

長野県松本市

MIMAZAWAGAWA-SAGAN

三間沢川左岸遺跡

－ 発掘調査報告書 －



2017.3

松本市教育委員会

長野県松本市

MIMAZAWAGAWA-SAGAN

三間沢川左岸遺跡

－ 発掘調査報告書 －

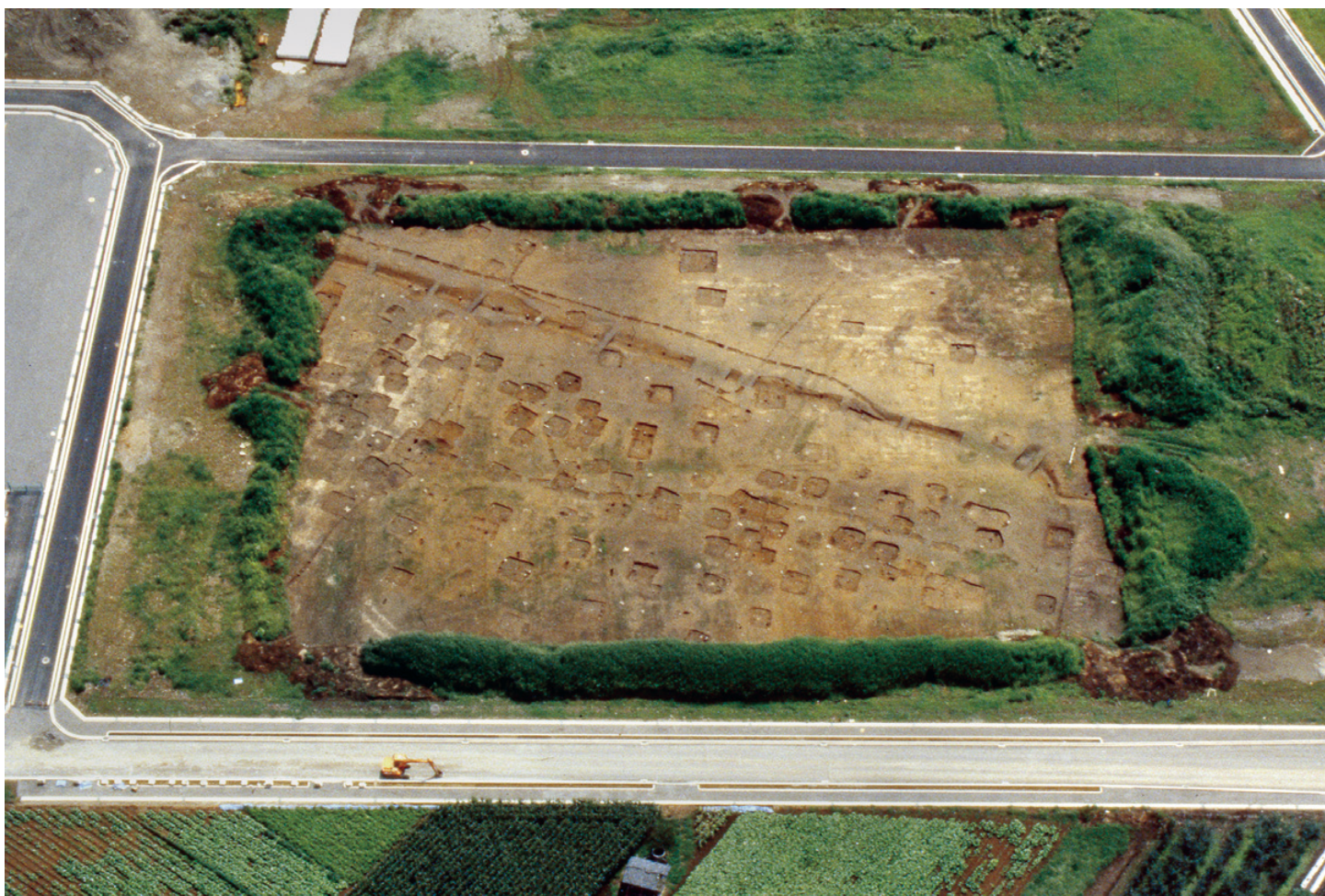


2017.3

松本市教育委員会



1次調査全景 南西から



2次調査全景 北西から



4次調査A区全景 南西から



5次調査全景 南東から



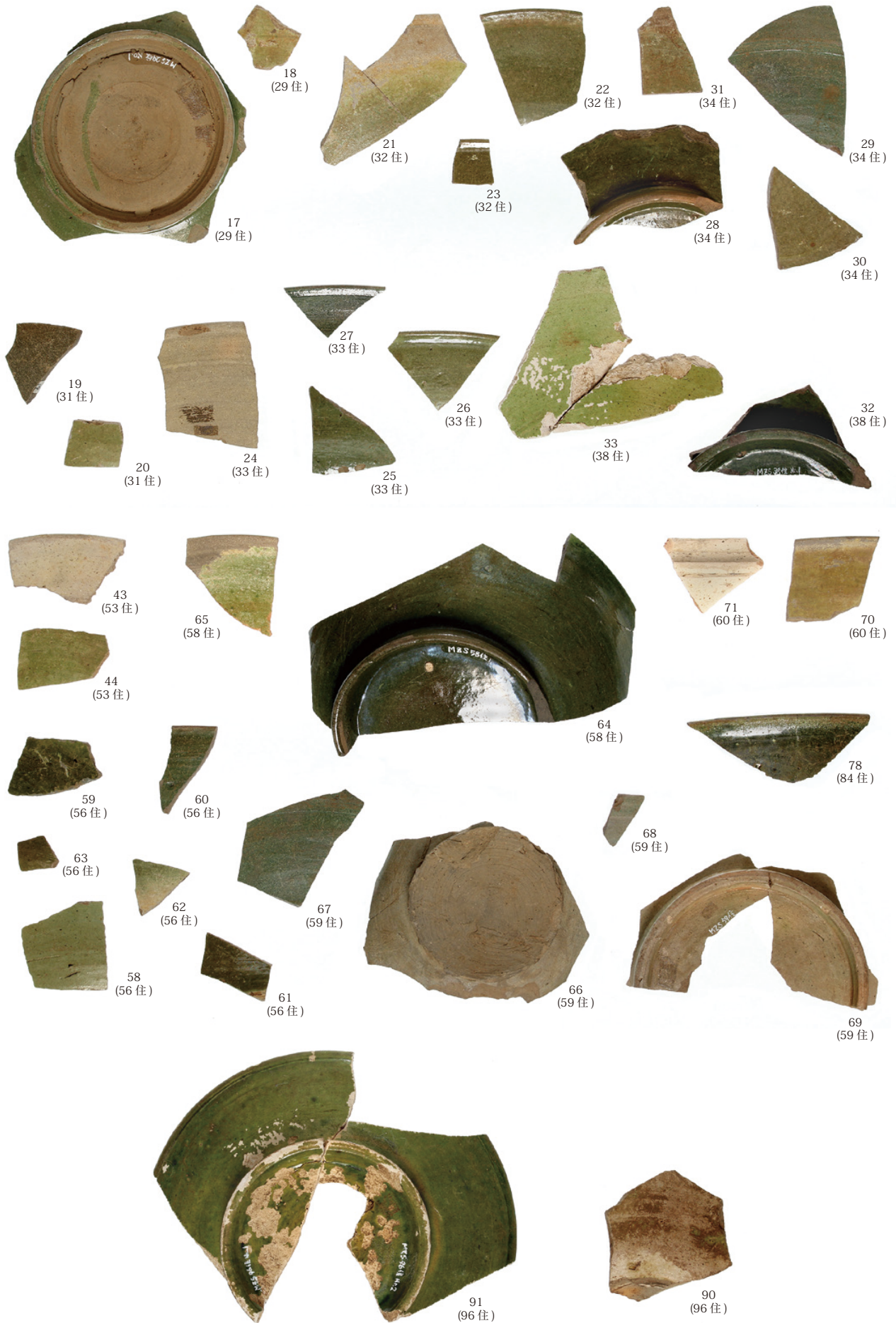
溝 3・6 (2次) 東から



通路状遺構 1 (5次) 北西から



緑釉陶器 (1)



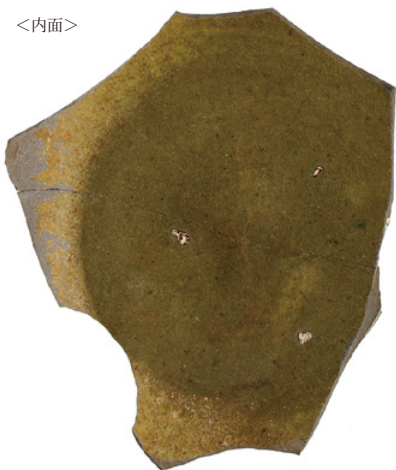
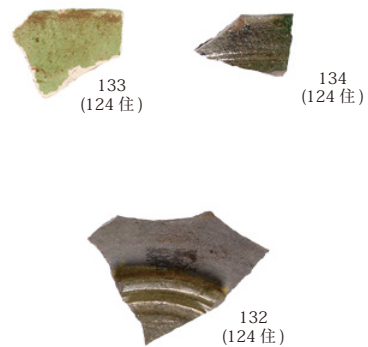
緑釉陶器 (2)

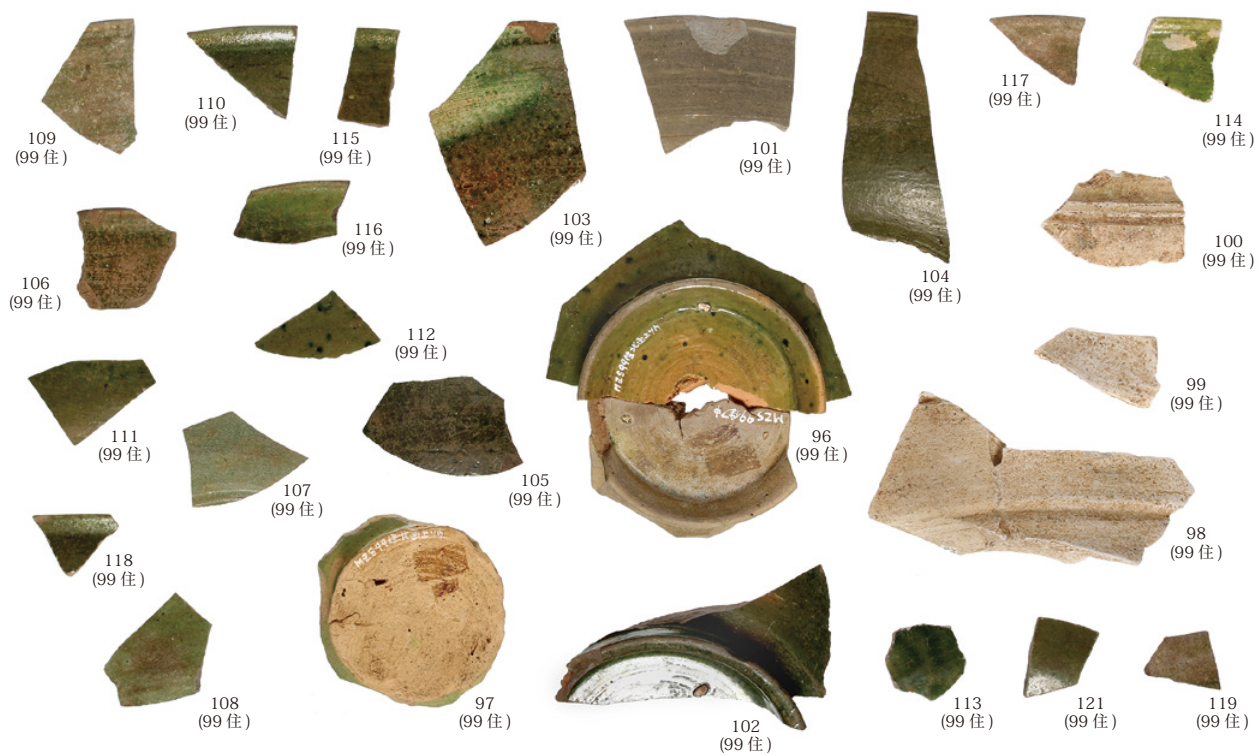
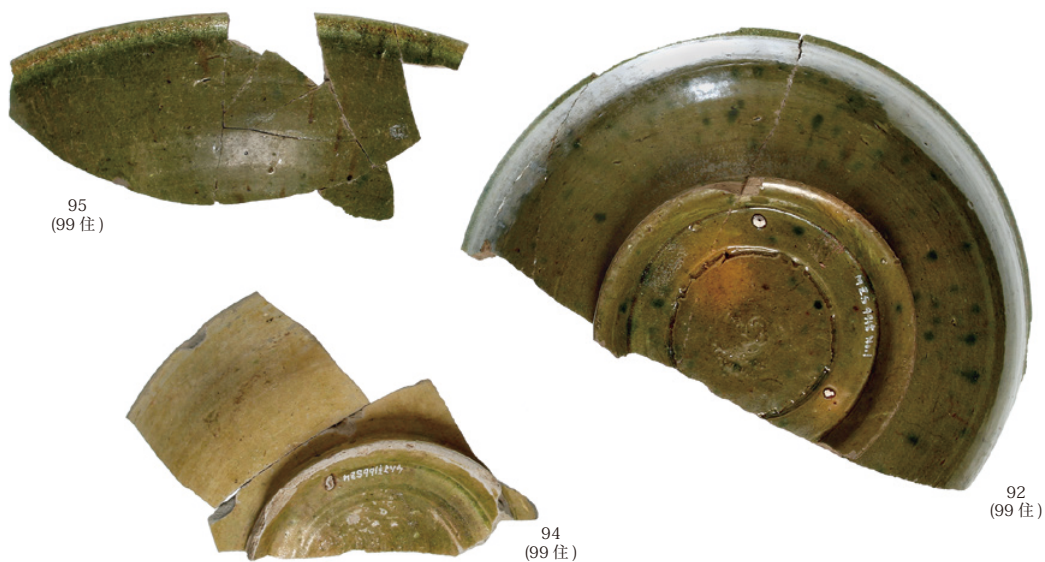
< 50 住外面 >

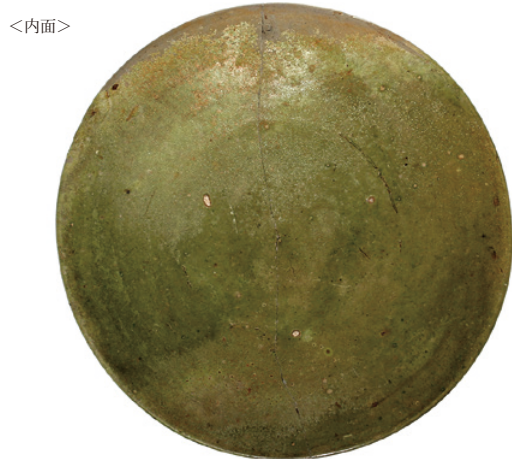
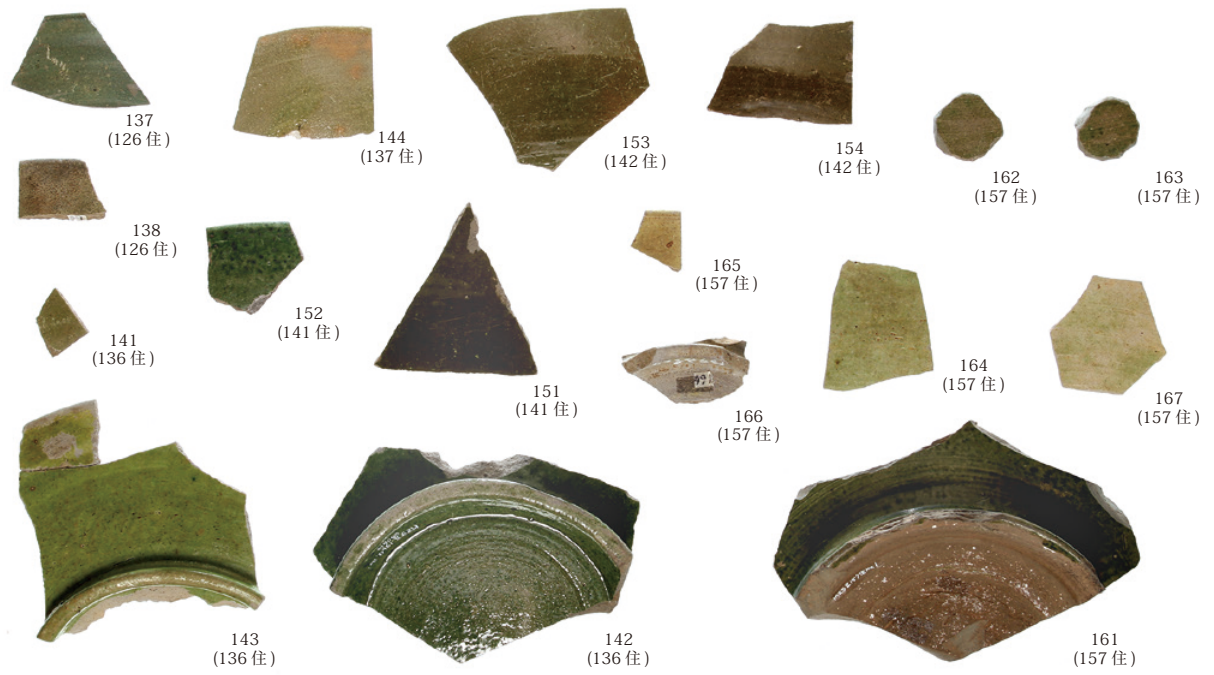
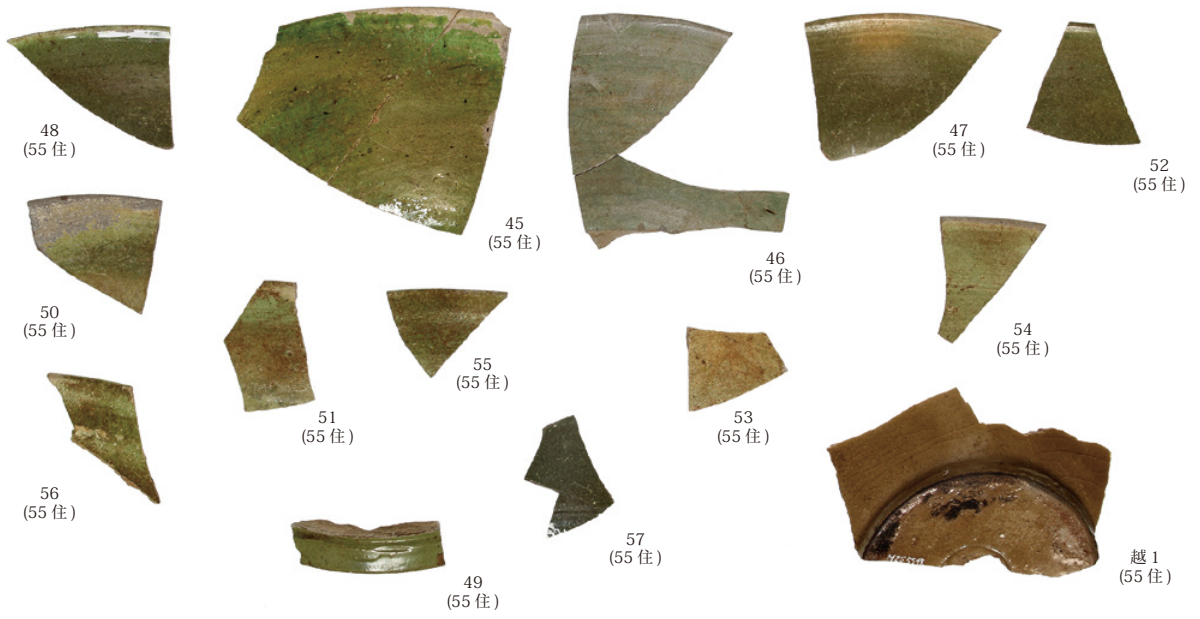


< 50 住内面 >







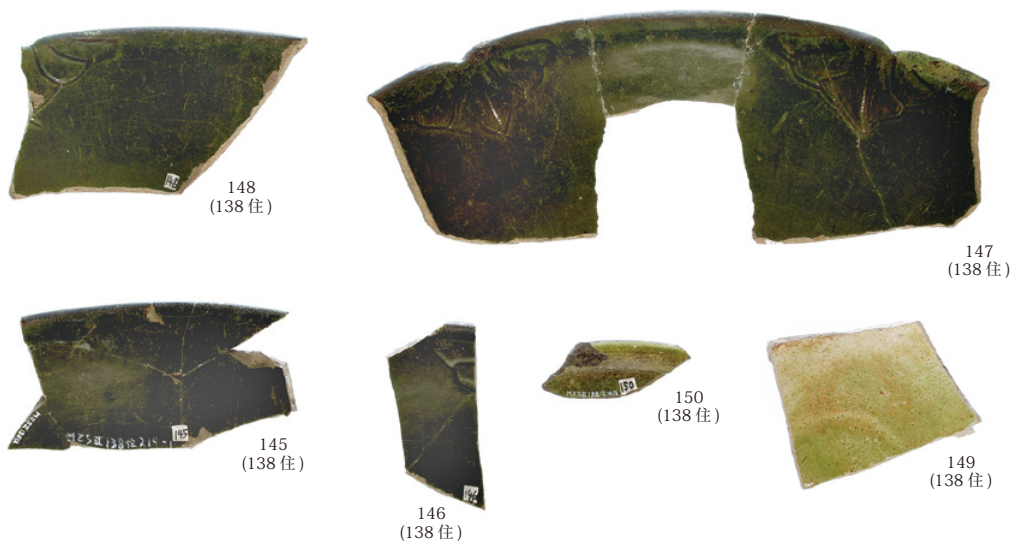


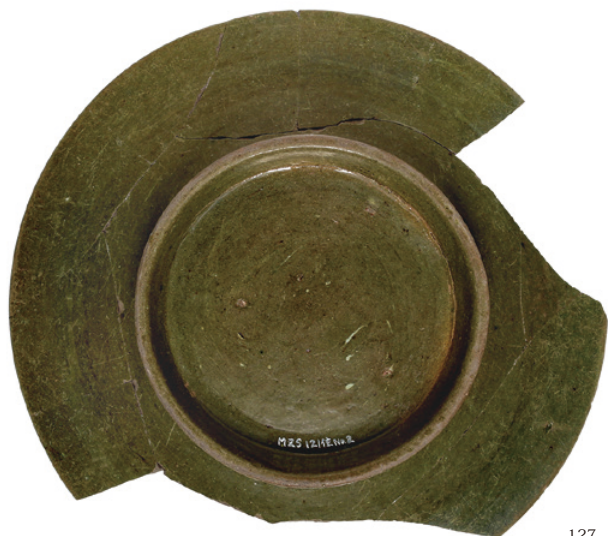
緑釉陶器 (6)

< 138 住外面 >



< 138 住内面 >





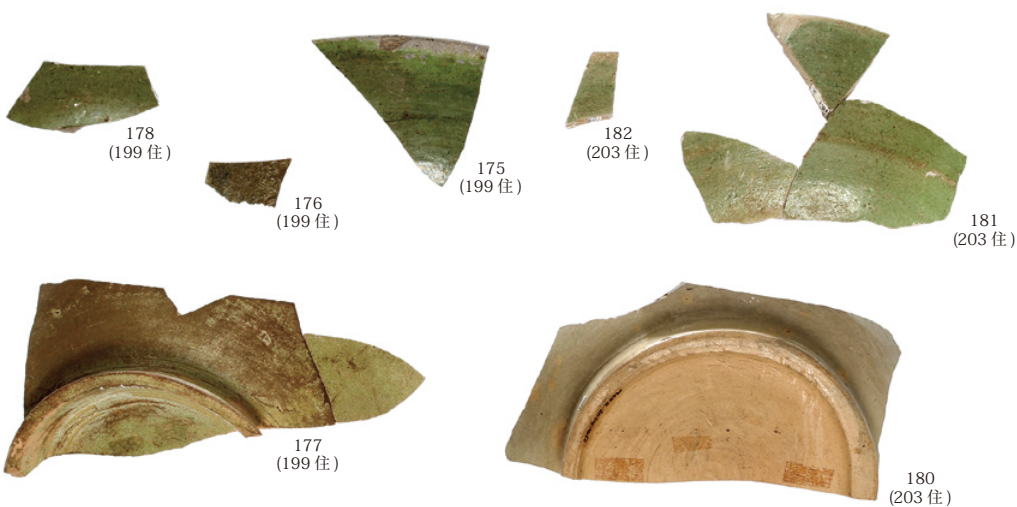
127
(121 住)



128
(121 住)



194
(267 住)



178
(199 住)

176
(199 住)

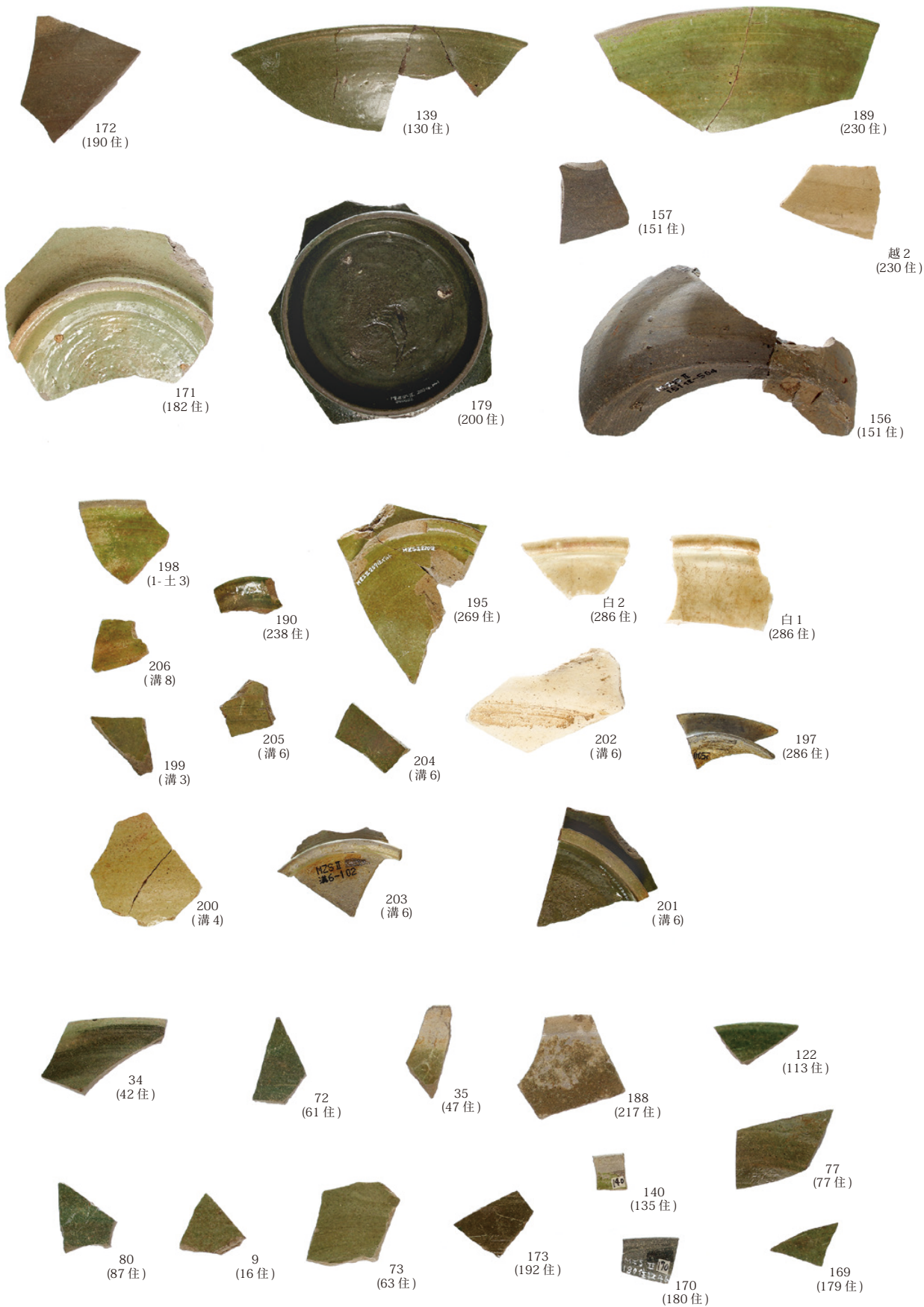
175
(199 住)

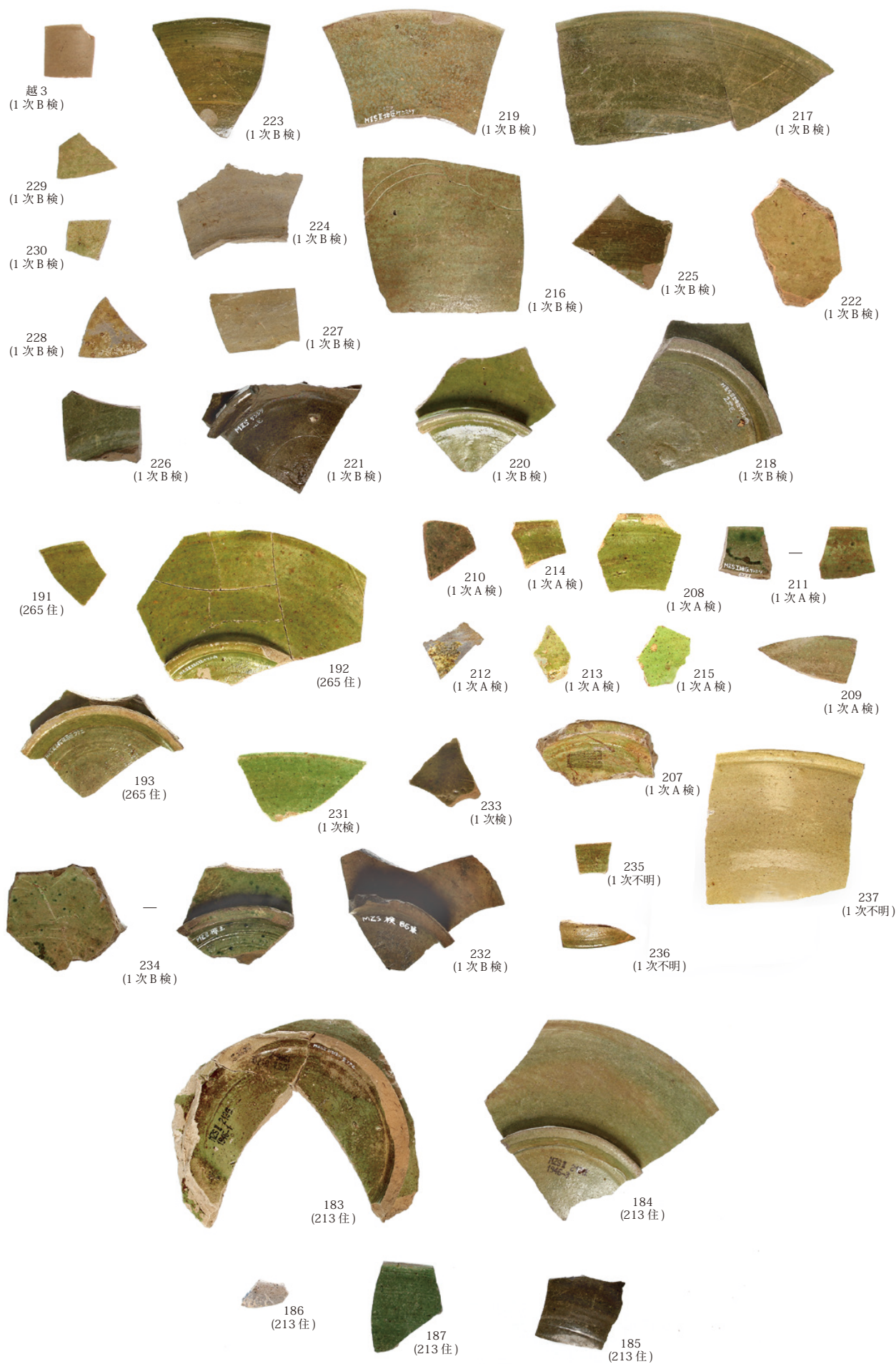
182
(203 住)

181
(203 住)

177
(199 住)

180
(203 住)





緑釉陶器 (10)



87



89



90



91



93



95



96



97



94



98



99

例言

- 1 本書は昭和 62・63 年度と平成 22・23・25 年度に実施された、松本市和田字西原 3967-10 ほかに所在する三間沢川左岸遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は松本市臨空工業団地および新松本工業団地の造成工事に伴う緊急発掘調査で、整理・報告書作成とともに松本市教育委員会が実施した。
- 3 本遺跡の発掘調査は本書刊行の時点で 8 次まで行われているが、本報告が対象とする調査次と調査年度・期間は次のとおり。
1 次：S62.5.30～7.21、2 次：S63.4.21～8.1、4 次：H22.4.12～23.7.20、5 次：H23.4.25～24.3.8、6 次：H25.6.4～12.13
- 4 本書の執筆、作成等の分担は次のとおり。
第 1 章：事務局、第 3 章 3 節 2：原田健司、同 3：小山奈津実、同 4 節：パリノ・サーヴェイ株式会社（要約文責：直井）、第 4 章 3 節：宮島義和、その他：直井雅尚
写真撮影：調査担当（遺構）、宮嶋洋一（遺物）、岩淵世紀（1 次空撮）、熊谷康治（2 次空撮）、株式会社地図測量（5 次空撮）
総括・編集：直井雅尚
- 5 本調査については、過去に当教育委員会が刊行した図書、報告書、報告会等の資料で部分的に紹介されてきたが、調査成果の内容については本書をもって最終的な見解とする。
- 6 発掘調査と本書作成にあたって次の方々からご教示、ご協力をいただいた。記して感謝を申し上げる。
石上周蔵、市村勝巳、井原今朝男、大久保知巳、大沢慶哲、岡本直久、片山昭悟、神澤昌二郎、桐原健、熊谷康治、小平和夫、佐々木明、笹本正治、島田哲男、新谷和孝、関沢聡、高山三千彦、田中正治郎、原明芳、樋口昇一、宮島義和、望月映、百瀬長秀、百瀬正恒、山下泰永、山田真一、和田和哉
- 7 本書の作成・執筆にあたって引用や参考にした文献は巻末にまとめて掲載した。
- 8 本調査で出土した遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市中山 3738-1 Ⅱ 0263-86-4710）に収蔵されている。

凡例

- 1 調査区名は調査次数とローマ字の枝番で表記した。例：1 次調査 A 区→1A 区、2 次調査区→2 区
- 2 本文、図・表中で用いた遺構の略称は次のとおり。
竪穴建物：住、掘立柱建物：建、土坑：土、墓址：墓、溝址：溝、ピット：P、通路状遺構：通
- 3 土器類実測図の断面表現は次のとおり。
白抜き：土師器・黒色土器、黒塗り：須恵器・軟質須恵器・青磁・白磁、灰色：灰釉陶器・緑釉陶器
また以下の土器類には、必要に応じて土器番号に続けて次の略称を付して示した。
軟質須恵器：軟、緑釉陶器：緑、青磁・白磁：磁、墨書土器：墨、刻書土器：刻
- 4 土器番号は通番ではなく帰属遺構ごとに 1 から付している。
例：「023_2 灰」は第 23 号竪穴建物出土土器の図示 2 番目の灰釉陶器を示す。
- 5 図類の縮尺は、竪穴建物・掘立柱建物・土坑・墓址・ピットが 1/80、土器・陶磁器類は 1/4（墨書・刻書正対図集成は 1/3）で統一したが、その他については不同で、そのつど提示した。
- 6 図中で用いた方位記号は真北方向を指している。
- 7 本文中で使用した時期表記は、すべて第 4 章第 2 節で設定した、本遺跡出土土器群の段階区分に基づく時期名称（第 20 表）を用いている。
- 8 遺構図中の土層名は下表のとおり記号化している。

主要土色				土層属性	他の混入物	混入量	混入粒径
A 褐色	H 橙褐色	O 暗灰色	V 灰白色	a 粘性	1 炭化物	1 微量(5%未満)	a 0.1cm未満
B 暗褐色	I 灰褐色	P 黒灰色	W 黄色	b 砂性	2 炭化材	2 少量(5～10%)	b 0.1～0.5cm
C 黒褐色	J 暗黄褐色	Q 橙灰色	X 黒色	c 鉄分	3 砂	3 中量(10%～20%)	c 0.5～1.0cm
D 明褐色	K 暗茶褐色	R 赤灰色	Y ローム	d 粘土	4 礫	4 多量(20%～40%)	d 1.0～3.0cm
E 黄褐色	L オリーブ褐色	S 黄灰色	Z 焼土	e 被熱	5 鉄滓	5 大量(40%以上)	e 3.0～5.0cm
F 赤褐色	M 暗オリーブ褐色	T 青灰色		f 敲締	6 灰		f 5.0cm以上
G 茶褐色	N 灰色	U 緑灰色					

目次

カラー写真図版

例言	1	目次	2	図目次	3	表目次	4
第1章 調査の経緯							5
第2章 遺跡の環境							6
第3章 調査結果							
第1節 調査の概要							11
第2節 発見された遺構							
1 提示の方法							17
2 遺構概観							17
3 遺構各説							17
(1) 竪穴建物	17	(2) 掘立柱建物	18	(3) 土坑	18		
(4) 墓址	19	(5) 溝址	19	(6) 通路状遺構	21		
(7) 道路状遺構	21	(8) ピット・ピット群	22	(9) その他の遺構	22		
4 遺物出土状況							22
第3節 出土遺物							
1 土器・陶磁器							106
(1) 概要と提示の方針	106	(2) 種別	106	(3) 器種器形	106		
(4) 紋様・暗紋	106	(5) 緑釉陶器・磁器	108	(6) 墨書土器	109		
(7) 土器群	109						
2 石器・石製品							199
3 金属製品							209
4 土製品							221
5 自然遺物							221
第4節 自然科学分析							
1 2区出土炭化材の年代測定・樹種同定と炭化種実の同定							223
2 4区出土炭化材の年代測定・樹種同定							229
3 第293号竪穴建物埋土の土壌洗出と種実遺体分析							231
第4章 調査のまとめ							
第1節 遺構について							
1 竪穴建物							243
2 溝址							246
3 通路状遺構							247
第2節 土器・陶磁器について							
1 三間沢川左岸遺跡における土器・土器群の変遷							248
2 模倣・搬入された土器							256
3 緑釉陶器							257
4 暗紋							260
第3節 墨書土器から見た三間沢川左岸遺跡							
1 墨書土器の分類							266
2 墨書からみた三間沢川左岸遺跡の特徴							266
第4節 平安時代の集落について							288
引用・参考文献一覧							304
写真図版							
抄録							

図目次

第1図 土層模式図	6	第60図 竪穴建物 51(279～281・283・284住)	79
第2図 遺跡の位置と周辺遺跡	7	第61図 竪穴建物 52(285～289住)	80
第3図 調査地と周辺調査地	9	第62図 竪穴建物 53(290～293住)	81
第4図 調査地配置図	10	第63図 掘立柱建物1(建1～3・11)	82
第5図 調査地全体図	12	第64図 掘立柱建物2(建5・9・10)	83
第6～9図 遺構配置図(1/4～4/4)	13	第65図 掘立柱建物3(建6～8)	84
第10図 竪穴建物 1(1～4・6・7住)	29	第66図 掘立柱建物4(建11・12・14)	85
第11図 竪穴建物 2(8・9・11～13・15住)	30	第67図 掘立柱建物5(建13)	86
第12図 竪穴建物 3(10・14住)	31	第68図 掘立柱建物6(建15)、柱列ピット群	87
第13図 竪穴建物 4(16・19～21・24住)	32	第69図 4次ピット群①②④	88
第14図 竪穴建物 5(17・18・22・23住)	33	第70図 4次ピット群③、5次ピット群	89
第15図 竪穴建物 6(25～29・31住)	34	第71図 土坑1	90
第16図 竪穴建物 7(32～37住)	35	第72図 土坑2	91
第17図 竪穴建物 8(38～43住)	36	第73図 溝配置	92
第18図 竪穴建物 9(44～49住)	37	第74図 溝2～4・8断面図	93
第19図 竪穴建物 10(50・57住)	38	第75図 溝6断面図	94
第20図 竪穴建物 11(51～54・56・59住)	39	第76図 溝9・14・19・22断面図	95
第21図 竪穴建物 12(55住)	40	第77図 通路状遺構1	96
第22図 竪穴建物 13(58・60～64住)	41	第78図 通路状遺構2・3	97
第23図 竪穴建物 14(65～70・116住)	42	第79図 通路状遺構4	98
第24図 竪穴建物 15(72～77住)	43	第80図 通路状遺構5、洗い場状遺構、溝6集石	99
第25図 竪穴建物 16(78～83住)	44	第81図 道路状遺構	100
第26図 竪穴建物 17(84～88・93住)	45	第82図 遺物出土状況1(135・223住)	101
第27図 竪穴建物 18(89～92・94～96住)	46	第83図 遺物出土状況2(161・197住)	102
第28図 竪穴建物 19(97・98・100～103住)	47	第84図 遺物出土状況3(157・245住)	103
第29図 竪穴建物 20(99住)	48	第85図 遺物出土状況4(55住)	104
第30図 竪穴建物 21(104～109住)	49	第86図 遺物出土状況5(226住、墓址)	105
第31図 竪穴建物 22(110・114住)	50	第87・88図 土器類器種器形一覧(1)・(2)	107
第32図 竪穴建物 23(112・113・115・117～119住)	51	第89～172図 出土土器類実測図(1)～(84)	115
第33図 竪穴建物 24(120～123・126・129住)	52	第173～177図 石器・石製品実測図(1)～(5)	204
第34図 竪穴建物 25(124・125・127・128・130住)	53	第178～181図 金属製品実測図(1)～(4)	217
第35図 竪穴建物 26(131～135住)	54	第182図 竪穴建物の床面積分布	244
第36図 竪穴建物 27(136・137・139～142住)	55	第183図 竪穴建物の時期別床面積分布	244
第37図 竪穴建物 28(138住)	56	第184図 竪穴建物の主軸方向	244
第38図 竪穴建物 29(143～148住)	57	第185図 カマド方位別住居数	245
第39図 竪穴建物 30(149～154住)	58	第186・187図 時期別カマド方位比率・位置比率	245
第40図 竪穴建物 31(155～159・263・264住)	59	第188図 食膳具の変遷	250
第41図 竪穴建物 32(160～164住)	60	第189・190図 甕類の変遷(1)・(2)	251
第42図 竪穴建物 33(165～170住)	61	第191図 土器群別にみる食膳具の種別構成比率	254
第43図 竪穴建物 34(171～177住)	62	第192図 模倣・搬入土器集成	257
第44図 竪穴建物 35(178～181・183・184住)	63	第193図 住居1棟あたりの緑釉出土重量	257
第45図 竪穴建物 36(185～190・210住)	64	第194図 緑釉陶器・磁器集成	261
第46図 竪穴建物 37(191～195・257住)	65	第195図 暗紋Aの類型模式図	262
第47図 竪穴建物 38(196～201住)	66	第196・197図 暗紋集成(1)・(2)	264
第48図 竪穴建物 39(202～207住)	67	第198～211図 墨書土器集成(1)～(14)	274
第49図 竪穴建物 40(208・209・211～214住)	68	第212図 竪穴建物の時期別棟数	288
第50図 竪穴建物 41(215～221・269住)	69	第213～218図 集落変遷図(1)～(6)	290
第51図 竪穴建物 42(222～226・228・231住)	70	第219～221図 発掘地点分布図(1)～(3)	298
第52図 竪穴建物 43(227・229・230住)	71	第222～223図 《参考》川西開田遺跡全体図(1)～(2)	302
第53図 竪穴建物 44(232～238住)	72		
第54図 竪穴建物 45(239～246住)	73		
第55図 竪穴建物 46(247～253住)	74		
第56図 竪穴建物 47(254～256・259～261・273住)	75		
第57図 竪穴建物 48(262・265～268・271住)	76		
第58図 竪穴建物 49(182・258・270・272住)	77		
第59図 竪穴建物 50(274～278住)	78		

表目次

第1表 三間沢川周辺での発掘調査一覧	8	第14表 遺構別鉄滓出土重量	216
第2表 遺構番号振替一覧	17	第15表 土製品一覧	221
第3表 竪穴建物一覧(1/4～4/4)	24	第16表 炭化物一覧	222
第4表 掘立柱建物一覧	28	第17表 骨類一覧	222
第5表 土坑一覧	28	第18表 竪穴建物時期別カマド方位	245
第6表 種別と器種器形の対応	107	第19表 柱穴を持つ竪穴建物	245
第7表 2区溝6出土土器類重量表	110	第20表 三間沢川左岸遺跡における土器群の段階区分	249
第8表 住居別土器群一覧(1/4～4/4)	111	第21表 緑釉陶器時期別出土重量	257
第9表 住居以外の遺構別土器群一覧	114	第22表 緑釉陶器一覧(1/3～3/3)	258
第10表 石器・石製品一覧(1/4～4/4)	200	第23表 土器群ごとの暗紋出現比率集計	263
第11表 こもで石(編物用石錘)集計	203	第24表 墨書一覧(1/5～5/5)	269
第12表 金属製品一覧(1/4～4/4)	211	第25表 希少遺物出土遺構	296
第13表 鉄滓一覧(1/3～3/3)	214	第26表 時期別墨書土器出土状況	297

写真図版目次

巻頭カラー写真		写真図版 7 竪穴建物(1)
カラー写真図版 1 調査区全景(1次・2次)		写真図版 8 竪穴建物(2)
カラー写真図版 2 調査区全景(4次・5次)		写真図版 9 竪穴建物(3)
カラー写真図版 3 溝3・6・通路状遺構1		写真図版 10 竪穴建物(4)
カラー写真図版 4 緑釉陶器(1)		写真図版 11 竪穴建物(5)
カラー写真図版 5 緑釉陶器(2)		写真図版 12 竪穴建物(6)
カラー写真図版 6 緑釉陶器(3)		写真図版 13 竪穴建物(7)
カラー写真図版 7 緑釉陶器(4)		写真図版 14 竪穴建物(8)
カラー写真図版 8 緑釉陶器(5)		写真図版 15 掘立柱建物
カラー写真図版 9 緑釉陶器(6)		写真図版 16 土坑・墓・ピット(1)
カラー写真図版 10 緑釉陶器(7)		写真図版 17 土坑・墓・ピット(2)
カラー写真図版 11 緑釉陶器(8)		写真図版 18 溝(1)
カラー写真図版 12 緑釉陶器(9)		写真図版 19 溝(2)
カラー写真図版 13 緑釉陶器(10)		写真図版 20 通路状遺構・道路状遺構
カラー写真図版 14 銅製品		写真図版 21 出土状況(1)
		写真図版 22 出土状況(2)
巻末モノクロ写真図版		写真図版 23 調査風景
写真図版 1 航空写真(1)		写真図版 24 墨書(1)
写真図版 2 航空写真(2)		写真図版 25 墨書(2)
写真図版 3 調査区全景(1)		写真図版 26 墨書(3)
写真図版 4 調査区全景(2)		写真図版 27 墨書(4)
写真図版 5 調査区全景(3)		写真図版 28 墨書(5)
写真図版 6 調査区全景(4)		写真図版 29 墨書(6)・刻書



溝6(4次)、南東から

第1章 調査の経緯

1 調査に至る経緯と調査経過

(1) 昭和62・63年度

松本市は和田西原地籍に臨空工業団地の造成を計画し、昭和60年度から用地取得を開始した。対象面積は約580,000㎡に及んだ。この一帯は昭和35年から38年にかけて開田事業（西原開田）が行われ、その際に平安時代の遺物が多量に採集されていたが、遺跡はそれに伴う工事によって湮滅したと考えられていた。ところが造成工事の一環として昭和61年12月に用地の一部について耕土の除去を行ったところ、耕土下のローム層上面に竪穴建物を中心とする多数の遺構が現れた。連絡を受けた松本市教育委員会は、現地を確認するとともに周辺の用地内で試掘調査を行った。その結果、湮滅したとされていた遺跡は、実際には良好に残存しており、しかもかなり広範囲に展開している可能性も考えられた。新発見の埋蔵文化財包蔵地として「三間沢川左岸遺跡」と命名し、開発部局との協議によって翌62年度当初から緊急発掘を実施して記録保存を図ることとなった。

昭和62年度の発掘調査は5月30日に開始した（第1次調査）。遺構の残存状況は良好であったが、開田工事の際の重機のキャタピラ痕などが局所的に深く食い込んで地盤が硬化し、検出作業は難渋した。130棟の竪穴建物を検出し掘り下げを進めたところ、多量の土器陶磁器のほか、緑釉陶器や銅印、銅鏡等の金属製品など貴重な遺物が多数出土し、特異な平安時代集落址であることが判明した。7月21日をもって調査は終了したが、引き続き遺跡の広がりを確認するため調査地の西側用地でトレンチによる確認調査を実施した。この結果、遺構分布はさらに西側に大きく広がることが確認でき、翌年度に第2次調査を行うこととなった。

昭和63年度の発掘調査は、昨年度のトレンチ調査で遺構分布を確認した範囲全域を対象として、4月21日から実施した（第2次調査）。開田工事による下層への影響は1次調査地点より軽微で作業は順調に進捗し8月1日に調査は終了した。1次調査と同様に銅鏡や銭貨、銅鈿などの特殊な遺物が出土したうえ、集落内を100m以上にわたって直進する大規模な水路の検出などで遺跡の特異な性格はさらに際立った。

(2) 平成22・23・25年度

平成19年から臨空工業団地の北に隣接して新松本工業団地の造成が計画された。一帯は本遺跡の北縁に当たると想定されたため緊急発掘を実施して記録保存を図ることで開発部局と協議を進めた。発掘調査は用地取得の交渉がまとまった範囲について平成22年度から開始し、翌23年度と25年度の3次にわたって実施した（第4・5・6次調査）。

第4次調査は、平成22年4月12日から翌年7月20日にかけて実施した。第1・2次調査地の北側全域を対象とし、隣接部は面的な調査、さらにその北側はトレンチによって遺跡の残存と遺構・遺物の有無を確認した。調査地内は長芋の耕作による攪乱が著しかったが、面的調査範囲からは10棟の竪穴建物や土坑、溝を検出することができた。トレンチ調査範囲では遺構の残存は把握できなかった。

第5次調査は、第4次調査地の東側一帯を対象とし、平成23年4月25日から翌年3月8日にかけて実施した。南半部は面的調査、北半部はトレンチ調査を行い、第4次調査地と同様に長芋の耕作による攪乱の影響はあったが、面的調査範囲からは竪穴建物や溝、通路状遺構、道路状遺構などが発見された。トレンチ調査範囲は、そのほとんどが過去の開発事業等で耕作土下まで攪乱されており、遺構・遺物の有無を把握することはできなかった。

第6次調査は、第4次調査の北側で最後に用地取得の見込みがついた地点について、平成25年6月4日から12月13日にかけて実施した。第4次調査で把握された大規模な水路（溝6）の上流部分が発見される可能性を想定した調査区の設定だったが、結果として溝は検出されず、以前の構造物等の影響で大規模な攪乱を受け、小規模な土坑が1基検出されたのみで遺物の出土はなかった。

(3) 整理作業、発掘調査報告書刊行

第6次調査に引き続き平成26・27年度に整理作業を実施し、平成28年度に発掘調査報告書（本書）の刊行に至った。ただし、第1・2次調査成果については、基礎的な整理計画がないまま発掘終了直後から展示等の普及公開に利用し続けたため、遺物の帰属情報などに若干の混乱が生じていた。さらに、調査終了から30年近くが経過し、保管等の不備もあって土器類の中には注記が判読不能になったものが少数あり、鉄製品の一部は劣化が進行して図示できなかった。

2 調査体制

(1) 昭和 62・63 年度

調査団長 松本市教育長 中島俊彦 調査担当者 【62 年度】竹原 学、三村竜一（嘱託）【63 年度】直井雅尚（主事）
調査員 太田守夫、土橋久子 協力者 青柳洋子、赤羽包子、新井唯邦、石合英子、岩野公子、大出六郎、大川幸子、大谷成嘉、小野勝近、開嶋八重子、上條茂子、唐沢かほる、北沢達二、児玉春紀、小林清志、小松正子、塩原竹子、塩原初子、塩原美世、瀬川長広、荘秀也、曾根原令子、田口吉重、武井緑、田多井うめ子、田多井亘、筒井とりへ、鶴川登、中島新嗣、中村悦子、中村安雄、林伊和夫、原沢一二三、堀江文子、丸山恵子、宮下英子、宮島たか子、麦島安夫、村川甞吾、村山正人、百瀬二三子、百瀬八江、百瀬義友、矢島利保、吉沢克彦、米山明子、米山禎興、若井七十郎
事務局 松本市教育委員会 社会教育課 浅輪幸一（課長）、小松晃（文化係長：S62）、田口勝（文化係長：S63）、熊谷康治（主査）、直井雅尚（主事）、山岸清治（事務員：S63）、洞田睦子（臨時：S62）、三沢利子（臨時：S63）

(2) 平成 22・23・25 年度

調査団長 松本市教育長 吉江厚 調査担当者 【22 年度】福沢佳典（主事）、石井佑樹（嘱託）【23 年度】熊谷博志（主事）、原田健司（嘱託）【25 年度】石井佑樹（主事）、原田健司（嘱託） 調査員 宮嶋洋一、森義直
協力者 青木久一、赤羽久、朝倉秀明、芦澤雅量、井口寛、石川一男、今井太成、加藤朝夫、坂口ふみ代、曾根原裕、高山知行、茅野信彦、床尾育代、中島健、中村明、西原達雄、平山忠男、三谷久美子、三村脩二、宮澤昭敬、召田和男、百瀬二三子、矢野芳徳、渡辺順子
事務局 松本市教育委員会 文化財課 塩原明彦（課長：H22・23）、伊佐治裕子（課長：H25）、大竹永明（課長補佐：H22・23）、直井雅尚（主査：H22・23、埋蔵文化財担当係長：H25）、久保田剛（主任：H22・23）、櫻井了（主査：H25）、柳澤希歩（嘱託）

(3) 整理作業

整理担当者 直井雅尚 職員・調査員 石井佑樹、小木曾昭洋、神澤昌二郎、神田訓安、熊谷博志、熊谷康治、栗田 愛、小山奈津実、白鳥文彦、新谷和孝、関沢 聡、高桑俊雄、竹原 学、田中正治郎、土橋久子、原田健司、廣田早和子、福沢佳典、古林舞香、三村孝子、三村竜一、宮嶋洋一、宮島義和、和田和哉 協力者 荒井留美子、井内南奈香、五十嵐周子、石合英子、市川二三夫、内沢紀代子、内田和子、柏原佳子、久保田瑞恵、小林由美子、佐々木正子、滝沢智恵子、竹内直美、竹平悦子、直井禎之介、直井知導、直井由加理、中澤温子、原田梨恵、洞沢文江、前沢里江、三澤栄子、宮本章江、村山牧枝、百瀬二三子、八板千佳

第 2 章 遺跡の環境

第 1 節 立地と地形地質

1 立地

三間沢川左岸遺跡は松本市和田字西原 3967-10 ほどに位置する。調査地の一帯は標高 643～645m、東北東にごく緩やかに傾斜するローム層に覆われた台地で、「くろべ」と呼ばれる黒味を帯びた腐植土が広がり、以前は桑を中心とした畑作が行われていた。昭和 30 年代の開田事業で整然と区画されたほ場となり、昭和 47 年に竣工した新和田神林堰によって、自然流下水を水源とする耕作が可能となった。

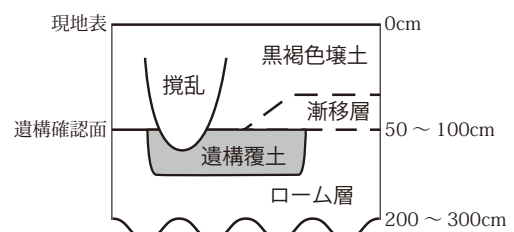
2 地形・地質

鎖川の西岸、三間沢川下流域は両河川による扇状地と梓川系統の扇状地の接点にあたり、その境界を三間沢川が流下している。三間沢川右岸から鎖川までの間には鎖川による沖積低地が広がっており、その堆積層は粘土やシルトが整然と堆積した互層をなしている。これに縄文時代後期以降と推定される鎖川起因の氾濫性の砂泥や礫が覆い、鎖川寄りにより厚く堆積している。また、かつての鎖川や三間沢川の旧流によると思われる大小の河川跡が幾筋も観察され、開田以前は窪地と微高地の連続する地形であったらしい。一方、三間沢川の左岸一帯は、こうし

た沖積低地が形成される以前の、ローム層に覆われた後期更新世の扇状地（台地）が広がっており、その範囲は三間沢川より北では本遺跡を東限とし、南では境窪遺跡の西から南側で沖積層中に没している。また、それ以南では鎖川による明瞭な河岸段丘をもって区切られ、上流に向かうほど沖積低地が幅を減じ、段丘崖も発達する。

このように本遺跡付近では三間沢川の流路を境界とするようにローム層の洪積台地と鎖川による沖積層が切り替わっており、本書で扱う第 1・2・4～6 次調査地はほぼ全域がローム層上にある。したがって調査地周辺の表土はローム層の腐植を起源とする礫や砂を含まない黒色・黒褐色の壤土が基本で、これが耕作や人為的な地業の影響で攪拌、削平されて現況となっている（第 1 図）。

本遺跡の南を画す三間沢川は、現在は平成の河川改修によって広い川幅に整備されているが、それ以前はかなり狭く、本遺跡より上流部は浅谷状に深く、下流部は天井川となっていた。昭和 30 年代の開田



第 1 図 土層模式図



270 秋葉原遺跡、271 新村遺跡、272 安塚古墳群、273 秋葉原古墳群、275 高綱遺跡、276 三の宮遺跡、277 北栗遺跡、278 南栗遺跡
 280 西和田遺跡、281 和田山の神遺跡、282 和田中遺跡、284 和田下西原遺跡、285 太子堂遺跡、286 二階道遺跡、288 三間沢川左岸遺跡
 289 衣外古墓址、290 中二子遺跡、298 下二子遺跡、300 上二子遺跡、301 神戸遺跡、304 大久保原遺跡、309 南荒井遺跡、310 下神遺跡
 311 神林川西遺跡、312 境窪遺跡、313 川西開田遺跡、314 梶海渡遺跡、482 芝沢遺跡、484 和田西原南遺跡、505 下和田遺跡、509 東
 新遺跡、1804 波田下原遺跡
 破線 - - - - は第3図の表示範囲

第2図 遺跡の位置と周辺遺跡

以前はさらに狭かったため、左岸地帯では三間沢川を用水とすることはむずかしかったと思われる。

第2節 歴史的環境

三間沢川左岸遺跡は松本盆地南部における遺跡立地の概略的な区分から俯瞰すると、大きくは奈良井川以西に分布する古代の遺跡群に属し、その西縁部に位置する。奈良井川以西の島立、新村、神林や本遺跡がある和田などの各地区、笹賀地区の北部は、現在は伝統的な集落が点在し松本を代表する豊かな水田地帯となっているが、考古学的な調査成果では、弥生時代後期や古墳時代から続く集落遺跡は無く、西暦600年代末頃から急激に開発が始まった一帯であることが判明している。その原因はおそらく生活用水や農業用水の水利にあったと考えるのが現段階ではもっとも妥当であろう。初期の開発は島立地区南部や和田地区東部が中心と推定されるが、西暦700年代以降はほぼ全域に拡がり、その結果として多くの遺跡が残された。古代から連綿と続けられた流路管理、水路開発が現在の水田の繁栄をもたらしている。ただし、これらの諸遺跡を潤す水路群からは、次節で詳述する本遺跡を含む三間沢川流域の川西開田遺跡、境窪遺跡、和田西原南遺跡は、西端に突出して外れ、その恩恵を受けられない位置にある。そのためこれら4遺跡のエリアには近世以降からの伝統的な集落は形成されずに今日に至っている。本遺跡からさらに2kmほど西に寄ると西山山麓に近づき、縄紋時代と平安時代が混在する山麓や丘陵地帯の遺跡立地へと変わる。

第3節 周辺の発掘調査

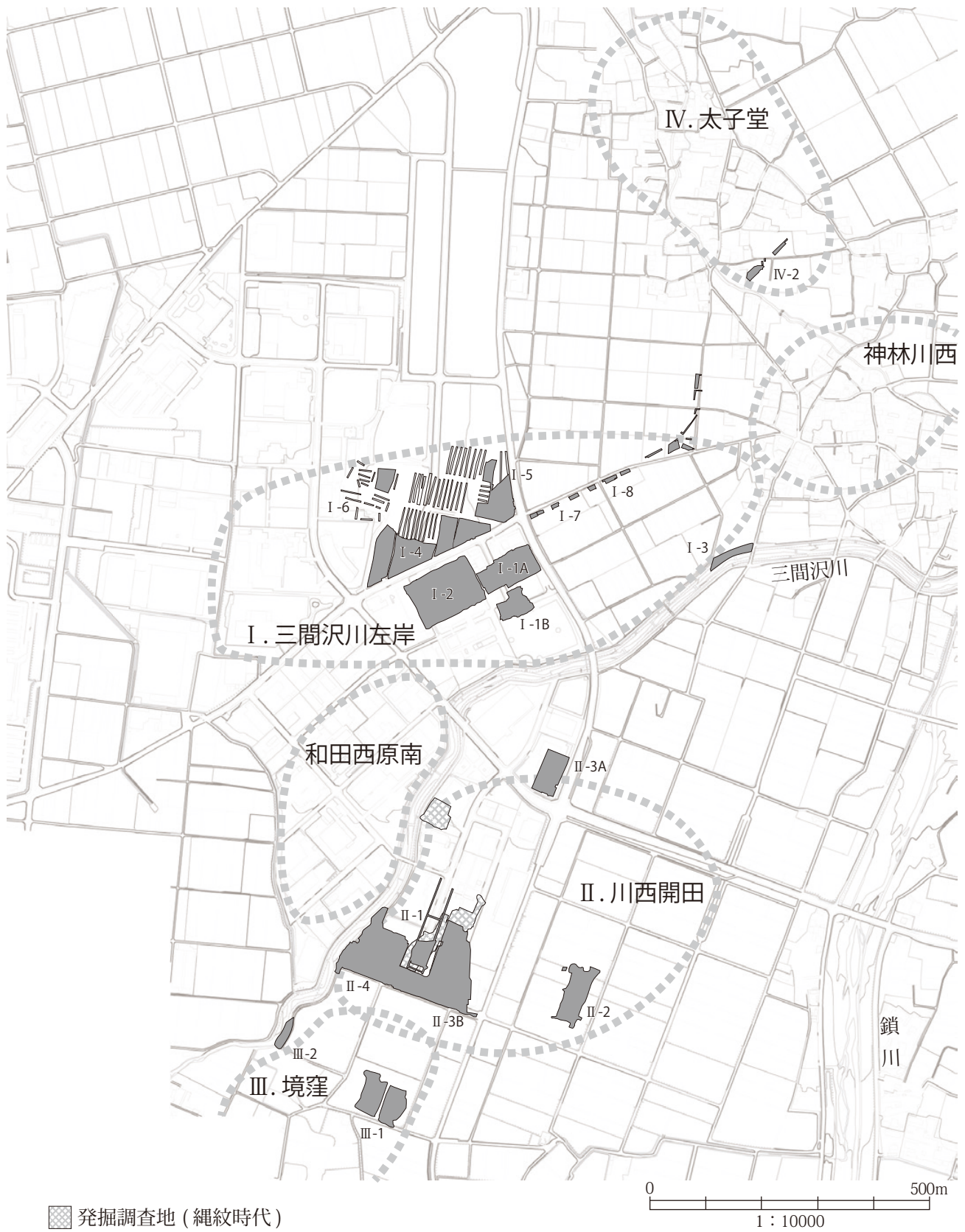
1 過去の調査履歴

松本市域における鎖川西岸地帯の考古学的な発見は比較的新しく、昭和30年代の開田工事や製瓦用粘土の採掘の際の遺物出土などから遺跡の存在が知られるにとどまっていた。また昭和32年には三間沢川左岸遺跡とその東隣の神林川西遺跡の境界付近で瀬戸美濃産鉄釉茶入れと孔雀文馨（昭和34年国重文指定：松本市立博物館蔵）が耕作中に出土したが、遺跡として明確に認識されるまでに至っていない。

昭和60年代に入ると、県営ほ場整備事業に伴って梶海渡遺跡(S60)、神林川西遺跡(S61)の調査が行われ、小規模ではあるが鎖川西岸域で初めて発掘調査によって古代・中世の人為的な営みの痕跡が確認できた。引き続き本書で扱う昭和62年度の三間沢川左岸遺跡第1次調査が臨空工業団地造成に伴って行われ、三間沢川流域での大規模な集落遺跡の存在が明らかになったのだが、それ以後、翌63年の同遺跡第2次調査、平成7・8年の神林再ほ場整備事業での川西開田遺跡第1・2次調査と境窪遺跡第1次調査、平成10・11年の臨空産業団地造成に伴う川西開田遺跡第3・4次調査、同じく11年の県営三間沢川河川改修事業による松本市側での川西開田遺跡第5次調査と三間沢川左岸遺跡第3次調査、山形村側での境窪遺跡第2次調査などが相次いで行われた。いずれも大きな成果があり、鎖川西岸域の中でも特に三間沢川流域は縄紋時代から中世に至る各時代の集落が大規模に展開する遺跡の稠密地帯で

調査原因	調査年	遺跡名	調査回	発掘面積	調査成果の概略	報告書
県営ほ場整備	S60	梶海渡遺跡	1	470	掘建1・井戸1・溝6・焼土2(平安)、火葬墓1(中世)	文献35
	S61	神林川西遺跡	1	688	流路・溝(時期不明)	文献36
	H7	川西開田遺跡	1	4,203	住8(奈良、平安)、住1(縄紋中期)	文献39
	H8	川西開田遺跡	2	2,702	住8(平安)、遺物集中1(縄紋後期)、延喜通宝、銅製円盤	
	H7	境窪遺跡	1	5,190	住10・平地住2・掘建9・柱列9・墓2(弥生中期)、住2(平安)	
臨空産業団地	H10	川西開田遺跡	3	32,560	住69・掘建15・土坑316・ピット1422・溝12(平安)、住14・土坑614・屋外焼土9・溝3(縄紋中期)	文献41・42
	H11	川西開田遺跡	4	11,234	住10・溝6(平安)、土坑1762・ピット575(中世)、住16・土坑684(縄紋中期)	
県営河川改修	H11	川西開田遺跡	5	3,616	土坑113(平安、中世)	文献40
	H11	三間沢川左岸遺跡	3	384	土坑48(弥生、平安)、溝5、銅丸轆	
	H11	境窪遺跡(山形村)	2	550	住2(平安)、土集1・土坑14・ピット245(弥生中期)	文献49
	H24	二階道遺跡	1	1,952	住8(弥生2・平安6)、掘建4・柱列4・溝3(平安)、土坑131(弥生、平安)	
市道7817号線改良	H25	太子堂遺跡	1	1,049	土坑1(不明)、溝2・自然流路6(平安)、火葬施設1(中世)	未報告
	H25	二階道遺跡	2	807		
	H24	三間沢川左岸遺跡	7	963	土坑28・溝2・通路状遺構2・道路側溝2(平安)、自然流路1(不明)	
	H26	太子堂遺跡	2	596	住3・溝7(平安)、土坑45(不明)、自然流路1(平安)、不明遺構(平安の溜池状遺構?)	
	H26	三間沢川左岸遺跡	8	787	溝状遺構・土坑・自然流路(不明)	
	S62	三間沢川左岸遺跡	1	7,741	住130・掘建10・土坑7・溝5(平安)	
臨空工業団地 新松本工業団地	S63	三間沢川左岸遺跡	2	11,304	住142・掘建4・土坑16うち墓2・溝9(平安)	本書
	H22	三間沢川左岸遺跡	4	11,742	住10・ピット171・土坑87うち墓2・溝8・通路状遺構3(平安)、土坑1(縄紋)	
	H23	三間沢川左岸遺跡	5	7,897	住9・掘建1・ピット80・土坑9うち墓1・溝3・通路状遺構2・道路状遺構1(平安)	
	H25	三間沢川左岸遺跡	6	1,961	ロームマウンド・ピット(時期不明)	

第1表 三間沢川周辺での発掘調査一覧



▨ 発掘調査地 (縄文時代)

■ " (平安時代)

調査地表示の (I・II・III・IV) は属する遺跡を、(1～8) は調査次 (調査区) を示す

破線 ■■■■ は各遺跡の推定範囲

第3図 調査地と周辺調査地



第4図 調査地配置図

あることが判明した。

平成20年代になると、新臨空工業団地造成に伴って22～25年に三間沢川左岸遺跡第4～6次調査（本書）、24～26年には市道7817線改良工事に伴う二階道遺跡第1・2次調査、太子堂遺跡第1・2次調査、三間沢川左岸遺跡第7・8次調査が行われた。特に市道7817号線改良に伴う調査では複数の地点で弥生時代や平安時代の遺構遺物が確認され、鎖川沿いから三間沢川左岸遺跡に至る東西1.5kmの間の遺跡分布や地形地質など、これまで解明が進んでいなかった三間沢川流域以外の範囲の考古学

的な究明の端緒とすることができた。

2 縄紋・弥生時代の発掘

縄紋時代の遺構・遺物が発見されている遺跡・調査としては、境窪遺跡第1次調査（後期土器）、川西開田遺跡第1次調査（中期後葉の埋甕を伴う竪穴建物）、同遺跡第2次調査（後期堀之内I式土器と石器の遺物集中）、同遺跡第3・4次調査（竪穴建物30棟、土坑1,298基等の中期初頭の大規模な集落）を挙げることができる。また昭和62年に本遺跡第1次調査の後に立会い調査を行った和田西原南遺跡でも中期中葉の竪穴建物1棟を確認している。

西に隣接する山形村では昭和 55・56 年と平成 13 年の発掘調査で中期の遺構・遺物を大量に検出した三夜塚遺跡が知られる。

弥生時代は前記の境窪遺跡 1 次調査で中期中葉の住居址・建物址計 30 棟、墓址 2 基等とそれに伴う多量の遺物が出土している。三間沢川左岸遺跡第 3 次調査では同時期の土坑群、境窪遺跡第 2 次調査(山形村分)でも同時期の遺物集中が検出されている。また二階道遺跡第 1 次調査では境窪遺跡と同時期の炉址や遺物が発見されている。やや位置は離れるが昭和 40 年に行われた今井地区のこぶし畑遺跡の発掘調査では弥生中期前葉の遺構・遺物が発見されており、鎖川・三間沢川流域で弥生時代中期前半に相当の人の動きがあったことがわかる。ただしこれらに後続する時期の遺跡は発見されておらず、中期後半から後期全般にかけては空白となっている。

3 古代・中世の発掘

古墳時代の遺構・遺物は極めて希薄で、川西開田遺跡第 1 次調査で平安時代の遺構中から前期の土器がまとまって出土しているのみである。近在に小規模な該期集落が存在する可能性がある。奈良時代の遺構・遺物は認められない。

平安時代になると川西開田遺跡の第 1・2 次調査で同時期の竪穴建物 16 棟、第 3・4 次調査で同 76 棟、境窪遺跡第 1 次調査で竪穴建物 2 棟、それに今回報告の三間沢川左岸遺跡第 1・2・4～6 次調査(本書)での計 291 棟を加えると、この 3 遺跡だけで 385 棟の竪穴建物が確認されている。うち 1 棟が 8 世紀に遡る他は、すべて西暦 9 世紀後半からほぼ 11 世紀前半代に収まるもので、これは三間沢川中流域のこの一帯で時期的に限定された極端な居住の集中があったことを示す。おそらく何らかの大規模な開発が行われたことを物語るものであろう。三間沢川流域から離れた二階道遺跡第 1 次調査と太子堂遺跡第 2 次調査でも、西暦 9 世紀後半の竪穴建物がそれぞれ 3 棟と 6 棟発見されており、これらから総合的に考えると鎖川西岸域の本格的な開発の始まりは 9 世紀代に下るといえる。

中世の遺構遺物は川西開田遺跡第 3・4 次調査の 4B 区とそれに隣接する同遺跡第 5 次調査地点から計 1,862 基の土坑が見つかり、覆土中から中世の陶磁器や金属製品が出土した。12 世紀末から 16 世紀初頭に形成された大規模な墓域と推定されるが、背景となる集落の特定はできていない。

第 3 章 調査結果

第 1 節 調査の概要

1 調査地点の選定

第 1 次調査(S62)は造成計画で調整池となるため先行して工事が始まる範囲を対象とした。前年の表土除去で遺構が露出した部分と、その北東隣接地の一带にあたる。続く第 2 次調査(S63)は前年の試掘で遺構分布を確認した第 1 次調査地の北西隣接地を対象とした。この第 1・2 次調査で遺跡の中心部と推定される遺構密集範囲を把握することができた。

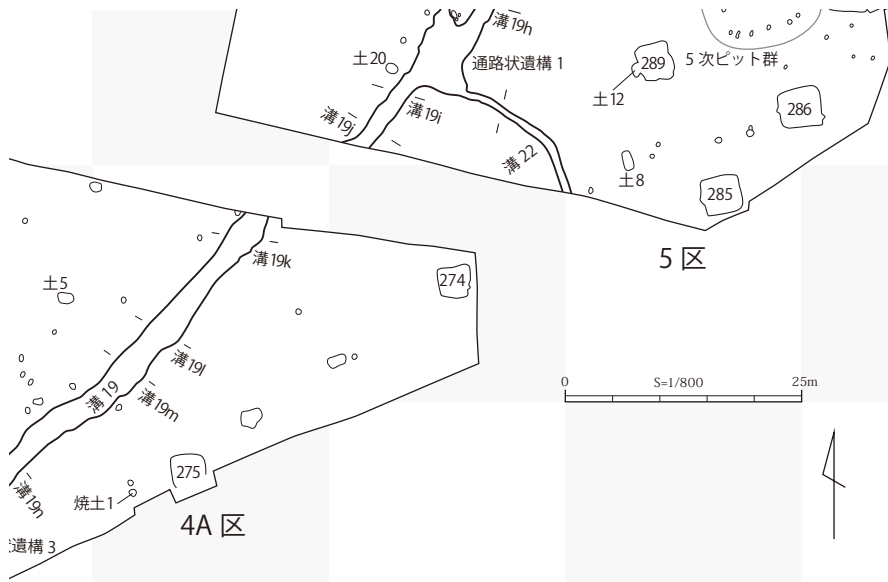
平成 22 年度から始まる第 4～6 次調査は第 1・2 次調査地の北側一帯が対象で、用地取得が進んだ範囲から順次調査地とした。第 1・2 次調査地に隣接する部分は当初から面的調査を行い、集落の北限地域と推定されたさらに北側の一帯はトレンチ調査を先行させ、遺構の分布が認められた範囲に限り面的調査を行った。またトレンチ調査により、過去の開発等で表土下が完全に破壊されていることが把握できた範囲は面的な調査地から除外した。

2 調査方法

各次調査では面的調査、トレンチ調査ともにパワーショベルで表土を除去し、排土の移動は第 1・2 次調査はブルドーザー、第 4～6 次調査はクローラードンプを用いた。遺構検出面は表土下のローム層上面とした。ローム層の上部に形成される黒色土との漸移層は耕作の影響でほとんど失われていたためである。検出作業は人力によって検出面を削り込んで遺構外周のラインを確定した。並行して調査地全域を真北を軸とした 3m 角のグリッドで覆い、交点の地表に釘を打設して平面実測の基準とした。遺構の掘り下げは竪穴建物は 4 分割、その他の遺構は規模によって 2～6 分割で土層観察面(土手)を残して進めるのを基本としたが、第 1 次調査に限り日程の関係ですべてを 2 分割に留めざるを得なかった。土層記録作成の後、遺物出土状況を撮影し、良好なものは出土状況を図化した。全遺構ですべての遺物を取り上げ、床面を精査・清掃して完掘写真を撮影、完掘図を作成した。さらに残存状況が良好なカマド等の施設は側面図や部分断面図の作成に努めた。実測は遣り方により縮尺 1/20 で調査地全域を平面図に収め、土層図等の立面図も縮尺 1/20 を基本とした。ただし平面・断面で詳細図が必要な場合は縮尺



第6図 遺構配置図(1/4)



第8図 遺構配置図(3/4)

1/10とした。調査終盤で航空機や無線操縦機、高所作業車による高所からの全景撮影を行った。

3 調査結果の概要（各調査次の面積等の詳細は表1と巻末の抄録を参照）

計5回の調査地は南北約250m、東西約300mの範囲に連続して広がっており、面的調査ができた範囲は40,600㎡に及ぶ。竪穴建物を中心とする平安時代9～10世紀の集落址とそれに伴う様々な施設を検出し、多数の遺物出土をみた。竪穴建物は第1・2次調査区を中心に291棟、掘立柱建物は16棟が確認され、土坑墓5基が集落内に点在していた。遺構群の中央部を貫く長大な水路や、集落の北縁を画す溝とそれを渡る通路状遺構、大型の金床石を据えた鍛冶遺構らしきものなども確認された。遺物は竪穴建物等の覆土・床面から多量の土器陶磁器や金属製品、石製品、土製品が出土した。金属製品では銅銚、銅鏡（八稜鏡、海獣葡萄鏡破片）や銭貨（富寿神宝、延喜通宝）、銅鏡など銅製品が目立ち、銅印「長良私印」が第22号竪穴建物から出土している。また緑釉陶器と墨書土器が多く、特に「王」と読める墨書が複数の遺構から多数出土した。石製品には砥石、石銚、編み物用石錘、土製品には羽口、土製円盤がみられた。

第2節 発見された遺構

1 提示の方法

すべての遺構の掲載を基本としたが、近現代の攪乱や、小規模な土坑・ピットで、単体で存在し時期の特定ができないものについては掲載を控えた。遺構実測図は平面図と断面図・土層図を組み合わせで示した。一部の溝址は規模が大きいため平面図とは別に断面図・土層図を掲載した。カマド等の遺構内施設は属する遺構の平面図に組み合わせた。遺構実測図の天地は方位ではなく各遺構の主軸に平行ま

本書での名称	調査時の名称(調査次)
溝13	溝7(4次)
溝14	溝7(4次)
溝15	溝12(4次)
溝16	溝10(4次)
溝17	溝11(4次)
溝18	溝4(4次)
溝19	溝1(4次)、溝1・5(5次)
溝20	溝9(4次)
溝21	溝10(5次)
溝22	溝2(5次)
通路状遺構1	溝1～3・5(5次)
通路状遺構2	溝5(5次)
通路状遺構3	溝2(4次)
通路状遺構4	溝5(4次)
通路状遺構5	溝8(4次)
道路状遺構	溝4・6～9(5次)

第2表 遺構番号振替一覧

たは直交方向を基本とした。竪穴建物や土坑の中で特殊な遺物出土の状況を示したものは出土状況図を別に掲載した。各遺構の時期表記は第4章第2節で設定した、本遺跡出土土

器群の段階区分に基づく時期名称（第20表）を用いている。

竪穴建物と掘立柱建物を除く遺構の番号は調査次ごとに命名されており統一性を欠くが、遺物保管との整合性を考慮して振り替えは行っていない。ただし、溝址のみは複数の調査次、調査区にかかっている上に、名称を通路状遺構や道路状遺構に変更したのもあるので、本書作成の段階で振り替えを行った（第2表）。本文と図・表中で用いる遺構名の略称は本書冒頭の凡例（1頁）に示すとおりである。

2 遺構概観

計6次にわたる調査で発見された遺構は、竪穴建物、掘立柱建物、土坑、墓址、溝址、通路状遺構、道路状遺構、ピット、ピット群・ピット列、その他の遺構（鍛冶遺構、洗い場状遺構）である。ただし墓址、通路状遺構、道路状遺構及び洗い場状遺構の名称は、遺構の形状や位置、遺物の出土状況から性格や用途を推定した命名であり、今後の検討によっては改名すべき対象となる。調査次ごとの遺構の数量や詳細は第1表に示す。

遺跡の一角はローム層が発達し、ほとんどの遺構はその層中まで掘り込まれて壁面（側面）と床面（底面）が構築されていたため、遺構上部を除き、極めて良好な残存状況を呈した。特に竪穴建物の床面では、沖積地の調査では把握が困難な小規模な周溝、ピットも検出でき、拡張やわずかに位置をずらした建て替えなどが想定できる痕跡をいくつも捉えることができた。

3 遺構各説

(1) 竪穴建物（第10～62図・第3表）

291棟を確認、調査した。5・30・282住は欠番、132住は誤って第1次調査と第2次調査の双方で命名したため2棟存在するが、本文・表中では区別できるように表記した。当初は1棟として把握し調査を進めたが、調査終了後や整理作業の段階で2棟の重複であったことが判明したのがあり、住居番号の後にA・Bを付して示した。1棟ではあるが周溝や柱穴等の配置から拡張や連続した移動が推定できるものがあり、これらのうち必要なものについては住居番号の後に旧・新を付した。出土した土器群から判断して、すべての竪穴建物址は平安時代に属する。

平面形は基本的に方形か隅丸方形で、これらを基調とした長方形や不整形もみられる。主軸はほぼ東西方向に統一されているが、時期的に古い一群は北

東から南西へ若干振れる傾向がある。規模は一辺の長さが最大で 8.0m (99 住)、最少で 2.2m (105 住)、大方は 3～4m 台に収まる。床面積に換算すると最大の 99 住が 46.8㎡、最小の 105 住が 4.8㎡である。壁は垂直から若干の傾斜を持って掘り込まれている。壁高（遺構の深さ）はさまざまで、最深は 0.6m (33 住) を測るが、当該遺構周辺の検出面の残存状況に大きな影響を受けている。覆土（埋土）は①水平に 2～3 層が重なるもの、②壁際堆土を持ちレンズ状の堆積を示すもの、③単層のもの、などに大別できる。ほとんどの土層に、量的な違いはあるが地山のローム土が細粒・中粒となって混入しており、いずれも単純な自然埋没ではないことが窺える。①には中層に被熱層や焼土・炭化物を含有するものもあり、埋没過程での何らかの人為を想起させる。①と②が組み合わさった状況のものもみられた。床面は竪穴底面のローム層の地山をそのまま平坦に敲き締めているものが多い。底面の凹凸の上に地山のローム土を貼床したのも見受けられる。竪穴ごとに床の固さはさまざまで、覆土に比してほとんど固さを感じないものもあった。固く締まる範囲は、中央部のみから壁際まで及ぶものまで多様である。

遺構内施設として柱穴・ピット、カマド、周溝がみられる。カマドは主に西か東壁の中央に設けられるが、コーナー寄りもある。壁外に若干張り出すことが多い。完存したものはないが、構造は袖部に石材を組んで空隙に粘土などを充填していたと推定される。石材が全く失われ、石材を埋め込んだ跡のピットや、火床の焼土のみが残存するものも多い。壁外に大きく張り出して延びる煙道は全く確認されなかった。柱穴は一部の竪穴建物にのみ伴う。明らかに柱穴と認定できる深さや規模を持ち、4 基または 6 基が長方形や方形に配列する。長方形の短辺のひとつをなす 2 基が壁直下や壁外へ張り出す位置に配置されるものが多い（壁直下：50・51・55・99・114・272 住、壁外：10・14・16・58・110・161 住）、壁から離れた位置に方形に配置される例は少ない（43・138 新・227 住）。また壁直下に小ピットが規則的に並び、壁下柱穴と想定できる例もある（50・55・99・227 住）。周溝は壁直下に並行して巡る溝で、半数以上の竪穴建物でみられたが、全周するものは少ない。幅は 10～20cm、深さも最深で 10cm ほどである。途中で壁際から離れて曲がるものや床を区画する間仕切りのように延びるものも多い。住居の拡張や重複の痕跡と考えたい。周

溝の有無と竪穴建物の規模に相関は認められない。

遺物は土器類を中心に金属製品や石器・石製品、土製品、炭化材・炭化物がある。出土状況は石材などを伴う意図的な廃棄や納置があったことを窺わせるものと、埋土形成時の無作為な廃棄や混入とみられるものが認められ、後者が大半を占める。ただし、後者であっても土器類は各住居で時期的なまとまりを持つ場合がほとんどで、周辺にあった遺物が長期にわたり遺構の埋没と共に流れ込んだとは単純に考えられず、何らかの作為があった可能性は高い。

竪穴建物の分布は、1A 区の中央部から西と、それに続く 2 区の東側で特に集中し、重複も著しい。1B 区や 2 区の南側、4・5 区では点在する程度になる。竪穴建物同士の重複は、2 棟から数棟単位で切り合いや著しい近接をする例が多く、時期的にほとんど差異のない重複も少なからずみられた。

(2) 掘立柱建物（第 63～68 図・第 4 表）

15 棟を確認、調査した。建 11 は誤って第 1 次調査と第 2 次調査の双方で命名したため 2 棟存在するが、本文・表中では区別できるように表記した。検出段階で掘立柱建物と認識できず、調査の進行過程でピットの配列から把握したものもある。掘り方のピット内に土器等の遺物を伴ったものは少なく、厳密な時期の特定はできないが、重複関係や配置、分布等からみて、周囲の平安時代の竪穴建物群に伴う遺構と捉えて問題はないと考える。

総柱式は建 5・9 の 2 棟のみで、他は側柱式である。規模は最小が 1×1 間の建 11（1 次）で 3.08×2.84m、面積は 8.75㎡、最大は 5×2 間の建 13 で 10.60×4.28m、面積は 45.37㎡を測る。梁行は 2 間が基調、桁行は 2～5 間がみられる。掘り方のピットは、平面形は円か隅丸方形で、規模は径 22～101cm、深さ 3～64cm とばらつきがあるが、深さは検出面の残存状況に左右されている。調査地内での分布は 1B 区南と 2 区南西隅にまとまる傾向が窺える。特に 1B 区南には 7 棟が集中し、軸をそろえて隣接（建 5・6）や重複（建 7・8）するものがみられる。

(3) 土坑（第 71・72 図・第 5 表）

120 基を確認、調査した（次項の墓址 5 基を含む）。径 50～100cm 前後の不整な円形、楕円形、隅丸長方形を呈す。深さや底面等の形状も多様で、用途を特定できるものは少ない。一部の土坑と墓址を除き、出土遺物は非常に少ない。時期は縄紋中期に属するもの 1 基（4 区土 90）を除くほとんどは竪穴建物

と同じ平安時代と推定する。分布は竪穴建物が稠密な1・2区で少なく、集落北辺部とみられる4・5区に多い。

(4) 墓址 (第72図・第5表)

墓址と推定される土坑は2区土209・212、4区土17・41、5区土21の5基で、このうち2・4区の4基は坑内に土器類が埋納されていたため墓址とした。5区土21は遺物の伴出はなかったが、規模や形状、埋土の状況が酷似しており墓址と推定した。平面形は長軸が1.2～1.5mの長方形や長楕円を呈し、壁は垂直に近く掘り込まれている。底面は平坦で、埋土に大小のブロック土を含み、短時間で埋め戻されたことが窺える。主軸方向はほぼ南北だが、10度前後振れるものもあり、斉一性は見えない。分布にも一定の傾向はなく、他の遺構間に点在する。

(5) 溝址 (第73～76図)

各調査区から大小さまざまな溝址が見つまっている。水流の痕跡を残すものもあるが、すべてが人為的に掘削された遺構と考える。規模の長大なものは調査区を超えて連続しており、これを1本と数えると22条の溝が検出されたことになる。

溝1 1A区南東部にあり、16住に切られる。長さ14m、幅10m、深さは40cmを測る。遺物は土器片が少量出土したのみで図示できるものはない。

溝2 (第74図) 1A区と2区にわたる。2区北西部の調査地域外から現れ、2区中央部北寄りわずかに蛇行しながら西から東に横断して1A区に続き、1A区南東の調査地外に消える。1A区中央西寄りで一旦途絶えるが、調査時の遺構検出面設定レベルの影響であって、本来は連続していたものであろう。重複するすべての竪穴建物が切られる。確認できる総延長は217m、幅は1.1～1.9m、深さは10～40cmを測る。覆土は、流路として機能した際に堆積したと推定する灰色系の砂性を帯びる土を含む、極めて特徴的なものであった。この灰色系の土はI・II期の竪穴建物数棟のカマド構築材としても用いられていた。2区の中央部東寄りで溝8と溝9が相次いで本址から分岐する。いずれも本址と酷似した埋土を持ち、溝8は分岐部分が竪穴建物が切られて不明だが、溝9は本址と連続する一体の遺構と捉えて問題ない状況であった。遺物は土器類と鉄器が出土している。土器類はf～1区間に集中して遺存しており、時期的にもI期新のまとまった資料である(第170図1溝2_1～第171図2溝2_46)。

溝3 (第74図) 2区中央部西寄りで溝6から分岐し、

東に直線的に延びて2区南東隅で区域外に出るが、その延長線上の1B区に再び現れ、同区北部を東西に横切って東端の調査区外に消えている。実際に確認された長さは2区で95m、1B区で36mだが、2区に分岐点から1B区の東端までの総延長は168mとなる。幅は0.5～1.1m、深さは12～48cmを測る。覆土に明確な流路の堆積はみられなかったが、溝6と並走していることから溝6に関連する遺構であることは確かであろう。遺物は土器類707gの出土をみたが、図示できるものはない。

溝4 (第74図) 1B区中央の掘立柱建物が集中する地帯を東西に横断している。1B区の西端調査区外から現れ、東側の先端は調査区域外に到達する前に浅くなって調査地内で消える。途中で2か所途切れるが、本来は連続していた可能性がある。途切れた部分も含む総延長は52mで、幅0.7～2.1m、深さ28～40cmを測る。覆土に明確な流路の痕跡はみられなかった。遺物は土器類の破片が散発的に出土し、11点を図示できた。I期からII期の様相を示し、本址の埋没時期もそこに求めたい。

溝5 1A区の南東隅で128住を切っている。東西の長さ11m、幅0.6～0.9m、深さ15cm前後を測る。規模の小さいものであり、遺物もなく、用途、性格はわからない。

溝6 (第75図) 第2次調査で2区をほぼ東西方向に横断する大型の溝として発見された。第4次調査の4D区で発見された南北方向の大規模な溝も、その位置や規模、断面形からこれの上流部に接続するものと推定し、双方を合わせ溝6として一括で捉えた。4D区の西の調査区外から東に向かって現れ、すぐに直角に折れてわずかに蛇行しながら南に向かい、いったん4D区南の調査区外に消える。おそらくそのまま南に下って2区西側の調査区外で大きく曲がって東に向かったらしく、2区西端部に現れて、小さなクランクを持った後にまっすぐに東に向い、そのまま2区東端の調査区外に消える。その延長線上には1B区の北端部がかかるが、この一帯は耕作や開田時の攪乱が多く、調査の際に黒色土の広がりも認められたものの、明確な遺構としては把握できなかった。おそらく2区からまっすぐ東方に延びていたものと推測する。4D区内の長さが89m、2区内が133m、双方を合わせ両区の間調査区外部分と1B区の推測部分を加えた推定総延長は約340mという長大な溝である。特に2区西側のクランク部以東は蛇行や湾曲をほとんど持たず、120mにわたり

一直線に東に向かっている。幅はばらつきが大きい
が、4D区で4～11m、2区は2.5～8mで、概し
て4区で太く2区で細い。断面形は緩いV字やU字
型を呈し、深さは0.6～1.4mを測る。埋土は自然
堆積のレンズ状を呈するが、最下層付近に水流に伴
う砂礫層が認められた地点がいくつかあり、流路で
あったことを示す。4D区の南寄りの同一地点で溝
13と溝14が合し、2区の西側では溝3が分岐して
いる。ただし溝3は本址よりもかなり浅く、水路の
分流ではない可能性がある。2区の東寄りに溝幅が
急に広がる部分があり、その一帯には溝底に礫の意
図的な集中（「特殊遺構」と命名）や、あたかも溝
底に下りていくために段と礫を配置したような遺構
（「洗い場状遺構」と命名。文献5では「水汲場遺構」
「洗い場遺構」と紹介）があり、本址の中でも特殊
な部分だったことが窺える（第80図）。遺物は4D
区では溝の規模の割に少なく、総量で1.2kgの土器
片が埋土中から散発的に出土したのみだが、2区で
は地点によって多少差はあるが埋土の上・下層を問
わず多くの土器類が含まれており、総量は24.7kg
に及んだ（第171図2溝6(7_1～4溝6_5)。ただ
し、出土状況に意図的な配置や廃棄を示すものは認
められなかった。遺物のほとんどが埋土形成時に周
囲から入り込んだものとみれば、竪穴建物の集中域
である2区の区間で多く、遺構がまばらな4D区で
少ないという状況も理解できる。本址の形成時期は
Ⅰ～Ⅱ期の224・245・272住と重複・近接するこ
とからそれ以降、埋没時期は出土土器群の最新時期
であるⅤ期古と考えられるので、本址はⅢ期からⅤ
期にかけて存在した大型の用水路であったと理解し
たい。

溝7 2区北東隅のやや南寄りで見え真直ぐに南
下、溝6の上部を切って渡り、溝10に合する。そ
の間すべての竪穴建物、溝址を切る。総延長は
72mを測るが、幅0.3～0.5m、深さ6～20cmと、
長さの割に規模は小さい。埋土から609gの土器類
が出土したが、近世以降の陶器が少量含まれており、
古代に属する遺構ではないと判断した。

溝8（第74図）2区中央部東寄りで溝2から分岐し、
南東に約30m延びて浅くなり消える。幅は0.8～
1.1m、深さは16～24cmを測る。重複するすべての
竪穴建物に切られる。埋土の特徴は溝2と全く同
じであった。遺物は土器類が2,927gあるが、すべ
て破片で散発的な出土である。

溝9（第76図）2区中央部東寄りの溝8のさらに

東側で溝2から分岐し、南南東に約37m延びて溝
11に切られて消える。幅は0.5～0.7m、深さは
16～20cmを測る。重複するすべての遺構に切られ
る。埋土の特徴は溝8と同様であった。遺物は土器
類が散発的に288g出土したのみである。

溝10 2区南部にあり一辺48mほどの方形区画に
見えるが、南側は調査区外の境界付近で浅くなっ
て消える。溝3、溝6の上部を切り、南下してきた
溝7と合する。総延長は93mを測るが、幅0.3～
0.5m、深さ14～20cmと、長さの割に規模は小さい。
埋土から近世以降の陶器がわずかに出土し、古代に
属する遺構ではないと判断した。

溝11 2区東部の151住南壁に切られる位置で現
れ、そのまま13mほど南下して溝6に合して終わ
る。幅は0.3m、深さは10cmを測る。途中で溝9を
切る。出土遺物はない。溝6の本址と合する地点は
部分的に幅員を増し、洗い場状遺構2を伴っていた。
溝12 2区北西隅やや東寄りから現れ、南南東に延
びて溝6に合して終わる。途中で溝2と265住を
切る。長さ26m、幅は0.4～0.7m、深さは5～
15cmを測る小規模なもので、遺物は土器類が散発
的に206g出土したのみである。溝6との併行関係
は不明。

溝13 4D区南部で溝14とともに溝6に合する形
で捉えられた。長さ21m、幅は1.5～2.6m、深さ
は5～15cmを測る。東から西に向かって徐々に深
くなり溝6に合流している。遺物はない。

溝14（第76図）4D区南部で溝13とともに溝6
に合する形で捉えられた。長さ24m、幅は0.7～
5.8m、深さは5～40cmを測る。西から東に向かっ
て急激に深さと幅を増し溝6に合流する。遺物は土
器類の破片が散発的に84g出土したのみである。

溝15 4D区中央北寄りにある長さ9m、幅0.4～
0.7m、深さ10～15cmの小規模なもので、溝20
に切られる。遺物はない。

溝16 4D区にあり、溝6の西側に添うように北か
ら南に向かう。途中で途切れ、溝6に合する溝14
付近で浅くなって消えている。途切れた部分も含め
ると総延長63mを測るが、幅は0.5～1.4m、深
さは5～25cmの浅いものである。埋土に2区の溝
2でみられた灰色系の砂性を帯びる土を含む極めて
特徴的な土層が認められ、溝2の上流部にあたる可
能性もある。遺物は土器類98gが散発的に出土し
たのみで図示できるものはない。

溝17 4D区中央北寄りにあり、溝20に切られる

規模の小さいもの。長さ4m、幅0.4m、深さ15～20cm。遺物の出土はない。

溝18 4C区から4B区にかけてあり、通5と溝19を切る。4C区北寄りで見えて東進後、直角に折れて南下、そのまま4B区の区域外に消える。総延長50m、幅0.6～0.8m、深さ25～45cmを測る。遺物は土器類の小片28gが散発的に出土したのみで、本址の時期特定はできない。

溝19 (第76図) 4D区の北端部付近に発して東南東に向かい、4B区に入ると大きく弧を描いて北東に向きを転じ、そのまま5区を貫いて東端の調査区外に達する直前で浅くなって消える、総延長255mに及ぶ長大な溝である。通1～5と交差し、溝18、4-土17(墓址)やいくつかの土坑、ピットに切られている。幅1.5～3.9m、深さ20～84cmを測る。断面形は浅いU字形を呈し、底面に若干の起伏がみられる。埋土に砂礫を伴う流水の痕跡は認められなかったが、鉄分の沈殿や青灰色を呈する部分がわずかにあり、局所的に小規模な滞水があったと推定する。遺物は、4A～D区の間では土器類が散発的に出土したのみだが、5区では通1との交差部の南側で須恵器の大甕(5溝19_17)がまとまって遺存しており、通1・2間では底面や埋土下層に土師器と黒色土器Aの杯A一括品(5溝19_4～11)が点々と残されていた。これらの土器類から本址の下限はIV期新からV期古くらいと考えられ、本址を切る4-土17がV期新なので、その頃までには埋没したのであろう。

溝20 4D区の西側区域外から現れ、そのまま真っ直ぐ東に28m延びて終わっている。幅0.5～0.9m、深さ30～45cmを測り、284住・溝6・15～17を切る。遺物は土器類222gが散発的に出土した。軟質須恵器の杯A2点を図示できたが、混入品の可能性がある。

溝21 5区西部で、通1の北方向の延長線上約7mから現れ、ほぼ北に向かって44m延びる。いったん7mほど途切れて再び現れ、さらに北に向かって浅くなって終わっている。本址は独立した遺構ではなく、南西から北東に向かっていた溝19が通1の場所で2本に分岐して、いったんは途切れる北に向かった1本とみることもできる。幅は0.7～1.0m、深さ15～20cmを測る。遺物は土器類の小片4gが出土したのみである。

溝22 (第76図) 通1の南端部から派生して弧を描くように南東に向かい、5区南部の調査区外へ消え

ている。長さ18m、幅0.7m前後、深さ15～20cmを測る。遺物はなく。通1または溝19に伴う施設であろう。

(6) 通路状遺構(第77～80図)

溝19(4・5区)と交差する形で5基が検出された。通4は280住に、通5は溝18に切られ、通1からは溝22が南東に延びている。平面形は極めて不整な長楕円や菱形を呈し、規模は長軸で8.3～17.4m、幅は3.2～6.4mを測る。壁は不明瞭で、端部から徐々に傾斜、下降して底面に至り、検出面からの深さは最深部で0.4～0.6mほどである。底面は起伏に富み、地山のローム層が極度に硬化して、所々に黒色土が敲き込まれたように貼りついていた。通1・通3・通4の中央部には、長軸方向に沿って1.4m前後の間隔をあけた、幅20～40cm、深さ20cm前後の溝が2本平行して走っており、通3・通4はその溝間に長径40～100cmのピットが連続して並んでいた。通1・通2にもピットというよりは激しい凹凸と表現した方がふさわしい起伏が集中していた。通1と通4は硬化面とピット(起伏)の広がりから、新旧2時期に分けられる可能性がある。長軸方向は、通2と通5が交差する溝19と直交するように東西に45度前後振るが、他は溝19の方向とはあまり関係がなく真北から東または西に10～15度振る程度で、南北を指向しているように見える。各遺構は約30～70mの間隔をおいて分布し、配置に規則性は感じられない。

遺物は、土器の小破片が埋土や底面から散発的に出土したのみである。通1から48g、通2から260g、通4から244g、通3と通5は皆無で、土器群として遺構の時期などを特定できる状況はない。

通1～5は、おそらく集落と同時期に存在した通路の痕跡で、当時の地表面と共に他の部分は失われたが、溝19との交差点のみは溝を横切るため窪地状に硬化面ができ、そのまま埋没して残存したものであろう。形成時期は溝19掘削以後、終期は交差する溝19の最新の遺物が10期古、通4を切る280住が9期新～10期古なので、それに近似する時期とみたい。ただし、各遺構が同時に存在した確証はなく、むしろ集落が継続していた間、必要に応じてそれぞれの方向に通路が延びていたと考えるのが自然であろう。

(7) 道路状遺構(第81図)

5区の北部で検出された。6～8mの間隔を空けて両側に幅70～100cm、深さ5～16cmの溝が断

続的に連なる遺構である。溝の連続は約 64m で、西側の溝は 2 重、3 重になる部分がある。5 区の西部で現れ、北東に延びて東側の調査区外に続いていく。東側の溝のさらに外側には径 40～60cm のピットが連なり、部分的に列をなしているように見える（ピット列）。溝間に硬化面やピットなどは確認できなかった。遺物は溝中から 10 数 g の土器小片が散発的に出土したのみである。両側に側溝を伴った道路状の遺構の痕跡と推定する。

(8) ピット・ピット群・ピット列・柱列

土坑より径の小さいピットは総数で 351 基検出されたが、規模が小さいので後世の攪乱や耕作痕と見分けがつかない。円形や楕円形を基調としている。遺物を伴ったものは少数で、時期を比定できるものは希だが、大半は竪穴建物と同じ時期に属すると推定する。分布は、土坑と同様に竪穴建物が集中する 1・2 区に少なく 4A・4B・4D 区と 5 区で多い。ピットが集中する箇所がいくつかあり、ピット群として把握した。また直線や直角に並ぶものをピット列とし、そのピット内に柱痕が確認できたものを柱列とした。特殊なピットとしては 1A 区の 69 住を切る P69（直径 25cm、深さ 28cm）から銅鏡片が一括出土している（第 23 図・第 181 図 87）。

(9) その他の遺構

165 住（2 区）は中央に 65 × 50cm の大石が据えられ、その脇の大形ピット内からは多量の鉄滓（7,947g）が出土した。大石は上面が平坦で、30cm の範囲で被熱・敲打痕を持つ。本址は金床石と鍛冶ピットを伴う鍛冶遺構であった可能性が高いと考える。

2 区の溝 6 は東部で溝幅が広がる部分があり、その北岸の 2 カ所に、溝底に降りて行けるようなスロープ状の掘り込みや段に大小の礫を伴った施設が設けられていた。溝 6 の水流を利用する洗い場・水汲み場的なものが設けられていた可能性がある。

4 遺物出土状況

(1) 多量の炭化材・炭化物を伴った竪穴建物

ア 135 住（第 82 図）

住居中央部やや南東寄りの埋土中層に多量の炭化材が集中、重積していた。炭化材は丸木状や分割材状だったがすべて 5～12cm ほどの小片で、上屋の構造材がそのまま炭化したようには見えなかった。炭化材はすべてが床面より数 cm 浮いており、集中部の中心には 1m くらいの範囲で焼土層も伴ってい

た。住居がある程度埋まった（埋めた）段階で焼土と炭化材層が形成されたものと考えられる。土器類は 2.7kg 出土したが、炭化材の分布とは関係なく、覆土下層から床面にかけて大小の破片で散在していた。

イ 161 住（第 83 図）

埋土上層から下層にかけて多量の炭化材が遺存していた。炭化材は板状（最大 36 × 32cm）や柱状（最大 52 × 8cm）で、特に南部から南東部に多く、壁の近くでは寄り掛るように浮き、中央部付近では床に密着するものもあった。一方、土器類は西壁中央に設けられたカマドの前面から北西部の一带に集中していた。その量は 21.2kg と極めて多かったが、破碎されたように大小破片で散らばっていた須恵器大甕 1 点と灰釉陶器の椀皿類がほとんどで、床面に密着したものは少なく、意図的な配列などの様相はなかった。これらの周囲の覆土中層から鉄鏃 3 点が出土した。また北東隅やや西寄りの壁直近の覆土最上層から銭貨（延喜通宝）が孔の位置が通るように 5 枚溶着して出土した。

ウ 197 住（第 83 図）

南半部に多くの炭化材が遺存していたが、5～25cm ほどの長さで、規格や方向の統一性もなく密集や点在する状況であった。南西部のものは床面に接しており、東側に行くほどに覆土上部へ浮いていく傾向がみられた。また南西部にはカヤなどイネ科植物の茎を簾状に編んだものが炭化して遺存していた。土器類の出土量は 2.25kg で他例と比べてかなり少ないが、多くが完形品やそれが割れた一括品で遺存していた。特に南西部には 4 点の土師器杯 A が床面上に密集して方形に並べられ、付近にも残りの良い杯 A と椀がまとめられていた。

エ 223 住（第 82 図）

埋土上層から下層にかけて多量の炭化材が出土した。炭化材は柱状に細長いものが多く、最大は 134 × 24cm を測った。中央部から周囲に向かって放射状に広がるように遺存しており、特に西部から南西部に顕著であった。壁の近くでは寄り掛るように傾き、中央部付近ではほとんどが床に密着、あるいはわずかに浮く程度であった。土器類は 16.8kg という大量の出土があったが完形やそれに近い形で遺存した個体はほとんどなく、大小の破片が覆土の上層から中層にかけて多量に含まれていた。カマド周りには床面に近いレベルのものもあったがすべて破片であった。

オ 245 住 (第 84 図)

床面中央部からカマドの前面や東側にかけて炭化材がまとまっていたが、他例に比べて量的には多くない。板状や丸木状を呈して 5～25cm ほどの長さや幅で、中央部のものは床に接し、端部に行くほど浮く傾向にあった。土器類は 10.2kg と多量に出土したが、上～中層に破片が多く、下層から床上には土師器・黒色土器 A の杯 A や椀が完形や一括品で残されていた。特にカマドの右脇には黒色土器 A の杯と椀、土師器甕の底部の計 7 個体が一カ所に重ねられていた。

(2) 意図的な廃棄、配置などがあった遺構

ア 55 住 (第 85 図)

多量の土器類が出土し、杯・椀・皿類だけで 130 点を図化提示できたが、その多くが壁際から出土した。壁に直近のものは床面よりかなり高い位置で壁に添って立つように傾き、壁から少し離れたものは床面に近いレベルで傾きが少なく、あたかも壁の上部から滑り落ちたような遺存状況を示した。また壁際に 3 点ほどの杯 A が正位で重ねられたものもあった。

イ 157 住 (第 84 図)

東壁南寄りの石組みカマド周辺と住居中央部に大小の礫 (最大 60 × 35cm) が多量に残されており、その周辺から 11.1kg に及ぶ土器類が出土した。51 点を図示できたが、土器群は明らかに 2 時期 (Ⅲ期新～Ⅳ期古、Ⅴ期新) に別れることから、時期の異なる 2 棟の竪穴建物がほぼ同じ位置で重複していたのを調査時に見落とした可能性が高い。調査当初は西壁中央部に東西に長く延びる焼土 (F1) が最初のカマド跡、南寄りの石組みカマドが最終のものとして捉え、1 棟の住居の中でカマドの移動があったと理解した。しかし、出土図や写真を詳細に検討すると、石組みカマドや中央部の礫はすべて床面から 5～10cm 浮いており、北東隅から北壁際の礫は 10cm 近く浮いて北壁とは微妙に異なる緩い弧状のラインを描いて分布する。F1 の焼土は壁際では上部から存在するが 40cm ほど内側は一段下がった周囲の礫の下端レベルで検出されている。土器類の出土地点も新しい時期のものが石組みカマド周辺に集まる傾向が認められる。これらのことより、調査時に把握した壁と床面は東壁中央にカマド (F1) を持ちⅢ期新～Ⅳ期古の土器群が伴う住居 (157A 住) であり、石組みカマドと礫群を持ちⅤ期新の土器群が伴う住居 (157B 住) は A 住よりも 5cm ほど高いレベルに

調査では把握できなかった軟弱な床を持ち、A 住の中にすっぽり収まる位置に構築されていたと推定する。

ウ 2 区土坑 212 (第 86 図)

216 × 100cm を測る長方形の土坑の中央から中央北寄りに黒色土器 A の杯 A 2 点と灰釉陶器皿 1 点、南東隅に黒色土器 A の椀 1 点が完形で残り、中央部の西壁際からは釘状の鉄器 1 点も出土した。これらの遺物は土坑底面から 10cm 前後浮いていた。本址埋土の下層は底面の凹凸を埋め均したような不自然な堆積で、上層にはローム粒や黒色土ブロックが混じり、掘削で生じた土がそのまま埋め戻された状況を呈す。土器類は出土レベルが上層の底面付近で揃っており、埋め戻しと同時に意図的に納められたものと推定され、本址は墓址として捉えたい。

エ 4 区土坑 17 (第 86 図)

180 × 92cm を測る長方形の土坑の北壁下から土師器の杯 A 4 点と椀 1 点、中央部の東壁下から土師器杯 A が 1 点、完形に近い形で出土した。どちらも壁直下からわずかに内側に寄った位置にあり、北壁下の 5 点は正位や逆位で東西に並ぶように残されていた。本址の埋土はロームなどのブロックが多量に混じる、掘削土を短期間で埋め戻した状況を示しており、いずれの土器も土坑底面から 2～5cm 浮いていた。本址は土坑の底面を整地した後、土器類を意図的に並べて埋め戻しを行った墓址と推定する。

オ 4 区土坑 41 (第 86 図)

185 × 92cm を測る隅丸長方形の土坑の北東部から土師器杯 A と椀、黒色土器 A の椀、灰釉陶器椀と長頸壺各 1 点の計 5 点、南部から土師器杯 A が 1 点、合計で 6 点の土器類が完形に近い形で出土した。また南部のやや中央寄りには鉄器 (刀子) 1 点が残されていた。北東部の土器類 5 点は東壁に添うように並び、灰釉陶器椀以外は正位で、ほぼ底部のレベルは揃っていた。灰釉陶器椀のみは側位で直立しており、他と較べて不自然な状態であった。南部の土師器杯 A や鉄器も含め、すべてが土坑底面より 5～10cm 浮いていたがレベルは揃っていた。土坑の底面を整地した後、土器類を意図的に並べた墓址と推定する。

No.	地区	平面形	主軸方位	規模(m,面積は㎡)				カマド位置	柱穴	重複関係		時期	特記事項	掲載図
				長	幅	深	面積			新	旧			
1	1A	方形	N0	3.8	0.31		(12.6)	不明			IV古<	床は平坦で固い。床上5~10cmより3列でこも石出土。	10	
2	1A	不明	N103W	3.2	0.20		(12.0)	西壁中央	4住		I新	覆土は黒色土で上層から河原石。床は軟弱、起伏が激しい。	10	
3	1A	方形	N83E	4.4	0.15		(15.9)	東壁中央	4住		III新>		10	
4	1A	方形	N88E	4.1	3.7	0.30	13.8	東壁北寄り		2,3住	IV新	床は全体が固く平坦。	10	
5												(欠番)		
6	1A	方形	N93E	4.4	4.0	0.36	(14.5)	東壁南寄り	7住		I古<	床は壁下を除き固く平坦。	10	
7	1A	隅丸方形	N89E	3.6	3.6	0.18	(12.0)	東壁中央	8住	6住	III新>	床は壁下を除き固い。一部貼床。	10	
8	1A	隅丸方形	N77W	3.7	0.29		(11.2)	西壁中央	9住	7住	IV古>	壁下を除き貼床で良好、平坦。2面の可能性。	11	
9	1A	方形	N95E	5.2	4.6	0.17	22.3	東壁南寄り		8住	IV新<	褐色土の上に貼床。	11	
10	1A	方形	N80E	5.8	5.2	0.52	25.5	東壁南寄り	6	11住	I新	床は非常に固く平坦。粘土袖カマド。	12	
11	1A	方形	N88W	4.2	3.8	0.15	14.1	西壁中央	10住		V古>	壁下幅30cmを除きタタキ床。	11	
12	1A	方形	N93E	4.3	4.4	0.18	17.8	東壁中央			IV古<	床は非常に固く良好、平坦。北壁下に高い範囲あり。	11	
13	1A	方形	N5E	4.0	3.6	0.35	(14.1)	不明	15住		V古>	床は非常に固く平坦。覆土中層~床上に炭化物多、焼失住居の可能性。北壁際床面から八稜鏡逆位で出土。	11	
14	1A	隅丸方形	N88E	5.5	0.22		(28.0)	東壁中央	4	15住	II古<	床は平坦。	12	
15	1A	方形	N85E	4.9	5.0	0.31	23.6	東壁中央		13,14住	V新>	床は非常に固くきわめて平坦。カマド内に支脚石。	11	
16	1A	方形	N85E	4.7	4.1	0.35	17.7	東壁中央	6		II古<	北壁際中央の床の窪み内から鏝と富寿神宝が近接して出土。	13	
17	1A	不整形	N75E	4.4	0.48		(15.9)	東壁中央		19住,土1	V新>	床は壁下を除き固く平坦。北壁側拡張の可能性。	14	
18	1A	方形か	N4E	3.9	0.37		(13.3)	不明		17,19住	I新<	床は固く平坦。	14	
19	1A	方形	N89E	3.6	3.8	0.38	12.8	東壁中央		17,18住	IV新>	床は壁下を除き固く平坦。カマド両袖の上に石を渡す。	13	
20	1A	不整形	N91E	4.4	0.27			東壁中央			V古	床は壁下を除き固く平坦。西壁削平。	13	
21	1A	隅丸長方形	N87W	4.6	0.16		(15.5)	西壁北端	23,22住		IV	床は部分的に固く、やや起伏あり。22・23住との重複が遺物所見と異なる。	13	
22	1A	隅丸長方形	N93W	4.4	5.3	0.36	21.9	西壁北寄り		23,21住	III古	床は程よく締まり良好。カマド新旧。壁より3cm、床上10cmから銅印出土。21・23住との重複が遺物所見と異なる。	14	
23	1A	隅丸長方形	N82E	4.0	0.18		(12.1)	東壁中央	22住	21住	III新>	床はあまり固くない。21・22住との重複が遺物所見と異なる。	14	
24	1A	方形	N89E	3.8	3.7	0.18	12.8	東壁中央			IV古	床は壁下を除き固く平坦。	13	
25	1A	方形	N87E	4.4	4.4	0.14	18.5	東壁南寄り		26住	IV新>	カマド新旧。	15	
26	1A	不明	N6W	4.2	0.15			北壁西寄り	25住		IV新>		15	
27	1A	方形	N6W	3.8	4.0	0.20	15.0	北壁東寄り			I新>	床は壁下を除いて良好、平坦。	15	
28	1A	方形	N95W	3.5	3.5	0.35	12.0	西壁中央			V古<		15	
29	1A	方形	N81E	4.8	4.1	0.20	17.6	東壁中央			IV古<	床は固く、壁下を除いて平坦。	15	
30												(欠番)		
31	1A	不整形	N83E	4.1	3.8	0.23	14.8	東壁中央か			II新	カマド位置は推定。	15	
32	1A	不整形	N3E	5.6	3.8	0.10	19.9	北壁西寄り			IV古<		16	
33	1A	方形	N84E	4.9	4.3	0.60	18.4	東壁南寄り			IV新<	覆土上層褐色、下層黄褐色でブロック多、人為埋没の可能性。床は壁際を除き固い。床面遺物は少。	16	
34	1A	方形	N97W	4.0	4.2	0.33	16.0	西壁南寄り			V古>	覆土は褐色土の単層、わずかにロームブロック含む。床の東側1/3は軟弱で不明瞭。	16	
35	1A	方形	N6W	4.5	4.6	0.07	19.2	北壁中央			V古>	浅く、一部床下まで覆土が及ぶ。床面に焼土広がる。	16	
36	1A	方形	N88E	0.16			(20.9)	東壁南寄り	38,39住		I古<		16	
37	1A	方形	N6W	3.5	3.5	0.10	11.8	なし	38住		IV古<	覆土は褐色土の単層。	16	
38	1A	方形	N85E	4.8	4.6	0.28	21.2	東壁中央	39住	37,36住	IV古	西壁の周溝の一部が間仕切り状に延伸。	17	
39	1A	長方形	N96W	4.3	3.2	0.15	12.8	西壁南寄り		38,36住	IV新	カマド新旧。	17	
40	1A	長方形	N95W	3.0	3.4	0.25	9.8	不明			V古>		17	
41	1A	方形	N4W	3.0	2.9	0.12	8.4	北壁東寄り			IV古<		17	
42	1A	方形	N89W	3.1	3.4	0.11	9.6	西壁中央			不明	遺物僅少で時期不明。	17	
43	1A	方形	N110W	5.3	5.0	0.30	23.6	西壁南寄り	4		I新>	床面2枚、固(旧)、ローム・褐色土・粘土で軟弱、厚さ1~3cm(新)。北東隅一帯中層に粘土。北西部床面から鉄具出土。	17	
44	1A	方形	N91W	3.7	3.3	0.18	(11.6)	西壁中央	45住		IV古>	覆土は自然堆積状、ほぼ全面固い床。	18	
45	1A	方形	N91W	3.2	3.4	0.07	10.2	西壁中央		44住	III新	覆土は褐色土の単層。床は中央部が固く良好。	18	
46	1A	不明	N11W	0.24				不明			IV新		18	
47	1A	方形	N94E	3.4	3.3	0.15	10.9	東壁南寄り			III古<		18	
48	1A	長方形	N63E	4.5	0.35		(17.1)	東壁南寄り	50住		I古	粘土袖カマド。	18	
49A	1A	方形	N13W	4.2	0.32		(17.3)	不明	50住		I新	49B住が49A住居を貼っていたことが調査後判明。	18	
49B	1A	方形	N90W	4.3	0.22		(16.9)	西壁中央	50住		IV新>	カマドは49B住のもの推定。	18	
50	1A	方形	N91E	7.2	5.9	0.57	36.3	東壁中央	12	48,49住	V新>	壁際を除き良好な床。カマド両側壁下の中~下層から杯類完形品出土。	19	
51	1A	長方形	N74E	5.6	4.6	0.45	26.3	東壁中央	4	52住	I新>	床面は固く良好。	20	
52	1A	長方形	N1E	3.8	3.2	0.15	11.7	なし		51住	IV古<		20	
53	1A	不明	N2W	3.0				不明	54住		IV新>		20	
54	1A	長方形	N91W	3.6	4.2	0.15	14.3	西壁南端		53住	IV新<	覆土下層に炭・焼土、埋没途中で焚火の可能性。中央~カマド寄りには固い床、他はやや軟弱。張り出し部から鉄滓。	20	
55	1A	長方形	N92W	7.6	6.6	0.43	46.3	西壁中央	14		IV古<	覆土は自然堆積状で中央が窪み、中層に焼土と炭層。床は柱間の中央が特に固い。床の4か所に焼土。間仕切り状の小溝あり。壁際中層から杯類出土多。	21	
56	1A	方形	N89W	4.4	4.7	0.41	20.5	西壁中央			IV新>	覆土上面は自然埋没状。床上10cmに炭層。	20	
57	1A	不明	N1E	0.23				不明					19	
58	1A	不整形	N84W	5.3	5.2	0.21	23.3	西壁中央	6		IV新>	床中央部は固く、周囲は軟弱な貼床で凹凸著しい。床面の遺物少。住居外にもピット。	22	
59	1A	方形	N102E	3.2	3.5	0.45	10.7	東壁北端			V新>	覆土上層から鉄滓が多い。	20	
60	1A	方形	N0	3.4	0.28		(10.6)	不明	61住		IV古>	遺物少ない。	22	
61	1A	方形	N90W	3.5	3.2	0.40	10.3	西壁北寄り		60住	IV新<	東半覆土に人為的な埋め戻し。	22	
62	1A	方形	N88E	0.35			(18.4)	東壁中央	63住,建11		III新>	粘土袖カマド。	22	
63	1A	隅丸方形	N94W	5.2	0.40		(17.7)	西壁中央	64住,建11	62住	III新>	壁際を除き固い床。カマドの支柱残存。	22	
64	1A	方形		3.6	3.7	0.16	12.9	東壁中央		63住	IV新?	床全面やや軟弱。カマドに焼土面の形成なし。	22	
65	1A	隅丸長方形	N83E	4.0	3.4	0.12	12.7	東壁北寄り			IV新	全面良好な床。遺物少。	23	
66	1A	隅丸長方形	N82E	4.3	3.6	0.28	14.6	東壁中央			III古<	覆土上層は人為埋没か。床上10cmに焼土面。床中央固く、周囲は軟弱。	23	
67	1A	不明	N1E	3.7	0.12			不明	122住		II>	遺物少ない。	23	
68	1A	不整形	N9W	2.7	2.8	0.42	6.5	なし		116住	IV古<	覆土に焼土・炭・灰が多い。	23	
69	1A	方形	N80E	4.4	3.5	0.30	12.6	東壁中央			I新>	覆土は自然堆積、下層は部分的に焼土・炭多量。床は良好。南東隅に浅い落ち込み、石材が組まれていた可能性。本址を切るピットから銅鏡片出土。	23	
70A	1A	隅丸方形	N92E	3.0	3.4	0.26	9.4	西壁南端	土5,70B住		IV新>	カマド新旧?	23	
70B	1A	隅丸方形	N84W	3.4	3.9	0.13	(13.1)	不明	土5	70A住	III~IV		23	
71	1A	不明	N3E	0.10				不明	72~74住		IV新>	床面のみ把握。平面図掲載不能。	24	
72	1A	長方形	N92W	3.4	3.9	0.24	(12.2)	西壁中央		71住	IV新<		24	
73	1A	隅丸長方形	N97W	3.5	0.12		(14.8)	西壁北寄り	74住,土5	71,72住	IV新>	南半分は固い床。	24	
74	1A	隅丸方形	N88E	3.8	4.2	0.12	15.0	東壁中央		71,73住	V新	中央は固い床、他は軟弱で凹凸著。71住重複部は貼床。北・南に不整形のピットあり、上面に貼床の可能性。	24	
75	1A	方形	N83W	3.1	3.5	0.06	10.4	西壁中央			V古>		24	
76	1A	方形	N83E	4.0	3.7	0.35	14.5	東壁中央			IV古>	覆土は自然堆積状。床中央部は固く良好。	24	
77	1A	長方形	N93W	4.5	3.4	0.18	15.2	西壁中央		溝2	IV古<		24	

第3表 竪穴建物一覧(1/4)

No.	地区	平面形	主軸方位	規模(m.面積は㎡)				カマド位置	柱穴	重複関係		時期	特記事項	掲載図	
				長	幅	深	面積			新	旧				
78	1A	方形	N95E	4.0	3.7	0.28	13.5	東壁中央				IV新	壁際は逆三角堆土、中央は単層でロームブロック多。壁下を除き固い床。	25	
79	1A	方形	N1E		3.2	0.33	(10.6)	不明		溝2		III新	床面の段差を伴う間仕切り状の溝。	25	
80	1A	隅丸方形	N84W	4.2	4.4	0.23	17.2	西壁中央				IV新>	西半部人為的な埋没か。	25	
81	1A	方形	N94W	3.8	3.8	0.23	14.0	西壁中央			溝2		IV新>	壁下の周溝を除き固い床。	25
82	1A	隅丸方形	N7W	4.2	4.0	0.35	(15.9)	不明				IV新	東壁中央部に段。	25	
83	1A	方形か	N3W	3.4		0.15		北壁東寄りか				IV古<	北壁の礎を伴うピットがカマド跡か。	25	
84	1A	方形	N85W	5.0	0.16		(23.1)	西壁中央			85住	VI>	一部周溝が二重にあり、住居拡張の跡と推定。	26	
85	1A	隅丸方形	N93W	4.4	4.4	0.36	17.4	西壁南寄り	84住			IV新>	覆土中層まで埋没後、焚火の灰層形成、ブロックの多い土で埋める。床は固く良好。中央床面に焼土面。	26	
86	1A	方形	N96W	3.5	3.5	0.13	(12.4)	西壁中央	87住			III古	南東隅に焼土あり、カマド類似施設か。	26	
87	1A	隅丸方形	N85E	4.0	3.6	0.20	13.4	東壁中央	88住		86住(建10)	III古	遺物多い。	26	
88A	1A	隅丸方形	N4E	4.9	4.9	0.20	(23.4)	不明			87住(建10)	IV古<	建10との重複前後関係は推定。	26	
88B	1A	隅丸方形	N1E	3.6		0.10	(12.2)	不明				不明		26	
89	1A	不明	N0			0.02		不明	90住			IV古	耕作・攪乱による破壊が著しい。	27	
90	1A	不明	N2E			0.10		不明		89住		IV新	耕作・攪乱による破壊が著しい。	27	
91	1A	不明	N87E			0.28		東壁中央か	92住			I新		27	
92	1A	不明	N8W	3.5		0.15		不明	93住	91住		IV古>		27	
93	1A	不明	N98W			0.12		西壁中央か		92住		IV新<		26	
94	1A	隅丸方形	N97W	3.1	3.2	0.12	9.5	西壁中央	96住			V古<	中央部北寄りに礎群。	27	
95	1A	方形か	N5W		4.4	0.50	(16.4)	不明	96住			II古>		27	
96	1A	隅丸長方形	N88E	4.8		0.35	(25.4)	東壁中央		94,95住		V新<	遺物多い。遺物から94住より本址が新、発掘所見と異なる。	27	
97	1A	方形	N3W		4.5	0.35	(18.5)	不明	98,99住			III新>		28	
98	1A	方形	N91E		4.0	0.23	(14.3)	東壁中央		97,112住		V古	覆土はロームブロックを少量含む褐色土単層。	28	
99	1A	長方形	N85E	8.0	6.4	0.53	46.8	東壁中央	13	97,113住		V新	覆土に意図的な埋め戻しや焚火の痕跡らしきもの。床は全体的によく締まる。南西隅は一段下がって焼土を伴う。	29	
100	1A	方形か	N83E	4.5		0.06	(15.4)	東壁南寄り	118住			IV新>	ほとんど削平される。	28	
101	1B	方形	N78E	4.7	4.2	0.45	(17.4)	東壁中央	102住			I新>	大きなブロックが混じる不自然な覆土、人為的な埋め戻しか。	28	
102	1B	方形	N84E	3.7	3.9	0.12	14.3	東壁中央		101住		II新>	床は固く良好、平坦。	28	
103	1B	方形	N83E	4.4	3.9	0.20	(15.3)	東壁中央	104住			II新>	床は壁下を除き固く良好。南東隅床から浮いて土器類多数。	28	
104	1B	不整形	N91E	4.4	4.2	0.10	18.0	東壁中央		103住		III新<	中央部は固く良好な床、壁下やや軟弱。所々窪んで起伏に富む。	30	
105	1B	隅丸方形	N92E	2.2	2.4	0.10	4.8	東壁南寄り				II古>	中央部は固く良好な床、全体が中央部に向かって挿鉢状に傾斜。	30	
106	1B	方形か	N79E			0.30	(23.7)	東壁中央か(2)	溝3			I新>	P ₁ ・P ₂ は柱穴の可能性。	30	
107	1B	方形	N98W	3.8	3.8	0.10	13.6	西壁中央				IV古	床は平坦だがやや軟弱。中央部に床からわずかに浮いて石が組まれたように密集。	30	
108	1B	方形	N1W	3.7	3.4	0.25	(11.6)	北壁中央	17			II新>	床は平坦で良好。	30	
109	1B	長方形	N83E	3.0	3.7	0.13	11.0	東壁南寄り				III古	床は固く良好。中央部床直上に0.3~0.5cmの灰層。	30	
110	1B	長方形	N83E	6.6	5.6	0.37	36.5	東壁中央	7			II新	礎板石を有す柱穴の可能性。床はロームを貼り、固く締める。覆土は暗褐色土単層。土器類多数。銅製鉋尾2点、石製巡方1点。(欠番)	31	
111															
112	1A	長方形か	N96W			0.07	(9.8)	西壁中央	98,121住			IV古	浅く遺物少ない。	32	
113	1A	方形か	N4W		4.6	0.20	(18.4)	不明	99,114新住	114旧住		IV新	覆土上層はブロックを含む人為埋没、中央西側良好な床。	32	
114新	1A	隅丸方形	N87E	4.8	4.4	0.22	18.1	東壁南寄り	4	113住		V新>	周溝・カマド・柱穴の配置や土層の立ち上がりから新旧を想定。	31	
114旧	1A	隅丸方形	N2W	4.7	4.1	0.18	17.2	不明	113住			III古<	柱穴・東壁のカマドは新住居。	31	
115	1A	方形	N3E	2.8	2.9	0.08	7.8	なし				IV新>		32	
116	1A	方形	N88W	4.3	4.2	0.07	(18.3)	西壁中央	68住			IV古>	ほぼ全面良好な床。	23	
117	1A	長方形	N92W	4.8	3.9	0.18	17.6	西壁南寄り				III古<	ほぼ全面良好な床。	32	
118	1A	不整形	N97W	4.0	3.5	0.15	13.0	西壁南端		100住		V新>	中央部の床に東西に広がる窪み。	32	
119	1A	方形	N85E	3.1		0.11	(9.3)	東壁中央	120住			III古	浅く遺物少ない。	32	
120	1A	長方形	N97W	4.7	4.1	0.14	(18.9)	西壁南寄り	121住	119住		V古	121住との重複が遺物所見と異なる。	33	
121	1A	方形	N93W	4.0	3.9	0.24	14.9	西壁中央		120,112住		III古<	覆土中層に焼土層。120住との重複が遺物所見と異なる。	33	
122	1A	方形	N0	3.9	3.9	0.15	14.6	不明		67住		III古<	一部削平。	33	
123	1A	方形か	N97W			0.22	(21.8)	西壁南寄り	124住	溝2		IV新	床は固く堅緻。溝2の遺物混入(I新)。	33	
124	1A	方形	N91W	5.8	5.4	0.36	(29.2)	西壁南寄り(3)		123住		IV新>	覆土は褐色土。床全面固く良好。P ₁ ~P ₃ は柱穴の可能性。	34	
125	1A	方形	N84E	5.4	4.9	0.32	(24.1)	東壁中央	126,127住			IV古<		34	
126	1A	方形	N91W	3.3	3.3	0.24	11.0	西壁南寄り	127住	125住		IV		33	
127	1A	方形か	N3W				(12.4)	北壁西寄り		126,125住		IV以降	125住覆土中に存在。中央西寄りに焼土。	34	
128	1A	長方形か	N7W	8.1		0.38		不明	溝5			II~III	周溝・ピットの配置から大幅な拡張を伴ったと推定。	34	
129	1A	方形	N88E	4.3	4.2	0.20	18.1	東壁中央				不明	住居の掘り方らしき大きな窪み多数。	33	
130	1A	不明	N16E	3.8		0.08		不明		溝2		IV	ほとんど削平。	34	
131	1A	不明	N4W			0.08		不明		(建10)		不明	ほとんど削平。	35	
132	1A	隅丸方形か	N90E		4.2	0.25	(17.2)	東壁南寄り				不明		35	
132	2	方形	N3W	3.5	3.6	0.25	11.3	北壁中央				IV新>	覆土にロームブロック多量混入、人為埋没の可能性。	35	
133	2	長方形	N89W	4.2	3.4	0.15	13.4	西壁中央				III新>	床は平坦、中央部固。北部床より少し浮いて石製巡方出土。	35	
134	2	方形	N91W	4.1	4.2	0.16	16.9	西壁中央				II新	床中央部は良好で平坦、外周部は軟弱。	35	
135	2	不整形	N8E	4.7	4.5	0.15	19.1	不明	溝7,136住	250住		IV新>	床は全面的に平坦で固い。中央部の覆土中層に1.5m径の焼土面。周囲に5cm長ほどの細かい炭化材多量。	82	
136	2	方形	N81W	4.4	4.2	0.25	16.7	西壁中央		135,250住		IV新	南東の焼土はカマド類似施設の可能性がある。	36	
137	2	方形	N85E		3.8	0.11	(14.4)	東壁北寄り	138住	溝2		IV新>		36	
138新	2	方形	N12W	6.3	6.2	0.12	(36.3)	北壁西寄り(3)	溝7	137,139住		V古<	床面二重、旧住居を埋めて拡張。間仕切り状の溝を持つ。	37	
138旧	2	方形	N88E	5.7	5.5	0.15	(30.4)	東壁中央	溝7	137,139住		V古	中央に焼土。緑釉陰刻花紋陶出土。	37	
139	2	長方形	N3E		2.8	0.12		不明	138,152住	溝7		IV古>	周溝に掘り方状の窪み。中央部の床は良好。	36	
140	2	方形	N87W	3.6	4.0	0.11	14.4	西壁中央		251住		IV古>	床は平坦。南側周溝が二重で内側のものは上部貼床、拡張の痕跡と推定。P ₁ 脇から一括土器。	36	
141	2	方形	N88W	4.3	3.8	0.13	(15.6)	西壁中央	143住	溝2		IV新>	カマド新旧、拡張の可能性。143住との重複、遺物所見と逆。	36	
142	2	長方形	N89E	3.1	3.6	0.10	10.9	東壁中央				IV新>	西壁南寄りにカマドと推定される焼土、新旧・並存は不明。	36	
143	2	不整形	N84E	4.0	4.0	0.10	15.4	東壁中央		141住	溝2	III新<	まとまりはないが、大小土器が多量に出土。床直から鉄鎌。	38	
144	2	不明	N1W			0.17		不明		244住		IV古>	ローム直床、平坦だが固さはない。	38	
145	2	方形	N88W	3.6	3.6	0.22	12.8	西壁中央		146,239~241住		IV新<	覆土はローム粒やブロック混入の褐色土、人為埋没の可能性。カマド脇から一括品3点。	38	
146	2	長方形	N84W		3.9	0.20	(12.2)	西壁中央	145住	239~242, 238住		IV新	中央部から南側の床は平坦で良好。	38	
147	2	方形	N94E	3.6	3.4	0.31	10.6	東壁中央				IV古	覆土中層はローム粒多量混入褐色土で人為埋没の可能性。カマド右脇から一括品、壁際上部から一括品2点。	38	
148	2	方形	N92W	3.8	3.7	0.10	14.0	西壁中央		236住		IV古>	床は中央部広く固い。床土5~10cmから一括品数点。	38	
149	2	方形	N108E	2.6	2.8	0.20	6.8	東壁中央				III新>	床は固く良好、中央部と南壁下に段。	39	
150	2	方形	N87W	3.4	3.4	0.20	10.6	西壁中央	151住			II新>	平坦なローム直床、堅緻。	39	
151	2	隅丸方形	N87E		3.9	0.10	(15.0)	東壁中央	溝7	150住		IV新	東方向への拡張に伴いカマド移動と推定。	39	
152	2	方形	N6E	3.7	3.7	0.18	12.9	北壁東寄り		139住	溝9	IV新>	ローム粒・ロームブロック多量混入、人為埋没の可能性。	39	
153	2	方形	N87W	3.2	3.8	0.21	11.3	西壁北端				V古>	自然堆積状だがローム粒混入、人為埋没の可能性も。中央部に固い床。遺物は少なく床から浮いて小片が散乱。	39	
154	2	方形	N91E	3.8	3.6	0.25	12.8	東壁南寄り		溝2		IV新<	上層に炭化物・灰層と焼土。覆土中から遺物大小片偏りなく出土。床は中央部が固く良好だが凹凸あり。床に段と周溝、拡張の可能性。	39	

第3表 竪穴建物一覧(2/4)

No.	地区	平面形	主軸方位	規模(m.面積はm)				カマド位置	柱穴	重複関係		時期	特記事項	掲載図
				長	幅	深	面積			新	旧			
155	2	不整形	N95W	4.1	3.7	0.22	13.2	西壁中央				IV新>	覆土は非常に不明瞭ながら自然堆積状。床中央と周辺に一括品、鉄器4点。	40
156	2	隅丸方形	N20W	4.2	4.6	0.48	15.8	北壁東寄り				IV古	ローム床面を破砕したような大小ブロック多量混入層と褐色土層が交互に堆積。拡張の可能性。	40
157	2	方形	N85E	4.2	4.2	0.22	17.0	東壁南端			232住	IV古>V新>	カマド2基。土器も新旧あるが、土層からの把握不能。石組カマドの新住が旧住にすっぽり収まる2軒と推定。	40
158	2	不整形	N83E	4.7	3.7	0.24	14.5	東壁北寄り			159住	III新<	壁下を除き床面良好。	40
159	2	不明	N9W	4.1		0.11		不明		158,263,264住		III	遺物僅少。土層は158住との前後関係不明瞭。	40
160	2	方形	N98W	3.4	3.3	0.11	(11.0)	西壁中央				III古<	周辺ピット群との前後関係不明。カマド前面と周辺から一括遺物。	41
161	2	不整形	N94W	5.1	4.1	0.28	18.7	西壁中央	4			V古<	覆土に炭化材を多量に含む層。南東部壁際は特に炭化材の残りが良い。検出時に北壁際から古銭数枚溶着して出土。北東部中層から灰土と須恵器片が多量に出土。	41
162	2	方形	N85E	3.3	3.3	0.06	10.6	東壁南端				V古>	ほとんど削平され浅い。遺物僅少。	41
163	2	方形	N104W	4.0	3.4	0.22	12.4	西壁中央				IV古<	レンズ状堆積。遺物僅少。	41
164	2	方形	N78E	3.6	3.8	0.21	12.3	東壁南端				IV新<	遺物は覆土全般から偏りなく大小破片が多数出土。	41
165	2	方形	N11W	2.8	2.7	0.12	7.1	なし				I古	覆土はピットの周辺を除きローム粒・ブロックが大量混入。中央部床直上に大石、その南隣のみ50cm径で固い。覆土中に鉄滓多数。P ₁ には鉄滓と小砂利多量、底面に焼土。鍛冶遺構か。	42
166	2	方形	N88W	3.3	3.4	0.22	10.1	西壁中央			溝2	IV古	床はわずかな起伏があるが良好。	42
167	2	方形	N79E	3.5	3.7	0.25	12.4	東壁北寄り				IV新>	中央部に良好な床。	42
168	2	方形	N92W	3.7	3.5	0.30	11.2	西壁中央			溝2,溝8	IV新>	カマドは拳大の礫を積み重ねた特異な構造。遺物は覆土全般から偏りなく大小片が出土。	42
169	2	方形	N10W	4.2	4.0	0.08	15.9	北壁西寄り			212住	III新<	212住(1新>)より浅いが重複部に貼床なし。壁際とカマドから一括品が数点出土。	42
170	2	隅丸方形	N97W	4.0	3.8	0.25	14.1	西壁中央			212住	IV古<	端部堆積があり下層は自然堆積状。上層中央部に焼土少混、焚火のような跡。遺物は覆土全般から中小破片が偏りなく少量出土。	42
171	2	方形	N90E	4.3	4.2	0.16	15.8	東壁北寄り			溝8	IV新	覆土は概して一括埋没の単層。床は中央部良好、周囲は凹凸あり。遺物はカマド周辺より一括品数点。	43
172	2	方形	N73E	2.7	3.0	0.12	7.6	東壁中央				不明	覆土浅く、遺物きわめて少。	43
173	2	方形	N78E	3.9	3.7	0.42	13.2	東壁中央	174住			II新	覆土は深くレンズ状堆積。床下ピット・掘り方あり。	43
174	2	方形	N107W	3.7	4.1	0.18	(14.7)	西壁中央			173住	III古<	床は周溝際まで固く良好。カマド両脇の床直からやや浮いて一括品数点、特殊な出土状況。中央部の床にめり込んで銅製品出土。	43
175	2	方形	N77E	4.4	4.3	0.38	16.5	東壁中央				III新<	遺物は大型破片が覆土全般から偏りなく多量に出土。	43
176	2	不整形	N77E	2.8	2.8	0.05	6.7	北東壁隅	177住			II新	遺物少ない。	43
177	2	不明				0.11		不明	178住	176住	IV新以降	削平により遺構の2/3を欠失。正確な切り合い関係は不明。	43	
178	2	方形	N88E	3.7	3.3	0.17	12.0	東壁中央			177住	V	床は北東・北西隅を除き平坦で固い。かなり削平。	44
179	2	方形	N98E	3.4	3.2	0.33	10.7	東壁中央				IV古<	覆土中央部はレンズ状堆積。床面と壁際から一括品数点。	44
180	2	方形	N90E	4.0	4.0	0.30	14.8	東壁南寄り			207住,溝2	V新	覆土中央部はレンズ状堆積。カマド内と前面から一括品。床面から海獣骨鏡破片出土。	44
181	2	方形	N101W	3.9	3.9	0.22	14.1	西壁中央				III新<	壁際上面近くに一括品。	44
182	2	長方形	N85E	4.3	4.9	0.18	19.2	東壁北寄り	270住	206,183住	溝2	IV新>	270住が中央にすっぽり収まる。ローム粒・ブロック多量混入、人為埋没の可能性。	58
183	2	方形	N91W		4.0	0.19	(14.8)	西壁中央		189,182,270住	溝2	IV古>	床にやや起伏あり。	44
184	2	方形	N92W	4.0	3.6	0.26	13.1	東壁南端			185住	IV新	かなり複雑な堆積。	44
185	2	方形	N14W	3.4		0.18	(10.3)	不明	184住			III新<	東北隅に一括品まとまってあり。	45
186	2	隅丸方形	N75E	3.9	3.4	0.27	11.2	東壁中央			210住	V>	遺物は大小破片が偏りなく出土。	45
187	2	方形	N13W	3.4	3.4	0.39	(10.5)	なし	208住			II	カマド・柱穴・周溝・床面なし。遺物は上中層から小片が数点、下層は一括品2点の他は皆無。特異な遺構。	45
188	2	方形	N92W	4.1	3.9	0.15	14.6	西壁中央			208,209住	IV新>	209住より浅く、重複部はローム貼床。	45
189	2	隅丸方形	N95W	4.0	3.7	0.35	13.5	西壁中央			208,183住	IV新?	覆土はレンズ状堆積で中央部の最上層が黒っぽい。	45
190	2	方形	N97W	3.4	3.4	0.07	10.8	西壁中央				III新>	覆土が浅く遺物は少ない。西壁際に一括品1点。	45
191	2	方形	N79E	4.4	4.2	0.12	16.5	東壁南寄り				IV古<	西半の床良好。遺物少。南壁寄りの床上一括品1点。	46
192	2	方形	N109W	3.5	3.6	0.16	11.6	西壁中央				IV新	カマド脇に粘土、補材か。	46
193	2	方形	N88W	3.8	4.0	0.17	13.9	西壁中央			257住	V古>	西壁前面の隙間から若干の一括品。	46
194	2	方形	N79E	3.5	3.2	0.14	10.8	東壁中央			195住	III新>	195住より新だが浅く、重複部は黒褐色土が固く締まる。遺物は西・東壁寄りに一括品7~8点。3点を重ねたものもあり、特殊な廃棄の可能性。	46
195	2	方形	N79E	4.6	4.1	0.46	17.1	東壁中央	194住			II古<	覆土は深く、端部と壁の間に漸移層的な部分あり。カマドは石材の周囲に砂性が強い灰色粘土を貼る。遺物はカマド右脇の床上一括品数点。	46
196	2	隅丸方形	N80E	3.0	3.4	0.05	8.8	東壁中央				V新	削平されて浅い。中央部の床良好。	47
197	2	方形	N94W	3.4	3.7	0.12	12.4	西壁中央				IV新	炭化物多量、一括遺物多。焼失住居か。	47-83
198	2	方形	N80E	3.7	4.0	0.12	14.0	東壁南寄り				III新>	端部堆積あり。中央部の床良好。	47
199	2	方形	N91E	4.4	4.0	0.25	16.6	東壁北端			211住	VI>	カマドは大型の石を組む。カマド周辺床下から糞等の一括品。	47
200	2	不整形	N100W	4.6	3.9	0.31	15.8	西壁中央	土201			V新>	遺物多、覆土上中層に一括品数点、床付近には少ない。南東隅のピット内の底から浮いて緑釉、石製紡錘車など出土。	47
201	2	方形	N89E	3.0	2.9	0.13	8.1	東壁南端	土203			III新	カマド周辺に石が多い。床は良好。	47
202新	2	長方形	N8W	3.3	3.6	0.05	10.9	東壁北寄り				IV新	貼床、周溝、平面プランから拡張あるいは2棟の重複を想定。	48
202旧	2	方形	N84E	3.3	2.6	0.10	7.6	東壁南寄り				IV新	遺物少。	48
203	2	隅丸方形	N92W	3.8	4.0	0.32	13.7	西壁中央			262住,溝2	IV新>	覆土中層に焼土を伴う層あり。埋没中の焚火跡か。	48
204	2	隅丸方形	N83E	3.4	3.0	0.20	8.7	東壁南端	土202			III古	遺物少ない。	48
205	2	長方形	N105W	3.5	4.3	0.25	14.2	西壁中央				IV古<	カマド周辺の床付近に一括品2,3点。	48
206	2	不明	N94E		4.2	0.25		東壁中央	182,270住	溝2	IV新	遺物多、特に上層や壁際上面に一括品多、中下層は少。	48	
207	2	方形	N107W	3.7	3.5	0.12	(12.7)	西壁南寄り	180住	溝2	III新<	中央から北東部に良好な床。	48	
208	2	長方形	N99W	3.6	4.2	0.25	(14.5)	西壁中央	189,188住	187住		III新<	端部堆積あり。床は壁際まで良好。	49
209	2	不整形	N103W	3.8	3.9	0.17	13.2	西壁中央	188住			III古<	北東側一帯の床広範に焼土。遺物やや多、大小片が偏りなく出土。	49
210	2	隅丸方形	N79E	3.8		0.31	(14.0)	東壁北寄り	186住			IV古<	覆土中の遺物少。カマド内とカマド両側に集中し一括品数点。	45
211	2	不整形	N100W	4.1	4.2	0.38	14.4	西壁中央	199住			I新>IV古>	大部分が床近くまで199住(VI>)に切られる。焼土4か所、土器2時期あり、2軒以上の重複と推定。詳細不明。	49
212	2	方形	N86E	4.2	4.2	0.27	(16.9)	東壁中央	169,170住			I新>	西壁下に良好な床。カマド両脇と前面に土器一括品多、特異な出土状況。意図的な廃棄か。	49
213	2	隅丸方形	N6W	4.7	4.5	0.33	(20.2)	不明			233,234住	V古>	南壁付近の周溝が二重、拡張を想定。	49
214	2	長方形	N90W		2.6	0.19	(13.7)	西壁南寄り				III新<	中央部床良好。中央部下層に大礫集中。	49
215	2	隅丸方形	N96E	3.4	3.2	0.25	9.9	東壁中央				III古<		50
216	2	不整形	N93E	3.0	3.7	0.12	10.5	東壁南寄り				III新>	中央から南西の床良好。	50
217	2	長方形	N86E	4.5	3.7	0.32	15.2	東壁中央				IV新>	堆積の中心が南西寄り、一部ロームブロックを多量に含む層あり、部分的に人為埋没の可能性。床は良好。遺物は小破片が偏りなく出土。	50

第3表 竪穴建物一覧(3/4)

No.	地区	平面形	主軸方位	規模(m.面積は㎡)				カマド位置	柱穴	重複関係		時期	特記事項	掲載図
				長	幅	深	面積			新	旧			
218	2	不整形	N93E	3.3	3.0	0.18	8.9	東壁南寄り				Ⅲ新>	覆土中央部に焼土塊・灰・ロームブロック混入、周囲を埋めて焚火か。壁際や内側の上中層より一括品。	50
219	2	方形	N5W	4.0		0.22	(14.0)	西壁中央	269住	220住.溝8		Ⅲ古<	269住床検出のF3が本址のカマド跡か。	50
220	2	方形	N86E			0.12	(9.2)	東壁南寄り	219,269住	溝8		Ⅲ古<	覆土が浅い。カマド周辺から一括品。	50
221	2	隅丸長方形	N93W	3.9	3.3	0.32	12.2	西壁中央		254,273住		Ⅲ新<	東壁中央の覆土上面に被熱面、その直下に10~20cmの固いロームブロック数個あり。遺物は覆土全般から偏りなく出土。	50
222	2	隅丸方形か	N22W	3.6		0.31		不明	223住			I	223住に切られてわずかに残る。	51
223	2	隅丸方形	N93E	4.0	4.1	0.32	14.3	東壁南寄り		222住		Ⅲ新	炭化物多量出土。壁の一部は上層、他は下層に炭化材多数。遺物は上層から下層まで大破片が多量に出土。	51
224	2	方形	N75E	3.8	4.0	0.33	14.5	東壁中央	溝6			Ⅱ新>	壁際やその内側から5~20cm浮いて一括品10数点。特に西側から東側へ流れ込んだように存在。その他大小破片が多量に偏りなく出土。	82
225	2	方形	N70E	4.2	4.1	0.40	15.9	東壁中央				Ⅱ新	遺物多。カマド周辺から大破片と一括品出土。	51
226	2	長方形	N73E	5.2	4.4	0.38	21.8	東壁中央				I古	床は平坦で四隅・壁際以外は堅緻、中央ほど硬さが増す。上中層遺物きわめて少。下層と床面から一括品多数。カマド脇より軽石製浮子。	51
227	2	長方形	N65E	6.6	5.7	0.23	36.8	東壁中央	16			I古	壁際を除き床は平坦で固い。主柱穴4本方形配列。壁柱穴12本均等に配置。西壁中央部壁下へ出入口関連施設とみられるピット5基。カマドに多量の粘土残る。	52
228	2	方形	N107W	4.4	3.7	0.25	14.6	西壁中央				I古<	床は固く平坦。カマド突出、全面的に灰色粘土残る。	51
229	2	不整形	N81E	4.2	4.0	0.07	13.8	東壁北寄り				V古	覆土きわめて浅い。カマド周辺より一括品。	52
230	2	不整形	N88W	3.1	3.2	0.17	9.3	西壁中央				IV古>	小さく浅い割に遺物多。カマドと西壁周辺に糞を主体とする大破片多数。	52
231	2	長方形	N83E	3.7	2.8	0.17	9.5	東壁中央		262住		IV古<	西1/3はローム直床、東2/3は262住覆土を敷き締めた床。遺物は偏りなく出土。東半分に一括品。	51
232	2	隅丸方形	N97W	3.6	3.7	0.32	12.1	西壁中央	157住			IV新	中央部東側に良好な床。	53
233	2	長方形か	N92W	3.9	3.9	0.12		西壁中央か	213住			Ⅲ新<	遺物僅少。	53
234	2	不明	N97W			0.30		西壁南寄りか	213住			I古	大半が区域外。遺物僅少。2軒の可能性。	53
235	2	不整形	N88E	3.3	3.6	0.11	10.4	東壁南寄り	溝10			Ⅲ新>		53
236	2	方形か		3.2		0.05	(8.7)	不明	148住			I	削平により148住との重複部分は不明瞭だが、遺物から本址が古。	53
237	2	方形	N96W	3.0	3.0	0.05	8.4	西壁中央				Ⅲ~Ⅳ	ほとんど削平される。遺物僅少。	53
238	2	方形	N82E	3.5	3.7	0.18	(11.9)	東壁南寄り	146住	242住		Ⅲ新?	242住の上部を切って、同覆土中に床を構築。	53
239	2	不明	N8E			0.19		不明	145,146住	240住		Ⅲ新?	残存部ほとんどなく、詳細不明。	54
240	2	不明	N6E	2.7		0.16		不明	145,239住			Ⅲ以前?	残存部ほとんどなく、詳細不明。	54
241	2	不明	N5W			0.08		不明	145,146住	242住		IV古	浅く残存部少ない。詳細不明。	54
242	2	方形	N102W	4.0	3.7	0.30	12.3	西壁中央	146,238,241住			I新>	146,238,241住は本址を切るが床まで達していない。南西隅のピットは出土土器から本址を切る別遺構と判断。	54
243	2	不整形	N83E	2.8	2.8	0.12	7.2	東壁中央				IV新>	床は平坦だがあまり固くない。小さい家としては遺物多。カマド周辺と中央部で床から若干浮いて一括品数点。	54
244	2	方形	N9W	4.1	4.3	0.10	(17.4)	不明	144住	溝2		Ⅲ古<	床はロームだが一部貼床で床下にピット6基。	54
245	2	不整形	N70E	3.2	3.6	0.20	11.4	東壁中央	溝10			Ⅲ古	覆土中~下層の中央部からカマド前面上にかけて炭化材と土器一括品大破片多数出土。一括廃棄と焚火があったか。	84
246	2	方形	N3E	3.9	3.7	0.06	13.4	北壁中央				IV新>	削平を受けて南半部はほとんどない。中央部床良好。	54
247	2	方形	N93E	3.7	3.9	0.13	12.9	東壁北端	248住			IV古<	削平により248住との前後関係不明瞭。床は中央部に固く広がる。	55
248	2	隅丸方形	N98E	3.4		0.10	(8.8)	東壁北寄り		247住		IV新>	東端部はほとんど削平。247住との前後関係不明瞭。	55
249	2	方形	N94E	3.5	4.2	0.13	14.0	東壁中央	溝7	250住		IV新>	南東部の床は250住覆土中に構築。	55
250	2	方形か	N85E	4.0		0.17	(13.4)	東壁中央か	249,135,136住.溝7			I新	カマドに灰色砂質粘土。	55
251	2	方形	N5W	3.4	3.9	0.10	(13.6)	不明	140住	溝2		Ⅲ新	周溝より内側の床は良好。	55
252	2	長方形	N90W	3.5	3.8	0.06	10.1	西壁中央				Ⅲ新	削平著しく周溝と覆土の一部のみ残る。中央部に良好な床。	55
253	2	方形か	N96E			0.4	0.05	(10.1)	東壁南寄り	溝7		IV古<	浅く遺物少ない。	55
254	2	長方形	N96E	4.4	3.7	0.28	(15.9)	東壁南寄り	221住.土208	273住		Ⅲ新<	221住に中央部を大きく破壊される。	56
255	2	長方形	N8W	3.3	2.9	0.11	(10.0)	なし	168住			(Ⅲ以降)	明確な床がなく、ロームと褐色土が混じる不明瞭な底面。遺物微量。	56
256	2	方形	N86E	3.2		0.06	(10.1)	東壁南端	168住	溝8		Ⅲ前<	カマドが南東隅に寄り。浅い。	56
257	2	方形か	N88W		4.0	0.08	(12.2)	西壁中央	193住			Ⅲ新	193住に大きく切られ僅かに残る。遺物僅少。	46
258	2	不明	N81E			0.05		東壁中央か				IV新	カマド・周溝から東方向に拡張と推定。遺物少ない。	58
259	2	方形	N110W	3.0	3.0	0.15	9.0	西壁中央				I古	西壁中央のカマドから床中央部にかけて焼土と黒色土が広がる。	56
260	2	不整形	N68E	4.6	4.5	0.34	18.2	東壁中央				Ⅱ古	中央から南側に固い床広がる。	56
261	2	方形	N1E	3.3	3.4	0.12	10.6	不明	溝6			Ⅱ	土器からみると溝6に切られているはずで、発掘所見と異なる。	56
262	2	方形	N80E	4.2	4.3	0.30	17.9	東壁中央	203,231住			Ⅱ古	上中層遺物少、下層と床面に一括品、カマド両脇に多い。	57
263	2	長方形	N78E	3.4	3.8	0.12	12.4	東壁中央		159,264住		IV新<	264住との重複部わずか。遺物所見から本址が新。	40
264	2	隅丸長方形	N98W	3.6	2.9	0.10	9.6	西寄り中央	263住	159住		Ⅲ新<	焼土位置から新旧カマドと拡張を想定。	40
265	2	隅丸方形	N108W	4.1	3.8	0.26	14.8	西壁中央	溝12			IV新>	床直に複数の焚火跡。	57
266	2	方形	N102W	3.2	3.2	0.22	10.0	西壁中央				IV古<	中央から南半部の床良好。	57
267	2	長方形	N97W	3.6	3.1	0.12	10.6	西壁中央		268住		IV古	焼土から新旧カマドと拡張を推定。	57
268	2	不明	N6W	3.2		0.16		不明	267住	溝2		Ⅲ~Ⅳ	遺物僅少。時期詳細不明。	57
269	2	方形	N87E	2.6	2.4	0.12	5.8	東壁南端		219,220住.溝8		V古>	遺物多、上下層から大小破片多数。南壁周辺に一括土器。219・220住を大きく切り込むため混入品が多い。	50
270	2	方形か	N85E							182,183住		V新>	182住完掘後にカマドの存在から本址を確認、カマド内を除いて遺物は182住で上がる。	58
271	2	方形か	N3W	3.4		0.03	(12.9)	不明				Ⅲ古<	削平により覆土をほとんど失う。	57
272	2	方形か	N72E	5.3		0.10	(27.3)	東壁中央か	4	溝6		I古	南側を溝6に切られるが、柱穴は残存。	58
273	2	不明	N2E			0.15		不明	221,254住			Ⅲ古	221・254住に大きく切られ詳細不明。	56
274	4A	方形	N7W	3.2	3.1	0.16	(10.0)	東壁南寄り				IV古<	耕作で破壊され、壁・周溝の一部を把握できたのみ。	59
275	4A	方形か	N87E	3.7		0.12	(12.4)	東壁中央か				IV?	耕作で破壊され、壁・カマド・床の一部を把握できたのみ。	59
276A	4A	隅丸方形か	N15W		3.4	0.12	(9.3)	不明				IV	耕作の攪乱著しく、壁・焼土の一部から本址を確認。	59
276B	4A	隅丸方形か	N17W		4.0	0.22	(12.8)	不明					平面形・残存覆土の深さから2軒と推定。	59
277	4B	隅丸方形	N101W	3.2	3.5	0.23	11.1	西壁中央	土21			Ⅵ>	床は起伏多。遺物多。	59
278	4B	不整形	N111W			0.06	(12.3)	西壁中央か				IV新	浅く、覆土は一部が残るのみ。	59
279	4B	方形か	N72E			0.21	(11.0)	西壁中央か				IV新	耕作の攪乱に大きく破壊される。	60
280	4B	不整形	N101W	3.5	3.2	0.24	10.4	西壁中央		通4		IV新<	通4にすっぽり取まって切る。	60
281	4C	不整形	N103W	3.8	4.1	0.15	(13.8)	西壁中央				IV新>	耕作の攪乱で一部破壊。	60
282													(欠番)	
283	4C	不整形	N96W	4.9	4.8	0.36	(19.8)	東壁南寄り				V新	耕作の攪乱で一部破壊。	60
284	4C	方形	N87E	4.9		0.46	(23.2)	東壁中央	溝17			Ⅱ古	耕作の攪乱で壁と床の一部破壊。遺物やや多。	60
285	5	方形	N78E	4.4	4.2	0.35	16.7	東壁中央				V古	耕作の攪乱で一部破壊。	61
286	5	方形	N79E	4.8	4.3	0.25	18.4	東壁南端				V古<	耕作の攪乱で壁と床の一部破壊。西壁中央に旧カマド。	61
287	5	方形	N29W	4.0		0.35	(15.6)	北壁東寄り	288住			I古	中央部床良好。一部は288住下まで続く。	61
288	5	方形	N88E	5.0	4.7	0.45	20.9	東壁中央		287住		Ⅱ古	深く、遺物多い。	61
289	5	方形	N23W	3.9	3.5	0.18	(12.7)	不明	土12			V新	南西部を攪乱で大きく破壊されるが、一部に床が残る。遺物少。	61
290	5	方形	N54E	5.4	4.8	0.40	23.6	東壁中央				Ⅱ古>	レンス状堆積。カマド両脇に粘土。	62
291	5	方形	N69E	4.0	3.9	0.38	14.9	東壁中央				I新	覆土深くレンス状堆積。	62
292	5	方形	N59E	3.8	3.6	0.42	13.0	東壁中央				Ⅱ古>	南東隅に粘土。	62
293	5	方形	N45E	3.8	3.7	0.27	13.4	東壁中央				Ⅱ古		62

面積欄の()は推定値であることを示す 時期欄の表示は第8表(P114)参照

第3表 竪穴建物一覧(4/4)

No.	地区	平面形 柱配り	主軸方向 面積(m ²)	規模(cm)	柱間寸法(cm)	重複関係			掲載図
						平面形	規模	柱痕	
1	1A	長方形 側柱	N-10°-W 6.4	2間×1間 364×176	桁行176 梁間160~200	円形	径40~46 深21~39	5基	63
2	1B	長方形 側柱	N-10°-W 19.3	3間×2間 536×364	桁行176~180 梁間172~188	円形・方形	径46~66 深19~32	8基	63
3	1B	長方形 側柱	N-5°-W 12.9	2間×1間 392×320	桁行326 梁間192~204	円形	径22~30 深11~22		63
5	1B	方形 総柱	N-1°-W 8.4	2間×2間 300×288	桁行136~164 梁間132~152	円形	径42~56 深29~58	9基	64
6	1B	長方形 側柱	N-3°-W 36.2	5間×2間 840×428	桁行208~228 梁間88~248	円形・方形	径36~54 深19~45	14基	65
7	1B	長方形 側柱	N-5°-W 23.0	4間×2間 656×352	桁行188~240 梁間168~180	円形・方形	径40~60 深14~32	11基	65
8	1B	長方形 側柱	N-6°-W 24.1	3間×2間 572×416	桁行188~240 梁間180~200	円形・方形	径58~78 深9~27	7基	65
9	1B	方形 総柱	N-3°-E 9.0	2間×2間 316×288	桁行152~160 梁間140~152	方形	径46~86 深18~41	9基	64
10	1A	長方形 側柱	N-0°-EW 34.7	3間×2間 724×480	桁行228~260 梁間224~252	円形	径50~70 深15~46	4基	64
11(1次)	1A	方形 側柱	N-4°-W 8.9	1間×1間 308×284	桁行308 梁間280~292	円形・方形	径74~101 深38~59		63
11(2次)	2	長方形 側柱	N-12°-W 19.3	3間×2間 516×368	桁行160~192 梁間180~192	円形・方形	径38~64 深7~24	4基	66
12	2	長方形 側柱	N-10°-W 20.2	3間×2間 508×400	桁行192~204 梁間160~184	方形	径34~64 深10~14	8基	66
13	2	長方形 側柱	N-0°-EW 46.0	5間×2間 1060×428	桁行196~228 梁間204~220	円形・方形	径30~60 深10~49	7基	67
14	2	長方形 側柱	N-8°-W 30.4	4間×1間 660×424	桁行424~460 梁間120~200	円形・方形	径32~56 深3~5		66
15	5	長方形 側柱	N-41°-E 23.6	3間×2間 648×448	桁行220~228 梁間192~228	円形	径32~70 深18~40		68

第4表 掘立柱建物一覧

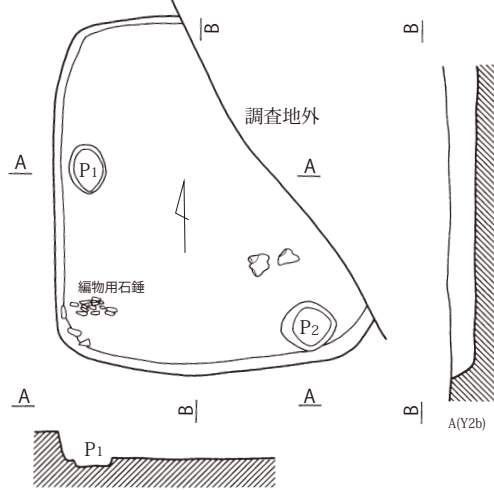
No.	地区	平面形	規模(cm)			特記事項	No.	地区	平面形	規模(cm)			特記事項
			長軸	短軸	深さ					長軸	短軸	深さ	
1-11	1A	方形	216	208	31	17住を切る	4-121	4B	長方形	176	84	30	277住を切る
1-12	1A	不整楕円形	468	168	20		4-124	4B	方形	140	108	42	溝19を切る
1-13	1A	楕円形	128	80	27	溝2を切る	4-140	4B	円形	80	(68)	70	
1-15	1A	隅丸長方形	280	220	5	70.73住を切る	4-164	4B	楕円形	(148)	104	75	
1-16	1B	方形	176	164	15		4-170	4B	不整楕円形	284	232	72	溝19に切られる
1-17	1B	隅丸方形	252	228	34	108住を切る	4-172	4B	楕円形	104	80	88	
2-1201	2	楕円形	108	64	32	200住を切る	4-183	4D	楕円形	88	72	47	
2-1202	2	円形	80	64	14	204住を切る	4-184	4D	楕円形	(112)	(92)	21	
2-1203	2	隅丸長方形	96	60	34	201住を切る	4-185	4D	不整方形	104	84	68	
2-1204	2	不整方形	140	108	30		4-186	4D	楕円形	108	(64)	72	
2-1205	2	楕円形	140	92	22		4-190	4D	円形	76	72	25	
2-1206	2	隅丸方形	128	112	42		5-13	5	楕円形	88	36	10	N82W63, Tr10内
2-1207	2	楕円形	168	128	43		5-18	5	隅丸長方形	224	96	15	
2-1208	2	円形	88	100	28	254住を切る	5-112	5	隅丸長方形	132	92	21	289住を切る
2-1210	2	楕円形	148	112	53		5-120	5	円形	104	104	68	
2-1211	2	隅丸長方形	120	68	57		5-121	5	不整長方形	216	72	48	道路状遺構を切る・墓?
2-1213	2	円形	72	72	18		2-1209	2	隅丸長方形	228	108	12	墓
2-1214	2	円形	88	84	86		2-1212	2	長方形	216	100	27	墓
2-1215	2	円形	100	88	36		4-117	4A	不整長方形	184	88	68	墓、溝19に切られる
2-1216	2	不明	(124)	(52)	20	溝7に切られる	4-141	4B	隅丸長方形	192	92	28	墓
4-15	4A	楕円形	136	(104)	111								

第5表 土坑一覧

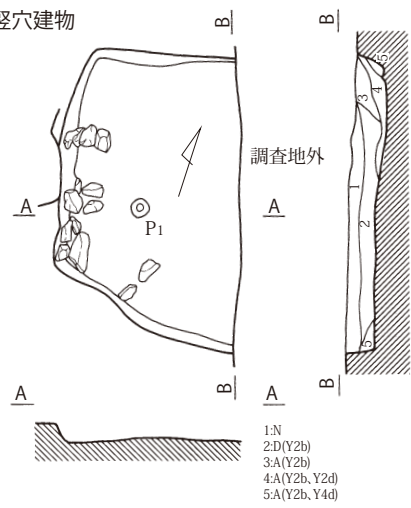


溝6(4次)、測量風景

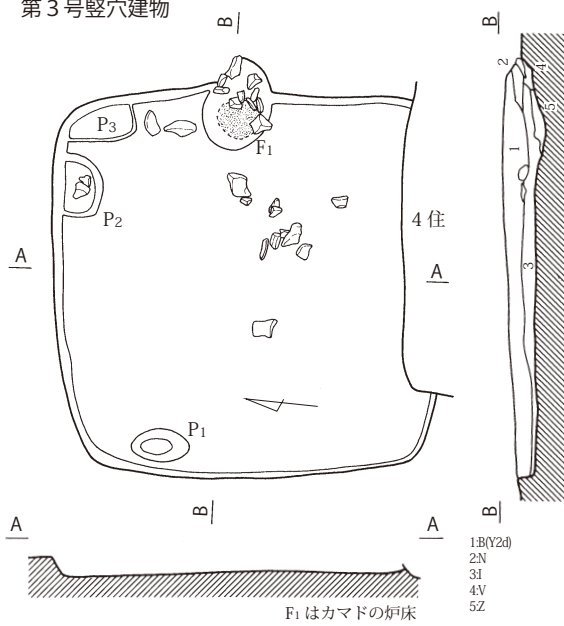
第1号竖穴建物



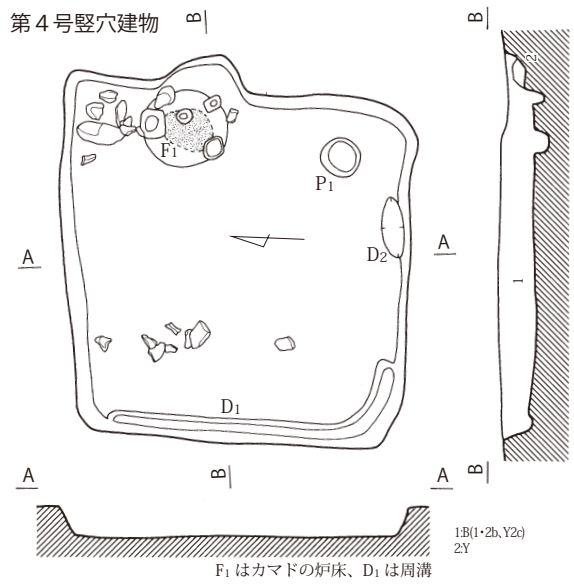
第2号竖穴建物



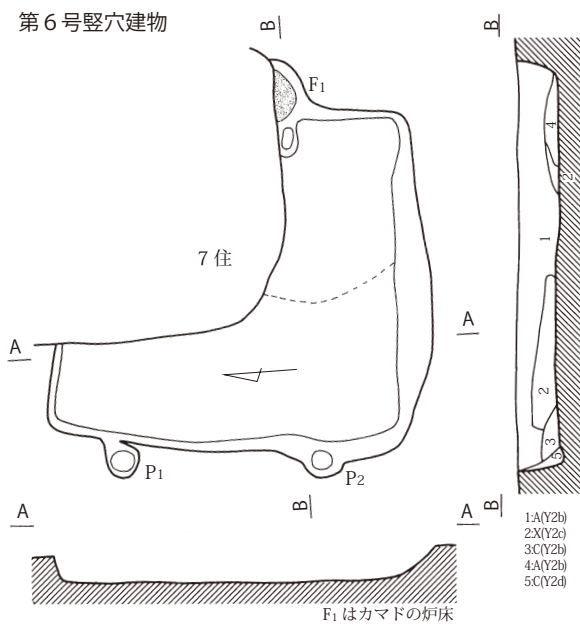
第3号竖穴建物



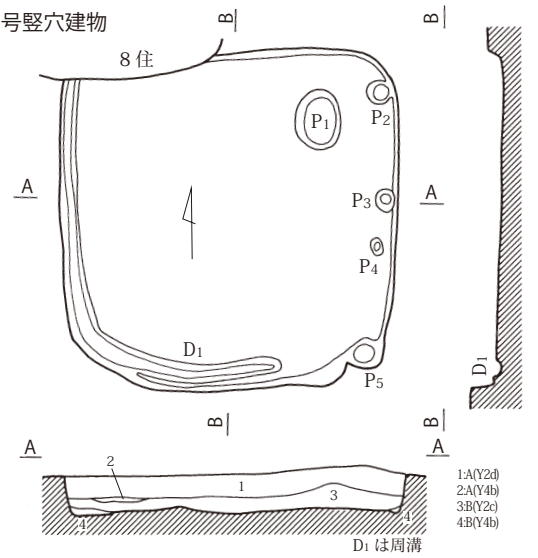
第4号竖穴建物



第6号竖穴建物



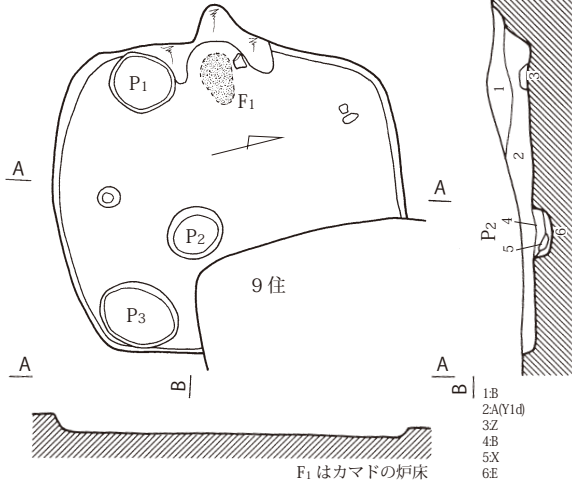
第7号竖穴建物



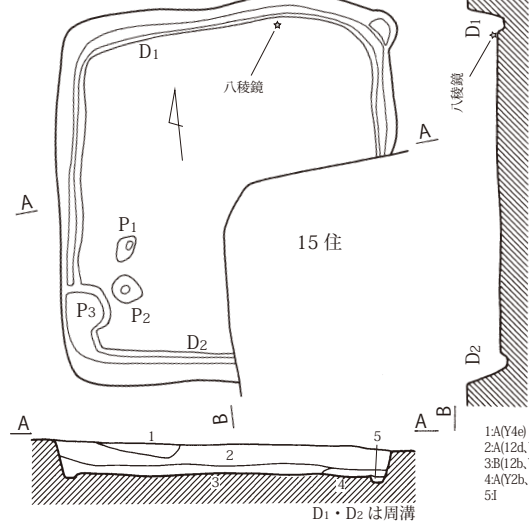
第10図 竖穴建物1(第1~4・6・7号)

0 S=1/80 2m

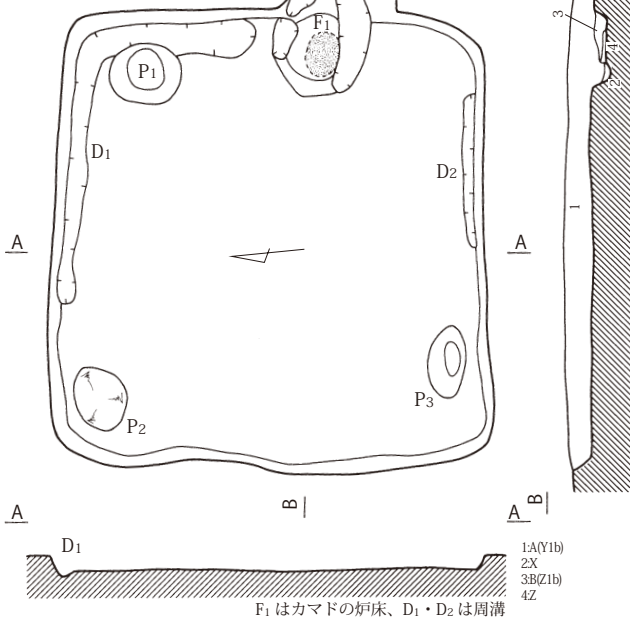
第8号竪穴建物 B|



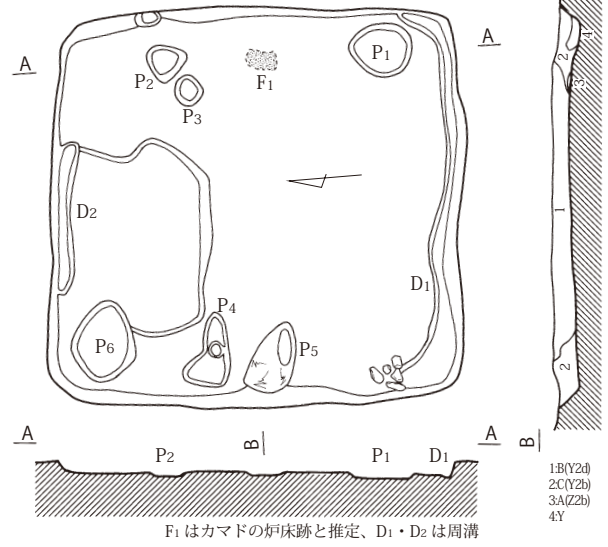
第13号竪穴建物 B|



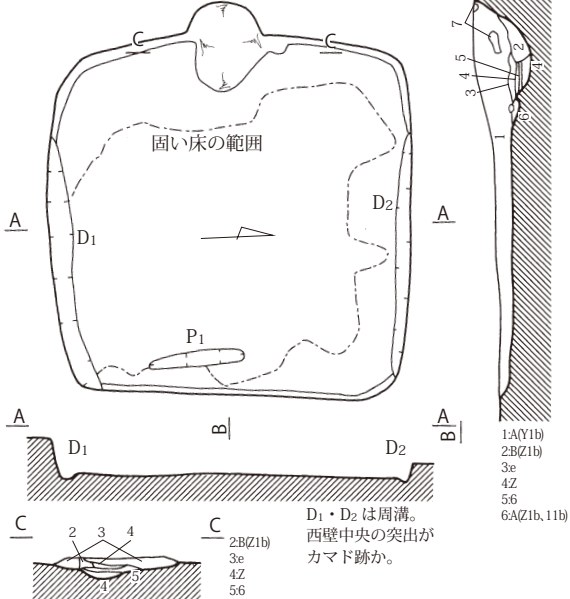
第9号竪穴建物 B|



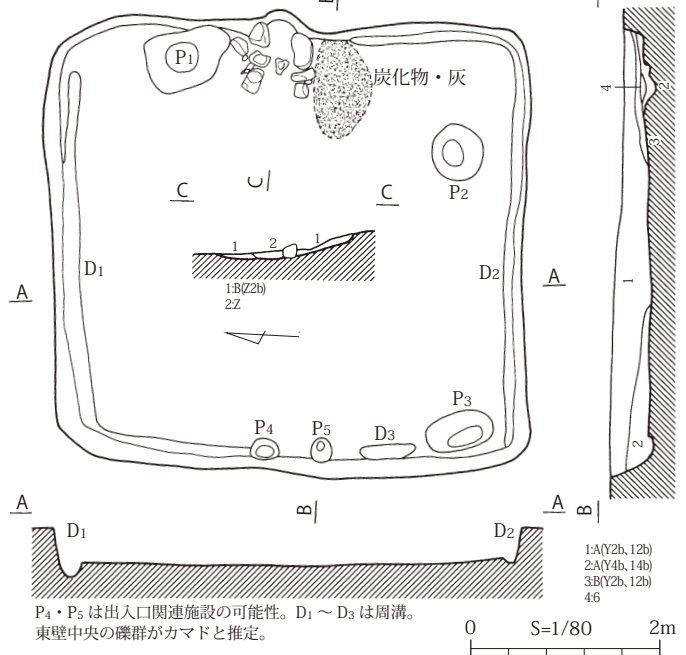
第12号竪穴建物 B|



第11号竪穴建物 B|



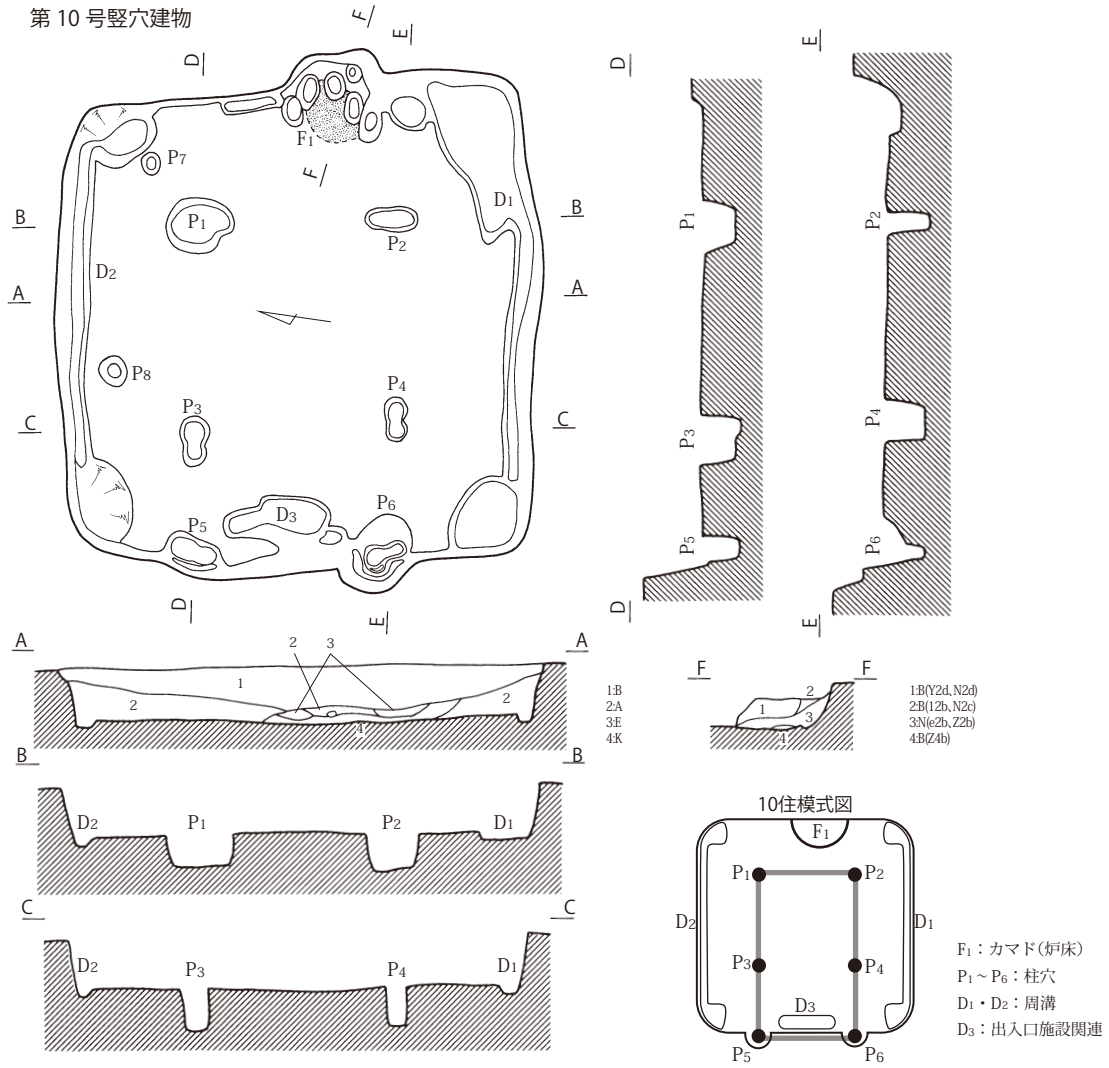
第15号竪穴建物 C|



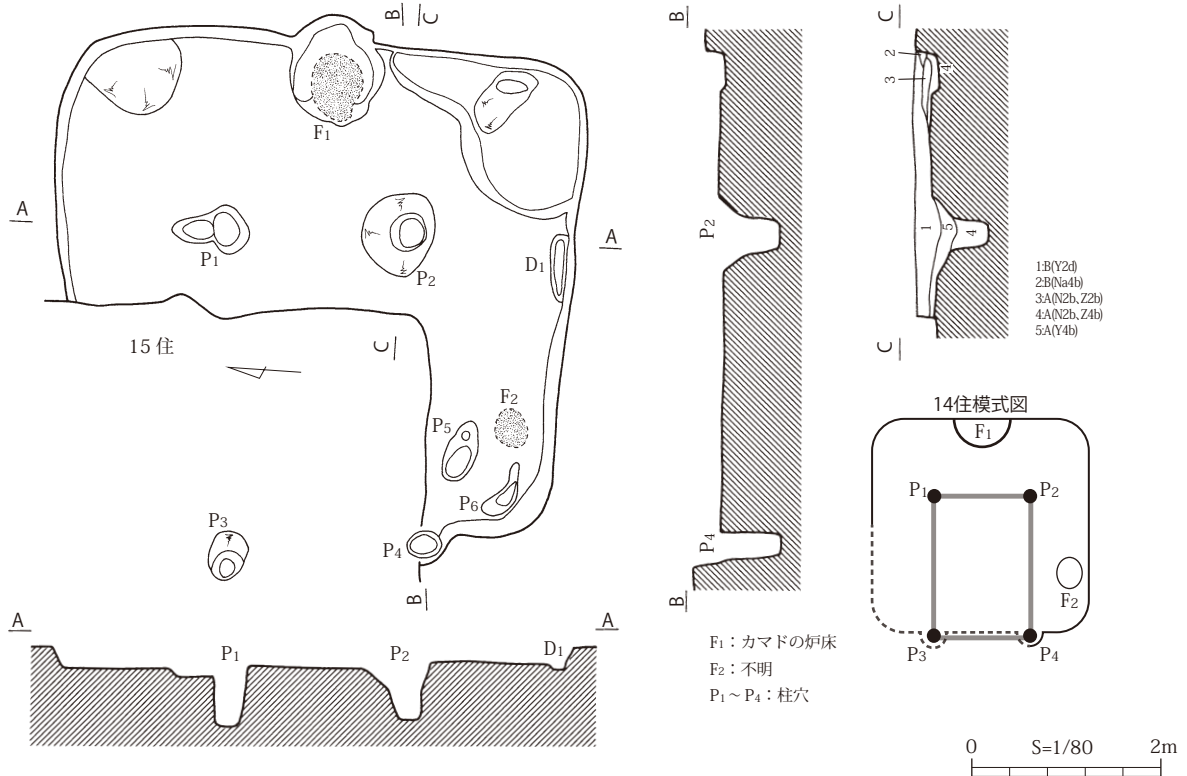
第11図 竪穴建物2(第8・9・11～13・15号)

0 S=1/80 2m

第 10 号 竪穴建物

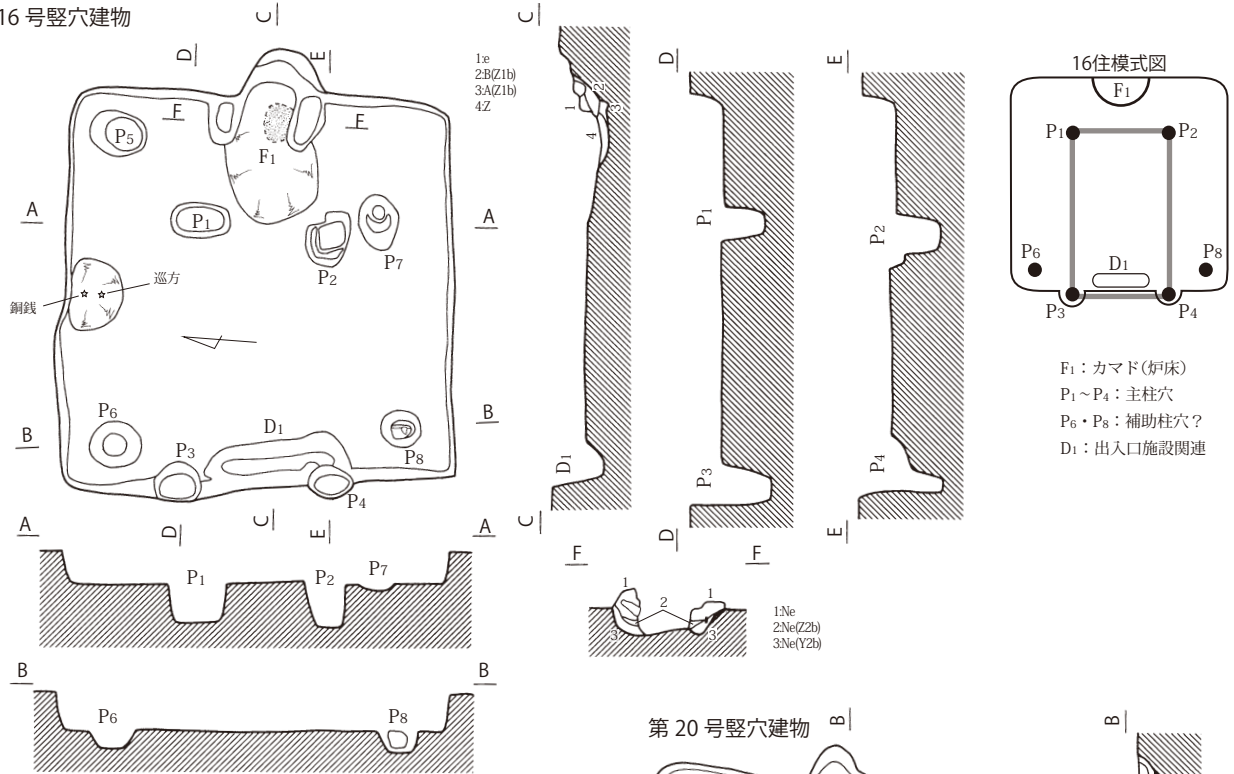


第 14 号 竪穴建物

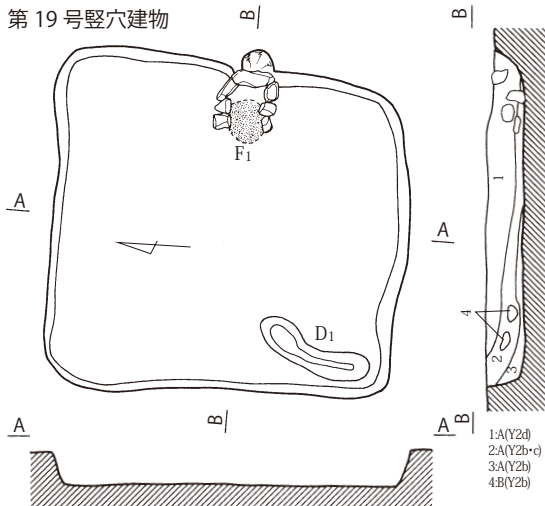


第 12 図 竪穴建物 3 (第 10・14 号)

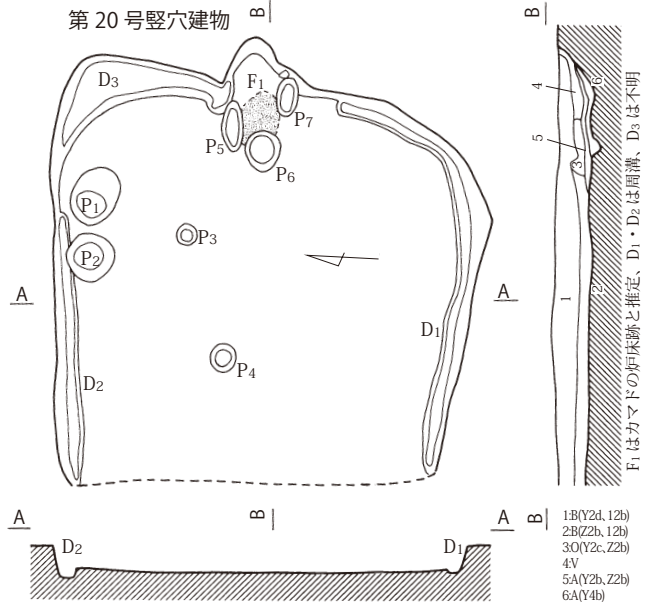
第 16 号 竪穴建物



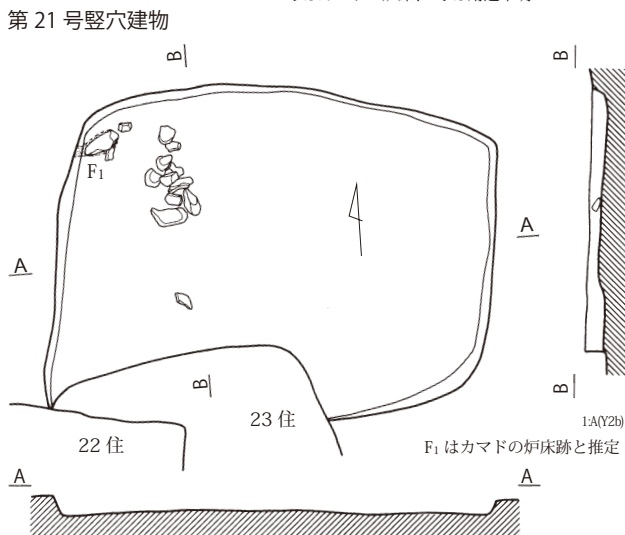
第 19 号 竪穴建物



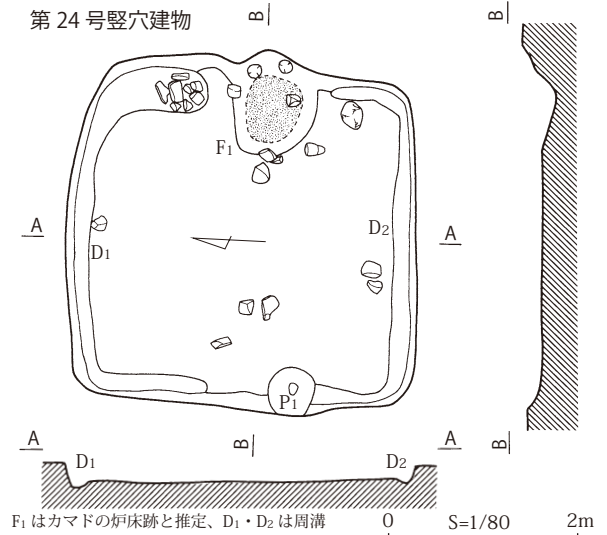
第 20 号 竪穴建物



第 21 号 竪穴建物

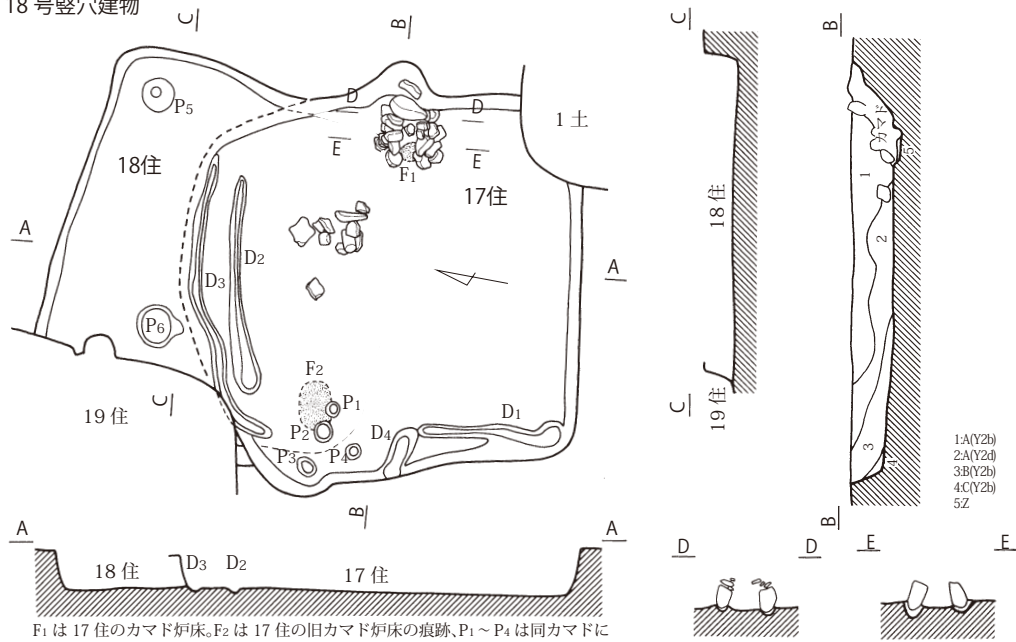


第 24 号 竪穴建物



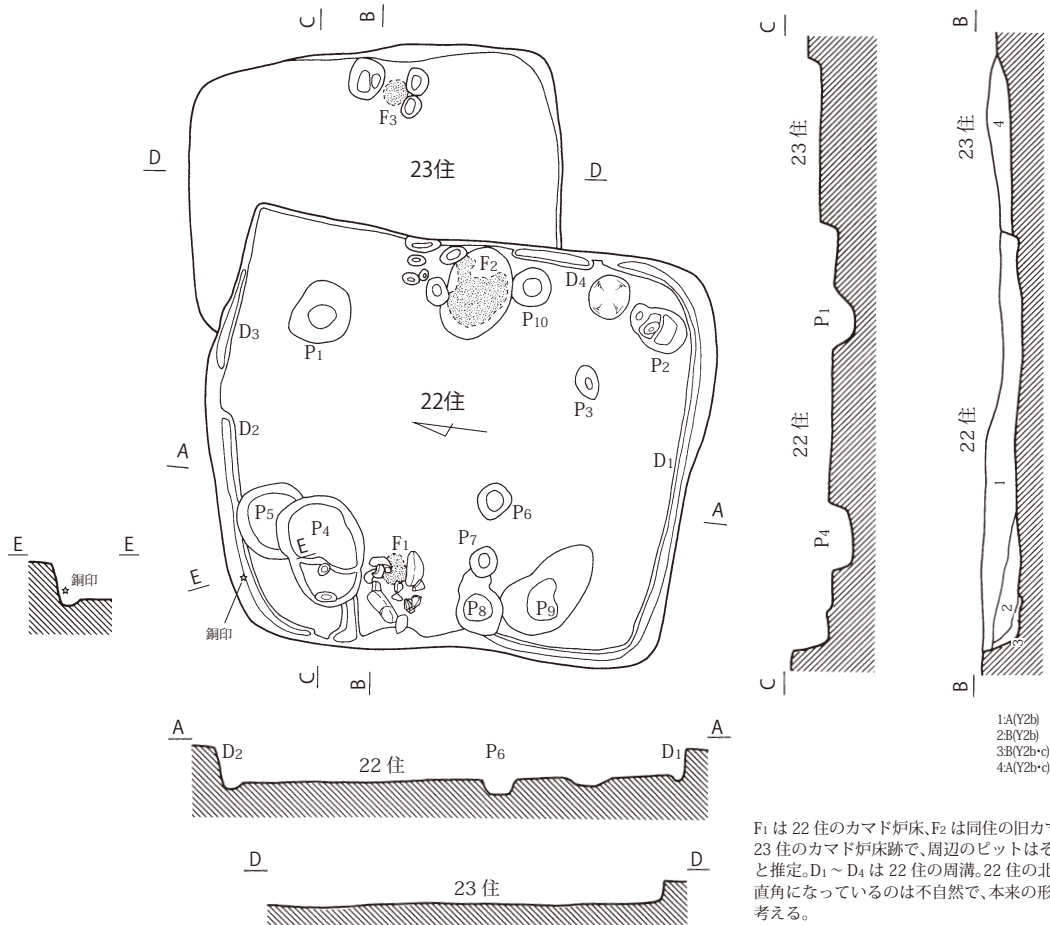
第 13 図 竪穴建物 4 (第 16・19~21・24 号)

第17・18号竪穴建物

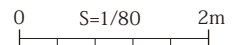


F₁は17住のカマド炉床、F₂は17住の旧カマド炉床の痕跡、P₁～P₄は同カマドに伴う痕跡と推定、D₁～D₃は17住の周溝。17住はD₂からD₃へと北壁側の拡張があった可能性。

第22・23号竪穴建物

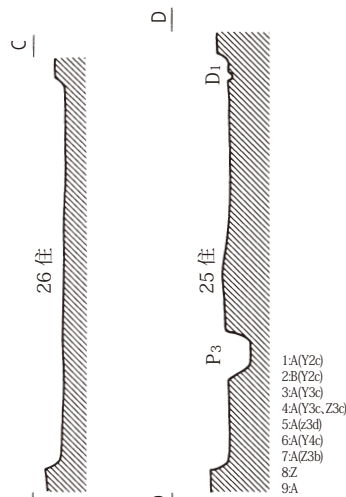
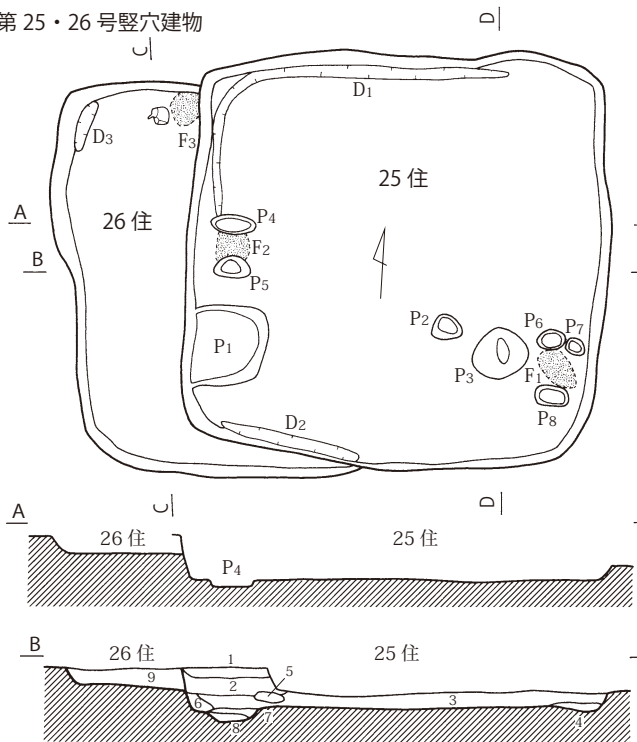


F₁は22住のカマド炉床、F₂は同住の旧カマド炉床、F₃は23住のカマド炉床跡で、周辺のピットはそれに伴う痕跡と推定、D₁～D₄は22住の周溝。22住の北東コーナーが直角になっているのは不自然で、本来の形状ではないと考える。



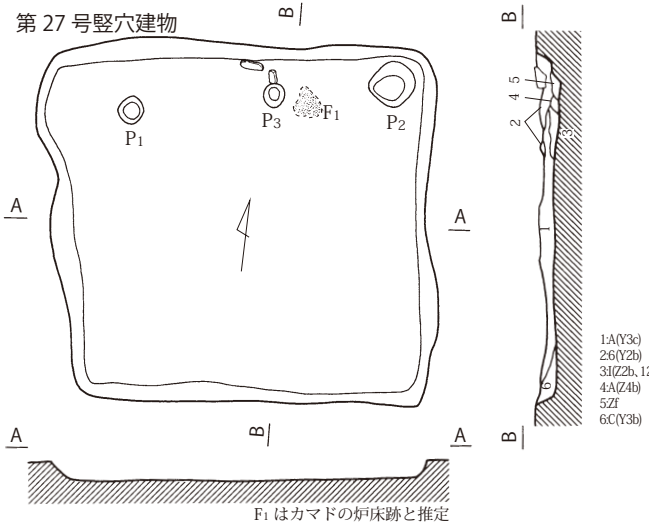
第14図 竪穴建物5(第17・18・22・23号)

第25・26号竪穴建物

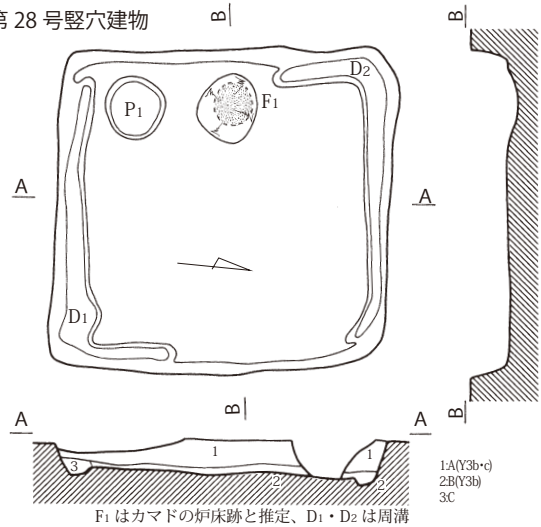


F₁ ~ F₃ はいずれもカマドの炉床跡と推定。25 住は F₂ (旧カマド) と F₁ (新カマド) の 2 時期がある可能性。P₄ ~ P₈ はカマドの袖石が抜けたものか。D₁・D₂ は周溝。

第27号竪穴建物

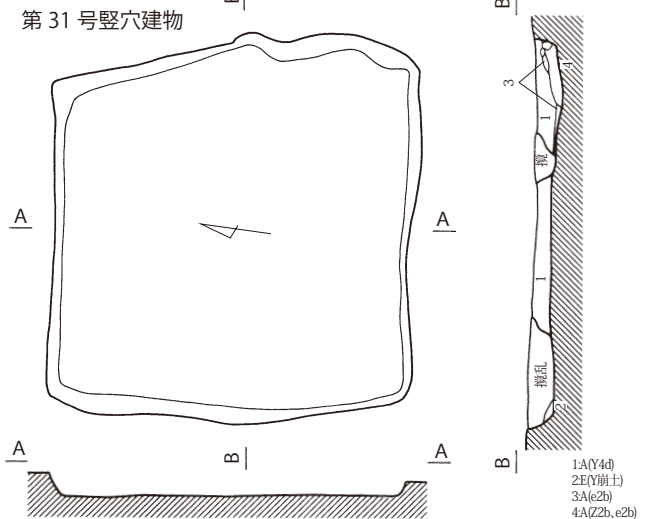


第28号竪穴建物

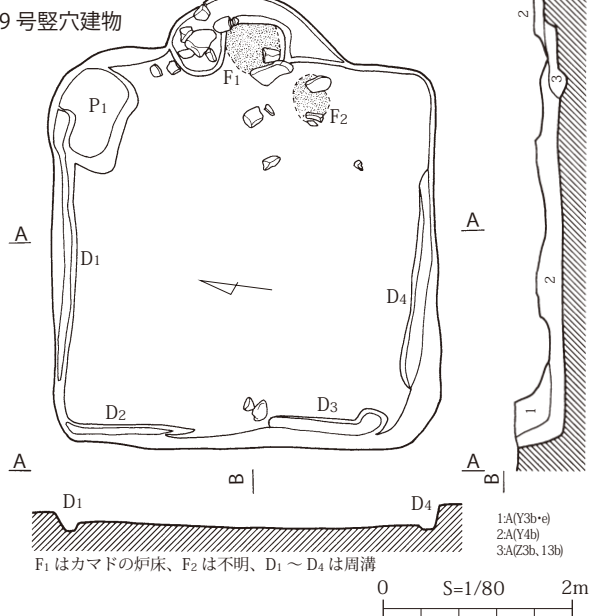


F₁ はカマドの炉床跡と推定、D₁・D₂ は周溝

第31号竪穴建物



第29号竪穴建物

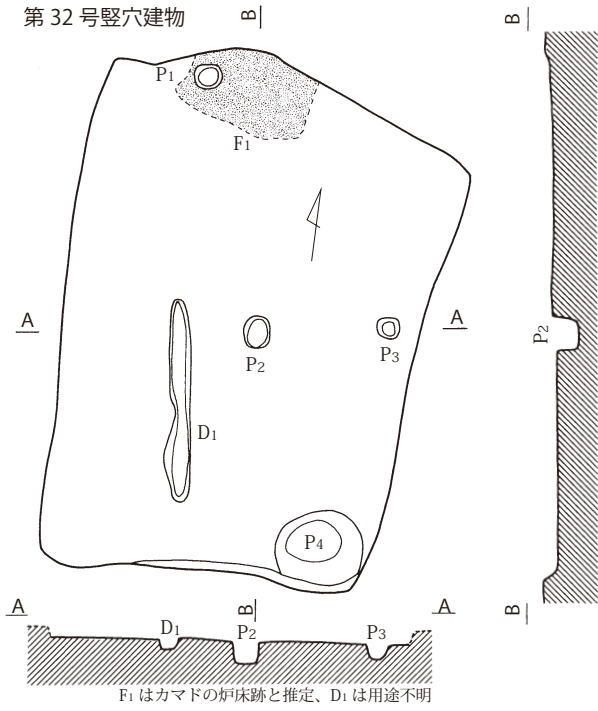


F₁ はカマドの炉床、F₂ は不明、D₁ ~ D₄ は周溝

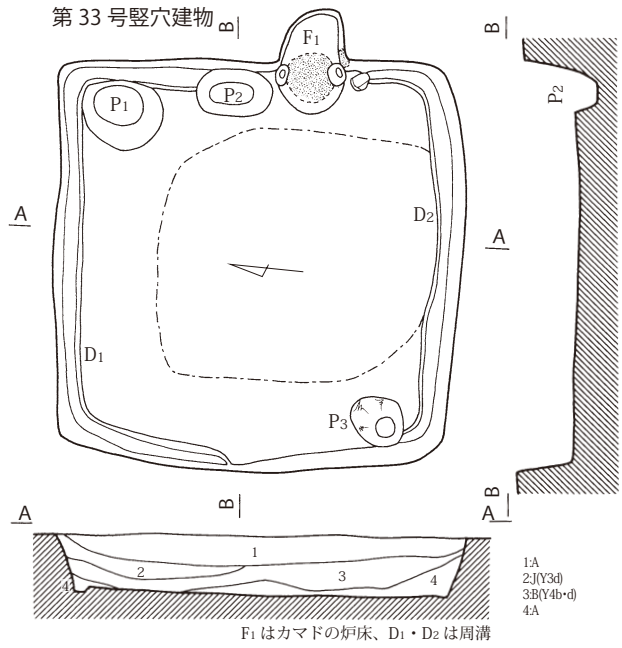
0 S=1/80 2m

第15図 竪穴建物6(第25~29・31号)

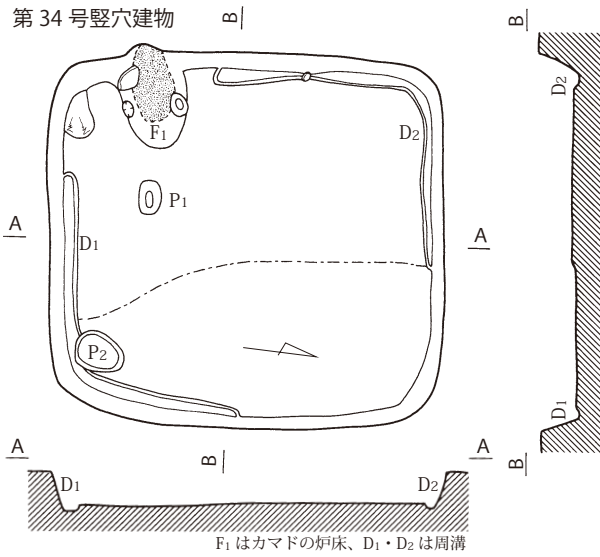
第 32 号 竪穴建物



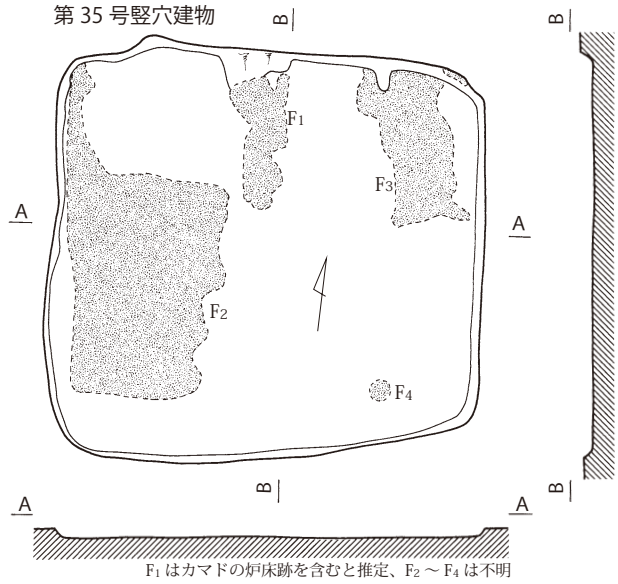
第 33 号 竪穴建物



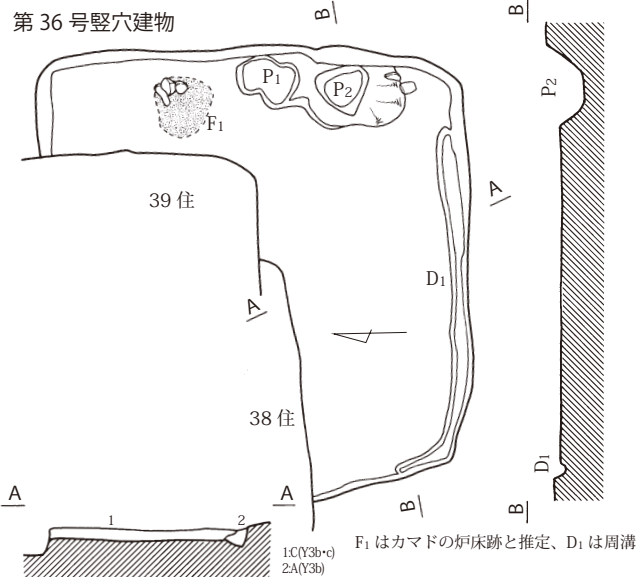
第 34 号 竪穴建物



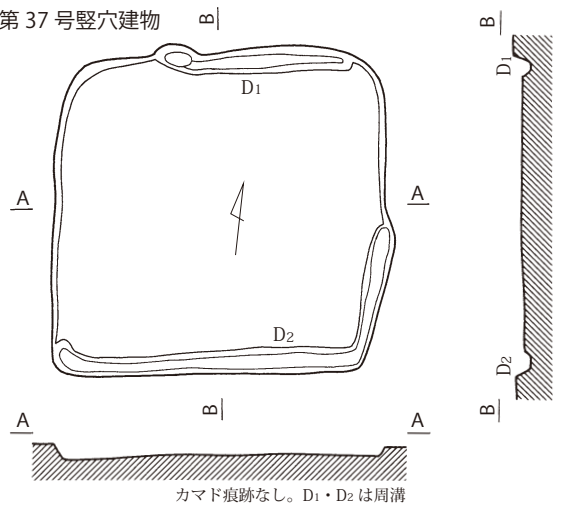
第 35 号 竪穴建物



第 36 号 竪穴建物



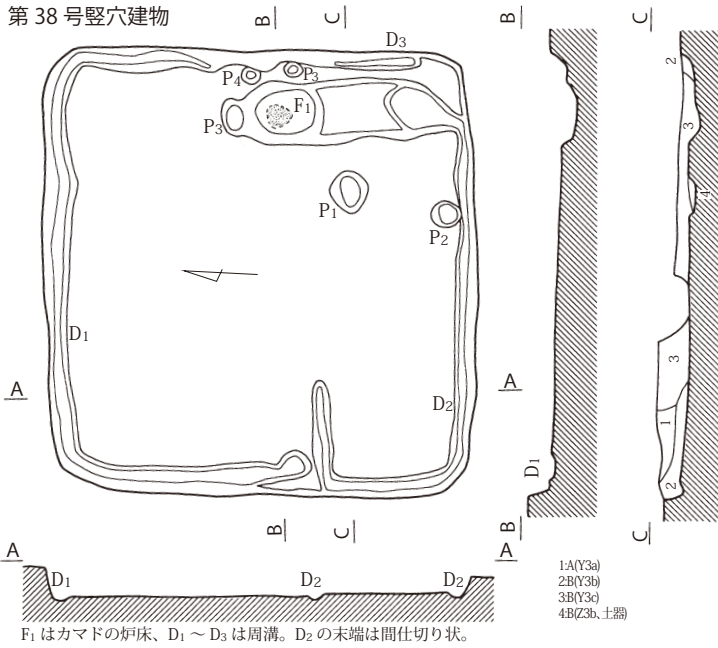
第 37 号 竪穴建物



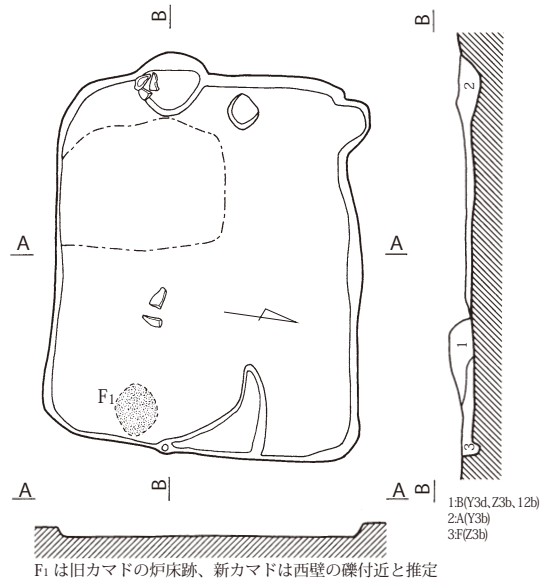
第 16 図 竪穴建物 7 (第 32 ~ 37 号)

0 S=1/80 2m

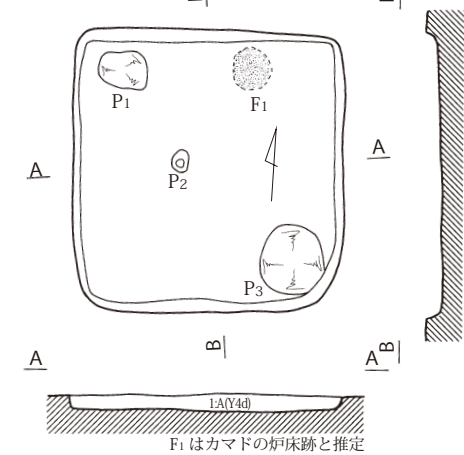
第38号竪穴建物



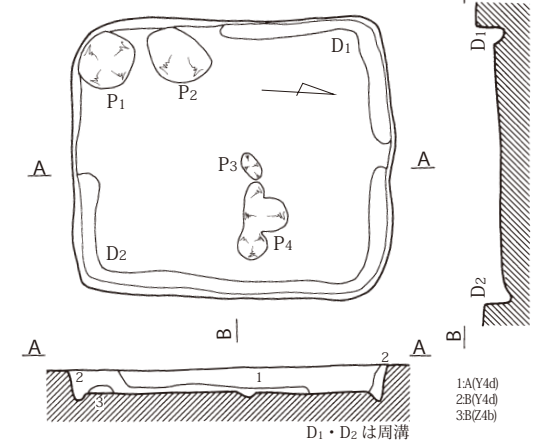
第39号竪穴建物



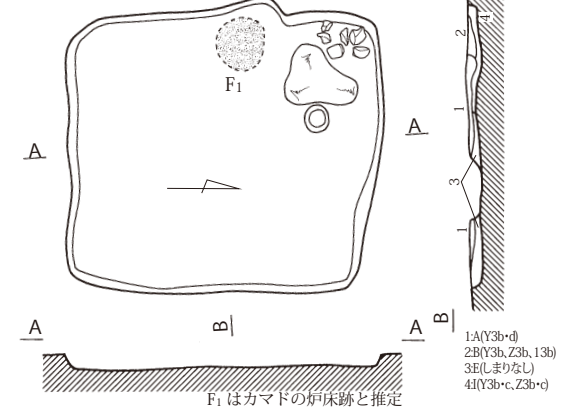
第41号竪穴建物



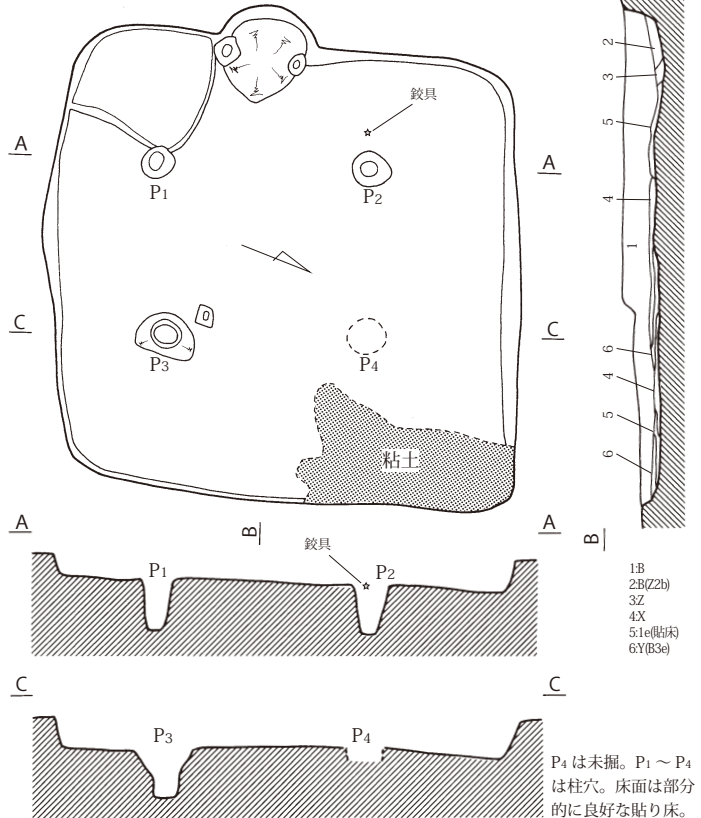
第40号竪穴建物



第42号竪穴建物



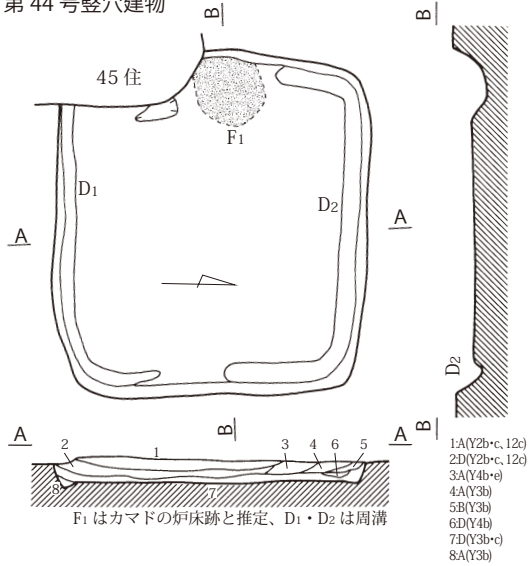
第43号竪穴建物



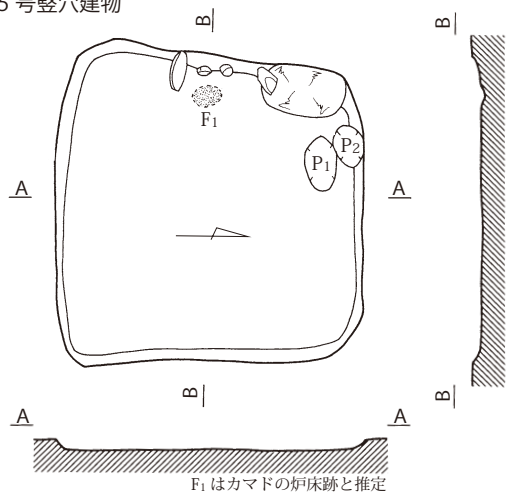
0 S=1/80 2m

第17図 竪穴建物8(第38~43号)

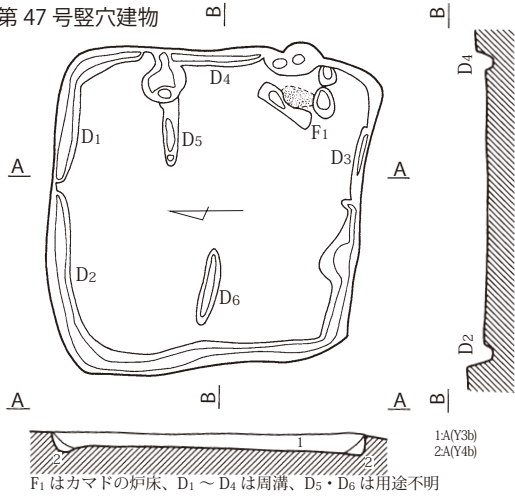
第44号竪穴建物



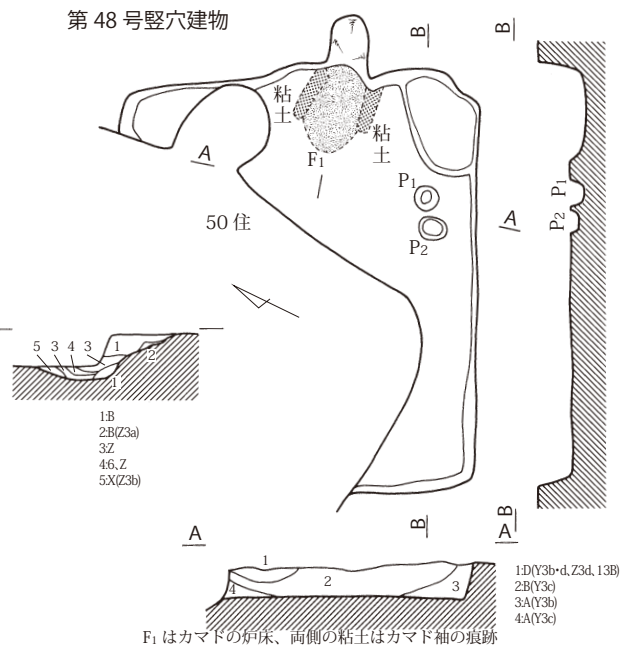
第45号竪穴建物



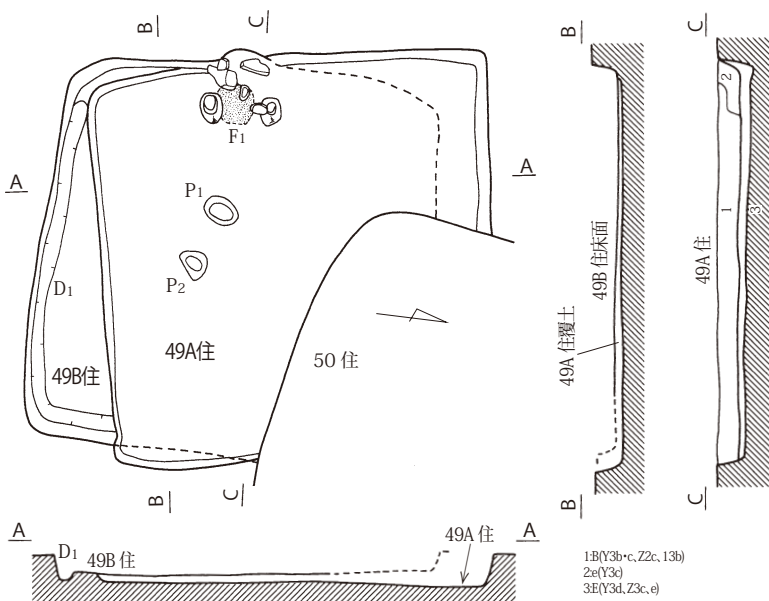
第47号竪穴建物



第48号竪穴建物

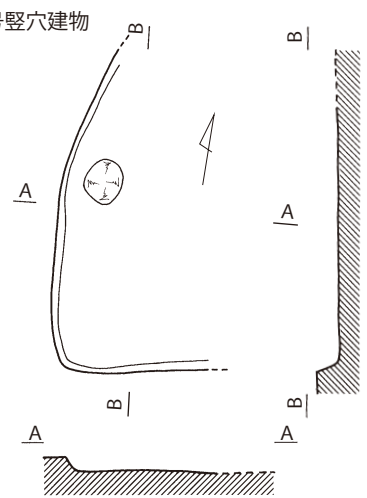


第49号竪穴建物



49B住が49A住を貼っていたことが調査後に判明。本来あるべき49B住の北壁等のラインを点線で示す。土層の第1・2層は49B住、第3層は49A住の覆土。D₁は49B住の周溝。F₁も49B住のカマド炉床と推定。

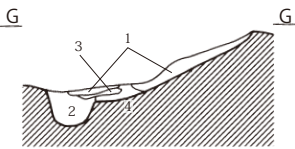
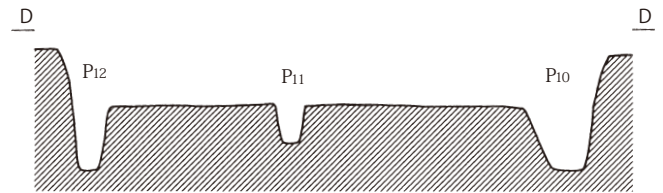
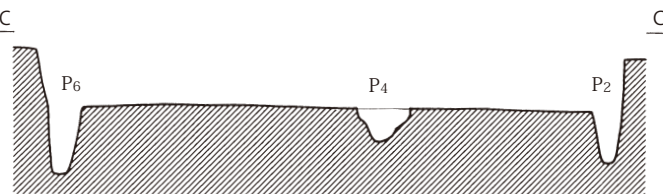
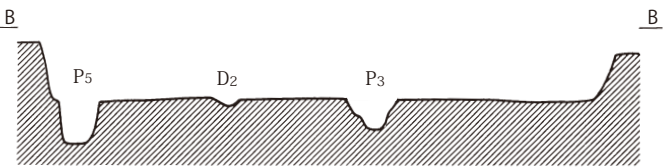
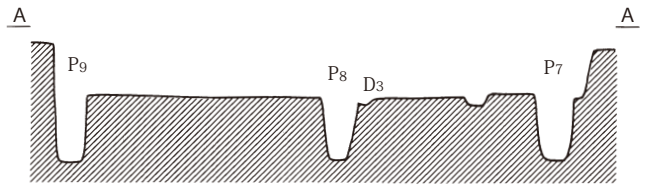
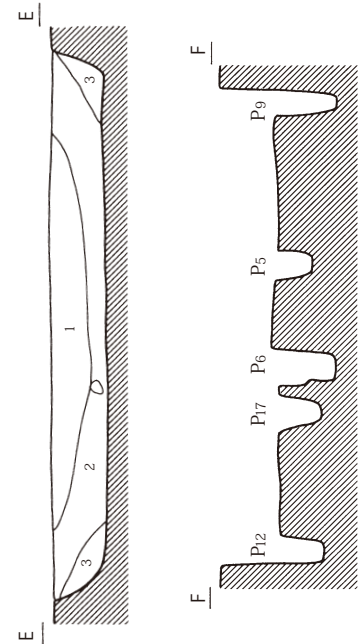
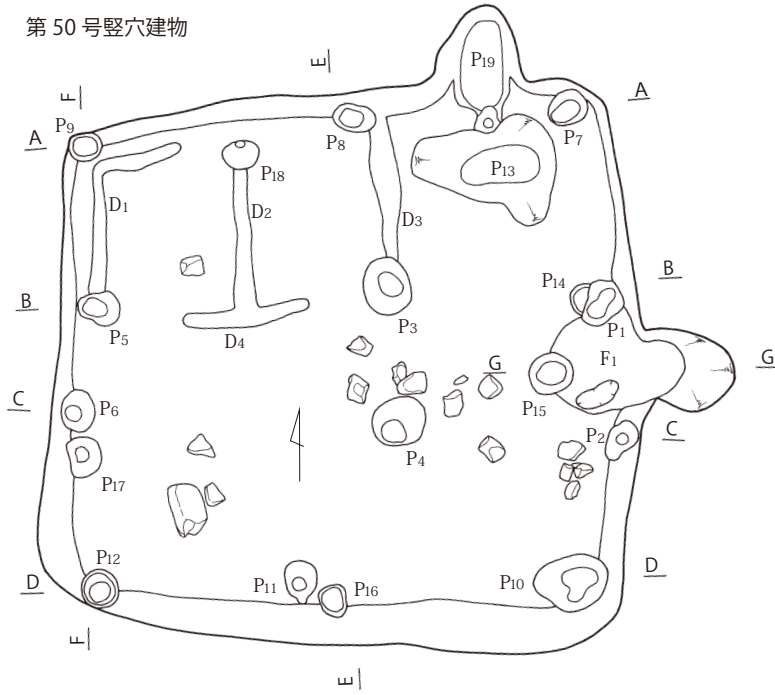
第46号竪穴建物



0 S=1/80 2m

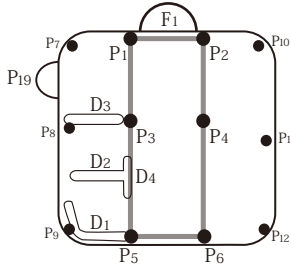
第18図 竪穴建物9(第44～49号)

第 50 号竪穴建物



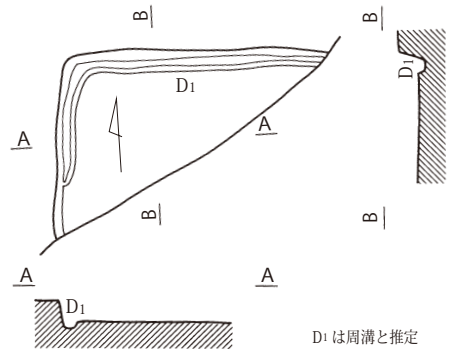
1:A(Y4b, Z4b)
2:A(B4b, Y4b, Z4b)
3:6
4:Z

50住模式図



P1～P6は支柱穴、P7～P12は壁柱穴(補助柱穴)を想定。D1は周溝、D2～D4は間仕切りなどの建物構造に関連するものとする。F1はカマド(被熱層の表記は土層図)、P19も位置的にカマドに類する施設と推定する。

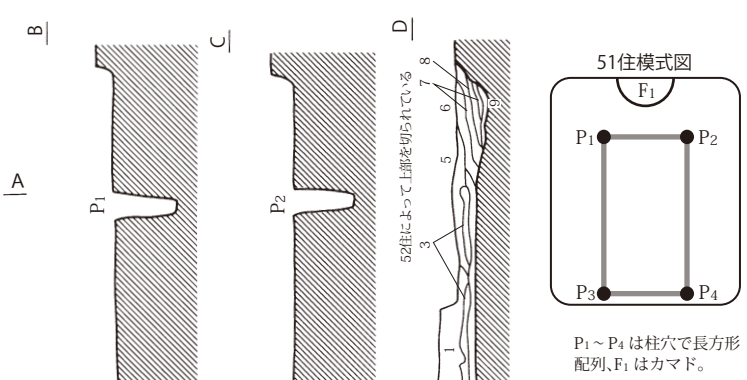
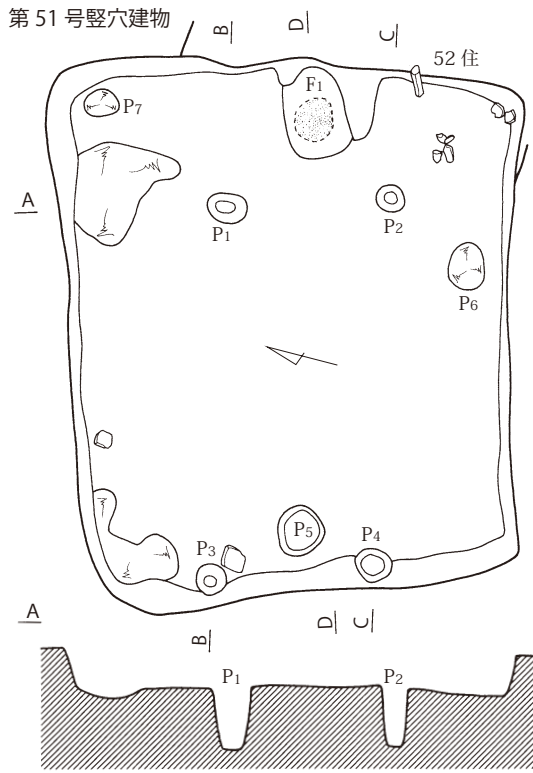
第 57 号竪穴建物



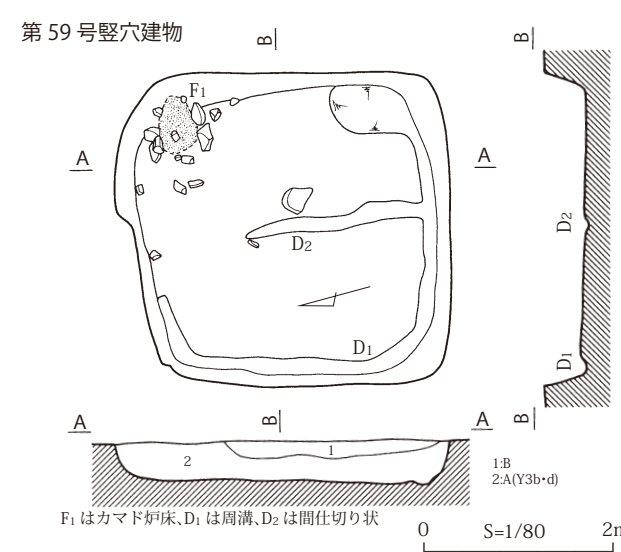
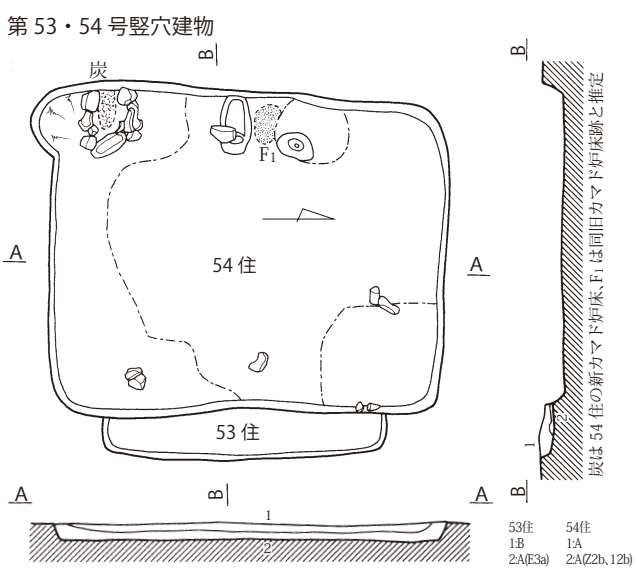
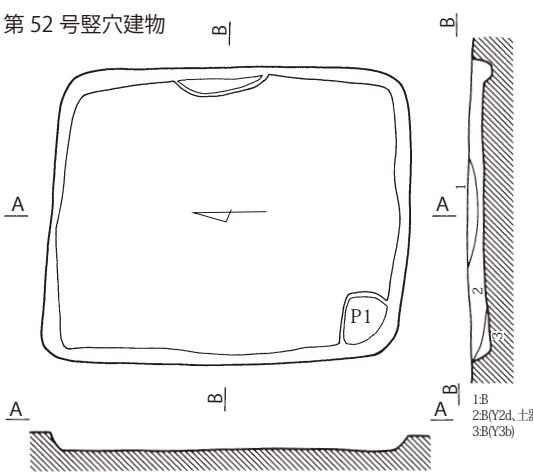
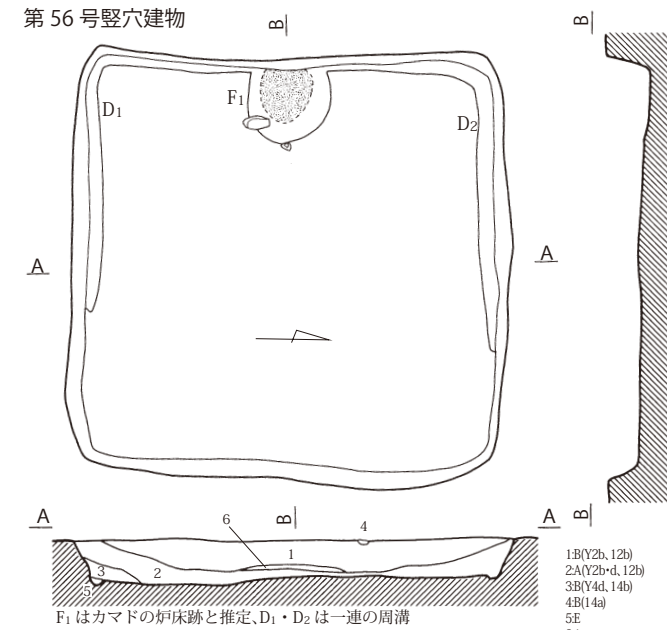
D1は周溝と推定

0 S=1/80 2m

第 19 図 竪穴建物 10 (第 50・57 号)

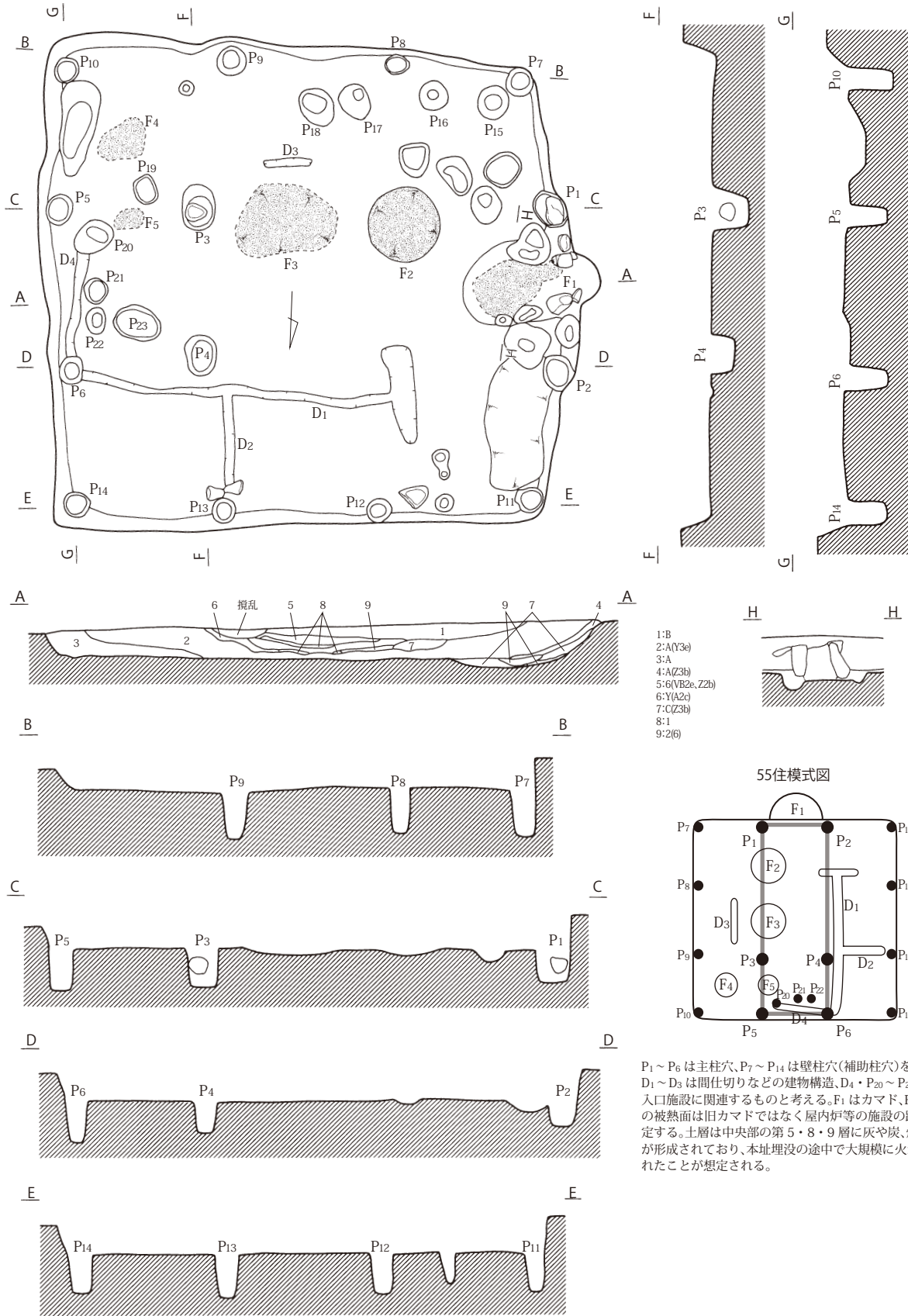


- 1B
2B(X4e, Y2d)
3X(12b)
4A
5A(e4b)
6A(e4d)
7B(2b, e2b)
8Z, 6
9Z



第20図 竪穴建物11(第51~54・56・59号)

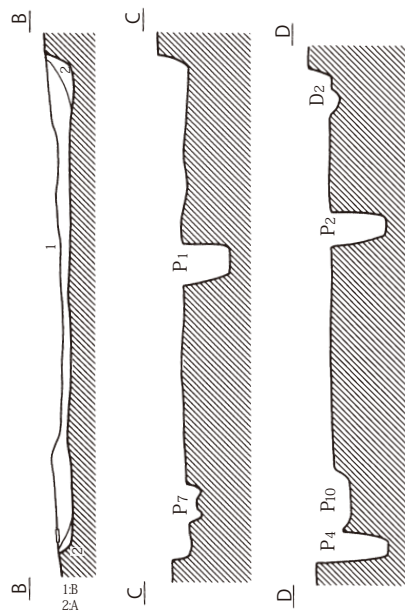
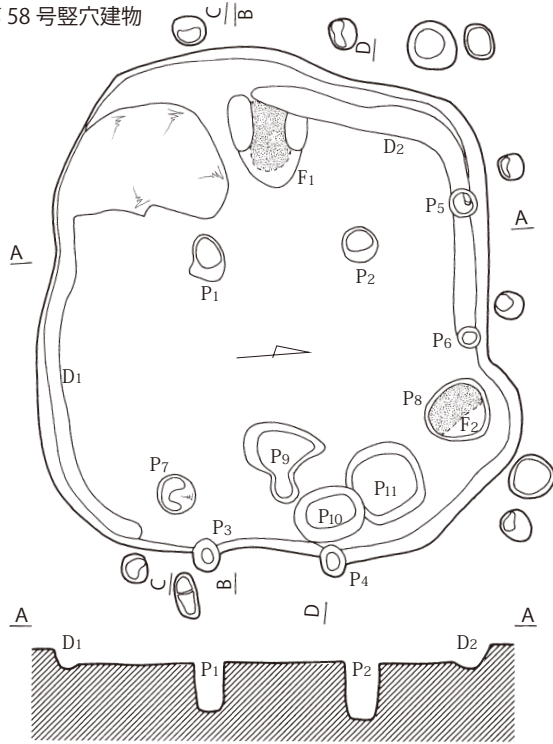
第 55 号 竪穴建物



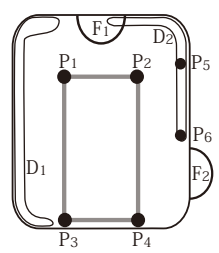
0 S=1/80 2m

第 21 図 竪穴建物 12 (第 55 号)

第58号竪穴建物

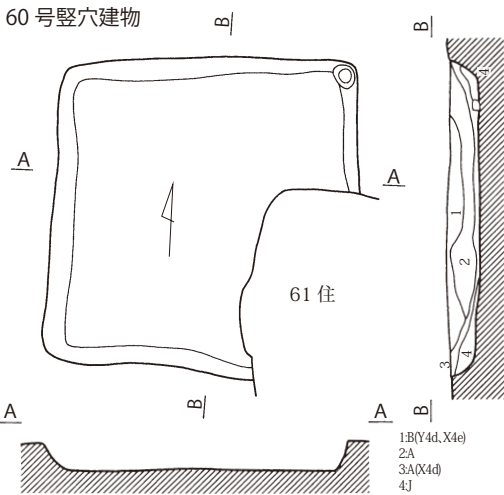


58住模式図

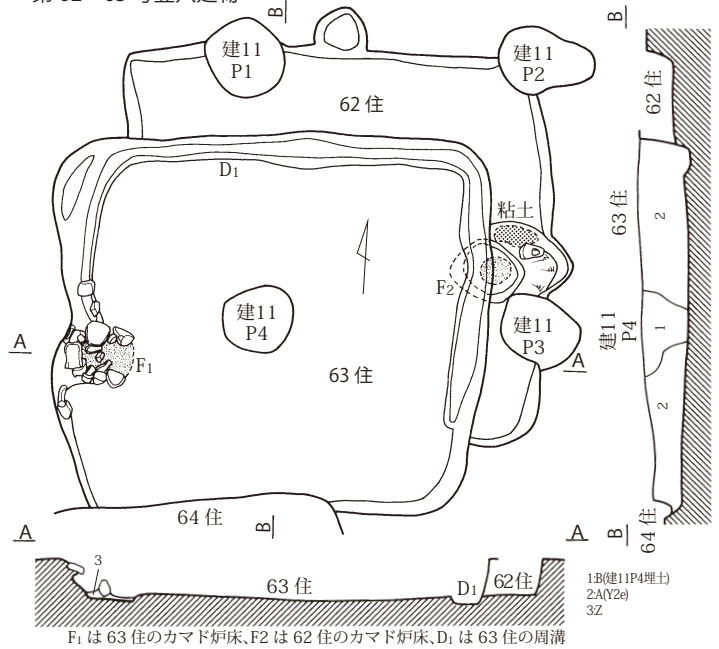


P₁~P₄は主柱穴、P₅・P₆は壁柱穴(補助柱穴)を想定。D₁・D₂は周溝、F₁はカマド、F₂も位置的にカマドに類する施設の炉床と推定する。住居外側にもPが配列する。

第60号竪穴建物

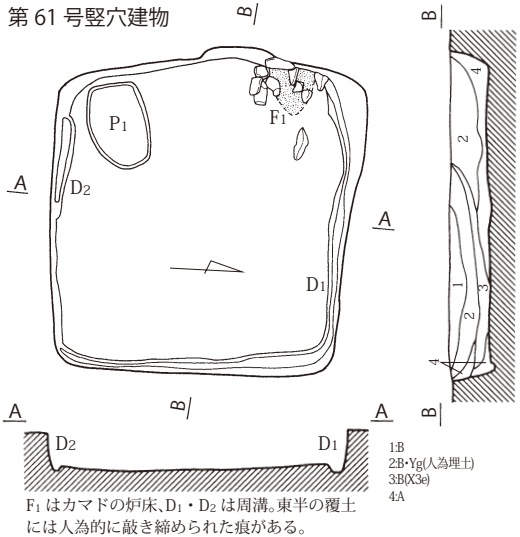


第62・63号竪穴建物



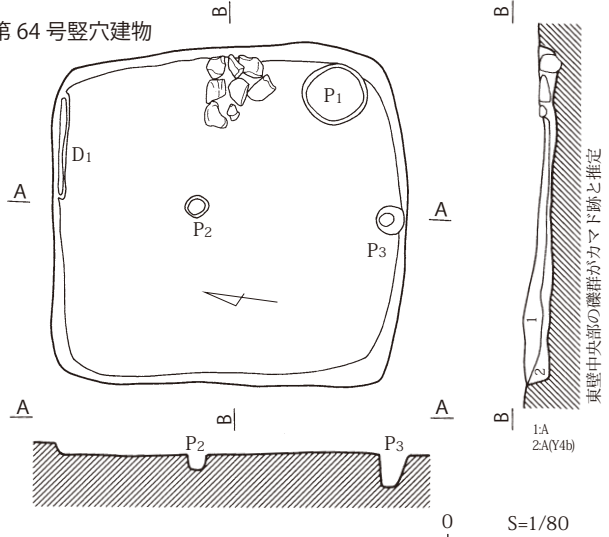
F₁は63住のカマド炉床、F₂は62住のカマド炉床、D₁は63住の周溝

第61号竪穴建物



F₁はカマドの炉床、D₁・D₂は周溝。東半の覆土には人為的に敷き締められた痕がある。

第64号竪穴建物

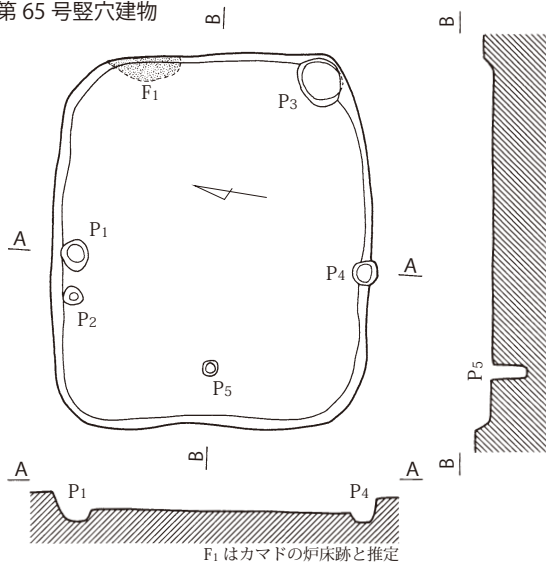


東意中央部の礎石がカマド下跡と推定

0 S=1/80 2m

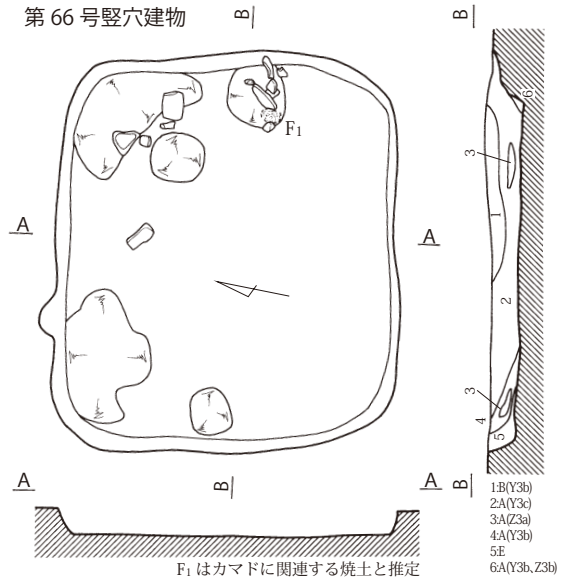
第22図 竪穴建物13(第58・60~64号)

第 65 号竪穴建物



F1 はカマドの炉床跡と推定

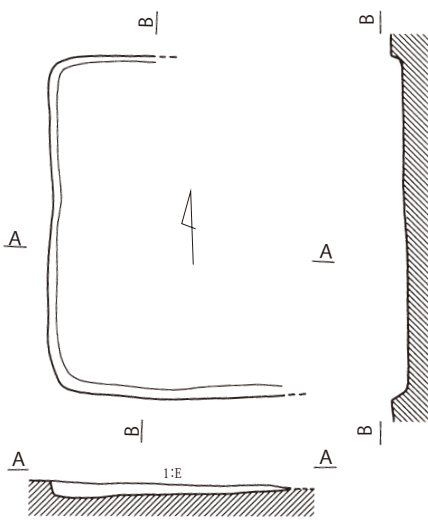
第 66 号竪穴建物



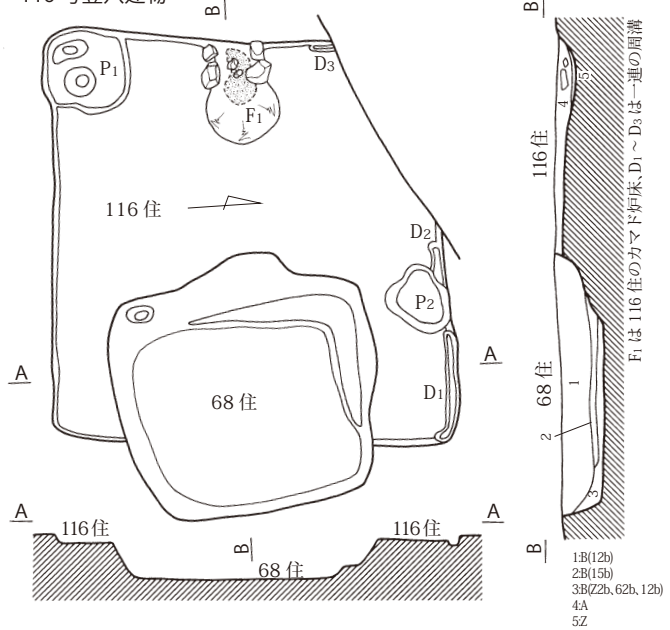
F1 はカマドに関連する焼土と推定

- 1B(Y3b)
- 2A(Y3c)
- 3A(Z3a)
- 4A(Y3b)
- 5E
- 6A(Y3b, Z3b)

第 67 号竪穴建物



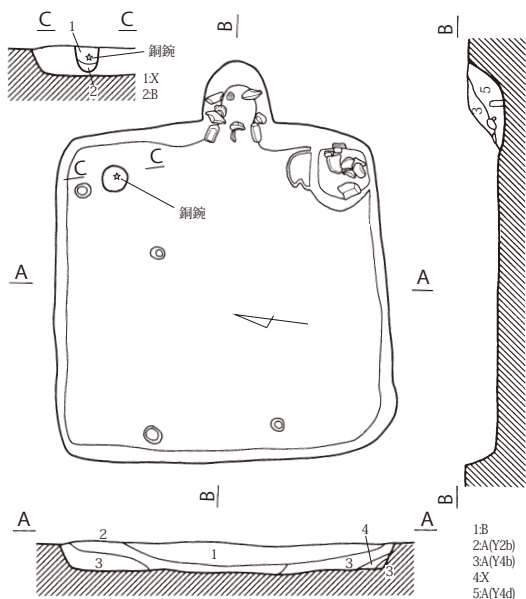
第 68・116 号竪穴建物



F1 は 116 住のカマドが床・D1 ~ D3 は一連の周溝

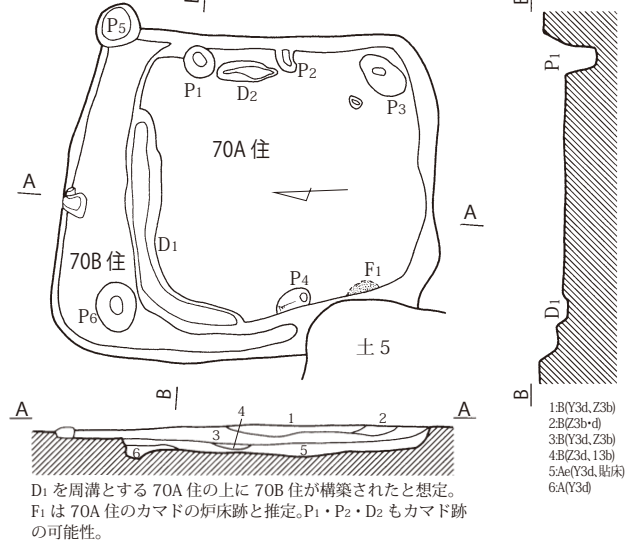
- 1B(12b)
- 2B(15b)
- 3B(Z2b, 62b, 12b)
- 4A
- 5Z

第 69 号竪穴建物



- 1B
- 2A(Y2b)
- 3A(Y4b)
- 4X
- 5A(Y4d)

第 70 号竪穴建物



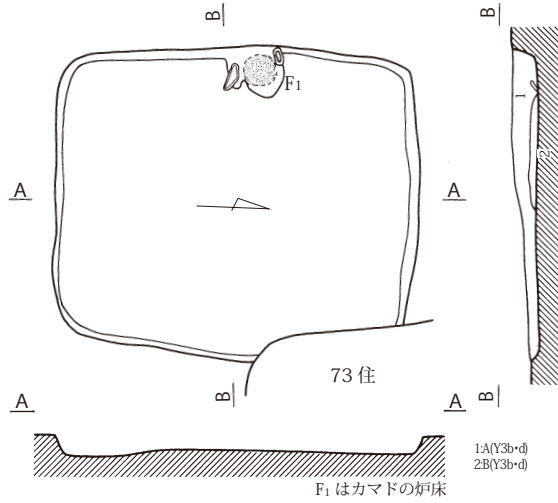
D1 を周溝とする 70A 住の上に 70B 住が構築されたと想定。
F1 は 70A 住のカマドの炉床跡と推定。P1・P2・D2 もカマド跡の可能性。

- 1B(Y3d, Z3b)
- 2B(Z3b-d)
- 3B(Y3d, Z3b)
- 4B(Z3d, 13b)
- 5Ae(Y3d, 貼床)
- 6A(Y3d)

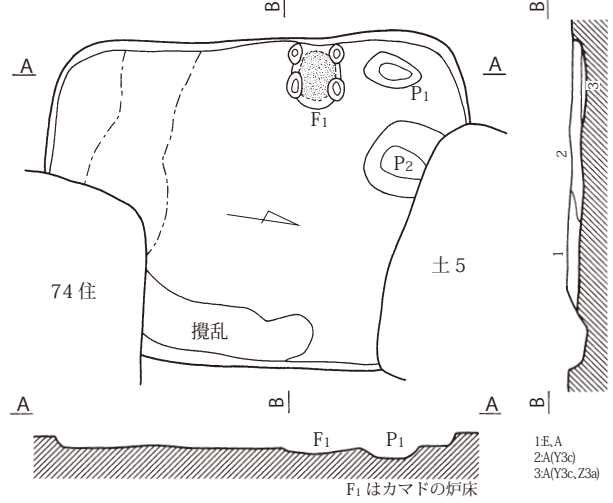
0 S=1/80 2m

第 23 図 竪穴建物 14 (第 65 ~ 70・116 号)

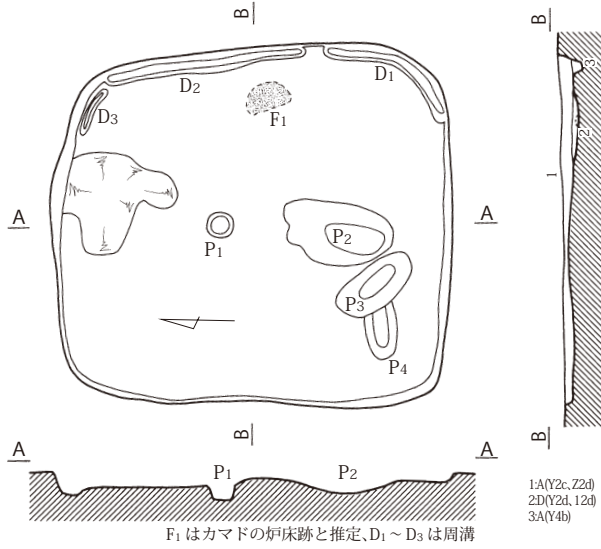
第 72 号 竪穴建物



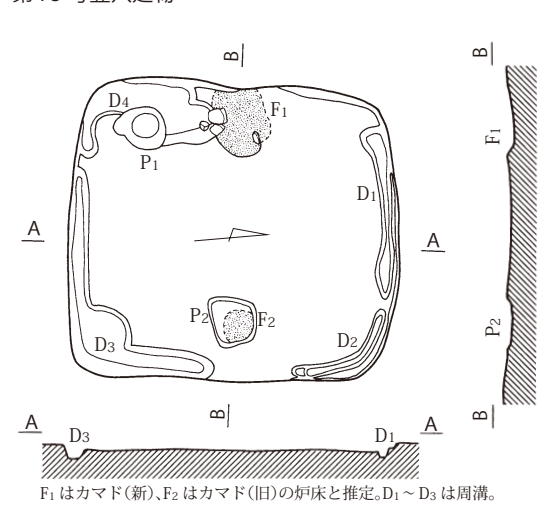
第 73 号 竪穴建物



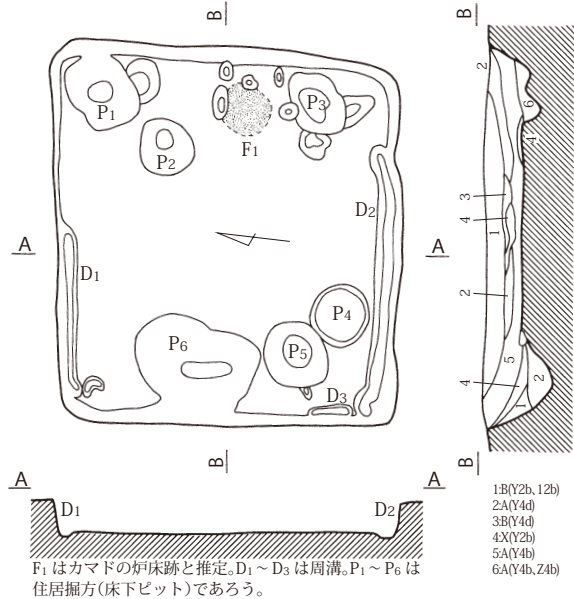
第 74 号 竪穴建物



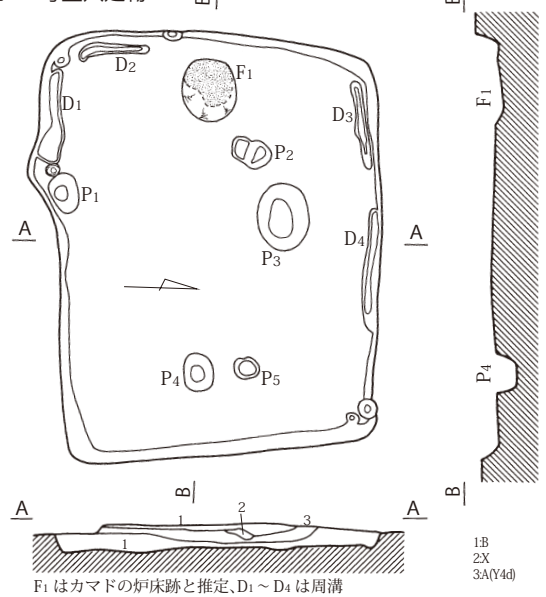
第 75 号 竪穴建物



第 76 号 竪穴建物



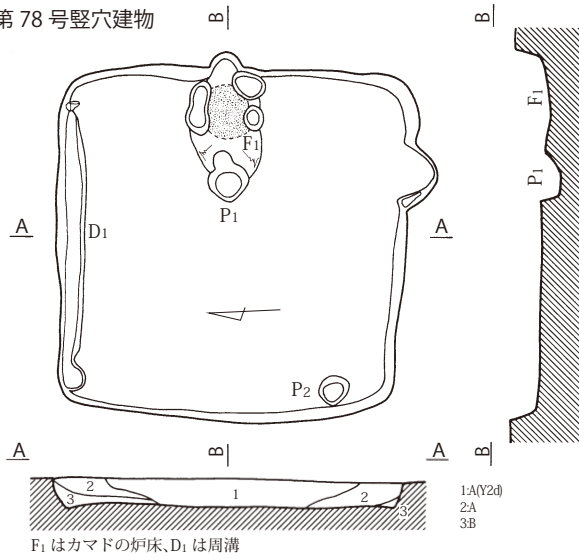
第 77 号 竪穴建物



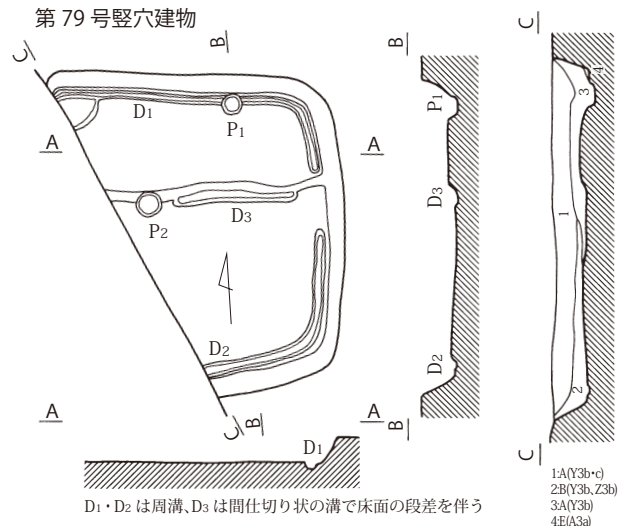
0 S=1/80 2m

第 24 図 竪穴建物 15 (第 72 ~ 77 号)

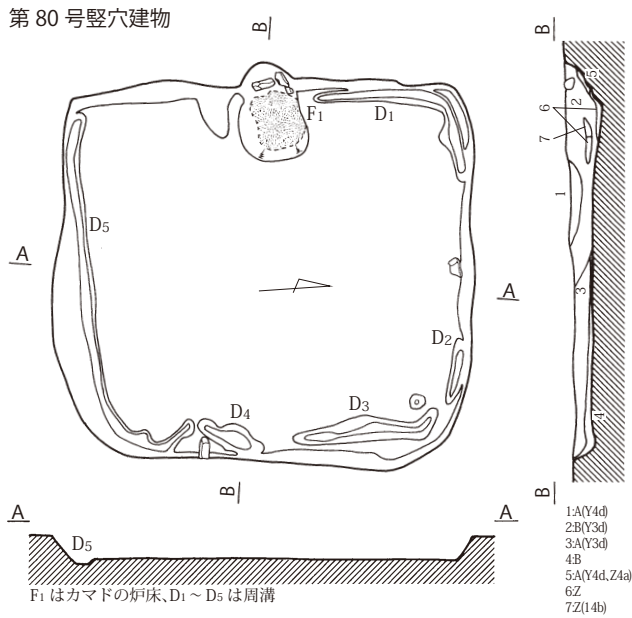
第 78 号 竪穴建物



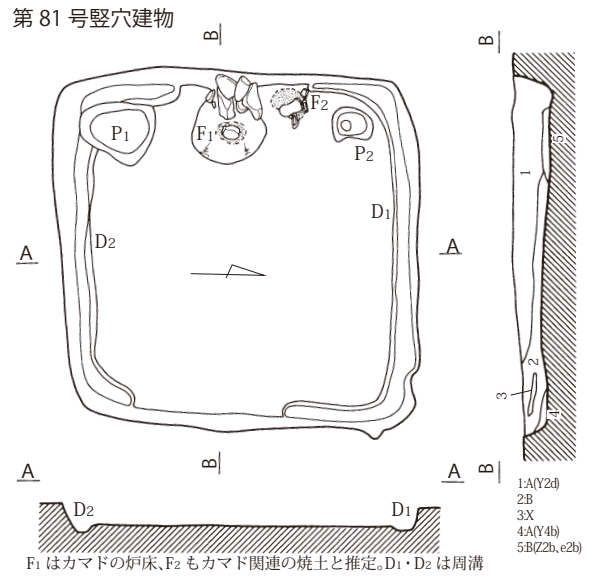
第 79 号 竪穴建物



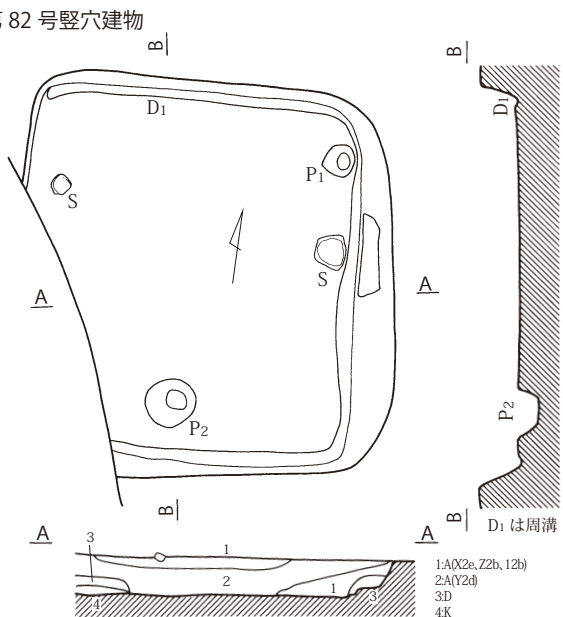
第 80 号 竪穴建物



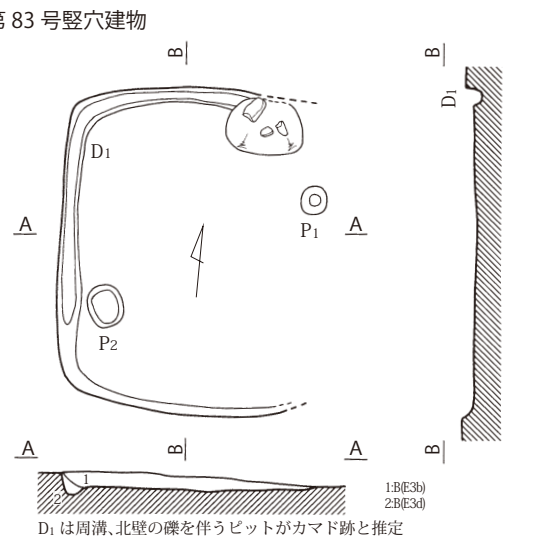
第 81 号 竪穴建物



第 82 号 竪穴建物



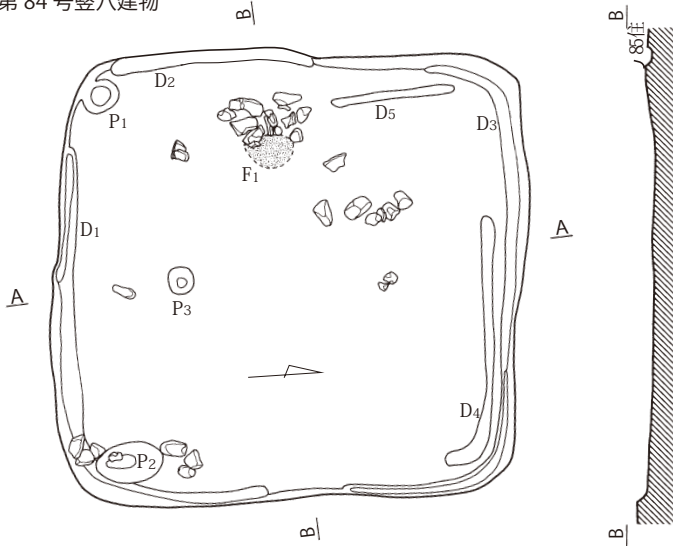
第 83 号 竪穴建物



第 25 図 竪穴建物 16 (第 78 ~ 83 号)

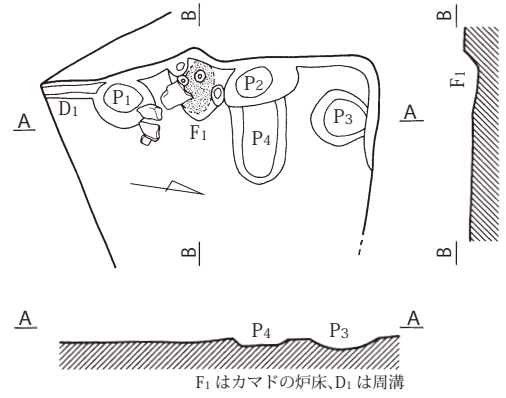
0 S=1/80 2m

第 84 号竪穴建物



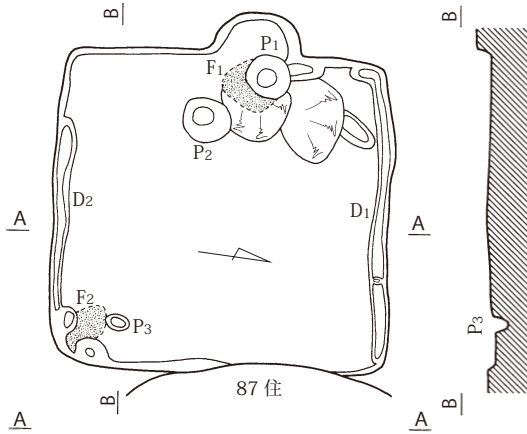
F₁はカマドの炉床、D₁～D₃は周溝、内側のD₄・D₅も旧周溝で住居拡張の跡と推定。

第 93 号竪穴建物



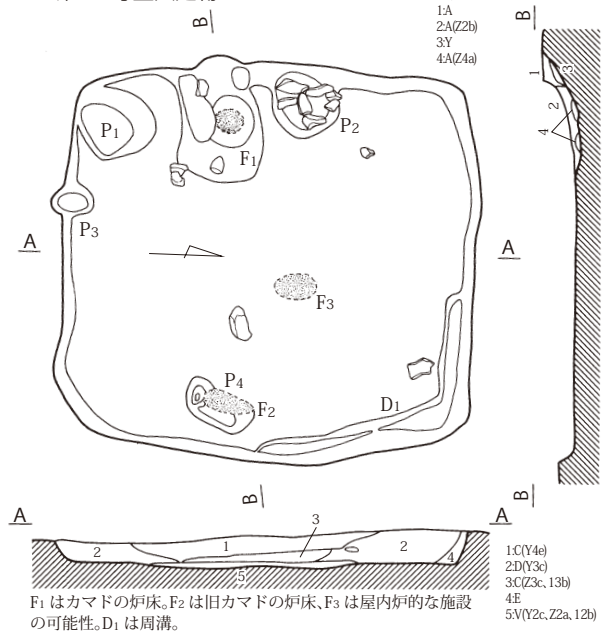
F₁はカマドの炉床、D₁は周溝

第 86 号竪穴建物



F₁はカマドの炉床跡と推定、F₂もカマド類似施設の焼土と推定、D₁・D₂は周溝

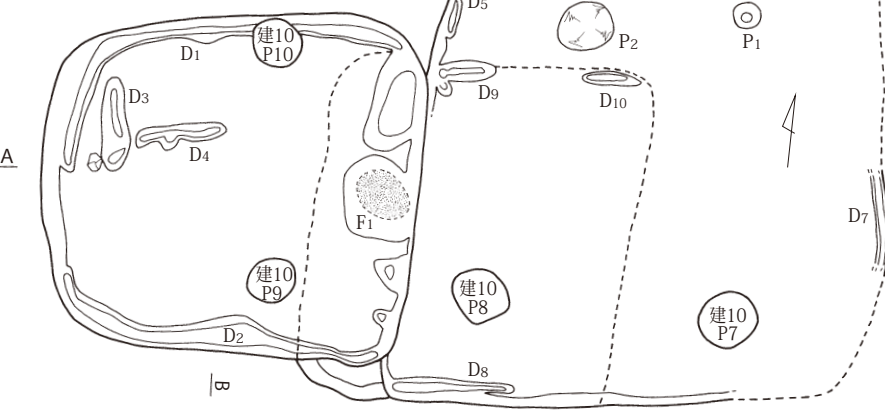
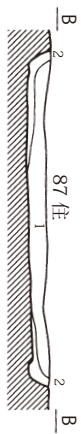
第 85 号竪穴建物



F₁はカマドの炉床、F₂は旧カマドの炉床、F₃は屋内炉的な施設の可能性、D₁は周溝。

85住カマド
1A
2A(Z2b)
3Y
4A(Z4a)
1C(Y4e)
2D(Y3c)
3C(Z3c, 13b)
4E
5V(Y2c, Z2a, 12b)

第 87 号竪穴建物



1B
2B(Y3b)

1A(Y3c, Z3c)
2A(Y3c)
3A(Y3d)
4A

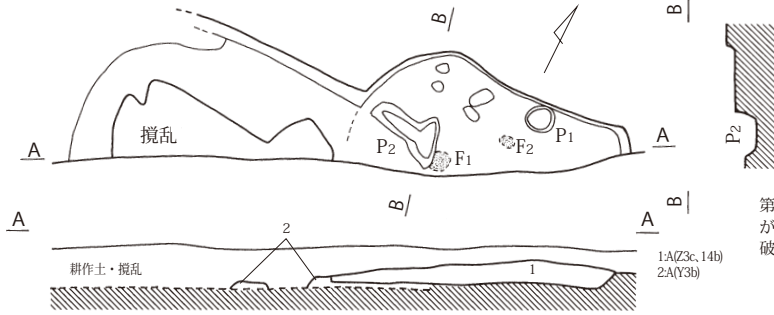
F₁は87住のカマド炉床、D₁・D₂は同住周溝、D₃・D₄は同住の施設か、D₅～D₈は88住周溝、D₉・D₁₀及び南西コーナーの存在から87・88住に切られた住居の存在を推定。遺物等は皆無だが88B住とする。P7～P10は建10を構成する柱穴。

0 S=1/80 2m

第 26 図 竪穴建物 17 (第 84 ～ 88 ・ 93 号)

第 89 号竪穴建物

第 90 号竪穴建物

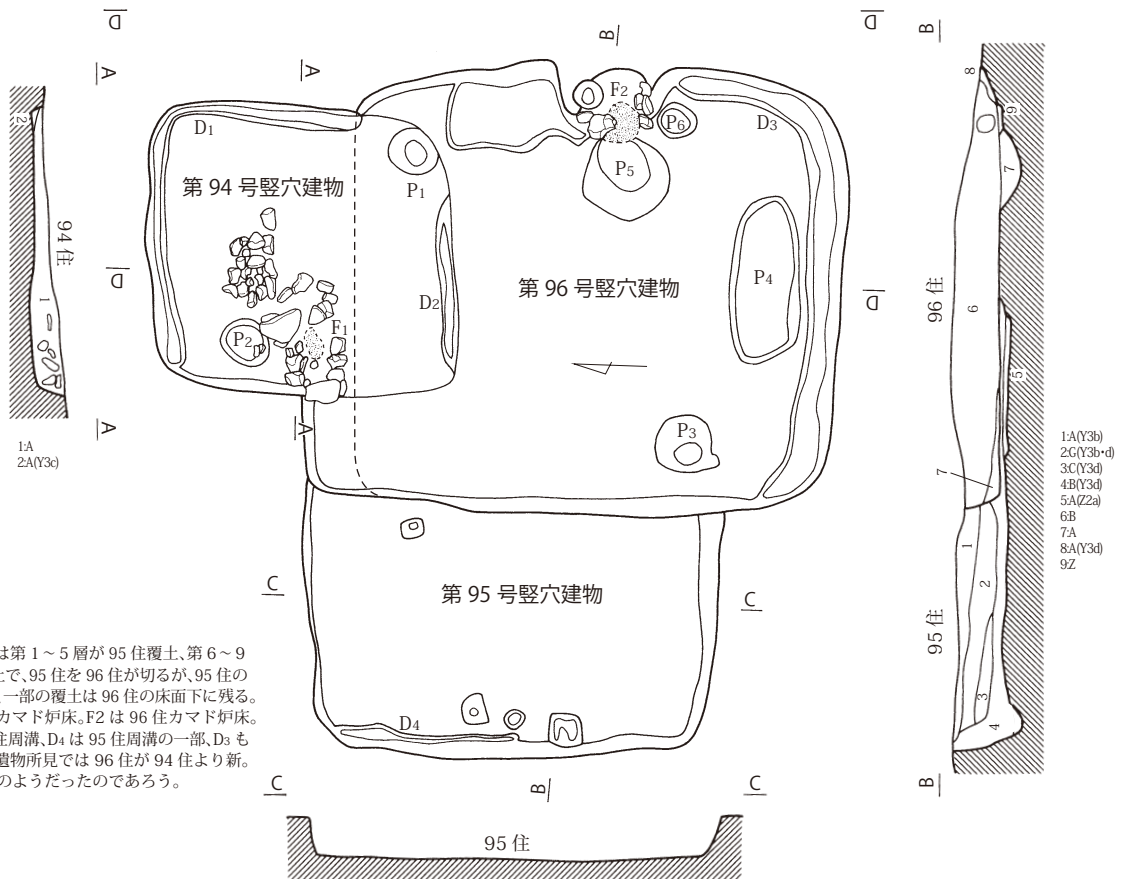
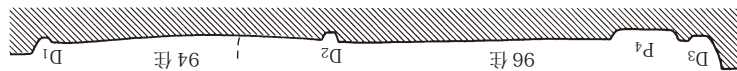
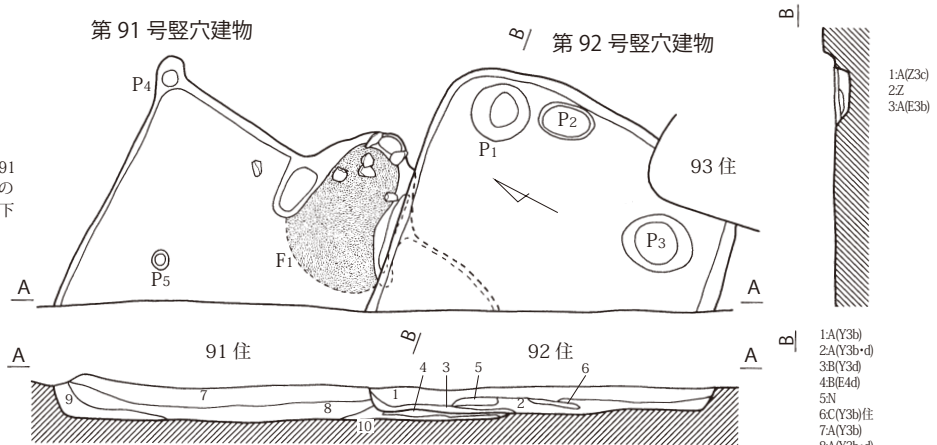


第 1 層が 90 住覆土、第 2 層が 89 住覆土で、89 住を 90 住
が切ると想定するが詳細は不明。両遺構共に耕作や攪乱の
破壊が著しい。F₁・F₂ は 90 住のカマド跡に想定できない。

第 1～6 層が 92 住覆土、第 7～10 層が 91
住覆土で、91 住を 92 住が切るが、91 住の
方が若干深く、一部の覆土は 92 住の床面下
に残る。F₁ は 91 住のカマド炉床。

第 91 号竪穴建物

第 92 号竪穴建物

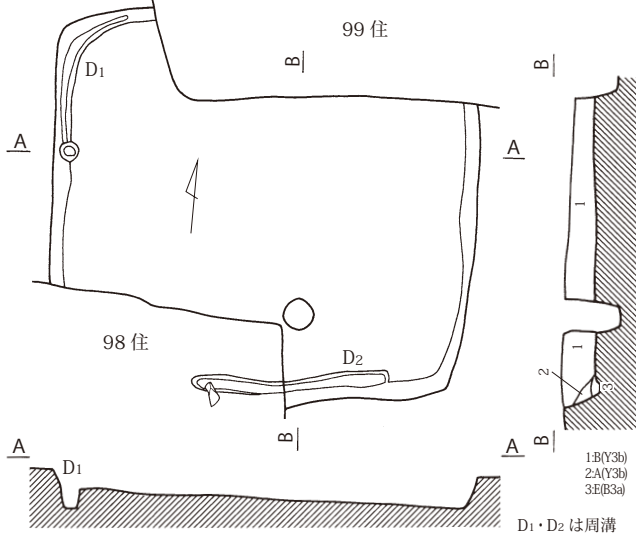


B 列の土層図は第 1～5 層が 95 住覆土、第 6～9
層が 96 住覆土で、95 住を 96 住が切るが、95 住の
方が若干深く、一部の覆土は 96 住の床面下に残る。
F₁ は 94 住のカマド炉床、F₂ は 96 住カマド炉床。
D₁・D₂ は 94 住周溝、D₄ は 95 住周溝の一部、D₃ も
96 住の周溝。遺物所見では 96 住が 94 住より新。
おそらく点線のようなのであろう。

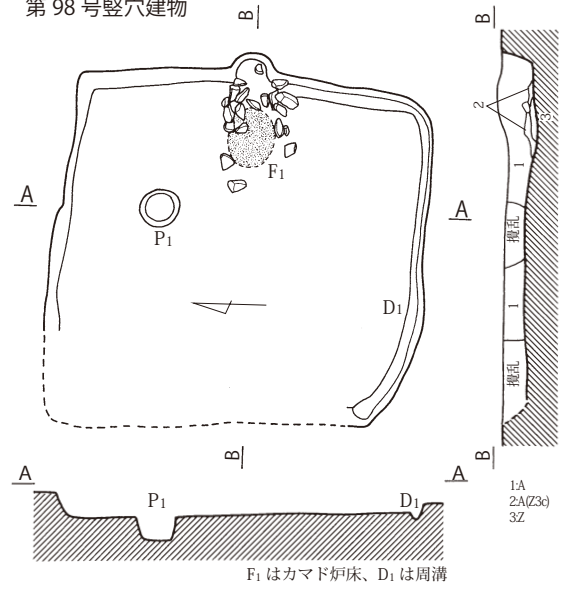
第 27 図 竪穴建物 18 (第 89～92・94～96 号)

0 S=1/80 2m

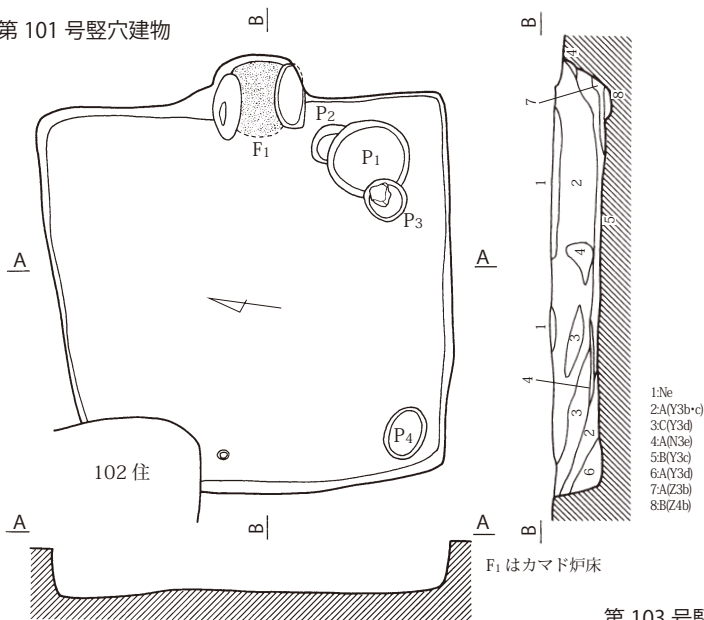
第97号竪穴建物



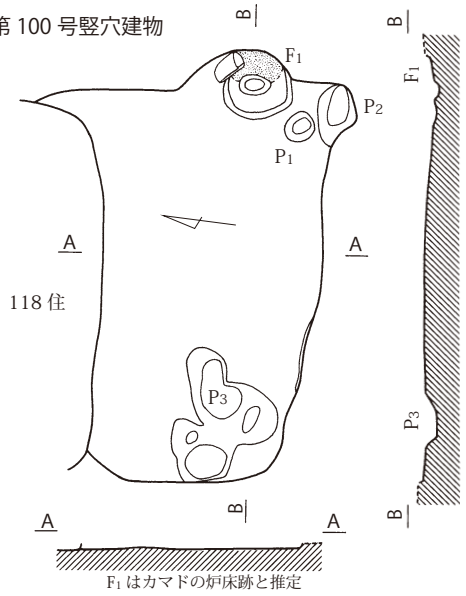
第98号竪穴建物



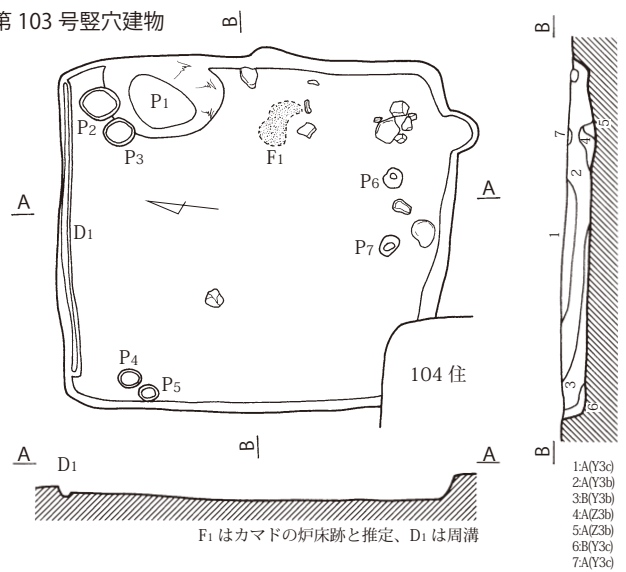
第101号竪穴建物



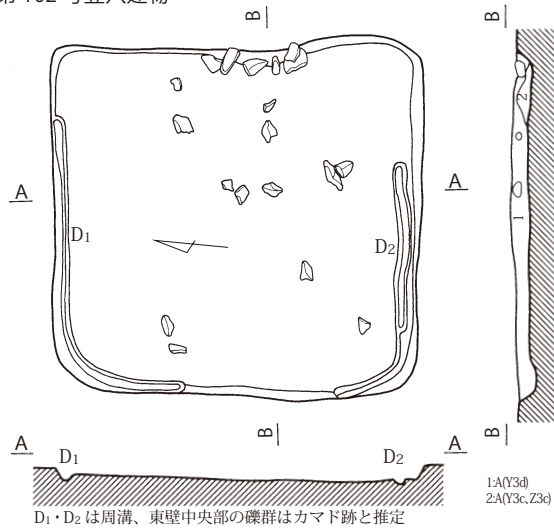
第100号竪穴建物



第103号竪穴建物



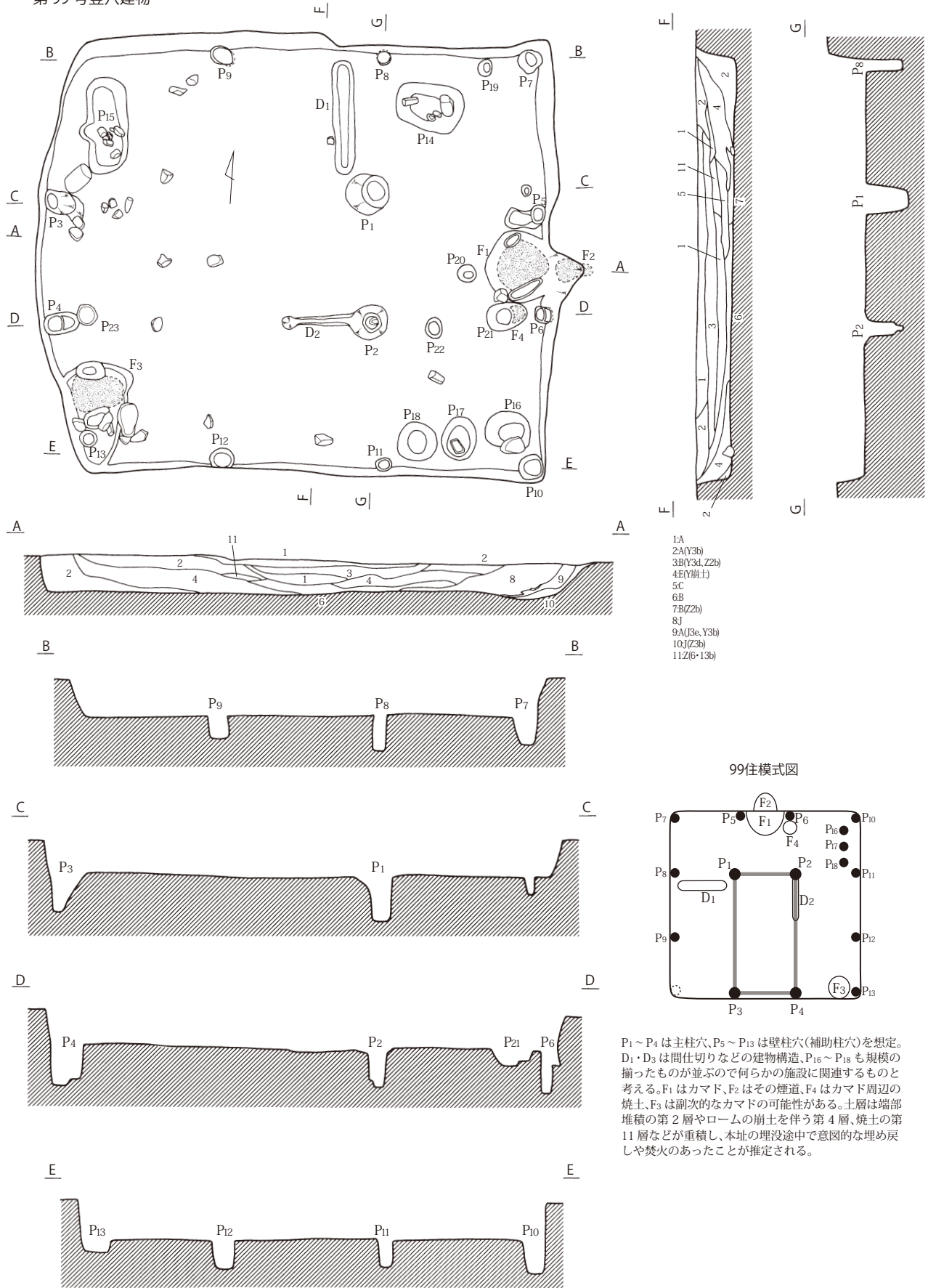
第102号竪穴建物



0 S=1/80 2m

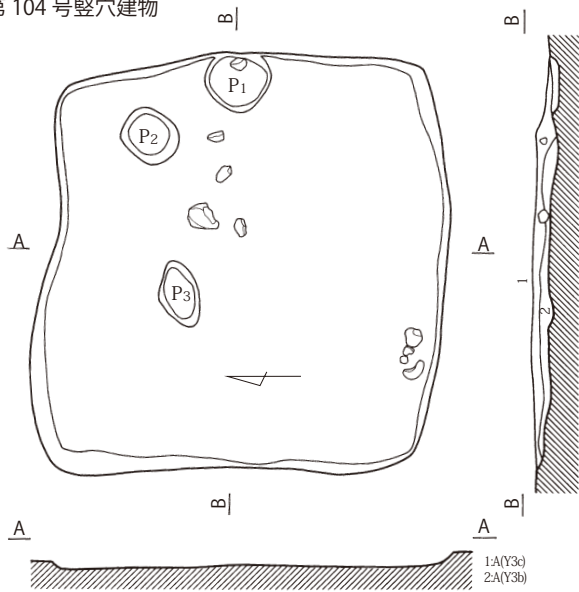
第28図 竪穴建物19(第97・98・100～103号)

第 99 号 竪穴建物

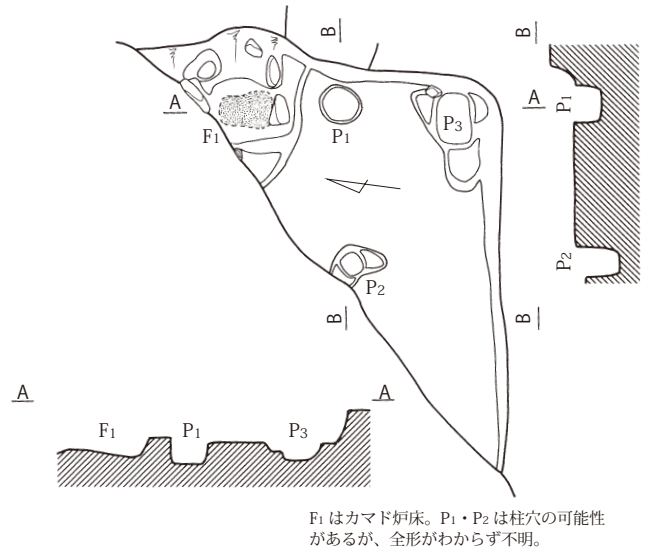


第 29 図 竪穴建物 20 (第 99 号)

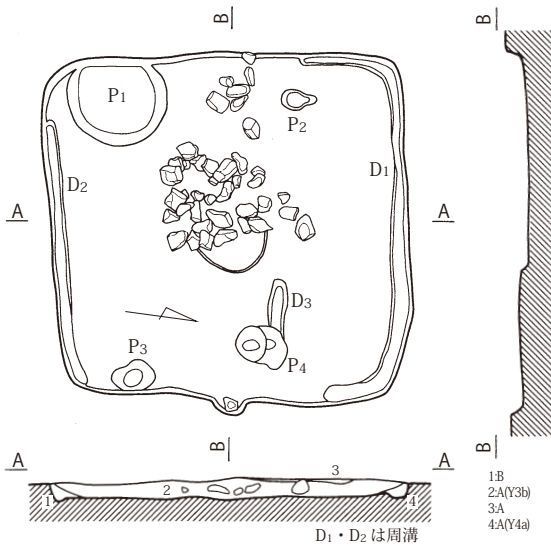
第 104 号 竪穴建物



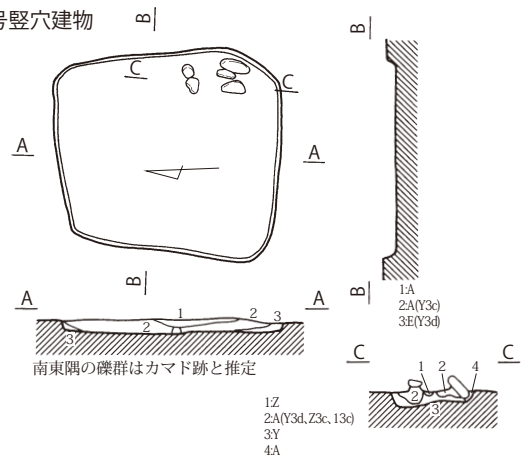
第 106 号 竪穴建物



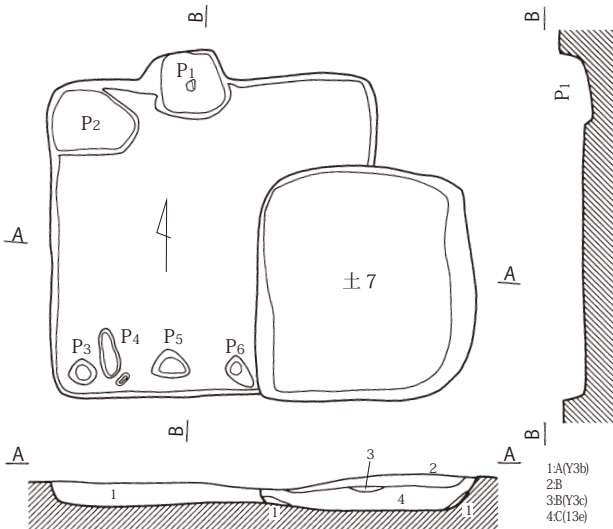
第 107 号 竪穴建物



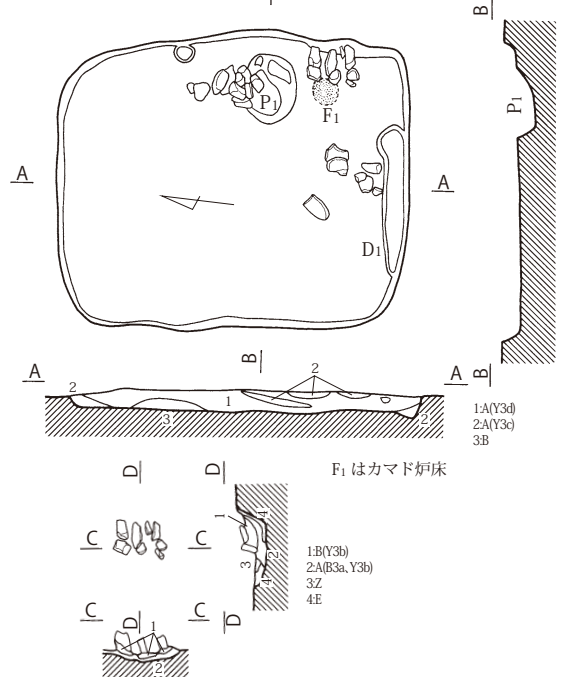
第 105 号 竪穴建物



第 108 号 竪穴建物



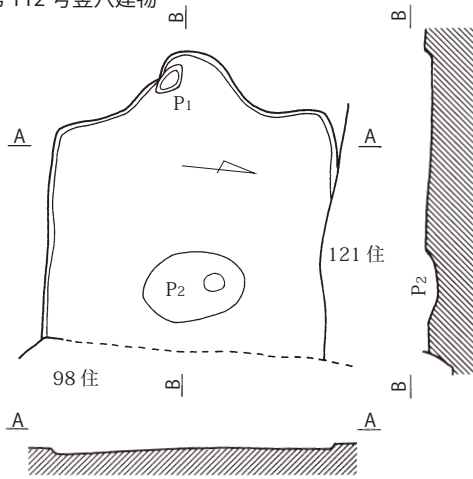
第 109 号 竪穴建物



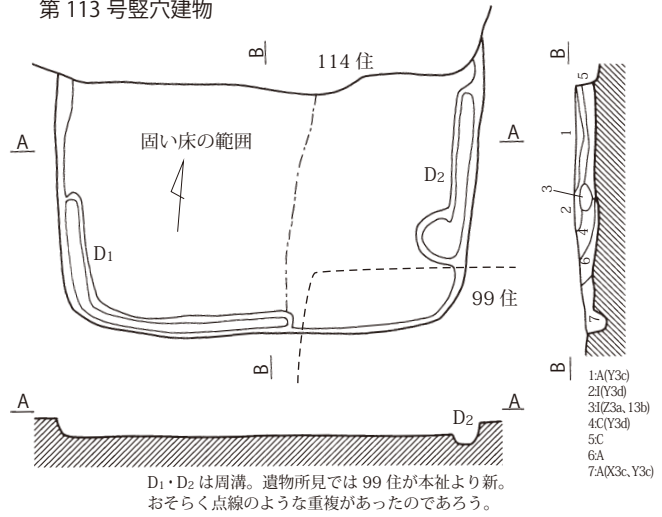
第 30 図 竪穴建物 21 (第 104 ~ 109 号)

0 S=1/80 2m

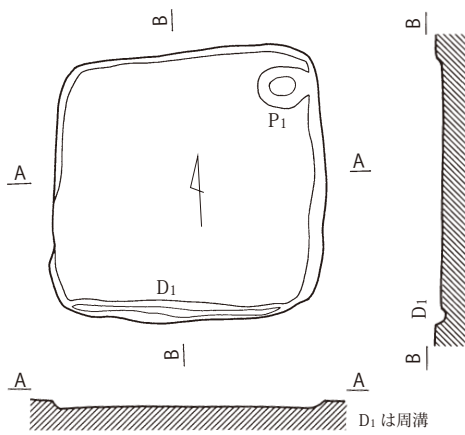
第 112 号 竪穴建物



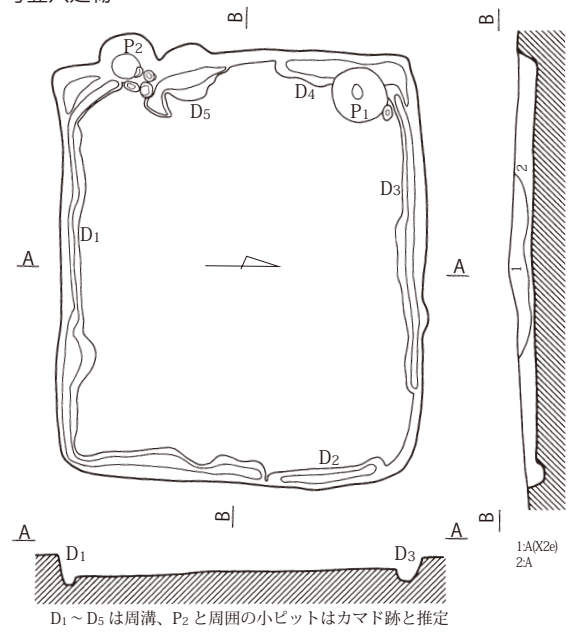
第 113 号 竪穴建物



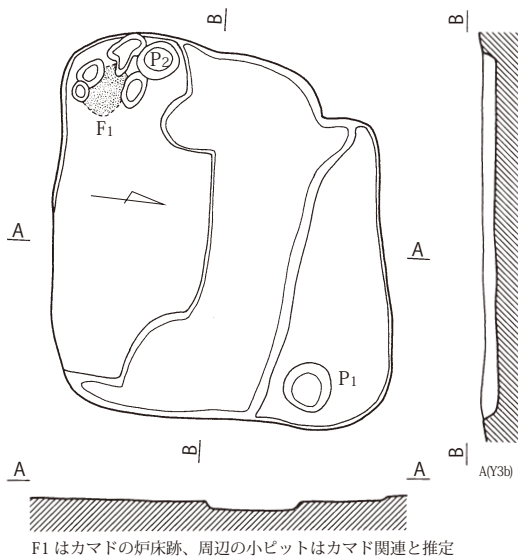
第 115 号 竪穴建物



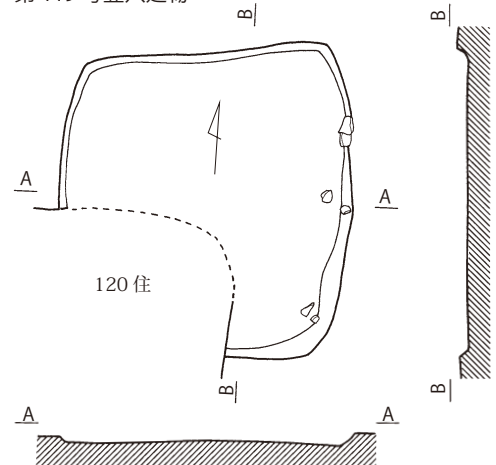
第 117 号 竪穴建物



第 118 号 竪穴建物



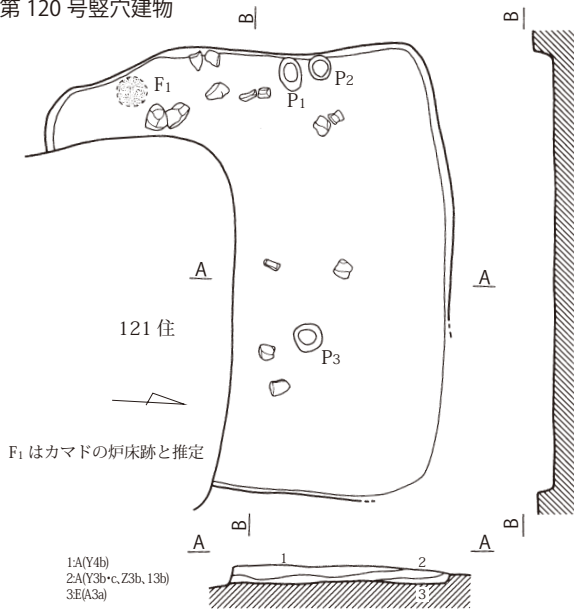
第 119 号 竪穴建物



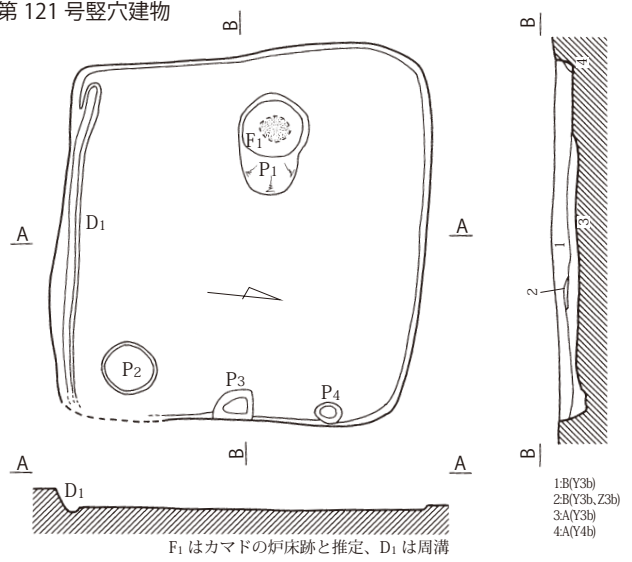
0 S=1/80 2m

第 32 図 竪穴建物 23 (第 112・113・115・117～119号)

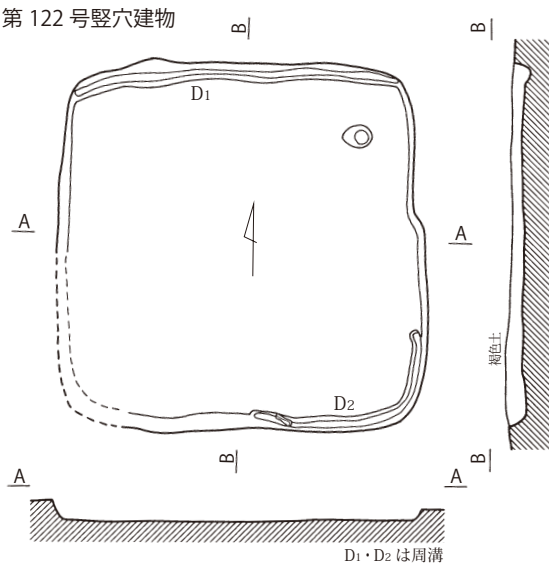
第 120 号 竪穴建物



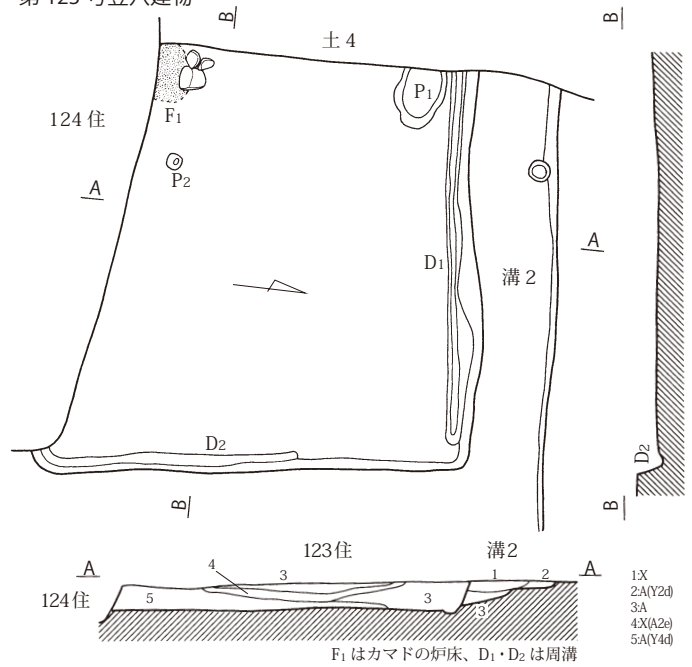
第 121 号 竪穴建物



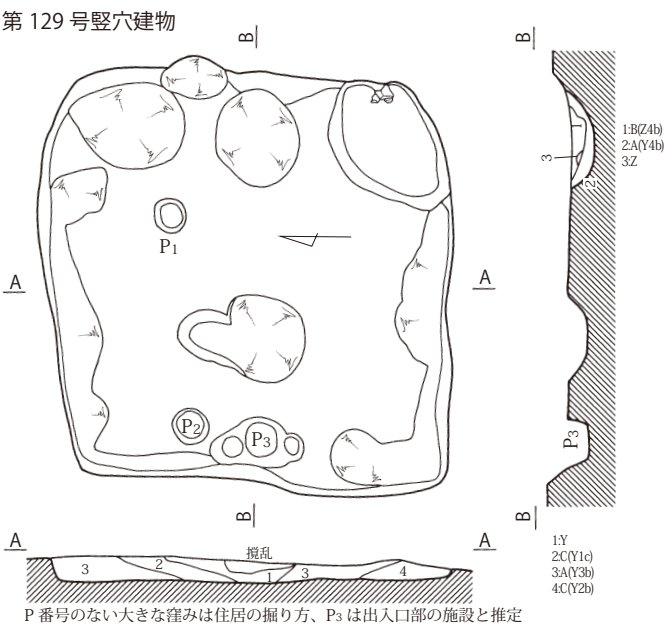
第 122 号 竪穴建物



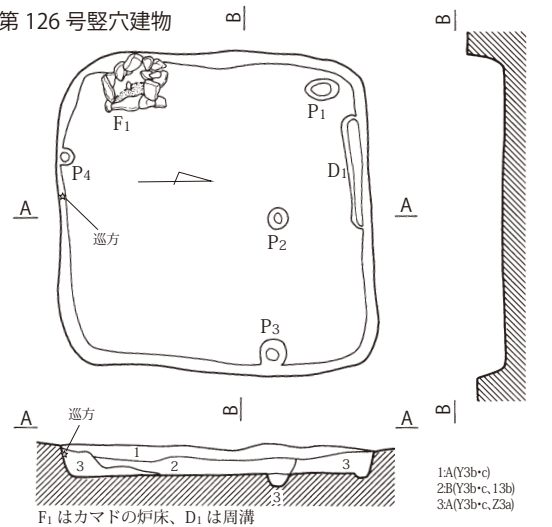
第 123 号 竪穴建物



第 129 号 竪穴建物



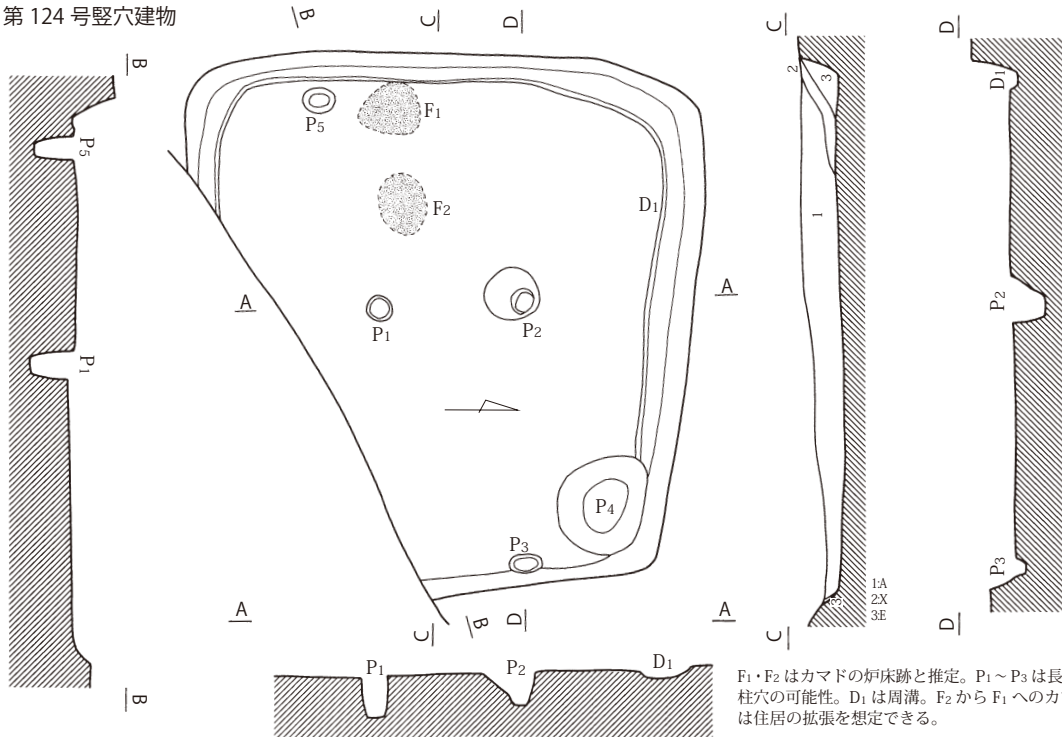
第 126 号 竪穴建物



第 33 図 竪穴建物 24 (第 120 ~ 123・126・129 号)

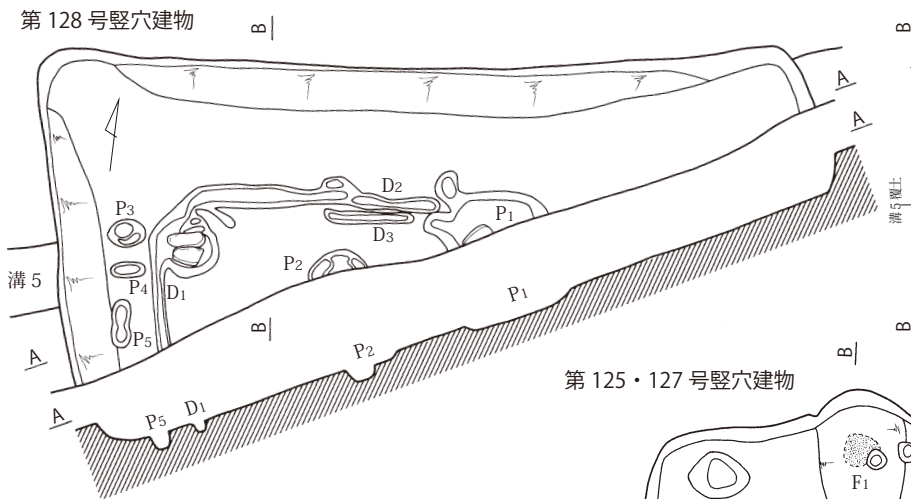
0 S=1/80 2m

第124号竪穴建物



F₁・F₂はカマドの炉床跡と推定。P₁～P₃は長方形配列の柱穴の可能性。D₁は周溝。F₂からF₁へのカマドの移動は住居の拡張を想定できる。

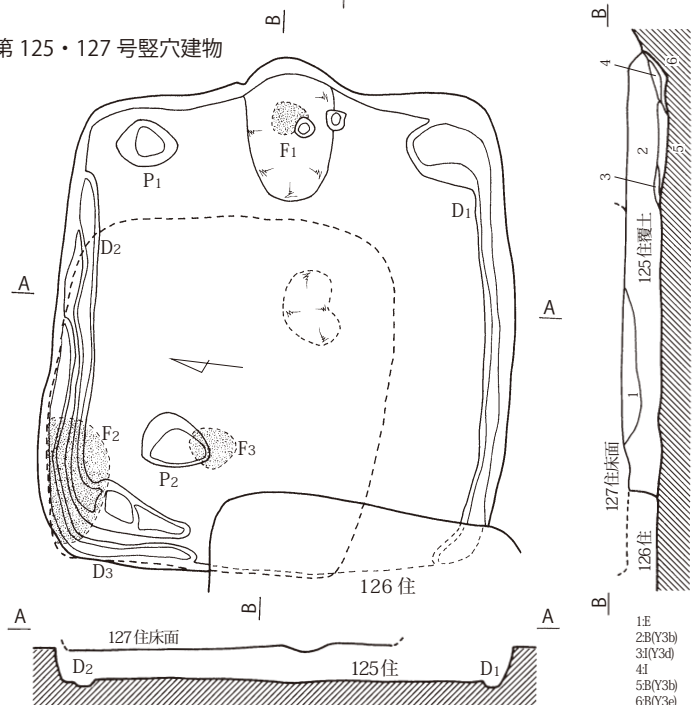
第128号竪穴建物



床面に現れたD₁～D₃・P₁は方形に配列し、小型の竪穴建物の周溝の一部に見える。一方、土層は連続的に堆積しており、まったく異なる別遺構上に本址が構築された様子でもない。D₁～D₃の周溝等で囲まれる小型の住居を拡張して本址としたと理解したい。

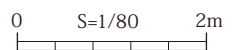
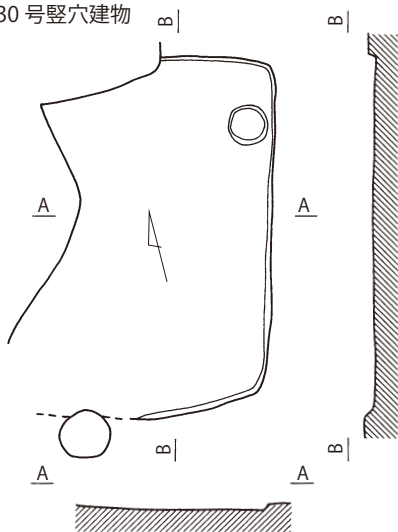
- 1A(Y2c)
- 2B(Y2d)
- 3B(Y3c)
- 4B(Y4b・d)
- 5X(Y2d)
- 6A(Y3b)
- 7A

第125・127号竪穴建物



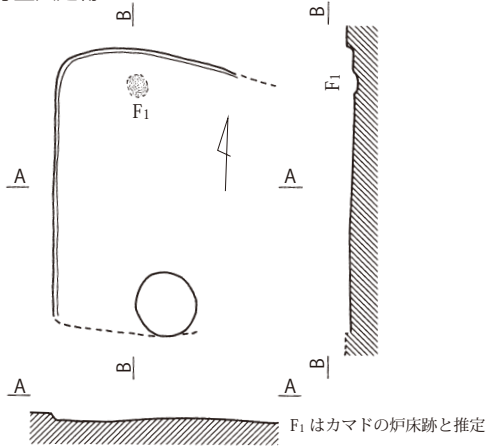
127住は125住覆土上層で床面と焼土(F₂・F₃)を確認。床面範囲を点線で示す。F₂はカマドの炉床跡と推定。125住に属する施設はF₁(カマド炉床)、D₁～D₃(周溝)、P₁・P₂(用途不明)。

第130号竪穴建物



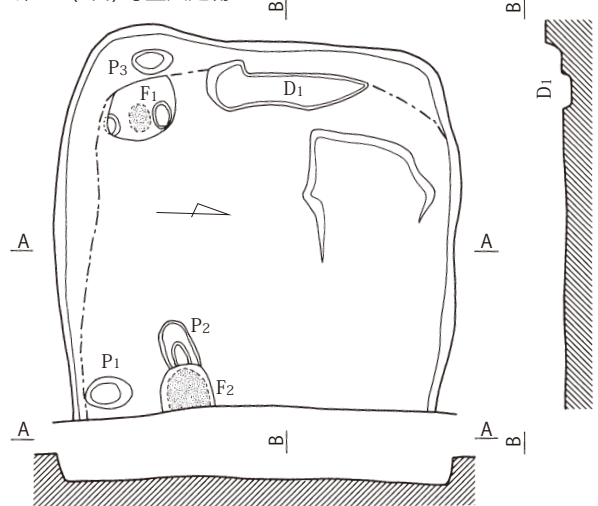
第34図 竪穴建物25(第124・125・127・128・130号)

第131号竪穴建物



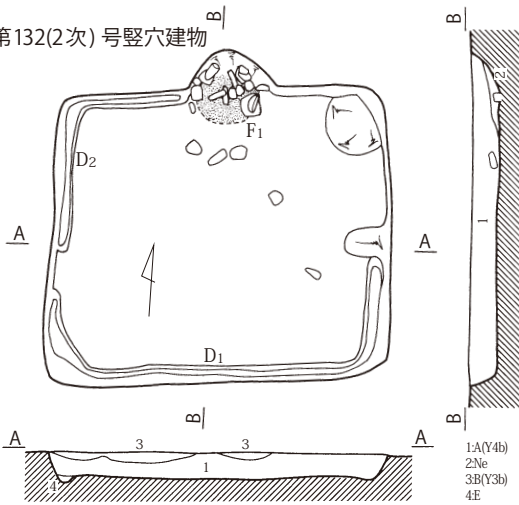
F₁はカマドの炉床跡と推定

第132(1次)号竪穴建物



F₁・F₂はカマドの炉床跡と推定、F₁が旧、F₂が新か？

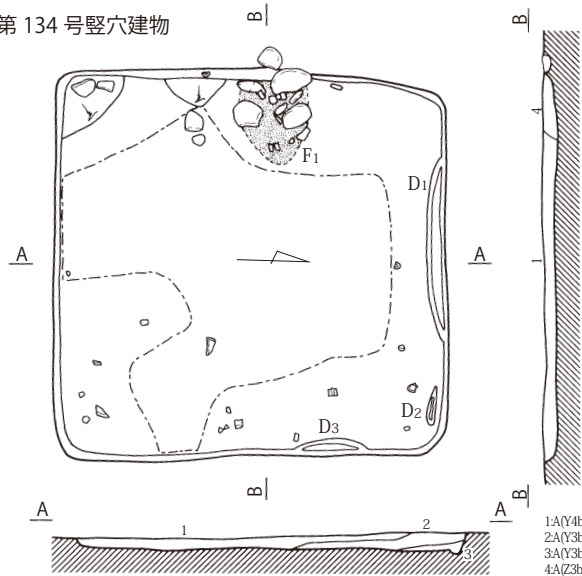
第132(2次)号竪穴建物



F₁はカマドの炉床、D₁・D₂は周溝

1A(Y4b)
2Ne
3B(Y3b)
4E

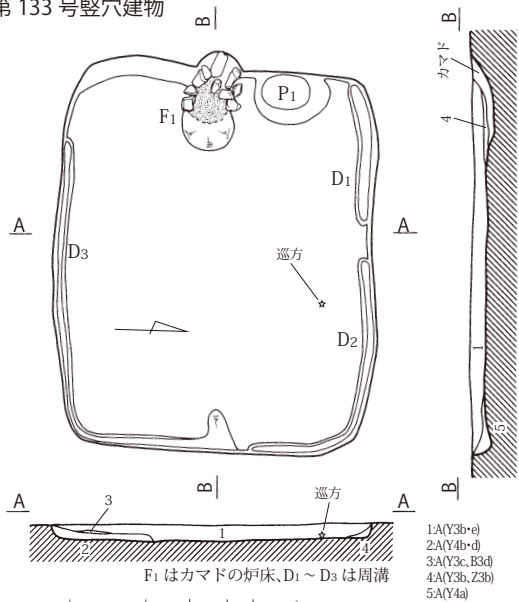
第134号竪穴建物



F₁はカマドの炉床、D₁～D₃は周溝

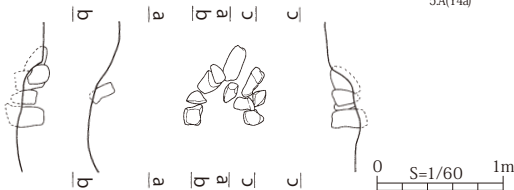
1A(Y4b, Y3d)
2A(Y3b-d)
3A(Y3b-e)
4A(Z3b-d)

第133号竪穴建物

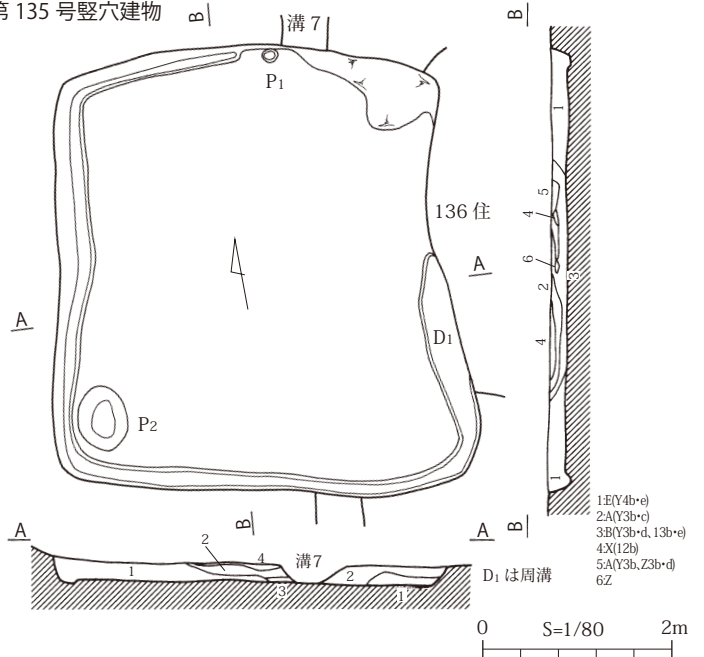


F₁はカマドの炉床、D₁～D₃は周溝

1A(Y3b-e)
2A(Y4b-d)
3A(Y3c, E3d)
4A(Y3b, Z3b)
5A(Y4a)

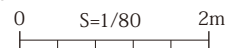


第135号竪穴建物



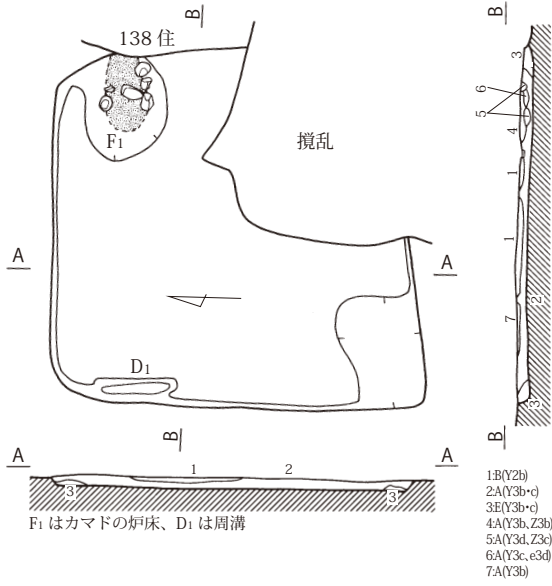
D₁は周溝

1E(Y4b-e)
2A(Y3b-c)
3B(Y3b-d, 13b-e)
4X(12b)
5A(Y3b, Z3b-d)
6Z

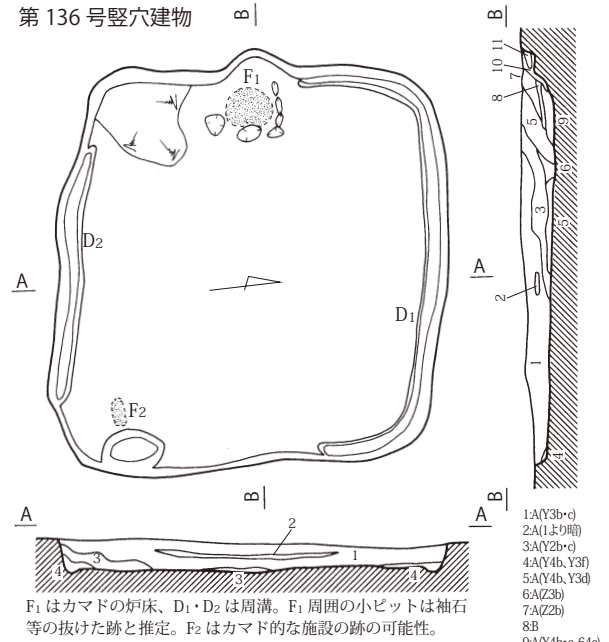


第35図 竪穴建物26(第131～135号)

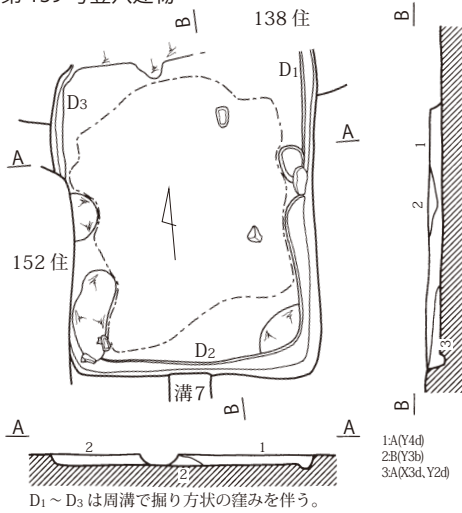
第 137 号 竪穴建物



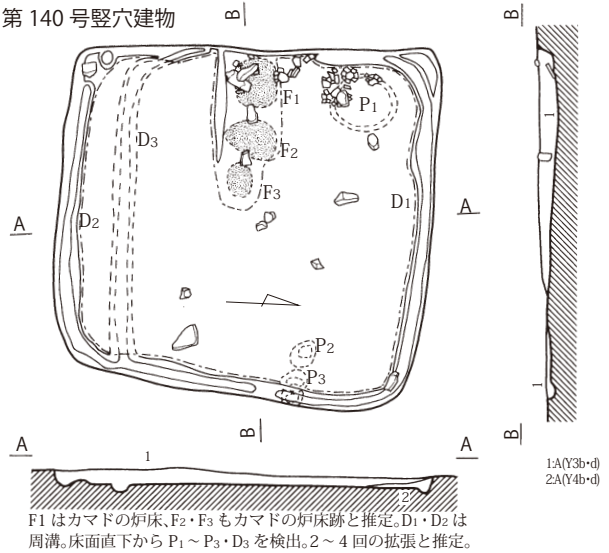
第 136 号 竪穴建物



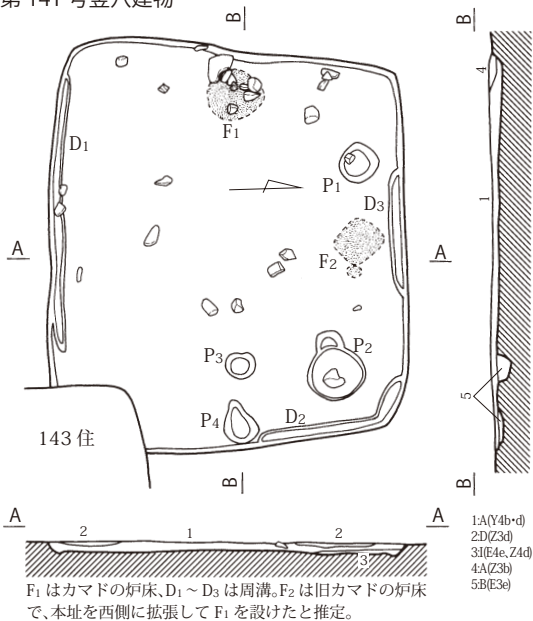
第 139 号 竪穴建物



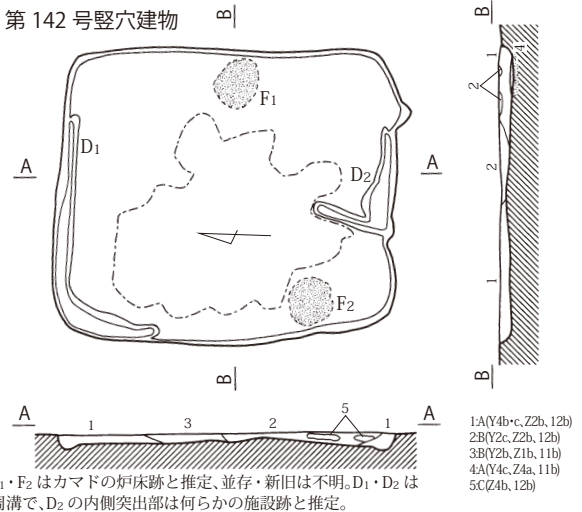
第 140 号 竪穴建物



第 141 号 竪穴建物



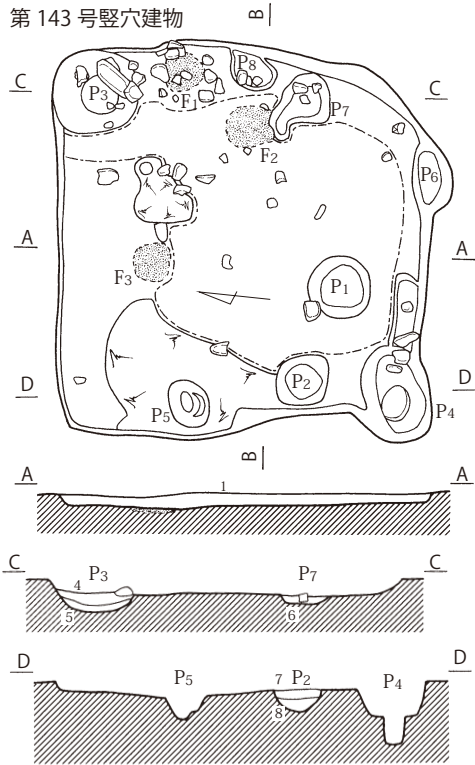
第 142 号 竪穴建物



0 S=1/80 2m

第 36 図 竪穴建物 27 (第 136・137・139～142 号)

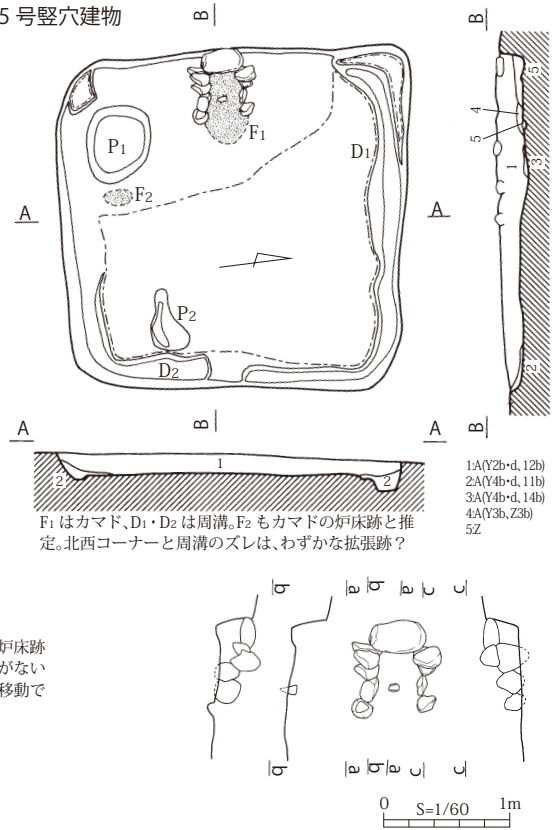
第 143 号 竪穴建物



- 1B(Y2b-d, Z1b, 11b)
- 2B(C2e, Y2d)
- 3A(Y4d, Z2d)
- 4A(Y4b-d, Zc, 1)
- 5B(Y2b)
- 6B(Y2c, 1a, Za)
- 7B(Y4c-d, 2d)
- 8A(Y4c)

F₁ はカマド、F₂・F₃ もカマドの炉床跡と推定。土層に遺構重複の様子が無いので、住居拡張に伴うカマドの移動であろう。

第 145 号 竪穴建物

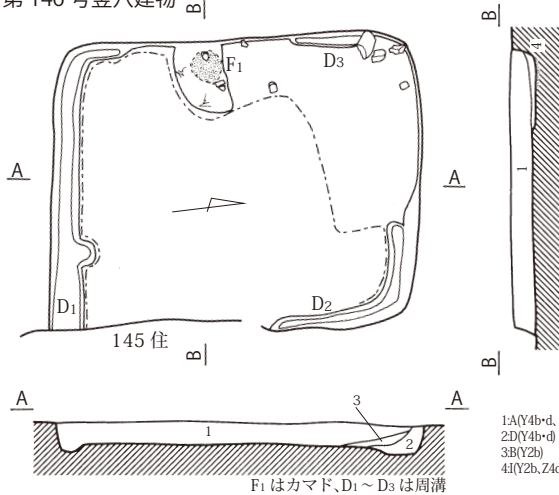


F₁ はカマド、D₁・D₂ は周溝、F₂ もカマドの炉床跡と推定。北西コーナーと周溝のズレは、わずかな拡張跡？

- 1A(Y2b-d, 12b)
- 2A(Y4b-d, 11b)
- 3A(Y4b-d, 14b)
- 4A(Y3b, Z3b)
- 5Z

0 S=1/60 1m

第 146 号 竪穴建物

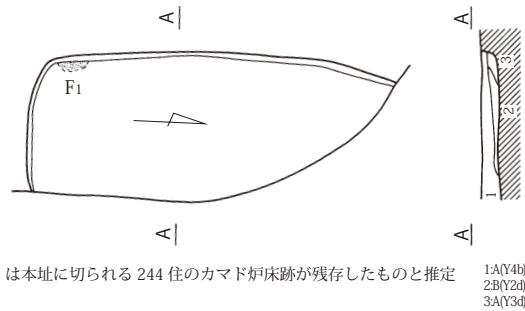


145 住

- 1A(Y4b-d, 14b-d)
- 2D(Y4b-d)
- 3B(Y2b)
- 4I(Y2b, Z4d)

F₁ はカマド、D₁~D₃ は周溝

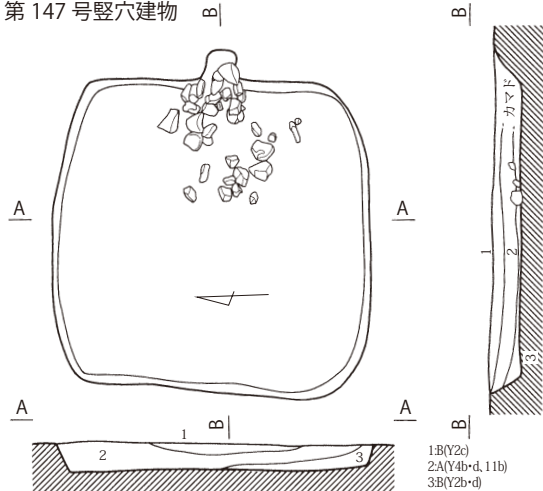
第 144 号 竪穴建物



F₁ は本址に切られる 244 住のカマド炉床跡が残存したものと推定

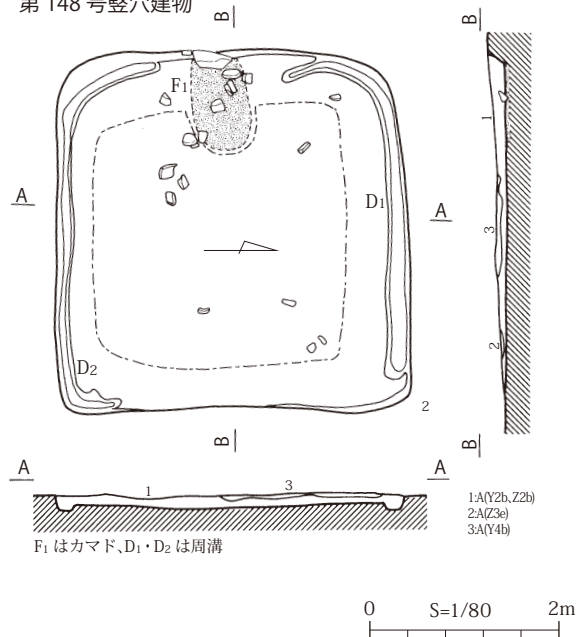
- 1A(Y4b)
- 2B(Y2d)
- 3A(Y3d)

第 147 号 竪穴建物



- 1B(Y2c)
- 2A(Y4b-d, 11b)
- 3B(Y2b-d)

第 148 号 竪穴建物



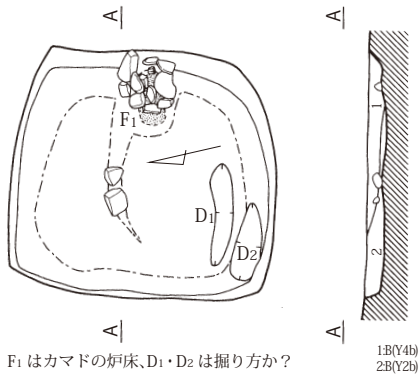
F₁ はカマド、D₁・D₂ は周溝

- 1A(Y2b, Z2b)
- 2A(Z3e)
- 3A(Y4b)

0 S=1/80 2m

第 38 図 竪穴建物 29 (第 143 ~ 148 号)

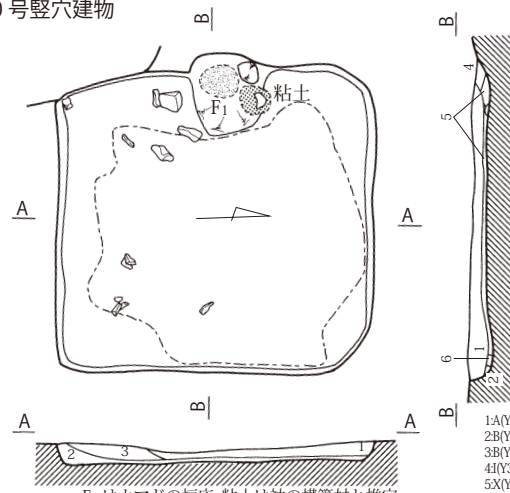
第 149 号 竪穴建物



F₁ はカマドの炉床、D₁・D₂ は掘り方か？

1B(Y4b)
2B(Y2b)

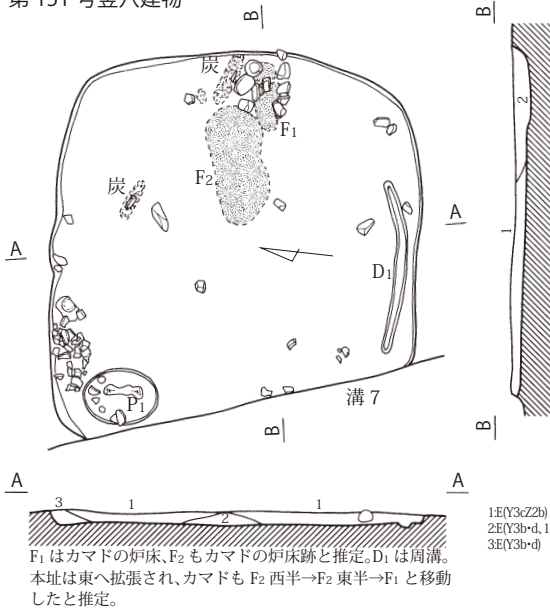
第 150 号 竪穴建物



F₁ はカマドの炉床、粘土は袖の構築材と推定

1A(Y4b-d)
2B(Y2d)
3B(Y2b)
4I(Y3d)
5X(Y2b, Z2a)
6B(Y2b)

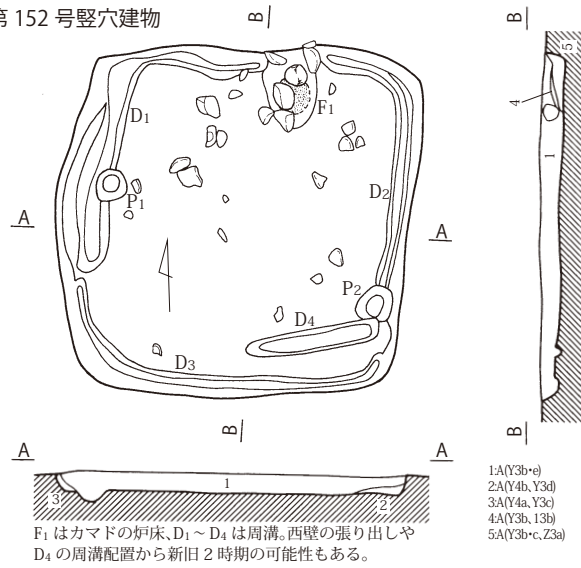
第 151 号 竪穴建物



F₁ はカマドの炉床、F₂ もカマドの炉床跡と推定、D₁ は周溝、本址は東へ拡張され、カマドも F₂ 西半→F₂ 東半→F₁ と移動したと推定。

1E(Y3c-Z2b)
2E(Y3b-d, 13b)
3E(Y3b-d)

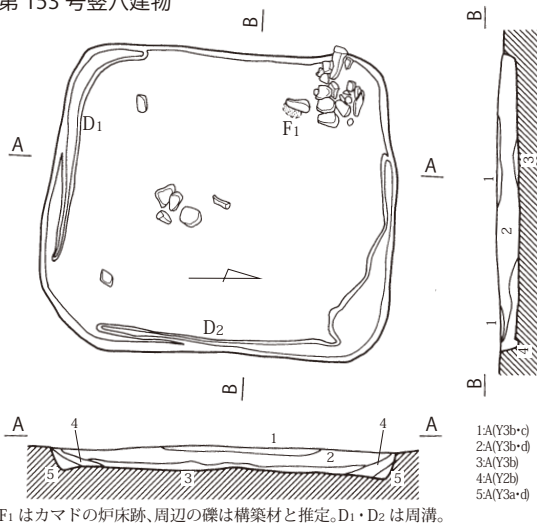
第 152 号 竪穴建物



F₁ はカマドの炉床、D₁～D₄ は周溝、西壁の張り出しや D₄ の周溝配置から新旧 2 時期の可能性もある。

1A(Y3b-e)
2A(Y4b, Y3c)
3A(Y4a, Y3c)
4A(Y3b, 13b)
5A(Y3b-c, Z3a)

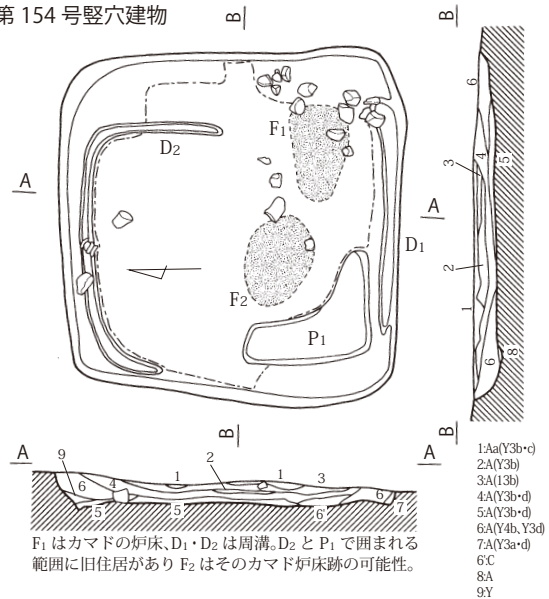
第 153 号 竪穴建物



F₁ はカマドの炉床跡、周辺の礫は構築材と推定、D₁・D₂ は周溝。

1A(Y3b-c)
2A(Y3b-d)
3A(Y3b)
4A(Y2b)
5A(Y3a-d)

第 154 号 竪穴建物



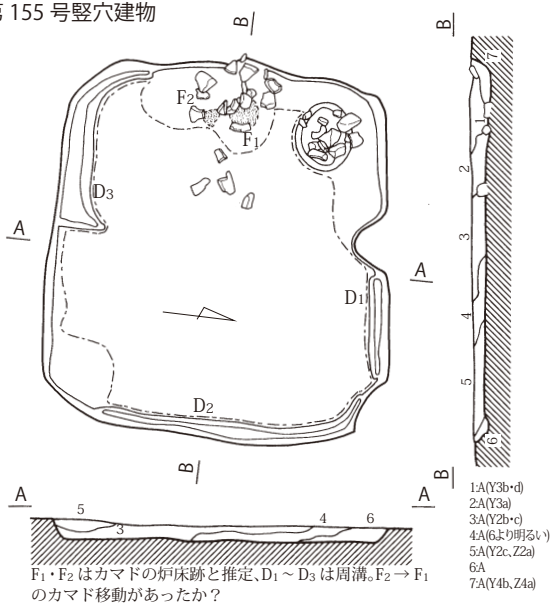
F₁ はカマドの炉床、D₁・D₂ は周溝、D₂ と P₁ で囲まれる範囲に旧住居があり F₂ はそのカマド炉床跡の可能性。

1Aa(Y3b-c)
2A(Y3b)
3A(13b)
4A(Y3b-d)
5A(Y3b-d)
6A(Y4b, Y3d)
7A(Y3a-d)
6C
8A
9Y

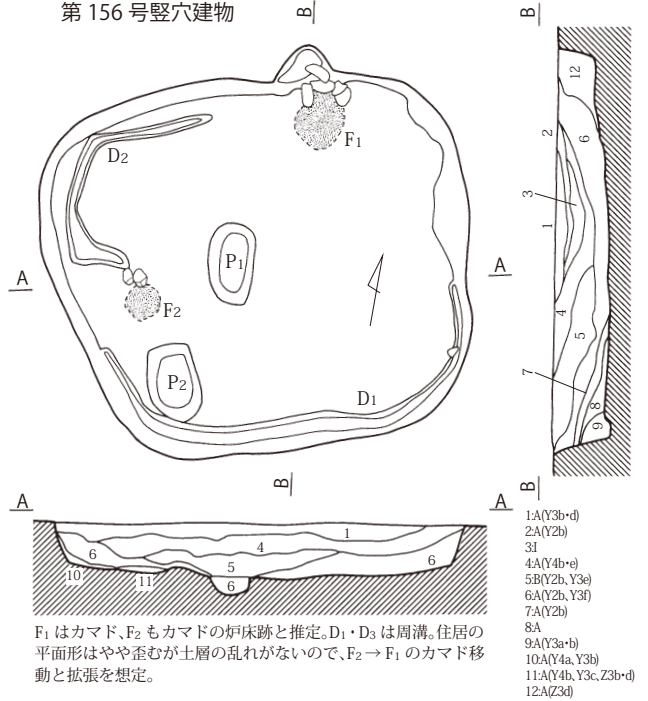
0 S=1/80 2m

第 39 図 竪穴建物 30 (第 149～154 号)

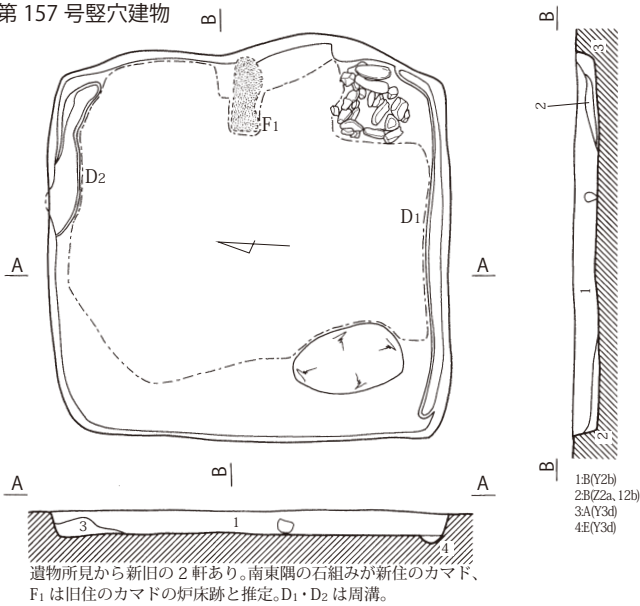
第 155 号 竪穴建物



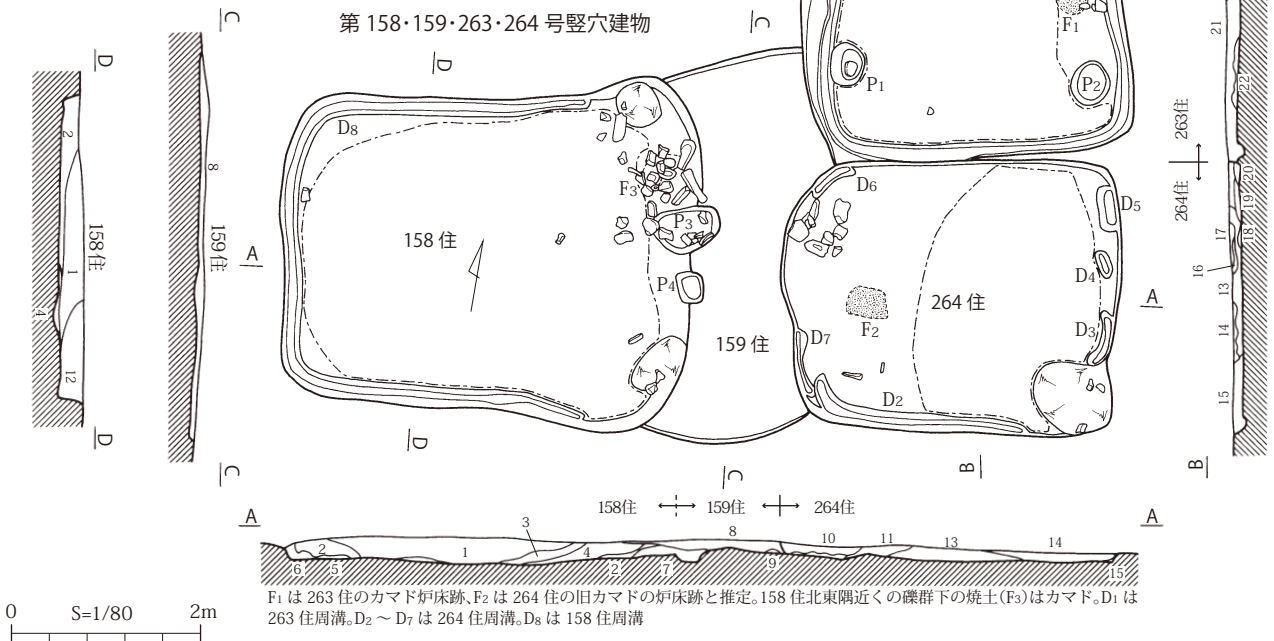
第 156 号 竪穴建物



第 157 号 竪穴建物



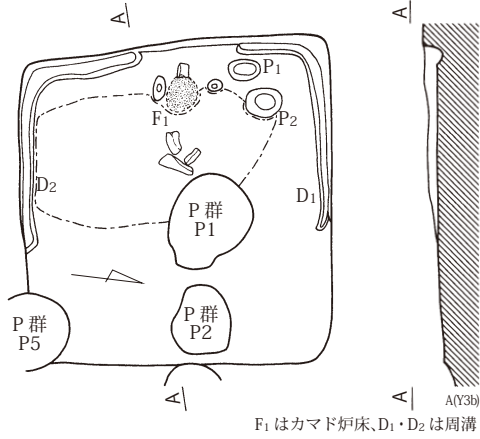
第 158・159・263・264 号 竪穴建物



0 S=1/80 2m

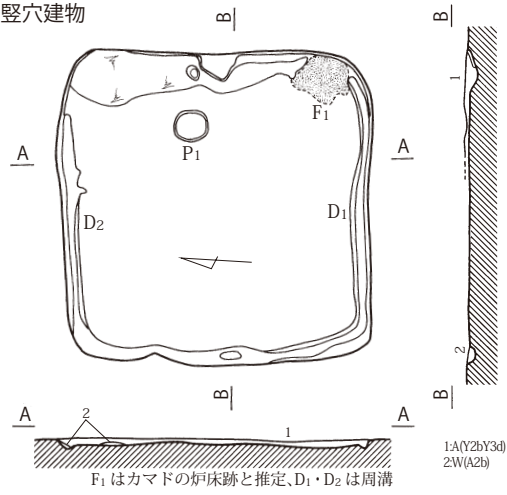
第 40 図 竪穴建物 31 (第 155 ～ 159・263・264 号)

第 160 号竪穴建物



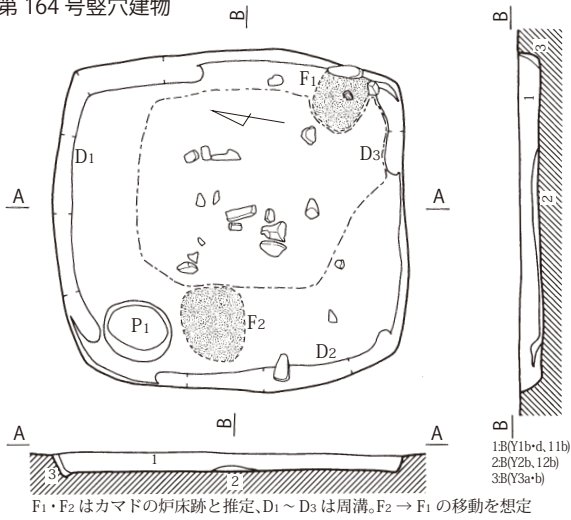
F₁ はカマド炉床、D₁・D₂ は周溝

第 162 号竪穴建物



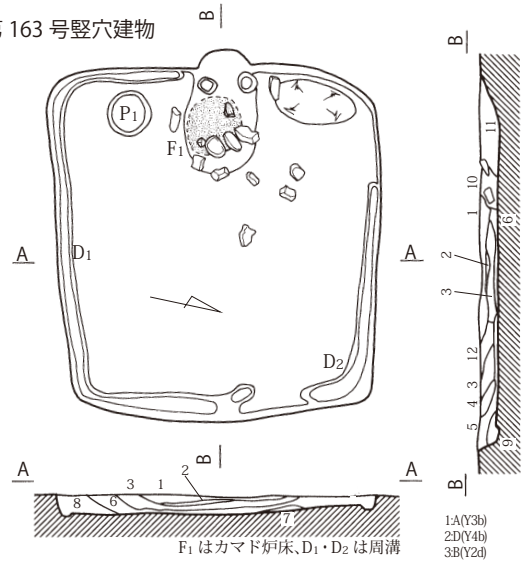
F₁ はカマドの炉床跡と推定、D₁・D₂ は周溝

第 164 号竪穴建物



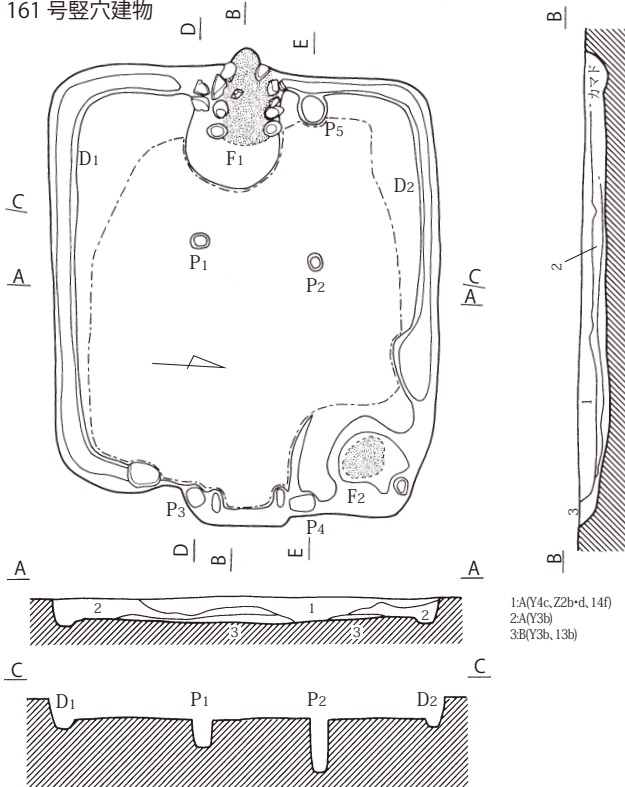
F₁・F₂ はカマドの炉床跡と推定、D₁～D₃ は周溝。F₂ → F₁ の移動を想定

第 163 号竪穴建物

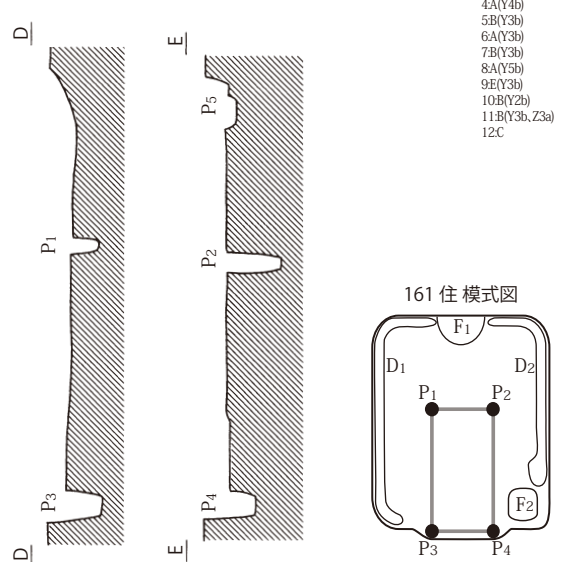


F₁ はカマド炉床、D₁・D₂ は周溝

第 161 号竪穴建物

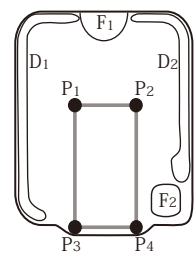


1:A(Y4c, Z2b-d, 14f)
2:A(Y3b)
3:B(Y3b, 13b)



1:A(Y3b)
2:D(Y4b)
3:B(Y2d)
4:A(Y4b)
5:B(Y3b)
6:A(Y3b)
7:B(Y3b)
8:A(Y5b)
9:E(Y3b)
10:B(Y2b)
11:B(Y3b, Z3a)
12:C

161 住 模 式 図

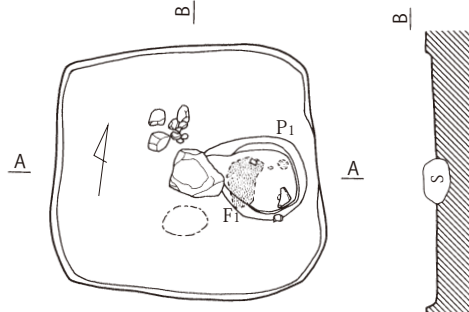


F₁ はカマドの炉床、F₂ も副炉的なカマド跡と推定。両者は同時存在した可能性を考えたい。P₁～P₄ は柱穴で長方形配列。P₃・P₄ は東壁の張り出し部にかかる。D₁・D₂ は周溝。

0 S=1/80 2m

第 41 図 竪穴建物 32 (第 160～164 号)

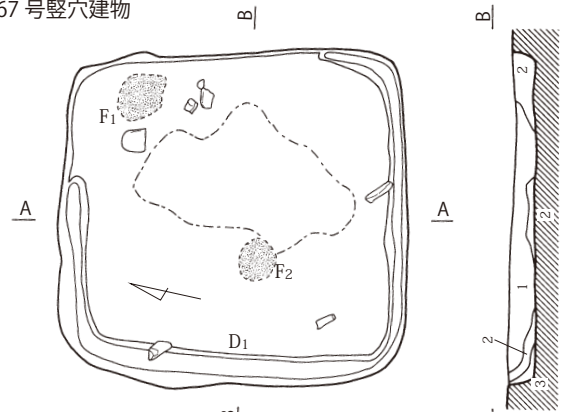
第 165 号竪穴建物



1:B(Y2b, 11b)
2:B(Y1c, 11b)
3:B(Y3b-d)
4:B(Y4b, Y3c)
5:B(Y3b)

カマドはなく、中央部に大石が据わる。石の上面は平坦で被熱・敲打痕が顕著。小範囲の床が硬いのみ。P₁ 側部に焼土 (F₁)、内部から鉄滓出土。鍛冶遺構か。

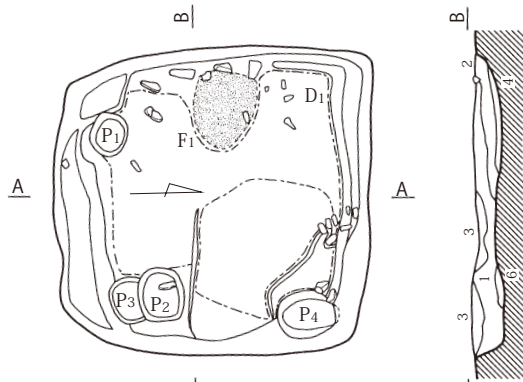
第 167 号竪穴建物



1:A(Y3e)
2:B
3:D

F₁ はカマドの炉床跡と推定、F₂ は用途不明、D₁ は周溝

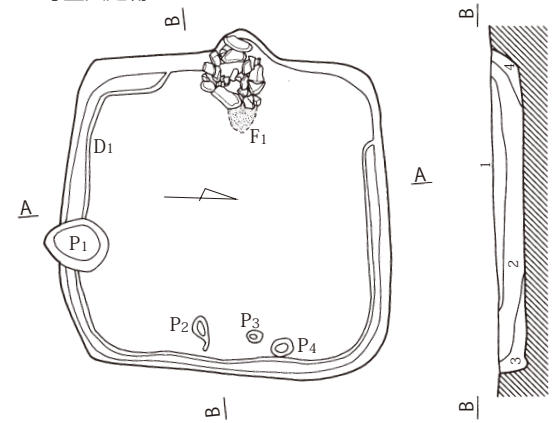
第 166 号竪穴建物



1:A(Y2b)
2:B(Y2h, Z2a)
3:B(A2e)
4:A(Y2b-d, Z2a)
5:B(Y2h)
6:A(Y2b-d)

F₁ はカマドの炉床、D₁ は周溝。南壁と南西隅に段。

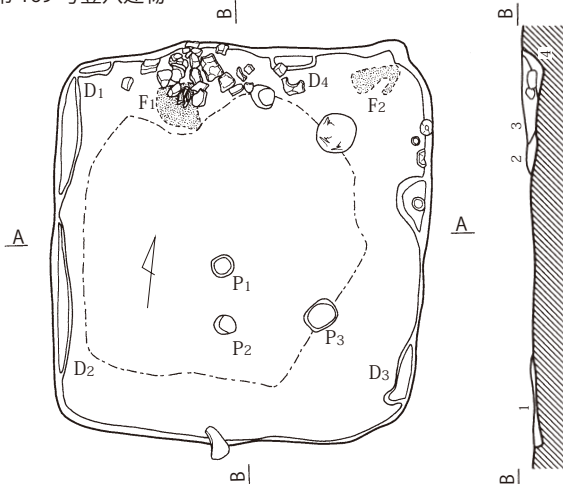
第 168 号竪穴建物



1:A(Y2b, Y3c, N3b-d)
2:A(Y2b, Y3c, N2d)
3:A(Y3c)
4:A(Z3b)
5:D

F₁ はカマドの炉床、D₁ は周溝

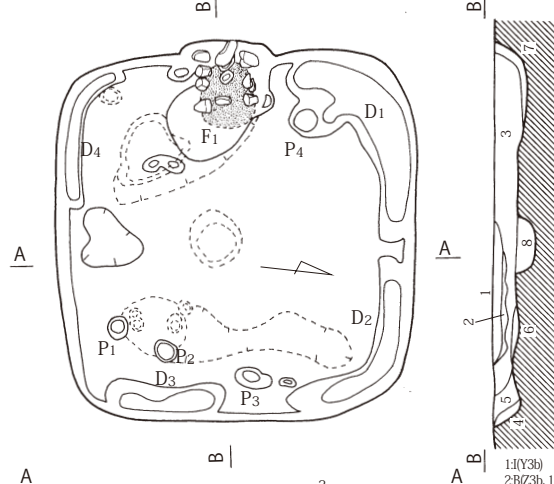
第 169 号竪穴建物



1:B
2:A
3:A(Y2c)
4:A(Y3c)

F₁ はカマドの炉床、F₂ もカマドの炉床跡と推定。
D₁ ~ D₄ は周溝。

第 170 号竪穴建物



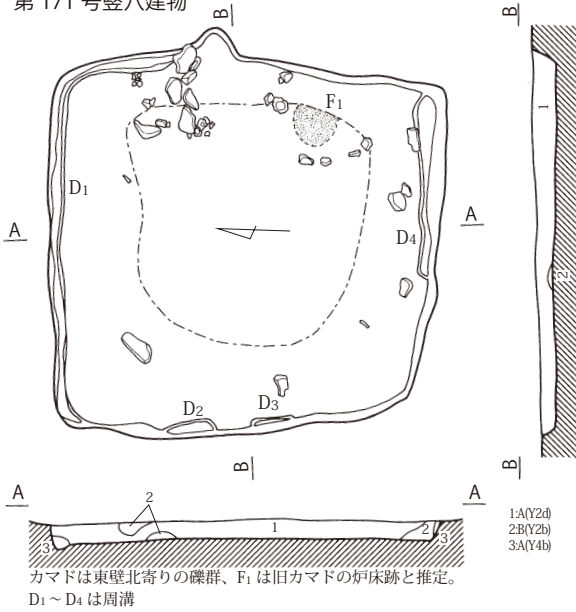
1:I(Y3b)
2:B(Z3b, 13b)
3:A(Y3c)
4:A(Y4b)
5:A(Y3b-d)
6:A(Y4d)
7:A(Z3b-d)
8:B

F₁ はカマドの炉床、D₁ ~ D₄ は周溝。点線は床下で確認されたピットや掘り方。

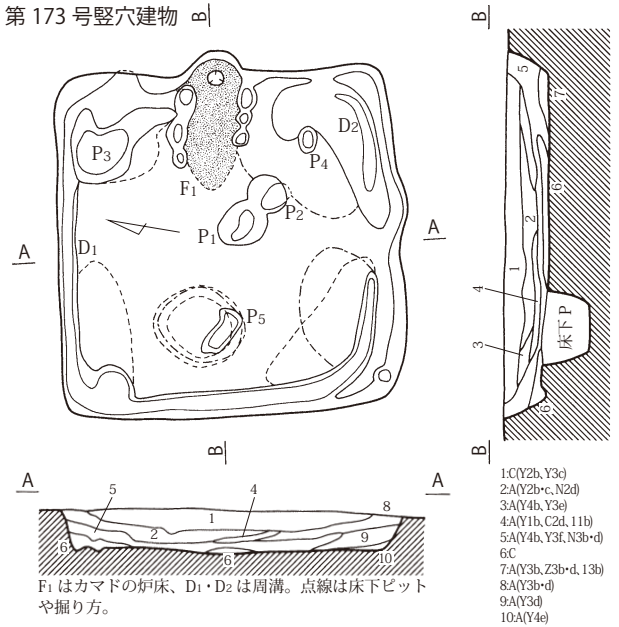
0 S=1/80 2m

第 42 図 竪穴建物 33 (第 165 ~ 170 号)

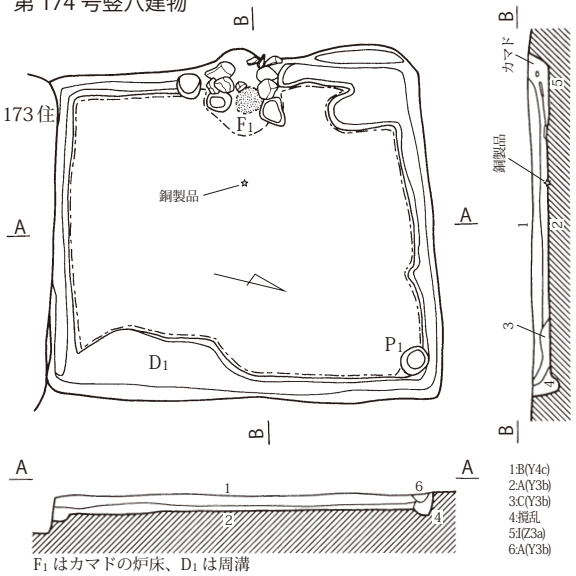
第 171 号 竪穴建物



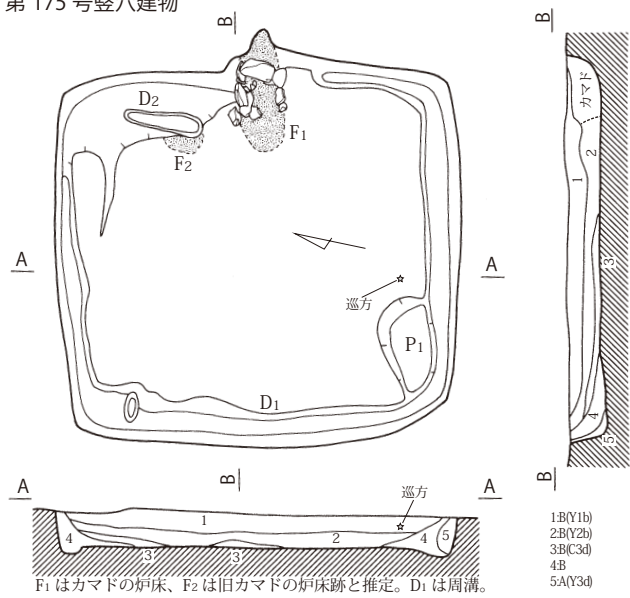
第 173 号 竪穴建物



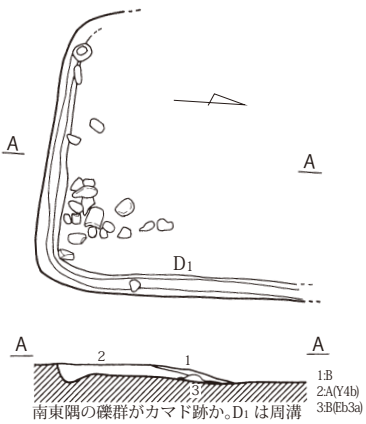
第 174 号 竪穴建物



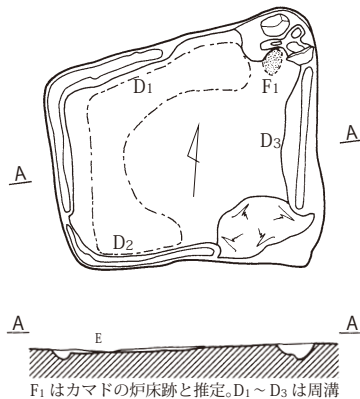
第 175 号 竪穴建物



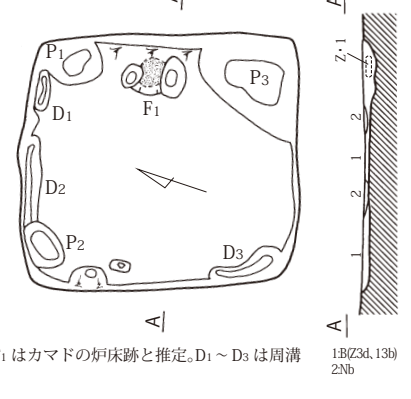
第 177 号 竪穴建物



第 176 号 竪穴建物



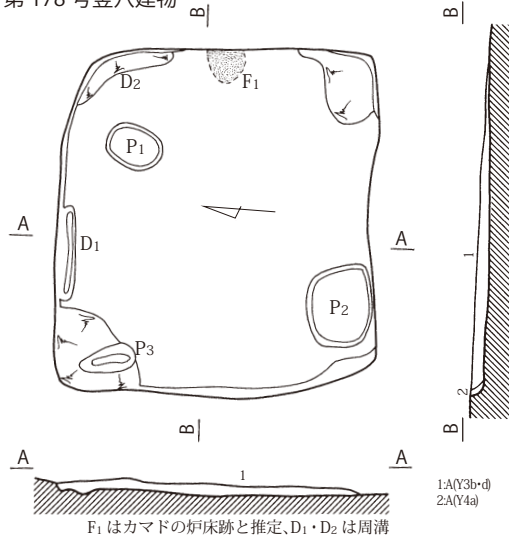
第 172 号 竪穴建物



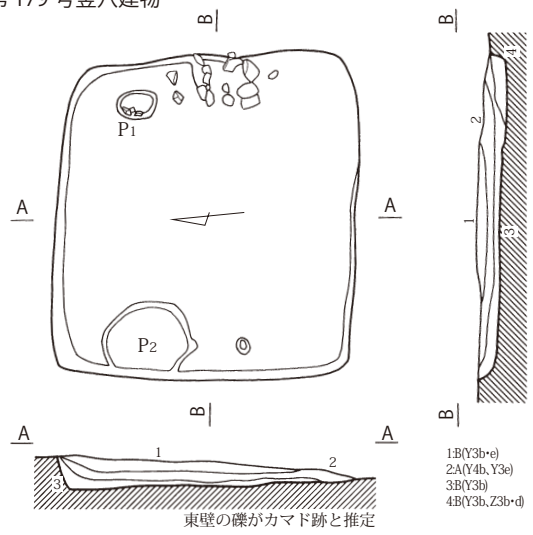
第 43 図 竪穴建物 34 (第 171 ～ 177 号)

0 S=1/80 2m

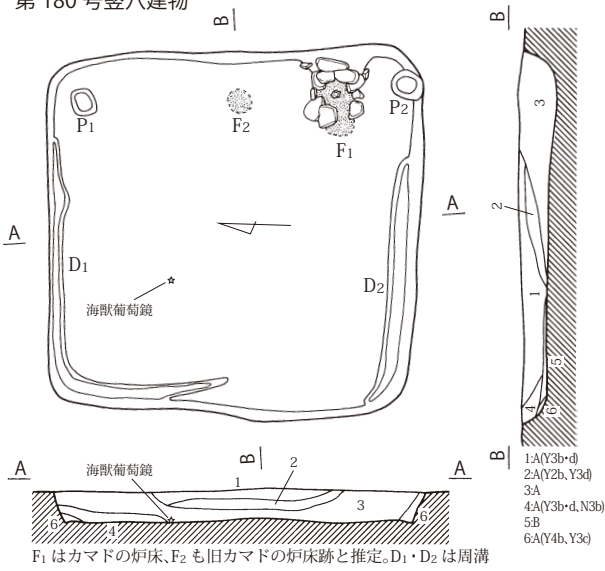
第 178 号 竪穴建物



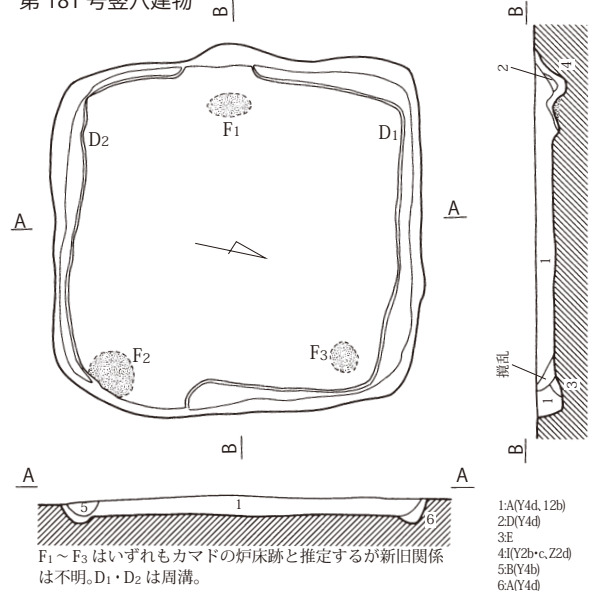
第 179 号 竪穴建物



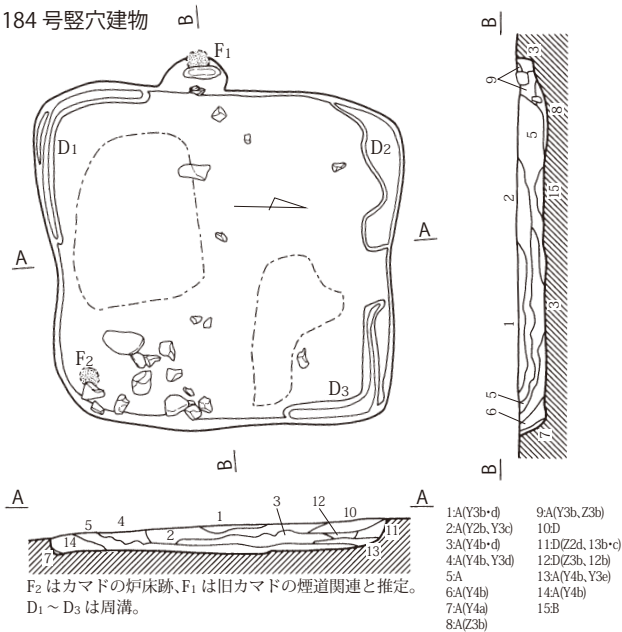
第 180 号 竪穴建物



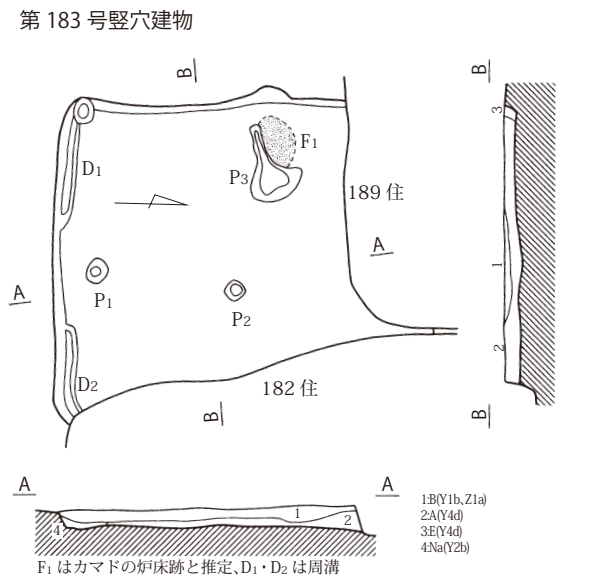
第 181 号 竪穴建物



第 184 号 竪穴建物



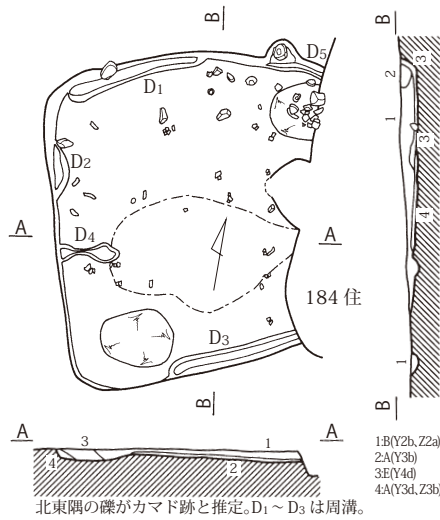
第 183 号 竪穴建物



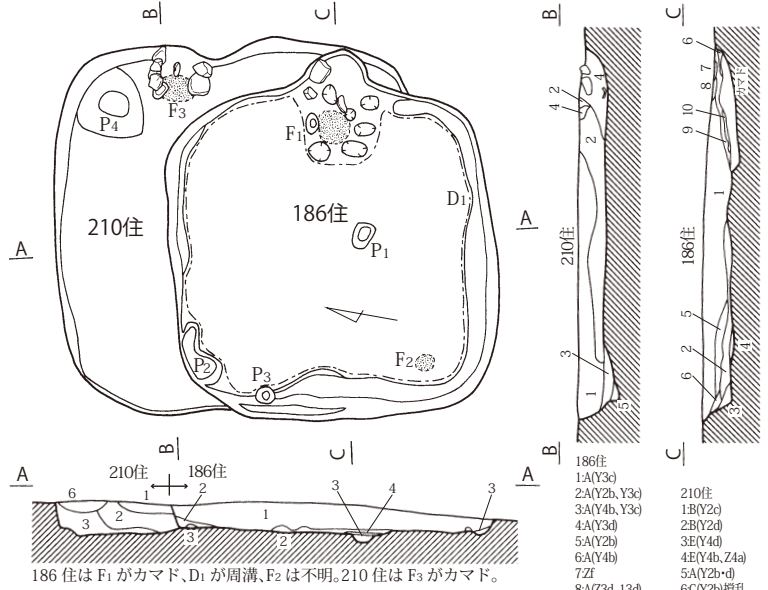
0 S=1/80 2m

第 44 図 竪穴建物 35 (第 178 ～ 181・183・184 号)

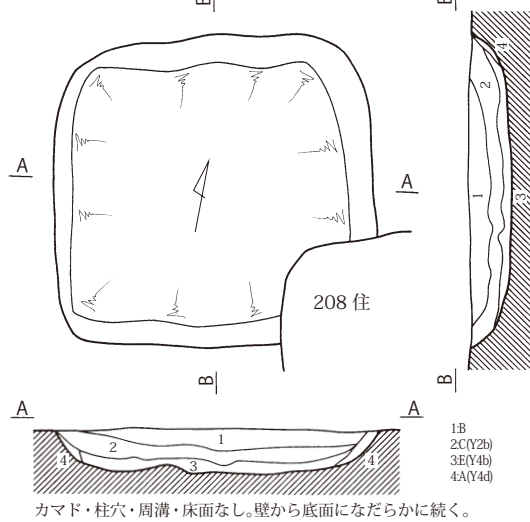
第 185 号竪穴建物



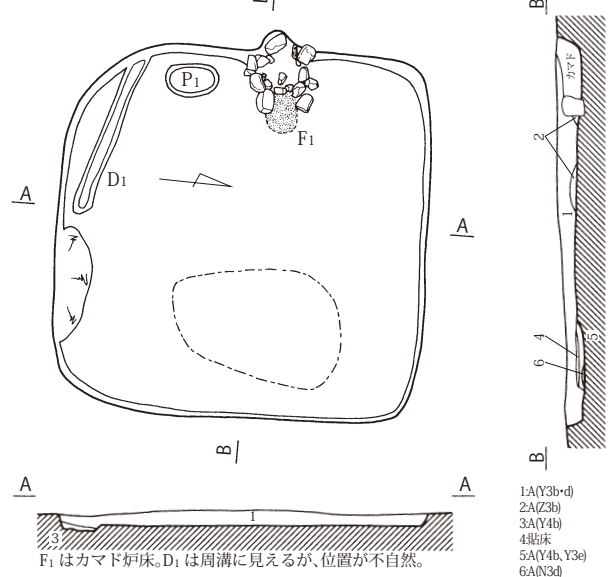
第 186・210 号竪穴建物



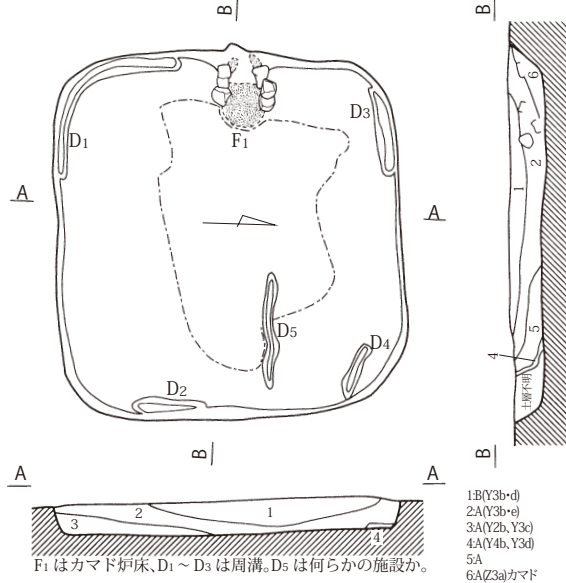
第 187 号竪穴建物



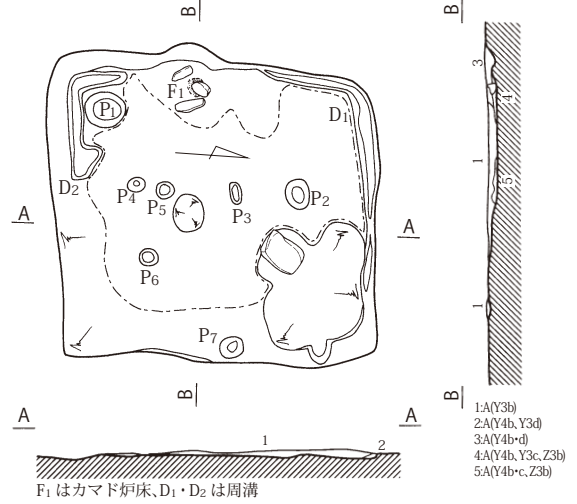
第 188 号竪穴建物



第 189 号竪穴建物



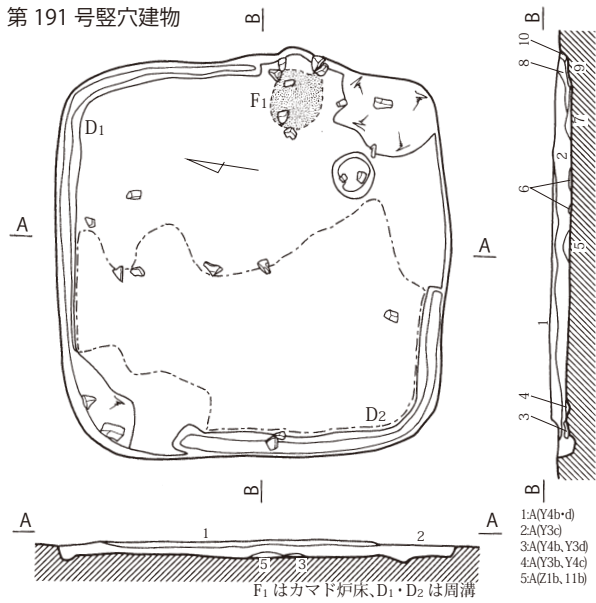
第 190 号竪穴建物



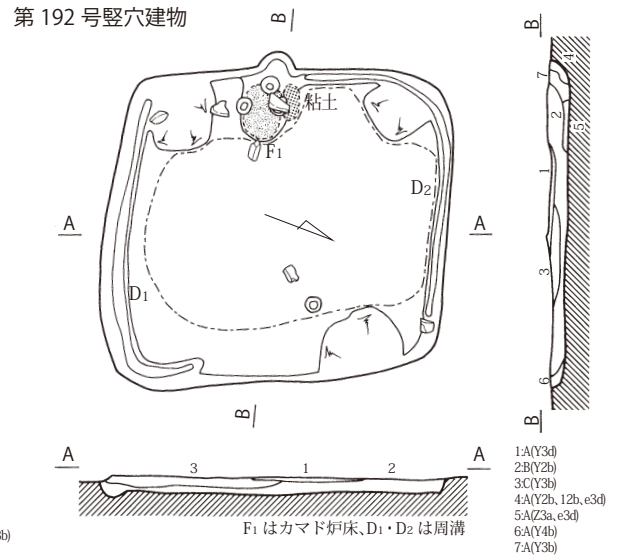
0 S=1/80 2m

第 45 図 竪穴建物 36 (第 185 ~ 190・210 号)

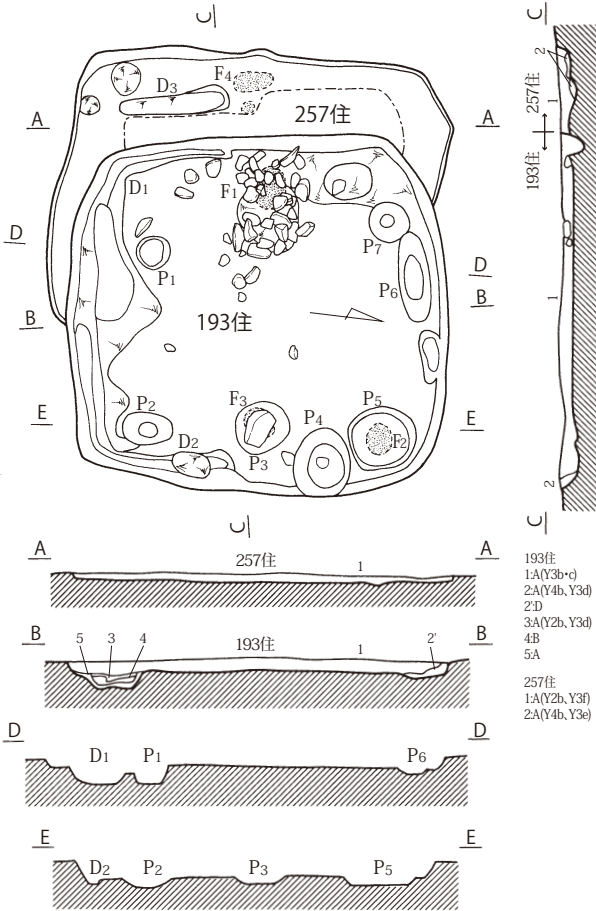
第 191 号竪穴建物



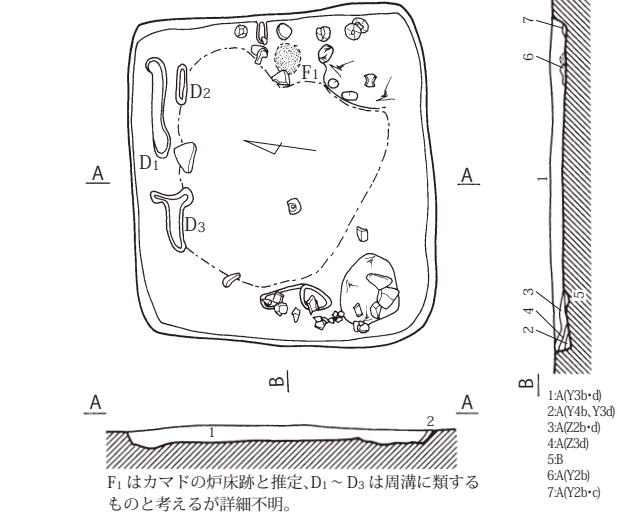
第 192 号竪穴建物



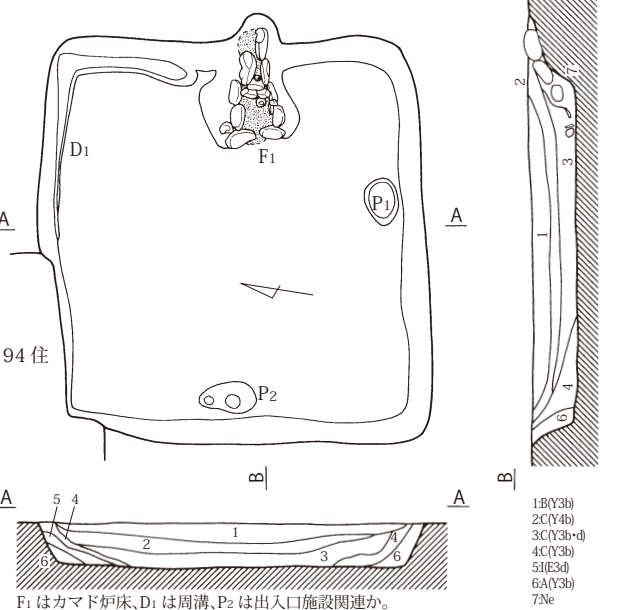
第 193・257 号竪穴建物



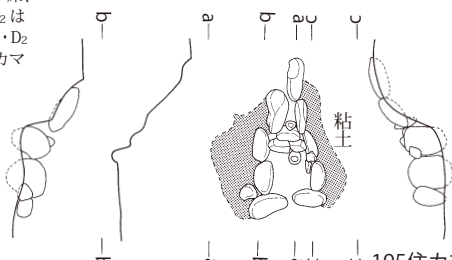
第 194 号竪穴建物



第 195 号竪穴建物



F₁ は 193 住のカマド炉床、
F₃ は旧カマド炉床跡、F₂ は
副炉的な痕跡と推定。D₁・D₂
は周溝。F₄ は 257 住のカマ
ド炉床跡と推定。

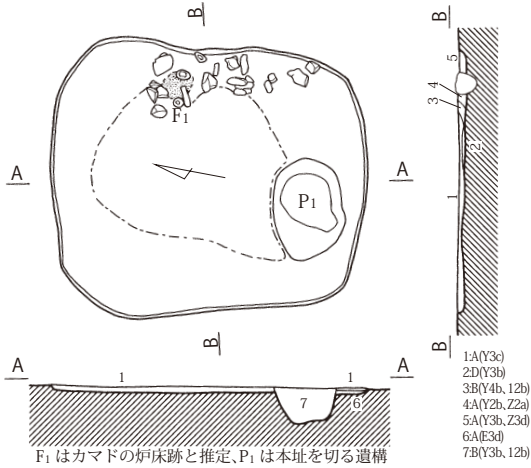


0 S=1/60 1m

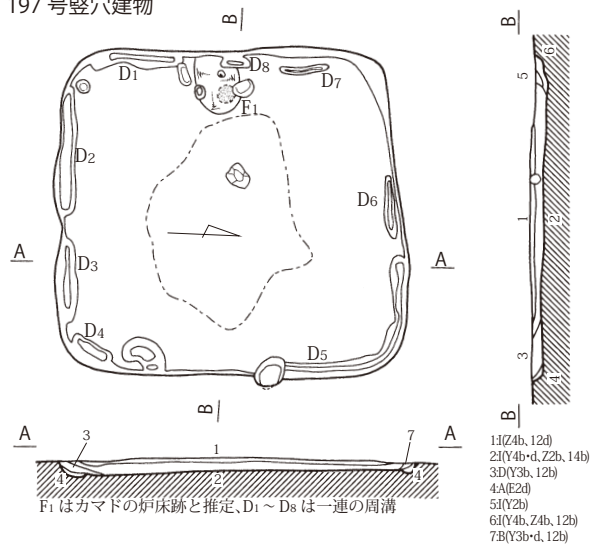
0 S=1/80 2m

第 46 図 竪穴建物 37 (第 191 ~ 195・257 号)

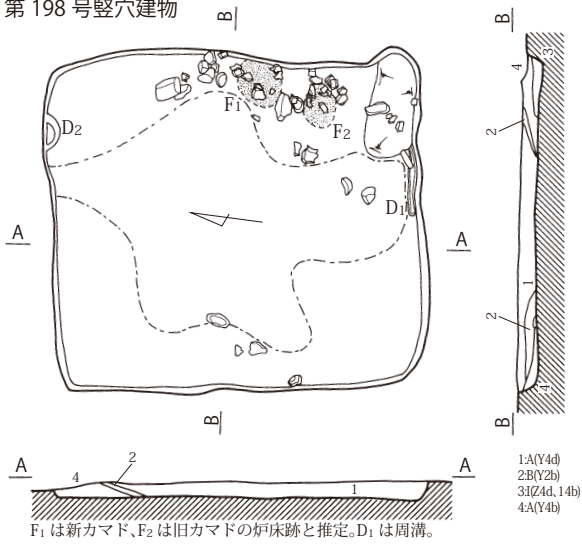
第 196 号竪穴建物



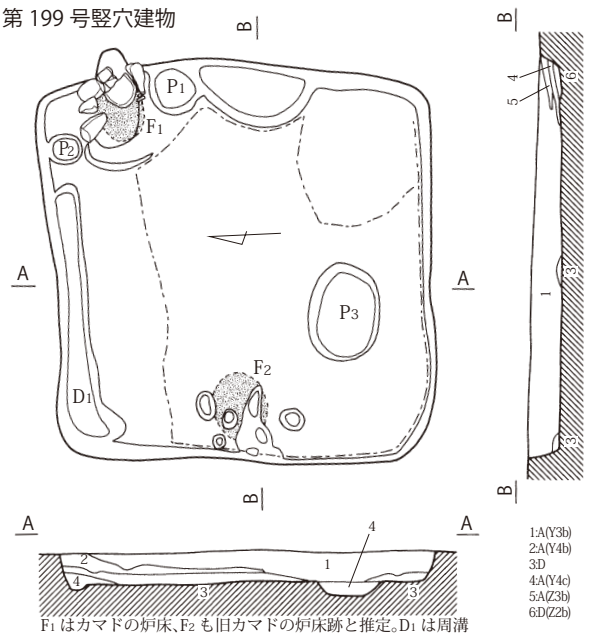
第 197 号竪穴建物



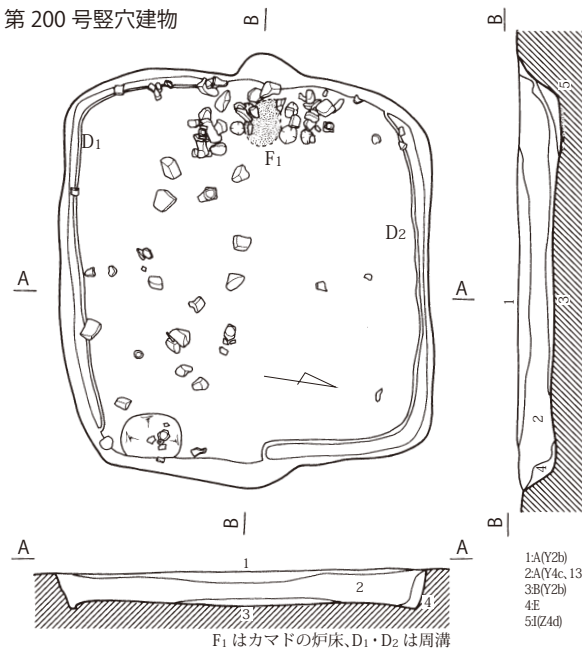
第 198 号竪穴建物



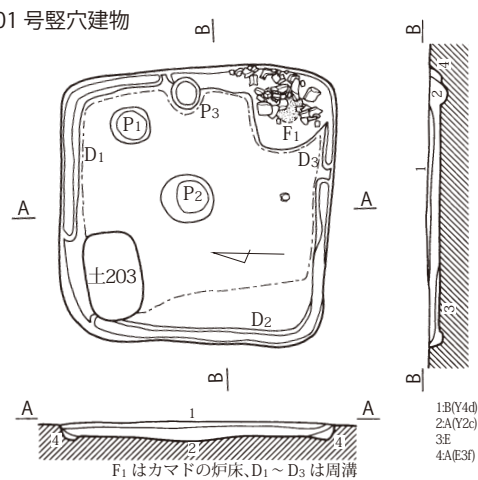
第 199 号竪穴建物



第 200 号竪穴建物



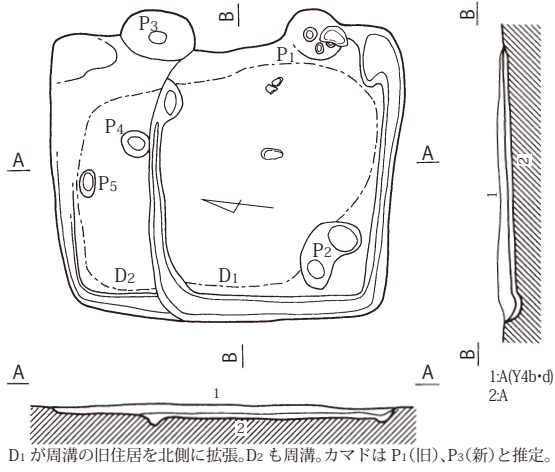
第 201 号竪穴建物



0 S=1/80 2m

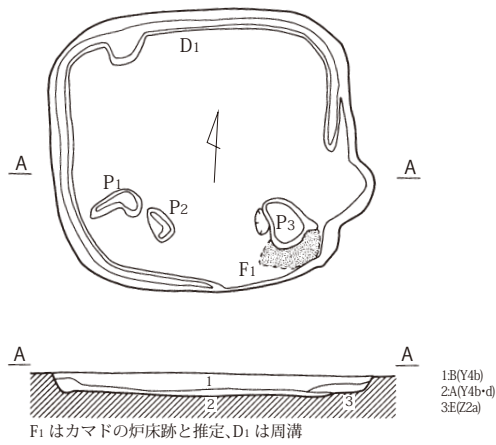
第 47 図 竪穴建物 38 (第 196 ~ 201 号)

第 202 号竪穴建物



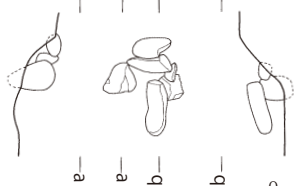
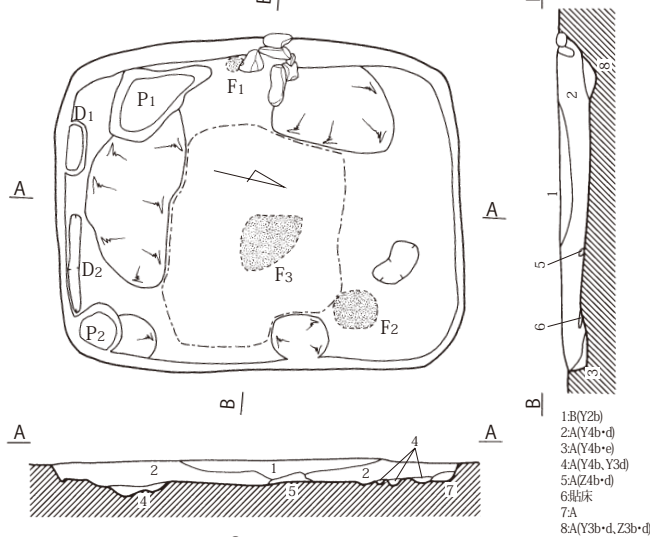
D1 が周溝の旧住居を北側に拡張。D2 も周溝。カマドは P1(旧)、P3(新)と推定。

第 204 号竪穴建物



F1 はカマドの炉床跡と推定、D1 は周溝

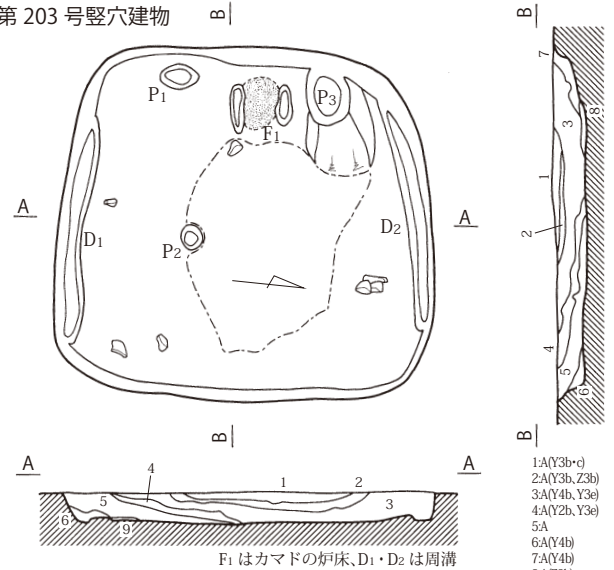
第 205 号竪穴建物



F1 はカマド、F2 は旧カマドの炉床跡で北壁方向に拡張があったと推定。F3 は床中央部の焚火跡。D1・D2 は周溝。大きな浅い窪みは床下の掘り方。

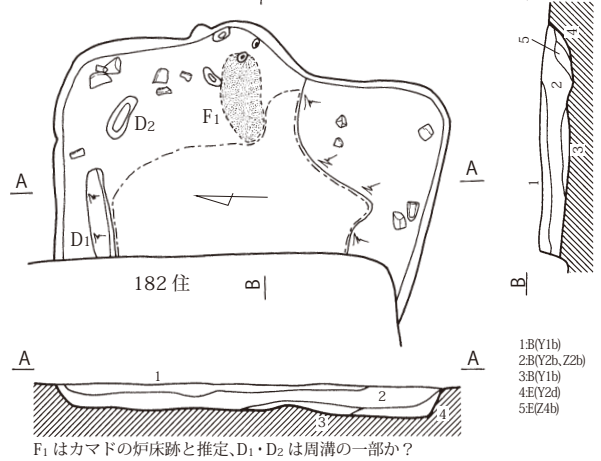
0 S=1/60 1m

第 203 号竪穴建物



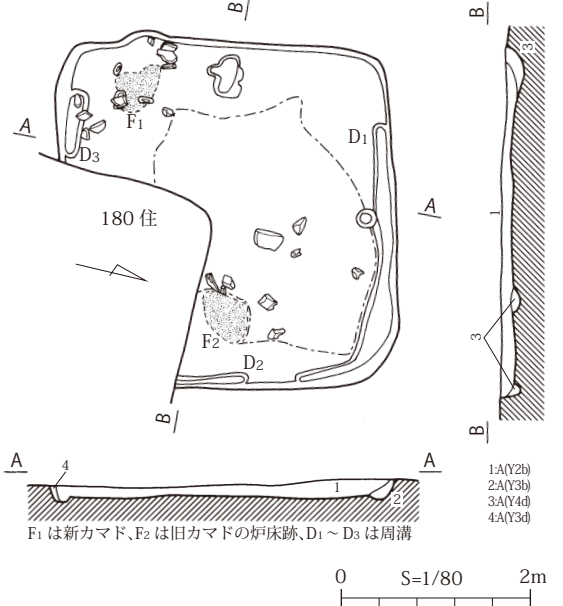
F1 はカマドの炉床、D1・D2 は周溝

第 206 号竪穴建物



F1 はカマドの炉床跡と推定、D1・D2 は周溝の一部か？

第 207 号竪穴建物

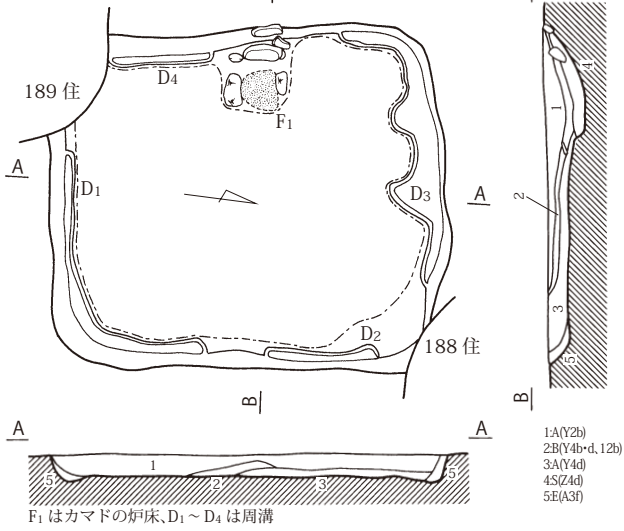


F1 は新カマド、F2 は旧カマドの炉床跡、D1～D3 は周溝

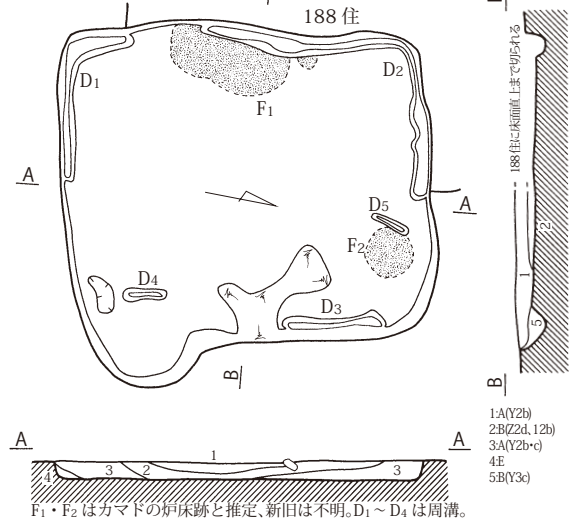
0 S=1/80 2m

第 48 図 竪穴建物 39 (第 202 ~ 207 号)

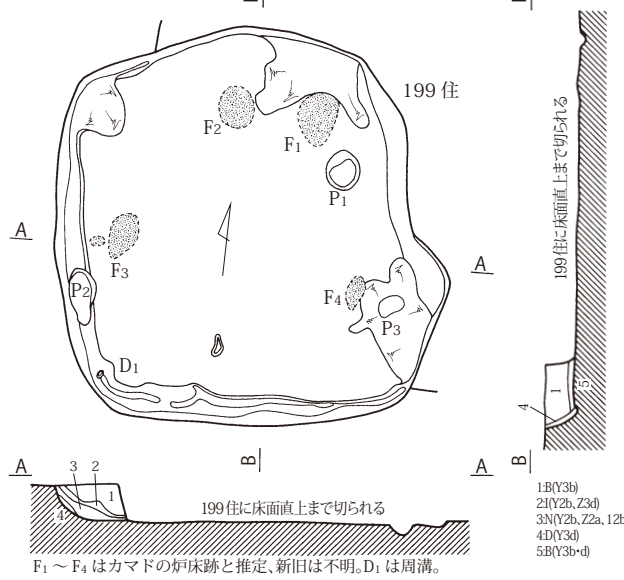
第 208 号竪穴建物



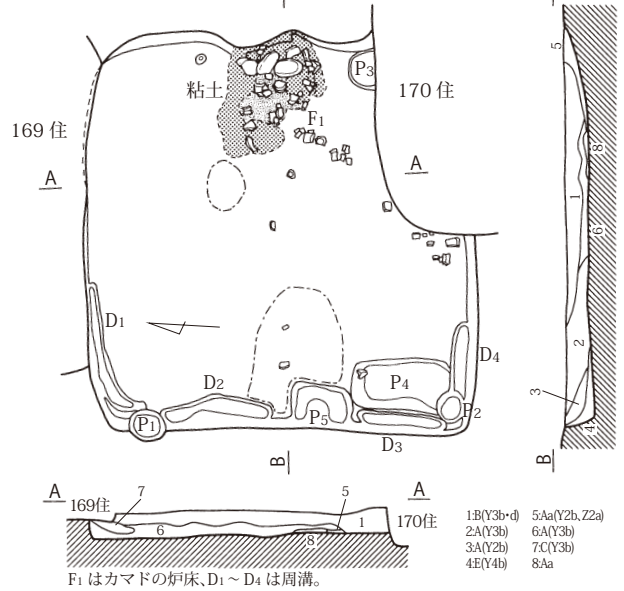
第 209 号竪穴建物



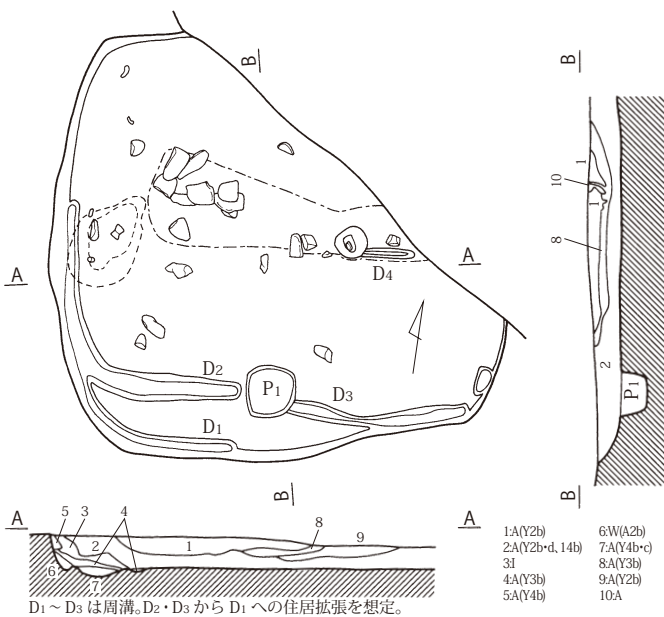
第 211 号竪穴建物



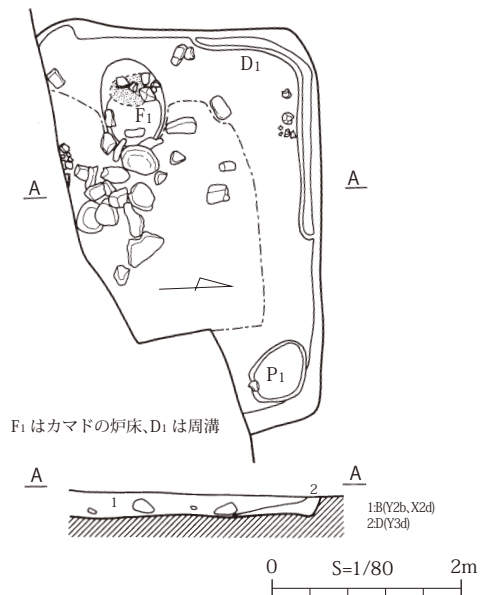
第 212 号竪穴建物



第 213 号竪穴建物

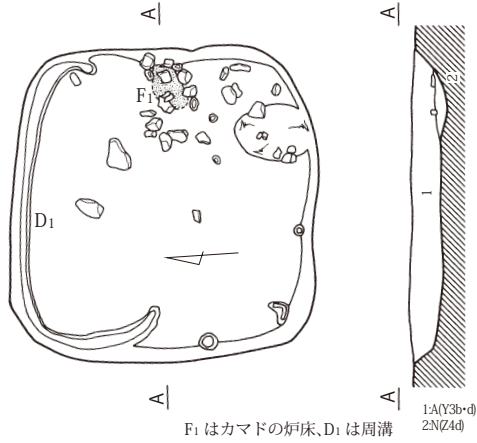


第 214 号竪穴建物



第 49 図 竪穴建物 40 (第 208・209・211～214 号)

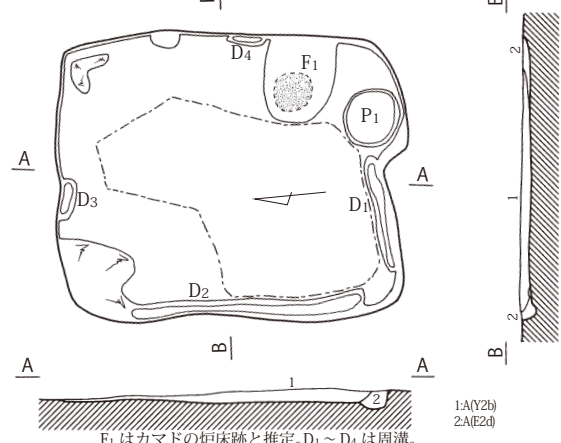
第 215 号竪穴建物



F₁ はカマドの炉床、D₁ は周溝

1A(Y3b-d)
2N(Z4d)

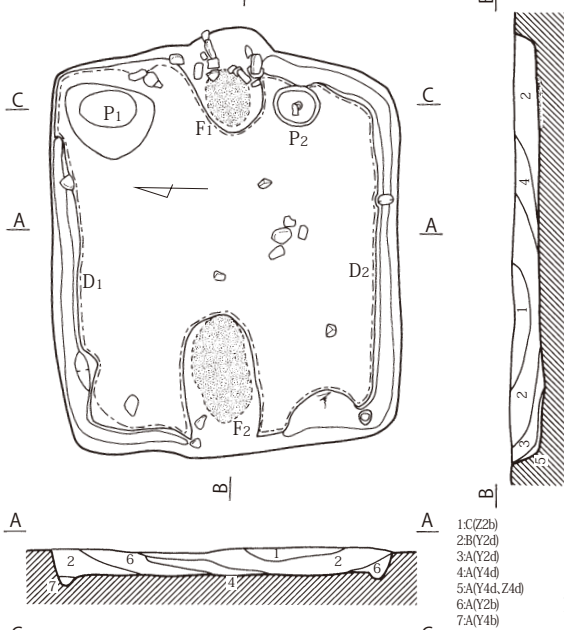
第 216 号竪穴建物



F₁ はカマドの炉床跡と推定、D₁ ~ D₄ は周溝。

1A(Y2b)
2A(E2d)

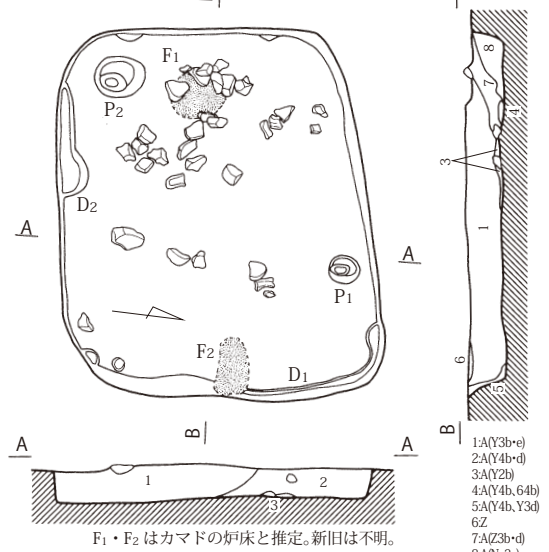
第 217 号竪穴建物



1C(Z2b)
2B(Y2d)
3A(Y2d)
4A(Y4d)
5A(Y4d, Z4d)
6A(Y2b)
7A(Y4b)

F₁ はカマドの炉床、F₂ は旧カマドの炉床跡と推定、D₁・D₂ は周溝。

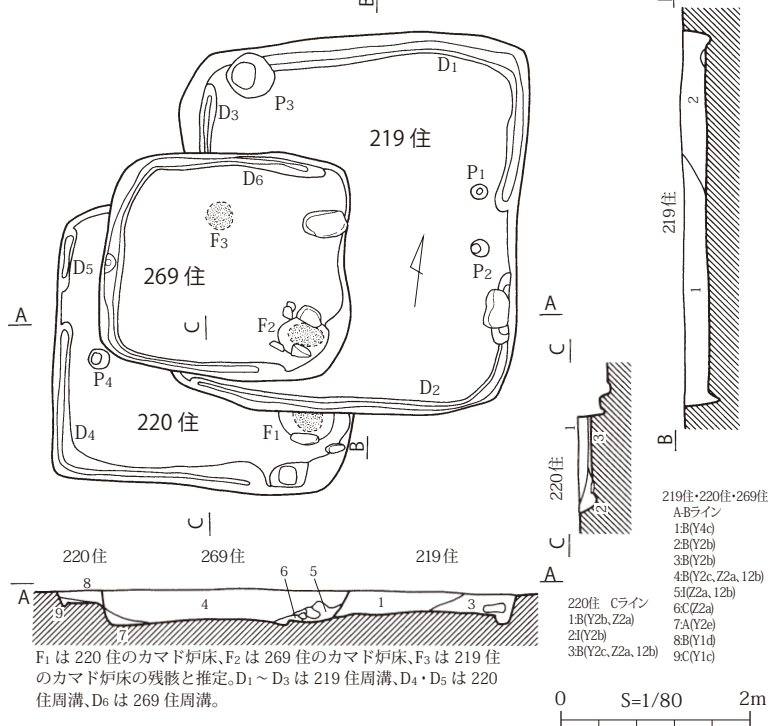
第 221 号竪穴建物



F₁・F₂ はカマドの炉床と推定。新旧は不明。

1A(Y3b-e)
2A(Y4b-d)
3A(Y2b)
4A(Y4b, 64b)
5A(Y4b, Y3d)
6Z
7A(Z3b-d)
8A(Na3a)

第 219・220・269 号竪穴建物



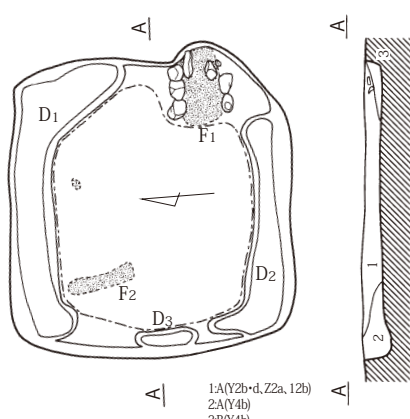
F₁ は 220 住のカマド炉床、F₂ は 269 住のカマド炉床、F₃ は 219 住のカマド炉床の残骸と推定、D₁ ~ D₃ は 219 住周溝、D₄・D₅ は 220 住周溝、D₆ は 269 住周溝。

219住・220住・269住
A: Bライン
1B(V4c)
2B(V2b)
3B(V2b)
4B(V2c, Z2a, 12b)
5I(Z2a, 12b)
6C(Z2a)
7A(Y2b, Z2a)
2I(V2b)
8B(Y1d)
9C(Y1c)

220住 Cライン
1B(Y2b, Z2a)
2I(V2b)
3B(Y2c, Z2a, 12b)

0 S=1/80 2m

第 218 号竪穴建物

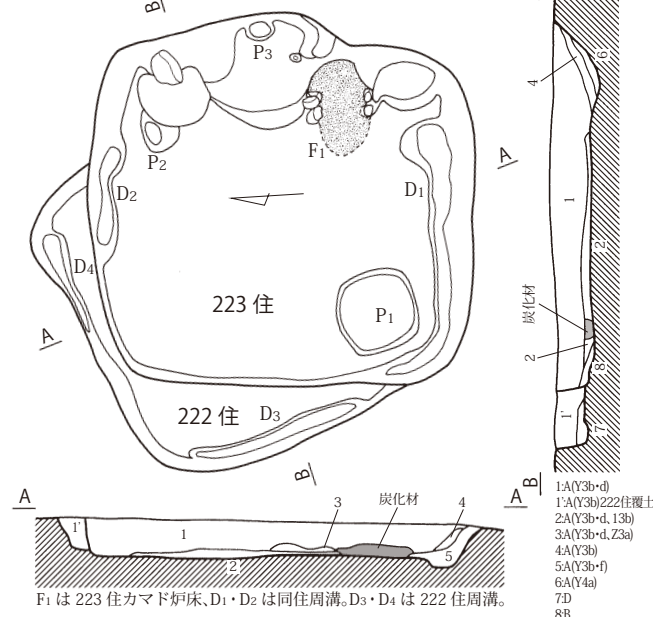


1A(Y2b-d, Z2a, 12b)
2A(Y4b)
3B(Y4b)

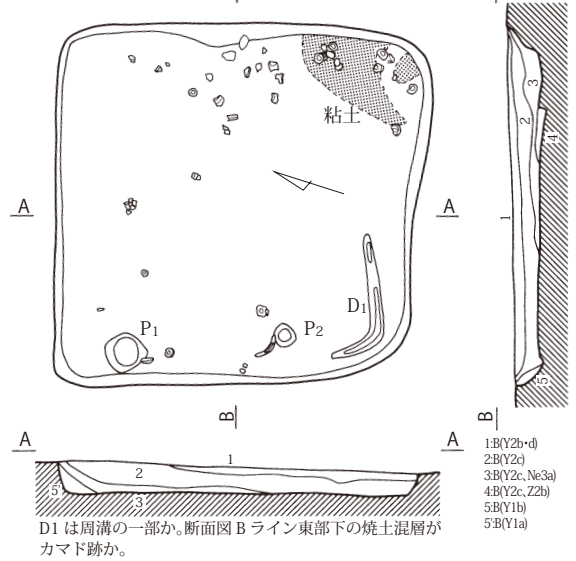
F₁ はカマドの炉床、F₂ は旧カマドの炉床跡と推定、D₁ ~ D₃ は周溝。

第 50 図 竪穴建物 41 (第 215 ~ 221・269 号)

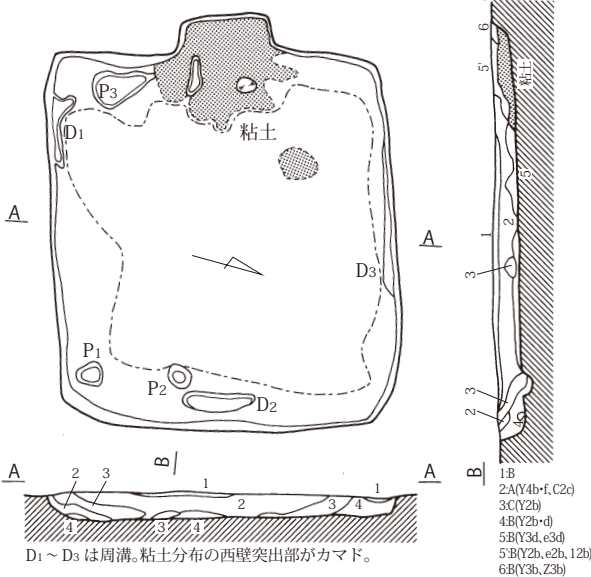
第 222・223 号竪穴建物



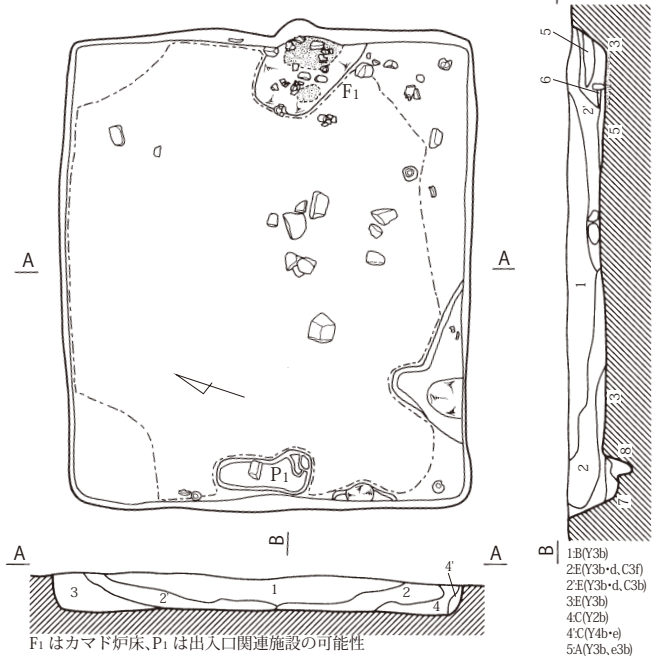
第 224 号竪穴建物



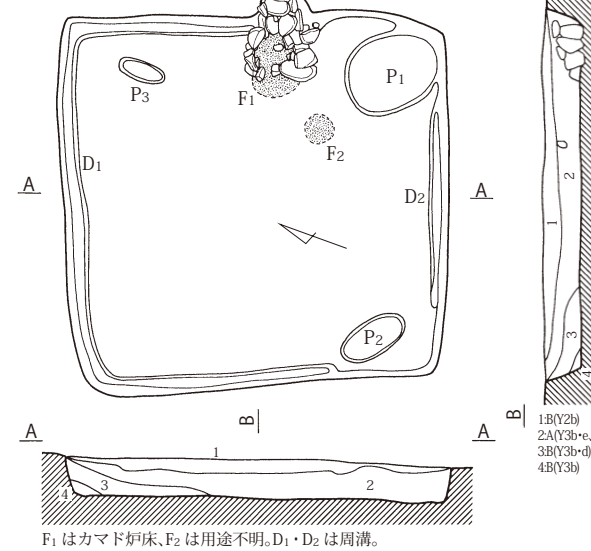
第 228 号竪穴建物



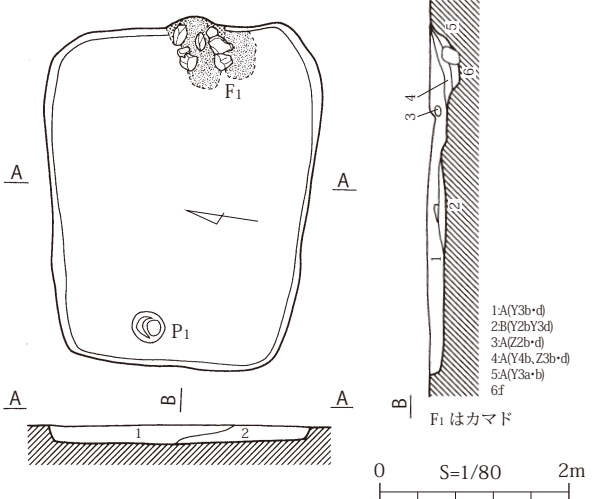
第 226 号竪穴建物



第 225 号竪穴建物

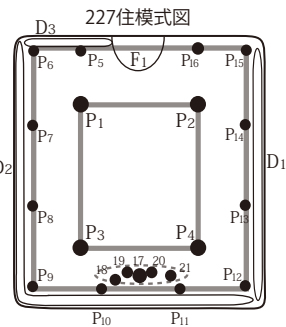
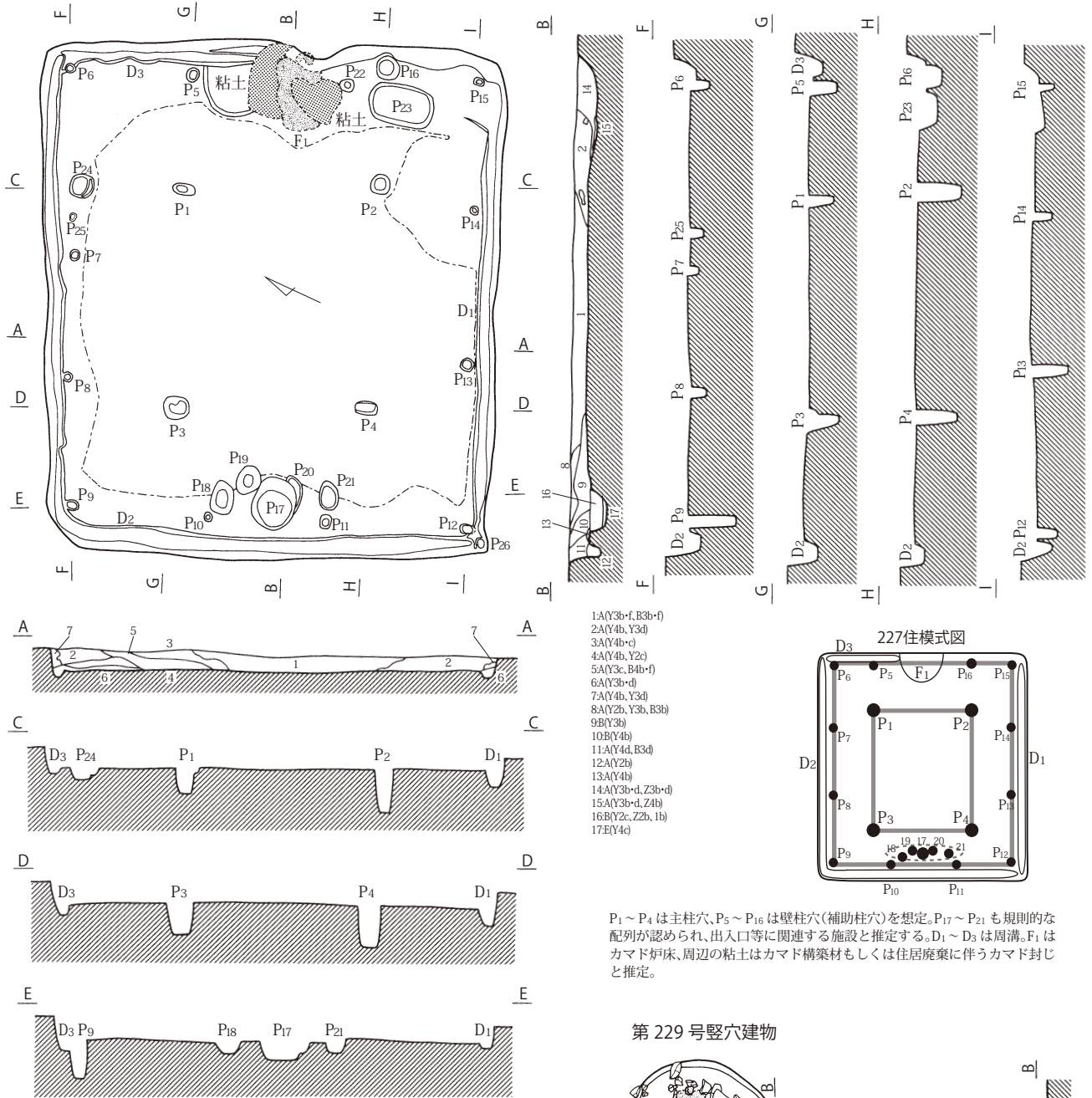


第 231 号竪穴建物



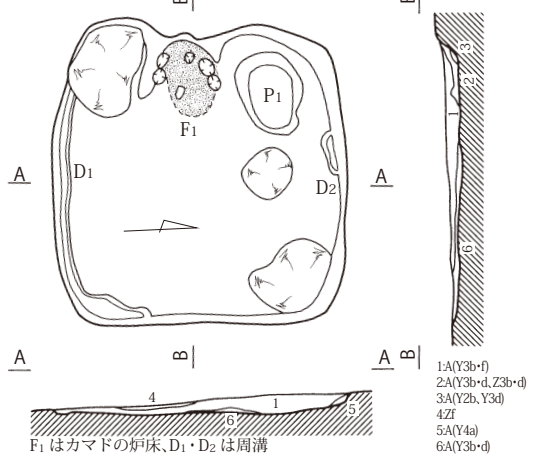
第 51 図 竪穴建物 42 (第 222 ~ 226・228・231 号)

第 227 号竪穴建物

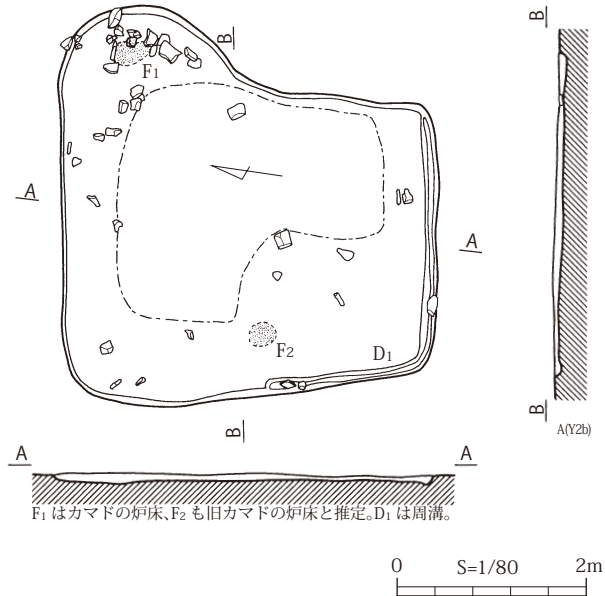


P1 ~ P4 は主柱穴、P5 ~ P16 は壁柱穴(補助柱穴)を想定。P17 ~ P21 も規則的な配列が認められ、出入口等に関連する施設と推定する。D1 ~ D3 は周溝。F1 はカマド炉床、周辺の粘土はカマド構築材もしくは住居廃棄に伴うカマド封じと推定。

第 230 号竪穴建物

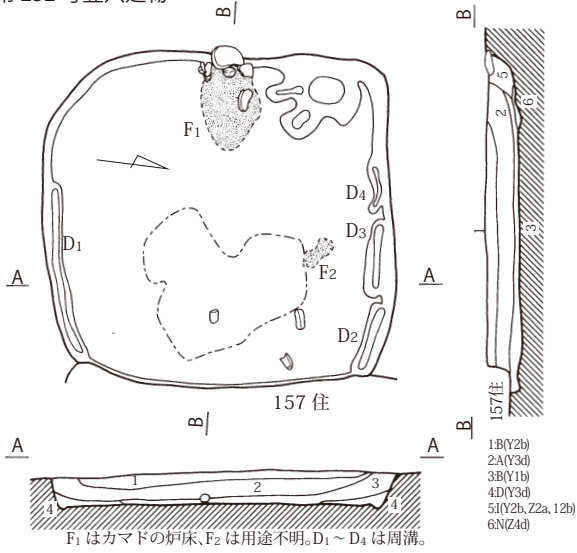


第 229 号竪穴建物

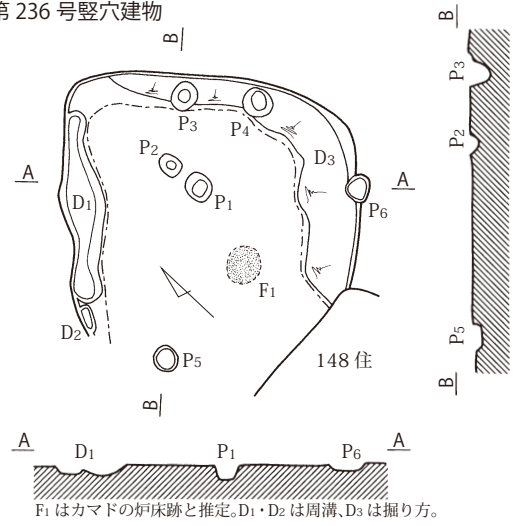


第 52 図 竪穴建物 43 (第 227・229・230 号)

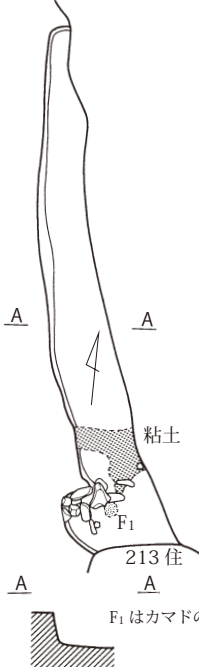
第 232 号竪穴建物



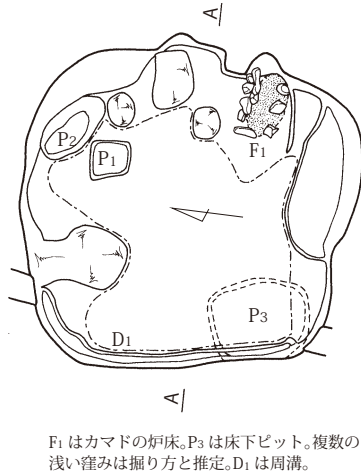
第 236 号竪穴建物



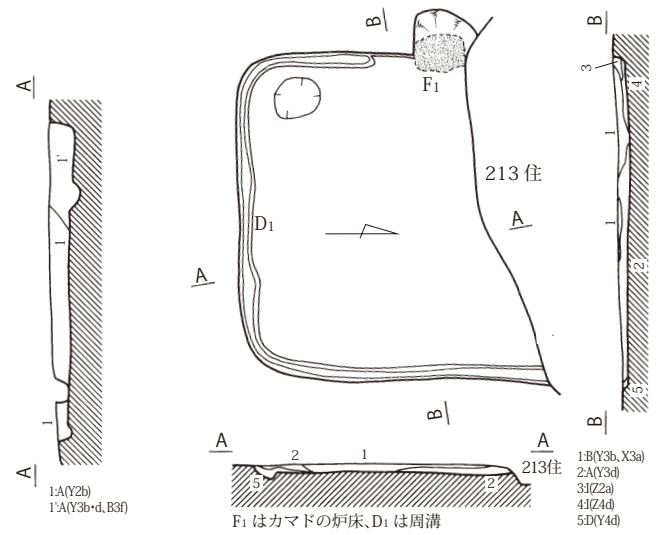
第 234 号竪穴建物



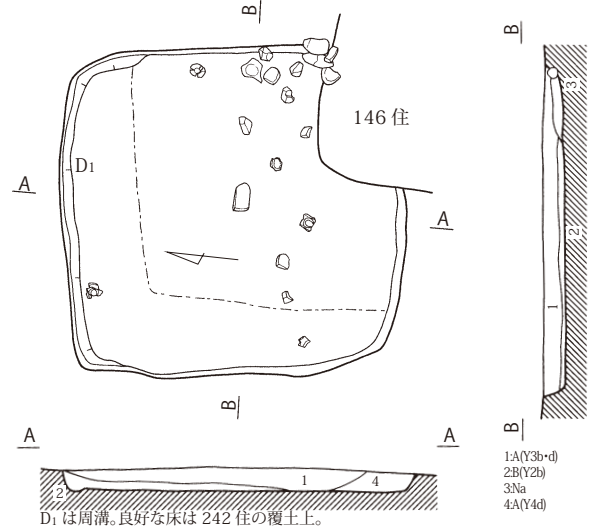
第 235 号竪穴建物



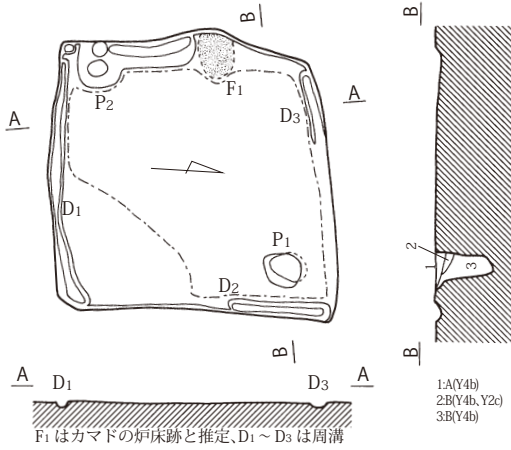
第 233 号竪穴建物



第 238 号竪穴建物



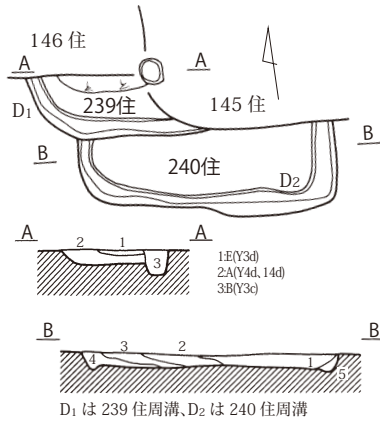
第 237 号竪穴建物



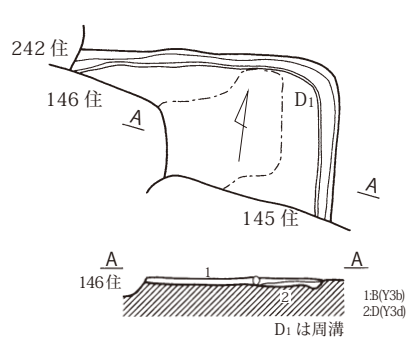
0 S=1/80 2m

第 53 図 竪穴建物 44 (第 232 ~ 238 号)

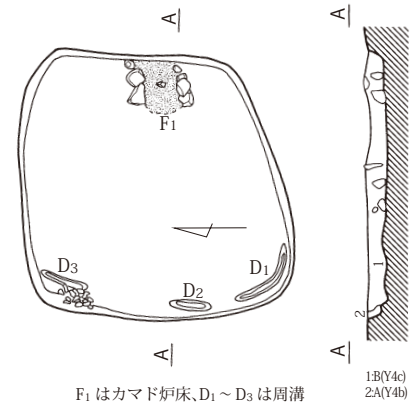
第 239・240 号竪穴建物



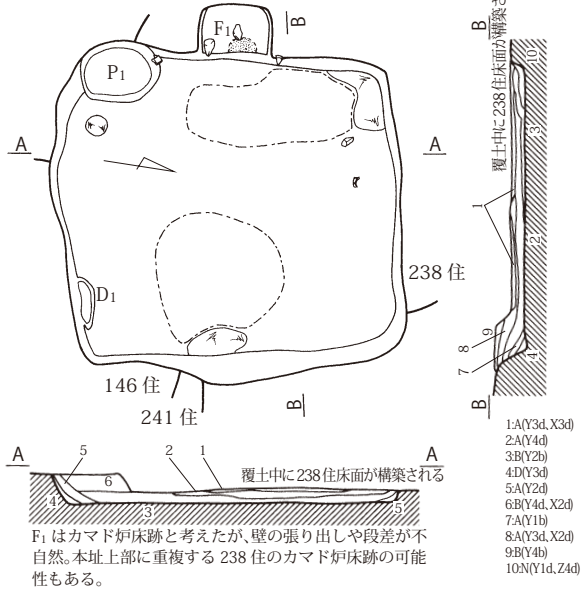
第 241 号竪穴建物



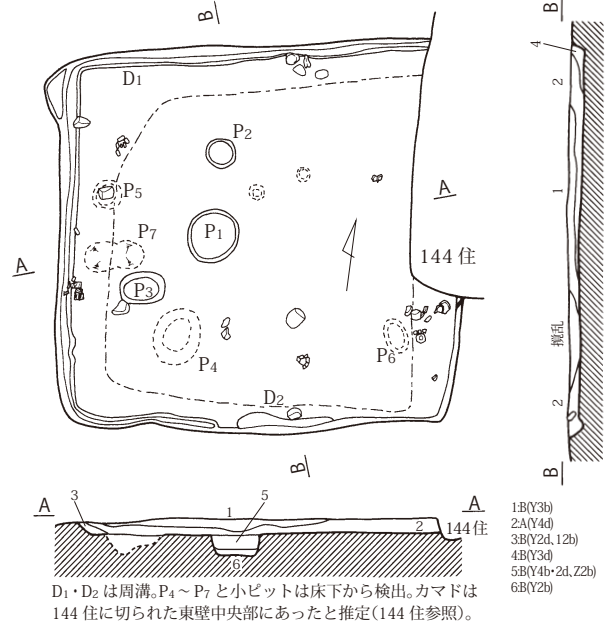
第 243 号竪穴建物



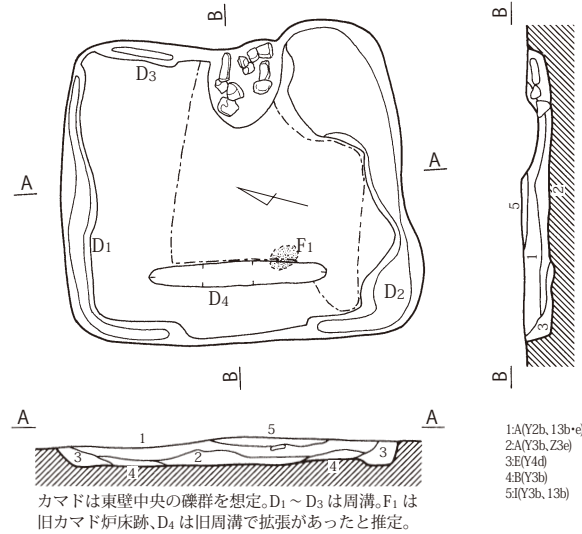
第 242 号竪穴建物



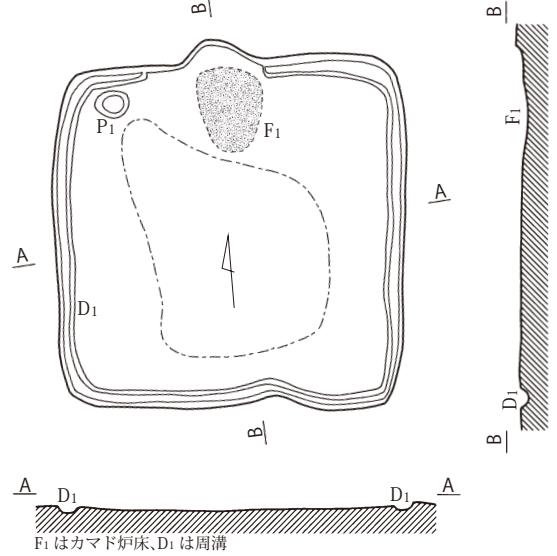
第 244 号竪穴建物



第 245 号竪穴建物



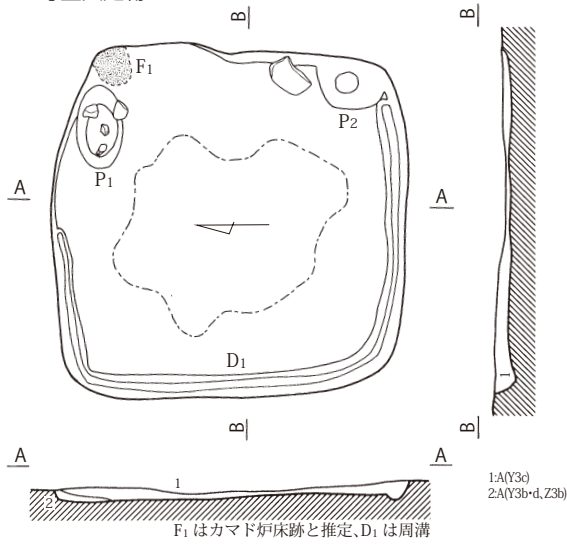
第 246 号竪穴建物



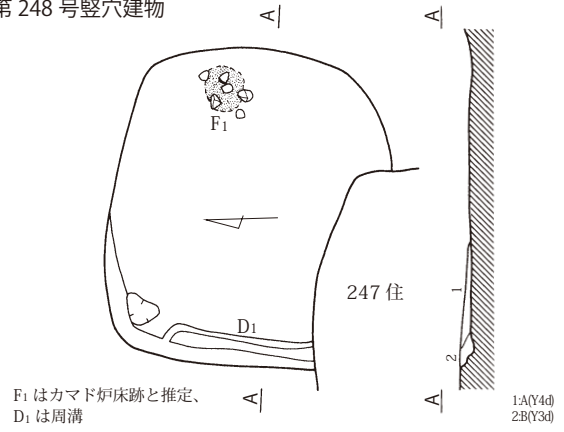
0 S=1/80 2m

第 54 図 竪穴建物 45 (第 239～246 号)

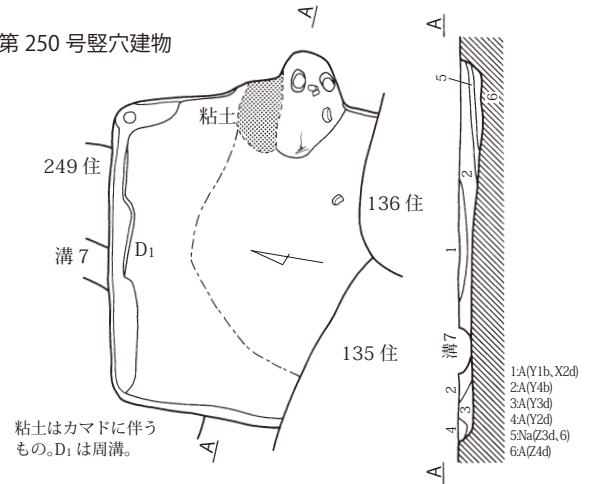
第 247 号竪穴建物



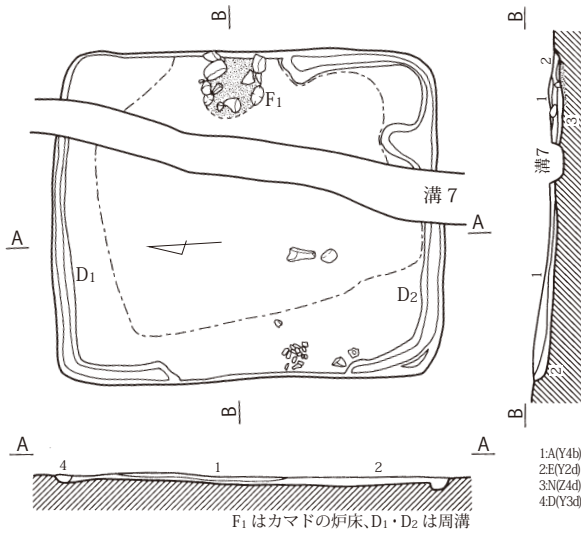
第 248 号竪穴建物



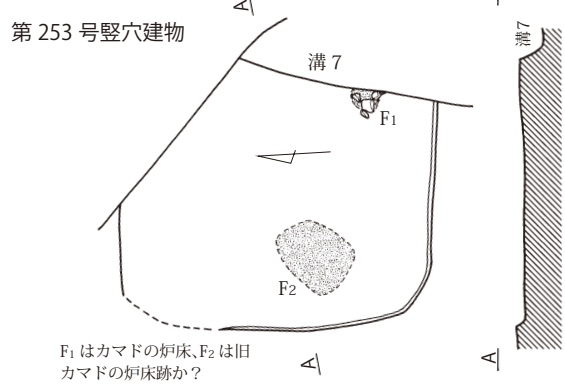
第 250 号竪穴建物



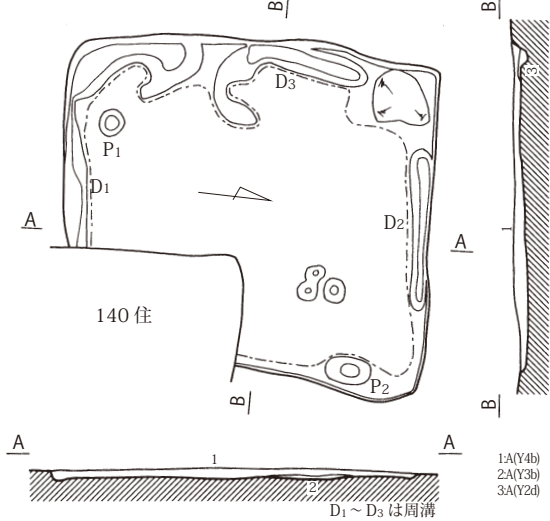
第 249 号竪穴建物



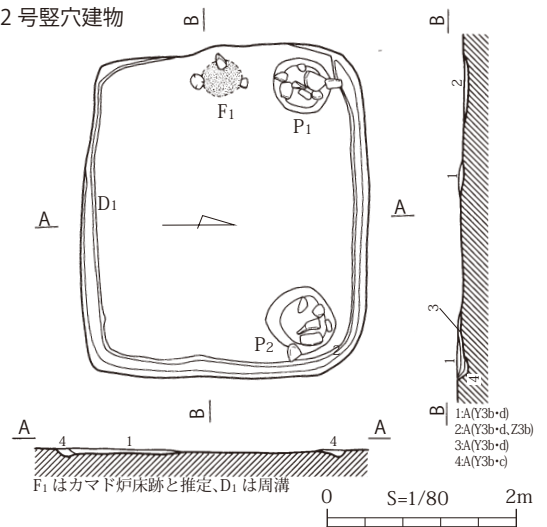
第 253 号竪穴建物



第 251 号竪穴建物

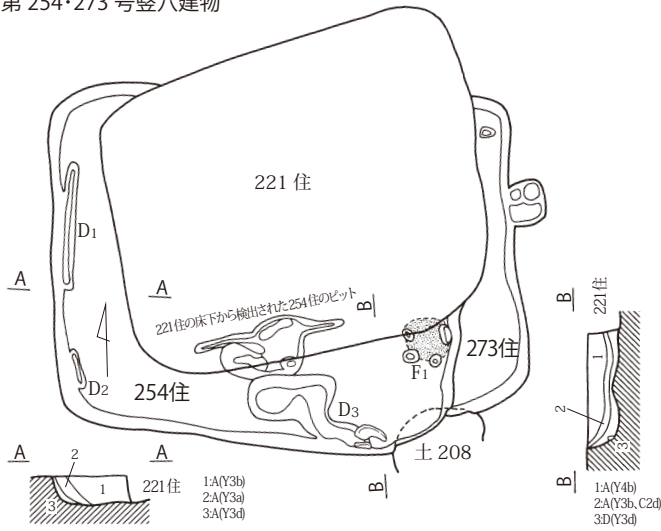


第 252 号竪穴建物



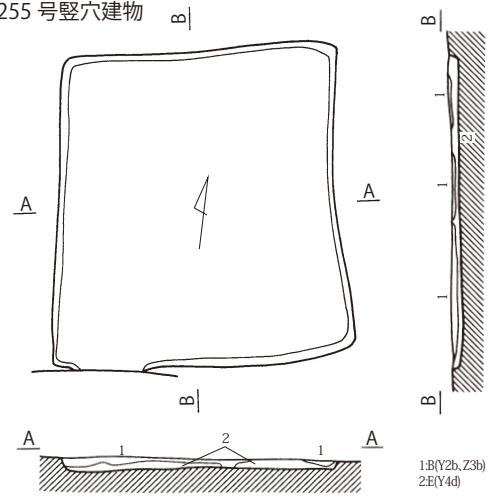
第 55 図 竪穴建物 46 (第 247 ~ 253 号)

第 254・273 号竪穴建物

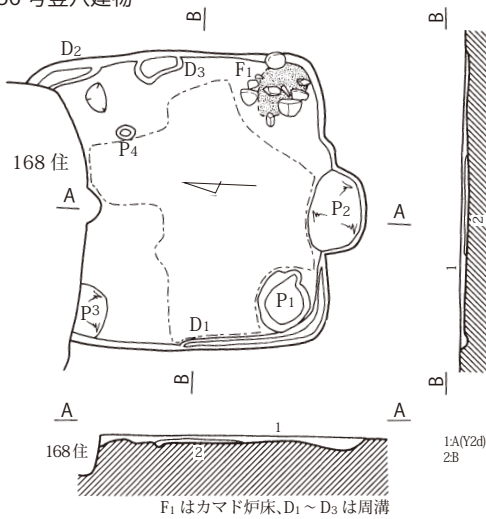


F₁ は 254 住のカマド炉床跡と推定、D₁・D₂ は同住の周溝

第 255 号竪穴建物

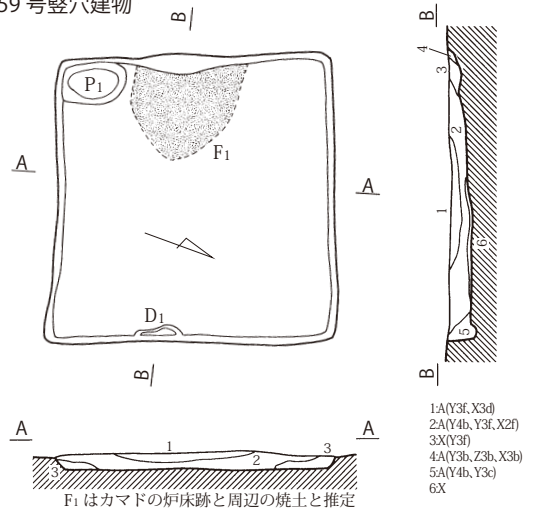


第 256 号竪穴建物



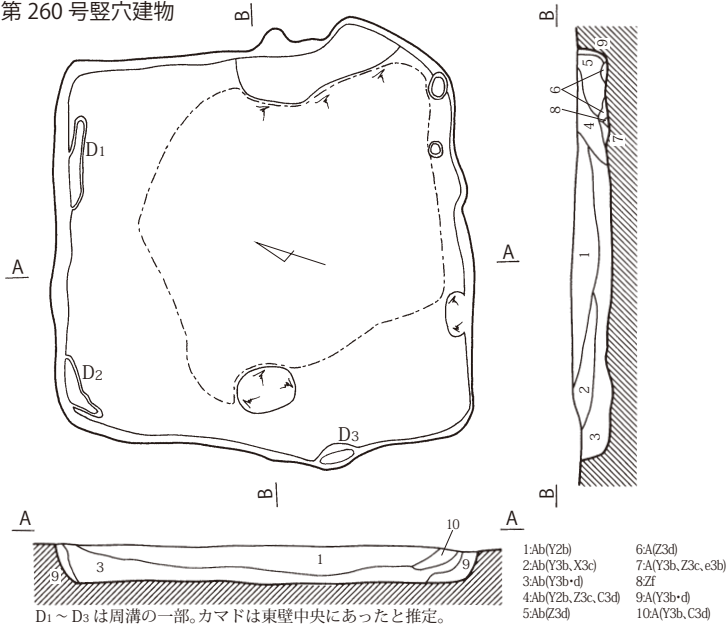
F₁ はカマド炉床、D₁～D₃ は周溝

第 259 号竪穴建物



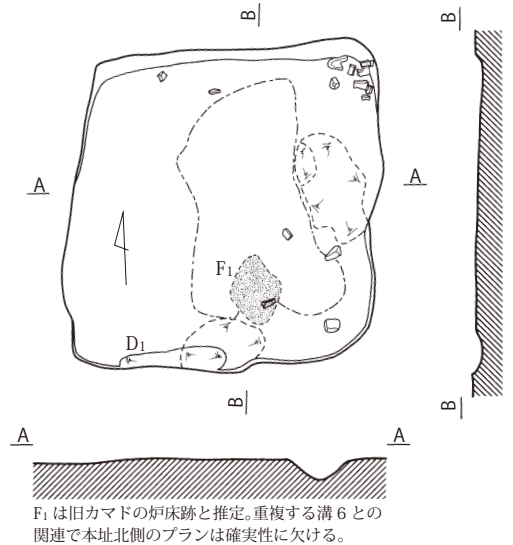
F₁ はカマドの炉床跡と周辺の焼土と推定

第 260 号竪穴建物



D₁～D₃ は周溝の一部。カマドは東壁中央にあったと推定。

第 261 号竪穴建物

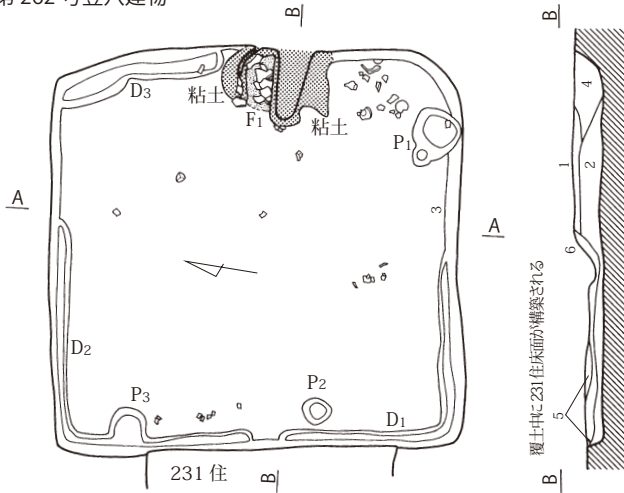


F₁ は旧カマドの炉床跡と推定。重複する溝 6 との関連で本址北側のプランは確実性に欠ける。

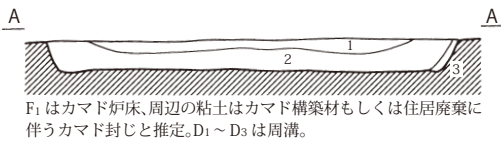
0 S=1/80 2m

第 56 図 竪穴建物 47 (第 254～256・259～261・273 号)

第 262 号 竪穴建物

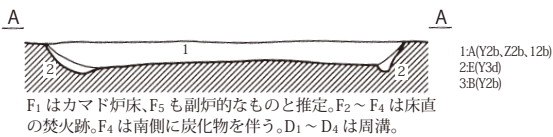
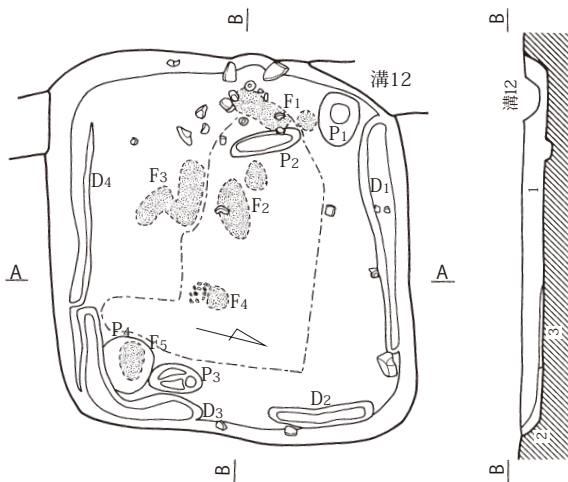


覆土中に231住床面が構築される



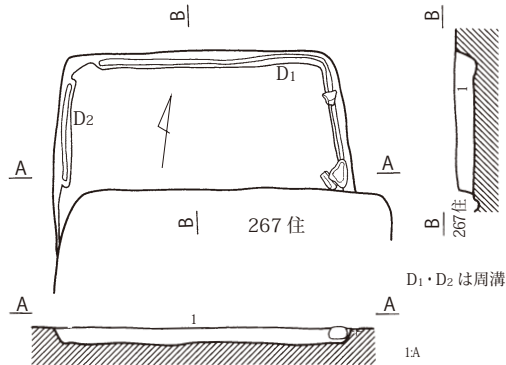
F1はカマド炉床、周辺の粘土はカマド構築材もしくは住居廃棄に伴うカマド封じと推定。D1～D3は周溝。

第 265 号 竪穴建物



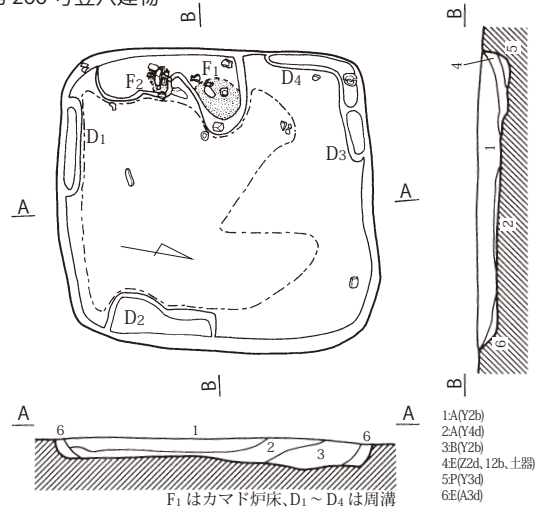
F1はカマド炉床、F5も副炉的なものと推定。F2～F4は床直の焚火跡、F4は南側に炭化物を伴う。D1～D4は周溝。

第 268 号 竪穴建物



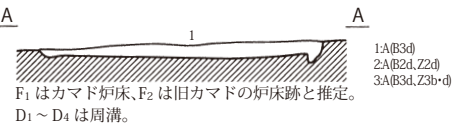
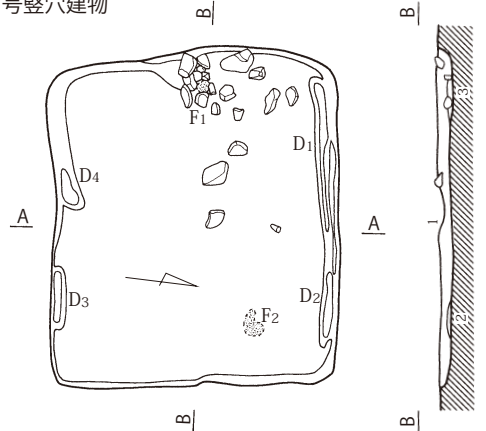
D1・D2は周溝

第 266 号 竪穴建物



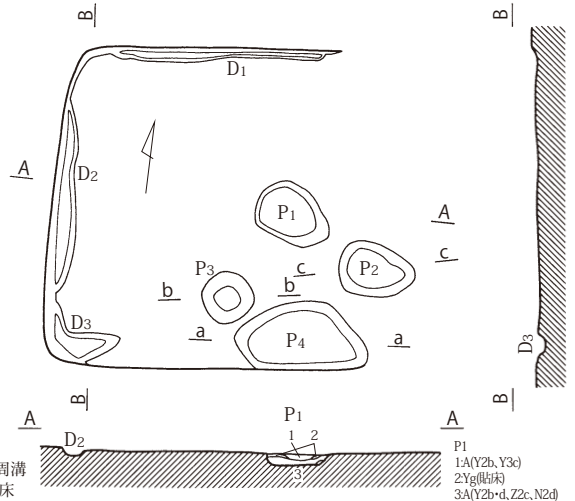
F1はカマド炉床、D1～D4は周溝

第 267 号 竪穴建物

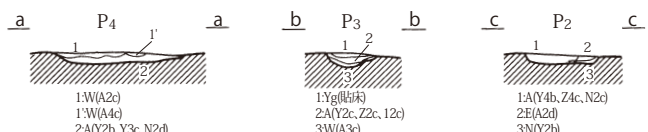


F1はカマド炉床、F2は旧カマドの炉床跡と推定。D1～D4は周溝。

第 271 号 竪穴建物



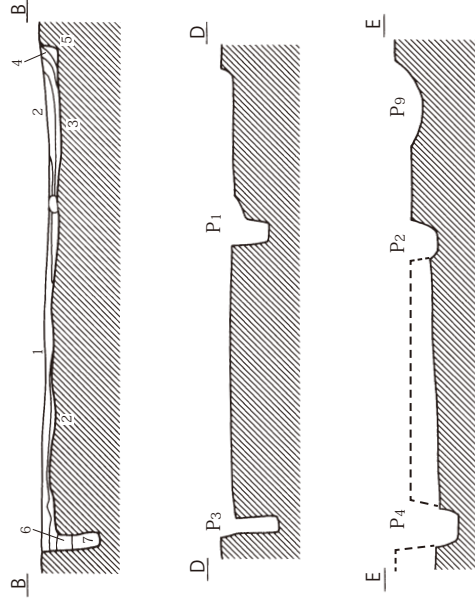
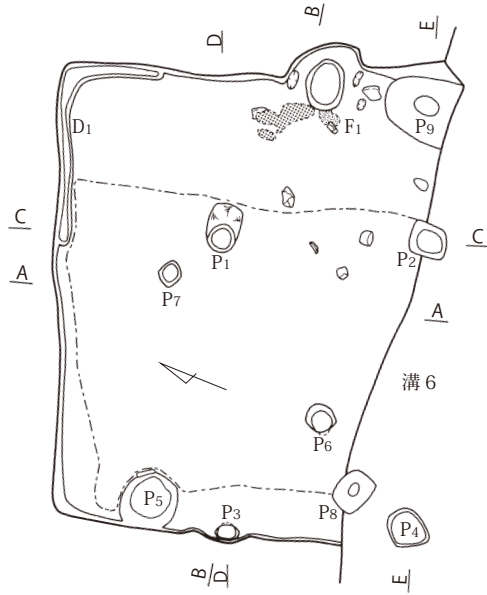
D1～D3は周溝
P上には貼床



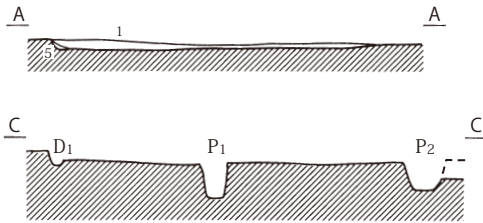
0 S=1/80 2m

第 57 図 竪穴建物 48 (第 262・265～268・271 号)

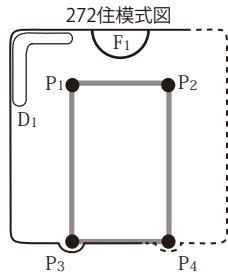
第 272 号 竪穴建物



P₂・P₄は溝6の底面から検出。点線は溝6に破壊される前の272住の床面とP₂・P₄の推定復元。

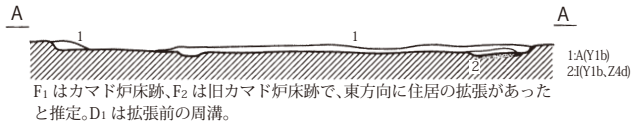
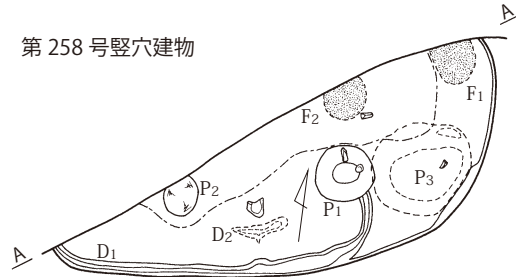


- 1:B0C3d
- 2:A(Y2b)
- 3:AZ2b
- 4:Z4d
- 5:D(Y3d)
- 6B
- 7C



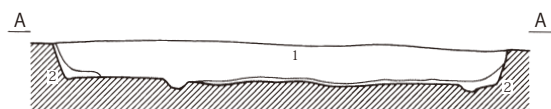
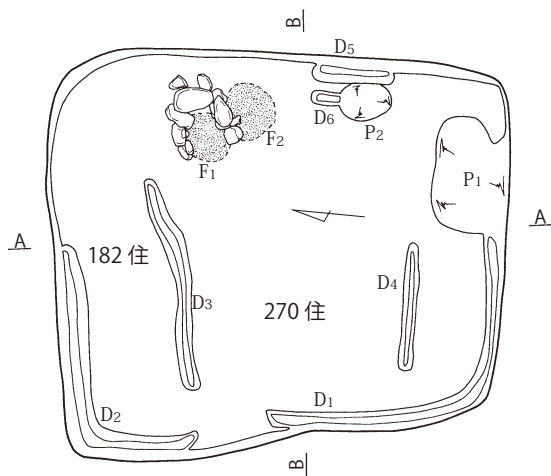
F₁はカマド炉床、P₁～P₄は柱穴、D₁は周溝。柱穴は4本長方形配列。断面図と模式図は溝6に切られた部分を点線で想定復元。P₂・P₄は溝6の範囲内から検出。

第 258 号 竪穴建物

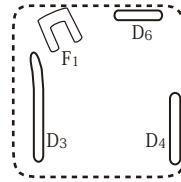


F₁はカマド炉床跡、F₂は旧カマド炉床跡で、東方向に住居の拡張があったと推定。D₁は拡張前の周溝。

第 182・270 号 竪穴建物

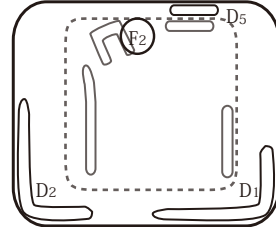


270住想定模式図

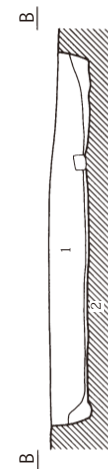


F₁: カマド炉床
D₃・D₄・D₆: 周溝

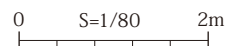
182住想定模式図



F₂: カマド炉床跡
D₁・D₂・D₅: 周溝

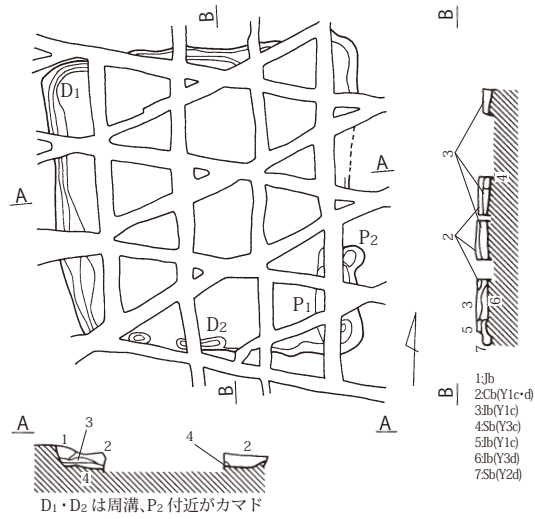


石組みカマド(F₁)は182住に伴うとするには位置や向きが不自然。D₃・D₄・D₆と共に182住内にすっぽり収まる270住の存在を想定した。出土遺物も2時期ありこれを支持する。しかし土層に270住の痕跡は見出せない。土層図作成時に270住の存在を全く考慮しておらず、微細な差異を見落としたのであろう。

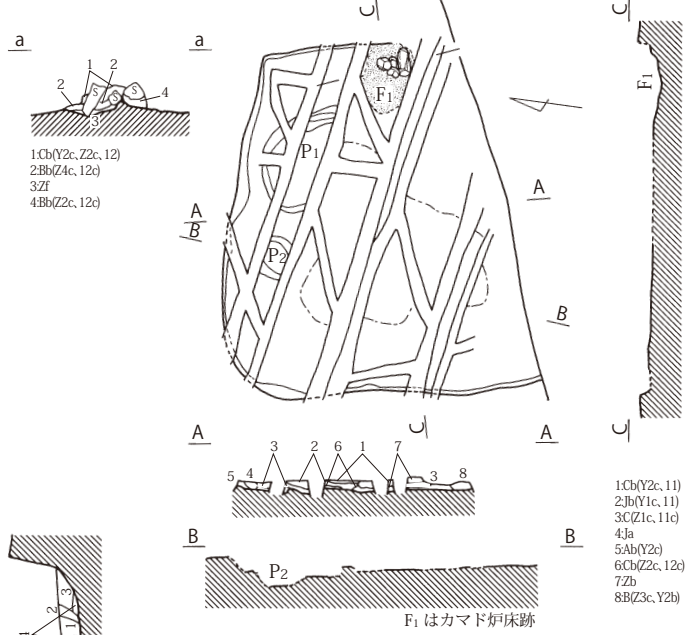


第 58 図 竪穴建物 49 (第 182・258・270・272 号)

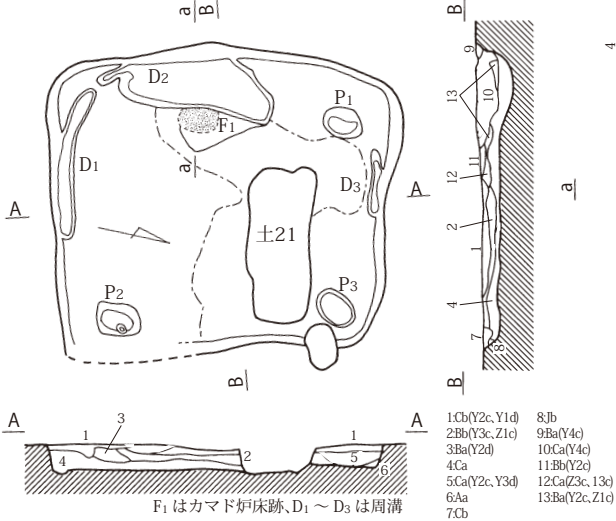
第 274 号竪穴建物



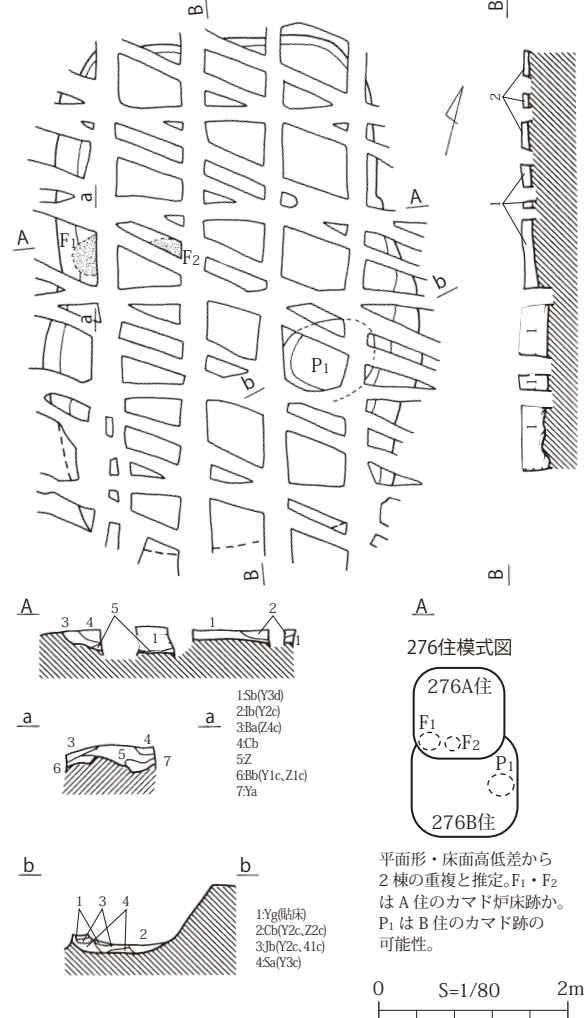
第 275 号竪穴建物



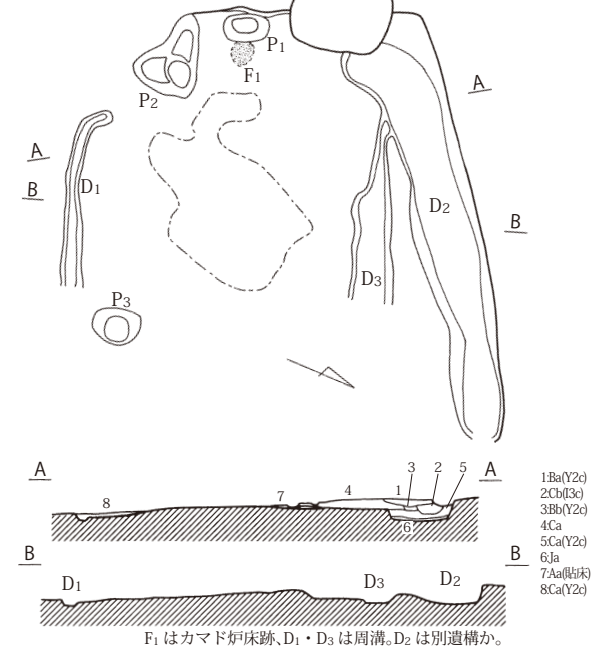
第 277 号竪穴建物



第 276 号竪穴建物

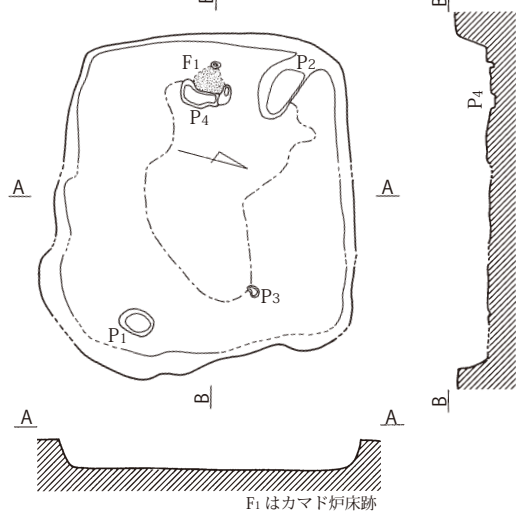


第 278 号竪穴建物



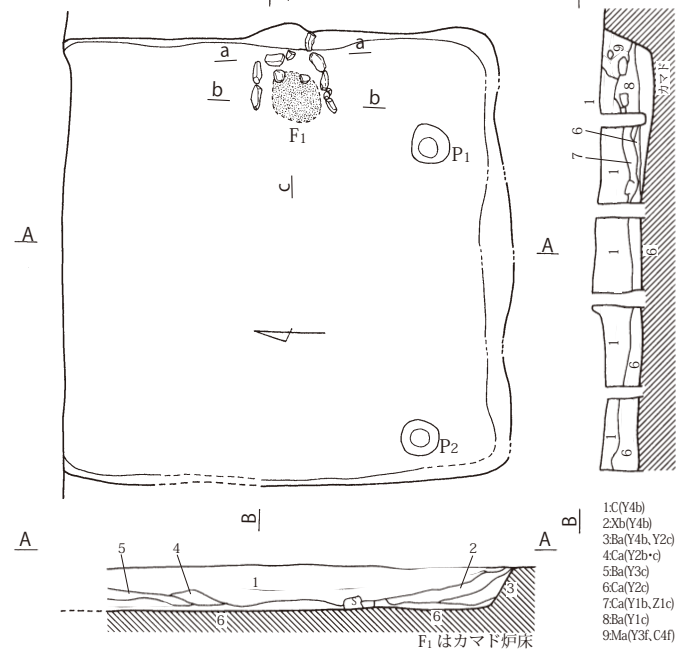
第 59 図 竪穴建物 50 (第 274 ~ 278 号)

第 280 号 竪穴建物



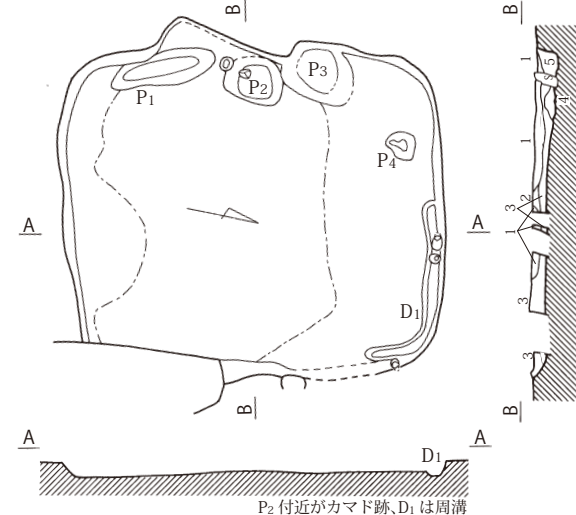
F1 はカマド 炉床跡

第 284 号 竪穴建物



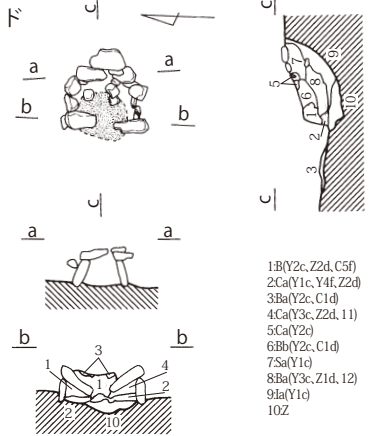
F1 はカマド 炉床

第 281 号 竪穴建物

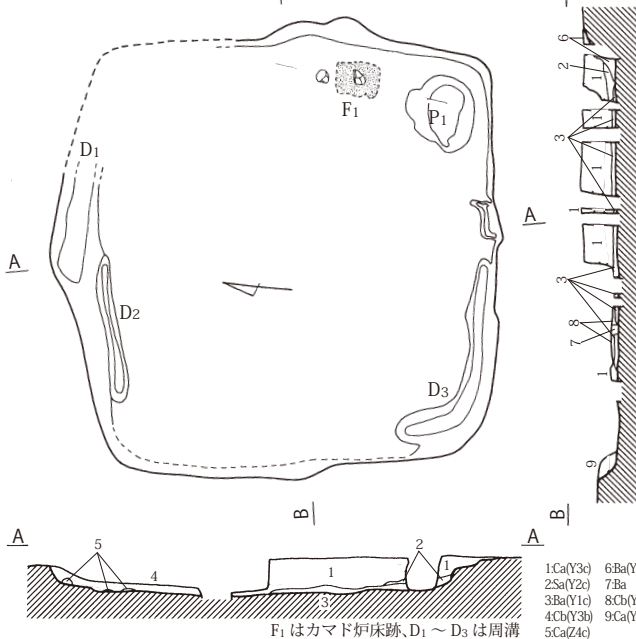


P2 付近がカマド跡、D1 は周溝

284 住カマド

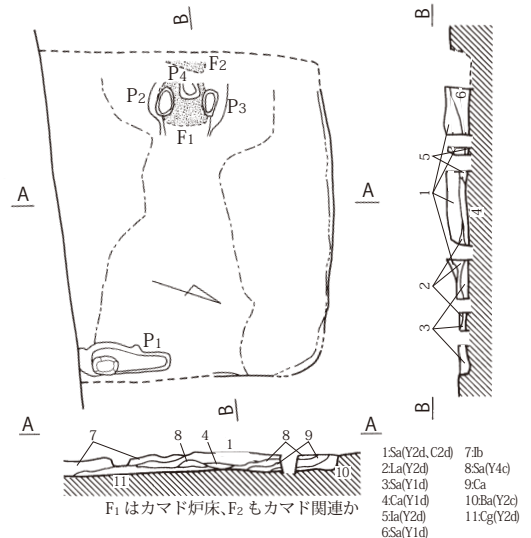


第 283 号 竪穴建物



F1 はカマド 炉床跡、D1 ~ D3 は周溝

第 279 号 竪穴建物

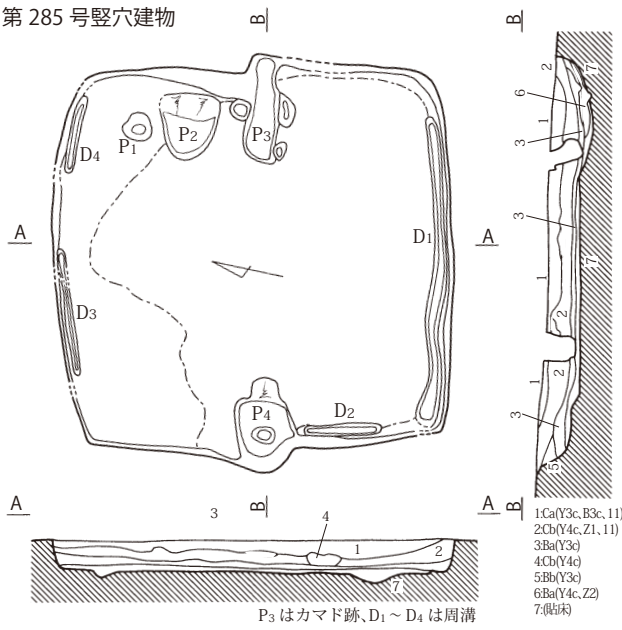


F1 はカマド 炉床、F2 もカマド 関連か

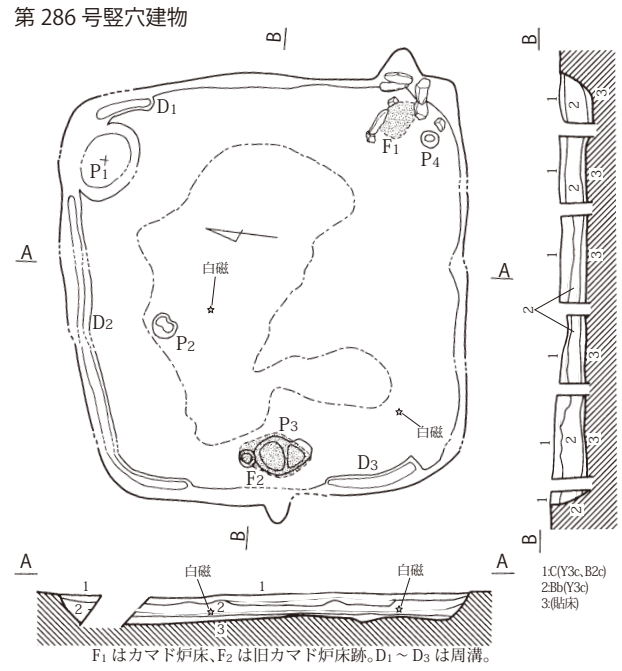
0 S=1/80 2m

第 60 図 竪穴建物 51 (第 279 ~ 281 · 283 · 284 号)

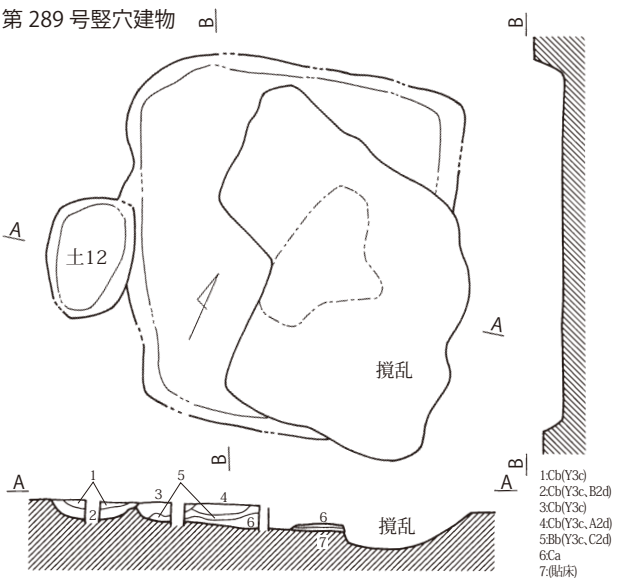
第 285 号 竪穴建物



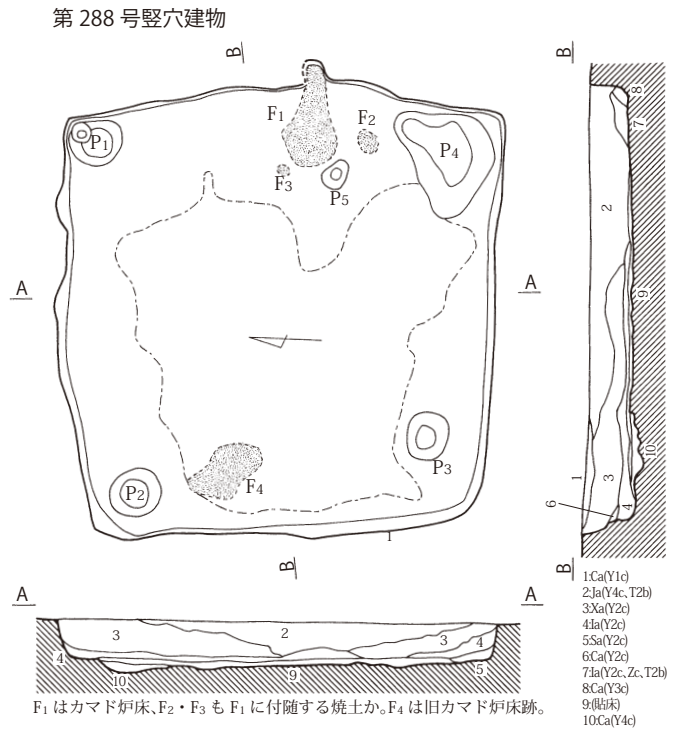
第 286 号 竪穴建物



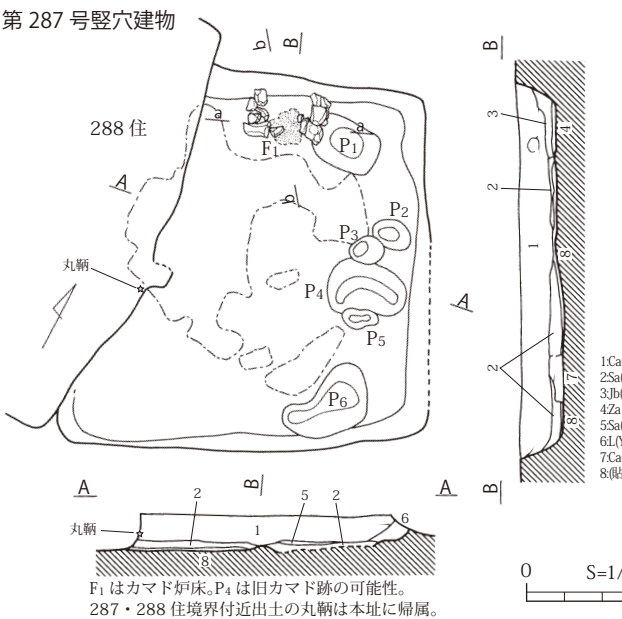
第 289 号 竪穴建物



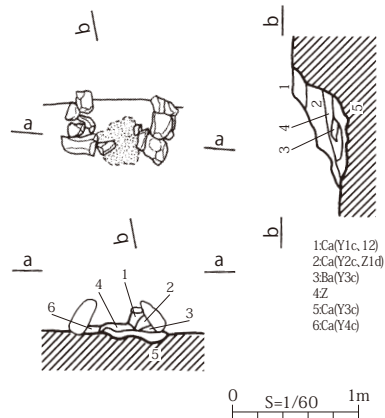
第 288 号 竪穴建物



第 287 号 竪穴建物



287住カマド

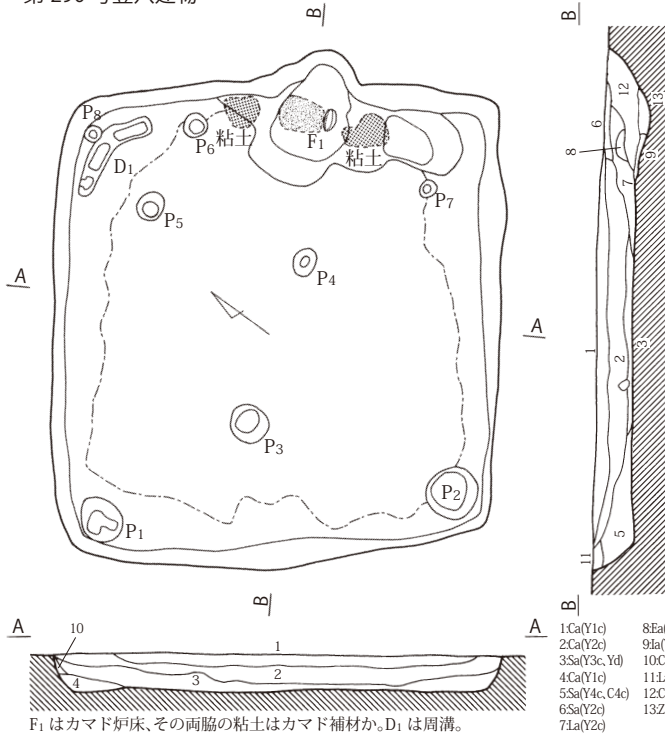


0 S=1/80 2m

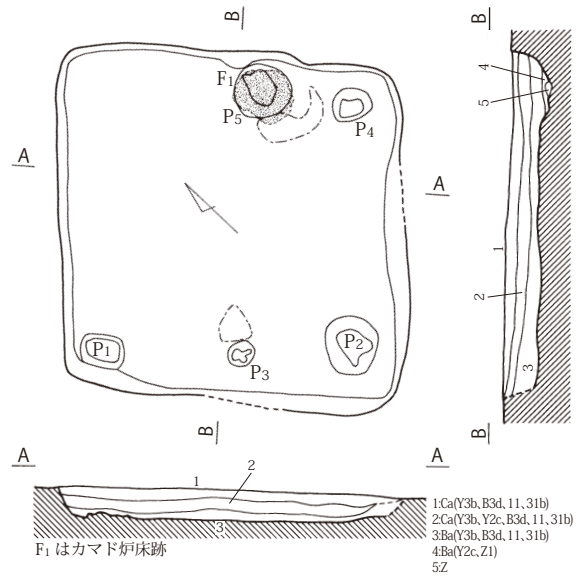
0 S=1/60 1m

第 61 図 竪穴建物 52 (第 285 ~ 289 号)

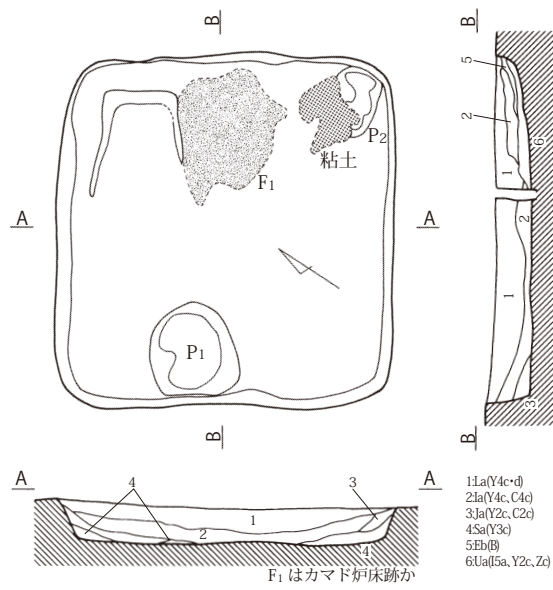
第 290 号 竪穴建物



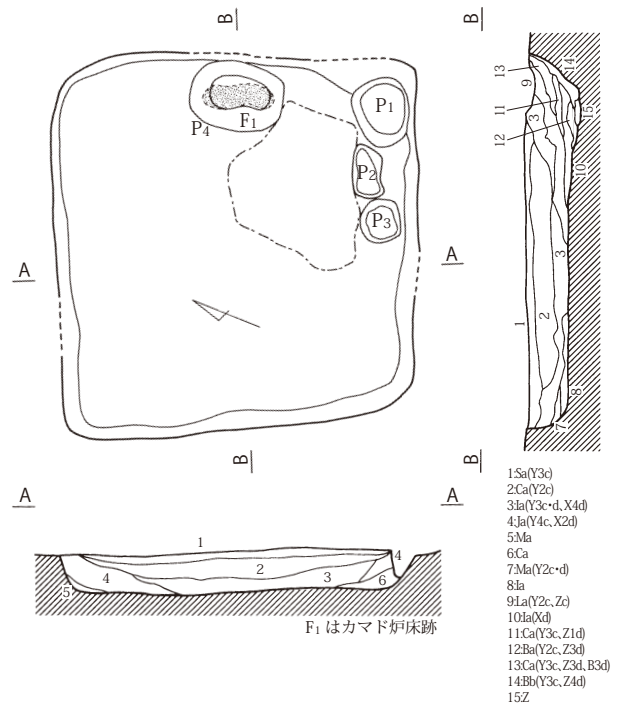
第 293 号 竪穴建物



第 292 号 竪穴建物



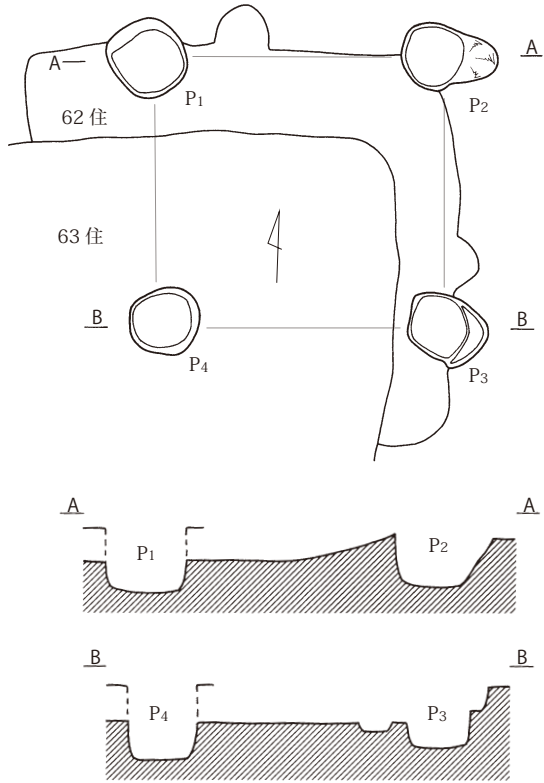
第 291 号 竪穴建物



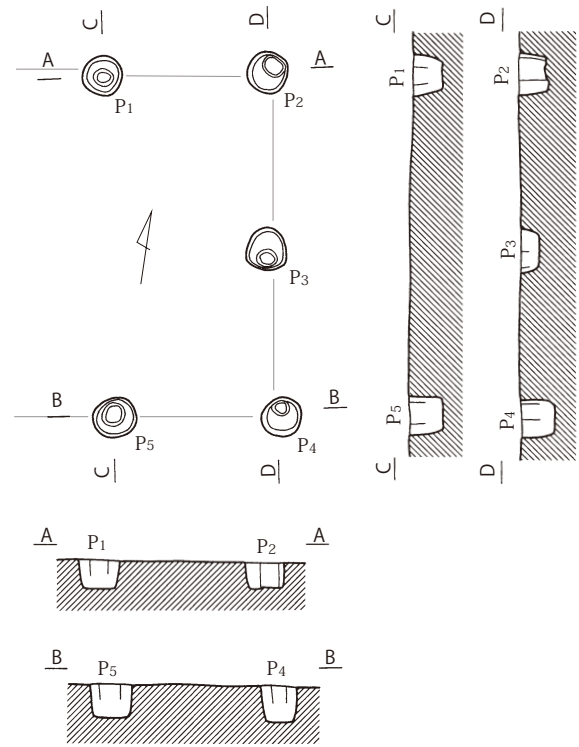
0 S=1/80 2m

第 62 図 竪穴建物 53 (第 290 ~ 293 号)

第 11 号掘立柱建物 (1 次)

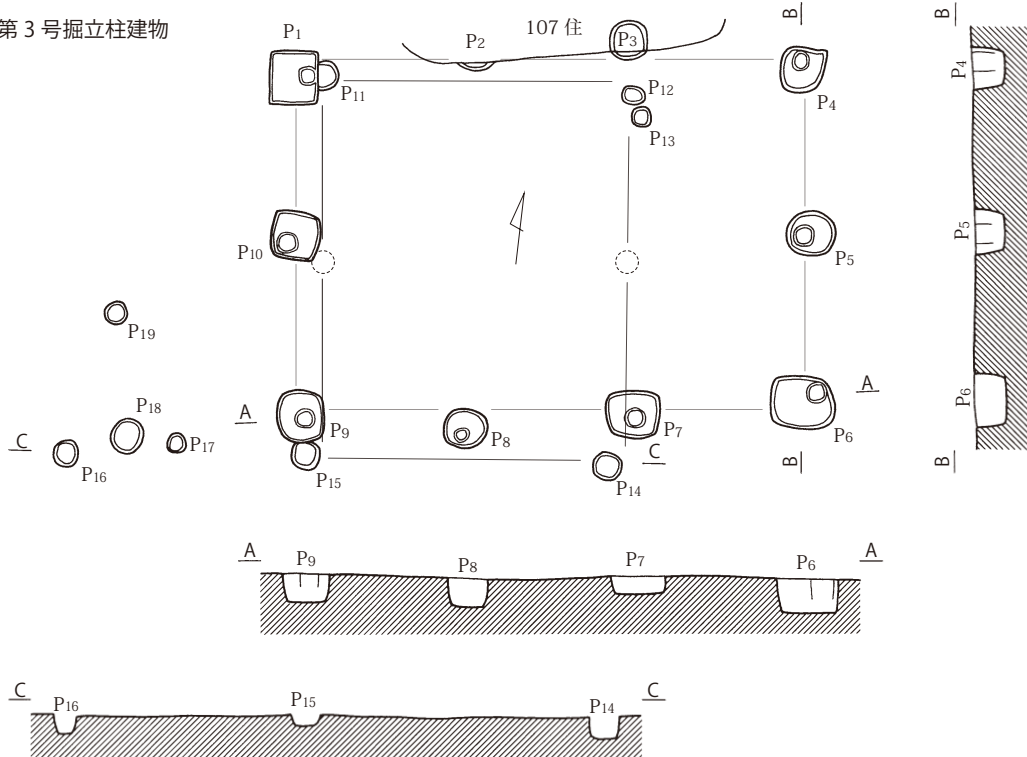


第 1 号掘立柱建物



第 2 号掘立柱建物

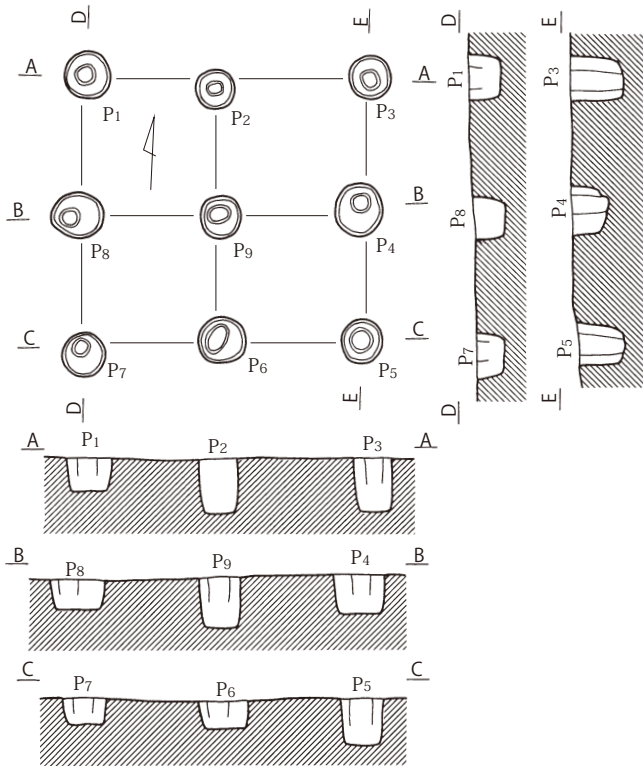
第 3 号掘立柱建物



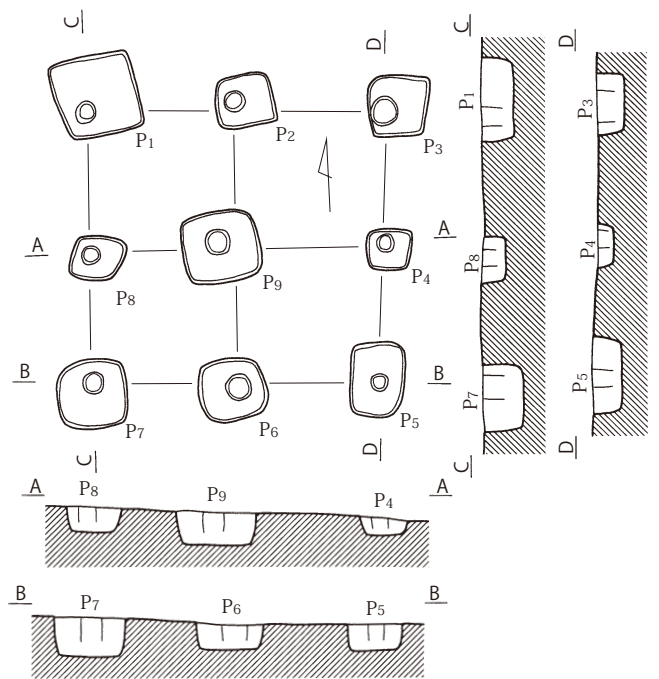
0 S=1/80 2m

第 63 图 掘立柱建物 1 (第 1 ~ 3 · 11 号)

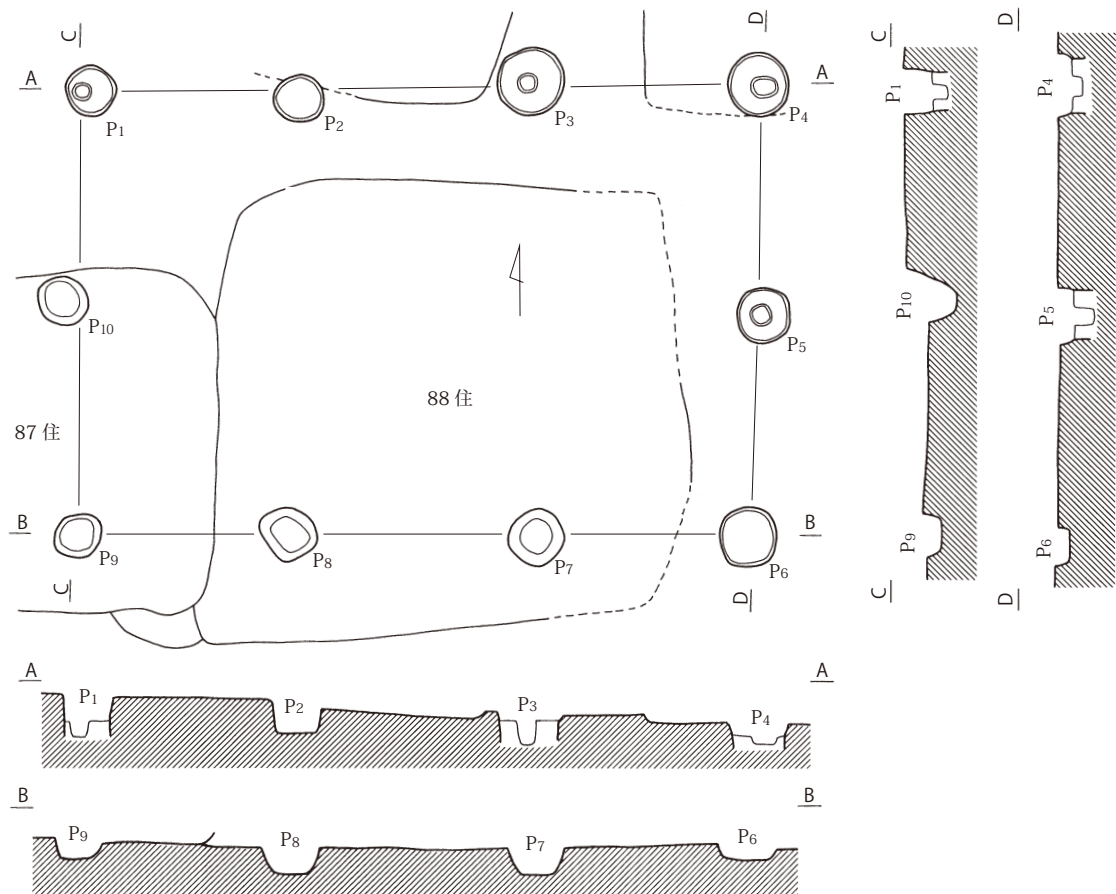
第5号掘立柱建物



第9号掘立柱建物



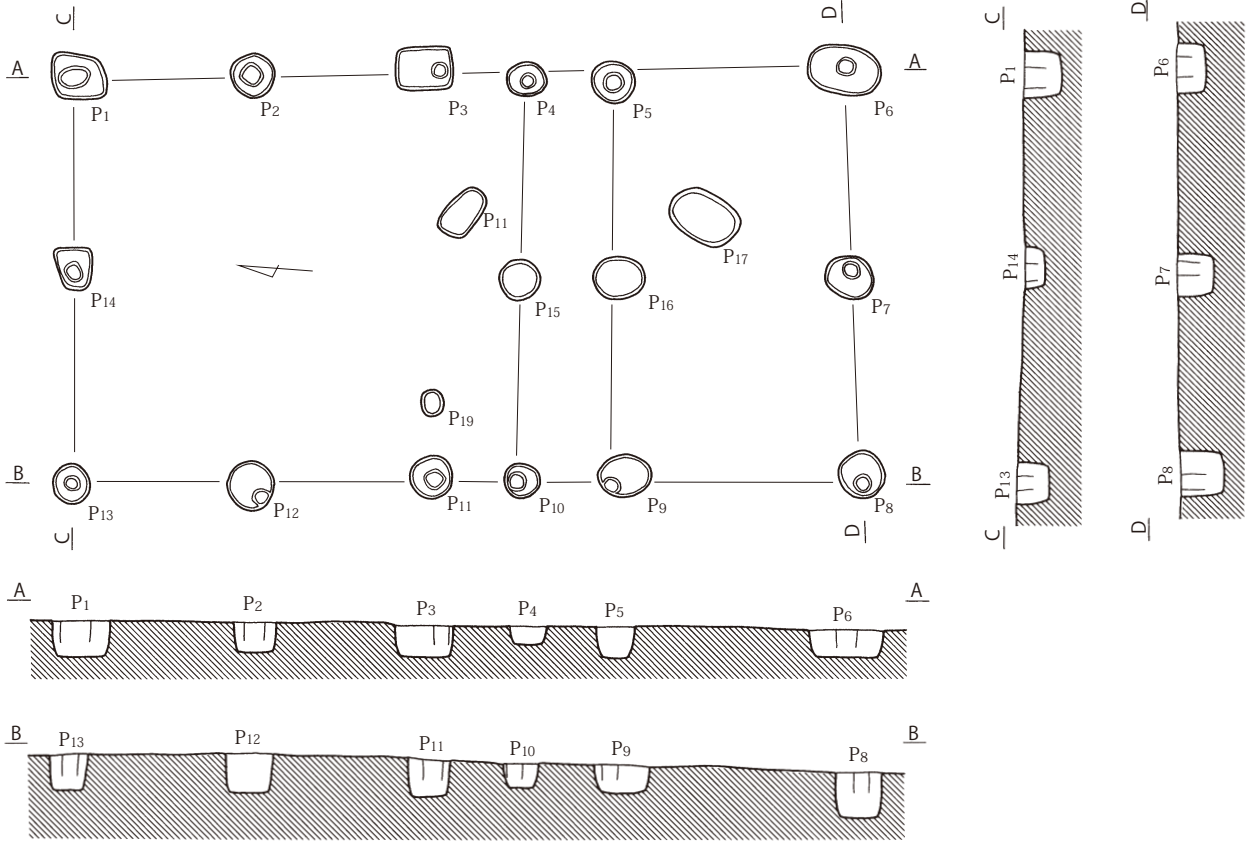
第10号掘立柱建物



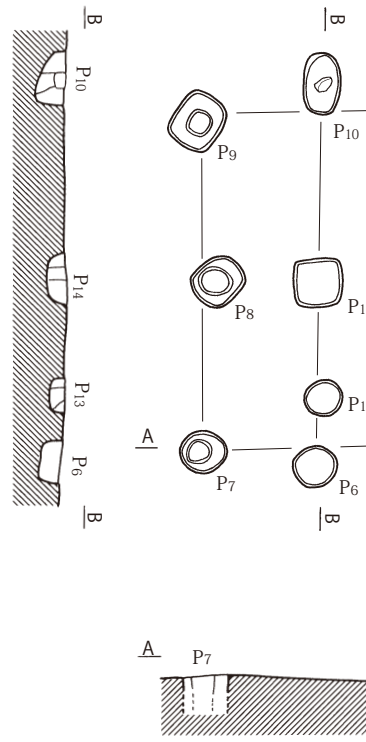
0 S=1/80 2m

第64图 掘立柱建物2(第5·9·10号)

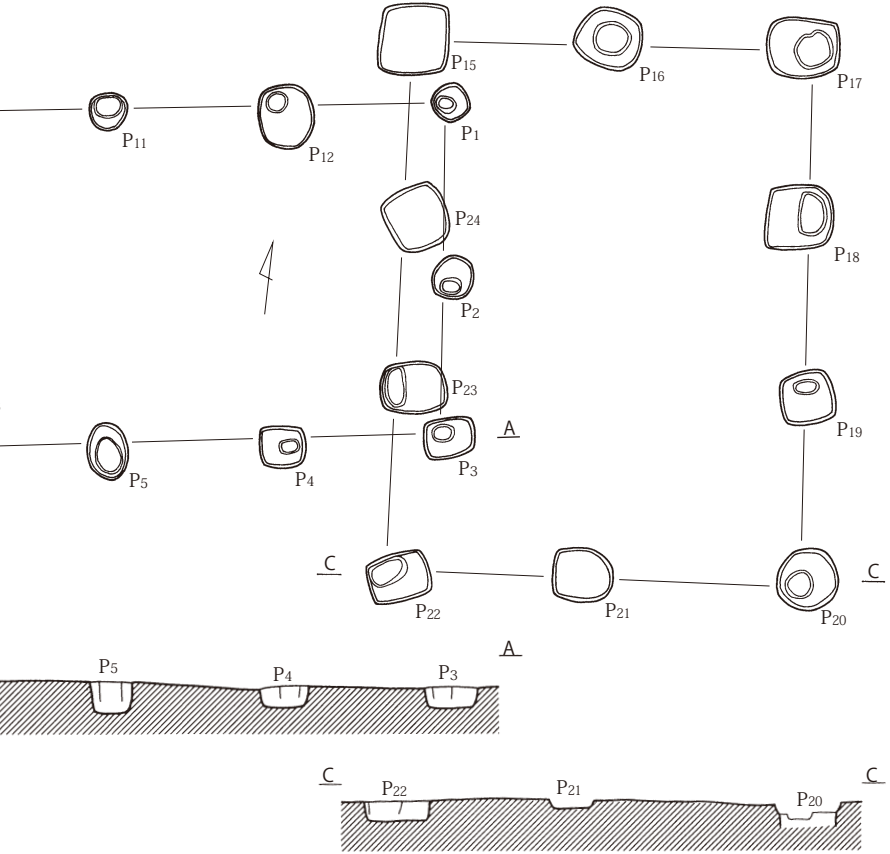
第 6 号掘立柱建物



第 7 号掘立柱建物



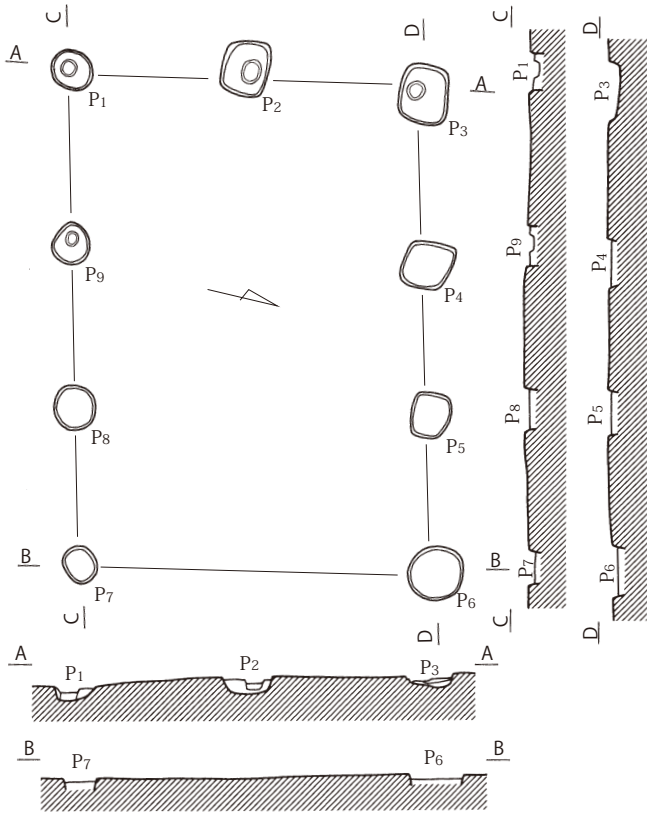
第 8 号掘立柱建物



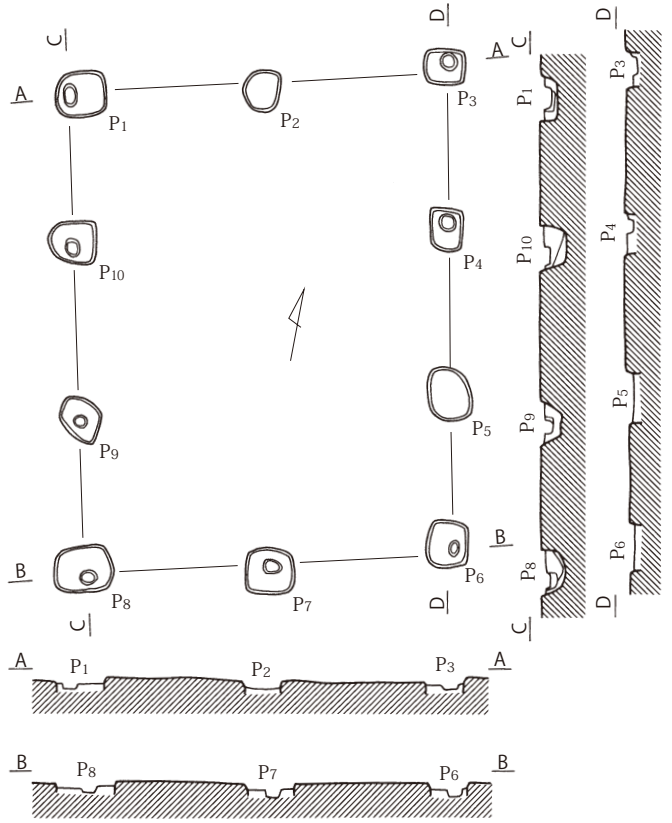
0 S=1/80 2m

第 65 图 掘立柱建物 3 (第 6 ~ 8 号)

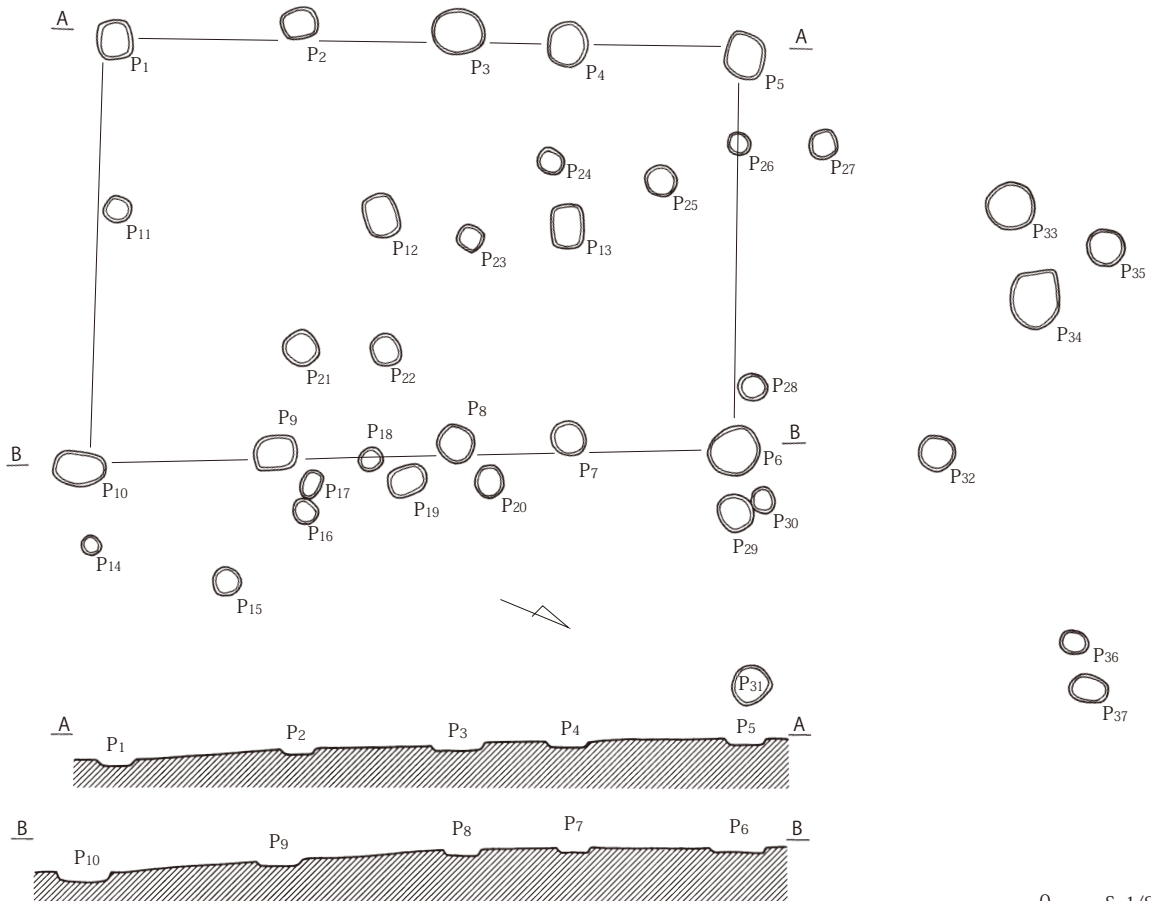
第 11 号掘立柱建物 (2 次)



第 12 号掘立柱建物



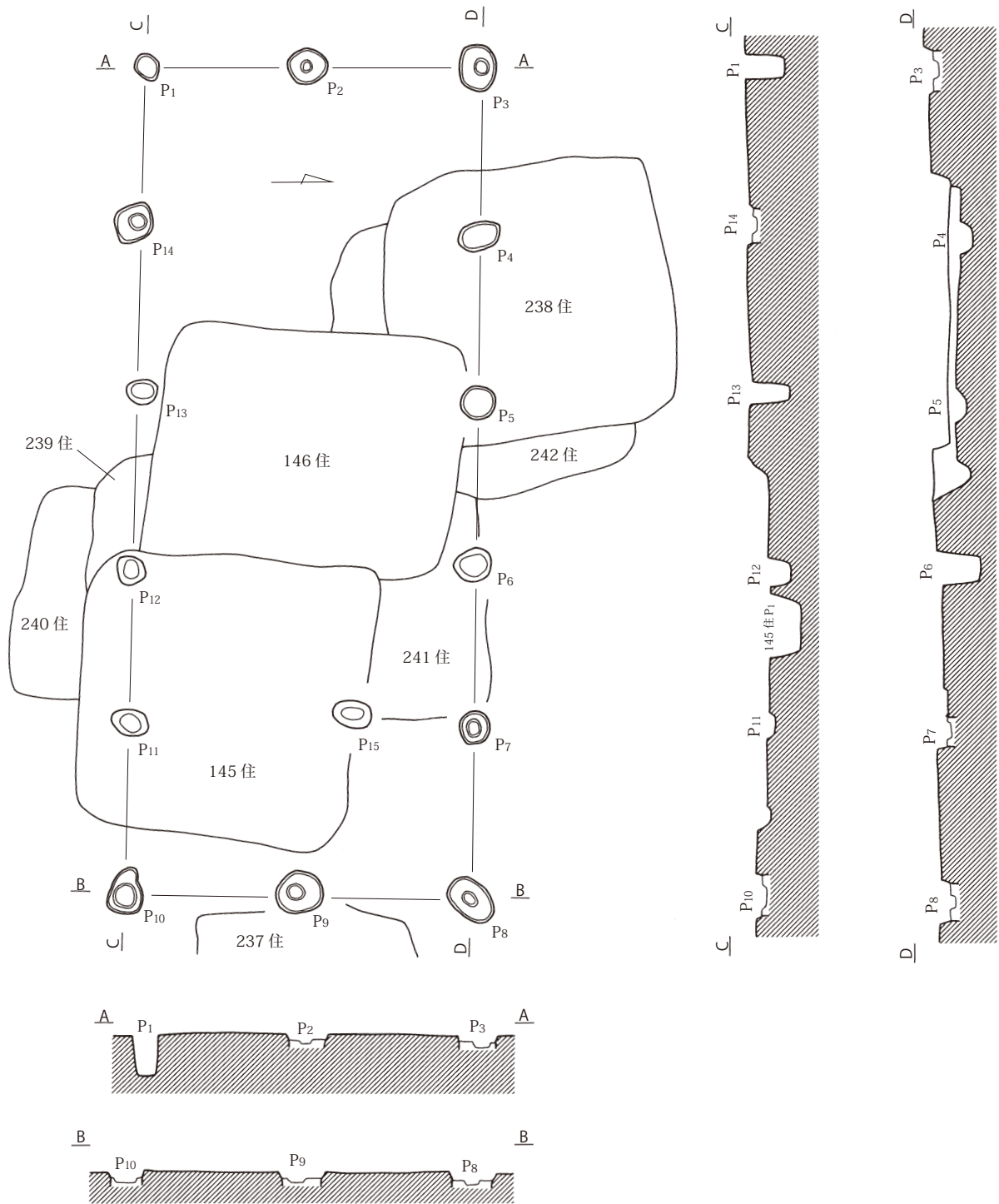
第 14 号掘立柱建物



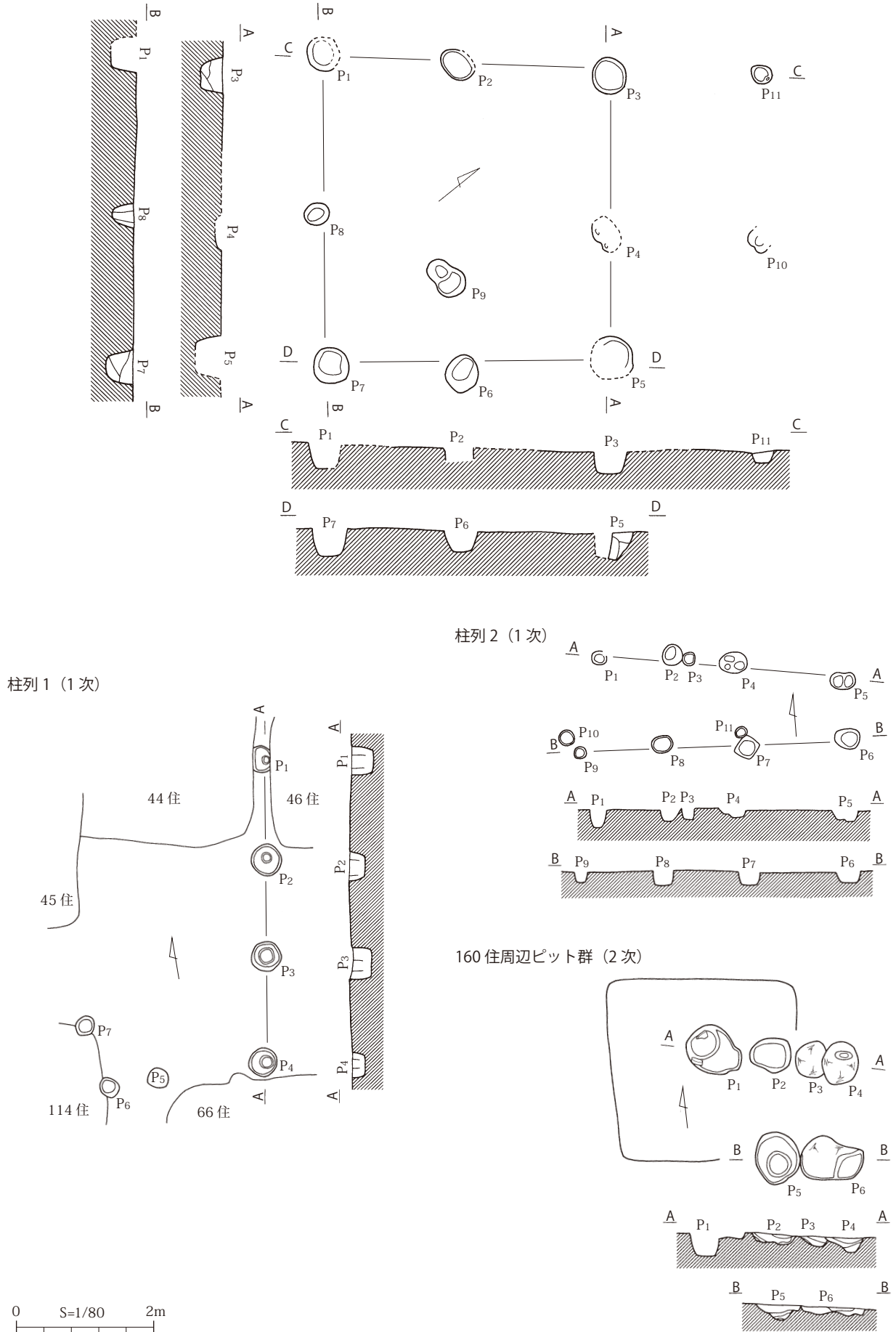
第 66 图 掘立柱建物 4 (第 11·12·14 号)

0 S=1/80 2m

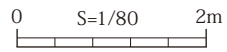
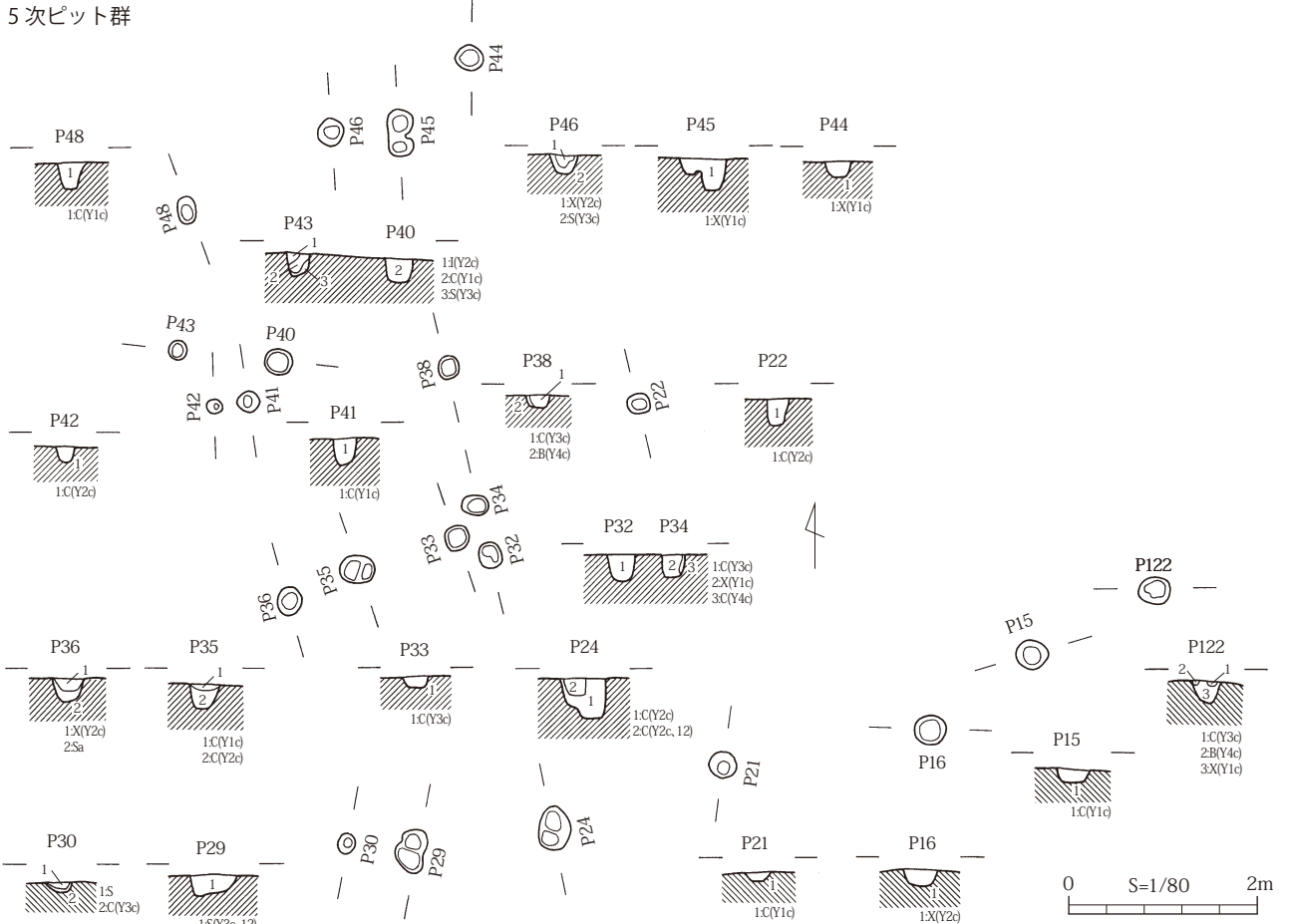
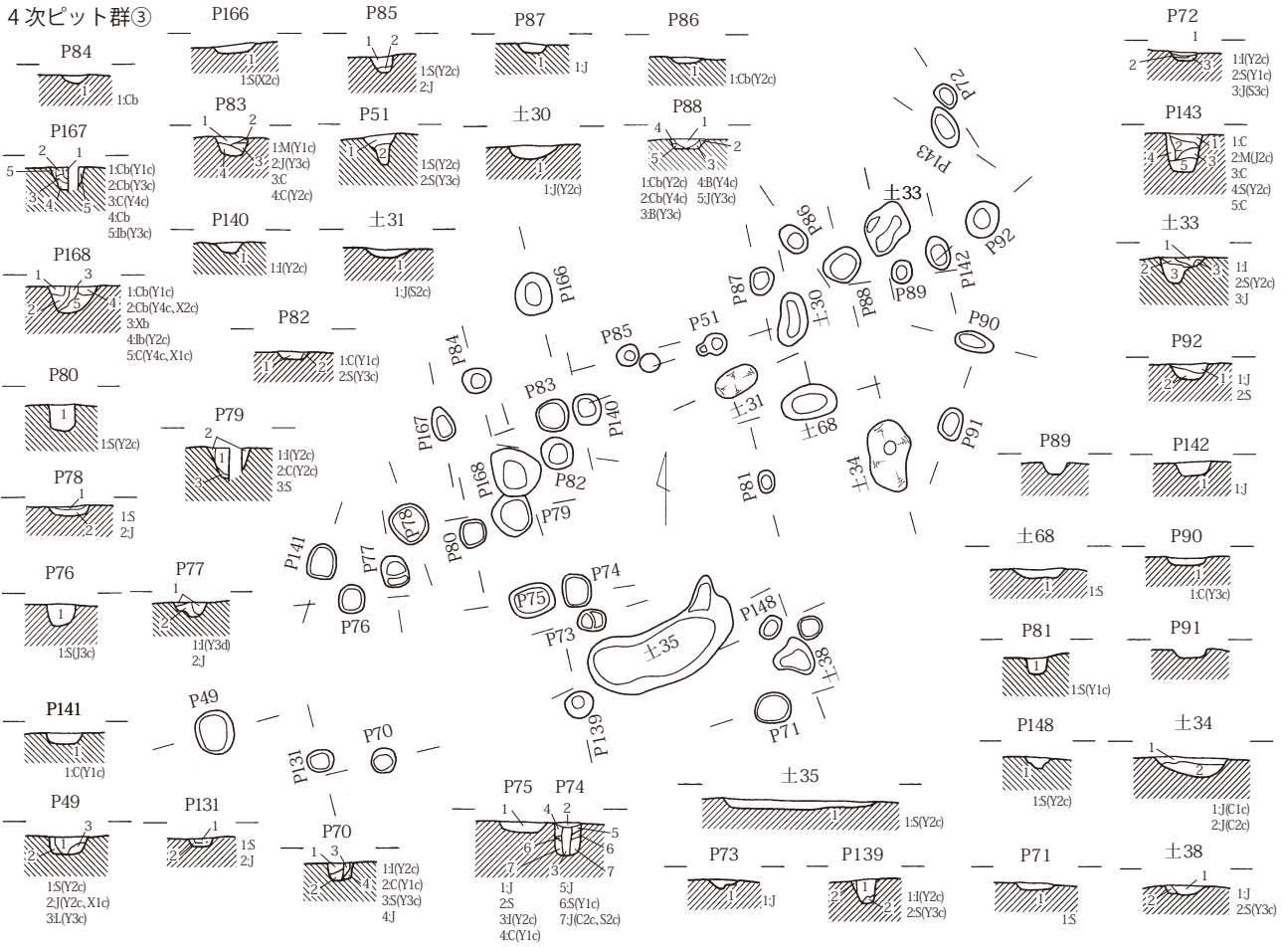
第 13 号掘立柱建物



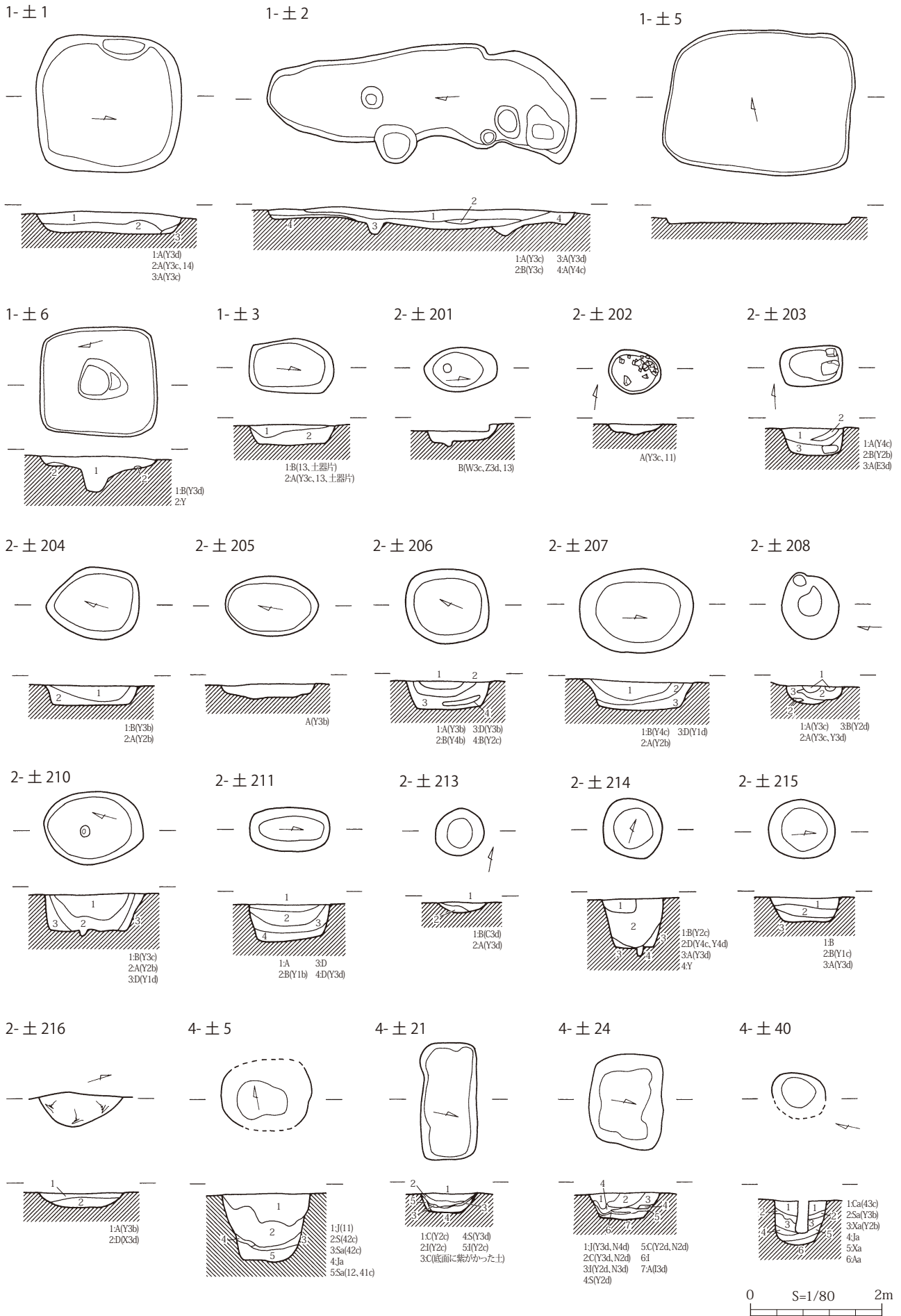
第 67 图 掘立柱建物 5 (第 13 号)



第68図 掘立柱建物6(第15号)、柱列ピット群

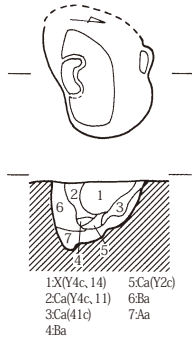


第70図 4次ピット群③、5次ピット群 平面・断面図



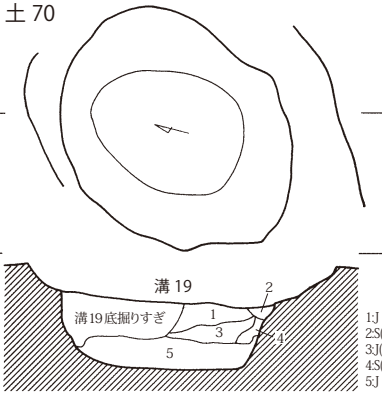
第71図 土坑1

4-±64



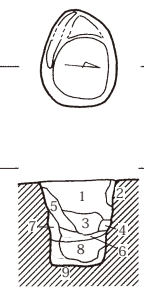
1X(Y4c, 14) 5Ca(Y2c)
 2Ca(Y4c, 11) 6Ba
 3Ca(41c) 7Aa
 4Ba

4-±70



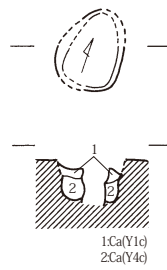
1J
 2S(Y3c, 12)
 3J(11)
 4S(Y3d, 11)
 5J

4-±72



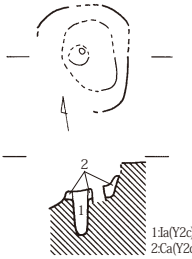
1S(11)
 2J(Y3d)
 3J(13)
 4J
 5J(Y3c)
 6A
 7J
 8J
 9S

4-±83



1Ca(Y1c)
 2Ca(Y4c)

4-±84



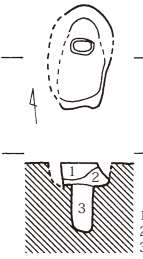
1Aa(Y2c)
 2Ca(Y2c)

4-±85



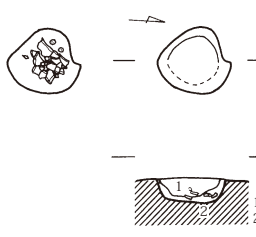
1B(Y3b, 11)
 2B(Y4c)

4-±86



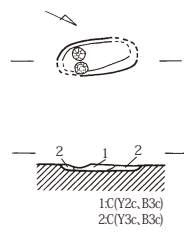
1B(Y3c, 41)
 2B(Y3c)
 3S(Y3d)

4-±90



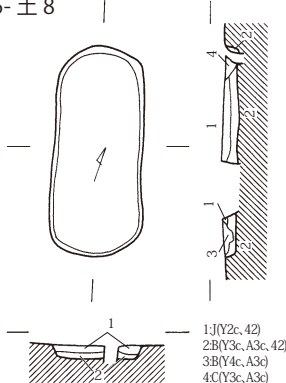
1C(Y2c, 1)
 2B(Yc, 1)

5-±3



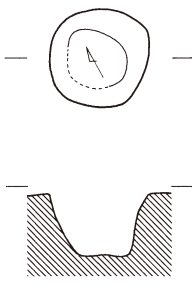
1C(Y2c, B3c)
 2C(Y3c, B3c)

5-±8

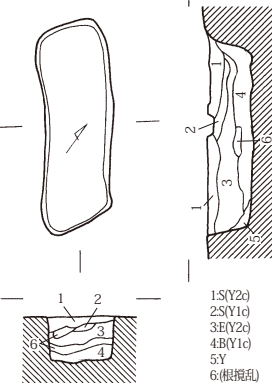


1J(Y2c, 42)
 2B(Y3c, A3c, 42)
 3B(Y4c, A3c)
 4C(Y3c, A3c)

5-±20

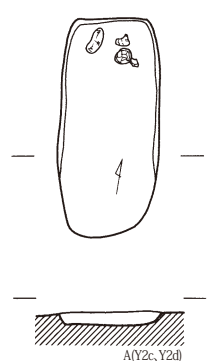


5-±21



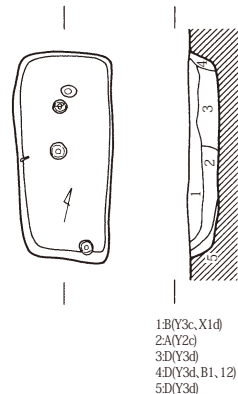
1S(Y2c)
 2S(Y1c)
 3E(Y2c)
 4B(Y1c)
 5Y
 6(根掘乱)

2-±209



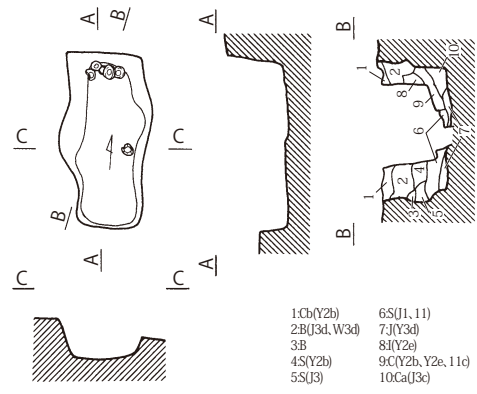
A(Y2c, Y2d)

2-±212



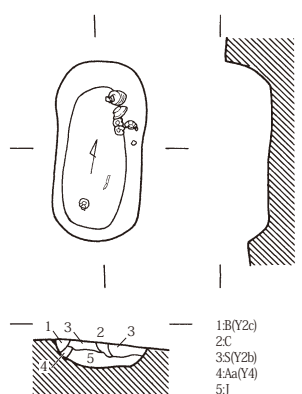
1B(Y3c, X1d)
 2A(Y2c)
 3D(Y3d)
 4D(Y3d, B1, 12)
 5D(Y3d)

4-±17

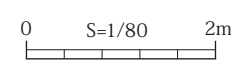


1Cb(Y2b) 6S(11, 11)
 2B(J3d, W3d) 7J(Y3d)
 3B 8J(Y2c)
 4S(Y2b) 9C(Y2b, Y2e, 11c)
 5S(J3) 10Ca(J3c)

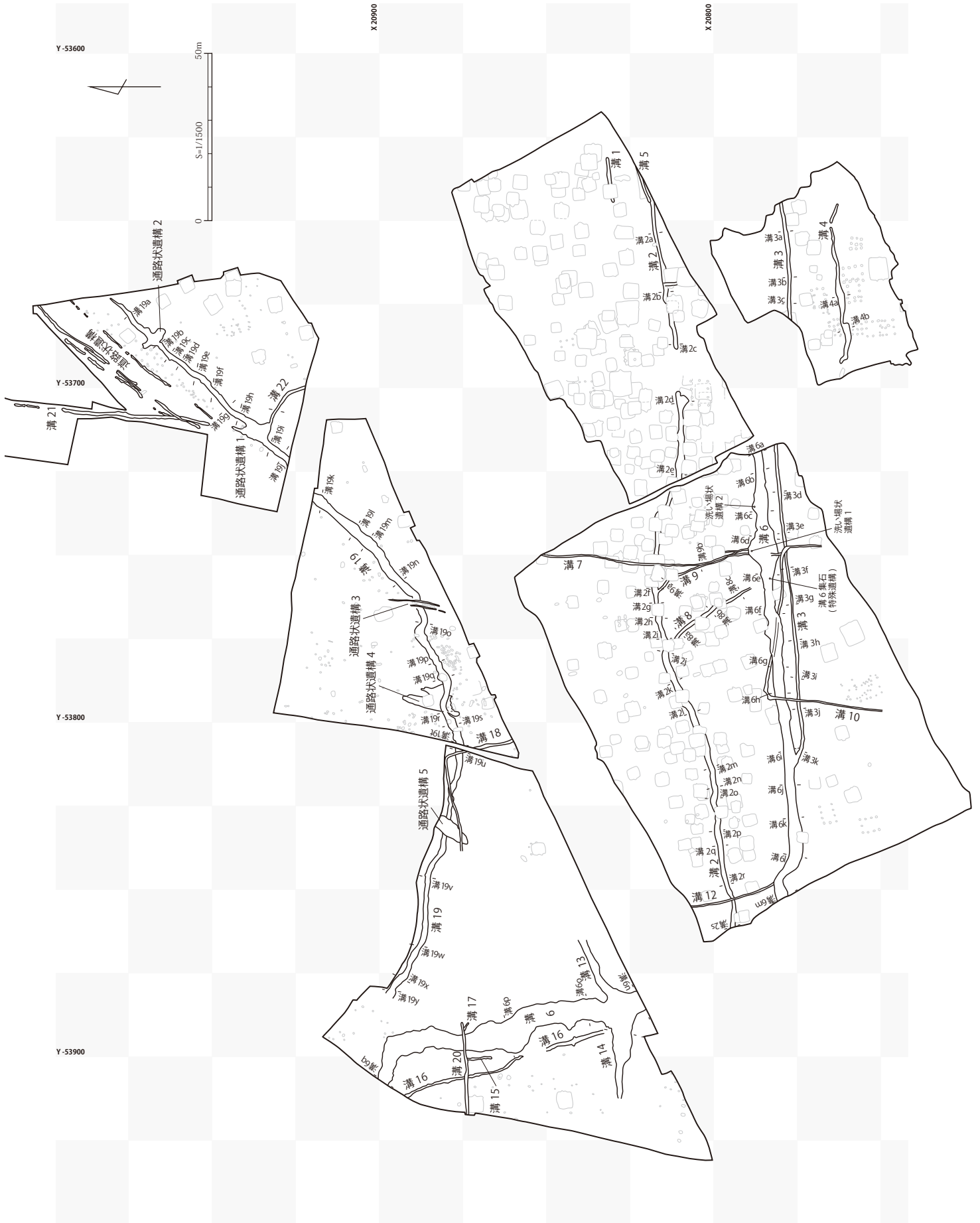
4-±41



1B(Y2c)
 2C
 3S(Y2b)
 4Aa(Y4)
 5J

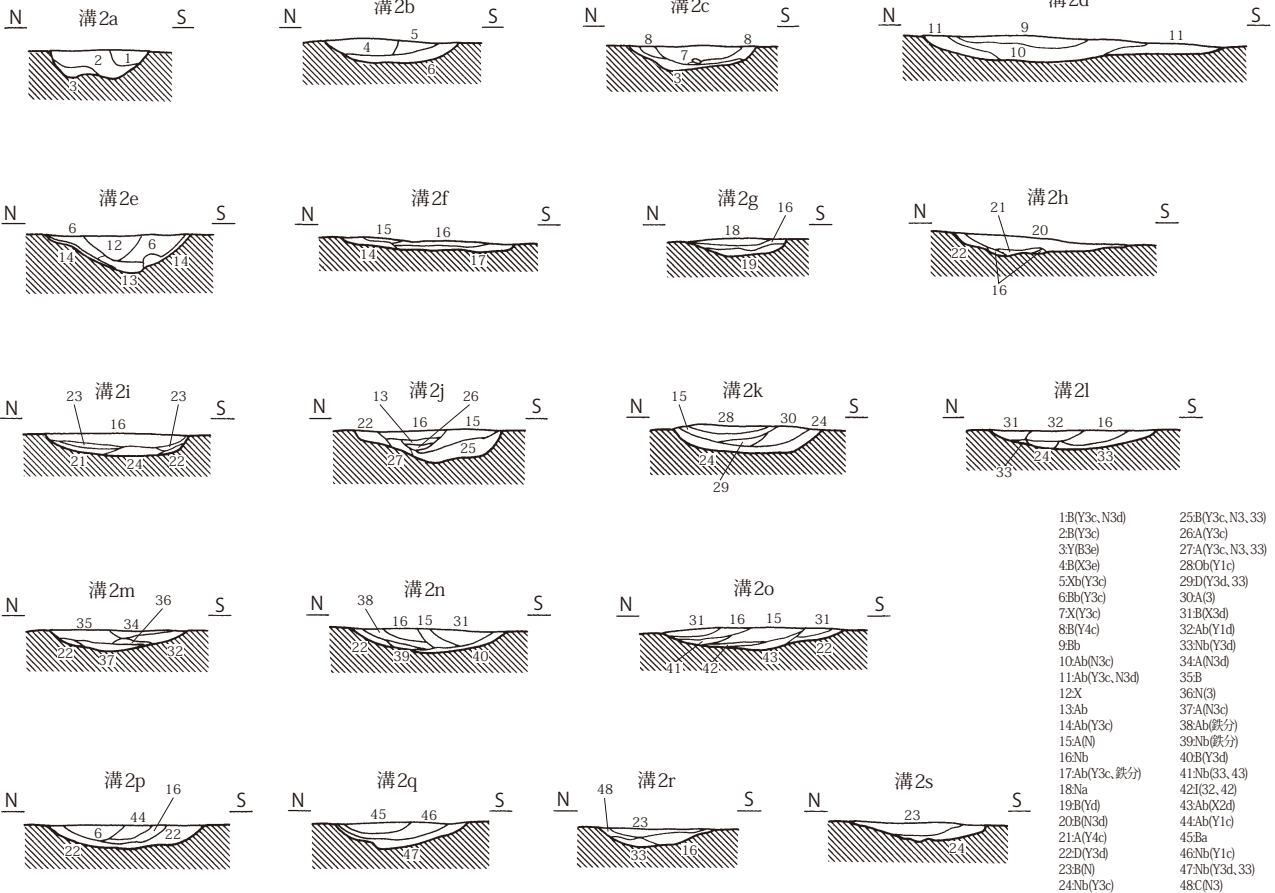


第72図 土坑2

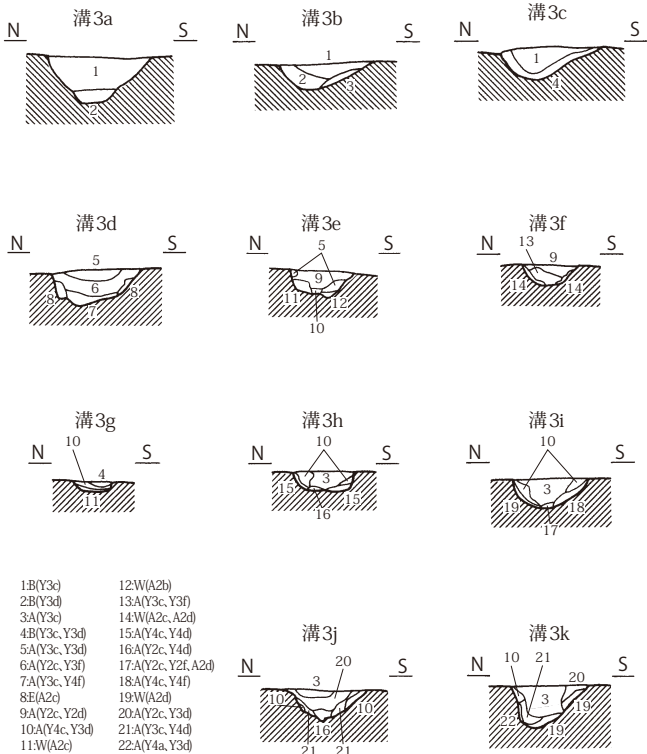


第73図 溝配置

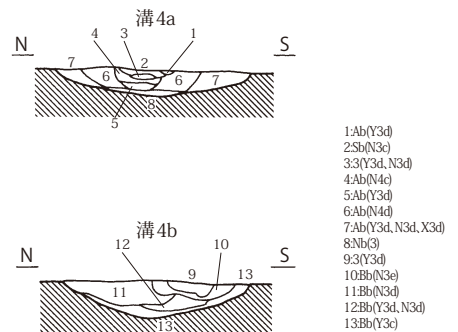
溝 2 断面図



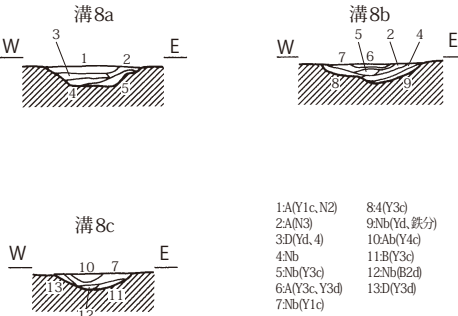
溝 3 断面図



溝 4 断面図

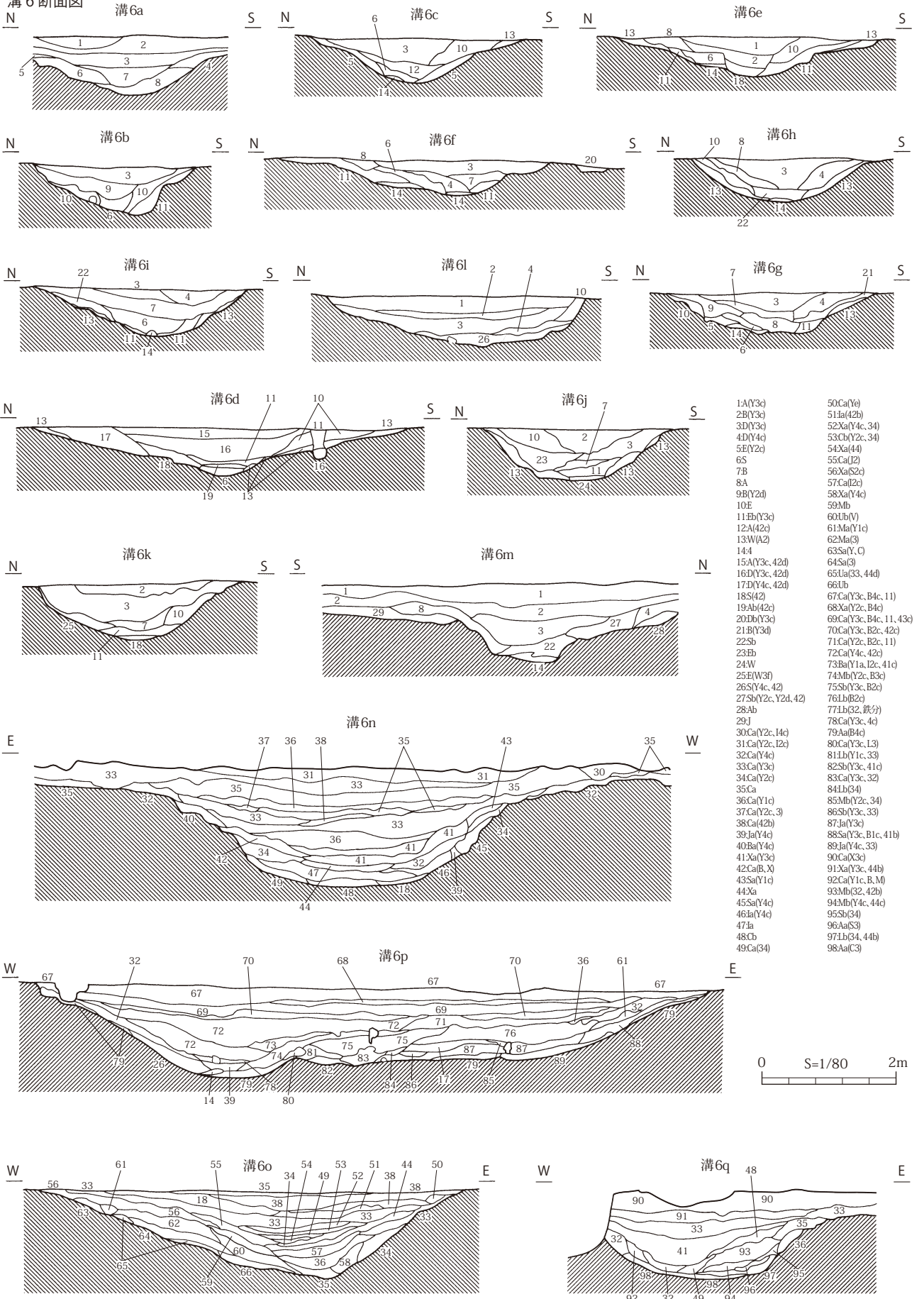


溝 8 断面図



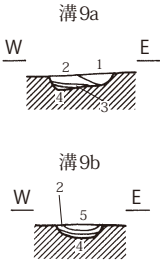
第 74 図 溝 2 ~ 4・8 断面図

溝6断面図

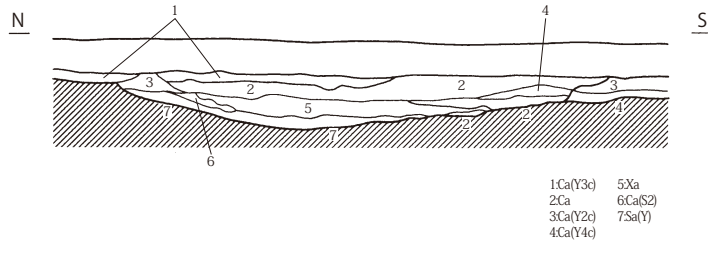


第75図 溝6 断面図

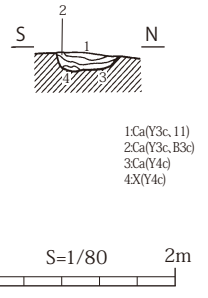
溝 9 断面図



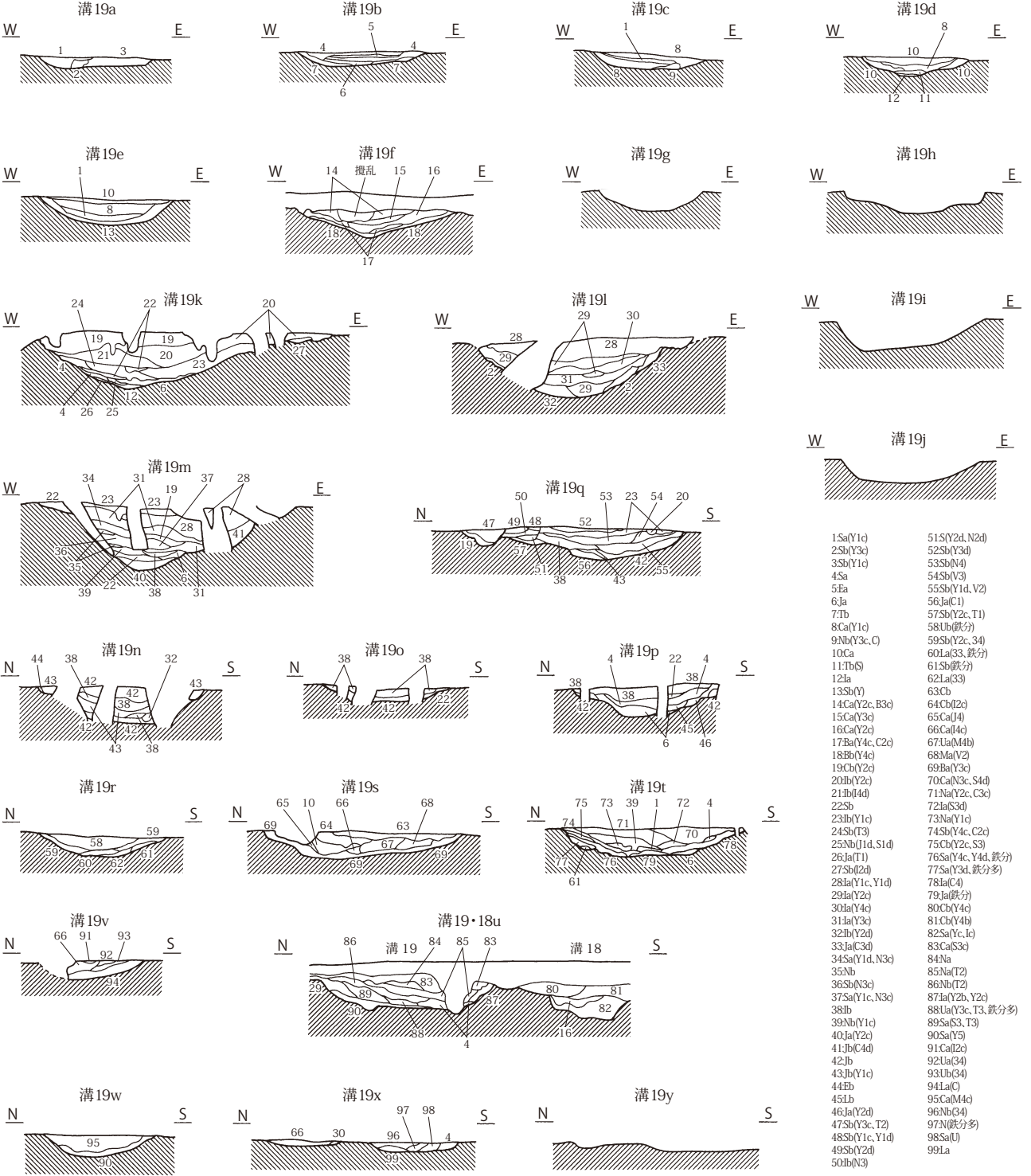
溝 14 断面図



溝 22 断面図

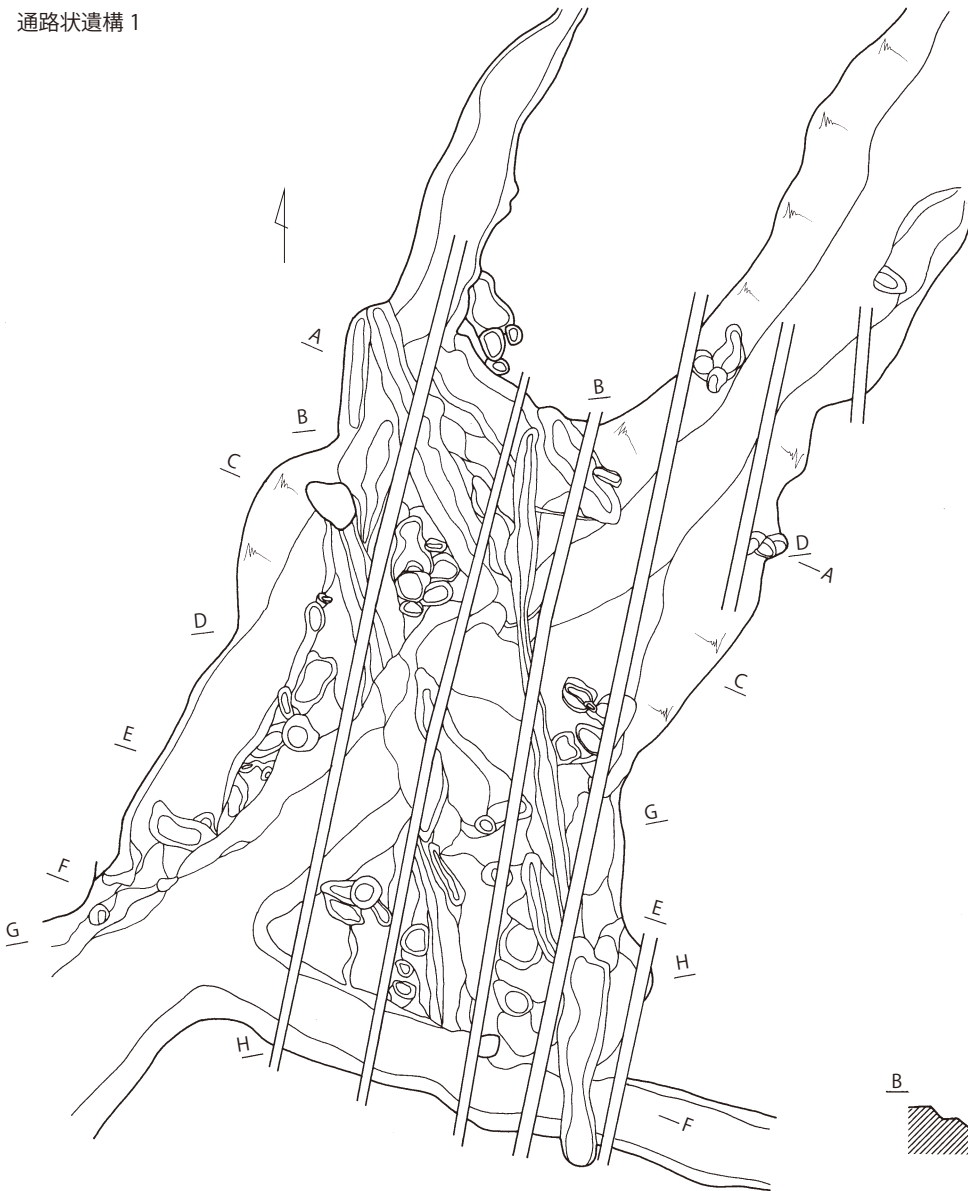


溝 19 断面図

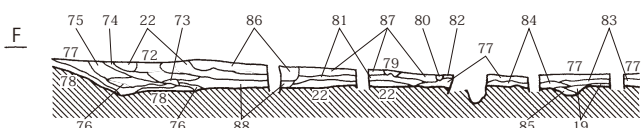
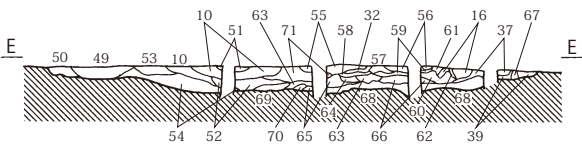
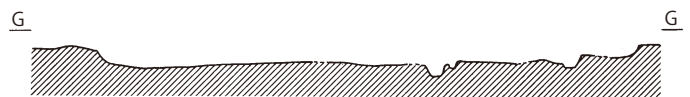
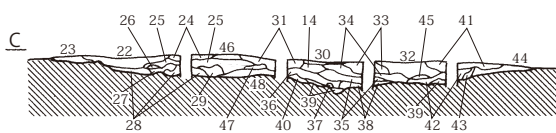
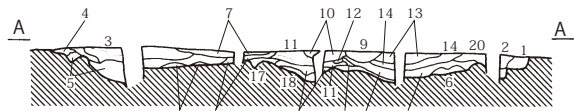


第 76 図 溝 9・14・19・22 断面図

通路状遺構 1



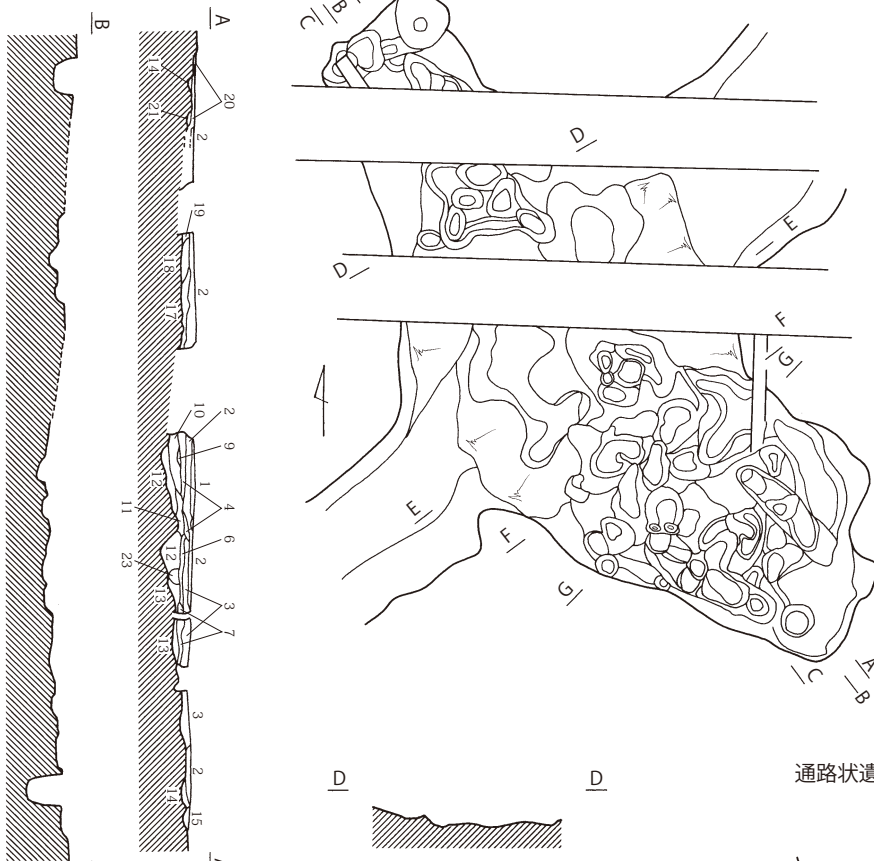
- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1Ca(Y3c, B3c) | 45Lb(34) |
| 2Ca(Y3c, X3c) | 46Mb(34) |
| 3Ca(Y3c, 41) | 47Lb(33, 鉄分) |
| 4Bb(Y3c) | 48Jb(34, 鉄分) |
| 5Bb(Y4c, Z3) | 49Ca(Y3c, B3d, 11, 41) |
| 6Ib(33) | 50Ca(Y3c, B3d, 41) |
| 7Ca(Y2c, B3d, 鉄分) | 51Cb(Y2c, I4, 41) |
| 8Bb(Y3c, 32) | 52Lb(Y1c, I4, 41) |
| 9Sb(Y1c, I4) | 53Cb(Y1c, B3d, 32) |
| 10Mb(Y1c, I4, 41) | 54Bb(Y1c, B3d, 31) |
| 11Jb(Y2c, I4, 鉄分) | 55Ca(Y3c, 31) |
| 12Ib(I4) | 56Ib(Y2c, I3, 鉄分) |
| 13Mb(Y1c, I3, 鉄分) | 57Lb(Y2c, I3) |
| 14Lb(I3) | 58Cb(Y3c, 33, 鉄分) |
| 15Ib(Y2c, I4) | 59Bb(Y3c, 33, 鉄分) |
| 16Ib(Y3c, 33, 鉄分) | 60Sb(Y4c, 32, 鉄分) |
| 17Jb(Y4c, 33, 鉄分) | 61Bb(Y2c, 31, 鉄分) |
| 18Cb(Y3c, 33) | 62Mb(Y2c, 32) |
| 19Bb(Y4c) | 63Bb(Y3c, 31, 鉄分) |
| 20Mb(Y2c, I4, 11, 41) | 64Jb(Y3c, 32) |
| 21Jb(Y2c, I4) | 65Sg(Y4c, 32, 鉄分) |
| 22Ca(Y3c, B3d) | 66Jb(Y4c, 32, 鉄分) |
| 23Ba(Y3c, 41) | 67Sb(Y3c, 32) |
| 24Lb(Y1c, I3, 鉄分) | 68Jb(Y3c, 33, 鉄分) |
| 25Mb(Y1c, I4, 鉄分) | 69Bb(Y3c, M3d) |
| 26Jb(Y2c, 34) | 70Ca(Y1c, M3d) |
| 27Jb(Y2c, C2d) | 71Mb(B2d, 33) |
| 28Sg(Y4c, C3d, 32) | 72Ca(Y4c, B3d) |
| 29Sb(I4, 鉄分) | 73Ca(Y4c, B2d) |
| 30Ca(Y1c, 31, 41) | 74Ca(Y2c, B3d) |
| 31Ca(Y2c, 32, 41) | 75Ca(Y2c, B2d, 41) |
| 32Lb(I3, 鉄分) | 76Ba(Y1c, B3d, 41) |
| 33Ib(I3, 鉄分) | 77Ja(Y3c) |
| 34Mb(I4, 鉄分) | 78Ab(Y4c) |
| 35Mb(I4, 41) | 79Ba(Y2c, A3d) |
| 36Jb(Y2c, 33, 鉄分) | 80Sa(Y2c, C2d, 鉄分) |
| 37Jb(Y3c, 32, 鉄分) | 81Jb(Y2c, 33) |
| 38Ib(Y3c, 32) | 82Bb(Y1c, C2d) |
| 39Bb(Y3c, 鉄分) | 83Ba(Y2c) |
| 40Sg(Y3c, 鉄分多) | 84Ja(Y3c, 31) |
| 41Jb(I4, 鉄分) | 85Bg(Y4c, 41) |
| 42Sb(I3, 鉄分多) | 86Ca(Y1c, B3d) |
| 43Bb(I4, 鉄分) | 87Ba(Y2c, B3d) |
| 44Bb(Y3c, C1d, 41) | 88Xa(Y2c, B1d, 41) |



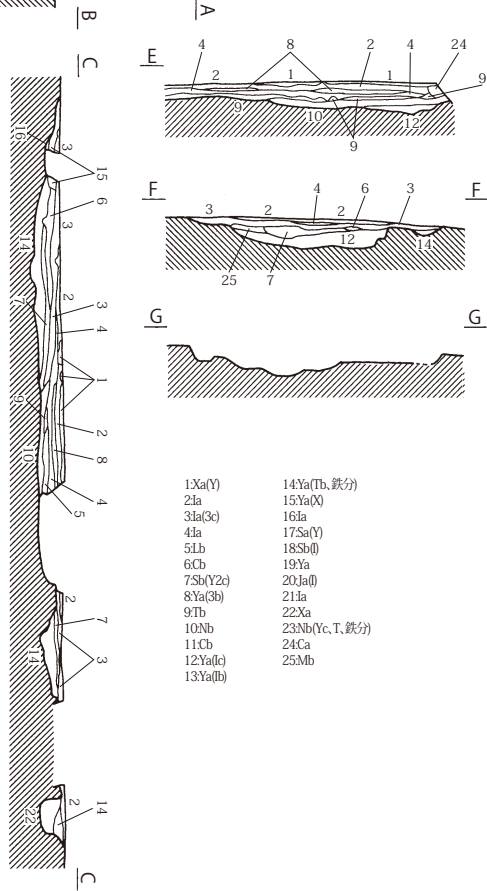
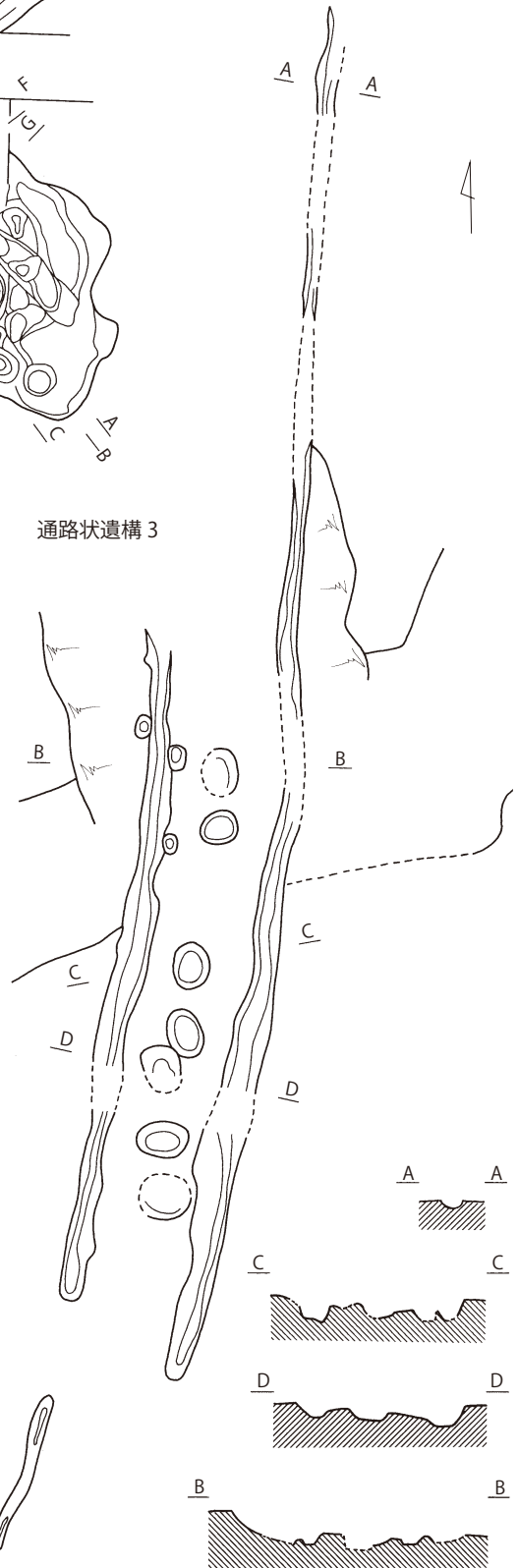
0 S=1/80 2m

第77図 通路状遺構 1

通路状遺構 2



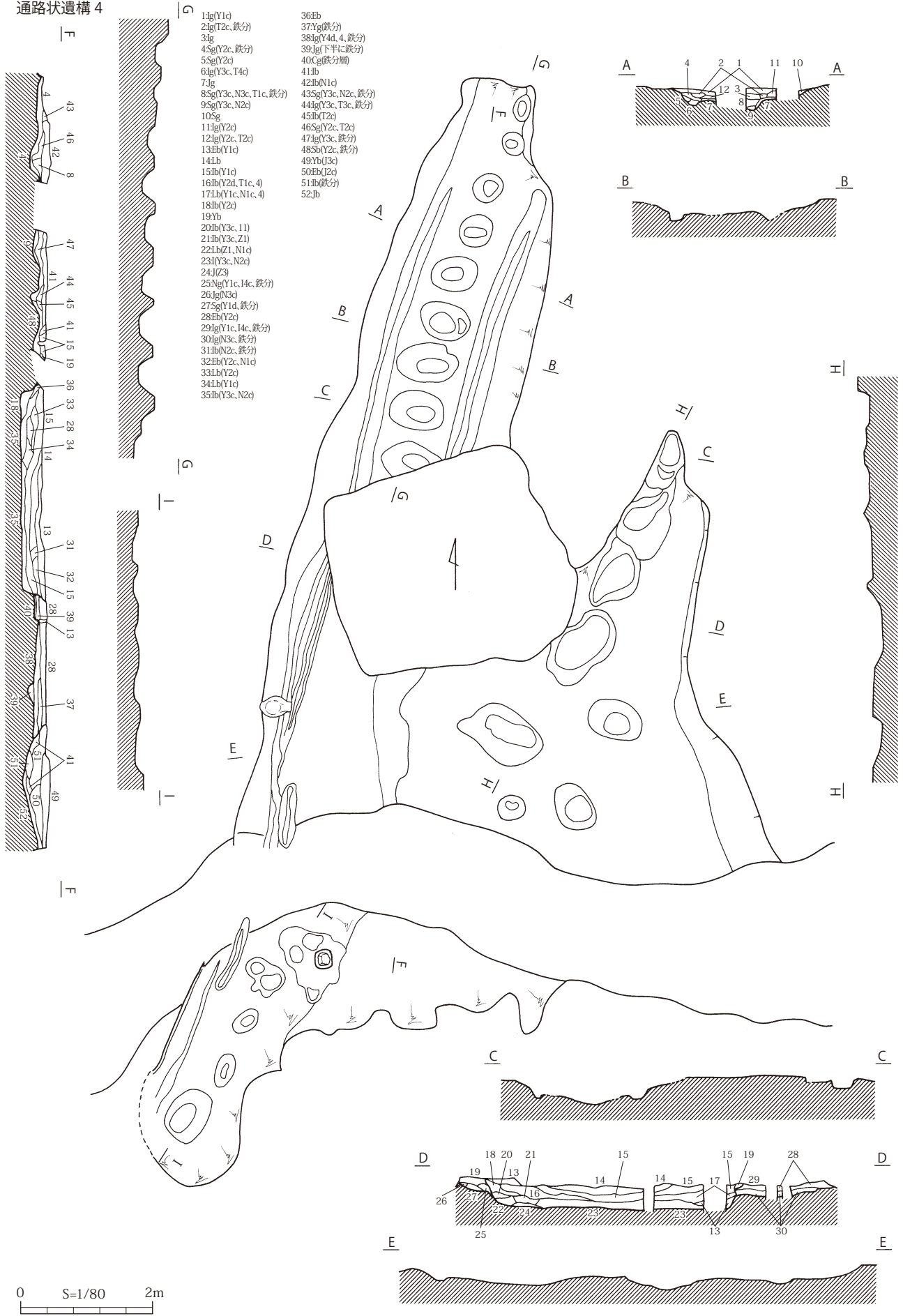
通路状遺構 3



- | | |
|-------------|-------------------|
| 1: Xa(Y) | 14: Ya(Tb, 鉄分) |
| 2: 2a | 15: Ya(O) |
| 3: 3a(3c) | 16: 1a |
| 4: 4a | 17: Sa(Y) |
| 5: 5Lb | 18: Sb(I) |
| 6: 6Cb | 19: Ya |
| 7: 7Sb(Y2c) | 20: Ja(I) |
| 8: Ya(3b) | 21: 1a |
| 9: Tb | 22: Xa |
| 10: Nb | 23: Nb(Yc, T, 鉄分) |
| 11: 1Cb | 24: Ca |
| 12: Ya(Ic) | 25: Mb |
| 13: Ya(Ib) | |

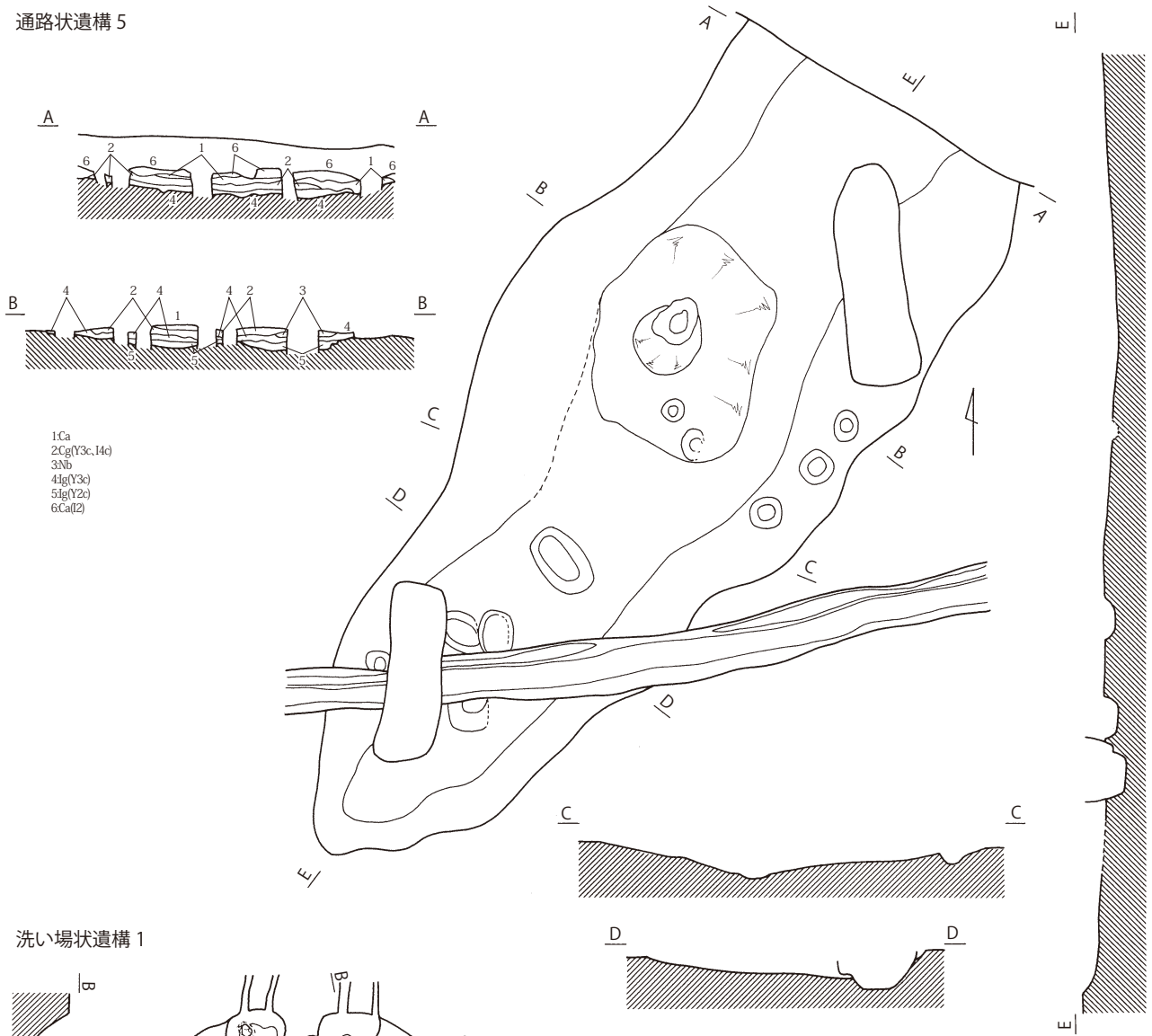
第 78 図 通路状遺構 2・3

通路状遺構 4

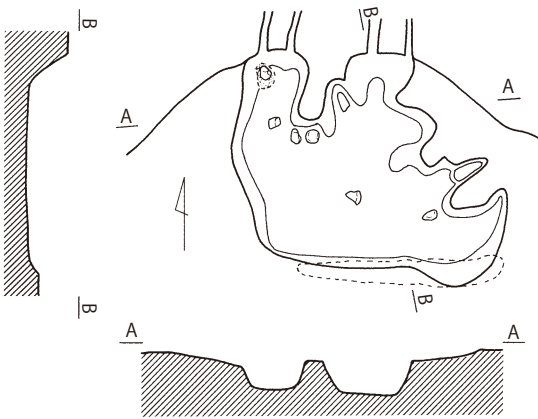


第79図 通路状遺構 4

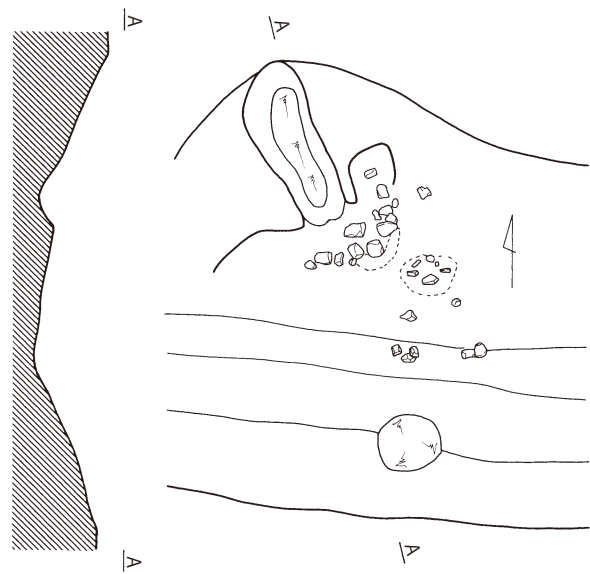
通路状遺構 5



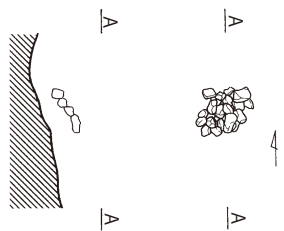
洗い場状遺構 1



洗い場状遺構 2

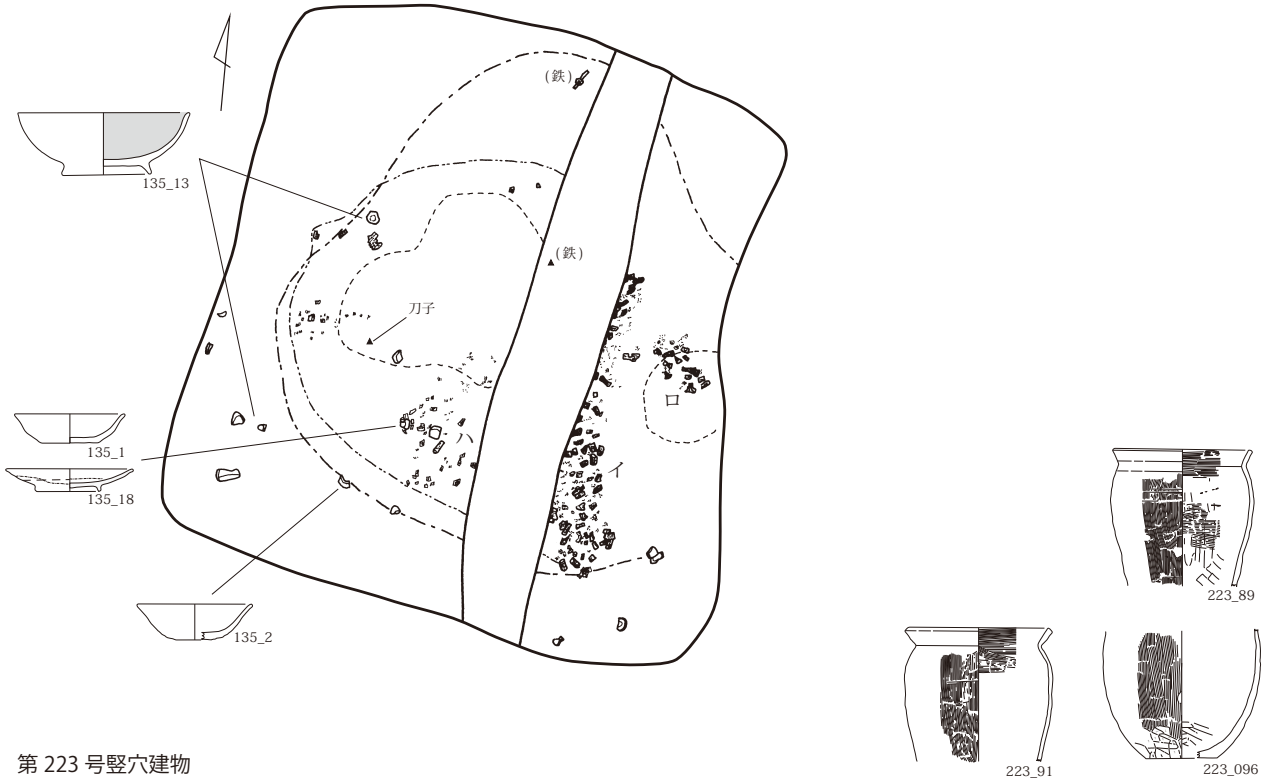


溝 6 集石 (特殊遺構)

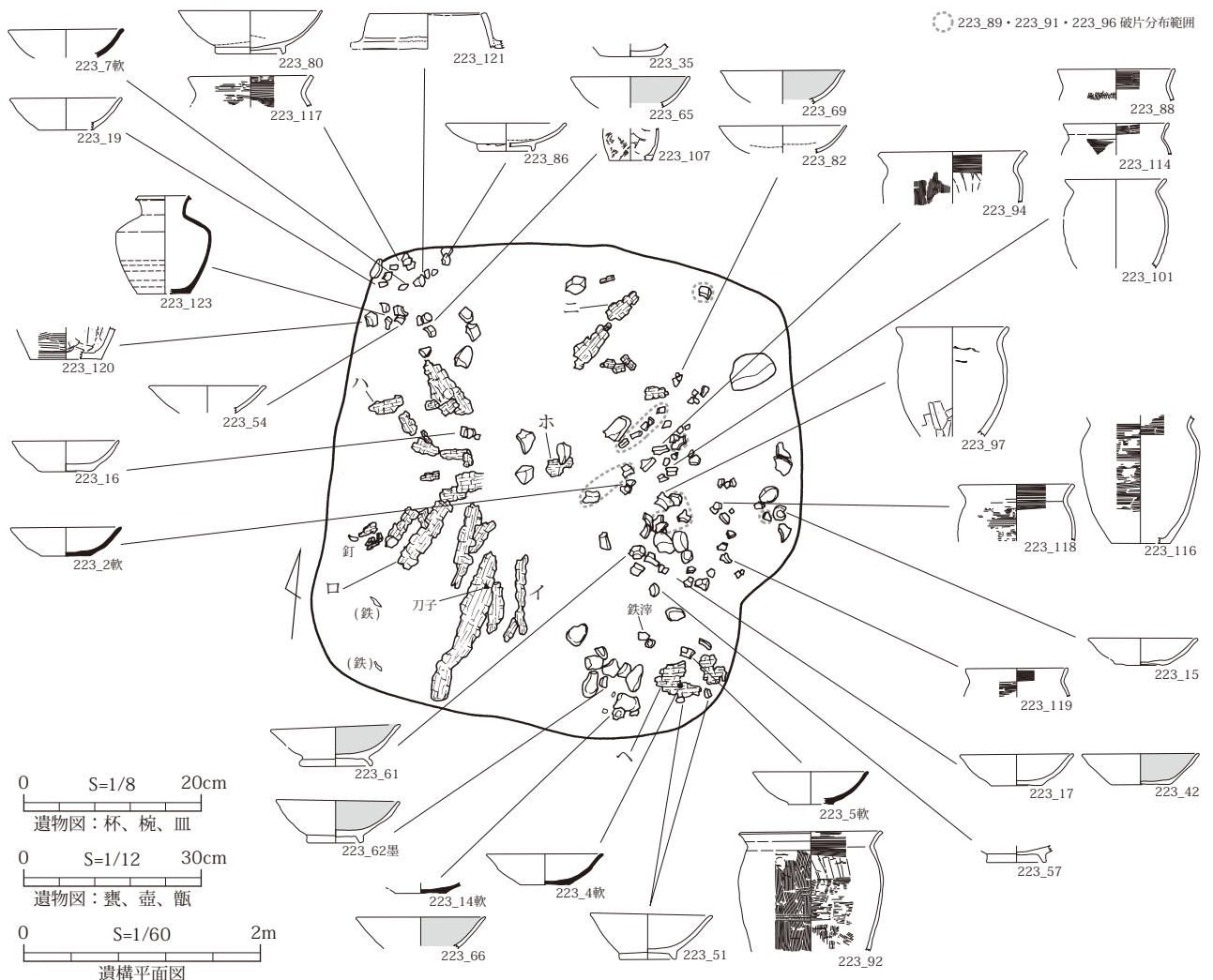


第 80 図 通路状遺構 5、洗い場状遺構 1・2、溝 6 集石

第 135 号竖穴建物

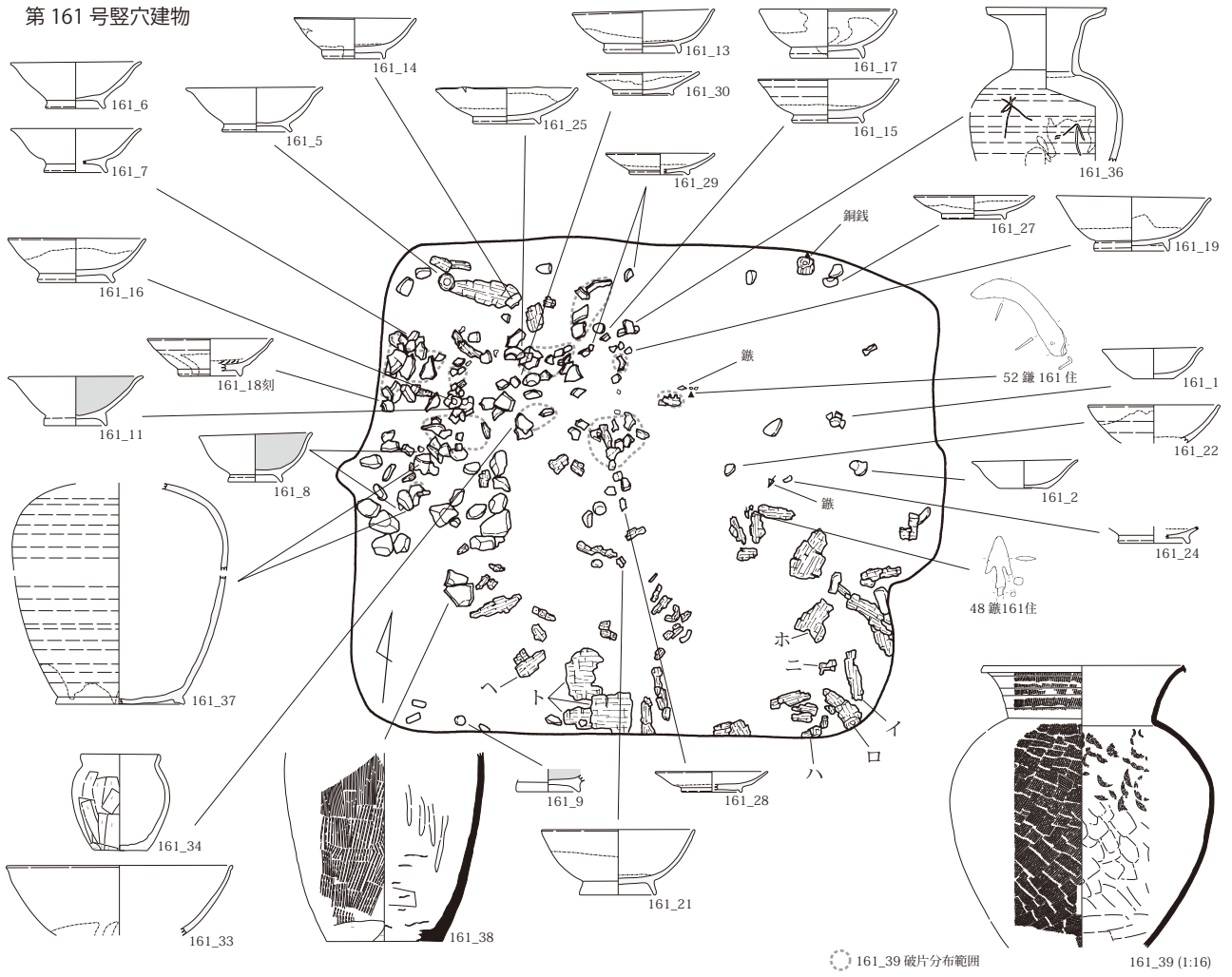


第 223 号竖穴建物

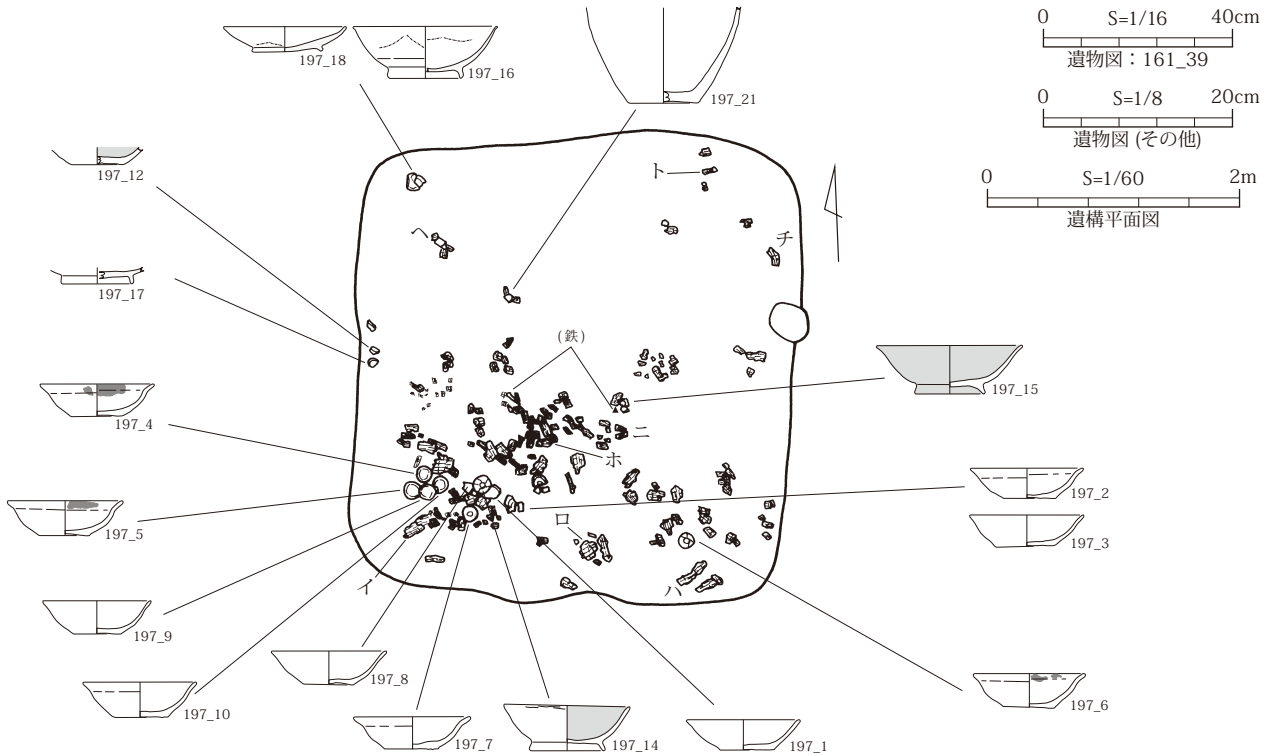


第 82 图 遺物出土狀況 1

第 161 号竖穴建物

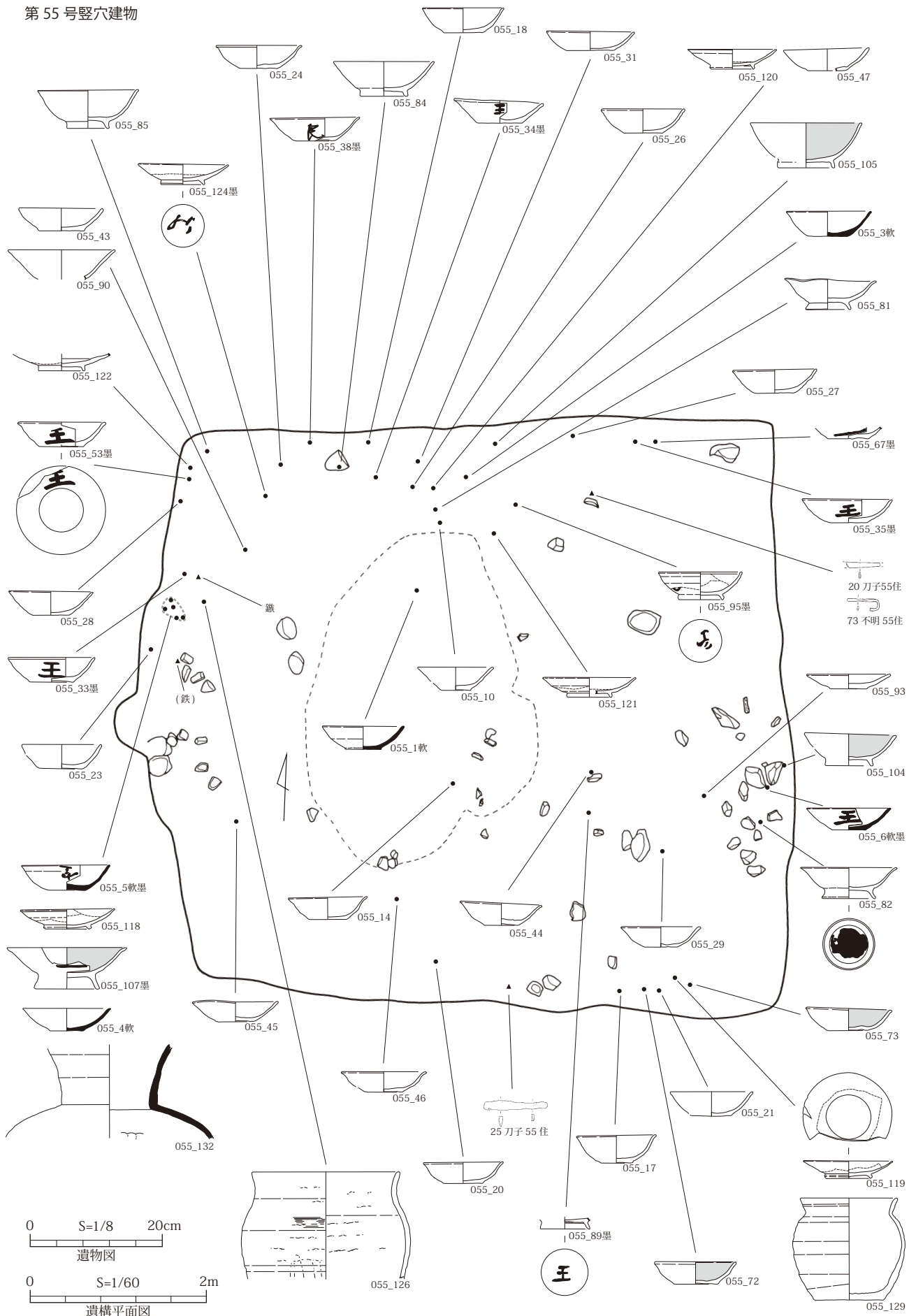


第 197 号竖穴建物



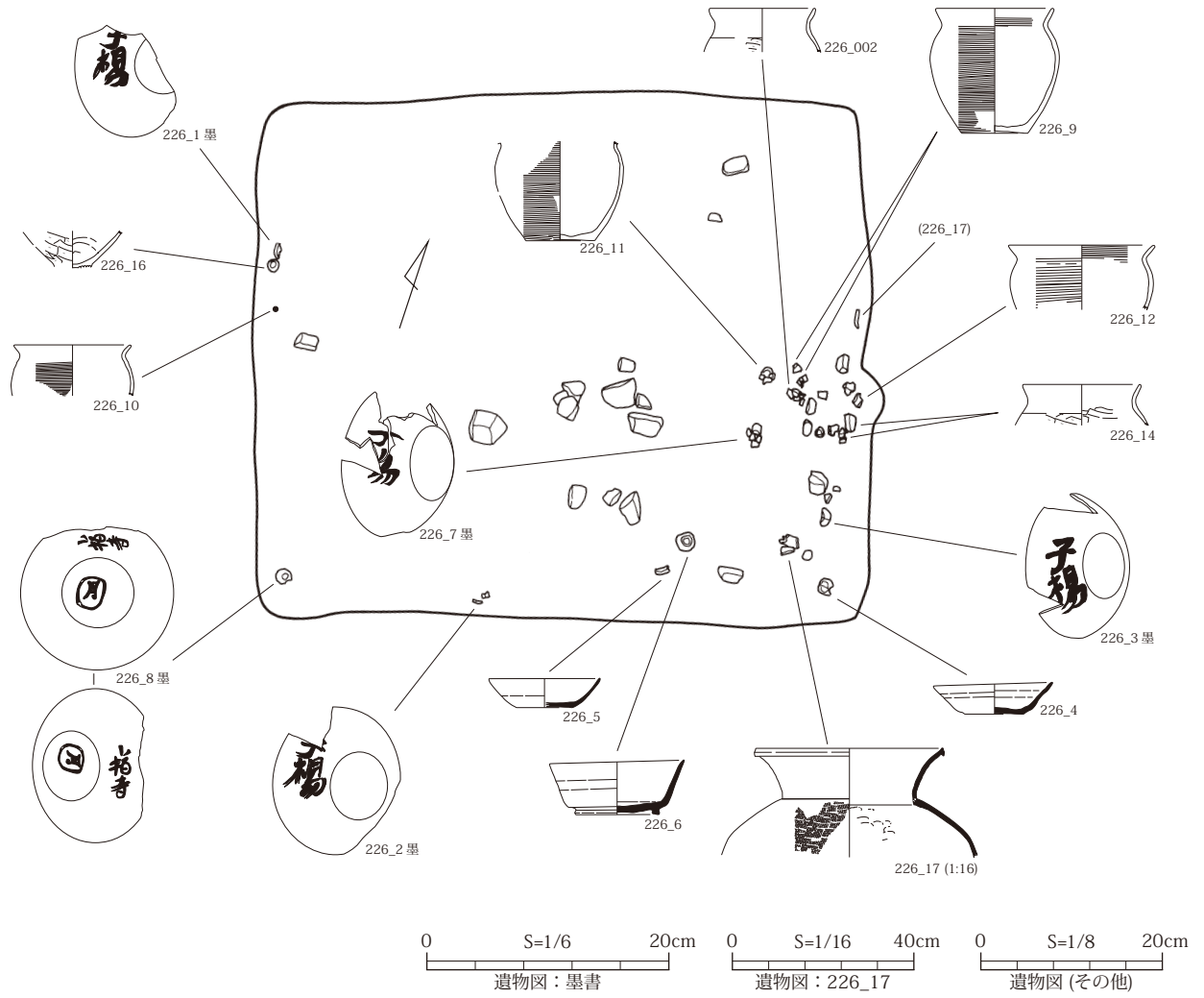
第 83 図 遺物出土状況 2

第 55 号竖穴建物

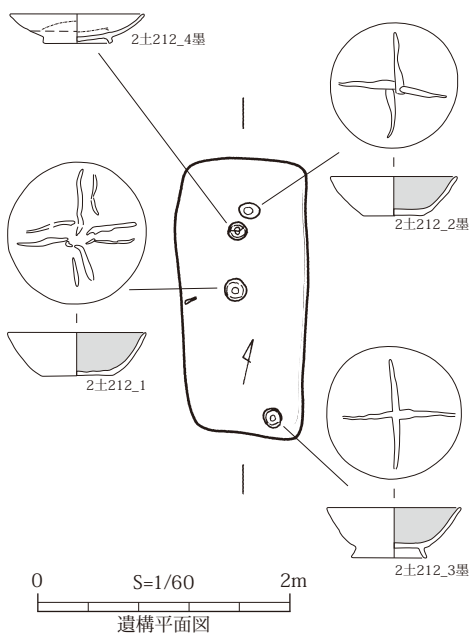


第 85 图 遺物出土状況 4

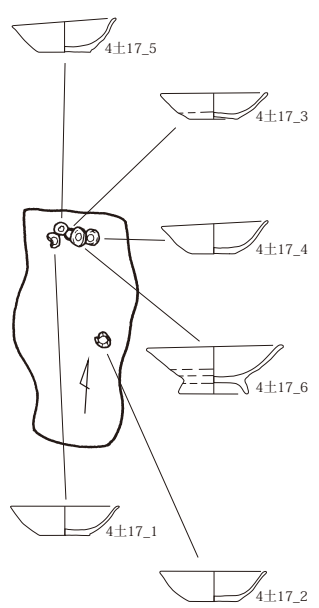
第 226 号竖穴建物



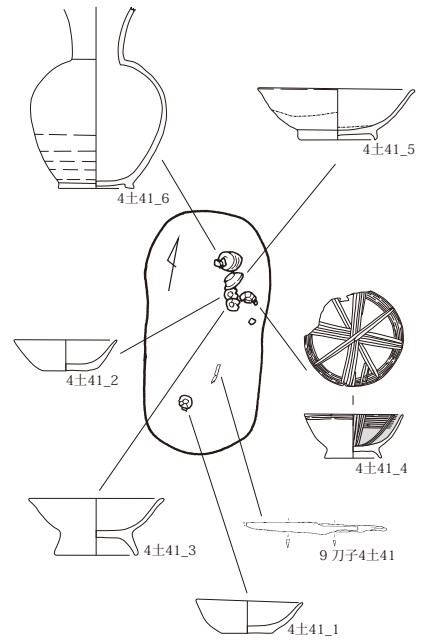
2-土 212



4-土 17



4-土 41



第 86 図 遺物出土状況 5

第3節 出土遺物

1 土器・陶磁器

(1) 概要と提示の方針

縄紋土器と古代に属する土器・陶磁器（焼き物。以下「土器類」という。）が出土し、把握できた総量は1,098kgである。縄紋土器はわずかなため、本書では特記しない限り「土器類」は古代に属するものを指す。土器類のほとんどが竪穴建物、土坑、溝址などの遺構内からの出土で、遺物包含層と遺構検出面からは少ない。竪穴建物からの出土量については、重量を第8表の中に示した。土器類の帰属時期は文献13・27に従うと、ほぼすべてが西暦9世紀の中葉から10世紀の末の間にあたる。

出土した土器類のうち遺存部が多いものについて実測図を作成し、遺構番号順に掲載した（第89～172図）。緑釉陶器と磁器は、他の土器類と同様に実測図を掲載したが、さらに実測不能の小破片を含めた全点を一覧表で示した（第22表）。墨書・刻書土器は、他の土器類と同様の基準で実測図を作成するとともに、墨書部分については正対図を作成した。通常の実測が不能な小片は墨書部分の正対図のみを作成し、墨書の全点を図化提示できるように努めた。墨書部分の正対図は集成を掲載し（第198～211図：274～287頁）、特殊な場合を除いて通常の実測図には掲出してない。図示掲載できた土器類は合計で4,319点、出土遺構別では、竪穴建物4,150点、土坑25点、溝128点、その他16点である。

(2) 種別

焼成の方法・技法で生じる焼き物の質的な違いを「種別」と表記する。文献13の分類に従うと、本調査で出土した土器類には、土師器、黒色土器A・B、須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁、青磁がある。土師器は素焼きの土器、黒色土器Aは土師器の内面に炭素を吸着させる黒色処理を行ったもの、黒色土器Bは黒色処理が内外面に及ぶものである。須恵器は窖窯を用いた還元炎焼成のもの、軟質須恵器は還元炎焼成に拠っていると推定されるが、焼成度合や胎土が須恵器と大きく異なる質の粗悪なものである。

量的には土師器と黒色土器A、須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器が土器類のほとんどを占めている。黒色土器Bはわずかしかがみられない。緑釉陶器は同時

期の他遺跡に比べると格段に多いが、種別構成の中ではまれな存在である。白磁と青磁は前者が2片、後者が1片確認されたのみである（緑釉陶器と磁器は本項(5)で再述）。

黒色土器Aの中には、使用時や廃棄後の被熱により黒色処理が失われ、一見して土師器のような色調を呈すものが散見されたが、当該種別に特有のミガキ調整の有無によって識別した。また、土師器と軟質須恵器には、双方の中間的な焼成の色調・質感を示すものが少なからずあり、それらについては胎土、器形などの要素を勘案して区別を行ったが、疑義が残るものもある。緑釉陶器には釉薬がすべて剥落したものもあったが、胎土と器形で判断した。

(3) 器種器形

名称と分類は概略を文献13に従う。大別して食膳具、煮炊き具、貯蔵具があり、種別を考慮せずに器種名を列举すると、食膳具は杯形土器（以下「杯」と略す。他の器種も同じ。）・蓋・椀・鉢・皿・耳皿・盤、煮炊き具は甕・小型甕・甑・足釜、貯蔵具は甕・壺・瓶に大きく分類できる。さらに杯は杯A・Bに、皿は皿A～Cに細分でき、蓋や椀、盤、鉢なども同様である。本遺跡における土器類の主要な種別と器種器形、それらに認められる製作時の調整痕の概要を第87・88図に示す。香炉や各種の瓶・壺類など希少な器種については他遺跡の事例を参考とした。

基本的に煮炊き具は土師器、貯蔵具は須恵器と灰釉陶器に限られる。一方、食膳具に分類される杯・椀・皿などの器種は複数の種別に及んでいる。本遺跡でみられる食膳具の器種器形名と種別との対応関係について第6表に整理した。

(4) 紋様・暗紋

わずかに紋様に類するものを持つ土器類があり、種別と器種の組み合わせが次のとおり認められる。

ア 櫛描の波状紋

須恵器甕の頸部に、櫛歯状工具で波状紋が描かれた例がある。甕A（大甕）に限られており、全形がわかるものはない。

イ 陰刻紋（第147図213_14・第127図138_39）

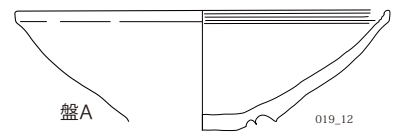
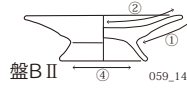
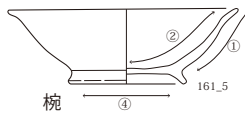
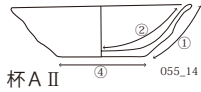
ごく一部の灰釉陶器と緑釉陶器に、焼成前の線描陰刻による花卉を描いた紋様がみられる。

ウ 緑彩紋

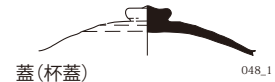
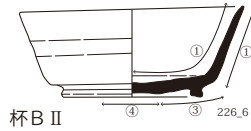
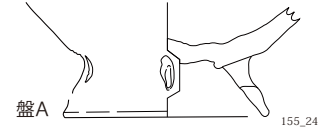
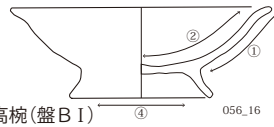
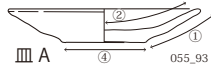
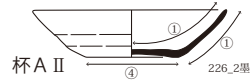
ごく一部の緑釉陶器に緑彩紋と推定されるものが認められる。いずれも小片で図示できず、断定はできない。

エ 暗紋（第196・197図）

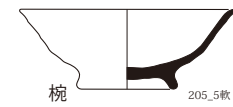
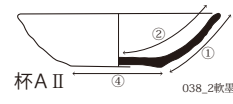
土師器



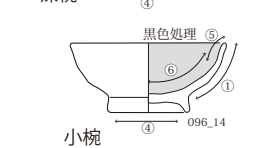
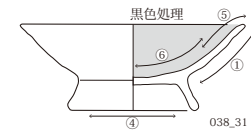
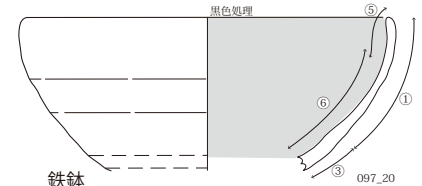
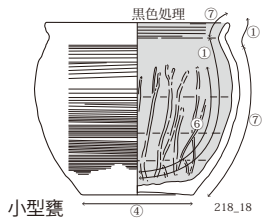
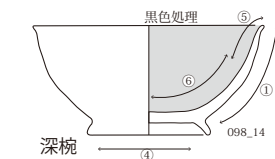
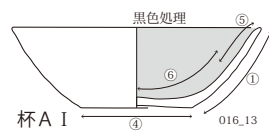
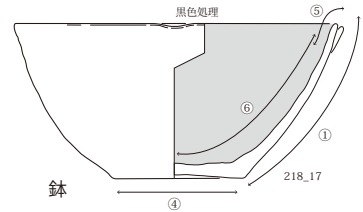
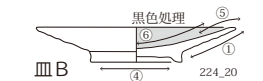
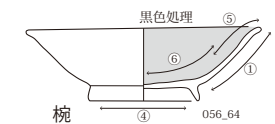
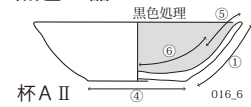
須恵器



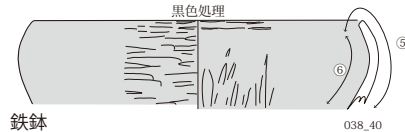
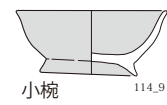
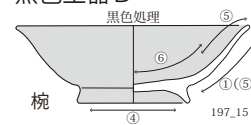
軟質須恵器



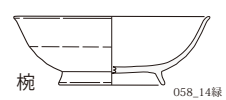
黒色土器A



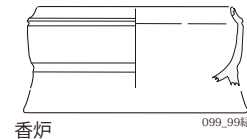
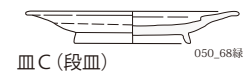
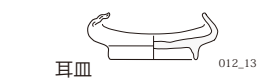
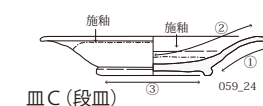
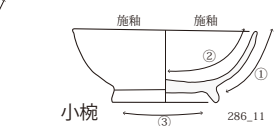
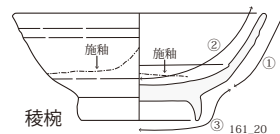
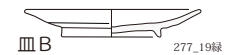
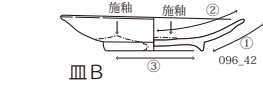
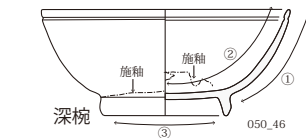
黒色土器B



緑釉陶器



灰釉陶器



第87図 器種器形一覧(1) おもな食膳具

0 S=1/5 10cm

器種 種別	蓋	杯		皿			椀				鉢		盤		
		A	B	A	B	C	耳	椀	足高	深	小	鉢	鉄	A	B
須恵器	○	●	○												
軟質須恵器		●						△							
土師器		●		○			△	●	○					○	○
黒色土器A		●			○		△	●	○	○	○	△			○
黒色土器B								△			○		○		
灰釉陶器					●	○	△	●		○	○				
緑釉陶器					●	○	△	●		△	△				

当該種別中の相対量で、多:●、少:○、稀れ:△、空欄:なし、を示す。

第87図 調整痕の凡例

- ① ロクロナデ
- ② 同上(コテ状工具使用?)
- ③ 回転ヘラケズリ
- ④ 回転糸切り
- ⑤ ヘラミガキ(横)
- ⑥ ヘラミガキ(縦・放射)
- ⑦ カキメ

※ 灰釉陶器椀皿類の底面調整痕は回転ケズリを基本とするが、回転糸切り痕が確認されたものは各実測図の底部中央に「糸」と記した。

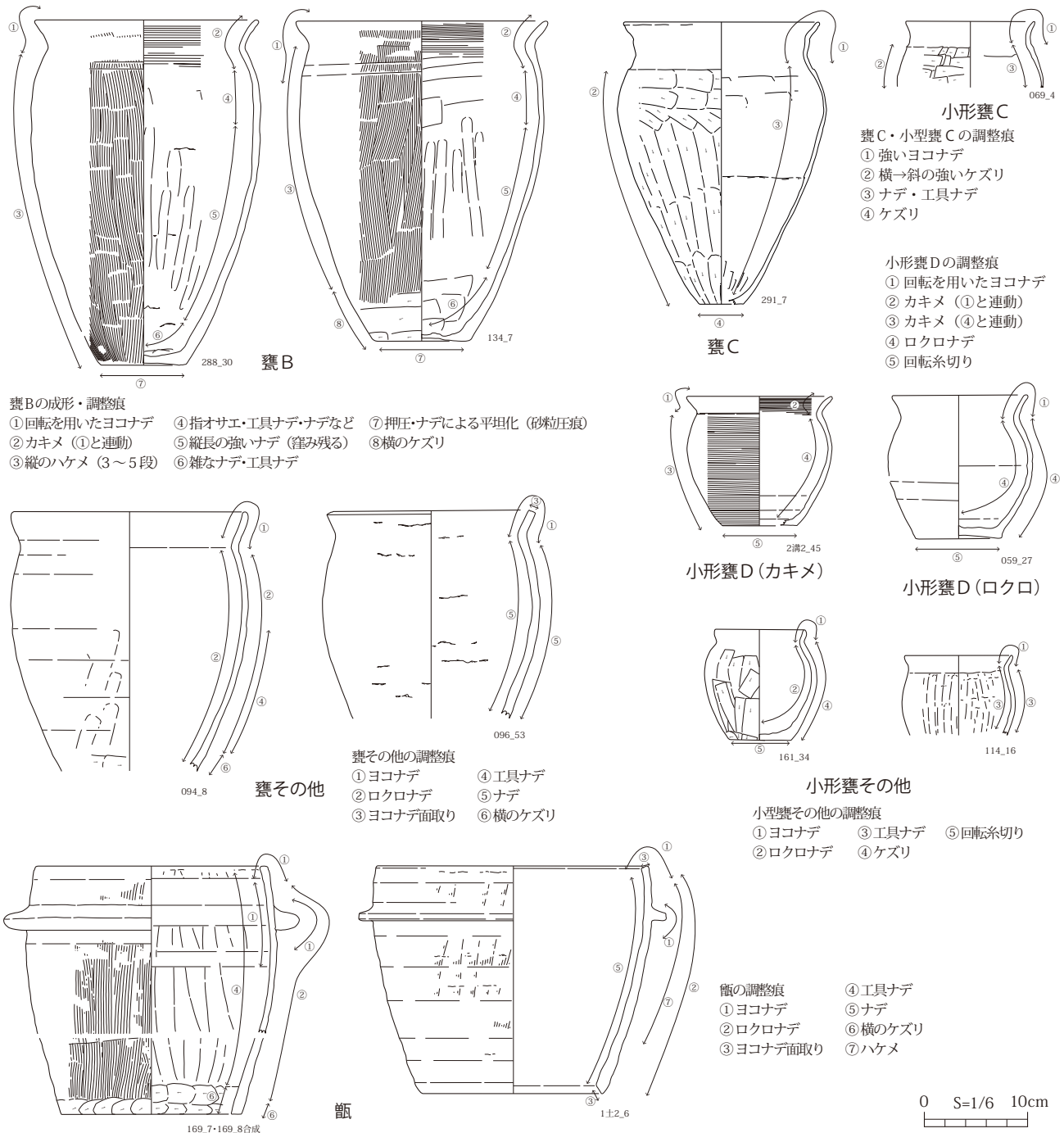
第6表 種別と器種器形の対応

黒色土器Aの杯・椀の内面に紋様の効果を図示した如き十字、螺旋、花卉状の暗紋が認められる。十字は、4分割する四方、6分割する六方、4分割をさらに2分する八方があり、まれに三方、五方、七方もみられる。十字の間に螺旋が組み合わされるものもある。黒色土器Aの杯・椀の内面には、精粗はあるが全面にミガキが行われるのが通例だが、ミガキ（特に体部の放射状ミガキ）を省略し、あたかも四方や六方、八方十字の暗紋のみで済ませている個体が多い。暗紋の分類や時期的な点については第4章第2節で別に触れる。

(5) 緑釉陶器・磁器 (第194図、第22表)

当地域の遺跡としては突出した量の緑釉陶器が出土している。総点数は237点、重量では3,589gで、97点を図化提示し、全点を一覧表で示した。出土遺構はほとんどが竪穴建物で、墓址を含めた土坑、溝址からの出土は僅かな破片のみであった。意図的な廃棄や納置などを想定できる出土状況を示したものはない。

器種・器形は椀と皿が大半を占め、僅かに壺・瓶類と合子（香炉）が伴う。より濃い緑釉で紋様を描いたと思われるもの（緑彩紋陶）や、施釉・焼成前



第88図 器種器形一覧(2) おもな煮炊き具

に花卉紋様を陰刻したもの（陰刻花紋陶）もわずかに伴っている。

器種・器形を問わず、色調（釉調）や胎土によっていくつかの類型に分けることができる。それについては文献 13・27 を参考とした。

(6) 墨書土器（第 198～211 図・第 24 表）

墨書や刻書による文字・記号が認められた土器類は 533 個体、記された墨書・刻書は 563 点となる。この内 205 点は一部の残存あるいは墨痕で判読ができない。墨書が記された土器類の種別、器種は土師器・黒色土器・須恵器・軟質須恵器の杯 A、土師器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器の椀・皿に限られるが、刻書は土師器小形甕にも記されている。墨書が記された部位は体部外面 (A) と底部外面 (B)、稀に内面 (C) で、A・B の双方に記されている個体もある。また体部外面の 2 カ所以上に記される例も複数みられた。土器体部に記された墨書の向きは、墨書の上下が明白なもので見ると土器を正位に置いた時に字句も正位となるもの (a)、逆位となるもの (b)、土器の口縁部を左側に置いた時に字句が正位になるもの (c)、右側に置いた時に正位となるもの (d) があり、a にはさらに 2 文字を横書きしたもの (a2) がわずかにあった。

(7) 土器群

土器類のほとんどは前述のとおり遺構内からの出土である。これらを各土器の単体ではなく、それぞれの遺構ごとの土器群として総体で扱うことによって、当該遺構の使用や埋没の時期、埋没状況、性格などを探る有力な手掛かりにできる。また、地域における当該期の土器様相に迫ることも可能になる。土器群の段階（時期）区分については、第 4 章第 2 節で設定したものをを用いる。

ア 竪穴建物出土の土器群

竪穴建物の埋土（覆土）中や床面（底面）から出土したもので、本調査で把握された土器群の中で量的にも内容の点でも主体をなす。出土状況から、意図的な納置や一括廃棄の可能性が推定できるものと、埋土形成時の無作為な廃棄とみられるものがあり、後者が大半を占める。ただし、後者であっても遺構ごとにかなり時期的なまとまりが認められ、土器群として把握する意義は少なくない。第 8 表に竪穴建物出土の土器群について、種別・器種器形の構成や量的な内容、時期等を示した。また、出土状況に問題がなく、点数や器種などの内容が良い土器群 30 群を用いて、本遺跡出土土器の段階（時期）区

分の決定を試みた。

イ 掘立柱建物出土の土器群

掘立柱建物を構成するピット掘方のいくつかから少量の土器類が出土したのみで、内容的にも乏しく土器群としての特記はむずかしい。

ウ 土坑出土の土器群

土坑から出土した土器類は、次項の墓址を除き量的に少なく、内容的にも取り上げるべきものは少ない。4-土 90 からは縄紋土器がまとまって出土しており、それらを伴った遺構が本遺跡では稀な縄紋中期のものであることを示している。

エ 墓址出土の土器群

墓址と推定される 5 基の土坑のうち、良好な出土状況を示した土器群を取り上げる。これらは出土位置などから墓壇内に納置、副葬されたものと考えられる。

① 2 区土坑 212 出土土器群

黒色土器 A の杯 A 2 点、椀 1 点、灰釉陶器の皿 1 点で構成される。黒色土器 A は杯・椀共に内面は口縁一帯に横のミガキを行うが体部の放射状ミガキは皆無で四方十字暗紋が描かれる。灰釉陶器の皿は体部下半から底面全面に回転ケズリが行われ、施釉はハケヌリである。Ⅲ期新からⅣ期古のまとまった資料と考える。

② 4A 区土坑 17 出土土器群

土師器の杯 A 5 点、椀 1 点で構成される。杯 A の口径はほぼ揃っており、平均値は 11.0cm を測る。Ⅴ期新のまとまった資料である。

③ 4B 区土坑 41 出土土器群

土師器の杯 A 2 点、椀（盤）1 点、黒色土器 A の椀 1 点、灰釉陶器の椀 1 点、長頸壺 1 点の計 6 点で構成される。杯 A の口径は 11.1cm と 10.8cm を測る。黒色土器 A の椀は小椀で、土師器の椀も盤に近いので、Ⅴ期新のまとまった資料と考える。

オ 溝址出土の土器群

溝址の規模によって土器類の出土量は大きく異なる。小規模な溝址からの出土は概して僅少で、内容的にも乏しく土器群としての特記はむずかしい。規模が長大な溝址には多量の土器類を出土したものがあり（溝 2・6）、それらの溝址が機能していた時期や期間等の検討に有効である。

① 溝 2 出土土器群（第 170・171 図、第 9 表）

2 区中央部を中心に 5.09kg の土器類が出土しており、47 点を図示できた。食膳具は須恵器杯 A、黒色土器 A の杯 A が主体で、須恵器杯 B と灰釉陶器椀

が伴う。土師器杯Aと軟質須恵器杯Aは混入と見なせる数値であろう。黒色土器Aの椀・皿、土師器の杯・椀がないこと、土師器甕Bが多量にあり、同甕Cもわずかに伴うことからI期新のまとまった資料といえる。灰釉陶器は椀が1点出土したのみで、体部の腰が張って四角く細い高台を持ち、釉は内面のみにハケ塗りされる、あまり類例をみないものである。

② 溝4出土土器群（第171図、第9表）

破片ばかりであるが2.9kgの土器類が散発的に出土し、11点を図示できた。須恵器と黒色土器Aの杯Aを中心として、須恵器の蓋B、黒色土器Aの椀（皿）、土師器の甕Bが伴っており、若干の時間幅はあるがI期からII期の様相にまとまっている。

③ 溝6出土土器群（第171図、第7・9表）

地点によって多少差はあるが埋土の上・下層を問わず多くの土器類が出土した。総量は24.7kgに及び、47点を図示できた。出土状況に意図的な配置や廃棄を示すものは認められず、ほとんどが埋土形成時に周囲から入り込んだものと考えられる。その点でまとまった資料とはいえないが、溝6の遺構としての時期や性格を探るうえで重要な要素なので土器群として把握し、図化不能品を含め全点を計量した。食膳具の器種構成は、重量比で土師器の杯・椀が45%、黒色土器Aの杯・椀が27%、灰釉陶器の椀・皿が21%を占め、須恵器の杯Aは3.8%、杯Bは0.3%、軟質須恵器の杯Aは3.3%にすぎない。土師器の甕類は甕Bが主体だが、Ⅲ期以降に現れてくる器面調整に回転を使わない「その他の甕」としたものが重量比で25%に達する。また甕が甕類に対して13%の比率で存在する。これらの点から見

ると、土器単体では時期幅に大きな広がりがあるが、総体の重量比では明らかにIV期以降に重心がある。最も新しい時期を示す土器類は、口径の小さい土師器杯A（第171図2溝6(4_3)）や底面に回転糸切り痕を残す灰釉陶器の椀皿類（第171図2溝6(5_24・5_30)）でV期古にあたる。これらが本土器群の最終的に形成された時期を示し、溝6の埋没時期をも示すと考える。

④ 溝19出土土器群（第172図、第9表）

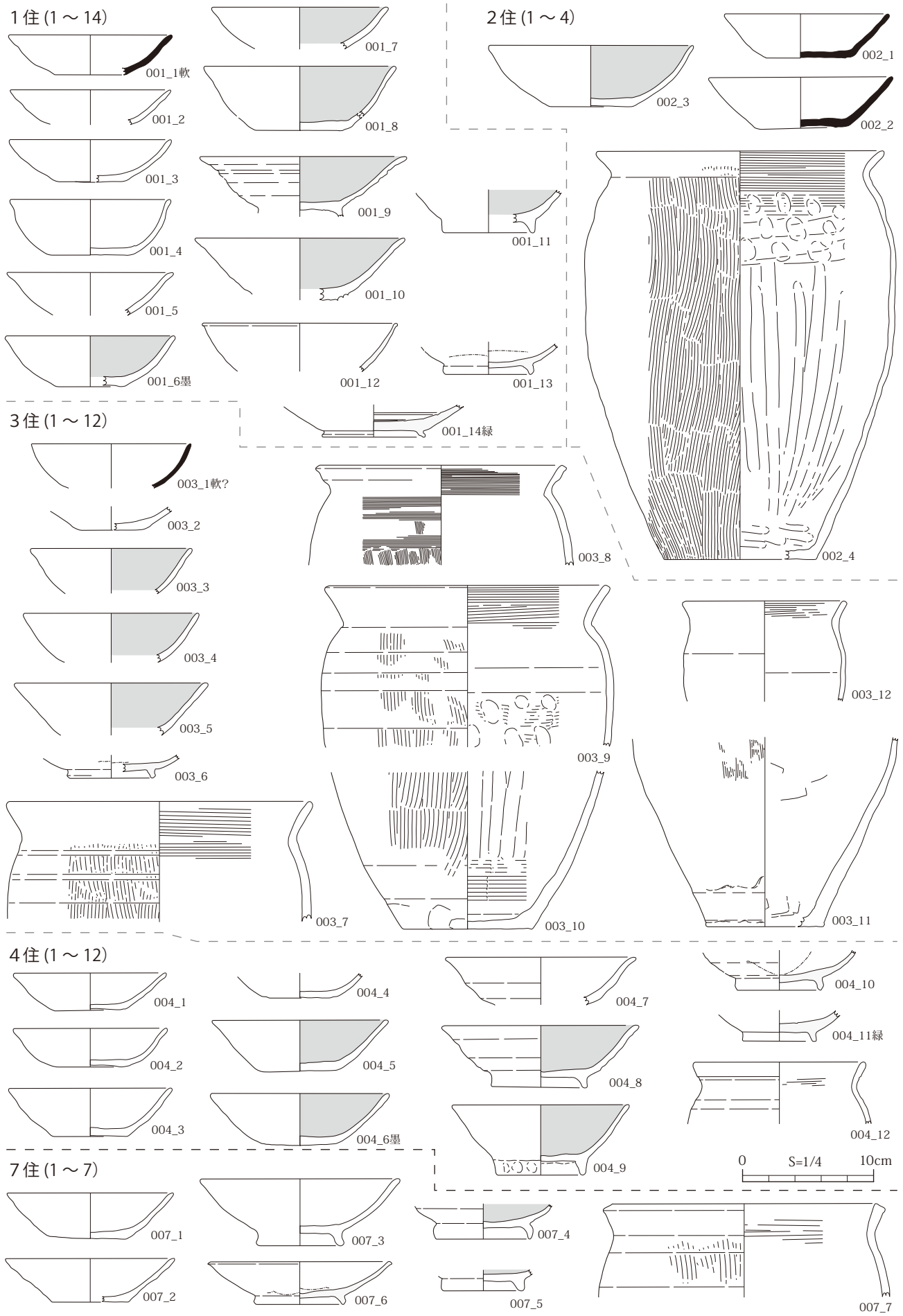
4区で2.5kg、5区で4.5kgの土器類が出土し、21点を図示できた。土師器、黒色土器A、須恵器と軟質須恵器の杯A、灰釉陶器の椀、須恵器の壺類と突帯四耳壺、大甕などの器種がみられるが、主体は土師器と黒色土器Aの杯Aである。この杯Aのうち8点は5区の通1・2間の底面や埋土下層に一括品で点々と残された出土状態が類似するもので、廃棄に人為の影響も考えられる。土師器杯Aの2点は口径11.7cmで揃い、黒色土器Aの6点も口径が12.5cm前後で底径が5cm未満と小さく、腰が張る外形も酷似している。時期は土師器の口径からV期古にあたり、黒色土器Aも特殊な規格品と見れば同じ時期まで下すことが可能かもしれない。この時期まで溝19が機能していたと考える。

カ その他の遺構出土の土器群

通路状遺構、道路状遺構、ピット、ピット群などの遺構があるが、いずれも少量の土器類が出土しているのみで、内容的にも乏しく土器群としての特記はむづかしい。

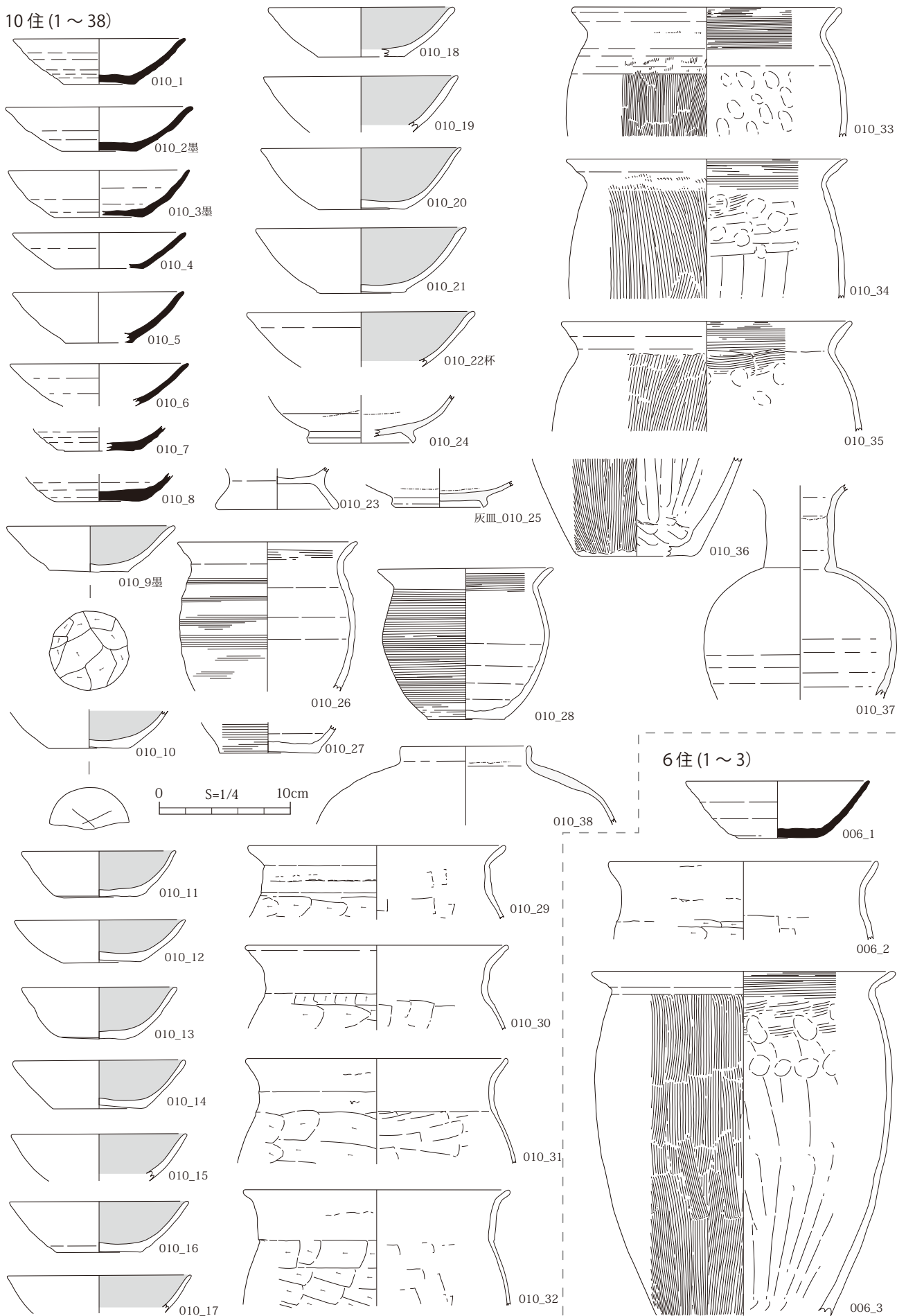
形態等 器種・器形	食膳具												煮炊き具					貯蔵具ほか				区間計			
	土師器				黒色A				須恵器				甕					須恵器		灰釉			緑釉	縄文	
杯A	椀	杯椀	盤A	杯A	椀	杯椀	杯椀	杯A	杯B	杯A	椀	椀皿	計	B	C	他	甕計	小甕	甕	壺	甕	壺瓶			香炉
b-c間	128	160	192	0	82	298	114	78	0	26	292	0	1370	332	32	280	644	96	0	22	770	50	0	2952	
c-d間	2	10	10	0	6	46	14	4	0	6	42	0	140	62	0	0	62	10	0	0	46	0	0	258	
d-e間	298	268	352	0	110	166	242	38	4	46	454	22	2000	292	8	434	734	206	0	18	912	16	0	3886	
e-f間	88	124	96	0	32	32	48	50	0	60	98	0	628	306	2	152	460	92	32	28	268	6	0	1514	
f-g間	94	60	156	0	20	80	90	60	0	10	34	0	604	576	6	0	582	72	116	80	292	18	0	1800	
g-h間	44	44	52	0	64	60	42	36	6	4	38	0	390	84	10	40	134	70	0	0	290	62	8	954	
h-i間	76	100	56	0	8	72	58	16	0	30	292	0	708	178	40	130	348	10	222	0	476	12	0	1776	
i-j間	118	312	243	0	54	296	148	16	0	38	84	0	1309	288	54	214	556	74	386	16	646	46	0	3051	
j-k間	66	132	10	0	0	0	18	0	0	0	234	0	460	142	0	0	142	30	0	0	92	0	0	724	
k-l間	44	114	62	0	0	12	28	10	6	10	12	0	298	290	18	152	460	108	0	0	348	6	0	1360	
トレンチc	44	162	130	0	58	44	128	36	4	36	102	0	744	714	7	220	941	50	24	56	60	24	0	1919	
トレンチd	16	82	46	20	12	16	20	0	0	24	188	0	424	100	1	16	117	30	0	2	234	36	0	849	
トレンチe	30	10	36	0	16	4	2	0	0	0	56	0	154	28	0	12	40	6	0	6	102	2	0	310	
トレンチf	44	8	56	0	36	16	36	4	0	16	68	6	290	98	2	26	126	56	0	10	0	8	0	76	566
トレンチg	12	0	4	0	6	20	6	0	0	6	18	0	72	38	0	0	38	0	0	56	228	2	0	396	
トレンチh	12	20	34	0	14	0	16	18	0	36	72	0	222	104	0	0	104	12	60	0	404	0	0	30	832
トレンチi	38	4	62	0	32	22	16	1	10	0	76	0	261	40	42	0	82	20	0	0	180	48	0	0	591
トレンチj	40	10	50	0	28	4	24	8	0	2	4	0	170	52	14	0	66	20	0	0	8	0	0	0	264
トレンチk	14	0	14	0	4	0	14	20	0	0	18	0	84	42	0	0	42	14	0	8	120	0	0	30	298
トレンチl	2	0	12	0	0	0	0	6	0	0	10	0	30	12	0	0	12	12	0	0	0	32	0	0	86
特殊遺構	24	162	24	0	0	0	4	0	0	0	6	0	220	34	0	0	34	0	0	0	30	8	0	0	292
器種計	1234	1782	1697	20	582	1188	1068	401	30	350	2198	28	10578	3812	236	1676	5724	988	840	302	5506	376	8	356	24678
食膳具比率(%)	11.7	16.8	16.0	0.2	5.5	11.2	10.1	3.8	0.3	3.3	20.8	0.3	100	67	4	29	100								

第7表 2区溝6出土土器類重量表(g)



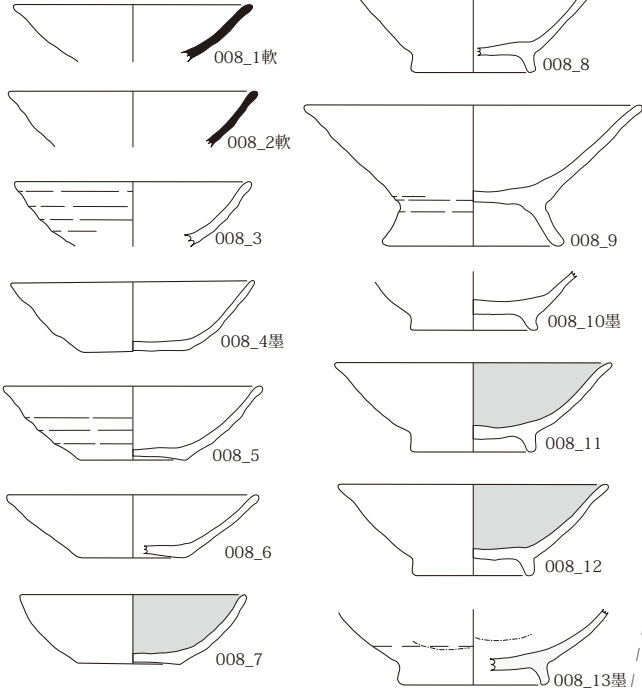
第 89 図 出土土器類実測図 (1)

10住(1~38)

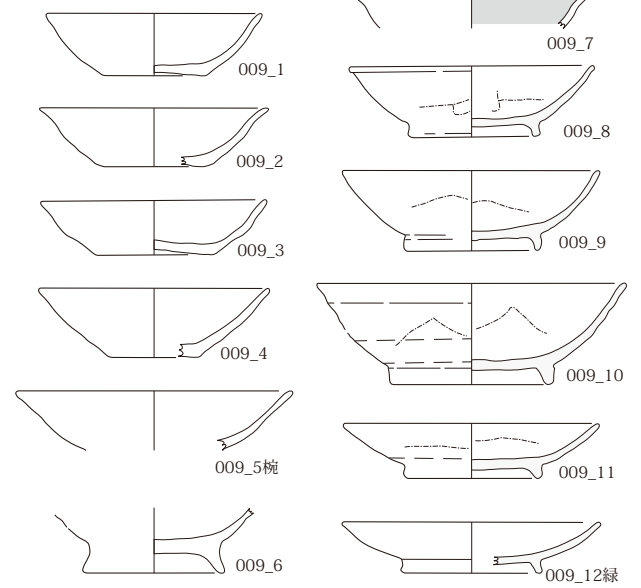


第90图 出土土器類実測图(2)

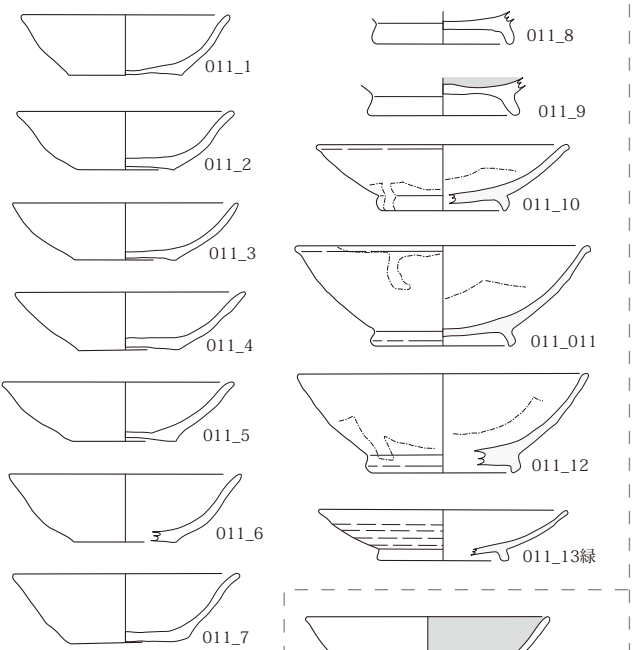
8住(1~13)



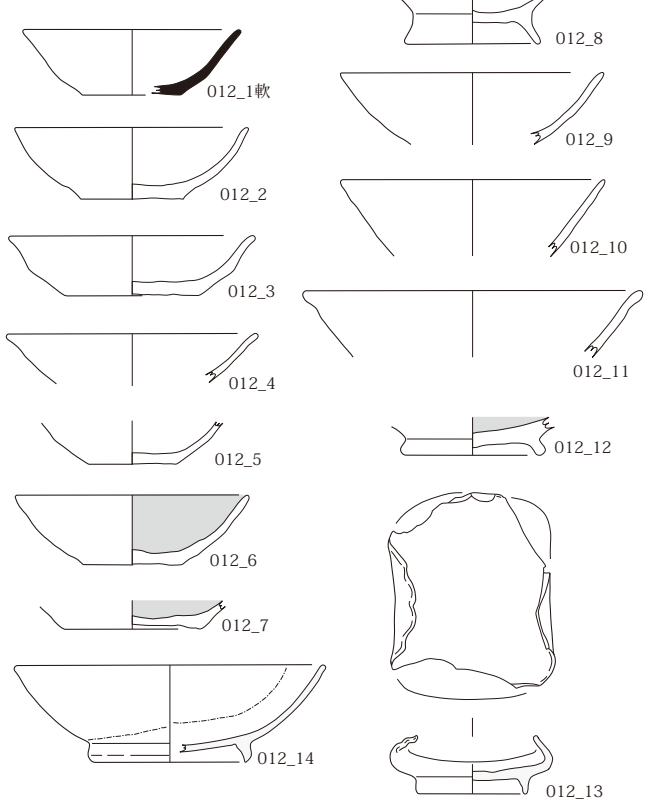
9住(1~12)



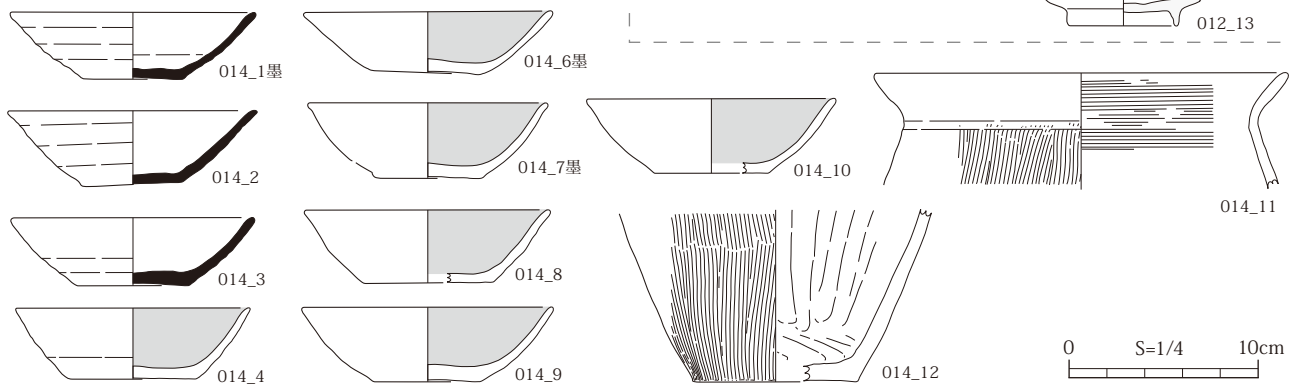
11住(1~13)



12住(1~14)

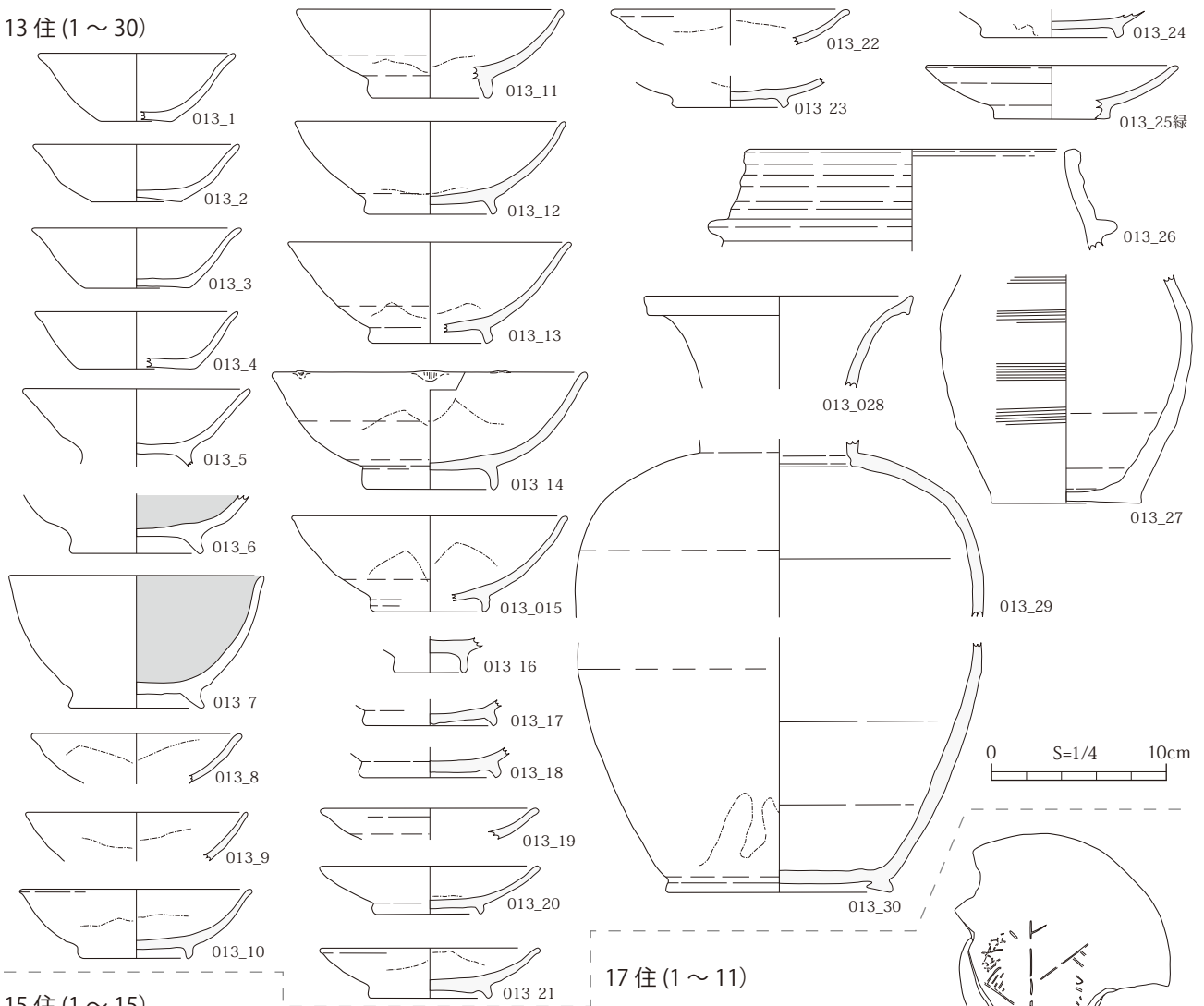


14住(1~12)

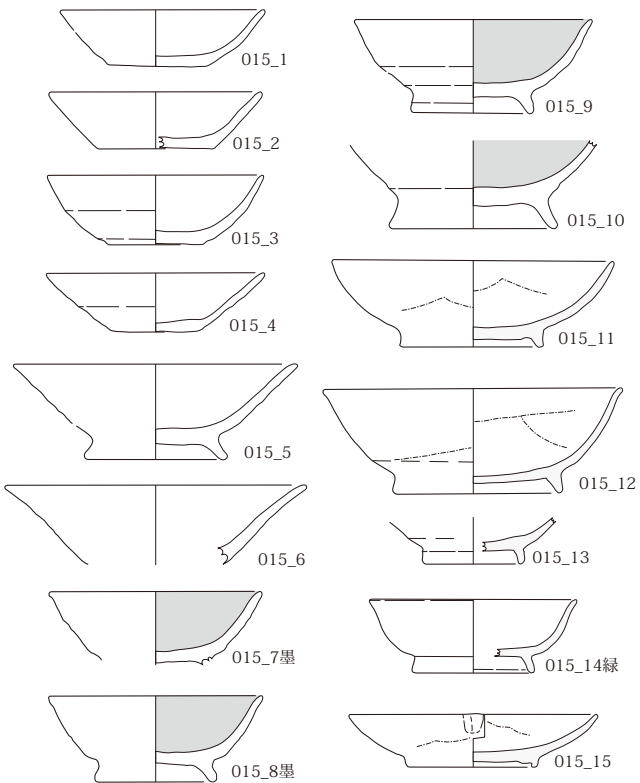


第91図 出土土器類実測図(3)

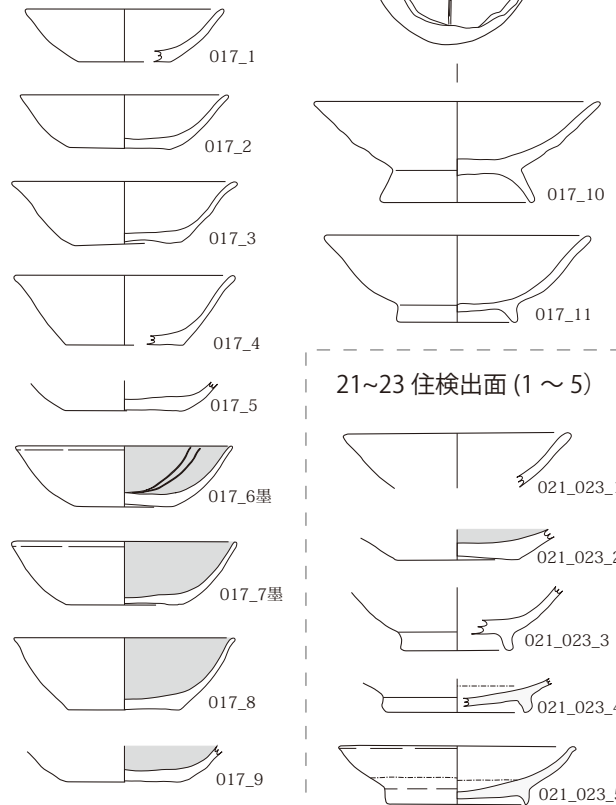
13住(1~30)



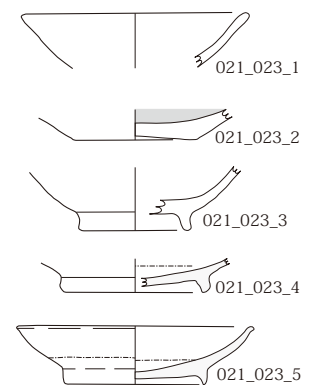
15住(1~15)



17住(1~11)

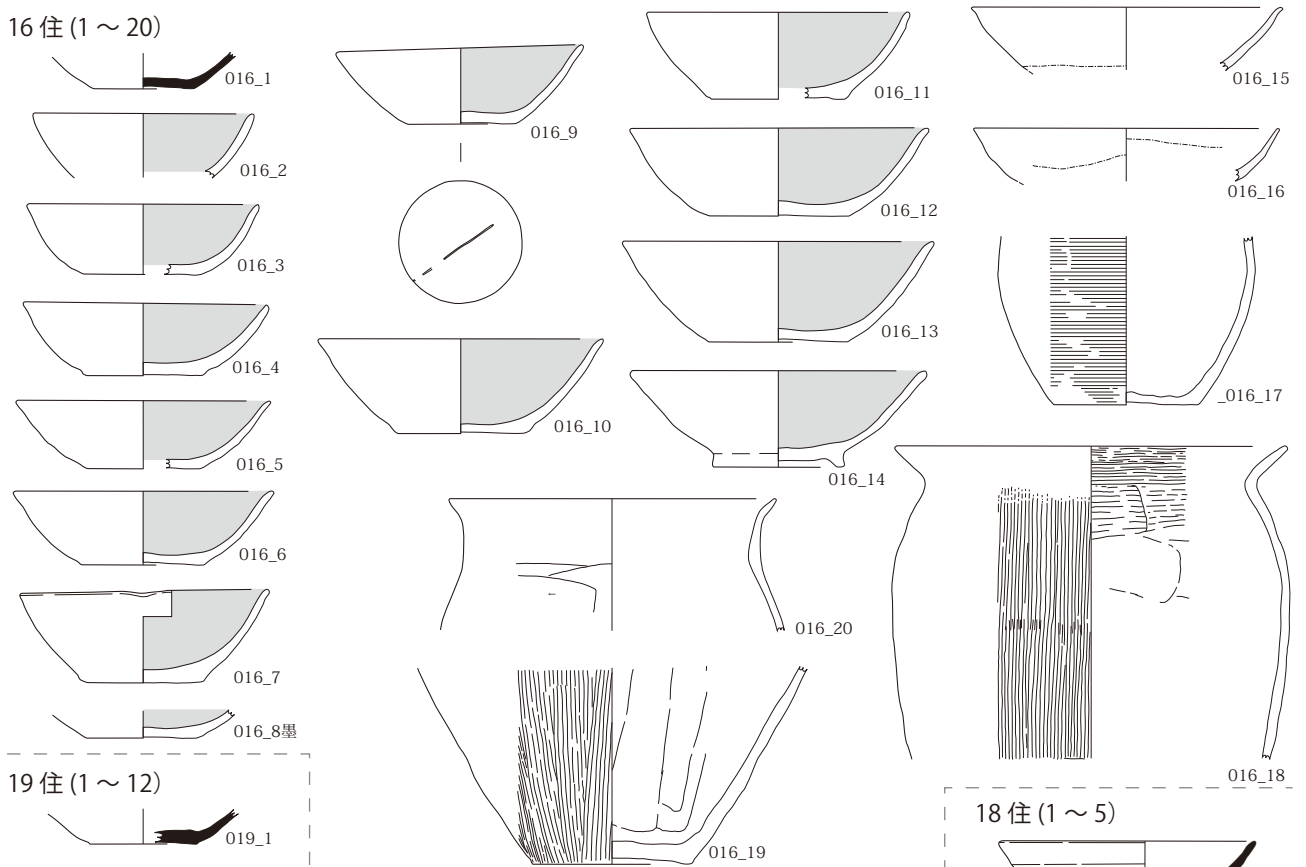


21~23住検出面(1~5)

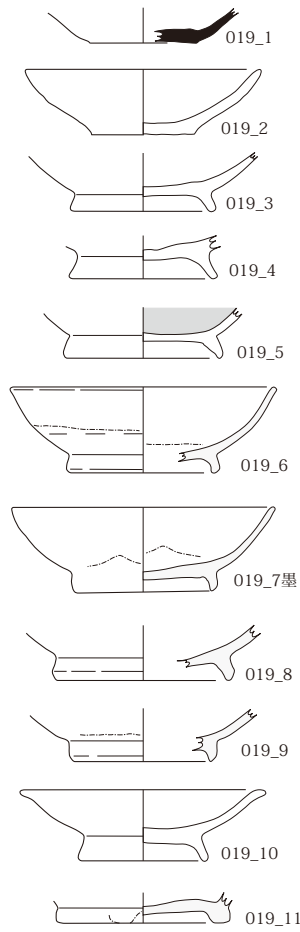


第92図 出土土器類実測図(4)

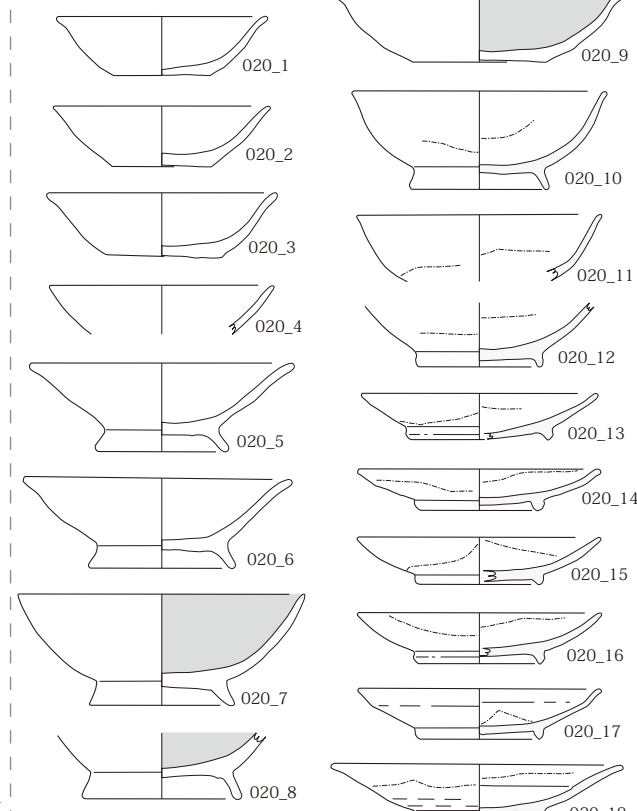
16住(1~20)



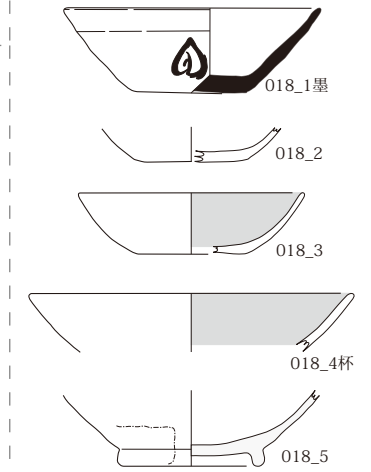
19住(1~12)



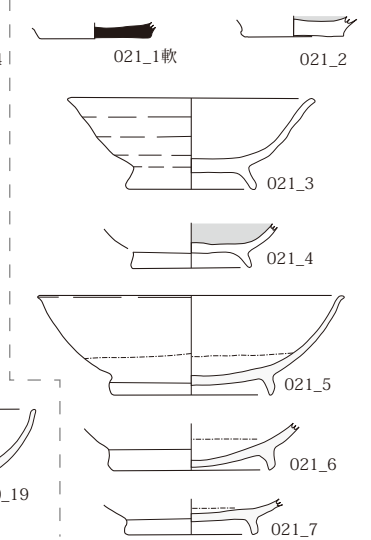
20住(1~19)



18住(1~5)

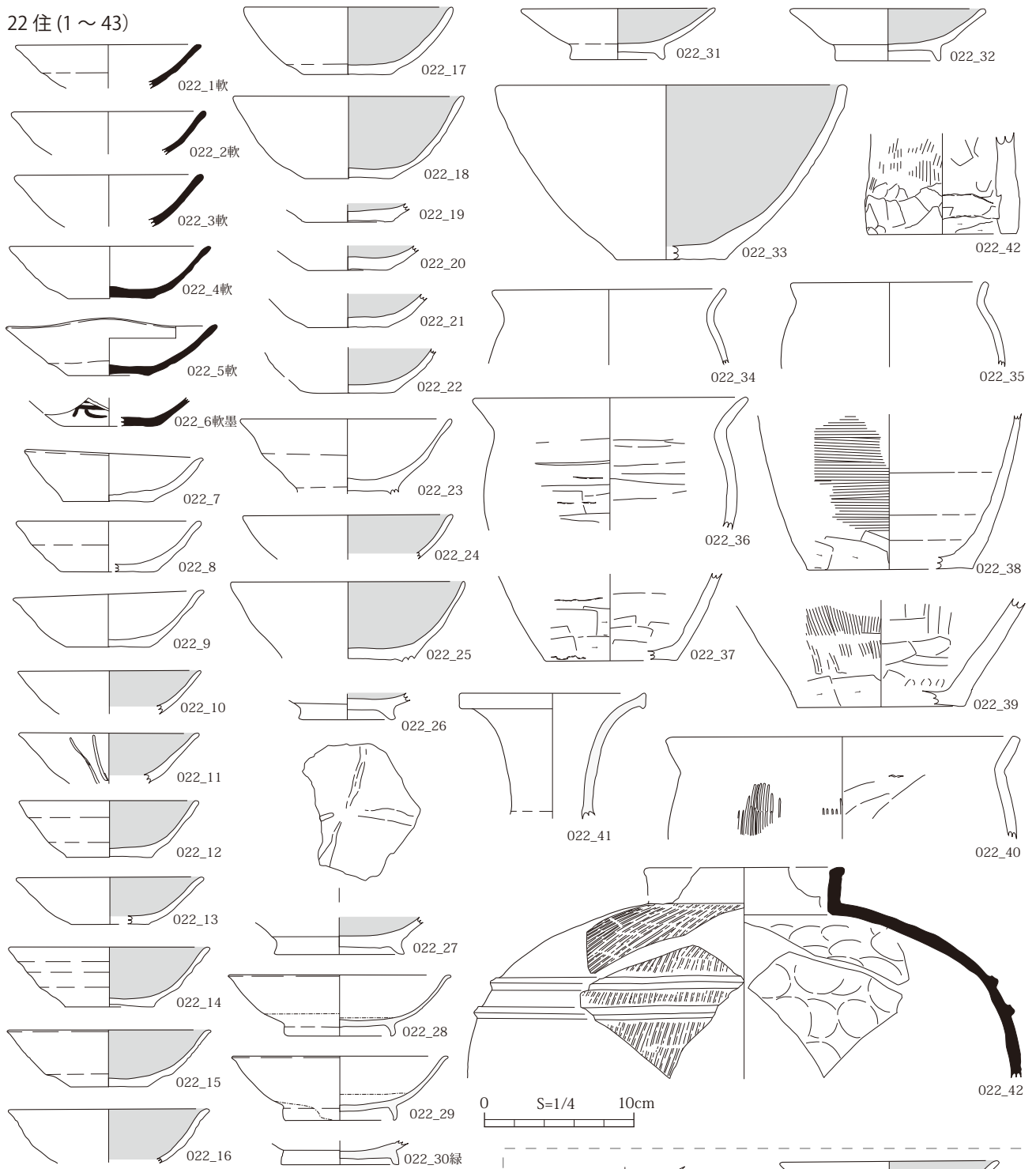


21住(1~7)

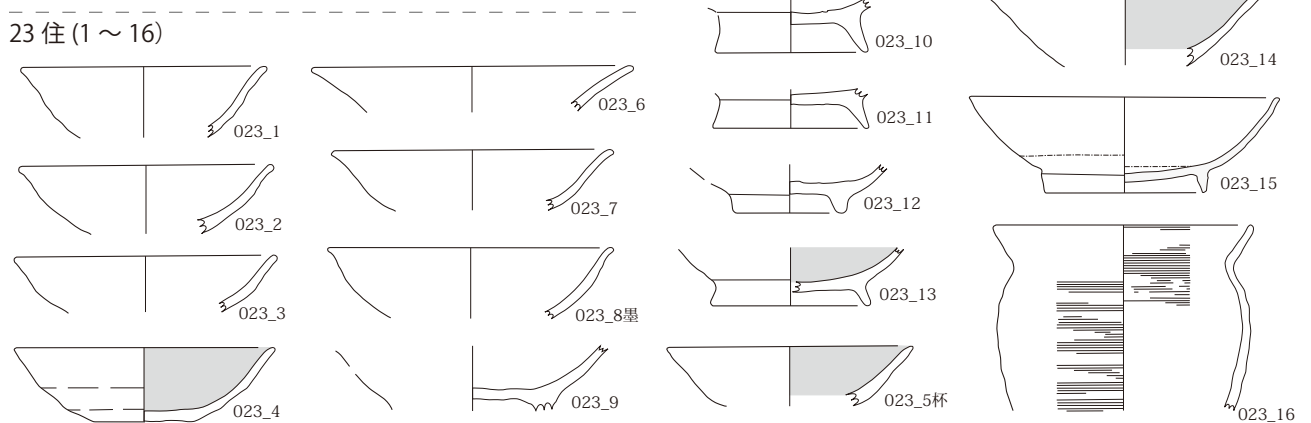


第93图 出土土器類実測图(5)

22 住 (1 ~ 43)

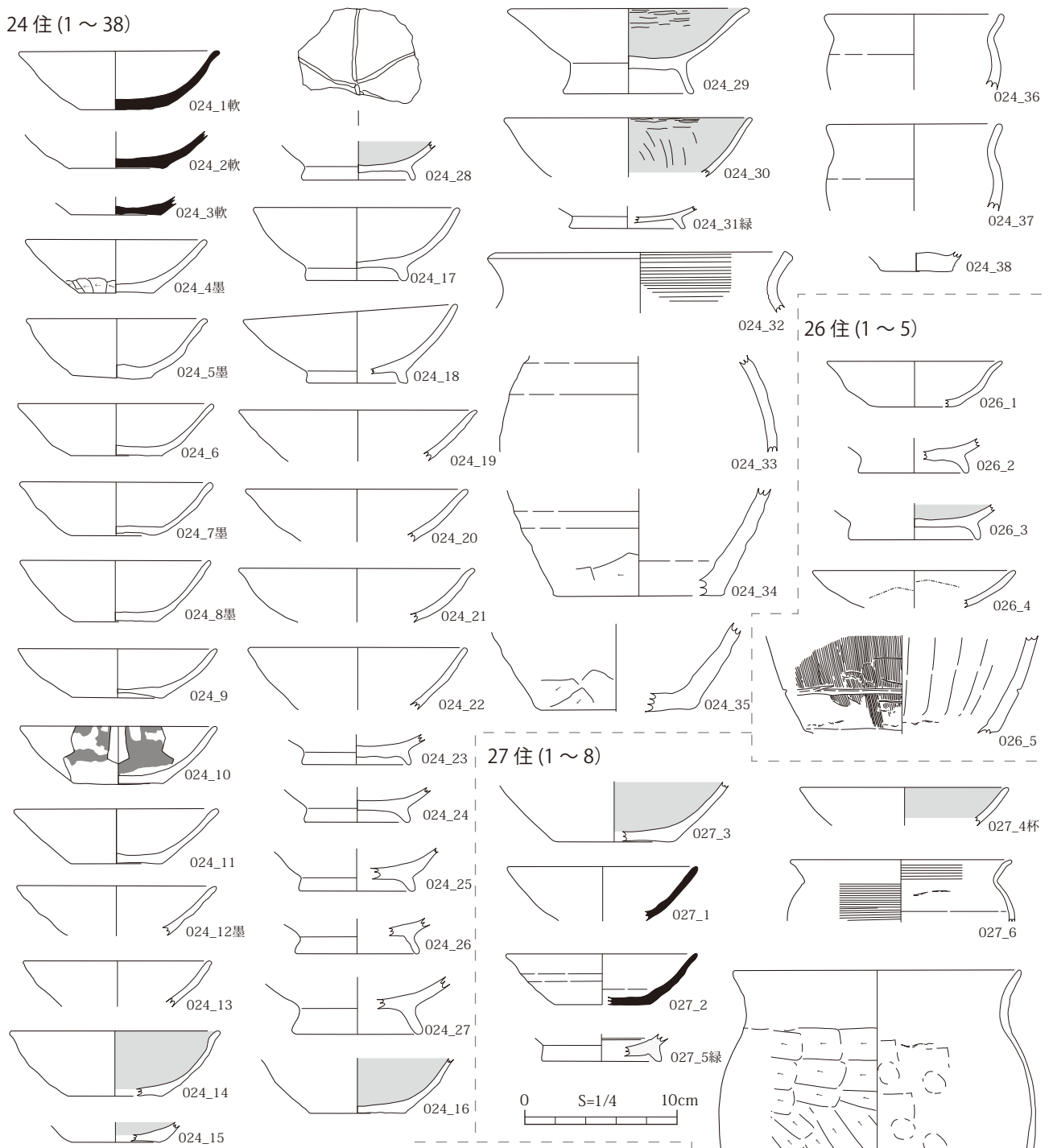


23 住 (1 ~ 16)

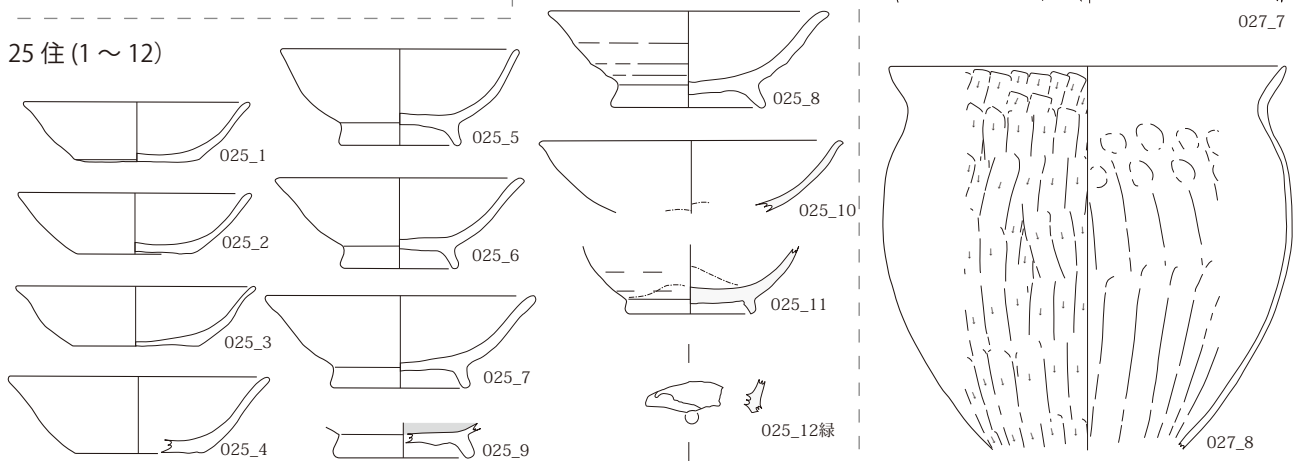


第 94 図 出土土器類実測図 (6)

24 住 (1 ~ 38)

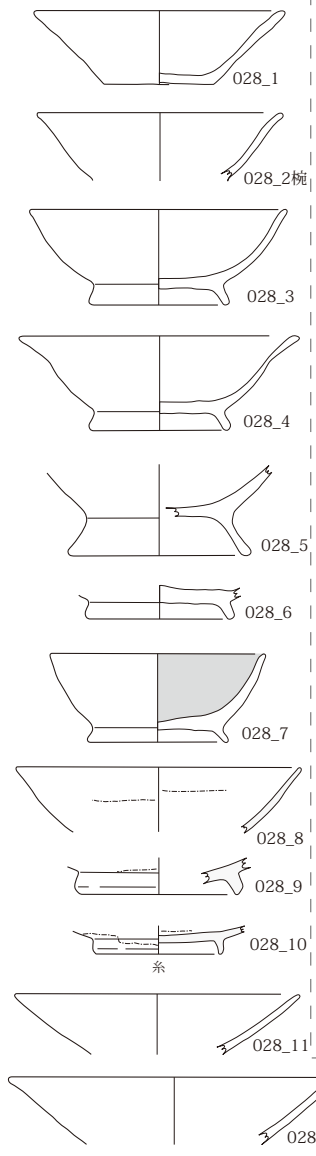


25 住 (1 ~ 12)

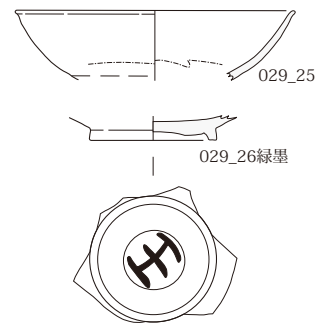
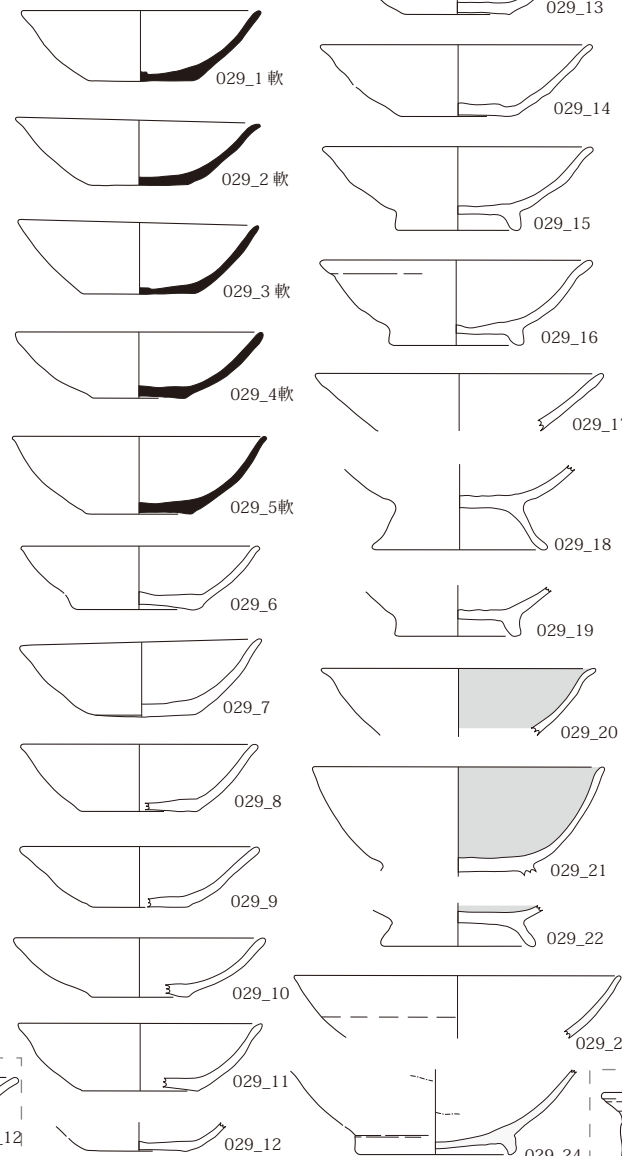


第 95 図 出土土器類実測図 (7)

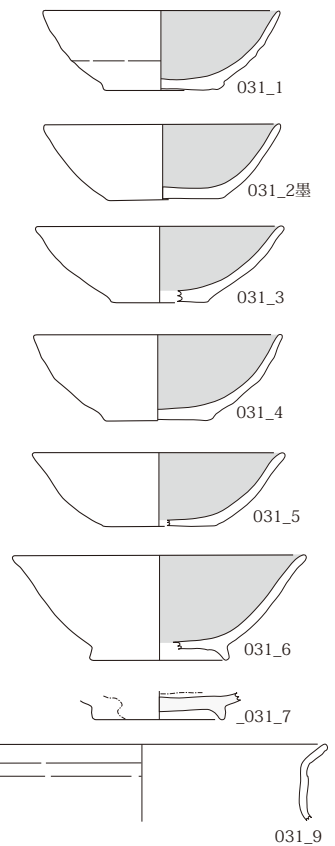
28住(1~12)



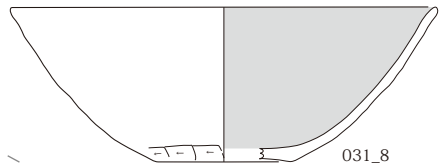
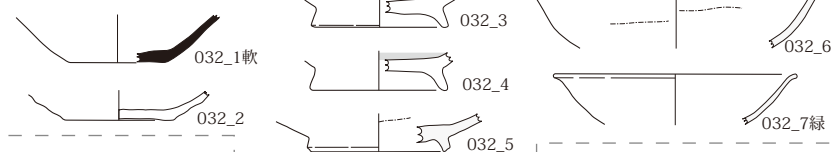
29住(1~26)



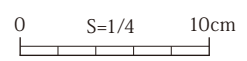
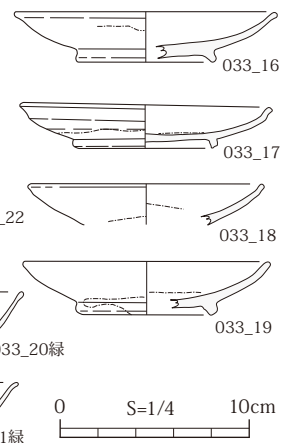
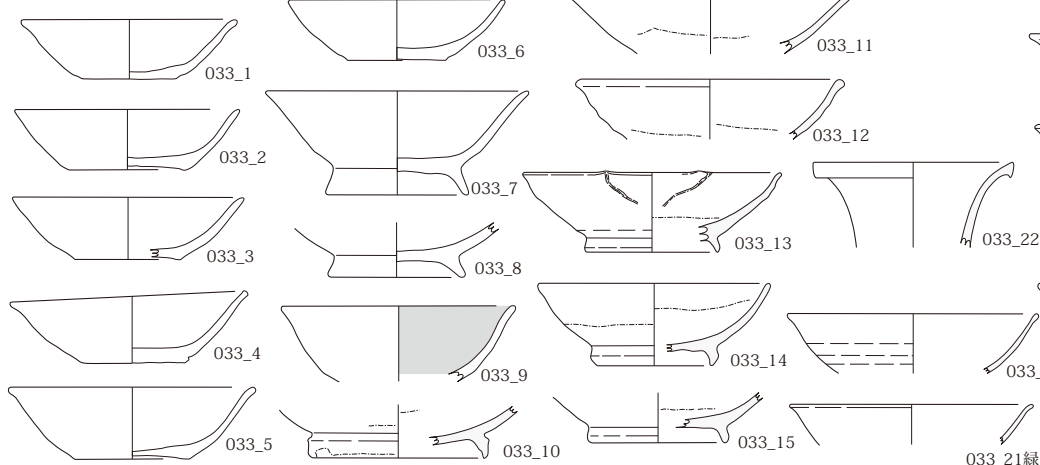
31住(1~9)



32住(1~7)

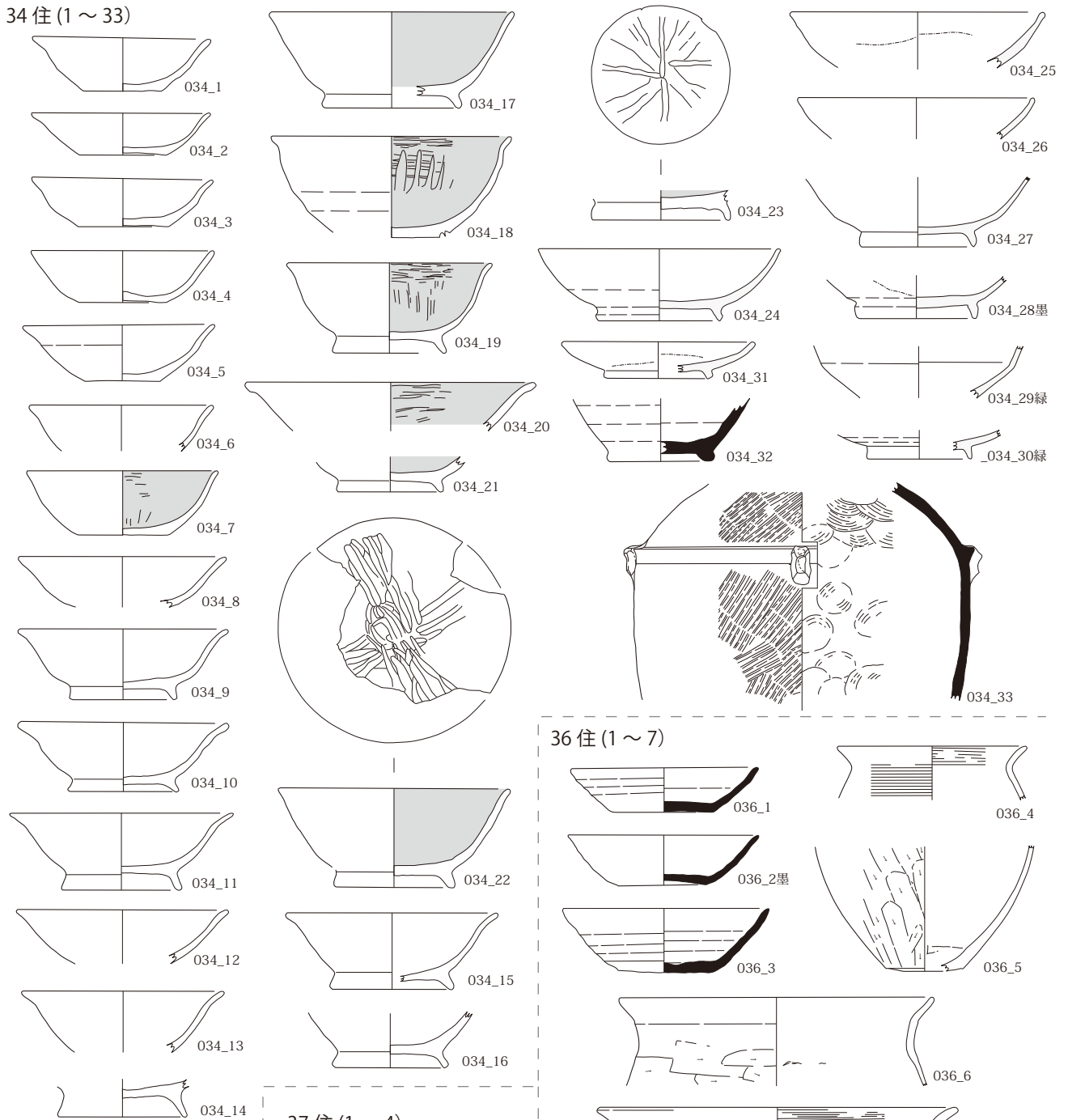


33住(1~22)

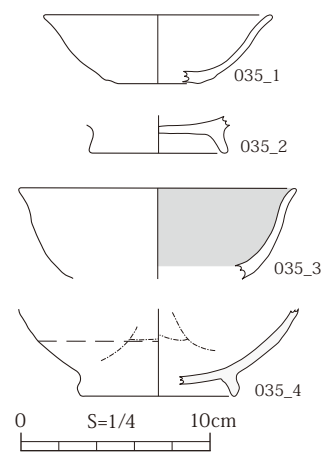


第96図 出土土器類実測図(8)

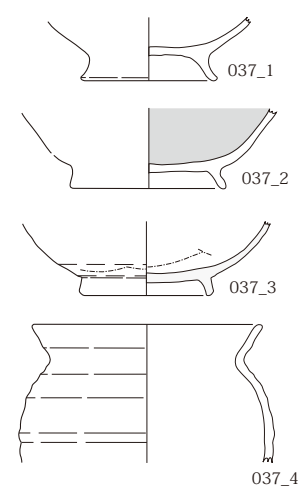
34 住 (1 ~ 33)



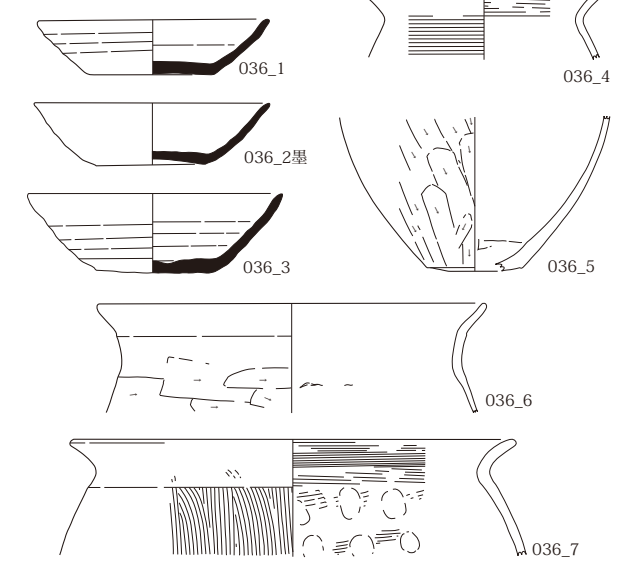
35 住 (1 ~ 4)



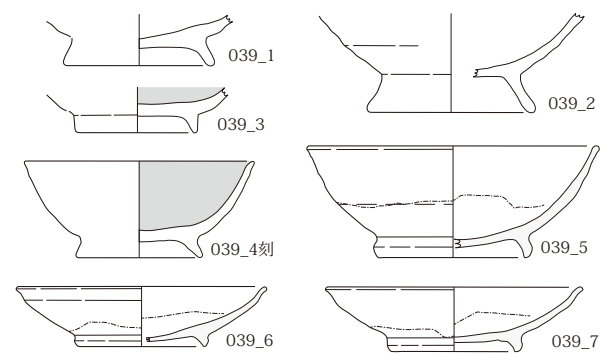
37 住 (1 ~ 4)



36 住 (1 ~ 7)

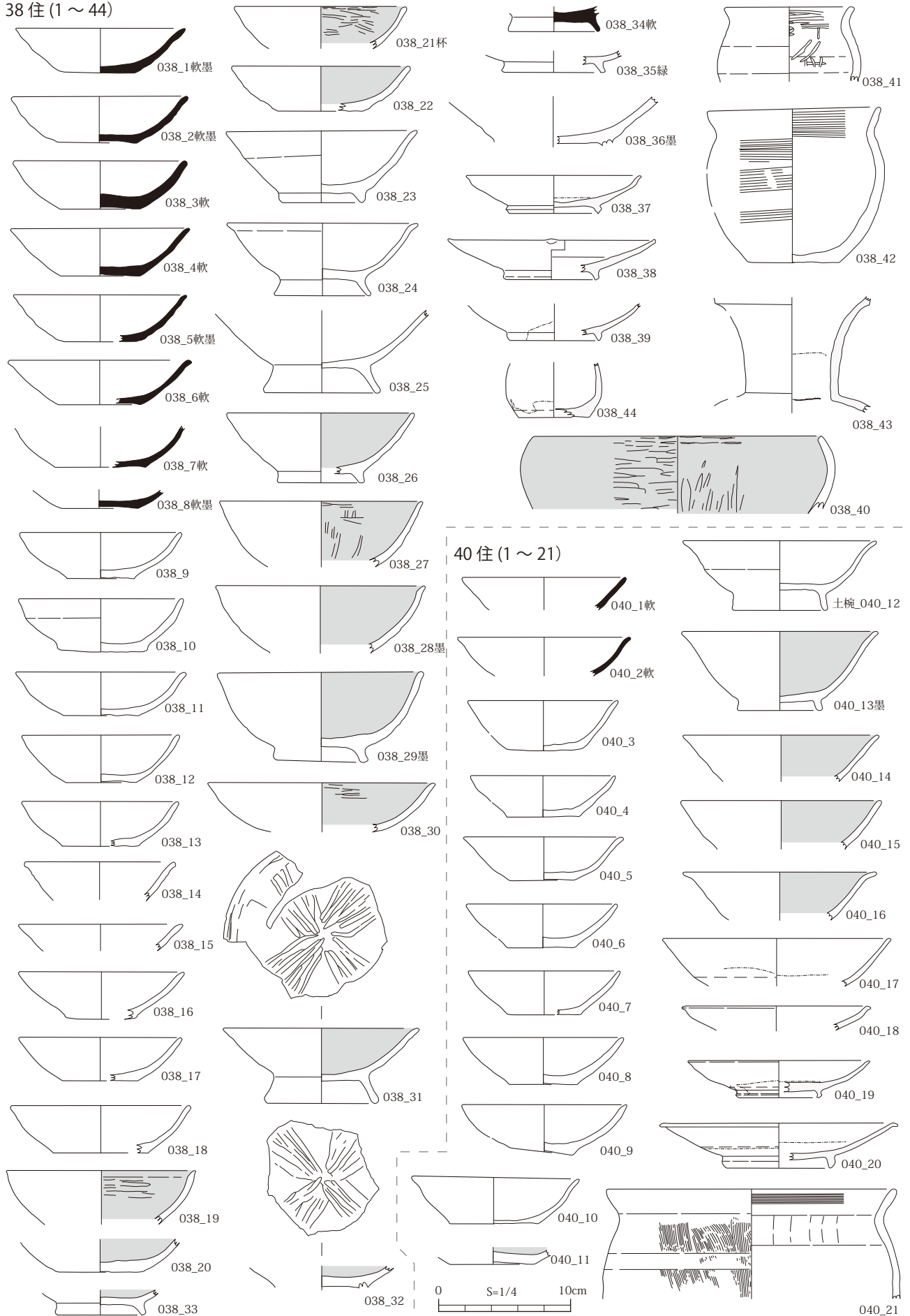


39 住 (1 ~ 7)

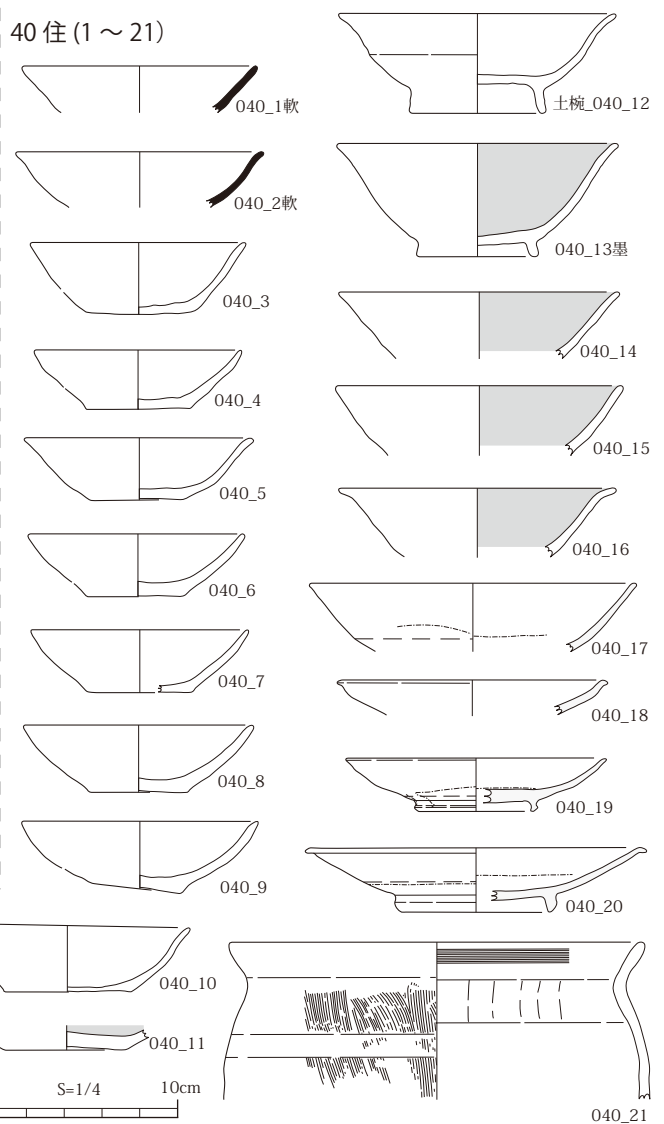


第 97 図 出土土器類実測図 (9)

38 住 (1 ~ 44)

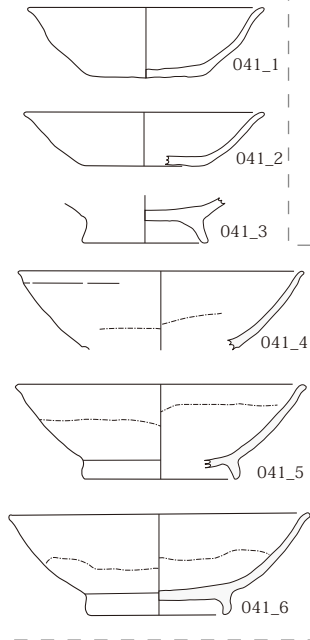


40 住 (1 ~ 21)

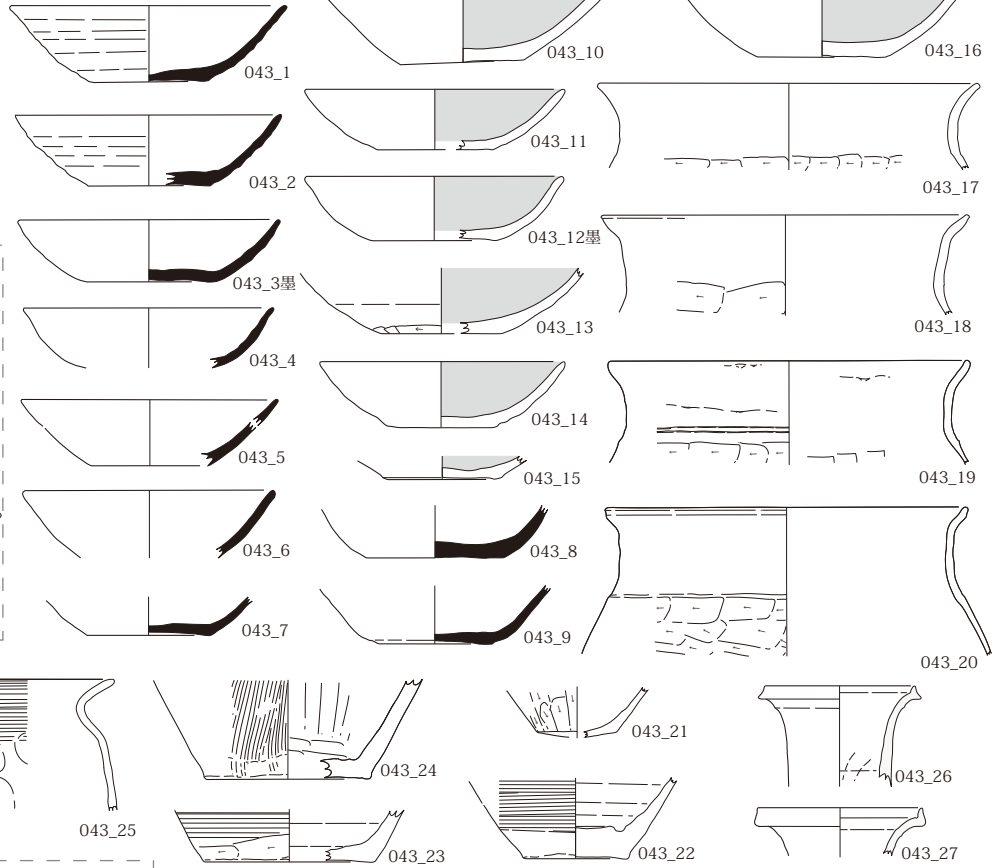


第 98 図 出土土器類実測図 (10)

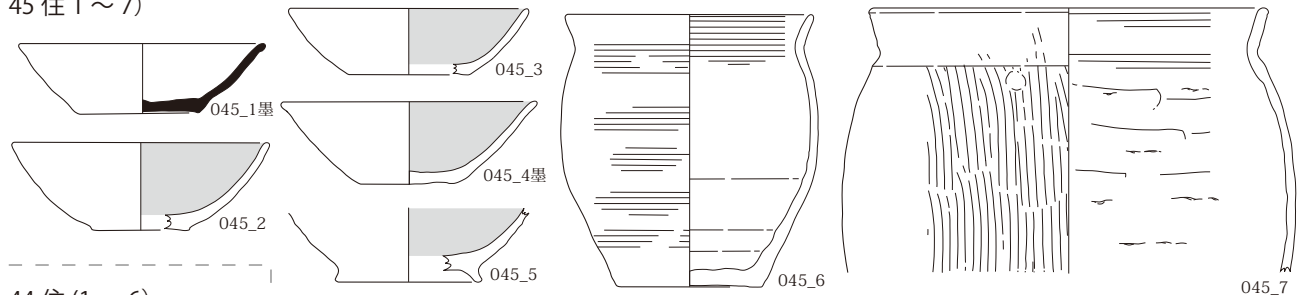
41 住 (1 ~ 6)



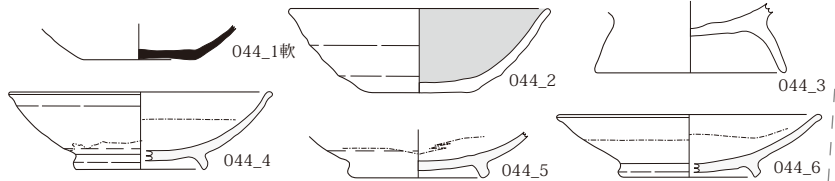
43 住 (1 ~ 27)



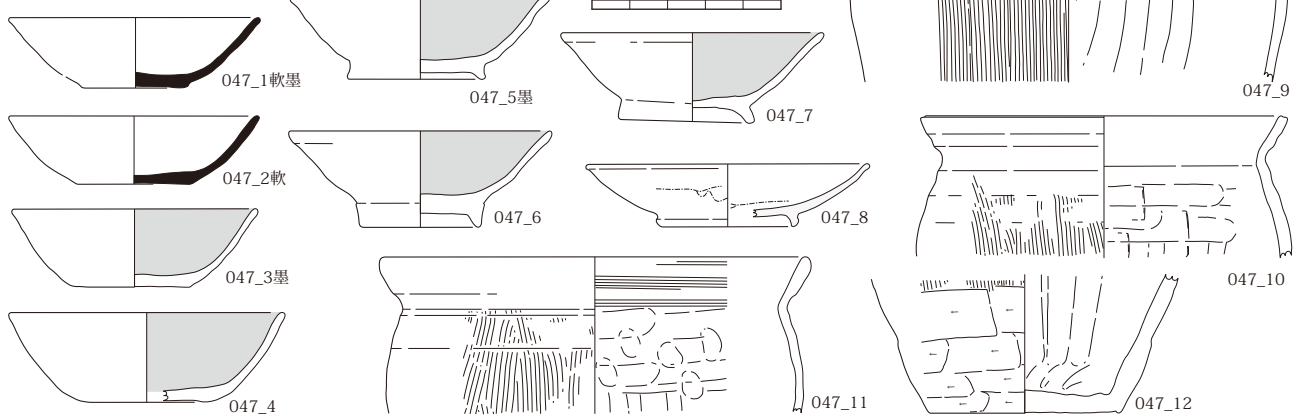
45 住 1 ~ 7)



44 住 (1 ~ 6)

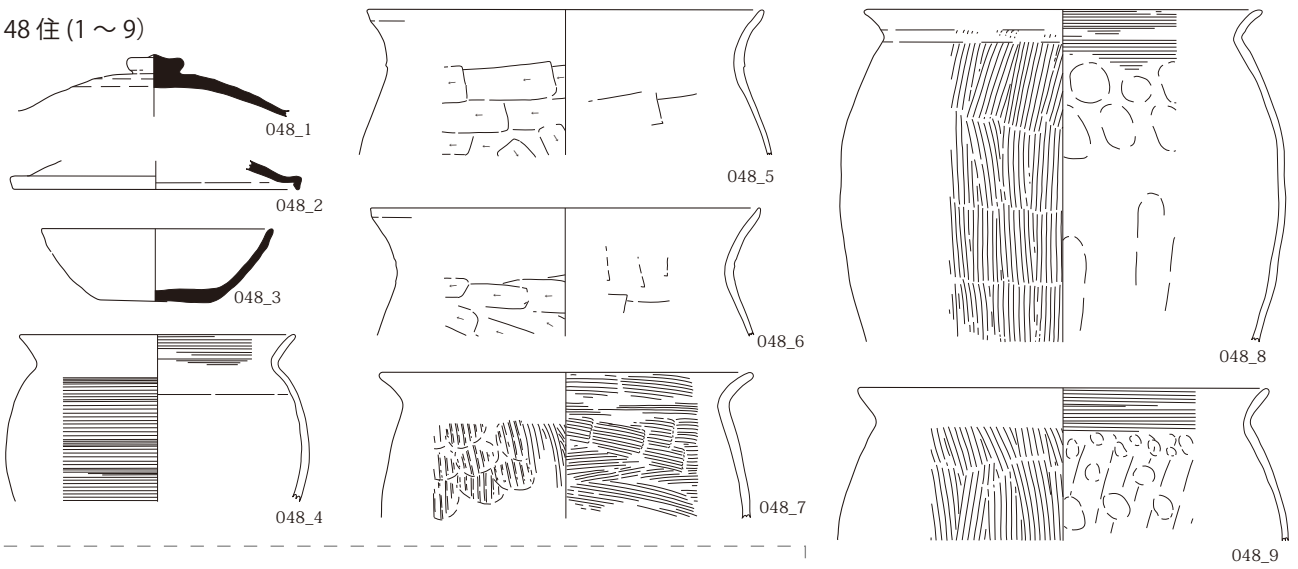


47 住 (1 ~ 12)

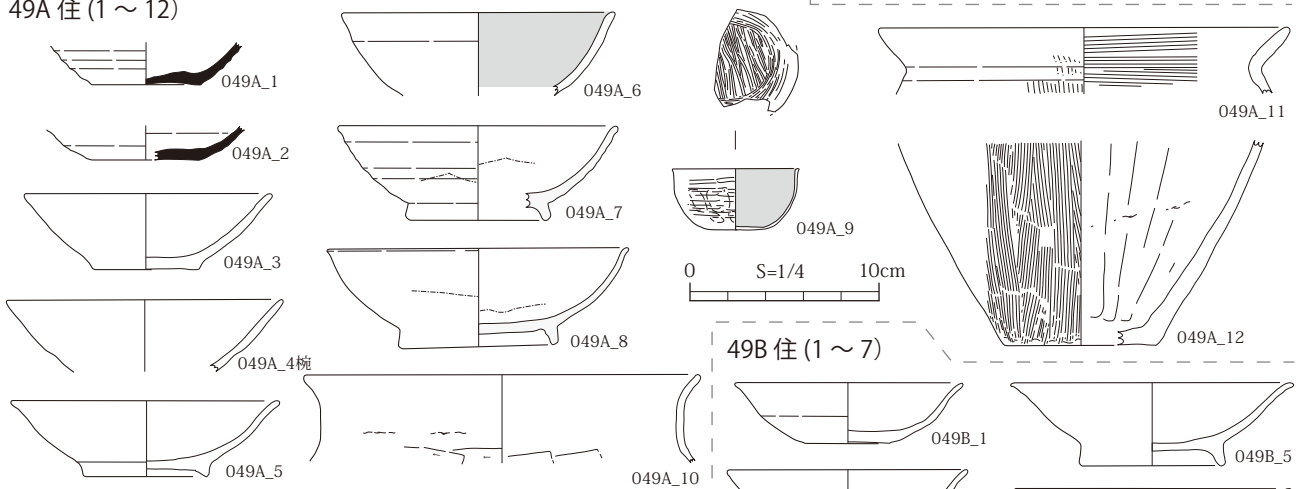


第 99 図 出土土器類実測図 (11)

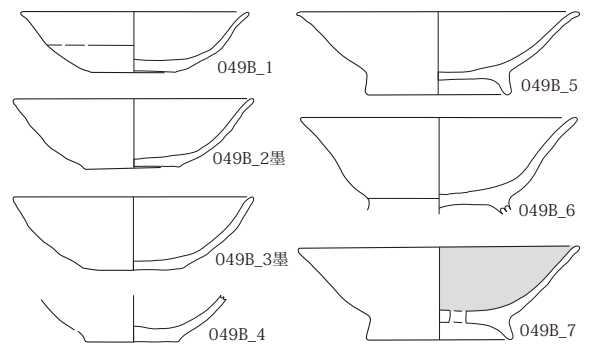
48 住 (1 ~ 9)



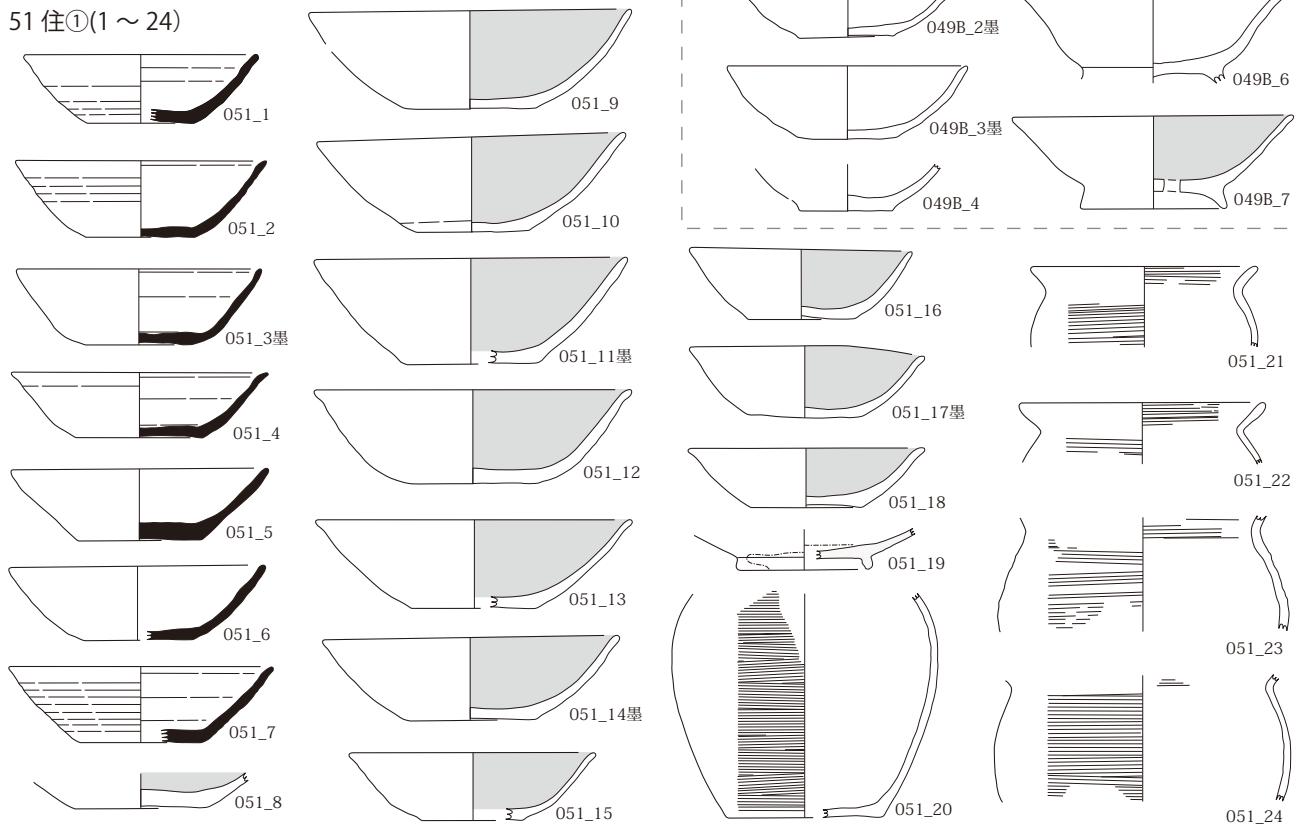
49A 住 (1 ~ 12)



49B 住 (1 ~ 7)

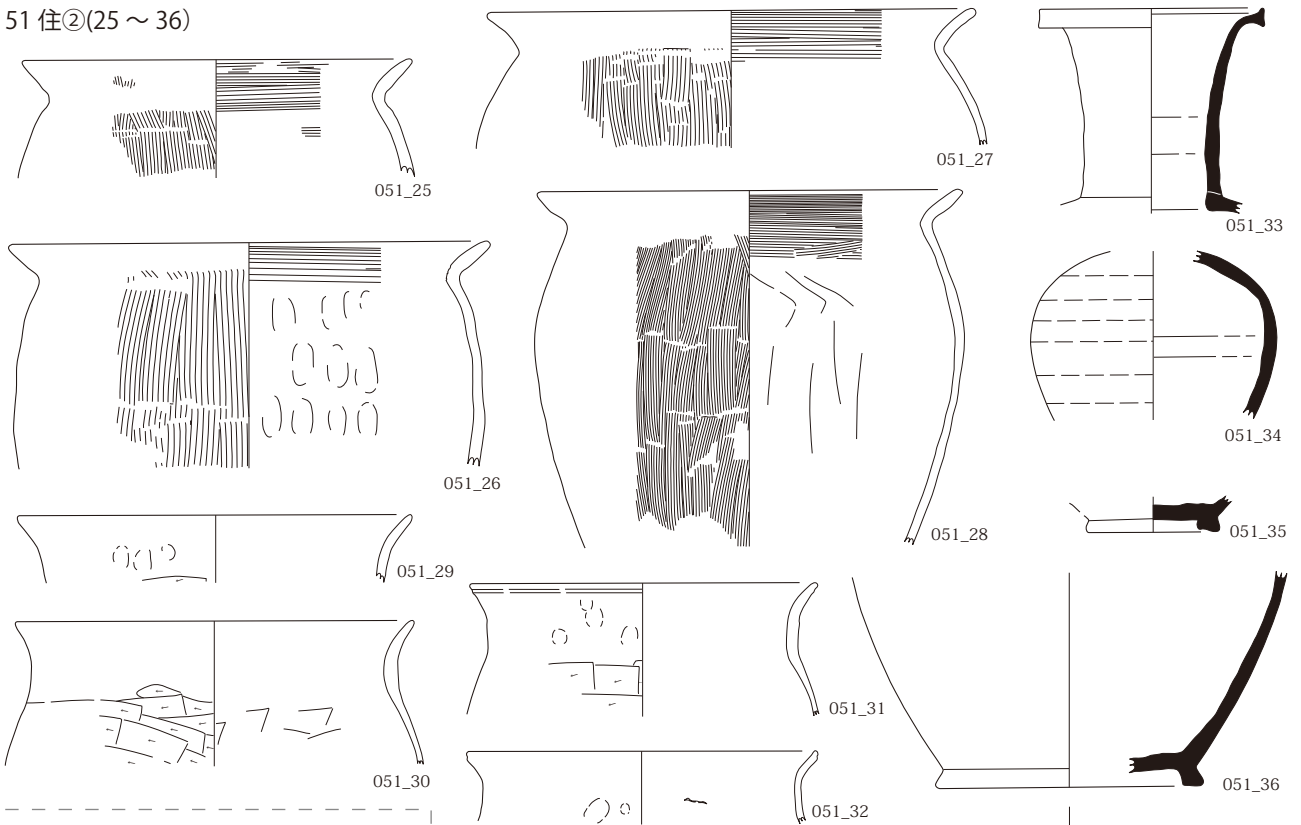


51 住① (1 ~ 24)

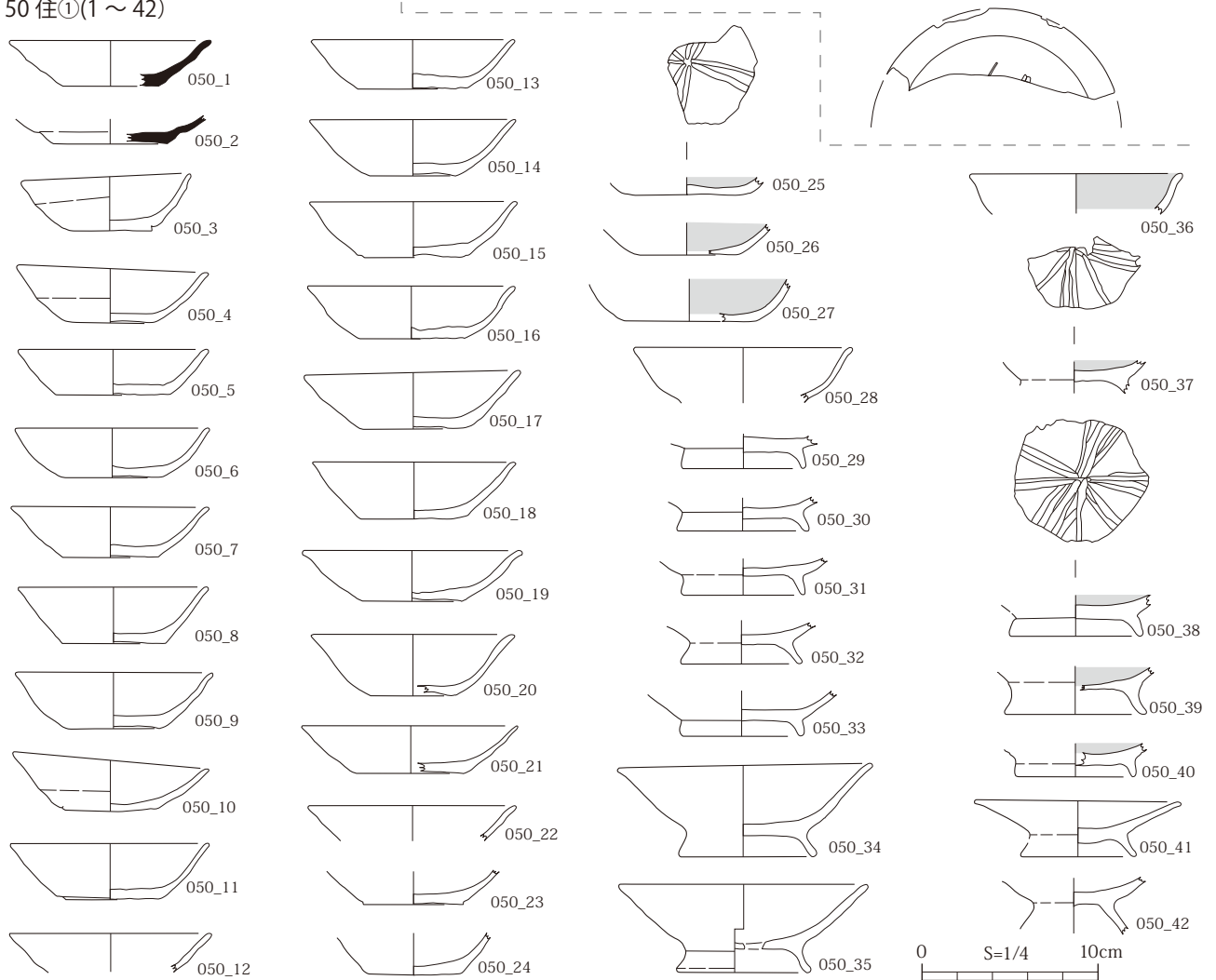


第 100 図 出土土器類実測図 (12)

51 住②(25 ~ 36)

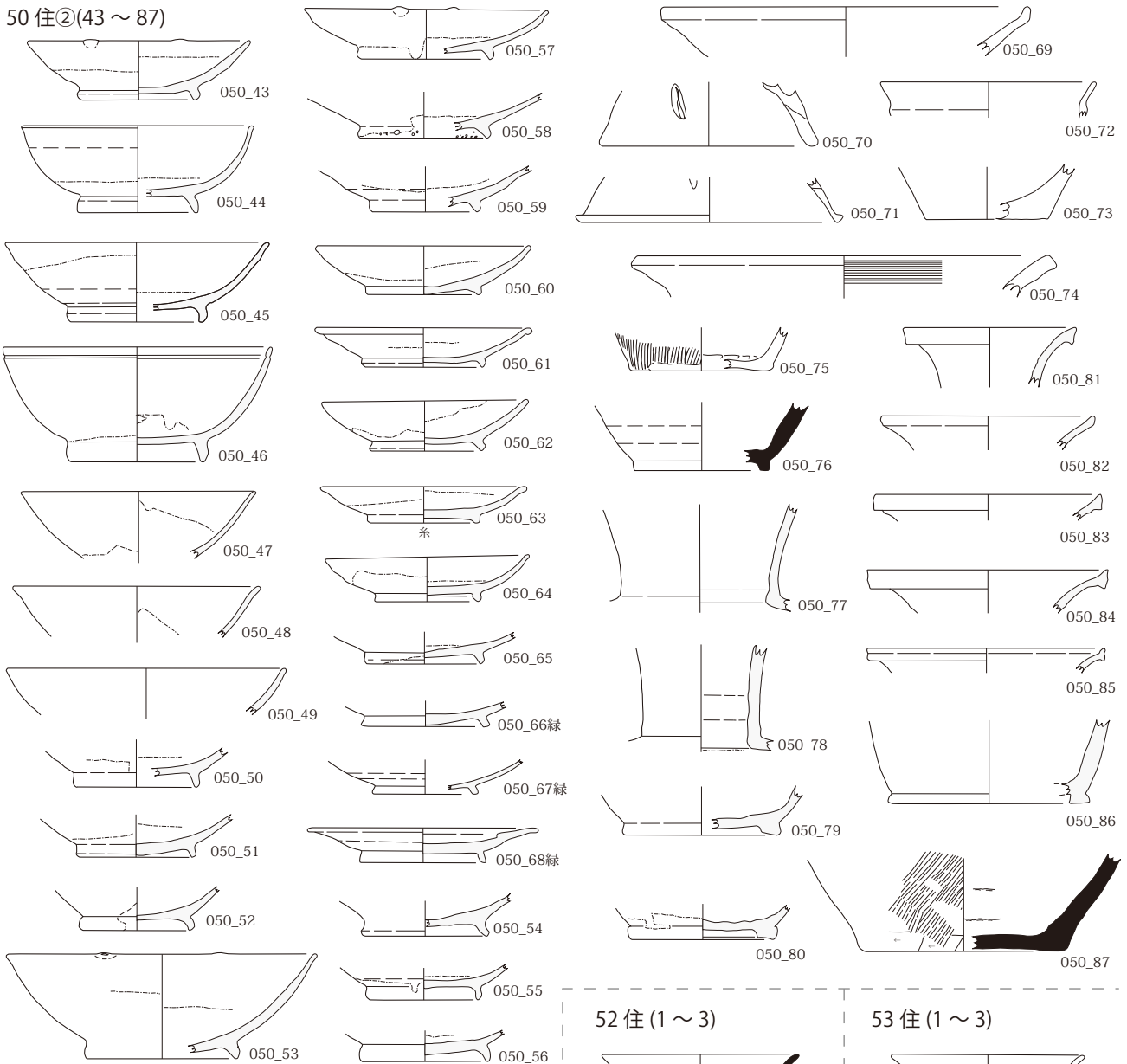


50 住①(1 ~ 42)

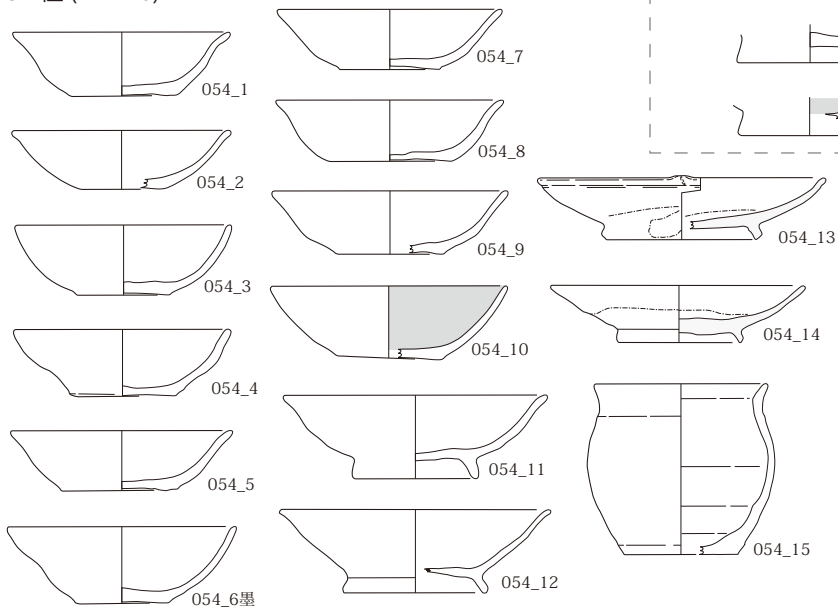


第 101 图 出土土器類実測图 (13)

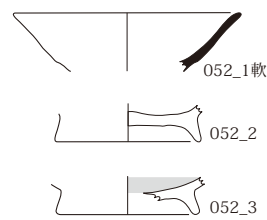
50 住②(43 ~ 87)



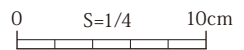
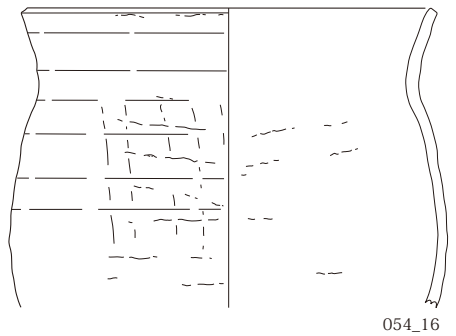
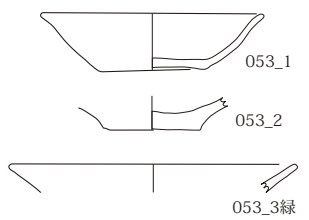
54 住(1 ~ 16)



52 住(1 ~ 3)

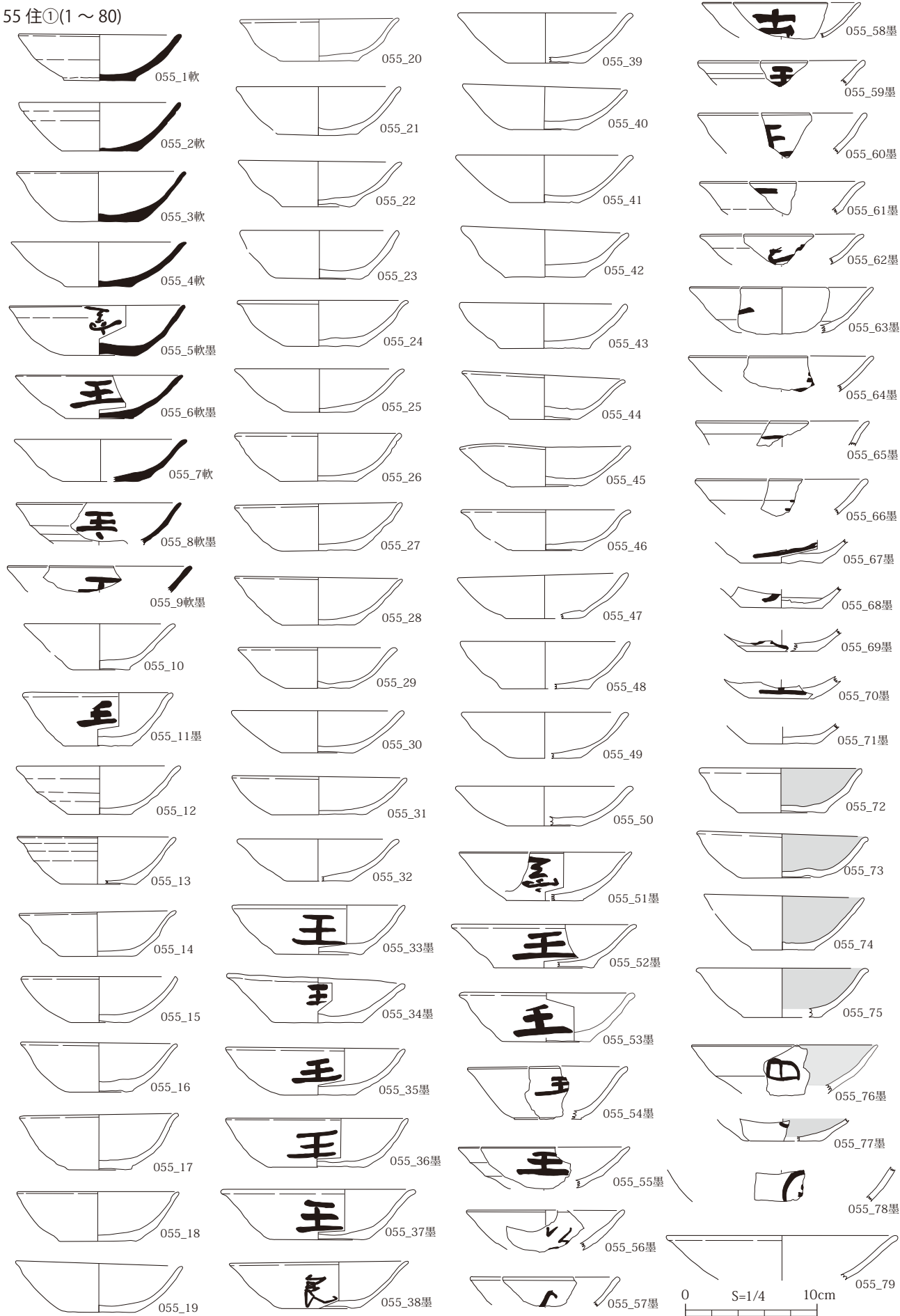


53 住(1 ~ 3)



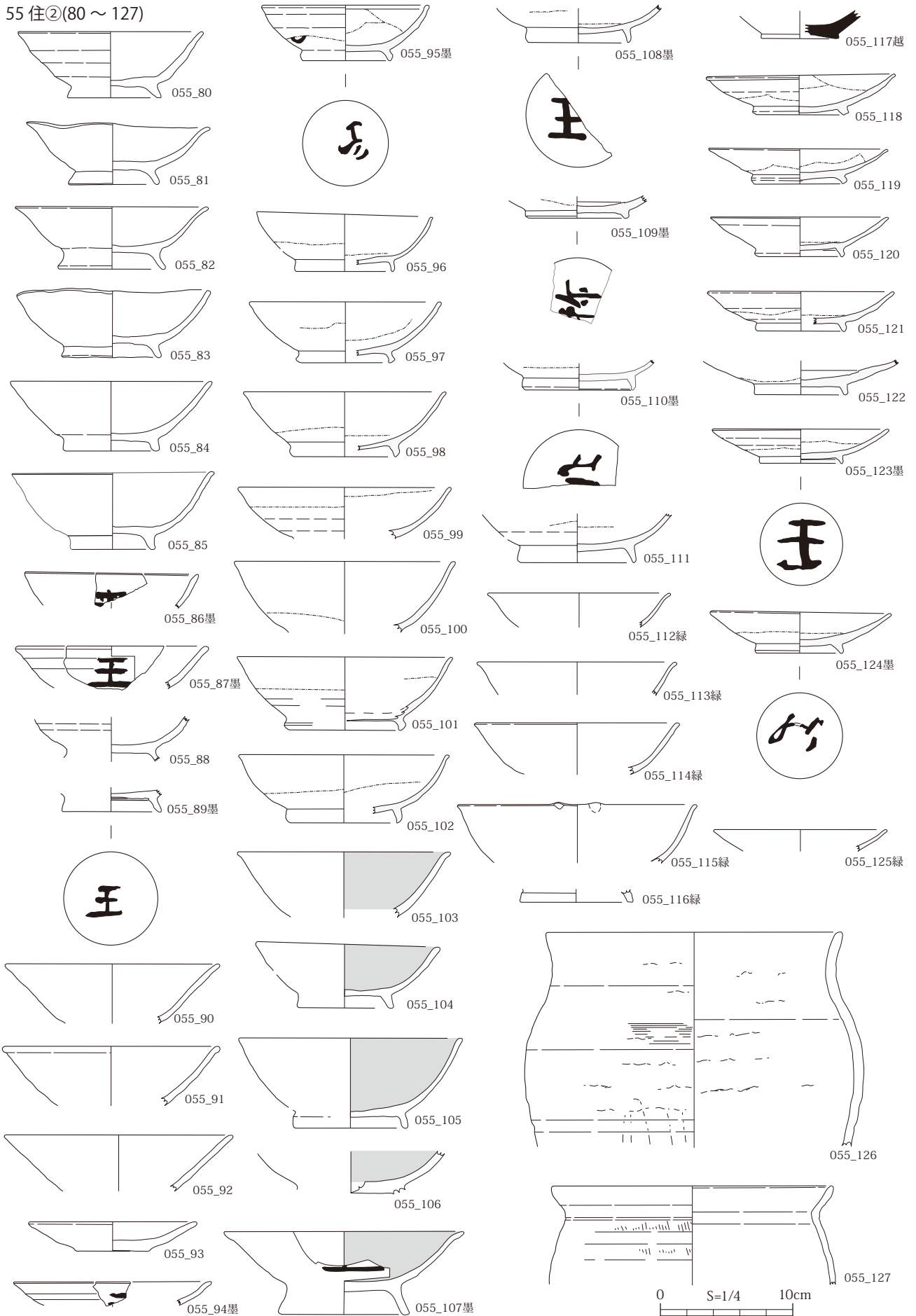
第 102 図 出土土器類実測図(14)

55 住①(1 ~ 80)



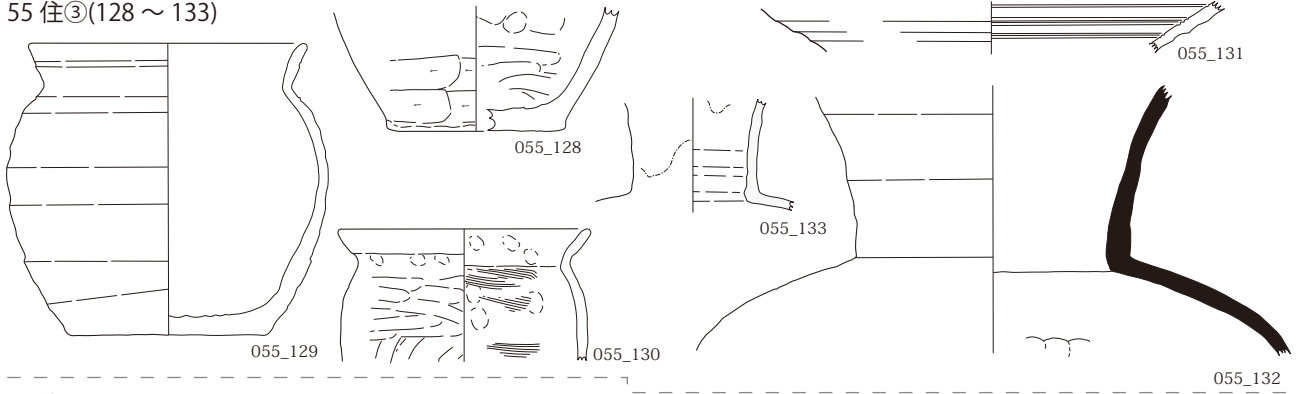
第 103 図 出土土器類実測図 (15)

55 住②(80~127)

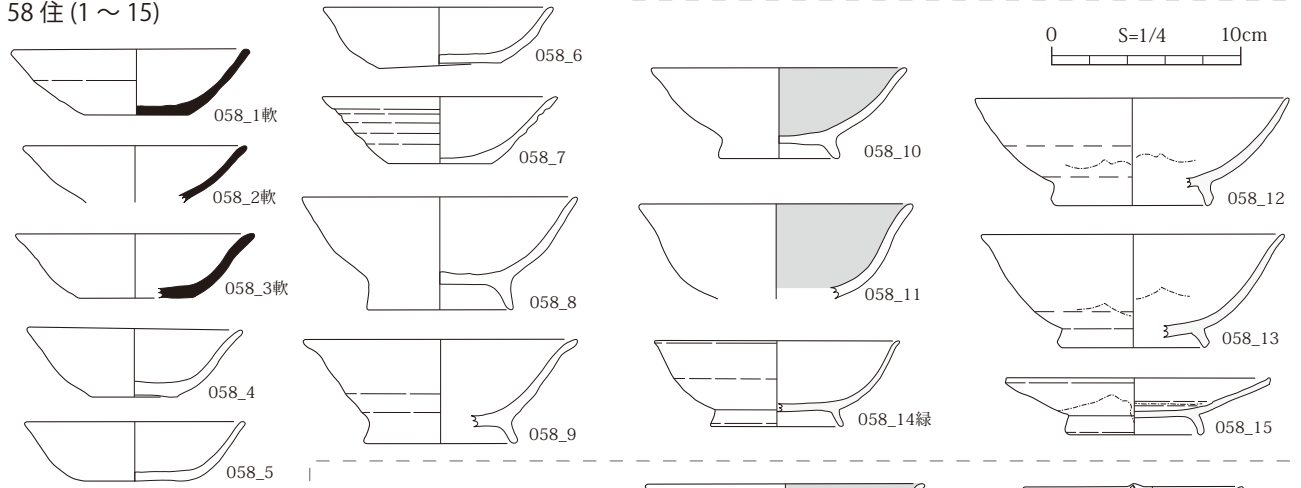


第 104 図 出土土器類実測図(16)

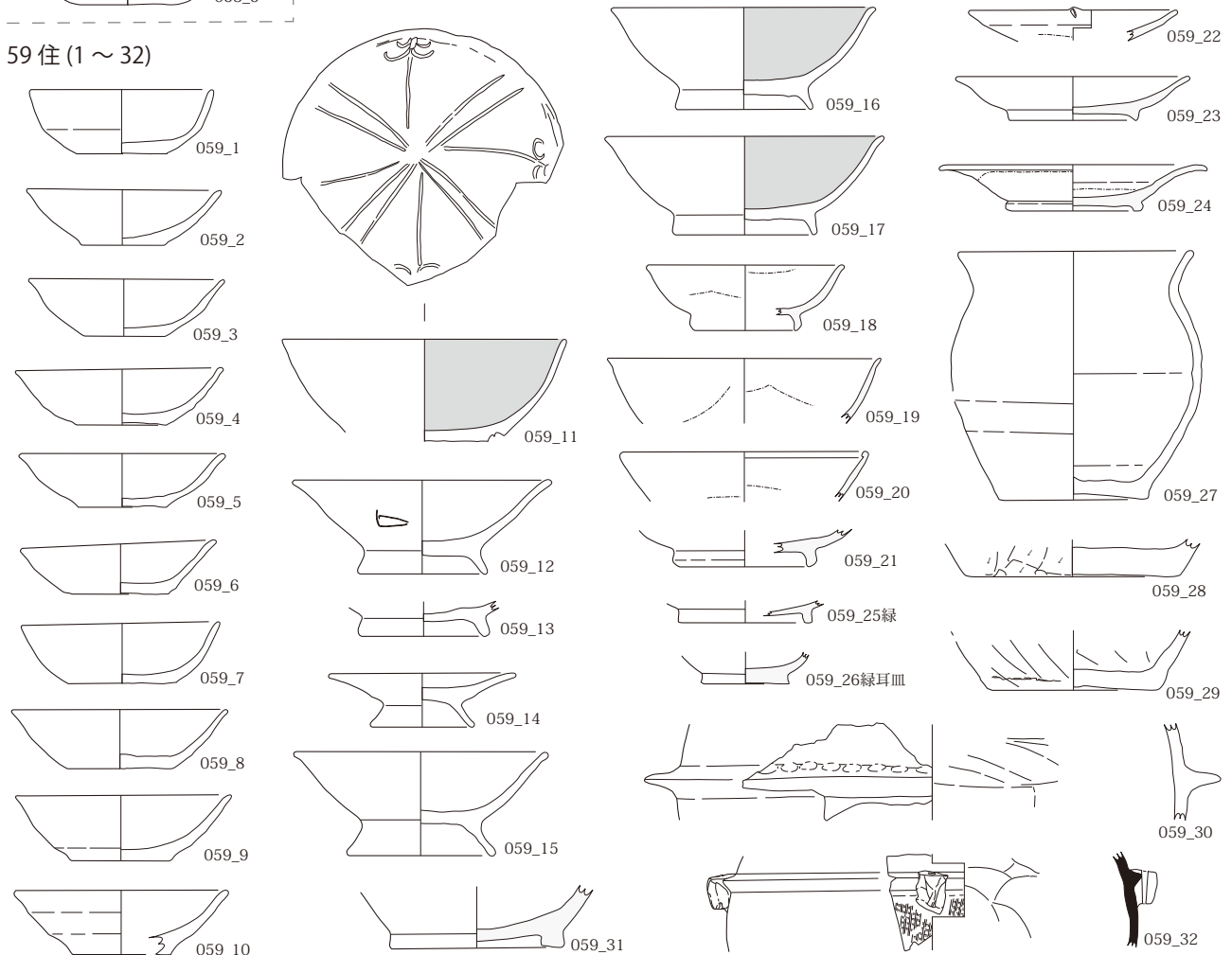
55 住③(128 ~ 133)



58 住(1 ~ 15)

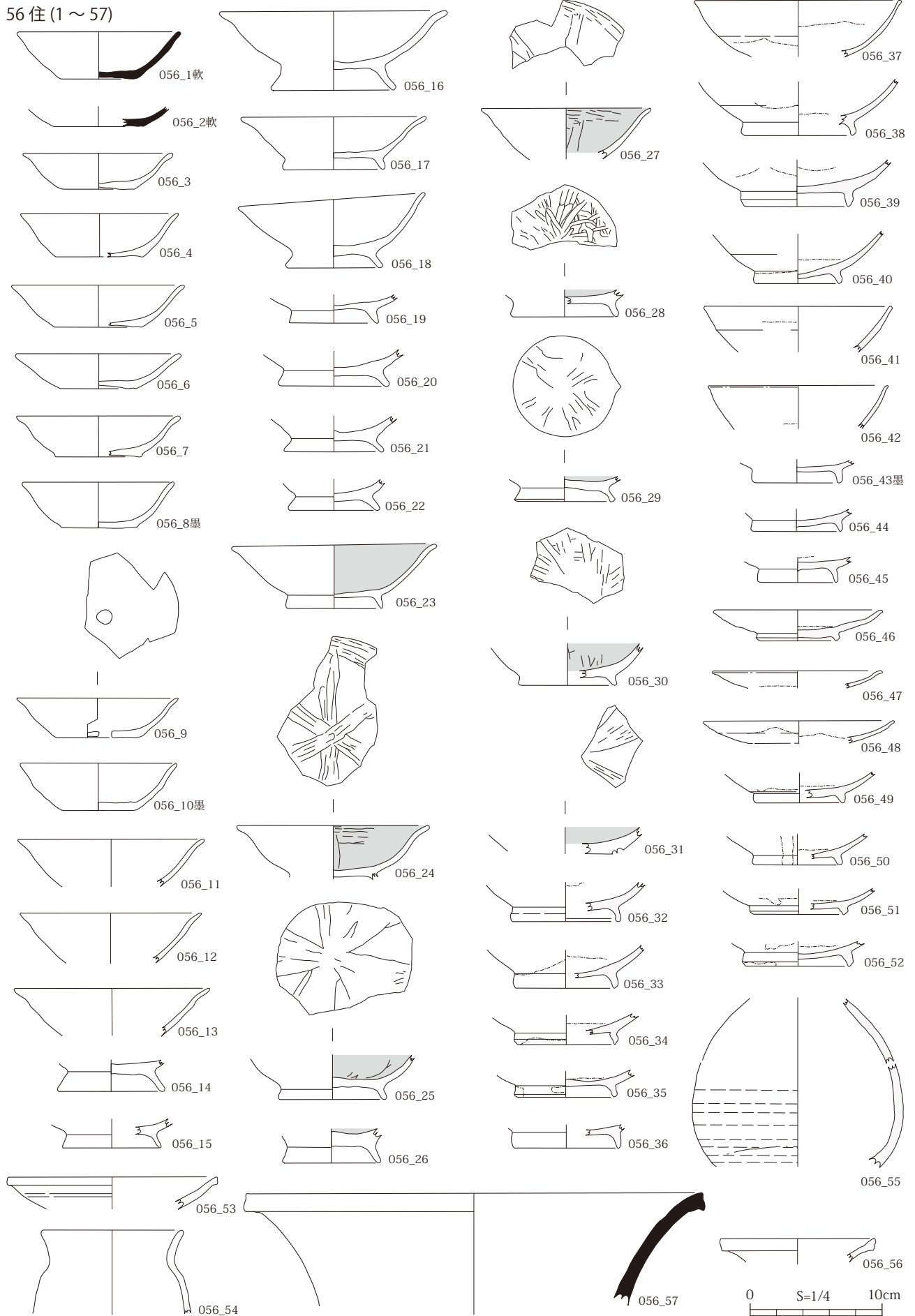


59 住(1 ~ 32)



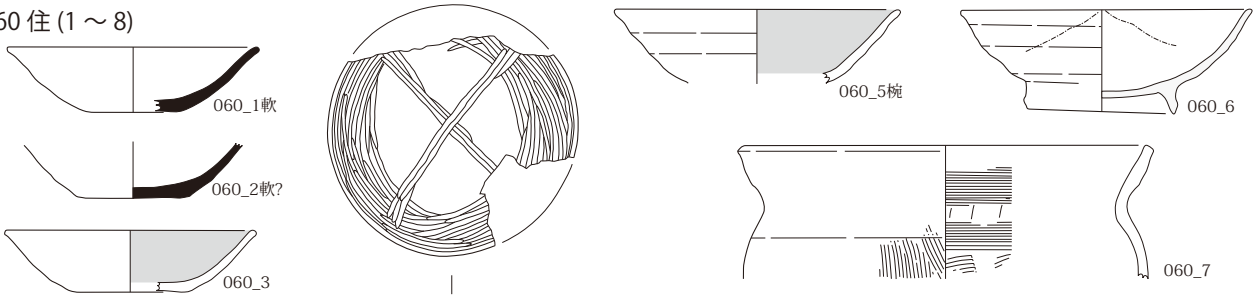
第 105 図 出土土器類実測図(17)

56住(1~57)

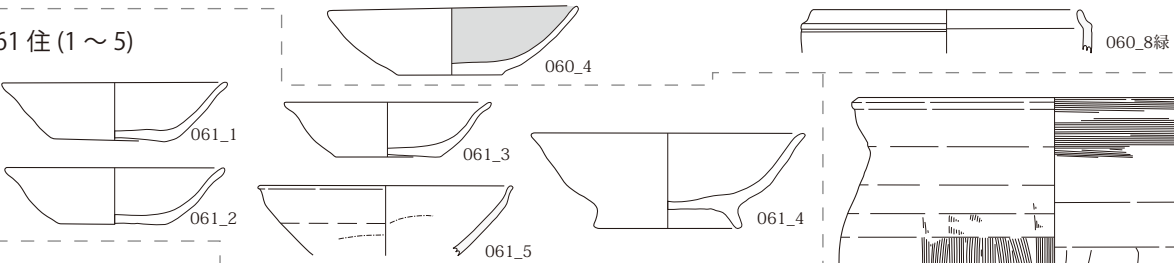


第106図 出土土器類実測図(18)

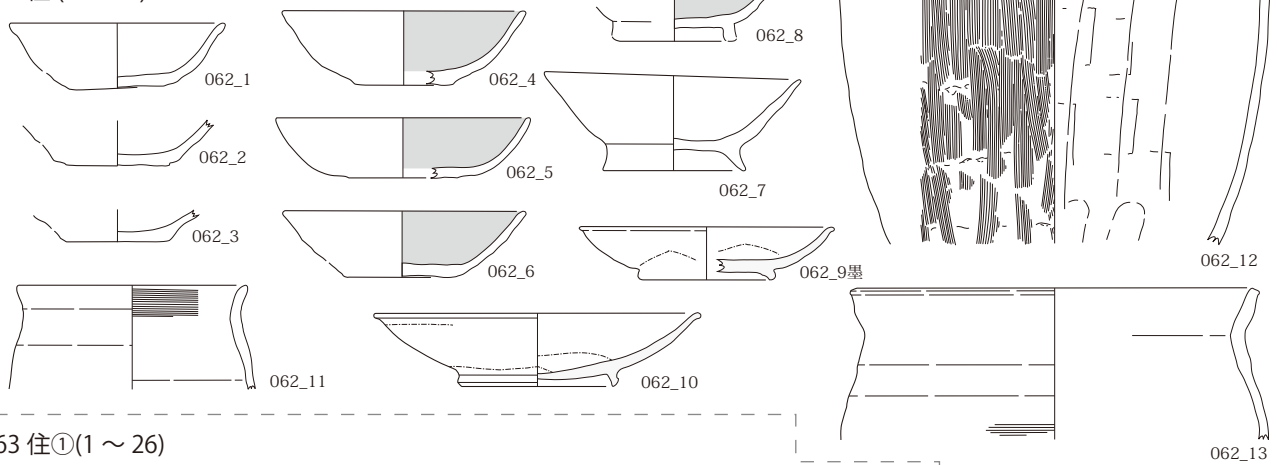
60 住(1~8)



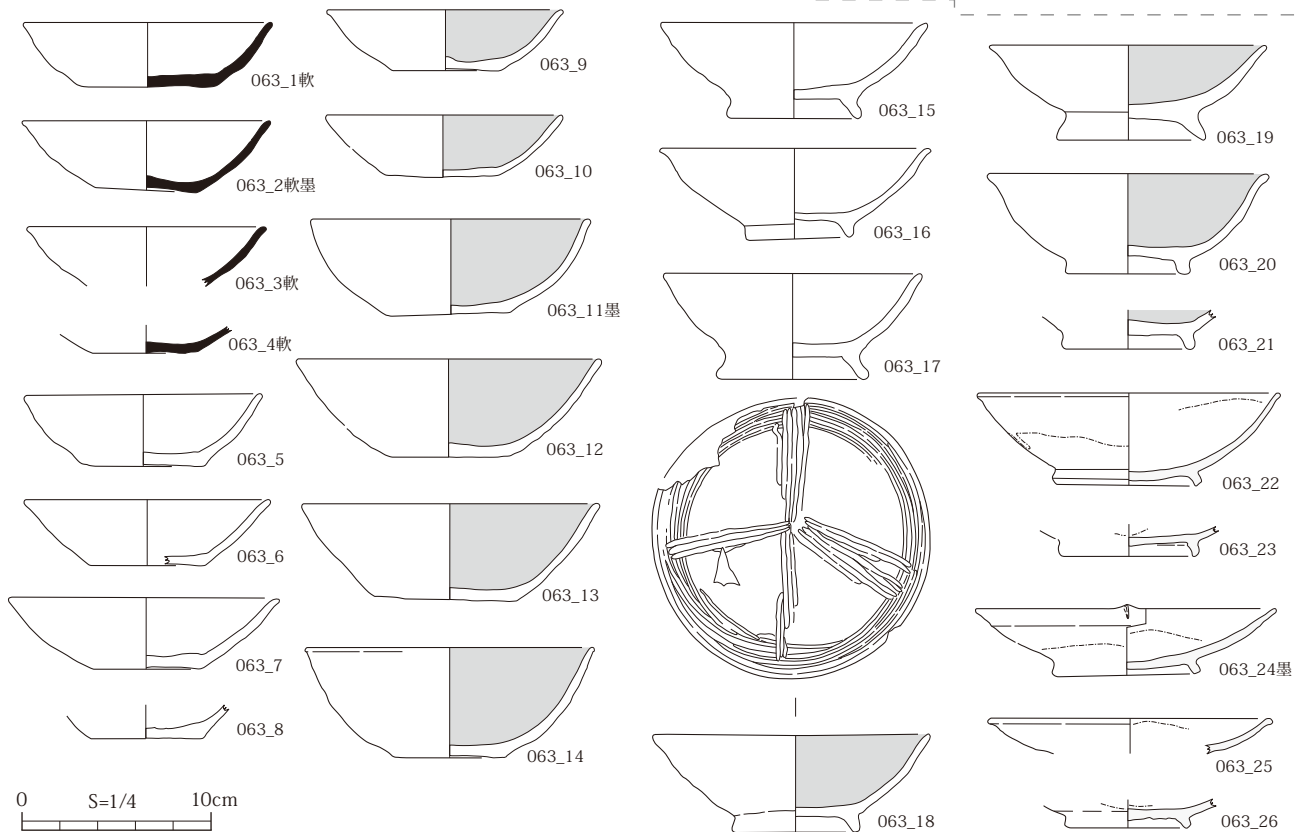
61 住(1~5)



62 住(1~13)



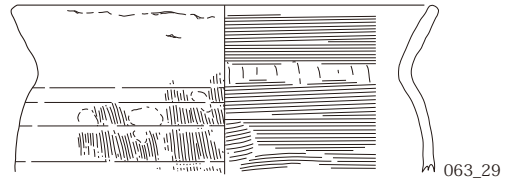
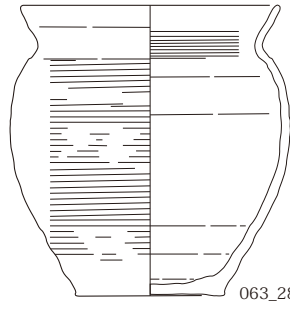
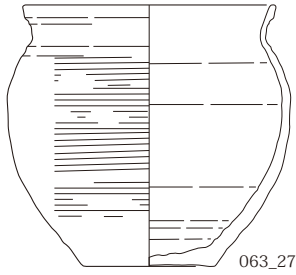
63 住①(1~26)



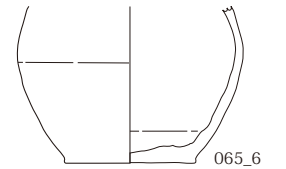
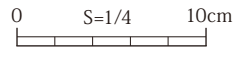
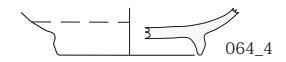
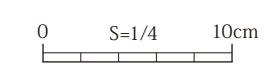
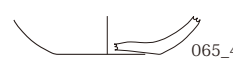
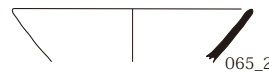
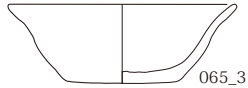
0 S=1/4 10cm

第 107 図 出土土器類実測図(19)

63 住②(27 ~ 29)



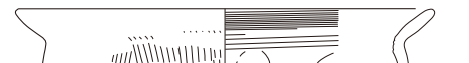
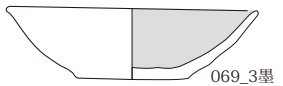
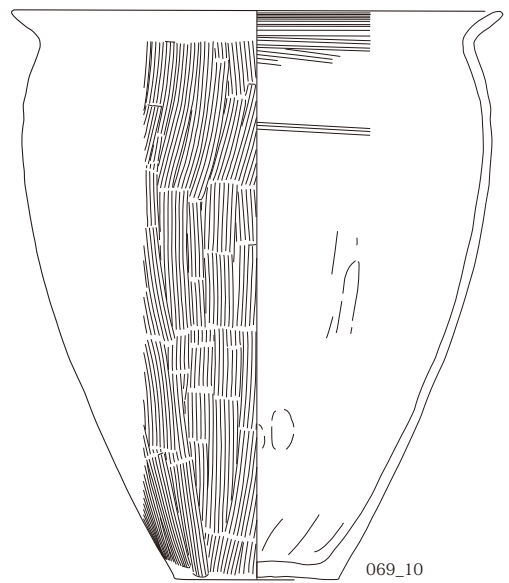
65 住(1 ~ 6)



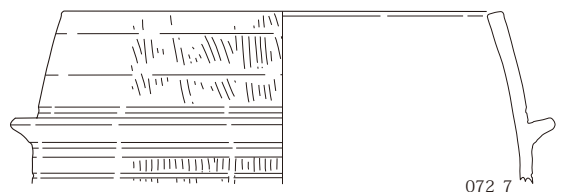
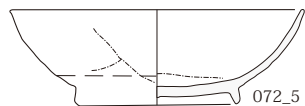
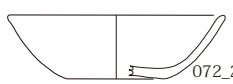
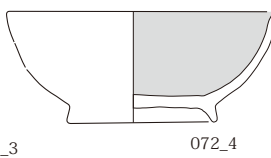
68 住(1 ~ 4)



69 住(1 ~ 13)

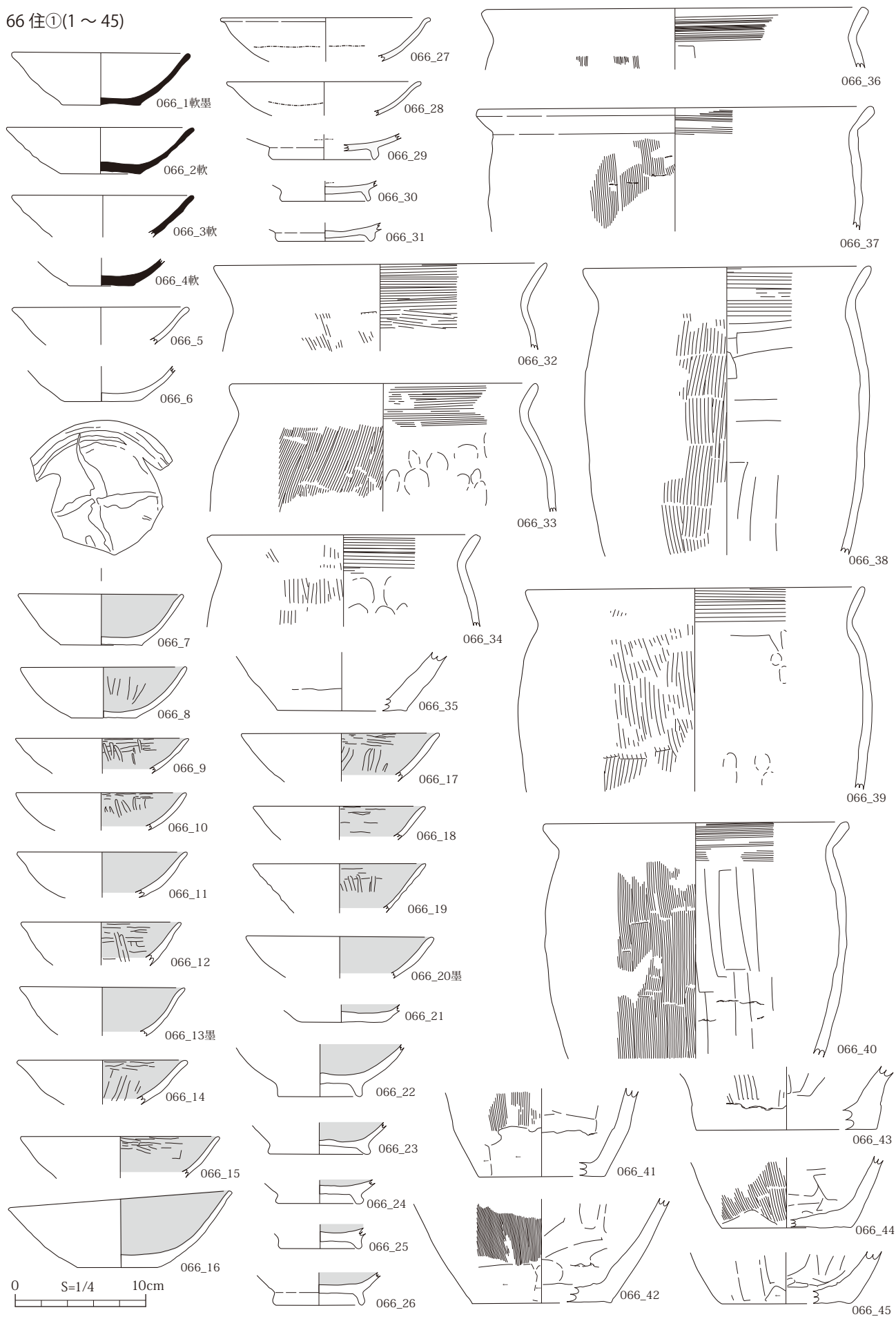


72 住(1 ~ 7)



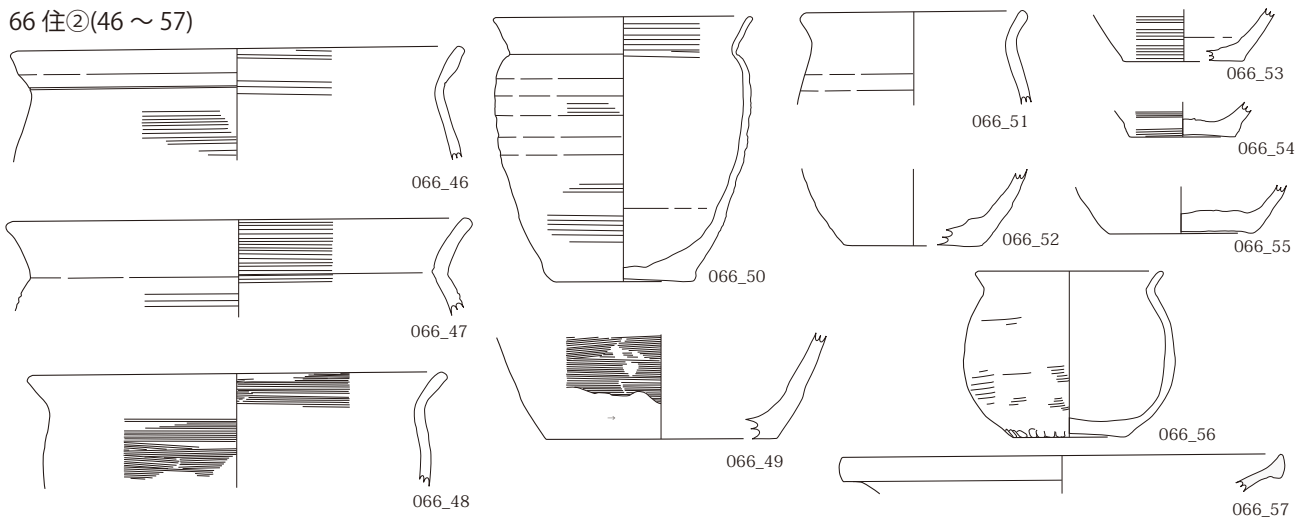
第 108 図 出土土器類実測図 (20)

66 住①(1 ~ 45)

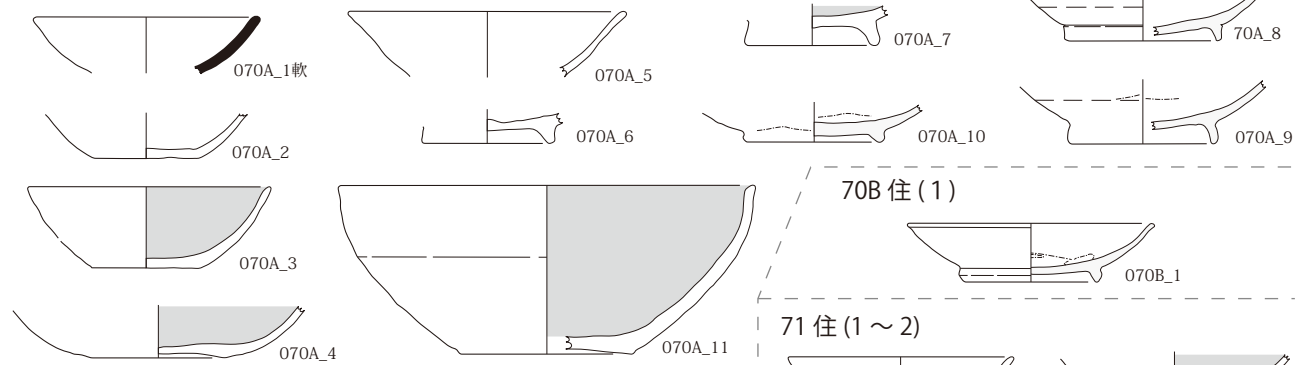


第 109 図 出土土器類実測図 (21)

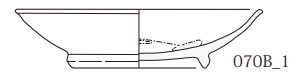
66住②(46~57)



70A住(1~11)



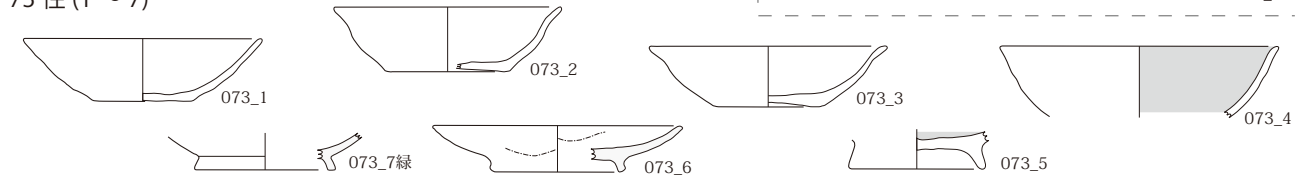
70B住(1)



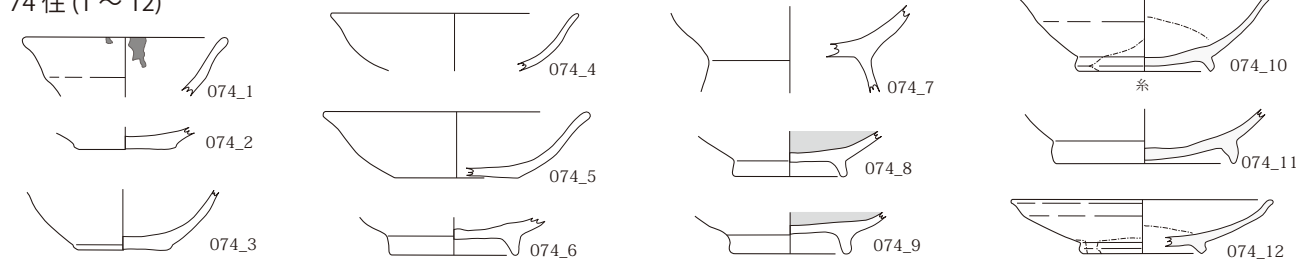
71住(1~2)



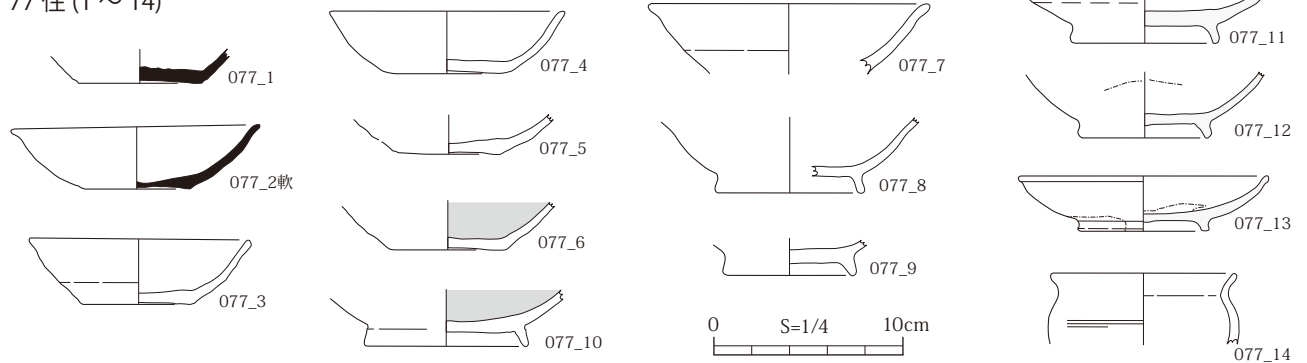
73住(1~7)



74住(1~12)



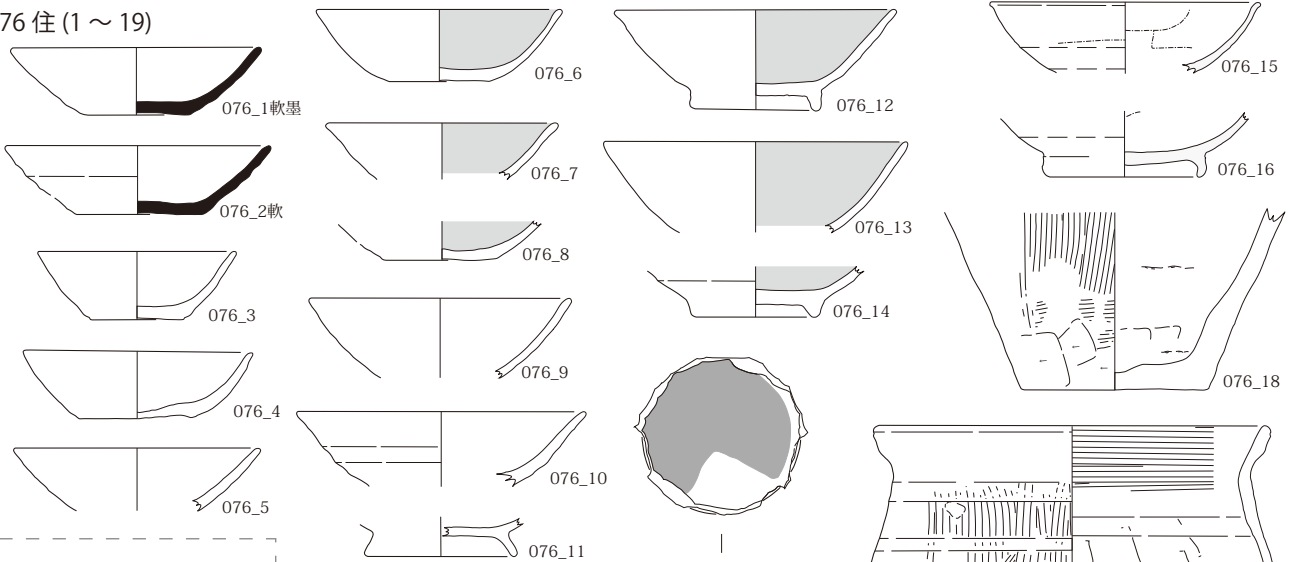
77住(1~14)



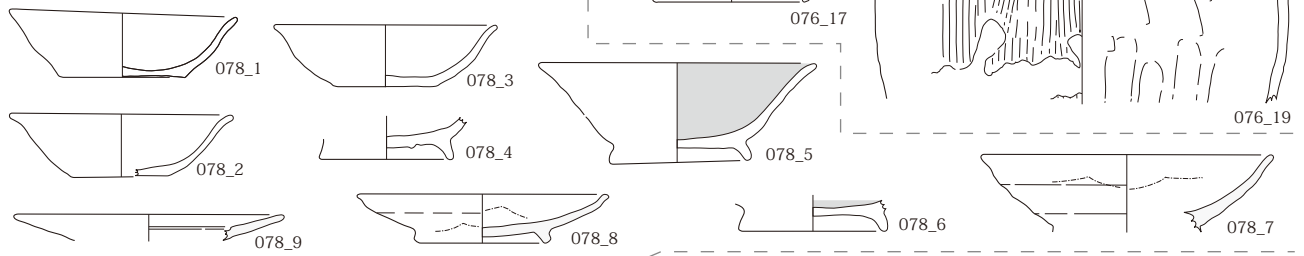
0 S=1/4 10cm

第110図 出土土器類実測図(22)

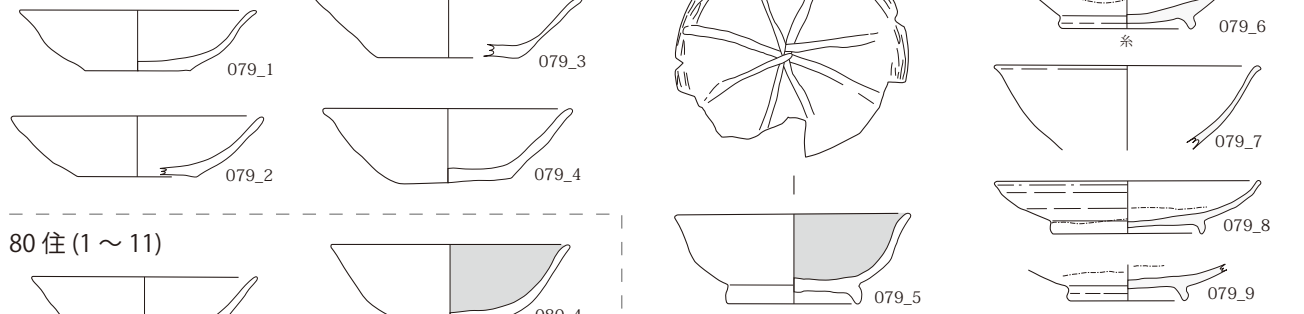
76 住 (1 ~ 19)



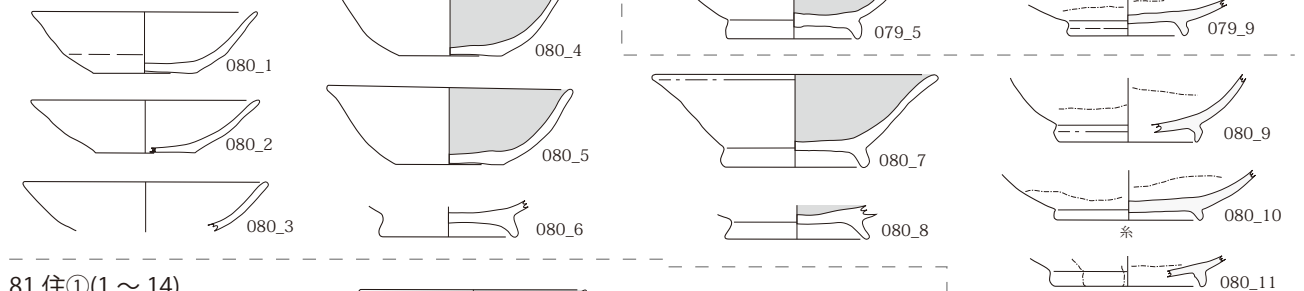
78 住 (1 ~ 9)



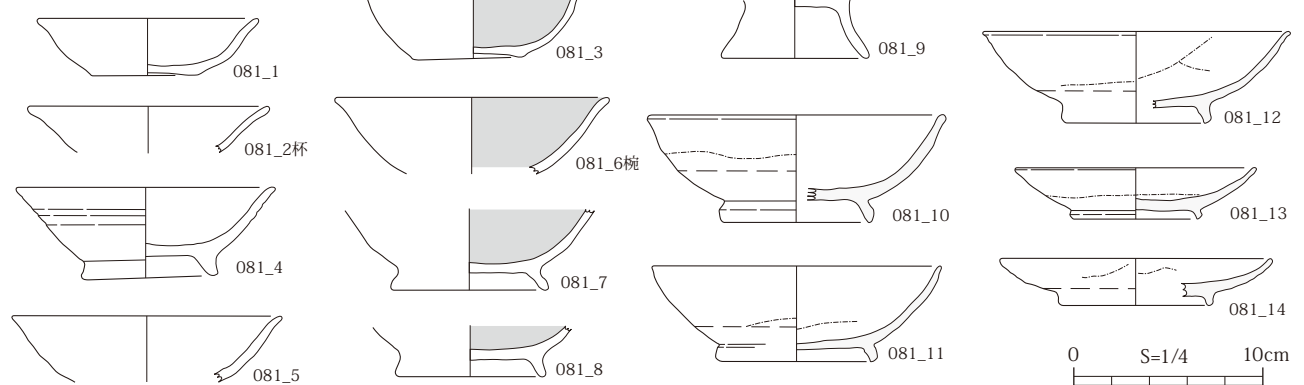
79 住 (1 ~ 9)



80 住 (1 ~ 11)

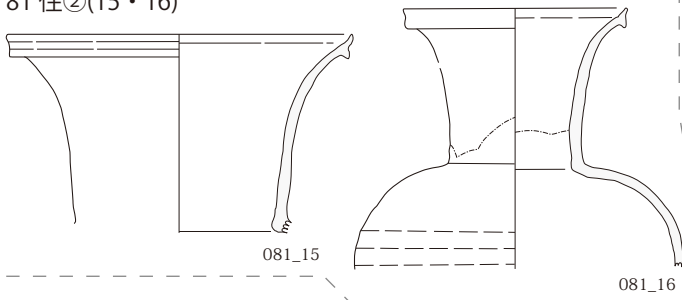


81 住① (1 ~ 14)

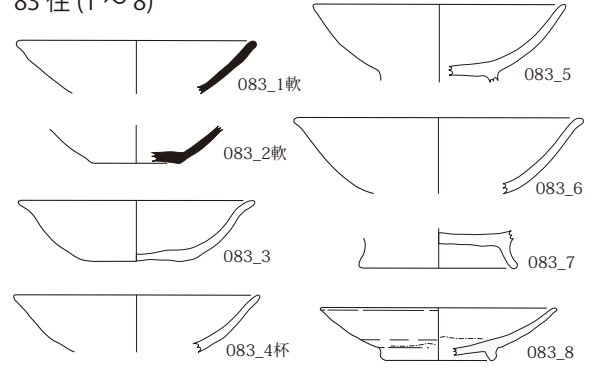


第 111 図 出土土器類実測図 (23)

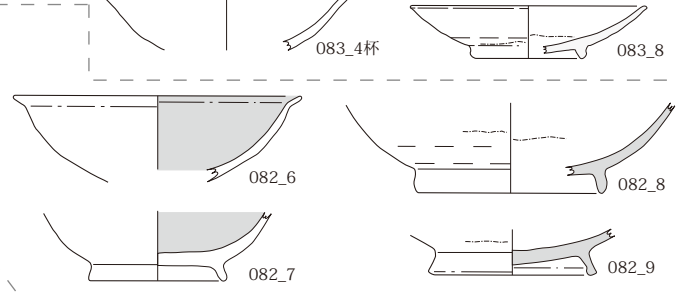
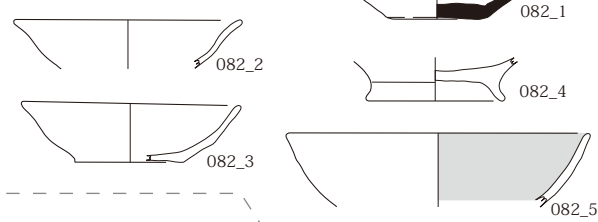
81 住②(15・16)



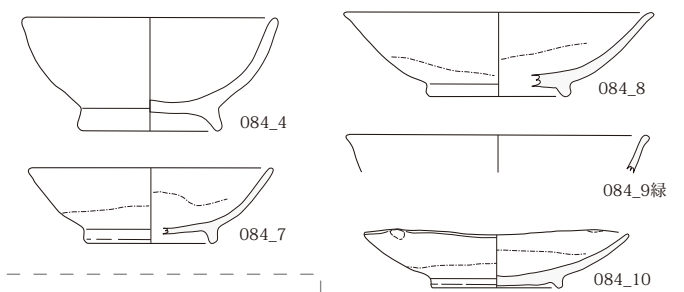
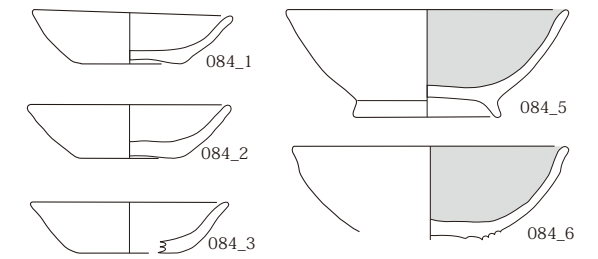
83 住(1~8)



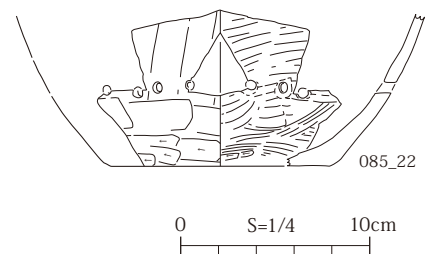
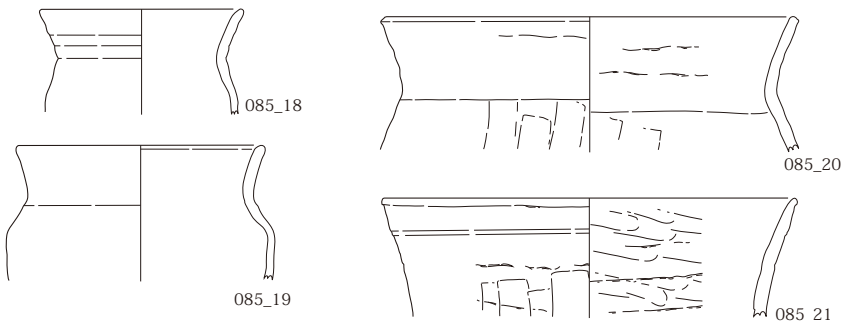
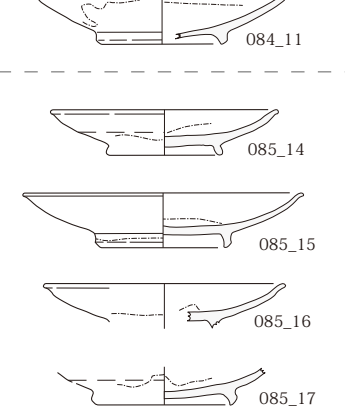
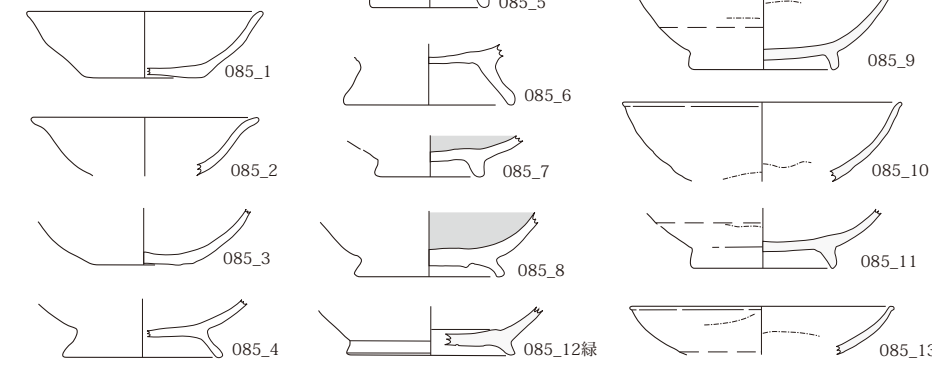
82 住(1~9)



84 住(1~11)

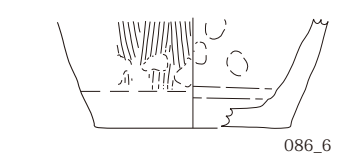
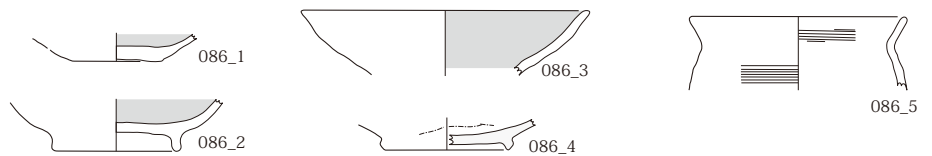


85 住(1~22)



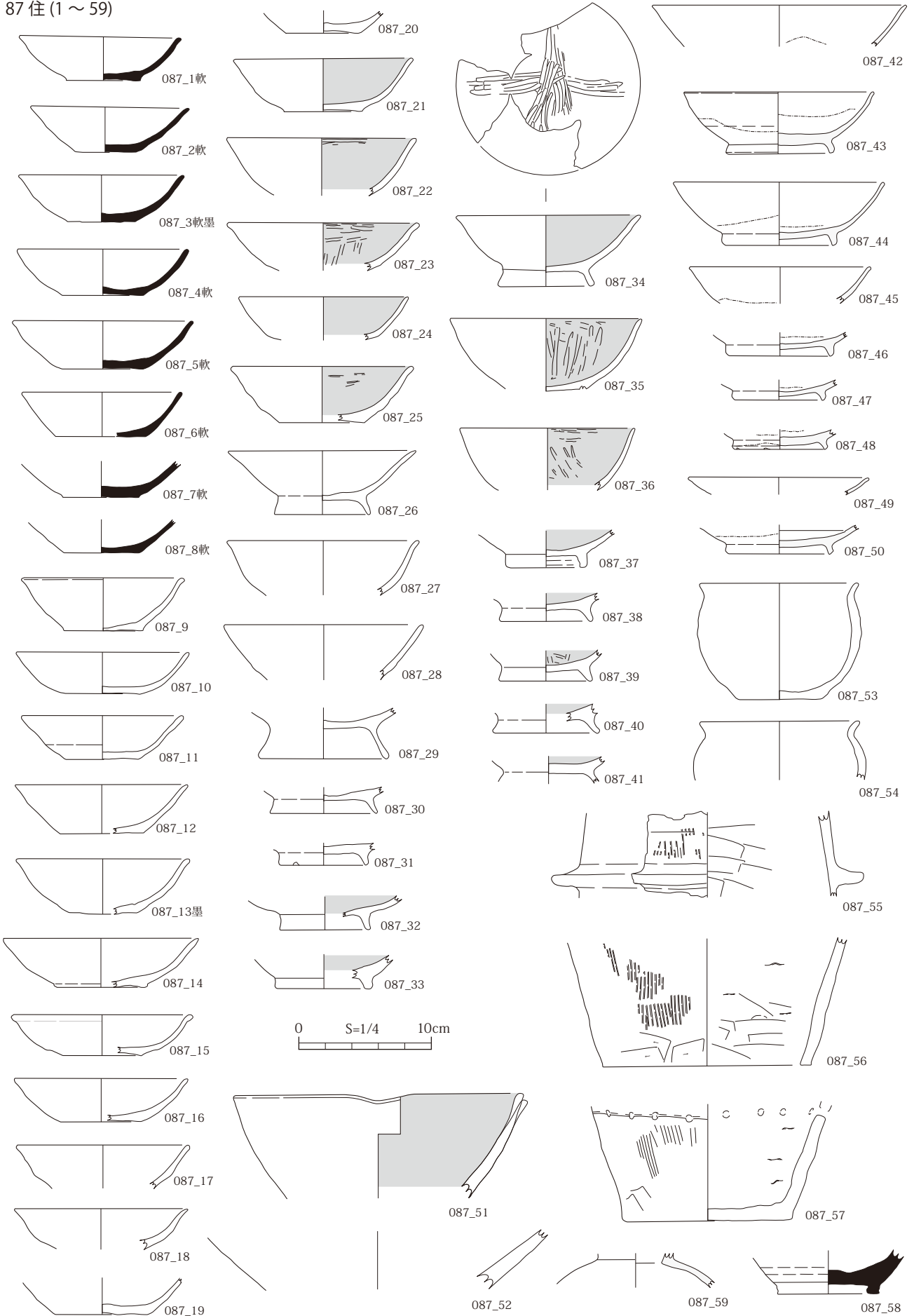
0 S=1/4 10cm

86 住(1~6)



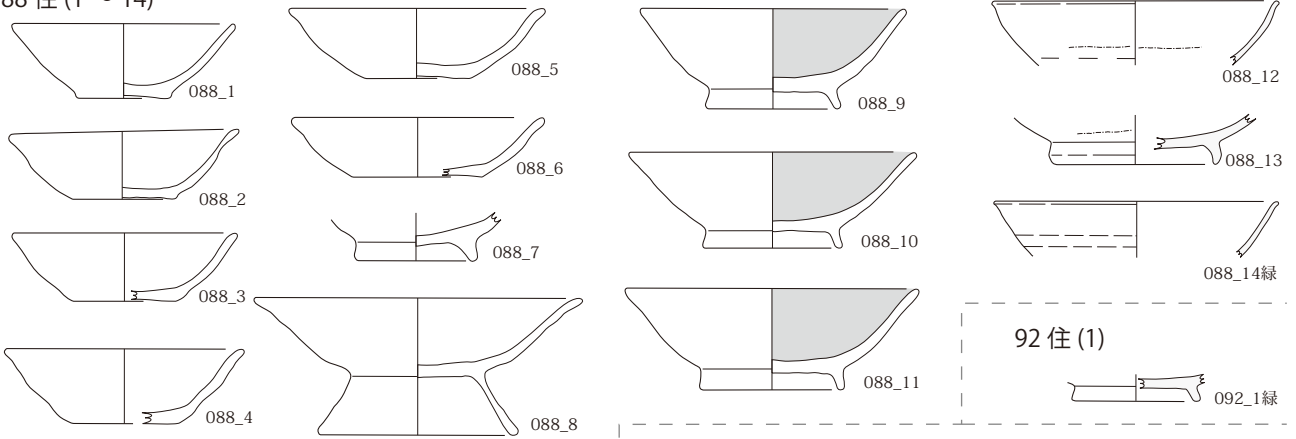
第 112 図 出土土器類実測図 (24)

87住(1~59)



第113図 出土土器類実測図(25)

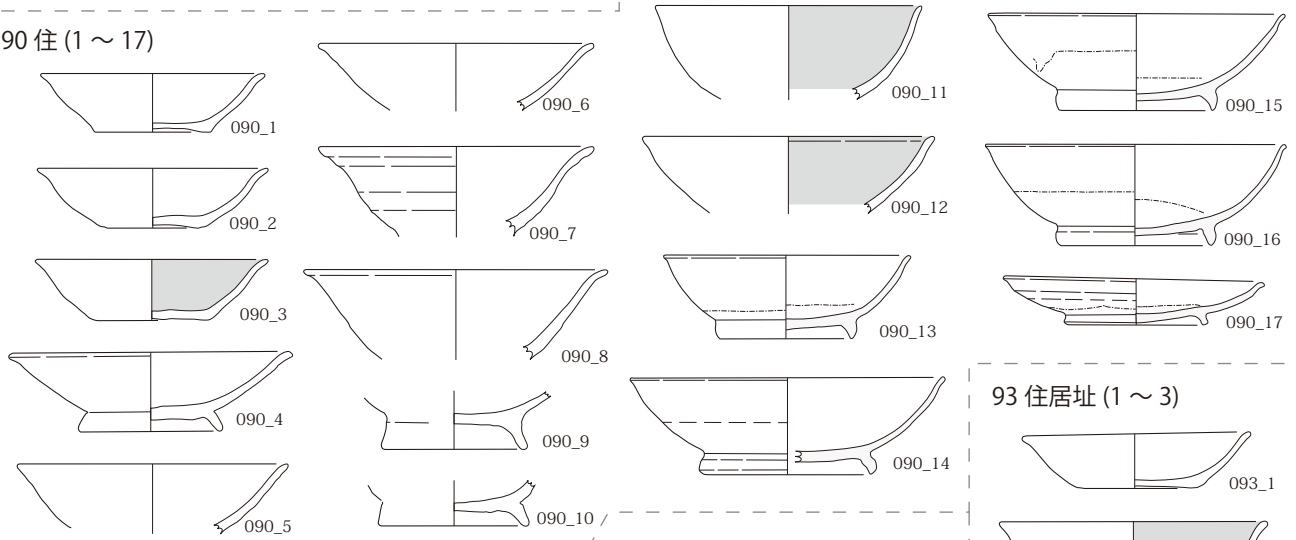
88住(1~14)



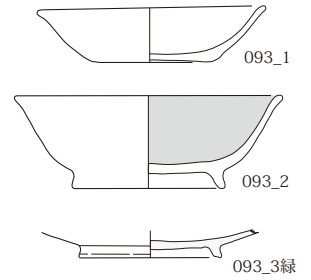
92住(1)



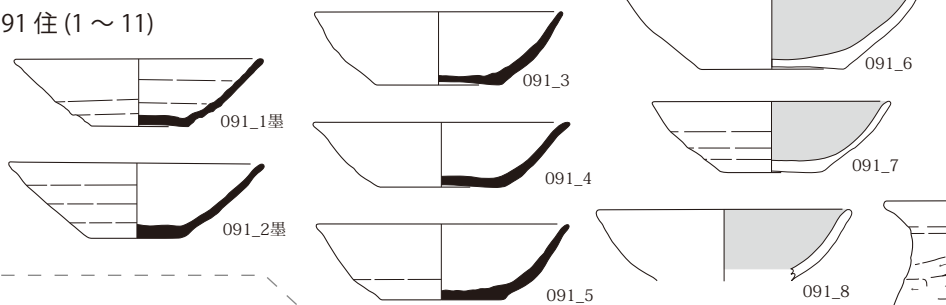
90住(1~17)



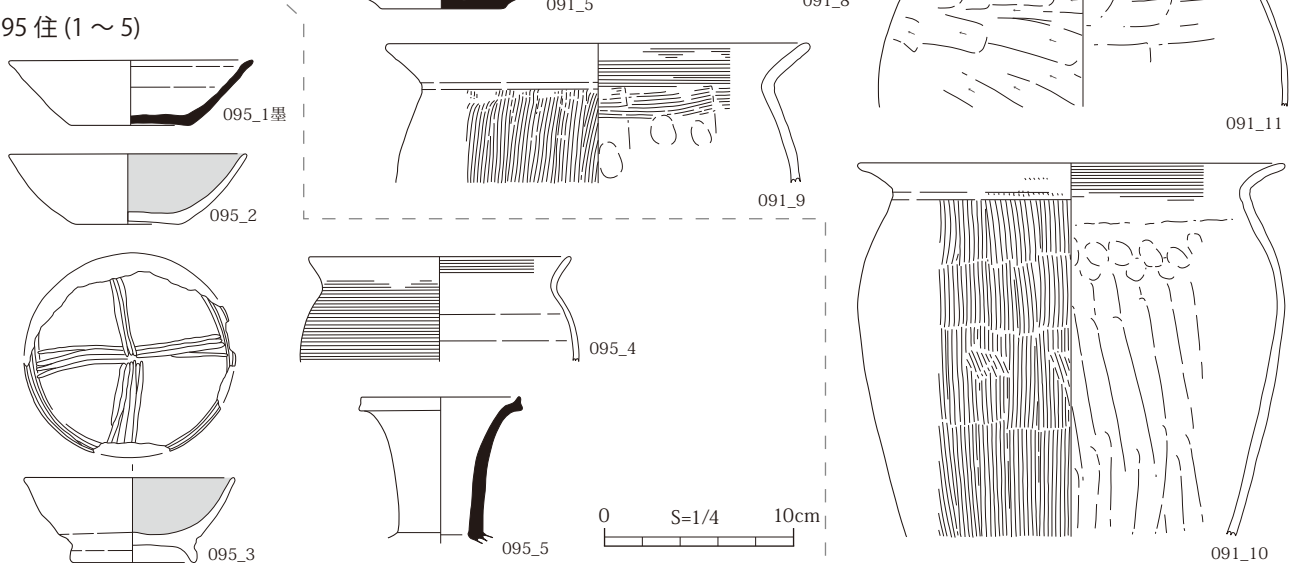
93住居址(1~3)



91住(1~11)

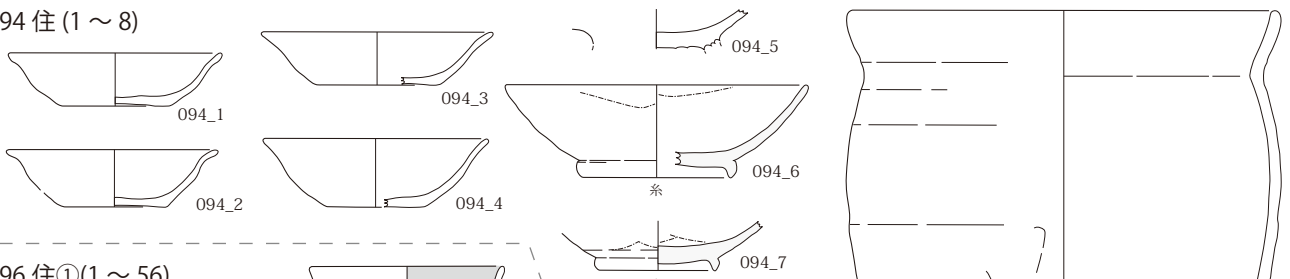


95住(1~5)

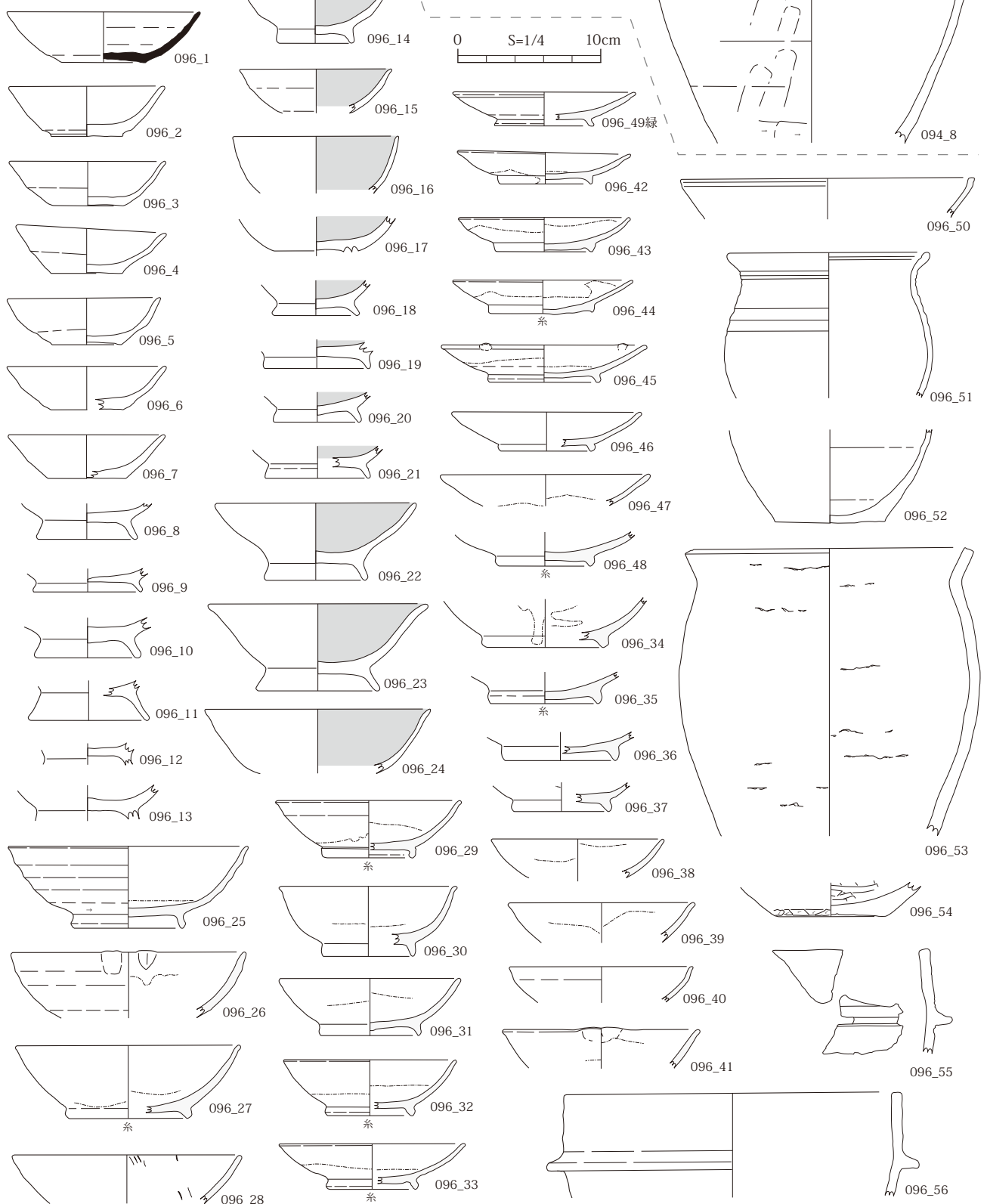


第114図 出土土器類実測図(26)

94 住 (1 ~ 8)

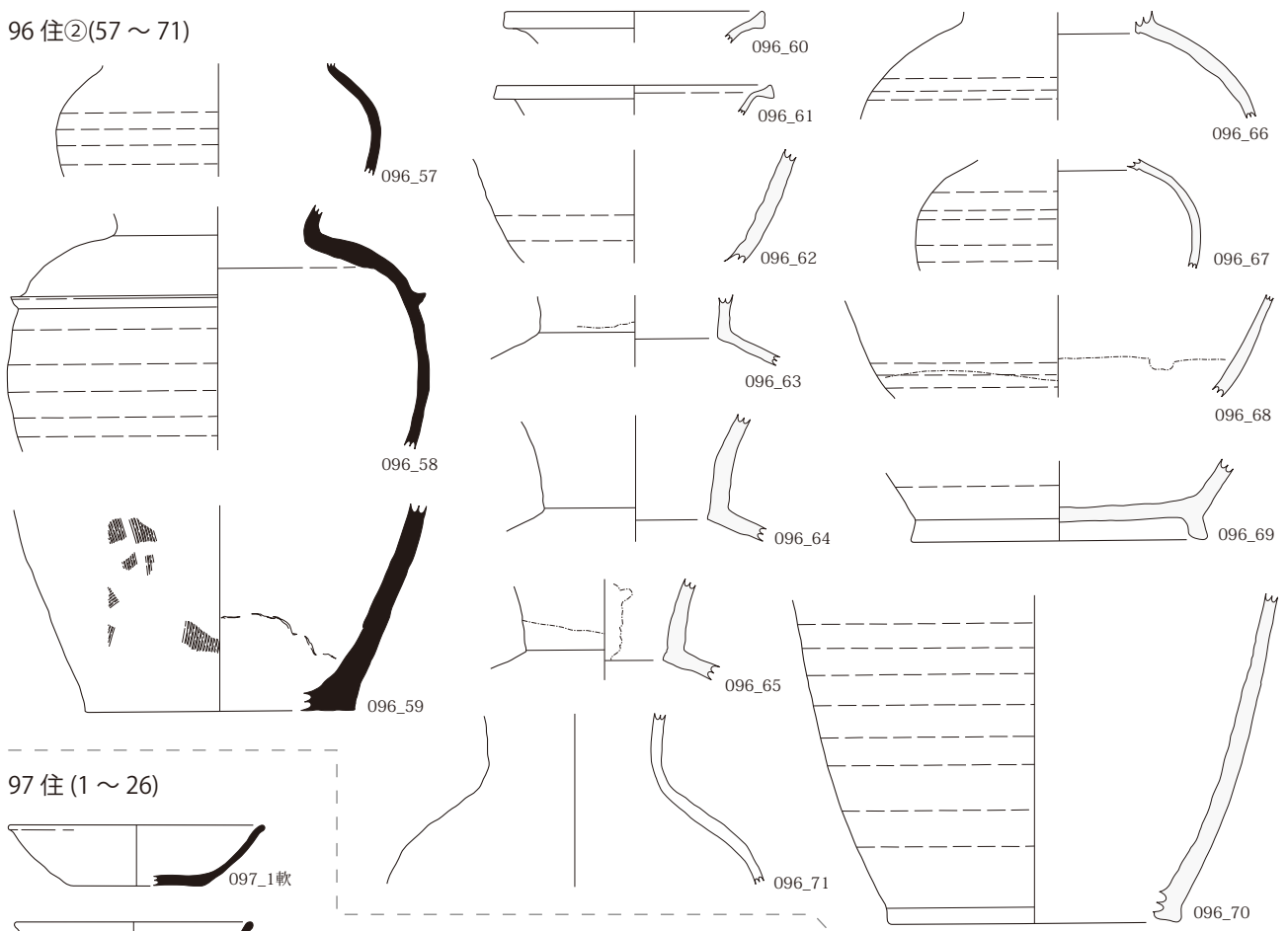


96 住① (1 ~ 56)

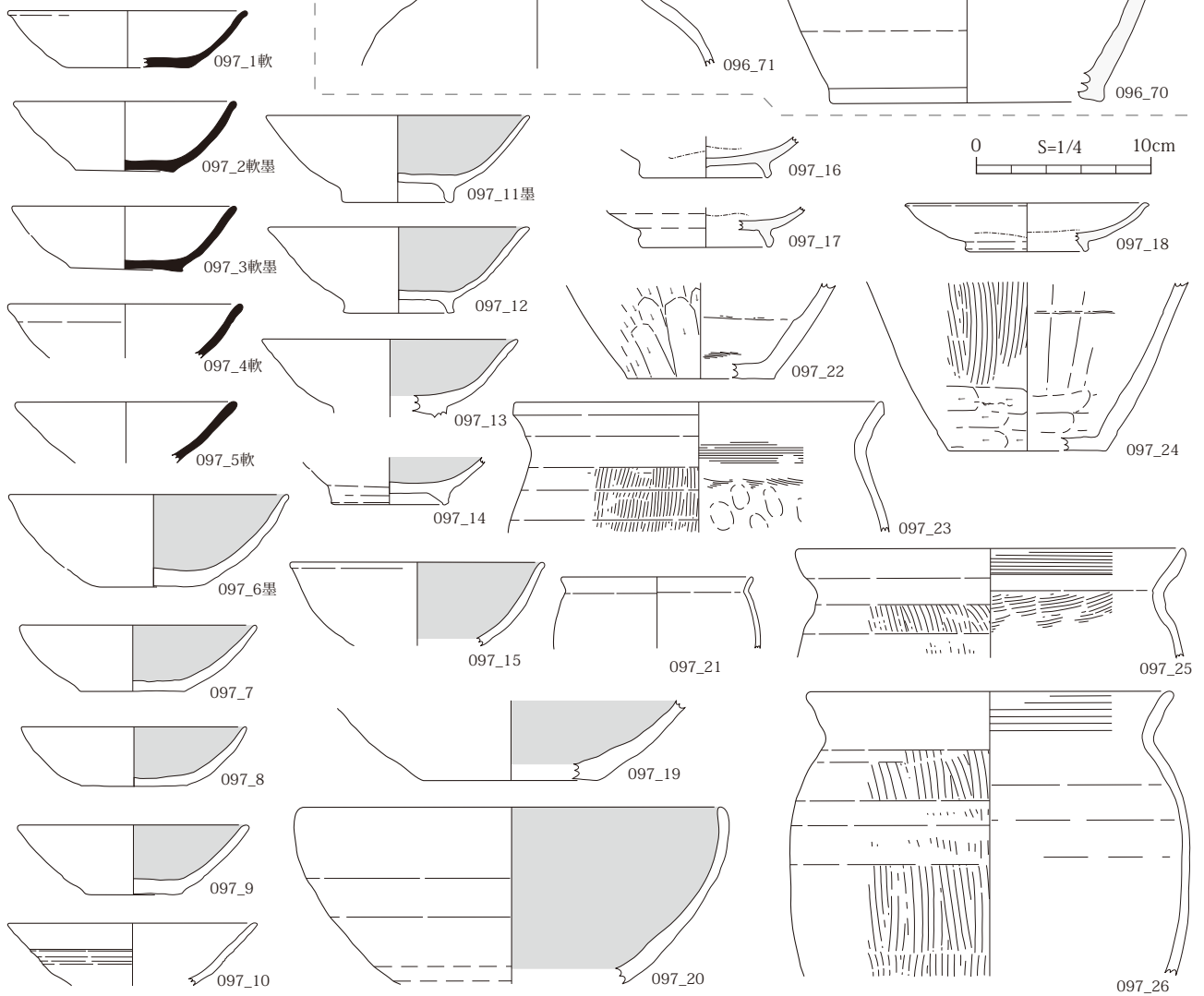


第 115 図 出土土器類実測図 (27)

96 住②(57 ~ 71)

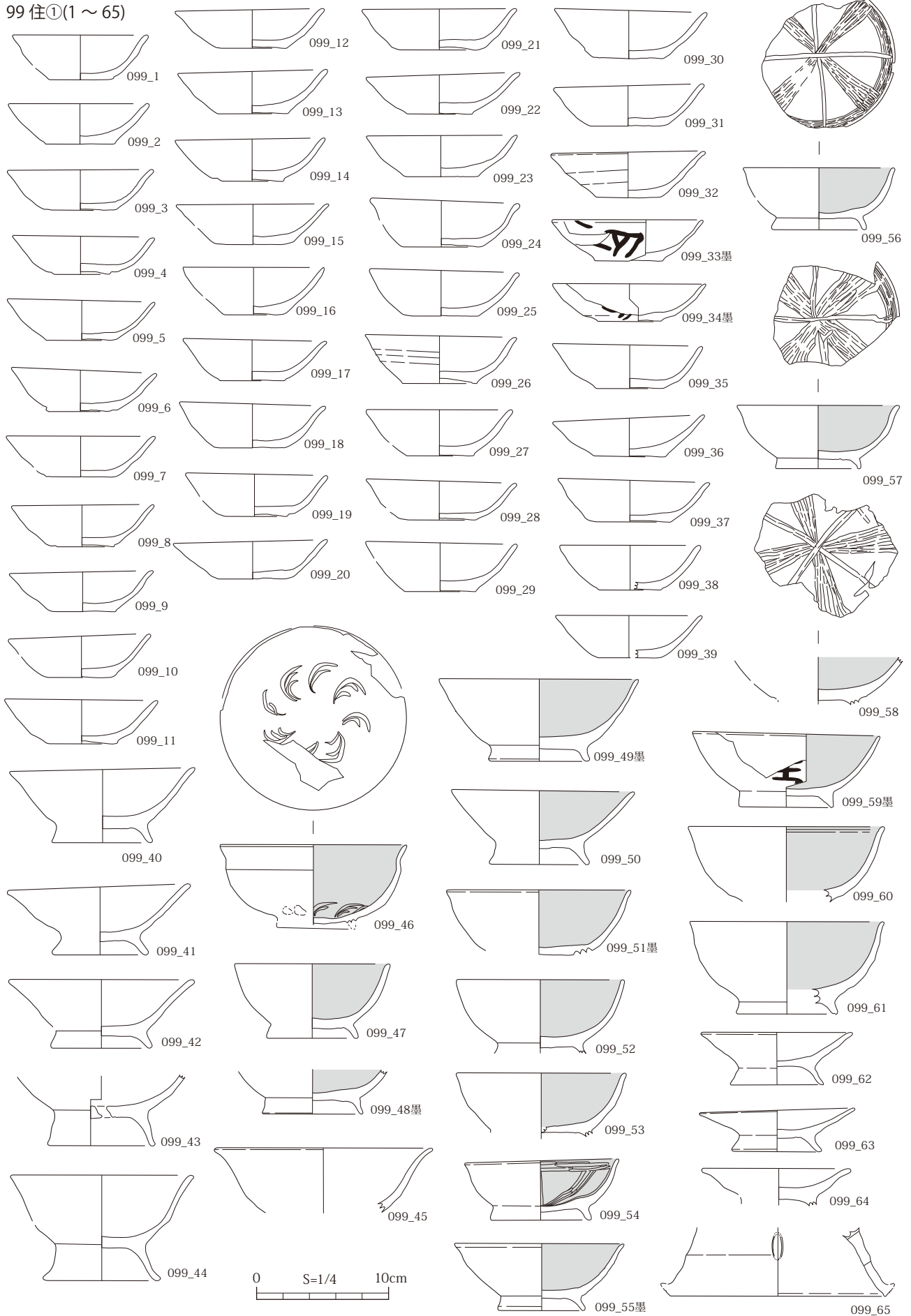


97 住(1 ~ 26)



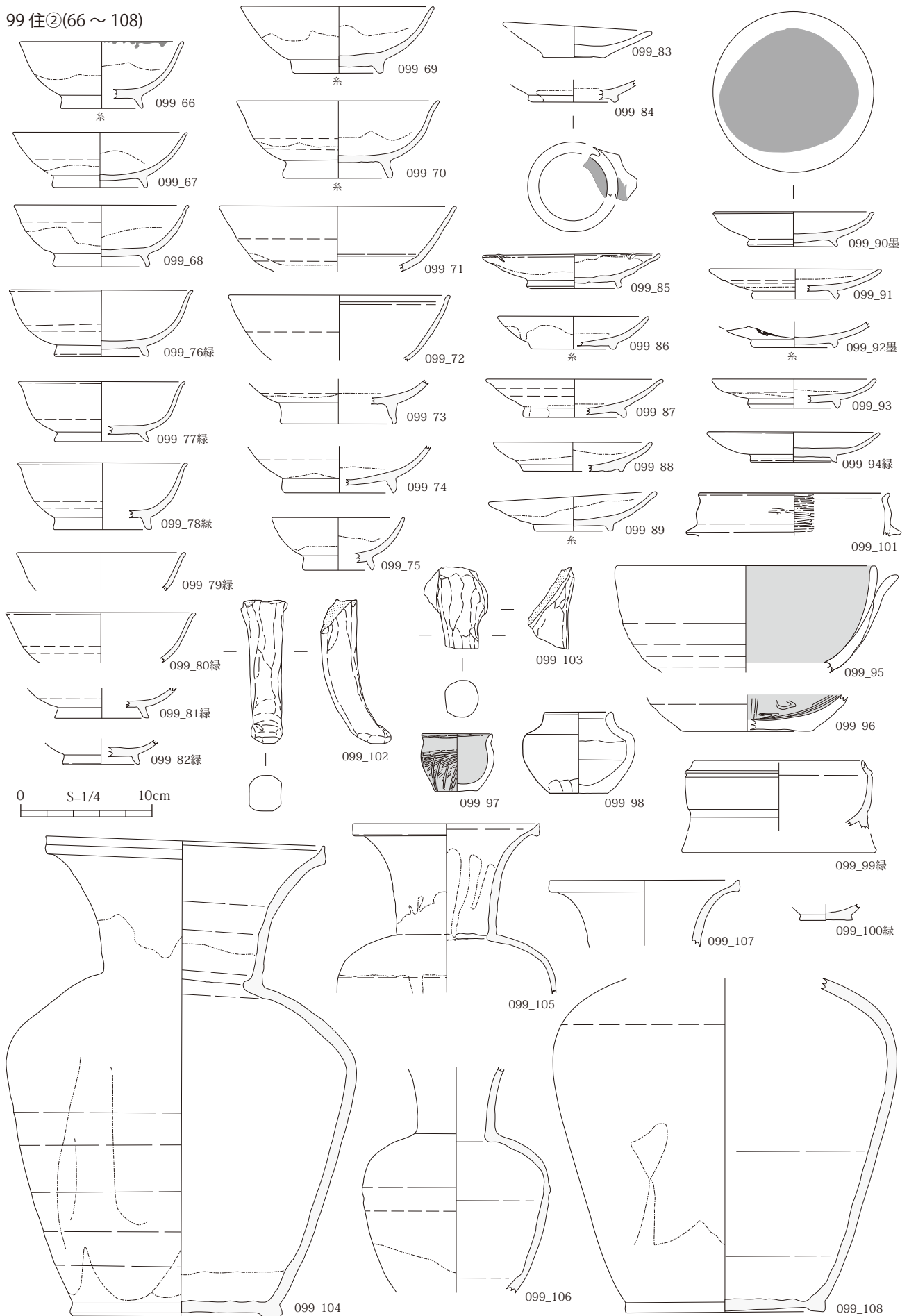
第 116 図 出土土器類実測図 (28)

99住①(1~65)



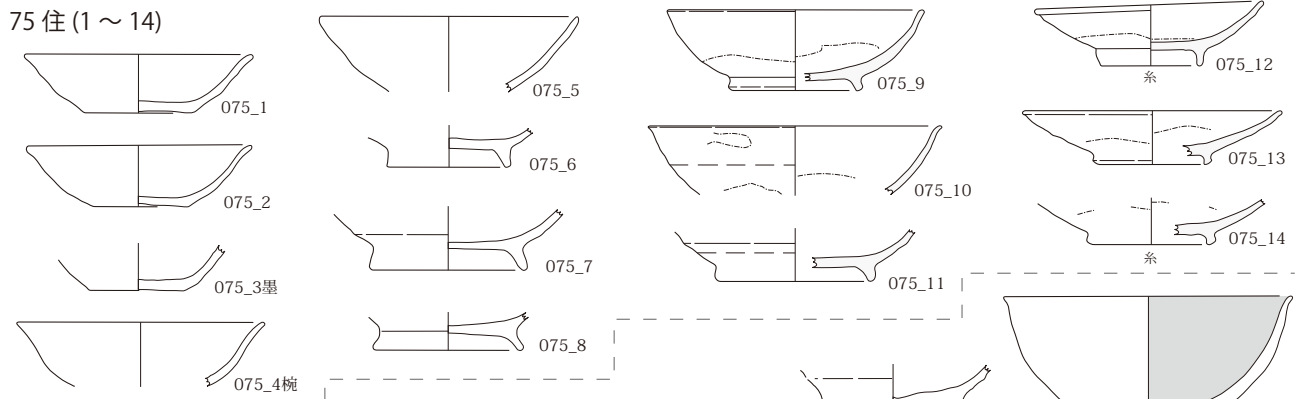
第117图 出土土器類実測图(29)

99住②(66~108)

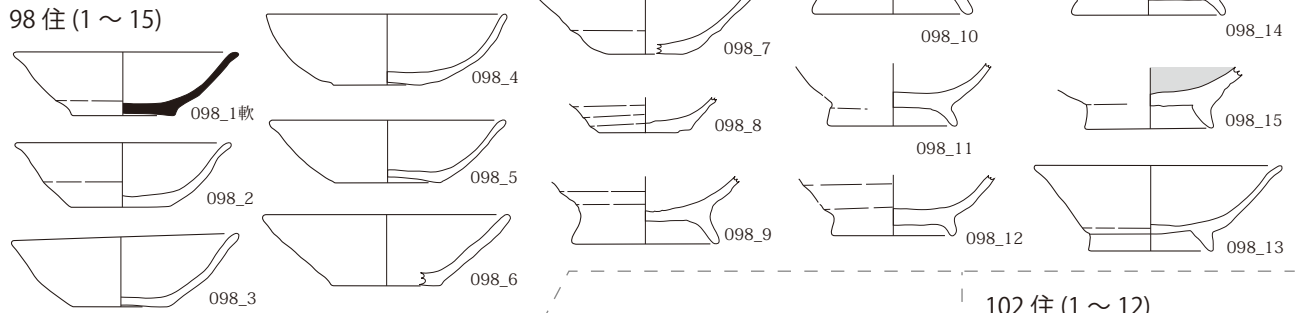


第118図 出土土器類実測図(30)

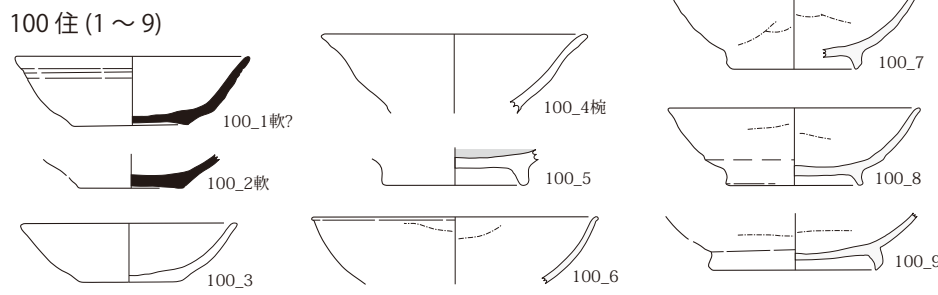
75住(1~14)



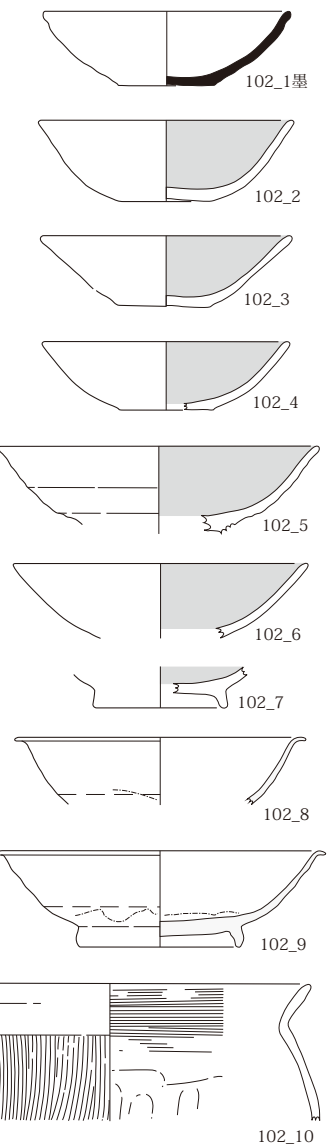
98住(1~15)



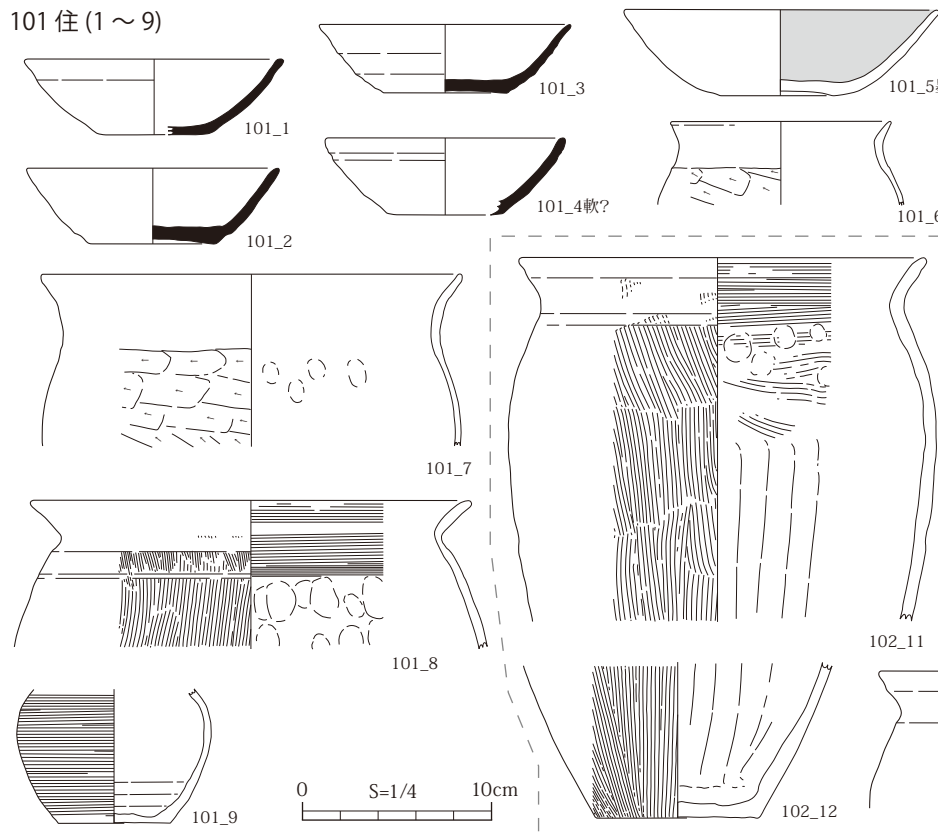
100住(1~9)



102住(1~12)



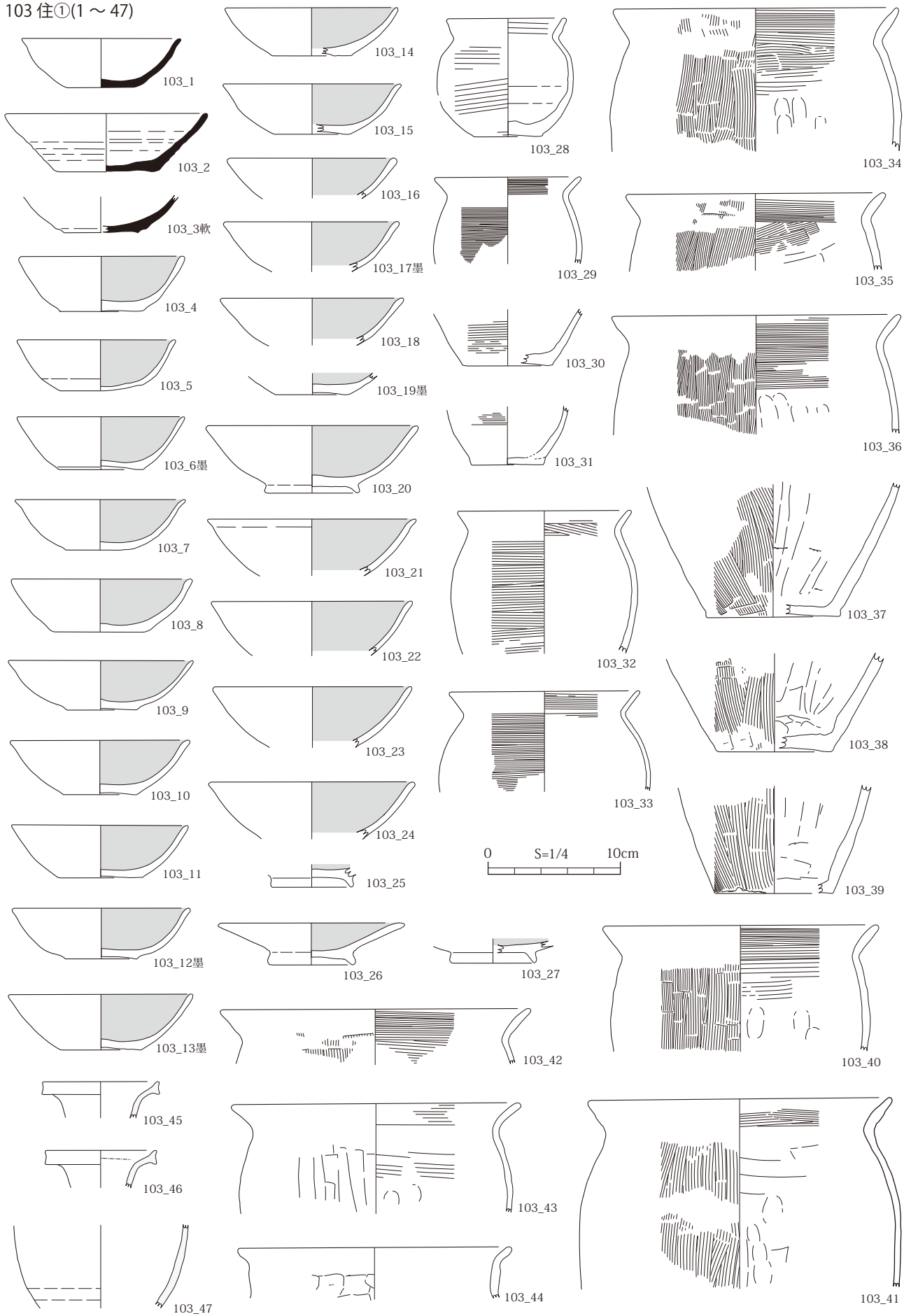
101住(1~9)



0 S=1/4 10cm

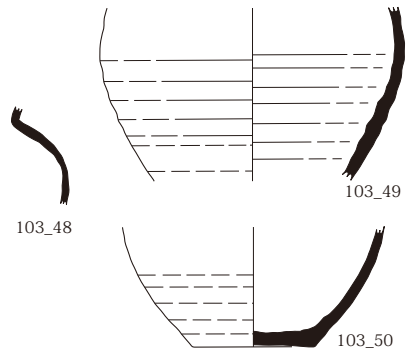
第119図 出土土器類実測図(31)

103 住①(1 ~ 47)

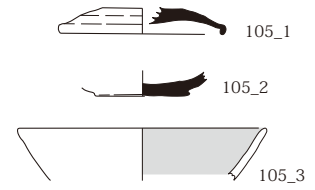


第 120 図 出土土器類実測図 (32)

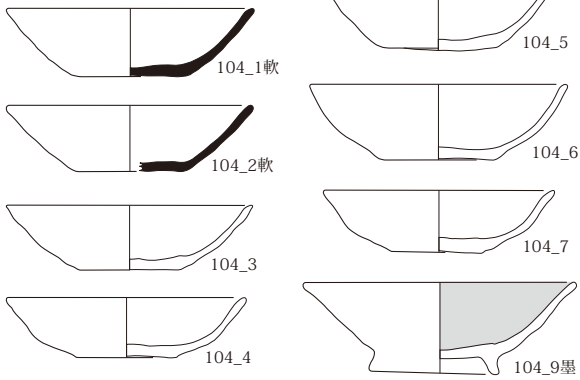
103 住②(48 ~ 51)



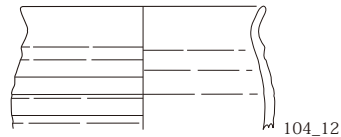
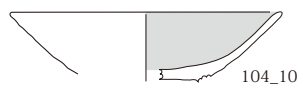
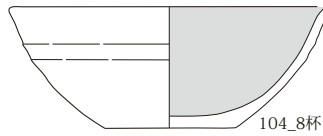
105 住(1 ~ 4)



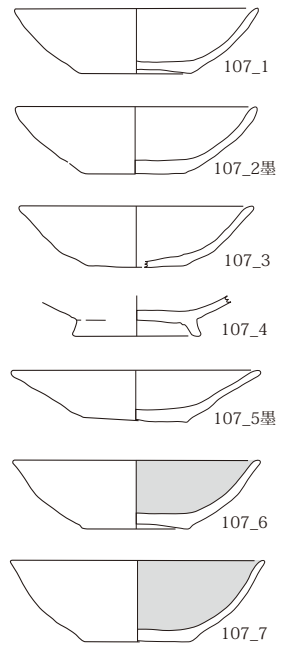
104 住(1 ~ 13)



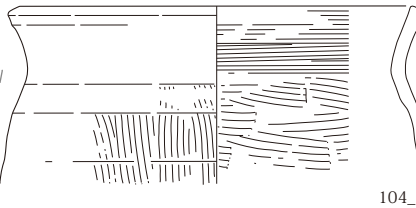
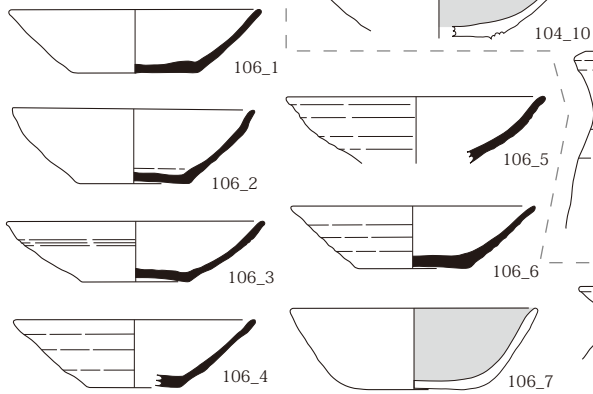
0 S=1/4 10cm



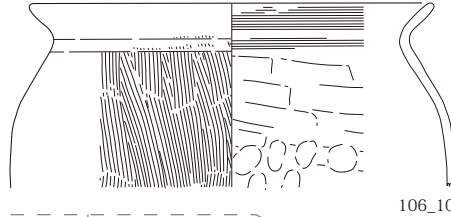
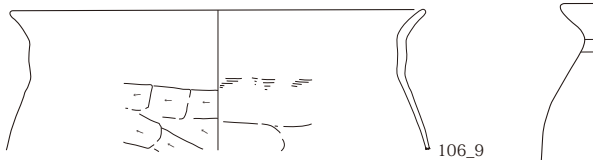
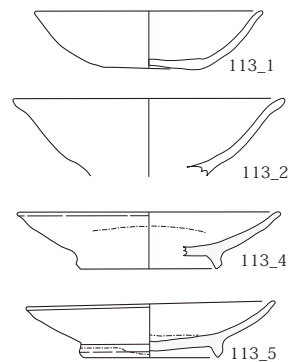
107 住(1 ~ 7)



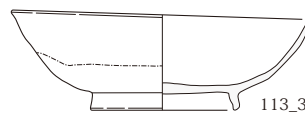
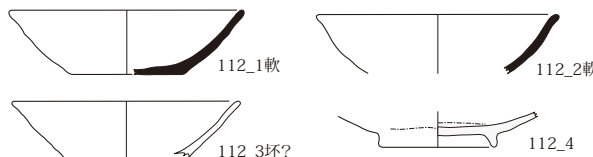
106 住(1 ~ 10)



113 住(1 ~ 5)

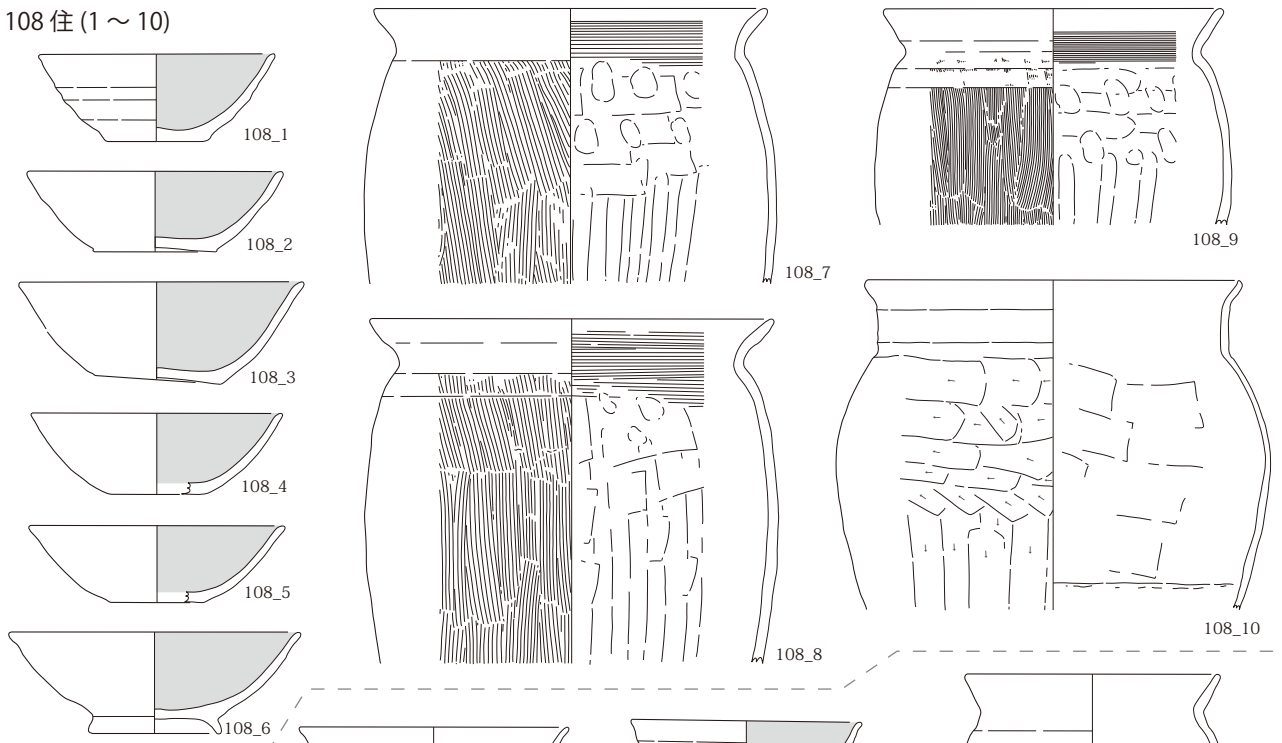


112 住(1 ~ 4)

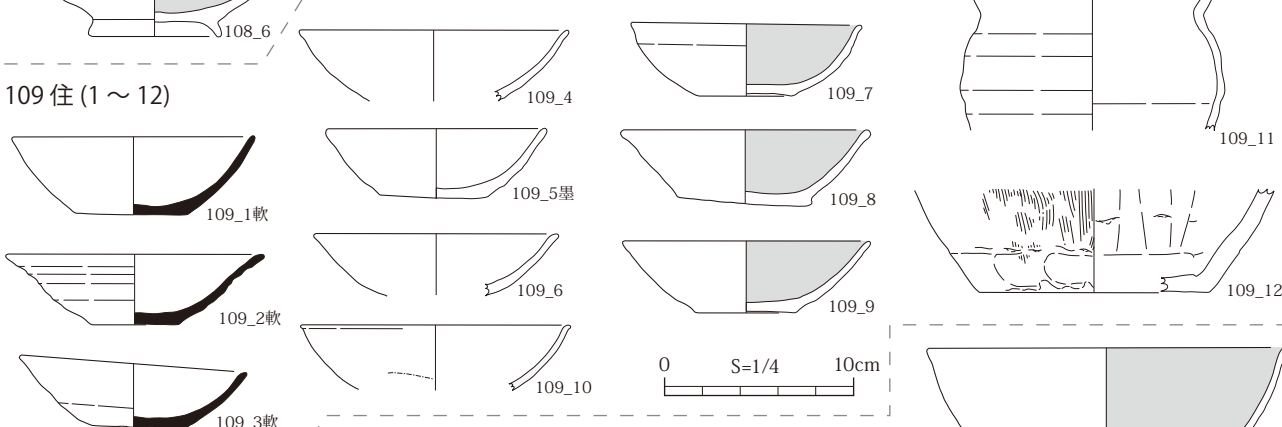


第 121 图 出土土器類実測图 (33)

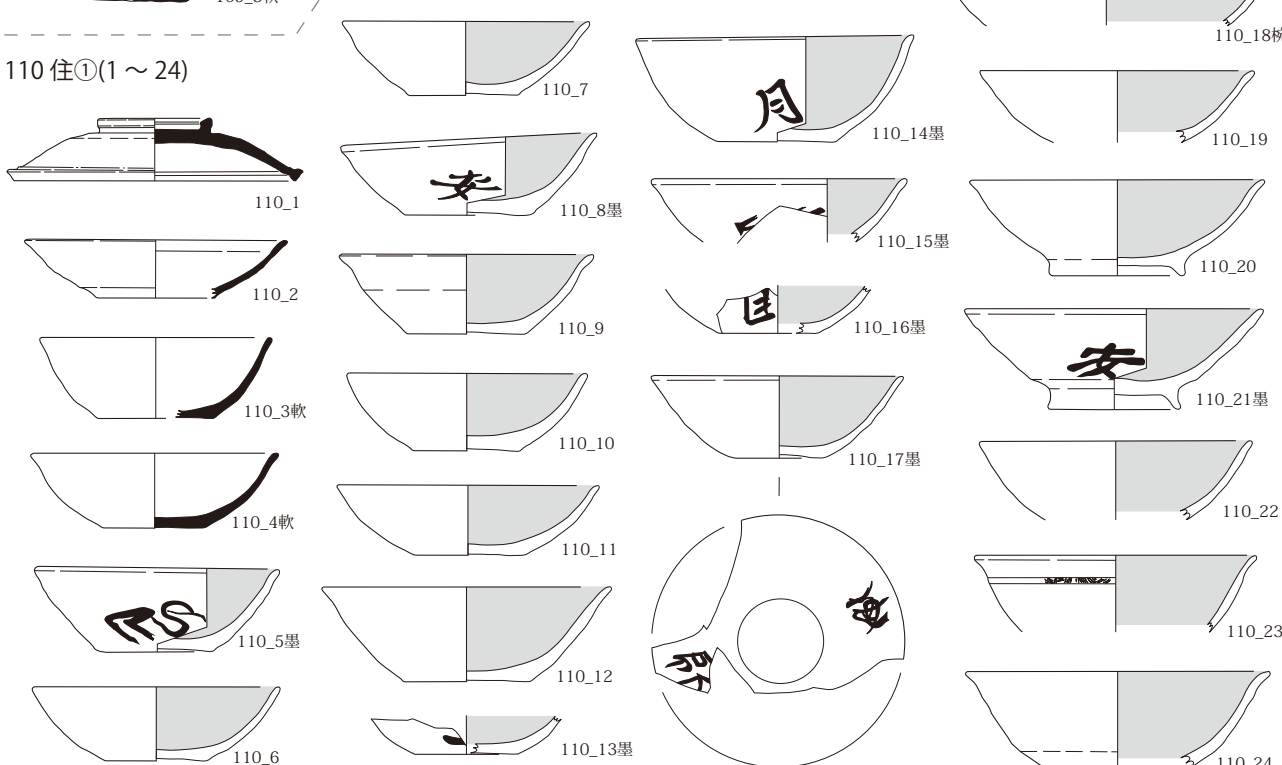
108住(1~10)



109住(1~12)

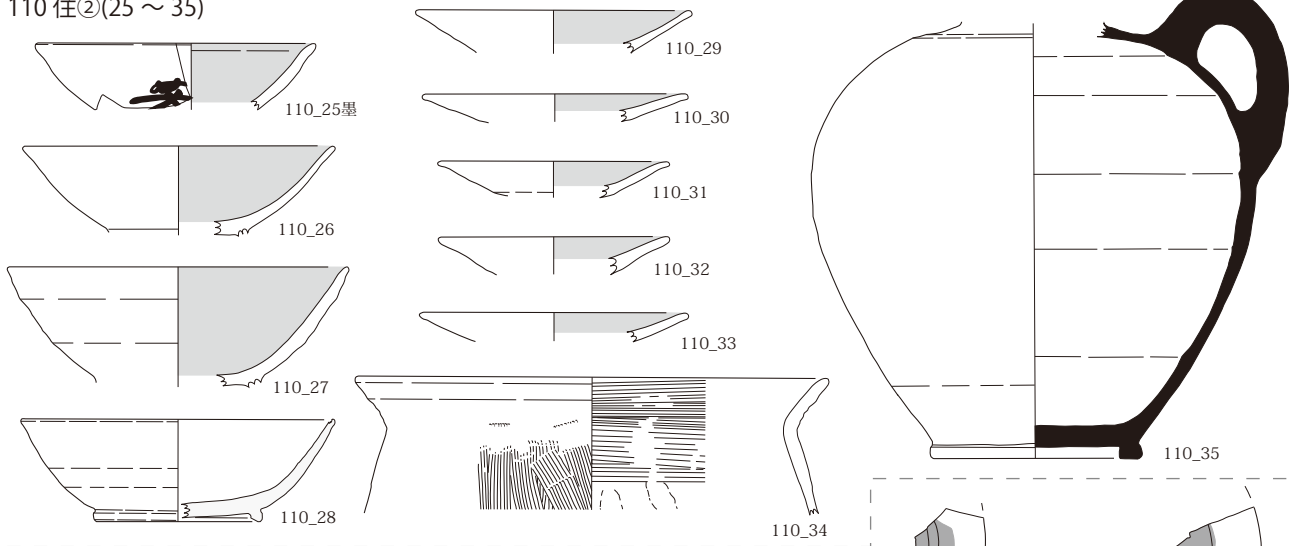


110住①(1~24)

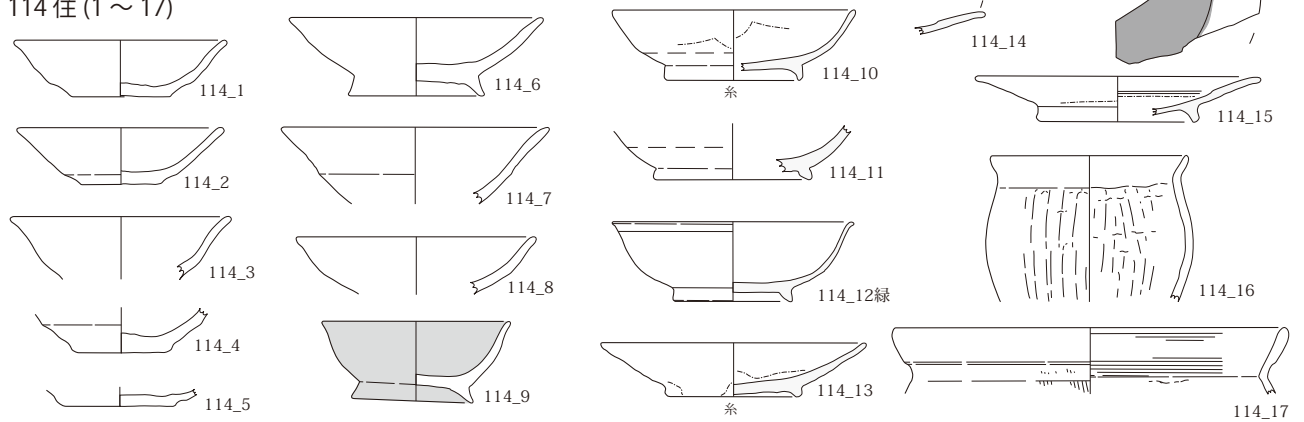


第122図 出土土器類実測図(34)

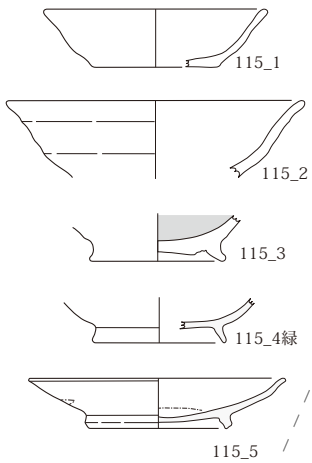
110住②(25~35)



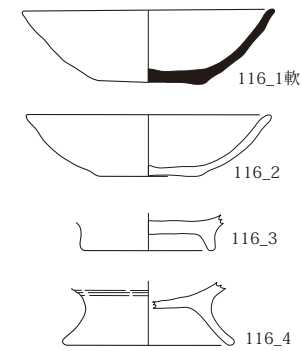
114住(1~17)



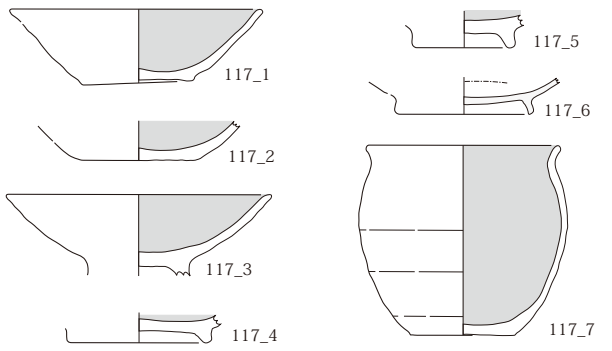
115住(1~5)



116住(1~4)

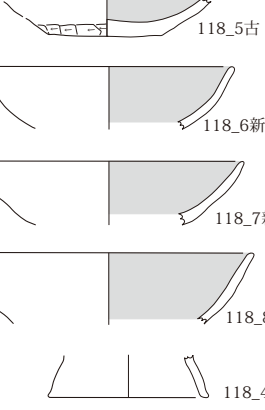
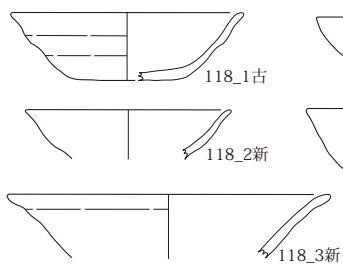


117住(1~7)

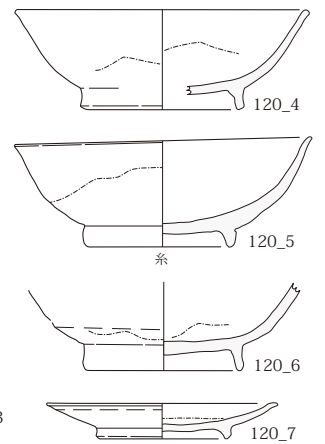
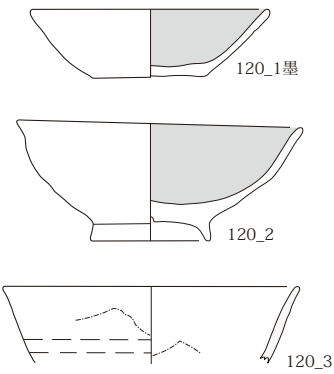


0 S=1/4 10cm

118住(1~8)

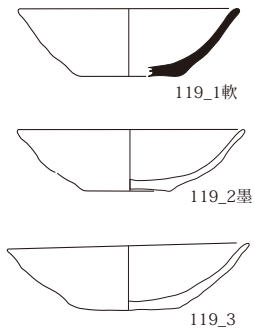


120住(1~7)

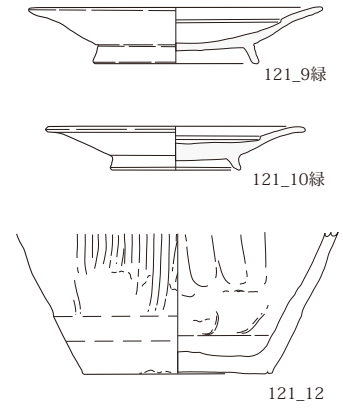
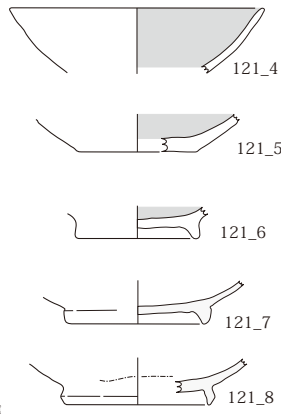
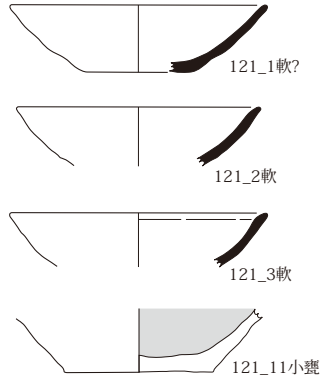


第123図 出土土器類実測図(35)

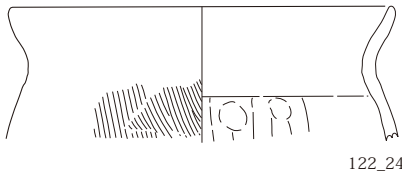
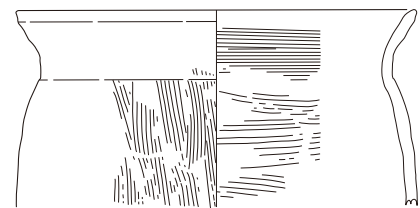
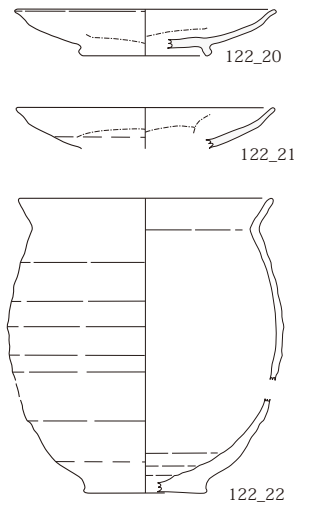
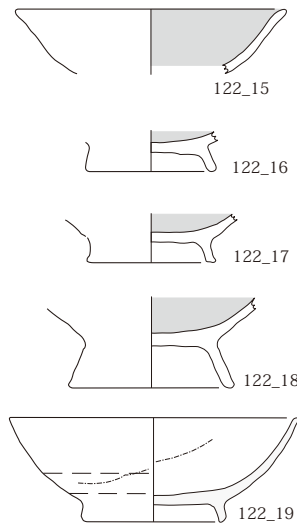
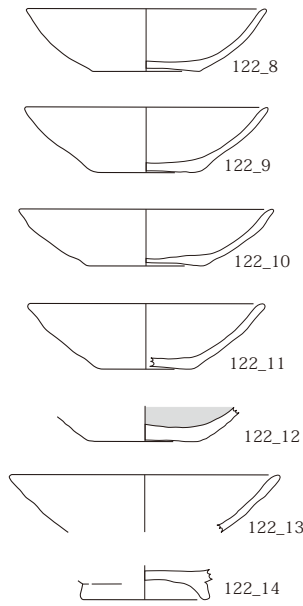
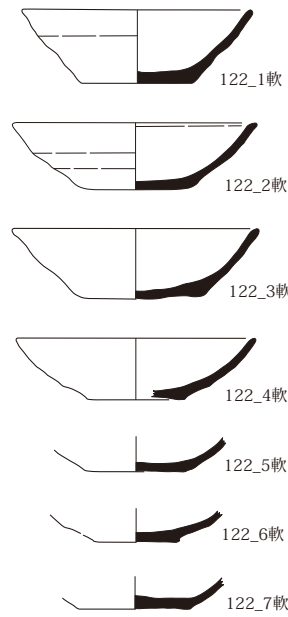
119住(1~3)



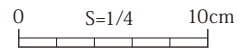
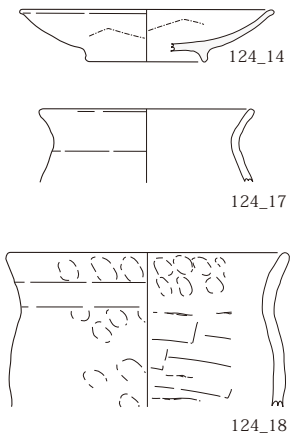
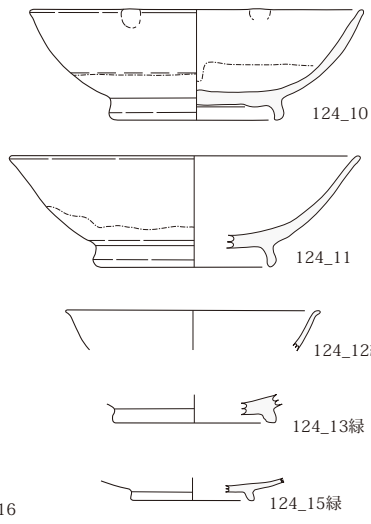
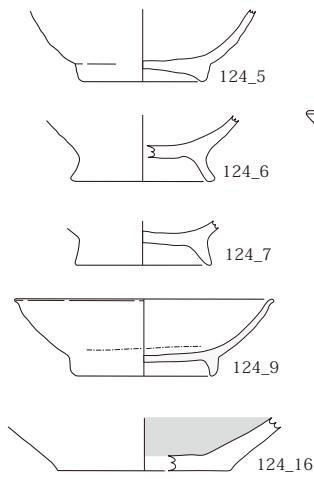
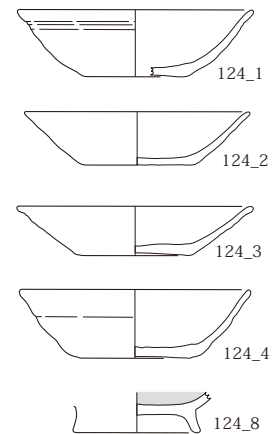
121住(1~12)



122住(1~25)

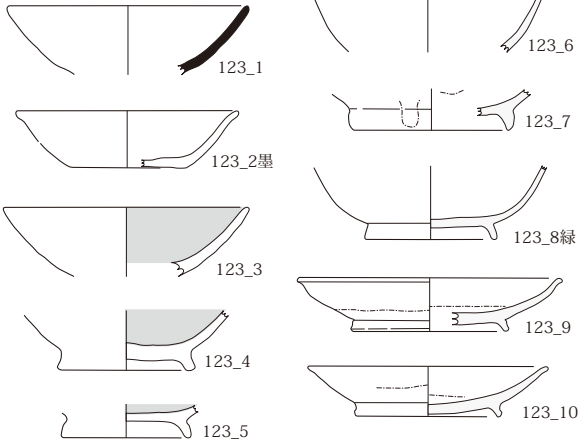


124住(1~18)

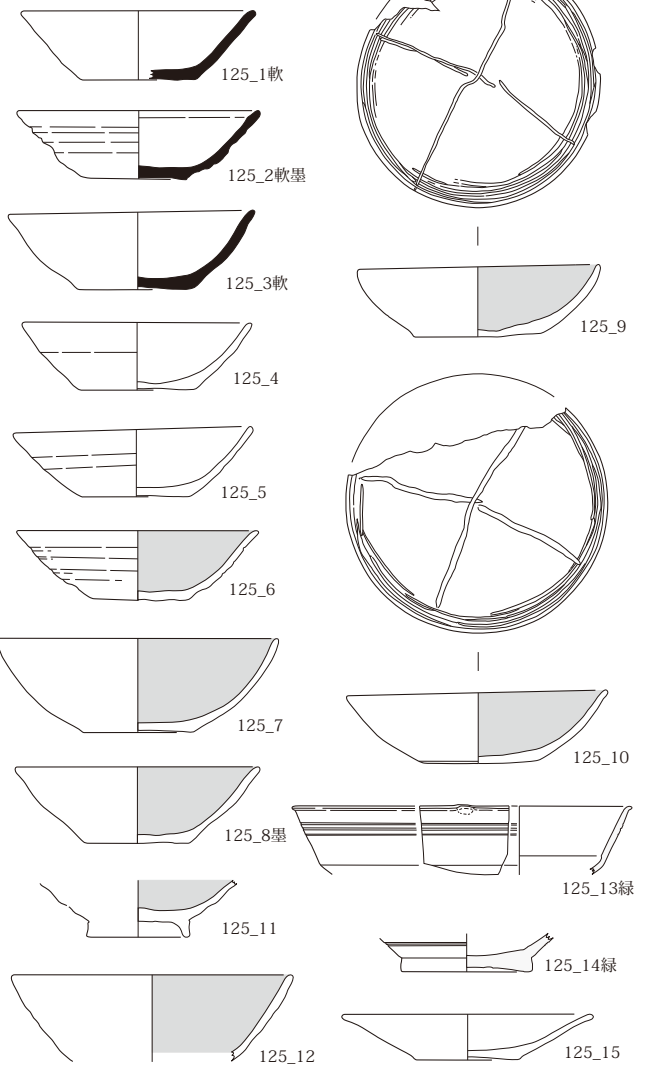


第124図 出土土器類実測図(36)

123住(1~10)



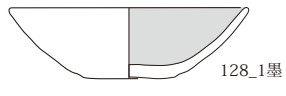
125住(1~15)



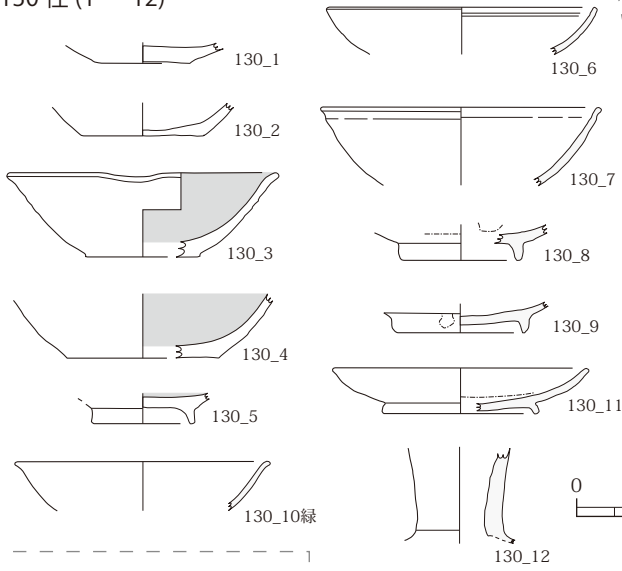
126住(1)



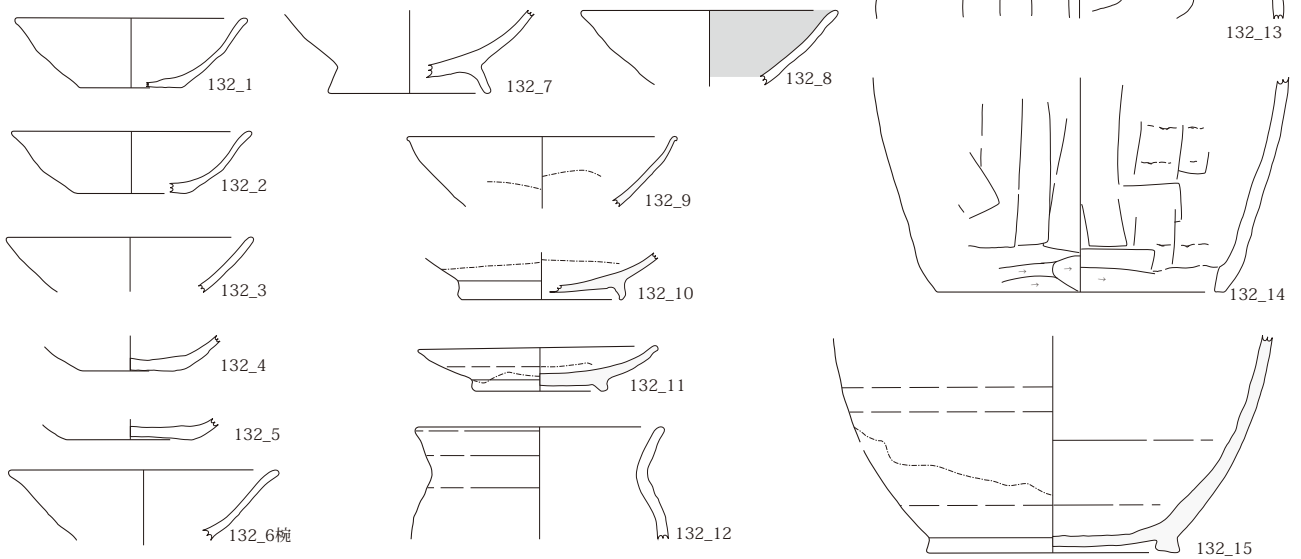
128住(1)



130住(1~12)

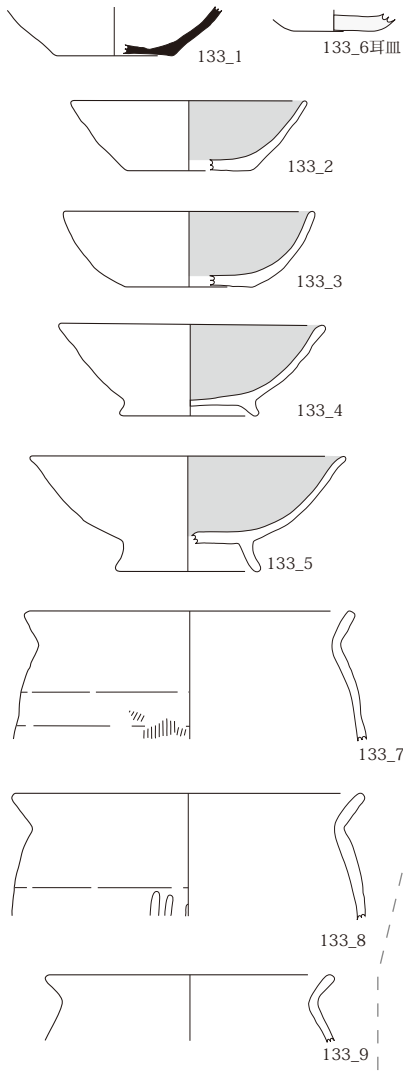


2次 132住(1~15)

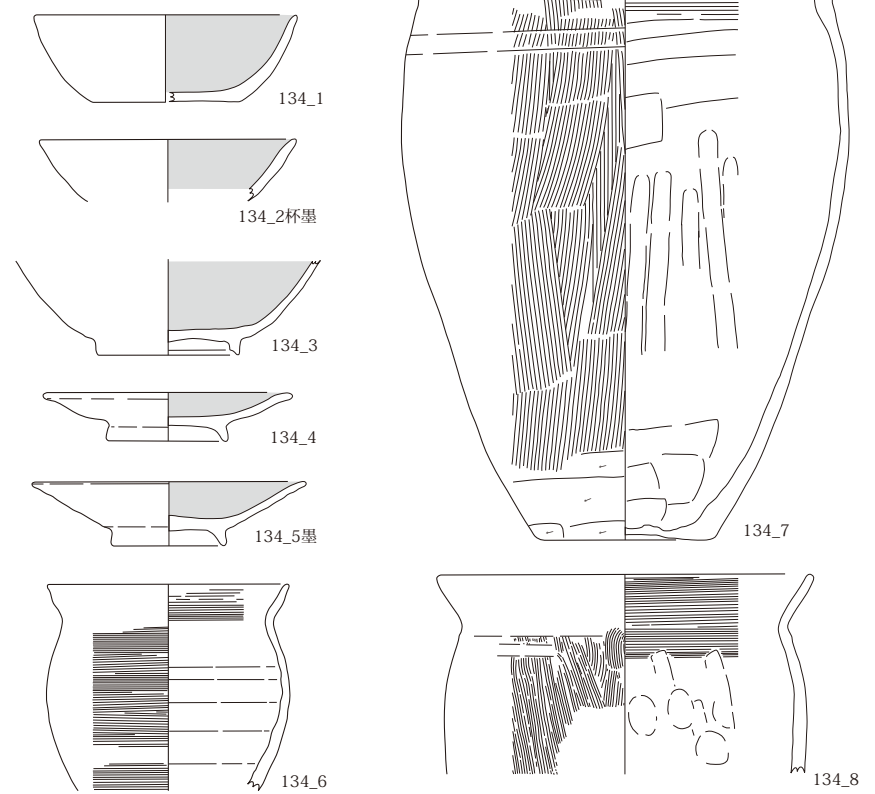


第125図 出土土器類実測図(37)

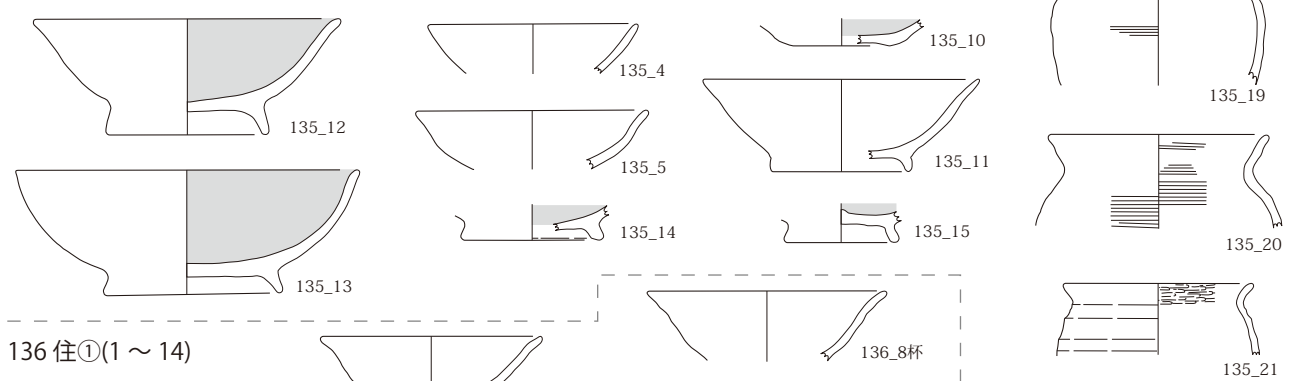
133住(1~9)



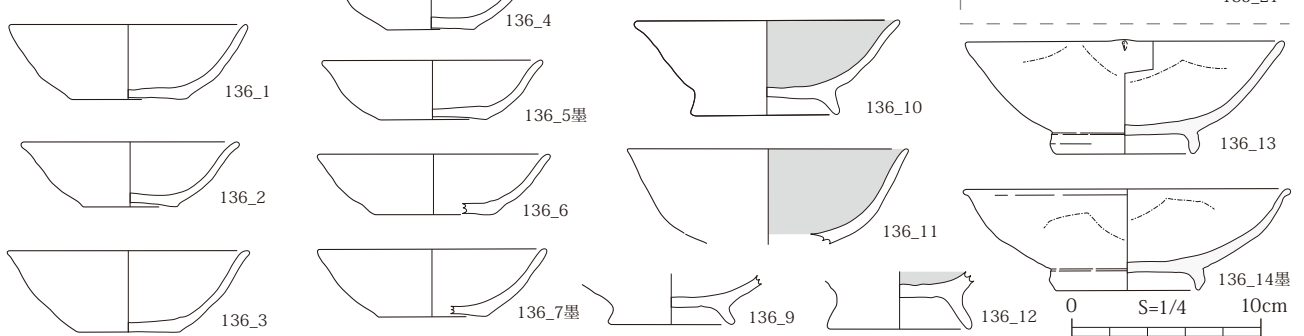
134住(1~8)



135住(1~21)



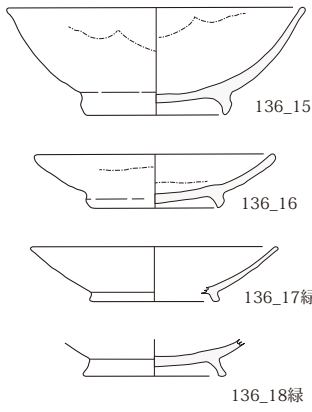
136住①(1~14)



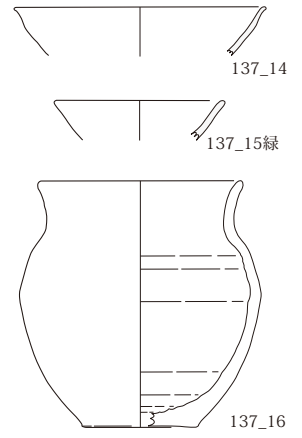
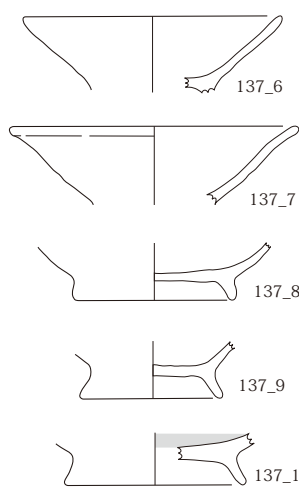
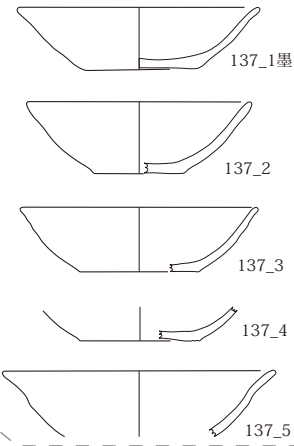
0 S=1/4 10cm

第126図 出土土器類実測図(38)

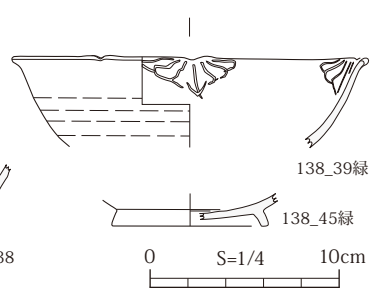
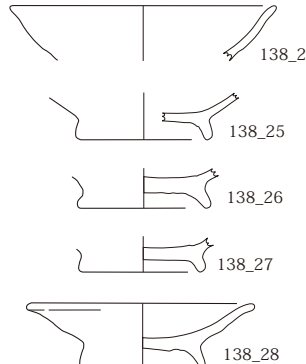
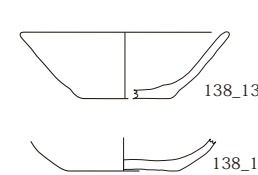
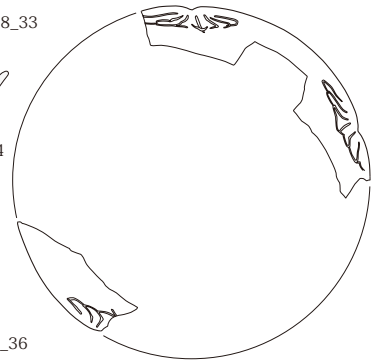
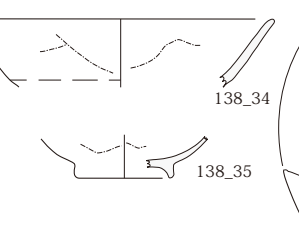
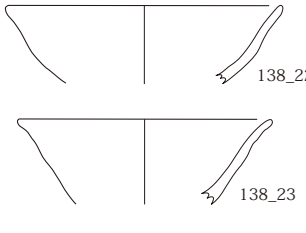
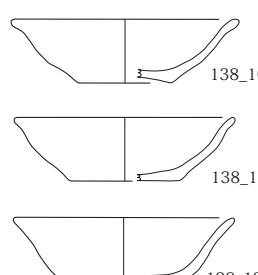
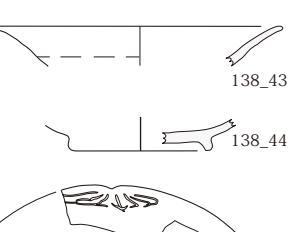
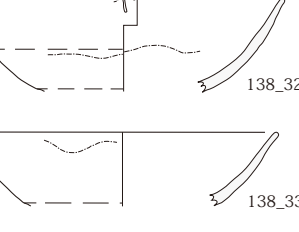
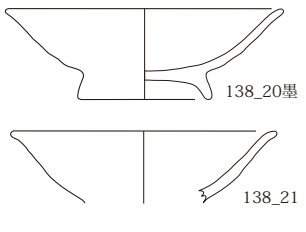
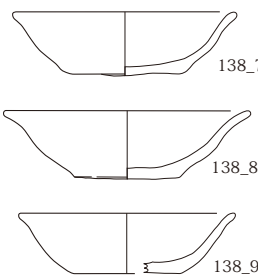
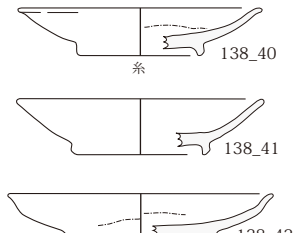
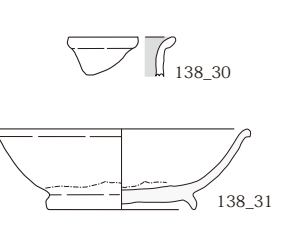
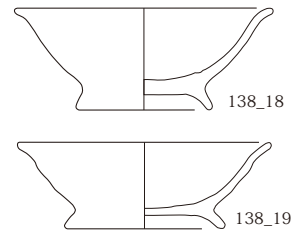
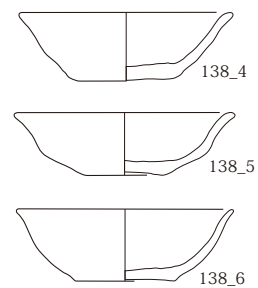
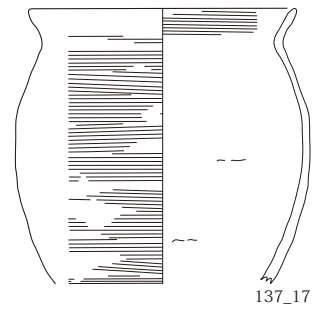
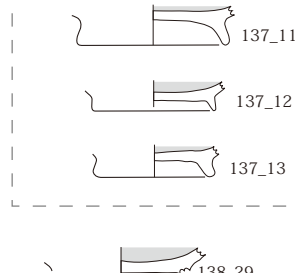
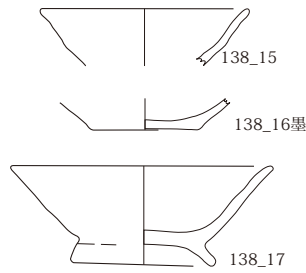
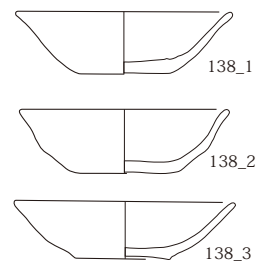
136住②(16~18)



137住(1~17)

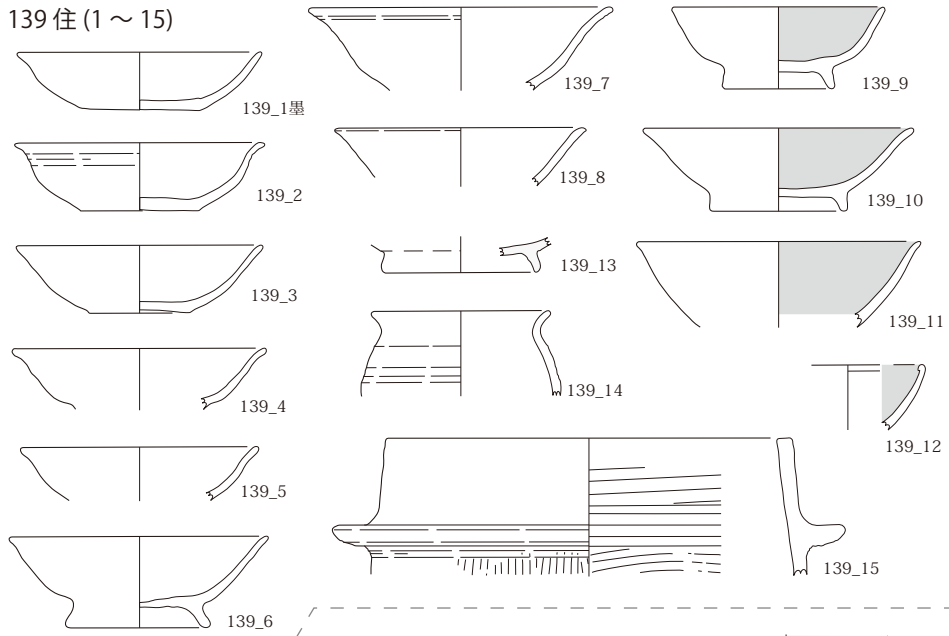


138住(1~45)

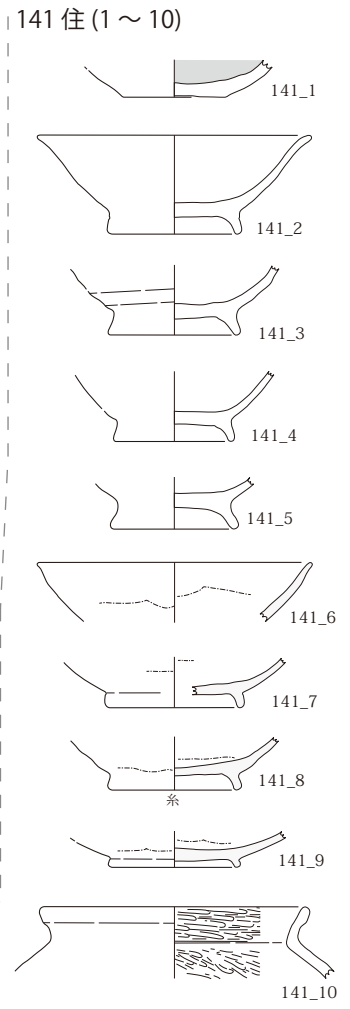


第127図 出土土器類実測図(39)

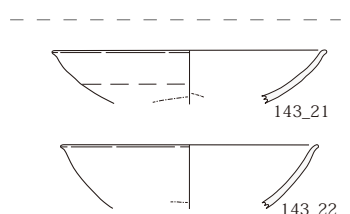
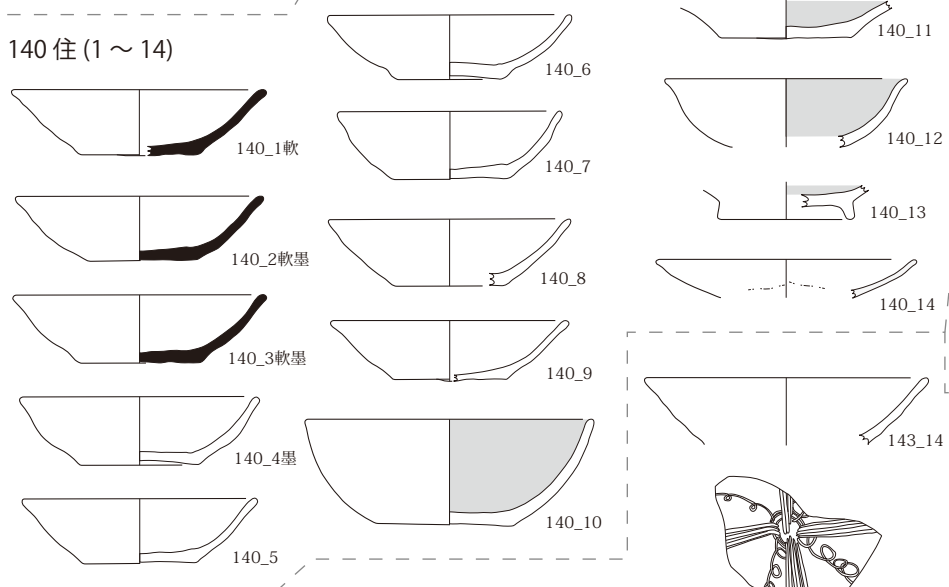
139住(1~15)



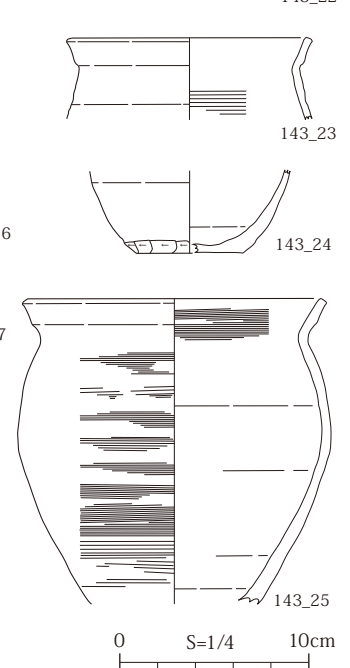
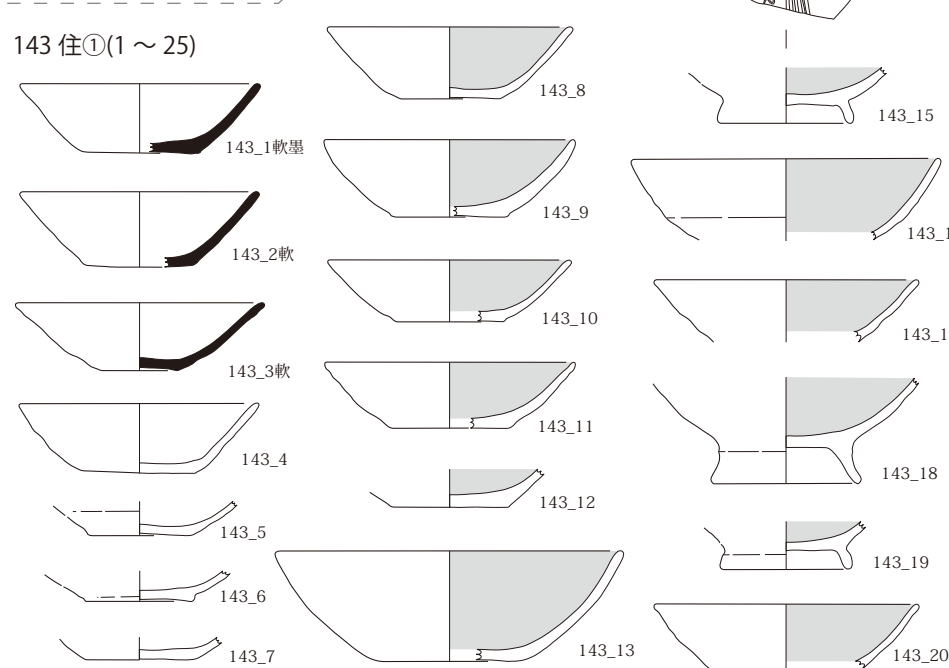
141住(1~10)



140住(1~14)

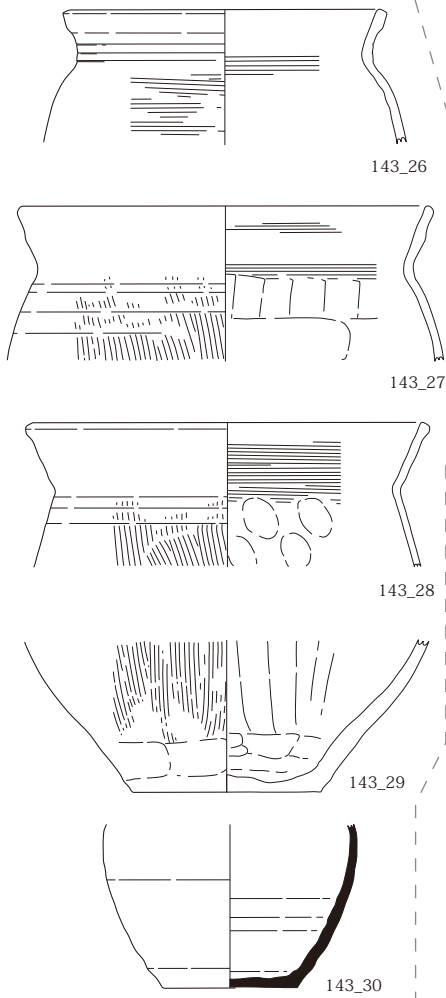


143住①(1~25)

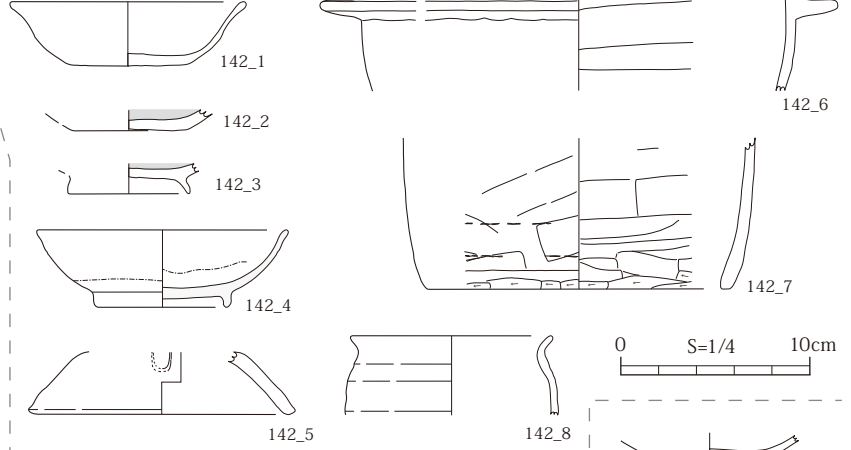


第128図 出土土器類実測図(40)

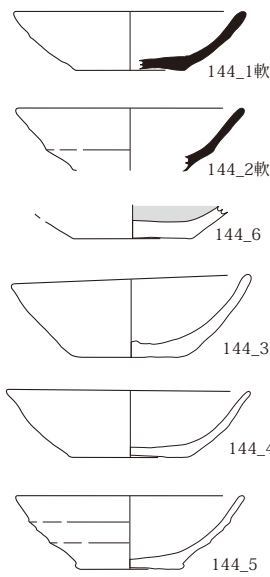
143 住②(26 ~ 30)



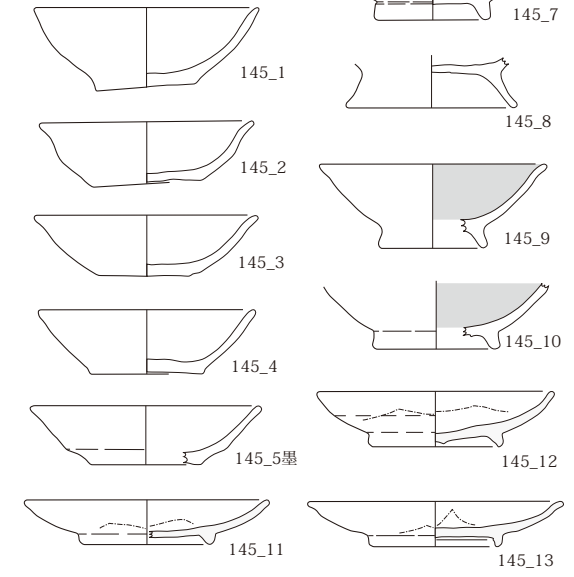
142 住(1 ~ 8)



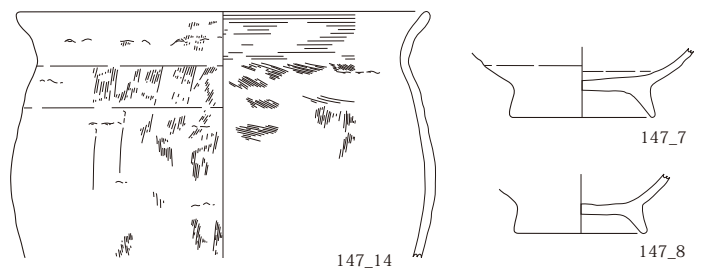
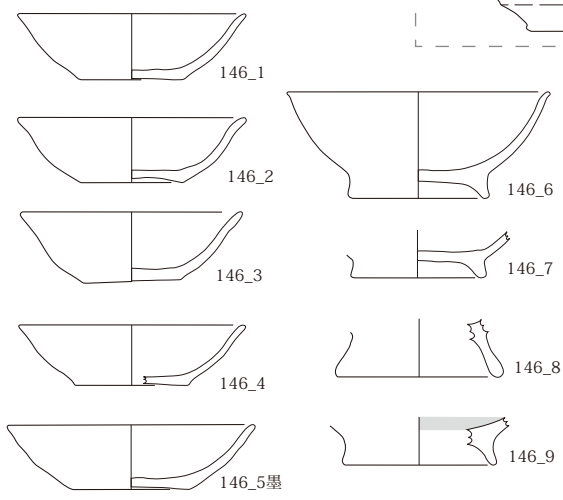
144 住(1 ~ 6)



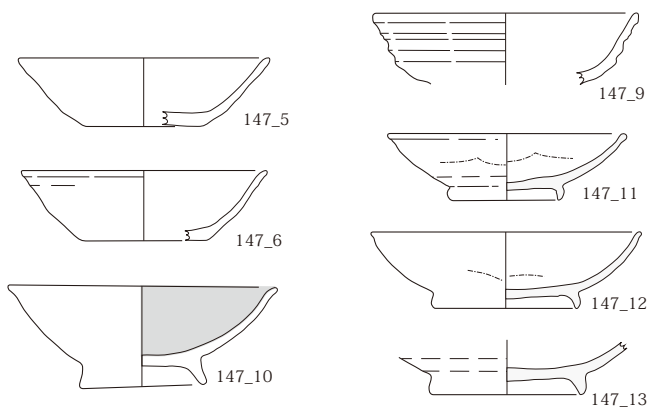
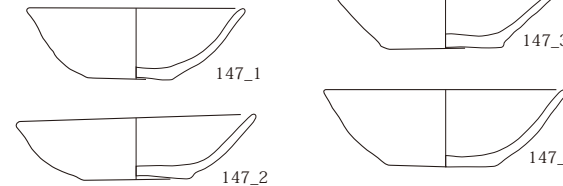
145 住(1 ~ 13)



146 住(1 ~ 9)

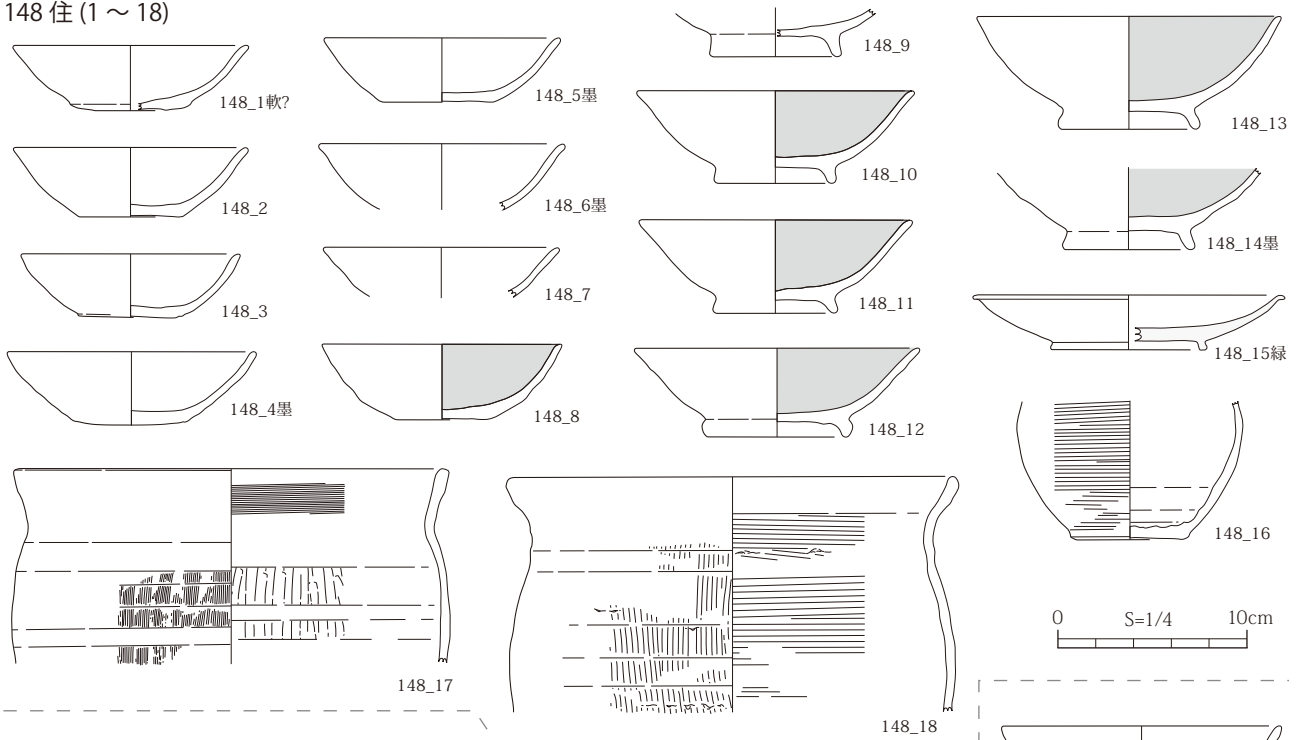


147 住(1 ~ 14)

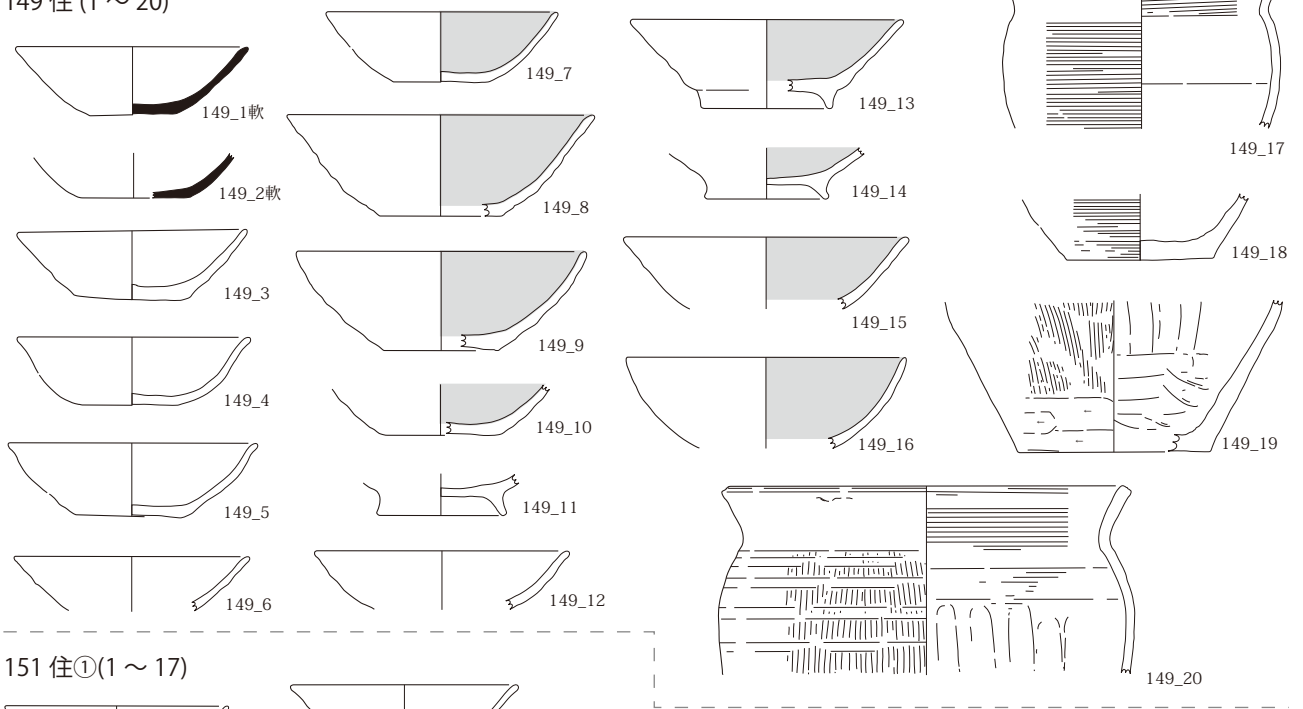


第 129 図 出土土器類実測図 (41)

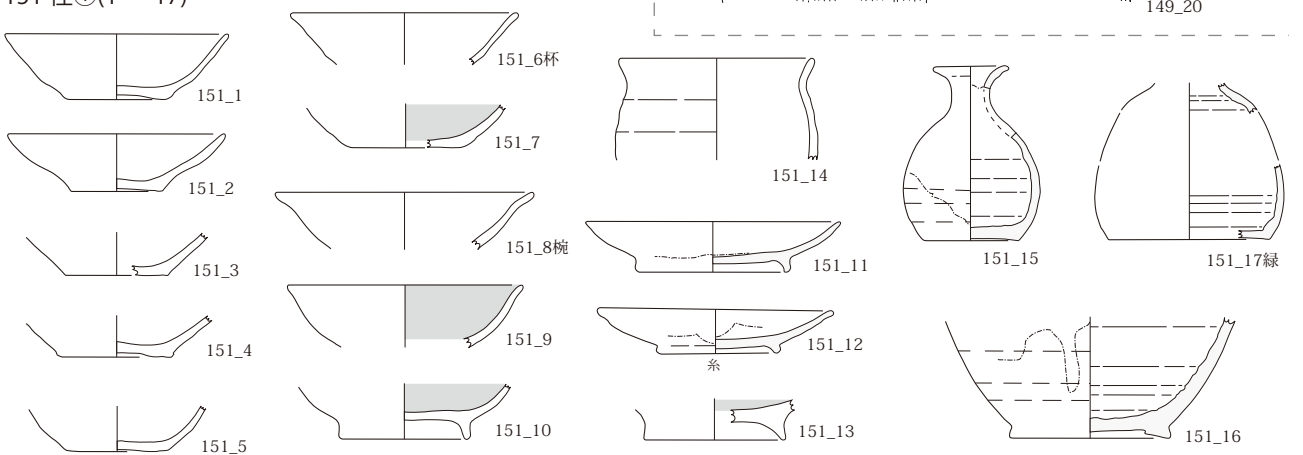
148住(1~18)



149住(1~20)

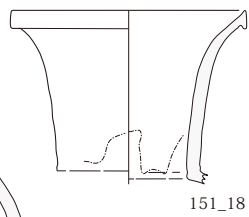
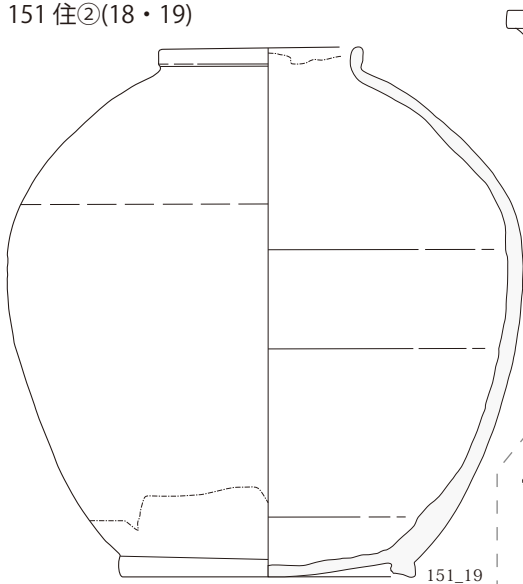


151住①(1~17)

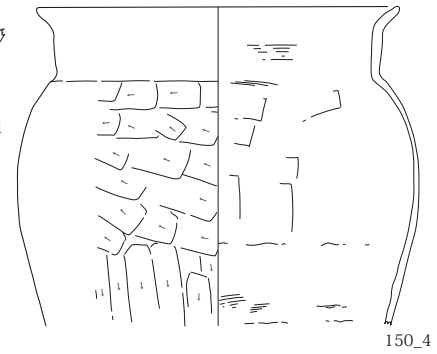
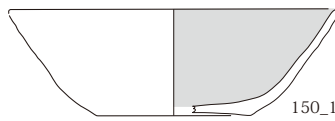
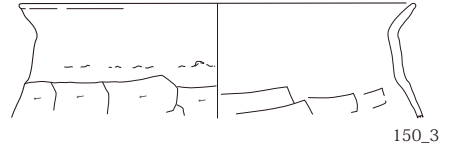
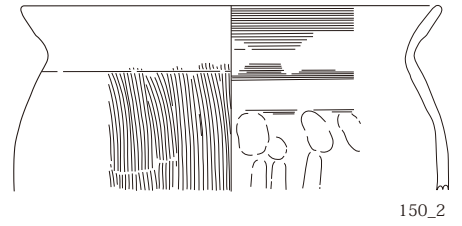


第130図 出土土器類実測図(42)

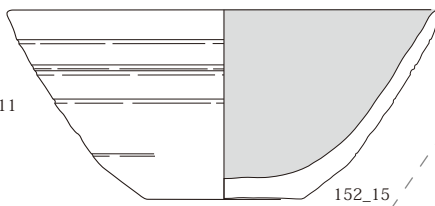
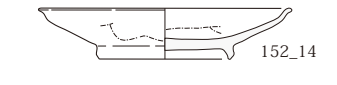
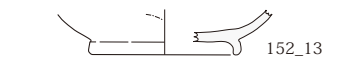
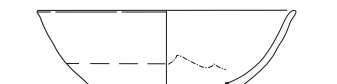
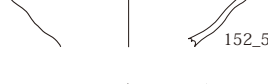
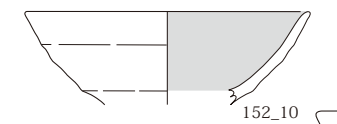
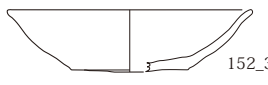
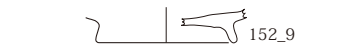
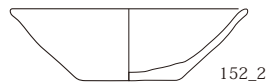
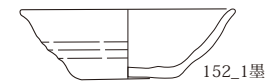
151 住②(18・19)



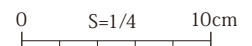
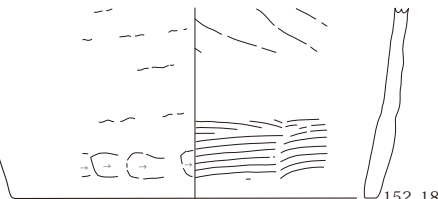
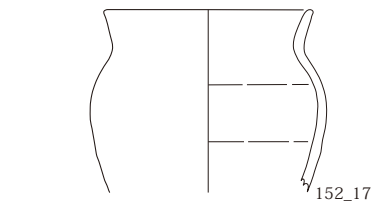
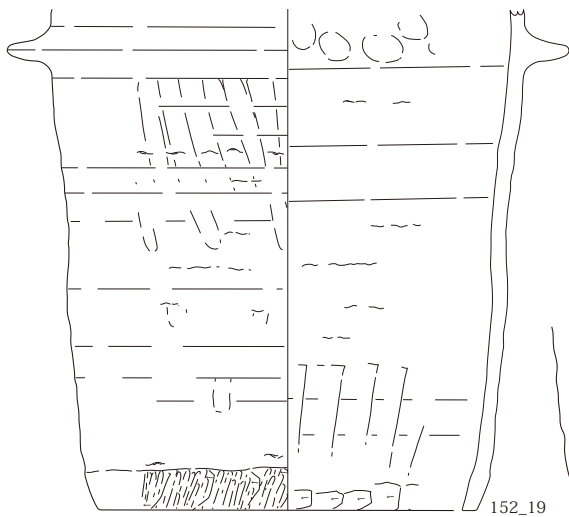
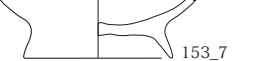
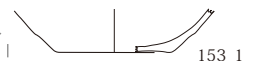
150 住(1~5)



152 住(1~19)

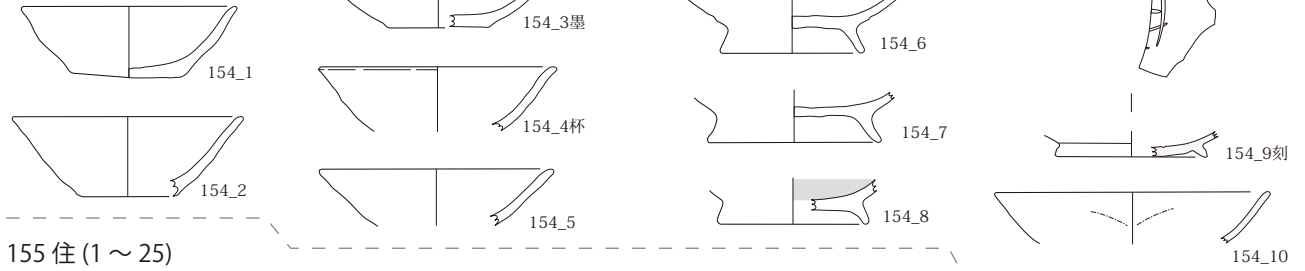


153 住(1~10)

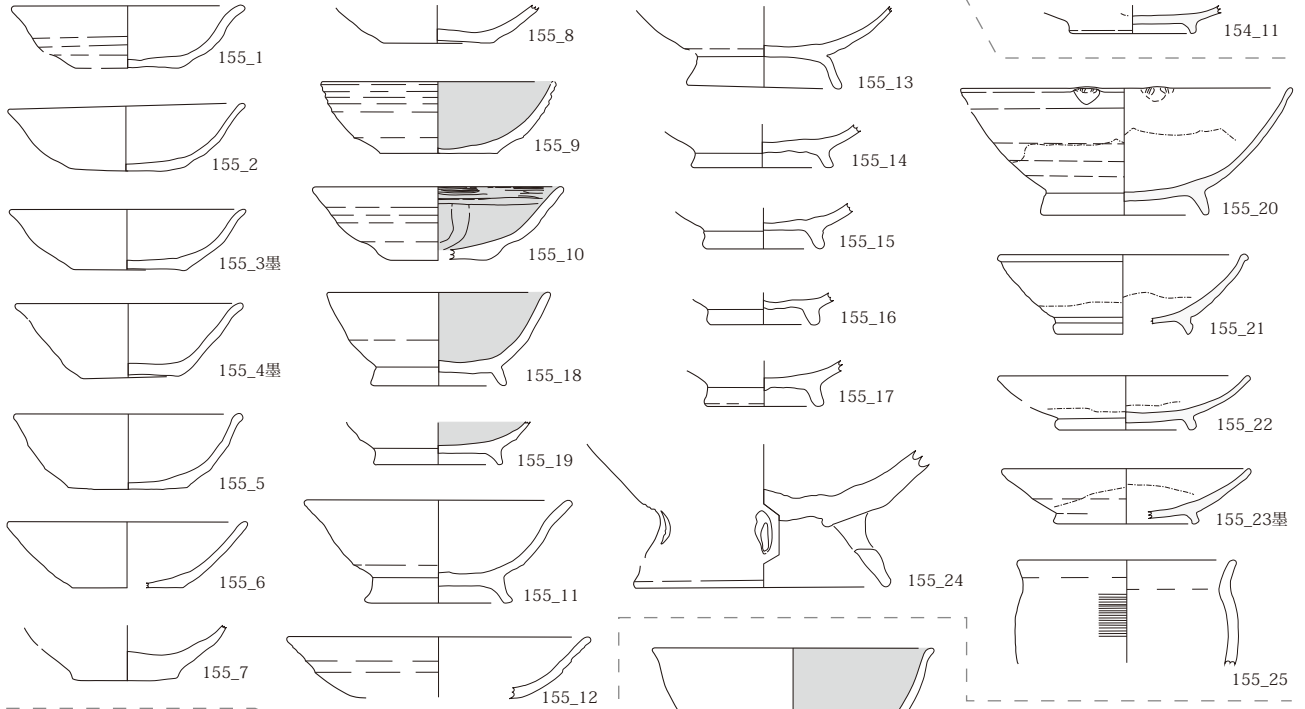


第 131 図 出土土器類実測図(43)

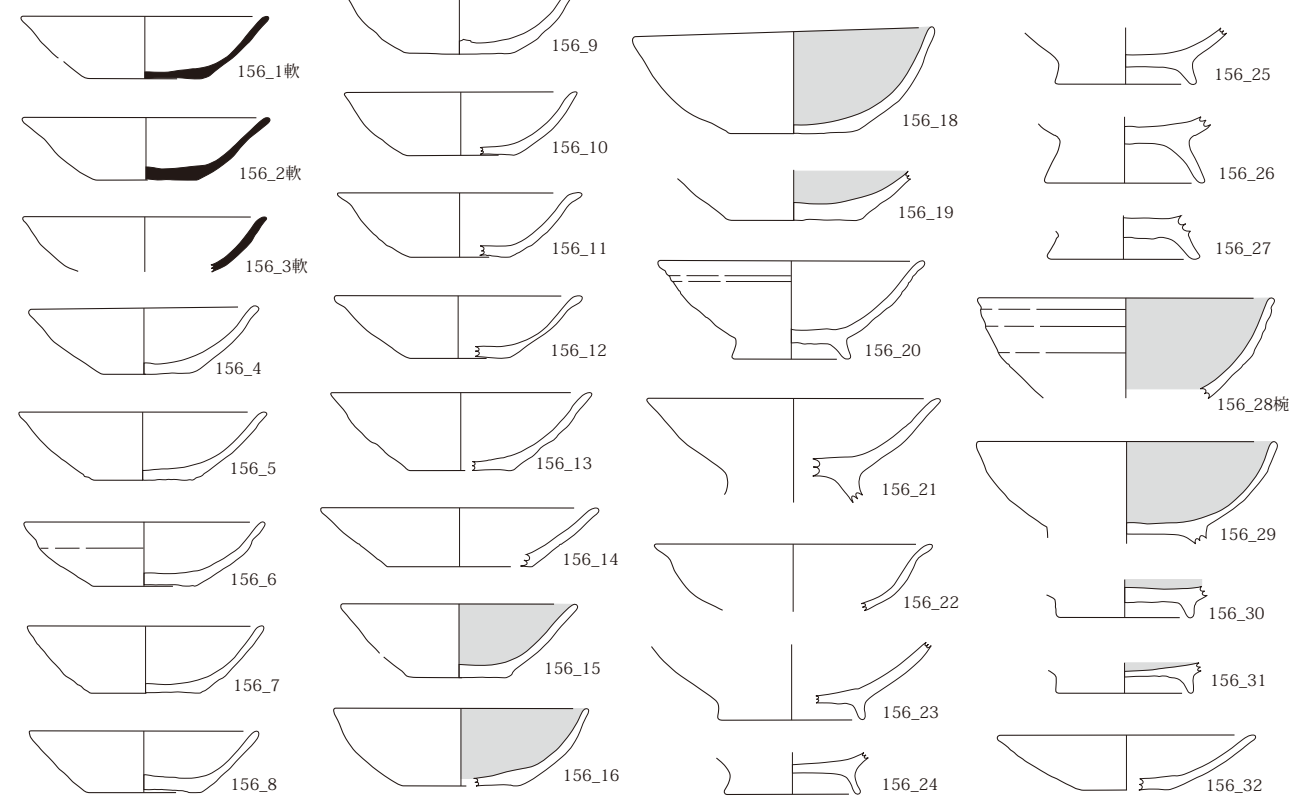
154住(1~11)



155住(1~25)

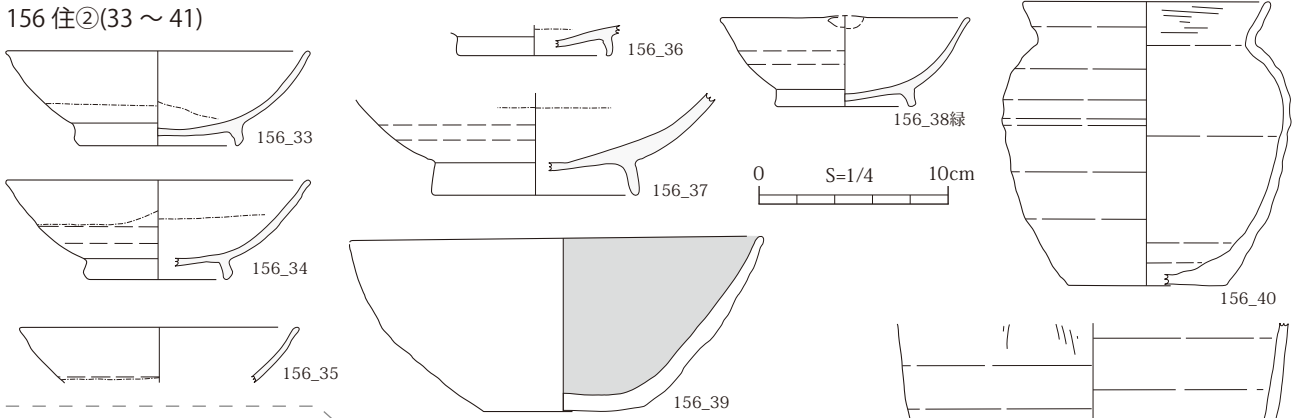


156住①(1~32)

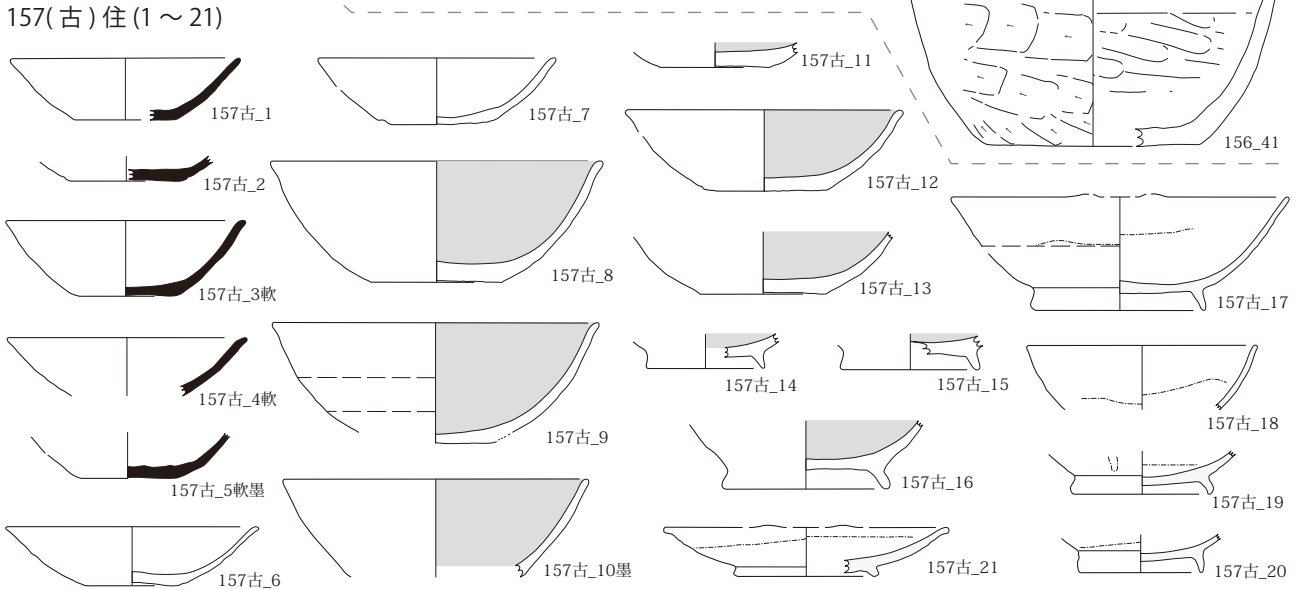


第 132 図 出土土器類実測図(44)

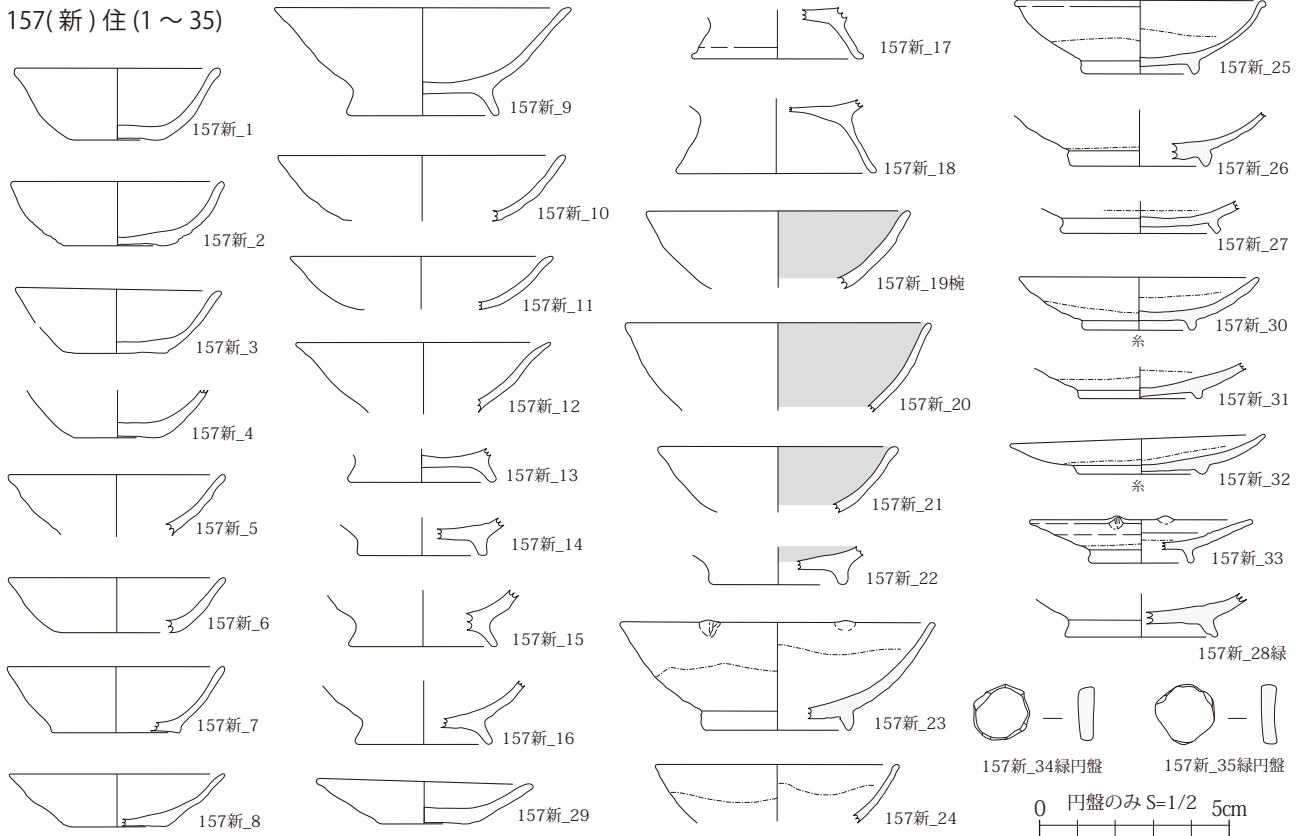
156 住②(33 ~ 41)



157(古) 住(1 ~ 21)

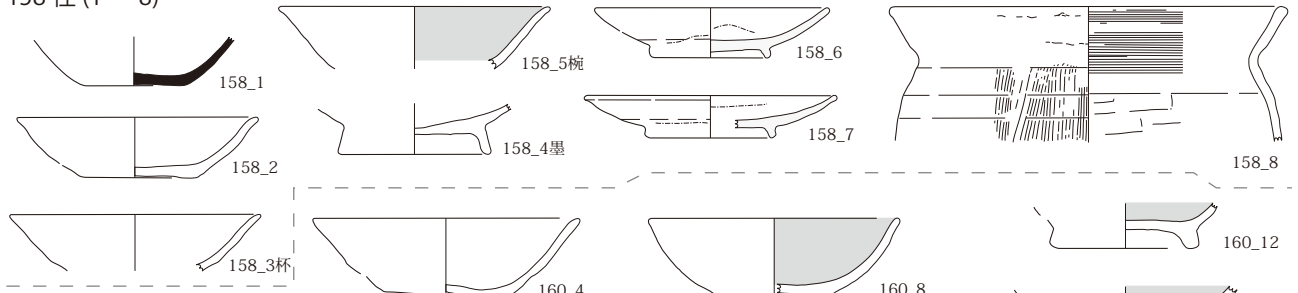


157(新) 住(1 ~ 35)

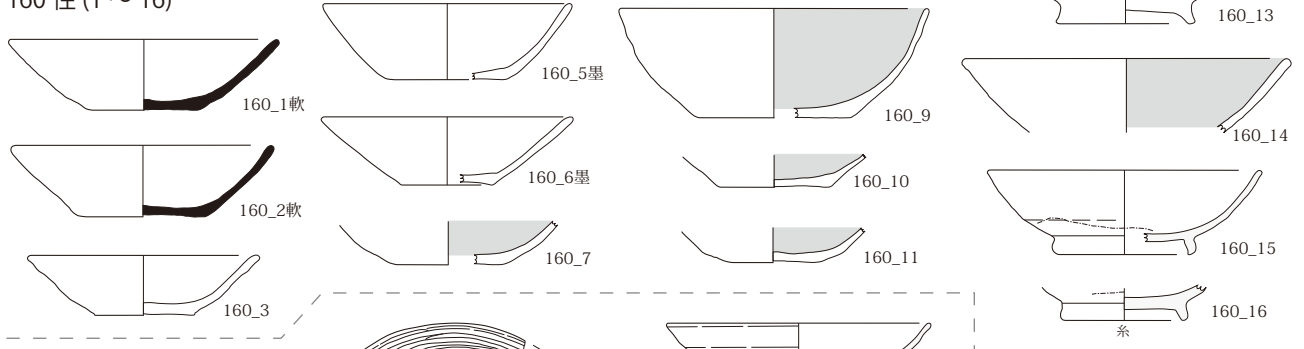


第 133 図 出土土器類実測図(45)

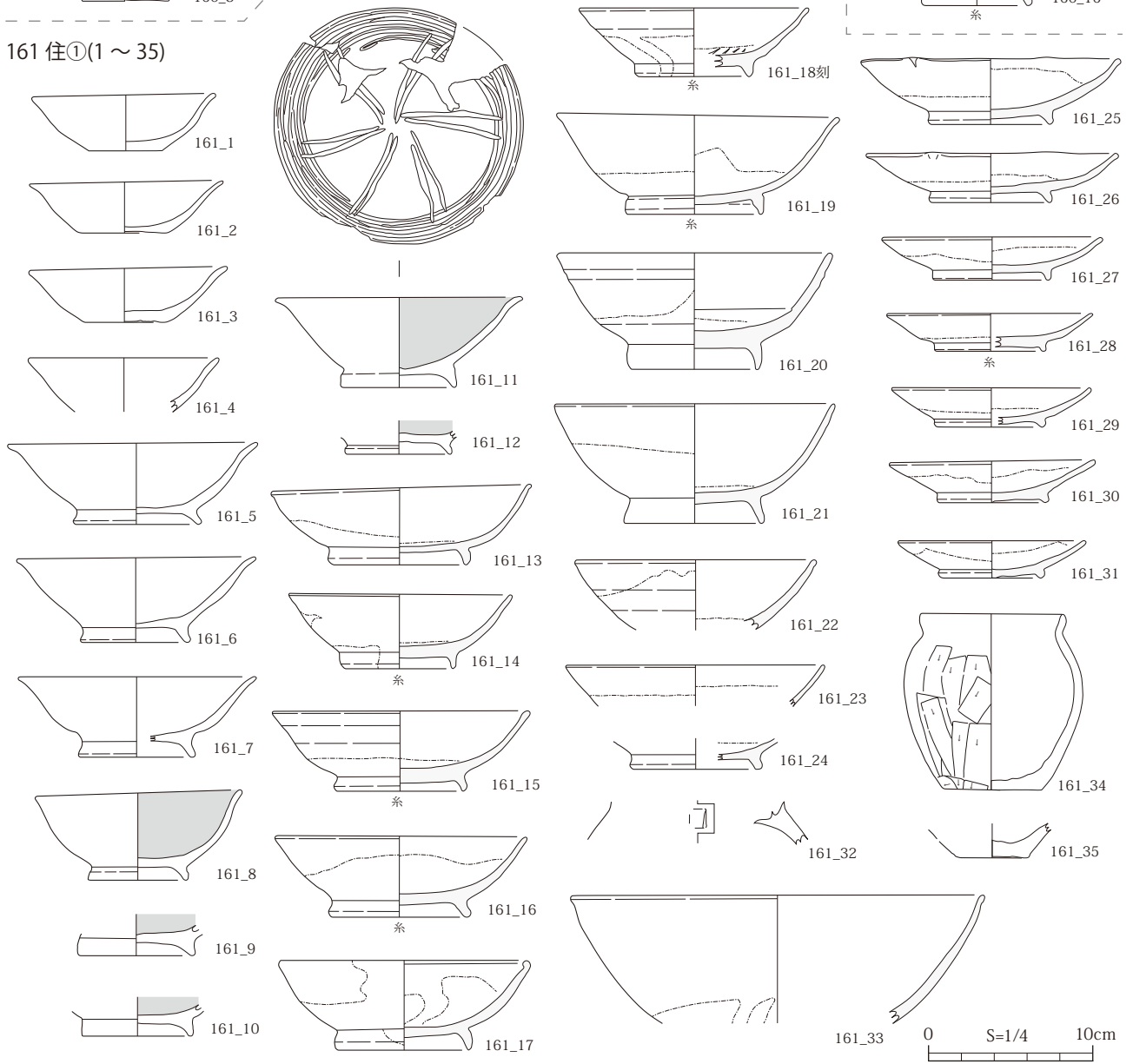
158住(1~8)



160住(1~16)

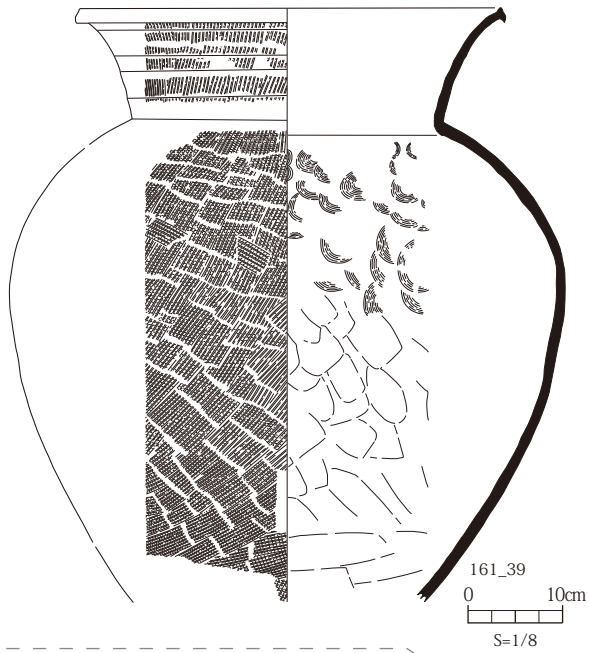
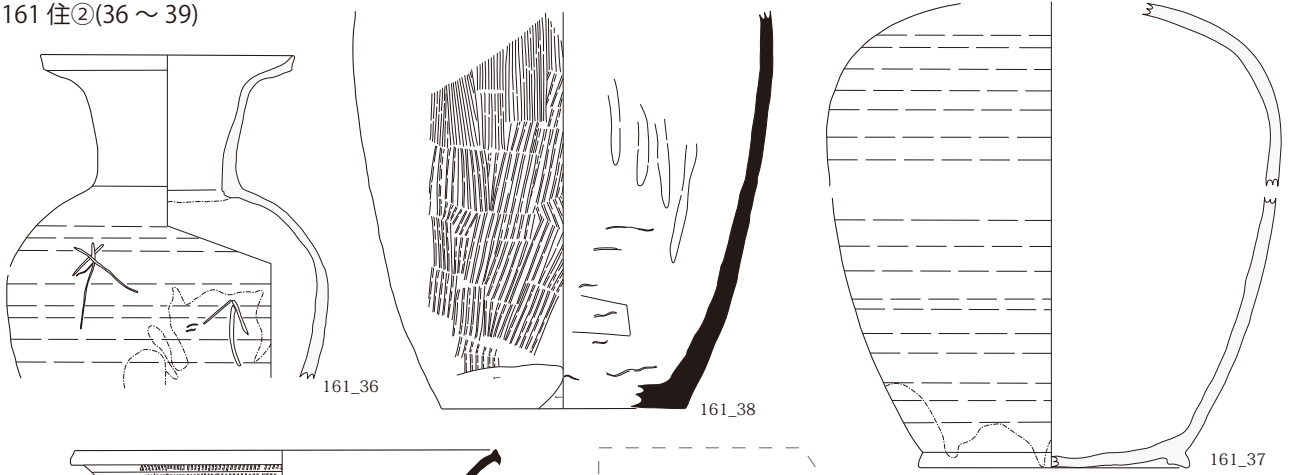


161住①(1~35)

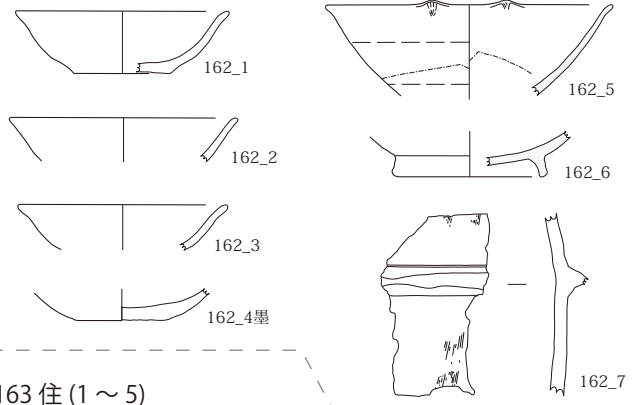


第134図 出土土器類実測図(46)

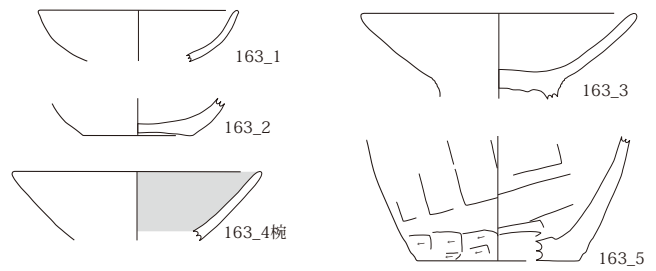
161 住②(36 ~ 39)



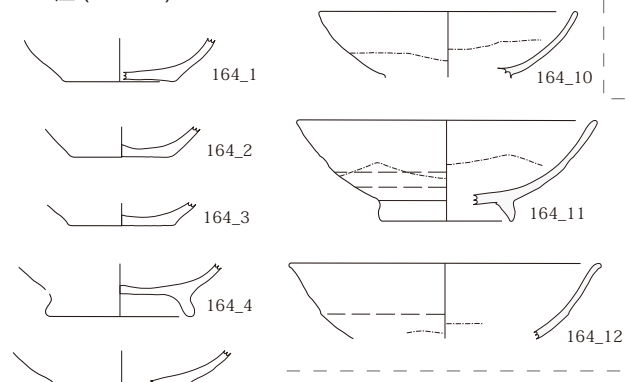
162 住(1 ~ 7)



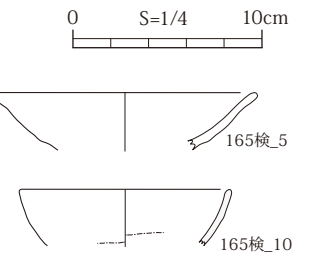
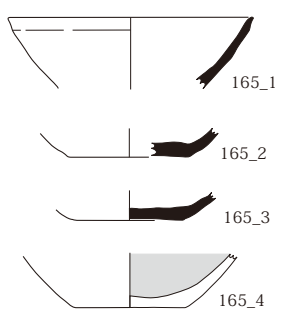
163 住(1 ~ 5)



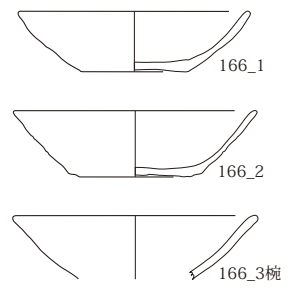
164 住(1 ~ 12)



165 住(1 ~ 10)

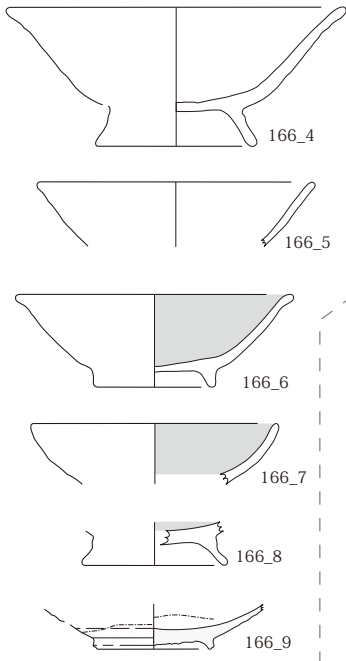


166 住①(1 ~ 3)

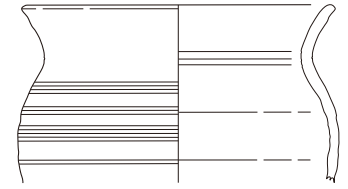
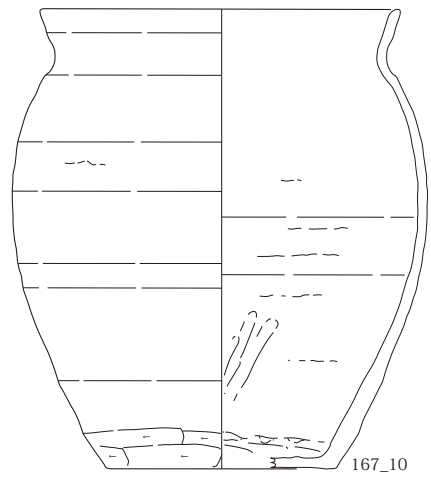
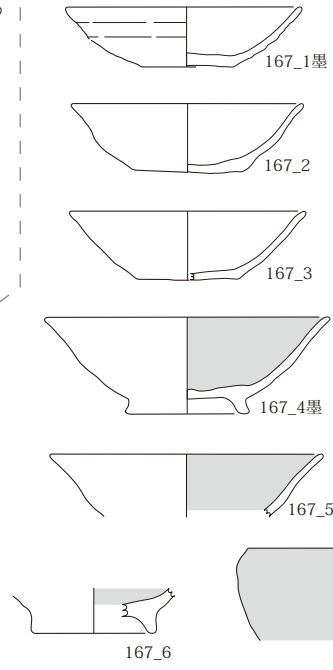


第 135 図 出土土器類実測図(47)

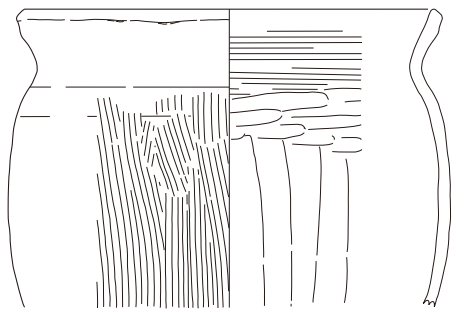
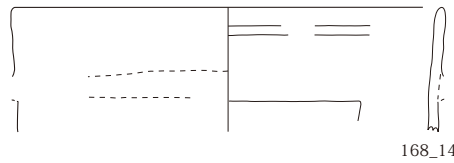
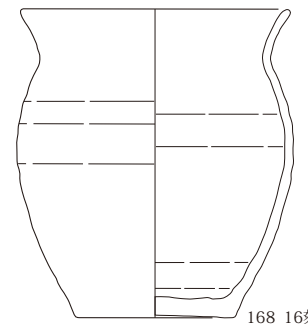
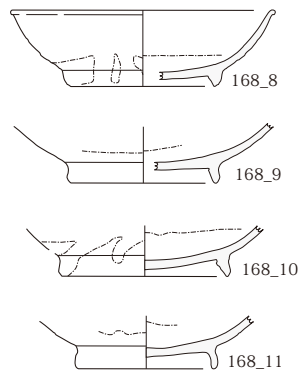
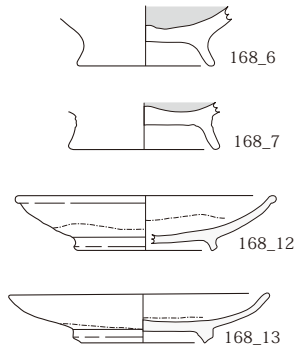
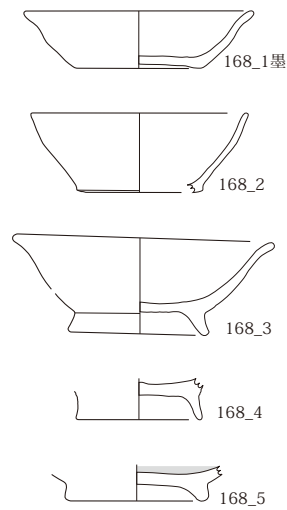
166 住②(4~9)



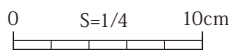
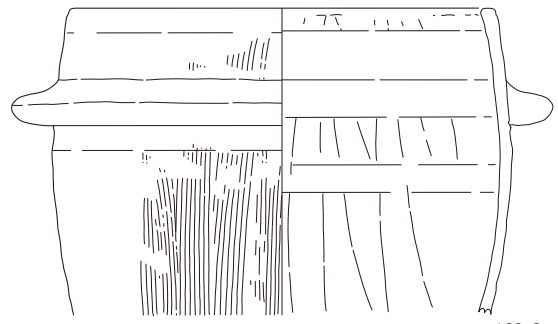
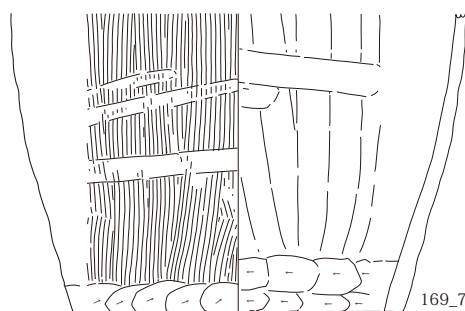
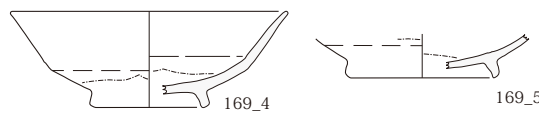
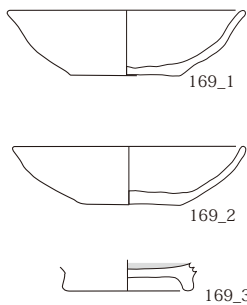
167 住(1~10)



168 住(1~16)

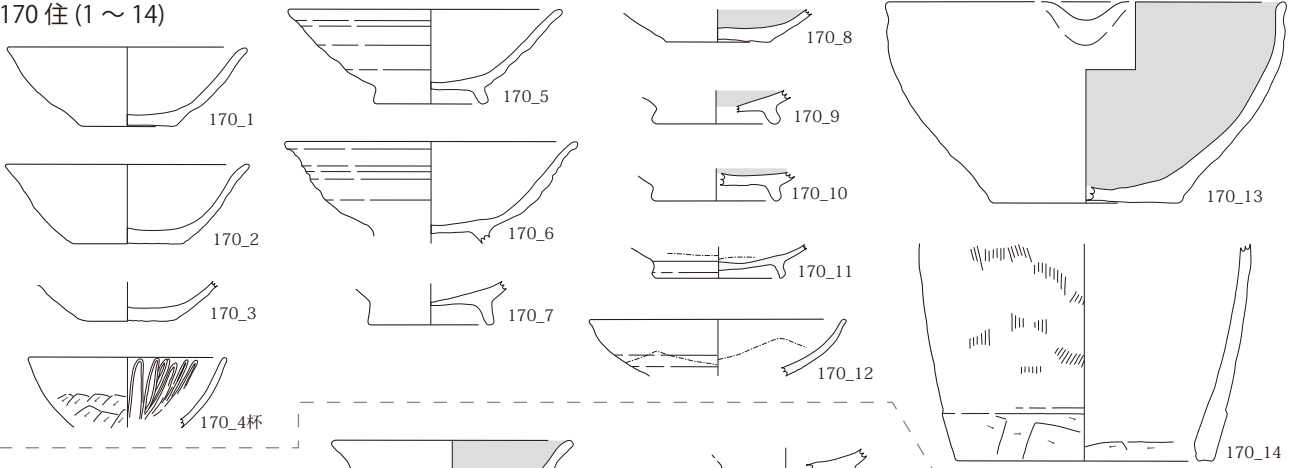


169 住(1~8)

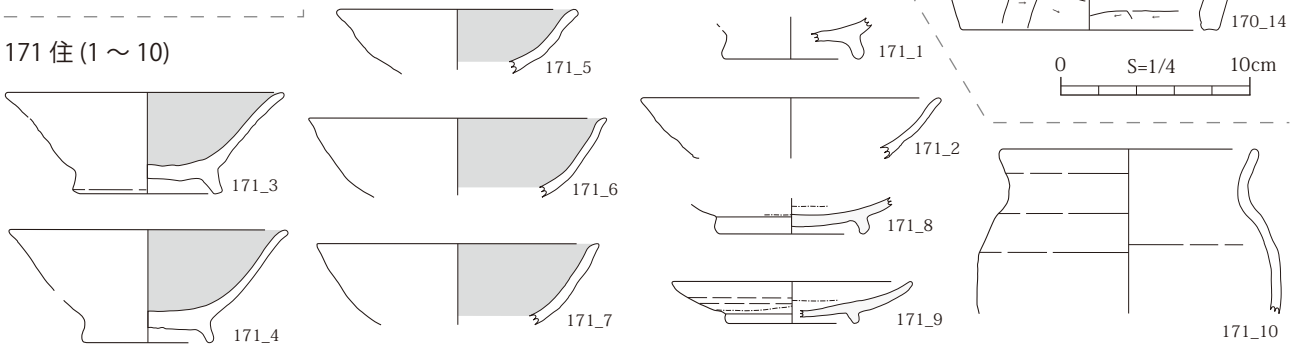


第 136 図 出土土器類実測図 (48)

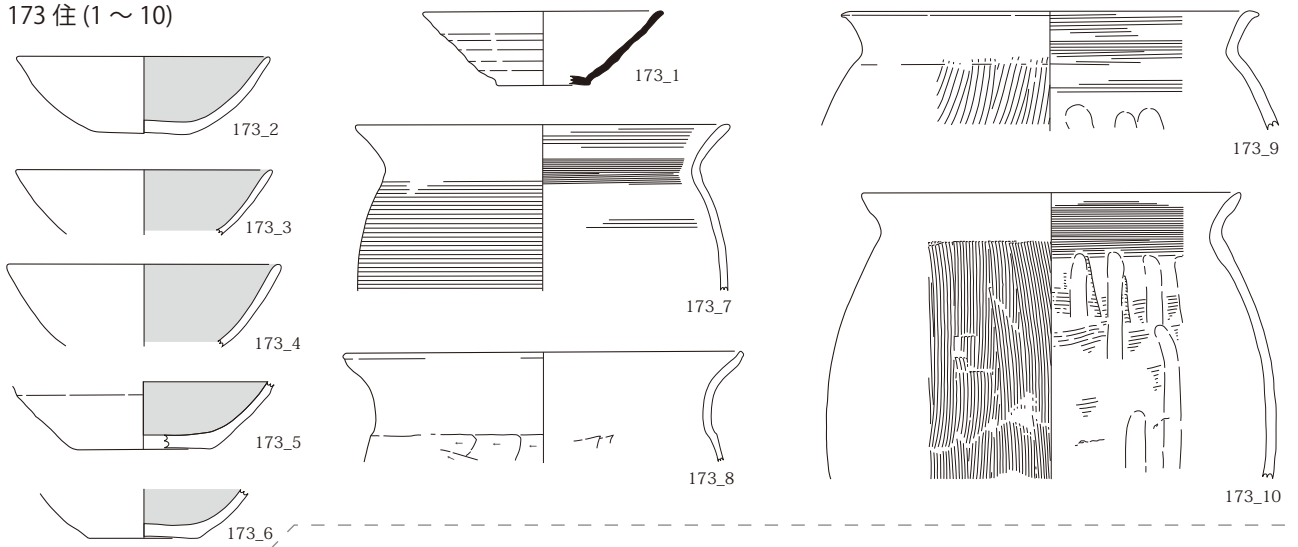
170 住 (1 ~ 14)



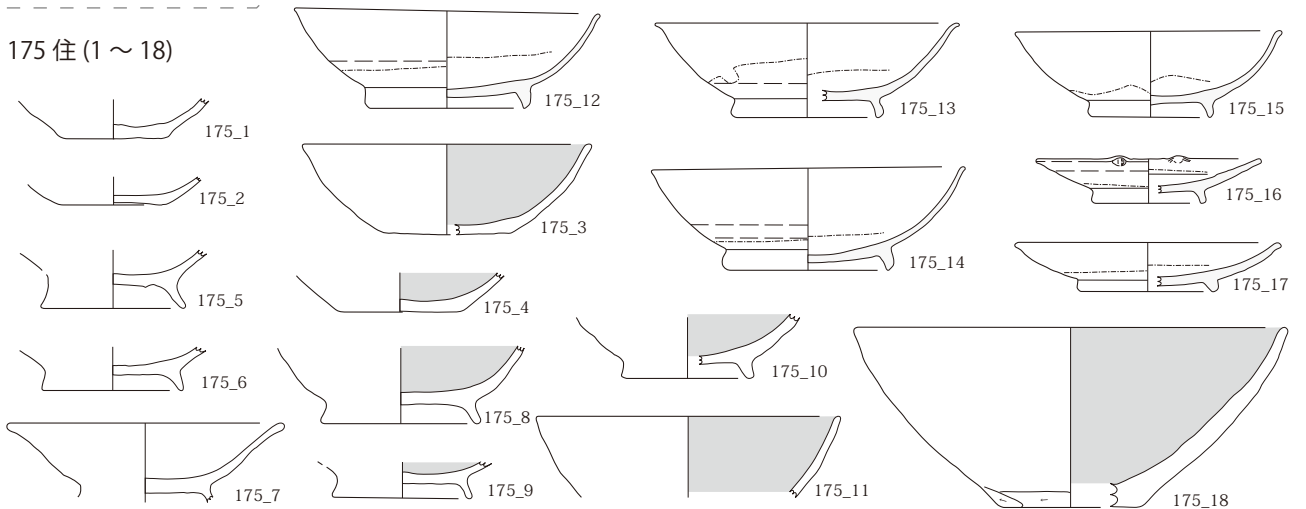
171 住 (1 ~ 10)



173 住 (1 ~ 10)

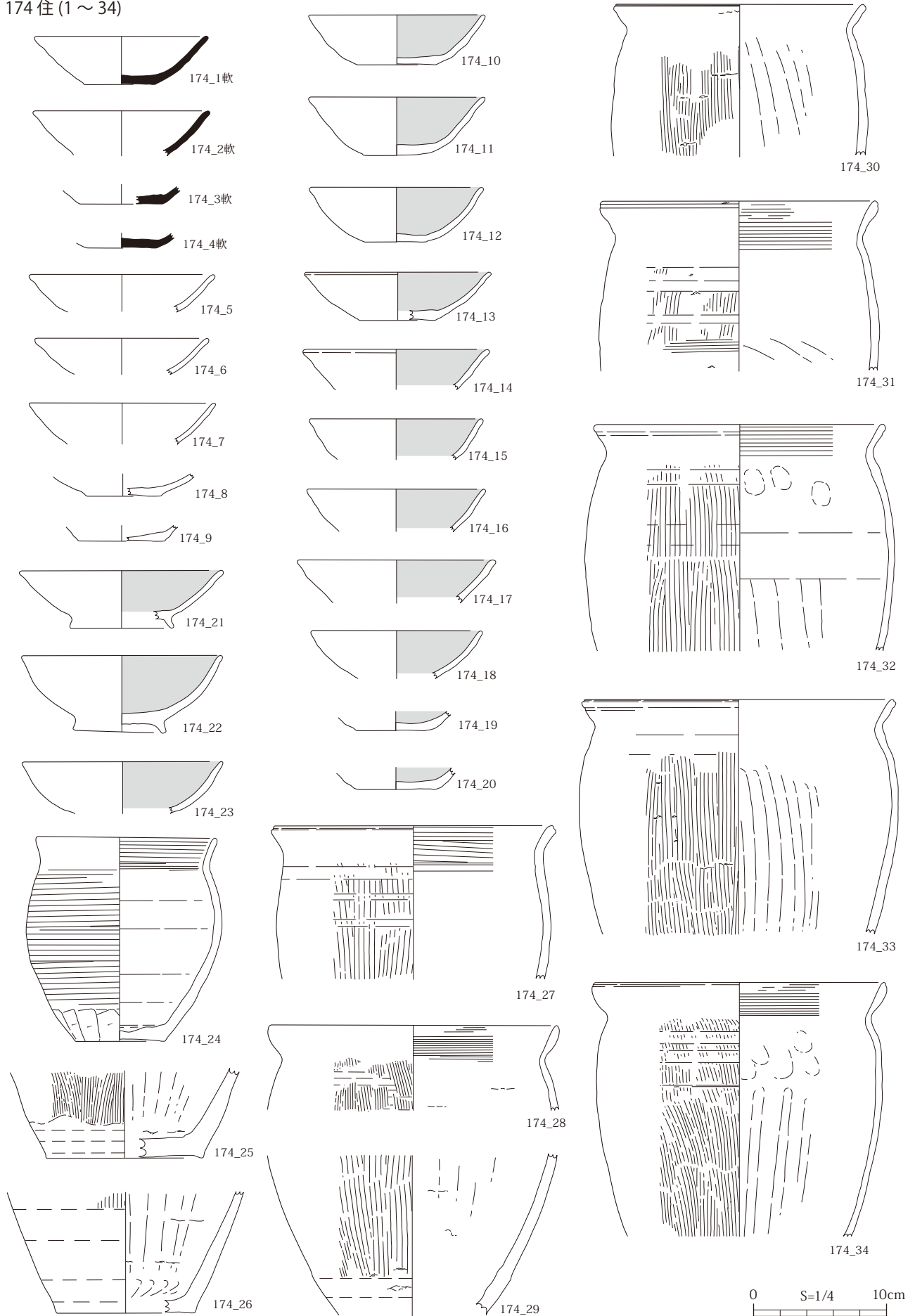


175 住 (1 ~ 18)



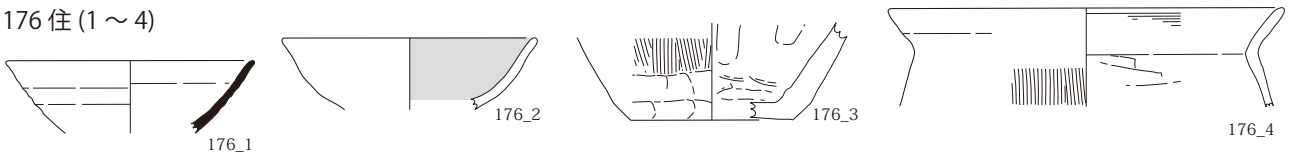
第 137 図 出土土器類実測図 (49)

174住(1~34)

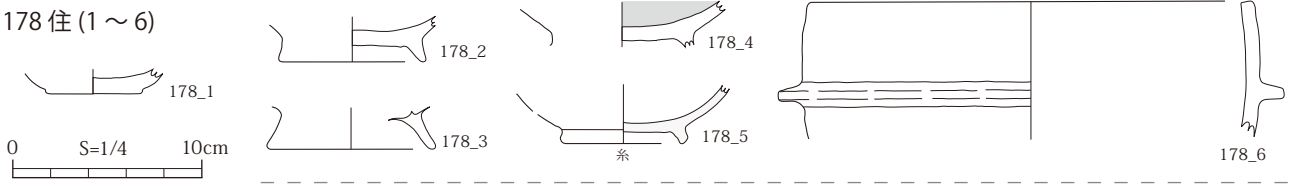


第138図 出土土器類実測図(50)

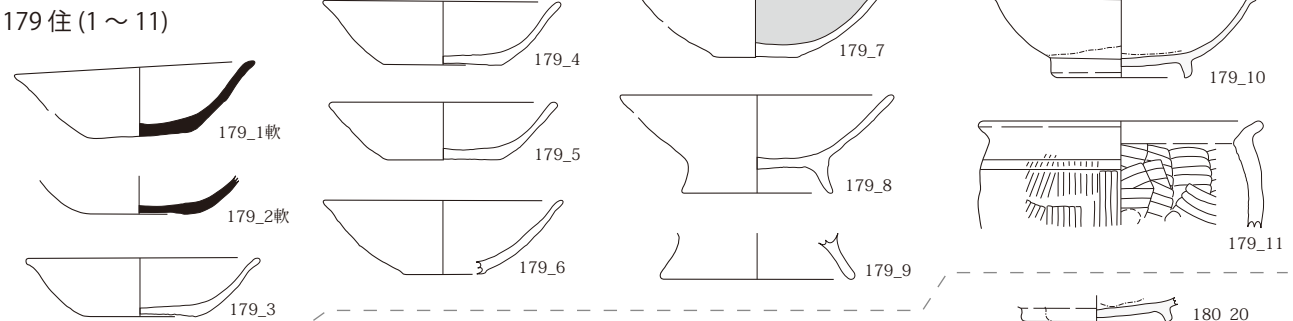
176住(1~4)



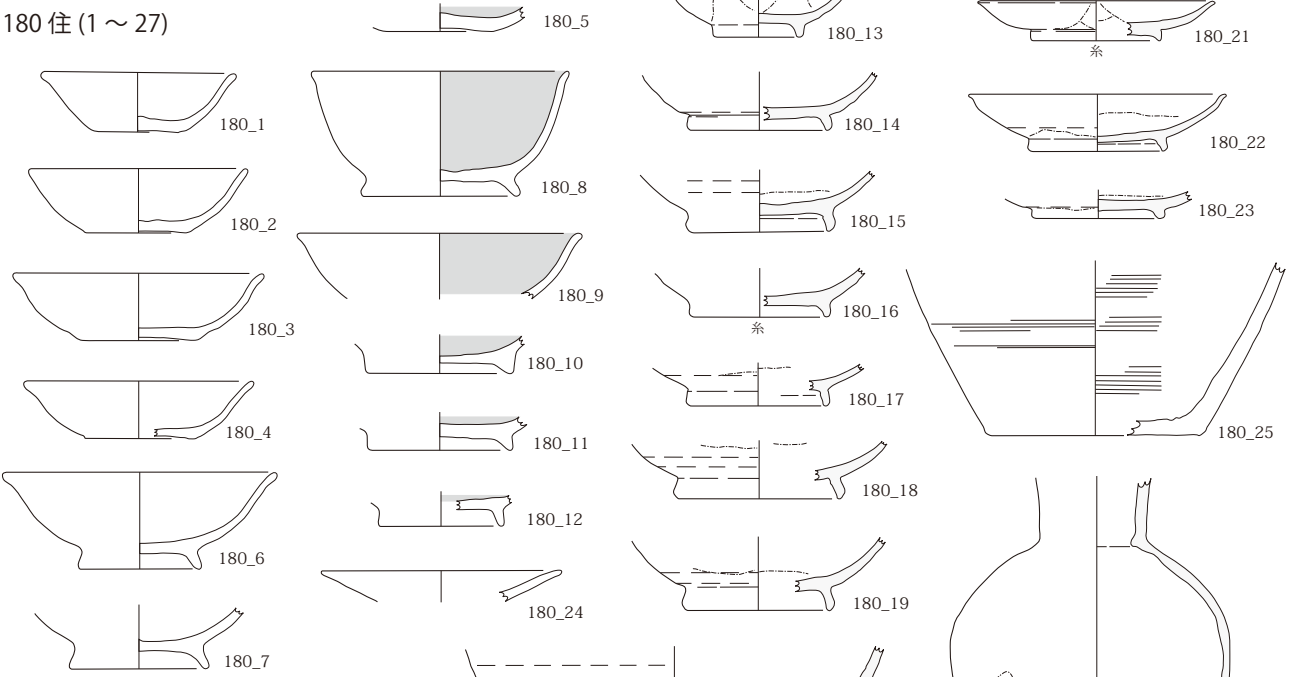
178住(1~6)



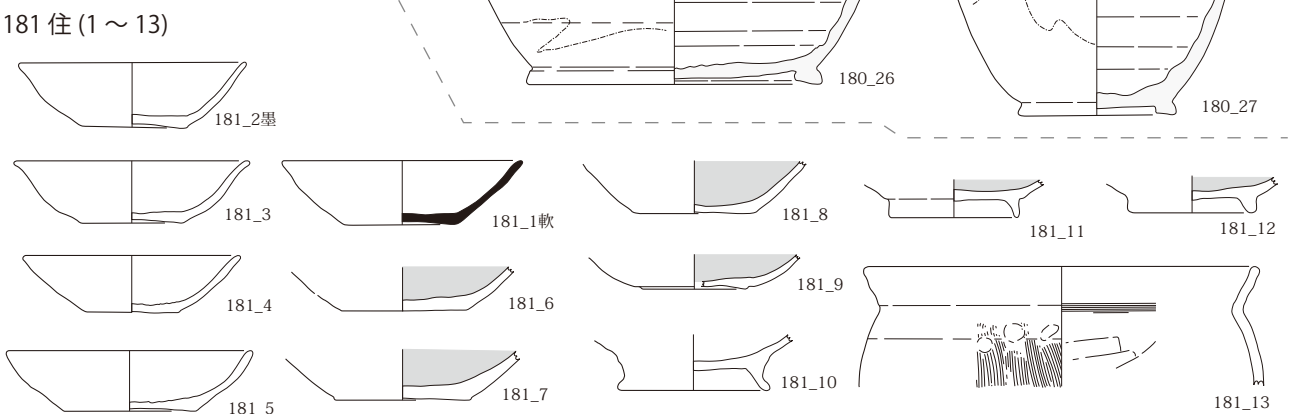
179住(1~11)



180住(1~27)

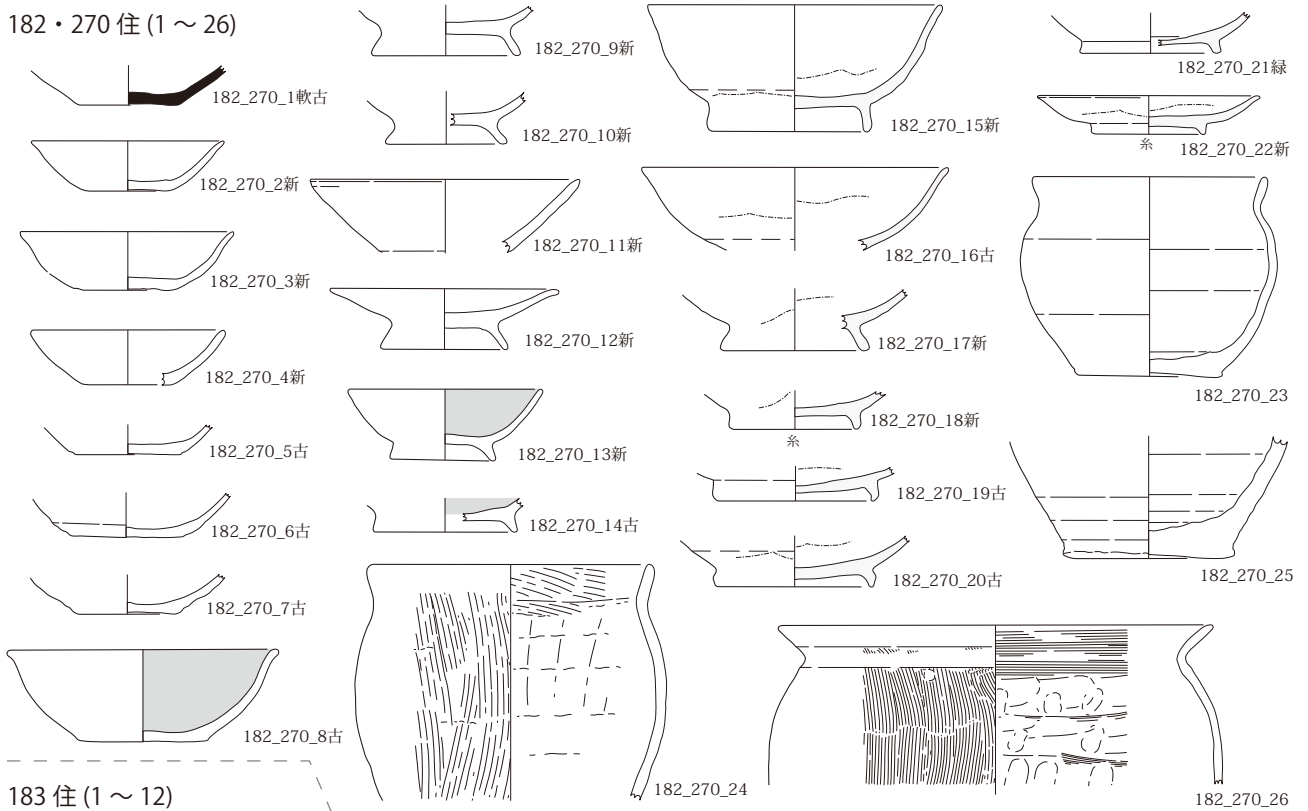


181住(1~13)

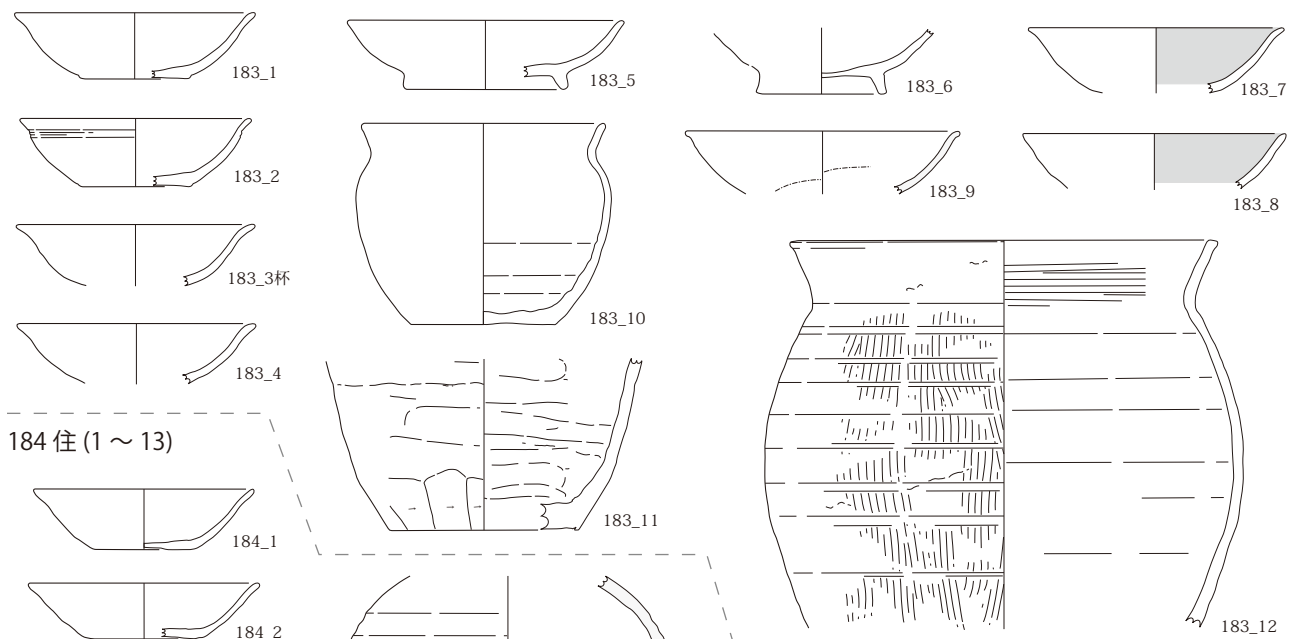


第139図 出土土器類実測図(51)

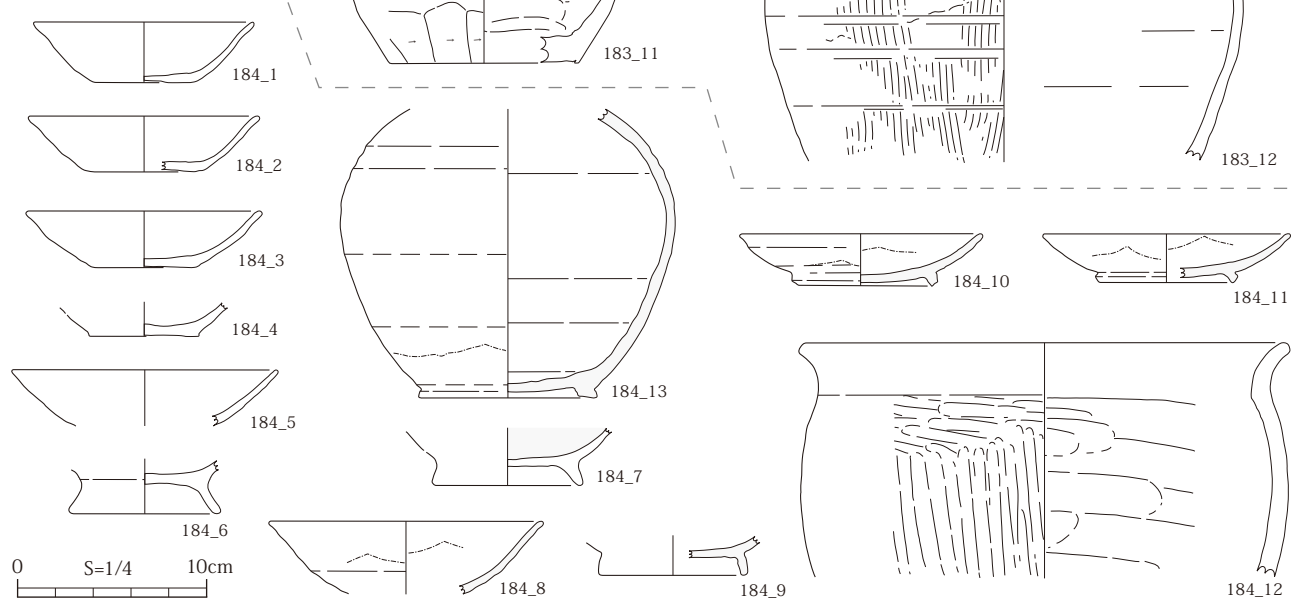
182・270住(1~26)



183住(1~12)



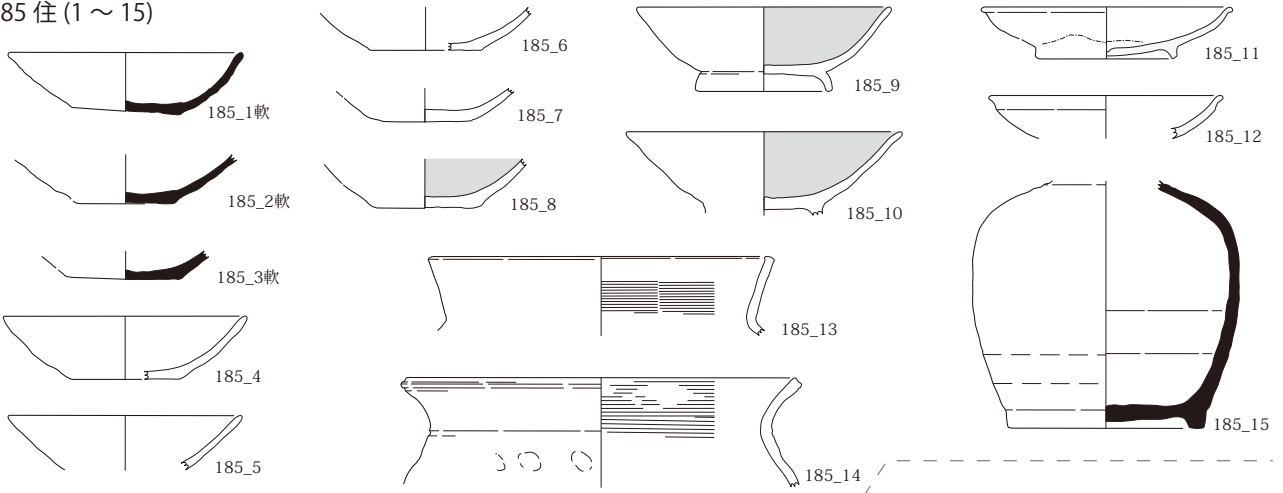
184住(1~13)



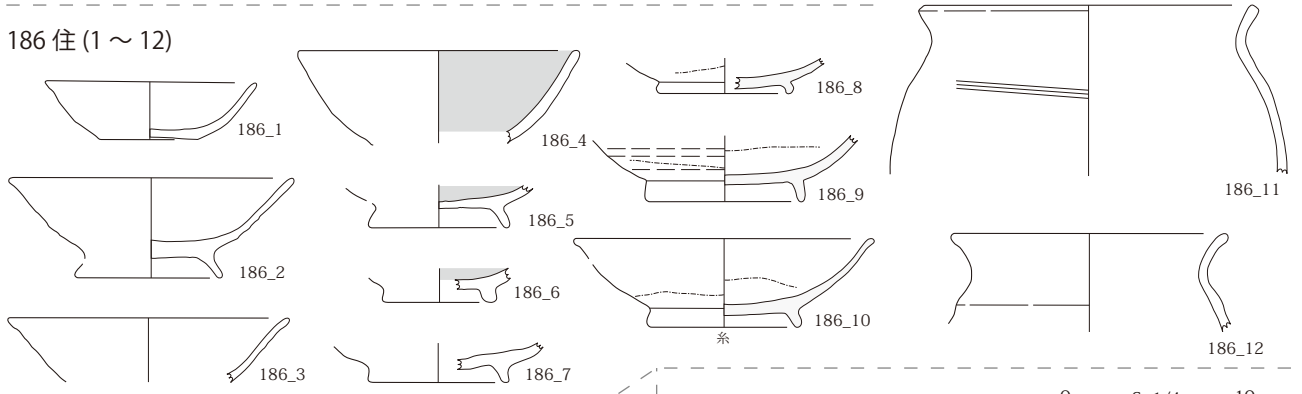
0 S=1/4 10cm

第140図 出土土器類実測図(52)

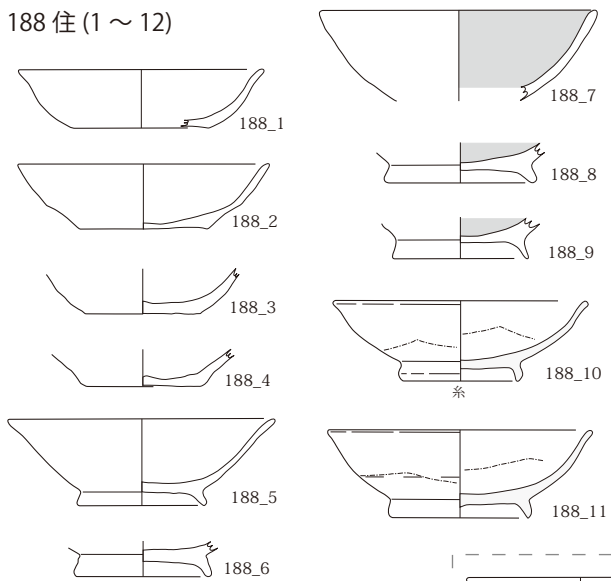
185 住 (1 ~ 15)



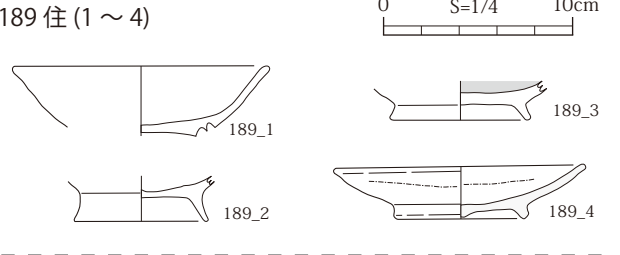
186 住 (1 ~ 12)



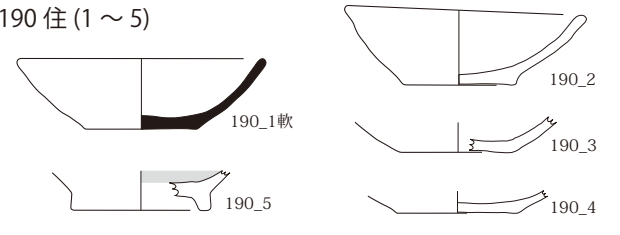
188 住 (1 ~ 12)



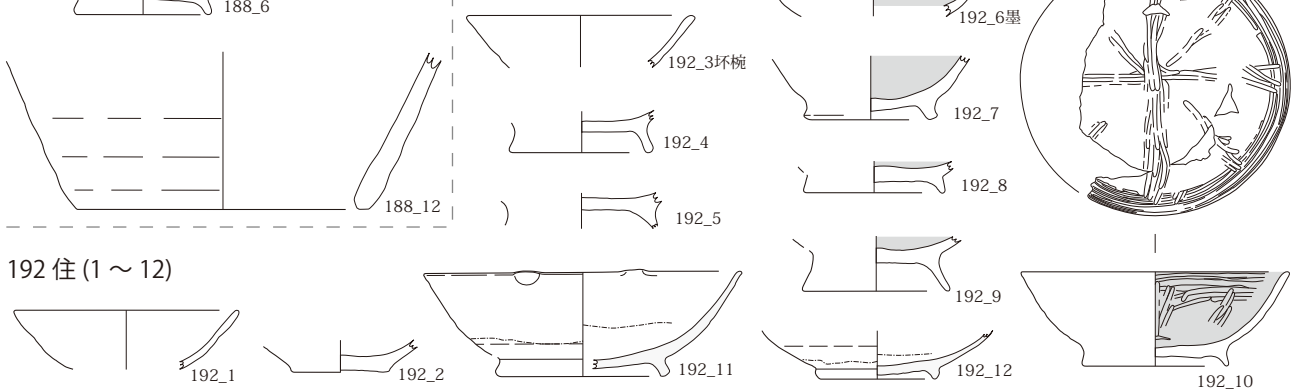
189 住 (1 ~ 4)



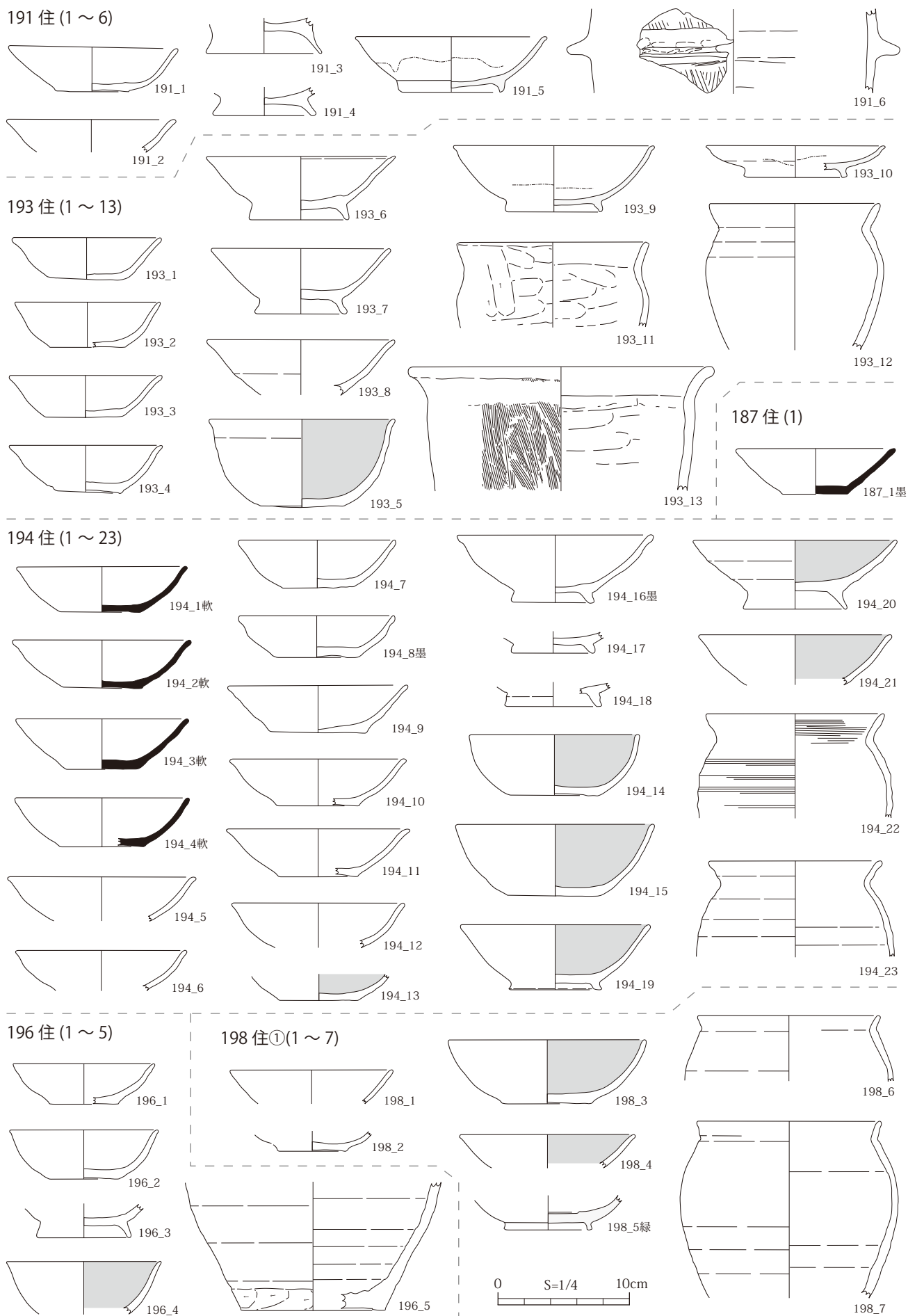
190 住 (1 ~ 5)



192 住 (1 ~ 12)

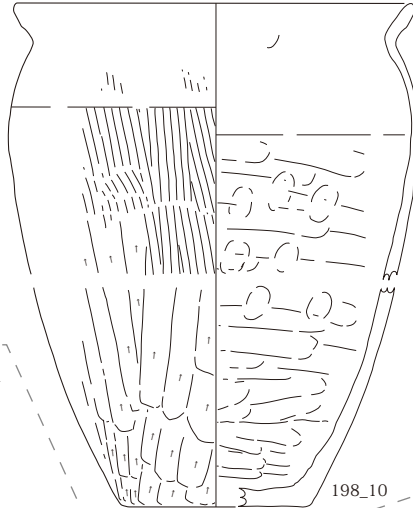
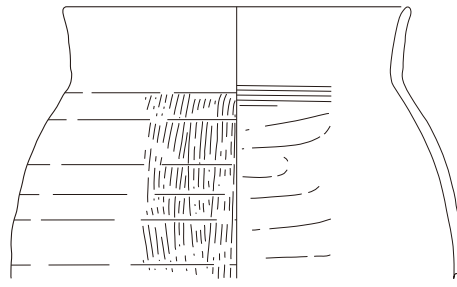
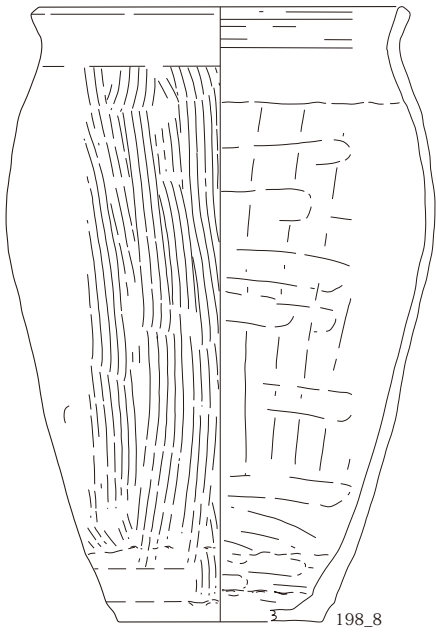


第 141 图 出土土器類実測图 (53)

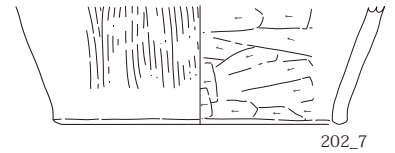
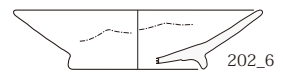
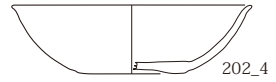
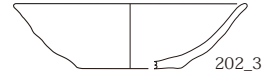
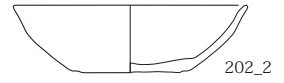
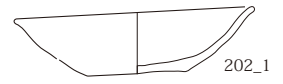


第 142 図 出土土器類実測図 (54)

198 住②(8 ~ 10)

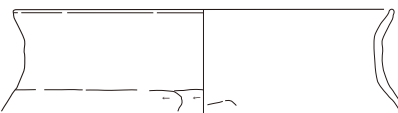
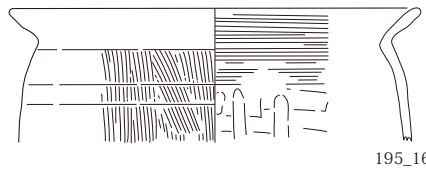
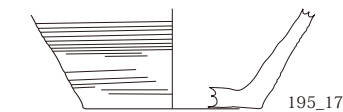
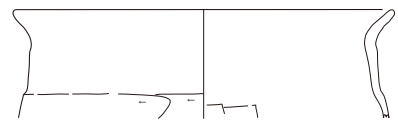
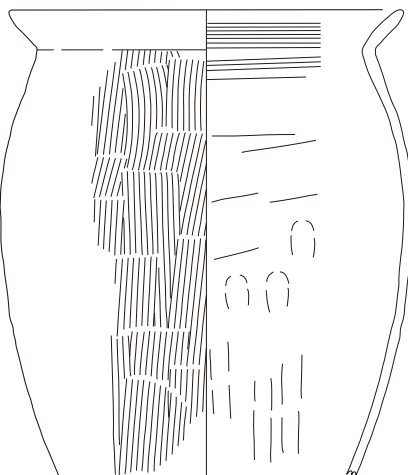
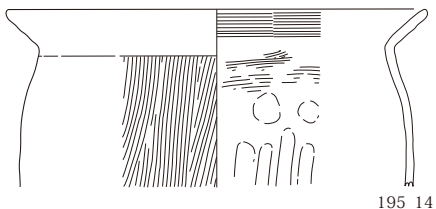
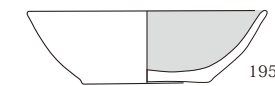
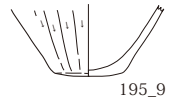
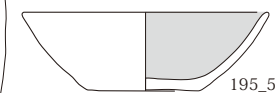
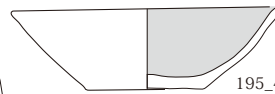
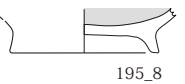
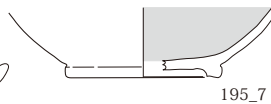
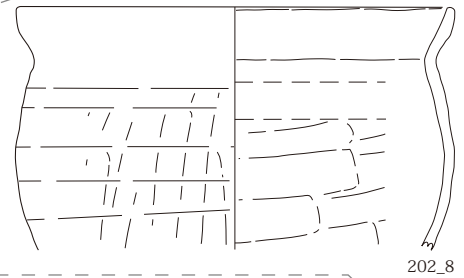
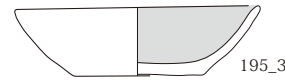
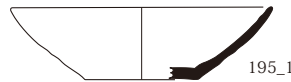
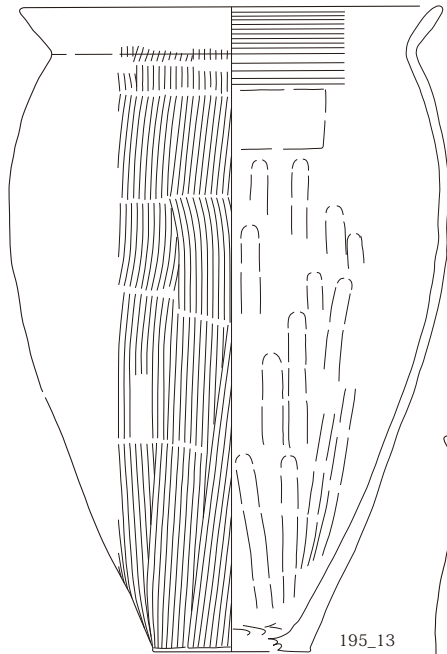


202 住(1 ~ 8)



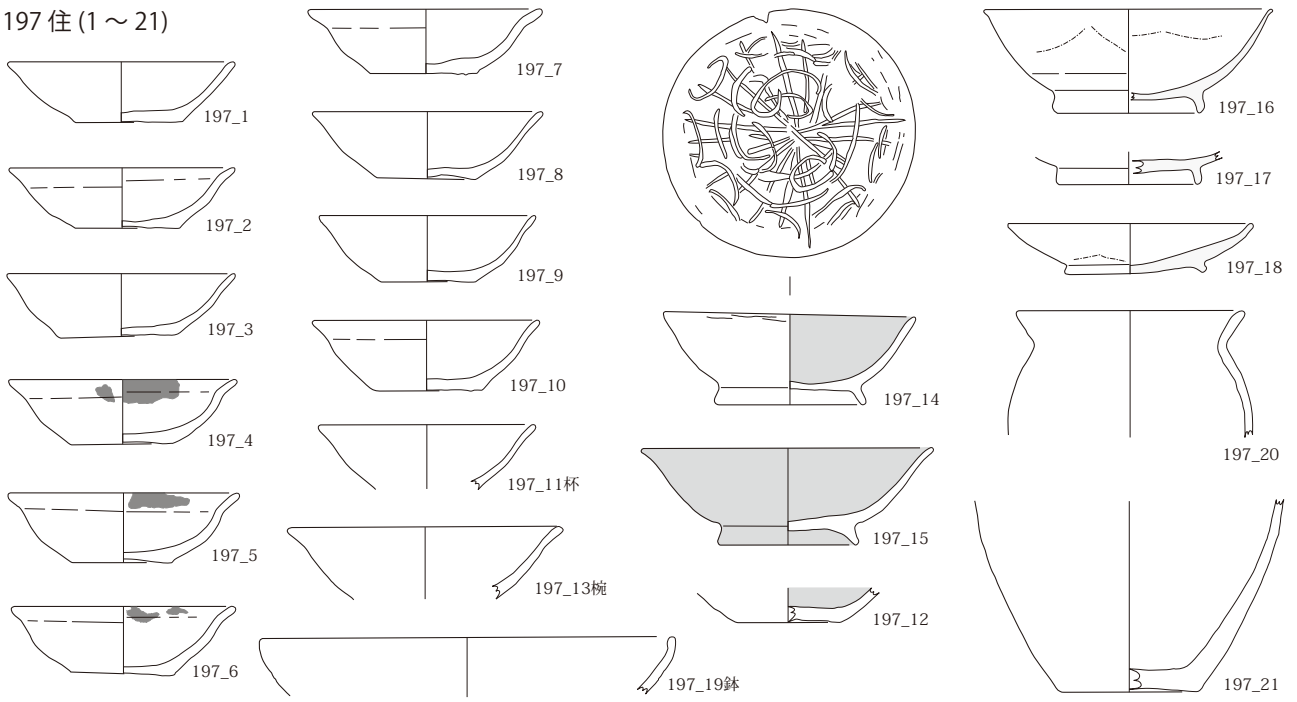
195 住(1 ~ 18)

0 S=1/4 10cm

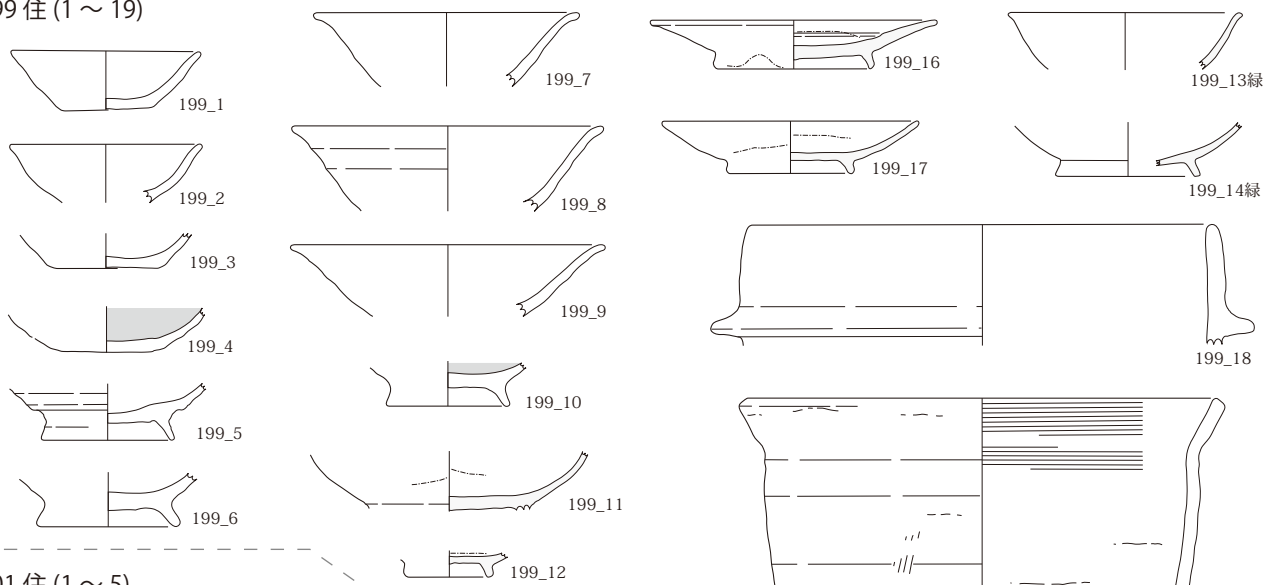


第 143 図 出土土器類実測図 (55)

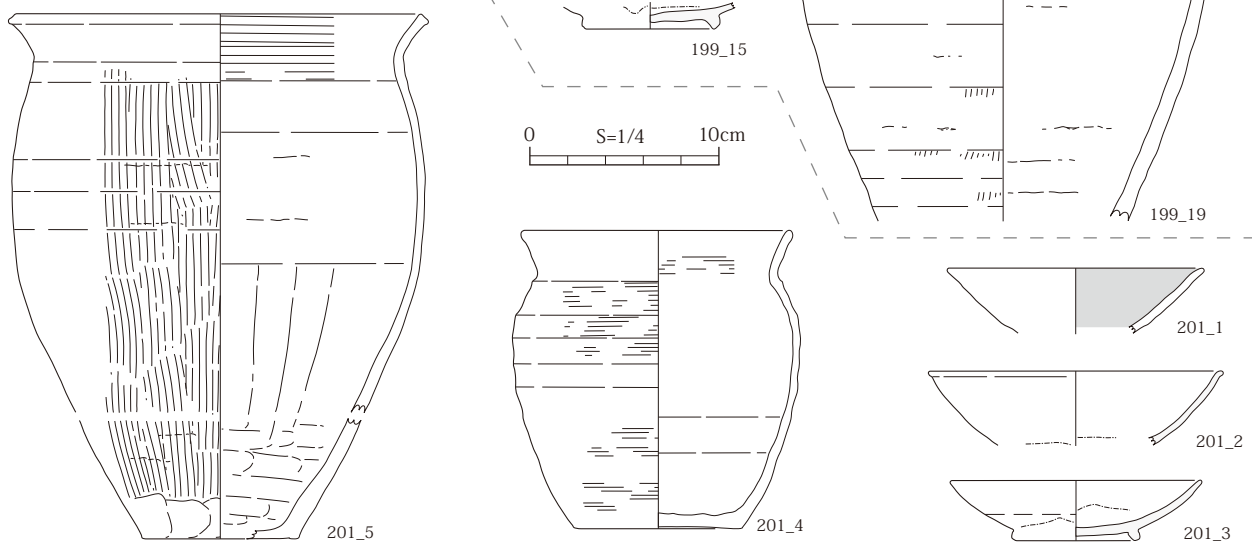
197住(1~21)



199住(1~19)

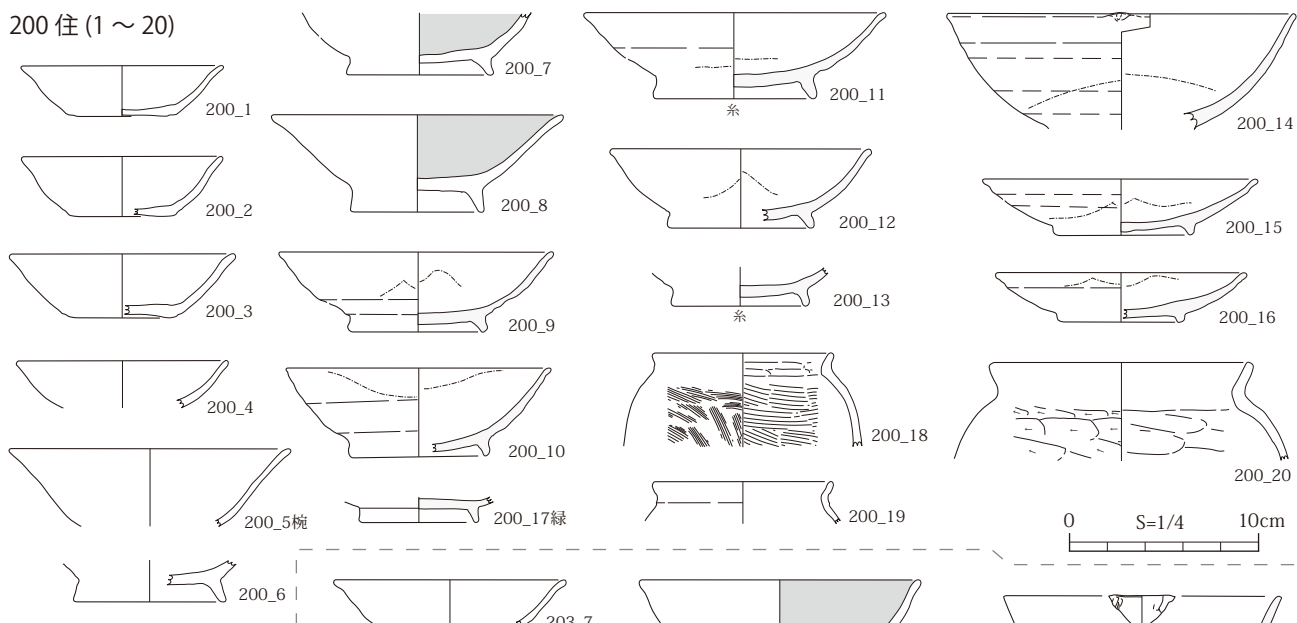


201住(1~5)

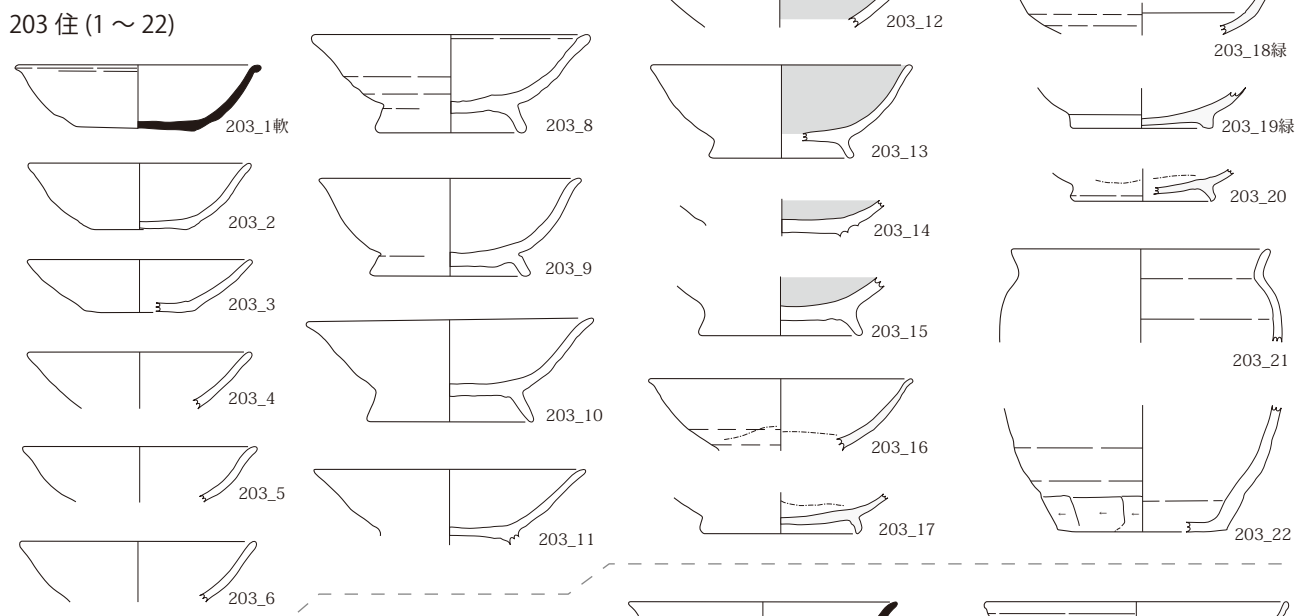


第144図 出土土器類実測図(56)

200 住 (1 ~ 20)



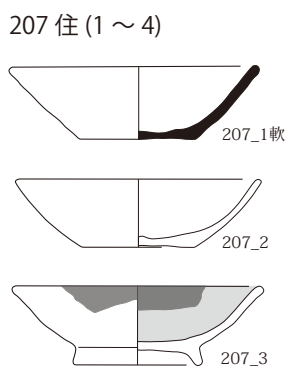
203 住 (1 ~ 22)



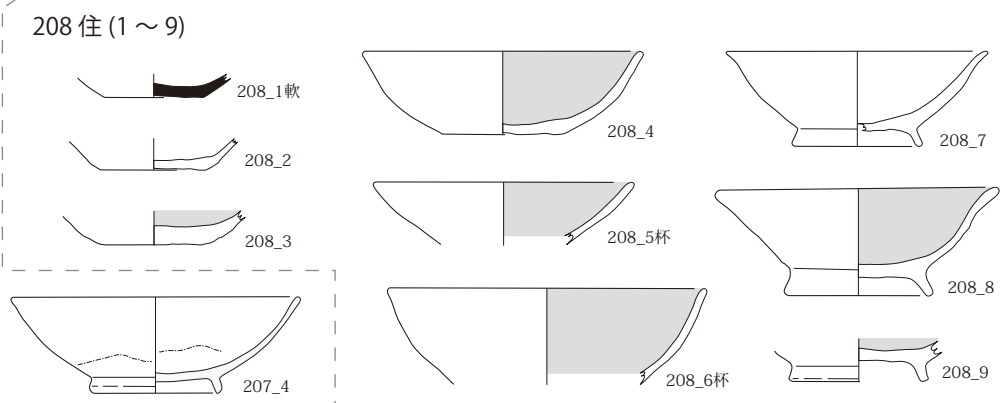
205 住 (1 ~ 8)



207 住 (1 ~ 4)

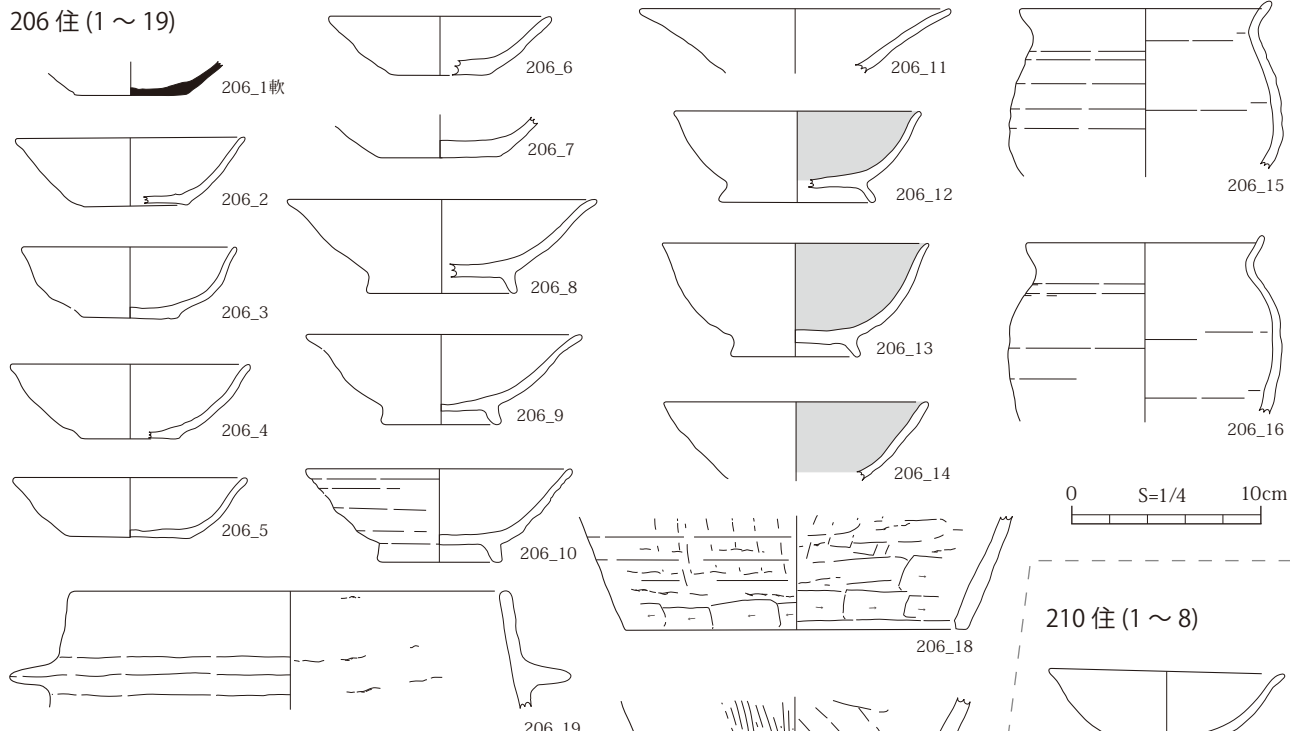


208 住 (1 ~ 9)

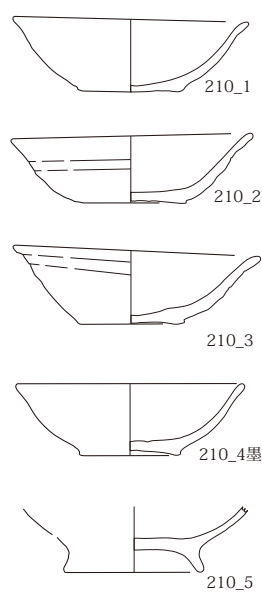


第 145 図 出土土器類実測図 (57)

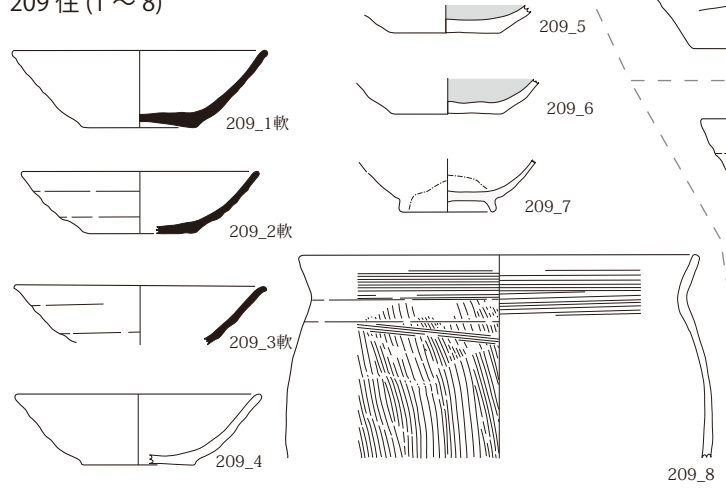
206 住 (1 ~ 19)



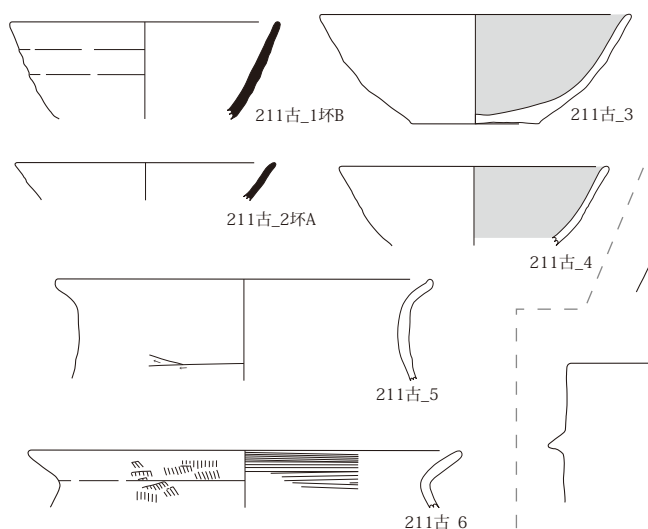
210 住 (1 ~ 8)



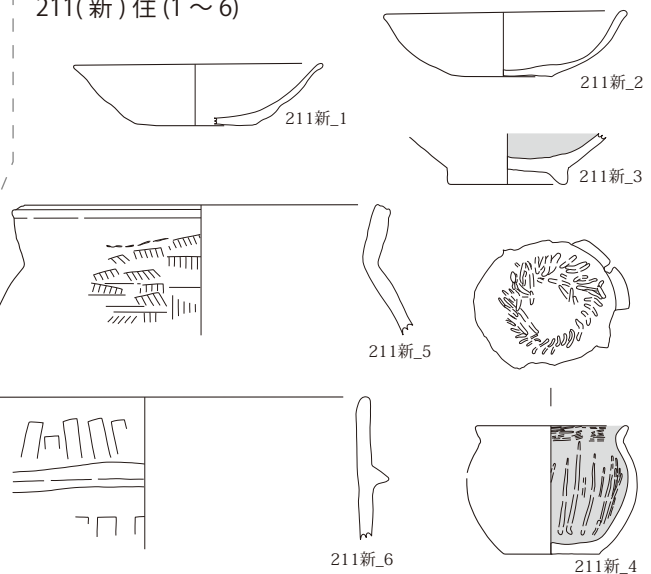
209 住 (1 ~ 8)



211(古) 住 (1 ~ 6)

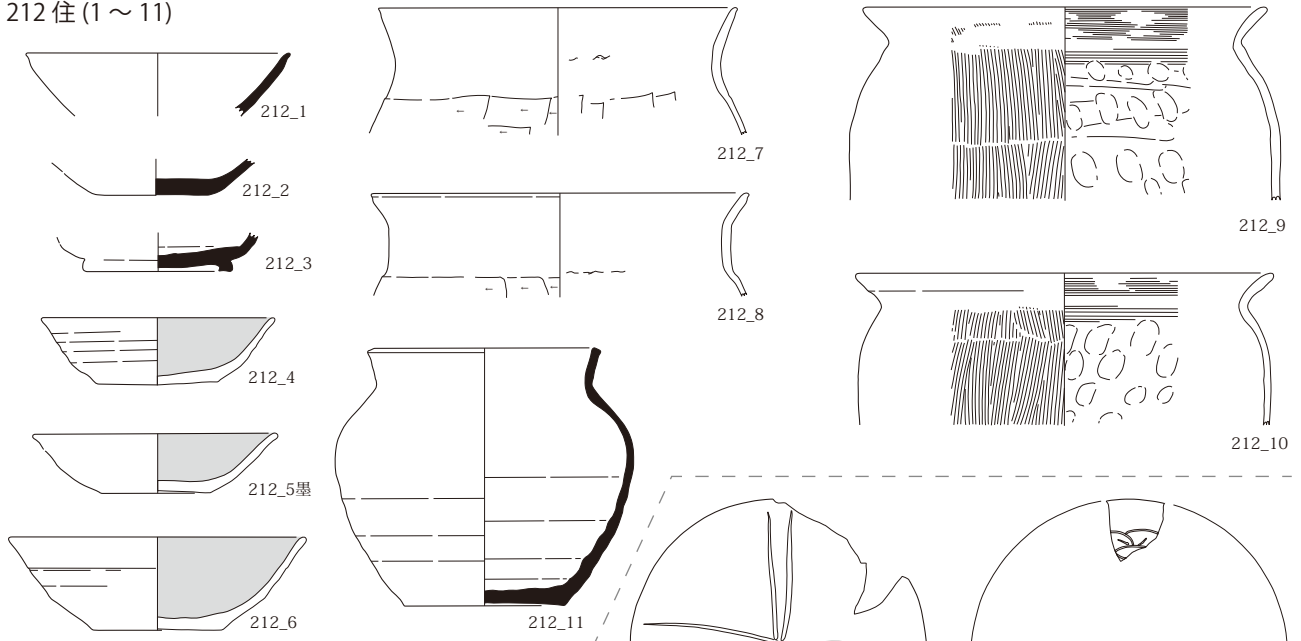


211(新) 住 (1 ~ 6)

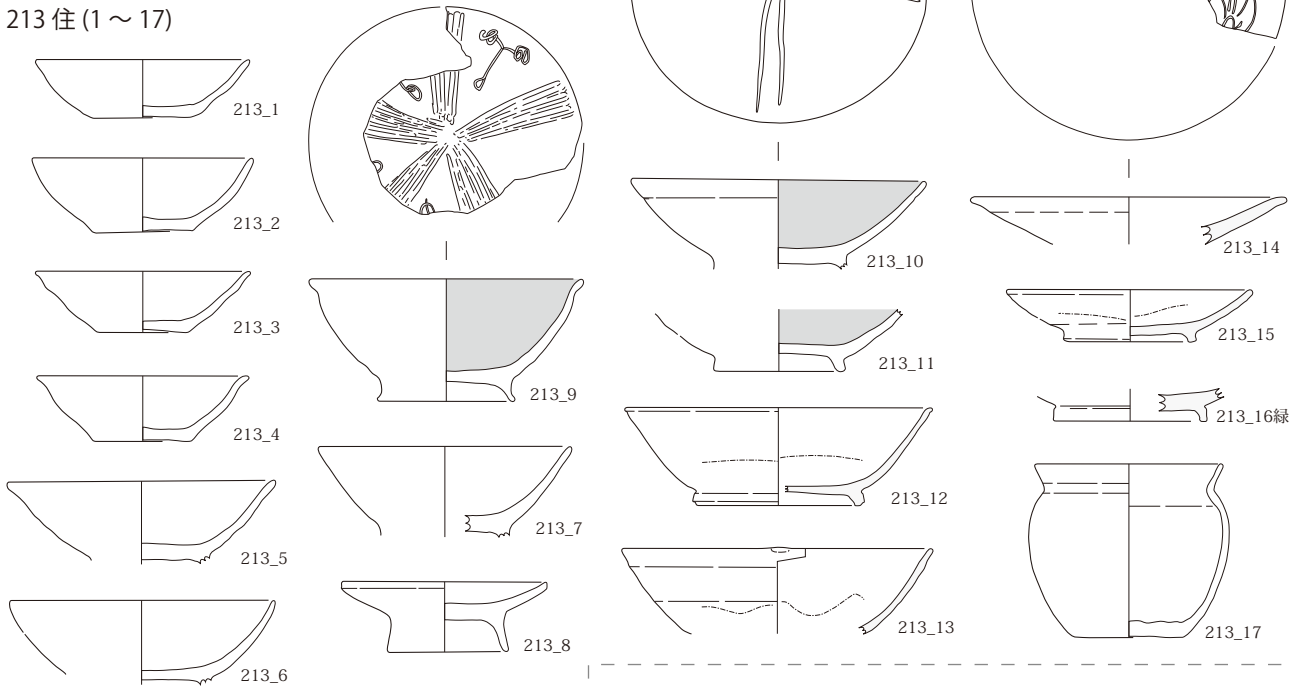


第 146 图 出土土器類実測图 (58)

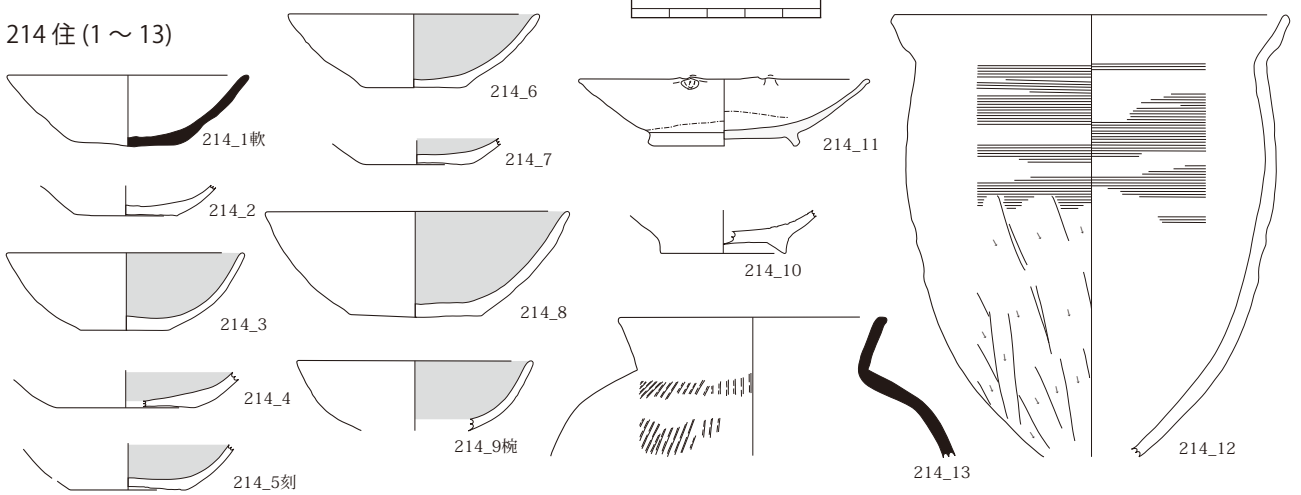
212住(1~11)



213住(1~17)

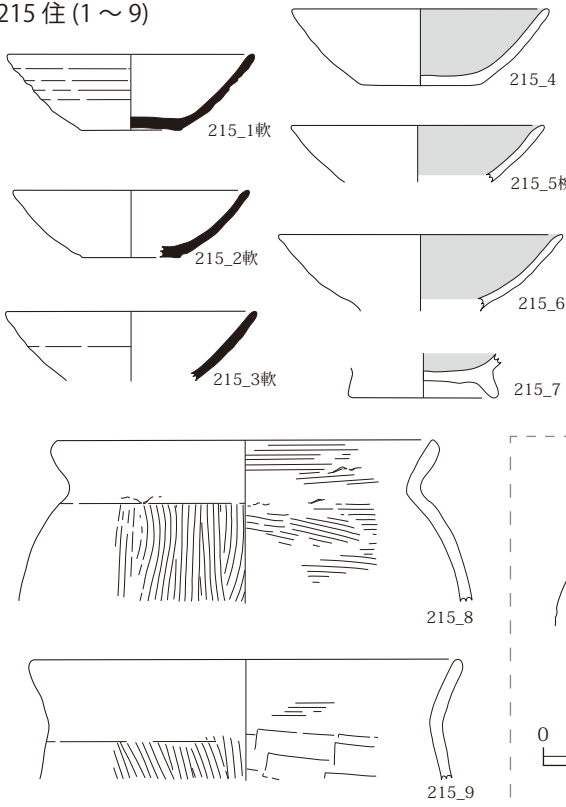


214住(1~13)

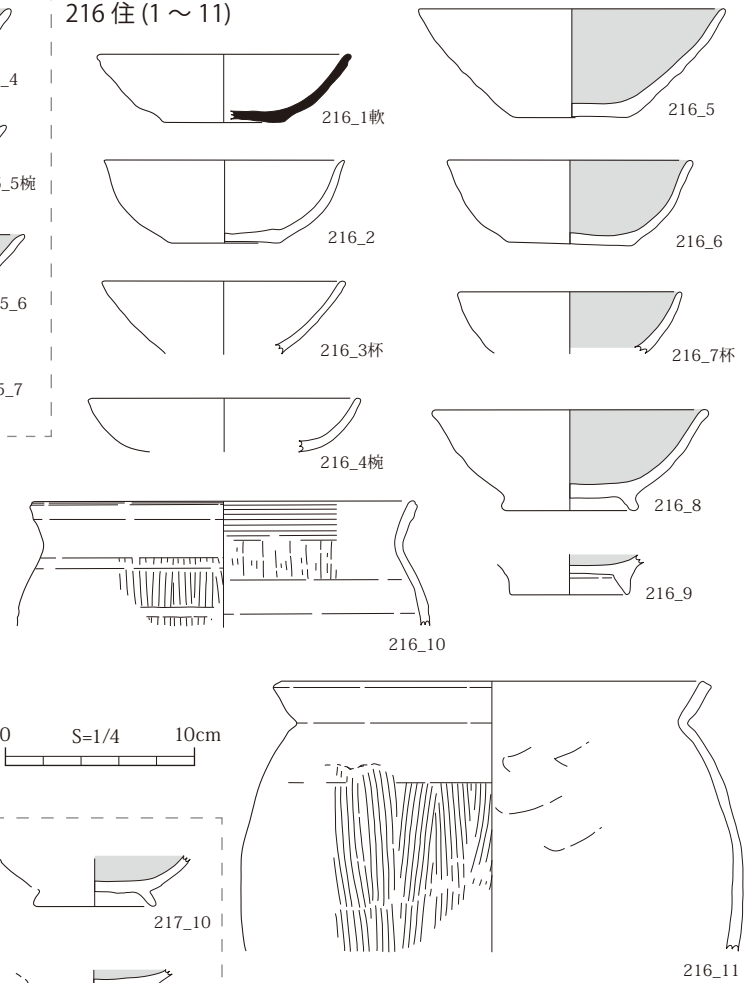


第147図 出土土器類実測図(59)

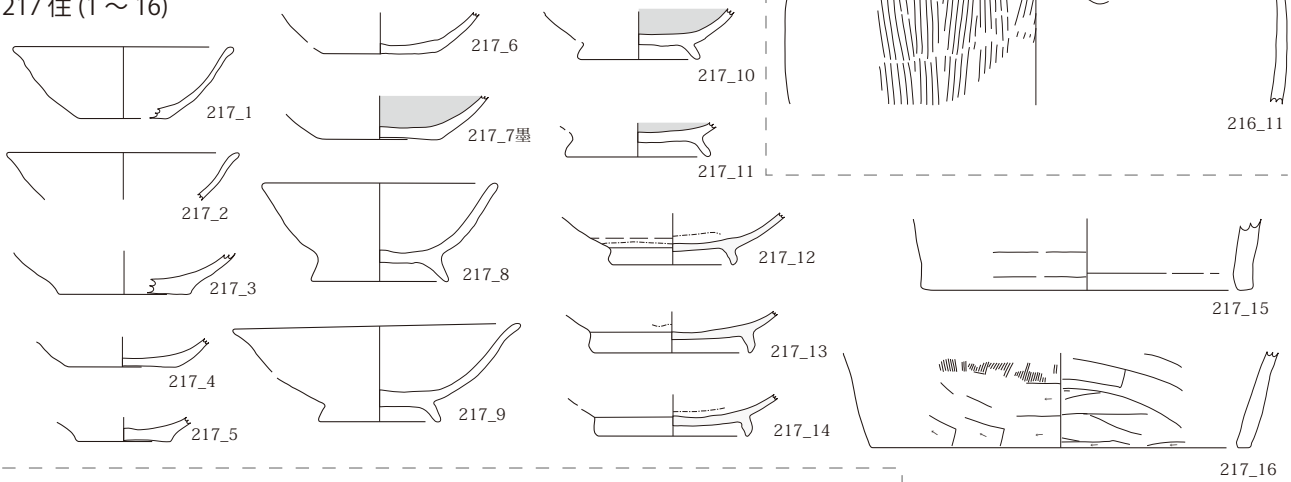
215住(1~9)



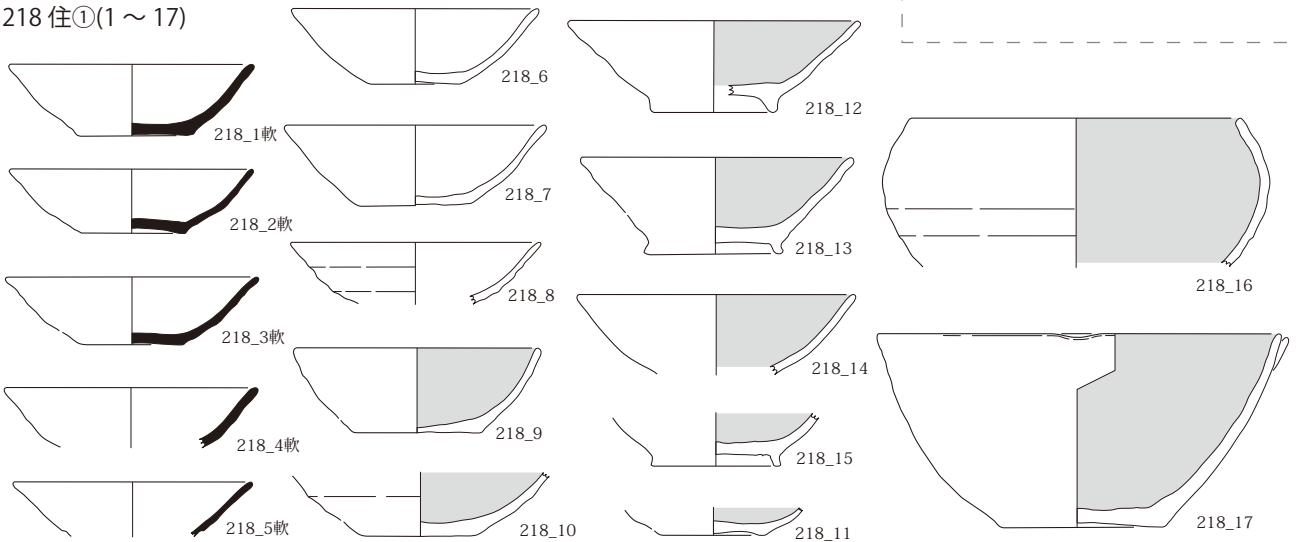
216住(1~11)



217住(1~16)

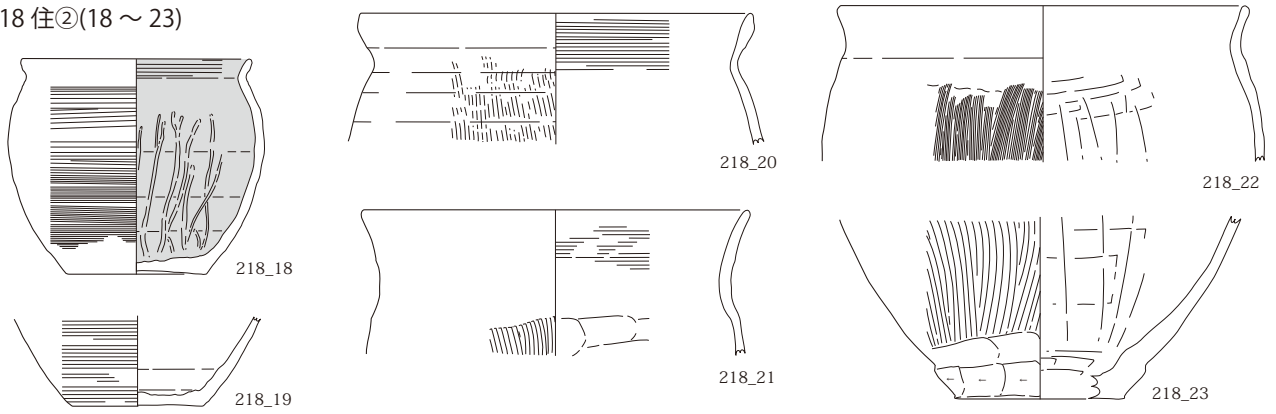


218住①(1~17)

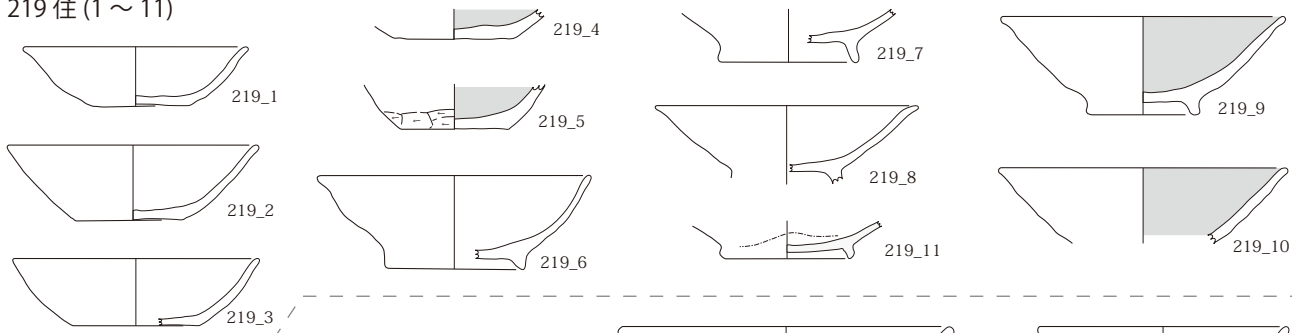


第148図 出土土器類実測図(60)

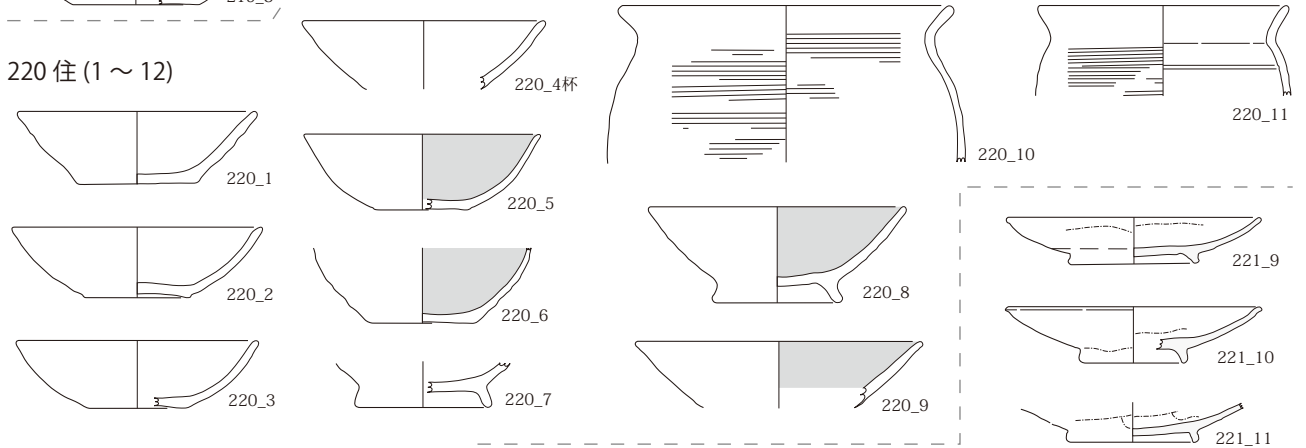
218 住②(18 ~ 23)



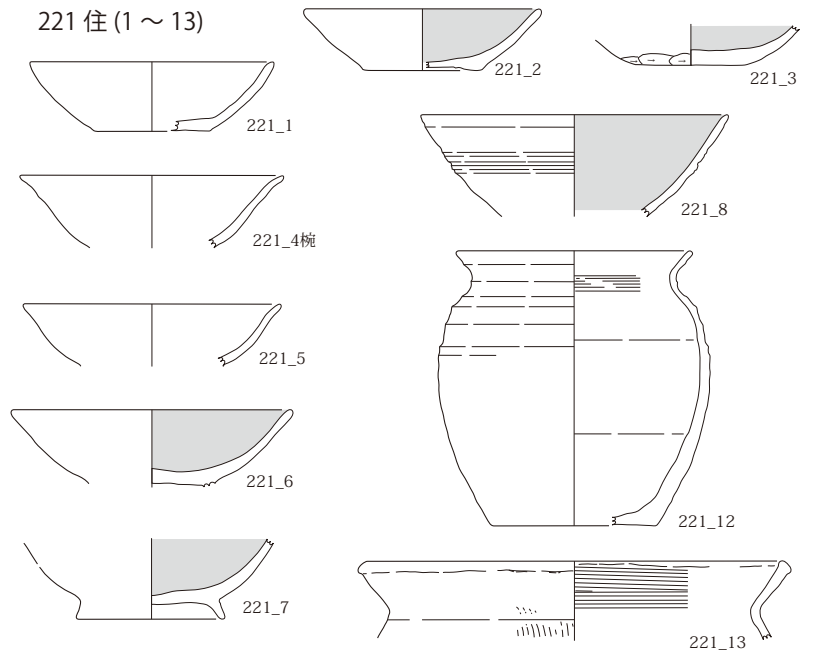
219 住(1 ~ 11)



220 住(1 ~ 12)



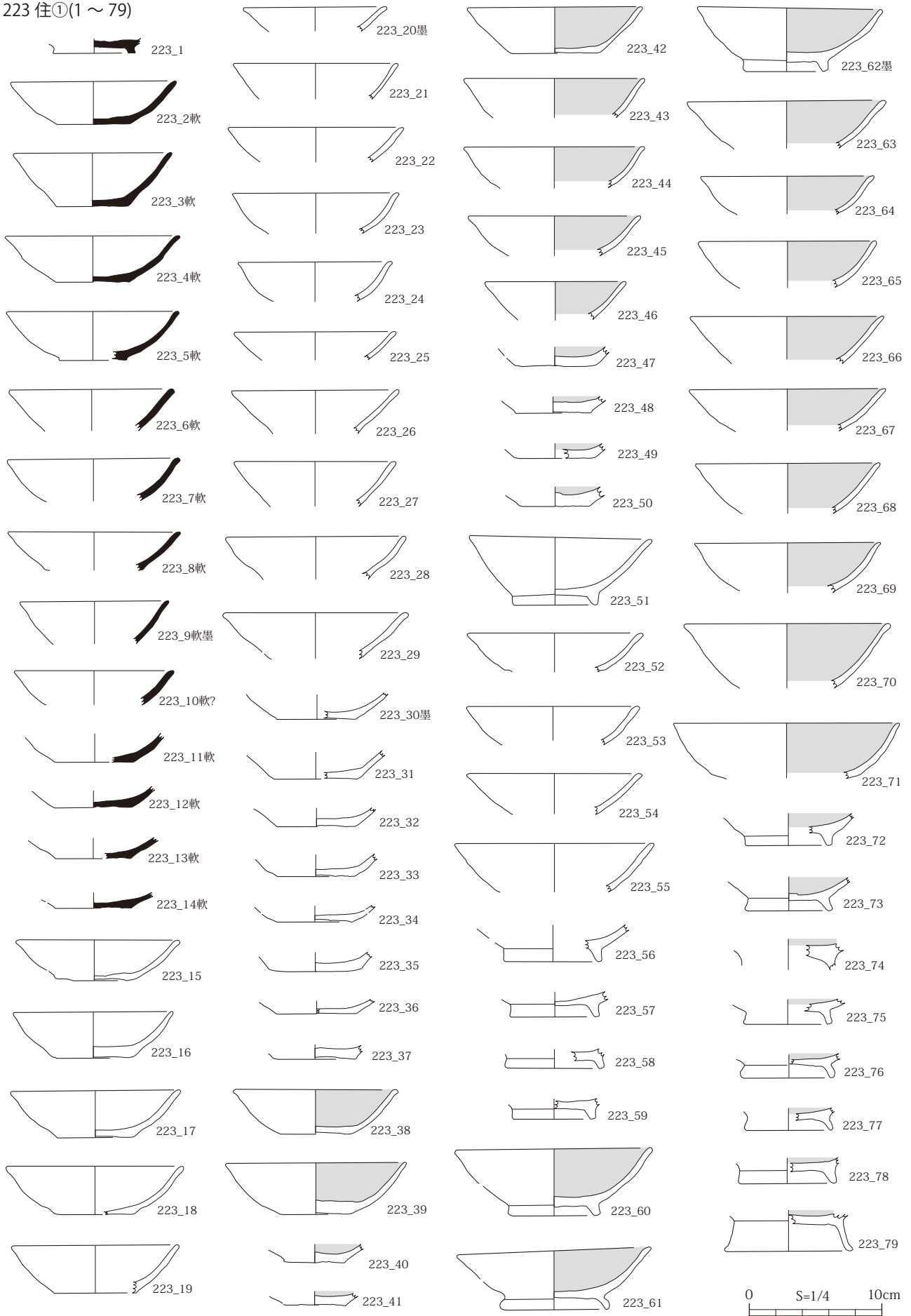
221 住(1 ~ 13)



0 S=1/4 10cm

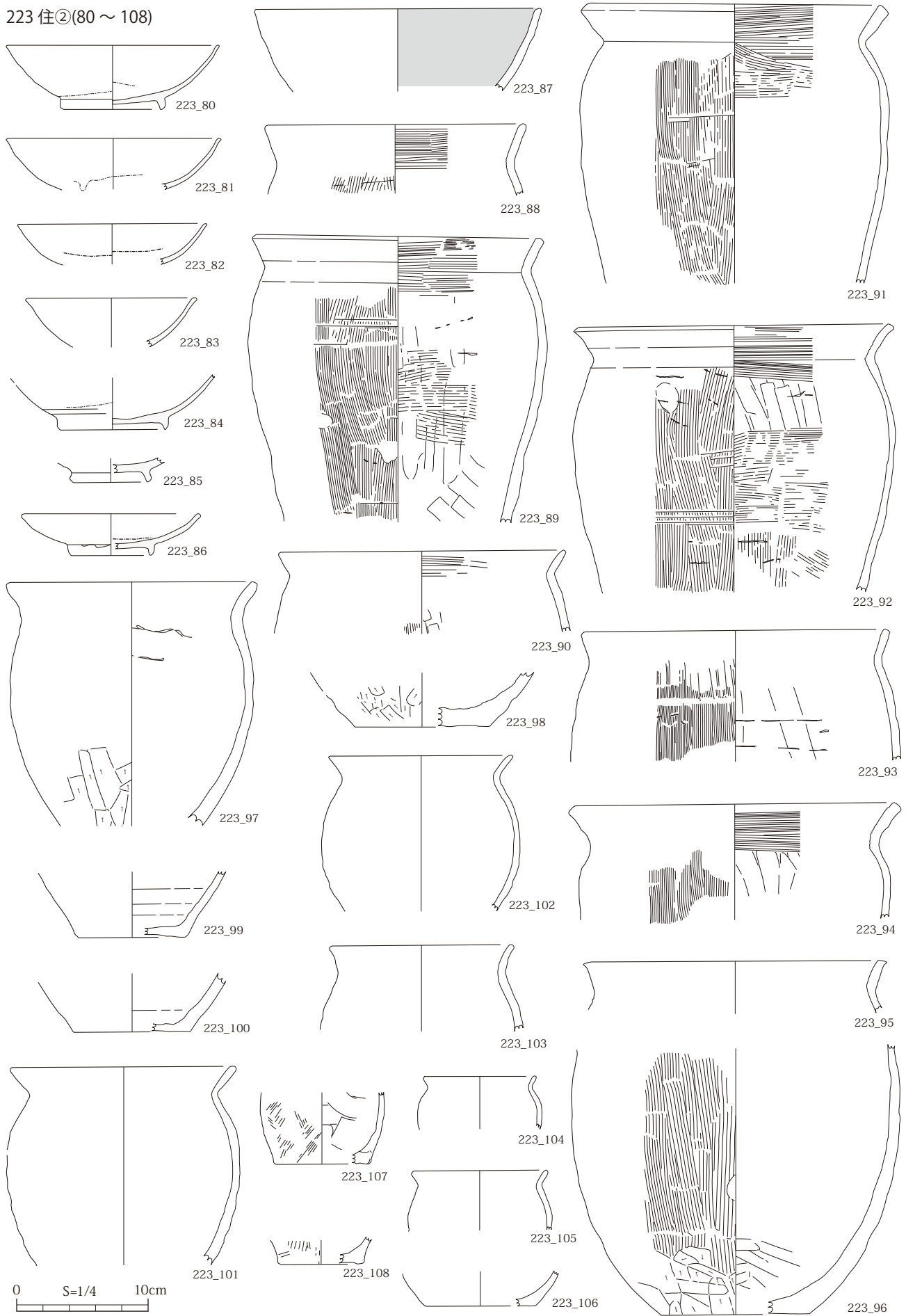
第 149 図 出土土器類実測図 (61)

223 住①(1 ~ 79)



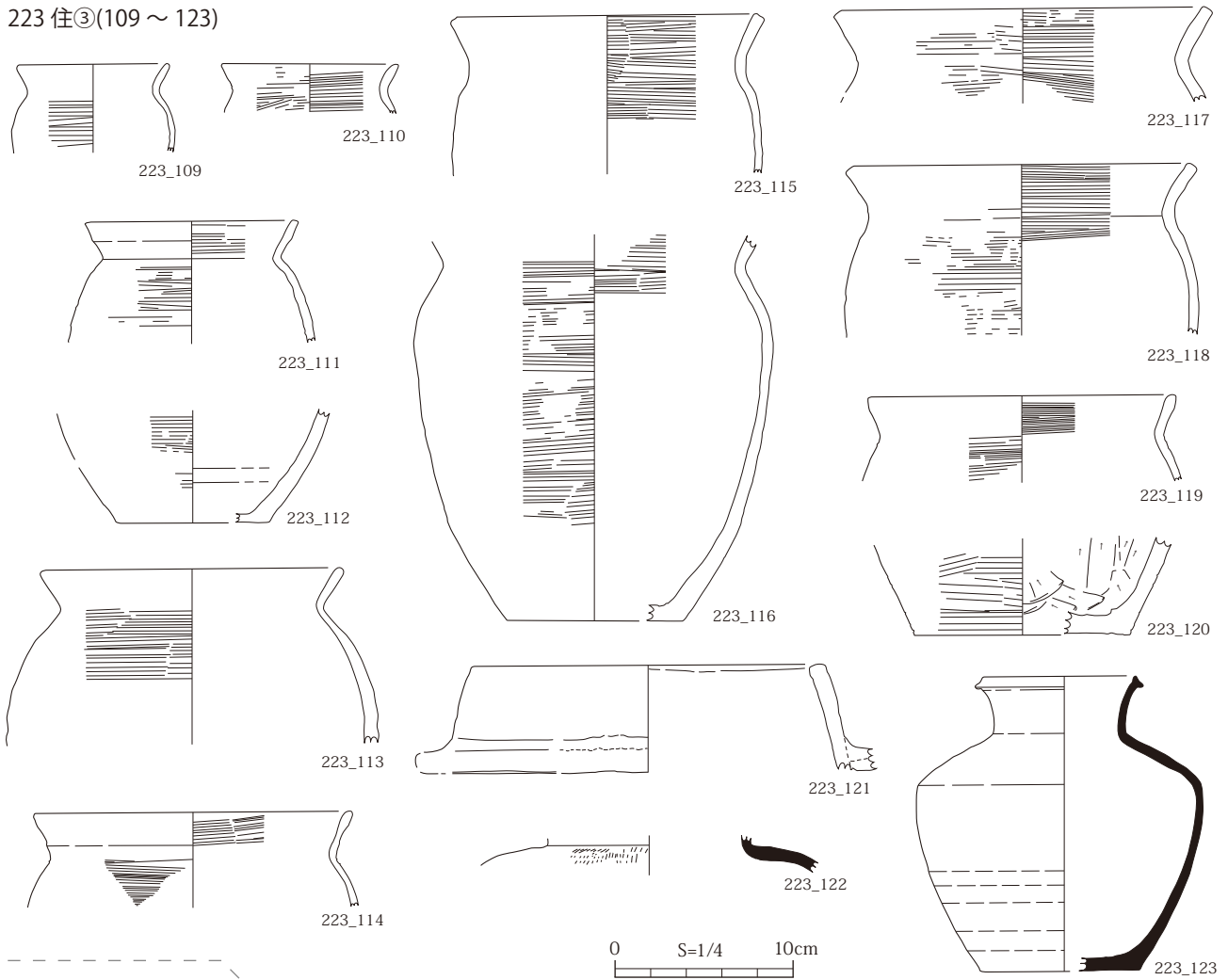
第 150 图 出土土器類実測图 (62)

223 住②(80 ~ 108)

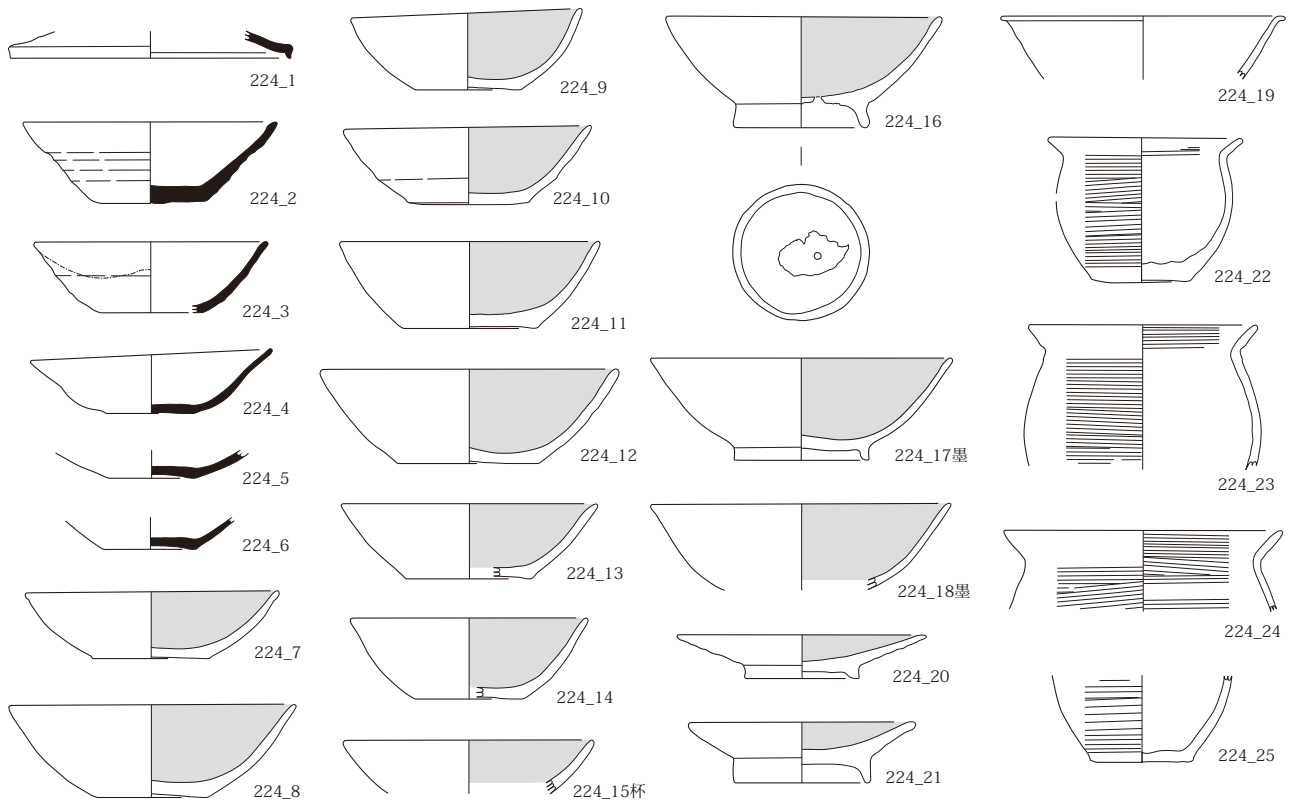


第 151 図 出土土器類実測図 (63)

223 住③(109 ~ 123)



224 住①(1 ~ 25)

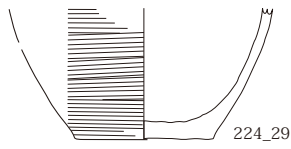


第 152 图 出土土器類実測图 (64)

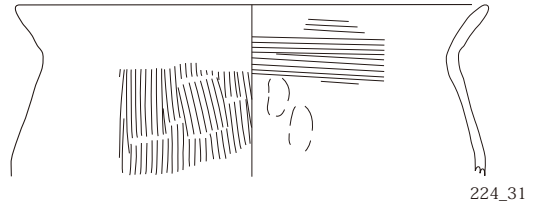
224 住②(26 ~ 33)



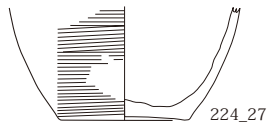
224_26



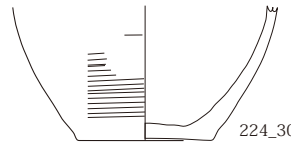
224_29



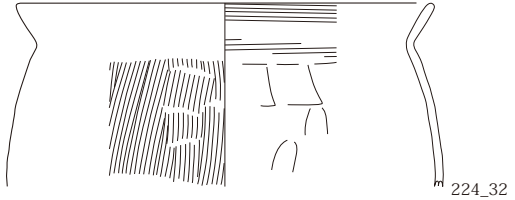
224_31



224_27



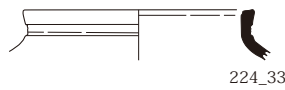
224_30



224_32

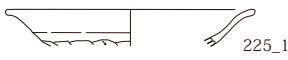


224_28

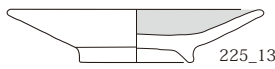


224_33

225 住①(1 ~ 18)



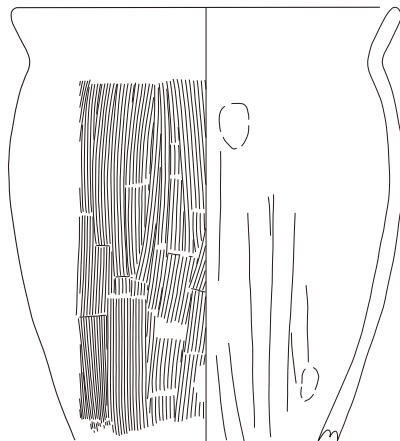
225_1



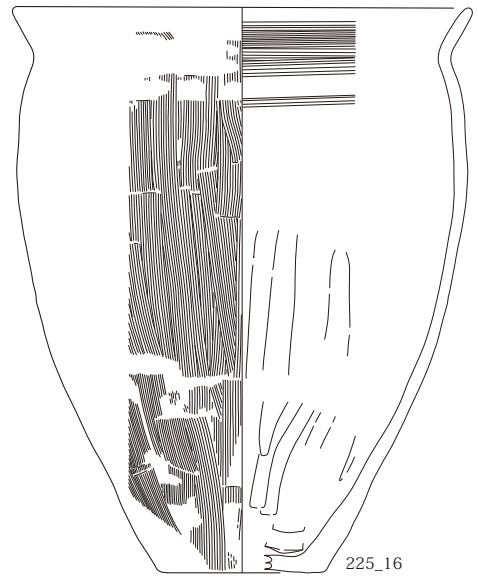
225_13



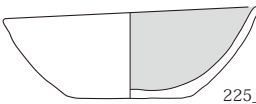
225_2



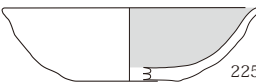
225_14



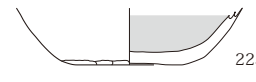
225_16



225_3



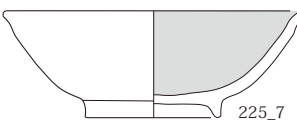
225_4



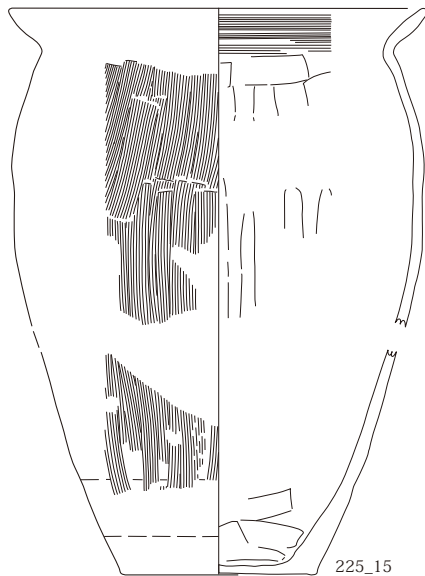
225_5



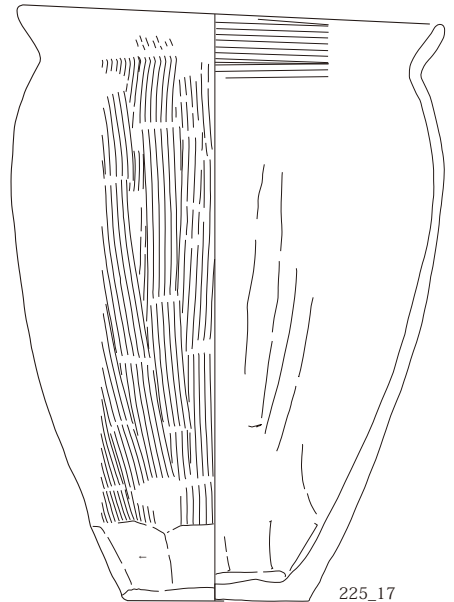
225_6



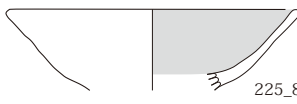
225_7



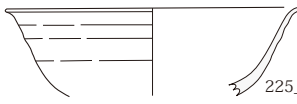
225_15



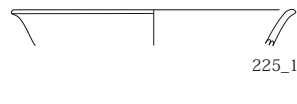
225_17



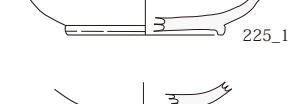
225_8



225_9



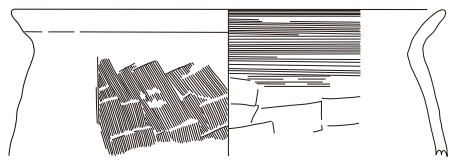
225_10



225_11



225_12

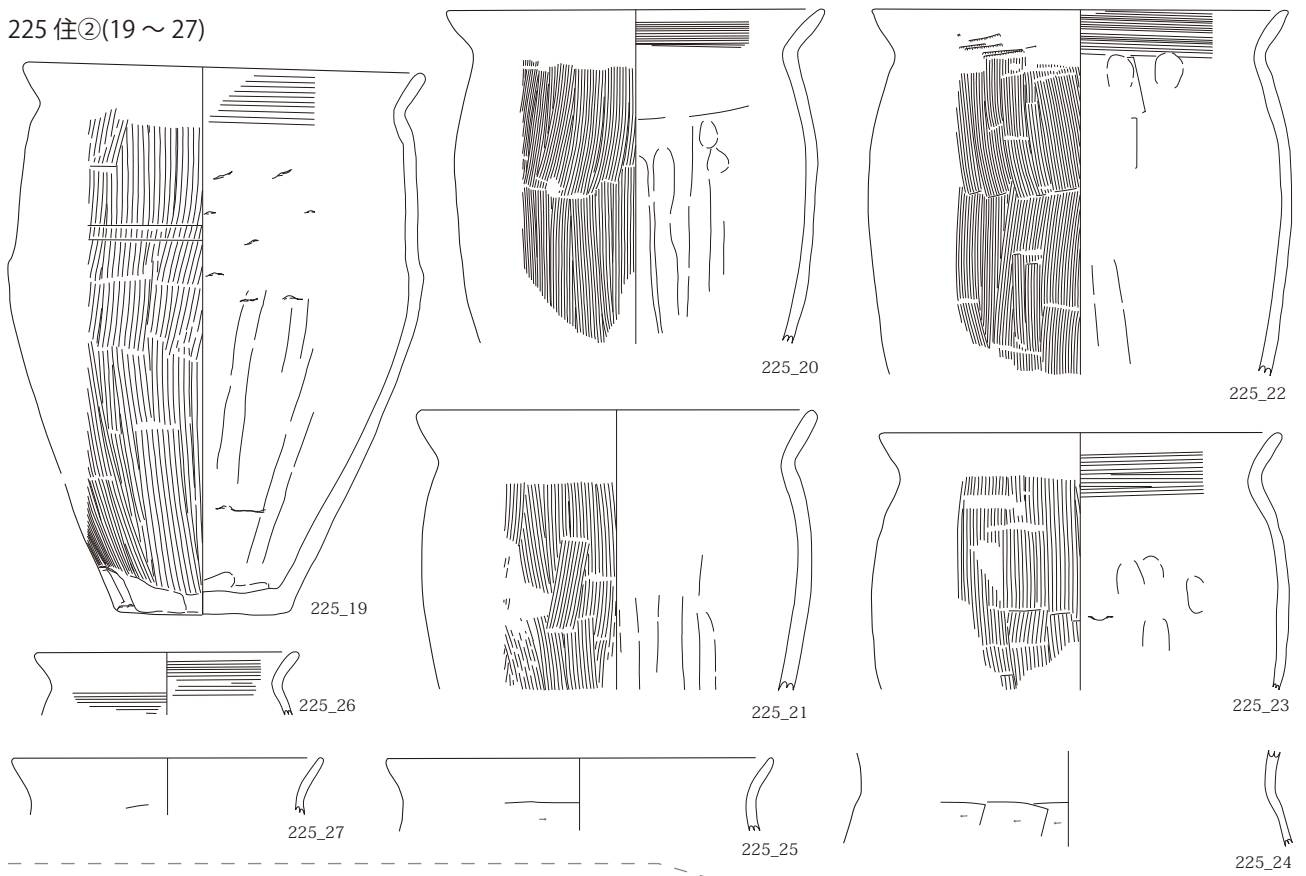


225_18

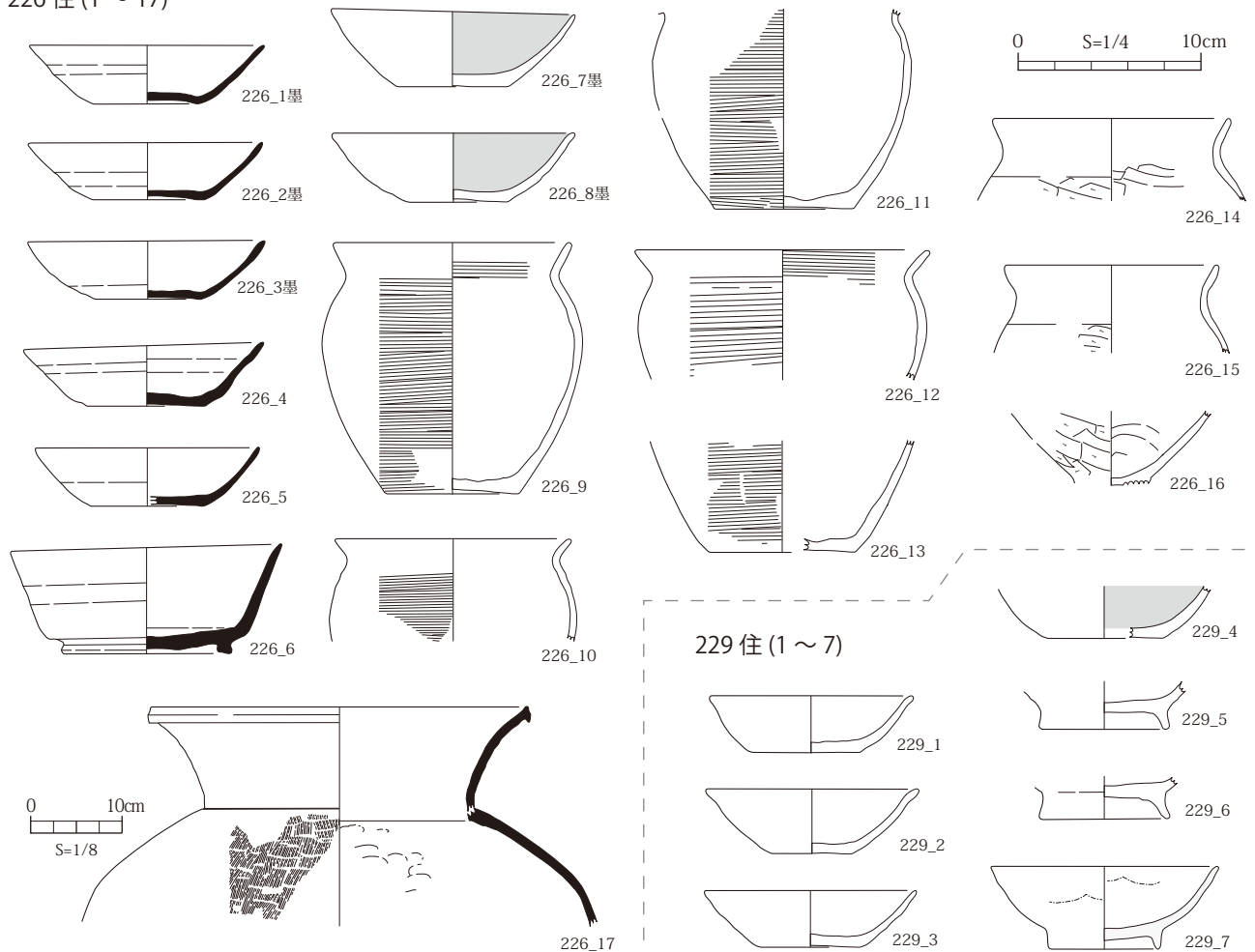
0 S=1/4 10cm

第 153 図 出土土器類実測図 (65)

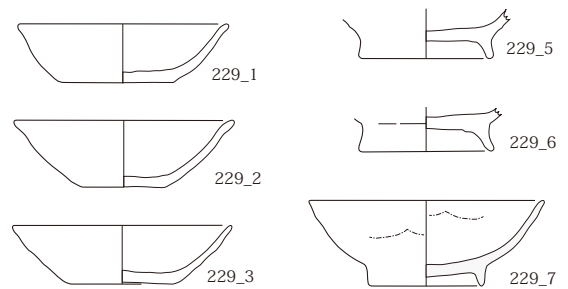
225 住②(19 ~ 27)



226 住(1 ~ 17)

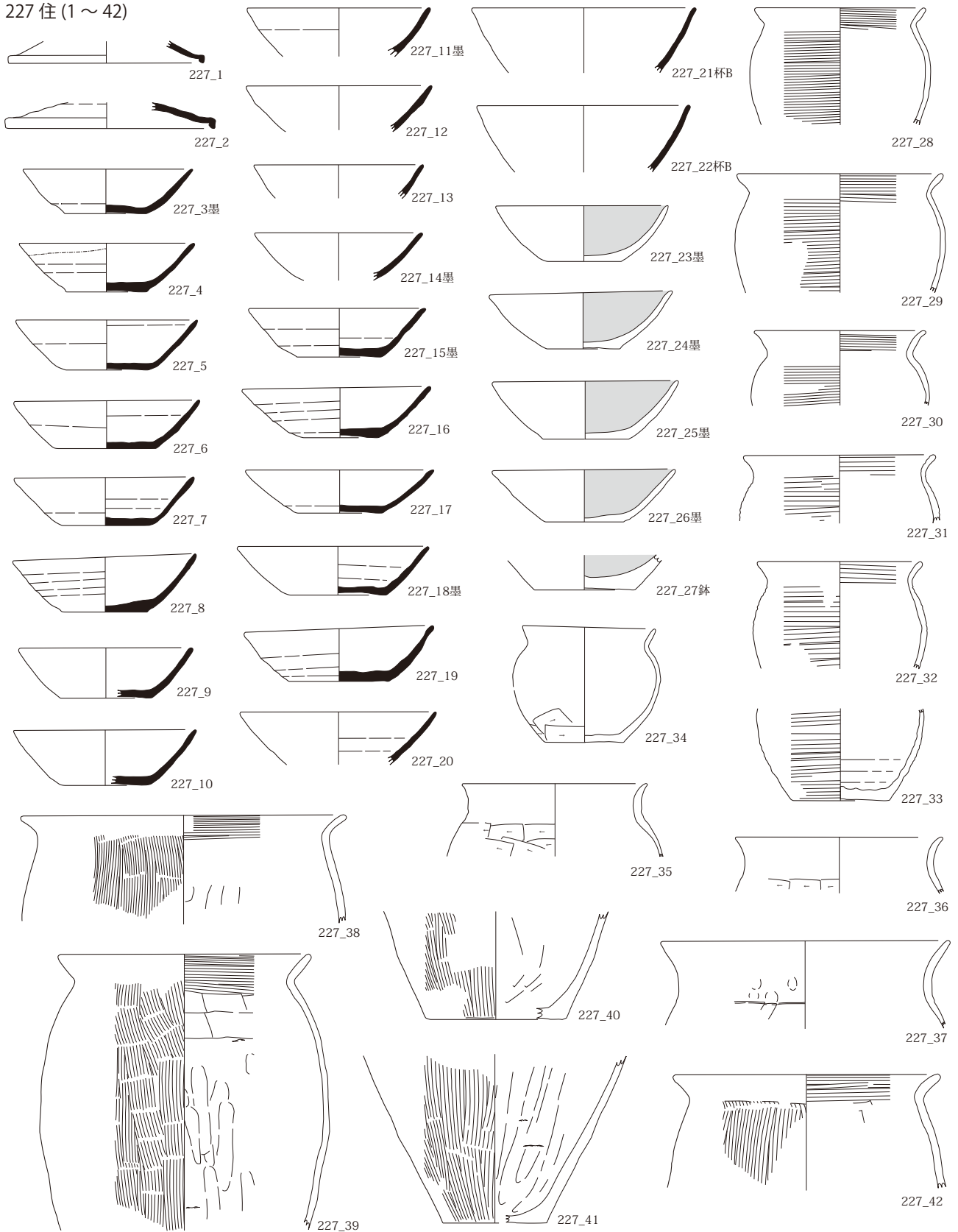


229 住(1 ~ 7)



第 154 図 出土土器類実測図 (66)

227 住 (1 ~ 42)

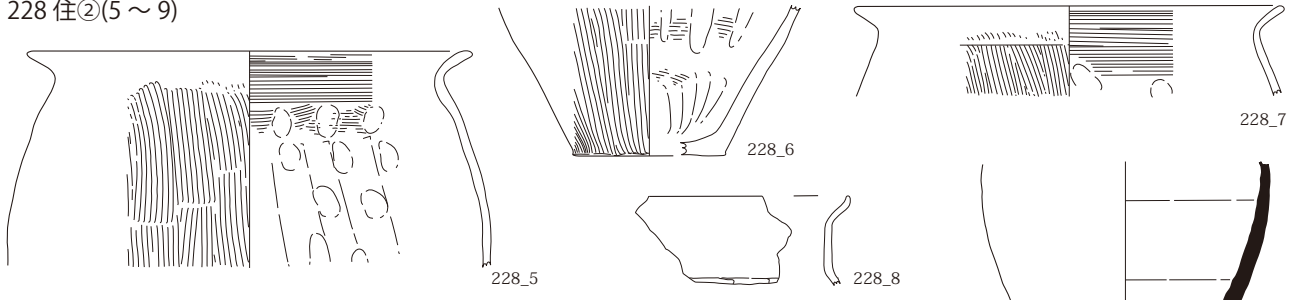


228 住①(1 ~ 4)

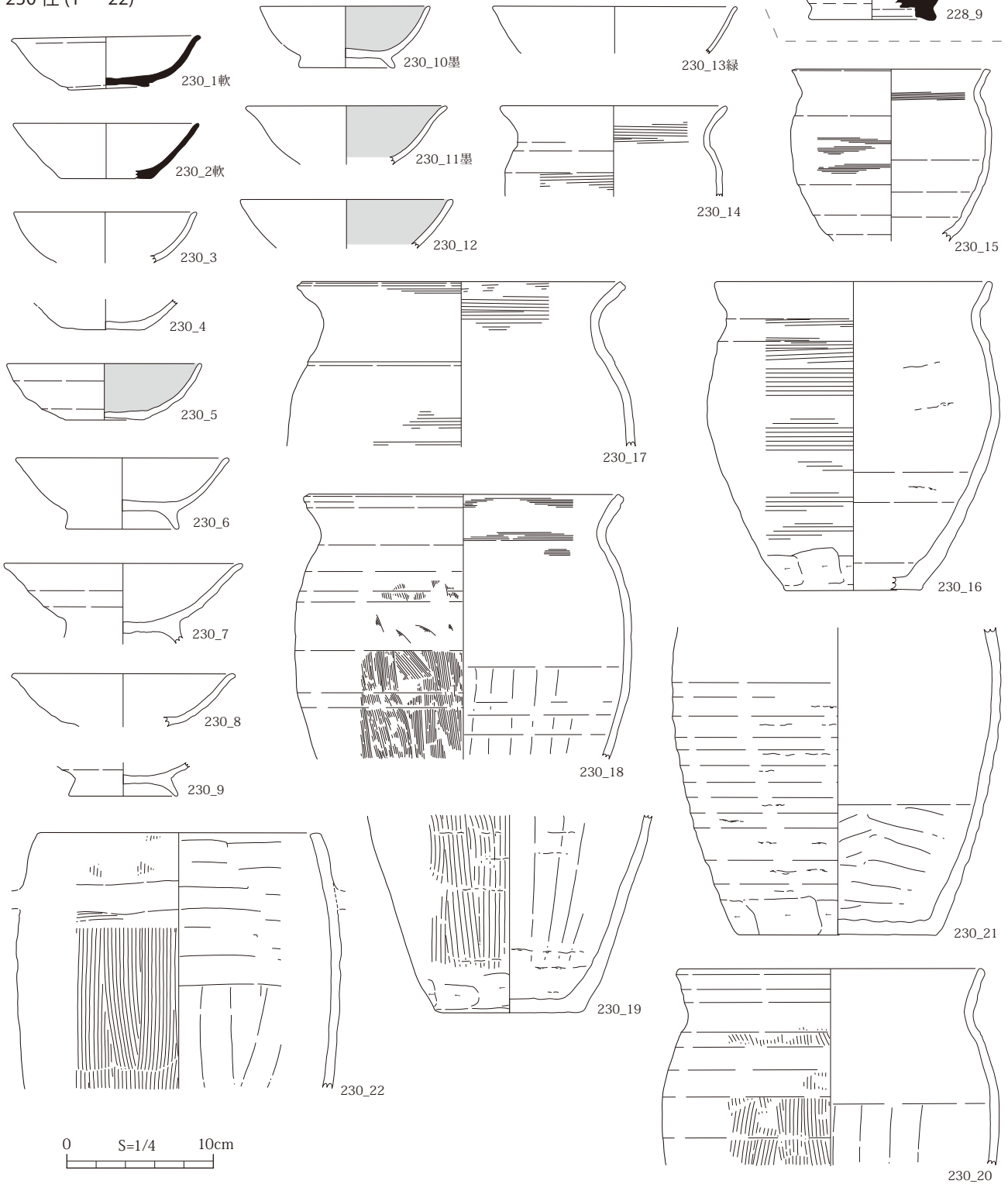


第 155 图 出土土器類実測图 (67)

228 住②(5~9)

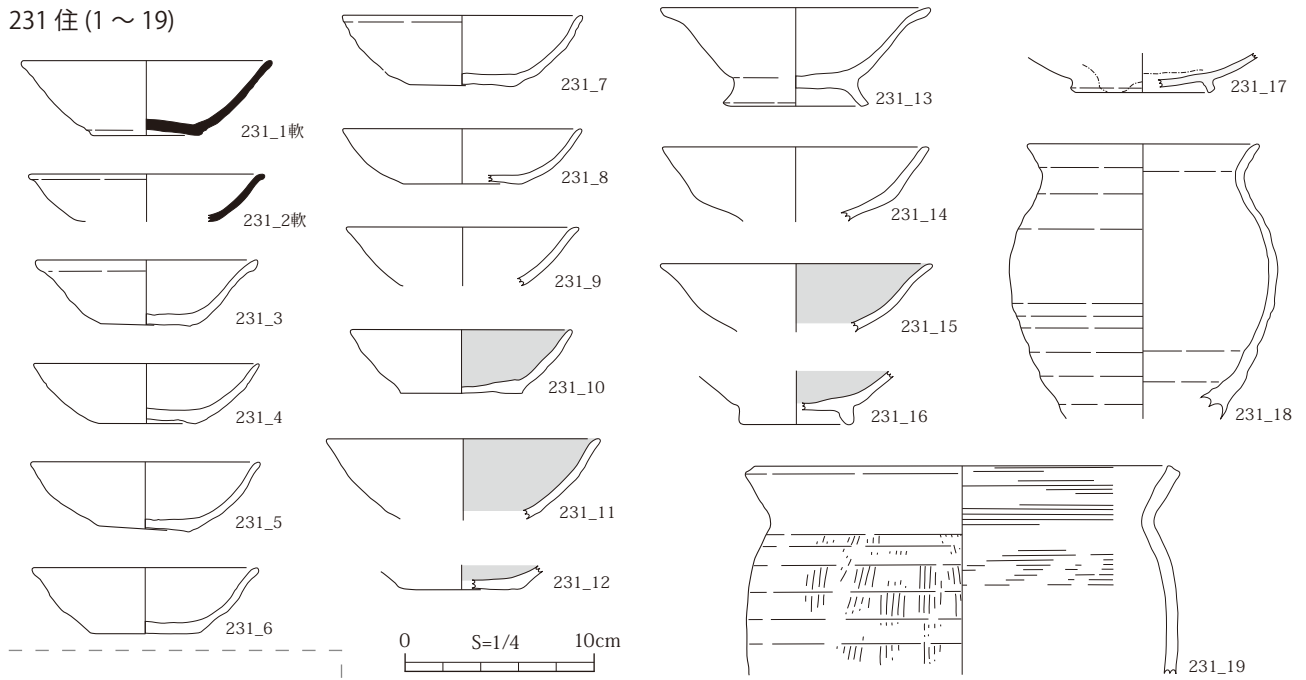


230 住(1~22)

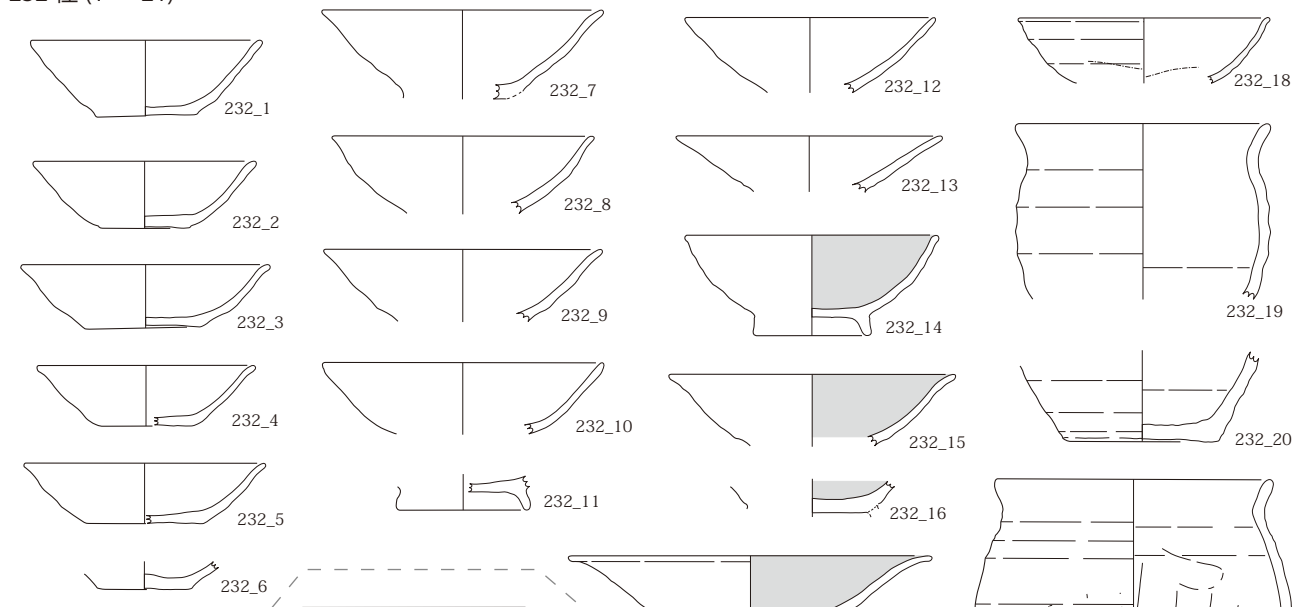


第 156 図 出土土器類実測図 (68)

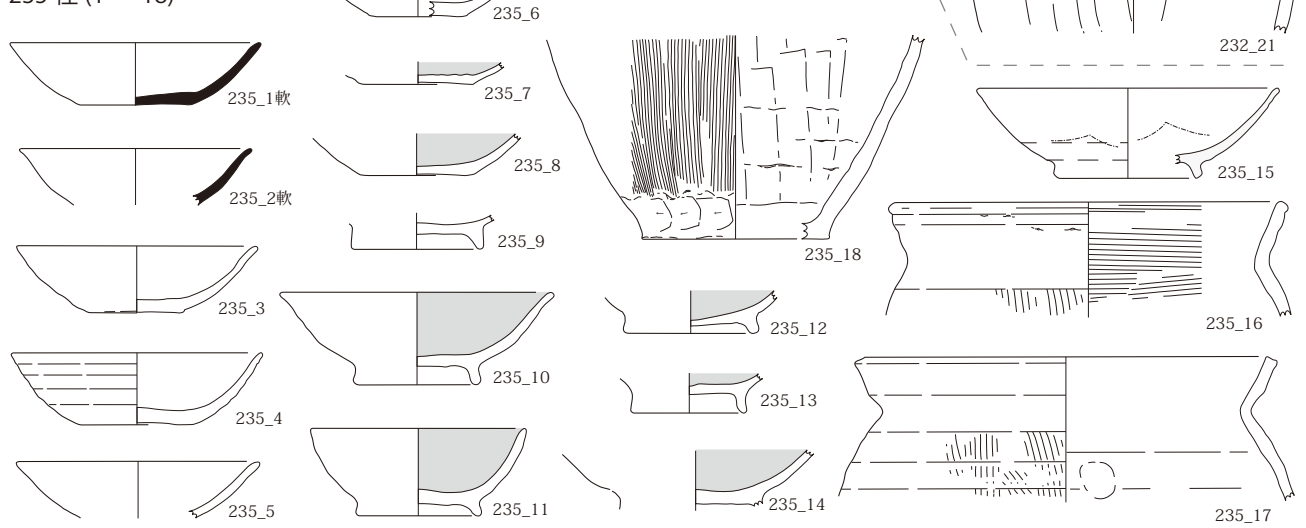
231 住 (1 ~ 19)



232 住 (1 ~ 21)

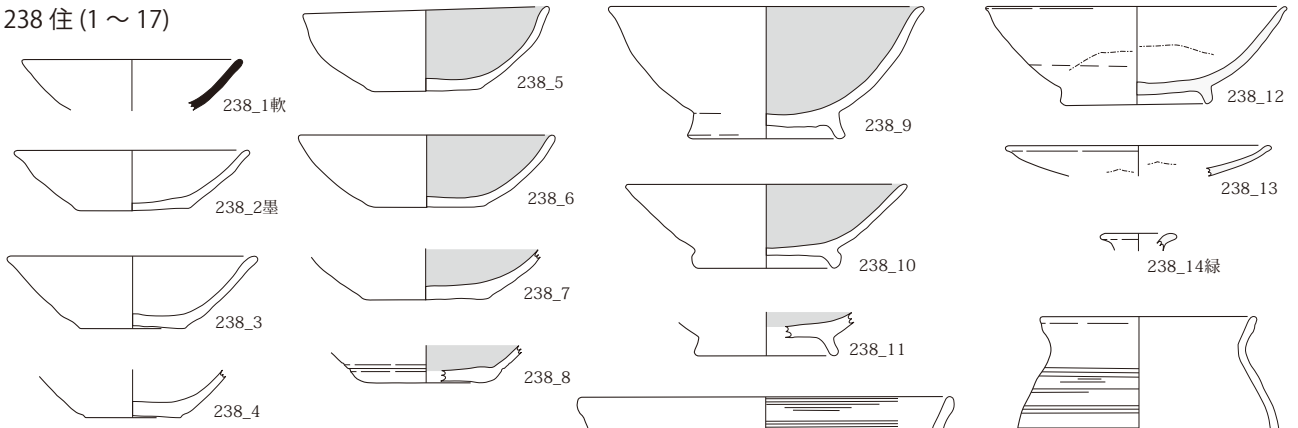


235 住 (1 ~ 18)

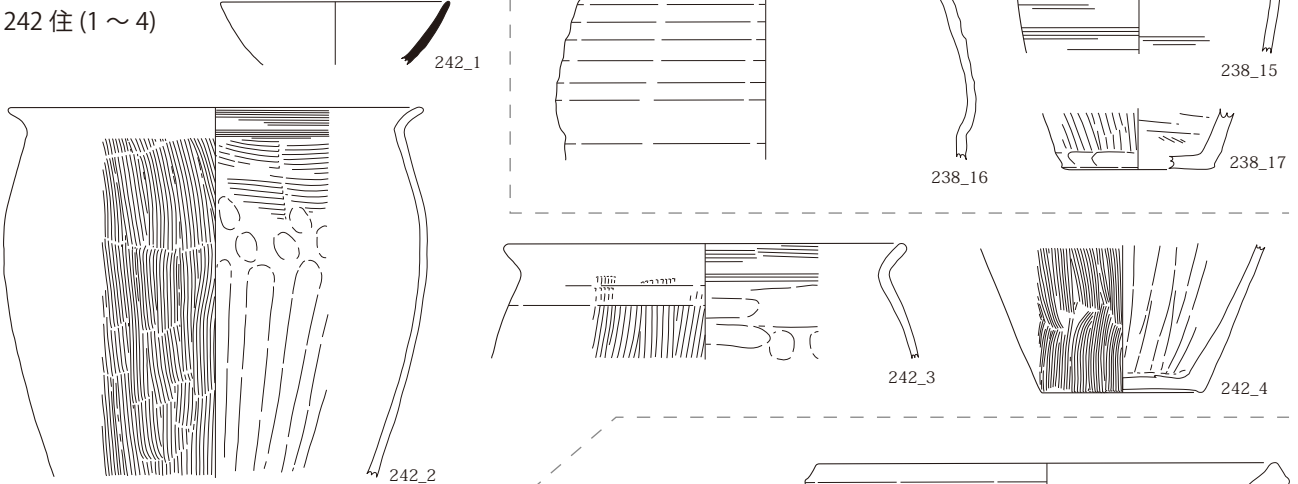


第 157 図 出土土器類実測図 (69)

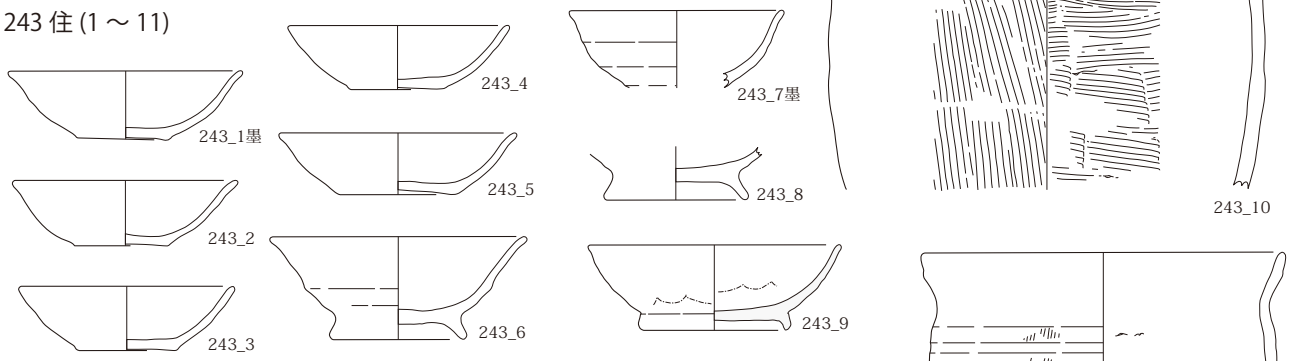
238 住 (1 ~ 17)



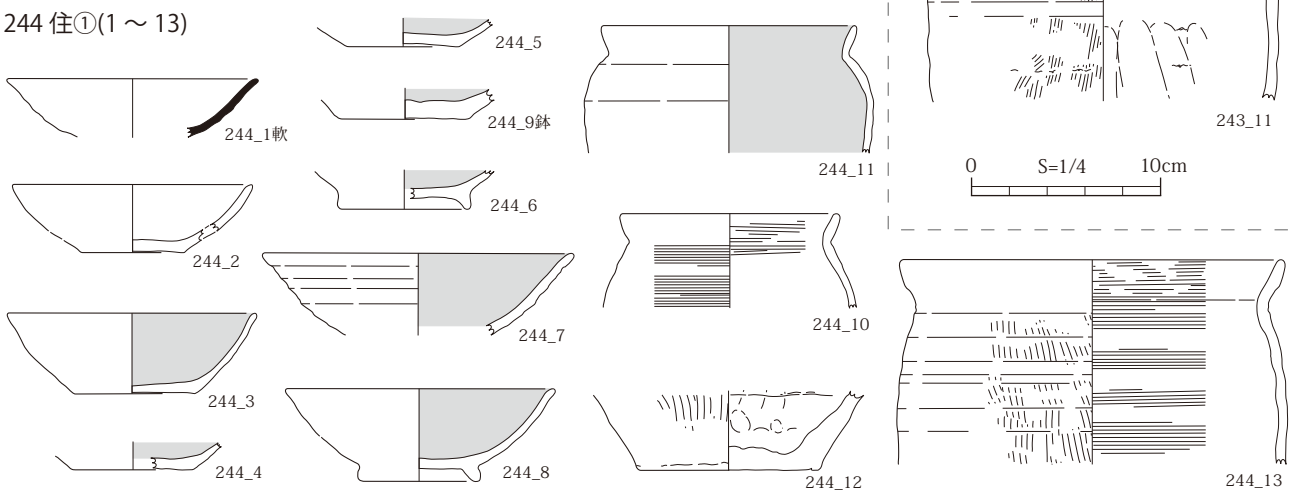
242 住 (1 ~ 4)



243 住 (1 ~ 11)

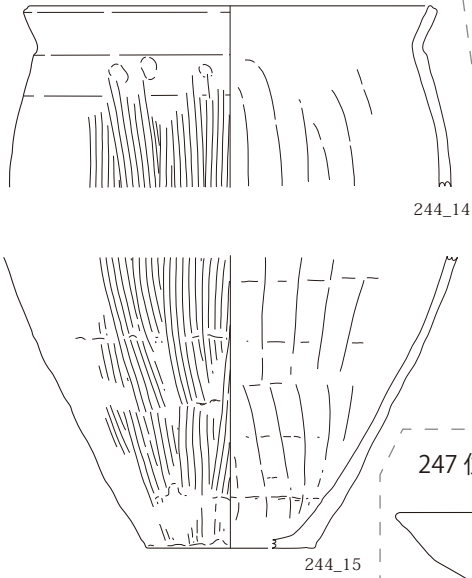


244 住① (1 ~ 13)

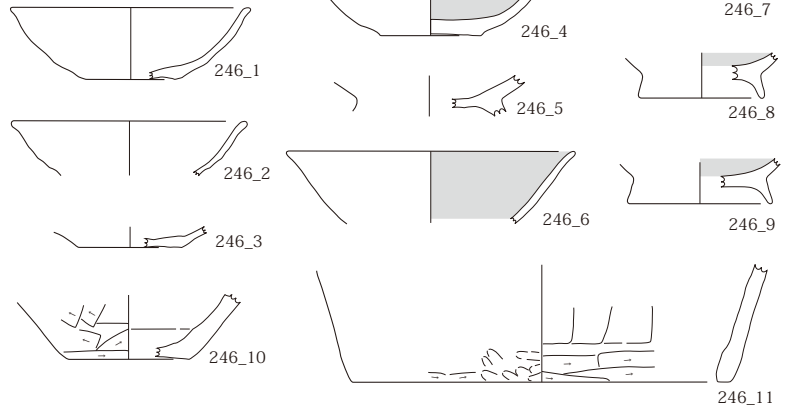


第 158 図 出土土器類実測図 (70)

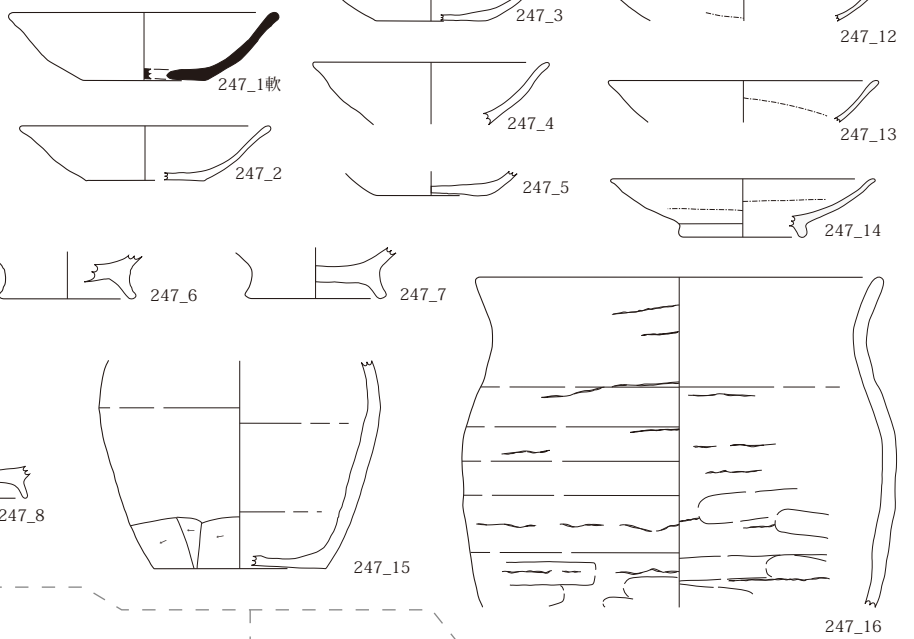
244 住②(14・15)



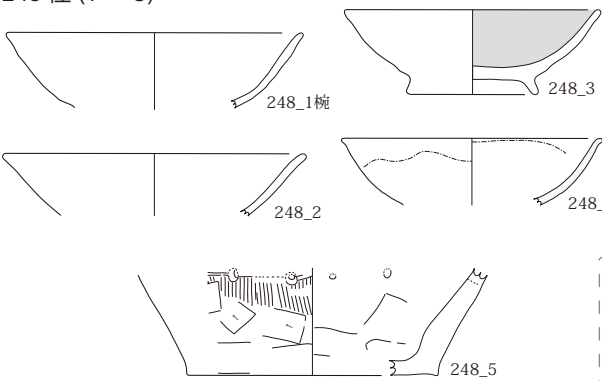
246 住(1~11)



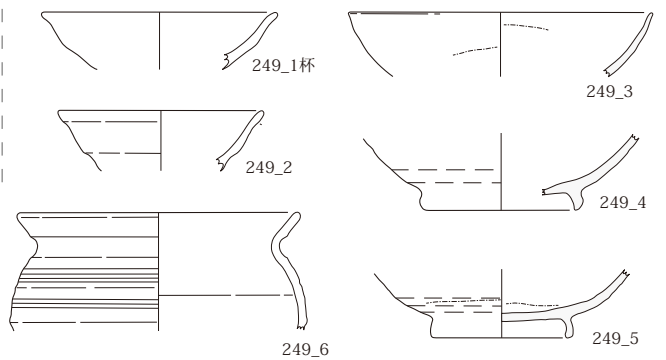
247 住(1~16)



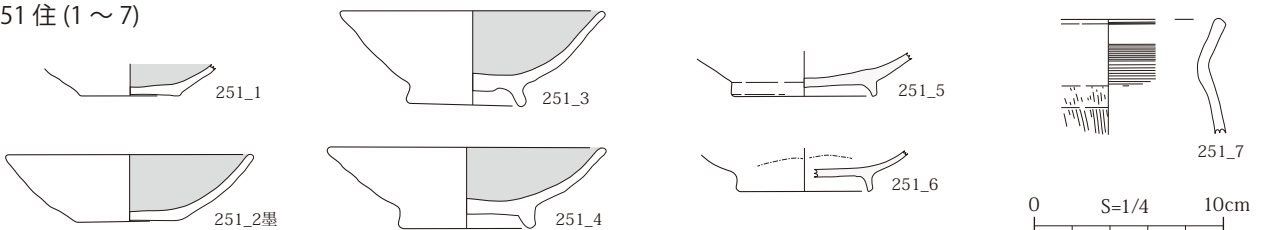
248 住(1~5)



249 住(1~6)



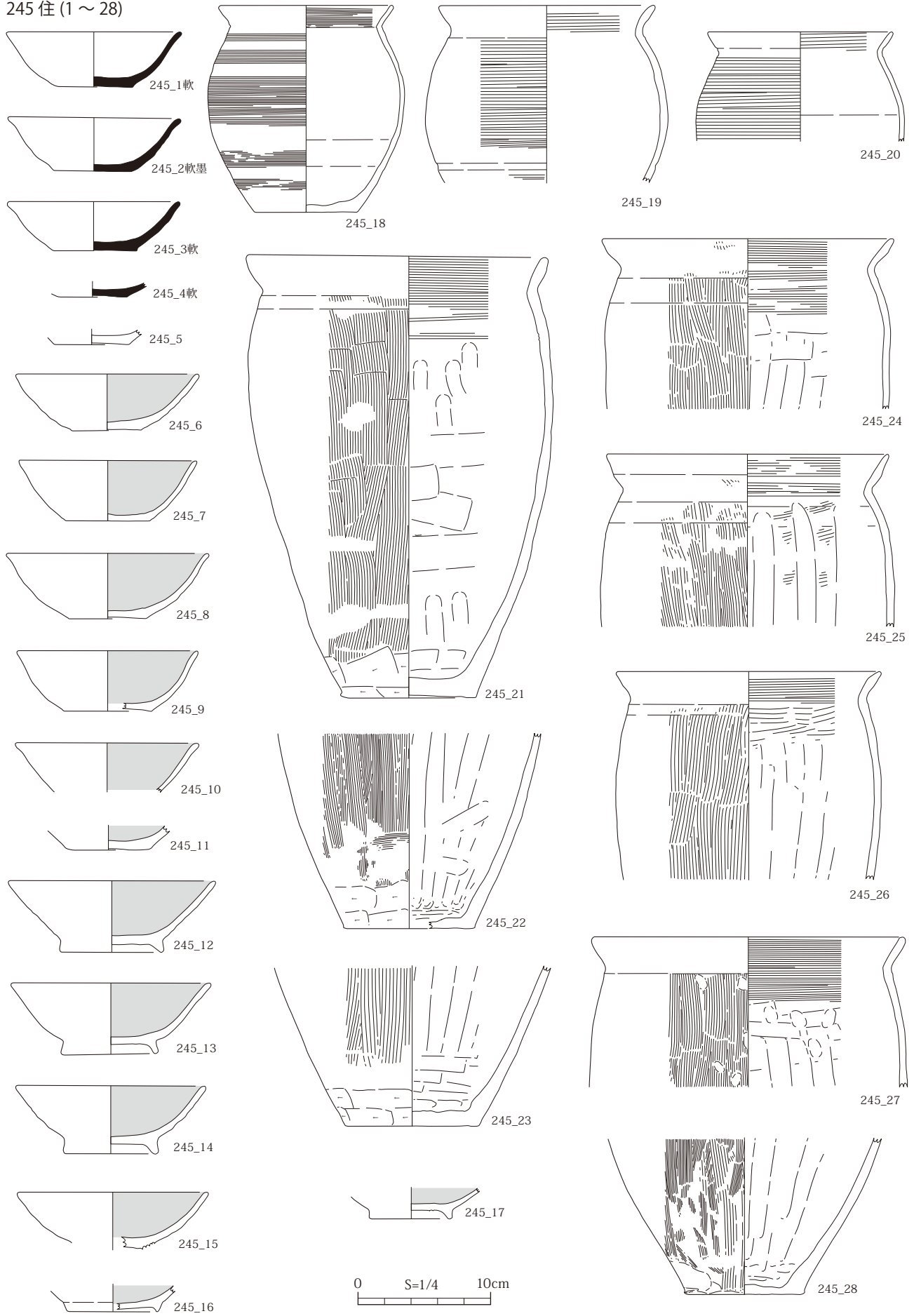
251 住(1~7)



0 S=1/4 10cm

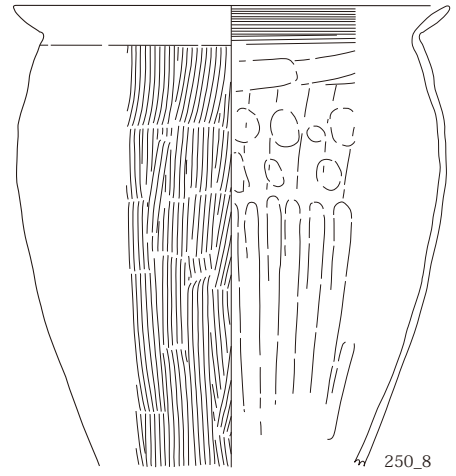
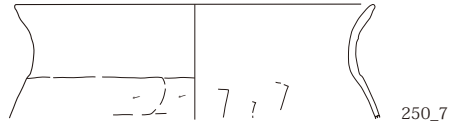
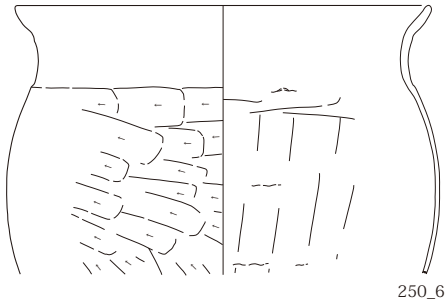
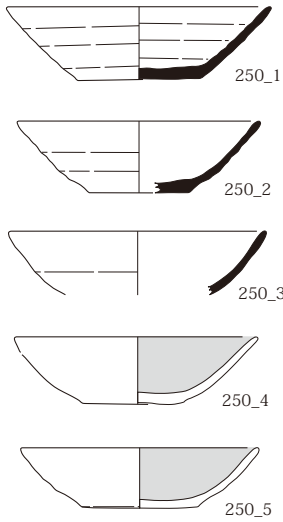
第 159 図 出土土器類実測図 (71)

245 住 (1 ~ 28)

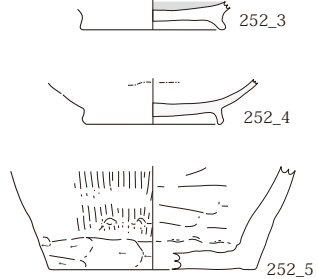
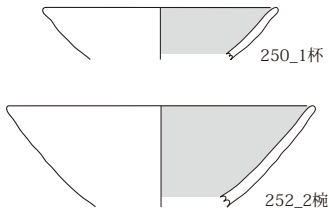


第 160 图 出土土器類実測图 (72)

250 住 (1 ~ 9)



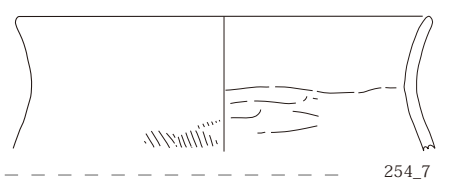
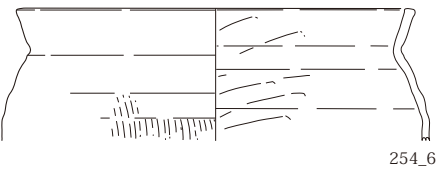
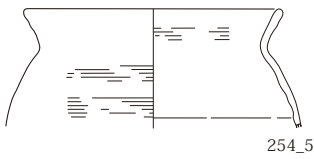
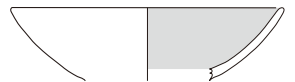
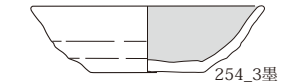
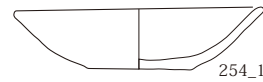
252 住 (1 ~ 5)



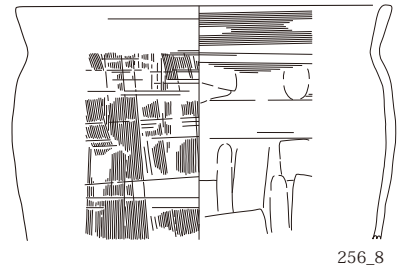
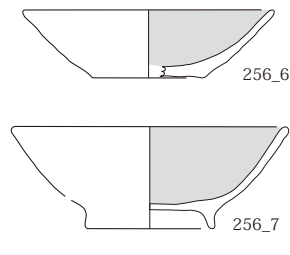
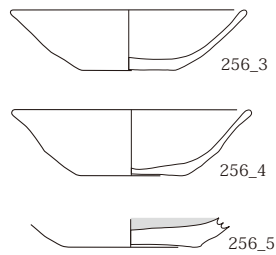
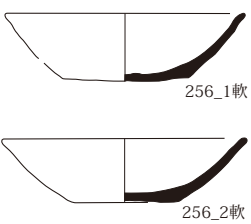
253 住 (1 ~ 3)



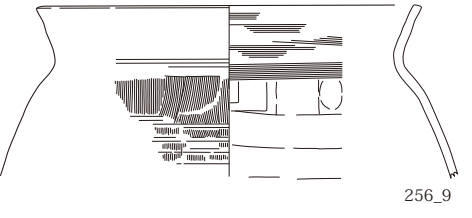
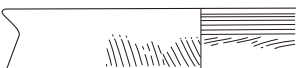
254 住 (1 ~ 7)



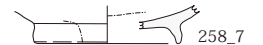
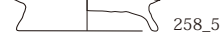
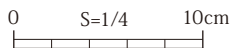
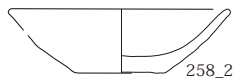
256 住 (1 ~ 9)



259 住 (1 ~ 5)

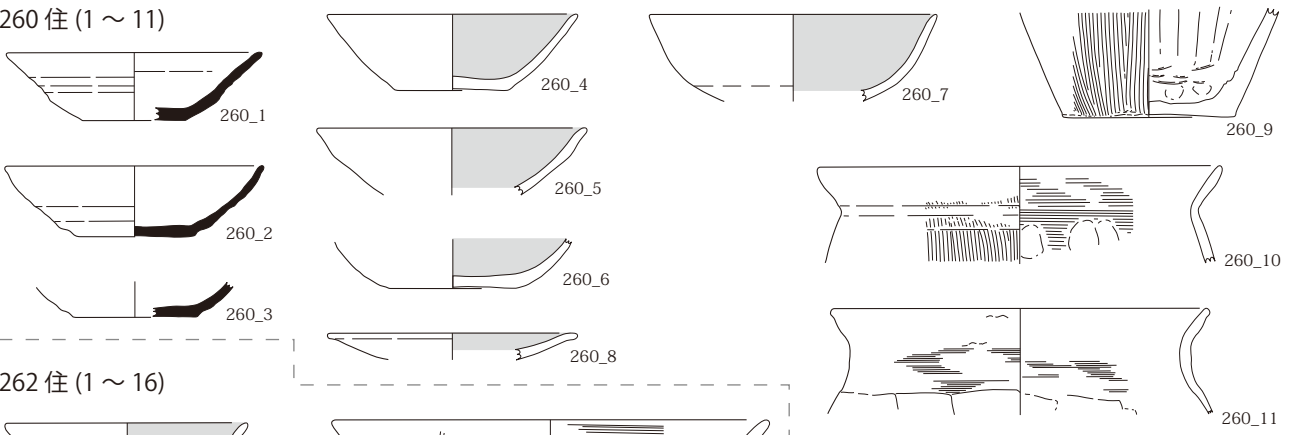


258 住 (1 ~ 7)

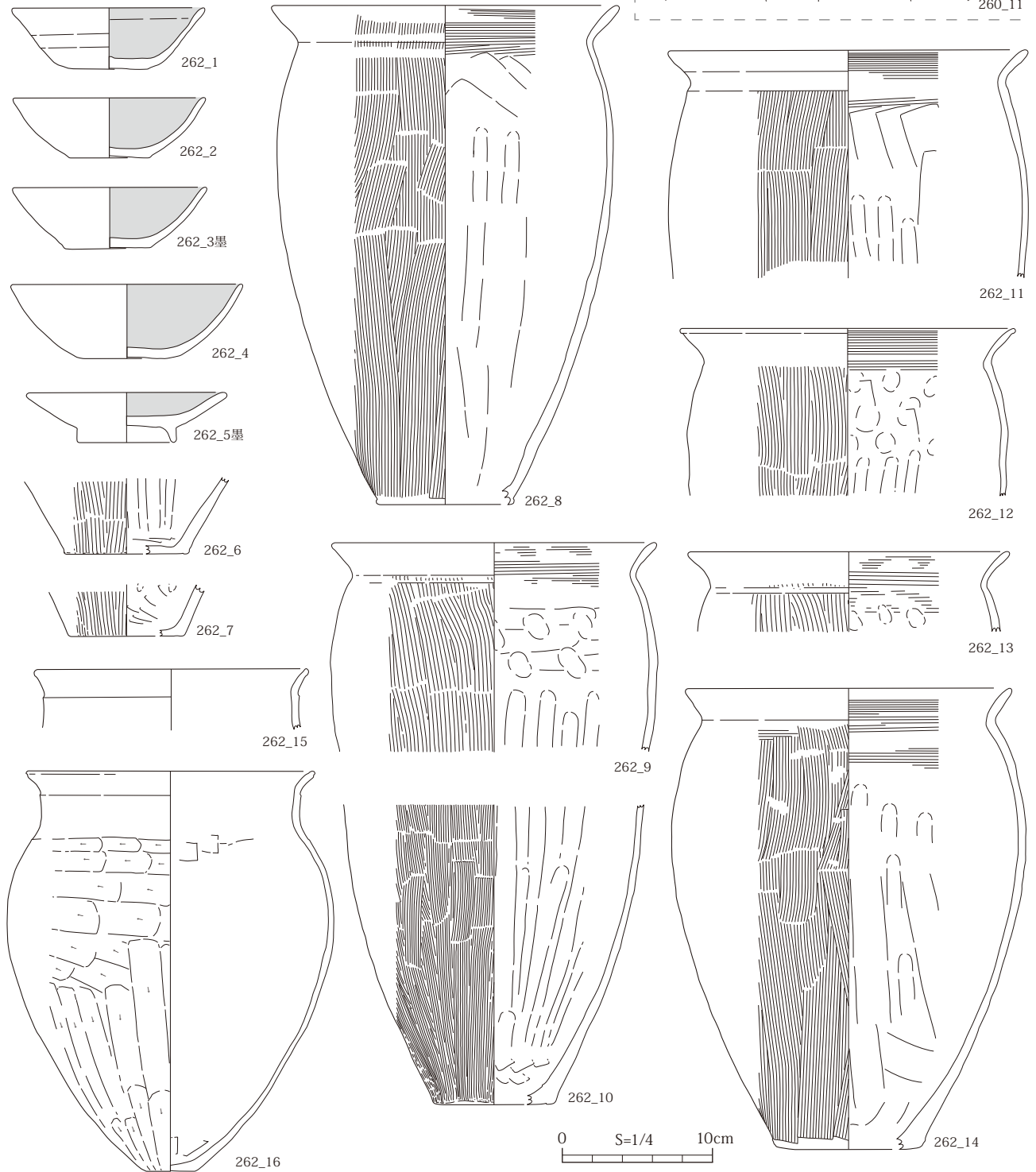


第 161 図 出土土器類実測図 (73)

260 住 (1 ~ 11)

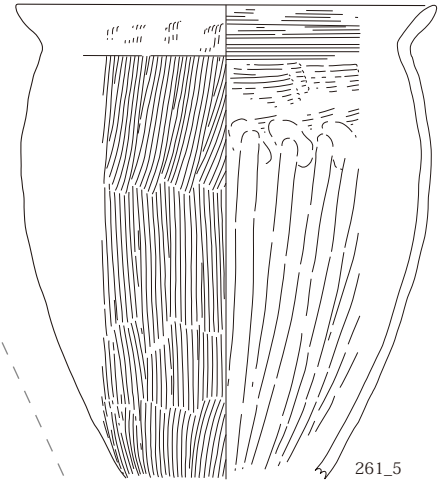
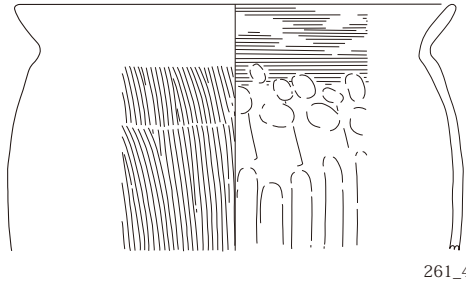
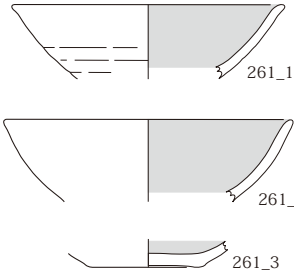


262 住 (1 ~ 16)

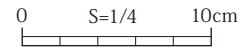
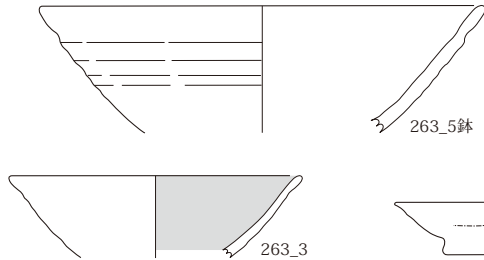
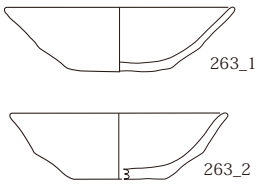


第 162 図 出土土器類実測図 (74)

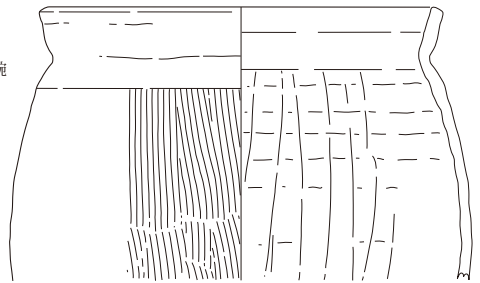
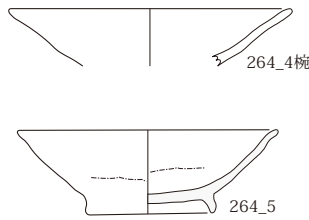
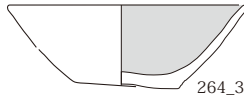
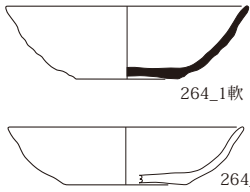
261 住 (1 ~ 5)



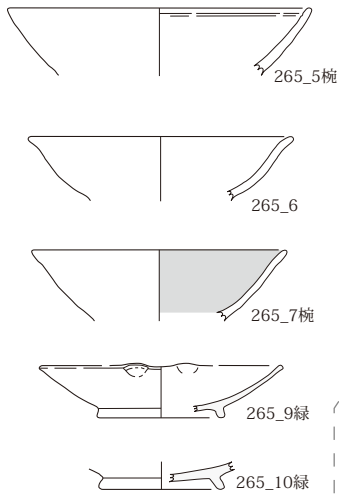
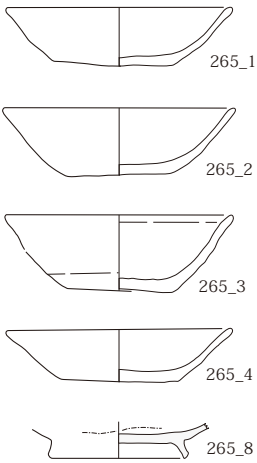
263 住 (1 ~ 5)



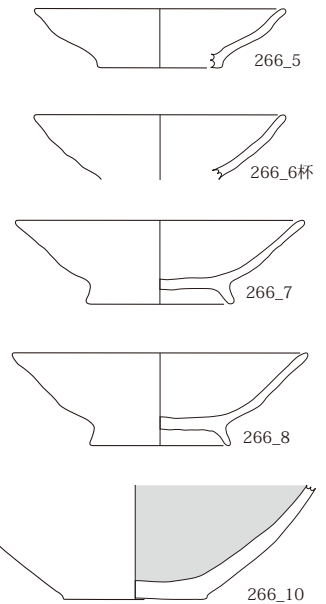
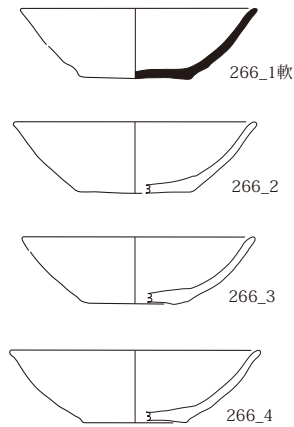
264 住 (1 ~ 6)



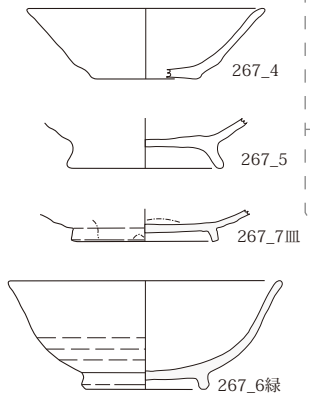
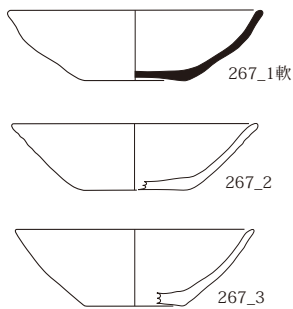
265 住 (1 ~ 10)



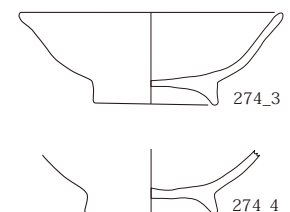
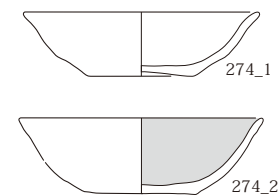
266 住 (1 ~ 10)



267 住 (1 ~ 7)

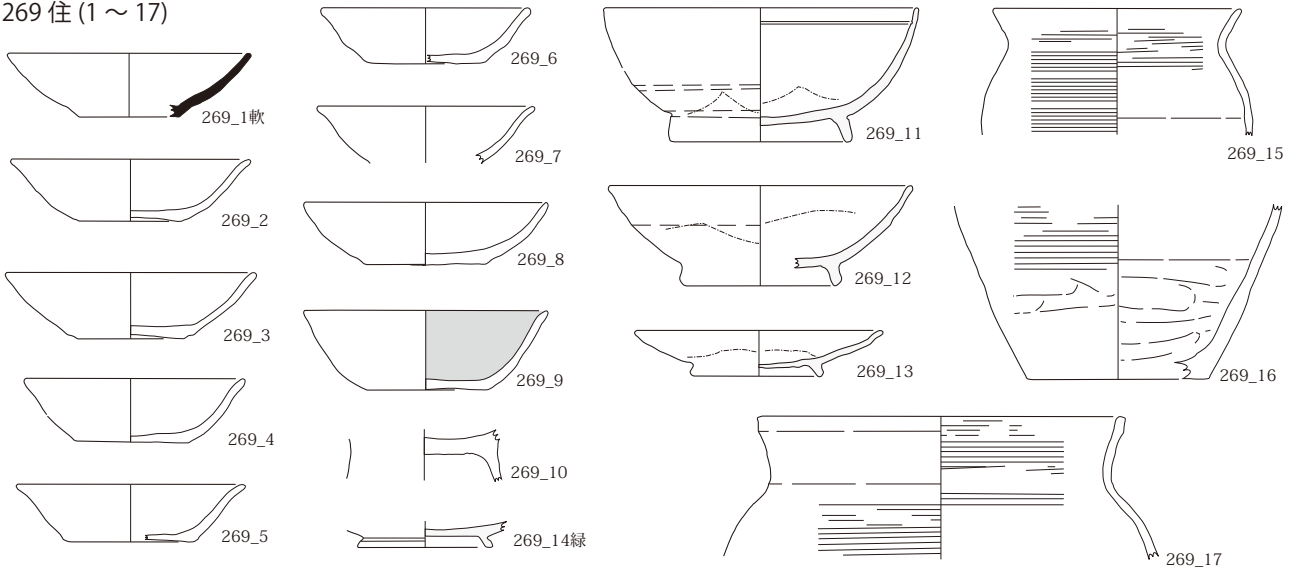


274 住 (1 ~ 4)

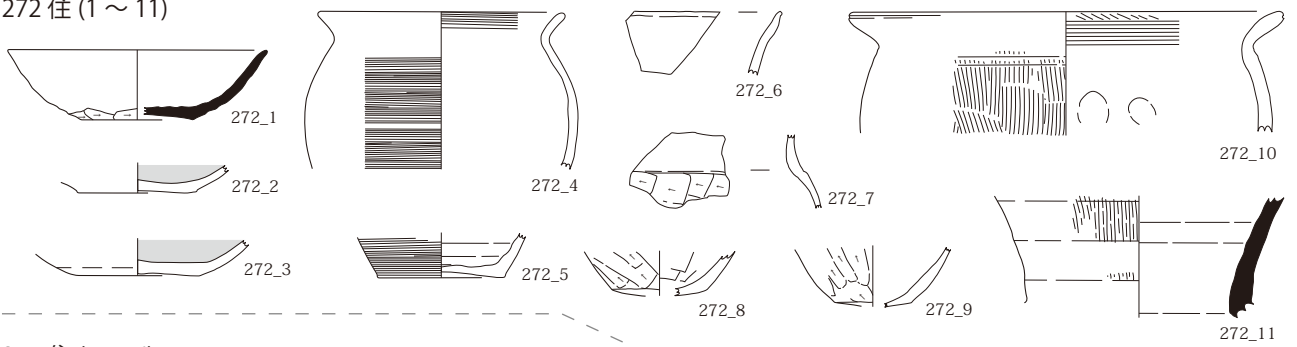


第 163 図 出土土器類実測図 (75)

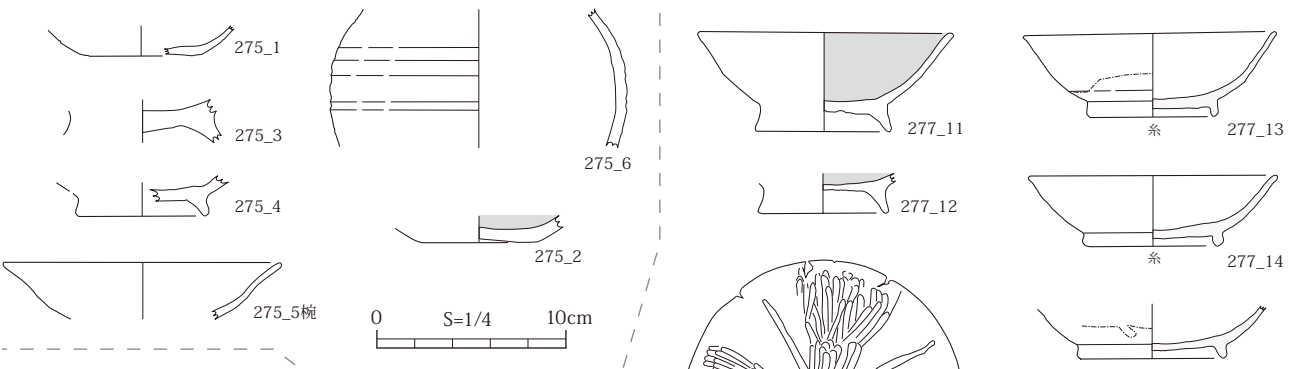
269 住 (1 ~ 17)



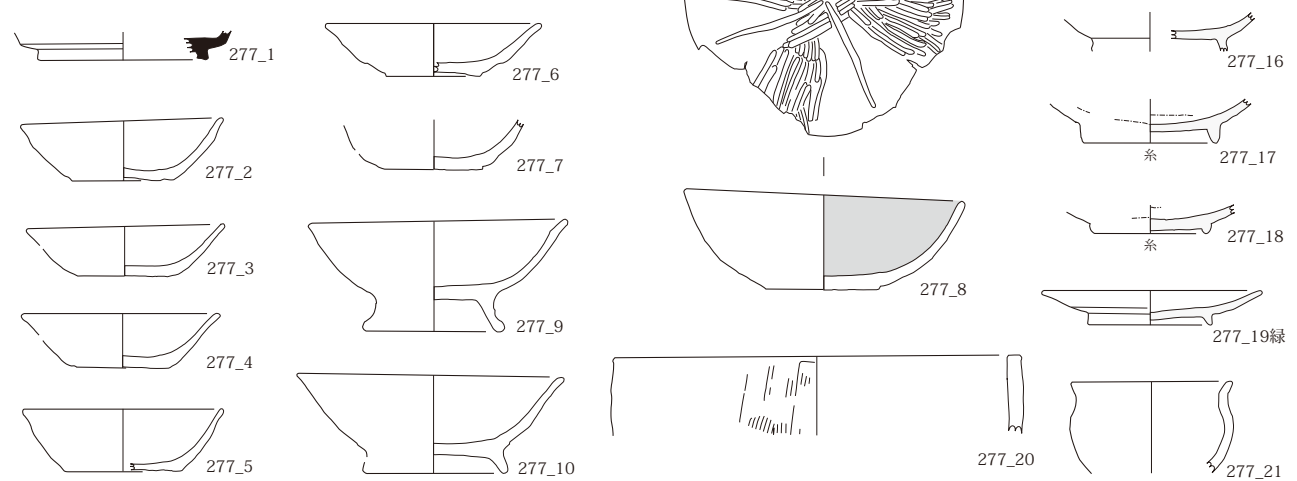
272 住 (1 ~ 11)



275 住 (1 ~ 6)

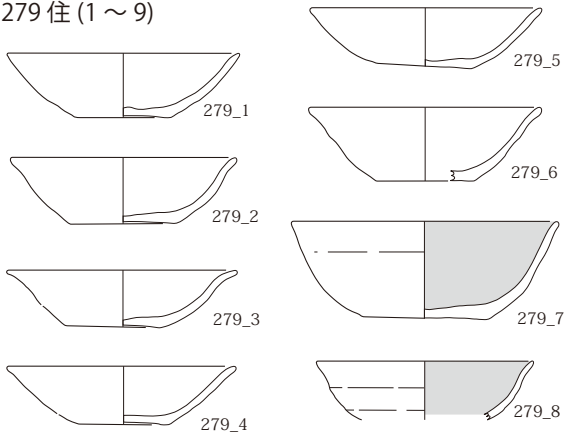


277 住 (1 ~ 21)

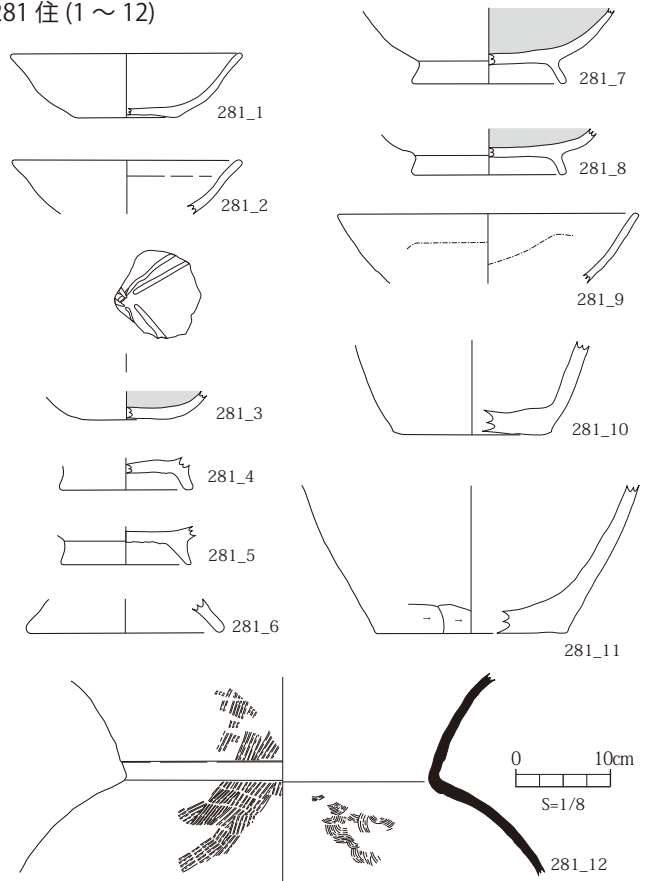


第 164 図 出土土器類実測図 (76)

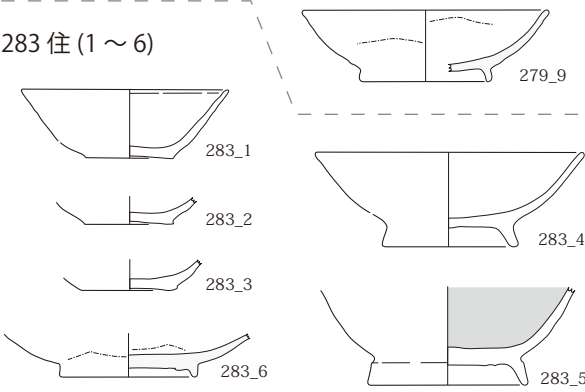
279住(1~9)



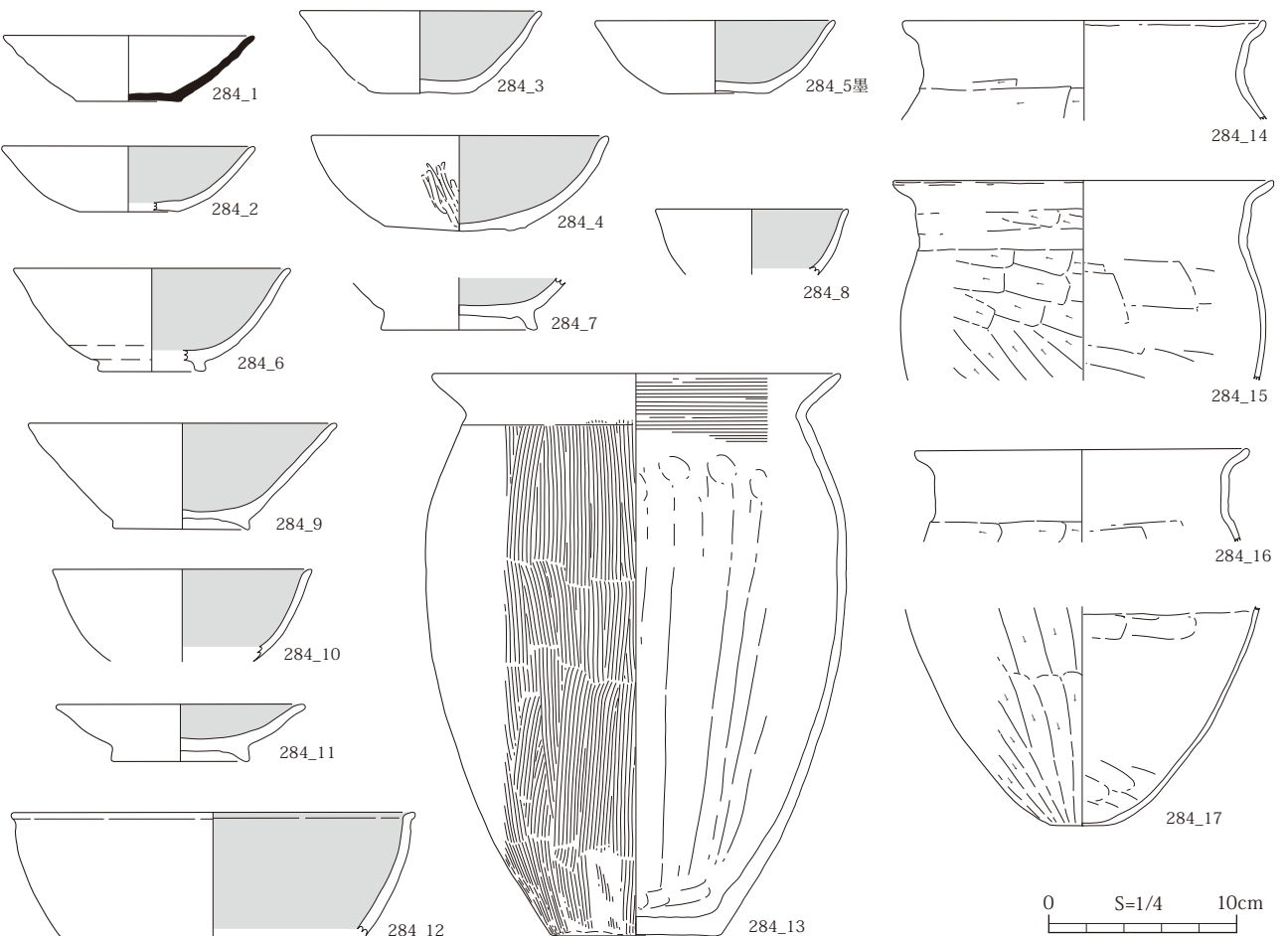
281住(1~12)



283住(1~6)

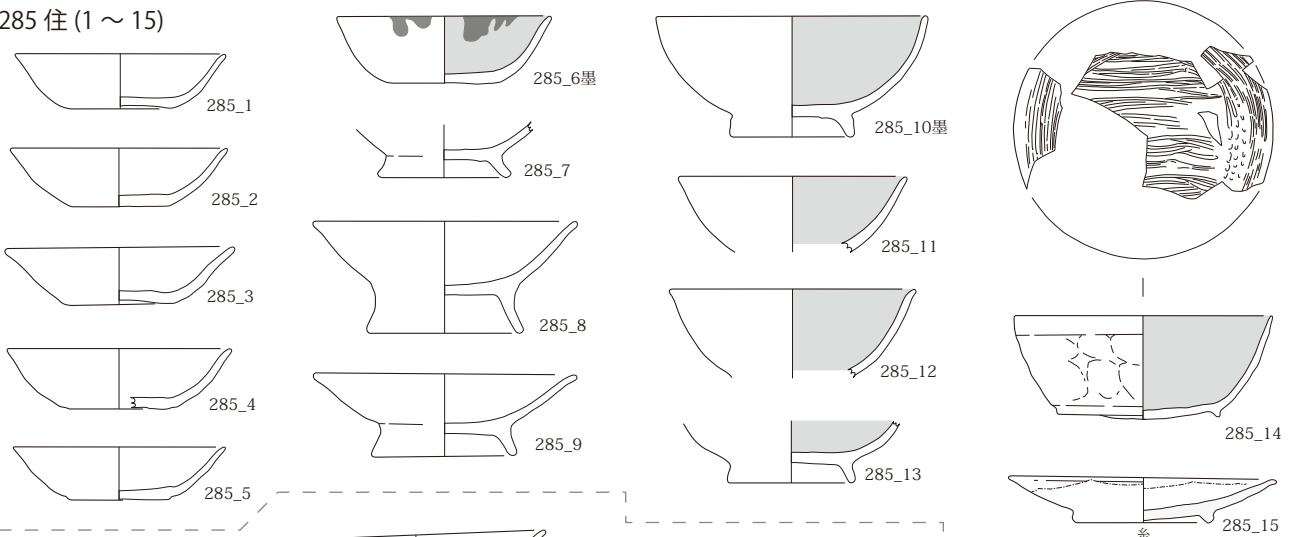


284住(1~17)

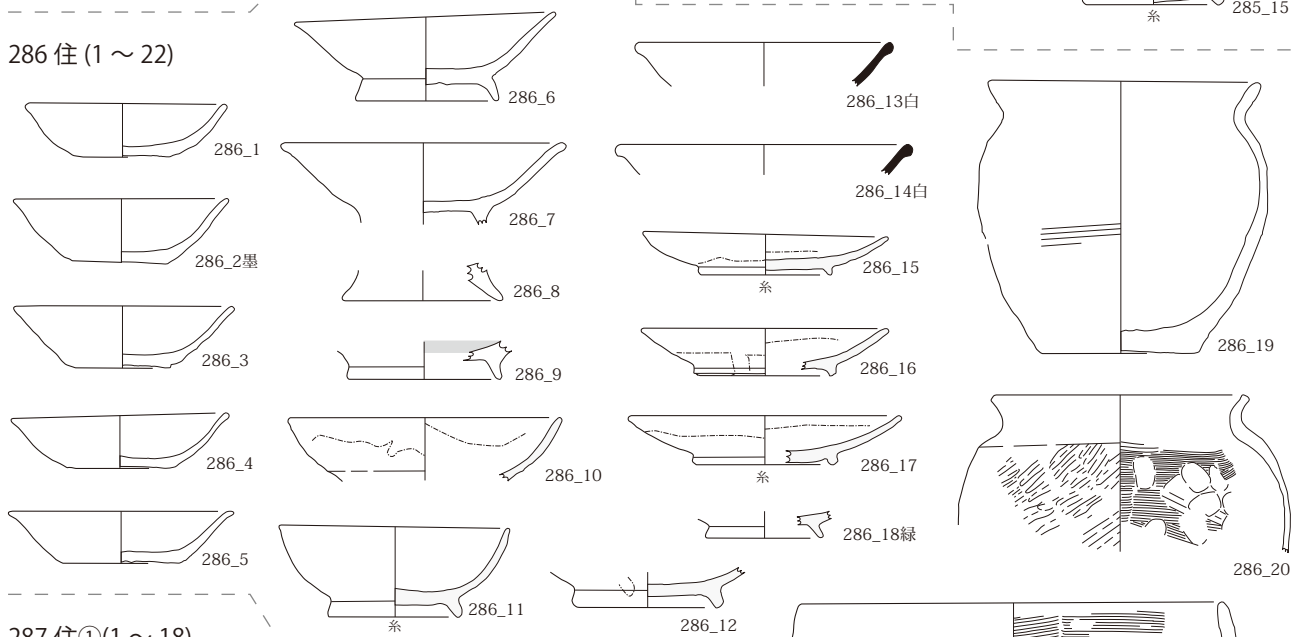


第165図 出土土器類実測図(77)

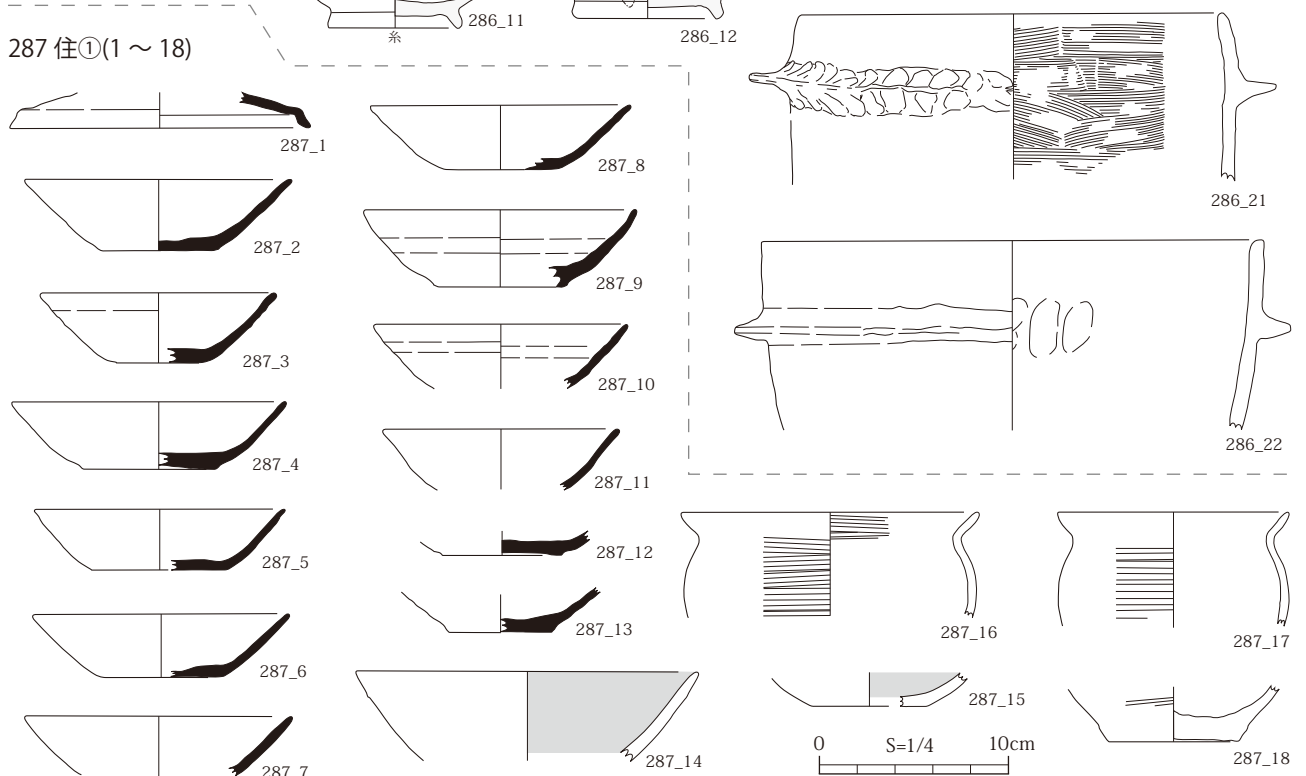
285 住 (1 ~ 15)



286 住 (1 ~ 22)

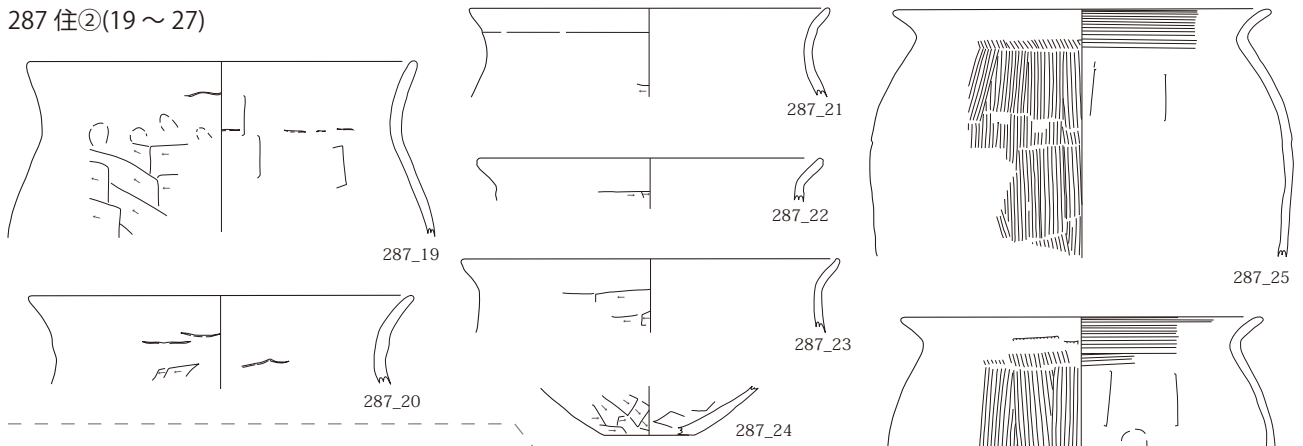


287 住① (1 ~ 18)

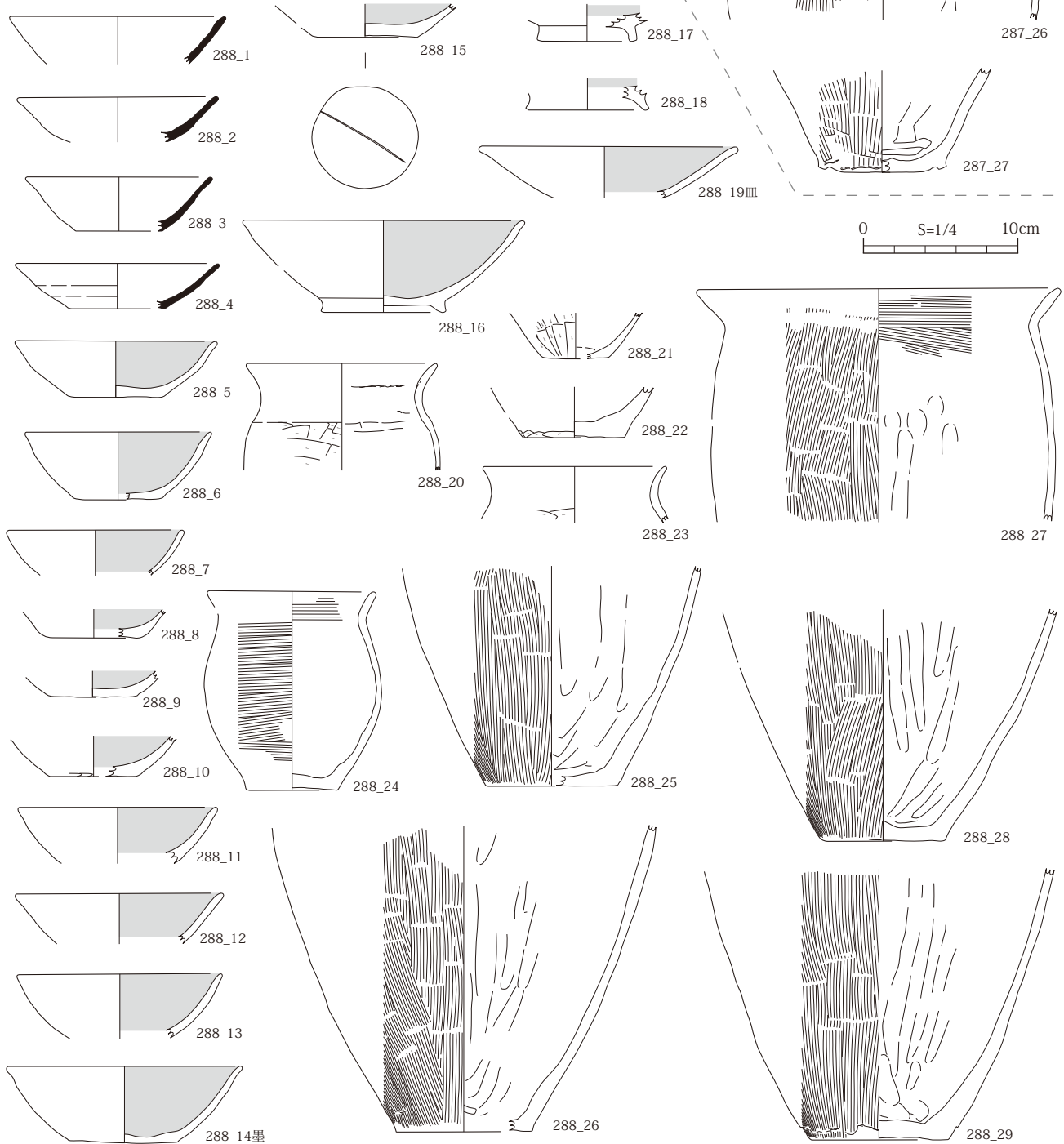


第 166 図 出土土器類実測図 (78)

287 住②(19 ~ 27)

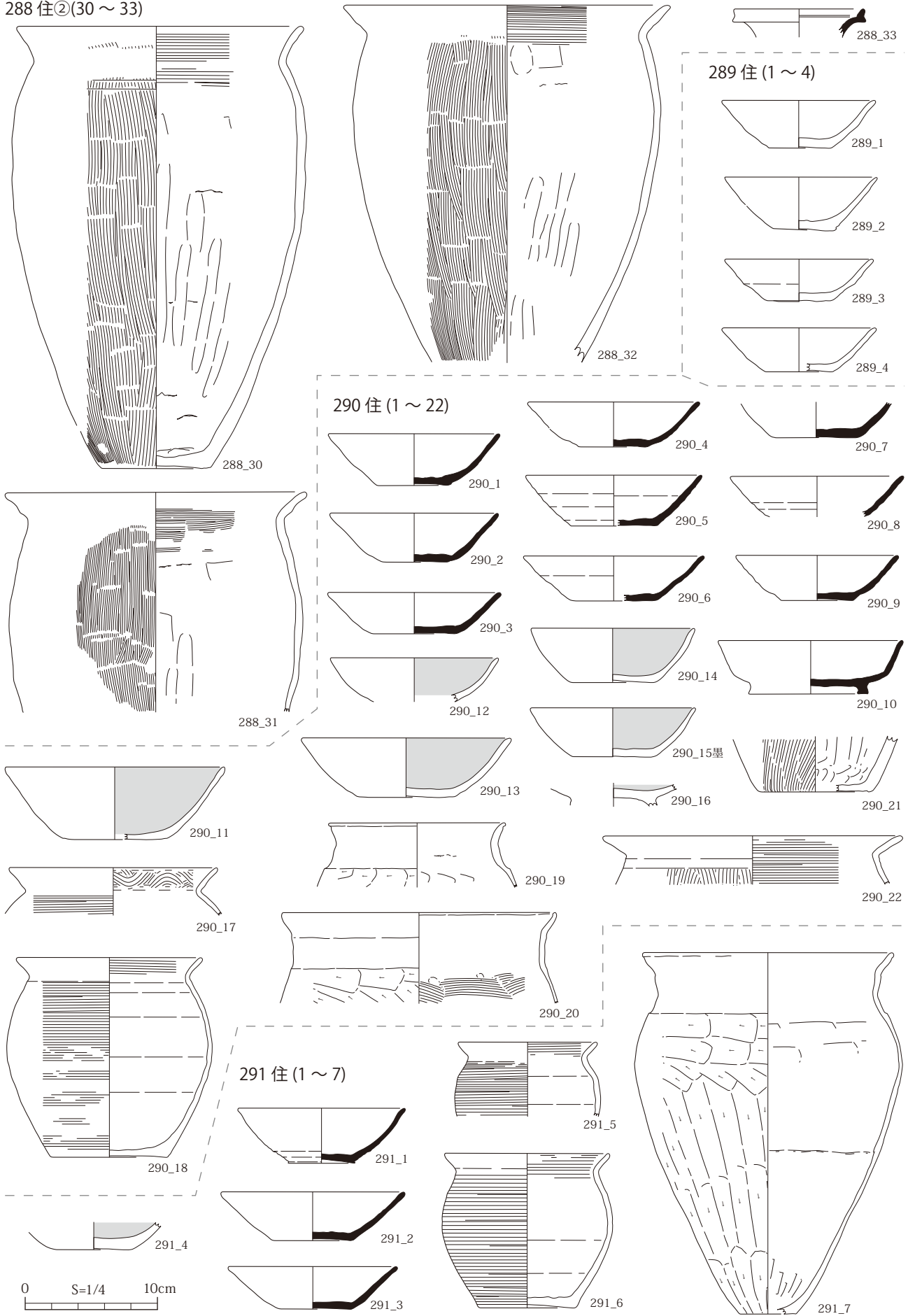


288 住①(1 ~ 29)



第 167 図 出土土器類実測図 (79)

288 住②(30 ~ 33)



第 168 図 出土土器類実測図 (80)

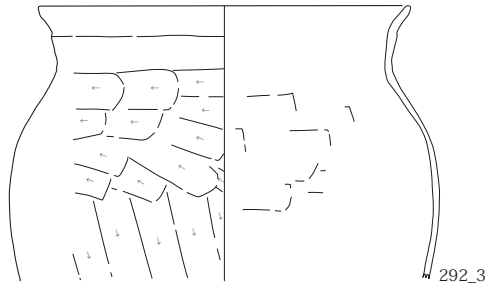
292 住 (1 ~ 5)



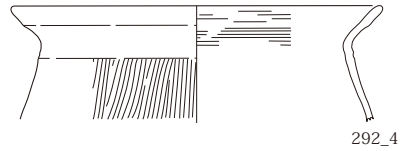
292_1



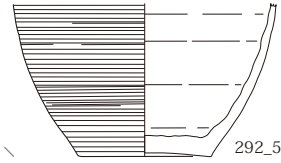
292_2



292_3

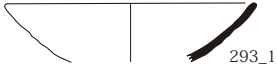


292_4



292_5

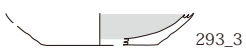
293 住 (1 ~ 10)



293_1



293_2



293_3



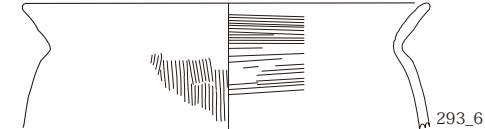
293_4



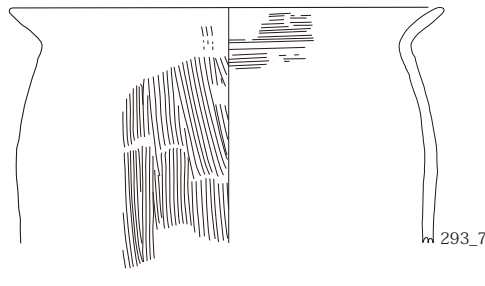
293_10



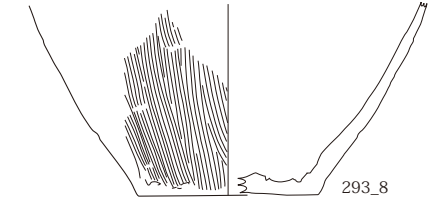
293_5



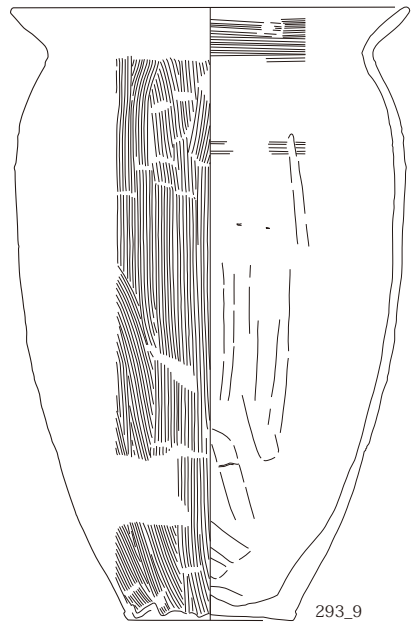
293_6



293_7

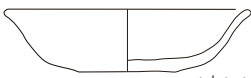


293_8

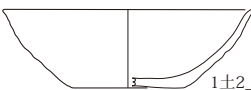


293_9

1 次土 1 (1)



1±1_1

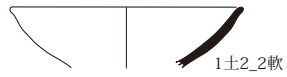


1±2_3

1 次土 2 (1 ~ 6)



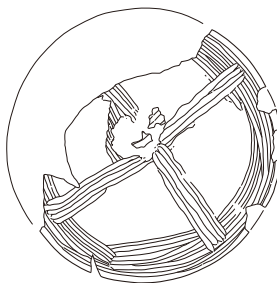
1±2_1軟



1±2_2軟

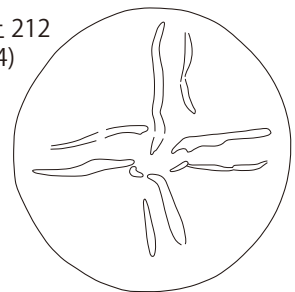


1±2_4

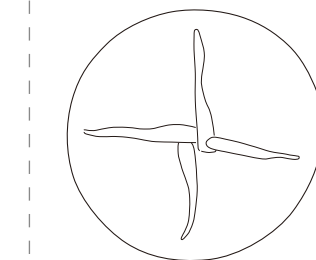


1±2_5

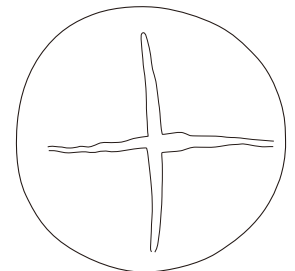
2 次土 212 (1 ~ 4)



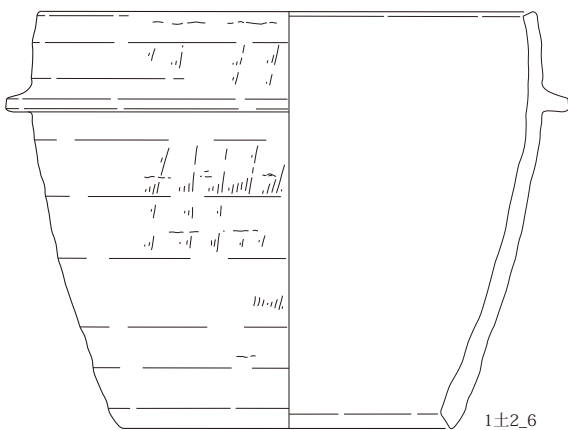
2±212_1



2±212_2墨

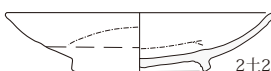


2±212_3墨

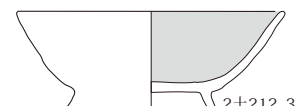


1±2_6

0 S=1/4 10cm

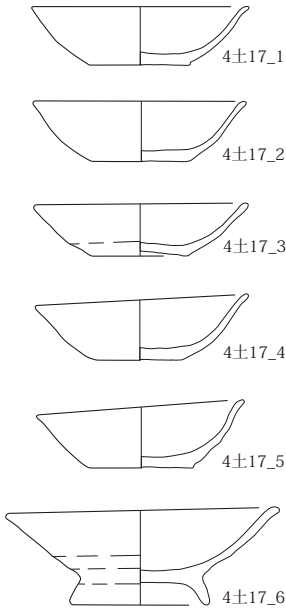


2±212_4墨

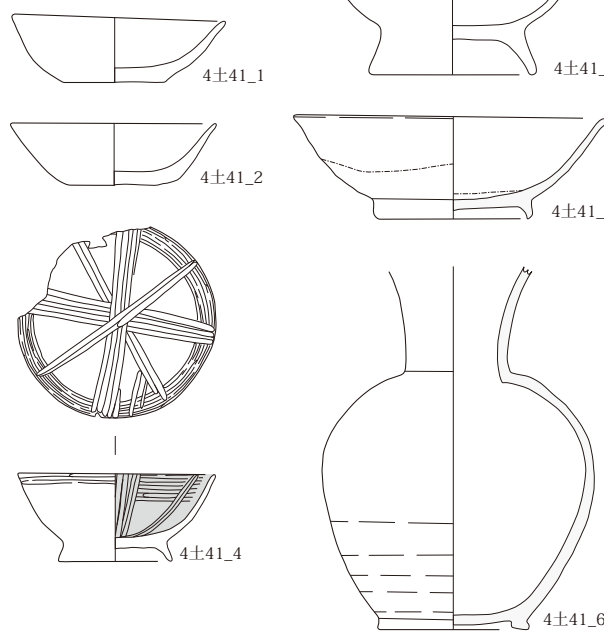


第 169 図 出土土器類実測図 (81)

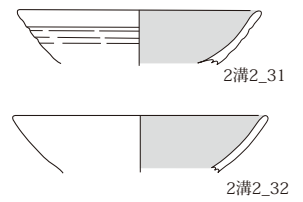
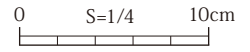
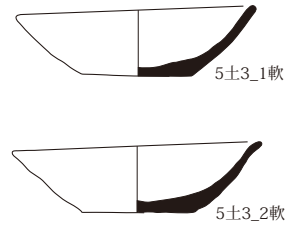
4次土 17(1~6)



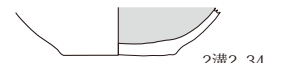
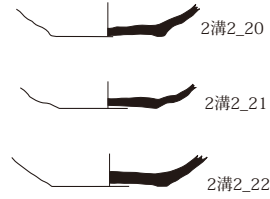
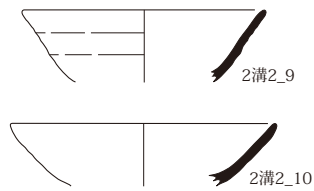
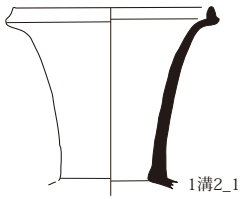
4次土 41(1~6)



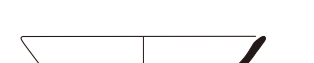
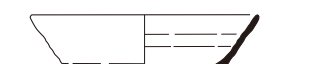
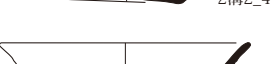
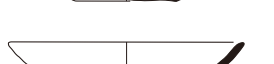
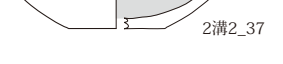
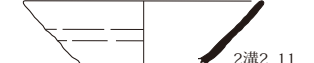
5次土 3(1・2)



1次溝 2(1)

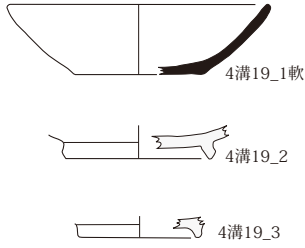


2次溝 2①(1~42)

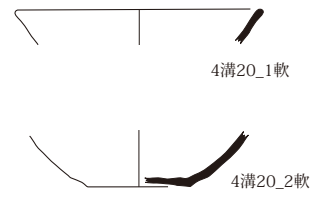


第170図 出土土器類実測図(82)

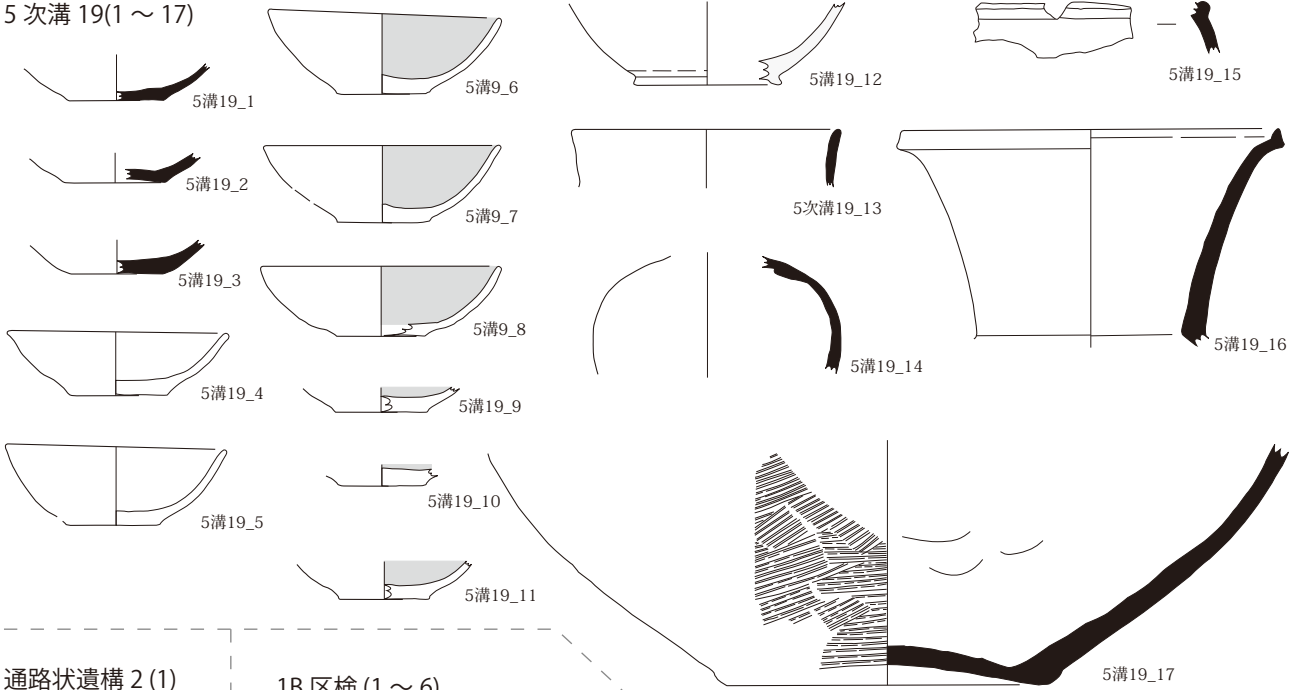
4次溝 19(1~4)



4次溝 20(1・2)



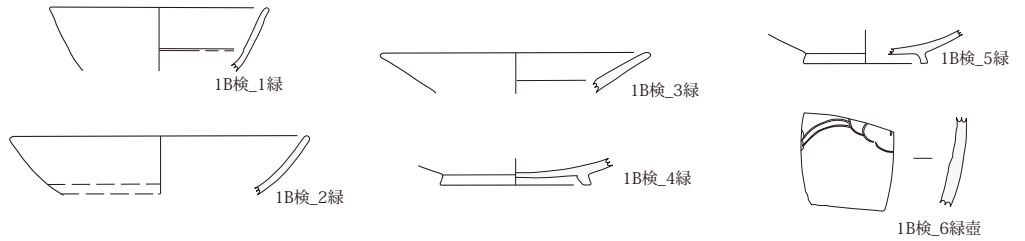
5次溝 19(1~17)



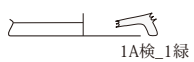
通路状遺構 2(1)



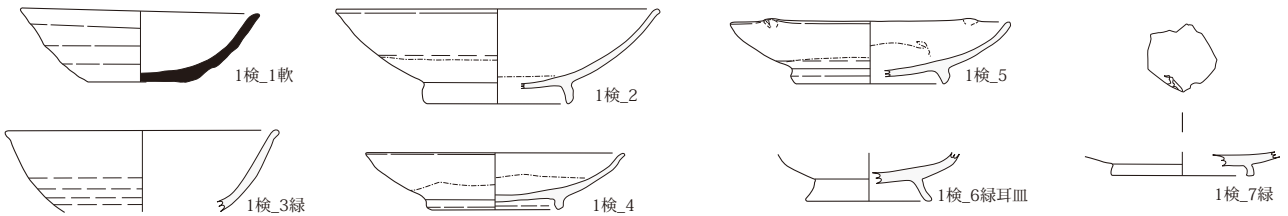
1B区検(1~6)



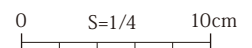
1A区検(1)



1次検(1~7)



4次検(1)



第 172 図 出土土器類実測図 (84)

2 石器・石製品 (第 173～177 図、第 10・11 表)

第 1・2・4・5 次調査で出土した定型的な石器・石製品は総数 297 点 (1 次 69 点、2 次 172 点、4 次 33 点、5 次 18 点、不明 5 点) である。その内訳は、石製帯飾り 2 点、浮子 8 点、火打ち石 6 点、磨石類 65 点、砥石 78 点、石鏃 19 点、小形刃器 9 点、楔形石器 2 点、打製石斧 21 点、磨製石斧 3 点、部分磨製石斧 2 点、磨製石鏃 1 点、大形刃器 7 点、石皿 1 点、尖頭器 1 点、石剣 / 石刀 1 点、石核 8 点、二次加工ある剥片 (RF) 9 点、微細剥離ある剥片 (MF) 6 点、剥片 28 点、原石 15 点、硯 1 点、不明 1 点がある。このうち古代に帰属する可能性のあるものを中心に 34 点と柱状片刃石斧 1 点、硯 1 点を図化し、概要を述べる。また、19 棟の住居址から合計 181 点の編物用石錘が出土している。住居址毎に集計し、概要を記す。それら以外のものは一覧表 (第 10 表) を参照されたい。

実測中における研磨・摩耗面はスクリーントーンと断面に矢印を付し表現した。新欠は白抜きとした。

石製帯飾り (1・2) 1・2 は、大理石製の巡方で、2 個一対の内部で連結する孔が裏面の四隅に配置されている。連結した孔内には帯に固定するための銅製の針金が残存しているものがある。

浮子 (3) 浮子は合計 6 点出土し、そのうち整形加工されているものが 1 点出土し、図示した。3 は、平面形が楕円形で上部に両面からの穿孔がみられ、その直径は最大 0.61cm を測る。

火打ち石 (4～7) 6 点出土した内の、使用痕が明瞭に観察できる 4 点を図示した。いずれもチャート製である。4 と 5 は、それぞれ 2 縁辺と 3 縁辺に比較的大きい剥離のツブレが観察できる。6 は、2 縁辺にツブレが顕著にみられる。重量が 86.0g と比較的重く、使用当初の形態を留めている可能性がある。7 は、6 とは逆に重量が 19.1g、最大長 2.7cm と比較的小さいことと、打点の残る面を 3 面有することから、新しい稜線を確保するための再加工が行われていると推定される。また、使用によるツブレも 4 縁辺にみられるため、使用頻度が高かったと考えられる。

磨石類 (8～15) 自然礫を素材にし、凹部、敲部、研磨・摩耗痕が観察されるものを一括して扱った。凹みの形状等から、縄紋時代に帰属すると考えられるものも含まれる。合計 64 点出土した内の、使用痕が明確に確認できる 8 点を図示した。8 は、表・裏面に磨面と、表面と 2 側面に敲打が観察される。

側面の敲打は平面形が分銅形に変化するほど顕著であるため、使用痕というよりは整形等に関わる痕跡の可能性もある。9・11・13 は、平面形が棒状または長楕円形で、磨面と端部の敲打痕がみられる。11 は、片側面にも 8 と同様の顕著な敲打痕がある。12 は、扁平で平面形円形を呈し、磨面が表面に、敲打痕が上部にある。10・14・15 は、敲打痕はなく、単数または複数の磨面のみが観察される。

砥石 (16～32) 自然礫を素材にしたものと、柱状に整形加工したものの 2 種類がある。合計 70 点出土し、前者は 41 点、後者は 29 点ある。前者は砂岩製等の質の粗い石材が多いが、後者は凝灰岩や頁岩等の細かい石材が多い。後者は一部磨石と似ている個体もあるが、金属器の研磨を想定し、柱状 / 棒状または板状で表面に平坦もしくは内湾した面を有するものを砥石として扱った。16・17・22・23・31 は、整形加工により柱状または扁平な長方形を呈している。自然礫素材の砥石と比較すると、小形のものが多く、31 を除き、石質から荒砥に分類される。31 は、凝灰岩製で、中砥～荒砥と考えられ、そのサイズから手持ち砥石と推定できる。表面には、使用によると思われる断面 V 字の溝状研磨痕が多数みられる。全体的に赤色化し、はじけた様な剥離も観察できることから、被熱していることがわかる。18～21・24～30・32 は、自然礫を素材に 2 面以上の砥面をもつ。石質はいずれも粗粒の砂岩で、大形のものも多く、荒砥の置き砥石と考えられる。32 は、横断面形が六角形を呈し、砥面も 6 面を有す。また、すべての砥面ではないが、溝状研磨痕も確認できる。

磨製石斧 (33) 184 住で出土した弥生時代中期の緑色凝灰岩製の柱状片刃石斧である。発掘調査によって出土した柱状片刃石斧は、市内では唯一のものであり、図示することとした。どういった経路で古代の住居に搬入されたのか不明である。刃部の断面は弱凸強凸で、平面形は緩い斜刃である。使用痕として刃縁に微細な剥離が確認できる。胴部から基部にかけて、部分的に敲打による整形が行われている。頭部には、自然面が残る部分もある。

市内で見つかった柱状片刃石斧は、他に中山地区の棚峯出土とされるものが 1 点ある (文献 38)。

硯 (34) 遺存状態が極めて悪く、側面の一部と海部の一部のみがわずかに確認できる。石質は粘板岩製である。出土地点は 151 住であるが、中世以降の遺物であるため、何らかの理由で後世に混入した

ものであろう。

紡錘車 (35・36) 35は、断面形が柳葉形に近い薄台形を呈す。裏面はほとんど整形加工が施されておらず、自然面に近い。中央部の孔の横にやや小さな孔が確認できる。両者の孔は断面形から片面穿孔と考えられる。36は、断面形が長方形を呈す。全面研磨による整形加工が認められる。中央部の孔は両面穿孔であり、正面に深さ2.1mmの貫通していない孔も確認できる。

編物用石錘 19棟の住居址から出土している。これらは住居址内から礫がまとまって検出されたため、編物用石錘と認定した。135住と138住、170住からは1点のみの出土であるため、自然礫である可能性が高いと思われる。しかし、他住居址で出土しているものと形状が近似していることや、調査時に遺物と認定されず採集されなかったものが存在する可能性も残ることから、ここでは編物用石錘とし、集計表(第11表)に加えた。石材はほとんど砂岩で占められているが、チャート、硬砂岩、頁岩等もわずかではあるが出土している。石錘はすべて自然礫をそのまま素材にしており、紐掛けのために整形した痕跡はみられなかった。15点以上出

土している住居址は6棟を数える。そのうち227住では、出土点数が41点と突出して多い。各住居址から出土した石錘の出土点数と完形品のサイズと重量は第11表を参照されたい。

注記	図No.	種類	地区	出土地点1	出土地点2	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	破損状況	備考
3		浮子	1	2住	カマド	軽石	6.3	5.8	4.5	42.6	完形	2個体に割れる
4		石鏝	1	2・4住		黒曜石	(2.3)	(1.4)	(0.5)		1/3以下欠	有茎凹基、先端部と基部欠損
5		砥石	1	9住	南部	泥岩	(5.3)	(1.9)	(1.3)	(20.7)	1/2欠	平面形棒状、砥面2面、持ち石
7		RF	1	10住	検出面	緑色凝灰岩	5.7	4.0	0.7	(15.8)	表面剥離	二次加工1縁辺
8	16	砥石	1	10住	東部	砂岩	(8.5)	(7.9)	(2.0)	(260.0)	1/2欠	平面形方、砥面4面、線条研磨痕有、粒度粗
9		小形刃器	1	10住	東部	チャート	8.4	4.9	1.8	61.4	完形	サイドスクレーパー
10		磨石類	1	13住	南部	砂岩	3.9	3.3	3.1	53.5	完形	平面形円形、弱い磨面1面
11		原石	1	16住		石英	4.6	3.7	2.7	47.3	完形	
12		砥石	1	16住		凝灰岩	(7.6)	3.7	3.6	(142.5)	1/3以下欠	平面形長方形、砥面4面、線条研磨痕有、粒度中
13		原石	1	16住		石英	5.0	3.8	3.2	69.6	完形	
14		砥石	1	20住	No.1	凝灰岩	16.3	6.7	5.3	81.4	完形	平面形長方形、砥面4面、線条研磨痕有、粒度細
15		磨石類	1	20住	北部	砂岩	(10.1)	5.8	2.5	(214.0)	1/3以下欠	平面形楕円形、敲部2
16		砥石か	1	20住		凝灰岩	(3.7)	2.5	1.6	(13.8)	1/3以下欠	
17		MF	1	20住	ベルト内	黒曜石	(2.1)	1.8	0.9	(3.3)	1/3以下欠	微細剥離1縁辺
19		小形刃器	1	24住	北部	チャート	3.9	3.1	6.0	9.7	完形	サイドスクレーパー
20		MF	1	24住		黒曜石	(2.3)	(2.3)	0.6	(2.8)	1/3以下欠	微細剥離1縁辺
21		打製石斧	1	34住	No.11	硬砂岩	17.5	6.4	3.4	460	完形	撥形、片側面のみ加工、未成品か
22		磨石類	1	34住	南部	砂岩	11.5	10.0	6.8	876	完形	平面形円形、弱い磨面1面
23		磨石類	1	38住		砂岩	5.7	4.4	3.5	117.4	完形	平面形円形、弱い磨面1面
24		小形刃器	1	38・39住		チャート	5.0	4.3	1.4	33.2	完形	サイドスクレーパー
25		砥石	1	40住	ベルト内	砂岩	(5.0)	(3.9)	(5.7)	(104.8)	2/3以上欠	砥面2面
26		原石	1	43住	北部	石英	2.8	2.0	0.8	4.5	完形	
27		原石	1	43住	北部	石英	8.38	2.5	2.2	18.4	完形	
28		石核	1	43住	南部	黒曜石	4.2	3.9	2.6	41.0	完形	打面3面以上
29		原石	1	43住	北部	石英	6.5	4.8	2.9	69.3	完形	
30		原石	1	43住	北部	石英	3.8	2.9	1.7	23.5	完形	2個体に割れ
31		MF	1	47住		黒曜石	2.8	1.7	0.6	1.9	完形	微細剥離2縁辺
32		磨石類	1	50住	西部	砂岩	9.6	8.6	7.6	794	完形	平面形円形、磨面1面
33	8	磨石類	1	50住	西部	砂岩	21.9	10.8	4.3	1430	完形	平面形楕円形、磨面2、敲部3
34	18	砥石	1	54住	No.4	砂岩	22.5	11.6	9.1	3545	完形	平面形長楕円形、砥面4面、線条研磨痕有、粒度粗
35		磨石類	1	54住		砂岩	(9.3)	4.1	(3.8)	(191.2)	1/2欠	平面形楕円形、敲部上1
36		磨石類	1	54住		砂岩	(19.0)	(6.0)	5.3	(800.0)	1/3以下欠	平面形楕円形、磨面2、敲部1、炭化物付着
37		磨石類	1	55住	カマド周辺	砂岩	(5.4)	3.3	2.9	(100.4)	1/2欠	平面形棒状、敲部1
38		砥石	1	58住	No.5	泥岩	10.9	4.8	4.0	232	完形	平面形長方形、砥面6面、線条研磨痕有、粒度中
39		砥石	1	59住	No.26	泥岩	(10.1)	4.5	1.4	(90.8)	1/3以下欠	平面形長方形、砥面4面、線条研磨痕有、粒度細
40		剥片	1	63住	ベルト内	黒曜石	(1.6)	(1.6)	(0.5)		1/2欠	
41	17	砥石	1	66住	南部	頁岩	(4.4)	(4.3)	(1.5)	(30.7)	1/2欠	平面形方形、砥面4面、線条研磨痕有、粒度細
42		小形刃器	1	検出面		黒曜石	2.4	1.8	0.5	1.7	完形	サイドスクレーパー、石匙折れ後に再加工の可能性
43		石鏝	1	73住	No.1	黒曜石	(2.1)	(2.0)	0.2	(0.7)	1/3以下欠	無茎凹基鏝、片脚部欠損
44		磨石類	1	74住	南部	砂岩	4.0	2.6	1.5	20.0	完形	平面形楕円形、敲部1
45		磨石類	1	76住	南部	砂岩	(5.8)	4.5	1.8	(49.5)	1/3以下欠	平面形楕円形、磨面1
46		剥片	1	77住		チャート	2.6	2.2	0.5	3.1	完形	

第10表 石器・石製品一覧(1/4)

注記	図No.	種類	地区	出土地点 1	出土地点 2	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	破損状況	備考
47		剥片	1	77住	ベルト内	チャート	4.0	1.8	1.2	9.1	完形	
48		砥石か	1	7住	北部	凝灰岩	11.2	0.9	1.6	29.8	完形	砥面1面、粒度中
49		打製石斧	1	81住	No.16	硬砂岩	(16.9)	(7.2)	(3.6)	(610.0)	2/3以上欠	短冊形
50		RF	1	81住		チャート	2.8	2.8	0.8	4.6	完形	二次加工1縁辺
51		尖頭器	1	82住		黒曜石	(8.3)	7.3	1.8	(90.8)	1/3以下欠	先端欠損
52		MF	1	82住		黒曜石	2.9	1.9	1.0	5.4	完形	微細剥離1縁辺
53		剥片	1	84住		チャート	2.4	1.9	0.5	1.9	完形	
54		打製石斧	1	84住		頁岩	14.0	5.7	2.5	236	完形	撥形
55		砥石	1	92住		凝灰岩	5.4	1.5	0.4	4.4	完形	平面形不明、砥面1、線条研磨痕有、粒度中
56		砥石	1	95住	南部	安山岩	8.7	7.0	6.0	430	完形	平面形長方形、砥面5面、線条研磨痕有、粒度粗
57		砥石	1	99住		砂岩	(7.5)	(7.2)	(4.0)	(274.0)	2/3以上欠	平面形不明、砥面1
58		砥石	1	検出面	検出面	砂岩	7.5	4.9	2.5	84.8	完形	平面形不明、砥面1
59		砥石	1	102住	北部	砂岩	(7.9)	4.4	2.8	(124.8)	1/2欠	平面形長楕円形、砥面2面、線条研磨痕有、粒度粗
60		磨石類	1	102住	北部	砂岩	9.1	4.5	3.9	218	完形	平面形棒状、磨面1
61		打製石斧	1	110住	北部	硬砂岩	16.3	5.5	2.7	350	完形	撥形、刃部のみ加工
62		砥石	1	110住	北部	砂岩	17.2	4.2	4.8	588	完形	平面形長方形、砥面2面
63		原石	1	110住	南部	黒曜石	1.9	1.2	1.6	3.0	完形	
64		剥片	1	110住	南部	黒曜石	2.5	2.2	0.6	3.1	完形	
65		砥石	1	118住	北部	凝灰岩	(8.8)	4.1	2.0	(110.4)	1/3以下欠	平面形長方形、砥面4面、線条研磨痕有、粒度中
66		剥片	1	118住	南部	黒曜石	2.2	2.0	0.6	2.7	完形	
67		砥石	1	122住		凝灰岩	(11.3)	4.3	4.6	(268.0)	1/2欠	平面形長方形、砥面4面(うち1面に線条痕有)、粒度中
68		砥石	1	125住	北部床面	砂岩	(147.0)	(6.5)	(3.9)	(400.0)	1/2欠	平面形不明、砥面4面、線条研磨痕有、粒度粗
69		小形刃器	1	126住	北端	黒曜石	3.4	3.2	1.6	14.0	完形	挟入石器
70		砥石	1	溝4	西部	砂岩	(9.2)	8.8	7.5	(1022.0)	1/3以下欠	平面形長方形、砥面1面
71		石鏃	1	検出面		黒曜石	1.5	1.4	0.2	0.3	完形	無茎凹基鏃
72		磨石類	1	検出面		安山岩	15.3	13.4	5.8	1526	完形	平面形凹形、凹部1、縄文
73		楔形石器	1	不明		黒曜石	2.3	1.9	0.9	4.5	完形	
74		磨石類	2	132住	床面	砂岩	(6.0)	(9.2)	(1.9)	(96.0)	2/3以上欠	平面形不明、2個体に割れ
75		磨石類	2	134住	南西部	砂岩	(4.9)	(4.6)	(1.2)	(34.7)	2/3以上欠	平面形不明、磨面1
76		剥片	2	134住	南東部	チャート	5.0	4.5	0.9	18.0	完形	
78		磨石類	2	136住		砂岩	(18.2)	(8.7)	(8.3)	(1952.0)	1/2欠	平面形楕円形、磨面1
79		砥石	2	136住		砂岩	(18.2)	(9.1)	(5.2)	(1152.0)	1/2欠	平面形楕円形、砥面1、線条研磨痕有、粒度粗
80	30	砥石	2	136住		砂岩	16.8	11.7	9.0	2102	完形	平面形楕円形、磨面1
81		磨石類	2	136住		安山岩	9.6	7.1	6.2	584	完形	平面形凹形、磨面1
82		石鏃	2	136住	北西部	黒曜石	(2.4)	2.0	0.4	(1.8)	1/3以下欠	五角形鏃、先端部欠損
83		砥石	2	137住		砂岩	(22.8)	(12.8)	(8.0)	(3325.0)	1/2欠	平面形楕円形、砥面3面、粒度粗
84		磨石類	2	137住	No.23	砂岩	(13.4)	10.4	4.9	(1056.0)	1/2欠	平面形楕円形、敲部1
85		浮子	2	137住	No.24	軽石	6.6	5.9	3.6	80.5	完形	
86		磨石類	2	137住		砂岩	8.0	3.4	3.4	161.2	完形	平面形楕円形、磨面1
88		大形刃器	2	138住	南東部	凝灰岩	9.7	6.0	1.2	80.4	完形	横刃石器
89		剥片	2	138住	ベルト内	チャート	3.5	2.4	0.5	5.2	完形	
90		原石	2	140住	南東部	石英	4.4	3.0	1.7	24.4	完形	
91		砥石	2	141住		砂岩	(13.6)	14.4	6.2	(1410.0)	1/2欠	平面形不明、砥面1、粒度粗、置き砥石
92	29	砥石	2	141住		砂岩	19.5	10.6	7.6	1532	完形	平面形楕円形、砥面1面、線条研磨痕有、粒度粗
93		砥石	2	141住	P1 No.14	安山岩	(4.4)	3.8	2.2	(55.8)	1/3以下欠	平面形長方形、砥面4面、粒度中
94		磨石類	2	142住		砂岩	22.9	14.6	12.5	5000	完形	平面形楕円形、磨面1
95	28	砥石	2	143住		砂岩	21.6	6.8	5.4	1082	完形	平面形長楕円形、砥面1面、粒度粗
96		砥石	2	143住	No.26	頁岩	16.5	4.8	3.7	416	完形	平面形長楕円形、砥面1面、粒度粗
97		砥石	2	143住		凝灰岩	7.7	3.4	2.2	66.5	完形	平面形不明、砥面1面、粒度粗
98		磨石類	2	143住	北西部	砂岩	13.3	4.6	2.6	232	完形	平面形長方形、磨面2
100		砥石	2	147住	No.16	砂岩	(17.1)	4.1	5.5	(362.0)	1/3以下欠	平面形棒状、砥面2面、粒度粗
101	14	磨石類	2	147住	No.4	砂岩	21.8	6.2	4.8	882	完形	平面形長楕円形、磨面2
102		石核	2	147住		黒曜石	2.6	2.1	1.7	10.1	完形	打面数2以上
103		剥片	2	147住		黒曜石	1.9	1.4	0.6	1.8	完形	
106		原石	2	147住	北東部	石英	5.3	4.4	2.3	79.0	完形	
107		打製石斧	2	148住	No.24	砂岩	(14.3)	(10.4)	(3.5)	(528.0)	1/2欠	撥形
108		磨石類	2	148住	No.26	砂岩	(10.7)	6.1	3.6	(336.0)	1/2欠	109と接合する。平面形棒状、磨面2
109		磨石類	2	148住	No.27	砂岩	(11.0)	6.0	3.5	(410.0)	2/3以上欠	108と接合する。平面形棒状、磨面2
110		砥石	2	148住	No.28	砂岩	12.8	5.3	5.7	564	完形	平面形棒状、磨面2
111		磨石類	2	148住	No.29	砂岩	(11.2)	7.7	4.1	(474.0)	1/2欠	平面形楕円形、磨面2
112		砥石	2	149住	No.5	凝灰岩	7.7	4.4	2.9	98.5	完形	平面形長方形、砥面2面、線条研磨痕有、粒度中
113		砥石	2	149住	No.6	砂岩	(12.0)	4.5	3.7	(278.0)	1/3以下欠	平面形長楕円形、磨面裏側4、線条研磨痕有、粒度粗
114		磨石類	2	151住	No.6	砂岩	12.8	4.4	3.3	274	完形	平面形棒状、磨面2
115	23	砥石	2	151住	No.8	砂岩	14.5	5.1	4.6	636	完形	平面形長方形、砥面1面、線条研磨痕有、粒度粗
116	34	硯	2	151住	ベルト内	粘板岩	(10.1)	(5.1)	(0.9)	(76.3)	2/3以上欠	
117		石鏃	2	152住	北西部	黒曜石	2.4	1.6	0.3	0.9	完形	無茎凹基
118		剥片	2	154住	南東部	黒曜石	1.9	1.3	0.6	1.3	完形	
120		砥石	2	154住	ベルト内	砂岩	(8.9)	4.4	3.3	(240.0)	1/3以下欠	平面形長方形、砥面4面、線条研磨痕有、粒度粗
121		楔形石器	2	157住	南西部	黒曜石	2.2	2.0	0.6	3.5	完形	
122		打製石斧	2	157住	北東部	頁岩	(12.7)	(7.2)	(3.0)	(342.0)	1/2欠	短冊形
123	25	砥石	2	161住	No.94	凝灰岩	12.5	5.0	2.0	208	完形	平面形長方形、砥面2面、粒度細
124		砥石	2	161住	南西部	凝灰岩	(5.0)	(4.2)	(1.9)	(64.4)	2/3以上欠	平面形長方形、砥面4面、線条研磨痕有、粒度中
125	26	砥石	2	164住	No.20	砂岩	30.0	9.0	7.1	2645	完形	平面形長方形、砥面1面、線条研磨痕有、粒度粗
126		砥石	2	164住	No.8	砂岩	(14.0)	(6.4)	(3.3)	(336.0)	1/3以下欠	平面形長方形、砥面3面、粒度粗
127	4	火打ち石	2	164住	南西部	チャート	(4.0)	(3.6)	(2.1)	(27.5)	1/2欠	ツブレ3縁辺
128		大形刃器	2	164住		頁岩	13.1	5.4	2.4	159.3	完形	横刃石器
129		小形刃器	2	165住	No.1	チャート	5.7	1.8	1.4	13.0	完形	挟入石器
131		剥片	2	166住	No.11	黒曜石	1.6	1.4	0.5	0.8	完形	
132		磨石類	2	166住	No.13	砂岩	13.1	4.9	3.6	342	完形	平面形棒状、磨面3
133		磨石類	2	166住	No.13	砂岩	12.2	4.9	3.1	254	完形	平面形棒状、磨面2
134		剥片	2	166住	P1	チャート	3.7	2.4	0.8	6.5	完形	
135	13	磨石類	2	166住	P2 No.1	砂岩	21.4	7.0	6.5	1284	完形	平面形棒状、磨面2
136	24	砥石	2	167住		砂岩	23.8	7.9	9.3	2670	完形	平面形長方形、砥面4面、線条研磨痕有、粒度粗
137		磨石類	2	168住		砂岩	(14.1)	7.2	5.4	(816.0)	1/2欠	平面形棒状、磨面裏・側2、敲部表、敲部上1
138		砥石	2	169住		砂岩	(8.2)	9.4	3.6	(374.0)	1/2欠	平面形長楕円形、砥面1面、線条研磨痕有、粒度粗
140		磨石類	2	171住		砂岩	11.7	11.1	7.0	(1146.0)	表面剥離	平面形曲形、磨面5、凹部3
141		打製石斧	2	173住		凝灰岩	(5.8)	(4.8)	0.8	(39.5)	1/2欠	平面形不明
142		原石	2	175住	ベルト西	チャート	12.8	4.7	4.0	262	完形	
143		砥石	2	178住	No.5	砂岩	(14.5)	5.7	6.8	(676.0)	1/3以下欠	平面形長方形、砥面4面、線条研磨痕有、粒度粗
144		磨石類	2	170住	南西部	砂岩	9.2	4.5	1.4	(90.7)	表面剥離	平面形長方形、磨面1
145		砥石	2	188住	No.16	凝灰岩	(8.1)	(6.0)	(3.9)	(288.0)	1/2欠	平面形長方形、砥面4面、線条研磨痕有、粒度中
146		剥片	2	191住	ベルト	砂岩	(15.0)	(6.5)	(1.4)	(109.8)	2/3以上欠	
147		砥石	2	193住	No.18	砂岩	(22.1)	5.5	6.8	(1300.0)	1/3以下欠	平面形棒状、砥面2面、粒度粗
148		砥石	2	193住	No.5	砂岩	(8.1)	3.8	(1.4)	(44.8)	1/3以下欠	平面形長方形、砥面3面、粒度粗

第10表 石器・石製品一覧(2/4)

注記	図No.	種類	地区	出土地点 1	出土地点 2	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	破損状況	備考
149	5	火打ち石	2	193住	南西部	チャート	4.9	2.3	1.8	22.8	完形	
150	22	砥石	2	195住	北西部	凝灰岩	10.8	4.4	2.1	120.3	完形	平面形長方形、砥面4面、線条研磨痕有、粒度中
151	9	磨石類	2	196住		硬砂岩	22.1	6.1	4.3	924	完形	平面形棒状、敲部部位上1、磨面有
152		剥片	2	196住		石英	2.1	2.3	1.1	5.2	完形	
153		磨石類	2	196住		砂岩	(8.8)	(4.6)	(3.8)	(216.0)	1/2欠	平面形棒状、磨面2
154		磨石類	2	199住		砂岩	(6.0)	(5.9)	(4.3)	(169.3)	2/3以上欠	平面形不明、磨面2
155		打製石斧	2	199住	No.22	凝灰岩	(10.7)	6.7	1.2	(146.3)	1/3以下欠	短冊形
156		浮子	2	199住	南西部	軽石	4.4	3.4	2.0	7.7	完形	
157		MF	2	199住	南西部	黒曜石	2.1	1.8	0.5	1.9	完形	微細剥離1縁辺
158		磨石類	2	199住	北東部	砂岩	(10.7)	(4.5)	(1.8)	(105.0)	2/3以上欠	平面形不明、磨面1
159	12	磨石類	2	200住		砂岩	10.4	10.4	2.6	430	完形	平面形凹形、磨面1、敲部1
160		石核	2	200住	北西部	黒曜石	4.9	3.6	1.6	25.4	完形	打面数4以上
161		磨石類	2	203住	南西部	砂岩	10.7	3.0	2.7	114.0	完形	平面形棒状、磨面2
162		剥片	2	203住	ベルト内	黒曜石	1.6	0.9	0.3	0.6	完形	
163		磨石類	2	205住	No.5	砂岩	9.2	8.8	6.3	650	完形	平面形凹形、磨面1
164	20	砥石	2	208住		砂岩	14.1	7.4	5.9	872	完形	平面形長楕円形、砥面3面、線条研磨痕有、敲部1
165		石皿	2	213住	No.2	安山岩	(17.2)	(18.9)	(8.7)	(3575.0)	1/2欠	
166		原石	2	213・233・234住		石英	5.4	4.8	2.4	70.8	完形	
167		原石	2	217住	南東部	黒曜石	4.6	2.0	0.7	8.9	完形	
168		砥石	2	217住	No.1	頁岩	(8.6)	(4.1)	3.9	(153.9)	1/2欠	平面形凹形、砥面4面、粒度中
170		剥片	2	217住	南東部	石英	2.9	2.6	1.1	9.3	完形	
171		砥石	2	217住	南東部	砂岩	(11.0)	4.9	4.4	(420.0)	1/2欠	平面形棒状、砥面2面
172		砥石	2	217住	南西部	砂岩	(11.6)	(8.0)	6.7	(910.0)	1/2欠	平面形長楕円形、砥面2面
173	10	磨石類	2	217住	南西部	砂岩	9.5	4.2	2.3	138.9	完形	平面形楕円形、磨面3
174		磨石類	2	217住	北東部	砂岩	(8.7)	(4.8)	(5.0)	(208.0)	2/3以上欠	平面形不明、磨面1
176	27	砥石	2	221住		硬砂岩	16.6	8.5	2.4	514	完形	平面形長楕円形、砥面1面、線条研磨痕有
177	15	磨石類	2	221住		砂岩	13.9	11.1	6.0	1238	完形	平面形凹形、磨面1
178		磨石類	2	221住	南西部	硬砂岩	(16.2)	(3.8)	(4.1)	(314.0)	1/2欠	平面形棒状、磨面2
179		砥石	2	221住		砂岩	(7.2)	4.7	2.6	(124.3)	1/3以下欠	平面形長方形、砥面3面、粒度粗
180		磨石類	2	223住	No.68	砂岩	9.3	8.9	3.4	352	完形	平面形凹形、磨面2
181		磨石類	2	223住	No.78	砂岩	17.1	15.4	3.1	1026	完形	平面形凹形、扁平
182		浮子	2	224住	No.28	軽石	7.6	6.0	4.2	60.7	完形	
183	11	磨石類	2	225住	No.26	砂岩	19.4	7.4	7.7	1100	完形	平面形楕円形、磨面3、敲部4
184		磨石類	2	225住	No.27	砂岩	16.4	5.9	4.3	642	完形	平面形棒状、敲部1
185		磨石類	2	225住	北東部	砂岩	(9.7)	(6.1)	2.2	(136.7)	1/2欠	平面形楕円形、磨面2、敲部1
186	21	砥石	2	227住	No.43	砂岩	30.2	11.7	9.0	3795	完形	平面形長楕円形、砥面3面、線条研磨痕有
192		磨石類	2	227住	No.49	砂岩	11.8	4.4	3.3	266	完形	平面形棒状、敲部1
195		剥片	2	228住	北東部	チャート	4.7	2.5	0.3	6.4	完形	
196		砥石	2	229住		安山岩	(4.6)	(3.2)	(1.4)	(18.4)	2/3以上欠	平面形長方形、砥面3面、線条研磨痕有、粒度中
197		磨石類	2	229住		砂岩	8.2	7.8	3.8	332	完形	平面形楕円形、敲部2、縄文
198		砥石	2	231住		砂岩	21.0	18.3	15.0	6660	完形	平面形不明、砥面3
199		砥石	2	231住		砂岩	(17.7)	(7.6)	(14.4)	(2276.0)	1/2欠	平面形長楕円形、砥面2面、粒度粗
200		磨石類	2	231住		砂岩	(7.3)	(5.5)	(3.0)	(95.3)	2/3以上欠	平面形不明、磨面1
201		打製石斧か	2	231住		砂岩	7.2	5.4	2.0	91.5	完形	撥形
202		砥石	2	232住		砂岩	(8.9)	(7.5)	4.6	(414.0)	1/2欠	平面形不明、砥面1面、線条研磨痕有、粒度粗
203		磨石類	2	232住	北西部	砂岩	3.6	3.1	0.9	15.4	完形	平面形A、磨面表1
204		RF	2	238住	ベルト内	黒曜石	4.6	2.0	1.1	8.6	完形	二次加工1縁辺
207		磨石類	2	246住	南西部	砂岩	2.3	2.2	1.2	9.7	完形	平面形方、全体磨
210		砥石	2	251住		砂岩	15.5	8.0	10.5	1294	完形	平面形不明、砥面2面
211		部分磨製石斧	2	258住	No.1	砂岩	18.3	6.2	2.1	352	完形	
212		砥石	2	260住		凝灰岩	(4.7)	(3.3)		(20.4)	2/3以上欠	平面形不明、砥面2面、粒度中
213	19	砥石	2	262住		砂岩	20.3	6.4	5.8	1006	完形	平面形長楕円形、砥面1面、線条研磨痕有、敲部2
214		原石	2	263住	No.2	石英	1.1	1.2	0.6	1.3	完形	
216		磨石類	2	263住	北西部	砂岩	6.7	3.6	2.2	81.5	完形	平面形楕円形、磨面1
217		打製石斧	2	264住	No.10	頁岩	20.3	10.2	4.6	1070	完形	撥形
218		MF	2	溝10		黒曜石	2.3	1.9	0.2	1.3	完形	微細剥離1縁辺
219		打製石斧か	2	溝2	j-k間	頁岩	5.0	5.5	0.9	37.3	完形	平面形不明
220		小形刃器	2	溝2	i-j間	チャート	4.1	2.8	0.6	8.4	完形	サイドスクレーパー
221		磨石類	2	溝2	i-j間	砂岩	7.6	2.9	1.3	44.0	完形	平面形楕円形、磨面1
222		磨製石斧	2	溝3	東部	緑色凝灰岩	(4.4)	(3.8)	(2.2)	(55.8)	2/3以上欠	基部のみ残、定角式
223		磨石類	2	溝6	l-m間	砂岩	6.6	6.3	2.4	137.6	完形	平面形凹形、磨面1
224		磨石類	2	溝6	l-m間	砂岩	7.8	3.8	3.1	117.6	完形	平面形棒状、磨面1
225		磨石類	2	溝6	l-m間	砂岩	(9.0)	(4.1)	(3.7)	(178.4)	1/2欠	平面形棒状、磨面1
226		磨石類	2	溝6	i-j間	砂岩	(7.2)	6.3	5.3	(256.0)	1/3以下欠	平面形凹形、磨面1
227		大形刃器	2	溝6	e-f間	チャート	7.2	5.4	1.3	61.7	完形	石匙、横型
228		剥片	2	溝6	e-f間	硬砂岩	5.0	7.3	1.4	55.2	完形	
229		磨石類	2	溝6	e-f間	花崗岩	7.8	5.1	3.5	160.1	完形	平面形不明、磨面1
230		砥石	2	溝6	d-e間	砂岩	(11.7)	6.0	5.3	(562.0)	1/2欠	平面形棒状、砥面1面、粒度粗
231		小形刃器	2	溝6	d-e間	黒曜石	2.7	2.0	0.7	3.4	完形	サイドスクレーパー
232		打製石斧	2	溝6	c-d間	硬砂岩	12.5	6.6	1.6	190.0	完形	撥形
233		大形刃器	2	溝6	tr-k	頁岩	8.9	6.1	1.5	85.7	完形	横刃形石器
234		砥石	2	溝6	tr-i西部	砂岩	19.4	14.0	6.1	2426	完形	平面形不整系、砥面1面、粒度粗
235		磨石類	2	溝6	tr-i西部	花崗岩	10.0	7.8	5.2	508	完形	平面形凹形、敲部1
236		RF	2	溝6	tr-d9	チャート	2.6	2.5	0.6	3.8	完形	二次加工1縁辺
237		RF	2	溝6	tr-d9	硬砂岩	4.5	4.5	0.7	19.3	完形	二次加工1縁辺
238		原石	2	溝6		石英	2.8	2.1	1.5	11.7	完形	
239		磨石類	2	溝6		砂岩	(7.5)	(4.7)		(43.1)	2/3以上欠	平面形不明、磨面1
240		砥石	2	溝6		砂岩	(5.5)	(5.3)	(1.6)	(84.3)	2/3以上欠	平面形不明、砥面1面
241		磨石類	2	溝6		砂岩	(5.0)	(4.9)	(1.8)	(54.5)	1/2欠	平面形不明、磨面1
242		石鏃	2	溝6		黒曜石	(2.9)	(1.4)	0.3	(0.7)	1/3以下欠	無茎凹基、片脚部欠損
243		砥石	2	検出面	N6/W72	凝灰岩	12.6	6.8	1.8	21.0	完形	平面形長方形、砥面1面、粒度中～細
244		打製石斧	2	検出面	S12/W135	砂岩	(11.8)	(9.3)	(2.6)	(348.0)	2/3以上欠	平面形不明
245		磨石類	2	検出面	W192/S6	砂岩	11.6	9.0	5.9	772	完形	平面形楕円形、敲部2
246		砥石	2	検出面	S27/W60	砂岩	(10.9)	(8.3)	(3.4)	(466.0)	2/3以上欠	平面形不明、砥面2面
247		原石	2	不明		石英	28.0	27.5	19.0	10000	完形	
248		不明	2	不明		砂岩	1.9	14.6	7.0	2600	完形	台石か
249	31	砥石	4	275住	No.41	凝灰岩	(9.0)	5.9	2.0	(125.4)	1/3以下欠	平面形長方形、砥面2面、表面に深い線条痕あり、粒度中
250		砥石	4	277住	No.78	砂岩	(14.8)	(8.5)	(6.1)	(1156.0)	1/2欠	平面形長方形、砥面2面、粒度粗
251	7	火打ち石	4	4・土26		チャート	2.7	2.7	2.1	19.1	完形	ツブレ4縁辺
252		RF	4	溝19	攪乱	黒曜石	3.3	2.2	0.8	5.5	完形	二次加工1縁辺
253		剥片	4	溝19		チャート	2.4	2.3	0.9	3.8	完形	
254		打製石斧	4	溝18		砂岩	(10.0)	(5.1)	(1.6)	(94.5)	1/2欠	短冊形
255		磨製石斧	4	通路状遺構4	No.10	凝灰岩	(6.7)	(5.5)	(2.5)	(101.7)	2/3以上欠	基部のみ残
256		石鏃	4	溝6		チャート	1.8	1.7	0.2	0.4	完形	無茎凹基鏃

第10表 石器・石製品一覧(3/4)

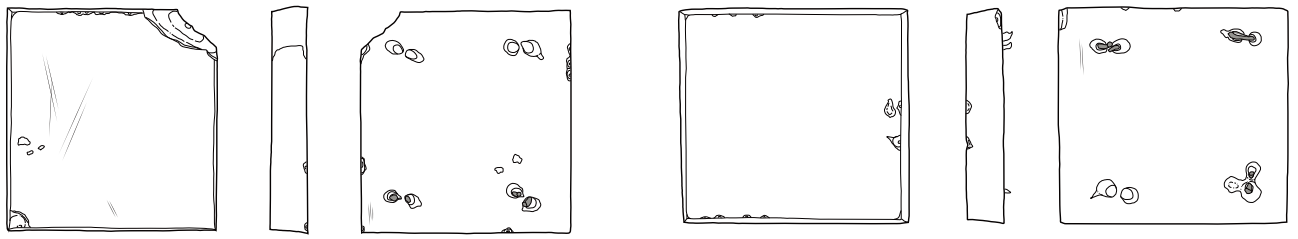
注記	図No.	種類	地区	出土地点 1	出土地点 2	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	破損状況	備考
257		剥片	4	溝6	No.2	黒曜石	4.2	3.7	1.2	24.4	完形	
258		剥片	4	溝16		黒曜石	3.1	1.7	0.7	2.5	完形	
259		石核	4	検出面		チャート	2.5	2.2	2.1	10.7	完形	打面数2以上
260		火打ち石	4	検出面		チャート	2.5	2.0	1.5	9.5	完形	ツブレ3縁辺
261		RF	4	検出面		緑色凝灰岩	(3.9)	(3.3)	(0.5)	(8.3)	1/2欠	二次加工1縁辺
262		石核	4	試掘tr5		チャート	4.3	3.1	1.7	22.1	完形	打面数3以上
263		打製石斧	4	不明		凝灰岩	(4.8)	(4.1)	(1.5)	(42.4)	2/3以上欠	平面形不明
264		大形刃器	4	不明		凝灰岩	8.0	7.8	2.4	163.1	完形	横刃形石器
265		砥石	4	不明		砂岩	9.7	3.5	2.8	90.7	完形	平面形楕円形、砥面1面、粒度粗
266	6	火打ち石	4	不明		チャート	5.6	3.7	3.1	86.0	完形	ツブレ2縁辺
267		打製石斧	4	不明		砂岩	9.7	3.5	2.8	90.7	完形	平面形不明、砥石の転用か
268	32	砥石	4	不明		砂岩	(14.4)	(11.1)	(8.9)	(1738.0)	1/2欠	平面形不明、砥面2面、線条研磨痕有、粒度粗
269		石核	4	不明		頁岩	5.4	4.0	1.6	32.2	完形	打面数2以上
270		剥片	4	不明		頁岩	3.3	2.5	1.2	6.5	完形	
271		石鏃	4	不明		黒曜石	3.6	2.6	0.6	5.9	完形	無茎平基鏃(基部二次加工なし)
272		打製石斧	4	検出面	No.108	砂岩	(8.3)	(7.1)	1.6	(141.2)	1/2欠	平面形不明
273		石鏃	4	検出面	No.144	黒曜石	3.1	2.2	0.4	1.6	完形	無茎凹基鏃
274		打製石斧	4	検出面	No.183	凝灰岩	(11.2)	(4.6)	1.1	(69.1)	1/2欠	短冊形
275		石鏃	4	検出面	No.370	チャート	(1.5)	1.2	0.2	(0.3)	1/3以下欠	無茎凹基鏃、鋸歯、先端部欠損
276		石鏃	4	検出面	No.646	黒曜石	2.2	1.5	0.3	0.7	完形	無茎凹基鏃
277		剥片	4	検出面	No.793	黒曜石	2.5	1.8	0.6	2.0	完形	
278		剥片	4	検出面	No.794	黒曜石	2.7	1.7	0.4	2.0	完形	
279		剥片	4	検出面	No.800	黒曜石	2.4	1.8	1.1	4.3	完形	
280		剥片	4	検出面	No.848	黒曜石	2.5	1.6	0.6	1.8	完形	
281		打製石斧	4	検出面	No.866	凝灰岩	(11.7)	6.2	1.8	(192.7)	1/3以下欠	平面形不明
282		石剣/石刀	5	285住	2層	緑色凝灰岩	(3.1)	(1.8)	(0.4)	(4.2)	2/3以上欠	
283		石鏃	5	285住	南西部	チャート	(2.7)	2.0	0.4	(1.5)	1/3以下欠	有茎凹基鏃、鋸歯、飛行機鏃、茎部欠損
284		浮子	5	287住	No.103	軽石	4.9	4.4	3.5	37.4	完形	
285		浮子	5	287住	No.158	軽石	4.8	4.3	3.3	15.3	完形	
286		浮子	5	288住	3層	軽石	3.1	2.2	1.5	2.7	完形	
287		大形刃器	5	289住	No.11	硬砂岩	8.4	4.9	0.7	36.2	完形	横刃形石器
288		大形刃器	5	289住	No.13	硬砂岩	8.6	5.9	0.6	44.8	完形	横刃形石器
289		石鏃	5	290住	No.2	黒曜石	(2.3)	(1.5)	0.3	(0.7)	1/3以下欠	無茎凹基鏃、片脚部欠損
290		剥片	5	290住	No.70	黒曜石	1.7	1.5	0.4	0.9	完形	
291		石核	5	290住	2層	黒曜石	2.6	1.8	1.4	5.0	完形	打面数2以上
292		石鏃	5	291住	No.24	黒曜石	(2.0)	1.1	0.2	(0.3)	1/3以下欠	無茎凹基鏃、先端部欠損
293		石鏃	5	293住	No.5	黒曜石	1.7	1.4	0.2	0.3	完形	無茎凹基鏃
294		石鏃	5	通路状遺構2	No.39	黒曜石	2.1	1.3	0.4	0.7	完形	無茎凹基鏃
295		小形刃器	5	通路状遺構2	No.44	黒曜石	2.5	1.7	1.7	4.9	完形	抉入石器
296		RF	5	道路状遺構	南部	黒曜石	2.4	1.3	0.5	1.5	完形	二次加工1縁辺
297		RF	5	攪乱	tr28	黒曜石	2.8	2.1	1.1	5.3	完形	二次加工2縁辺
299		部分磨製石斧	5	攪乱		硬砂岩	7.7	5.8	1.7	85.8	完形	
300		石鏃	2	213住	南東	黒曜石	2.7	1.4	0.3	1.1	完形	無茎凹基
301	33	磨製石斧	2	184住	No.6	緑色凝灰岩	10.0	3.6	3.8	237	完形	柱状片刃石斧、刃縁に微細剥離、刃部磨滅により緩い斜刃
303		石核				チャート					完形	打面数1
305		火打ち石	2	258住		チャート	3.1	2.3	1.6	14.4	完形	ツブレ2縁辺
306		剥片	2	140住	南東	チャート	2.1	1.7	0.3	1.2	完形	
307	3	浮子	2	226住	北東	軽石	6.4	3.0	2.4	16.3	完形	両面穿孔
308	2	石製帯飾り	2	133住		大理石	3.8	4.1	8.3	26.2	完形	巡方、裏面3箇所に針金あり
309	1	石製帯飾り	2	111住		大理石	3.9	3.7	6.8	26.1	完形	巡方、裏面2箇所に針金あり
310		砥石	2	99住	北東上層	砂岩	(41.7)	(29.9)	(15.0)	(24.3)	1/2欠	砥面3、粒度粗
311		砥石	2	99住	検	砂岩	(96.4)	(24.5)	(25.5)	(81.4)	1/3以下欠	砥面1、粒度細
312		砥石	2	150住	No.15	砂岩	(70.6)	(88.8)	(18.5)	(150.3)	1/2欠	砥面2、粒度中
313	35	紡錘車	2	185住	No.1	砂岩	(52.6)	46.3	6.8	(21.9)	1/3以下欠	孔数2(孔径6.5mm、5.5mm)、片面穿孔、平面形楕円形
314	36	紡錘車	2	200住	No.2	頁岩	48.9	44.7	20.8	69.9	完形	孔数2うち1つは貫通せず(孔径10.9mm、4.3mm未貫通深さ2.1mm)平面形円形
315		砥石	2	208住	No.13	頁岩	(76.1)	(40.2)	(42.6)	(150.4)	1/3以下欠	平面形長方形、砥面3、粒度細
316		石鏃	2	溝2	j-k間	黒曜石	(22.6)	17.5	2.7	(0.8)	1/3以下欠	有茎鏃、鋸歯、飛行機鏃、茎部欠損
317		打製石斧	2		W117S66	ホルンフェルス	(160.7)	90.6	22.9	(371.0)	1/3以下欠	撥形
318		磨製石鏃	2	検出面	南東部	粘板岩	(47.6)	(24.6)	(3.7)	(3.9)	1/3以下欠	茎部欠損
319		打製石斧	2	表採		頁岩	143.7	67.2	27.1	177.1	完形	撥形
320		砥石		表採		砂岩	(146.5)	(176.0)	(56.5)	(2125.0)	2/3以上欠	平面形不明、砥面1、溝状研磨痕4本、粒度粗
321		砥石		表採		砂岩	174.5	94.0	42.0	969.0	完形	平面形長楕円形、砥面2、粒度中
322		砥石		表採		頁岩	148.5	64.5	34.5	619.0	完形	平面形長方形、砥面5、粒度細
323		石鏃	2		W108N12	チャート	(13.8)	(11.4)	2.2	(0.2)	1/3以下欠	無茎凹基鏃、尖頭部先端・片逆刺欠損

第10表 石器・石製品一覧(4/4)

※ ()内数値は残存地を表す
 ※ 200g未満は0.1g単位、200g以上は1g単位

出土地点	個数	長軸(完形のみ、cm)			短軸(完形のみ、cm)			重量(完形のみ、g)		
		最小値	最大値	平均値	最小値	最大値	平均値	最小値	最大値	平均値
1住	25	6.3	12.2	9.2	2.3	4.7	3.5	39.9	143.6	114.7
9住	16	9.5	12.6	10.9	2.9	9.7	4.4	100.9	191.4	159.0
22住	16	6.6	9.6	8.0	2.2	4.1	2.9	41.7	102.6	62.4
135住	1	—	—	9.6	—	—	3.5	—	—	131.8
138住	1	—	—	15.0	—	—	4.9	—	—	376.0
145住	4	11.1	12.7	11.8	2.9	3.7	3.3	151.8	200.0	172.7
147住	4	7.4	12.0	9.7	2.7	4.4	3.7	74.5	180.6	123.3
147住	11	7.0	9.8	8.6	3.2	4.2	3.8	86.7	153.3	113.8
154住	4	9.9	12.2	10.7	3.3	4.2	3.9	108.8	121.6	114.6
166住	7	11.0	15.0	12.7	2.5	6.1	4.7	136.7	468.0	319.5
170住	1	—	—	13.8	—	—	4.5	—	—	320.0
217住	2	9.9	11.4	10.7	2.6	3.3	2.8	106.7	139.8	123.3
219住	3	8.1	8.4	8.3	3.5	4.0	3.7	77.8	86.4	82.3
227住	41	6.8	12.3	9.3	3.2	8.7	4.0	67.5	220.0	130.2
243住	19	7.4	11.6	9.1	2.8	5.1	4.1	84.0	184.1	113.3
244住	5	7.1	9.8	8.5	2.7	4.8	3.8	48.4	147.3	91.2
247住	3	—	—	10.7	4.9	5.5	5.2	—	—	176.3
249住	15	7.6	13.6	9.2	3.7	5.1	4.3	91.4	334.0	157.4
263住	3	6.5	8.2	7.6	2.7	3.5	3.2	50.4	85.8	66.0
平均/合計	181	6.3	15.0	10.2	2.2	9.7	3.9	39.9	468.0	155.1

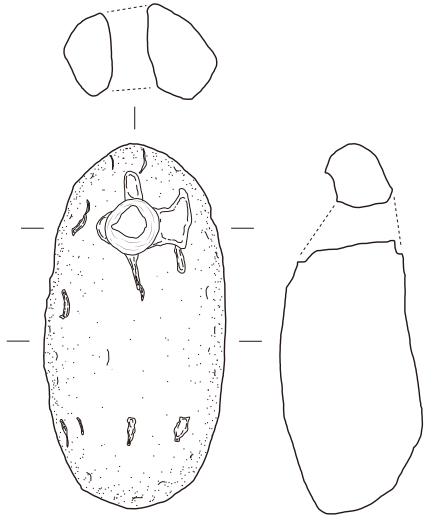
第11表 こもで石(編物用石錘)集計



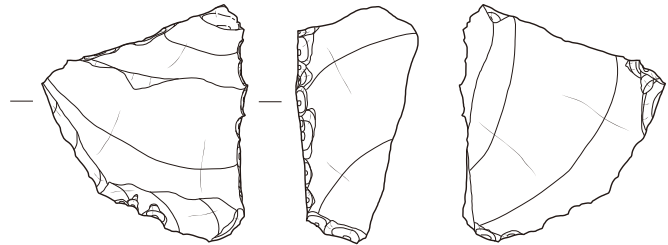
1

2

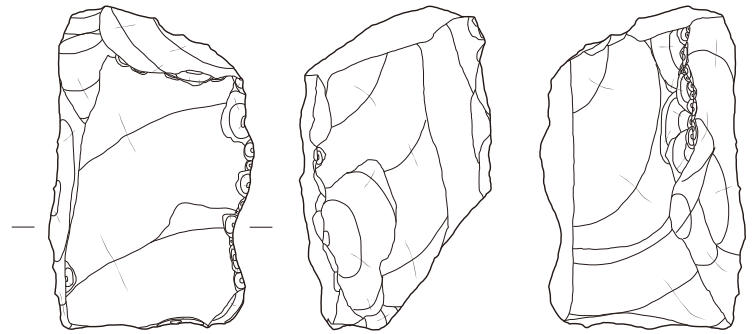
針金



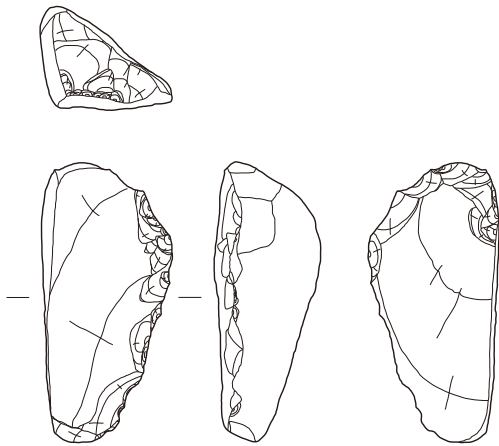
3



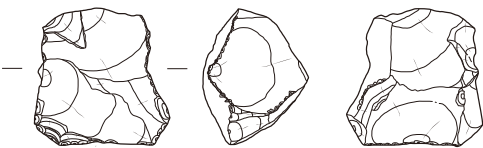
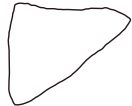
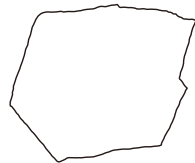
4



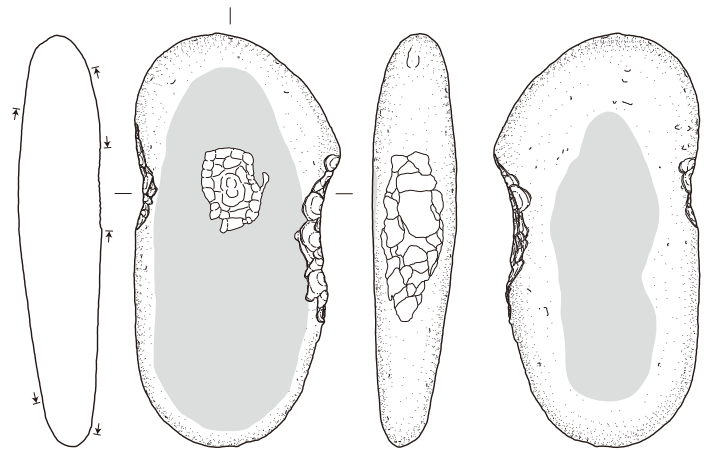
6



5



7

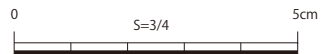


8

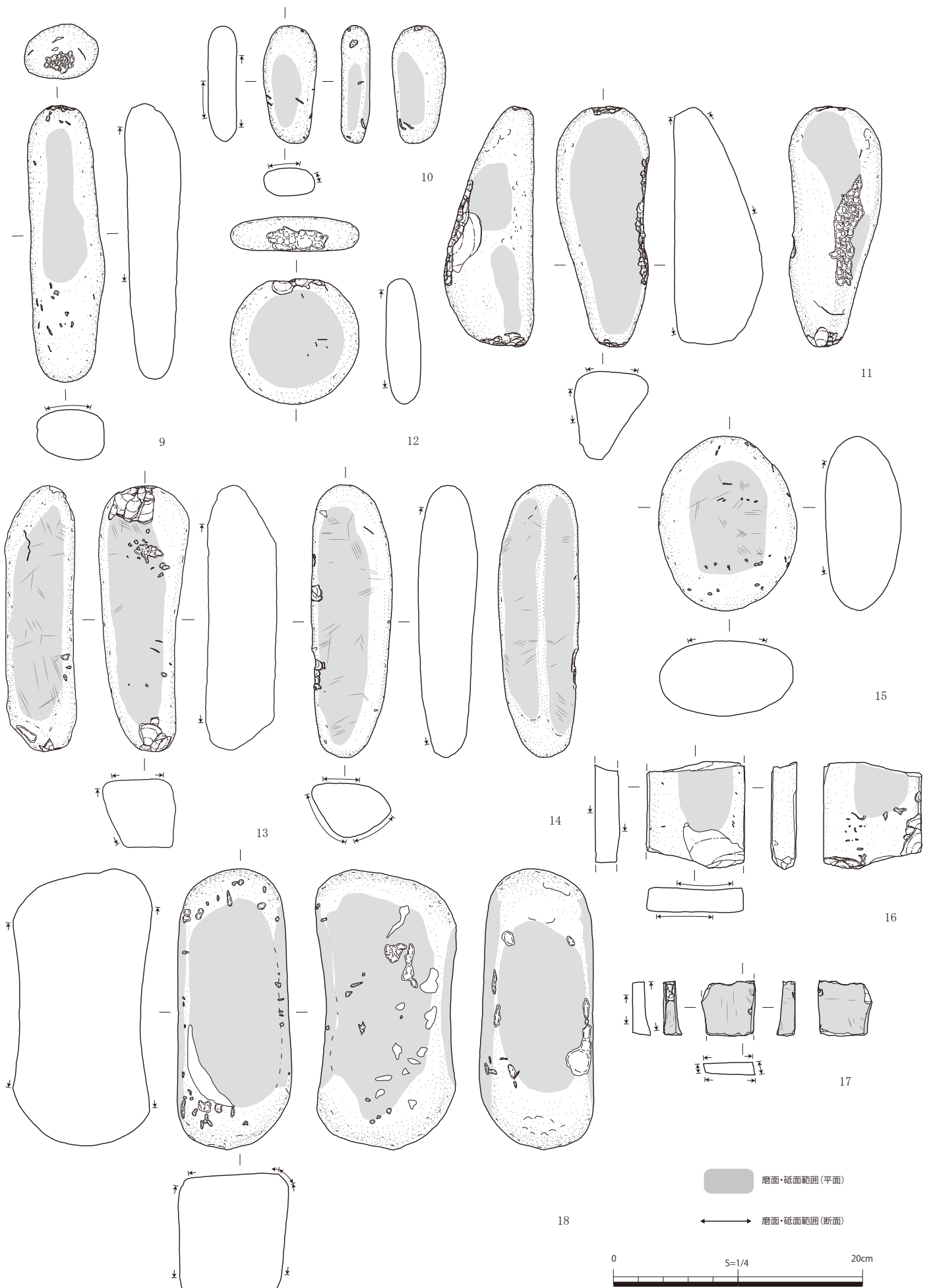


磨面・砥面範囲(平面)

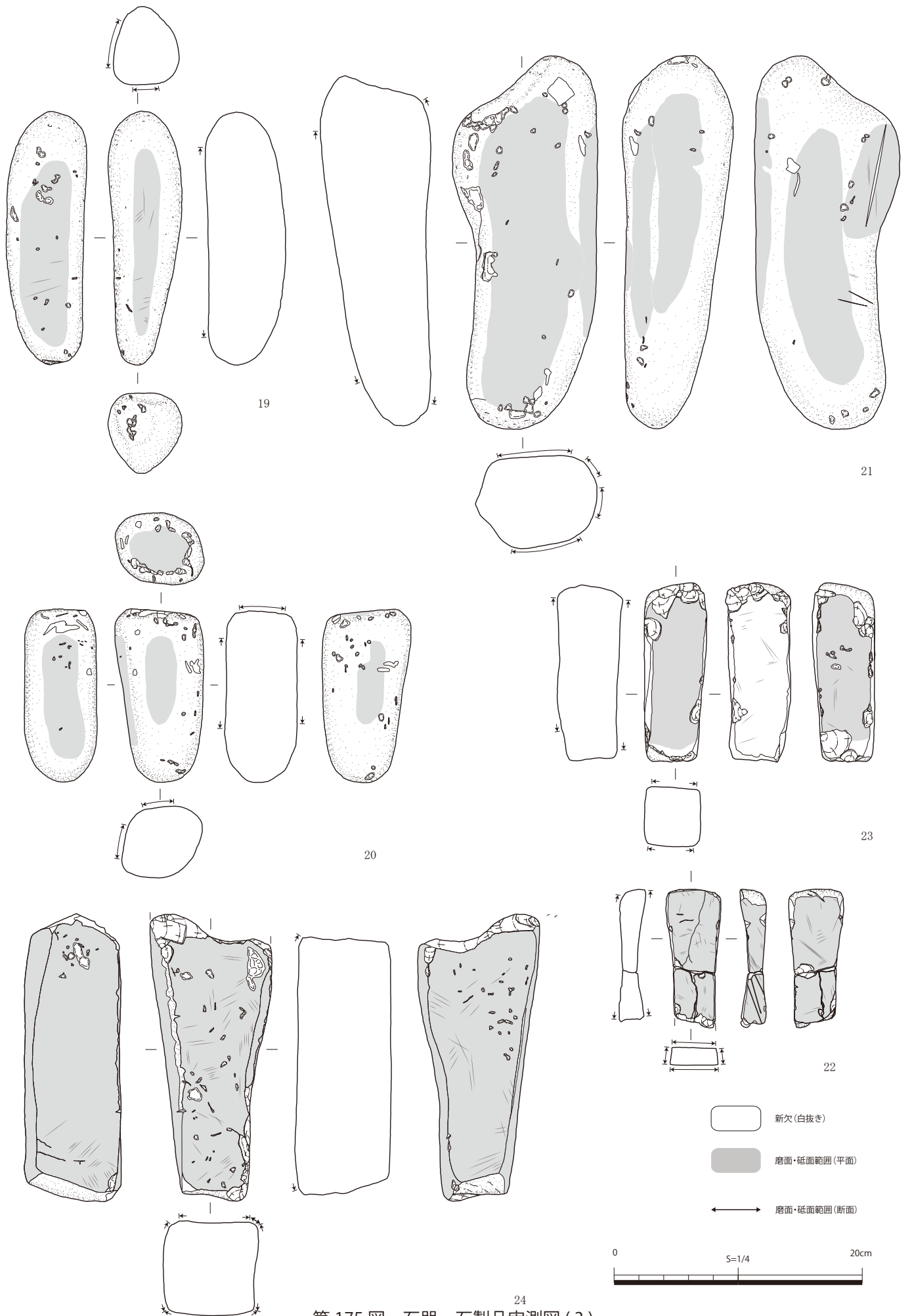
磨面・砥面範囲(断面)



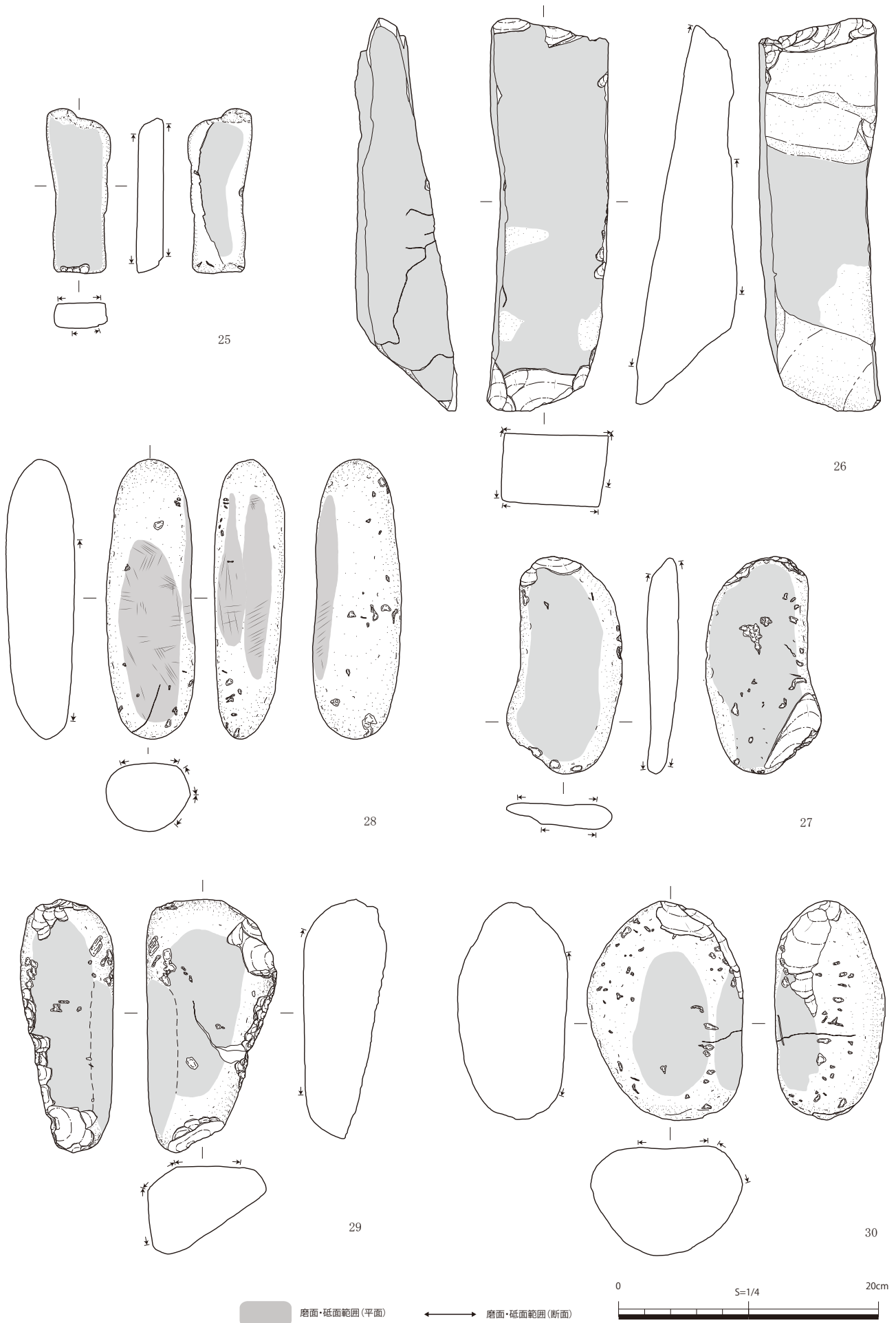
第 173 図 石器・石製品実測図(1)



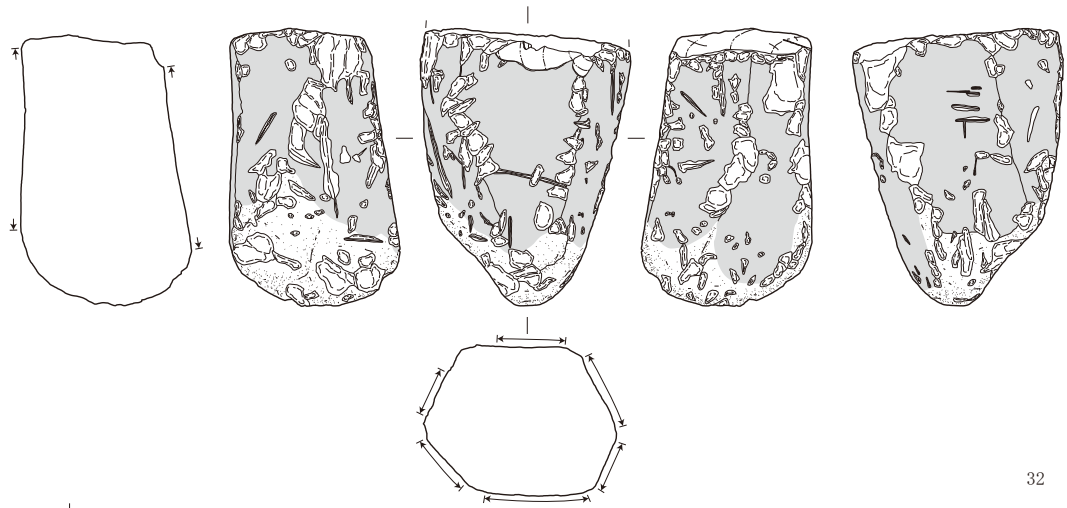
第 174 図 石器・石製品実測図(2)



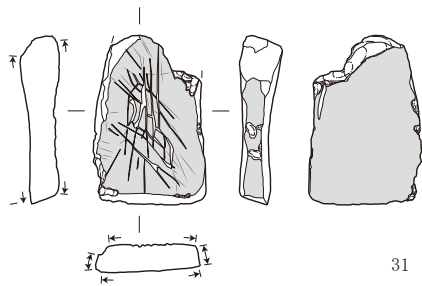
第 175 図 石器・石製品実測図 (3)



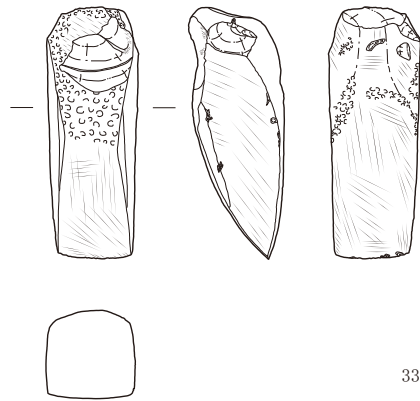
第 176 図 石器・石製品実測図(4)



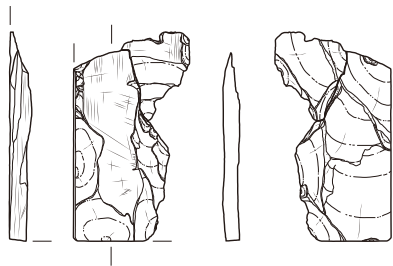
32



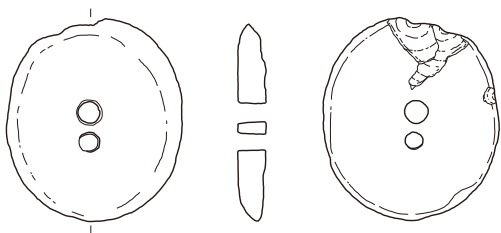
31



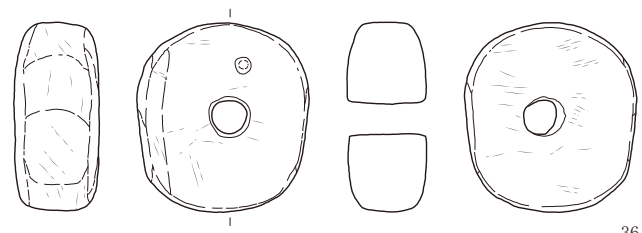
33



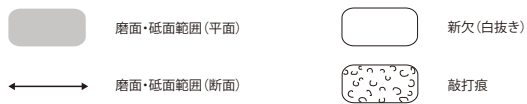
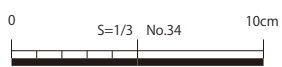
34



35



36



第 177 図 石器・石製品実測図(5)

3 金属製品(第178～181図、第12～14表、カラー写真図版14)

(1) 概要

金属製品は345点出土し、その内訳は鉄製品310点、銅製品23点、金属種別不明1点、銭貨11点である。その他、鉄滓が64,083.7g出土している。これらの出土地点・器種・寸法等については一覧表(第12・13表)を参照されたい。なお、一部の製品については、銹化による損傷が著しく、計測ができなかった。

器種は、鉄製品が刀子・釘・鏃・鎌・斧・紡錘車・刃物・苧引鉄・鋸・燧鉄・ボルト・鐸・馬具・その他不明品、銅製品が煙管・鉸具・鉈尾・丸柄・巡方・鏡・銅印・銅鏡・その他不明品、銭貨である。その内、比較的残存状態の良好なもの、特徴的なものを中心に92点を図示し、7点を写真掲載している。遺物の記載にあたっては図番号を使用している。また、遺物の形状等については、大半がX線撮影を行っていないため、目視による現状を記載している。

(2) 鉄製品

刀子(1～35) 72点出土し、35点を図示している。小松氏により形状の分類(文献14、以下同)がされているが、銹化による膨張で形状は不明瞭なものが多く、分類は困難である。現状から推定可能な点のみを述べると、4・5・7・10・16・18・26・28・29・32・34は両関、6・9・14・15・22・25・33・35は棟関と推定される。また、13は木製の柄が良好に残存している。2は茎部の片面、9は茎部の両面に木質が付着している。

釘(36～42) 31点出土し、7点を図示している。頭部が残存するものは6点ある。頭部の形状は、鑿の使用の有無、基部上端の折り曲げ・折り返しの有無が銹化による膨張で不明瞭な上、X線撮影を行っていないことから、特定が困難である。故に、小松氏により頭部形状による釘の分類が行われているが、前述の理由から、現状から推定可能な点のみを述べたい。38は鑿の使用の有無は不明であるが、基部上端を叩き伸ばして曲げていることから、IVまたはV a類と推定される。39は基部上端を叩き伸ばして丸く曲げていることから、V b類と推定される。40は頭部の一部が欠損しているため、詳細は不明であるが、基部上面に楕円形の皿を載せたVII類に似る。42は基部が単に折り曲げられていることから、III類と推定される。また、41は頭部が欠損しているため、形状は不明であるが、脚部に木質

が付着している。

釘 or 鏃(43・44) 2点出土し、図示している。43・44ともに断面が方形の棒状製品で、片側の幅が徐々に減じる形状をしている。釘の脚部もしくは鏃の茎部とみられる。また、43は全面に木質が厚く付着している。

鏃(45～50) 10点出土し、6点を図示している。小松氏により形状の分類が行われているため、現状からの分類を試みる。45は身部の一部が欠損しているため、身部平面は不明瞭であるが、正三角形または五角形とみられ、身部関の形状が逆刺であることから、I aまたはII a類と推定される。46は身部平面が長三角形で、身部関の形状が角状または撥状であることから、VII bまたはVII c類と推定される。47・49は身部平面が長三角形で、身部関の形状が逆刺であることから、VII a類と推定される。48は身部平面が正三角形で、身部関の形状が逆刺であることから、I a類と推定される。50は雁股鏃のため、VIII類である。

鎌(51・52) 4点出土し、2点を図示している。51は刃部が緩やかに湾曲しており、折り返し部は端部上端から棟側にかけて折り返している。また、基部の両面には木質が付着している。52は刃部の湾曲が大きく、基部端部の形状は角丸である。折り返し部は端部の大半を折り返している。

斧(53・54) 2点出土し、図示している。53は着柄部が袋状で、刃部は弧状を呈す。54は着柄部が袋状で、刃部は端部がやや丸みを帯びる。

紡錘車(55～61) 9点出土し、7点を図示している。小松氏により紡輪の断面形状による分類が行われているが、銹化による膨張で紡輪の断面形状は不明瞭である。大きさについては、55・56は中型、57は小型とみられる。58～61は同一遺構内よりまとまって出土していることから、58は紡輪、59～61は紡軸の一部と判断した。

刃物(62) 1点出土し、図示している。62は片側に刃部を有することから、何らかの刃物とみられるが、欠損が多く、器種の特定は困難である。

苧引鉄(63) 1点出土し、図示している。63は肩が丸く、刃部は鋭利である。

鋸(64) 1点出土し、図示している。64は片刃で、刃先は交互に振れている。この身の両面には木質が付着しており、柄の木材と推定される。

燧鉄(65) 1点出土し、図示している。65は頂部、裾部が欠損しており、形状の詳細は不明である。

不明(66～79) 173点が出土し、14点を図示している。66は鏃に似た形状をしているが、断面が長方形であり、刃部を持たない。67は断面が長方形と方形で異なる棒状製品である。断面は長方形から方形へと変わり、さらに長辺を変えた長方形へと変化する。76～78は同一遺構内より出土していることから、同一個体の可能性が考えられるが、詳細は不明である。78は断面楕円形の棒状製品に孔を持つ板状製品を巻いた形状をしている。

(3) 銅製品

鉸具(80) 1点が出土し、図示している。80は縁金にT字形の刺金が接続する形状をしている。また、鉸具頭部はC字形をしている。

錠尾(81・82) 2点が出土し、図示している。81は方形の一面が丸みを帯びる形状で、鉸留め痕は2カ所、孔は3カ所でみられる。何らかの原因で鉸留めが壊れ、3カ所に孔を開けて留め直した痕跡の可能性が考えられる。82は方形の一面が丸みを帯びる形状で、鉸留めは4カ所で良好に残る。

丸軔(83) 1点が出土し、図示している。83は半円形で長方形の透かしが入る。鉸留めは3カ所でみられる。

巡方(84～86) 3点が出土し、図示している。84は方形で長方形の透かしが入る。鉸留めは5カ所でみられる。85は方形で長方形の透かしが入る。鉸留めは四隅にみられる。86は長方形で長方形と推定される透かしが入る。鉸留めは四隅で良好に残る。84・85に比べ、小型で、透かしは細長い形状をしている。

鏡(87・88) 7点が出土し、図示している。87はNo.64～69の6片を復元実測したものである。これらは同一遺構内より出土していることから、同一個体の可能性が考えられる。口縁部外側は上部に2本、下部に3本の沈線が入る。口縁部内側はわずかに膨らみ、沈線が入る。また、No.64はX線撮影により補修痕が確認されている。口縁部の欠損部を包むように銅板を折り曲げ、その端部を花卉状に切り、5カ所を鉸で留めている。なお、銅板に覆われた内側には2個の細い孔がみられ、補修時の失敗の孔の可能性が考えられる。88は薄い板状製品が湾曲した形状をしており、銅鏡と推定されるが、詳細は不明である。

銅印(89) 1点が出土し、図示している。89は印面が方形で、鈕の形状は荅鈕有孔である。印面の輪郭は有郭で、印文は2行で「長良私印」と陽刻され

ており、朱の付着がみられる。材質は、奈良国立文化財研究所・沢田正昭氏のX線分析によると、主成分の銅の量に対して錫と鉛の量が多いという結果が出ている。

銅鏡(90・91) 2点が出土し、図示している。90は八稜鏡である。一部は被熱により溶けている。縁は断面台形の蒲鉾式で、界圏は単圏がめぐる。裏面の紋様は銹化が著しく不鮮明であるが、瑞花双鳥文と推定される。外区の紋様は表面が荒れており不明であるが、1カ所に膨らみがみられる。鈕は円錐鈕が付く。91は海獣葡萄鏡である。欠損が著しく、縁や鈕は残存しておらず、詳細は不明である。裏面の紋様は海獣の身体と葡萄の房がみられる。

不明(92) 4点が出土し、1点を図示している。92は板状製品で、片端は断面三角形形状に膨らみ、もう片側はU字に曲がる。鏡の一部のようにも見えるが、詳細は不明である。

(4) 銭貨

銅銭(93～99) 11点が出土し、7点を写真掲載している。内訳は、富寿神宝1枚、延喜通宝5枚、開元通宝1枚、熙寧元宝1枚、寛永通宝1枚、銭貨不明1枚、雁首銭1枚である。93の富寿神宝は皇朝十二銭のひとつで、初鑄は818年である。松本市内では初の出土であり、その後、平成2年に小池遺跡、平成27年に高畑遺跡の調査でも出土している。94は文字が読み取れないが、古代銭貨の可能性が考えられる。95～99は溶着した状態で出土した。95・98は延喜通宝で、初鑄は907年である。96・97・99は文字が読み取れないが、出土状況からみて、延喜通宝であると推定される。(95～99は発見時には6枚の溶着とされていたが、その後、本書作成までの間に1枚ずつに分離されて展示等に使用され、5枚として保管されていた。分離前の状態での実測図は作成されていなかった。本稿では5枚として扱うが、95にはもう1枚分の残片らしきものが付着しており、それを6枚目と数えていた可能性もある。)

参考文献 文献14、文献37(巻末一覧参照)

No.	実測 図	出土遺構	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	金属 種別	備考
1		3住	検出面	丸釘	31.1	9.6	8.0	1.5	Fe	
2	79	6住	検出面	不明	25.6	22.3	11.2	9.6	Fe	断面方形の棒状製品/片端が輪状になる
3	36	7住	検出面	釘	90.0	7.9	7.8	8.0	Fe	脚部先端欠/断面方形
4	1	10住	東側中層	刀子	51.5	11.0	7.8	5.1	Fe	基部、茎尻欠
5		10住	東側	不明	63.8	27.4	6.2	20.6	Fe	
6	55	13住	No.02	紡錘車	255.0	51.5	8.3	50.6	Fe	紡軸両端欠
7	90	13住	No.01	銅鏡	87.0	-	2.6	54.5	Cu	八稜鏡/わずかに欠
8	2	15住	No.02	刀子	72.1	12.2	7.5	6.7	Fe	基部の一部欠/基部の片面に木質付着
9	3	15住	No.15	刀子	117.2	14.1	5.6	17.6	Fe	基部及び基部の一部か
10		15住	No.02	不明	151.9	10.5	3.5	4.3	Fe	
11		16住	下層	刀子	27.0	12.1	5.6	2.6	Fe	
12	93	16住		富寿神宝	22.7	21.8	1.7	1.5	Cu	わずかに欠/初鑄818年(嵯峨天皇)
13	84	16住		巡方	32.8	31.1	3.9	10.2	Cu	裏金具欠
14	46	17住	南側下層	鏃	101.2	14.6	13.1	13.0	Fe	基部欠
15	43	18住	No.02	釘or鏃	49.5	10.2	8.9	4.5	Fe	断面方形の棒状製品/片側の幅が徐々に減じる/全面に木質付着
16	44	18住	No.02	釘or鏃	36.0	6.1	5.8	2.0	Fe	断面方形の棒状製品/片側の幅が徐々に減じる
17	7	20住	北側	刀子	123.9	14.4	7.2	14.7	Fe	完形
18		20住		不明	41.2	29.2	5.4	14.6	Fe	
19	65	21~23住	検出面	燧鉄	95.9	31.1	5.3	30.3	Fe	頂部、裾部欠
20		22住	南側	不明	87.8	29.2	3.6	14.3	Fe	
21		22住	南側	不明	57.6	26.9	3.2	8.7	Fe	
22		22住	南側	不明	28.4	19.7	4.5	2.5	Fe	
23	89	22住	No.01	銅印	33.0	32.0	28.0	52.5	Cu	完形
24	37	24住	南側上層	釘	103.3	8.2	8.0	7.4	Fe	脚部剥落/断面方形
25		24住		釘	64.0	5.4	5.3	3.4	Fe	
26	75	25住	検出面	不明	83.9	40.5	6.0	26.3	Fe	板状製品
27		25住	南側	不明	76.2	18.8	4.1	12.6	Fe	
28	15	33住	No.04	刀子	87.7	17.0	10.4	14.4	Fe	切先、基部欠
29	18	33住	No.04	刀子	72.5	9.6	5.1	6.0	Fe	基部の一部欠
30		33住	No.04	刀子	40.0	10.2	3.6	3.7	Fe	
31	59	33住	No.01	紡錘車	124.9	9.8	8.6	12.7	Fe	紡軸の一部か/断面円形
32	58	33住	No.01	紡錘車	46.9	24.8	3.9	6.4	Fe	紡軸の一部
33	60	33住	No.01	紡錘車	62.0	6.0	5.8	3.5	Fe	紡軸の一部か/断面円形
34	61	33住	No.01	紡錘車	35.0	9.0	8.4	3.9	Fe	紡軸の一部か/断面円形
35		34住	P1	不明	34.7	13.0	6.8	6.5	Fe	
36		35住	東側	釘	56.2	6.2	5.9	2.6	Fe	
37		35住	東側	不明	23.5	13.0	8.8	3.2	Fe	
38		39住	北側	釘	36.0	6.6	5.3	1.6	Fe	
39		39住	南側	不明	65.0	19.5	5.0	7.4	Fe	
40		39住	北側	不明	30.6	18.1	4.1	2.1	Fe	
41	80	43住		鉸具	44.8	44.0	9.6	39.8	Cu	完形
42	19	49住	南側	刀子	87.0	10.5	4.6	5.1	Fe	基部の一部欠
43	11	49住	南側	刀子	36.9	7.4	6.6	3.6	Fe	茎尻のみ
44		50住	No.22	不明	39.1	22.1	7.8	7.4	Fe	
45	8	51住	北側下層	刀子	47.5	9.4	6.1	4.0	Fe	基部の一部か
46	22	54住	No.01	刀子	198.0	16.3	6.7	27.5	Fe	完形
47	21	54住	東側	刀子	43.2	9.5	3.9	2.4	Fe	基部の一部か
48		54住	検出面	不明	76.9	7.3	6.9	6.5	Fe	
49		54住	検出面	不明	41.3	6.4	6.1	2.4	Fe	
50		54住	東側	不明	27.2	10.0	9.9	2.2	Fe	
51	25	55住	No.56	刀子	95.8	15.6	6.4	14.2	Fe	切先、茎尻欠
52	20	55住	No.27	刀子	50.6	9.5	4.5	2.8	Fe	基部の一部か
53	47	55住	No.01	鏃	74.7	14.8	7.6	9.6	Fe	基部欠
54	73	55住	No.27	不明	47.3	19.6	8.0	4.1	Fe	断面長方形の棒状製品/2箇所で屈曲する
55	94	55住		銭貨	15.6	13.9	1.3	0.8	Cu	わずかに欠
56	26	56住	西側	刀子	103.8	16.0	6.5	9.7	Fe	切先欠
57		56住	検出面	釘	41.3	9.3	7.5	1.4	Fe	
58		56住		不明	78.2	10.2	7.2	7.4	Fe	
59		58住	北側	不明	47.0	42.1	4.2	14.0	Fe	
60		59住	ベルト	不明	27.7	11.2	2.5	2.2	Fe	
61		59住	ベルト	不明	38.0	4.1	2.8	1.6	Fe	
62		59住	上層	不明	30.9	6.5	3.9	1.2	Fe	
63	23	66住	南側	刀子	55.3	7.8	2.2	2.9	Fe	基部の一部か
64	87	69住	Pit	鏡	66.2	63.0	3.0	35.8	Cu	口縁部/補修痕あり
65	87	69住	Pit	鏡	61.4	59.9	1.8	20.1	Cu	口縁部
66	87	69住	Pit	鏡	72.3	60.0	2.3	18.3	Cu	口縁部
67	87	69住	Pit	鏡	63.4	50.8	1.8	17.0	Cu	口縁部
68	87	69住	Pit	鏡	46.1	38.1	1.2	8.7	Cu	胴部か
69	87	69住	Pit	鏡	45.1	41.3	1.1	7.4	Cu	胴部か
70		72住	南側	刀子	25.2	8.0	3.8	0.9	Fe	
71		72住	南側	刀子	4.2	10.2	4.7	0.9	Fe	
72	28	74住	検出面	刀子	76.5	11.7	6.1	5.7	Fe	茎尻欠
73		74住	南側	不明	49.5	9.0	7.4	5.6	Fe	
74		74住	南側	不明	17.3	17.0	2.8	1.2	Fe	
75		76住	北側	不明	73.1	18.0	2.5	5.8	Fe	
76		80住	南側	不明	20.1	6.4	5.5	1.2	Fe	
77	24	81住	北側下層	刀子	50.5	12.5	5.7	3.7	Fe	切先のみ
78		81住	No.04	不明	28.2	7.7	6.6	1.4	Fe	
79		82住	南側	不明	27.5	16.0	6.9	2.5	Fe	
80		83住	検出面	不明	37.6	7.9	2.5	0.7	Fe	
81		83住	検出面	不明	31.8	6.4	1.5	0.5	Fe	
82		84住	No.02	刀子	90.9	10.8	3.9	9.1	Fe	
83	27	87住	No.02	刀子	127.3	13.4	5.6	15.0	Fe	茎尻欠
84	38	87住	検出面	釘	55.2	8.6	7.3	4.6	Fe	脚部先端欠/断面方形
85		87住	検出面	不明	29.9	8.8	6.4	2.5	Fe	
86		87住		不明	22.7	8.4	3.1	1.0	Fe	
87	53	88住	No.01	斧	114.4	39.7	32.8	212.8	Fe	完形
88		94住	南側下層	不明	41.6	29.9	7.1	11.7	Fe	
89	40	96住	南側	釘	33.5	11.0	9.2	2.3	Fe	頭部の一部、脚部欠/断面長方形
90		96住	検出面	不明	34.8	22.3	6.8	7.8	Fe	
91	63	97住		牽引鉄	100.0	28.0	7.0	25.3	Fe	脚部先端欠
92		98住	北側	煙管	15.8	15.5	10.6	2.5	Cu	雁首
93		99住	検出面	釘	42.6	14.4	9.7	4.1	Fe	
94		99住	検出面	釘	38.5	6.3	5.1	1.8	Fe	

第12表 金属製品一覧(1/4)

No.	実測 図	出土遺構	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	金属 種別	備考
95		99住	南西上層	不明	34.9	8.6	3.7	2.7	Fe	
96		100住		鏃	78.0	31.9	3.7	16.4	Fe	
97		101住	北西	不明	43.6	5.8	5.7	2.4	Fe	
98		103住	No.17	刀子	81.4	15.5	6.0	9.6	Fe	
99		103住	No.28	刀子	75.2	17.3	10.3	13.8	Fe	
100	30	103住		刀子	76.2	9.2	7.0	6.6	Fe	茎部の一部欠
101		109住	東側	刀子	80.4	12.0	5.0	6.4	Fe	
102	33	110住	No.28	刀子	128.2	14.0	7.3	15.8	Fe	茎尻欠
103	31	110住	南側	刀子	85.2	13.8	6.8	8.2	Fe	茎部の一部
104		110住	南側	刀子	34.5	10.2	4.7	2.6	Fe	
105	50	110住	南側	鏃	58.8	46.4	12.2	15.9	Fe	雁股鏃／片側の刃部先端、篋被部、茎部欠
106		110住	北側	不明	37.8	6.3	5.4	1.9	Fe	
107	81	110住	No.01	鉞尾	39.1	35.2	3.2	13.9	Cu	裏金具欠
108	82	110住	No.03	鉞尾	37.2	34.9	4.7	12.1	Cu	裏金具の一部欠
109		114住	南側	釘	39.5	7.5	7.2	2.9	Fe	
110		114住	南側	釘	25.9	6.5	6.3	1.7	Fe	
111		115住	検出面	釘	62.0	8.4	8.4	4.2	Fe	
112		122住		刀子	76.9	10.2	6.0	7.5	Fe	
113		122住	東側	不明	33.5	23.9	8.6	5.5	Fe	
114		126住	北側	不明	33.4	22.5	1.6	2.8	Fe	
115		126住	北側	不明	27.4	26.6	2.6	2.0	Fe	
116	85	126住	No.01	巡方	31.5	29.7	2.5	5.9	Cu	裏金具欠
117		133住	表面	不明	60.3	3.6	2.1	1.9	Fe	
118		135住	溝	不明	-	-	-	3.8	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
119		136住	No.05	刀子	136.5	17.7	5.3	26.3	Fe	
120		136住	No.07	刀子	40.9	15.7	5.7	5.2	Fe	
121		136住	No.06	刀子	42.4	5.5	2.2	1.1	Fe	
122		136住	No.07	刀子	20.6	11.9	5.5	1.8	Fe	
123		136住	表面	鏃	110.4	32.1	10.7	29.0	Fe	雁叉鏃
124		136住	No.27	丸釘か	42.6	4.0	3.6	1.5	Fe	
125		136住	No.03	不明	106.5	8.0	7.0	12.2	Fe	
126		136住	No.03	不明	31.3	15.4	7.5	5.2	Fe	
127		136住	No.07	不明	32.9	5.5	4.8	1.4	Fe	
128		136住	No.06	不明	-	-	-	0.8	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
129		138住	No.10	不明	78.2	8.8	7.5	8.8	Fe	
130		138住	No.13	不明	10.1	6.0	5.5	0.4	Fe	
131		138住	No.12	不明	20.5	7.8	0.5	0.1	Fe	材質不明
132		140住	表面	不明	62.5	14.4	3.7	30.7	Fe	
133		140住	北西壁	不明	28.2	19.5	8.5	6.8	Fe	
134		141住	No.02	不明	48.4	15.6	3.1	9.9	Fe	
135		143住	P4	刀子	125.8	15.8	10.0	17.3	Fe	
136	51	143住	No.03	鏃	158.0	38.9	7.2	76.9	Fe	基部の端部欠／基部の両面に木質付着
137		143住	表面	不明	33.3	6.3	3.8	2.0	Fe	
138		143住	P4	不明	25.5	7.6	7.2	1.7	Fe	
139		144住	No.01	不明	72.0	10.0	3.8	5.0	Fe	
140		145住	No.17	不明	52.8	11.0	8.5	11.5	Fe	
141		145住	No.07	不明	29.5	17.8	8.8	4.7	Fe	
142		145住	No.07	不明	24.0	12.0	5.8	1.8	Fe	
143		146住	北東上～下層	釘	16.0	6.7	3.4	0.9	Fe	
144		150住	No.12	不明	-	-	-	3.0	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
145	10	152住	No.09	刀子	114.1	14.8	6.5	15.4	Fe	切先、茎尻欠
146		152住	No.09	不明	30.0	9.0	4.4	2.3	Fe	
147	13	153住		刀子	116.2	10.9	9.0	11.8	Fe	切先欠／木製の柄が付く
148		153住	北西	紡錘車	63.4	63.3	3.7	37.0	Fe	
149	14	155住	No.18	刀子	102.8	10.7	5.6	6.3	Fe	茎尻欠
150	17	155住	No.12	刀子か	106.5	21.6	7.0	18.3	Fe	断面三角形
151	39	155住	No.22	釘	68.4	6.3	7.7	8.3	Fe	脚部先端わずかに欠／断面方形
152		156住	北東	不明	-	-	-	1.3	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
153	16	157住	No.05	刀子	114.2	21.3	5.1	20.2	Fe	茎部の一部欠
154		157住	No.05	鏃	66.1	20.9	3.4	7.9	Fe	
155		157住	No.05	釘	25.7	5.5	4.9	1.4	Fe	
156		158住	北東中層	刀子	66.3	12.1	9.1	5.2	Fe	
157		161住	No.04	刀子	75.3	14.1	6.8	10.8	Fe	
158	48	161住	No.03	鏃	66.3	28.0	9.0	10.9	Fe	身部欠、茎部欠
159	52	161住	No.01	鏃	122.9	22.1	5.7	23.3	Fe	完形
160		161住	No.99	不明	60.0	16.4	4.0	7.2	Fe	
161	95	161住	No.95	延喜通宝	19.0	18.4	3.5	3.6	Cu	完形／初鑄907年(醍醐天皇)
162	96	161住	No.95	延喜通宝か	20.2	20.2	2.0	2.0	Cu	完形
163	97	161住	No.95	延喜通宝か	19.3	19.0	1.5	2.6	Cu	完形
164	98	161住	No.95	延喜通宝	19.5	19.2	1.9	2.2	Cu	完形／初鑄907年(醍醐天皇)
165	99	161住	No.95	延喜通宝か	21.2	20.9	2.4	3.0	Cu	わずかに欠
166		164住	No.01	刀子	36.0	13.0	7.3	4.6	Fe	
167		164住	No.09	鏃	77.1	9.1	4.9	6.5	Fe	
168		164住	No.21	不明	65.3	8.0	7.8	5.2	Fe	
169		164住	No.01	不明	-	-	-	10.0	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
170		164住	No.09	不明	-	-	-	8.8	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
171		164住	ベルト	不明	-	-	-	8.4	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
172		164住	No.11	不明	-	-	-	3.6	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
173		165住	Pit	釘	32.0	10.5	5.2	5.1	Fe	
174		165住	Pit	不明	33.5	31.5	10.0	16.5	Fe	
175		165住	Pit	不明	39.6	22.6	8.0	12.1	Fe	
176		166住	P1	不明	-	-	-	3.5	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
177		168住	北西	不明	47.0	5.8	5.1	2.3	Fe	
178		171住	No.01	刀子	62.2	13.3	6.5	8.3	Fe	
179		171住	No.02	刀子	42.1	8.0	1.2	1.5	Fe	
180		171住	No.02	不明	-	-	-	5.9	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
181		171住	No.01	不明	-	-	-	3.0	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
182		173住	No.21貼床下	釘	62.0	11.6	8.2	9.7	Fe	
183		173住	No.01	不明	38.8	13.6	5.1	3.6	Fe	
184		173住	No.01	不明	14.2	8.6	4.0	0.8	Fe	
185	92	174住	No.01	不明	40.8	33.2	3.0	4.5	Cu	板状製品
186	86	175住		巡方	27.8	23.2	5.7	6.2	Cu	裏金具、透かしの一部欠
187		176住	床面	不明	29.4	23.3	2.1	2.0	Fe	
188	91	180住	No.01	銅鏡	42.0	35.0	10.0	26.3	Cu	海獣葡萄鏡

第12表 金属製品一覧(2/4)

No.	実測 図	出土遺構	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	金属 種別	備考
189		182住	No.05	刀子	170.0	13.5	6.1	19.0	Fe	
190	29	182住	No.01	刀子	151.0	15.5	8.0	18.3	Fe	茎尻欠
191		182住	No.04	刀子	77.2	11.6	4.8	7.0	Fe	
192		182住	No.01	不明	45.7	7.7	4.5	2.3	Fe	
193		182住	No.09	不明	44.2	7.5	5.0	3.0	Fe	
194		182住	北東	不明	22.8	11.5	3.0	1.3	Fe	
195	32	184住	No.01	刀子	235.0	17.0	9.0	22.5	Fe	完形
196		184住	No.03	釘	51.4	7.5	6.5	3.1	Fe	
197		184住	No.09	不明	53.1	17.0	5.6	9.6	Fe	
198	45	186住	No.03	鏃	141.0	16.0	11.5	20.3	Fe	身部の一部、身部関欠
199		186住	No.13	鏃	57.2	21.5	3.2	9.9	Fe	
200		186住	No.19	不明	134.0	8.2	7.7	11.3	Fe	
201		186住	No.08	不明	67.1	6.0	8.0	6.8	Fe	
202		186住	No.14	不明	39.7	9.5	3.5	2.9	Fe	
203		186住	No.14	不明	31.7	9.0	6.5	2.7	Fe	
204		188住	表面	不明	12.7	10.2	7.0	1.2	Fe	
205		189住	No.01	鐸	39.4	16.3	14.5	11.5	Fe	
206		191住	No.13	釘	63.7	10.0	5.8	6.5	Fe	
207		191住	No.11	不明	48.5	9.5	4.5	3.0	Fe	
208		191住	No.11	不明	30.3	7.1	3.0	1.6	Fe	
209		191住	No.11	不明	19.7	8.5	4.0	1.5	Fe	
210		193住	北東	不明	-	-	-	1.3	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
211		195住	南東	不明	24.6	23.1	2.3	4.1	Fe	
212		195住	南東	不明	-	-	-	1.7	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
213		196住	No.06	刀子	105.8	12.8	9.8	10.9	Fe	
214	78	197住		不明	33.3	30.2	7.2	6.3	Fe	板状製品／孔を持つ
215	76	197住		不明	35.6	28.5	4.5	4.1	Fe	断面方形の棒状製品／屈曲する
216	77	197住		不明	24.9	24.3	3.2	2.1	Fe	板状製品／孔を持つ
217		197住	南西	不明	-	-	-	2.2	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
218		200住	No.11	不明	89.0	10.8	7.7	10.7	Fe	
219		200住	No.08	不明	72.1	5.0	4.0	3.1	Fe	
220		203住	No.08	不明	26.5	5.0	3.5	1.3	Fe	
221		205住	No.01	刀子	46.0	10.8	4.3	3.7	Fe	
222	49	205住	No.08	鏃	78.3	20.0	8.3	0.9	Fe	茎部欠
223		205住	No.08	鏃	30.3	6.0	3.7	0.9	Fe	
224		206住	南東	不明	13.8	5.4	4.2	0.4	Fe	
225		207住	床面	不明	26.0	6.5	4.2	0.7	Fe	
226		216住	床No.01	不明	24.2	13.4	1.0	1.2	Cu	
227		217住	No.04	不明	59.5	15.7	3.3	6.7	Fe	
228		219住	No.03	刀子	150.5	14.8	6.5	7.9	Fe	
229		219住	No.03	刀子	66.2	13.7	9.3	7.9	Fe	
230		220住	南西	不明	22.3	4.5	3.4	0.4	Fe	
231	35	221住	No.10	刀子	143.1	11.0	5.5	11.9	Fe	切先欠
232	34	221住	No.13	刀子	137.5	21.5	7.2	25.8	Fe	茎尻欠
233		221住	No.02	釘	94.8	12.1	10.7	12.6	Fe	
234		221住	No.03	不明	91.2	15.1	5.8	19.1	Fe	
235		221住	北西	不明	54.7	8.0	5.4	4.1	Fe	
236		221住	北西	不明	-	-	-	1.7	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
237		222住	No.01	刀子	85.8	12.4	4.8	9.0	Fe	
238		222・223住	南西	刀子	34.6	9.4	4.1	2.5	Fe	
239		223住	No.70	刀子	123.8	12.5	7.5	9.7	Fe	
240		223住	南東上～下層	刀子	91.8	11.4	5.0	8.1	Fe	
241		223住	No.01	釘	47.4	8.0	6.5	5.1	Fe	
242		223住	P1 No.77	不明	106.3	12.1	7.4	11.9	Fe	
243		223住	No.02	不明	47.8	4.5	4.5	2.4	Fe	
244		223住	P1 No.77	不明	29.4	7.2	4.5	1.5	Fe	
245		223住	No.02	不明	-	-	-	1.6	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
246		223住	No.01	不明	-	-	-	0.4	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
247		224住	No.01	刀子	81.7	10.1	2.4	5.0	Fe	
248		224住	No.24	刀子	25.8	10.8	2.5	1.1	Fe	
249		224住	No.01	不明	-	-	-	9.1	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
250		224住	No.24	不明	-	-	-	3.3	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
251		225住	カマドNo.01	刀子	163.0	11.6	5.5	20.2	Fe	
252		225住	南西	紡錘車	35.3	26.8	3.1	6.4	Fe	
253		225住	No.23	不明	37.1	15.4	2.5	2.0	Fe	
254		225住	カマドNo.01	不明	-	-	-	2.7	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
255		225住	カマド	不明	-	-	-	2.4	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
256		225住	南西	不明	-	-	-	2.3	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
257	64	227住	No.02	鋸	190.0	23.3	6.5	33.5	Fe	のこ身両端欠／両面に木質付着
258		227住	No.01	不明	65.0	7.5	4.3	3.4	Fe	
259		227住	No.01	不明	27.9	7.2	4.9	2.2	Fe	
260		227住	No.01	不明	32.0	7.0	5.0	1.8	Fe	
261		235住		不明	-	-	-	17.5	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
262		237住	上層	不明	-	-	-	4.7	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
263		247住	No.02	刀子	58.5	12.5	5.2	4.2	Fe	
264		247住	No.02	不明	-	-	-	1.7	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
265		251住	表面	不明	50.6	6.4	5.1	3.8	Fe	
266		251住	ベルト	不明	-	-	-	2.1	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
267		251住	表面	不明	-	-	-	1.6	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
268		258住	P1	不明	-	-	-	3.3	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
269		262住	No.02	不明	36.3	14.7	2.3	2.7	Fe	
270		263住	No.01	不明	-	-	-	3.4	Cu	錆化による損傷が著しく、計測不可
271		264住	No.07	不明	70.1	12.1	6.5	7.9	Fe	
272		264住	No.07	不明	-	-	-	1.4	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
273		264住	No.07	不明	-	-	-	1.0	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
274	56	268住	No.01	紡錘車	147.3	50.5	7.5	29.7	Fe	紡軸両端欠
275		269住	No.12	不明	33.3	5.1	4.7	1.3	Fe	
276		274住	北東	丸釘	21.9	7.9	5.7	0.8	Fe	
277		275住	南北ベルト	不明	47.6	14.6	6.5	7.0	Fe	
278	41	277住	No.39	釘	36.6	6.4	6.3	1.5	Fe	頭部欠／断面方形／脚部に木質付着
279	62	278住	No.01	刃物	61.5	24.2	3.8	9.0	Fe	片側に刃部を持つ
280		278住	No.04	不明	59.5	8.2	7.8	9.2	Fe	
281		278住	攪乱	不明	22.4	18.3	6.9	8.5	Fe	
282		279住	南抜張区	不明	81.3	39.1	13.0	44.0	Fe	

第12表 金属製品一覧(3/4)

No.	実測 図	出土遺構	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	金属 種別	備考
283		279住	攪乱	不明	41.5	6.0	5.2	1.9	Fe	
284		281住		丸釘	27.3	9.9	8.2	2.9	Fe	
285		281住	攪乱	不明	27.2	18.0	3.3	2.7	Fe	
286		281住		不明	26.5	6.2	4.0	0.9	Fe	
287		281住	No.41	不明	-	-	-	2.9	Fe	銹化による損傷が著しく、計測不可
288	88	281住	No.782	鏡	90.0	74.2	1.0	32.0	Cu	胴部か
289	57	284住	No.01	紡錘車	42.8	41.2	28.4	16.4	Fe	紡輪及び紡軸の一部
290	67	285住	No.135	不明	54.9	5.4	5.0	2.3	Fe	棒状製品／断面は部位により長方形と方形で異なる
291		285住	No.06	不明	17.3	5.4	5.0	1.0	Fe	
292	4	286住	No.78	刀子	260.5	15.8	6.1	30.2	Fe	完形
293		286住	No.79	不明	28.2	9.9	3.6	1.6	Fe	
294		286住	No.80	不明	21.7	7.5	4.8	1.3	Fe	
295	83	287住	No.203	丸轆	27.7	17.8	3.4	3.2	Cu	裏金具欠
296	6	288住	No.149	刀子	135.3	15.8	4.5	15.8	Fe	切先、茎尻欠
297	12	288住	No.300	刀子	71.9	8.6	3.7	4.2	Fe	茎部の一部
298	69	288住	No.45	不明	67.5	9.4	5.5	5.1	Fe	断面長方形の棒状製品／片側の幅が徐々に減じる
299	70	288住	No.51	不明	71.1	21.4	5.3	1.2	Fe	板状製品／両面に木質付着
300		288住	No.61	不明	32.7	7.5	7.0	1.6	Fe	
301	54	291住	No.01	斧	150.0	59.5	41.0	610.0	Fe	完形
302	5	293住	No.52	刀子	64.3	16.6	7.1	13.7	Fe	身部及び茎部の一部
303	71	293住	No.68	不明	50.0	28.5	4.0	9.6	Fe	板状製品
304	74	293住	No.83	不明	41.7	9.8	4.7	3.9	Fe	断面長方形の棒状製品
305		293住	No.81	不明	17.4	9.9	3.4	1.1	Fe	
306		4-土21	No.13	不明	44.3	5.6	4.6	1.5	Fe	釘状
307	9	4-土41	No.08	刀子	146.6	12.5	5.9	11.9	Fe	切先欠／茎部の両面に木質付着
308		4-土52		不明	66.3	13.0	8.5	11.6	Fe	ボルト状
309		溝6	No.18	不明	30.6	30.4	3.9	5.6	Fe	
310		溝6	b-c間上層	不明	35.6	6.6	3.4	1.6	Fe	
311		溝6	i-j間	不明	15.9	4.8	4.3	0.5	Fe	
312		溝6	b-c間上層	不明	-	-	-	3.8	Fe	銹化による損傷が著しく、計測不可
313		溝6		不明	-	-	-	8.4	Fe	銹化による損傷が著しく、計測不可
314		溝19		不明	98.0	7.8	6.1	8.5	Fe	
315		溝19	トレンチ	不明	37.0	9.5	9.3	6.4	Fe	
316		溝19		不明	20.8	10.9	5.3	1.4	Fe	
317		通路状遺構5	攪乱	不明	39.8	19.4	4.0	4.7	Fe	
318		通路状遺構5	攪乱	不明	38.8	24.0	4.5	5.8	Fe	
319		4区-P8		不明	49.3	12.6	11.3	18.2	Fe	
320		焼土1付近		不明	-	-	-	49.3	不明	銹化による損傷が著しく、計測不可
321		1区-検出面	126住から3m西	刀子	71.8	15.2	10.0	10.4	Fe	
322		1区-検出面	24住から6m北西	釘	30.4	6.0	5.5	1.5	Fe	
323		1区-検出面	91住から1.5m北	馬具	34.0	24.5	6.9	4.0	Fe	
324		1区-検出面	68住から3m東	丸釘	33.0	9.2	8.5	1.3	Fe	
325		1区-検出面	68住から3m東	丸釘	26.5	4.1	4.1	1.4	Fe	
326		1区-検出面	90住から1.5m東	ボルト	86.0	20.5	18.0	36.8	Fe	
327		1区-検出面	26住から2m北西	不明	155.0	63.0	4.0	91.0	Fe	
328		1区-検出面		不明	216.0	8.9	7.2	24.0	Fe	
329		1区-検出面		不明	72.8	10.0	8.0	7.7	Fe	
330		1区-検出面	87住から2.5m南	不明	46.5	15.8	11.2	12.0	Fe	
331		1区-検出面	78住から1m東	不明	25.6	4.3	4.3	1.0	Fe	
332		1区-検出面	86住から3m南	不明	16.0	3.9	2.6	0.2	Fe	
333	42	1区-検出面		釘	82.1	16.2	5.5	9.6	Fe	脚部先端欠／断面方形
334		2区-検出面		刀子	28.7	11.3	4.5	5.0	Fe	
335		2区-排土		刀子	80.7	13.4	5.8	6.1	Fe	
336	72	4区-検出面	攪乱	不明	24.8	24.5	10.1	4.5	Fe	断面長方形の輪状製品
337	66	4区-検出面	No.009	不明	54.3	9.8	5.5	6.2	Fe	断面長方形の棒状製品／形状は鏝に似る
338	68	4区-検出面	No.561	不明	47.7	13.4	10.6	17.9	Fe	棒状製品／断面は部位により長方形と方形で異なる
339		4区-検出面	No.012	不明	30.7	8.2	8.0	2.8	Fe	
340		4区-検出面	No.015	煙管	42.7	11.0	11.0	6.0	Cu	吸口
341		4区-検出面	No.783	開元通宝	22.3	21.8	1.1	1.6	Cu	わずかに欠／初鑄621年(唐)
342		4区-検出面	No.784	熙寧元宝	24.4	23.4	1.0	1.8	Cu	わずかに欠／初鑄1068年(宋)
343		4区-検出面	No.001	寛永通宝	23.2	22.9	1.1	2.3	Cu	完形／初鑄1636年(明正天皇)
344		4区-検出面	No.008	雁首銭	20.7	19.4	1.7	2.8	Cu	
345		4区-検出面	No.381	不明	19.7	19.1	2.0	0.5	Cu	

第12表 金属製品一覧(4/4)

No.	出土遺構	出土地点	重量(g)	No.	出土遺構	出土地点	重量(g)	No.	出土遺構	出土地点	重量(g)
1	1住	東側	236.0	24	22・23住	検出面	126.0	47	39住	検出面	199.5
2	4住	北側	54.0	25	25住	南側	1041.2	48	39住	南側	36.0
3	4住	南側	14.0	26	25住		210.8	49	44住	東側	242.0
4	4住	南側	24.0	27	25住		174.0	50	45住	南側	34.0
5	8住		636.0	28	25住	北側	135.8	51	49住	北側	174.0
6	8住		100.0	29	28住	西側上層	50.0	52	49住	南側	122.0
7	9住	北側下層	54.0	30	28住	西側中層	4.0	53	50住	東側下層	126.0
8	9住	北側	46.0	31	29住	北側	116.0	54	50住	東側下層	96.8
9	10住	西側	66.0	32	29住	No.15	8.7	55	50住	P12	82.0
10	11住	南側上層	118.0	33	30住	検出面	148.0	56	50住	カマド	56.0
11	15住	南側	226.0	34	31住	北側	217.0	57	50住	西側中層	18.0
12	15住	No.09	60.0	35	32住	検出面	330.0	58	50住	東側下層	14.0
13	17住	検出面	52.0	36	32住		642.0	59	50住	上層	4.0
14	17住		38.0	37	33住	No.05	336.0	60	50住	ベルト	20.0
15	20住	南側	273.0	38	33住	西側上層	160.0	61	50住	下層	56.0
16	20住	ベルト	159.7	39	33住		28.0	62	55住	No.08	1198.0
17	20住	北側	50.0	40	33住	東側中層	24.0	63	54住	東側	460.4
18	21住	西側	228.0	41	33住	東側下層	16.0	64	54住		427.4
19	22住	南側	159.9	42	33住	西側下層	8.0	65	55住	P17	314.0
20	22住	南側	16.0	43	34住	南側上層	636.0	66	55住	北側中層	298.0
21	23住	南側	198.0	44	35住	東側	46.0	67	55住	北側中層	274.0
22	23住	北側	36.0	45	36住	東側	194.0	68	55住	北側下層	102.0
23	21～23住	検出面	32.0	46	39住	北側	768.0	69	55住	北側上層	84.0

第13表 鉄滓一覧(1/3)

No.	出土遺構	出土地点	重量(g)	No.	出土遺構	出土地点	重量(g)	No.	出土遺構	出土地点	重量(g)
70	55住	ベルト	66.0	164	99住	Pit	112.0	258	166住	No.15	66.0
71	55住	P3	62.0	165	99住	検出面	50.0	259	166住	P1	10.0
72	55住	南側中層	52.0	166	99住	中層	34.5	260	166住	北西	264.0
73	55住	カマド周辺	44.0	167	101住		158.0	261	166住	上層	296.0
74	55住	検出面	34.0	168	102住	検出面	276.0	262	167住	No.07	198.0
75	55住	南側中層	18.0	169	103住	南側	4.0	263	168住	No.03	236.0
76	55住	検出面	8.9	170	103住	北側	112.0	264	168住	No.13	436.0
77	56住	東側	350.0	171	104住		16.0	265	168住	No.14	240.0
78	56住	西側	392.0	172	107住	西側	566.0	266	168住	南東	20.0
79	58住	北側	34.0	173	109住	東側	146.0	267	168住	ベルト	70.0
80	58住	北側	422.0	174	110住	南側	4.0	268	168住	南東	38.0
81	58住	北側	45.9	175	110住	南側上層	88.0	269	169住	北東	92.0
82	59住	No.02	235.3	176	110住	北側	32.0	270	169住	北西	2.0
83	59住	ベルト	486.0	177	110住	北側	28.0	271	171住	南東	42.0
84	59住		112.0	178	110住	西側	46.0	272	171住	北西	108.0
85	59住		34.0	179	113住	東側	18.0	273	171住	北東	86.0
86	59住		10.0	180	114住	北側	8.0	274	172住	北側	56.0
87	59住	東側上層	100.0	181	114住	北側下層	40.0	275	172住	南側	72.0
88	59住	西側上層	938.0	182	114住	南側下層	98.0	276	173住	北西	10.0
89	59住	西側上層	654.0	183	114住	北側下層	26.0	277	173住	南東	18.0
90	59住	西側中層	10.0	184	121住		300.0	278	174住	北東	8.0
91	59住	西側中層	464.0	185	122住		82.0	279	175住	No.07	90.0
92	59住	西側下層	100.0	186	122住	東側	38.0	280	175住	No.24	228.0
93	59住	東側下層	46.0	187	124住	南側	372.0	281	175住	ベルト	24.0
94	59住	西側下層	244.0	188	124住	北側	178.0	282	175住	北東	26.0
95	59住	検出面	10.0	189	124住	北側	76.0	283	175住	南東	6.0
96	59住	検出面	30.0	190	125住	ベルト	144.0	284	175住	ベルト	6.2
97	61住	No.03	20.0	191	126住	北側	220.0	285	180住	北側上層	42.0
98	61住	南側	88.0	192	128住	西側	66.0	286	180住	南側上層	24.0
99	61住	北側	8.0	193	132住	No.02	330.0	287	180住	北西	350.0
100	62住	No.01	259.5	194	132住	No.03	10.0	288	181住	No.03	194.0
101	63住	西側	580.0	195	133住	北西	90.0	289	181住	No.05	192.0
102	64住		188.0	196	133住		4.0	290	181住	上層	18.0
103	64住	検出面	200.0	197	136住	No.04	240.0	291	182住		28.0
104	66住	南側	253.8	198	136住	南東	68.0	292	182住	北壁	10.0
105	68住	上層	10.0	199	136住	北西	322.0	293	183住	南東	42.0
106	68住	上層	338.0	200	136住	南西	64.0	294	183住	南西	24.0
107	70住	西側	66.0	201	137住	No.01	132.0	295	183住	ベルト	6.0
108	70住		12.0	202	137住	No.02	188.0	296	186住	ベルト	30.0
109	72住	南側	16.0	203	138住	No.11	16.0	297	187・208住	表面	94.0
110	72住		144.0	204	138住	北東下床面	6.0	298	189住	北西	54.0
111	72住	北側	38.0	205	138住	南東下床面	22.0	299	190住	No.01	348.0
112	73住	南側	50.0	206	138住	南東	18.0	300	191住	No.03	42.0
113	76住		12.0	207	138住	No.09	17.7	301	191住	ベルト	106.0
114	76住	北側上層	28.0	208	139住	ベルト	126.0	302	191住	ベルト	4.0
115	76住	検出面	594.6	209	140住	北西	600.0	303	191住	表面	590.0
116	77住	No.03	394.0	210	140住	ベルト	10.0	304	192住	No.07	250.0
117	77住	No.04	80.0	211	140住	南東	14.8	305	192住	No.08	74.0
118	77住		20.0	212	141住	No.05	16.0	306	192住	No.09	328.0
119	77住		10.0	213	142住	南西	168.0	307	192住	南西	80.0
120	79住	下層	484.0	214	142住	南東	38.0	308	193住	Pit	62.0
121	80住	ベルト	342.0	215	143住	No.04	54.0	309	193住	南西	12.0
122	80住	南側	27.6	216	143住	表面	3.8	310	193・257住	表面	58.0
123	82住	南側	18.5	217	144住	北側	52.0	311	194住	北西	10.0
124	82住	北側	22.0	218	145・146・239~241住	上層	16.0	312	194住	北東	60.0
125	83住		88.8	219	146住	南西上~下層	116.0	313	195住	南東	88.0
126	84住	北側	338.7	220	146・238・241・242住	表面	8.0	314	195住	北西	26.0
127	84住	検出面	346.0	221	150住	南西	40.0	315	195住	北西上~下層	40.0
128	84住	南側	108.0	222	151住	北東	24.0	316	199住	北東	14.0
129	84住		510.0	223	152住	ベルト	70.0	317	199住	北東	26.0
130	85住	西側	250.6	224	153住	北西	296.0	318	199住	ベルト	16.0
131	85住	検出面	8.7	225	154住	南東	48.0	319	199・211住	表面	8.0
132	85住	ベルト	18.5	226	155住	南東	44.0	320	200住	南西	32.0
133	85住	東側	96.2	227	155住	No.19	354.0	321	200住	北西	140.0
134	85住	検出面	22.0	228	155住	No.19	11.9	322	200住	ベルト	8.0
135	86・87住	検出面	12.0	229	156住	P1	28.0	323	200住	ベルト	22.0
136	87住	検出面	174.9	230	156住	南東	188.0	324	200住	ベルト	32.0
137	88住	検出面	168.0	231	156住	ベルト	18.0	325	205住	表面 左床	308.0
138	89住		142.0	232	156住	ベルト	178.0	326	206住	南東	90.0
139	90住		52.0	233	156住	No.03	12.0	327	206住	北西	22.0
140	90住	上層	16.0	234	156住	P2	202.0	328	207住	ベルト	142.0
141	90住	検出面	20.0	235	156住	北東	4.0	329	208住	北西	18.0
142	92住		18.0	236	156住	南東	22.0	330	208住	南西	84.0
143	92住	検出面	82.0	237	156住	南西	8.0	331	212住	No.17	480.0
144	92住	検出面	12.0	238	157住	No.06	47.0	332	212住	北西	44.0
145	93住		162.0	239	157住	No.07	92.0	333	212住	北西	46.0
146	95住	北側	276.0	240	157住	南西	20.0	334	212住	南西	352.0
147	96住	カマド	8.0	241	157住	北西	68.0	335	213住	南西	24.0
148	96住	南側	92.0	242	157住	南東	6.0	336	213住	ベルト	194.0
149	96住	南側	6.6	243	158住	No.07	84.0	337	213住	No.08	72.5
150	96住	南側	70.6	244	158住	北東上~下層	5.2	338	213住	北東	2.7
151	96住	北側	57.1	245	159住	ベルト	30.0	339	213・233・234住	上層	34.0
152	97住	東側	322.0	246	161住	表面	230.0	340	215住	北側	68.0
153	97住	西側	786.0	247	164住	表面	48.0	341	215住	南側	6.0
154	98住	ベルト	82.0	248	164住	南東	6.0	342	216住	No.15	106.0
155	99住	北西上層	82.0	249	164住	南西	124.0	343	217住	No.02	646.0
156	99住	北西中層	40.0	250	164住	北西	386.0	344	217住		188.0
157	99住	北東中層	44.0	251	164住	北西	62.0	345	217住		18.0
158	99住	北東中層	61.1	252	165住	表面	2880.0	346	217住		26.0
159	99住	北東下層	82.0	253	165住	Pit	522.0	347	217住	南西	6.0
160	99住	南西下層	24.0	254	165住	南側	2775.0	348	217住	南西上層	12.0
161	99住	北西下層	240.2	255	165住	北側	676.0	349	217住	南東	36.0
162	99住	西側ベルト	119.2	256	165住	上層	8.0	350	217住	南東	44.0
163	99住	北西	154.0	257	165住	Pit	1086.0	351	218住	床面	64.0

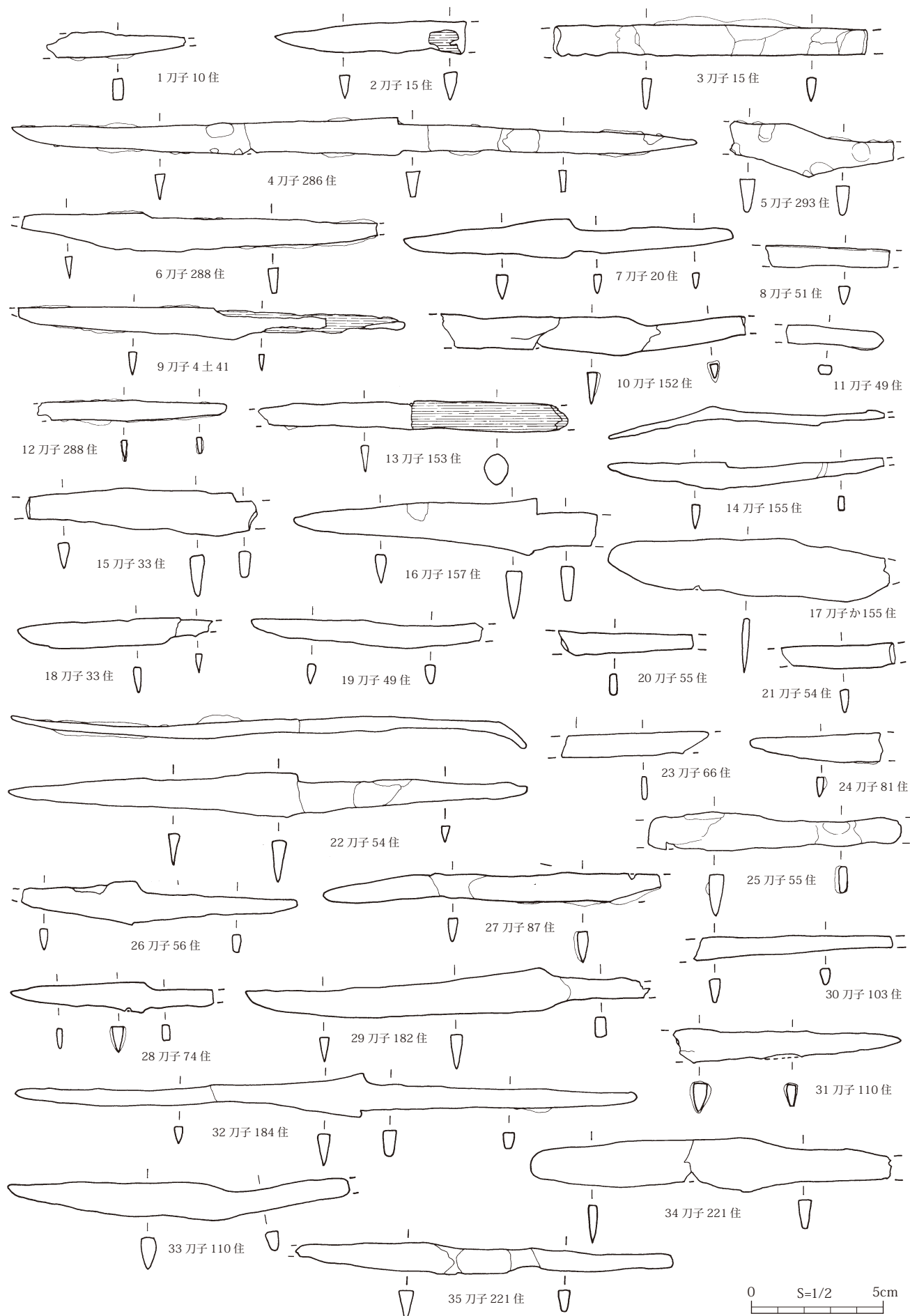
第13表 鉄滓一覧(2/3)

No.	出土遺構	出土地点	重量(g)	No.	出土遺構	出土地点	重量(g)	No.	出土遺構	出土地点	重量(g)
352	219住	北西	1.0	389	266住	北西	52.0	426	溝6	d-e間	14.0
353	219住	北西	64.0	390	272住	P9	30.0	427	溝6	d-e間上層	32.0
354	220住	No.01	92.0	391	276住	No.03	56.8	428	溝6	b-c間上層	230.0
355	221住	No.01	86.0	392	278住	No.02	160.5	429	溝6	h-i間	8.0
356	221住	No.03	118.0	393	278住	No.03	36.9	430	溝6	g-h間	298.0
357	221住	北東	52.0	394	285住	No.40	7.8	431	溝6	f-g間 土77	50.0
358	221住		50.0	395	285住	No.41	29.2	432	溝6	e-f間	188.0
359	221住	南東	16.0	396	285住	No.162	11.5	433	溝6	d-e間	126.0
360	221住	北西	124.0	397	288住	No.31	14.3	434	溝6	d-e間 トレンチ4	272.0
361	222・223住	上層	70.0	398	288住	Pit	2.4	435	溝6	d-e間	50.0
362	222・223住	北西	8.0	399	288住	西壁一括	3.3	436	溝6	d-e間	34.0
363	222・223住	南西	14.5	400	290住	No.52	13.8	437	溝6	b-c間 No.01	242.0
364	223住	No.03	264.0	401	建6	中央Pit	246.0	438	溝6	特殊遺構2	12.0
365	223住	南東上～下層	184.0	402	1-12	検出面	26.0	439	溝6	トレンチg	76.0
366	223住	P2	144.0	403	1-13	西側	136.0	440	溝7		6.0
367	223住	北東下層	152.0	404	1-15		171.7	441	溝8	北側	16.0
368	226住	No.13	104.0	405	1-17		20.0	442	溝8	北側	500.0
369	226住	北東	4.0	406	溝19		13.4	443	溝8	北側	8.0
370	226住	ベルト	28.0	407	溝19		10.8	444	溝8	北側	114.0
371	227住	No.07	142.0	408	溝2		424.0	445	溝8	北側	396.0
372	227住	ベルト	56.0	409	溝2		52.0	446	2区-検出面		160.2
373	227住	南東	86.0	410	溝2		156.0	447	2区-検出面		350.0
374	228住	南西	6.0	411	溝2	No.13	130.0	448	1区-検出面		128.0
375	229住	北東	4.0	412	溝2		46.0	449	1区-検出面	26住から2m北西	34.0
376	229住	北東	8.5	413	溝2		68.0	450	1区-検出面	58住から2.5m北	38.0
377	233住		8.0	414	溝2		52.0	451	1区-検出面	64住から0.2m北西	18.0
378	238住		18.0	415	溝2	No.06	250.0	452	1区-検出面	68住から3m東	46.0
379	243住	No.03	386.0	416	溝2	No.07	386.0	453	1区-検出面	82住から0.3m北東	28.1
380	247住	北西	20.0	417	溝3	中央北側検出面	66.0	454	1区-検出面		449.0
381	255住		134.0	418	溝3	中央北側検出面	290.0	455	1区-検出面	90住から1.5m東	19.9
382	256住	北東上～下層	90.0	419	溝3	中央	28.0	456	1区-検出面	1区 検出面	120.0
383	257住	No.03	4.0	420	溝4	トレンチ4	22.0	457	1区-検出面	2区 検出面	14.0
384	257住	No.06	52.0	421	溝4	東側検出面	18.0	458	1区-排土		64.0
385	260住	ベルト	90.0	422	溝6	トレンチ西側	12.0	459	2区-検出面	西側	24.0
386	264住	No.05	86.0	423	溝6	j-k間下層	194.0	460	2区-検出面	北側	100.0
387	264住	北西	10.0	424	溝6	e-f間中層	100.0	461	4区-検出面	No.597	11.3
388	266住	No.03	128.0	425	溝6	e-f間下層	76.0				

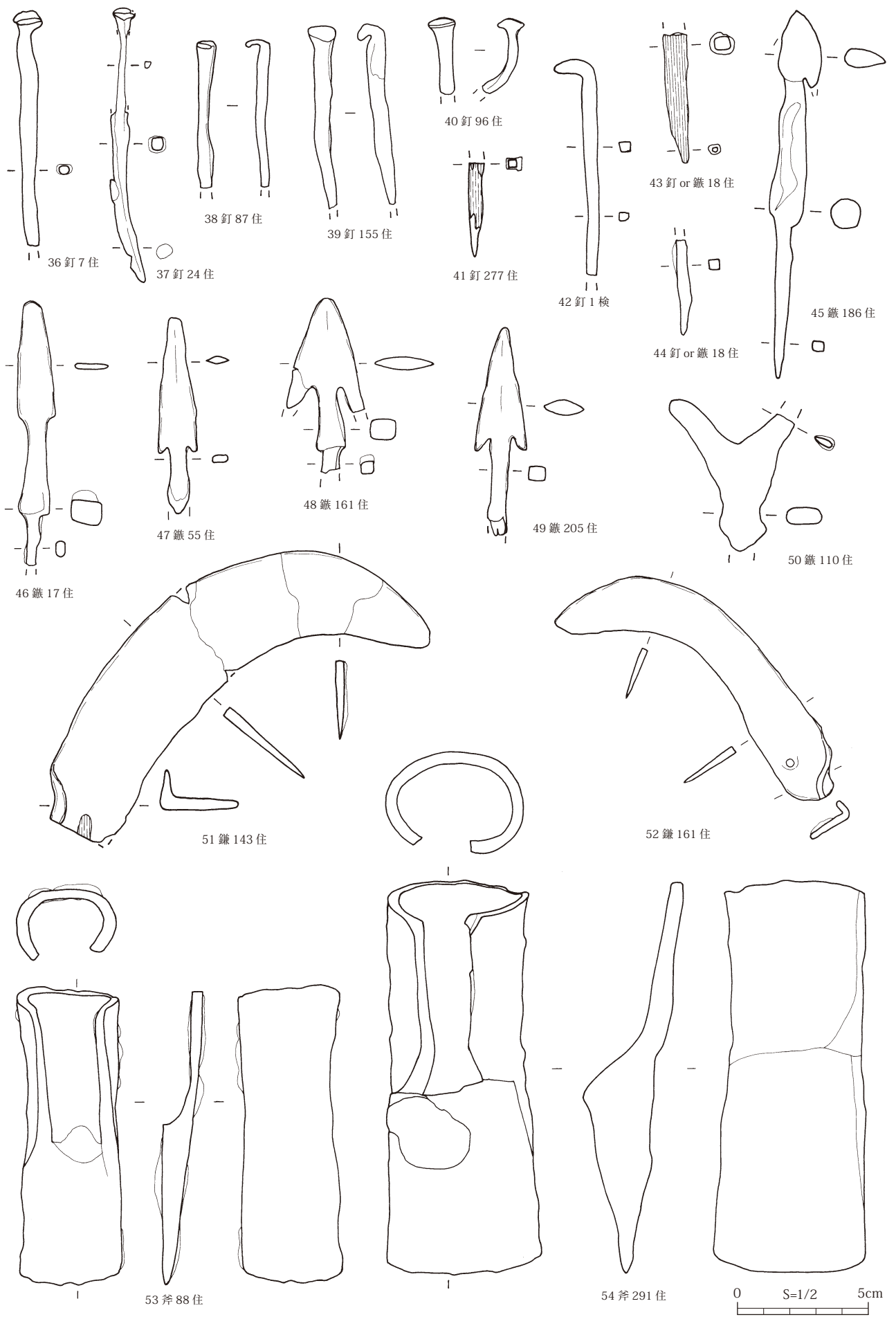
第13表 鉄滓一覧(3/3)

遺構	重量(g)	備考	遺構	重量(g)	備考	遺構	重量(g)	備考	遺構	重量(g)	備考
1住	236.0		79住	484.0		146住	116.0		215住	74.0	
4住	92.0		80住	369.6		150住	40.0		216住	106.0	
8住	736.0		82住	40.5		151住	24.0		217住	976.0	
9住	100.0		83住	88.8		152住	70.0		218住	64.0	
10住	66.0		84住	1302.7		153住	296.0		219住	65.0	
11住	118.0		85住	396.0		154住	48.0		220住	92.0	
15住	286.0		87住	174.9		155住	409.9		221住	446.0	
17住	90.0		88住	168.0		156住	660.0		223住	744.0	
20住	482.7		89住	142.0		157住	233.0		226住	136.0	
21住	228.0		90住	88.0		158住	89.2		227住	284.0	大型住居
22住	175.9		92住	112.0		159住	30.0		228住	6.0	
23住	234.0		93住	162.0		161住	230.0		229住	12.5	
25住	1561.8		95住	276.0		164住	626.0		233住	8.0	
28住	54.0		96住	234.3		165住	7947.0	鍛冶遺構	238住	18.0	
29住	124.7		97住	1108.0		166住	636.0		243住	386.0	
30住	148.0		98住	82.0		167住	198.0		247住	20.0	
31住	217.0		99住	1043.0	大型住居	168住	1040.0		255住	134.0	
32住	972.0		101住	158.0		169住	94.0		256住	90.0	
33住	572.0		102住	276.0		171住	236.0		257住	56.0	
34住	636.0		103住	116.0		172住	128.0		260住	90.0	
35住	46.0		104住	16.0		173住	28.0		264住	96.0	
36住	194.0		107住	566.0		174住	8.0		266住	180.0	
39住	1003.5		109住	146.0		175住	380.2		272住	30.0	
44住	242.0		110住	198.0	大型住居	180住	416.0		276住	56.8	
45住	34.0		113住	18.0		181住	404.0		278住	197.4	
49住	296.0		114住	172.0		182住	38.0		285住	48.5	
50住	472.8	大型住居	121住	300.0		183住	72.0		288住	20.0	
54住	887.8		122住	120.0		186住	30.0		290住	13.8	
55住	2554.9	大型住居	124住	626.0		189住	54.0		建6	246.0	
56住	742.0		125住	144.0		190住	348.0		1-12	26.0	
58住	501.9		126住	220.0		191住	742.0		1-13	136.0	
59住	3473.3		128住	66.0		192住	732.0		1-15	171.7	
61住	116.0		132住	340.0		193住	74.0		1-17	20.0	
62住	259.5		133住	94.0		194住	70.0		溝1	0.0	
63住	580.0		136住	694.0		195住	154.0		溝2	1564.0	
64住	388.0		137住	320.0		199住	56.0		溝3	384.0	
66住	253.8		138住	79.7	大型住居	200住	234.0		溝4	40.0	
68住	348.0		139住	126.0		205住	308.0		溝6	2014.0	
70住	78.0		140住	624.8		206住	112.0		溝7	6.0	
72住	198.0		141住	16.0		207住	142.0		溝8	1034.0	
73住	50.0		142住	206.0		208住	102.0		溝19	24.2	
76住	634.6		143住	57.8		212住	922.0				
77住	504.0		144住	52.0		213住	293.2				

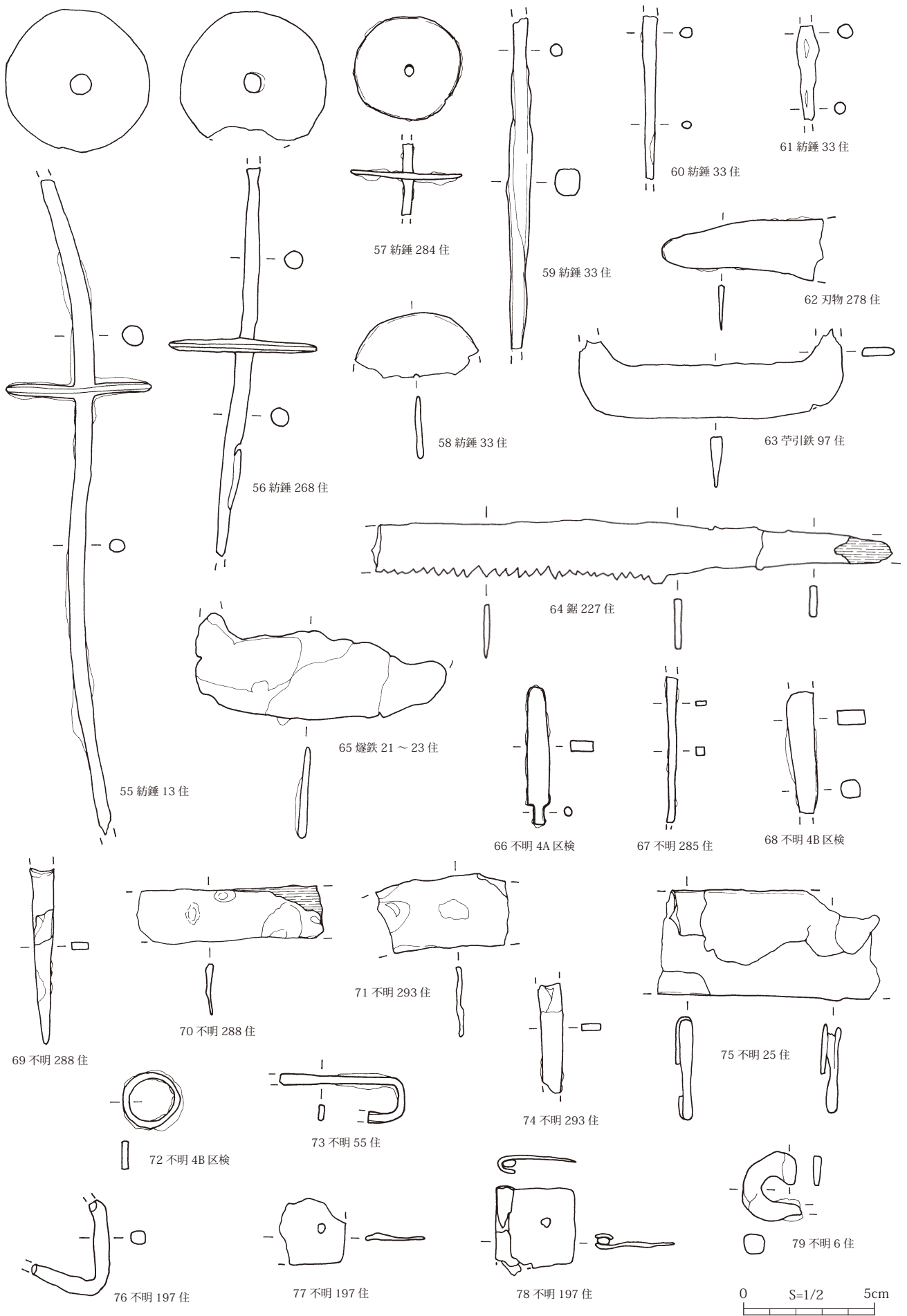
第14表 遺構別鉄滓出土重量



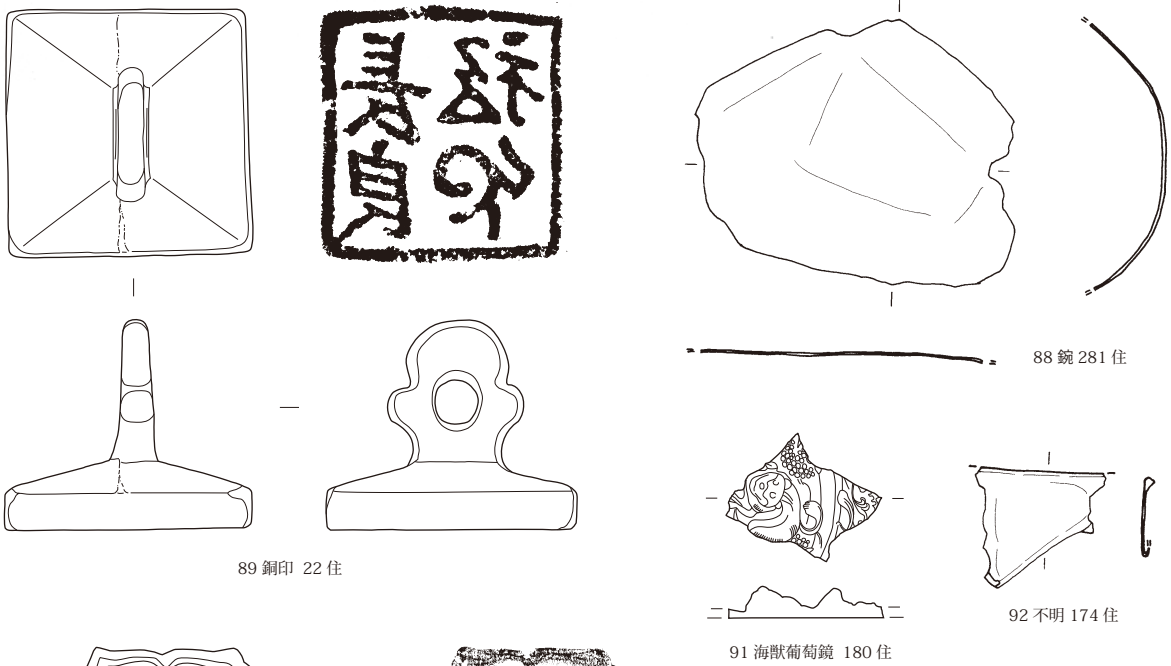
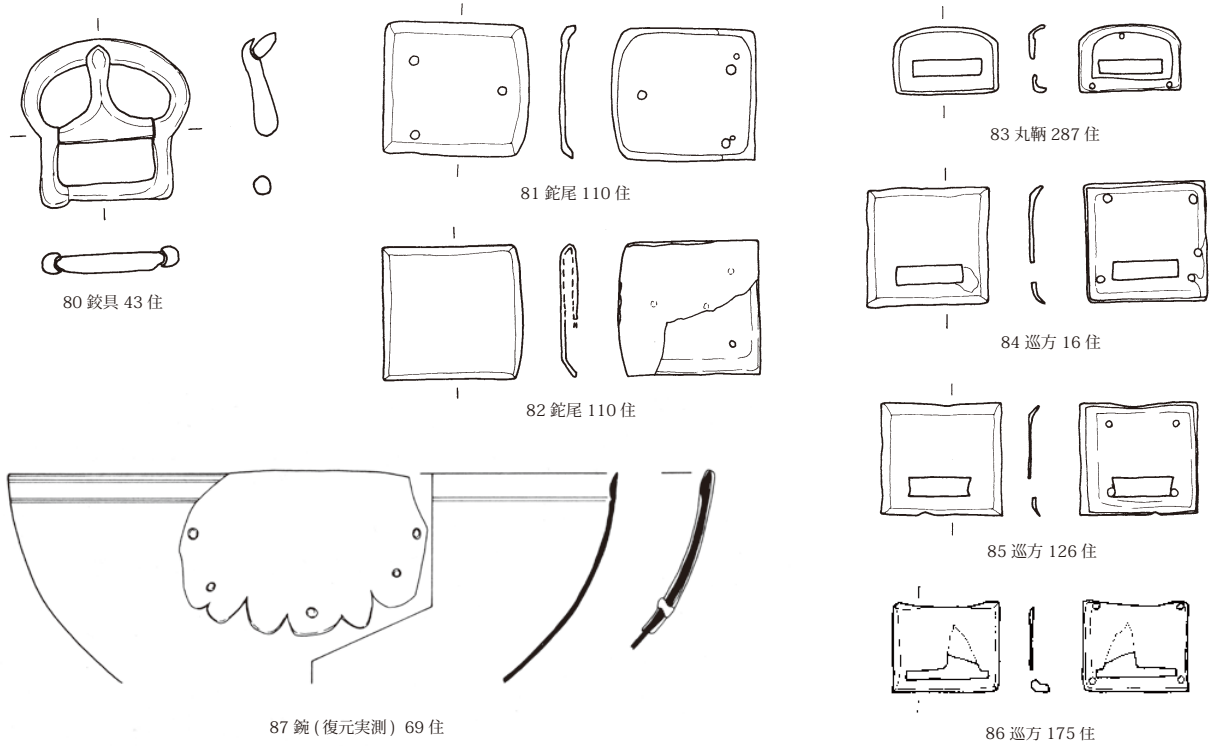
第 178 图 金属製品実測图(1) 刀子



第 179 図 金属製品実測図(2) 釘・鍬・鎌・斧



第 180 図 金属製品実測図 (3) 紡錘車・鉄その他・不明



No.80 ~ 88, 90 ~ 92
0 S=1/2 5cm

No.89
0 S=1/1 5cm

第 181 図 金属製品実測図(4) 銅製品

4 土製品 (第 15 表)

土製品に分類、把握した遺物としては、轆の羽口、有孔土製品、環状土製品、筒状土製品、焼成粘土塊がある。すべてを一覧表で示し、実測図は掲載していない。轆の羽口は 39 点が出土し、総重量は 2,784g を量る。全形がわかるものはなく、すべて大小の破片となっている。いずれも被熱痕が顕著で、炉側は溶解が著しい。有孔土製品は直径 3mm 前後の貫通孔を有し、形状から土器の一部ではない可能性があるものを一括した。2 点あるが、いずれも小片で詳細はわからない。環状土製品は幅 2.3cm で直径が 5cm ほどの環状の一部にあたと推定される土製品で、平安時代の土師器の破片とは思えないものだが小破片で詳細はわからない。筒状土製品は上下両端を欠く方柱形で、一方の端に向かって徐々に細くなっていく形状を呈し、芯部に太い孔が貫通している。残存長 32cm、断面形は長方形から台形で太い側の端が 11.5 × 9.5 ~ 10.5cm、細い側は 9.5 × 6.5 ~ 7.5 cm を測る。器肉は 2.0 ~ 3.5cm 前後と厚く、そのため 2,870g と重い。色調と焼成は土師器に似るが、胎土には 1cm 以上の小石が混じり、極めて焼きが甘くボロボロと崩れてしまう。外面の調整は工具ナデとわずかなハケメで仕上げられ、内面の孔側は全く器面調整がない。焼成粘土塊は土器などに成形されていない粘土が被熱によって固形化したごとくに見える土塊で、9 点出土している。いずれも 40g 以下の小塊で、詳細は全くわからない。

陶製品としては緑釉陶器の椀皿類破片の外周を打ち欠き、研磨して作られた陶製円盤が 157 住から

2 点出土している (第 133 図 157 新_34・35)。いずれも直径 1.4 ~ 1.6cm、厚さ 0.3 ~ 0.4cm、胎土は須恵器質で釉は濃緑に近い。

5 自然遺物 (第 16・17 表)

炭化物と骨類を自然遺物として扱う。炭化物には炭化材、炭化種実、植物質の製品が炭化したものなどを含む。現場から取り上げができた炭化物の一覧を第 16 表に示す。このうち 48 点で樹種同定を行い、さらにその中の 7 点については放射性炭素年代測定を実施した。また炭化種実塊 1 点について種実同定を行った。それらの結果は自然科学分析 (本章第 4 節) に掲載した。その他の炭化物については計量したのみで観察や分析は未実施である。骨類については第 17 表に示す。いずれも少量で分析等は未実施なので詳細は判明していない。2- 土 212 は墓址と推定される遺構なので被葬者の歯が残存していた可能性がある。溝 6 からは馬の歯らしきものが、最下層や特殊遺構 (溝 6 集石) を含む複数の地点から出土している。

遺物として取り上げたものではないが、293 住の覆土 (埋土) を 15 地点・層位に分けて土壌試料として採取し水洗選別を行った結果、炭化種実が 60 点余発見されている (本章第 4 節)。取り上げ不能で記録のみを残した遺物として 197 住で検出された簾状の炭化物がある (次頁写真掲載)。細かいカヤ状の植物茎を擦ったワラ状の繊維で連ねたものが 20 × 10cm ほどの範囲で検出できた。

No.	地区	遺構	種類	重量(g)	特記事項
1	1A	10住	焼成粘土塊	14	
2	1A	28住	羽口	14	
3	1A	28住	羽口	72	
4	1A	29住	土製品	28	有孔土製品
5	1A	33住	羽口	56	
6	1A	44住	羽口	20	
7	1A	50住	羽口	12	
8	1A	51住	羽口	128	
9	1A	51住	土製品	2870	筒状土製品
10	1A	54住	羽口	38	
11	1A	55住	焼成粘土塊	26	
12	1A	55住	焼成粘土塊	12	
13	1A	56住	羽口	34	
14	1A	58住	焼成粘土塊	38	
15	1A	59住	羽口	102	
16	1A	59住	羽口	56	
17	1A	59住	羽口	26	
18	1A	59住	羽口	46	
19	1A	59住	羽口	110	
20	1A	59住	羽口	12	
21	1A	59住	羽口	36	
22	1A	59住	羽口	38	
23	1A	59住	羽口	340	
24	1A	61住	羽口	36	
25	1A	63住	羽口	56	
26	1A	63住	羽口	22	
27	1A	64住	羽口	88	
28	1A	64住	羽口	152	

第 15 表 土製品一覧

No.	地区	遺構	種類	重量(g)	特記事項
29	1A	68住	焼成粘土塊	6	
30	1A	74住	羽口	30	
31	1A	76住	焼成粘土塊	8	
32	1A	84住	羽口	42	
33	1A	84住	羽口	112	
34	1A	87住	羽口	42	
35	1A	97住	土製品	8	環状土製品
36	1A	99住	羽口	36	
37	1A	99住	羽口	26	
38	1A	113住	羽口	50	
39	1B	溝3	羽口	32	
40	2	135住	羽口	22	
41	2	147住	羽口	110	
42	2	149住	焼成粘土塊	18	
43	2	157住	羽口	64	
44	2	157住	焼成粘土塊	10	
45	2	165住	羽口	82	
46	2	165住	羽口	32	
47	2	175住	羽口	32	
48	2	212住	羽口	76	
49	2	212住	羽口	188	
50	2	212住	羽口	48	
51	2	212住	羽口	38	
52	2	223住	羽口	66	
53	2	溝6	羽口	488	
54	2	溝8	羽口	28	
55	4A	275住	土製品	14	有孔土製品
56	5	290住	焼成粘土塊	28	

No.	出土地点等	重量(g)	特記事項	No.	出土地点等	重量(g)	特記事項
1	13住 北部炭 870706	42		53	164住 北西フク土炭化 880530	10	
2	13住 南炭 870707	134		54	166住 ベルト 880530炭	2	
3	13住 北炭 870708	284		55	183住 ベルト 880706炭	3	
4	28住 No.4周辺の炭化物	8		56	193住 カマド内 880616炭	1	
5	33住 西側下層炭 870619	14		57	197住 炭 880623	240	樹種同定
6	35住 東炭 870612	12		58	197住 炭化物 880623	20	種実同定
7	35住 西側 870612	4		59	197住 炭化物口	60	樹種同定
8	54住 東側 870613	98		60	197住 炭化物ハ	50	樹種同定
9	54住 西側 870613	170		61	197住 炭化物ニ	40	樹種同定
10	54住 炭No.5 870702	122		62	197住 炭化物ホ	75	樹種同定
11	54住 炭 870702	158		63	197住 炭化物ヘ	65	樹種同定
12	55住 下層北側炭 870616	24		64	197住 炭化物ト+チ	85	樹種同定
13	55住 下層南側 870616	6		65	197住 炭化米No.4の下より	115	
14	55住 ベルト内 870618	86		66	197住 No.5内の炭化物	100	樹種同定
15	68住 上層 870626	42		67	197住 n11炭	1	
16	68住 中層 870626	54		68	197住 N11	1	
17	68住 下層 870626	10		69	197住 炭化物	2000	樹種同定
18	68住 炭 870630	180		70	200住 北東 880617	5	
19	85住 ベルト内炭化物 870708	134		71	206住 No.19 880709	10	
20	90住 E1.5m検出面炭化物 870611	3		72	211住 カマド炭化 880713	8	
21	90住 上層 870707	4		73	213住 ベルト内 880712	3	
22	99住 北東中層 870616	4		74	214住 P1炭 880727	4	
23	99住 北ベルト 870618	10		75	217住 フク土北東炭化物 880526	1	
24	107住 東側 870622	10		76	217住 内土坑 880531	1	
25	124住 フク土南 870624	14		77	218住 ベルト炭化 880527	5	
26	128住 東部 870708	60		78	223住 上層～下層南西炭化物 880609	40	
27	135住 南西フク土炭化物 880702	1		79	223住 イ 880613	835	樹種同定、年代測定
28	135住 イ炭	100	樹種同定	80	223住 ロ 880613	385	樹種同定
29	135住 ロ炭	125	樹種同定、年代測定	81	223住 ハ 880613	330	樹種同定
30	135住 ハ炭 880713	80	樹種同定	82	223住 ニ 880613	420	樹種同定
31	135住 炭化物 880714	240	樹種同定	83	223住 ホ 880613	345	樹種同定
32	136住 表面 880524	10		84	223住 ヘ 880613	210	樹種同定
33	138住 P4(貯蔵穴) 880720	20		85	227住 P2炭化 880721	5	
34	145住 ベルト炭化 880611	5		86	227住 P3 880721	10	
35	145住 P2炭 880611	10		87	245住 イ炭化	100	樹種同定、年代測定
36	146住 上層～下層南東 880622	20		88	245住 ロ炭化	30	樹種同定
37	147住 No.10炭化 880527	5		89	245住 ハ炭化	110	樹種同定
38	151住 上面 880624	1		90	245住 ニ炭化	30	樹種同定
39	151住 炭 880712	85	樹種同定	91	245住 ホ炭化	20	樹種同定
40	151住 炭カマド内 880712	10		92	245住 ヘ炭化	50	樹種同定
41	158住 No.10 880706	16		93	257住 No.4 880718	32	
42	160住 No.16 880719	115	樹種同定	94	257住 No.7 880718	2	
43	161住 南西中層炭 880531	100	樹種同定	95	264住 北面 880612	2	
44	161住 フク土炭化 880607	20	樹種同定	96	264住 No.9炭 880706	15	
45	161住 カマド付近炭化 880607	20	樹種同定	97	265住 No.6 880729	3	
46	161住 イ 880608	260	樹種同定	98	1次土坑3 ベルト炭化物 870716	20	
47	161住 ロ 880608	630	樹種同定	99	1次土坑6 炭化材 870625	188	
48	161住 ハ 880608	215	樹種同定	100	1次土坑7	244	
49	161住 ニ 880608	280	樹種同定	101	溝6 5区炭化物 880706	1	
50	161住 ホ 880608	300	樹種同定	102	溝6 5区炭化物 880706	5	
51	161住 ヘ 880608	335	樹種同定、年代測定	103	溝6 9区	5	
52	161住 ト 880608	1050	樹種同定	104	溝6 特殊遺構1炭 880720	10	樹種同定

第16表 炭化物一覧

No.	出土地点等	重量(g)	種類・状態等	No.	出土地点等	重量(g)	種類・状態等
1	16住 カマド右袖 骨 870709	1.0	被熱	10	2次土212 歯 880722	0.9	人の歯か
2	98住 北フク土 870710	4.2	脊椎か	11	溝6 5区最下層砂礫中 880707	6.9	馬の歯か
3	123住 No.1 870710	8.0	被熱骨と歯	12	溝6 9区中層 骨 880718	61.1	馬の歯か
4	124住 骨 870704	6.8	管骨	13	溝6 9区中層 880718	23.6	馬の歯か
5	124住 北側 870704	1.6	管骨	14	溝6 4トレ中層① 880623	12.5	馬の歯か
6	125住 No.9 870713	3.3	管骨	15	溝6 4トレ中層② 880623	13.9	馬の歯か
7	137住 No.3①	5.1	馬の歯か	16	溝6 4トレ中層③ 880623	1.3	馬の歯か
8	137住 No.3②	4.3	馬の歯か	17	溝6 特殊遺構①歯 880705	8.9	馬の歯か
9	2次土212 No.6 歯	0.7	人の歯か				

第17表 骨類一覧



51 住出土 筒状土製品



197 住 炭化材出土状況

第4節 自然科学分析

1 2区出土炭化材の年代測定・樹種同定と炭化種実の同定

(1) 放射性炭素年代測定

ア 試料

焼失住居とされる竪穴遺構4軒(135住、161住、223住、245住)より出土した炭化材のうち、135住口-b(No.2)の芯持丸木(径1.2cm)、161住へ-a(No.12)の芯持丸木(径6×5cm)、223住イ-a(No.27)の芯持丸木(径4cm)、245住イ(No.33)の(柎目)板状を呈する炭化材の4点を選択した。いずれも観察範囲内に認められる最外年輪を含む数年輪分を測定に供している。

イ 分析方法

試料中の土壌や根などをメスやピンセットを用いて取り除いた後、HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0。(Copyright 1986-2014 M Stuiver and

PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正は、CALIB 7.1.0.のマニュアルに従い、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年較正結果は $\sigma \cdot 2\sigma$ (σ は統計的に真の値が68.2%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95.4%の確率で存在する範囲)の値を示す。また、表中の相対比は、 $\sigma \cdot 2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。なお、較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

ウ 結果および考察

炭化材試料の同位体効果による補正を行った測定年代(補正年代)は、表1のとおりである。また、暦年較正結果(1σ)は、表1、図1に示すとおりである(表1、図1)。

以上の各竪穴建物の暦年較正結果(1σ)を参考とすると、135住が10世紀後半から11世紀前半頃、161住および223住が9世紀末から10世紀後半頃、245住が7世紀前半から中頃と推定される。三間沢川左岸遺跡は、これまでの発掘調査により平安時代(9~10世紀)の集落とされ、135住、161住および223住では若干の時期差が推定されるものの、得られた年代は調査所見と調和する。245住は、上記した3軒よりも明らかに古い。今回の結果は、当竪穴建物の年代を示している可能性はあるものの、他の3軒では芯持丸木状を呈する炭化材を供したのに対し、本遺構では(柎目)板状を呈する炭化材を供しているため、古木効果の影響により古い年代を示している可能性も考慮する必要がある。

(2) 炭化材(樹種)同定

ア 試料

焼失住居とされる竪穴建物7軒(135住、151住、160住、161住、197住、223住、245住)および溝6特殊遺構1より出土した炭化材39試料(No.1~39)である。これらには、炭化材1点のみの試料や、接合関係が認められず、形状や木取り、組織の特徴が異なる複数(種)の炭化材から構成される試料、さらに炭化種実塊などが確認された。このうち、複数(種)の炭化材から構成される試料については、各試料中で形状や木取りなどの観察から代表的なものを選択・抽出している。炭化種実塊につ

表1 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料名	測定年代 (補正年代) (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正結果 (cal)			相対比	測定機関 CodeNo.
				σ				
No.2 135住ロ-b 炭化材 (コナラ節)	1,050±30	-24.25±0.53	1,047±25	σ	cal AD 987 - cal AD 1,017	cal BP 963 - 933	1.000	IAAA- 143338
				2σ	cal AD 903 - cal AD 919	cal BP 1,047 - 1,031	0.042	
					cal AD 965 - cal AD 1,026	cal BP 985 - 924	0.958	
No.12 161住へ-a 炭化材 (サワラ)	1,120±20	-26.45±0.43	1,115±23	σ	cal AD 896 - cal AD 927	cal BP 1,054 - 1,023	0.525	IAAA- 143339
				2σ	cal AD 942 - cal AD 970	cal BP 1,008 - 980	0.475	
					cal AD 888 - cal AD 985	cal BP 1,062 - 965	1.000	
No.27 223住イ-a 炭化材 (カエデ属)	1,110±20	-32.45±0.49	1,110±24	σ	cal AD 897 - cal AD 926	cal BP 1,053 - 1,024	0.484	IAAA- 143340
				2σ	cal AD 943 - cal AD 973	cal BP 1,007 - 977	0.516	
					cal AD 889 - cal AD 987	cal BP 1,061 - 963	1.000	
No.33 245住イ 炭化材 (サワラ)	1,410±20	-25.52±0.64	1,405±23	σ	cal AD 630 - cal AD 656	cal BP 1,320 - 1,294	1.000	IAAA- 143341
				2σ	cal AD 606 - cal AD 661	cal BP 1,344 - 1,289	1.000	

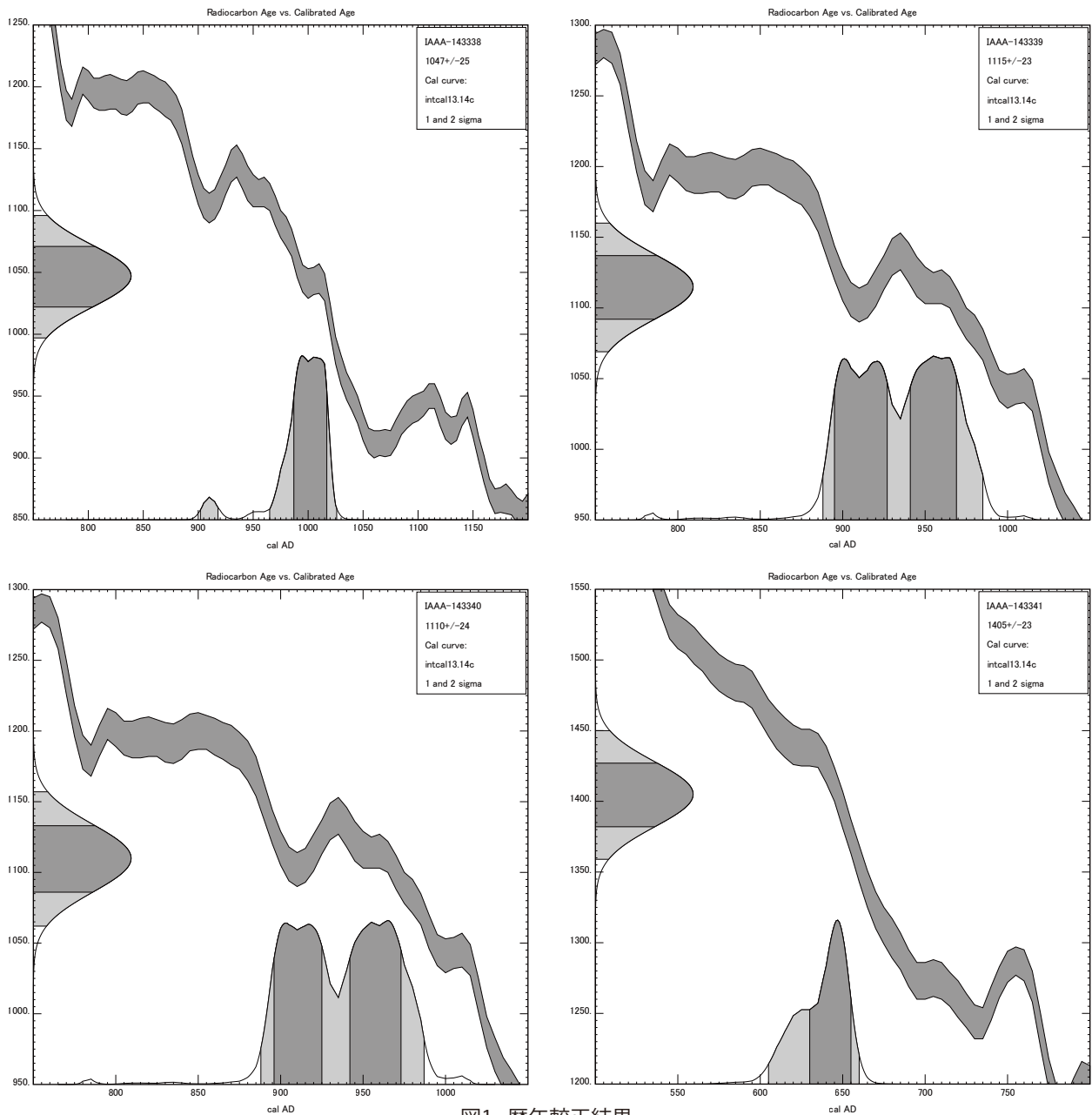


図1 暦年較正結果

いては、後述する(3)の種実同定試料としている。

本分析では、上述した試料の観察により選択・抽出した炭化材より57点を対象とした。なお、各試料の詳細((通し)No、出土地点、仮名称、観察所見など)は、結果とともに表2に示したので参照されたい。また、表2中の仮名称は、1試料より複数の炭化材を選択・抽出した際、試料の識別のために便宜的に付した名称である。

イ 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995-1999)を参考にする。

ウ 結果

同定結果を表2に示す。各遺構より出土した炭化材は、針葉樹2分類群(モミ属、サワラ)、広葉樹10分類群(ハンノキ属ハンノキ亜属、コナラ属コナラ亜属クヌギ節、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、エノキ属、ケヤキ、モクレン属、カツラ、カエデ属、アワブキ属)およびイネ科に同定された。イネ科に同定された試料は、径および桿の厚みの違い等から複数種が混じる可能性があるが、組織観察では判断に至らなかった。

エ 考察

焼失住居とされる竪穴住居跡などから出土した炭化材は、各試料の観察では、表3に示すとおり芯持丸木(芯持材を含む)をはじめ、分割材状(ミカン割、半裁)および板状(板/棒状)を呈するもののほか、カヤ材とみられる稈(茎)などが確認された。

各遺構を通じて確認された樹種は、サワラが22点と最も多く、次いでコナラ節(10点)、クヌギ節(5点)、モミ属(6点)、カツラ(4点)、カエデ属(3点)であり、この他は1~2点という組成を示した(表3)。また、分析点数が多い竪穴住居跡の樹種構成についてみると、135住は9点すべてがコナラ節であった。一方、161住は15点のうち8点がサワラであり、この他にモミ属、クヌギ節、ケヤキ、モクレン属、イネ科なども認められたものの1~2点とわずかであり、サワラを主とする傾向が

うかがえる。また、197住はサワラやカツラ、223住および245住はサワラを含む針葉樹材が多く認められる。

次に、各竪穴住居跡における炭化材の形状や木取りと樹種との関係についてみると、135住は住居跡南東部に炭化材が多く分布しており、これらの試料には、芯持丸木、分割材(ミカン割)状などが認められた。なお、分析対象とした炭化材は、すべてコナラ節であり、形状の違いによる樹種の違いは認められなかった。

151住は分割材(ミカン割)状がクヌギ節、板状がサワラ、160住の板状がサワラであり、板状を呈する試料にサワラが認められる点で共通する。

161住は、住居跡南壁付近を含む南半部の床面より出土した炭化材を主体とし、これらの試料には板状を呈する試料を主体として、芯持丸木や分割材(ミカン割、半裁)状を呈する試料、カヤ材が認められた。このうち、芯持丸木や半裁状、板状を呈する試料はサワラを主体とすることから、建築部材にはサワラが多く利用されていた可能性がある。また、覆土試料に認められたイネ科や南西中層試料に認められたクヌギ節やモクレン属などは屋根材(カヤ材)や木舞などに由来する可能性があり、出土状況等の調査所見による検討が望まれる。

197住は、住居跡床面全面から炭化材が出土しており、とく南半部より多く出土している。分析対象とされた炭化材は、壁際(口、ハ、ト、チ)、住居中央(ニ、ホ)および炭化米出土した地点付近(No.5内)より採取されており、芯持丸木を呈するものが多く、この他分割材(ミカン割、半裁)状、板状(板/棒状を含む)、カヤ材などが認められた。このうち、芯持丸木は、針葉樹のモミ属やサワラ、広葉樹のハンノキ亜属、クヌギ節、カツラが認められるなど雑多な樹種構成を示す一方、分割材状(ミカン割、半裁)にはカツラとカエデ属が、板状(板/棒状)にはサワラやハンノキ亜属が認められた。とくに板状を呈する試料にサワラが多く認められる傾向は、151住や160住、161住と共通する特徴と言える。

223住は、住居跡床面中央より放射状に炭化材が出土する状況が確認されており、分析対象とされた炭化材はいずれも垂木と推定される炭化材より採取されている。これらの試料は、板状(板/棒状を含む)を主として、芯持丸木(芯持材?を含む)や分割材(半裁)状などから構成され、板状(板/棒状を含む)にはモミ属とサワラ、芯持丸木や分割材

(半裁) 状にはエノキ属、カエデ属、アワブキ属が認められた。本遺構では、板状を呈する試料にサワラが多く認められるという、上記した遺構と共通する特徴が指摘できる。また、板状(板/棒状を含む)以外の試料は広葉樹から構成されることから、形状によって利用樹種が針葉樹と広葉樹とに分かれるという特徴もうかがえる。

245住は、223住ほど明瞭ではないものの、住

居跡床面中央より放射状に炭化材が出土する状況やカマド前面(前庭)に炭化材が多く出土する状況が確認されている。分析対象とされた炭化材は、上記した放射状に出土した垂木の可能性がある炭化材より採取されている。これらの試料には、芯持丸木、分割材(ミカン割)状、板状(板/棒状含む)が認められたが、分割材(ミカン割)状にクリが認められた他は全て針葉樹であった。針葉樹は、芯持丸木

表2 樹種同定結果

(通し) No.	試料			観察所見		樹種 (分類群)	備考
	遺構名	出土位置 (取上名称・No.)	仮名称	形状	直径 (半径)		
1	135住	イ	a	芯持丸木	3cm	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
2	135住	ロ	b	芯持丸木	1.2cm	コナラ属コナラ亜属コナラ節	放射性炭素年代測定
			c	芯持丸木	2.5cm	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
3	135住	ハ	a	芯持丸木	2.5cm	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			d	芯持丸木	2.5×2.3cm	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			e	芯持丸木	2.3×2.0cm	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
4	135住	炭化物	a	分割材(ミカン割)状	(3cm)	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			b	分割材(ミカン割)状	(2.5cm)	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			e	芯持丸木	2cm	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
5	151住	炭化物	a	分割材(ミカン割)状	(>0.7cm)	コナラ属コナラ亜属クスギ節	
			b	分割材(ミカン割)状	(>0.7cm)	コナラ属コナラ亜属クスギ節	
			c	板状(板目)		サワラ	
6	160住	No.16	-	板状(板目)		サワラ	
7	161住	イ	-	板状(板目)		サワラ	
8	161住	ロ	-	板状(板目)	(7cm)	ケヤキ	
9	161住	ハ	a	板状(板目)		コナラ属コナラ亜属クスギ節	
			b	分割材(ミカン割)状	(1.5cm)	ケヤキ	
10	161住	二	-	板状(板目)		サワラ	
11	161住	ホ	a	板状(板目)		サワラ	
			c	板状(板目)		サワラ	
12	161住	へ	a	芯持丸木	6×5cm	サワラ	放射性炭素年代測定
			b	分割材(半裁)状	3.5cm	サワラ	
13	161住	ト	a	板状(板目)		モミ属	
			b	板状(板目)		サワラ	
14	161住	カマド付近	-	板状(板目)		サワラ	
15	161住	フク土	-	カヤ材(稈)	0.3cm	イネ科	
16	161住	南西中層	a	分割材(ミカン割)状	(>3cm)	コナラ属コナラ亜属クスギ節	
			b	分割材(ミカン割)状	(>3cm)	モクレン属	
17	197住	ロ	-	芯持丸木	2.8×2.5cm	カツラ	
18	197住	ハ	a	芯持丸木	2.0cm	ハンノキ属ハンノキ亜属	
			b	分割材(ミカン割)状	(>3.5cm)	カツラ	
19	197住	二	a	板状(板目)		サワラ	
			b	分割材(半裁)状	3.5cm	カツラ	
20	197住	ホ	-	芯持丸木	5.0cm	サワラ	
21	197住	へ	a	芯持丸木	5.0cm	コナラ属コナラ亜属クスギ節	
			b	板/棒状(板目)		サワラ	
22	197住	ト+チ	a	カヤ材(稈)	0.5cm	イネ科	
			c	分割材(半裁)状	2.0cm	カエデ属	
23	197住	炭	b	芯持丸木	2.7×2.2cm	モミ属	
			c	分割材(ミカン割)状	(3.5cm)	カエデ属	
			d	板/棒状(板目)		サワラ	
			e	板/棒状(芯持材)		ハンノキ属ハンノキ亜属	
25	197住	No.5内	-	カヤ材(稈)		イネ科	
26	197住	炭化物	a	芯持丸木	4.5×2.8cm	カツラ	
			b	芯持丸木	5.3×5.0cm	サワラ	
27	223住	イ	a	芯持丸木	4cm	カエデ属	放射性炭素年代測定
			c	芯持材?	2cm	アワブキ属	
28	223住	ロ	-	板状(板目-追証)		サワラ	
29	223住	ハ	a	板状(板目)		サワラ	
			b	分割材(半裁)状	4.5cm	エノキ属	
30	223住	ニ	b	板/棒状(板目)		モミ属	
			c	板状(板目)		サワラ	
31	223住	へ	-	板状(板目)		サワラ	
32	223住	ホ	-	板/棒状(板目)		モミ属	
33	245住	イ	-	板状(板目)		サワラ	放射性炭素年代測定
34	245住	ロ	-	分割材(ミカン割)状	(>2cm)	クリ	
35	245住	ハ	-	芯持丸木	4.5cm	モミ属	
36	245住	ニ	-	分割材(ミカン割)状?	(>1cm)	モミ属	
37	245住	ホ	-	板状(板目)		サワラ	
38	245住	へ	-	板/棒状(板目)		サワラ	
39	溝6特殊遺構1	炭	-	分割材(ミカン割)状	(>1.2cm)	コナラ属コナラ亜属コナラ節	

と分割材（ミカン割）状がモミ属、板状（板／棒状含む）がサワラであり、形状による樹種構成の違いが示唆される。

以上の結果から、135 住を除く各竪穴住居跡からは板状（板／棒状を含む）を呈する炭化材が出土しており、このような板状を呈する試料には針葉樹材が多く利用される傾向が明らかとなった。また、この他の形状の炭化材についても針葉樹のサワラが認められる一方、135 住出土炭化材の主体をなすコナラ節は認められなかった。このような状況から、135 住とその他の竪穴住居跡では木材利用が異なることが示唆される。

なお、135 住のコナラ節を主とする種類構成は、形状やコナラ節の材質から強度を考慮した木材利用が推定される。その他の竪穴住居跡については、135 住との差異や樹種構成において特筆される板状（板／棒状を含む）試料は出土状況から垂木や壁材などに推定される試料も含まれる状況から、サワラを主体とする針葉樹材の加工性を考慮した木材利用が考えられる。また、この他に確認された広葉樹材については、強度が高い木材が多いことから、上記した針葉樹材の板状とは用途や部位が異なる可能性も考えられる。

本遺跡で別途実施した他の焼失住居と考えられる竪穴建物（275 住、279 住）より出土した炭化材の分析調査によれば、275 住の芯持丸木の分割材状の炭化材にコナラ節、クリ、カエデ属、カヤ、角材状にサワラが確認されており、279 住のカマド脇より出土した板状の炭化材にサワラが確認されている。このような樹種構成は、今回の 135 住を除く竪穴住居跡の木材利用に類似する可能性がある。

また、松本盆地における古代の住居跡より出土した炭化材の調査事例では、宮北遺跡の平安時代の住居跡出土炭化材にヒノキ科、舅屋敷遺跡（塩尻市）の平安時代の住居跡出土炭化材に広葉樹のクリ、ナラ（コナラ節）、トチ（トチノキ）、トネリコ（トネリコ属）、マカンバ（カバノキ属）、ヤナギ（ヤナギ属）、針葉樹のトウヒ（トウヒ属）、スギなどが確認されている（小林,1982）。また、三角原遺跡（旧三郷村）の 10 世紀後葉～11 世紀前葉とされる住居跡出土炭化材にヒノキ科が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,2005）。さらに、来見原遺跡（大町市）では、奈良時代の住居跡からオニグルミとコナラ、11 世紀前半の住居跡からコナラ節とクリ、11 世紀中頃～後半とされる住居跡から広

葉樹のコナラ、クリ、クヌギ、コナラ、針葉樹のモミ属が確認されている（森,1988）。形状や木取りなどを含めた詳細な比較は難しいものの、概ね針葉樹材と広葉樹材が混在して利用されるという傾向がうかがえ、このような木材利用は今回の 135 住を除く各竪穴住居跡などと共通する。コナラ節が主となるという特徴が認められた 135 住については、（1）の結果では 161 住や 223 住と比較して若干の時期差が示されている状況などから、時期による木材利用の変化や建築材として利用する樹木を調達した森林植生の変化などを反映している可能性などが考えられる。

（3）種実同定

ア 試料

試料は、（1）-アで触れた炭化材試料に確認された炭化種実塊 1 試料（No. 24；197 住炭化物 880623）と、245 住より採取された土壌 2 点（炭化種子、炭化種子？）である。

イ 分析方法

（ア）炭化種実塊

本分析では、試料の保存を優先し、非破壊による分析を行った。炭化種実塊を双眼実体顕微鏡とマイクロスコープ（KEYENCE,VHX-1000）で観察する。また、炭化種実塊より脱落した炭化種実は、ピンセットで抽出する。炭化種実の同定は、現生標本を参考に実施し、結果を一覧表と図版で示す。分析後は、試料を容器に入れて保管する。

（イ）土壌試料

土壌試料を粒径 2.0mm、1.0mm、0.5mm の篩を通す。粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体を抽出する。種実遺体の同定は、現生標本と石川（1994）、中山ほか（2000）、鈴木ほか（2012）等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて結果を一覧表で示す。種実以外の分析残渣は、一覧表の下部に重量を記録後、容器に入れて保管する。分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れて保管する。

ウ 結果

（ア）炭化種実塊

結果を表 4 に示す。炭化種実塊 9 個のうち、8 個を構成する炭化種実は、すべて栽培種のイネの胚乳（炭化米）に同定された。1 個は状態不良のため、イネの胚乳？とした。イネ以外は、単子葉類の炭化植物片と土砂の付着が確認された。なお、イネの類（粃）や他分類群の種実、虫類は確認されなかった。

表3 遺構別種類構成

	135住		151住		160住		161住				197住				223住			245住			溝6	合計	
	芯持丸木	分割材状(ミカン割)	分割材状(ミカン割)	板状	板状	芯持丸木	分割材状(ミカン割)	板状	カヤ材	芯持丸木	分割材状(ミカン割)	板状	カヤ材	芯持丸木	分割材状(ミカン割)	板状	芯持丸木	分割材状(ミカン割)	板状	分割材状(ミカン割)			
針葉樹																							
モミ属								1	1							2	1			1			
サワラ				1	1	1	1	6	2			3			4				3				
広葉樹																							
ハンノキ亜属									1			1											
クヌギ節			2				1	1	1														
コナラ節	7	2																1					
クリ																		1					
エノキ属														1									
ケヤキ							1	1															
モクレン属						1																	
カツラ									2	1	1												
カエデ属										1	1												
アワブキ属														1									
その他																							
イネ科								1				2											
合計	7	2	2	1	1	1	3	1	9	1	7	2	2	4	2	2	1	6	1	2	3	1	61

表4 種実同定結果 (炭化種実塊)

試料名	分類群・部位・状態	個数	仮番号	重量(g)	大きさ	図版番号	備考
No.24 197住炭化物 880623	イネ胚乳+植物遺体(単子葉類)	4	1	4.46	5.2cm×3.0cm×1.6cm	1,2	平坦面確認,植物片:少ない,複数同方向配列
			2	3.21	3.9cm×2.8cm×1.6cm	3,4	平坦面確認,植物片:長さ1.7cm×幅2.1cm,複数同方向配列
			3	0.70	2.3cm×2.1cm×1.1cm	5	平坦面確認,植物片:長さ1.7cm×幅1.0cm,複数同方向配列
			4	0.07	1.0cm×0.9cm×0.7cm	6	平坦面確認,植物片:残存長4mm×幅1.7mm(1個体)
	イネ胚乳(多量塊状)	1	-	1.54	3.2cm×1.9cm×1.5cm	-	平坦面確認,イネ胚乳のみ
	イネ胚乳(塊状,状態不良)	3	1	0.35	1.8cm×1.5cm×0.8cm	7	一部の胚乳の形状が残る,外面は丸みを帯びる
			2	0.24	1.5cm×1.4cm×0.5cm	-	一部の胚乳の形状が残る,外面は丸みを帯びる
			3	0.11	1.4cm×0.9cm×0.6cm	-	一部の胚乳の形状が残る,外面は丸みを帯びる
	イネ胚乳?(塊状,状態不良)	1	-	0.06	1.0cm×0.7cm×0.4cm	-	胚乳の形状は不明瞭,外面は丸みを帯びる
	イネ胚乳	13	1	<0.01	長さ4.46mm,幅2.10mm,厚さ2.11mm	8	長粒極小型,種皮が残存(玄米)
2			<0.01	長さ4.08mm,幅2.28mm,厚さ1.94mm	9	長粒極小型,種皮が残存(玄米)	
				0.10			
分析残渣(イネ,単子葉類,泥等)	-	-	-	1.93			
	合計			12.79			

表5 種実同定結果 (土壌試料)

試料名	分類群	部位	状態	数量(個)	重量(g)	備考
245住 炭化種子	エノコログサ属	果実	破片	63	-	薄膜状,状態不良
	スベリヒユ	種子	完形	1	-	
	アカザ属	種子	完形	103	-	1個発芽
			破片	17	-	
	エノキグサ	種子	破片	1	-	
	炭化材			2	0.02	最大4.3mm
	分析残渣(>0.5mm)			-	2.84	土粒主体,植物片
	分析残渣(<0.5mm)			-	0.65	土粒主体,アカザ属種子片,植物片
245住 炭化種子?	エノコログサ属	果実	破片	25	-	薄膜状,状態不良
	カヤツリグサ属	果実	完形	3	-	
	スベリヒユ	種子	完形	31	-	
			破片	5	-	
	アカザ属	種子	完形	612+	0.13	14個発芽
			破片	23	-	
	カタバミ属	種子	完形	1	-	
	ニシキソウ亜属	種子	完形	2	-	
	エノキグサ	種子	完形	3	-	
			破片	1	-	
炭化材			17	<0.001	最大3.7mm	
	分析残渣(>1.0mm)			-	4.64	土粒主体,植物片
	分析残渣(1.0-0.5mm)			-	1.66	土粒主体,アカザ属種子(200個超),植物片
	分析残渣(<0.5mm)			-	2.19	土粒主体,種実片,植物片

イネの胚乳は、炭化しており黒色、やや扁平な長楕円体を呈する。炭化種実塊から脱落した胚乳13個の重量は0.10gを量る。また、保存状態が良好な2個の計測値および粒形・粒大(佐藤,1988)は、長さ4.7mm、幅2.1mm、厚さ2.1mm(長粒極小型;図版1_5-8)と、長さ4.1mm、幅2.3mm、厚さ1.9mm(短粒極小型;図版1_5-9)であった。胚乳の基部一端には、胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2~3本の縦隆条が確認され、種皮が残る「玄米」の状態も確認された(図版1_5-8,9)。

多数の胚乳が密着した炭化種実塊のうち、最大塊(図版1_5-1)の大きさは5.2×3.0×1.6cmを測り、重量(土砂を含む)は4.5gを量る。炭化種実塊の表面観察では、胚乳個々の向きは区々で、隣接する別個体の種皮が密着する。なお、炭化種実塊9個のうち5個は、最大面が平坦であった(図版1_5-1a,3a)。このうち4個の平坦面には单子葉類の炭化植物片が確認された(図版1_5-1b,3b,4-6)。炭化植物片は、最大長1.7×幅2.1cm程度の薄い膜状を呈し、炭化米塊と接して長軸方向に複数配列する(図版1_5-3b,4)。炭化植物片は、幅1~3mm程度の線形を呈し、表面には浅く細い長軸方向の平行脈が配列する(図版1_5-6)状況から、同一種の单子葉植物の葉や茎等と考えられる。

一方、残りの炭化種実塊4個(イネ?含む)は、状態が極めて不良であり、胚乳の形状を留める個体が少なく、外面に丸みを帯びる共通点が確認された(図版1_5-7)。

(イ) 土壌試料

同定結果を表5に示す。2試料を通じて、草本8分類群(エノコログサ属、カヤツリグサ属、スベリヒユ、アカザ属、カタバミ属、ニシキソウ亜属、エノキグサ)891個の種実が同定された。なお、1試料(炭化種子?)からは、アカザ属の種子が多量確認されたため、粒径1mm(635個0.13g)までの抽出同定にとどめ、1mm以下はアカザ属以外を同定対象としている。分析残渣は土粒を主体とし、炭化材(最大4.3mm)や炭化していない植物片等も少量確認された。

種実遺体群は、明るく開けた、やや乾いた場所に生育する中生草本のみから成り、アカザ属が全体の85%以上を占める(755個)。種実遺体の保存状態は、膜質で脆弱なエノコログサ属を除いて極めて良好で、いずれも炭化は認められない。また、アカザ属には、発芽種子が15個確認された。

なお、これらの種実遺体群は、本遺跡の立地や、焼失住居とされている245住より採取された試料であることを考慮すると、出土炭化材などとは履歴が異なる(後代の混入など)可能性が高いと判断されるため、考察からは除外している。

エ 考察

197住より出土した炭化種実塊の同定の結果、表面に確認された種実はずべて栽培種のイネの胚乳(炭化米)に同定された。炭化種実塊より脱落した炭化米の一部を計測した結果、長粒極小型と短粒極小型(佐藤,1988)が確認された。

この出土炭化米塊は、穎が確認されなかったことから、籾殻を取り去った(脱稈;だっぶ)後の胚乳(玄米)が多量密着した状態で火を受けたと考えられる。なお、一部の炭化米塊には平坦面が確認されたことや平坦面に同一種と考えられる单子葉植物の植物片が同一方向に配列する状況が確認されたことから、敷藁等の植物片を挟在し、平坦面に接した状態で火を受けたことなどが推定される。一方の保存状態が不良な炭化米塊は概形が丸みを帯びる。形状から上記した平坦面を有する炭化米塊との差異が示唆されるが、その成因については本試料の出土位置や調査所見による検討が望まれる。

2 4 区出土炭化材の年代測定・樹種同定

(1) 試料

試料は、焼失住居であるA区275住から出土した炭化材7点(ID1~7)と、B区279住から出土した炭化材1点(ID8)の、計8点である。このうち、275住No.2(ID2)とNo.3-1と3-2(ID3, ID4)は、発掘調査時に出土した形状を保つよう取上げられ、タッパーに保管された状態であった。これらの試料の観察では、カヤ材とみられる植物遺体の集合体と、芯持丸木状あるいは分割材状などの複数の炭化材が確認できた。そのため、275住No.2(ID2)では、芯持丸木状(径約2.5cm)の炭化材(ID2-1)と、分割材状(残存径4.0cm)の炭化材(ID2-2)を抽出している。

今回の調査では、放射性炭素年代測定には275住No.2(ID2)の芯持丸木状の炭化材(ID2-1)と、同No.3-1の炭化材(ID3)の観察範囲内の最外年輪部を含む部位、さらに同No.3-2(ID4)の芯持丸木状(径約5.5×3.5cm)の炭化材を供し、樹種同定は275住No.2の分割材状の炭化材(ID2-2)を含めた計9点を対象とした。

(2) 分析方法

1- (1) -イ、1- (2) -イと同じ。

(3) 結果

ア 放射性炭素年代測定

275 住出土炭化材の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代・較正暦年代）は、表 6 のとおりである。

イ 樹種同定

樹種同定結果を表 7 に示す。炭化材は、針葉樹 2 分類群（サワラ、カヤ）と、広葉樹 3 分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、カエデ属）に同定された。

(4) 考察

275 住の炭化材 3 点の放射性炭素年代測定結果（補正年代）に基づく較正暦年代は、いずれも 8 世紀後半～9 世紀後半を示した。これまでの発掘調査により、本遺跡は平安時代を主体とする集落であることが明らかとされているが、今回の結果から 275 住も当該期の遺構である可能性が示唆される。

また、275 住および 279 住から出土した炭化材には、サワラ、カヤの針葉樹と、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、カエデ属などの広葉樹が確認された。各分類群の木材の材質をみると、針葉樹のカヤはやや重硬で強度や保存性が高いが、加工は容易

である。サワラは、軽軟で強度が低いが、木理が通直で割裂性が高いため加工が容易であり、耐水性が高い。一方、広葉樹のコナラ節、クリおよびカエデ属は、重硬で強度が高く、加工はやや困難である。

275 住は、発掘調査時にカマドと貼床に新旧が確認されていることから、同じプラン内での建直しが推定される。炭化材は、床面のほぼ全面から出土しており、建築部材に由来すると考えられている。分析対象とされた炭化材は、No. 4 (ID5) と東側拡張部 (ID7) を除く 5 点が、住居中央から外側に向かって放射状に伸びるように出土している。これらの炭化材には、コナラ節、クリおよびカエデ属が確認されたことから、強度の高い木材の利用が推定される。No. 2 (ID2) にはクリとカエデ属が認められたことから、異なる部材が含まれると考えられる。また、カヤ材とみられる植物遺体が認められたことから、屋根材と垂木、あるいはそれに伴う部材の組合せを示している可能性がある。No. 4 (ID5) は、住居北壁際より出土している。炭化材は断面(木口)が半裁～扇形を呈し、径約 5cm を測る。当試料は、針葉樹のカヤであり、上記した広葉樹を主体とする 5 点と傾向が異なる。さらに、東側拡張部から出土した炭化材 (ID7) は、分割材(角材)状を呈し、針葉樹のサワラに同定された。以上の結果から、住

表6 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料名	測定年代 (補正年代) (yrBP)	δ 13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	測定機関 Code No.	
				σ	cal AD	774 -	cal AD			830
ID:2(2-1) 275住 No.2 炭化材(カエデ属)	1,220±30	-24.50±0.58	1,215±25	σ	cal AD	836 -	cal AD	868	0.350	IAAA- 112359
					cal AD	710 -	cal AD	746	0.118	
				2σ	cal AD	766 -	cal AD	888	0.882	
					cal AD	782 -	cal AD	789	0.089	
ID:3 275住 No.3-1 炭化材(コナラ節)	1,180±20	-25.26±0.48	1,180±23	σ	cal AD	810 -	cal AD	847	0.467	IAAA- 112360
					cal AD	855 -	cal AD	887	0.444	
				2σ	cal AD	776 -	cal AD	895	0.969	
					cal AD	925 -	cal AD	937	0.031	
ID:4 275住 No.3-2 炭化材(カエデ属)	1,180±20	-29.97±0.54	1,183±24	σ	cal AD	782 -	cal AD	789	0.100	IAAA- 112361
					cal AD	810 -	cal AD	848	0.480	
				2σ	cal AD	853 -	cal AD	886	0.420	
					cal AD	775 -	cal AD	895	0.973	
					cal AD	925 -	cal AD	937	0.027	

表7 樹種同定結果

ID	区	遺構	No.ほか	形状*	樹種	備考
1	A	275住	No.1	分割材状(ミカン割状)	クリ	
2-1	A	275住	No.2	芯持丸木(径約2.5cm)	カエデ属	放射性炭素年代測定試料
(2-2)	A	275住	No.2	分割材状(板状)	クリ	
3	A	275住	No.3-1	分割材状(ミカン割状)	コナラ属コナラ亜属コナラ節	放射性炭素年代測定試料
4	A	275住	No.3-2	芯持丸木(径約5.5×3.5cm)	カエデ属	放射性炭素年代測定試料
5	A	275住	No.4	分割材状(約1/2残、径約5cm)	カヤ	
6	A	275住	No.5	分割材状(ミカン割状)	カエデ属	
7	A	275住	東側拡張部、 造成土	分割材状(角材状)	サワラ	広い面が柃目
8	B	279住	No.70	分割材状(板目板状)	サワラ	カマド脇出土

*炭化材の形状観察による。

居構築材として、比較的硬い材質の広葉樹材と針葉樹材が利用されるという傾向がうかがえる。なお、東部拡張部から出土した試料については、後世の攪乱の影響を受けている可能性が考えられるため、住居構築材の詳細な用途の検討は今後の課題である。

一方の 279 住の炭化材は、住居西壁に設置されたカマドの脇の床面上から出土したことから、燃料材と推定されている。この炭化材は、針葉樹のサワラであったことから、軽軟で燃えやすい木材の利用が推定される。

3 第 293 号竪穴建物埋土の土壌洗出と種実遺体分析

(1) 試料

第 293 号住居跡埋積物（覆土）より採取された土壌 15 点である。土壌試料は、住居跡覆土の堆積状況の観察のために設定された東西および南北ベルトの両端付近と、両ベルトが交叉する中央部の計 5 地点より採取されている（図 2）。また、上記した 5 地点では、覆土の調査所見によって分けられた第 1 層（黒褐色弱粘質土）、第 2 層（黒褐～暗褐色弱粘質土）および第 3 層（暗褐色弱粘質土）より、層位別に採取されている（表 8）。

本分析では、上記した地点および層位別に採取された土壌試料 15 点を対象に、土壌洗出・分類および種実遺体分析を実施した。

(2) 分析方法

土壌試料は、各地点・層位より計 94.5kg が採取されている（表 8）。住居跡覆土中の微細遺物の産状を把握するため各試料 1kg を対象に水洗選別を実施し、主に植物片（炭化、未炭化）、土器、土塊、砂礫などに大分類した後、炭化植物片が多く得られた試料を対象に種実遺体分析を実施するという工程が示された。なお、後述するように、各試料 1kg を対象とした分析の結果、検出された炭化種実は少量であったため、担当者確認の上、仕様を一部変更し各試料 1kg について追加分析を行った。以下、土壌洗出（水洗）および種実遺体分析の工程を記す。

土壌試料を 72 時間常温乾燥後、水を満たした容器に投入し、浮いた炭化物を粒径 0.5mm の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、浮いた炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（約 20 回）。残土を粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。篩内の試料をシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、

同定が可能な種実遺体を拾い出す。

種実遺体の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等の図鑑類を参考に実施し、個数を数えて結果を一覧表で示す。分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れて保管する。分析残渣は、水に浮いた炭化物主体と沈んだ砂礫主体とに分け、40℃ 48 時間乾燥後の重量を記録する。

栽培種などを対象とした種実の大きさ（長さ、幅、厚さ）の計測にはデジタルノギスを用いた。

(3) 結果

結果を表 9 に示す。土壌洗出および種実遺体分析の結果、第 293 号住居跡覆土試料（15 試料；31 kg）を通じて、被子植物 13 分類群（ブドウ科、イネ、コムギ、キビ？、ヒエ近似種、イネ科、ホタルイ近似種、ホタルイ属、サナエタデ近似種、タデ属（2 面体、3 面体）、スベリヒユ科、マメ科）112 個の種実が抽出・同定された。また、状態不良の炭化物片 44 個は、種類の同定に至らなかったため不明炭化物としている。この他に、骨片が 1 個（No. 4；径 5.4mm）、巻貝類が 10 個、土器片が 1 個（4.8g、径 4.3cm）確認された。分析残渣は、炭化物主体（炭化材・植物片等）が 26.9g、砂礫主体が 356.5g を量る。

栽培種は、穀類のイネの胚乳が 3 個、コムギの胚乳が 28 個（うち 1 個は穎付着）、キビ？の胚乳が 1 個と、栽培種の可能性があるヒエ近似種の穎・胚乳が 2 個、マメ科（ダイズ類？）の種子が 1 個の、計 35 個が確認され、全て炭化している。

栽培種と栽培種の可能性がある種実を除いた分類群は、木本が落葉広葉樹のブドウ科が 1 個、草本 6 分類群（ホタルイ近似種、ホタルイ属、サナエタデ近似種、タデ属（2 面体、3 面体）、スベリヒユ科）32 個の、計 33 個が確認された。イネ科 25 個、ホタルイ属 1 個、タデ属（2 面体、3 面体）4 個の、計 29 個は炭化しているが、ブドウ科、ホタルイ近似種、サナエタデ近似種、スベリヒユ科の各 1 個は、炭化が認められず、保存状態が良好である。

なお、上記した炭化が認められない状態の良好な種実については、後代の混入の可能性があるので、結果表示に留めている。また、火熱の影響を受けた痕跡が認められない骨類や巻貝類についても、炭化が認められない種実と同様に取り扱っている。

ア 炭化種実の出土状況

以下、地点別の炭化種実の出土状況を記す。

(ア) 東ベルト

第1層からキビ?が1個、第2層からコムギが1個、第3層からタデ属(2面体)が1個確認された。

(イ) 西ベルト

第1層からヒエ近似種が1個、第2層からイネが1個、コムギが1個、イネ科が9個、第3層からコムギが2個、マメ科が1個確認された。

(ウ) 南ベルト

第1層からコムギが5個、第2層からコムギが4個、ヒエ近似種が1個、イネ科が4個、第3層からイネが1個、コムギが3個確認された。

(エ) 北ベルト

第1層からイネ科が3個、第2層からコムギが3個、ホタルイ属が1個確認され、第3層からは1個も確認されなかった。

(オ) ベルト中央

第1層からコムギが4個、タデ属が3個、第2層からイネが1個、コムギが4個、イネ科が4個、第3層からコムギが1個、イネ科が2個確認された。

イ 出土炭化種実の記載

炭化種実の保存状態は極めて不良で、表面に泥が付着している。出土炭化種実各分類群の写真を図版3に、栽培種などの種実遺体の計測結果を表10に示す。また、以下に、出土炭化種実の形態的特徴などを述べる。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳は炭化しており黒色、長さ4.3mm、幅2.4mm、厚さ2.2mmのやや偏平な長楕円体で、基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、両面に2~3本の縦隆条がある。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳・穎は炭化しており黒色、長さ2.6~3.9mm、幅2.1~2.8mm、厚さ1.4~2.6mmの丸みを帯びた楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑で、微細な粒状模様がある。焼き崩れにより側面が窪む個体や、頂部から焼き膨れが突出した個体がみられる。また、南ベルトの第3層より出土した1個の表面に穎(果)の破片が付着する。穎は薄く、表面は粗面で微細な縦筋が配列する。

・キビ (*Panicum miliaceum* L.)? イネ科キビ属

胚乳は炭化しており黒色、長さ1.4mm、幅1.6mm、厚さ0.8mmのやや偏平な広卵体で、背面は丸みがあり腹面はやや平ら。基部正中線上に、径0.5mmの半円形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面で、小型であるため、キビ?としている。

・ヒエ近似種 (*Echinochloa* cf. *utilis* Ohwi et Yabuno) イネ科ヒエ属

胚乳・穎は炭化しており黒色。長さ1.7~2.0mm、幅1.2~1.3mm、厚さ0.6~0.9mmの半広卵体。背面は丸みがあり腹面はやや平ら。胚乳基部正中線上は、背面に長さ1.0~1.5mm、幅0.7mmの馬蹄形、腹面に径0.5mm程度の半円形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面。胚乳表面に付着する穎(果)は薄く、表面は平滑で光沢があり、微細な縦長の網目模様が縦列する。

・イネ科 (Gramineae)

胚乳・穎は炭化しており黒色、長さ1.3mm、径0.7mmの半狭卵~楕円体。背面は丸みがあり、腹面は偏平。胚乳の基部正中線上には径0.5mmの胚の凹みがある。胚乳表面は粗面。胚乳表面に残る穎(果)は薄く、表面には微細な網目模様が縦列する。

・ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実は炭化しており黒色、長さ2.1mm、径0.6mmの片凸レンズ状広倒卵体。頂部は尖り、背面正中線上は鈍稜、基部は切形で刺針状の花被片を欠損する。果皮表面は光沢があり、不規則な波状横皺状模様が発達する。破損部から確認される果実内部は炭化・発泡している。

・タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実は炭化しており黒色、長さ1.7mm、径1.4mmのやや偏平な広卵体(2面体)と、長さ1.4mm、径1.1mmの三稜状広卵体(3面体)の少なくとも2分類群が確認された。いずれの果実も頂部は尖り、花柱を欠損する。基部は切形で萼片を欠損する。果皮表面は粗面。微細な網目模様がある。破損部から確認される果実内部は炭化・発泡している。

・マメ科 (Leguminosae)

種子は炭化しており黒色、長さ6.8mm、幅3.9mm、厚さ2.8mmのやや偏平な楕円体。腹面の子葉合わせ目上にある長楕円形の臍を欠損する。幼根はやや突出し、長さ2.2mm、幅1.3mmを測る。種皮表面は粗面で、焼き崩れて発泡している。ダイズ属ダイズ (*Glycine max* (L.) Merr. subsp. *max* (L.) Merr.) の類に似るが、臍を欠損するため、マメ科に留めている。

(4) 考察

第293号住居跡覆土からは、穀類のイネ、コムギ、ヒエ(近似種)、キビ?、豆類のマメ科(ダイズ類?)などの炭化種実が確認された。穀類の出土状況は、コムギが28個と最も多く、他の分類群は1~3個程度であった。コムギは、各地点より確認された

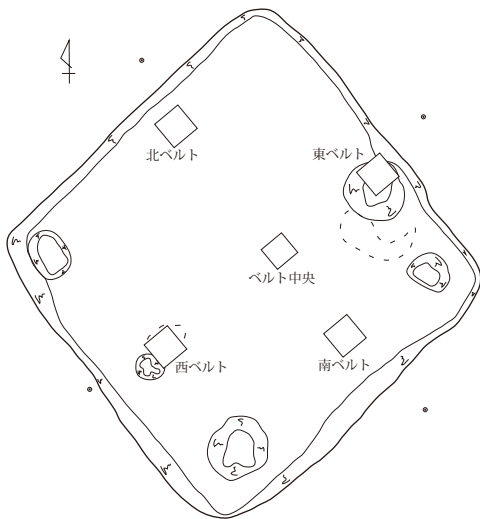


図2 第293号住居跡完掘略図および試料採取位置

表8 第293号住居跡採取試料一覧

試料 No	地点/層位	土層名	重量 (Kg)	
1	東ベルト	第1層	黒褐色弱粘質土	3.25
2		第2層	黒褐～暗褐色弱粘質土	7.25
3		第3層	暗褐色弱粘質土	2.00
4	西ベルト	第1層	黒褐色弱粘質土	6.75
5		第2層	黒褐～暗褐色弱粘質土	6.00
6		第3層	暗褐色弱粘質土	9.00
7	南ベルト	第1層	黒褐色弱粘質土	7.00
8		第2層	黒褐～暗褐色弱粘質土	9.50
9		第3層	暗褐色弱粘質土	3.75
10	北ベルト	第1層	黒褐色弱粘質土	8.50
11		第2層	黒褐～暗褐色弱粘質土	9.00
12		第3層	暗褐色弱粘質土	3.00
13	ベルト中央	第1層	黒褐色弱粘質土	5.75
14		第2層	黒褐～暗褐色弱粘質土	8.75
15		第3層	暗褐色弱粘質土	5.00
		合計		94.50

が、南ベルトとベルト中央でやや多く認められる傾向にある。また、層位別にみると、第1層から9個、第2層から13個、第3層から6個と覆土中部より多く出土するという傾向が看取される。

渡来した栽培種とされるイネ、コムギと栽培種の可能性を含むキビ(？)、ヒエ(近似種)、マメ科(ダイズ類?)は、当時利用された植物質食料と考えられ、その状態から火熱の影響により炭化したことが推定される。また、コムギの一部や、ヒエ(近似種)の表面には穎(粃)が残ることから、食用前の穎がついた生の状態で炭化した可能性がある。

本地域における平安時代の植物質食料の出土事例では、本遺跡の南西に位置するヨシバタ遺跡(山形村)が挙げられる。ヨシバタ遺跡では、3軒の住居跡より栽培種のモモ、イネ、アワ(近似種を含む)や栽培種の可能性があるヒエ近似種やマメ科、さらに食用可能な堅果類のトチノキが確認されている。とくに、炭化穀類が多く出土した住居跡(SB-11)では、イネとアワ(近似種)が多産するという状況が確認されている(パリノ・サーヴェイ株式会社,2012)。これらの産状と第293号住居跡の炭化種実遺体群とを比較すると、多く出土する穀類が異なるなどの組成の違いが指摘される。2遺跡間における炭化種実の産状の違いは、集落の年代や様態を反映する可能性もあり、今後の同様の調査事例の蓄積による検討が期待される。

なお、栽培種とその可能性がある炭化種実を除いた分類群では、いずれも明るく開けた場所に生育する人里植物の草本のイネ科、ホタルイ属、タデ属が確認され、ホタルイ属には湿生植物が含まれる。これらは、住居跡周辺の水湿地などを含む草地環境に

由来すると考えられる。

<引用文献>

熊井久雄,1988, I 地形分類図・土地分類基本調査 松本・長野県農政部農村整備課,11-18.
 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31, 京都大学木質科学研究所,81-181.
 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32, 京都大学木質科学研究所,66-176.
 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33, 京都大学木質科学研究所,83-201.
 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34, 京都大学木質科学研究所,30-166.
 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35, 京都大学木質科学研究所,47-216.
 小林康男,1982,火災住居検出の炭化材. 剪屋敷 長野県塩尻市剪屋敷遺跡発掘調査報告書, 剪屋敷遺跡発掘調査団・塩尻市教育委員会,157.
 松本市教育委員会,1988,三間沢川左岸遺跡(Ⅰ) 平安時代集落址の緊急発掘調査概報.
 森 義直,1988,炭化物(炭化材)について. 長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書 来見原遺跡Ⅱ, 大町市埋蔵文化財調査報告書第14集, 大町市教育委員会,118.
 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑(2010年改訂版). 東北大学出版会,678p.
 パリノ・サーヴェイ株式会社,2005,三角原遺跡の自然科学分析. 安曇野農業水利事業あづみ野排水路埋蔵文化財発掘調査報告書 一郷村内一 三角原遺跡, 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書76, 農林水産省関東農政局安曇野農業水利事業所・長野県埋蔵文化財センター, 付属CD-ROM所収.
 Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.,2004,IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

表9 土壌試料洗い出し・種実遺体分析結果

分類群	部位	状態	第293号住居跡															合計	備考
			東ベルト			西ベルト			南ベルト			北ベルト			ベルト中央				
			第1層	第2層	第3層	第1層	第2層	第3層	第1層	第2層	第3層	第1層	第2層	第3層	第1層	第2層	第3層		
			No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15		
炭化種実																			
栽培種																			
イネ	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	
		破片	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	
コムギ	穎・胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	
	胚乳	完形	-	1	-	-	1	2	4	3	1	-	-	-	1	1	1	15	
		破片	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	3	-	3	3	-	12	
キビ?	胚乳	完形	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
ヒエ近似種	穎・胚乳	完形	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	
マメ科	種子	完形	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	臍欠損,ダイズ類?
その他の草本																			
イネ科	穎・胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
	胚乳	完形	-	-	-	-	4	-	-	3	-	2	-	-	-	1	2	12	
		破片	-	-	-	5	-	-	1	-	-	-	-	-	5	-	-	11	
ホタルイ属	果実	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
タデ属(2面体)	果実	完形	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	3	
タデ属(3面体)	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	
不明炭化物			-	7	-	5	9	6	1	2	1	3	1	-	5	4	-	44	
炭化していない種実																			
木本																			
ブドウ科	種子	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
草本																			
ホタルイ近似種	果実	破片	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	
サナエタデ近似種	果実	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	
スベリヒコ科	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	
動物遺体																			
骨片*			-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	径5.4mm
巻貝類*			-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	1	1	2	3	-	10	
土器片			-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	乾重4.8g,径4.3cm
分析残渣																			
炭化物主体(炭化材,植物片等)			1.8	1.5	2.0	1.9	3.0	2.3	2.2	1.0	3.1	2.1	0.9	0.7	1.2	1.3	1.9	26.9	乾重(g)
砂礫主体			14.1	83.0	17.0	13.7	24.0	13.5	12.8	17.4	57.2	35.2	18.1	10.7	21.0	10.9	8.0	356.5	乾重(g)
分析量			2.1	2.1	2.0	2.1	2.1	2.1	2.1	2.0	2.1	2.1	2.1	2.0	2.1	2.1	2.1	31.0	乾重(kg)

*火熱の痕跡なし

表10 主な種実遺体の計測値

分類群・部位	試料No.	出土遺構	ベルト	層位	大きさ			備考
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	
イネ 胚乳	14	第293号住居跡	ベルト中央	第2層	4.3	2.4	2.2	
コムギ 穎・胚乳	9	第293号住居跡	南ベルト	第3層	3.3 +	2.1 +	1.8 +	
コムギ 胚乳	2	第293号住居跡	東ベルト	第2層	2.9	2.6	2.3	
	5	第293号住居跡	西ベルト	第2層	2.8 *	1.8 +	1.4	頂部焼き膨れ(長さ0.9mm)
	6	第293号住居跡	西ベルト	第3層	3.9	2.1	2.2	
	6	第293号住居跡	西ベルト	第3層	2.8 *	2.1	2.0	頂部焼き膨れ(長さ1.0mm)
	7	第293号住居跡	南ベルト	第1層	3.7	2.8	2.6	
	7	第293号住居跡	南ベルト	第1層	3.4	2.4	2.1	
	7	第293号住居跡	南ベルト	第1層	3.5	1.9	1.7	
	7	第293号住居跡	南ベルト	第1層	2.6	1.8	1.8	
	8	第293号住居跡	南ベルト	第2層	3.7 +	2.8	2.4	基部欠損
	8	第293号住居跡	南ベルト	第2層	3.2	2.3	2.2	
	9	第293号住居跡	南ベルト	第3層	3.3	1.8 +	2.1	
	13	第293号住居跡	ベルト中央	第1層	3.5	2.2	1.9	
	14	第293号住居跡	ベルト中央	第2層	3.5	2.7	2.5	
	15	第293号住居跡	ベルト中央	第3層	3.2	2.1	2.1	
キビ? 胚乳	1	第293号住居跡	東ベルト	第1層	1.4	1.6	0.8	胚の凹み:径0.5mm
ヒエ近似種 穎・胚乳	4	第293号住居跡	西ベルト	第1層	1.7	1.2	0.9	胚の凹み:長さ1.0mm,幅0.7mm
	8	第293号住居跡	南ベルト	第2層	2.0	1.3	0.6	胚の凹み:長さ1.5mm,幅0.7mm
マメ科 種子	6	第293号住居跡	西ベルト	第3層	6.8	3.9	2.8	幼根:やや突出,長さ2.2mm,幅1.3mm

註)計測値はデジタルノギスによる。欠損部は残存値に「+」で示す。

佐藤敏也,1988,弥生のイネ. 弥生文化の研究2 生業,金関 怨・佐原 真編,雄山閣,97-111.

島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織. 地球社,176p.

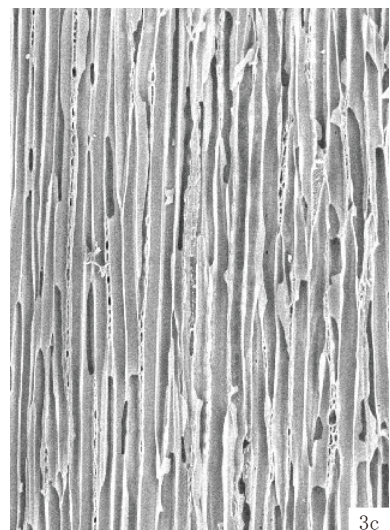
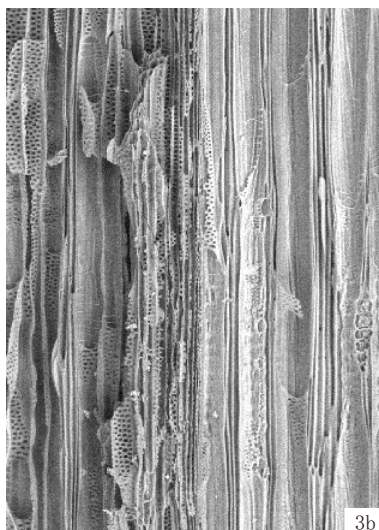
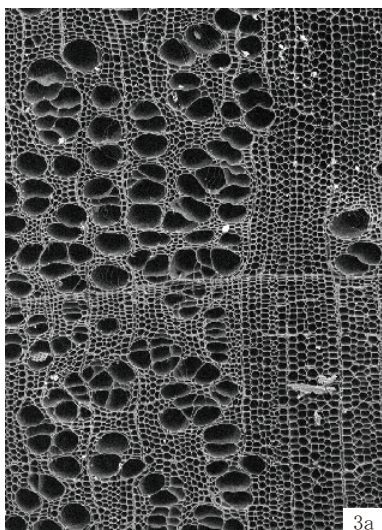
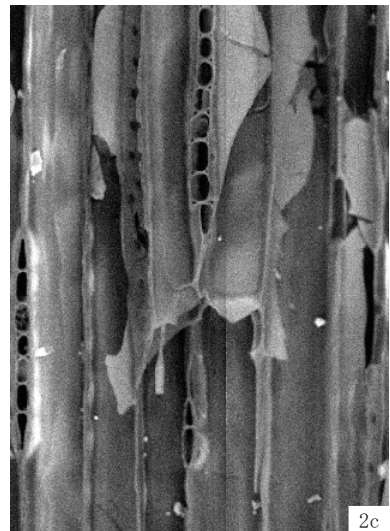
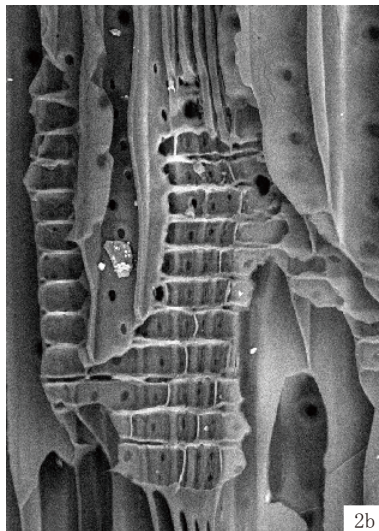
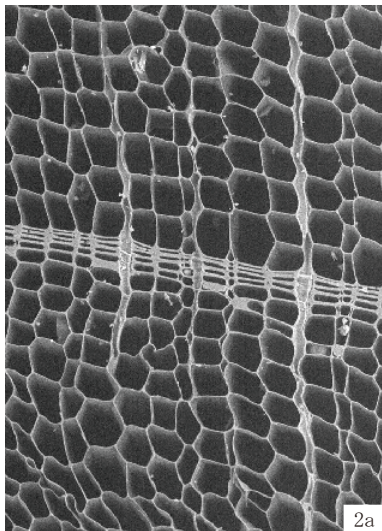
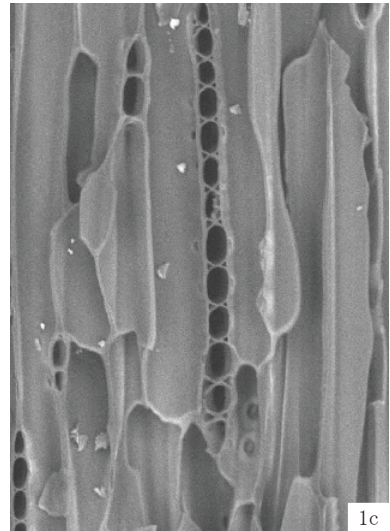
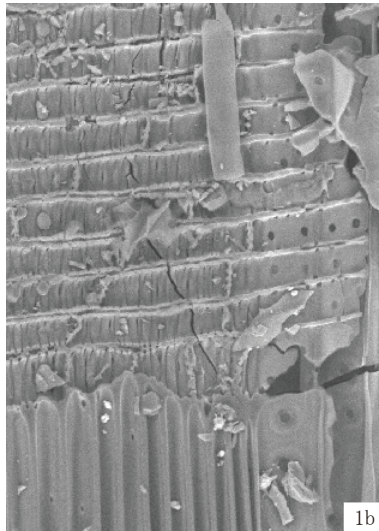
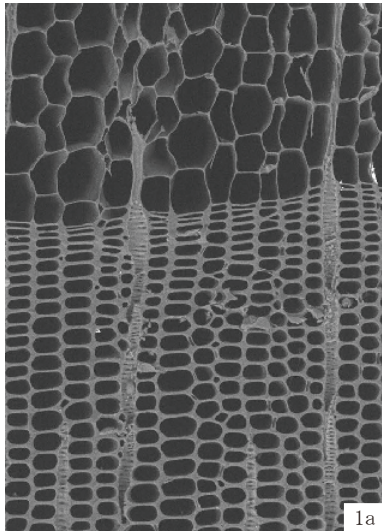
鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実-形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実 632種-. 誠文堂新光社,272p.

パリノ・サーヴェイ株式会社,2012,VI 自然科学分析. ヨシバタ遺跡 山形保育園新園舎建設工事に伴う緊急発掘調査報告書

,山形村遺跡発掘調査報告書第19集,山形村教育委員会,98-110.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.,1989,IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

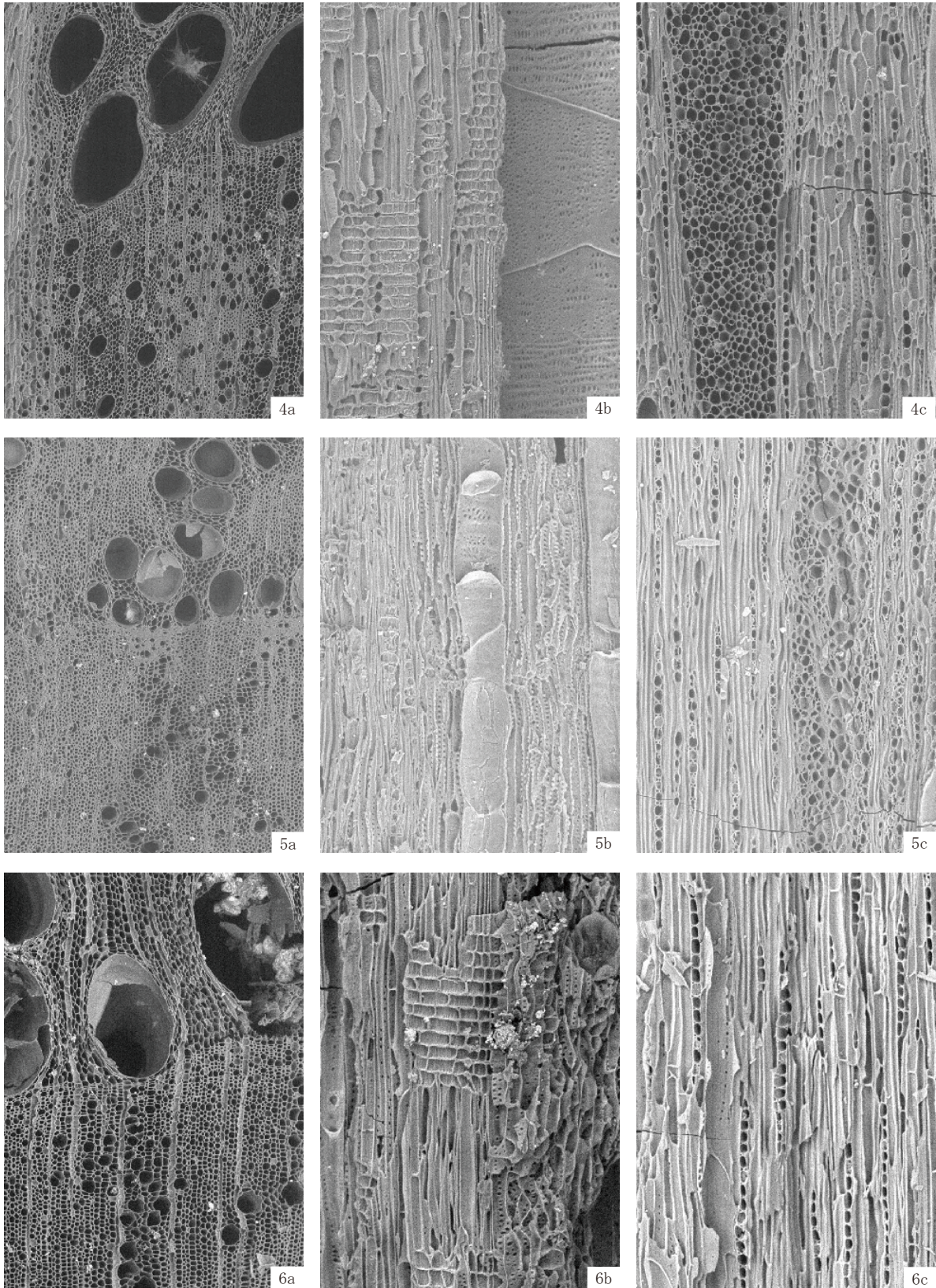
図版1_1 炭化材(1)



1. モミ属(161住ト-a;13)
 2. サワラ(160住 No.16;6)
 3. ハンノキ属ハンノキ亜属(197住ハ-a;18)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

100 μ m:3a
 100 μ m:1-2a, 3b, c
 100 μ m:1-2b, c

図版1_2 炭化材(2)



4. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(151住炭化物-b;5)

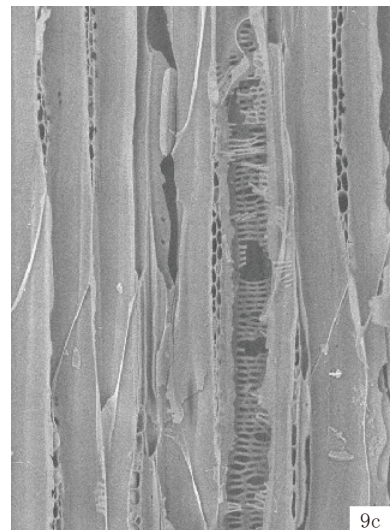
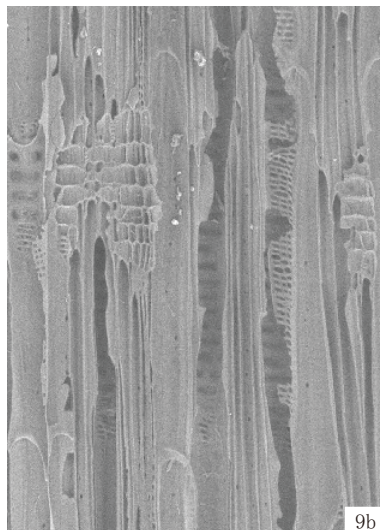
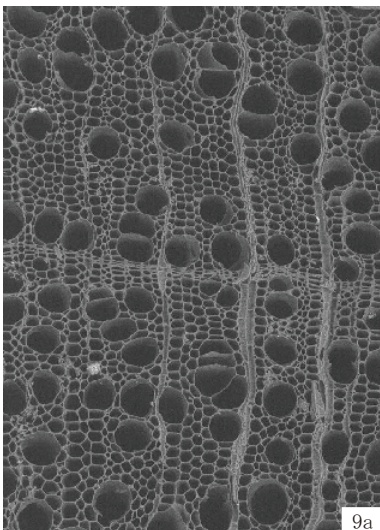
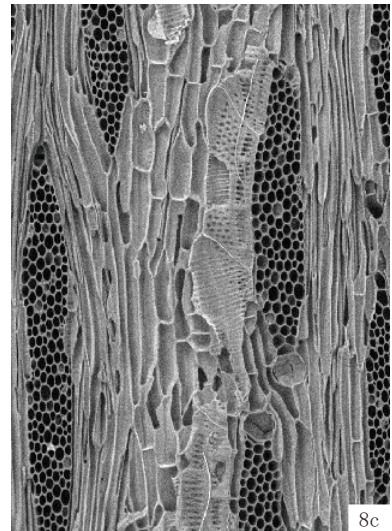
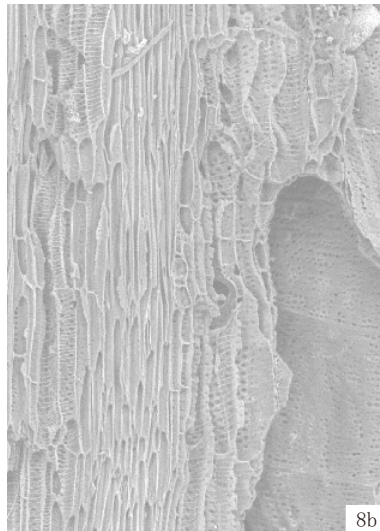
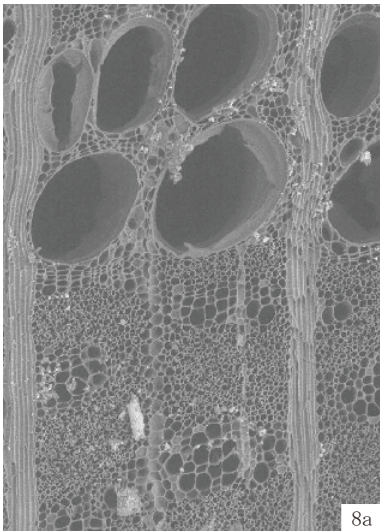
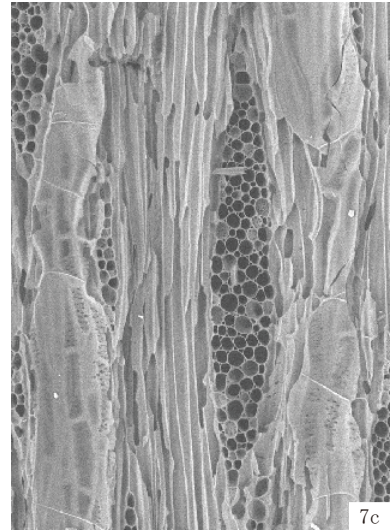
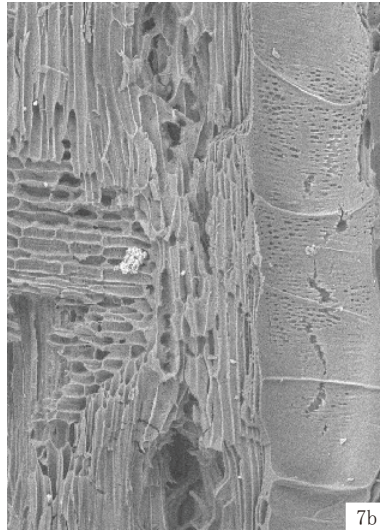
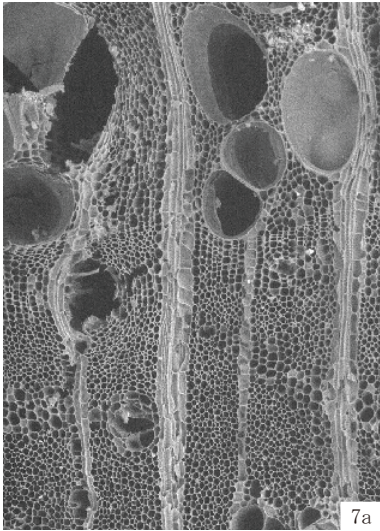
5. コナラ属コナラ亜属コナラ節(135住炭化物-a;4)

6. クリ(245住口;34)

a:木口, b:柁目, c:板目

100 μm: a
100 μm: b, c

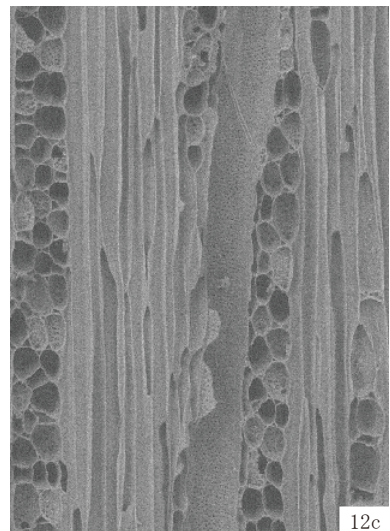
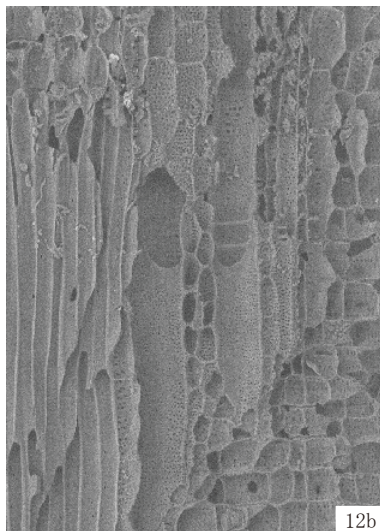
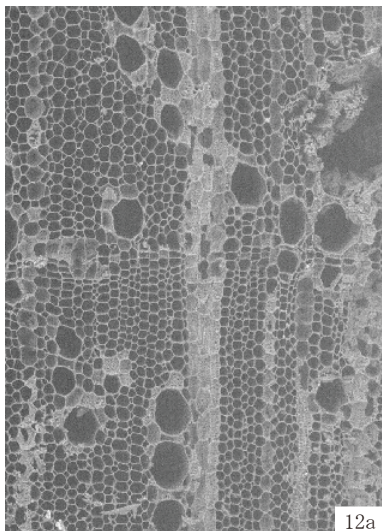
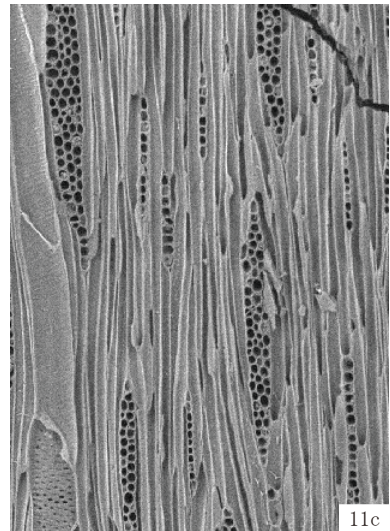
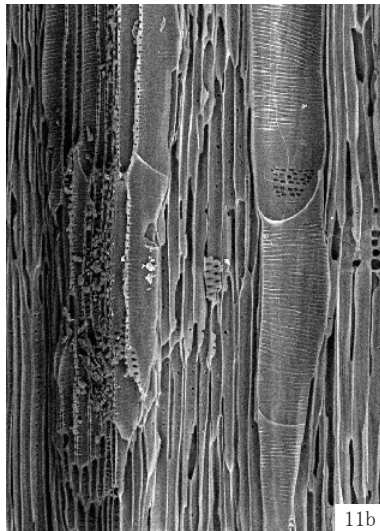
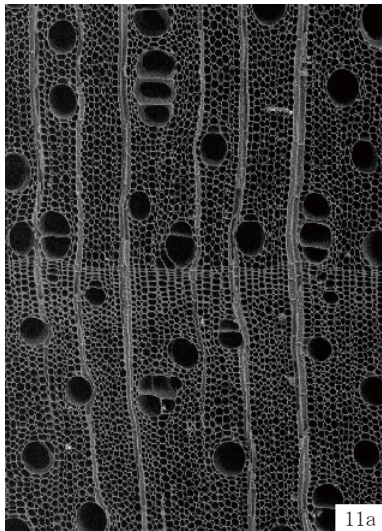
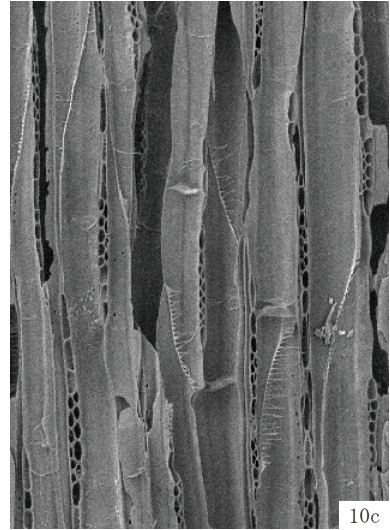
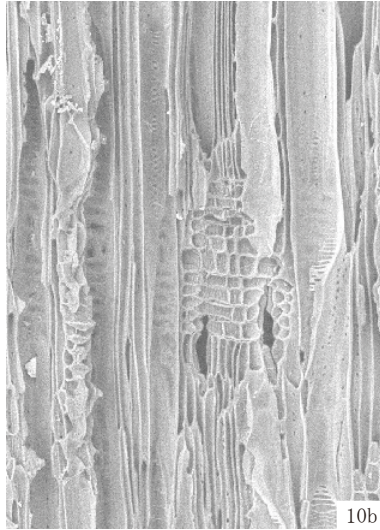
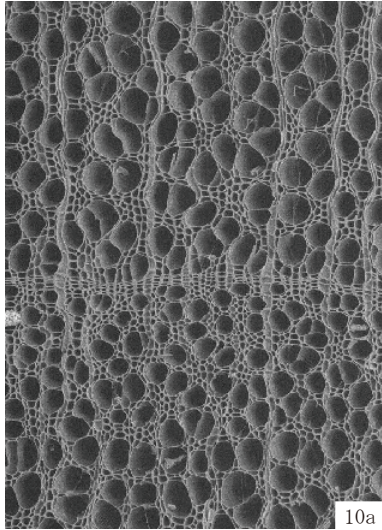
図版1_3 炭化材(3)



7. エノキ属(223住ハ-b;29)
 8. ケヤキ(161住口;8)
 9. モクレン属(161住 南西中層-b;16)
 a:木口, b:柁目, c:板目

100 μm: a
 100 μm: b, c

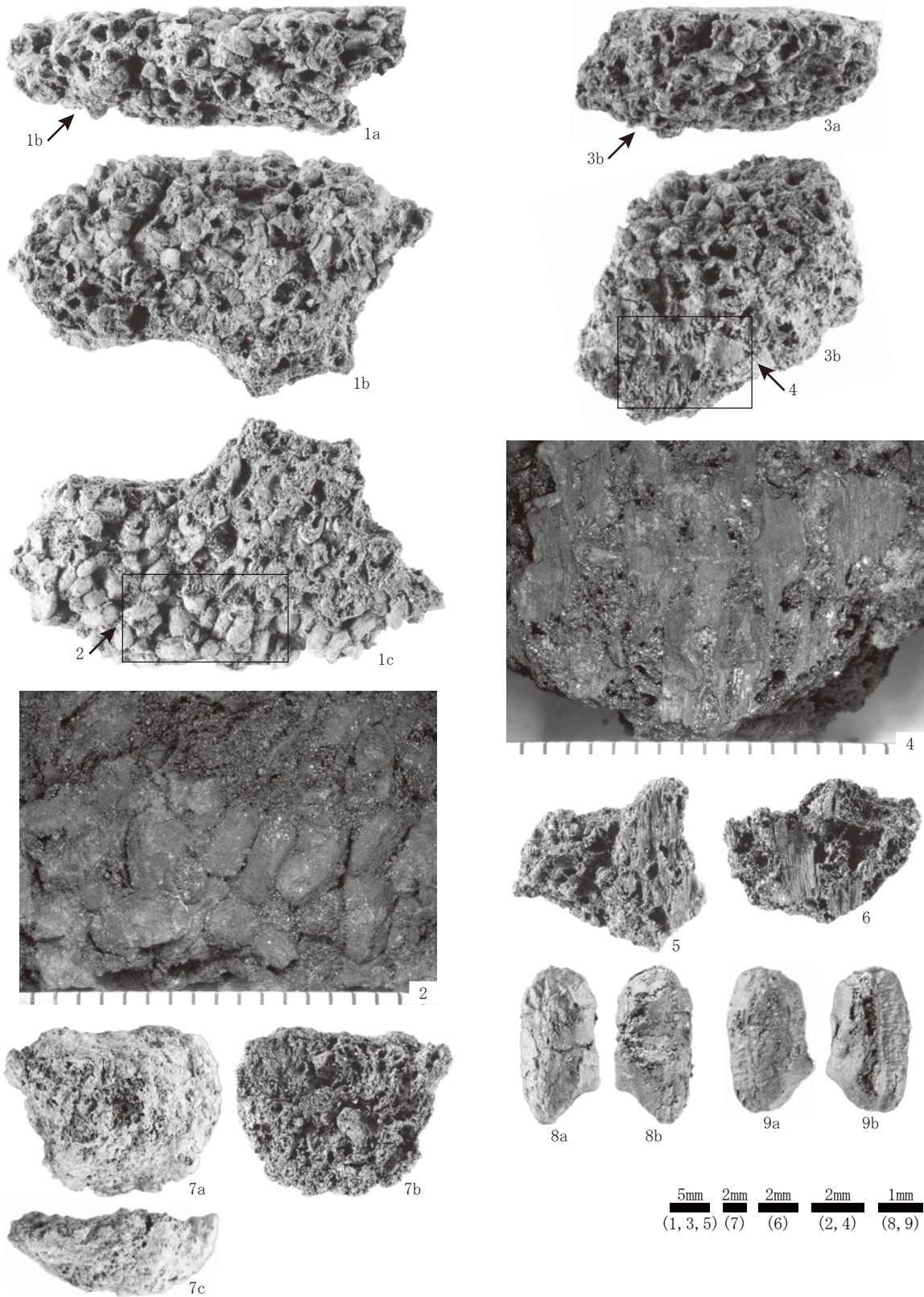
図版1_4 炭化材(4)



10. カツラ (197住炭化物-a;26)
 11. カエデ属 (197住炭-c;23)
 12. アワブキ属 (223住イ-c;27)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

100 μm: a
 100 μm: b, c

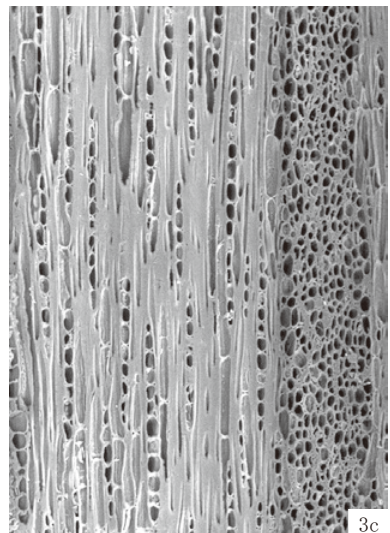
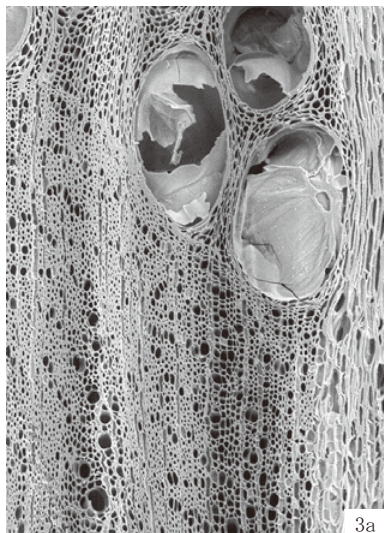
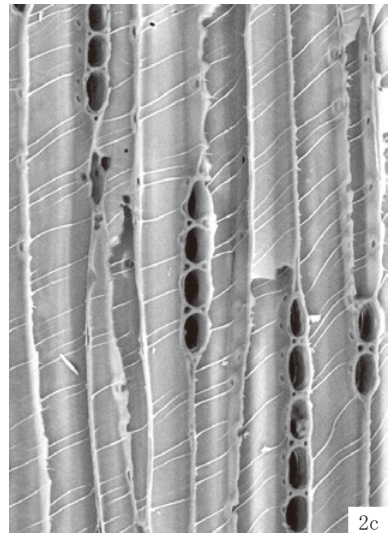
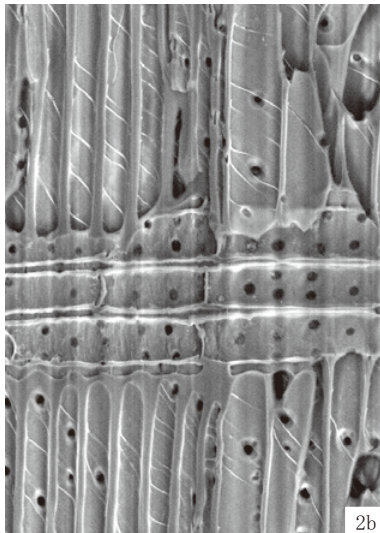
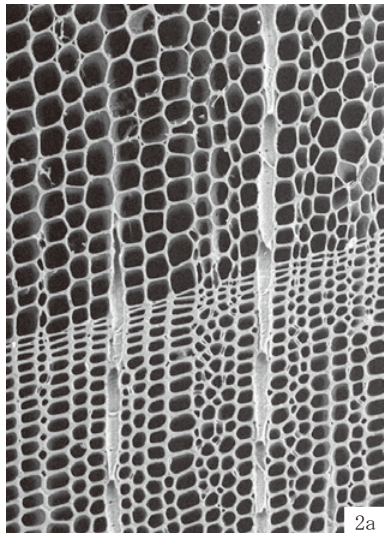
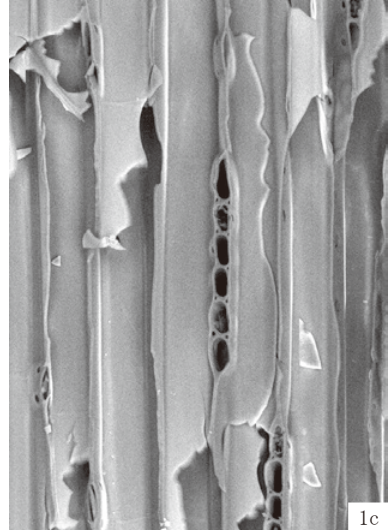
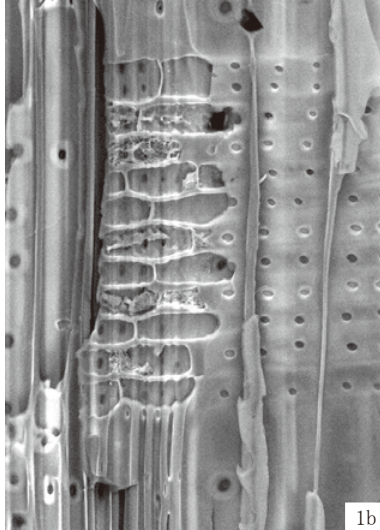
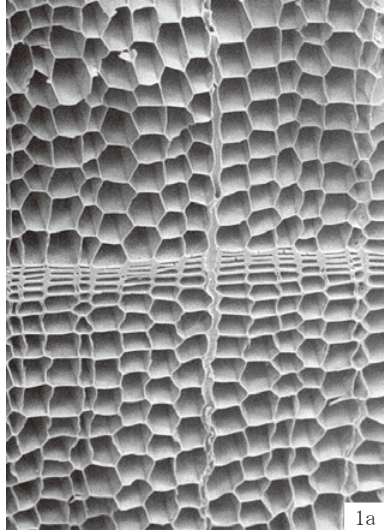
図版1_5 炭化種実






1. イネ 胚乳(塊状)・単子葉類(197住炭化物;24)
3. イネ 胚乳(塊状)・単子葉類(197住炭化物;24)
5. イネ 胚乳(塊状)・単子葉類(197住炭化物;24)
7. イネ 胚乳?(塊状、状態不良)(197住炭化物;24)
9. イネ 胚乳(197住炭化物;24)

2. イネ 胚乳(塊状)(197住炭化物;24)
4. 単子葉類(197住炭化物;24)
6. イネ 胚乳(塊状)・単子葉類(197住炭化物;24)
8. イネ 胚乳(197住炭化物;24)

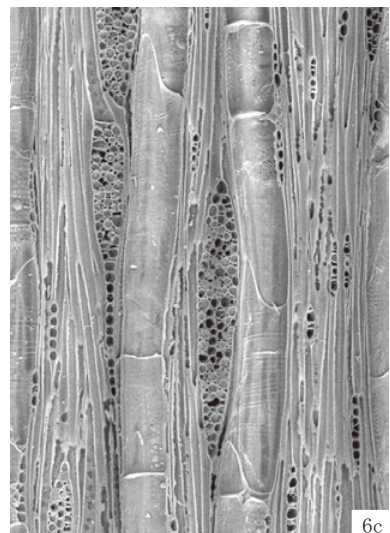
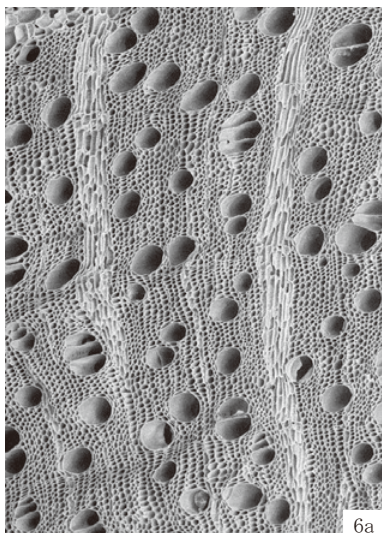
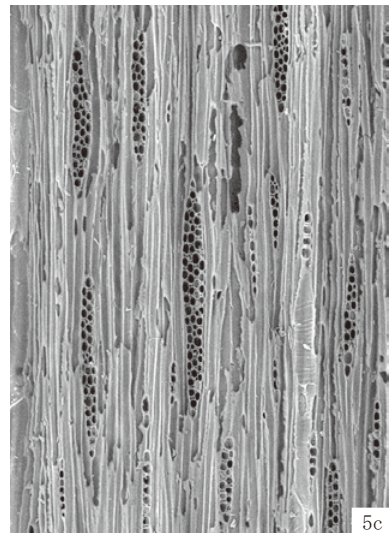
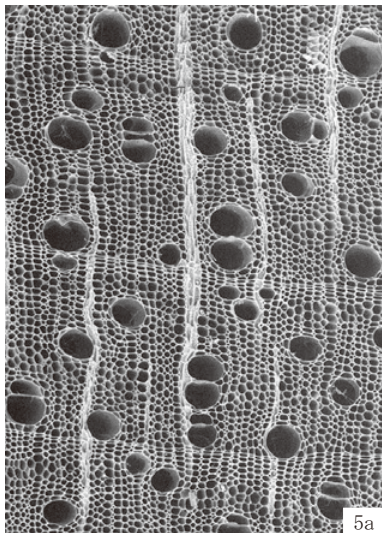
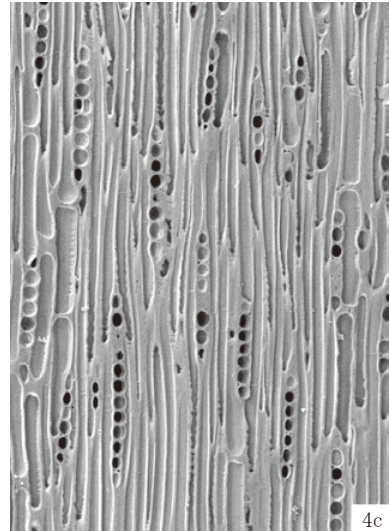
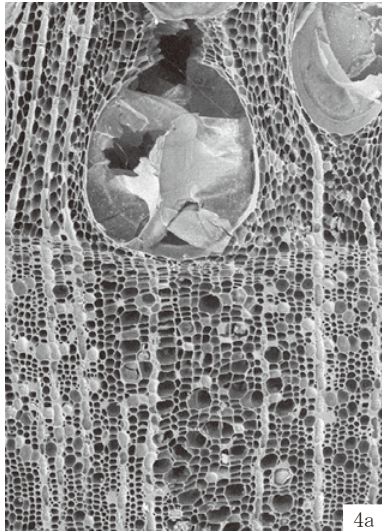
図版2_1 炭化材(1)



1. サワラ (275住 東側拡張部; ID7)
 2. カヤ (275住 No.4; ID5)
 3. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (275住 No.3-1; ID3)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

 200 μm: 2-3a
 200 μm: 1a, 2-3b, c
 100 μm: 1b, c

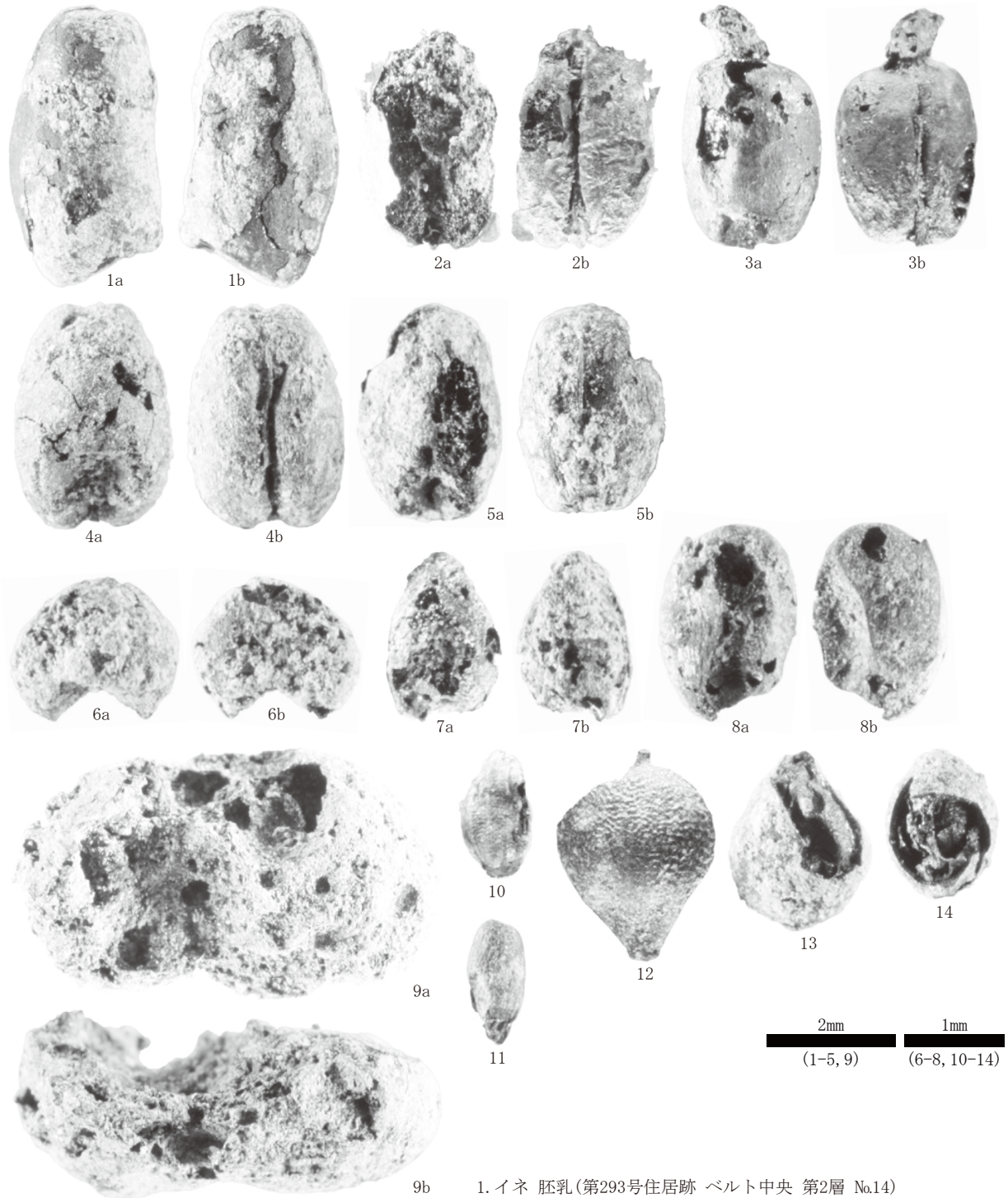
図版2_2 炭化材(2)



4. クリ (275住 No.2; ID2-2)
 5. カエデ属<Aタイプ>(275住 No.3-2; ID4)
 6. カエデ属<Bタイプ>(275住 No.5; ID6)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μm: a
 200 μm: b, c

図版3 種実遺体



- 4b
1. イネ 胚乳(第293号住居跡 ベルト中央 第2層 No.14)
 2. コムギ 穎・胚乳(第293号住居跡 南ベルト 第3層 No.9)
 3. コムギ 胚乳(第293号住居跡 西ベルト 第3層 No.6)
 4. コムギ 胚乳(第293号住居跡 南ベルト 第1層 No.7)
 5. コムギ 胚乳(第293号住居跡 ベルト中央 第3層 No.15)
 6. キビ? 胚乳(第293号住居跡 東ベルト 第1層 No.1)
 7. ヒエ近似種 穎・胚乳(第293号住居跡 西ベルト 第1層 No.4)
 8. ヒエ近似種 穎・胚乳(第293号住居跡 南ベルト 第2層 No.8)
 9. マメ科(ダイズ類?) 種子(第293号住居跡 西ベルト 第3層 No.6)
 10. イネ科 穎・胚乳(第293号住居跡 北ベルト 第1層 No.10)
 11. イネ科 穎・胚乳(第293号住居跡 北ベルト 第1層 No.10)
 12. ホタルイ属 果実(第293号住居跡 北ベルト 第2層 No.11)
 13. タデ属(2面体) 果実(第293号住居跡 ベルト中央 第1層 No.13)
 14. タデ属(3面体) 果実(第293号住居跡 ベルト中央 第1層 No.13)

第4章 調査のまとめ

第1節 遺構について

1 竪穴建物

(1) 規模・規格等の比較

ア 規模

平面形が方形（隅丸方形）を基調としており、一辺の最大は8.0m（99住）、最少は2.2m（105住）、床面積に換算すると最大の99住が46.8㎡、最小の105住が4.8㎡である。第182図のグラフは床面積の分布で、12～14㎡台を中心とする平均的な分布を示す。ただし23㎡台と36㎡、46㎡台に特異な突出があり、大形や準大形の竪穴建物が一定数で存在する傾向が読み取れる。第183図のグラフは床面積の分布を時期別にみたもので、Ⅲ期とⅥ期を除き、突出した大型住居が存在することがわかる。さらにⅠ・Ⅱ期では総数の少なさに比して、特定の床面積に集中せず、様々な大きさのものがかなり対等に分布しているのに対し、Ⅲ・Ⅳ期は中央値に向かってかなり集中しているように見える。Ⅲ期に集落レベルで変化が起こっている可能性がある。

イ 主軸方向

第184図のグラフは竪穴建物の主軸方向を示したもので、ほぼ東西とそれに直交する南北に沿っているものが主流となっている。それ以外では東西軸より北東-南西方向に15～25度振るものとそれに直交するものが一定の数で認められ、これらはⅠ・Ⅱ期の竪穴建物に該当する。すなわち集落の出現時からしばらくは主軸が北東-南西方向に振っており、やがて東西（南北）に定まっていく状況を示すと考える。

ウ カマドの位置

竪穴建物のどの方角の壁にカマドがあり、その壁のどの位置にカマドが築かれているかを第185～187図のグラフで、その時期別のデータを第18表で示した。カマドは竪穴建物の西壁と東壁がほとんどで、わずかに北壁にも設けられるが、南壁の例は皆無である。この傾向に時期差はあまり感じられない。壁のどの位置にあるかは、Ⅰ・Ⅱ期は中央部やその付近がほとんどだが、Ⅲ期以降にやや隅寄りのものが現れ始め、Ⅳ・Ⅴ期にはさらに隅に近いものが増えてくる。本遺跡ではⅥ期以降の動向を知り得ないが、他遺跡の例ではさらに時期が新しくなると隅に設置されることが多くなるので、本遺跡のⅣ期あたりにその萌芽があるとみることもできよう。

(2) 柱穴を持つ竪穴建物

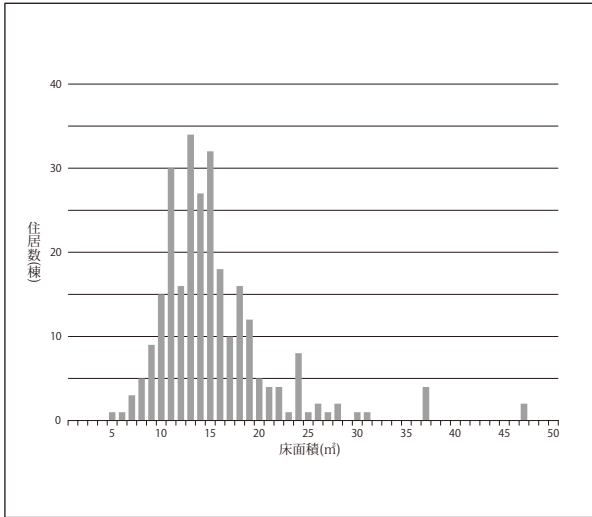
ア 柱穴の有無

第19表は上屋構造に関わる柱穴とおぼしきピットが確認された竪穴建物の一覧だが、総数が15棟で、竪穴建物全体の5%と少ない。地山がローム層だったので沖積地の遺跡では見つけ難いような小ピットや溝なども床面から検出でき、それにもかかわらず柱穴を伴う竪穴建物の発見率が低いということは、本遺跡の竪穴建物は床面に穴を掘って柱を立てるのではない構造が主流であったと考えざるを得ない。

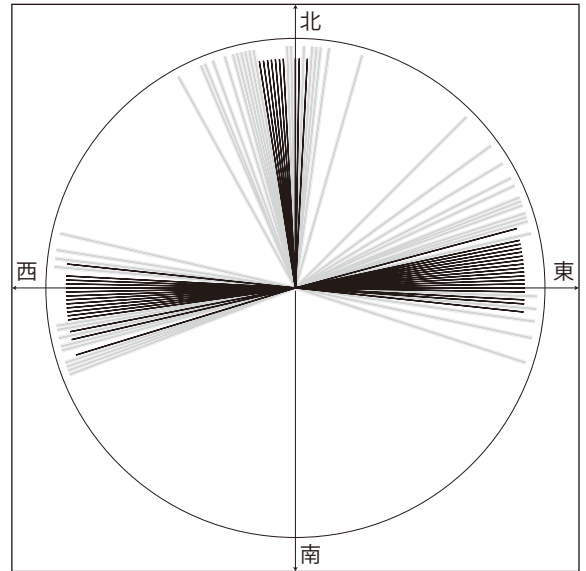
一方、比較的規模の大きい竪穴建物に柱穴が伴うことは明らかである。床面積が上位5位までの大型竪穴建物（50・55・99・110・138・227住）にはすべて柱穴があり、それ以外でも柱穴があるのは中型クラスが多い。柱穴を持つ中で床面積が最小のものは16住（17.7㎡）だが、これも本遺跡の竪穴建物の床面積分布の中央値（13㎡）よりは大きい。逆に中型クラスでありながら柱穴が明らかでないのは226住（21.8㎡）、56住（20.5㎡）くらいである。また柱穴のある竪穴建物は概して遺存状況が良く、これは他の竪穴建物より床面までが深かったことを意味する。これらから、柱穴を有す要件の一つが遺構の規模であることは間違いない。柱穴の有無と竪穴建物の時期について相関関係は認められない。

イ 柱穴の配置

長方形と方形の配置があり、前者が12例（10・14・16・50・51・55・58・99・110新・114・161・272住）と多く、後者は4例（43・110旧・138新・227住）にすぎない。長方形配置は4基の柱穴がかなり扁平

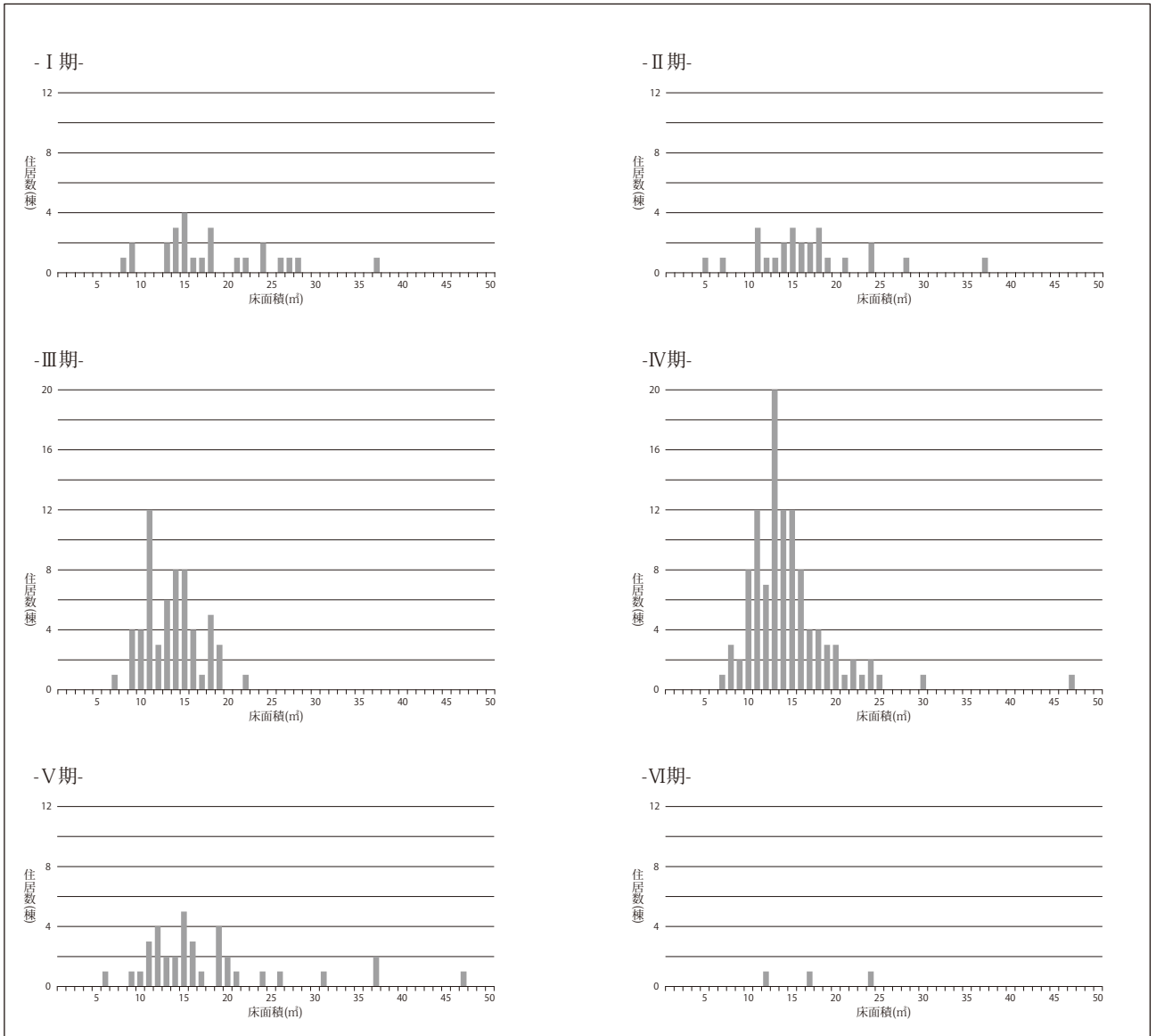


第 182 図 縦穴建物の床面積分布



住居の主軸方向を1度刻みで集計し、グラフ化
 — 該当する住居が3棟以上ある主軸方向
 ... " 1~2棟の主軸方向

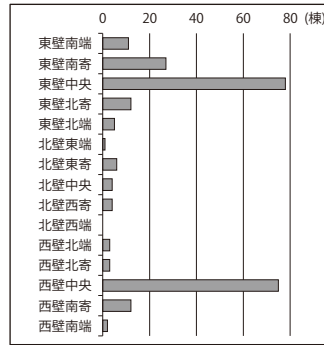
第 184 図 縦穴建物の主軸方向



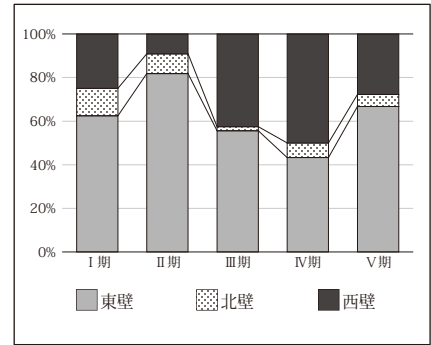
第 183 図 縦穴建物の時期別床面積分布

カマド位置	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期	合計
東壁南端	0	0	3	3	5	0	11
東壁南寄り	4	1	10	9	3	0	27
東壁中央	11	17	15	22	13	0	78
東壁北寄り	0	0	1	10	1	0	12
東壁北端	0	0	1	1	2	1	5
北壁東端	0	1	0	0	0	0	2
北壁東寄り	3	0	0	3	0	0	6
北壁中央	0	1	0	2	1	0	4
北壁西寄り	0	0	1	2	1	0	4
北壁西端	0	0	0	0	0	0	0
西壁北端	0	0	0	2	1	0	3
西壁北寄り	0	0	1	2	0	0	3
西壁中央	4	2	19	41	7	2	75
西壁南寄り	2	0	3	5	2	0	12
西壁南端	0	0	0	2	0	0	2

第18表 竪穴建物時期別カマド方位



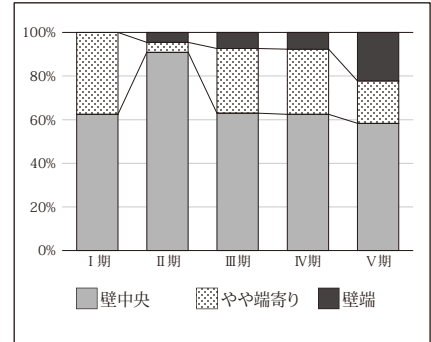
第185図 カマド方位別住居数



第186図 時期別カマド方位比率

遺構名	地区	面積(m ²)	主柱の配列	補助柱穴	時期
10住	1A	25.5	6基-長方形		I新
14住	1A	(28.0)	4基-長方形		II古<
16住	1A	17.7	4基-長方形	(有)	II古<
43住	1A	23.6	4基-長方形		I新>
50住	1A	36.3	6基-長方形	有	V新>
51住	1A	26.3	4基-長方形		I新>
55住	1A	46.3	6基-長方形	有	IV古<
58住	1A	23.3	4基-長方形	有	IV新>
99住	1A	46.8	4基-長方形	有	V新>
110住	1B	36.5	4基-方形, 4基-長方形		II新
114新住	1A	18.1	4基-長方形		V新>
138新住	2	(36.3)	4基-長方形		V古<
161住	2	18.7	4基-長方形		V古<
227住	2	36.8	4基-長方形	有	I古
272住	2	(27.3)	4基-長方形		I古

第19表 柱穴を持つ竪穴建物



第187図 時期別カマド位置比率

の長方形に配置され、その短辺の一つをなす2基が壁直下や壁外へ張り出す位置に設けられるのが基本となる。まれに6基の柱穴が長方形に並ぶものもあるが、扁平であることや壁直下・壁外への配置を欠くことがないのは同様である。壁直下や壁外へ配置される柱穴の位置はカマドの対辺にあたることが多い。方形配列は4基の柱穴で構成され、壁から離れた床中央部に近い位置に4基が方形に並ぶ。壁の各コーナーに柱穴が配されていたと推定される110住(旧)は例外的である。

(3) カマドの移動

竪穴建物の壁に近い床面に複数の焼土層(被熱層)が残っている例が少なからずあり、カマドの移動があった可能性を指摘できる。移動前後の位置関係は①対辺、②側辺、③同辺の左右、④同辺の外側、の4類型がある。①の事例としては75住・85住・217住など壁の中央部から対辺の壁の中央部に動いたものと、164住・199住・207住・286住のように対辺の隅寄りに動いたもの。②は138新住・141住・156住などでいずれも壁の中央部から側辺の中央部に動いたもの。③は180住・198住などにみられる同じ壁の中央部から隅や脇寄りに動いたもの。④は110住・124住・140住・151住・258住など壁の中央部の同じ位置ではあるが竪穴建物の内側から外側へと移動したと推定されるものである。①のうち中央部に動いたものと②は竪穴建物内でカマドが設置されている壁の変更、①で隅寄りに動いたものと③はIII期以降にカマドの設置位置が壁の中央部から隅寄りへと変化していく流れの中にあるもの、④は竪穴建物の拡張に伴うものと理解したい。

(4) 竪穴建物の拡張

周溝の数と配置から竪穴建物の拡張を推定できる例がいくつかある。具体的には、周溝が同じような位置に相似形で二重に巡ったり、やや離れたところを壁に平行して走っていたりするもので、前者としては17住・84住・125住・140住・213住、後者は151住・154住・258住などが相当しよう。140住・151住・258住では前項のような拡張に伴うカマドの移動(④類型)もみられる。138住はこれらの拡張とは異なり、南と西に拡張するとともに旧住居を埋め、より浅いレベルに新住居の床面を構築している。本遺跡では珍しい例である。

(5) 竪穴建物の重複

竪穴建物が密集する1A区と2区では、2棟から数棟単位での重複や著しい近接の例が多く、その中には時期的にほとんど差異のないものもみられた。特に2棟の重複・近接例の中には住居規模や主軸方向、カマ

ド位置などの規格が類似し、しかも時期的にも近く、まるでその場所に限定して意図的に同じような竪穴建物を連続して建てた如くに見えたものがいくつかあった。具体的には 25・26 住（Ⅳ古・Ⅳ新>）、60・61 住（Ⅳ古>・Ⅳ新<）、101・102 住（Ⅰ新>・Ⅱ新>）、103・104 住（Ⅱ新>・Ⅲ新<）、173・174 住（Ⅱ新・Ⅲ古<）、194・195 住（Ⅲ古<・Ⅱ古<）、186・210 住（Ⅴ新>・Ⅳ古<）などで、これらの多くは切る方が切られるものより深く、逆に新しい方の床面深度が浅い例は稀であった。床面深度の差は、構築にあたり良好なローム面が露出するまで掘削しただけという単純な理由かもしれないが、平面配置をも勘案すると竪穴建物の占地が偶然やランダムな選択だけではなく、何らかの条件や規制、意図の上に行われ、その結果として重複が生じた場合もあるのではないかと考えたい。

(6) 特異な竪穴建物

ア 165 住

中央部の床上に 65 × 50cm の大礫が平坦面を上にして据えてあり、平坦面には被熱と敲打の痕跡が顕著であった。硬化した良好な床面は大礫の南側に 50cm ほどの範囲のみに存在した。大礫の東側に隣接して大形のピット（径 100cm、深さ 25cm）があり、内部には鉄滓と小砂利が多量に含まれ底面には焼土が残されていた。本址は竪穴建物の形態をとる鍛冶遺構と推定する。覆土中からも鉄滓が多量に出土したが、土器類は覆土下層と検出面から少量が得られたのみである。覆土下層出土品はⅠ期を示すので本址の時期もそこに求めるが、検出面出土品はⅤ期にまとまっていてどこに由来するか不明である。何らかの跡地利用があったのであろうか。

イ 187 住

上面検出では他の竪穴建物との違いはなく、平面が隅丸方形の竪穴建物として一連の遺構番号を付して掘り下げた。しかし完掘の結果、カマド・炉・柱穴・周溝・床面がなく、壁もゆるい傾斜でなだらかに底面へ続いていく、通常の竪穴建物とは全く異質な遺構となった。深さは約 50cm と他の竪穴建物と比べて遜色はなかったが、遺物は上層から土器類の小破片が数点、下層からは掲載した須恵器杯 A（第 142 図 187_1）の 1 点が二つに割れ 1m ほど離れて出土したのみで他は皆無、出土土器総量は 205g しかなかった。時期は下層出土の須恵器杯 A からⅠ～Ⅱ期とするが他の土器類が貧弱なので詳細はわからない。本址の用途や構築の目的は全く推定できない。掲載した須恵器杯 A は完形品で墨書があり、薄れて判読が難しいが 2 文字あり「王□」と見える。「王」の墨書では最古である。

ウ 227 住

本遺跡の中では 3 番目の床面積（36.8㎡）を有する大形住居で、方形配列の 4 本の支柱穴と 12 本の壁柱穴を持つ。さらに東壁中央に設置されるカマドの対辺にあたる西壁中央部直下に特徴的な規模と配列の 5 基のピットがある。隣接する同時期の 226 住から「小栢寺」と記す墨書が出土しており、規模と特異なピット配置から本址は村落寺院の可能性が指摘される（本章第 3 節 2）。

2 溝址

溝 2・溝 6・溝 19 は本遺跡を特徴づける最大の遺構である。調査地内に限っても 200m 以上に延びる長大なもので、溝 2 と溝 6 は 2 区と 1 区を西から東に貫いて横断し、溝 19 は 4 区から 5 区にかけて集落居住域の北限を画すように位置している。

(1) 溝 2 と溝 6

溝 2 と溝 6 には水流があったことを示す堆積が認められ、この 2 条は集落に導水する目的で人為的に掘削された大型の用水路と推定する。本遺跡が所在する三間沢川下流域の左岸一帯はローム層とその上部腐植土層で形成される土壤、地質で極めて水利が悪く（文献 1）、現代においても農業用水はすべて梓川から引水されている（中信平右岸用水：昭和 47 年竣工）。本遺跡が営まれた平安時代前期に、このような高燥な土地に自然流路があり、それを一部改修して利用していたと考えるのは、無理があると思う。溝 2・溝 6 は共に本遺跡のかなり遠方から導水していたもので、その水源は松本市と山形村境の唐沢川、またはその近在の西山山麓から流下する小河川の可能性が高いと現段階では考えている（注 1・2）。溝 6 は遺構各説（第 3 章第 2 節）で推定したように、4 区の西側外から調査区域内に入っていったん南下し、2 区の西側区域外で

東に曲がって2区を貫くものとみるが、溝2も4区の西部を南下する溝16がその上流と捉えると、溝6とほぼ同様の位置を取る。両者とも時期差はあるが水源から本遺跡まで同じような経路をたどっていたためであろう。

溝2はI期に属し集落の開始期と一致するので、この水路と本遺跡の出現は極めて密接な関係があり、溝2を開削して入植を開始したとの想定も可能である。一方、溝6はⅢ期の中で掘削されⅤ期の中で埋没したと推定でき、本遺跡の最盛期と軌を一にしている。集落の生活用水を支え続けた水路であったに違いない。この水路が機能していた間には当然、部分的な自然埋没や崩落などがあり、それに対して溝浚いや修繕など維持管理の営みも継続されたであろう。溝幅の太い地点の土層にはそれに関連した、溝の中心部の移動のようにも見える痕跡が認められる（溝6土層図d・o・p地点など）。溝6の埋没以後、本遺跡は急速に衰退して集落は消滅する。集落の継続には溝6の維持管理が不可欠で、逆に言うと集落を維持していく必要がなくなった時点で溝6の埋没が始まったのであろう。この地で集落を営むには導水は必須の条件で、本遺跡は溝2と共に始まり、溝6の消長と盛衰の歩みを共にしたといえよう。

(2) 溝19

本址が導水用の水路であることを示す堆積は明確にはみられない。ただし滞水した痕跡はあった。この長大な溝の用途・目的については次のような想定ができる。①本遺跡の集落の北限を画す。これは全体の遺構配置を見れば自明である。ただし、平面形が集落の展開する南側ではなく、逆の北側を内面とするような弧状を描いており、②集落北側の遺構がない空白の領域を囲う。という目的も感じられる。特に溝21が単独ではなく本址の続きと見ればその感は一層強まり、その領域に行くための通路が5本も溝19を渡っている点もこの見解をさらに補強する。溝19の北側には発掘調査で把握できなかった何らかの（重要な）用途の領域・空間があった可能性が高い。

本址の時期は、直接の遺構重複や出土遺物から下限をⅣ期新からⅤ期古と考えた。始まりはⅡ期の竪穴建物が本址の南北に展開するのでそれ以降とみると、用水路である溝6とほぼ並行する集落の盛行期に存在、機能したと推定される。

注1：第2次調査（S63）の際、地形地質担当の調査員だった太田守夫氏が溝6最下層に堆積していた流路性の砂礫について肉眼観察の結果「梓川水系ではなく唐沢川水系のもの」との見解を述べられていた。本書への成稿を頂戴する前に逝去された。

注2：平成23年に実施された下原遺跡第2次調査で、9世紀後半頃に埋没した水路が発見されている。幅約3m、深さ1m以上を測り、最下層には砂礫の堆積があった。報告書では大規模な土木工事によって作られた導水目的の水路で、旧唐沢川もしくはその支流、分流から取水していた可能性を考えている（文献43）。本遺跡から1.5km西方の地点であり、この水路が本遺跡に向かうものであったと即断はできない。しかし本遺跡と同時期に溝6に匹敵する規模の水路が作られていたという発見は極めて重要である。

3 通路状遺構

4次調査で発見された通3・通4は、調査当初は通路という認識はなく、溝19に付随する溝底に降りていくための施設で、同溝の一部が張り出したものと捉えていた。しかし5次調査でも溝19の延長上に同様の遺構が2基も現れたため、それほど幅が太くない溝19の溝底に降りる目的だけでこのような施設が何カ所も必要なのかという疑問が生じた。それまで想定していなかった種類の遺構の可能性もあったので、長野県立歴史館考古資料課長（当時）であった原明芳氏に現地視察をお願いしたところ、溝19を渡るための通路の痕跡ではないかというご教示を得た。また、溝を渡るための道の発掘調査での先行事例を探したところ、かなり類似する事例（文献6・22）を見出すことができ、本址を通路状遺構として把握することができた。

第2節 土器・陶磁器について

1 三間沢川左岸遺跡における土器・土器群の変遷

(1) 先学の成果と本遺跡の土器群

長野県内の古墳時代末期から平安時代全般にかけての土器類・土器群の段階区分（編年）、年代観については、文献27と文献13（本節では、以下「両文献」という。）が広く用いられている。いずれも直接には長野自動車道建設に伴って発掘調査が行われた塩尻・松本市内の遺跡を対象としたものであったが、長野県内では同時期の多くの遺跡で両文献の時期区分と年代観が参照され、特に時期名称は文献13のものが多く使用されている（文献2・7）。両文献とも、基本的には杯Aの型式変化と土器群内での種別構成比を基準にした時期的な段階を設定したうえで、それに伴う各器種の消長や型式変化、土器群の様相の変化を明らかにするという方法を採用しており、現在でもその有効性に否定的な見解はない。（注1）

本遺跡の土器類も大枠では両文献の成果の範囲で把握は可能である。しかし両文献が直接対象とした遺跡に比して年代幅が短いにもかかわらず遺構は密で、土器類の量は極めて多い。遺跡の立地自体も異なる。この特徴を考慮すると、さらに詳細な土器群の段階区分に基く時期の尺度での遺構や集落の把握が必要となる。ここでは両文献の成果を基軸としながら、本遺跡出土土器群の段階区分を独自に設定すると共に代表的な器種器形の消長について考えてみたい。

(2) 段階区分の設定

実測可能な土器個体数が合計で20点を超え、かつ種別を問わず杯Aが10点以上ある土器群（例外として、これを満たさないが時期的な特徴を示す必要のあるものを含む）で、遺構の切り合い等の把握に層位的な問題がないもの30例を対象として、時期的な段階区分の設定を試みた。区分の基準は両文献に倣い、複数の種別に共通する器形の杯Aの消長と口径の変化を第一の指標とするもので、土師器杯Aの出現を大きな画期とし、それ以前を須恵器と黒色土器Aでの杯Aの構成比、それ以降を土師器杯Aの平均口径によった。さらに副次的な指標として、主な食膳具の種別と器種の消長、煮炊き具の器種の消長を参考にした。指標の詳細と段階区分の根拠は第20表に示すとおりで、本遺跡出土の代表的な土器群は連続する11の段階に細別できる。各段階の名称は最も代表的な土器群の遺構名を用いる（正式には「三間沢川左岸遺跡○○段階」。単に「○○段階」と略す）。既存の段階区分（両文献）と本遺跡の各段階との対応関係についても第20表に示す。各段階の指標と概要は以下のとおり。

① 227住段階 227住、287住から出土した土器群を基準とする。杯Aは須恵器と黒色土器Aで構成され、後者の占める比率が20%以下であることが第一の指標である。土師器の甕が甕Bと甕Cで構成されることが副次的な指標となる。須恵器の杯Bと蓋がわずかに伴う。

② 51住段階 10住、43住、51住から出土した土器群を基準とする。杯Aは須恵器と黒色土器Aで構成され、後者の占める比率が20～60%であることを第一の指標とする。土師器の甕が甕Bと甕Cで構成されることが副次的な指標で、次段階との差異は黒色土器Aの椀と皿Aが伴わないことである。

③ 288住段階 16住、224住、288住から出土した土器群を基準とする。杯Aは須恵器と黒色土器Aで構成され、後者の占める比率が60%を超えることを第一の指標とする。土師器の甕は甕Bと甕Cで構成され、本段階から黒色土器Aの椀と皿Bが伴う場合があることが副次的な指標となる。次段階との差異は軟質須恵器の杯Aが伴わないことである。

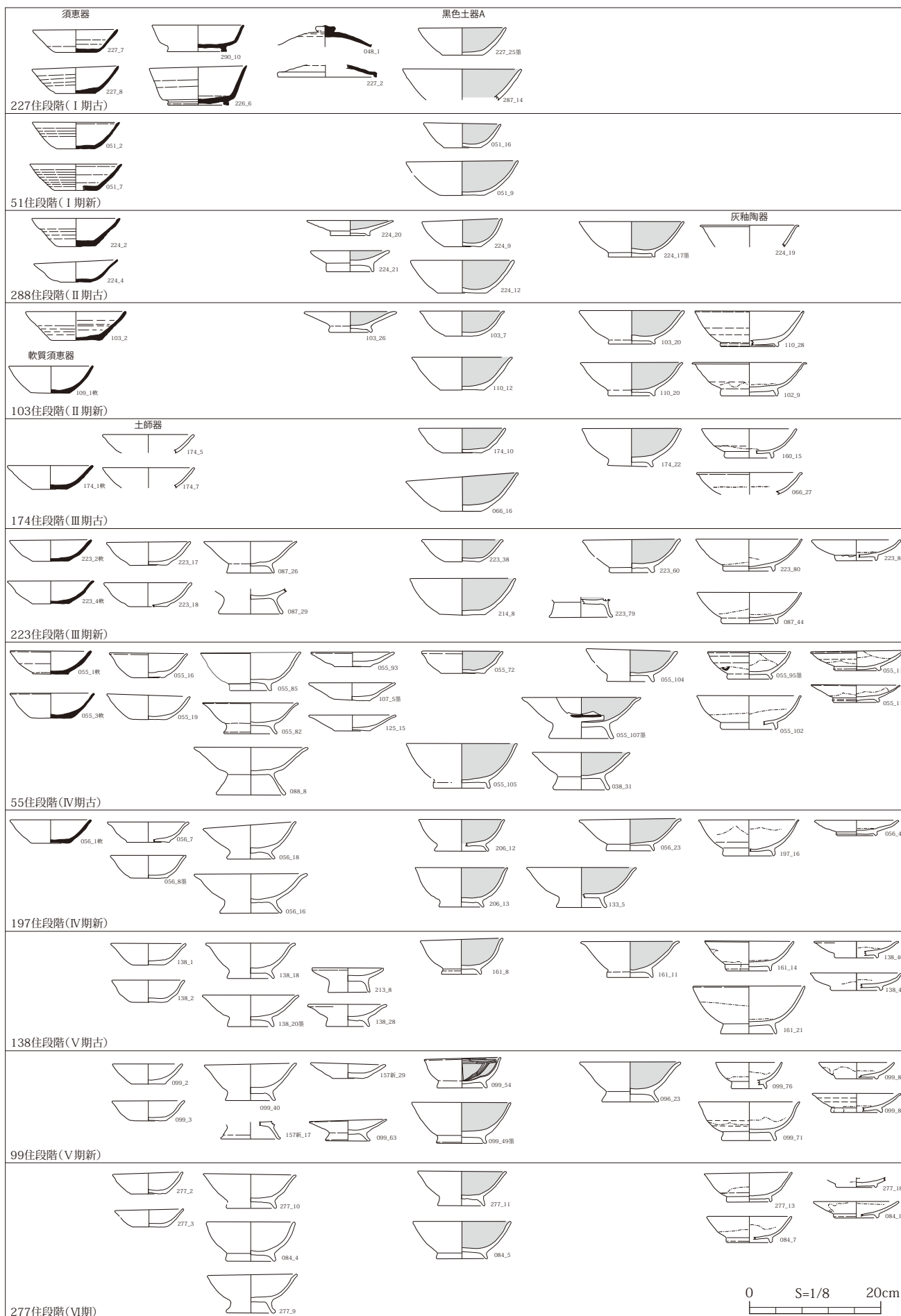
④ 103住段階 103住、110住から出土した土器群を基準とする。杯Aは須恵器と軟質須恵器、黒色土器Aで構成され、須恵器と黒色土器Aにおいて後者の占める比率が60%を超えると共に軟質須恵器が伴うことを第一の指標とする。土師器の甕は甕Bが主体となり甕Cがわずかに伴う場合があること、黒色土器Aの皿Bが伴う場合があることが副次的な指標となる。

⑤ 174住段階 66住、174住から出土した土器群を基準とする。杯Aは軟質須恵器と黒色土器A、土師器で構成され、土師器の杯Aの口径が13cm以上であると共に須恵器の杯Aがみられないことを第一の指標とする。土師器の甕は甕Bが主体だが甕B・甕Cの分類では括れないその他の甕が伴うことが副次的な

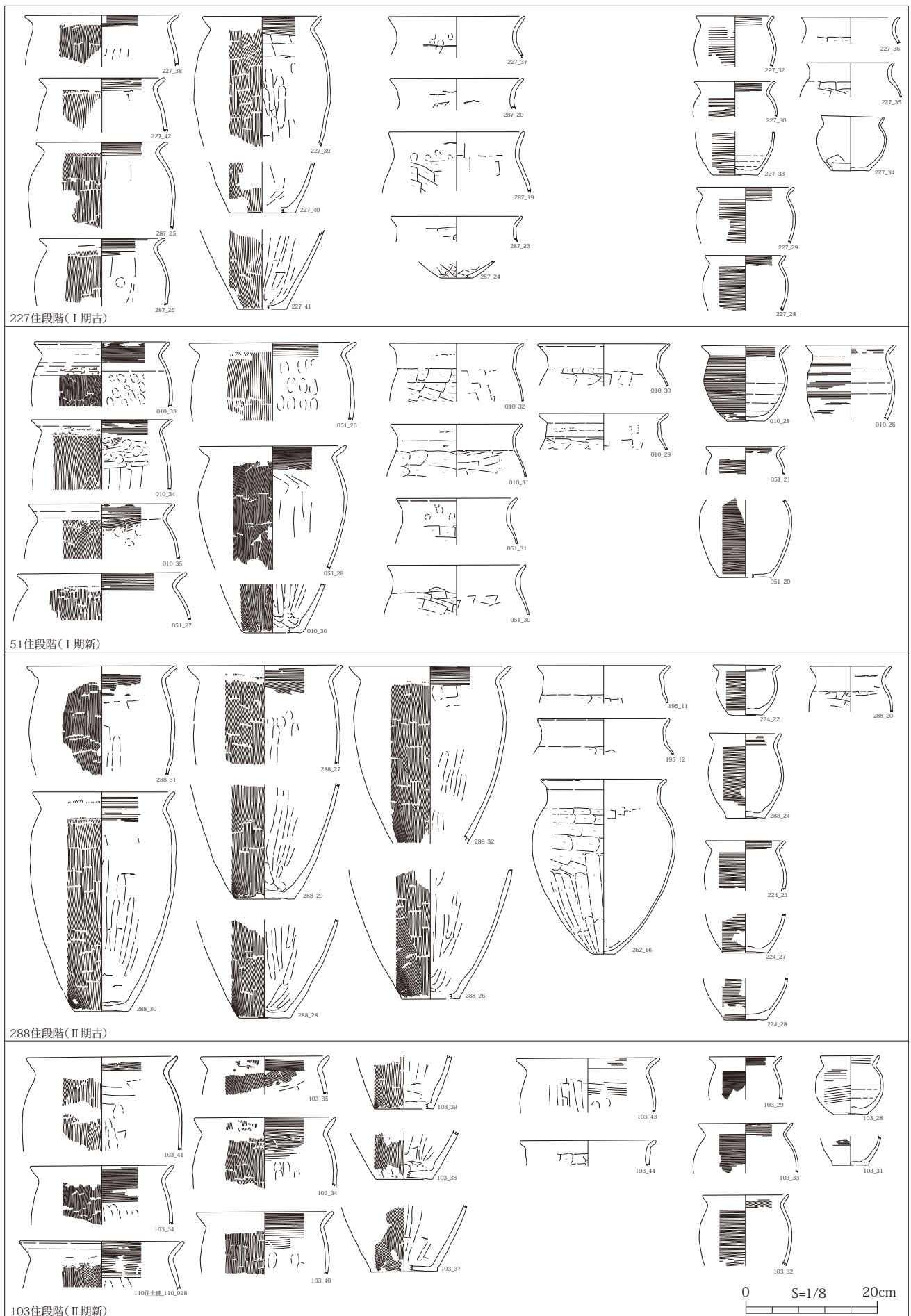
時期	段階区分		土器群 (遺構名)	総個 体数	杯A個体数			黒杯A 割合(%)	土杯A口径 平均(cm)	杯A以外の食膳具の個体数				甗の個体数			既存編年の各段階と基準							
	段階名称	杯Aの指標			その他の指標	須	軟須			黒A	土	計	須蓋	杯B	黒皿	黒椀	土椀	土盤	灰	緑	甗B	甗C	甗他	原1989
I期	227住段階	須80%以上		227住	42	18	4	22	18.18		2	2						5	1		原1989	小平1990		
	51住段階	黒20～60%前後	須杯B・蓋消滅	287住	27	12	2	14	14.29									3	6		SB184段階 黒杯20～60%		6期	
II期	288住段階	黒60%前後超	黒椀・皿出現	10住	38	8	14	22	63.64		0	0						4	4					
	103住段階	黒60%前後超 軟須出現	灰椀皿出現	43住	27	9	7	16	43.75		0	0						2	5					
III期	174住段階	土口径13cm台 土登場・須消滅		51住	36	7	11	18	61.11		0	0						4	4					
	223住段階	土口径13cm前後	土椀出現	16住	20	1	0	13	92.31		1							2	1		SB144段階 黒杯60%超 (軟須出現)		7期 (須惠器減少) (軟須出現)	
IV期	55住段階	土口径12cm台後半		224住	33	5	0	14	64.29									1	2					
	197住段階	土口径12cm台前半 軟須消滅		288住	33	4	0	11	73.33									1	3					
V期	138住段階	土口径11cm台後半		103住	51	2	1	16	84.21									2	6					
	99住段階	土口径11cm台前半		110住	35	1	2	13	81.25									5	10					
VI期	277住段階	土口径10cm台		66住	57		4	15	21	13.30								0	5					
				174住	34		4	11	5	20	13.53							0	3					
				87住	59		7	5	12	24	13.10							10	6					
				194住	23		4	3	8	15	13.16							3	3					
				223住	123		13	13	23	49	12.90							19	9					
				24住	38		3	3	10	16	12.81							3	11					
				38住	44		8	3	10	21	12.52							9	3					
				55住	133		9	6	63	78	12.65							5	14					
				156住	41		3	5	11	19	12.66							4	7					
				56住	57		2	0	8	10	12.10							9	12					
				135住	21		0	1	9	10	12.40							4	1					
				197住	21		0	1	11	12	12.10							1	1					
				138住	45		0	16	16		11.70							2	11					
				161住	39		0	4	4		11.70							5	3					
				286住	22		0	5	5		11.55							1	3					
				50住	87		3	22	25		11.00							5	8					
				59住	32		0	10	10		11.40							3	2					
				99住	109		0	39	39		11.11							16	6					
				84住	11		0	3	3		10.57							2	1					
				277住	21		1	6	7		10.84							2	2					

表中「須」は須惠器、「軟須」は軟質須惠器、「黒」は黒色土器A、「土」は土器、「灰」は灰椀陶器、「緑」は緑釉陶器を略したものの

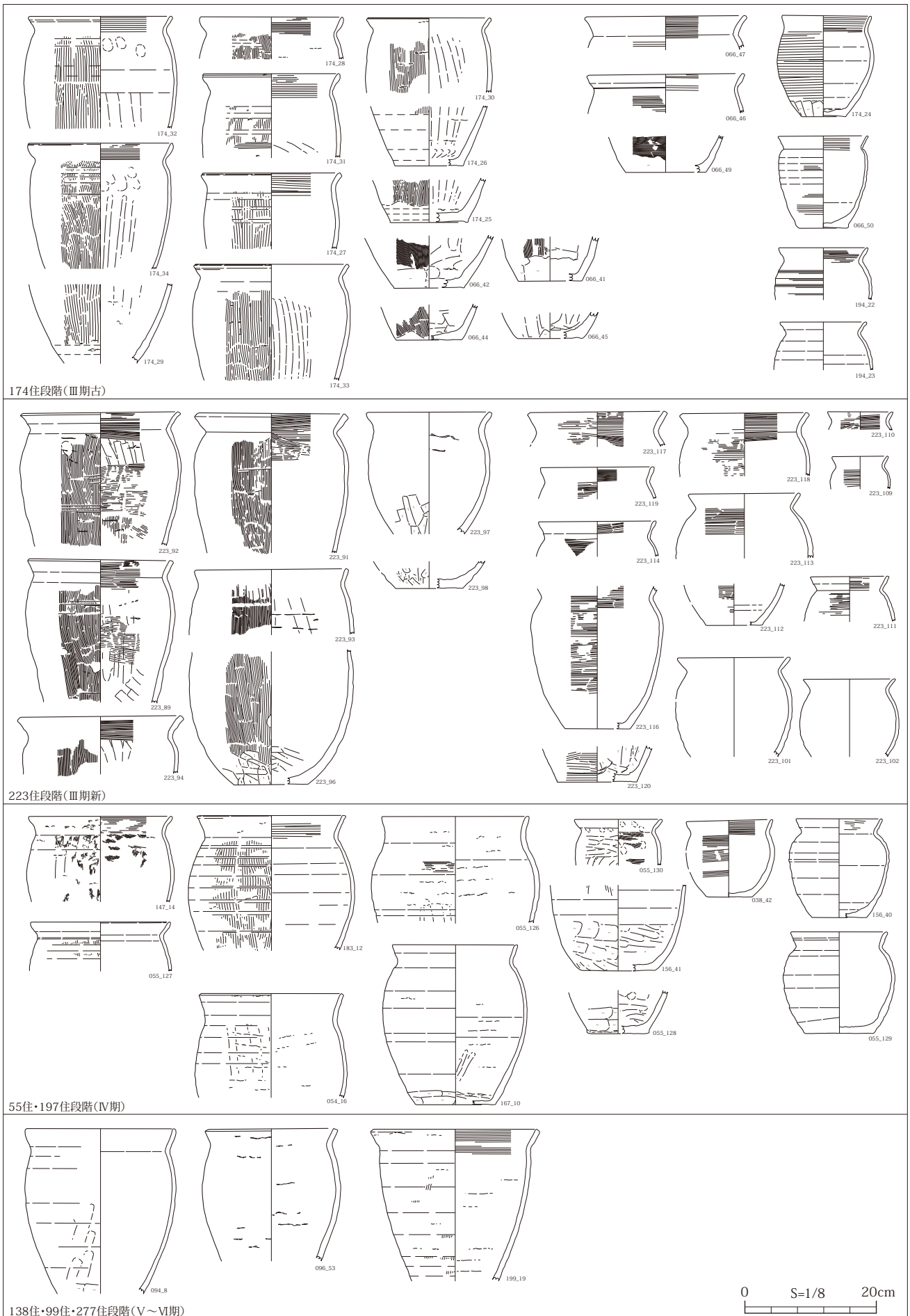
第20表 三間沢川左岸遺跡における土器群の段階区分



第 188 図 食膳具の変遷



第 189 図 甕類の変遷(1)



第 190 図 甕類の変遷 (2)

指標である。前段階との差異は土師器の杯Aが現れること、黒色土器Aの皿Bがみられないことである。

⑥ 223 住段階 87 住、194 住、223 住から出土した土器群を基準とする。杯Aは軟質須恵器と黒色土器A、土師器で構成され、土師器の杯Aの口径が13cm前後であることを第一の指標とする。土師器の椀が伴うことが副次的な指標となる。

⑦ 55 住段階 24 住、38 住、55 住、156 住から出土した土器群を基準とする。杯Aは軟質須恵器と黒色土器A、土師器で構成され、土師器の杯Aの口径が12cm台後半であることを第一の指標とする。

⑧ 197 住段階 56 住、135 住、197 住から出土した土器群を基準とする。杯Aは黒色土器A、土師器で構成され、土師器の杯Aの口径が12cm台前半であることを第一の指標とする。前段階との差異は軟質須恵器の杯Aがほとんどみられなくなることである。

⑨ 138 住段階 138 住、161 住、286 住から出土した土器群を基準とする。杯Aは黒色土器Aと土師器で構成されるが前者は僅少で後者が主体を占め、土師器の杯Aの口径が11cm台後半であることを第一の指標とする。土師器の盤Bがわずかに伴う。

⑩ 99 住段階 50 住、59 住、99 住から出土した土器群を基準とする。杯Aは黒色土器Aと土師器で構成されるが前者は僅少で後者が主体を占め、土師器の杯Aの口径が11cm台前半であることを第一の指標とする。土師器の盤Bが伴う。

⑪ 277 住段階 84 住、277 住から出土した土器群を基準とするが、他に比べ本段階は良好な土器群に恵まれていない。杯Aは黒色土器Aと土師器で構成されるが前者は極めて僅少で、土師器の杯Aの口径が10cm台後半であることを第一の指標とする。

(3) 段階区分と時期の名称

前項では良好な土器群30例による段階区分を設定したが、この段階区分は本遺跡の遺構や遺物、集落の時期を記述、比較するための尺度にする目的もあった。ただし「段階」という名称はあくまでも土器群の段階区分という限定的なものであり、遺構・遺物や集落の変遷について時間的な順番や前後関係も示しながら時期を規定する用語としては適当ではない。また、遺構や集落の時期の尺度としては細かすぎる点もある。そこで本遺跡の遺構・遺物や集落の「時期」を示す汎用的な名称としては土器群の段階区分に対応させた「三間沢川Ⅰ～Ⅵ期」の用語を使用する。土器群の段階区分との対応関係は第20表左側欄のとおりである。(混乱のおそれがないかぎり表記短縮で「Ⅰ期」「Ⅱ」略す。細分が必要な場合には「Ⅰ期古・新」等で表記する。)

(4) 土器群の変遷

土器群の段階区分に基づいた食膳具の変遷の概要を第188図に示す。その量的な比較は第20表を元に作成した各段階の杯Aを構成する種別の比率グラフ(第191図左)と、食膳具全体の種別構成の比率グラフ(第191図右)で示した。第191図左からは、杯Aの種別構成が須恵器から黒色土器A、そして土師器へと遷移していく大きな流れと、その中での軟質須恵器の出現と消滅、消長が読み取れる。第191図右は杯Aだけではなく椀や皿、盤Bなどを含む食膳具全体における各種別構成の比率を示したもので、やはり須恵器から黒色土器Aへ、そして土師器と灰釉陶器へと変化していく大きな流れがわかる。

同じく煮炊き具の土師器甕と小型甕の変遷概要を第189・190図に示す。甕Bと甕Cによる構成から、やがて甕Cがなくなり、さらにその他の甕が現れると共に甕Bが型式変化していく状況がわかる。

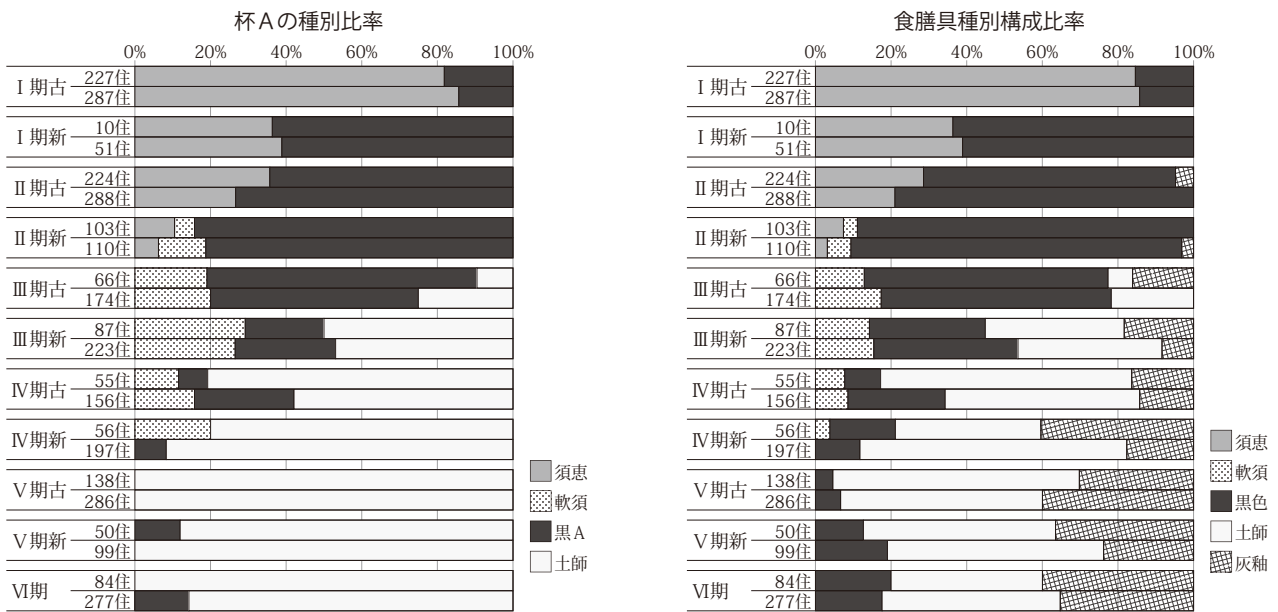
(5) 代表的な器種の消長と変化

ア 杯A

最も普遍的な器種で、種別は須恵器、軟質須恵器、黒色土器A、土師器に限られ、灰釉陶器と緑釉陶器には全くみられない。軟質須恵器と土師器の区別が難しい焼成のものが少なからずある。(注2)

須恵器の杯AはⅠ・Ⅱ期のみでみられなくなる。底径の縮小と器高の減少による体部の傾斜の増加や、器壁が薄くなるなど文献13で指摘されているのと同様の動きを示す。軟質須恵器はⅡ期から散見されるようになり、Ⅲ期からⅣ期古に量的なピークを迎えた後、急速に姿を消す。その間、技法や形態にほとんど変化はみられない。外形は須恵器杯Aのような小ぶりの底部から直線的に体部が開くものではなく、むしろ黒色土器Aの杯Aに近い。

黒色土器AはⅠ期からⅥ期までほぼ間断なく存在するが、Ⅱ・Ⅲ期で量的なピークを迎え、Ⅳ期新以降は



第 191 図 土器群別にみる食膳具の種別構成比率

著しく数を減じてV期以降には僅少となる。I～III期は大小（I・II）の二規格（二法量）が明確に認められるが、III期以降の全体量の減少に伴い「大」規格の存在が不明瞭になる。技法的には、I期は内面のミガキの方向や単位が把握できないほど細かく密で、回転を用いた外器面の調整も凹凸が少なく、全体的に丁寧な造りである。II期以降は内面のミガキが口縁部は横方向、体部・見込み部は放射状に定形化し、新しくなるほど磨き残しの隙間が目立つ雑なものになる。放射状のミガキを全く行わず、各種の十字状の暗紋に置き換わるものがIII期以降に現れる。

土師器はIII期から現れ、急激に種別間での量的な比率を増して、IV期以降は杯Aの80%以上を占める。両文献は時期が下るにつれて口径が縮小していく現象を指摘し、時期区分の主要な指標としているが、本遺跡でも全く同じ状況を示した。技法的には時期差に起因する差異はみられない。初期から成形・調整が雑で全体が歪むものも散見され、出現期にあっても丁寧に作られた様相は認められない。文献27では出現時に黒色土器Aと同様な大小の二口径（二法量）の存在を認めているが、本遺跡ではこの点は明確にできなかった。

イ 杯B

須恵器のみであり、I期の土器群にわずかに伴うが量的に極めて少ない。本遺跡では盛行期を過ぎているためであろう。身の深いもの（第154図226_6）と浅いもの（第168図290_10）、径が小さいもの（第150図223_1）がみられた。

ウ 椀

杯Aに次いで普遍的な器種で、種別は黒色土器A、土師器、灰釉陶器で多数がみられ、緑釉陶器の中でも半数を占める。ごくまれに軟質須恵器とするしかない胎土、色調を呈すものがある。

本遺跡での椀の初現はII期の土器群に伴う黒色土器Aと灰釉陶器で、土器群内での構成比は少なく、特に灰釉陶器は僅少である（110住・224住）。II期の黒色土器Aの椀は、外形は腰の張りが緩やかで大きく開き、小さい高台が付されるものが多く、同期の灰釉陶器の椀に似る。技法的には前時期の黒色土器Aの杯Aと同様で内面のミガキは均質で方向が揃い、回転を用いた外器面の調整も凹凸が少ないなど、全体的に丁寧な造りのものが多い。

III期になると土師器が加わり、以後はこの3種別が椀の主要な構成となる。黒色土器Aと土師器は類似の外形を呈すものが多く、高台は前時期より厚く大きめのものも目立つようになる。黒色土器Aの内面ミガキは、同杯Aと同じで口縁部は横方向、体部・見込み部は放射状で定形化するが、磨き残しの隙間が目立つ雑なものが多くなる。暗紋も同杯Aと歩調を同じくしている。黒色土器A、土師器ともに成形・調整も雑で全体が歪むものも散見され、土師器の椀は出現期にあっても丁寧に作られることはない。III期の後半より高台が高く体部が浅めの足高椀が現れるが数量は少なく、最初は黒色土器Aに限られ、次いで土師器にも類似す

る形態がみられるようになる。この足高椀が、両文献ではV期以降に出現するとされる盤B Iに繋がって行く可能性も考えたい(第20表では盤Bではなく椀でカウントしている)。

IV期も種別の構成や外形、調整の特徴に前時期と大きな変化はなく、粗雑さが一層目立つようになる。土師器の中には高台のやや高いものや、体部の腰の張りが微弱、あるいは直線的なものがみられるようになる。

V期以降になるとわずかに黒色土器Bがみられるようになる。また半球形の小椀、深椀が黒色土器Aと灰釉陶器に現れるが、従来のような形態も依然として存在する。両文献では全国的な様相と次期以降の動向を見据え、土師器の体部が直線的で高台の高いものを盤B Iとして椀から分離するが、本遺跡の段階まででは従来の椀との外形上の差異に基づく区別はむずかしいものが多い。

エ 皿

皿Aは高台が付されないもの、皿Bは高台があり、皿Cは段皿である。皿Aは土師器にしかみられず、IV期以降の土器群にわずかに伴うのみの希少器形といえる。皿Bの種別は黒色土器Aと灰釉陶器、緑釉陶器で、黒色土器AはII期に集中的に現れ、それ以後は全くみられない。技法的には、黒色土器Aの杯Aや椀のような粗雑化が生じる前に消滅するので、顕著な変化を指摘するのはむずかしい。口径12～14cmの範囲にあるが、17cmを超えるものもある(第167図288_19)。灰釉陶器はIII期から現れ、以後継続する。緑釉陶器は数量が少ないが灰釉陶器と同様の傾向を示す。段皿は灰釉陶器と緑釉陶器にしかみられない。III期からわずかに現れ、IV期以降に量を増す。

オ 盤B

両文献によると、I・II(大・小)の二法量があり、文献27ではSB94段階:10期相当、文献13では11期から出現し、「長く外傾する高台がつき、上部は皿状(文献27)」、「足高高台を有する身の浅い椀型の器(文献13)」と説明されている。本遺跡ではV期以降に盤B IIが散見される。盤B Iは体部のみの残存では土師器椀との区別が明瞭にできなかった。また「高い高台」に着目すると、本遺跡では黒色土器Aの中に体部が椀に近い形態でIII期ころから現れ始め、次いで土師器にも同形態が現れるが、それを盤B Iとすると両文献での出現時期や形態の説明と齟齬が生じる。その点で文献23による屋代遺跡(千曲市)での黒色土器Aの盤B I(土師器の盤B)の分類の方が本遺跡の状況に近いと感じられた。「椀」の項でも述べたように本書ではこれら高い高台のものをとりあえず足高椀として把握し、盤B Iにカウントしていないが、今後、在地における盤Bの出現を探っていく中で当然、見直しがなされるものとする。

カ 土師器甕B

I・II期に盛行するが、その後は徐々に型式変化をしながら量を減らし、IV期には全く原形をとどめない形態となって消滅する。(第189・190図)

外形上の変化の着目点は口縁部の長さとお開・外反度合い、口唇部の形態にある。例外も少なくないが、概略としては口縁部の長さは[短]→[長]、外開・外反度合いは[強・外反]→[弱・直線+稜]→[弱・受け口]、口唇部は[細丸]→[太丸]→[面や沈線]という方向で変化していく。技法上での着目点は器肉の厚さ、ロクロ等の回転を用いた器面調整が行われる範囲、ハケメの整雑、胴部下端のケズリの有無と範囲である。こちらも例外はあるが、器肉は[薄]→[厚]、回転を用いた調整範囲は[狭・口縁頸部]→[広・胴部上半]、ハケメは[整・均質]→[雑・太細や深淺のばらつき]、胴部下端は[端部までハケメ]→[下端部にケズリ]と変化していく。外形上の口縁部の長さとお開度合いの変化が技法上の回転を用いた器面調整の変化に密接に連動しているであろうことは容易に推測できる。

オ 土師器甕C

I～II期にみられる。I期には甕Bに拮抗する量を持つ土器群もあるが、全形を知り得るものは少ない。II期新にはごくわずかとなり消滅する。外形の変化は文献13で把握されているものと全く同じで、口縁部が「く」の字状から逆「コ」の字状になる。小型甕Cも同様の経過をたどるが、口縁部形態の変化は顕著ではない。

カ 小型甕D

ロクロ等の回転を用いて器面すべての調整を行い、底面には回転糸切り痕を残すもので、I期から盛行し、本遺跡では型式変化をしながら概ねV期までは存在が確認できる。(第189・190図) 胴部外面の調整痕と

口縁部形態を中心とする外形を時期的な変化の指標とする。その他にも大小の規格に時期的特徴が感じられるが明確な指標にはできなかった。

I期は胴部外面の全面にカキメが顕著に残る。カキメの条は均質で深く、隙間はない。器肉は薄い。II期も同様だが、やや雑になる傾向がある。III期には雑な傾向が顕著となり、カキメの太細や深淺のばらつきが大きい。一応、カキメは行うがロクロナデの凹凸を均しきれず、カキメが当たる部分とそうではない部分が生じた個体も多い。器肉は厚くなり、器壁を薄く削り込むためのカキメの意味が失われていく。さらにロクロナデのみでカキメを行わないものが現れ、これは口縁部内面のカキメも欠落している。IV期以降はこの傾向がさらに強まり、部分的でもカキメが認められる個体はごくわずかになり、ほとんどがロクロナデのみとなる。II期から現れ始める、このカキメの粗雑化という現象は、甕Bにおける胴部外面のハケメの変化に似ており、双方が製作段階で何らかの関連性を持っていることが窺える。

口縁部を中心とした外形は、短めの口縁が強く外開・外反するものから、やや長めで外開・外反が弱くなるという方向で変化する。甕Bほど顕著ではないが、やはり同様な傾向がある。

キ甕

直立かわずかに内傾する長い口縁部下に罫が全周し、頸部のくびれが全くない形態の大形の土師器で、発掘時は羽釜と認識していた。しかし整理作業を進める中で、羽釜の特徴のひとつである平底大型や丸底の底部が破片資料を合わせてもほとんどみられない一方で、かなり底径が大きくなりそうな底の抜けた甕とみられる破片が多数あり、一部は接合して甕としての全形が捉えられた。また、文献13では羽釜の出現が11期(本遺跡VI期相当)であること、文献27ではSB114段階(本遺跡IV期相当)で羽釜Aが出現するがその多くが羽釜型の甕であろうとしていることを勘案し、前記の罫が付く土師器は本書ではすべて甕という名称で一括した。羽釜が含まれている恐れは皆無ではないが、羽釜として接合・復元できた例はない。

III期新(IV期古)の土器群に伴って現れVI期まで継続している。形態上の特徴や製作技法の時期的な差異などを抽出、一般化するには個体数が少なすぎて難があるが、III期以降の甕Bの太細や深淺のばらつきがあるハケメに類似する調整痕が残るものと、全く異なるナデや工具ナデなどがみられるものがある。罫以下がかなり長く丈の高いものもある(第131図152_19)。いずれも厚手で、中には極めて焼成が良く、色調は土師器だが質感や重量は須恵器に匹敵するような例もある。事例の増加とともに、在地以外にも視野を広げて検討が必要な器種であろう。

2 模倣・搬入された土器

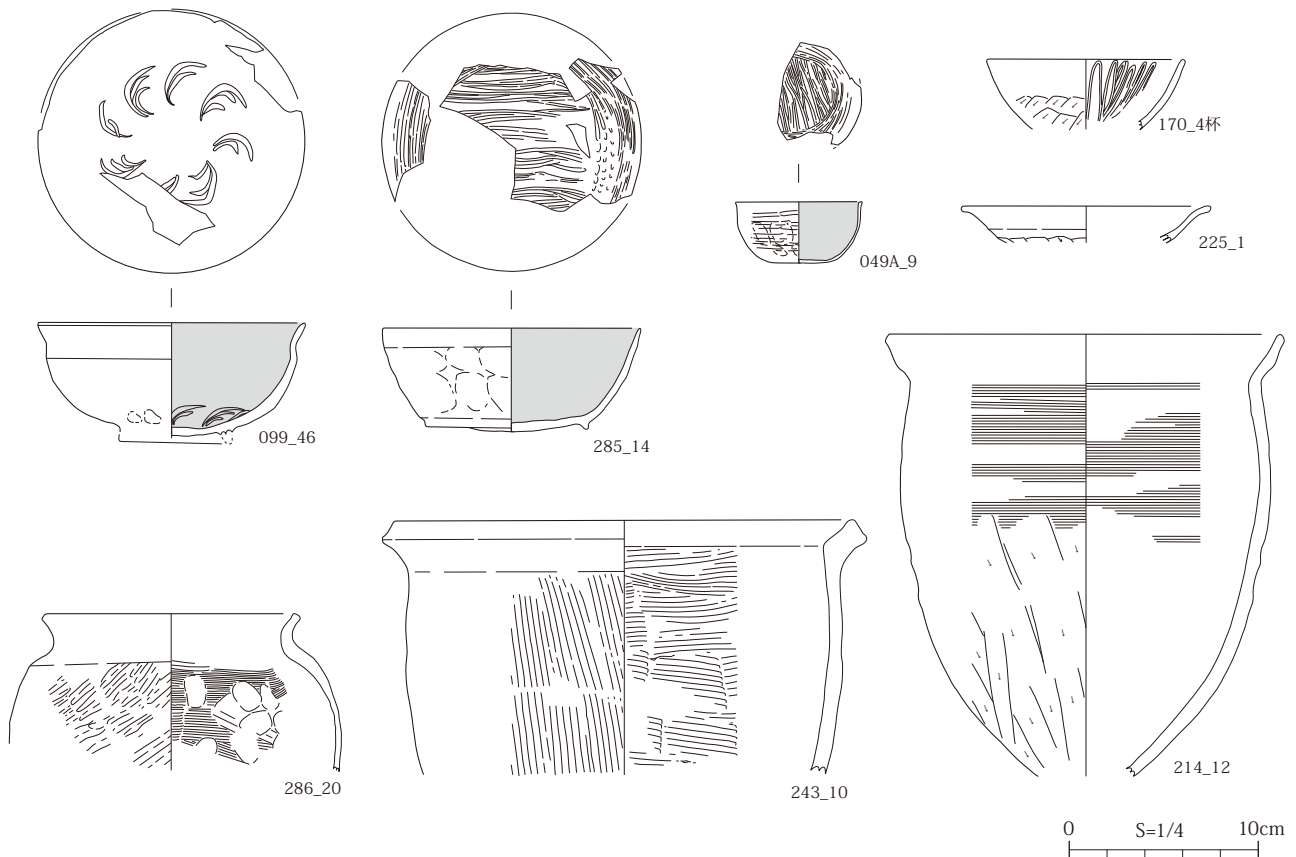
土師器や黒色土器Aの中に在地で通有の器種器形に比して形態や製作技法が大きく異なるものがわずかにみられる。在地の系統的な土器生産から外れたものと考えられ、他地域からの搬入品か、それらを模して特別に製作されたものである可能性が高い。

(1) 食膳具

黒色土器Aでは第117図099_46(椀)と第166図285_14(椀)、第100図049A_9(小鉢)を挙げたい。後の2者にはロクロナデによる器面調整の行われた痕跡がない。小片で図化できなかったが049A_9によく似た黒色土器Bの破片が187住の上層からも1点出土している。土師器では第137図170_4(杯)、第153図225_1(皿)を挙げたい。前者は体部内面に放射状の特徴的なミガキがあり外面下半は手持ちケズリ、後者にも外面下半に手持ちケズリがあり、口縁端部は玉縁状を呈す。甲斐型の杯や皿に似る。

(2) 土師器甕類

第147図214_12(甕)、第158図243_10(甕)、第166図286_20(小型甕)が該当する。214_12は口縁部内面から胴部上半部までカキメが巡り、外面胴部下半には縦方向のケズリが行われるが、甕Cのような薄い器壁には仕上がっていない。北信を中心に分布する甕に似る。243_10は四角く厚い口縁部や強いハケメ、口縁端部に最大径がある点など甲斐型の甕と共通点が多い。286_20は肩部以上に強いヨコナデが行われ、胴部は外面が稜のできるくらい強いケズリ(もしくはタタキ)の後に全面的な太いミガキ、内面が明瞭な指頭圧痕とハケメで調整され、焼成が極めて良い土器で、在地での類例をみない。



第 192 図 模倣・搬入土器集成

3 緑釉陶器

(1) 胎土と色調の特徴

出土した器種はほとんどが碗と皿であるが胎土の色調や質感、釉の色調はかなり多様である。生産地と時期の違いに起因すると考えるが、筆者の狭い知見ではそれについて触れるのは困難なので、外見上の観察にとどめた。

胎土は色調や硬さ、質感で 4 種類ほどのグループに分けられる。第一のグループは灰白色を呈しやや硬めのもの、第二のグループは同じく灰白色を呈するがかなり軟質なもの、第三のグループは黒めの暗灰色を呈し須恵器のような質感で硬いもの、第四のグループは青灰色や薄めの灰色を呈し須恵器のような質感で硬いものである。第二のグループに属するものはわずかしかない。被熱の影響であろうか、断面の一部やすべてに橙色を帯びるものが各グループでみられる。

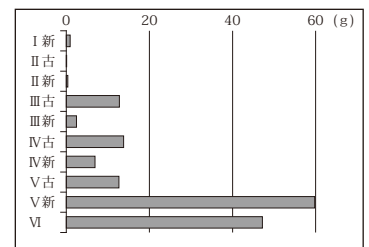
釉の色調は淡緑や草色、淡黄緑、緑、濃緑や渋みのある濃緑などがみられる。一個体の釉の色調はほとんどが一様だが、器面の狭い範囲に黄橙色の部分を持つものや、より濃い緑の大小の斑点が全面的にとんでいるものが、特に緑や濃緑の釉の個体でみられる。

胎土の質感と釉の色調にはある程度の相関を認めてもよい。胎土が第一のグループは概して淡緑や草色を呈し、第三や第四のグループには緑や濃緑が多い。特に第三のグループで渋みのある濃緑が目につく。

(2) 時期別の出土比率

本遺跡での緑釉陶器の総出土量は 3,589g で、うち時期が判定できる竪穴建物出土の土器群に伴っていたのは 3,322g である。これらの時期別の重量と、それを該当時期の竪穴建物棟数で割り戻した数値を第 21 表に示す。I・II期は 1.0g 以下なので、とりあえず混入として排除すると、本遺跡での緑釉陶器の確実な

時期	重量合計(g)	II棟あたりの平均(g)
I 期新	16.3	0.91
II 期古	1.5	0.09
II 期新	5.5	0.37
III 期古	332.8	12.80
III 期新	109.2	2.43
IV 期古	773.0	13.80
IV 期新	551.2	6.89
V 期古	316.4	12.66
V 期新	1075.0	59.72
VI 期	141.5	47.17
計	3322.4	(11.34)



第 21 表 緑釉陶器時期別出土重量 (左表)

第 193 図 住居 1 棟あたりの緑釉出土重量 (右図)

No.	実測図No.	出土地点	器種	残存状況	重量(g)	胎土	釉調・色調	備考
1	001 14	1住	碗	高台2/3、口縁全欠	101.4	灰白硬	草色	見込みに圈線2本
2	004 11	4住	碗	高台1/4、口縁全欠	29.7	灰白硬	薄草色	見込みに凹線
3	009 12	9住	皿	高台1/6、口縁1/8	15.1	暗灰硬	濃緑むら有	
4	011 13	11住	皿	高台1/4、口縁1/8	17.6	灰白硬	草色、釉全面剥落	釉は被熱で落ちたか
5	013 25	13住	皿	高台1/4、口縁1/10	24.8	暗灰硬	黒濃緑	No.6と同一個体か、飛び出し底部
6		13住	皿	口縁1/10	4.7	暗灰硬	黒濃緑	No.5と同一個体か
7	015 14	15住	碗	高台1/3、口縁1/10	32.7	白色やや軟	濃緑むら有	小丸碗
8		15住	不明	1.5cm小片	1.0	白橙やや硬	草色	
9		16住	不明	1.5cm小片	1.5	灰白硬	草色	
10		20住	皿	口縁1/8	9.8	暗灰硬	濃緑	No.11と同一個体か
11		20住	皿	口縁1/8	5.3	暗灰硬	濃緑	No.10と同一個体か
12	022 30	22住	碗	高台2/3、口縁全欠	62.6	青灰硬	緑	見込みに圈線か
13	024 31	24住	碗	高台1/8、口縁全欠	9.0	暗灰硬	濃緑	
14		25住	碗	口縁1/10	5.0	青灰硬	緑	
15	025 12	25住	香炉	体部1/8	3.7	白色やや軟	草色、艶著しい	透かしらしきもの
16	027 5	27住	碗	高台1/8、口縁全欠	16.3	青灰硬	緑	見込みに圈線
17	029 26	29住	碗?	高台完、口縁全欠	64.7	青灰硬	草色、底面露胎	底面墨書「王」(墨書No.67)
18		29住	不明	1cm小片	1.4	灰白硬	草色、内面無釉	瓶にしては薄い
19		31住	不明	1.5cm小片	3.9	暗灰硬	濃緑	
20		31住	不明	1cm小片	1.6	灰白硬	草色	
21		32住	皿	口縁1/16	7.9	灰白硬	草色	
22		32住	碗	口縁1/20小片	0.9	暗灰硬	濃緑	
23	032 7	32住	碗	口縁1/10	5.1	暗灰硬	濃緑	
24	033 20	33住	碗	口縁1/10	5.0	灰白硬	濃草色、釉外面剥落	
25		33住	碗	1.5cm小片	3.4	灰白硬	草色	
26	033 21	33住	碗	口縁1/10	2.5	灰白硬	草色	
27		33住	碗	口縁1/10	2.0	青灰硬	緑	
28	034 30	34住	碗	高台1/4、口縁全欠	14.1	暗灰硬	濃緑	
29	034 29	34住	碗	体部1/8	10.2	青灰硬	緑	稜碗
30		34住	不明	1.5cm小片	4.6	灰白硬	草色	底板か
31		34住	不明	1.5cm小片	2.8	灰白硬	淡草色	
32	038 35	38住	碗	高台1/4、口縁全欠	16.1	暗灰硬	濃緑むら有	皿とするとかかなり大きい
33		38住	碗	体部1/6	15.8	白色やや軟	草色	
34		42住	碗	口縁1/16	3.8	青灰硬	緑	
35		47住	碗	口縁1/25	1.1	青灰硬	緑	
36	050 66	50住	皿	高台1/3、口縁全欠	24.3	暗灰硬	濃緑	
37		50住	皿	口縁1/10	5.9	青灰硬	緑	
38		50住	碗	口縁1/20	2.8	暗灰硬	濃緑むら有	
39		50住	碗	1cm小片	0.8	暗灰硬	濃緑むら有	
40		50住	碗	1cm小片	0.8	白色やや軟	草色	
41	050 68	50住+75住+84住	皿	高台3/4、口縁1/3	93.2	暗灰硬	緑	段皿
42	050 67	50住	皿	高台1/4、口縁全欠	13.3	灰白硬	草色	
43	053 3	53住	皿	口縁1/8	4.1	灰白硬	草色、釉外面剥落	
44		53住	碗	1.5cm小片	2.4	灰白硬	草色	
45	055 114	55住	碗	口縁1/8	17.5	灰白硬	草色	
46	055 115	55住	碗	口縁1/10、体部1/8	11.1	青灰硬	緑	輪花
47	055 112	55住	碗	口縁1/8	5.5	灰白硬	草色	
48	055 113	55住	碗	口縁1/8	4.0	青灰硬	緑	
49	055 116	55住	碗皿	高台1/6のみ	3.5	灰白硬	草色	
50	055 125	55住	皿	口縁1/8	3.2	灰白硬	濃緑	
51		55住	碗	口縁1/20	3.0	灰白硬	草色	
52		55住	碗	口縁1/20	2.6	灰白硬	濃緑	
53		55住	不明	1cm小片	2.2	灰白硬	草色	
54		55住	碗	口縁1/10	2.1	灰白硬	草色	
55		55住	碗	口縁1/10	1.8	青灰硬	草色	輪花
56		55住	碗	口縁1/10	1.7	白橙やや硬	草色	
57		55住	不明	約2×1cm小片	1.7	暗灰硬	濃緑	
58		56住	碗	1.5cm小片	4.5	灰白硬	草色	
59		56住	不明	1cm小片	2.7	暗灰硬	濃緑	
60		56住	碗	口縁1/20	1.8	青灰硬	緑	
61		56住	碗	1cm小片	1.5	灰白硬	濃緑	
62		56住	不明	1cm小片	1.0	暗灰硬	濃緑むら有	
63		56住	不明	1cm小片	0.6	暗灰硬	濃緑むら有	
64	058 14	58住	碗	高台1/3、口縁1/10	44.2	暗灰硬	濃緑	小丸碗
65		58住	碗	口縁1/10	3.0	白橙やや硬	草色むら有	輪花
66	059 26	59住	耳皿	底部ほぼ完、口縁全欠	47.9	灰白硬	草色、ミガキなし	底部突出、高台なし
67		59住	皿	体部1/8	7.7	青灰硬	緑	稜皿
68		59住	不明	1cm小片	0.6	灰白硬	草色	
69	059 25	59住+128住	皿?	高台1/2、口縁全欠	18.9	白橙やや硬	草色	
70		60住	碗	体部1/8	4.1	灰白硬	濃緑	
71	060 8	60住	香炉	口縁1/10	3.0	白橙軟質	釉全面剥落、色調不明	
72		61住	碗	1.5cm小片	1.6	青灰硬	緑	
73		63住	碗	1.5cm小片	3.7	灰白硬	草色	
74	073 7	73住	碗	高台1/6、口縁全欠	8.4	灰白硬	草色	
75		76住	碗	1.5cm小片	2.5	白橙やや硬	草色、オリーブ	
76		76住	不明	1cm小片	0.9	青灰硬	緑	
77		77住	不明	1.5cm小片	3.4	青灰硬	緑	
78	084 9	84住	碗	口縁1/8	5.7	暗灰硬	濃緑	
79	085 12	85住	碗	高台1/4、口縁全欠	46.0	橙灰硬	濃緑むら有、底面露胎	底面に糸切り残る
80		87住	碗	1cm小片	1.6	青灰硬	緑	見込みに圈線
81	088 14	88住	碗	口縁1/6	9.0	灰白硬	草色	
82		88住	皿	口縁1/20	3.7	暗灰硬	濃緑、釉外面剥落	
83		88住	皿	口縁1/10	4.0	暗灰硬	濃緑	
84		88住	不明	1cm小片	1.0	青灰硬	緑、被熱で剥落	
85		89住	碗?	高台・口縁全欠	8.4	白橙やや硬	草色	被熱
86		89住	碗?	高台・口縁全欠	11.0	灰白硬	草色、ミガキなし	被熱
87		89住	皿	高台・口縁全欠	9.7	暗灰硬	濃緑	被熱
88	092 1	92住	皿	高台1/2、口縁全欠	26.1	暗灰硬	濃緑	
89	093 3	93住	皿	底部完、口縁全欠	63.4	青灰硬	濃緑	
90		96住	碗	体部1/8	11.9	青灰硬	草色剥落	深碗
91	096 49	96住	皿	高台3/4、口縁1/4	64.7	白色やや軟	濃緑むら有	
92	099 76	99住	碗	高台2/3、口縁1/2	127.2	暗灰硬	濃緑むら有	底面に圈線か
93	099 94	99住	皿	高台完、口縁2/5	92.4	白橙やや硬	緑むら有	
94	099 77	99住	碗	高台1/3、口縁1/6	36.0	灰白硬	草色	

第22表 緑釉陶器一覧(1/3)

No.	実測図No.	出土地点	器種	残存状況	重量(g)	胎土	釉調・色調	備考
95	099 80	99住	碗	口縁1/3	25.9	暗灰硬	濃濃緑	
96	099 82	99住	碗	高台3/4、口縁全欠	39.4	灰白硬	緑むら有 / 草色、釉全面剥落	釉残存片と釉剥落片が接合
97	099 100	99住	不明	高台完、口縁全欠	22.1	白橙やや硬	草色、底面露胎	糸切り高台
98	099 99	99住	合子	腰部1/5	19.1	白色軟	草色、釉全面剥落	No.98~100同一個体
99	"	99住	香炉	体部	2.7	白色軟	草色、釉全面剥落	"
100	"	99住	香炉	肩~胸部	3.7	白色軟	釉全面剥落	"
101	099 79	99住	碗	口縁1/8	5.2	青灰硬	草色、釉外面剥落	
102	099 81	99住	碗	高台1/3、口縁全欠	17.0	暗灰硬	濃濃緑	
103		99住	碗	口縁1/20	9.8	暗灰硬	濃濃緑	
104		99住	碗	口縁1/20	7.9	暗灰硬	濃濃緑	深碗
105		99住	不明	体部	3.8	暗灰硬	濃濃緑	
106		99住	不明	口縁	3.0	橙灰硬	濃濃緑	
107		99住	不明	体部	2.5	青灰硬	緑	
108		99住	不明	体部	2.4	灰白硬	草色	
109		99住	不明	口縁	2.3	青灰硬	緑	
110		99住	碗	口縁1/10	2.2	暗灰硬	濃濃緑	
111		99住	不明	体部	2.2	暗灰硬	草色	
112		99住	不明	体部	1.7	灰白硬	草色むら有	
113		99住	不明	体部1cm小片	1.7	灰白硬	草色	
114		99住	不明	口縁1cm小片	1.6	灰白やや軟	草色	
115		99住	碗	口縁1cm小片	1.6	暗灰硬	濃濃緑	
116		99住	皿?	口縁1/12	1.5	暗灰硬	濃濃緑	
117		99住	不明	口縁1/10	1.1	灰白硬	釉全面剥落	
118		99住	不明	口縁1cm小片	0.8	白橙やや硬	草色	
119		99住	不明	体部1cm小片	0.6	灰白硬	釉全面剥落	
120	099 78	99住+B区検	碗	高台1/4、口縁1/4	62.4	灰白硬	緑	小丸碗
121		99住	不明	体部1cm小片	1.4	灰白硬	草色	
122		113住	皿	口縁1/20	1.2	暗灰硬	濃濃緑むら有	
123	114 12	114住	碗	高台完、口縁3/5	112.7	青灰硬	濃濃緑むら有	
124		114住	碗	高台1/8、口縁全欠	8.9	灰白硬	草色、釉全面剥落	
125		114住	碗	口縁1/20	2.2	灰白硬	草色、釉全面剥落	
126	115 4	115住+B区検	碗	底部1/4、口縁全欠、高台一部のみ	12.5	暗灰硬	濃濃緑	
127	121 9	121住	皿	口縁2/3、高台完	159.4	青灰硬	濃濃緑むら有	段皿
128	121 10	121住	皿	高台完、口縁1/3	109.7	暗灰硬	濃濃緑むら有	段皿
129	123 8	123住	碗	高台3/4	46.6	青灰硬	草色剥落	深碗
130	124 13	124住	碗	高台1/8、口縁全欠	17.3	青灰硬	緑	見込みに圈線か
131	124 12	124住	碗	口縁1/10	4.3	暗灰硬	濃濃緑	
132	124 15	124住	皿	高台1/8、口縁全欠	6.6	暗灰硬	濃濃緑、釉外面剥落	
133		124住	碗	口縁1/16	2.5	白色やや軟	草色	
134		124住	碗	口縁1/20	1.5	青灰硬	緑	輪花
135	125 14	125住	碗	底部完	80.2	灰白硬	草色、底面露胎	蛇の目高台
136	125 13	125住	碗	口縁1/8	12.7	青灰硬	緑	稜碗、輪花
137		126住	皿	口縁1/20	2.6	青灰硬	緑	
138		126住	不明	1cm小片	1.6	暗灰硬	被熱で変質	
139	130 10	130住	碗	口縁1/4	9.7	暗灰硬	緑	
140		135住	碗?	口縁1cm小片	0.4	灰白硬	草色	
141		136住	不明	体部小片	0.2	灰白硬	草色	
142	136 18	136住	皿	高台1/3	31.3	暗灰硬	濃濃緑	
143	136 17	136住+145住	皿	高台1/4、口縁1/10以下	13.6	灰白軟	草色	
144	137 15	137住	碗	口縁1/10	4.8	灰色	草色	小碗
145	138 39	138住	碗	口縁1/2、底部全欠	14.8	暗灰硬	濃濃緑	輪花、印花花紋、
146	"	138住	"	"	5.9	"	"	No.145~148同一個体
147	"	138住	"	"	46.1	"	"	"
148	"	138住	"	"	16.4	"	"	"
149	138 45	138住	碗	高台1/4	15.6	暗灰硬	濃濃緑	
150		138住	皿	口縁1/12	2.0	暗灰硬	濃濃緑	
151		141住	皿		6.2	橙灰硬	濃草色	段皿か
152		141住	碗?	口縁小片	2.5	暗灰硬	濃濃緑	
153		142住	碗	体部	6.9	暗灰硬	濃草色	
154		142住	碗?	体部	3.9	暗灰硬	濃草色	
155	148 15	148住	皿	高台1/3、口縁1/4	72.7	灰白硬	薄草色	
156	151 17	151住+72住	小瓶	底部2/5	31.7	灰色硬	釉全面剥落	糸切痕、No.157と同一個体
157	"	151住+72住		肩部1/10	3.7	"	"	No.156と同一個体
158	156 38	156住	碗	高台1/3、口縁1/4	55.9	橙灰硬	草色	輪花
159		156住	碗	体部	7.8	暗灰硬	草色	
160		156住	皿?	口縁2cm小片	1.3	灰白硬	草色、内面剥落	
161	157新 28	157住	碗	底部1/3、高台半欠	54.8	灰色硬	濃濃緑むら有、底面露胎	
162	157新 34	157住	円盤	体部1cm円形状	1.5	灰色硬	濃濃緑	断面ミガキか
163	157新 35	157住	円盤	体部1cm円形状	1.4	灰色硬	濃濃緑	断面ミガキか
164		157住	碗?	体部	2.9	灰色硬	草色、内面ぼぼ剥落	
165		157住	碗	口縁小片	0.6	灰色硬	黄色	
166		157住	皿?	高台1/10	3.0	灰白硬	草色、外面ぼぼ剥落	
167		157住	碗	体部	3.0	灰白硬	草色、内面ぼぼ剥落	
168		168住		口縁小片	1.8	被熱で変質	釉全面剥落	
169		179住	不明	底部小片	1.1	灰白硬	草色	
170		180住	碗	口縁1.5cm小片	10.0	暗灰硬	草色	カマド出土
171	182 270 21	182住+270住	碗	高台1/3	27.3	灰白軟	薄草色	底面に圈線
172		190住	碗	体部	6.5	暗灰硬	こげ茶色	
173		192住	不明	体部	2.1	暗灰硬	濃濃緑	
174	198 5	198住	碗	高台2/3	95.8	灰白硬	濃草色むら有	底面に圈線
175	199 13	199住	碗	口縁1/8	5.8	灰色硬	草色	
176		199住	不明	小片	1.1	灰色硬	濃濃緑	被熱か
177	199 14	199住	碗	高台1/3	27.7	橙灰やや軟	草~茶色	
178		199住+211住	碗	体部	3.1	灰色硬	草色	199住が211住を切っている
179	200 17	200住	碗or皿	底部完	46.3	暗灰硬	濃濃緑	
180	203 19	203住	碗	高台1/2	46.0	橙灰やや軟	底面露胎	
181	203 18	203住+177住	碗	口縁1/10、体部	14.2	灰白軟	草色	輪花、見込みに圈線
182		203住	碗	口縁小片	1.0	灰白軟	草色	No.181と同一個体か
183	213 16	213住	皿	底部3/4、高台全欠	59.7	橙白軟	草色	
184		213住	皿	高台1/5	32.6	灰白硬	草色	
185		213住	碗	体部	4.8	暗灰硬	濃草色	
186		213住	不明	1cm小片	0.8	灰白硬	釉全面剥落	
187		213住	碗	口縁1/12	5.3	橙灰硬	草色	
188		217住	皿?	口縁1/20	4.2	灰色硬	釉ぼ全面剥落	

第22表 緑釉陶器一覽(2/3)

No.	実測図No.	出土地点	器種	残存状況	重量(g)	胎土	釉調・色調	備考	
189	230 13	230住	椀	口縁1/5	13.3	灰白やや軟	草色		
190	238 14	238住	小瓶	口縁1/8	1.6	橙灰硬	草色		
191		265住	椀or皿	口縁小片	1.3	灰白硬	草色		
192	265 9	265住	皿	高台1/5、口縁1/6	18.3	灰白硬	草色	輪花	
193	265 10	265住	皿	高台1/4	13.0	灰白硬	草色		
194	267 6	267住	椀	高台3/4、口縁1/3	129.3	灰白硬	草色		
195	269 14	269住・220住	皿	高台1/5	13.8	灰白硬	草色	269住が220住を切っている	
196	277 19	277住	皿	完形	98.1	灰白硬	草色		
197	286 18	286住	皿?	高台1/10以下	4.4	灰色硬	草色、釉ほぼ全面剥落		
198		1区-土3	椀	口縁1/10	2.2	白橙やや硬	草色	輪花	
199			溝3	不明	1.7	灰白硬	草色		
200			溝4	椀	1.5cm小片	5.8	白色やや軟	オリーブ、ツヤ、貫入	No.237と同一個体か
201	2溝6(10_39)		溝6	皿	高台1/12	9.4	灰白硬	渋草色	
202			溝6	椀	体部	7.9	白色軟	釉全面剥落	
203			溝6	皿	高台1/8	6.2	灰白硬	渋草色、釉ほぼ全面剥落	
204			溝6	不明	底部2cm小片	2.1	灰白硬	渋草色	
205			溝6	不明	体部1cm小片	1.4	灰白硬	草色	見込みに圈線
206			溝8	不明	体部1cm小片	1.2	暗灰硬	渋草色	
207	1A検 1	1A区検出面	皿?	高台1/8、口縁全欠	7.2	青灰硬	草色		
208		1A区検出面	椀	口縁1/20	3.6	灰白硬	草色		
209		1A区検出面	椀	1.5cm小片	2.5	灰白硬	草色		
210		1A区検出面	不明	1cm小片	1.9	暗灰硬	濃緑むら有		
211		1A区検出面	椀?	口縁1/20	1.7	灰白硬	草色	緑彩紋陶	
212		1A区検出面	不明	1cm小片	1.1	青灰硬	渋草色		
213		1A区検出面	不明	1cm小片	1.1	白色やや軟	草色		
214		1A区検出面	椀or皿	1cm小片、口縁	1.0	白橙やや硬	草色		
215		1A区検出面	不明		0.8	白色やや軟	草色、内面剥落		
216	1B検 6	1B区検出面	壺類	胴部辺	27.0	灰白硬	草色、内面無釉	外面に印刻花紋	
217	1B検 2	1B区検出面	椀	口縁1/4	20.7	青灰硬	緑		
218	1B検 4	1B区検出面	皿?	高台1/4、口縁全欠	17.4	灰白硬	草色		
219	1B検 3	1B区検出面	皿	口縁1/8	15.1	灰白硬	草色	段皿	
220	1B検 5	1B区検出面	皿?	高台1/8、口縁全欠	8.8	白色やや軟	草色		
221		1B区検出面	椀?	高台1/10、口縁全欠	8.1	暗灰硬	渋濃緑	器肉薄い	
222		1B区検出面	不明	2×3cm平板	7.8	橙軟質	草色	何かの底部か	
223	1B検 1	1B区検出面	椀	口縁1/8	6.7	暗灰硬	渋濃緑	内面に段	
224		1B区検出面	皿	体部1/8	5.3	青灰硬	釉剥落	段皿	
225		1B区検出面	不明		4.3	灰白硬	外面渋草色、内面草色ほぼ剥落		
226		1B区検出面	椀?	1.5cm小片	3.9	青灰硬	草色		
227		1B区検出面	椀?	1.5cm小片	3.5	灰白硬	草色		
228		1B区検出面	不明	1.5cm小片	1.1	白橙やや硬	草色		
229		1B区検出面	不明	1.5cm小片	0.8	白色やや軟	草色		
230		1B区検出面	不明	1cm小片	0.6	白色やや軟	草色、内面無釉か		
231		1区検出面	皿?	口縁1/8	5.0	白色やや軟	草色	段皿か	
232	1検 6	1区検出面	椀	高台1/8、口縁全欠	18.6	暗灰硬	渋濃緑	耳皿か	
233		1区検出面	椀	1.5cm小片	1.9	白橙やや硬	濃緑むら有		
234	1検 7	1区検出面	皿	高台1/6、口縁全欠	11.9	灰白硬	草色むら有	緑彩紋陶か	
235		1区	不明	1.0cm小片	0.6	灰白硬	草色		
236		1区	不明	1.0cm小片	1.0	白橙やや硬	草色	高台の一部	
237	1検 3	1区	椀	口縁1/8	19.7	白色やや軟	オリーブ、ツヤ、貫入	深椀、No.200と同一個体か	
越1	055 117	55住	椀	底部1/3	36.1	橙灰硬	越磁、底面露胎	ケズリ出し高台	
越2		230住	椀	体部	4.9	橙白硬	越磁か		
越3		1B区検出面	不明	口縁1/10以下	1.6	褐灰硬	越磁か		
白1	286 13	286住	椀	口縁1/10以下	7.4	白色	白磁		
白2	286 14	286住	椀	口縁1/10以下	4.5	白色	白磁		

第22表 緑釉陶器一覽(3/3)

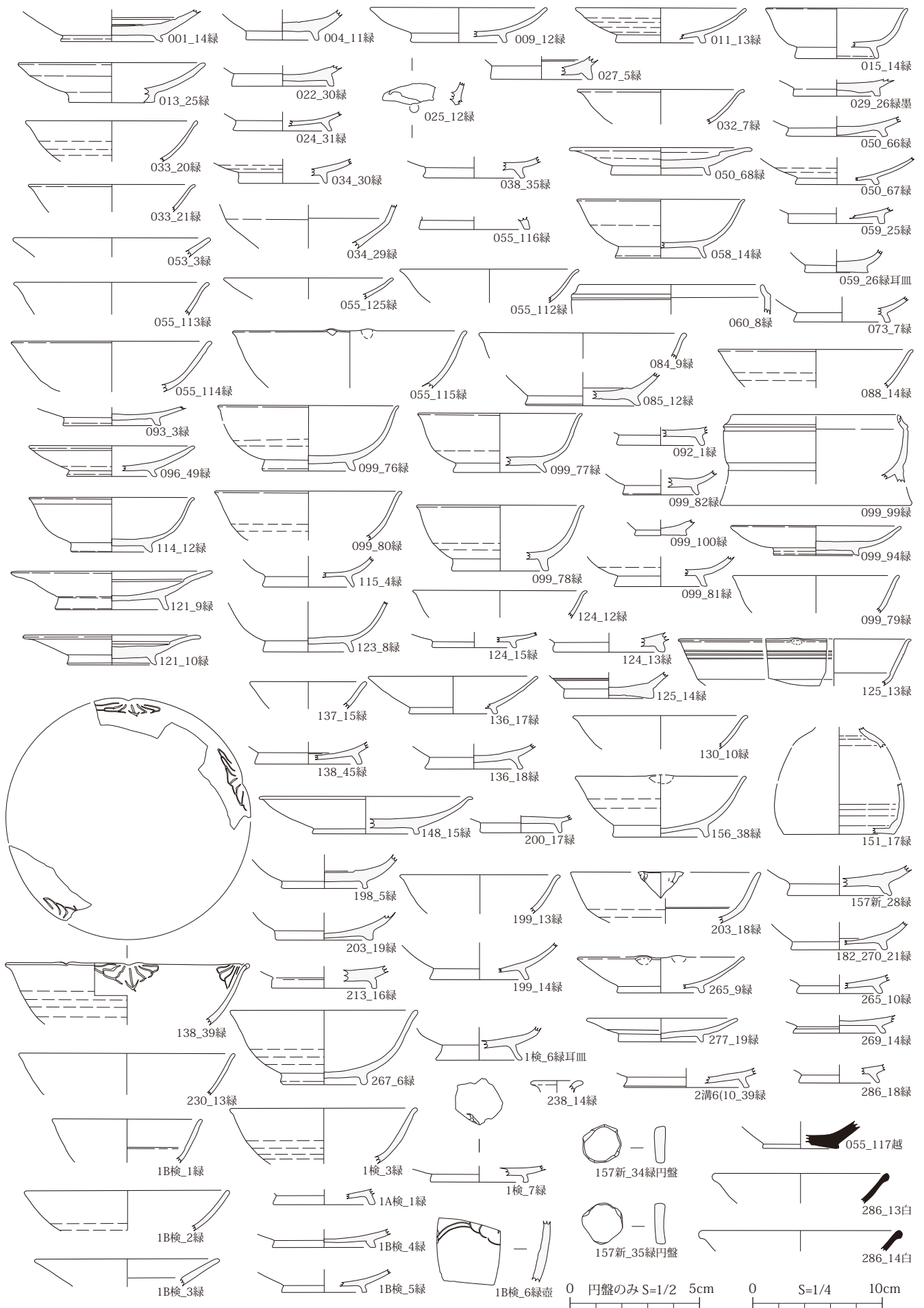
出現時期はⅢ期古である。それ以降は量的な多さを最後まで継続し、特にⅤ期新からⅥ期にかけて急増している。集落が消滅する寸前まで卓越した保有量を誇っていたといえよう。ただし、細かくみるとⅢ期新とⅤ期古でいったん減少する状況が認められる。時期ごとの出土量(廃棄量)が流入量を示しているとは必ずしもいえないが、緑釉陶器の受容に関して集落レベルで何らかの変動があったことを暗示するものかもしれない。

4 暗紋

(1) 分類

黒色土器Aの杯・椀にみられる暗紋について本遺跡で認められたものを分類し、出現の時期や展開を推察してみたい。土器実測での暗紋の図化は全形が良くわかるもの、典型的なものに絞ったが、第196・197図にその集成を示す。いくつかの類型に分けることが可能で、大分類として十字やそれに類する3～8方向の十字状・放射状のものを暗紋A、螺旋や花卉状を描くなど十字状以外のものを暗紋Bとする。暗紋の個々のミガキの線の太さには2mm以上の太いものと1mm前後の細いものがあり、暗紋Aは前者が圧倒的に多い。暗紋Bには後者が散見される。また、口縁部を除く体部内面にミガキ調整を全く行わずに暗紋が描かれる場合がほとんどだが、放射状のミガキ調整の上に重ねて暗紋を描いた例も稀にある(第197図165検_6など)。ただし、暗紋A・B共に器体自体の調整や形態などはごく普遍的なもので、最初から暗紋を付するという特殊性を意図して製作されたようには見えない。

暗紋Aは、暗紋の方向数とミガキの本数でさらに細分できる。方向数は3～8方向の6種類がありa～f



第 194 図 緑釉陶器・磁器集成

の記号で示す。本数は1本線、2本線、多数線の3種が基本で、これに多数線と1本線を組み合わせたもの2種を加え、この5種を1～5の数字で示す。多数線には平行なものと扇形があり、後者にはさらに1を付して分離する。暗紋Aの類型表記は、暗紋Aを示すAと、方向・線数を示す記号・数字とを組み合わせるとAa1などとする。方向のa～fと線数の1～5を組み合わせさせた暗紋Aの類型模式図を第195図に示した。また第196・197図の集成にもそれぞれの個体の類型表記を添付した。

暗紋Bは類例が少なく細分には至らないが、暗紋AのAb3型をベースにしてその間に細いミガキによる螺旋(143_15)を描くもの、Ab2型の間に花卉状(059_11)、Ac3型の間に花卉状(213_9)を描くものがある。197_14はおそらくAf1型がベースでその上を覆うように弧線や螺旋を連ねており、これも花卉状を意図したように見える。一方、099_46は見込み部中央を核とした弧線の風車状を描く、暗紋Aをベースにしていない例である。049A_9や285_14は見込み部に一方向のみの平行線を重ねるもので、他の暗紋Bとは異質であるが、これらは器体の成形・調整にロクロナデが用いられない特殊な器種なので、それらに固有のミガキと解するべきかもしれない。

(2) 出現と展開

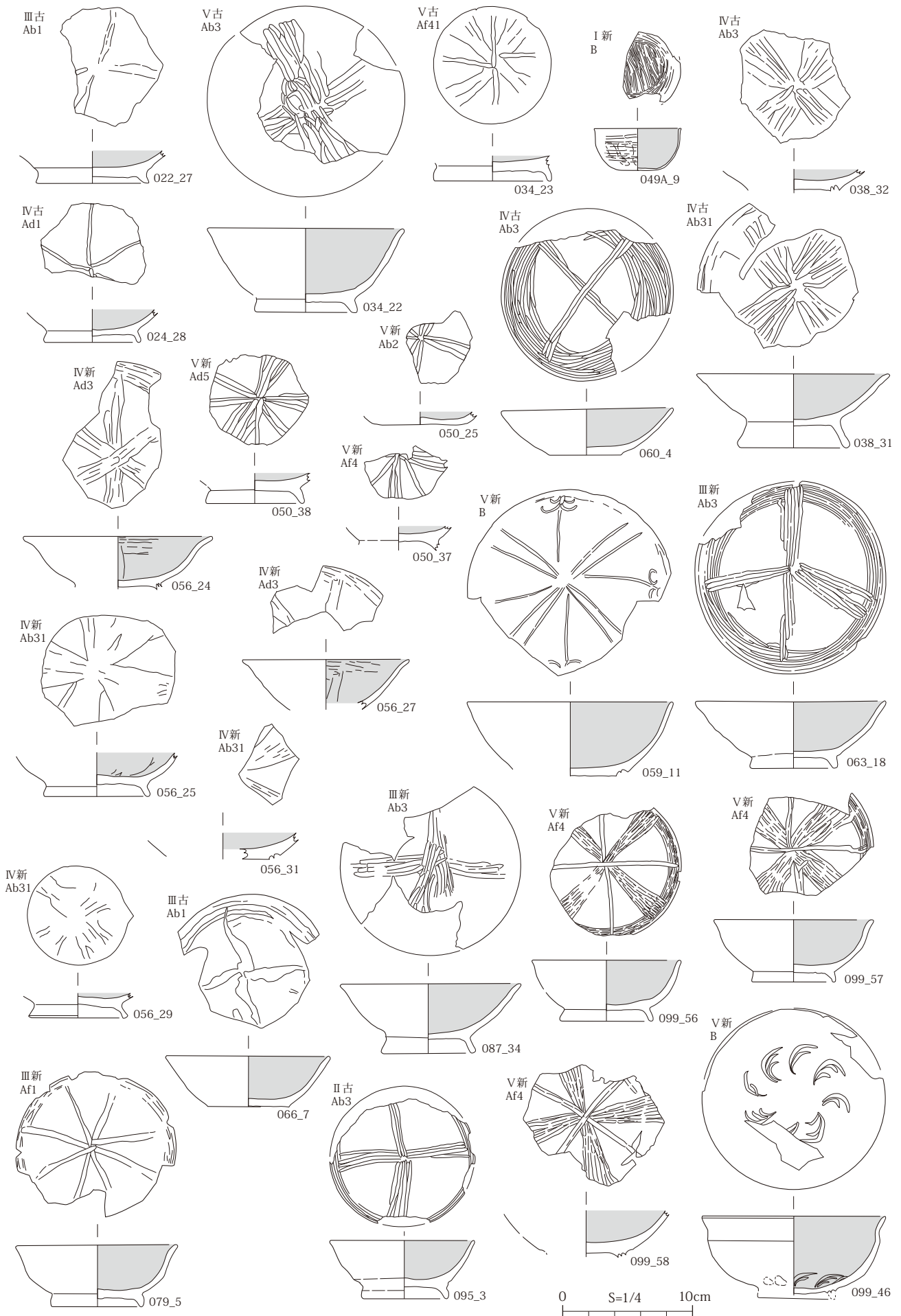
段階区分に用いた標式的な土器群(第20表(249頁)で取り上げた土器群)と、それ以外で黒色土器Aの杯・椀が多い土器群について、暗紋を持つ土器点数とその比率、暗紋の類型を一覧にしたのが第23表である。これで見るとI期に暗紋はなく、II期古が初出だが出現比率は1.7%とわずかしかない。III期古が11.8%、III期新になると22.8%と比率が増し、個々の土器群でみると30%を超えるものも10例中3例あり、本遺跡ではIII期古から暗紋が安定的に出現したと考えてよさそうである。IV～VI期は平均すると20～40%台であるが、30%以上を占める土器群が増え、50%を超えるものもみられる。ただしV期新からVI期になると杯・椀類のなかで黒色土器Aの占める比率が減少し、さらにVI期には器種構成を良好に把握し得るだけの個体数を有する土器群がなくなるので、暗紋の動向は明言できない。

暗紋Aの類型は、III期古以前では3方向多数線のAa31型と4方向1本線のAb1型とがみられ、以後はAb1型や4方向多数線のAb3型・Ab31型を主流としながら展開する。IV期からは6方向Ad型、IV期新以降は8方向のAf型などがみられるようになる。特にV期からはそれぞれ4方向の多数線と1本線を組み合わせたような8方向のAf4型・Af41型が現れる。これらから通観すると、出現時は3・4方向で、時期が下るとつれ方向が増えるものが加わるという図式を想定することが可能かもしれない。

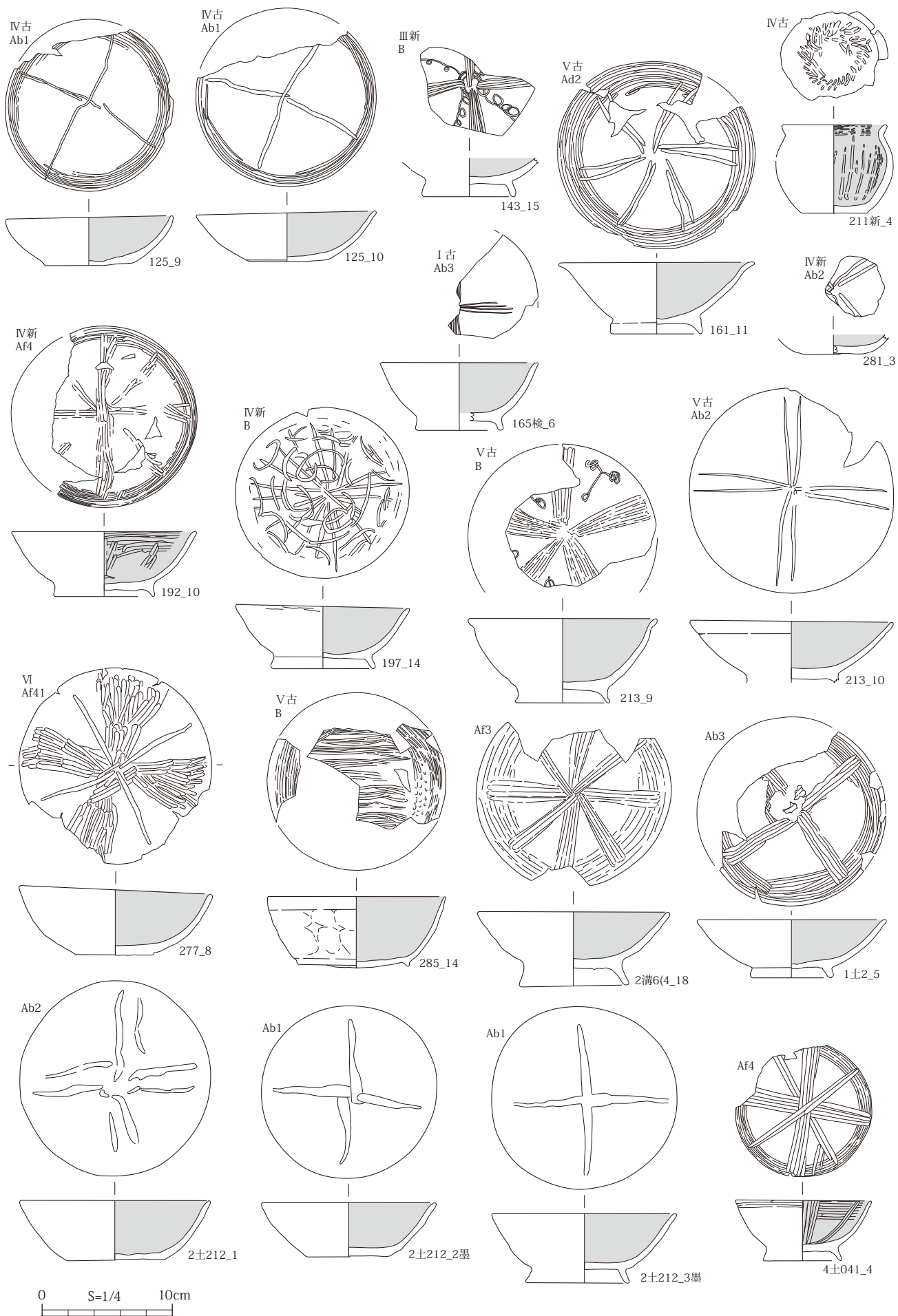
暗紋Bは点数が少ないので明確にはいえないが、III期新から認められ、IV・V期にわたって存在している。集成図ではV期に3例が認められる。暗紋Bは本遺跡ではIII期に出現し、暗紋AのAf型の盛行とほぼ歩調を揃えるように展開した可能性を考えたい。

	a	b	c	d	e	f
1						
2						
3						
31						
4						
41						
5						

第195図 暗紋Aの類型模式図



第 196 图 暗纹集成 (1)



第 197 図 暗紋集成 (2)

三間沢川左岸遺跡と時期を同じくするものも存在する。しかし確認された墨書土器は刻書も含めて8点ほどに過ぎず、積極的に墨書土器を使用する傾向はみられない。この点から三間沢川左岸遺跡の集落は通常の集落とは異なったもので、荘園に関する集落としての性格が濃厚であると考えられている（文献39）。

三間沢川左岸遺跡の村はI期古段階から始まる。溝3の南側の建14などの掘立柱建物や空閑地に囲まれた大型の竪穴建物227住が中心的な住居と推定される。この住居から6点「子楊」が出土しており、その北側に付属する形の226住からも4点出土している。

「子楊」を人名と推定したが、「楊」は『新撰姓氏録』「諸蕃」に「楊侯忌寸」がみられる。また『続日本紀』天平宝字4年(761)3月15日条では、百済の渡来人の内王国嶋等5人に「楊津連」を与えている。これらの例から類推し「楊」は渡来系の氏族の系譜を引く可能性がある。「楊」をウジ名とする例としては長岡京出土木簡に「楊守嶋」、富山県北高木遺跡出土木簡に「楊麻呂」がある（以下木簡は奈良文化財研究所木簡データベースによる）。村の開発を主導した存在である可能性が高い。

注目されるのは226住出土の「小栢寺」と書かれた墨書土器である。寺の名称であると考えられ、「子楊」と密接に関することは明らかである。おそらく「小栢寺」を建立したのが「子楊」なのであろう。先に記述されたように227住は竪穴建物であるが、1間×1間の身舎に四面の廂がつく構造をもつ。これは須田勉氏が指摘した村寺院の分類のうち竪穴建物型(Ⅲ類)Dと同じである(須田2006)。おそらく227住は寺(堂)だったものと推定される。

9世紀以降の集落が丘陵地や山間地に展開する傾向は関東甲信越各地で指摘されていることから、平野修氏はこれらを当該期に新たに出現する計画的な開墾集落と捉えられているとし、そのような集落に「寺」に関連すると思われる「堂」的な建物や、仏教的色彩の強い遺物が少なからず確認されると指摘している(平野1996)。三間沢川左岸遺跡は平地の集落であるが、奈良井川左岸域の7世紀後半から開発が行われた遺跡群とは異なり、それまでは開発の対象とはならなかった土地に9世紀前半に突如現れる集落である点、そして仏教的色彩の強い遺物・遺構がある点で共通している。時期も平野氏の分析により9世紀前半を主とし、集落の開発当初から仏教的色彩を帯びるが、9世紀半ば以降にはほとんどつながらない点も同じである。

イ 荘園開発と村

三間沢川左岸遺跡は荘園に関する村と推定される。その理由として「庄」の墨書土器の出土ももちろんながら、最も注目されるのが「西庄」の存在である。この「方位+庄」の墨書は東大寺領横江荘推定地である金沢市の上荒屋遺跡で東西南北すべてが出土している。出越茂和氏は、9世紀の初期荘園は東西南北といった表記で表される、分散する複数の庄家と倉庫群からなる複合的な構造をもつ場合があったことを指摘し(出越1993)、これを受けて小口雅史氏は庄家が分散することの意味はおそらく荘田の分割経営法と関わるものと理解している(小口1996)。「西庄」はI期新段階の43住から出土しており、開発当初の9世紀前半から初期荘園を分割して経営するために設置された庄家に関わる村の開発が行われたと考えられる。

井上尚明氏は庄家遺構についてまとめられているが(井上2014)、北陸の上荒屋遺跡、じょうべのま遺跡をモデルとして庄家の構造を示している。掘立柱建物群が整然とならび、廂付の建物を主屋とする図が提示されている。これに従えば三間沢川左岸遺跡には庄家の主屋などは未検出ということになる。そこで庄家は調査区外にあると想定して、出土した竪穴住居群はその庄家(西庄)建設に伴ってI期新段階に新たに開発された村と認識される。すなわち初期荘園経営に携わる計画的な村の成立である。

しかしこの認識には問題がある。初期荘園における計画村落は存在しないという前提論である(金田章裕1978・小口雅史1991)。小口氏は金田氏の指摘を受け、周辺を田に囲まれた孤立的荘宅的荘所では周囲に村が連続して存在する例がなく、荘園経営に必要な労働力からみても、それは既存の村に依存せざるをえないものと考えられるとしている。

しかし藤井一二氏は律令制下で新たに形成された村を「開墾型集落」として把握し、その一形態として「荘園村落」を指定している。すなわち荘園成立を契機にして開発・経営の関わりから荘園近辺の地に進出する「開墾型集落」(Ⅱ類)であり、荘園関係史料にみえる「村」については「荘所」の成立ないし私的領有権の発生との関りで理解する見方が有力であるとしている点も無視できない(藤井1986)。三間沢川左岸遺跡の村は既存のものではなく、開発当初から荘園に関わっていたことが墨書土器から指摘できる。

(2) II期の村

ア 村の縮小化

II期古段階はやや村の中の住居が減少し、核となる住居も見当たらない。I期新段階にみられた「𠩺」をもつ住居が2軒ほど残ることから集団は継続していた可能性がある。284住から出土した「生」の墨書は「庄」と読めそうな字体で、荘園機能が継続していた可能性を示す。

イ「安」と110住

II期新段階になると住居数が増加する。この段階で中心となる大型住居は110住である。「安」が3点出土しており、この住居を拠点として村を統括する存在であったと推定される。また、187住からは「王□」が出土しており、次の段階で隆盛する「王」とのつながりが窺える。

ウ II期の信仰

I期の寺を中心とした仏教信仰がII期に続いた痕跡は墨書からは窺えない。信仰関係の資料としては134住出土の「☆」（五芒星）である。符籙と判断され、道教的な信仰が入ってきているものと考えられる。同じく134住からは造語の「望」も出土しており、信仰に関する可能性がある。

(3) III期の村

ア「王」の登場

III期古段階に「王」の墨書が登場する。7軒の住居から「王𠩺」を含めて14点が確認され、66住からは4点確認できる。目立った規模の住居はみられないが、160住では「王」のほか「庄」が2点あり、新たなグループが進出して荘園経営に携わったものと推定される。

新段階になると12軒の住居から32点が出土しており、特に目立つのは63住の13点である。「王」はIII期の間に進出しそのグループの住居を増やしている。

イ「王」の解釈

「王」は山形県今塚遺跡に9世紀第2四半期頃の墨書土器がある。三上喜孝氏は「王」を渡来系氏族と捉えている（三上2004）。姓として与えられた「王（こにきし）」で百済系渡来王族の流れをくむ在地有力者かもしれない。王をウジ名とする例は藤原京出土木簡に「王葛」、平城宮出土木簡に「王部大庭」「王南天」がある。また、国司クラスの官人の例として『続日本後記』承和9年(842)8月29日条に「前豊後介正六位中井王」が私宅を豊後国日田郡に置き私営田を諸郡に持っていることが記述されている。この場合の王は3世王以下の「皇族ではない王」を示すものと考えられる。すなわち王号をもって臣籍となった王臣家である。

(4) IV期の村

ア「王」と55住

「王」はIV期古段階へと続く。13軒の住居から64点が出土しており、圧巻なのは55住で出土した32点である。IV期古段階の半分がこの住居から出土していることになる。大型の建物跡で、まさに村の核となる住居といえる。住居数も大きく増加し、「王」は村の中で確固とした勢力を手に入れたように思われる。

IV期新段階になると「王」の出土は3軒の3点と大幅に縮小してくる。

イ「大南介」

IV期古段階の54住からは「王」とともに「大南」が出土している。「王」の勢力が縮小したとみられるIV期新段階の136住・145住・168住で1点ずつ出土している。いずれも小型の住居である。ウジ名の可能性もあるが類例をみない。新たな勢力の進出を思わせる。

さらに154住から「大南」とともに「大南介」が出土している。信濃国府の存在から考えても「介」は国司級の官人を示す可能性があるが、「大南」が不明である。おそらく国府と関連のあるグループとみられ、その先頭に立つのが「大南介」なのであろう。国司私営田といわれる私的経営地の獲得が行われたのではないだろうか。国司層の私営田経営は9・10世紀を通して一ヶ所集中の形ではなく諸郡所在の経営田の集合体だったとされる（奥野中彦1988）。

ウ 特殊文字の出現

IV期古段階には「𠩺」（44住）、「𠩺」（230住）、「𠩺」（266住）、「𠩺」（156住）など則天文字を意識したような造語が登場する。吉祥句のような役割を持っていたものか。墨書文字に新たな段階が訪れたように

も思われ、祭祀にも変化が起きてきたことが推定される。

(5) V期の村

ア 大南と王

V期古段階において、大型住居 138 住が出現する。「大南」が 1 点出土していることからこの段階で「大南」は村の核となる住居をもつことになる。しかし、13 住・20 住・23 住・120 住・229 住からは王が出土しており、その命脈をたもっていることがわかる。

イ「王」と「定」の隆盛と村の終焉

V期新段階に再び「王」が隆盛を迎える。99 住は非常に大型の住居であり、「王」が 4 点出土している。まさに大南を凌駕した感がある。村の中核となる住居であろう。ただ注意しなくてはならないのが 50 住で、99 住に近接する大型住居である。ここからは「王」が 1 点出土しているものの「定」が 4 点出土している。同時期に近接していることから相反する勢力とは思えず、「王」に関わりのある有力者である可能性が高い。

しかしこの段階以降、村は衰えVI期古段階をもって終焉を迎える。

遺構	No.	文字等	部位	向き	土器No.	種別	器種	時期	遺構	No.	文字等	部位	向き	土器No.	種別	器種	時期
1住	1	生	A	a	001_6	黒	杯A	IV古	17住	35	大	B	e	〃	—	—	V新
〃	2	王カ	A	a		土	杯A	〃	18住	36	⊕	A	a	018_1	須	杯A	I新
〃	3	?	A	?		黒	杯碗	〃	〃	37	?	A	?		須	杯A	〃
〃	4	王カ	A	a		土	杯A	〃	〃	38	定カ	A	a		土	杯A	V古
4住	5	大カ	A	a		土	杯A	IV新	19住	39	上	B	e	019_7	灰	碗	IV新
〃	6	王	A	a	004_6	黒	杯A	〃	20住	40	王	B	e		黒	碗	V古
6住	7	?	A	a		土	杯A	Ⅲ以降	〃	41	?	B	e		土	杯A	〃
8住	8	?	A	a	008_10	土	碗	IV古	〃	42	□	A	a		土	杯A	〃
〃	9	ㄥカ	B	e	008_13	灰	碗	〃	22住	43	□	A	a	022_6	軟	杯A	Ⅲ古
〃	10	ㄥカ	A	a	〃	—	—	—	〃	44	帛カ	A	a		軟	杯A	〃
〃	11	良	A	a	008_4	土	杯A	〃	〃	45	厩カ	A	a		黒	杯A	〃
10住	12	界	A	d	010_9	黒	杯A	I新	〃	46	?	A	?		黒	杯A	〃
〃	13	⊕	A	a	010_2	須	杯A	〃	〃	47	?	A	?		黒	杯A	〃
〃	14	⊕	B	e	〃	—	—	—	〃	48	?	A	?		黒	杯A	〃
〃	15	⊕	A	a	010_3	須	杯A	〃	23住	49	王	A	a	023_8	土	杯A	Ⅲ新
〃	16	⊕	B	e	〃	—	—	—	〃	50	大南	A	a		土	杯A	〃
13住	17	王カ	A	?		土	杯碗	V古	24住	51	?	A	?		土	杯A	IV古
14住	18	ㄥ	A	b	014_1	須	杯A	Ⅱ古	〃	52	?	A	?		黒	杯A	〃
〃	19	成カ	A	c	014_5	黒	杯A	〃	〃	53	□	A	a	024_8	土	杯A	〃
〃	20	□	A	b	014_6	黒	杯A	〃	〃	54	□	A	a	024_4	土	杯A	〃
〃	21	月	A	b	014_7	黒	杯A	〃	〃	55	王	A	a	024_5	土	杯A	〃
15住	22	?	A	?		黒	杯碗	V新	〃	56	王	A	a	024_12	土	杯A	〃
〃	23	?	B	e		土	杯碗	〃	〃	57	王	A	a	024_7	土	杯A	〃
〃	24	大	A	a		黒	杯碗	〃	25住	58	?	A	?		土	杯A	IV新
〃	25	大カ	A	a		黒	杯A	〃	〃	59	?	A	?		土	杯A	〃
〃	26	上	A	a	015_7	黒	小碗	〃	26住	60	万	A	a		土	杯A	IV新
〃	27	上	B	e	〃	—	—	—	〃	61	万カ	A	a		土	杯A	〃
〃	28	上	A	a	015_7	黒	小碗	〃	28住	62	王	B	e		土	碗	V古
〃	29	上	B	e	〃	—	—	—	29住	63	王カ	A	a		軟	杯A	IV古
16住	30	穴カ	B	e	016_8	黒	杯A	Ⅱ古	〃	64	?	A	?		土	杯A	〃
〃	31	?	A	a		黒	杯碗	〃	〃	65	?	A	?		土	杯A	〃
17住	32	ㄥカ	A	a		土	杯A	V新	〃	66	王カ	A	a		軟	杯A	〃
〃	33	ㄥ・大カ	A	a2	017_6	黒	杯A	〃	〃	67	王	B	e	029_26	緑	碗	〃
〃	34	ㄥ	A	a	017_7	黒	杯A	〃	31住	68	?	A	?		土	杯A	Ⅱ新

部位 A：体部外面 B：底部外面 C：内面

向き a：土器を正位に置いたときに文字正位 a2：aの向きで2字横書き b：土器を正位に置いたときに文字逆位

c：土器口縁部を左側に置いたときに文字正位 d：土器口縁部を右側に置いたときに文字正位 e：底部・内面

刻書は文字等欄に(刻)を付して表記

第24表 墨書一覧(1/5)

遺構	No.	文字等	部位	向き	土器No.	種別	器種	時期	遺構	No.	文字等	部位	向き	土器No.	種別	器種	時期
31住	69	安倍勅	A	a2	031_2	黒	杯A	Ⅱ新	55住	131	王	A	a	055_53	土	杯A	Ⅳ古
32住	70	□	B	e		灰	椀	Ⅳ古	"	132	王勅	A	a	055_67	土	杯A	"
"	71	?	A	?		土	杯A	"	"	133	良	A	a	055_38	土	杯A	"
33住	72	?	A	?		土	杯A	Ⅳ新	"	134	王勅	A	a	055_58	土	杯A	"
"	73	事勅	A	?		黒	杯A	"	"	135	□	A	a	055_76	黒	杯A	"
"	74	委勅	A	a		土	椀	"	"	136	王	A	a	055_54	土	杯A	"
"	75	能	A	a		土	杯A	"	"	137	定	A	b	055_51	土	杯A	"
34住	76	ト	B	e	034_28	灰	椀	V古	"	138	?	A	?	055_77	黒	杯A	"
36住	77	人勅	A	a	036_2	須	杯A	I古	"	139	王	A	a	055_34	土	杯A	"
38住	78	?	A	?		黒	杯A	Ⅳ古	"	140	?	A	?	055_63	土	杯A	"
"	79	?	A	?		黒	杯A	"	"	141	王	A	a	055_87	土	椀	"
"	80	王	A	a	038_36	土	盤A	"	"	142	?	A	?		土	杯A	"
"	81	王	A	a	038_29	黒	椀	"	"	143	王勅	A	a	055_8	軟	杯A	"
"	82	王勅	A	a	038_8	軟	杯A	"	"	144	王勅	A	a		土	杯A	"
"	83	王	A	a	038_5	軟	杯A	"	"	145	王勅	A	a	055_60	土	杯A	"
"	84	王	A	a	038_2	軟	杯A	"	"	146	?	A	?		土	杯A	"
"	85	王	A	a	038_28	黒	椀	"	"	147	?	A	?	055_65	土	杯A	"
"	86	王	A	a	038_1	軟	杯A	"	"	148	王勅	A	a	055_94	土	皿	"
39住	87	王勅	B	e		灰	椀	Ⅳ古	"	149	?	A	?	055_61	土	杯A	"
40住	88	□	A	?	040_13	黒	椀	Ⅳ古	"	150	王勅	A	a	055_59	土	杯A	"
43住	89	西庄	A	d	043_3	須	杯A	I新	"	151	?	A	?		土	杯A	"
"	90	占	A	c	043_12	黒	杯A	"	"	152	?	A	?	055_56	土	杯A	"
44住	91	?	A	?		土	杯A	Ⅳ古	"	153	?	A	?	055_66	土	杯A	"
"	92	□	B	e		土	杯A	"	"	154	?	A	?	055_78	土	椀	"
"	93	王勅	A	a		土	杯A	"	"	155	?	A	?	055_69	土	杯A	"
45住	94	王	A	b	045_1	須	杯A	Ⅲ新	"	156	王勅	A	a		土	杯A	"
"	95	大	A	a	045_4	黒	杯A	"	"	157	?	A	?		土	杯A	"
47住	96	?	A	?	047_1	軟	杯A	Ⅲ古	"	158	王	B	e	055_71	土	杯A	"
"	97	真	A	b	"	—	—	—	"	159	王勅	A	a	055_70	土	杯A	"
"	98	王	A	a	047_3	黒	杯A	"	"	160	□	A	a	055_68	土	杯A	"
"	99	王	A	a	047_5	黒	椀	"	"	161	王勅	A	a	055_9	軟	杯A	"
49住A	100	?	A	?		黒	杯A	I新	"	162	王勅	A	a	055_86	土	椀	"
49住B	101	定	A	a	049B_3	土	杯A	Ⅳ新	"	163	王勅	A	a	055_87	土	椀	"
"	102	定	A	a	049B_2	土	杯A	"	"	164	?	A	?	055_57	土	杯A	"
"	103	上	B	e		黒	杯A	"	"	165	王勅	A	a	055_64	土	杯A	"
50住	104	定勅	A	a		土	杯A	V新	"	166	?	A	?	055_62	土	杯A	"
"	105	定勅	A	a		土	杯A	"	"	167	王勅	A	a		土	杯A	"
"	106	定勅	A	a		土	杯A	"	"	168	定	A	b	055_5	軟	杯A	"
"	107	定勅	A	a		土	杯A	"	"	169	?	A	?	055_95	灰	椀	"
"	108	定勅	A	a		土	杯A	"	"	170	□	B	e	"	—	—	—
"	109	本勅	A	a		土	杯A	"	"	171	?	A	?	055_123	灰	皿	"
"	110	?	A	?		軟	杯A	Ⅲ・Ⅳ	"	172	王	B	e	"	—	—	—
"	111	?	A	a		黒	杯A	Ⅲ・Ⅳ	"	173	ト	B	e	055_124	灰	皿	"
"	112	王勅	A	a		土	杯A	V新	"	174	王	B	e	055_108	灰	椀	"
51住	113	神人	A	b		須	杯A	I新	"	175	王勅	A	a		土	杯A	"
"	114	大	A	b		須	杯A	"	"	176	王勅	A	a		土	杯A	"
"	115	神人	A	b		須	杯A	"	"	177	王勅	A	a		軟	杯A	"
"	116	○勅	A	a	051_11	黒	杯A	"	"	178	祢勅	B	e	055_109	灰	椀	"
"	117	人	A	b	051_14	黒	杯A	"	"	179	□	B	e	055_110	灰	椀	"
"	118	○	A	a	051_17	黒	杯A	"	"	180	王勅	A	a	055_107	黒	椀	"
"	119	?	A	?	051_3	須	杯A	"	"	181	?	A	?		黒	杯A	"
54住	120	?	A	?		土	杯A	Ⅳ新	"	182	王勅	A	a		土	杯A	"
"	121	王勅	A	a		黒	杯A	"	"	183	ト勅	A	a		灰	椀	"
"	122	?	A	?		土	杯A	"	56住	184	定勅	A	a		土	杯A	Ⅳ新
"	123	大南勅	A	a	054_6	土	杯A	"	"	185	ト	B	e	056_43	灰	椀	"
55住	124	王	A	a	055_6	軟	杯A	Ⅳ古	"	186	ト	A	a	056_10	土	杯A	"
"	125	王	A	a	055_37	土	杯A	"	"	187	?	A	?		土	杯A	"
"	126	王	A	a	055_52	土	杯A	"	"	188	?	A	?	056_8	土	杯A	"
"	127	王	A	a	055_35	土	杯A	"	58住	189	?	A	?		土	杯A	Ⅳ新
"	128	王	A	a	055_11	土	杯A	"	"	190	王勅	A	a		土	杯A	"
"	129	王	A	a	055_36	土	杯A	"	"	191	全勅	A	a		黒	杯A	"
"	130	王	A	a	055_33	土	杯A	"	62住	192	王勅	A	a	062_9	灰	皿	Ⅲ新

第24表 墨書一覽(2/5)

遺構	No.	文字等	部位	向き	土器No.	種別	器種	時期	遺構	No.	文字等	部位	向き	土器No.	種別	器種	時期
63住	193	□	A	?		黒	杯A	Ⅲ新	99住	255	王カ	A	a	099_59	黒	椀	V新
"	194	王カ	A	a		軟	杯A	"	"	256	王カ	A	a	099_49	黒	椀	"
"	195	王	A	a		土	杯椀	"	"	257	王	A	a	"	—	—	—
"	196	王カ	A	a		土	杯	"	"	258	王	B	e	"	—	—	—
"	197	王	A	a	063_2	軟	杯A	"	"	259	王カ	A	a	099_51	黒	椀	"
"	198	王カ	B	e		土	椀	"	"	260	王	B	e	"	—	—	—
"	199	王カ	B	e	063_24	灰	皿	"	"	261	?	A	?	099_33	土	杯A	"
"	200	王カ	A	a	063_11	黒	杯A	"	"	262	□	B	e	099_90	灰	皿	"
"	201	□	A	a		土	杯A	"	"	263	□	A	a		土	杯椀	"
"	202	王カ	A	a		土	杯A	"	"	264	□	A	?	099_34	土	杯A	"
"	203	王カ	A	a		黒	杯椀	"	"	265	?	A	?	099_48	黒	椀	"
"	204	王カ	A	a		土	杯A	"	"	266	?	A	?	"	—	—	—
"	205	王カ	A	a		黒	杯椀	"	"	267	王	B	e	"	—	—	—
"	206	王カ	A	a		土	杯A	"	"	268	上	A	a	099_55	黒	椀	"
"	207	王カ	A	a		土	杯A	"	"	269	上	B	e	"	—	—	—
66住	208	王カ	A	a		軟	杯A	Ⅲ古	"	270	?	A	?	099_92	灰	皿	"
"	209	住カ	A	a		黒	杯A	"	101住	271	⊕	A	a	101_5	黒	杯A	I新
"	210	王カ	A	a	066_20	黒	杯A	"	102住	272	?	A	?		黒	杯A	Ⅱ新
"	211	王	A	a	066_1	軟	杯A	"	"	273	収	A	a	102_1	須	杯A	"
"	212	王	A	a	066_13	黒	杯A	"	103住	274	?	A	?		黒	杯A	Ⅱ新
68住	213	全	A	a		黒	杯A	Ⅳ古	"	275	?(刻)	A	?		黒	杯A	"
69住	214	⊕カ	A	a	069_3	黒	杯A	I新	"	276	?	A	?		黒	杯A	"
"	215	⊕カ	A	a	"	—	—	—	"	277	□	A	?	103_6	黒	杯A	"
70住	216	王カ	A	a		土	杯A	Ⅳ新	"	278	□	A	?	103_12	黒	杯A	"
"	217	王	A	a		土	杯A	"	"	279	□	A	?	103_11	黒	杯A	"
74住	218	?	A	?		土	杯A	Ⅳ古	"	280	?	A	?	103_17	黒	杯A	"
"	219	?	A	?		土	杯A	V新	"	281	?	A	?	103_19	黒	杯A	"
"	220	?	A	?		黒	杯A	"	104住	282	王カ	A	a		軟	杯A	Ⅲ新
"	221	?	A	?		黒	杯A	"	"	283	王	A	a	104_9	黒	椀	"
"	222	王カ	A	a		土	杯A	"	107住	284	王カ	A	a	107_5	皿	杯A	Ⅳ古
"	223	王カ	A	a		土	杯A	"	"	285	王カ	A	a	107_2	土	杯A	"
"	224	□	A	a		土	杯A	"	108住	286	?	A	?		黒	杯A	Ⅱ新
75住	225	大カ	A	a	075_3	土	杯A	V古	109住	287	王	A	a	109_5	土	杯A	Ⅲ古
76住	226	王カ	A	a		土	杯A	Ⅳ古	110住	288	☞	A	a	110_5	黒	杯A	Ⅱ新
"	227	?	A	?		黒	椀	"	"	289	安	A	a	110_21	黒	椀	"
"	228	倍	A	a	076_1	軟	杯A	"	"	290	安カ	A	a	110_25	黒	杯椀	"
77住	229	?	A	?		土	杯A	Ⅳ古	"	291	?	A	?	110_13	黒	杯A	"
78住	230	□	A	?		黒	杯A	Ⅳ新	"	292	?	A	?	110_15	黒	杯A	"
"	231	?	A	?		黒	杯A	"	"	293	月	A	a	110_14	黒	杯A	"
79住	232	南	A	a		土	杯A	Ⅲ新	"	294	安	A	a	110_8	黒	杯A	"
80住	233	□	A	a		土	杯A	Ⅳ新	"	295	☞	A	a	110_17	黒	椀	"
82住	234	?	A	?		土	杯A	Ⅳ新	"	296	帛カ	A	b	"	—	—	—
85住	235	祈カ	B	e		灰	椀	Ⅳ新	"	297	月カ	A	b	110_16	黒	杯A	"
"	236	?	B	e		灰	椀	"	"	298	?	A	?		黒	杯A	"
"	237	王	A	a		土	杯A	"	"	299	?	A	?		黒	杯A	"
87住	238	?	A	?		土	杯A	Ⅲ新	112住	300	?	A	?		土	杯A	Ⅳ古
"	239	王	A	b	087_3	軟	杯A	"	"	301	?	A	?		土	杯A	"
"	240	?	A	?	087_13	土	杯A	"	113住	302	王カ	A	a		軟	杯A	Ⅳ新
88住	241	㊦カ	B	e		灰	椀	Ⅳ古	114住	303	?	A	?		土	杯A	V新
91住	242	⊕カ	A	a	091_1	須	杯A	I新	119住	304	?	A	?	119_2	土	杯A	Ⅲ古
"	243	?	A	?	091_2	須	杯A	"	120住	305	□	A	?	120_1	黒	杯A	V古
94住	244	庚カ	A	a		黒	杯A	V古	"	306	?	A	?		黒	杯A	"
95住	245	?	A	?		黒	杯A	Ⅱ古	"	307	王	B	e		灰	耳皿	"
"	246	?	B	e		須	杯A	"	121住	308	?	A	?		黒	椀	Ⅲ古
"	247	⊕	A	a	095_1	須	杯A	"	122住	309	王	A	a		軟	杯A	Ⅲ古
97住	248	?	A	?		土	杯A	Ⅲ新	"	310	王	A	a		土	杯A	"
"	249	王カ	A	a		土	杯A	"	"	311	王	A	a		黒	杯A	"
"	250	?	A	?		黒	杯A	"	123住	312	大南カ	A	a		黒	椀	Ⅳ新
"	251	王カ	A	a	097_6	黒	杯A	"	"	313	大南	A	b	123_2	土	杯A	"
"	252	王カ	A	a	097_11	黒	椀	"	124住	314	?	A	?		灰	皿	Ⅳ新
"	253	?	A	?	097_3	軟	杯A	"	"	315	▽	A	a		黒	椀	"
"	254	王カ	A	a	097_2	軟	杯A	"	125住	316	王	A	a	125_8	黒	杯A	Ⅳ古

第24表 墨書一覧(3/5)

遺構	No.	文字等	部位	向き	土器No.	種別	器種	時期	遺構	No.	文字等	部位	向き	土器No.	種別	器種	時期
125住	317	王	A	a	125_2	軟	杯A	IV古	160住	379	庄カ	A	a	160_5	土	杯A	III古
126住	318	王カ	A	a		黒	杯A	IV	"	380	王カ	A	a	160_6	土	杯A	"
"	319	王カ	A	a		軟	杯A	"	"	381	庄カ	A	b		黒	杯A	"
"	320	王カ	A	a	126_1	軟	杯A	"	161住	382	?(刻)	C	e	161_18	灰	椀	V古
"	321	王カ	A	a		軟	杯A	"	"	383	* (刻)	A	a	161_36	灰	長頸壺	"
128住	322	王	A	a	128_1	黒	杯A	III	"	384	↑(刻)	A	a	"	—	—	—
"	323	王カ	A	a		黒	杯A	"	162住	385	?	A	?	162_4	土	杯A	V古
"	324	王カ	A	a		黒	杯A	"	164住	386	?	A	?		土	杯A	IV新
129住	325	□□	A	c		黒	椀	IV以降	166住	387	?	A	?		軟	杯A	IV古
132住	326	ㇿカ	A	a		土	杯A	IV以降	167住	388	井	A	c	167_1	土	杯A	IV新
"	327	全カ	A	a		黒	杯A	IV新	"	389	井	A	c	167_4	黒	椀	"
134住	328	☆	B	e	134_5	黒	皿	II新	"	390	王カ	A	a		土	杯A	"
"	329	中	A	b	"	—	—	—	"	391	□	A	a		土	杯A	"
"	330	璧	A	d	134_2	黒	杯椀	"	"	392	井カ	A	c		土	杯A	"
135住	331	電	A	a		黒	杯A	IV新	168住	393	(鋸齒、刻)	A	a	168_16	土	小甕	IV新
136住	332	大南	A	a	136_7	土	杯A	IV新	"	394	上	B	e		灰	皿	"
"	333	?	A	?		土	杯A	"	"	395	大南	A	a	168_1	土	杯A	"
"	334	田カ	A	a	136_5	土	杯A	"	"	396	×(刻)	A	a		土	甕B	"
"	335	王カ	A	a	136_14	灰	椀	"	169住	397	?	A	a		黒	杯	III新
"	336	?	B	e	"	—	—	—	170住	398	門	A	a		土	杯A	IV古
137住	337	?	A	?		土	杯A	IV新	171住	399	井カ	A	?		土	杯A	IV新
"	338	西舎カ	C	e	137_1	土	杯A	"	174住	400	王カ	A	a		軟	杯A	III古
138住	339	大南カ	A	a	138_20	土	椀	V古	175住	401	?	A	?		黒	椀	III新
"	340	?	A	c,d	138_16	土	杯A	"	"	402	十	B	e	(")	—	—	—
"	341	?	A	?		土	杯A	"	"	403	租カ	A	a		土	杯A	"
"	342	?	A	?		土	杯A	"	"	404	王	A	a		土	杯A	"
"	343	定カ	A	a		土	杯A	"	178住	405	?	A	?		土	杯A	V
"	344	?	C?	?		土	杯A	"	"	406	王カ	A	a		土	杯A	"
139住	345	王	A	a	139_1	土	杯A	IV古	180住	407	王カ	A	a		軟	杯A	V新
140住	346	王	A	a	140_2	軟	杯A	IV古	181住	408	?	B	e		灰	椀	III新
"	347	王	A	a	140_3	軟	杯A	"	"	409	卍	A	a		黒	杯A	"
"	348	王カ	A	a	140_4	土	杯A	"	"	410	?	A	?		土	杯A	"
"	349	王カ	A	a		黒	杯A	"	"	411	?	A	?		土	杯A	"
141住	350	王カ	A	a		土	杯A	IV新	"	412	王	A	a		土	杯A	"
"	351	?	A	?		黒	椀	"	"	413	王	A	a	181_2	土	杯A	"
"	352	□	A	a		土	杯A	"	"	414	?	A	?		土	杯A	"
142住	353	?	A	?		黒	椀	IV新	182住	415	?	A	?		土	杯A	IV新
143住	354	王カ	A	a	143_1	軟	杯A	III新	183住	416	?	A	?		黒	杯A	IV古
145住	355	大南	A	a	145_5	土	杯A	IV新	184住	417	?	A	?		土	杯A	IV新
"	356	南カ	A	a	145_7	土	椀	"	"	418	?	A	?		土	杯A	"
146住	357	王カ	A	a	146_5	土	杯A	IV新	187住	419	王□	A	d	187_1	須	杯A	II新
148住	358	王	A	a	148_5	土	杯A	IV古	188住	420	?	A	?		軟	杯A	IV新
"	359	王	A	a	148_4	土	杯A	"	191住	421	?	A	?		黒	杯A	IV古
"	360	王	A	a	148_14	黒	椀	"	192住	422	全	A	b		黒	杯A	IV新
"	361	王	A	a	148_7	土	杯A	"	"	423	?	A	?	192_6	黒	椀	"
"	362	?	A	?		黒	椀	"	193住	424	?	A	?		黒	杯椀	V古
149住	363	?	A	?		土	杯A	III新	194住	425	王	A	a	194_16	土	椀	III新
151住	364	?	A	?		土	杯A	IV新	"	426	?	A	?	194_8	土	杯A	"
152住	365	?	B	?		灰	皿	IV新	"	427	?	A	?		軟	杯A	"
"	366	大	A	b	152_1	土	杯A	"	198住	428	王カ	A	a		黒	杯A	III新
154住	367	大南介	A	d	154_3	土	杯A	IV新	200住	429	?	A	?		土	杯A	V新
"	368	大南カ	A	a		土	杯A	"	202住	430	服カ	A	a		黒	杯A	IV新
"	369	?(刻)	C	e	154_9	灰	椀	"	"	431	?	A	?		黒	杯A	"
155住	370	王	A	a	155_3	土	杯A	IV新	203住	432	□	A	a		土	杯椀	IV新
"	371	王カ	A	a	155_23	灰	皿	"	"	433	?	A	?		土	杯A	"
"	372	王	A	a	155_4	土	杯A	"	"	434	?	A	?		土	杯A	"
156住	373	凵	B	e		灰	椀	IV古	208住	435	王	A	a		土	杯A	III新
157住	374	服	A	a	157古_10	黒	椀	IV古	"	436	?	A	?		土	杯A	"
"	375	?	A	?	157古_5	軟	杯A	"	"	437	?	A	?		黒	杯A	"
"	376	□	A	a		黒	椀	"	210住	438	大	A	a	210_4	土	杯A	IV古
"	377	大南カ	A	a		土	杯A	V新	"	439	?	A	?		土	杯A	"
158住	378	?	A	?	158_4	土	椀	III新	211住	440	?	A	?		土	杯A	IV古

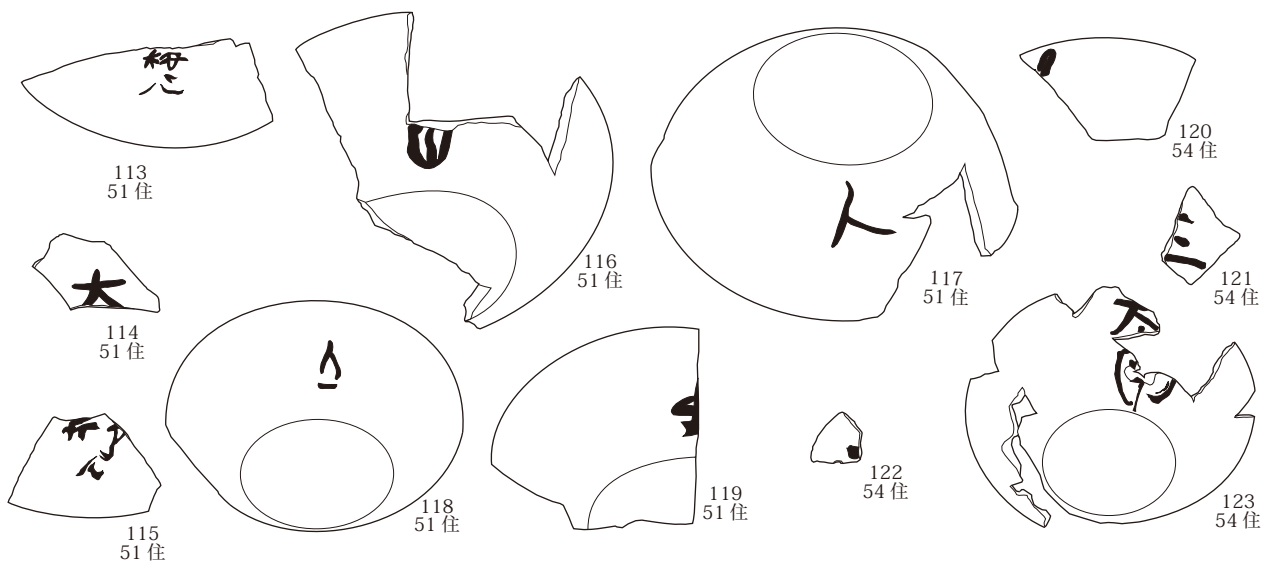
第24表 墨書一覧(4/5)

遺構	No.	文字等	部位	向き	土器No.	種別	器種	時期	遺構	No.	文字等	部位	向き	土器No.	種別	器種	時期
211住	441	?	B	e	(〃)	—	—	IV古	262住	503	?	A	?	〃	—	—	II古
〃	442	?	A	?		土	杯A	〃	〃	504	?	A	?	262_5	黒	皿	〃
212住	443	⤵	A	a	212_5	黒	杯A	I新	264住	505	?	A	?		黒	杯碗	III新
214住	444	⤵カ	A	a		黒	小甕	III新	266住	506	虬	B	e	266_9	灰	皿	IV古
〃	445	十(刻)	A	a	214_5	黒	杯A	〃	284住	507	生	B	d	284_5	黒	杯A	II古
217住	446	大右カ	A	b		土	杯A	IV新	〃	508	へ	A	b	〃	—	—	—
〃	447	□□	A	a		土	杯A	〃	285住	509	?	B	?		土	杯A	V古
〃	448	□	A	a		土	杯A	〃	〃	510	庄	B	e	285_10	黒	碗	〃
〃	449	□	A	a	217_7	黒	杯A	〃	〃	511	大	A	a	285_6	黒	杯A	〃
〃	450	王カ	A	a		土	杯A	〃	〃	512	羨	A	a	〃	—	—	—
〃	451	?	A	?		土	杯A	〃	286住	513	?	A	?		土	杯A	V古
223住	452	金カ	A	b	223_62	黒	碗	III新	〃	514	市カ	B	e		土	杯A	〃
〃	453	王カ	A	a	223_30	土	杯A	〃	〃	515	貴カ	A	b	286_2	土	杯A	〃
〃	454	王カ	A	a	223_20	土	杯A	〃	288住	516	之	A	a	288_14	黒	杯A	II古
〃	455	□	A	?	223_9	軟	杯A	〃	〃	517	之	A	a	〃	—	—	—
〃	456	□	A	a		黒	碗	〃	290住	518	⤵	A	a	290_15	黒	杯A	II古
〃	457	?	A	?	(〃)	—	—	—	〃	519	⤵	A	a	〃	—	—	—
〃	458	?	A	?		黒	碗	〃	〃	520	⤵	A	a	〃	—	—	—
〃	459	?	A	?		黒	杯碗	〃	1-土2	521	?	A	?		土	杯A	
〃	460	?	A	?		黒	杯碗	〃	〃	522	?	A	?		土	杯A	
〃	461	?	A	?		黒	杯碗	〃	1-土3	523	?	A	?		土	杯A	
224住	462	窪家	A	c	224_18	黒	碗	II新	2-土212	524	田カ	A	a	2±212_2	黒	杯A	III新
〃	463	□吉	A	c	224_17	黒	碗	〃	〃	525	王カ	B	e	2±212_4	灰	皿	III新
226住	464	子楊	A	c	226_1	須	杯A	I古	〃	526	王カ	A	a	2±212_3	黒	碗	III新
〃	465	子楊	A	c	226_3	須	杯A	〃	4-土3	527	丸	A	a		黒	杯A	
〃	466	子楊	A	c	226_2	須	杯A	〃	4-土26	528	王カ	A	a		土	杯A	
〃	467	子楊	A	c	226_7	黒	杯A	〃	溝2	529	?	A	?		黒	杯A	
〃	468	子カ	A	c		須	杯A	〃	溝3	530	?	A	?		軟	杯A	
〃	469	(月)	B	e	226_8	黒	杯A	〃	溝4	531	貞カ	A	a		黒	杯A	
〃	470	小柏寺	A	d	〃	—	—	—	溝2	532	王	A	d	2溝2_16	須	杯A	
227住	471	子カ	A	c	227_25	黒	杯A	I古	溝6	533	本	A	a		土	杯A	
〃	472	子楊	A	c	227_26	黒	杯A	〃	〃	534	本カ	A	a		土	杯A	
〃	473	子楊	A	c	227_24	黒	杯A	〃	〃	535	貞カ	A	a		黒	杯A	
〃	474	子楊	A	c	227_3	須	杯A	〃	〃	536	□	A	a		土	杯A	
〃	475	子楊	B	e	227_15	須	杯A	〃	〃	537	王カ	A	a		土	杯A	
〃	476	子楊	A	c	227_18	須	杯A	〃	溝8	538	?	A	?		黒	杯A	
〃	477	子楊	A	c	227_11	須	杯A	〃	通2	539	?	A	?		黒	杯A	
〃	478	?	A	?	227_14	須	杯A	〃	〃	540	?	A	?		黒	杯A	
〃	479	目刀	A	c	227_23	黒	杯A	〃	〃	541	?	A	?		黒	杯A	
229住	480	王カ	A	a		土	杯A	V古	〃	542	王	B	e		灰	碗	
230住	481	ㇿカ	A	a	230_11	黒	碗	IV古	〃	543	田カ	A	a		黒	碗	
〃	482	王	A	a	230_10	黒	碗	〃	1区検	544	王カ	A	a		土	杯A	
231住	483	?	A	?		土	杯A	IV古	〃	545	?	A	?		土	杯A	
233住	484	?	A	?		黒	杯碗	III新	〃	546	王	A	a		軟	杯A	
238住	485	王カ	A	a	238_2	土	杯A	III新	〃	547	王カ	A	a		黒	碗	
〃	486	王カ	A	a		黒	杯A	〃	〃	548	王カ	A	a		黒	碗	
〃	487	王	A	a		黒	杯碗	〃	〃	549	王カ	B	e		黒	碗	
〃	488	?	A	?		軟	杯A	〃	〃	550	王	A	a		黒	杯A	
〃	489	?	A	?		軟	杯A	〃	〃	551	収カ	A	a		黒	杯A	
243住	490	大南	A	a	243_1	土	杯A	IV新	〃	552	?	A	?		軟	杯A	
〃	491	?	A	?	243_7	土	碗	〃	〃	553	?	A	?		軟	杯A	
245住	492	門カ	A	c	245_2	軟	杯A	III古	〃	554	安カ	A	a		黒	碗	
247住	493	?	A	?		黒	杯碗	IV古	〃	555	王カ	A	a		軟	杯A	
〃	494	?	A	?		黒	杯碗	〃	〃	556	王カ	A	a		軟	杯A	
〃	495	?	B	?		土	杯A	〃	〃	557	大南	A	b		黒	碗	
250住	496	宿カ	A	a		黒	坏	I新	2区検	558	定カ	A	a		黒	杯碗	
251住	497	□	A	?	251_2	黒	杯A	III新	不明	559	王カ	A	a		黒	碗	
254住	498	十	A	a	254_3	黒	杯A	III新	〃	560	成カ	A	a		黒	杯碗	
257住	499	今カ	A	a		土	杯A	III新	〃	561	王	A	a		黒	碗	
259住	500	□	A	c	259_3	須	杯A	I古	〃	562	王	A	a		土	杯A	
260住	501	?	A	?		須	杯A	II古	〃	563	?	A	?		黒	杯碗	
262住	502	貞	A	d	262_3	黒	杯A	II古									

第24表 墨書一覽(5/5)



第199図 墨書土器集成(2)



0 S=1/3 10cm

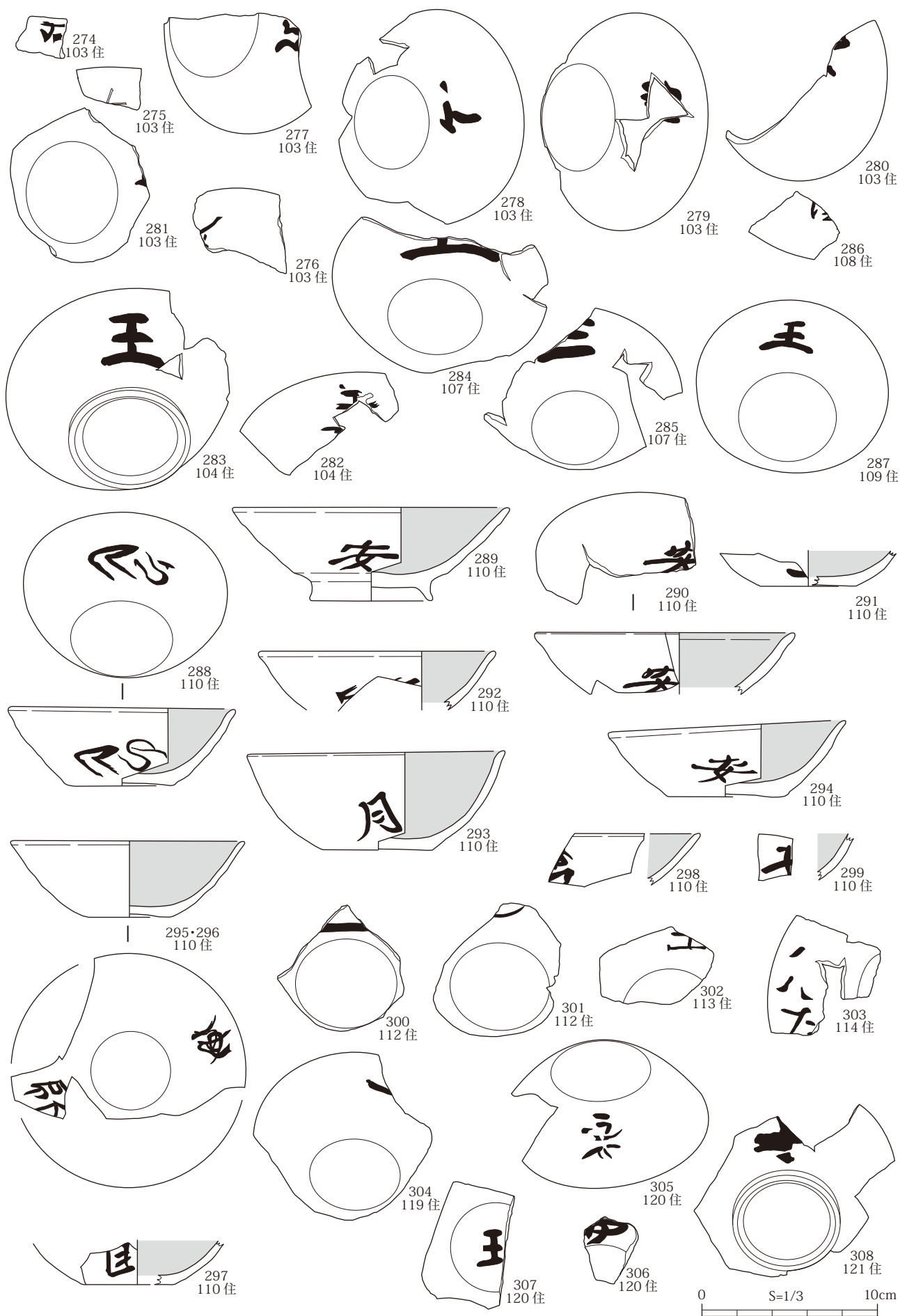
第 201 图 墨書土器集成(4)



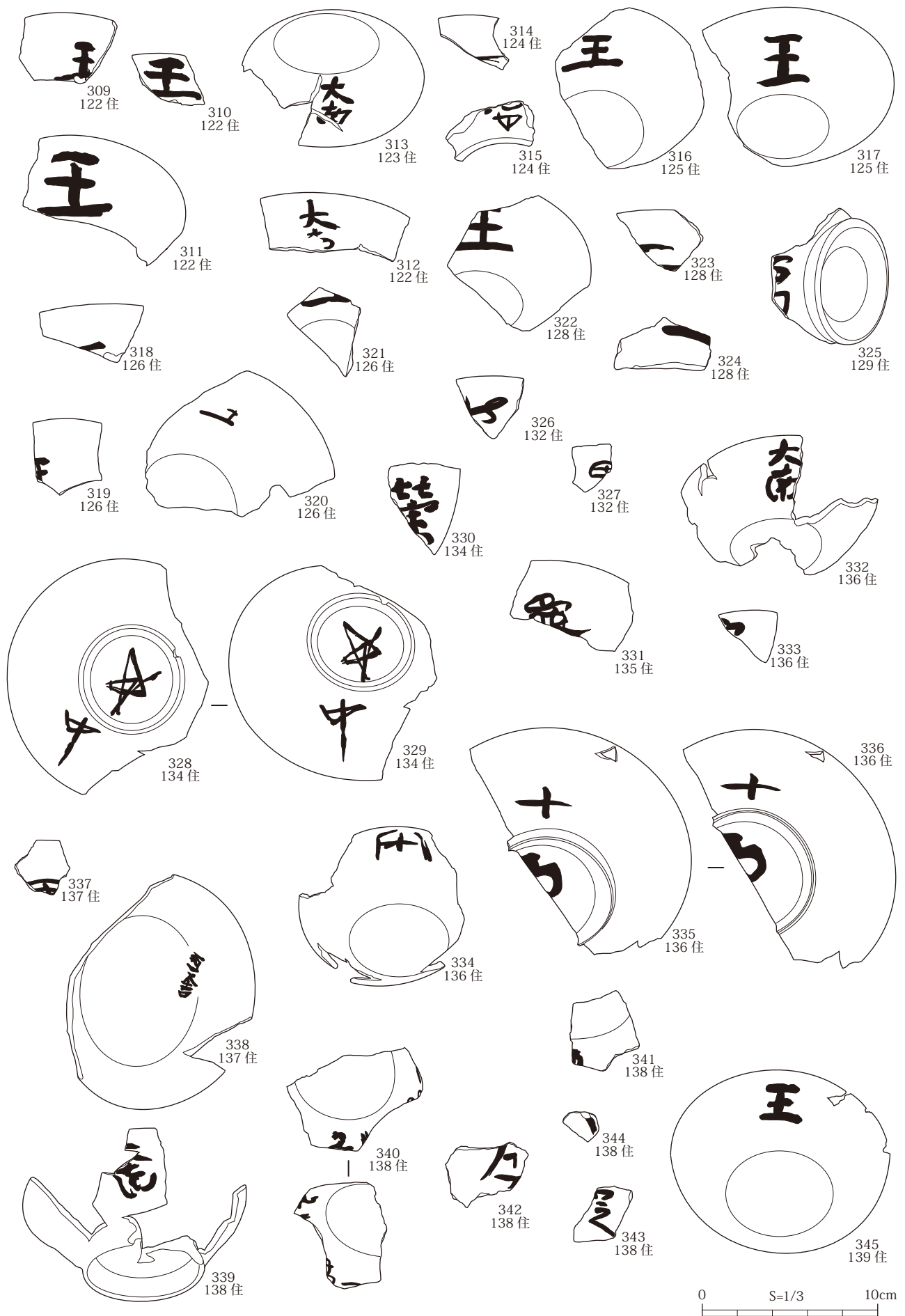
第202図 墨書土器集成(5)



第 203 图 墨書土器集成 (6)



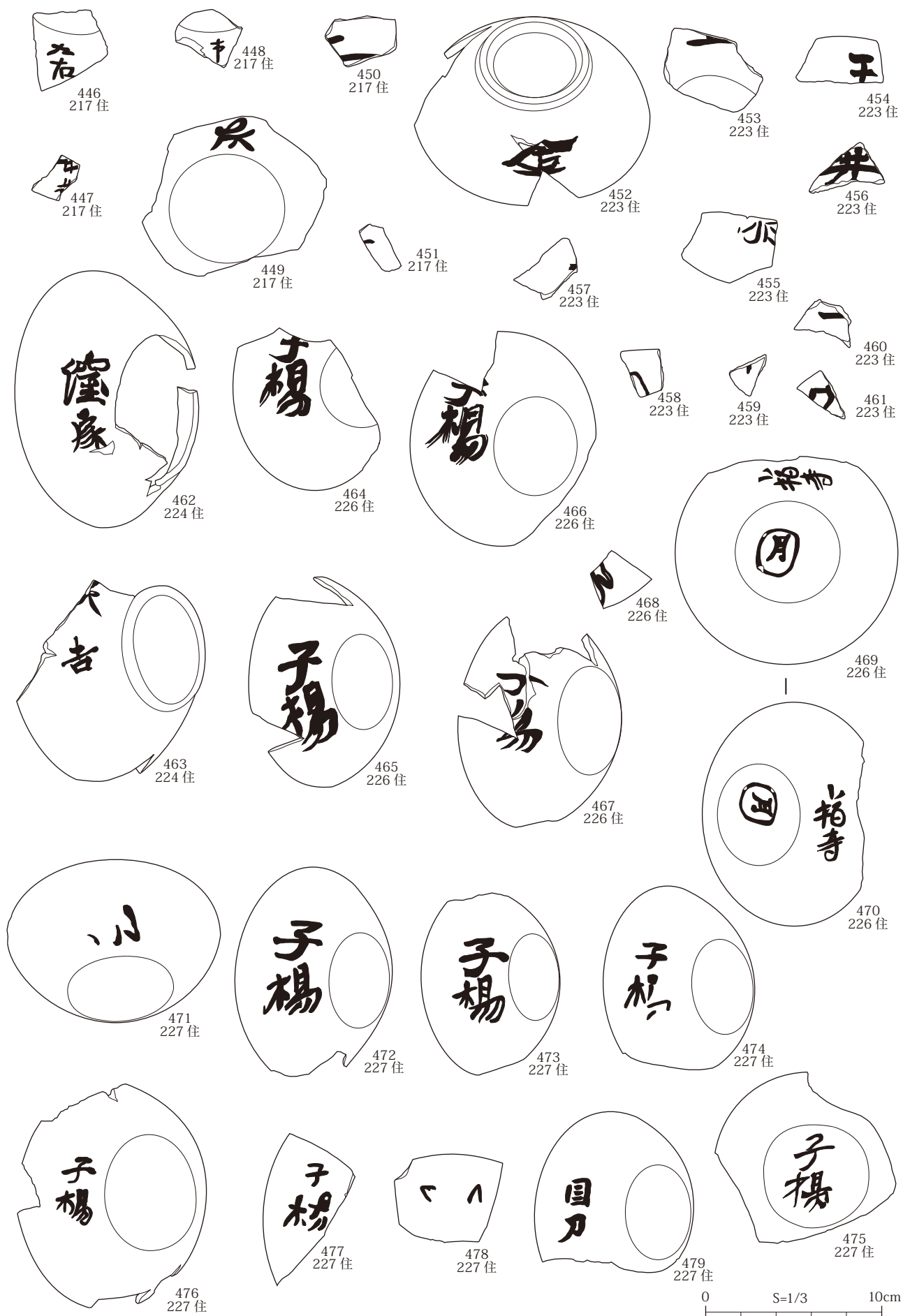
第 205 図 墨書土器集成(8)



第 206 図 墨書土器集成 (9)



第 208 図 墨書土器集成 (11)



第 209 図 墨書土器集成 (12)



0 S=1/3 10cm

第211図 墨書土器集成(14)

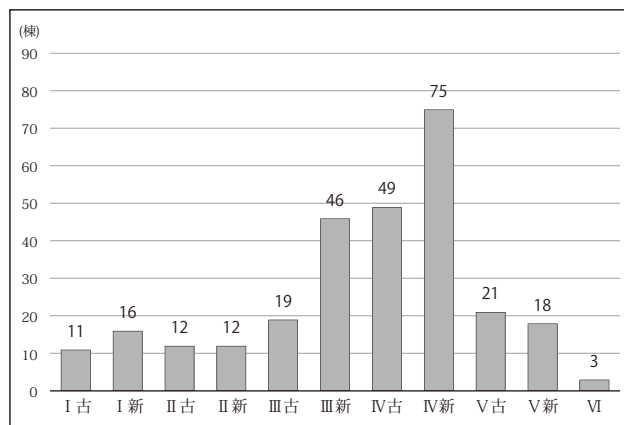
第4節 平安時代の集落について

1 平安時代集落の概観

本遺跡で確認された遺構のうち、縄紋時代の土坑、近世以降の溝などごくわずかなものを除くすべてが平安時代前半に属すると特定や推定ができる。それらは大別すると竪穴建物、掘立柱建物、墓址を含む土坑、特殊遺構等を含む溝、通路状遺構、道路状遺構として捉えられ、本遺跡はこれらの遺構が組み合わさって集落を構成していた。集落の存続期間は三間沢川Ⅰ期からⅥ期までで、文献13の実年代推定に従うと800年代前半から900年代後半にあたり200年間に満たない。

2 竪穴建物棟数の時期別推移

集落の主体を占める遺構の竪穴建物は291棟というまとまった数が発見されたが、これらは本遺跡の存続していた間、常に一定だったわけではなく、時期によって棟数に増減がある。出土土器群から推定した竪穴建物の時期（Ⅰ期～Ⅵ期）の棟数の推移を第212図のグラフで示す。Ⅰ期からⅡ期は20棟以下で推移するが、Ⅲ期に入ると20棟を超えて増加が始まり、Ⅳ期新で75棟に達してピークを迎える。以後、急速に減少し、最後のⅥ期古では3棟を数えるのみとなる。



第212図 竪穴建物の時期別棟数

3 各期の様相と集落の変遷（第213～218図）

(1) Ⅰ期

本期に存在が確実なのは竪穴建物27棟（古段階11棟、新段階16棟）と3本の溝（溝2・4・16）である。溝8・9は溝2から分岐するので本期に属すると推定でき、その末尾が溝4に続いていた可能性がある。溝16はそのまま南下して2区の西側調査区外で直角に近く曲がり、溝2に接続していた可能性を考えている。竪穴建物は調査地を西から東に貫く溝2の南北両側に点在しているが、古段階では2区南端部(A)、1A区北部(B)、5区東部(C)の3エリアが認められ、Aエリア以外で新段階へ続いていく。本期の竪穴建物の特徴として主軸方向がきっちり東西（南北）を指さず、北東から南西方向に15～25度振れている点が挙げられる。Aエリアにまとまる掘立柱建物（建11・12・14）が同様の軸方向を採っており、これらは本期から出現したと考えたい。1棟のみ離れて存在する165住は鍛冶遺構、Aエリアの大型住居227住は墨書土器の項（本章第3節）で述べたように村落寺院の可能性が指摘される。

本期は集落の開始期である。本期前半から既に三つのエリアに竪穴建物が分布しており、当初から広範な展開があったといえる。その中でも大型の226・227住と掘立柱建物があるAエリアが中核部に近いであろう。遠方から導水した用水路の溝2を集落の中心に据えており、本集落が計画的に拓かれたことを物語る。集落内に鍛冶遺構を持ち、村落寺院を伴っていた。

(2) Ⅱ期

本期に存在が確実なのは竪穴建物24棟（古12、新12）である。溝2とそれに関連する溝4・8・9・16は本期の初頭までは残っていた可能性がある（溝2の特徴的な堆積土：灰色砂性粘質土が本期前半の195住のカマドに使用）。Ⅰ期にみられたA～Cエリアは、拡大傾向のCエリア以外は縮小あるいは消滅するが、他方で1B区にDエリア、1A区東端にEエリアが現れる。特にDエリアは本期後半からではあるが大型住居の110住を中心に、一帯の掘立柱建物7棟の多くが伴っていたと推定する。掘立柱建物のうち建5・9は2×2間の総柱建物である。

本期は竪穴建物の棟数はⅠ期とあまり変わっておらず、集落の中心であった溝2は前半までで埋没してしまう。しかし、本期後半には大型住居と掘立柱建物群を中心としたDエリアが出現しており、倉庫とみられ

る総柱建物2棟を伴った掘立柱建物群はかなり整然と並ぶ。おそらくここが集落の中核の一部として機能していたのであろう。I期のAエリアと同様に南部に中核部が継続して置かれた点で集落の性格が大きく変わったとは考えられないが、110住を中心とする掘立柱建物群の集中は、本期に集落の管理的側面が強化された感を受ける。

(3) III期

本期に存在が確実なのは竪穴建物65棟(古19、新46)と2区土坑212である。溝6は245住(III期古>)と接し、それ以外の竪穴建物との重複や近接がないので、おそらく本期の中で最初の掘削が行われたのであろう。溝6に合流する溝13・14もこれに準ずる。溝19及びそれに交差する通1～5は、通4が280住(IV期新)に切られるのでIV期には埋没していたこと、溝19に293住(II期古)が近接しておりそこまでは遡らないことの2点から、本期から出現すると推定したい。通1との位置関係から溝21も同様に、その溝21と前後する道路状遺構も本期からの存在と考える。竪穴建物は本期から棟数が増加し、特に後半からの急増が著しい。1A区西半分から2区北半分の全域にかなり密集して分布し、I・II期までのA～EエリアではB・Dエリアで小規模に残るのみとなる。

本期は溝6や溝19と通路状遺構という本集落を特徴づける遺構が登場するとともに、竪穴建物が急増し、溝6の北側一帯(中央部エリア)の広範囲に密に分布する。前時期までの中核地帯であった集落南部(A・Dエリア)はほとんど空白となり、それに代わる中核は見当たらない。強いて挙げるなら中央部の建10(2×3間:4.8×7.2m)、建13(2×5間:4.3×10.6m)が相当しようか。I・II期までの溝2を中心としながら中核部を南部外縁に設ける構成から、溝6を大きな南限とし中核を中央部に取り込む構造へと、本期の中で集落の景観や性格を大きく変貌させたのであろう(竪穴建物の床面積分布でも本期での変化は読み取れる:本章第1節1)。2区土212は本期後半から次期前半くらいの墓址で、中央部エリアに埋葬されている。

(4) IV期

本期に存在が確実なのは竪穴建物124軒(古49、新75)である。溝はIII期に引き続き溝6と溝19が存在していたものと推定する。通路状遺構は通4が埋没して280住(IV期新)が掘り込まれている他は、本期での有無を裏付ける根拠がないので溝19と一体で捉えておきたい。竪穴建物は前半では前時期とほぼ同じ棟数を維持し、後半はさらに増加する。分布は溝6を南限としながら前時期よりさらに中央部エリアの範囲を広げ、1A区・2区全域から4区の溝19の一帯にまで及ぶ。

本期は溝6を南限とし、中央部エリアが拡大するという集落の基本的な構成は前時期と変わらないが、さらに竪穴建物が増加密集するとともに、その中に単独で突出する規模の大型住居55住が現れる。前時期から始まった竪穴建物の増加がピークとなり、集落は最盛期を迎える。

(5) V期

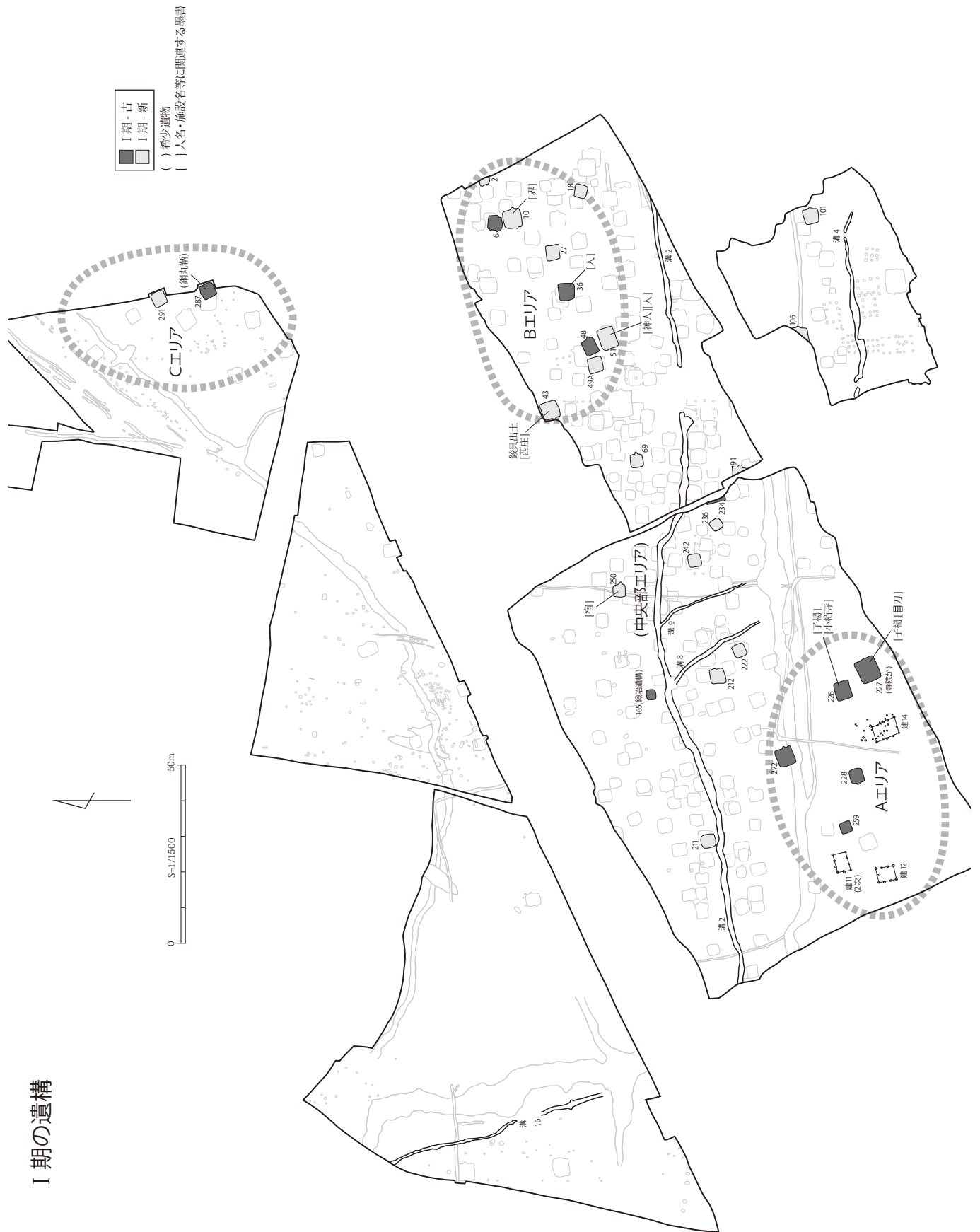
本期に存在が確実なのは竪穴建物39軒(古21、新18)と4区土坑17・41である。溝6は伴う最新の土器類がV期古なので、本期後半までには埋没したと考える。溝19は5区区間の溝底に配置された土器類がV期古であり、さらに4区土17(V期新の土器類を副葬する墓址)に切られているので、やはり本期の後半までには埋没したと考える。竪穴建物は棟数と分布密度を著しく減少させている。一方、II期でいったん消滅したCエリアに再び竪穴建物が現れる。

本期は竪穴建物の棟数が前時期の1/3以下に急減し、本集落を特徴づけていた溝6、溝19が埋没する。溝6を南限とした中央部エリアに竪穴建物が広く展開する構成に変化はないが、前時期に比べた棟数の減少は顕著で、集落が急速に終息に向かっていることが窺える。そのような動きの一方で、前半に138住、後半に50住・99住という突出した大型住居が集落の中心部に造られている。集落の北のはずれには4区土17と土41の2基の墓址が15mほどの距離をおいて設けられた。

(6) VI期

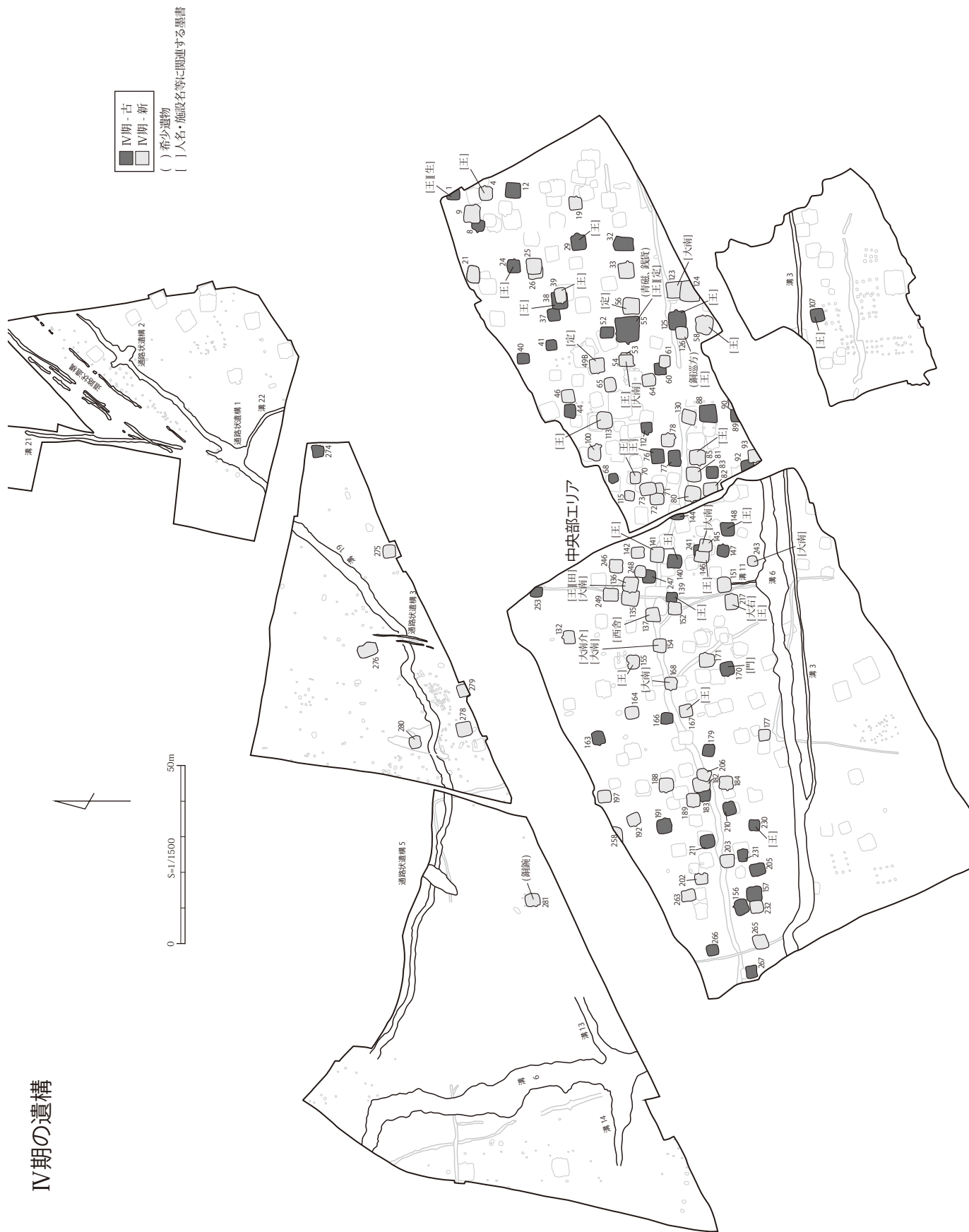
本期に存在が確実なのは竪穴建物3棟のみで、他の遺構の存在は推定も含めて認められない。竪穴建物は遺構・遺物共に突出する内容はなく、本期を以て集落は消滅する。

I 期の遺構



第 213 図 集落変遷図(1)

IV期の遺構



第 216 図 集落変遷図(4)

VI期の遺構



第 218 図 集落変遷図(6)

4 集落と希少遺物

本遺跡から出土した磁器類、金属製品、石製品などの希少な遺物や墨書土器について、遺構内や集落でのあり方の点から見てみる。第25表は希少遺物が出土した竪穴建物の時期と特徴の一覧である。

希少遺物を出土した竪穴建物の遺構面での特殊性については、大型住居の55住と110住、柱穴を有する16住、43住、161住の5例が特殊な規格の竪穴建物（161住は焼失住居でもある）、残りの9例はごく普通のものであった。特殊な竪穴建物5例のうち43住以外はすべて複数点の出土がある一方で、普通の竪穴建物9例からは1点ずつしか出土していない。この状況だけで希少遺物の廃棄（あるいは特殊な竪穴建物の廃絶）に他とは違う意味があるとはいいきれないが、集落を考える上では一つの視点となろう。

竪穴建物の時期は出土土器群の段階区分によって特定、推定しており、厳密にはそれらの遺物が廃棄、遺棄された時期を示す。特に希少遺物でその点は重要であろう。

青磁・白磁 越州窯青磁の椀1点（第104図055_117）と白磁の椀2点（第166図286_13・14）が出土しているが、いずれも底部や口縁部の破片である。白磁は同一個体の可能性もある。青磁は55住（IV期古）から出土した。55住の壁際には土師器を中心とした多くの杯Aや椀が意図的とみられる状況で残されていたが、青磁はそれらとは異なり小片で覆土からの出土であった。ただし55住は本遺跡で最大級の床面積を有す大型住居で、その点は考慮する必要がある。白磁2点は286住（V期）の出土だが、他の土器類と同じで特殊な状況は全くみられなかった。本遺跡で多数が出土している緑釉陶器も青磁や白磁と同様、特殊な出土状況は全くない。磁器は相伴した土器群の時期と文献27などの成果がほぼ整合する。

銅鏡 281住と69住を切るピットから出土している。281住のもの（第181図88）は板状の銅製品で鏡とは断定できない。281住はIV期の遺構だが、銅製品は本址の検出面から破片の単体で出土した。後者は出土したピットが径25cmと小さく（第23図、写真図版16）、出土状態も大形破片4点のうち3点が並ぶようになっており、意図的にピット内に納められたと考える。ピット自体も銅鏡埋納用に設けられた可能性がある。ピットの時期は69住がI期なのでそれ以降であることは確かだが、ピット内から他の遺物は得られておらず、周辺にこのピットを伴う遺構も見当たらないのでそれ以上の推定はむずかしい。銅鏡は第3章第2節3で述べたように補修痕を有す極めて珍しいものである（第181図87）。

銅鏡 八稜鏡と海獣葡萄鏡が出土している。八稜鏡は13住（V期）の床面近くから表面を上にして出土したもの（第11図）で、出土状況に特殊な様子は認められない。一部を欠損するだけだが全体の半分ほどが被熱で融けて傷んでいる。13住には炭化材や焼土などを伴った火災や焚火の痕跡はなく、八稜鏡は廃棄・埋没以前から傷んでいた可能性がある。海獣葡萄鏡は3cm角ほどの破片で180住（V期）の床中央部の硬化面に圧着するような状態で出土した（第44図）。破断面は鋭利で、破片になった後に摩滅・風化した痕跡は顕著にみられない。海獣葡萄鏡は全国的にみて7世紀から8世紀初頭の遺跡や古墳から出土するが、その年代と180住とは200年以上の開きがある。そもそも本遺跡全体でも古代に属する最古の遺構・遺物は9世紀前半なので、海獣葡萄鏡は本遺跡とは大きく時期を違える異質な存在といえる。おそらく意図的に折損され、本来の用途である鏡とは認識されない小破片となった形で集落に持ち込まれ、V期に廃棄されたものであろう。

銅印 22住の北壁西隅寄りの壁際から数cm、床からは10cmほど浮いて出土した（第14図）。他の土器類などと同様で特殊な出土状況は示していない。22住の土層は西側から埋没、あるいは埋め戻された状況を示しており、銅印もその際に廃棄されたものと推定される。完形品で遺存状態も良好である。印文の「長良私印」については文献17・20・31で解釈が示されている。銅印は遺物そのものから製作の時期を絞り込むのは難しい（4文字の私印は印影や使用例が8～11世紀に及ぶとされる：文献20）。銅印が出土した22住の土器群はIII期古に位置付けたがII期新に遡る要素を若干含んでおり、文献13の比定を参考にすると9世紀後半の中に収まる。銅印廃棄の時期もそこに求められる。

時期	遺構	備考	出土遺物
I古	287住		銅丸柄1
I新	43住	柱	鉸具1
II古	16住	柱	富寿神宝1、銅巡方1
II新	110住	柱・大	鉸尾2、石巡方1
III古	22住		銅印1
III新	133住		石巡方1
"	175住		銅巡方1
IV古	55住	柱・大	青磁1、銭貨1
IV新	126住		銅巡方1
"	281住		銅鏡1
V古	161住	柱	延喜通宝5
"	286住		白磁2
V新	13住		八稜鏡1
"	180住		海獣葡萄鏡

備考欄[柱]は柱穴のある住居、[大]は大型住居を示す

第25表 希少遺物出土遺構

銭貨 竪穴建物出土の銭貨は計7枚で、銭種の判読ができたものは富寿神宝1枚と延喜通宝2枚、判読ができないもののうち3枚も延喜通宝と推定され、もう1枚も大きさなどから古代銭貨とみられる(第3章第2節3)。富寿神宝は16住の北壁中央部直下の床に掘られた浅いピット状の窪みから銅製巡方とともに出土したものである(第13図)。16住ではその他の遺物は特殊な出土状況を示していないが、銭貨と巡方が窪みの中から出土したことは意図的な廃棄や埋納の可能性も考えられる。延喜通宝5枚はすべて161住からの出土で、南壁中央東寄りの壁際の覆土上層から、5枚が重なって溶着した状態で出土した(第83図)。161住は覆土上～下層に多量の炭化材が残り、灰釉陶器を中心とする土器類が意図的に多数廃棄されていたいわゆる焼失住居で、銭貨は炭化材生成時に被熱溶着したものと推定する。廃棄時に紐で結ばれていたか、袋や容器に重ねて入れられていた可能性を考えたい。銭種不明の1枚は55住出土であるが、出土状況はよくわからない。富寿神宝は初鑄が818年、延喜通宝は907年で、前者が出土した16住がⅡ期、後者の161住がⅤ期(文献13の7期と10期に対応。それぞれ9世紀中葉から後半、10世紀中葉に比定)なので時期的に齟齬はないが、初鑄から50年を経ずして廃棄されたことになる。

石鈔・銅鈔 革帯に付される鉸具、鉈尾、巡方、丸軀が出土している。すべて単体での出土で、内訳は鉸具1点、鉈尾2点、銅製丸軀1点、巡方5点(銅製3点、石製2点)の計9点である。出土遺構は16住(Ⅱ期古:銅巡方1)、43住(Ⅰ期新:鉸具1)、110住(Ⅱ期新:鉈尾2、石巡方1)、126住(Ⅳ期:銅巡方1)、133住(Ⅲ期新:石巡方1)、175住(Ⅲ期新:銅巡方1)、287住(Ⅰ期古:銅丸軀1)で、16住の銅巡方が床面の窪みから銭貨(富寿神宝)と共に出土した他は、出土状況に特殊性は感じられない。110住からは3点が出土しているので注目すべきであろう。革帯関連の遺物は前半期の竪穴建物からの出土が多い。

墨書土器 第26表は竪穴建物の時期別棟数(時期が限定できないものは除く。)に占める墨書土器の出土した竪穴建物数と比率などを示したものである。竪穴建物が3棟のみとなったⅥ期を除き、各時期で30%から60%台の竪穴建物から墨書土器が出土しており、量的な指標となる保有指数(文献27:墨書土器数÷竪穴建物棟数)でもすべて1.0以上を示す。他の遺跡と較べると、文献13で対象とした7遺跡では墨書土器は5期から8期の間に出土が集中し、9期以降にはほとんどみられない。文献27の塩尻市吉田川西遺跡でも6・7期がピークで8・9期には減少に転じ、10期以降は僅少となっている。本遺跡ではⅣ・Ⅴ期になっても減少傾向はみられず、墨書土器の時期的なあり方はかなり特殊な状況といえる。(文献13・27の5～10期は本遺跡のⅠ期の前段階～Ⅴ期に相当:第20表参照)

時期	住居数	墨書土器 出土住居数	墨書土器 点数	墨書土器を持つ 住居の比率(%)	保有指数
Ⅰ古	11	4	17	36.4%	1.55
Ⅰ新	16	10	20	62.5%	1.25
Ⅱ古	12	8	15	66.7%	1.25
Ⅱ新	12	8	28	66.7%	2.33
Ⅲ古	19	9	24	47.4%	1.26
Ⅲ新	46	26	76	56.5%	1.65
Ⅳ古	49	34	142	69.4%	2.90
Ⅳ新	75	41	91	54.7%	1.21
Ⅴ古	21	13	25	61.9%	1.19
Ⅴ新	18	8	32	44.4%	1.78
Ⅵ	3	0	0	0.0%	0.00
全体	282	161	470	57.1%	1.67

住居数・土器点数は時期が明確なもののみを表記
保有指数は墨書土器点数を住居数で割り戻した値

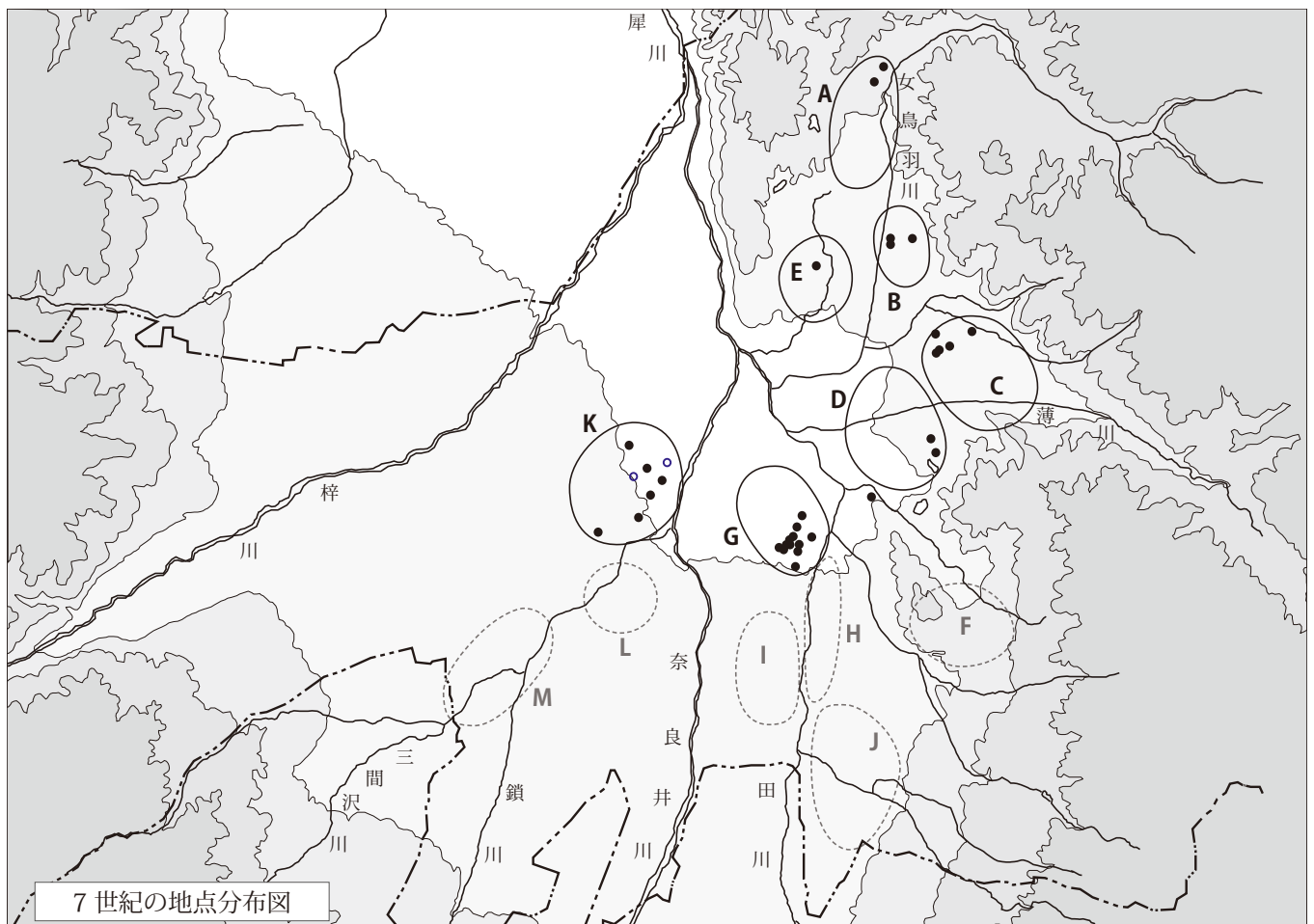
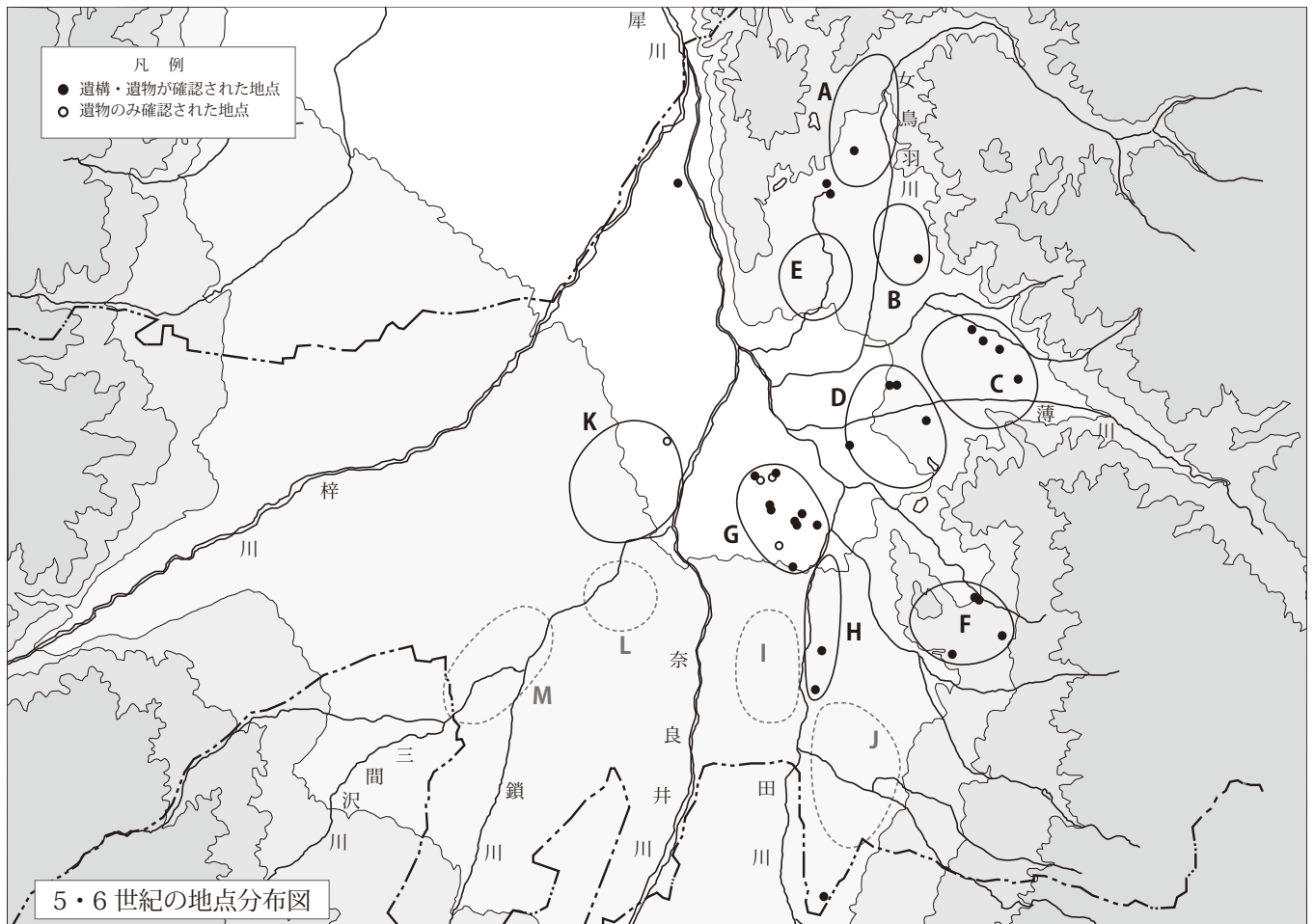
第26表 時期別墨書土器出土状況

5 三間沢川下流域の平安時代集落をめぐって

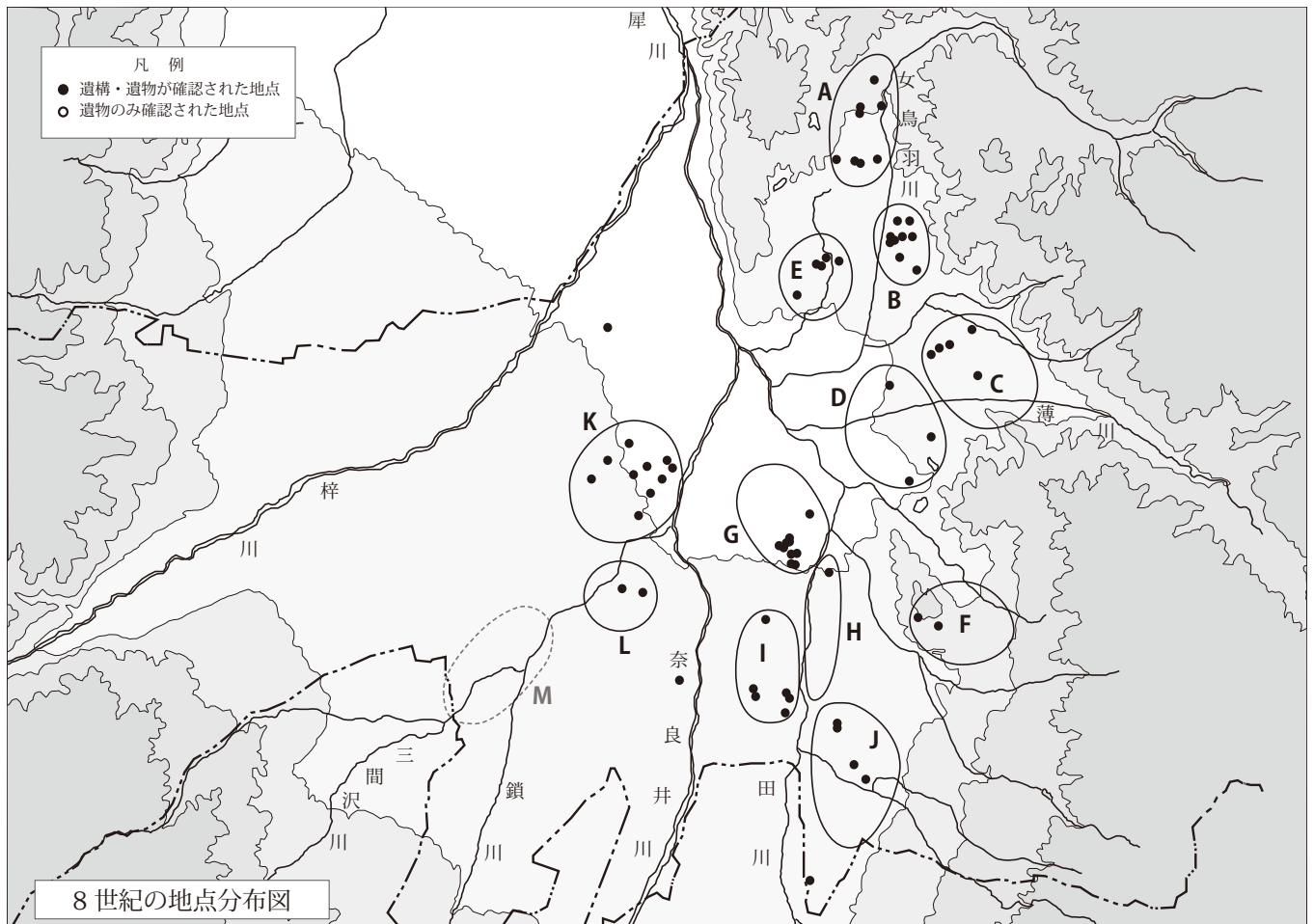
(1) 三間沢川下流域の遺跡群

これまで触れてきたが、本遺跡は極めて特徴的なあり方を示している。始まりが9世紀前半と遅く、しかも10世紀末までにはほぼ消滅する短期間の集落でありながら、非常に多くの竪穴建物が密集して営まれ、出土品に希少遺物が多い。墨書土器も多い。計画的に水路を設けてローム層地帯に集落を営んでいる。

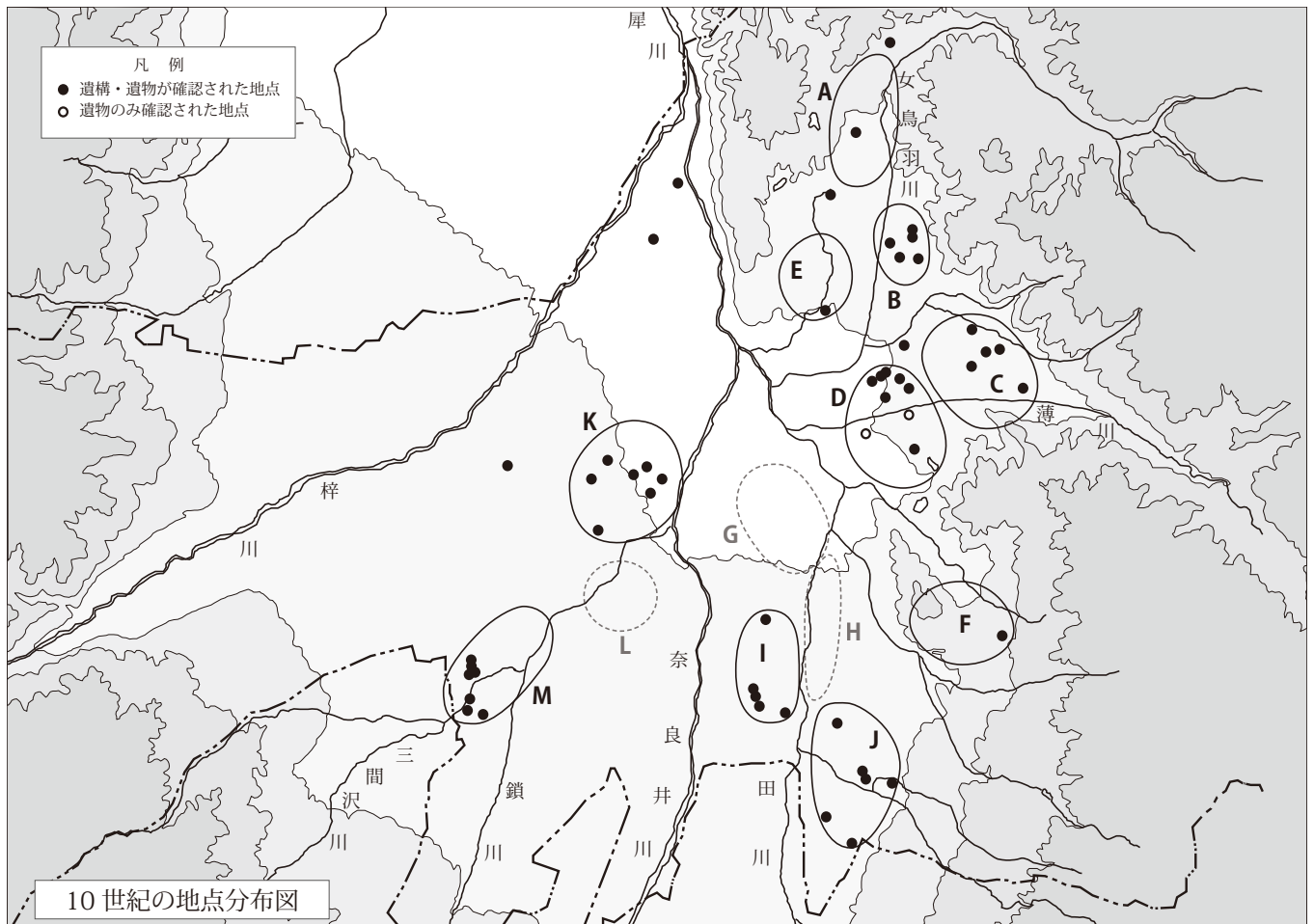
本遺跡と同様の三間沢川下流域に立地する川西開田遺跡は、地形的には本遺跡の対岸に位置し、三間沢川や鎖川による沖積地上に営まれている。4次にわたる調査で92棟の竪穴建物が発見されている(文献40・41)。この集落は本遺跡よりやや遅れて始まり11世紀代の中で終わるという違いを見せるが、9世紀代から開発が始まる点や、集落の存続期間が短い、集落内に大規模な水路を設けている、緑釉陶器や銭貨などの希少遺物が伴う点は本遺跡によく似ている。ただし墨書土器は多くない。時期的にほぼ並行するこの二つの集落間の距離は600mほどであり、双方が密接な関連を有して存在していたことは想像に難くない。川西開田遺跡の約200m南では境窪遺跡が調査されており、9世紀後半に属するとみられる2棟の竪穴建物が発見されている。地形的には川西開田遺跡と同じなので、同一の集落の縁辺部と捉えることもできる。本遺跡を含めたこれら三間沢川下流域の遺跡群については、それぞれの相違点もあるが、包括して捉えていく必



第 219 図 発掘地点分布図(1)



第 220 図 発掘地点分布図 (2)



第 221 図 発掘地点分布図 (3)

要がある。

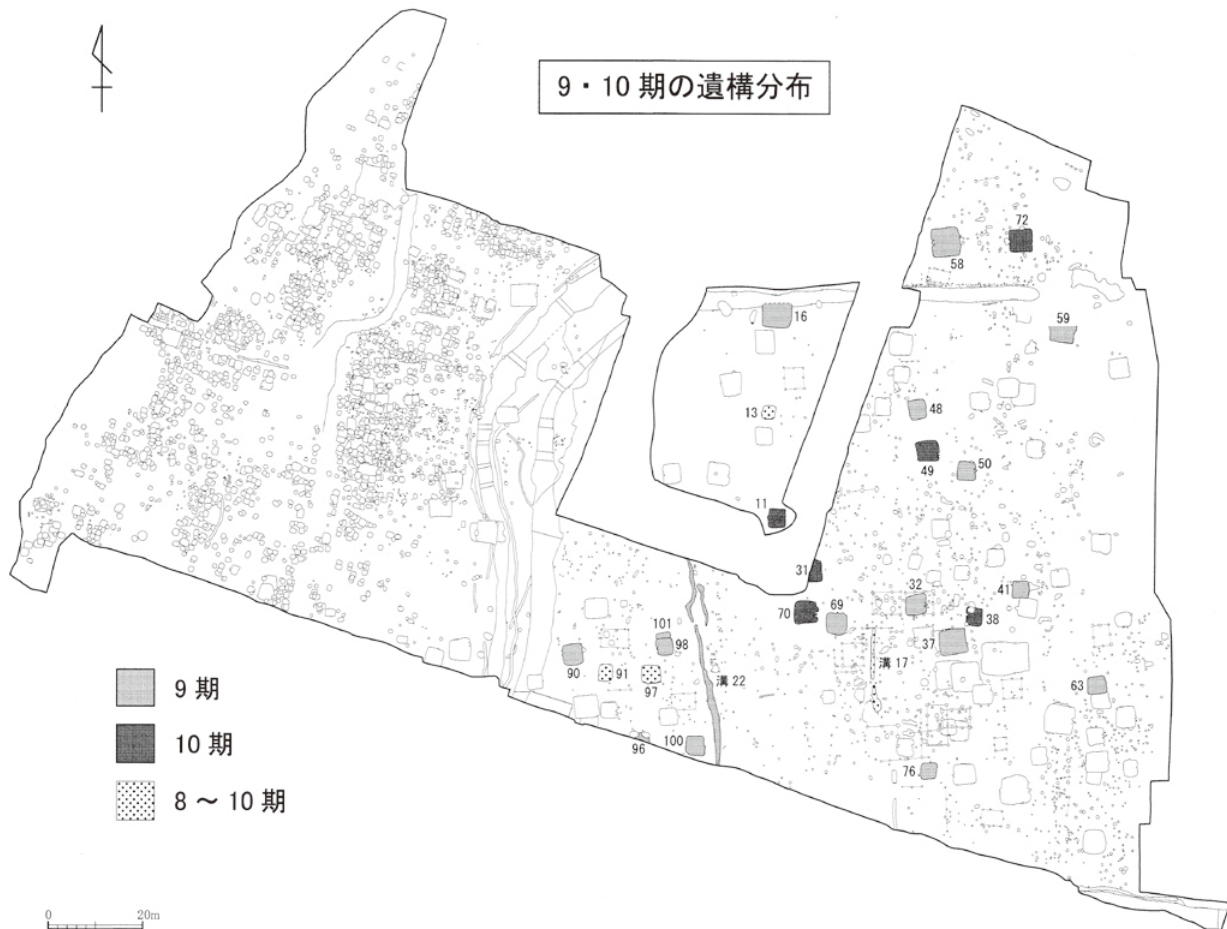
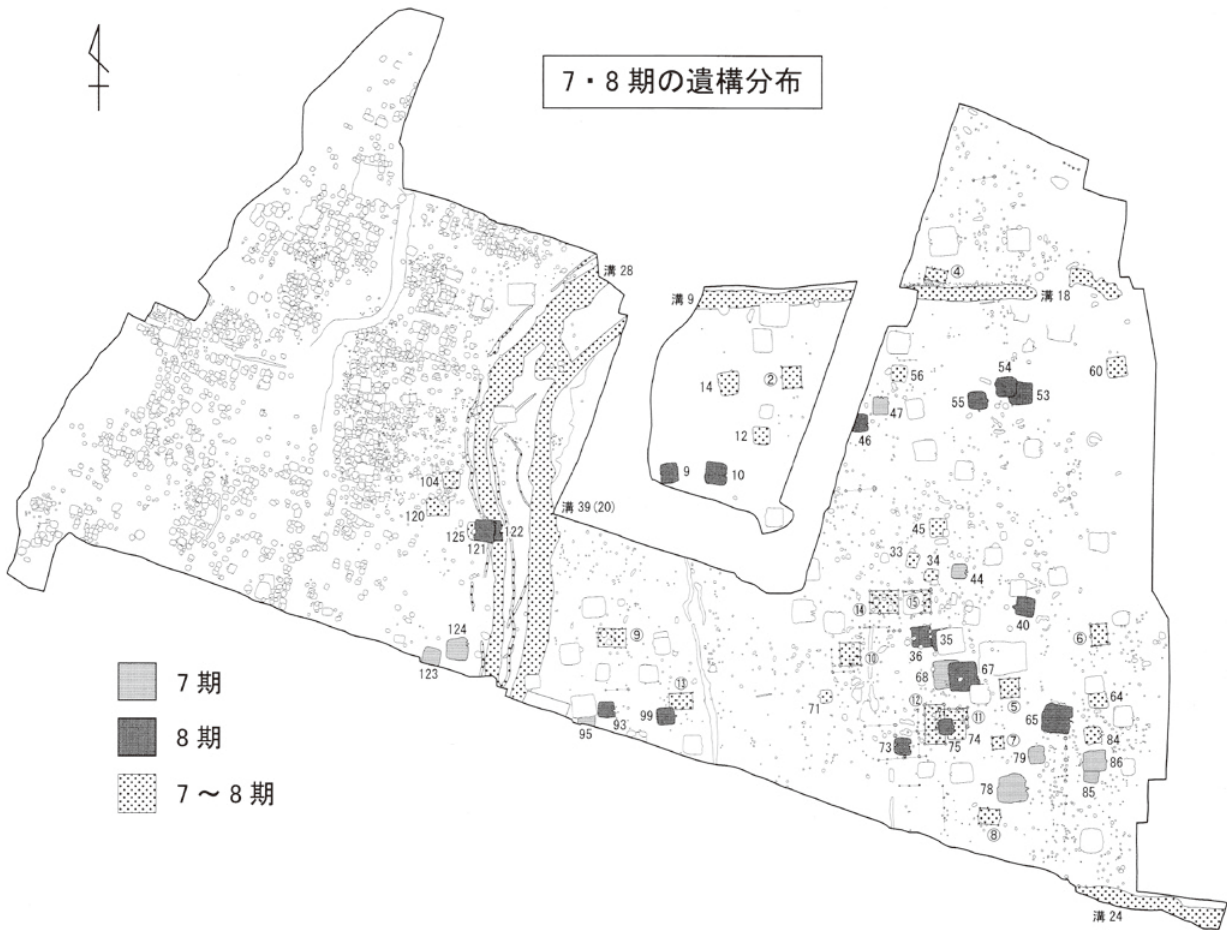
(2) 松本市域の古代集落と三間沢川下流域の遺跡群

昭和50年代以降の発掘調査の蓄積によって松本市域での小地域ごとの古代集落遺跡の動向がかなり判明してきている。三間沢川下流域の遺跡群は、その中でどのように位置付けできるか、若干の考察を巡らせてみたい。

第219～221図は昭和50年以降に松本市教育委員会が実施した発掘調査で5世紀から12世紀までの遺構・遺物が検出された地点を示したものである（古墳本体は除く）。それらの地点は地形的にAからMまでのエリアで暫定的にまとめることができる。5・6世紀の地点分布図（第219図上段）では、A～D・F～Hエリアで遺構・遺物がみられる。Eエリアは今のところ、この時期の明確な発見はないが周囲に同時期の古墳があるため加えた。Gエリアは南松本、出川の一帯であるが、それ以外は田川以東が主で、これらが古墳時代前期（Aエリアを除くと弥生時代）から続く松本市域における「伝統的な地域」である。7世紀の地点分布図（第219図下段）では、Kエリアが加わる。前代までほとんど遺構・遺物がなかった地域で一挙に地点が広がっている。7世紀後半から末のことと捉えられている。F・Hエリアでは途絶えるが、Hエリアは調査例が少ないので未発見なだけかもしれない。8世紀の地点分布図（第220図上段）ではI・J・Lのエリアが加わる。田川・奈良井川間のIエリア、東山山麓のJエリア、鎖川・奈良井川間のLエリアはこの時期から本格的な開発が始まった一帯と考えることができる。Fエリアの地点は窯跡であり、集落址ではない。Kエリアのかなり北方に単独の地点があり、ここに小規模なエリアを設定すべきかもしれない。9世紀の地点分布図（第220図下段）に至ってMエリアが加わる。このMエリアが本遺跡の含まれる三間沢川下流域の遺跡群で、松本市域の中ではかなり後発の地域だったことがわかる。しかも前代までまったく遺構・遺物がなかった地域で一挙に地点が広がっている点は7世紀後半のKエリアの出現に似ている。この9世紀（の後半くらいまで）が最も地点が多く、「伝統的な地域」でも、それ以降に加わったエリアでも盛んな開発があったことが窺える。しかし、10世紀の地点分布図（第221図上段）では、前代まで地点を有していたG・H・Lエリアが途絶え、Aエリアも著しく減少している。「伝統的な地域」のB～Dエリア、後発のI・J・Mエリアは前代の状況を維持しているが、Kエリアも縮小傾向にある。それまで順調に増加、拡大を続けてきた松本市域の遺跡分布に、10世紀に入ると大きな変化が広範に生じている。この異変ともいえるエリアの縮小と衰退はおそらく9世紀の後半から末ころには始まっており、それが10世紀の分布図に大きく反映したものであろう。さらに11・12世紀の地点分布図（第221図下段）では本遺跡を含むMエリアも空白になる。厳密には川西開田遺跡に1棟のみが残り、11世紀の前半で消滅する。伝統的な地域の田川以東でも地点の分布が減少している。その一方でIエリアは地点数を増やしており、田川・奈良井川間のこの傾向は南隣する塩尻市域の吉田川西遺跡にも通ずるものがある。いったん消滅したGエリアも復活する。おそらく9世紀後半から始まった変化を経て、新たな集団が入ったのであろう。

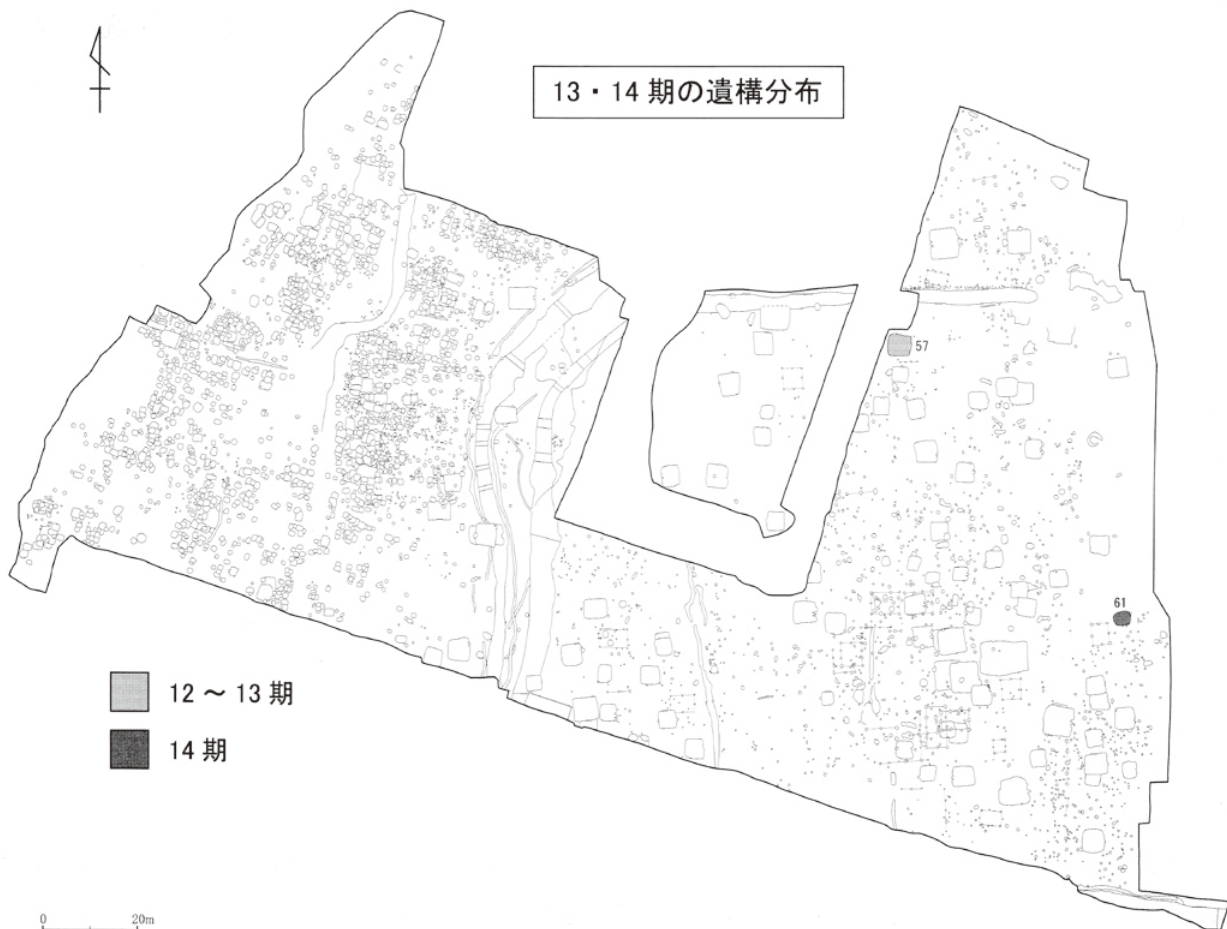
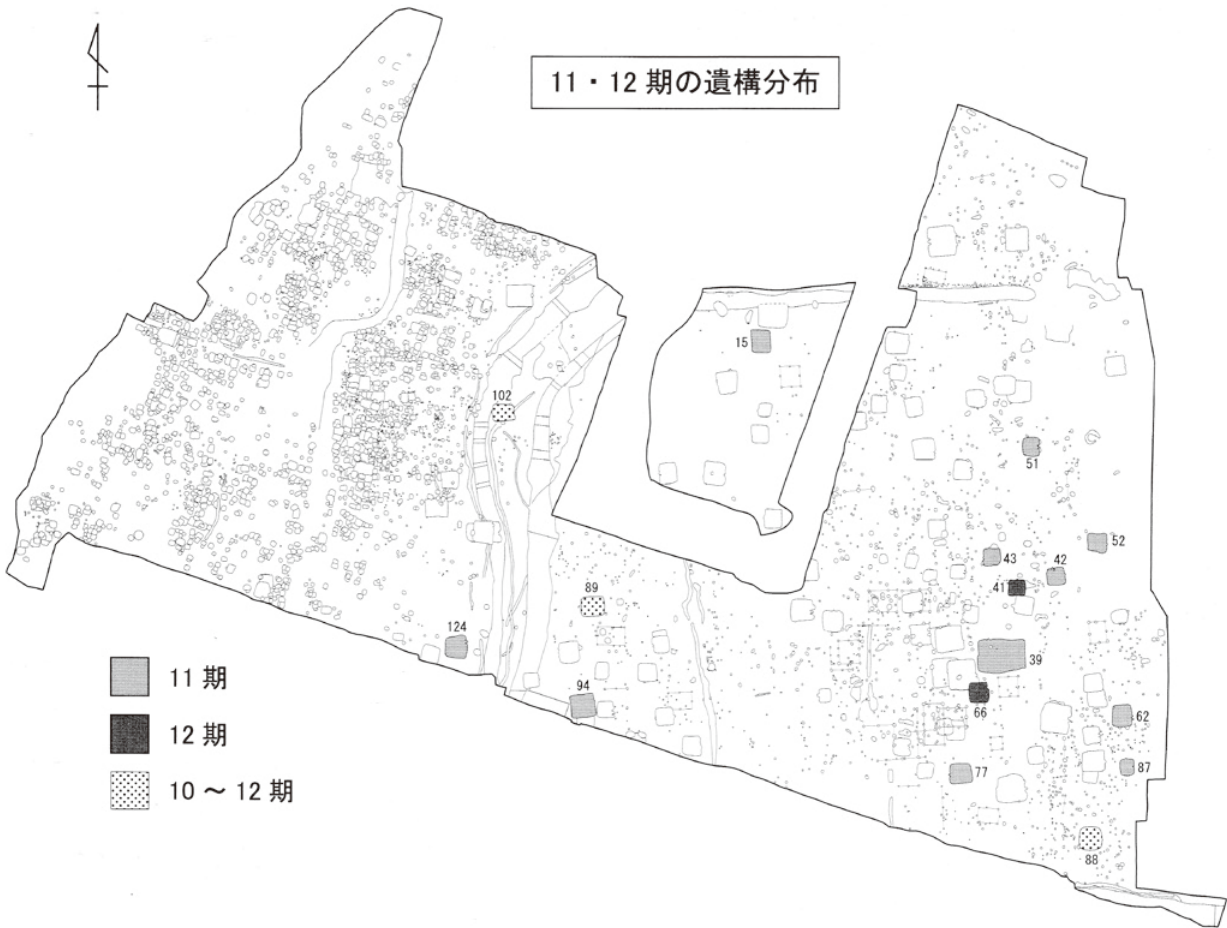
このような動向を踏まえ、あらためて本遺跡をみると、竪穴建物棟数はⅢ期から増加し、Ⅳ期にピークを迎え、続くⅤ期も棟数は減らしているが3棟の大型住居を中核に据えている。墨書土器、緑釉陶器など希少遺物も多い。本遺跡のⅢ～Ⅴ期は文献13の年代比定によれば9世紀末から10世紀中頃までにあたり、松本市域全体ではそれまでの有力エリアのいくつかが消滅、縮小していった時期に重なる。伝統的な地域やそれに続いた古い開発のエリアが衰退していく一方で、三間沢川下流域の遺跡群は新たに出現し、拡大発展を遂げたといえよう。ところが、次のⅥ期では急速に衰え、川西開田遺跡でわずかに次期に続いたのち、三間沢川下流域の遺跡群は消滅してしまう。

三間沢川下流域の遺跡群の登場と拡大、急激な消滅の背景は、単なる地勢的な要因などではなく、おそらく8世紀（9世紀前半）までの政治や地方経済の体制が大きく変動し揺るぎ始めたことに対する地域の反応や、中央権力との結びつき方の変化といった視点で捉えるべきで、ひとり松本市域だけの問題ではないため、ここでのこれ以上の検討はむずかしい。



0 20m

第 222 図 《参考》川西開田遺跡全体図(1)



0 20m

第 223 図 《参考》川西開田遺跡全体図(2)

おわりに

本書では発掘調査の最大の成果である平安時代の遺構と遺物の全容を報告することを主眼とした。次いで遺跡の特徴、特殊性を示す目的で土器類や緑釉陶器、希少遺物、墨書土器などを取り上げて本章で触れた。ただし、鉄器・鉄製品、石器・石製品、土製品、自然遺物、鉄滓などについては実測図の掲載やデータの列挙、個々の遺物説明にとどまった。わずかではあるが出土している縄紋時代の遺物については、石器の一部を提示できたのみで土器は図化できていない。その他にも墨書土器の多さに対応するはずの硯（転用硯）の問題、多彩な鉄器類、こもで石（編物用石錘）の多量出土、64kgに及ぶ鉄滓などについては、詳細な観察や検討ができなかった。本遺跡の特徴を物語る遺物であるだけに残念である。また、自然科学分析の結果と発掘成果との対比、検討もできていない。これらすべては今後への大きな課題としたい。

本遺跡の第1次調査から既に30年が過ぎた。発掘時から出土品や遺構は注目を集め、翌年には概報を刊行したが、それ以後の整理作業はまったく進捗せず、平成22年から始まる第4次以降の調査で、ようやく以前のもも合わせた整理作業と報告書が刊行できる運びとなった。このような遅滞の原因と責任は調査と遺物保管に関わった市教委の担当者であり、深くお詫びするものです。

何回かの発掘調査、長期にわたった保管や整理作業では数えきれないほど多くの方々からご協力やご教示をいただいた。例言に列挙しただけではとても及ばないところで、本書の刊行にあたっては、それらすべての皆様に満腔の謝意を申し上げます。

引用・参考文献一覧

- 文献1 赤羽裕幸 2002「3 遺跡の歴史的環境と周辺遺跡(4) 近世以降」『松本市文化財調査報告No.162 川西開田遺跡Ⅲ・Ⅳ 古代・中世編』松本市教育委員会
- 文献2 飯田市教育委員会 2005『恒川遺跡群—遺物編その1(古代・中世)—』
- 文献3 出越茂和 1993「北陸初期荘園の考古学的分析」『上荒屋遺跡(二)』金沢市教育委員会
- 文献4 井上尚明 2014「多様な地方官衙と庄家・居宅」『古代官衙』考古調査ハンドブック11 ニューサイエンス社
- 文献5 井原今朝男 1989「平安時代の生活と村落」『長野県史 通史編 第1巻 原始・古代』
- 文献6 上田市立信濃国分寺資料館 2009『信濃の東山道と万葉歌』
- 文献7 岡谷市教育委員会 2008『郷土の文化財 29 榎垣外官衙遺跡』
- 文献8 小口雅史 1991「荘園と村」『日本村史講座 4 政治Ⅰ』雄山閣出版
- 文献9 小口雅史 1996「荘所の形態と在地支配をめぐる諸問題」『土地と在地の世界をさぐる』山川出版社
- 文献10 奥野中彦 1988『日本における荘園制成立過程の研究』三一書房
- 文献11 金田章裕 1978「東大寺領荘園の景観と開発」『古代の地方史 4 東海・東山・北陸』朝倉書店
- 文献12 国立歴史民俗博物館 1999『国立歴史民俗博物館研究報告 第79集 日本古代印の基礎的研究』
- 文献13 小平和夫 1990「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 4—松本市内その1—総論編』長野県教育委員会、(財)長野県埋蔵文化財センター
- 文献14 小松 望 1989「金属製品と鍛冶資料」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 3—塩尻市内その2—吉田川西遺跡』長野県教育委員会、(財)長野県埋蔵文化財センター
- 文献15 須田 勤 2006「古代村寺院とその信仰」『古代の信仰と社会』国士舘大学考古学会編
- 文献16 関 和彦 1994「古代の家号と実体的共同体」『日本古代社会生活史の研究』校倉書房
- 文献17 高島英之 1999「古代の私印について」『国立歴史民俗博物館研究報告 第79集 日本古代印の基礎的研究』国立歴史民俗博物館
- 文献18 高島英之 2000「墨書土器村落祭祀論序説」『日本考古学』第9号 日本考古学協会
- 文献19 竹原 学 2000「三間沢川下流の原始・古代・中世—地形の変化と集落—」『松本市史研究』第10号
- 文献20 土橋 誠 1999「私印論」『国立歴史民俗博物館研究報告 第79集 日本古代印の基礎的研究』国立歴史民俗博物館
- 文献21 戸田芳実 1967『日本領主制成立史の研究』岩波書店
- 文献22 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団 2001『鶴田A遺跡Ⅰ 県営圃場整備事業(山前中部Ⅲ期地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査』
- 文献23 鳥羽英継 1999「第5章第1節 土器」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 26—更埴市内その5—更埴条里遺跡・屋代遺跡群(含む大境遺跡・窪河原遺跡)—古代1編—』長野県教育委員会、(財)長野県埋蔵文化財センター
- 文献24 長野県史刊行会 1988『長野県史 考古資料編』全1巻(4) 遺構・遺物

- 文献 25 長野県埋蔵文化財センター 1996『長野県屋代遺跡群出土木簡』
- 文献 26 西山克己 2011「信濃出土の古代銭貨の用いられ方とそれが意味すること」『長野県立歴史館研究紀要』第 17 号
- 文献 27 原 明芳 1989「吉田川西遺跡にみられる食器の変容」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 3
—塩尻市内その 2—吉田川西遺跡』長野県教育委員会、(財)長野県埋蔵文化財センター
- 文献 28 原 明芳 1996「古代社会の変質と中世の始まり」『松本市史』第二巻歴史編 I 原始・古代・中世 松本市
- 文献 29 原 明芳 2014「信濃国筑摩郡の変容、その主体者は誰か」『古代東国の考古学③ 古代の開発と地域の力』
高志書院
- 文献 30 平川 南 2000「付 則天文字を追う」『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 文献 31 平川 南 2002「長野県内出土・伝世の古代印の再検討」『長野県考古学会誌』99・100 号
- 文献 32 平野 修 1996「古代仏教と土地開発—山梨県内の事例から—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 7 集
- 文献 33 藤井一二 1986「初期荘園の耕地と村」『初期荘園史の研究』塙書房
- 文献 34 松本市教育委員会 1974『長野県松本市今井こぶし畑遺跡緊急発掘調査概報』
- 文献 35 松本市教育委員会 1986『松本市文化財調査報告No. 40 松本市梶海渡遺跡』
- 文献 36 松本市教育委員会 1987『松本市文化財調査報告No. 55 松本市神林川西遺跡』
- 文献 37 松本市教育委員会 1988『三間沢川左岸遺跡（I）平安時代集落址の緊急発掘調査概報』
- 文献 38 松本市教育委員会 1993『松本市文化財調査報告No. 100 松本市山影遺跡』
- 文献 39 松本市教育委員会 1998『松本市文化財調査報告No. 130 境窪遺跡・川西開田遺跡 I・II』
- 文献 40 松本市教育委員会 2001『松本市文化財調査報告No. 150 川西開田遺跡 V・三間沢川左岸遺跡 III』
- 文献 41 松本市教育委員会 2002『松本市文化財調査報告No. 162 川西開田遺跡 III・IV 古代・中世編』
- 文献 42 松本市教育委員会 2003『松本市文化財調査報告No. 167 川西開田遺跡 III・IV 縄紋編』
- 文献 43 松本市教育委員会 2015『松本市文化財調査報告書No. 217 波田下原遺跡 2・3 和田中西原遺跡 2』
- 文献 44 三上善孝 2004「墨書土器研究の可能性」『山形大学人文学部研究年報』1 巻
- 文献 45 山形村教育委員会 1981『三夜塚遺跡 県営圃場整備事業東筑摩郡山形村竹田地区緊急発掘調査報告書』
- 文献 46 山形村教育委員会 1982『神明遺跡・三夜塚遺跡 県営圃場整備事業東筑摩郡山形村竹田地区緊急発掘調査報告書』
- 文献 47 山形村教育委員会 2009『下原遺跡 三夜塚遺跡 IV—県営畑地帯総合整備事業竹田原地区に伴う緊急発掘調査
報告書—』
- 文献 48 山形村教育委員会 2010『下原遺跡 三夜塚遺跡 V—地方特定道路整備工事（村道北 6 号線）に伴う記録保存—』
- 文献 49 山形村教育委員会 2001『境窪遺跡 II —三間沢川河川改修工事に伴う緊急発掘調査報告書—』



溝 19 (5 次)、南西から



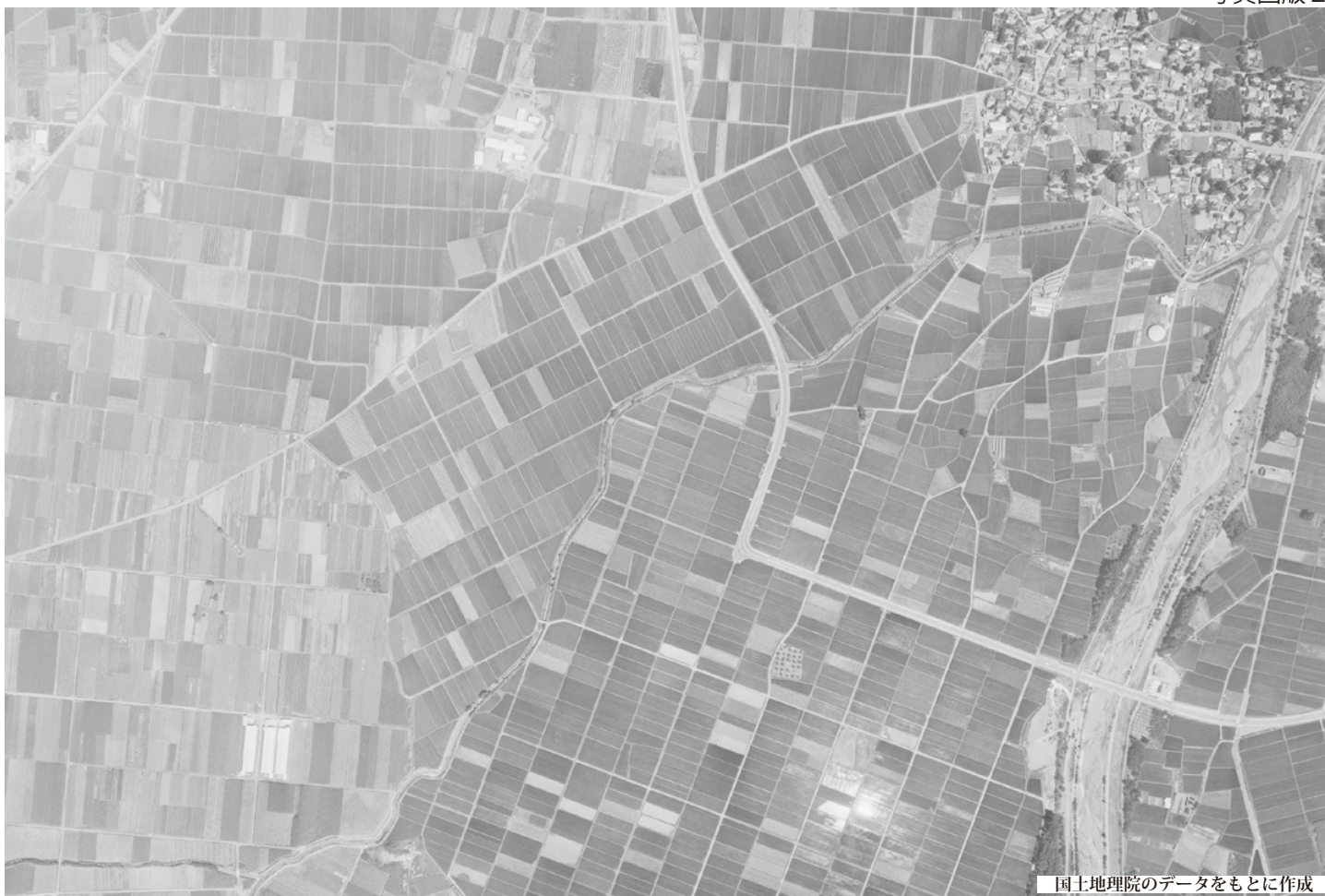
国土地理院のデータをもとに作成

昭和 23 年撮影 左手前から右奥にかけて三間沢川が流れ、右側の鎖川に合流する



国土地理院のデータをもとに作成

昭和 44 年撮影 開田工事事業 (S34 ~ 38) により、方形区画の耕地となっている



国土地理院のデータをもとに作成

昭和 54 年撮影 国民体育大会（やまびこ国体：S53）にあわせて、松本環状高家線が開通



平成 25 年撮影 調査終了後 臨空工業団地が広がる



1次A区 北から-1



1次A区 北から-2



2次調査区 北から



2次調査区 東から

調査区全景 (2)



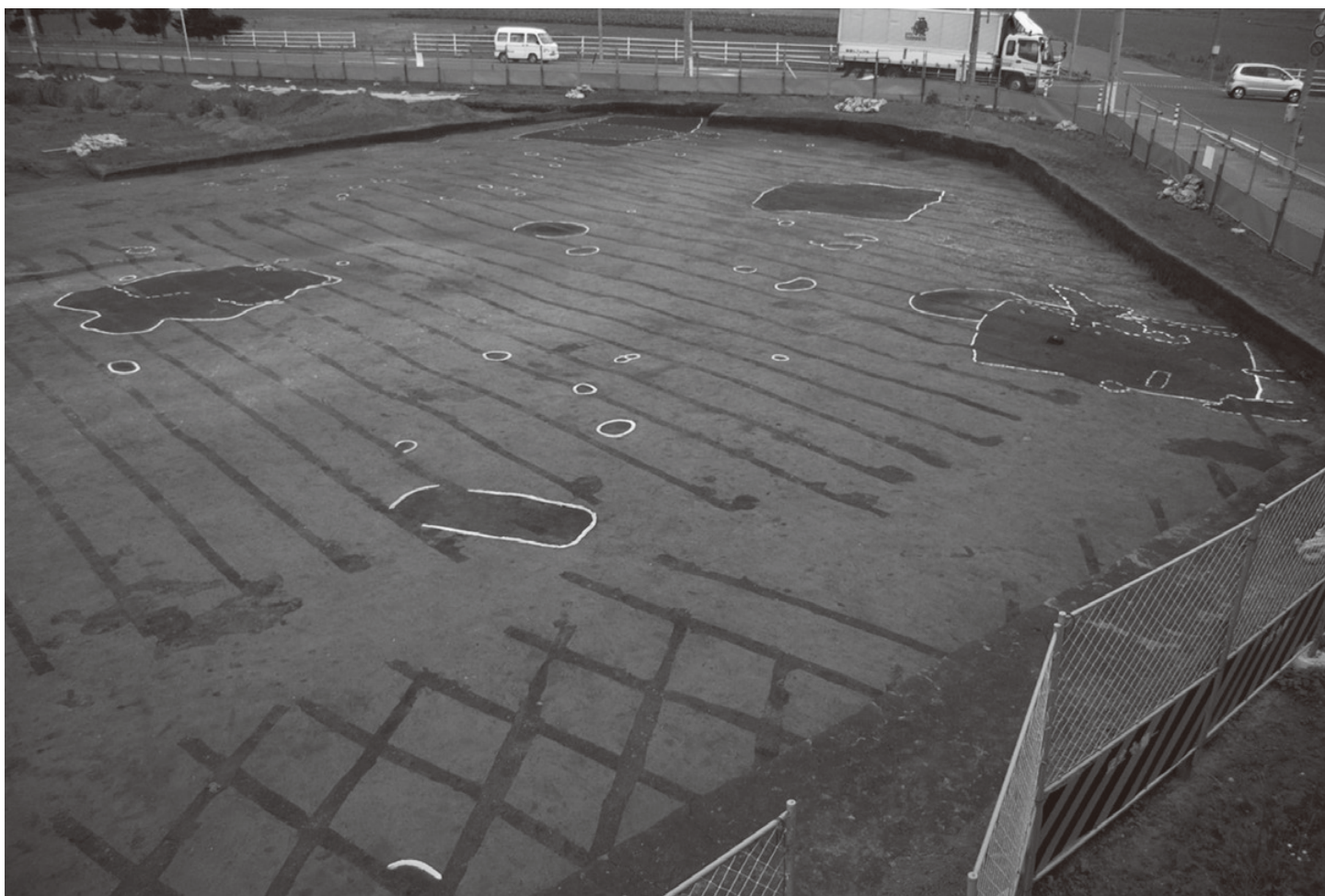
4次B区南半 北東から



4次D区全景 南から



5次調査区 南東から



5次調査区 南西から

調査区全景 (4)



10 住 西から。左上は 11 住に切られる



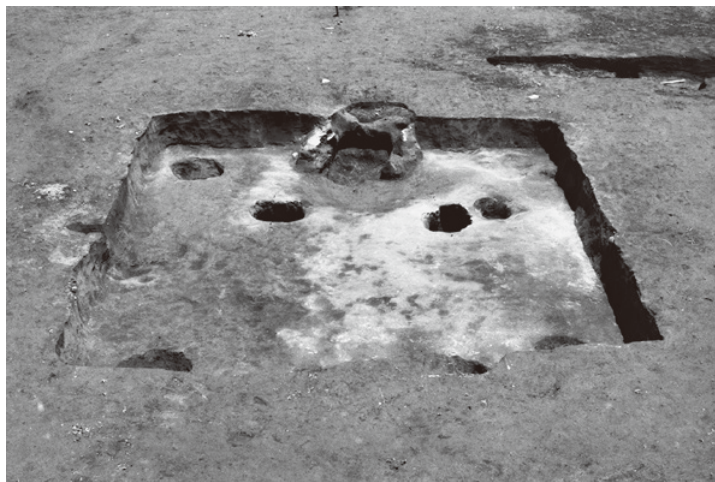
11 住 東から



13 住 西から。右上を 15 住に切られる



14 住 西から。左手前を 15 住に切られる



16 住 西から



17 住 西から。左隣の 18 住を切り、右上の土 1 に切られる



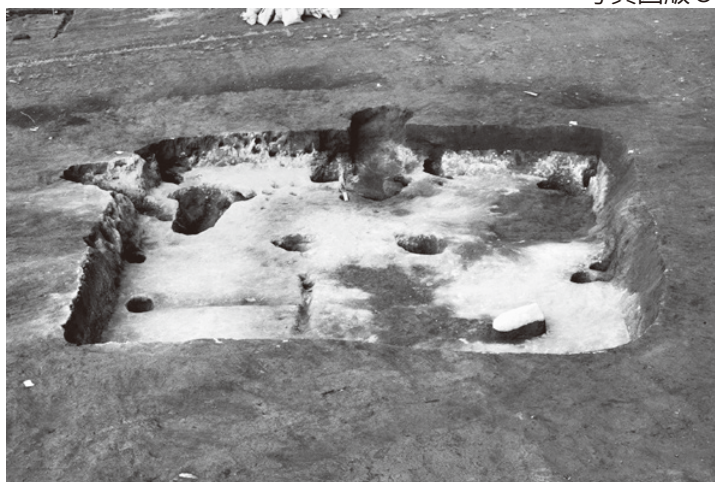
19 住 西から



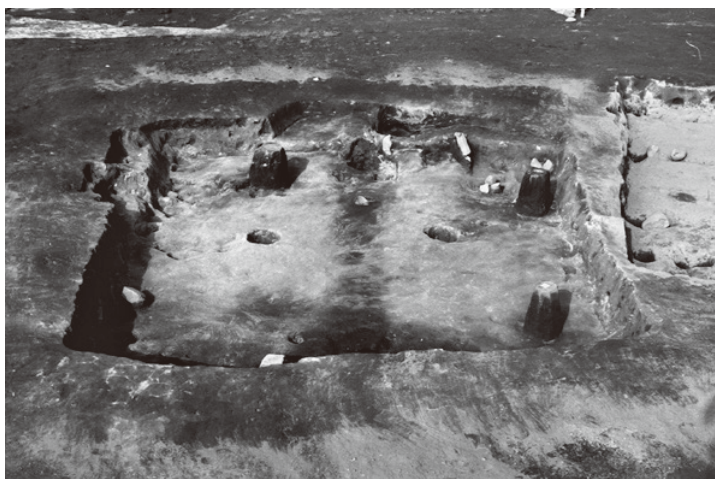
22 住 東から。右手前は 23 住



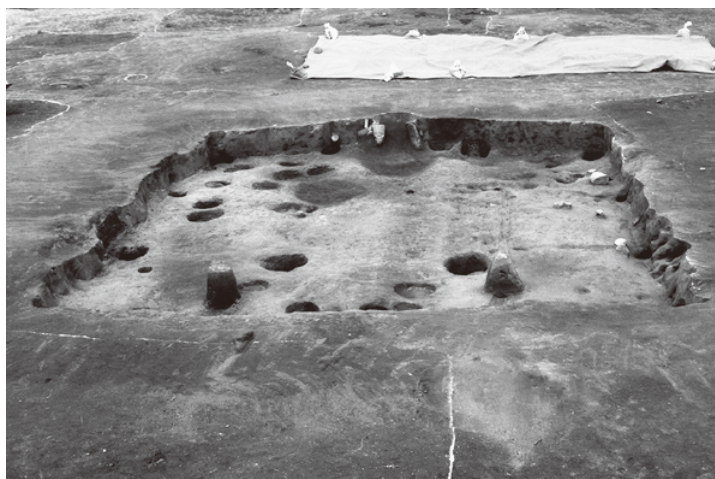
24 住 西から



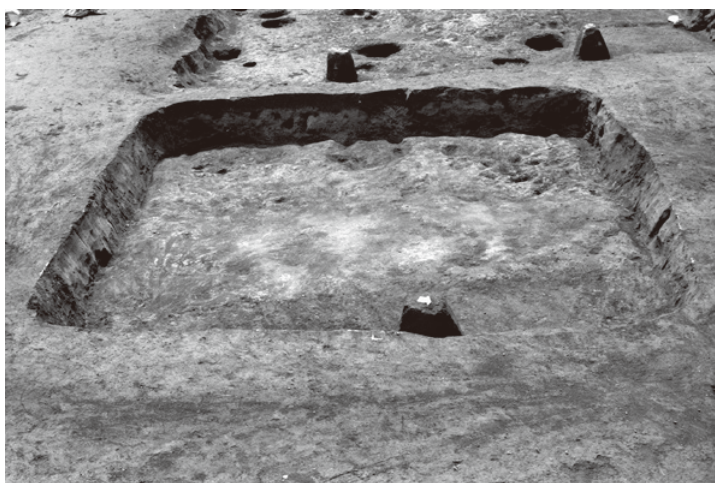
50 住 西から



51 住 西から。奥は 52 住が上部を破壊する



55 住 東から



56 住 東から



58 住 東から



59 住 西から



61 住 東から。右上は 60 住を切る
竪穴建物 (2)



63 住 東から。左上を64住に切られる



66 住 西から



69 住 西から。本址覆土中のピットから銅鏡出土



76 住 西から



81 住 東から



84 住 東から。上奥は85住



94 住 東から。左側は96住を切る



98 住 西から。横方向の土色の変質は開田時のキャタピラの跡
竪穴建物(3)



99 住 西から。手前左隅は 113 住



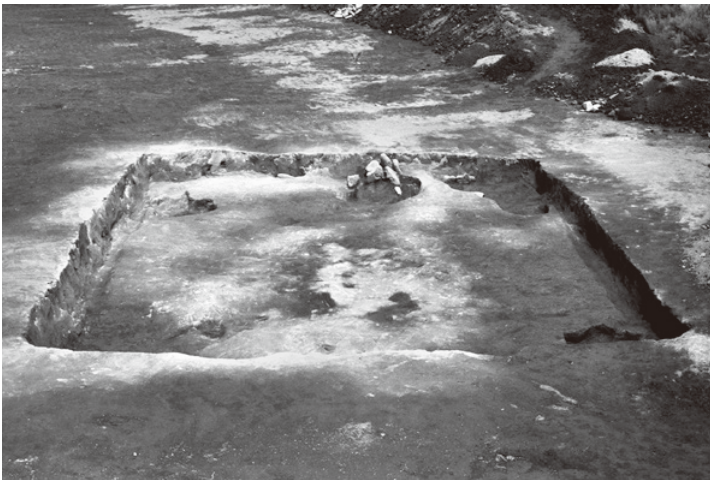
103 住 西から。手前右隅は 104 住



107 住 東から



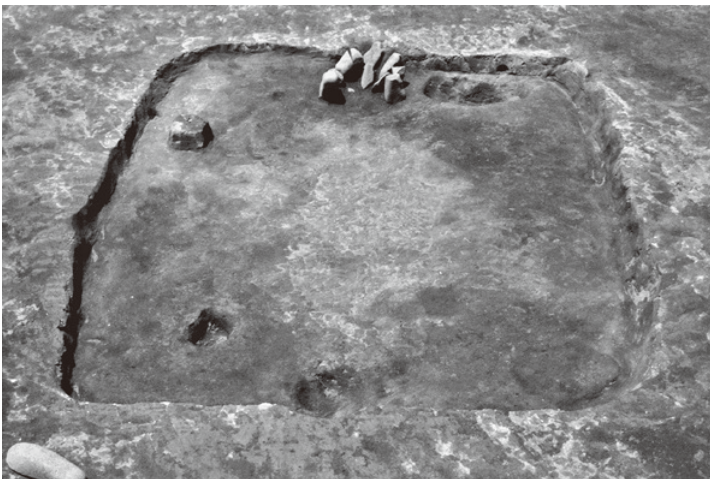
108 住 南から。奥は 109 住。右側は土 7 に切られる



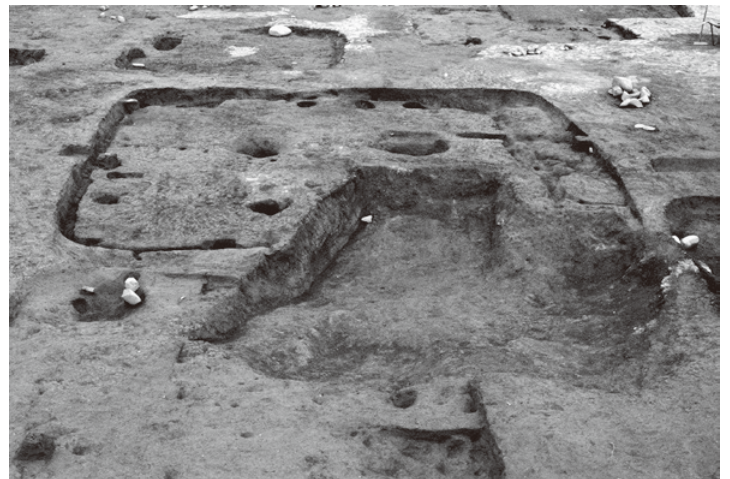
110 住 西から



126 住 東から。手前から右は 125 住を切る



133 住 東から



138 住 西から。右手前は大きな攪乱



140 住 東から。左側へ拡張している



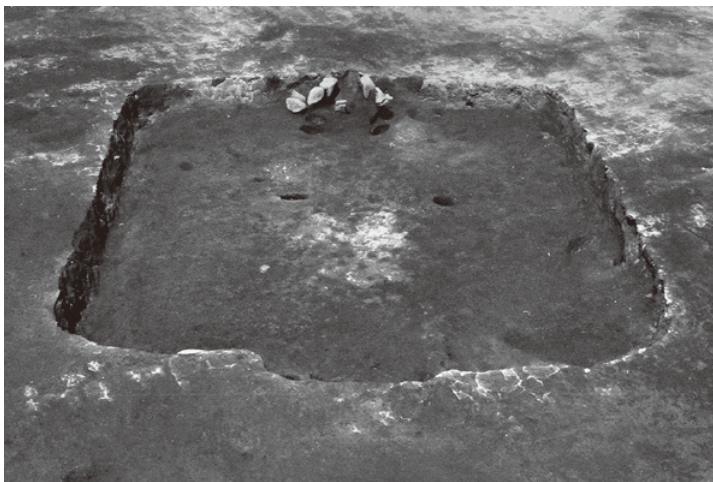
151 住 西から。手前を溝7に切られる



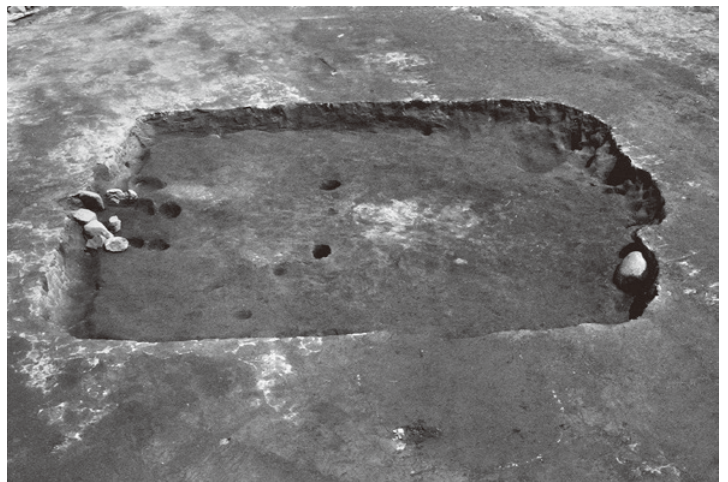
156 住 南から



157 住 西から



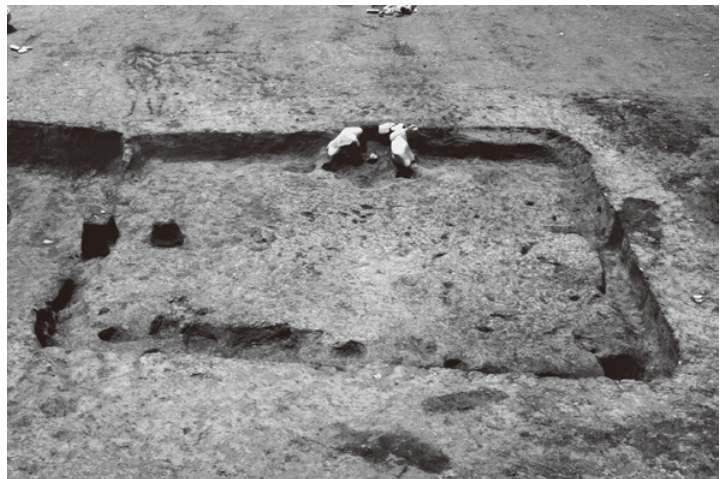
161 住 -1 東から



161 住 -2 南から



165 住 南から



174 住 東から。左側は173住
竪穴建物(5)



175 住 西から



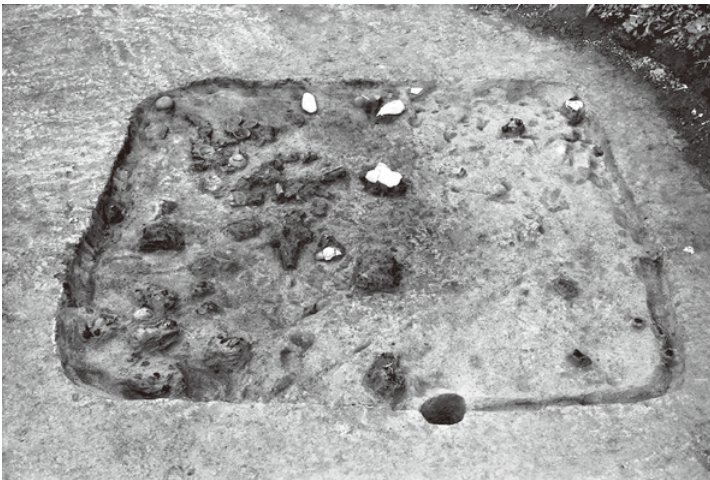
180 住 西から



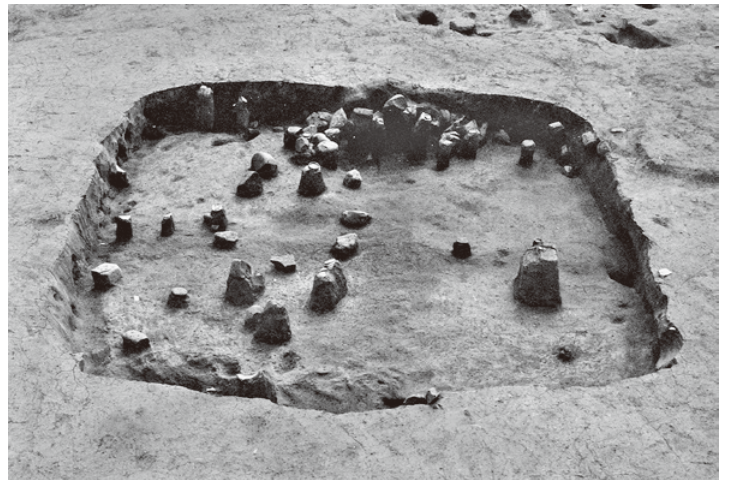
187 住 東から。左下は 208 住



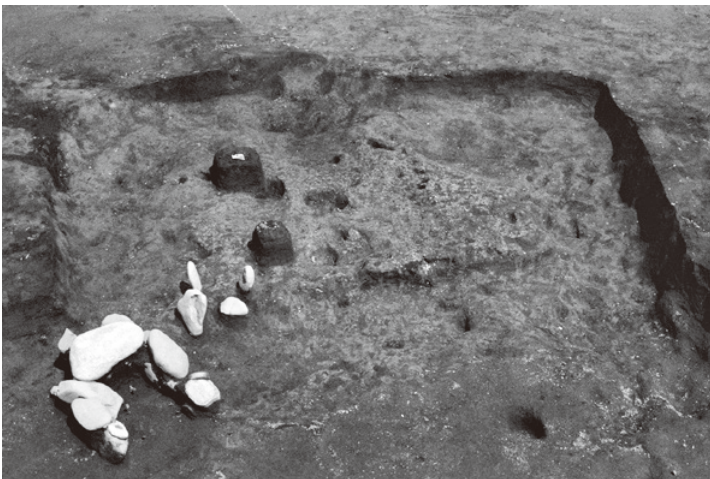
195 住 西から。左下隅は 194 住に切られる



197 住 東から



200 住 東から



206 住 西から。手前は 182 住と 270 住カマド



217 住 西から



219住・220住・269住 南から。左下より220・269・219住



222住・223住 西から。炭化材が223住。222住は左側のみ



224住 西から



225住 西から



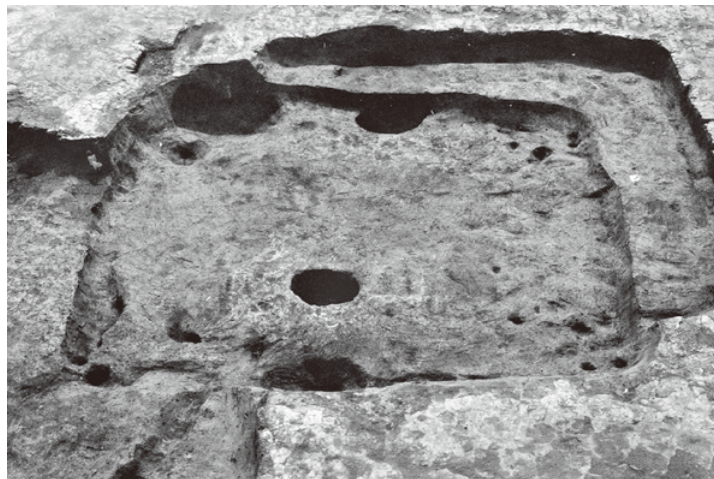
226住 西から



227住 西から



228住 東から



242住 東から。右上一带に238住が載っていた。
左側は146住と145住

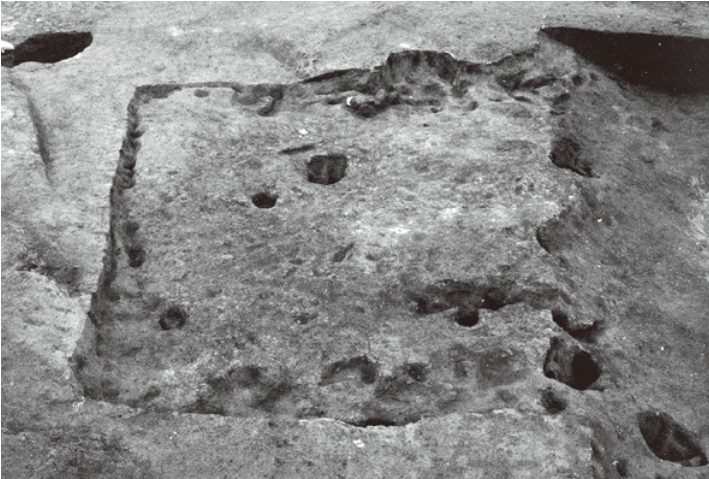
竪穴建物 (7)



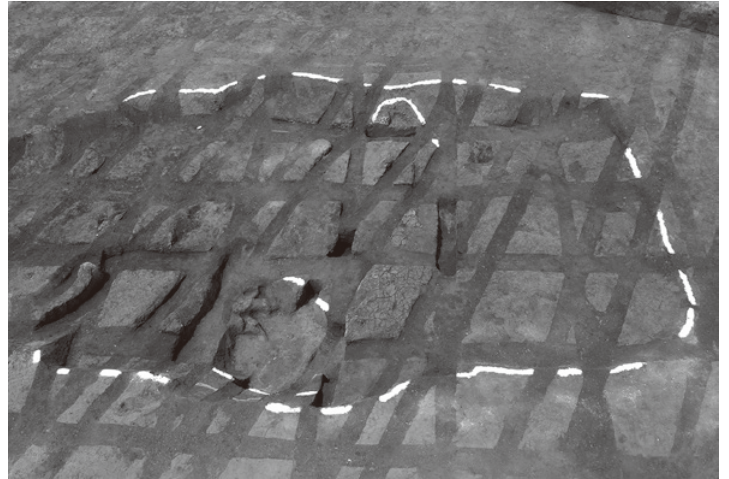
245 住 西から



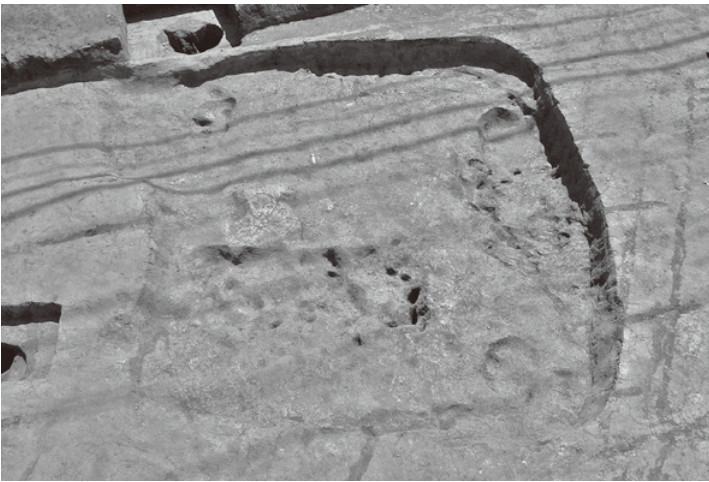
262 住 西から。手前の突出は 231 住



272 住 西から。右側は溝 6 に切られる



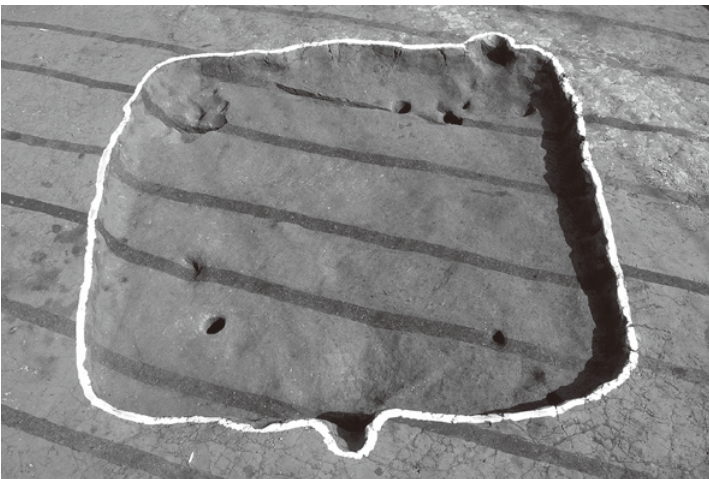
276 住 東から



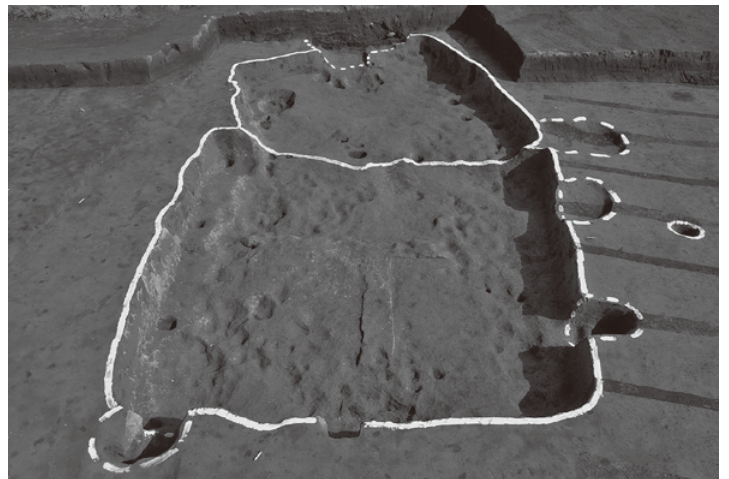
277 住 北から



284 住 西から



286 住 西から



287 住・288 住 西から。奥は 287 住、手前が 288 住

竪穴建物 (8)



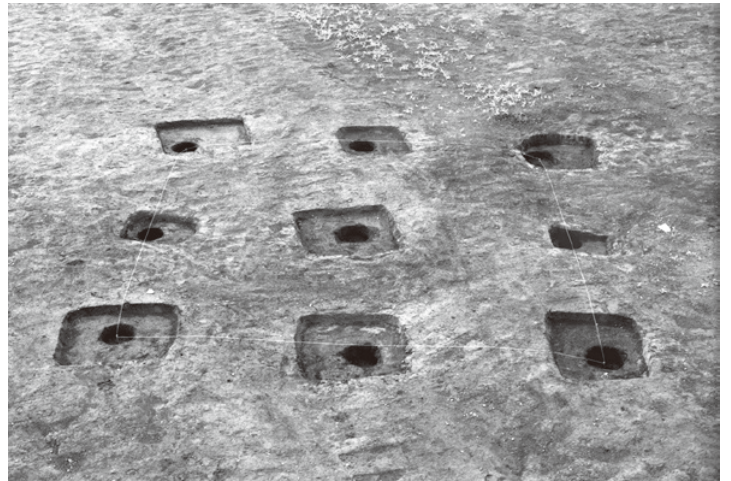
建 2 西から。左は 107 住



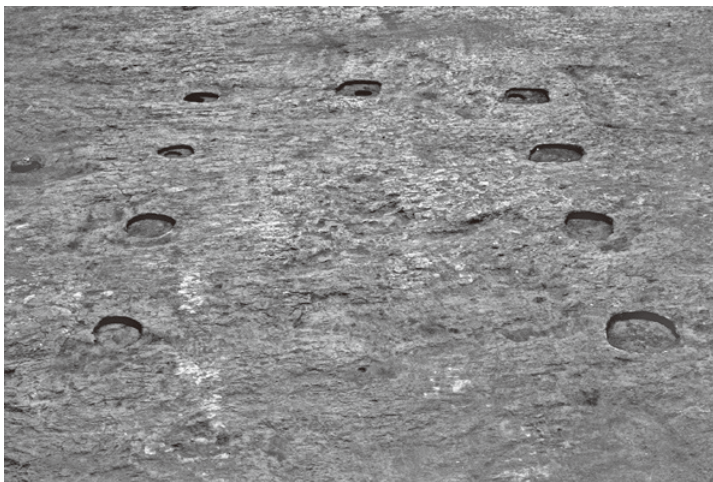
建 5・6 南から。奥が建 5、手前が建 6



建 7・8 西から。奥が建 8、手前が建 7



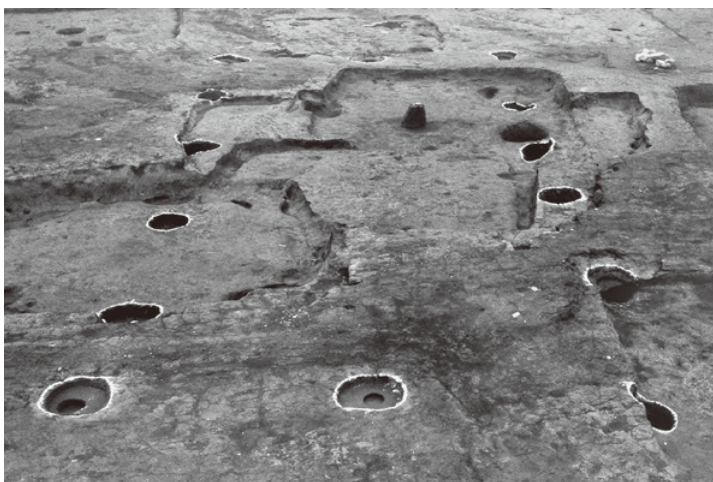
建 9 南から



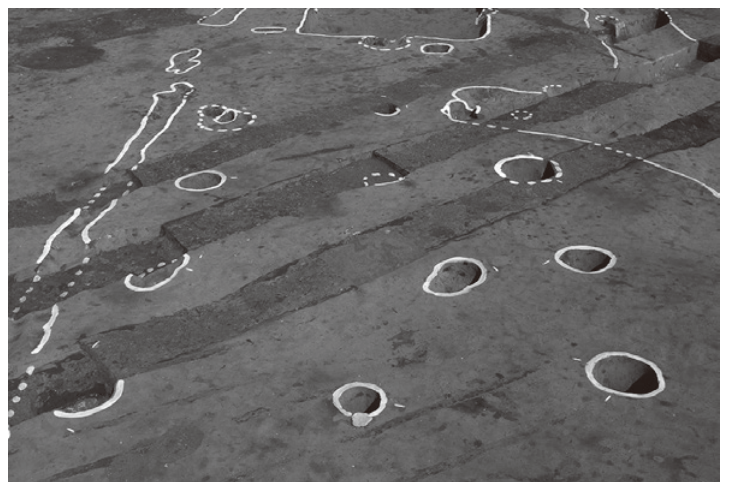
建 11(2次) 東から



建 12 南から



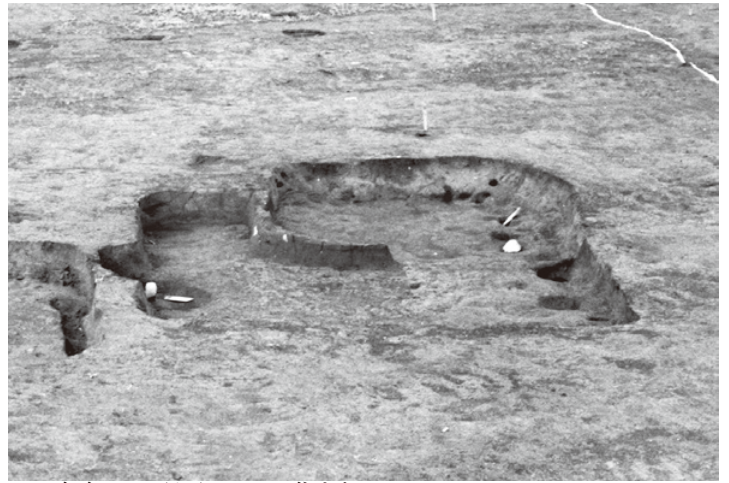
建 13 西から。複数の住居と重複する



建 15 南西から。右側は通路状遺構 2
掘立柱建物



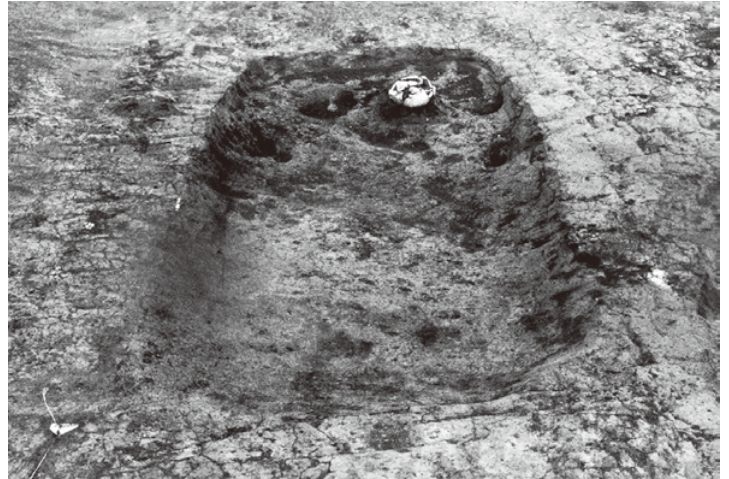
69住 銅鏡出土ピット



1次土7 西から。108住を切る



2次土202 遺物出土状況



2次土209住 南から



2次土212 遺物出土状況。南から



4次土17 A区西壁



4次土17 遺物出土状況-1



4次土17 遺物出土状況-2。東から
土坑・墓・ピット(1)



4次土 17 東から



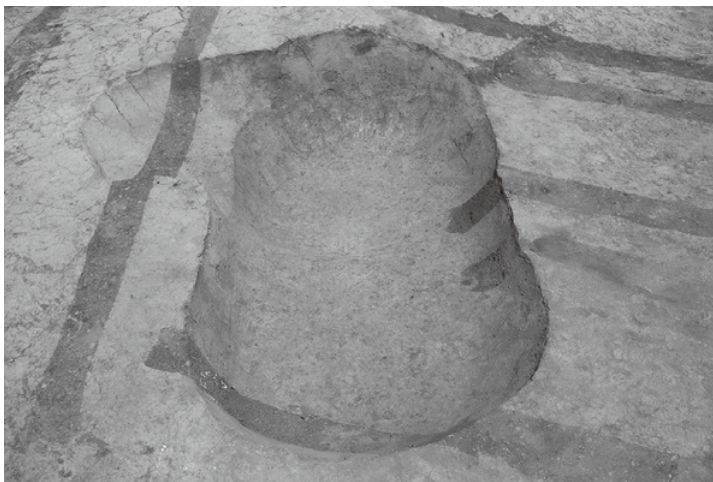
4次土 41 ベルト北から



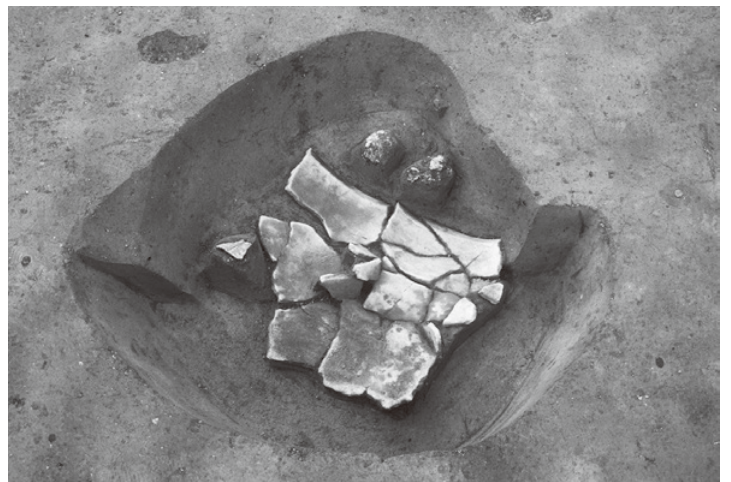
4次土 41 遺物出土状況-1。北から



4次土 41 遺物出土状況-2



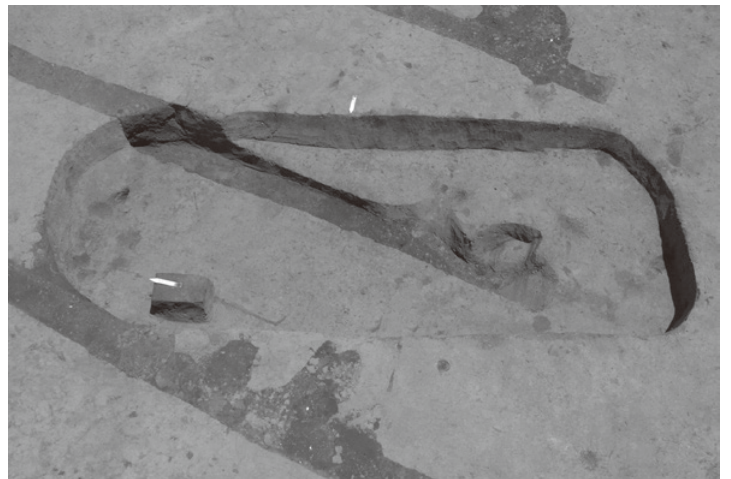
4次土 41 完掘



4次土 90 遺物出土状況



5次土 8 セクション 東から



5次土 8 西から

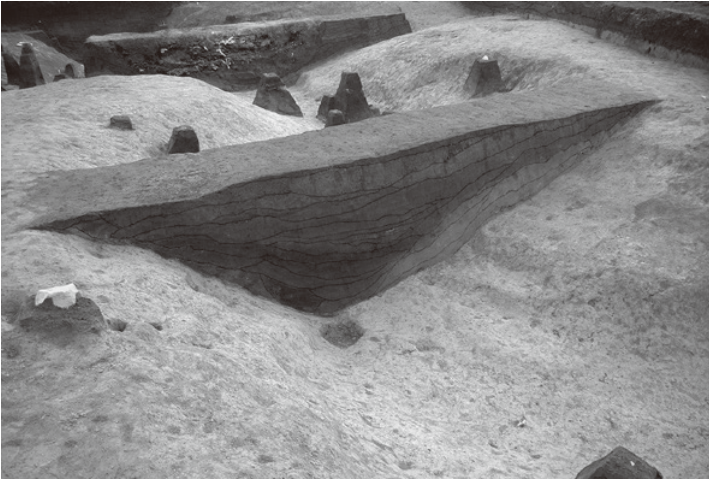
土坑・墓・ピット(2)



溝6・3 (2次) 西から



溝6 (4次C区) 北から



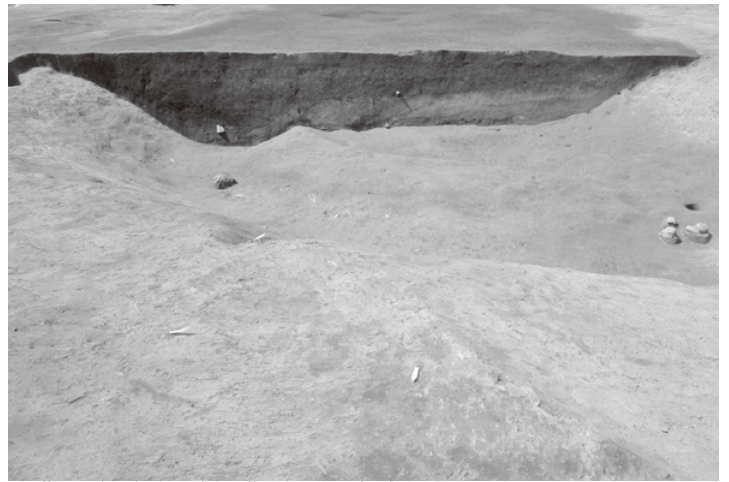
溝6 (4次C区) 溝6o 断面北壁



溝6 (4次D区) 北から



溝6・16(4次D区) 北東から



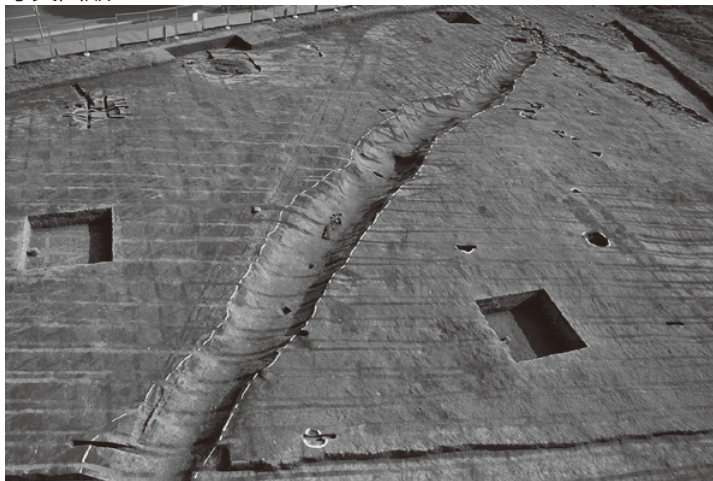
溝6 (4次D区) 溝6p 断面南壁



溝7 138住を切る。南から



溝16 (4次D区) 断面北壁



溝 19 (4次 A区) 北から



溝 19 (4次 A区) 溝 19k 断面北壁



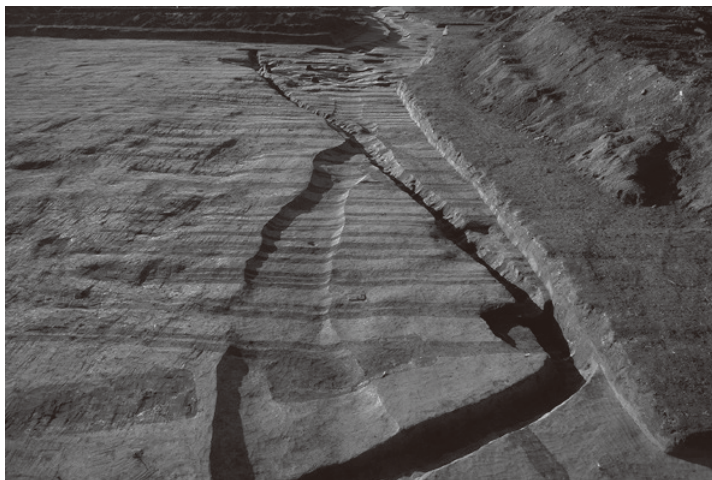
溝 19 (4次 A区) 溝 19n 断面西壁



溝 19 (4次 B区) 西から。中央奥は通路状遺構 4



溝 19 (4次 B区) 溝 19t 断面西壁



溝 19・18 (4次 C区) 東から



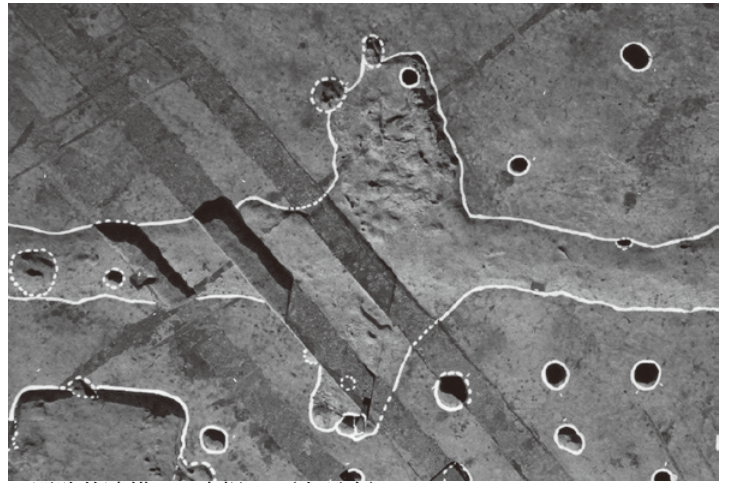
5次 溝 19・道路状遺構等空撮



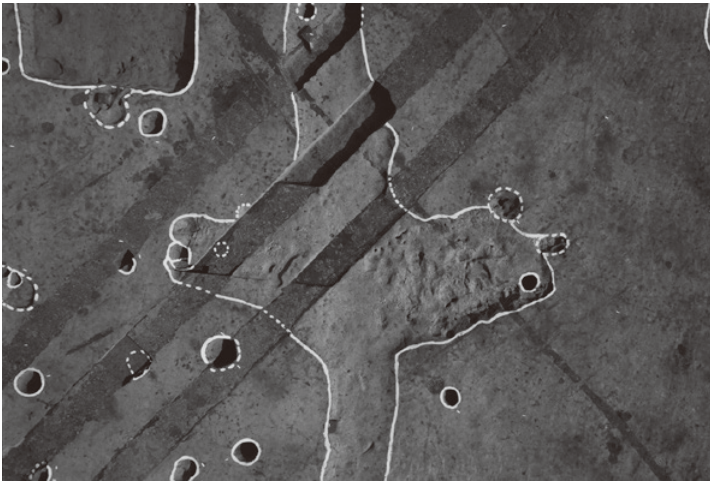
溝 19 (5次) 溝 19h 断面北壁



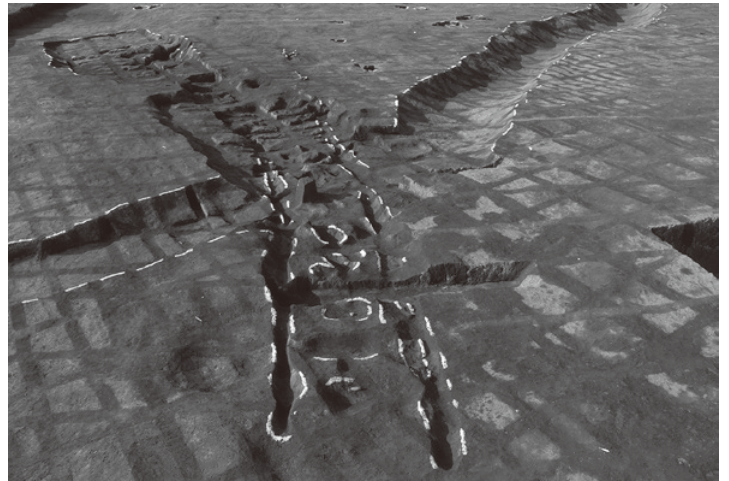
通路状遺構 1 北から



通路状遺構 2 空撮-1 (上が南)



通路状遺構 2 空撮-2



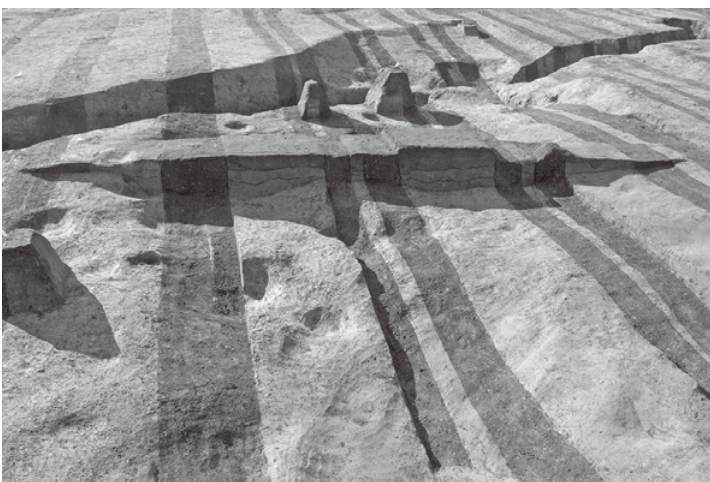
通路状遺構 3 南西から



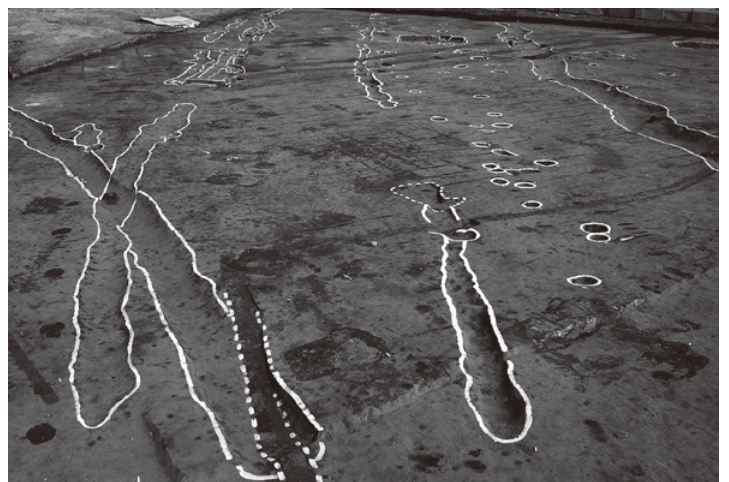
通路状遺構 4 南から



通路状遺構 4 遺構内ピット土層



通路状遺構 5 東西ベルト北壁

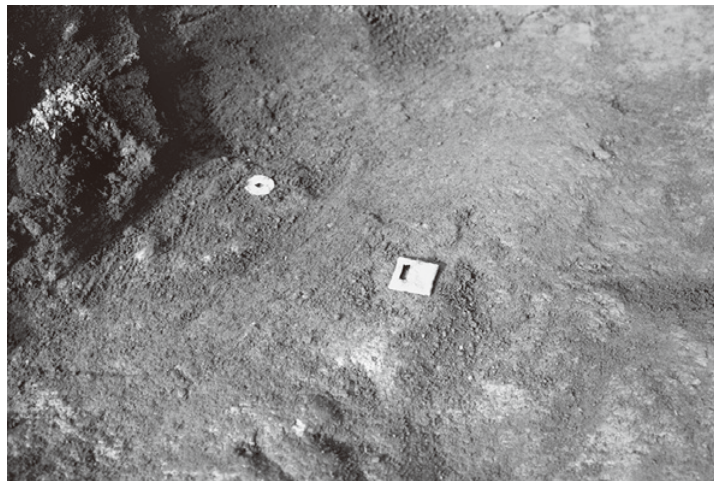


道路状遺構 南西から

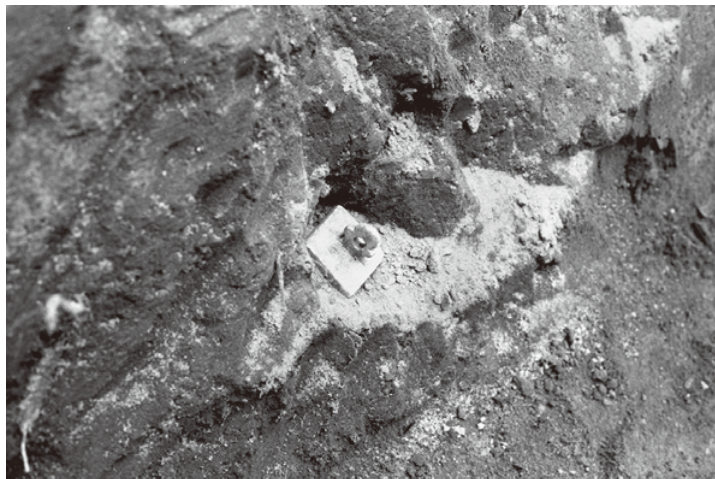
通路状遺構・道路状遺構



13 住 八稜鏡



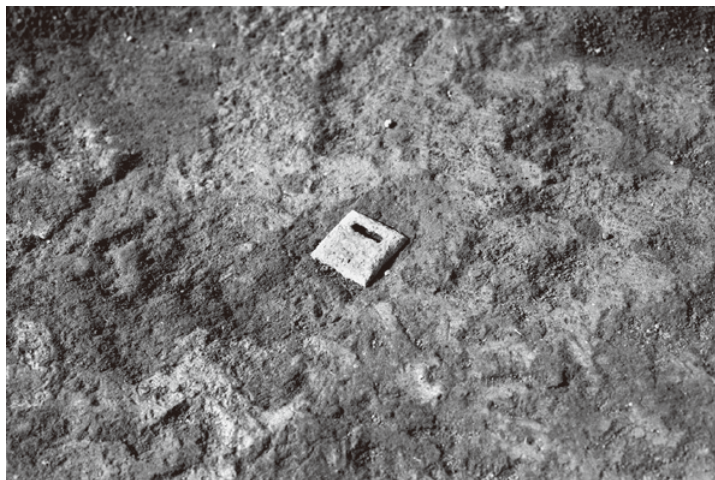
16 住 錢貨と巡方



22 住 銅印



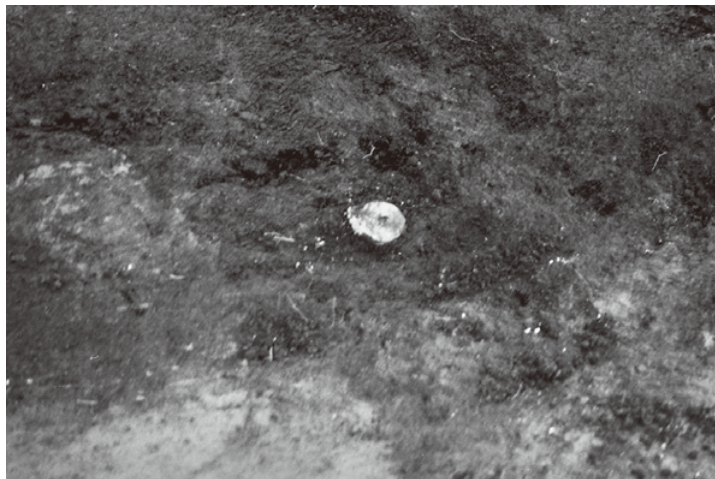
51 住 筒状土製品



125 住 帶飾り



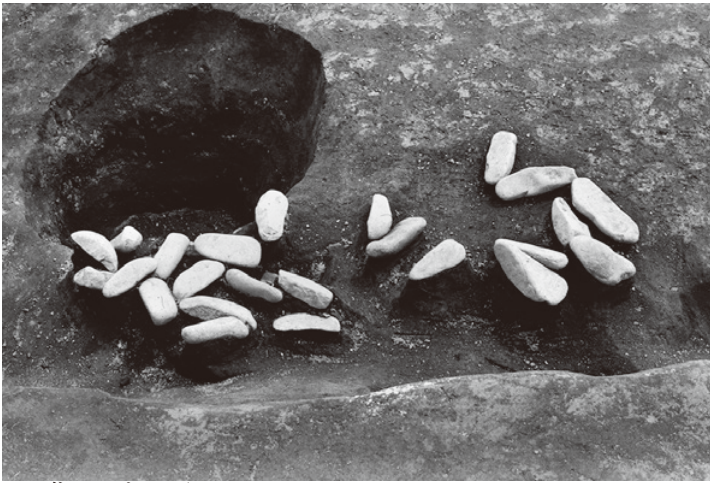
133 住 石帯



161 住 錢貨



180 住 海獸葡萄鏡
出土状況 (1)



9住 こもで石



165住 大石



161住 炭化材・遺物出土状況-1



161住 炭化材・遺物出土状況-2



161住 炭化材・遺物出土状況-3



161住 炭化材・遺物出土状況-4



197住 炭化材・遺物出土状況



184住 石器出土状況
出土状況(2)



1次 調査風景



2次 調査風景



4次 調査風景



5次 調査風景



4次 重機



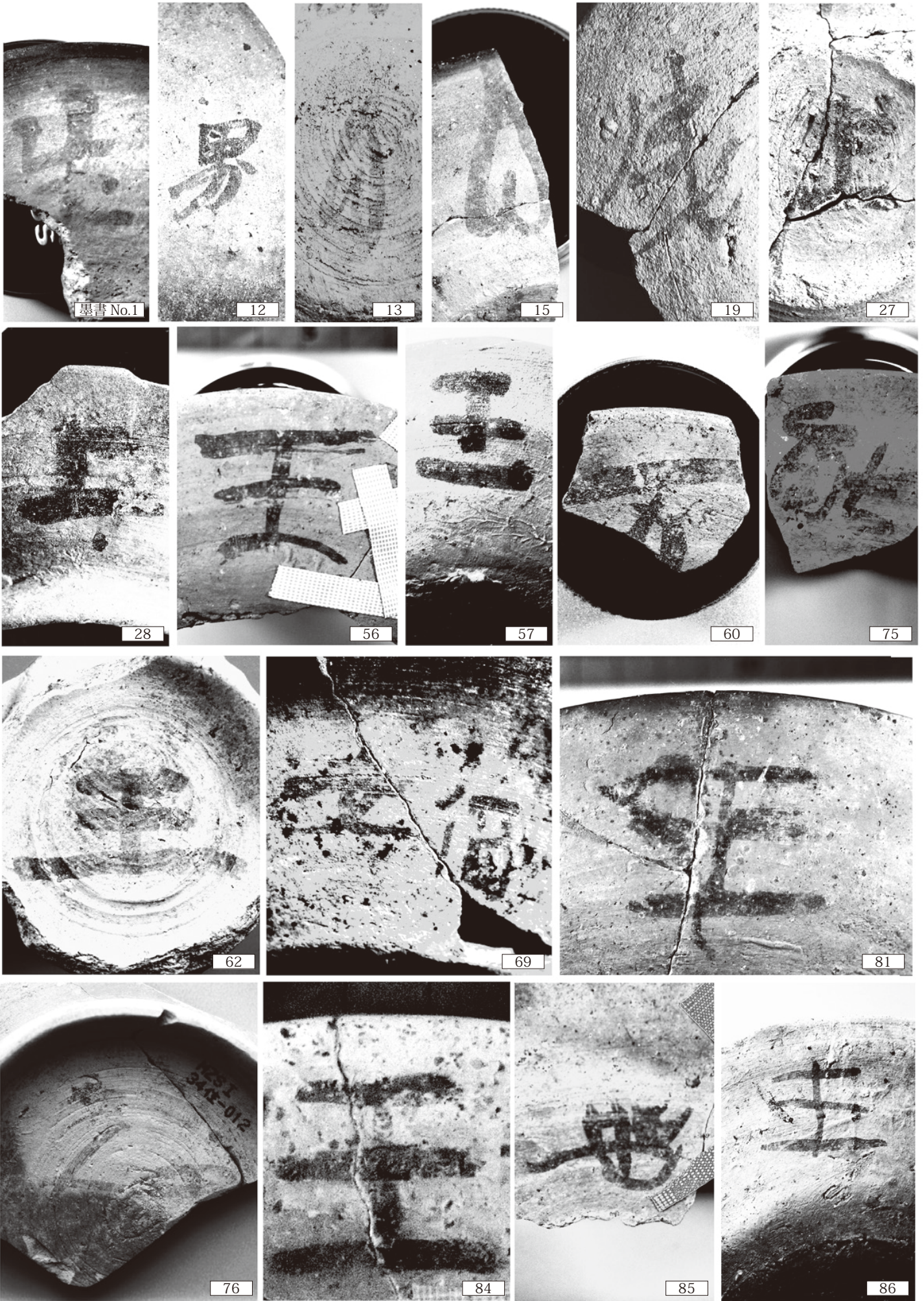
1次 現地説明会



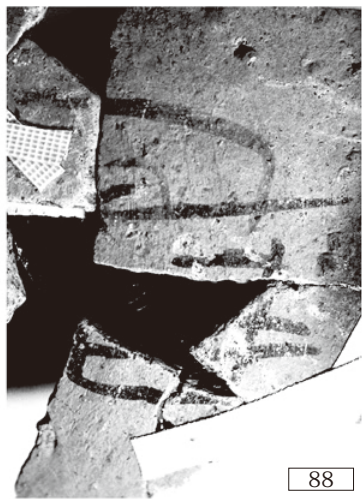
4次 和田地区見学会



5次 現地説明会
調査風景



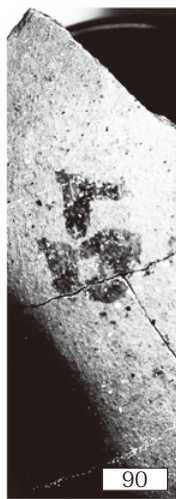
墨書 (1)



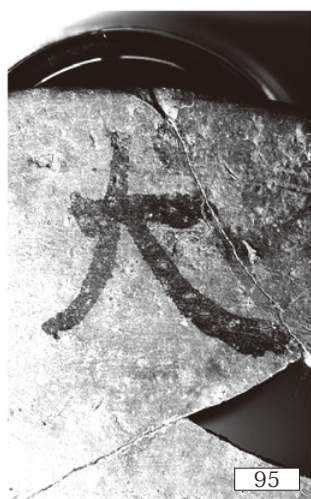
88



89



90



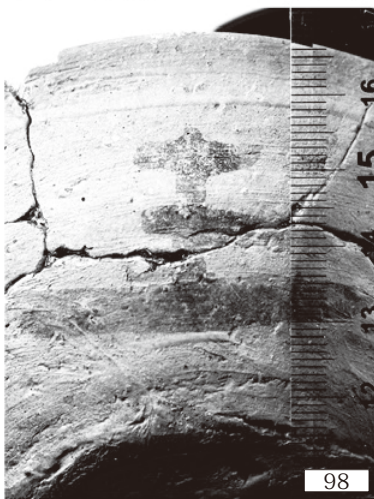
95



97



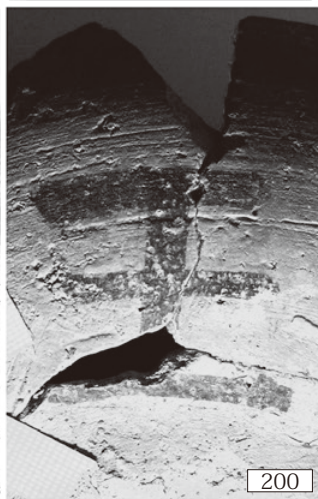
99



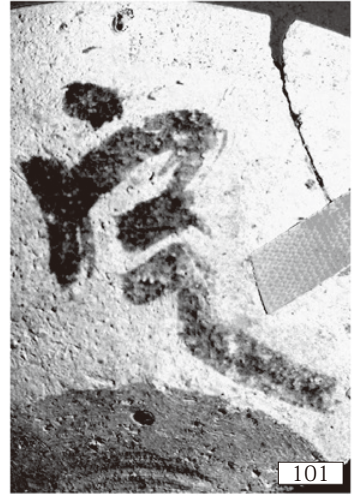
98



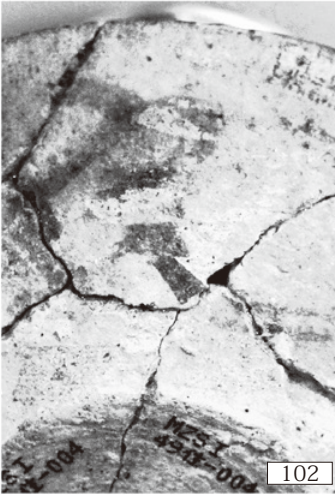
197



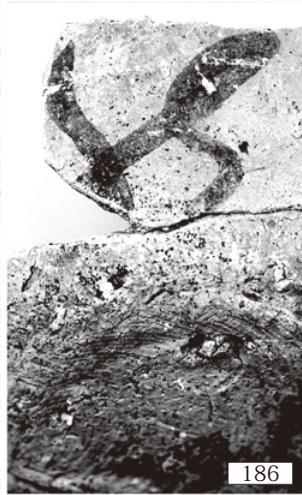
200



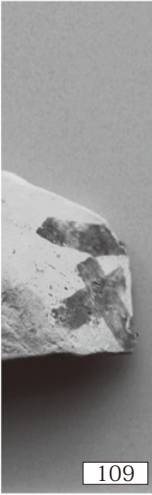
101



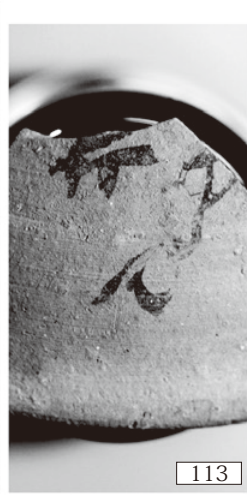
102



186



109



113



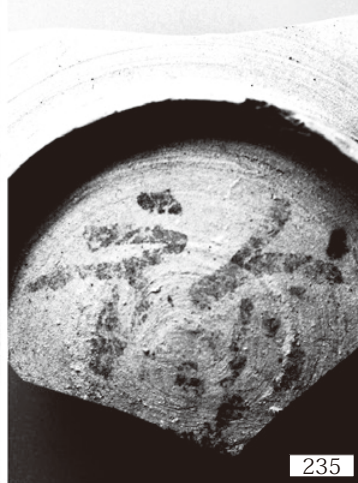
212



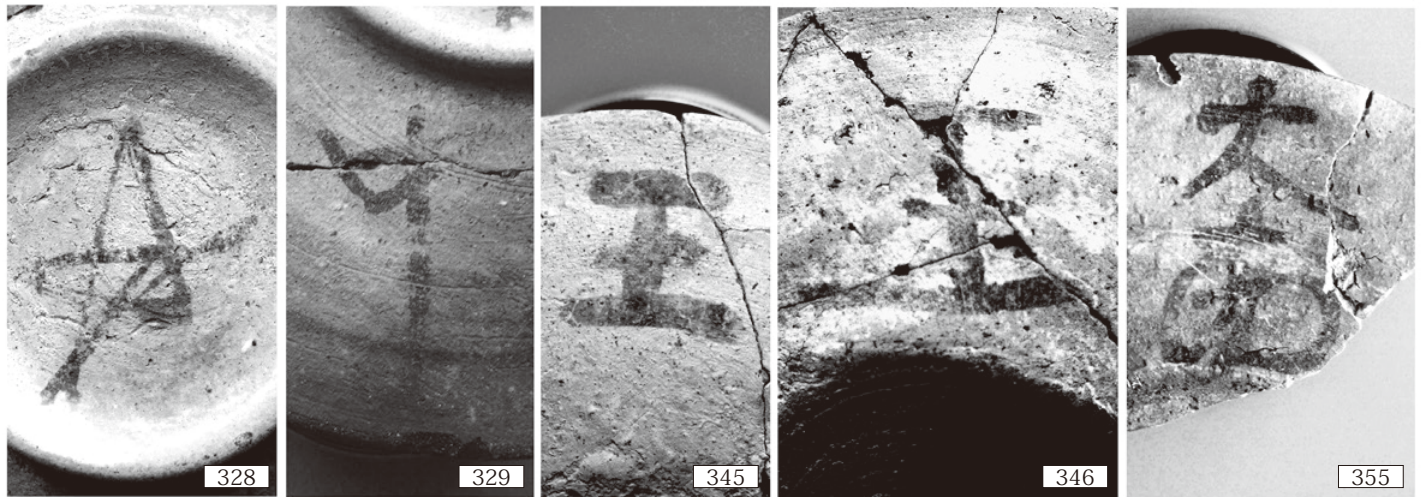
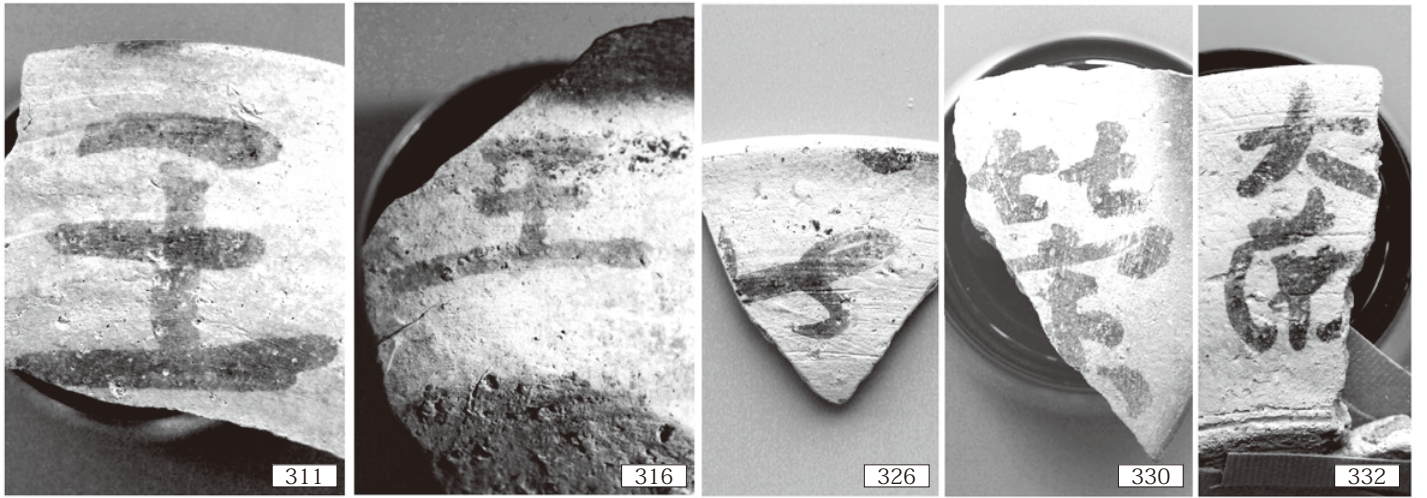
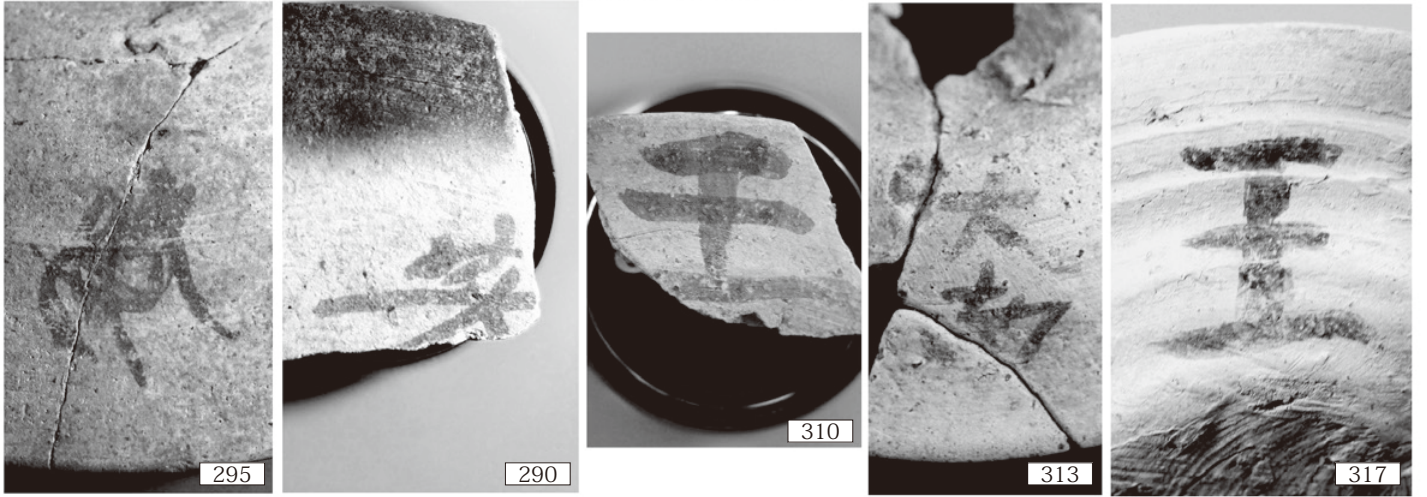
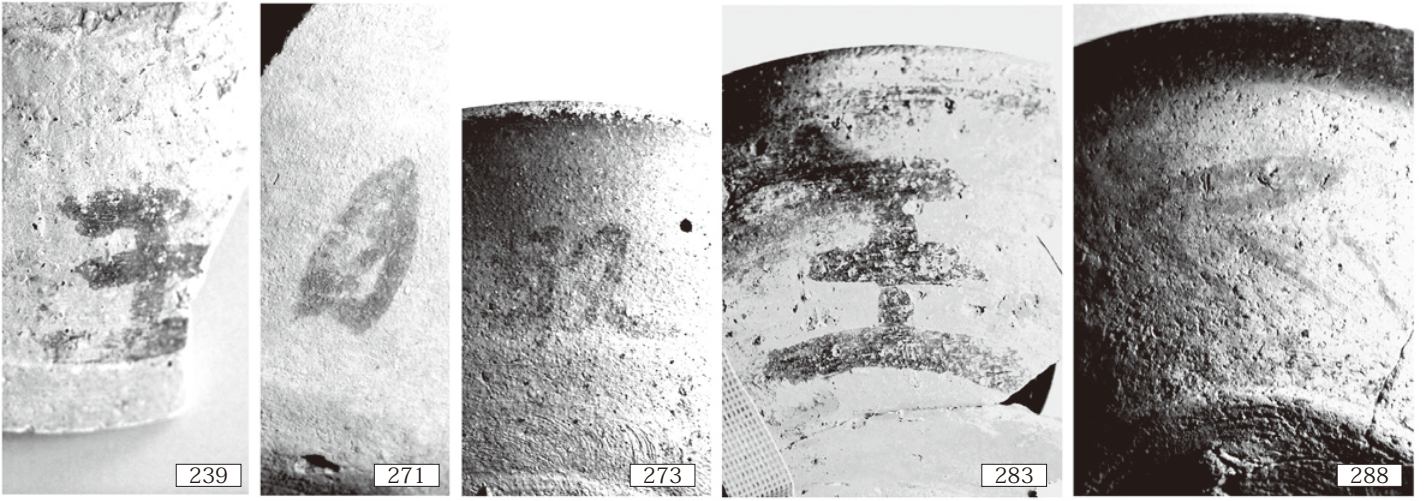
228

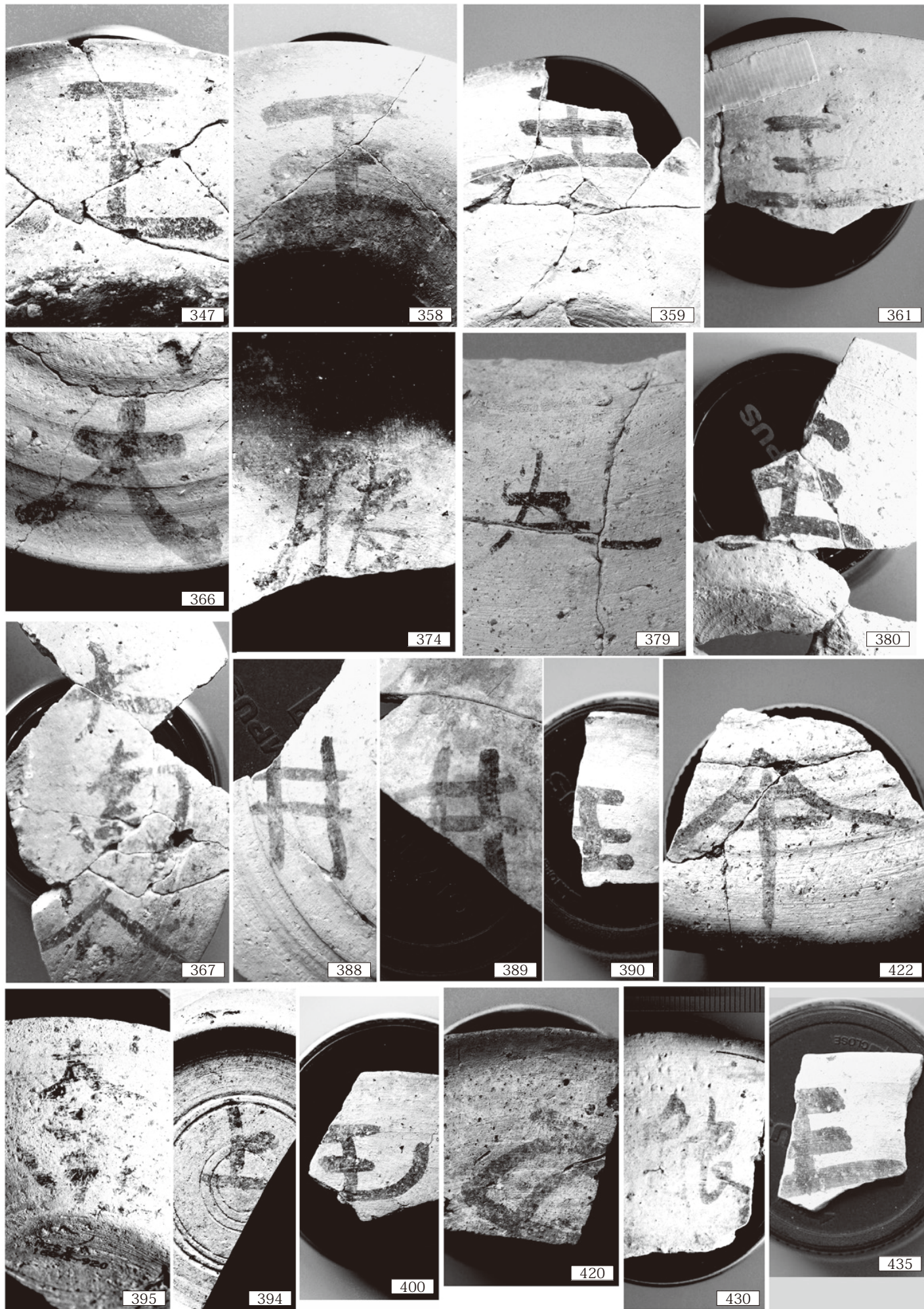


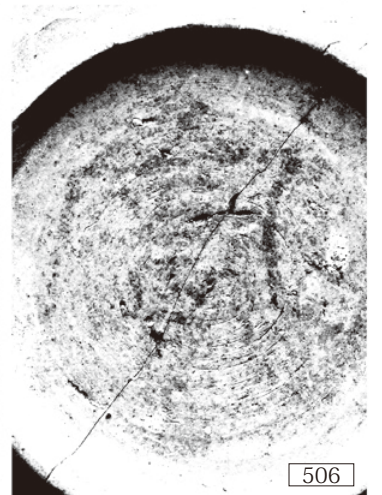
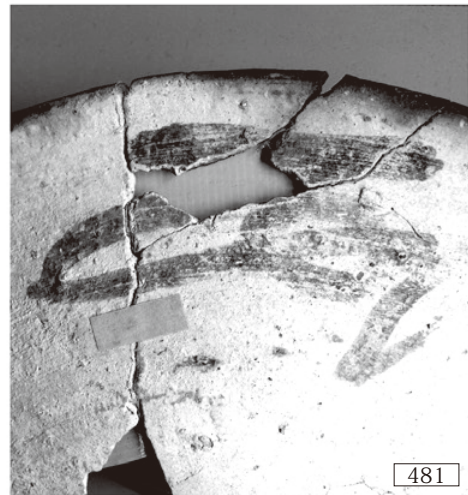
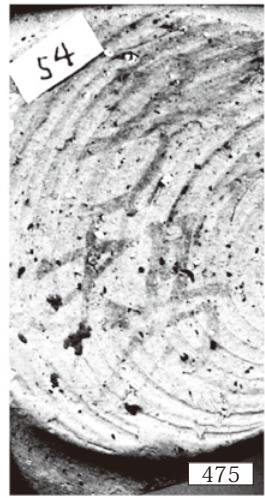
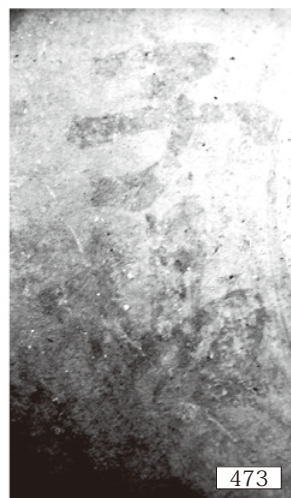
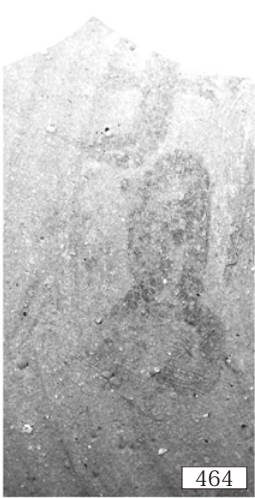
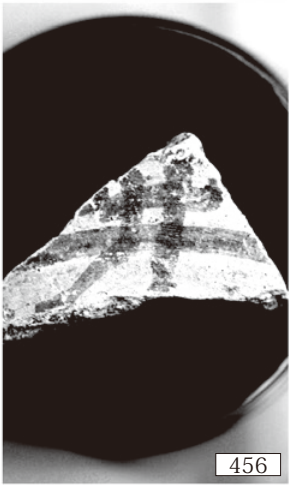
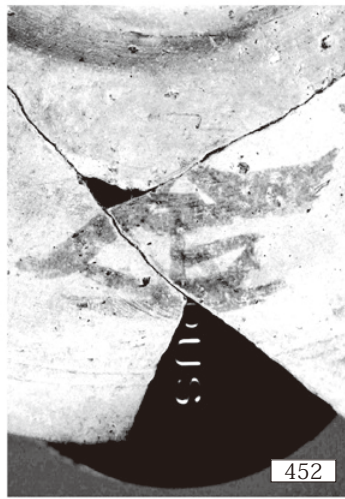
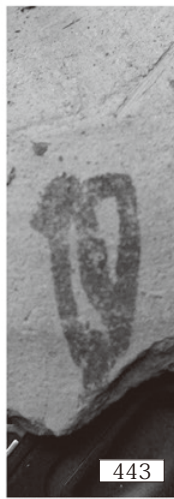
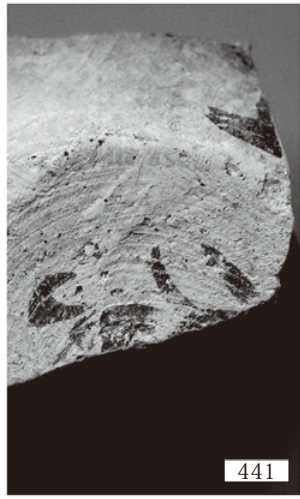
237

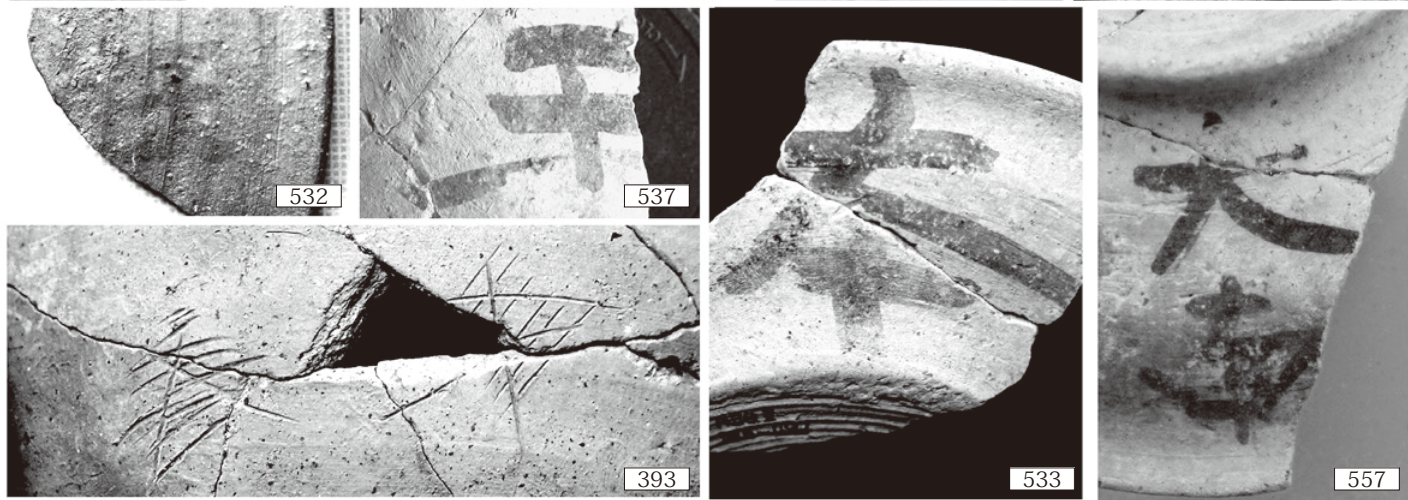
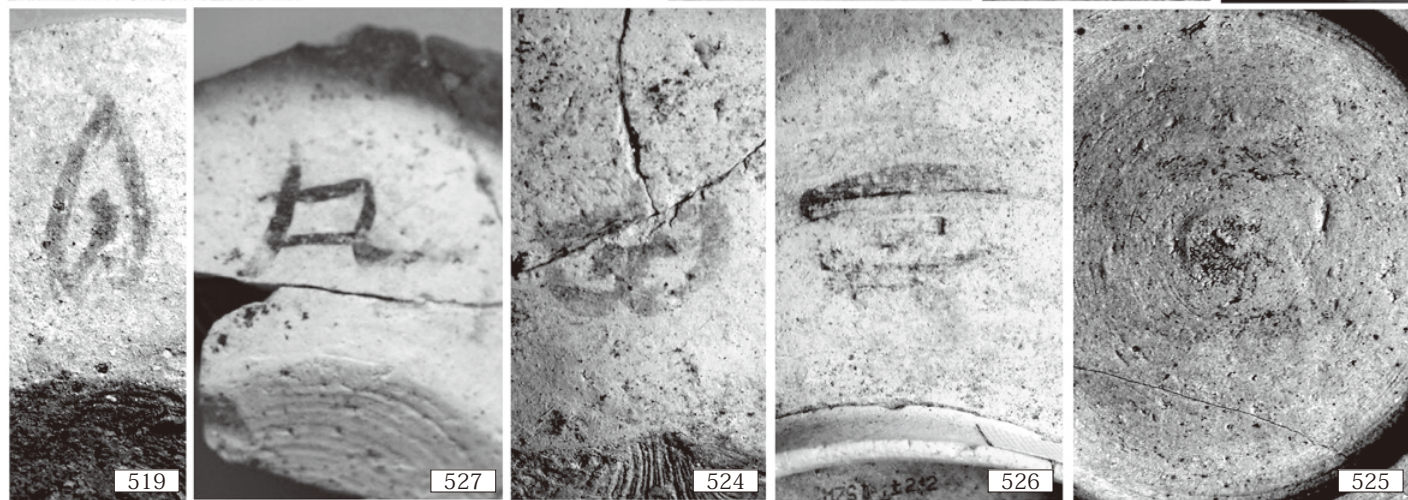
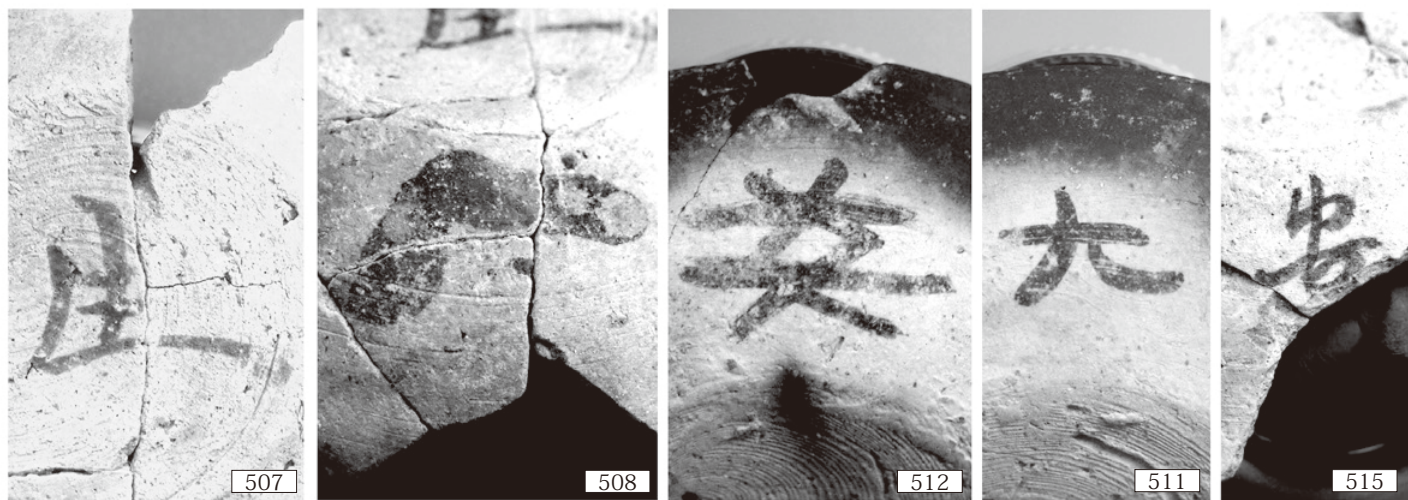
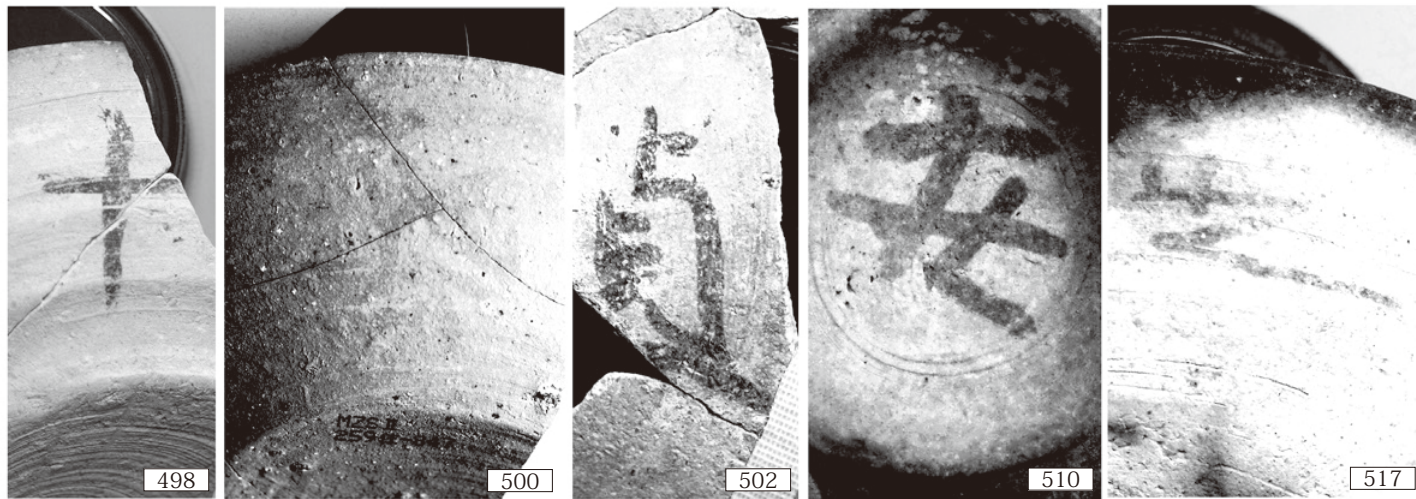


235









報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし みまざわがわさがんいせき はつくつちようさほうこくしよ							
書名	長野県松本市 三間沢川左岸遺跡 発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.226							
編著者名	小山奈津実、直井雅尚、原田健司、宮島義和							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号 TEL0263-34-3000(代) (記録・資料保管：松本市考古博物館 〒390-0823 松本市大字中山3738-1 TEL0263-86-4710)							
発行年月日	2017(平成29)年3月31日 (平成28年度)							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
みまざわがわさがん 三間沢川左岸	ながのけんまつもとし 長野県松本市 わだ 和田3967番ほか	20202	288	36度 11分 11秒	137度 54分 09秒	S62.5.30~7.21	7,741㎡	松本市臨空工業 団地建設事業
						S63.4.21~8.1	11,304㎡	
						H22.4.12~23.7.20	11,742㎡	新松本工業団地 建設事業
						H23.4.25~24.3.8	7,897㎡	
						H25.6.4~12.13	1,961㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
三間沢川左岸	集落跡	平安	竪穴建物 291棟 第1~293住 ※132住重複 ※5・30・282住欠番 掘立柱建物 15棟 土坑 120基 溝址 22条 通路状遺構 5基 道路状遺構 1基 ピット 351基	[土器・陶磁器] 土師器、黒色土器、須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、青磁、白磁、縄紋土器 [土製品] 羽口、筒状土製品、陶製円盤 [銅製品] 銅印、銅鏡、鉸具、巡方、丸柄、鉈尾、八稜鏡、海獣葡萄鏡、銭貨(富寿神宝、延喜通宝) [鉄器・鉄製品] 刀子、斧、鎌、紡錘車、鉸具、鋸、鎌、苧引鉄、火打金具、鉄滓 [石器・石製品] 編物用石錘、砥石、巡方、浮子、縄紋・弥生時代の石器(石鎌、打製石斧、磨製石斧、磨製石鏃) [自然遺物] 炭化材、炭化種実、炭化米			<ul style="list-style-type: none"> ・平安時代前~中期の集落址の一部を調査し、竪穴建物が密集して検出された。 ・集落を貫く長大な水路が発見された。 ・集落の北縁を画す溝と、それを渡る通路跡が確認された。 ・竪穴建物に伴って多量の土器陶磁器、金属製品、石製品が出土した。 ・銅銚や銭貨などの銅製品が出土した。 ・銅印「長良私印」が竪穴建物から出土した。 ・墨書土器が多く、特に「王」と読める墨書が多くの遺構から出土した。 	
要約	<p>竪穴建物を中心とする平安時代9~10世紀の集落址とそれに伴う様々な施設を検出し、多数の遺物出土をみた。竪穴建物は第1・2次調査区を中心に291棟、掘立柱建物は15棟が確認され、土坑墓5基が集落内に点在していた。遺構群の中央部を貫く長大な水路や、集落の北縁を画す溝とそれを渡る通路状遺構、大型の金床石を据えた鍛冶遺構らしきものなども確認された。</p> <p>遺物は竪穴建物等の覆土・床面から多量の土器陶磁器や金属製品、石製品、土製品が出土した。金属製品では銅銚、銅鏡(八稜鏡、海獣葡萄鏡破片)や銭貨(富寿神宝、延喜通宝)、銅鏡など銅製品が目立ち、銅印「長良私印」が第22号竪穴建物から出土している。また緑釉陶器と墨書土器が多く、特に「王」と読める墨書が複数の遺構から多数出土した。石製品には砥石、石銚、編物用石錘、土製品には羽口、筒状土製品、陶製円盤が見られた。</p> <p>それ以前に人が居住した形跡がない地帯に出現し、多数の金属製品や緑釉陶器を有すが150年間ほどしか継続しなかった特殊な集落遺跡で、その性格や生業、出現と撤退の背景など、今後の究明が大きな課題となる。</p>							

松本市文化財調査報告No.226

長野県松本市

三間沢川左岸遺跡

－発掘調査報告書－

発行日 平成29年3月31日

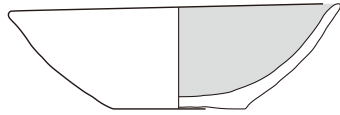
発行 松本市教育委員会

〒390-8620 松本市丸の内3番7号

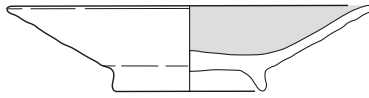
印刷 株式会社 二光印刷



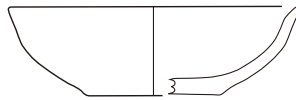
西庄



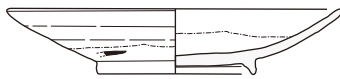
子楊



☆



大南
介



王